# THE CENTRAL REVIEW

# 中央公論

## 春季大附録號



第三十九年　第四　第四百三十三號

大正十三年四月一日發行（毎月一回一日發行）

此廣告を見て御申込の方は中央公論愛讀者なる旨御申添を乞ふ






卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社



竹林小徑　　平福百穗筆

大正十三年

# 中央公論

四月一日發行

## 春季大附録號

第卅九年 第四號

第四百三十三號

# 各派對立の内面的觀察

總選擧に對する護憲三派の共同作戰に於て、一つの難關は普選即行の問題だ。憲革兩派に取つて一枚看板の觀ある普選即行は、政友會の永く力を極めて反對し來た所で、今更之を容認するは大政黨の估券に關する樣でもある。併し政友派領袖の此の難關に對する躊躇逡巡は單に右樣の行き掛りからばかりではない。もう一つ頗る珍妙な理窟が揭げられてあるのが面白い。それは外でもない。政友會が普選斷行に贊成すると本黨側から政友派赤化の惡評を宣傳さるゝの恐れあるからと云ふのである。是れ實に頗る面白い見解ではないか。

普選を即行せねば駄目だと主張する者ある他の一方に於て、普選の即行は非常變に失すると危惧する者の尠からざるは事實だ。併し世間の人氣を集める方策として、普選を叫ぶ者の外に之を斥くる者もあらうとは一寸予輩の思ひ及ばなかつた所である。世の中は段々進んで猫も杓子も普選を叫ぶ樣になつたと予輩は考へて居たのに、豈んぞ知らん、普選即行の主張と赤化宣傳の惡戯とを結び付け之に恐るべき重大の結果を豫想する者あらんとは。世間にはまだ飛んだ所をねらつてゐる者が多いと見へる。

併し乍ら考へて見るに、問題は普選の主張が現にどれ丈けの範圍の人氣を博して居るかに在るのではないやうだ。人氣は日に日に變る。變るといふよりは、正しい主張は日に日に共鳴の範圍を擴張して行くと謂つていゝ。故に正しき主張に立つ人は、現に共鳴を寄せる人の多寡を顧慮せず前途の光明と最後の勝利とを確信して驀らに勇往邁進する。然るに主義に信念のない者は、之に反して常に頑迷なる傳統的勢力に倚て纔に自家の地步を踏み留めんとする。而もその情勢の一見堅牢侵し難きに眩惑して、それが實に日に日に衰頽の運命に進むものなるに氣付かない。則ち問題

の岐るゝ所は、其人の着眼點の如何に在るのだ。進歩して止まざる活社會の活きた思想に眼をつけるか、過去の惰勢に依て空威張りしてゐる舊社會の殘壘に秋波を寄せるか。之等の態度如何に依て各般の問題に對する態度も自ら異つて來る。普選即行に對する前述二種の見解の岐るゝ所も畢竟これに外ならないと思ふ。

斯く觀ると、憲革二派と政友會との提携も內面的には甚だ怪しいものと謂はねばならぬ。憲革二派といへども、其實どれ丈け時勢に對する理解を有つて居るかは分らない。殊に憲政會の動もすれば來るべき總選擧に於ける格段の成功を豫想してにや、從てまた將來の政界に於ける獨自の活躍の可能を夢見てにや、必しも三派共動の協定に拘束せられざらんとするの色あるは甚だ感服せざる所である。が、孰れにしても、この二派は普選の即行には既に進んで其の旗幟を鮮明ならしめて居る。若し普選の即行にして赤化宣傳と結付けて一部の人士から極度に忌まるゝ事實ありとせば、憲革二派は正に明白に之等の人士に挑戰したものと謂はねばならぬ。然るに政友會は却て之等人士の同情を貴しとする。其の擯斥を受くるは努めて避けざる可らずとするのだ。斯らなれば政友會の見識は、今頃になつて伊藤公の創立趣意書などを振り廻す政友本黨のそれと何の擇ぶ所もないではないか。護憲三派と政友本黨との外觀的對立に拘らず世上には寧ろ政友兩派の陰に相近きの實を傳ふるは偶然でないと思ふ。

各政派の離合集散が、利害の合不合に依るは固より免れぬが、同時にまたその根柢たる思想的見識に於て大體一致する所なくては、本當の安定的對立とはいへぬ。この點に於て予輩は舊政友會の分裂を或る意味に於て當然の運命と見做すに拘らず又其居然たる大政黨の崩壞せるを大に喜ぶものたるに拘らず、其結果として現れた今日の各派對立の形勢には、頗る薄き意味に於てもの安定をさへ認許するに躊躇する。恐らくは總選擧後に於て必ずやもう一度紛更を見るだらう。我國政界の前途はまだ〳〵容易に見當を附け得べき狀態にはないのである。(大正十三年三月六日)

中央公論



第卅九年第四號
春季大附錄號
第四百三十三號



# 一自由思想家の生活信條

田中王堂

## 一、解題

わたくしが一個の文明批評家として世に立つて以來、わたくしはいろいろの機會に方り、いろいろの問題に關して自分の意見を公表した。然し、こゝに、清和な良心を以て宣言し得る一事は、(其等の評論の價値は別として、)自分の最深確信の披瀝であつたことを其等の特徴の一つとして居ることである、其等の評論を通して、わたくしは自分の信ずると

ころを語り殘したことはあるかも知れぬが、既に語る以上、一點、一劃と雖も、未だ曾つて自分の信じないところのものを語つたことのないことである。畢竟するに、其等の文章は其の志向に於て、其の氣魄に於て、悉とくわたくしの信條の告白であつたのであると言へる。

事實さうであるとすると、今更ら何の必要あつて、何の必要ありと感じて、わたくしは新たに自分の生活信條なるものを公表しようとするか、新たにそんなものを公表して、これまでわたくしが達した、若しくは、達しようと志したものの外に如何なる目的を達しようと企てるのであるか、さうすることに一つでも理由があり得るか、若しあるとしたならば、其の理由は何んであるか。

確かに一つある。これまでわたくしは殆ど總べての場合に於て、わたくしの人生觀に impersonal の形を與へて來た。今はたとひこの一つの場合に限りてなりとも、其れに personal の形を與へて見たい、否、與へねばならぬと感ずることがその理由である。然し、こゝでわたくしが impersonal, personal と言つて居るのは、表現に關するものではなくして、主として情操と態度とに關するものなのである。或る人が或る事柄に就いて彼れの意見を公表するに方つて、彼れが "I think" といふ表現を用ゐるか、"It is" といふ表現を用ゐるかに依つて、其れが personal であるか、若しくは、impersonal であるかは決定されないで、此等の表現の孰づれが用ゐられるにしても、その事柄を取り扱ふ彼れの態度と情操との如何に依つて始めて決定されるのである。斯くして、(これが一つの適例を著名な著書より舉げるならば)あの『文藝復興』に於てウオルタア・ペエタアは同一の表現を以て終始を一貫して居るが、其等が取り扱はれて居る態度と情操とからすれば、最後の一章を除いての總べての impersonal の文章であるが、其の最後のものは僅かに一 personal の文章である。

それでは impersonalと personal との間にどんな關係があり、どれだけの相違があるか。

總じて人間の活動は其の種の何たるを問はず、例へば藝術上の創作にせよ、科學上の研究にせよ、乃至、政治上の若しくは、社會上の改造にせよ、其れの發端より其れの完結に至るまでには、進行の過程に於て三つの段階を閲する。第一のものは或る計畫が著想される段階である。第二のものは其れを實行にまで運用する手順の講ぜられる段階である。第三のものは當初の意圖に照準して其れの成績の功過が吟味される段階である。此等の段階の孰づれにしても、おのれの欲望を滿たさうとする努力に於て、單一なる衝動が次第に開展し行く形態であるから、其れのはたらき振りの組織と、輪郭と、方向とは彼れの能力と興味とに依つて制限されて居ることは明らかである。されば、絶對的の意味では、此等は等しく人間的である。然し、第一の段階と第三の段階とには情意の要求、若しくは、鑑賞が顯著にはたらき、第二の段階に於ては理智の整齊が顯著にはたらくところから、相對的の意味で、第一のものと第三のものとを personal とし、第二のものを impersonal とすることには相當の理由のあることである。

さうすると、誰れにしても、彼れの人生觀を impersonal に語る時には、彼れは第二の段階に即して理智の整齊として其れを語つて居るのであり、personal に語る時には情意の要求、若しくは、其れの鑑賞として第一の段階、若しくは、第三の段階に即して其れを語つて居るのである。彼れの人生觀の『何か』を說明するには impersonal の態度と情操とでなければならぬが、其れの『何故に』を辯明するには personal の態度と情操とでなければならぬ。

若し世の中に自分の人生觀を personal にしか語ることの出來ない者があるならば、彼れは其れに依つて彼れの知識の未熟であることを暴露する。其れと同時に、若し彼にして其れを impersonal にしか語らないならば、其れが單に傳統と記誦とより來たる假物でなくして、彼れ自づからの體驗と反省とより來たる眞物であることを彼れはどうして標致し

得よう。この事實からして、何人に取つても絶えず彼れの人生觀を impersonal に存るといふことは動物の領分に存るを免かれないか、彼れがさうすることの必要と認めた場合に於て、時あつて、其れを personal に存るといふことには十分の根據と功利とがある。

こゝに、わたくしはこれまでわたくしの人生觀の『何か』を區分的に語つて來たが、今は其れの『何故に』を全體的に語らうとするのである。わたくしとしては、この瞬間に方つて、さうしなければならぬとする情緒の横溢よりさうするのである。然し、其れより讀者がわたくしの人生觀に關して新たにどれだけの透視と理會とを得るかは獨り讀者の實驗に委せられねばならぬ。

## 二、『自由人の信仰』か『不自由人の信仰』か

バアトランド・ラッセルに、(わたくしからすれば其れの眞價に不相應な程度に評判になつた)『自由人の信仰』と題する、文章がある。瑰麗なる其の文辭、澎湃たる其の情熱、如何にも一名品たるを失はぬものである。然し、其れに盛られた思想に至つては、膚淺にして不徹底を極めたものである。そこなる彼れの所説を約すれば、大概次のやうなものである。

自然の傾向は人間の理想と何等の交渉を有たぬ。人間は彼れ、及び、彼れの子孫に對してこの地上に於て長く幸福な生活を續けて行かうと希望して居るが、冷酷にして意地惡き自然は些しも彼れのこの希望を顧るところはない。自然は一つの力に過ぎない、そして、力はいつでも人間の幸福に對しては一個の專制君主である。この絶大なる力の前には人間の如何なる努力も、如何なる奮鬪も全然無力である。されば、わたくし共も、わたくし共の子孫も事實を正視する限り個

人として、種族として、たゞ死の迫るのを待つあるのみである。然し、人間には想像力といふ不思議なものが賦與されて居る。この想像力あるがために、たとひ行爲と欲望とに於て、わたくし共は絶えず外界の力の專制に服從しなければならないとも、尠なくとも思想と向上心とに於てわたくし共は自由である。わたくし共は想像力に依つて自然に對して無効な反逆を企てることなくして其れの支配を超越することが出來る。何故ならばわたくし共自づからが創造した眞と美と、完全との實現に熱中することから、假に自然の差し出す死の手のおのれの身邊にあるのを忘れることが出來るからである、否、其れを卻けることさへも出來るからである。畢竟するに、自由人とは、斯くして、この火宅の中に在りて尚ほ、一つの樂地を作り出す人の謂である。

此れが「自由人の信仰」の骨子であつて、其れは直ちに悲壯美（the Sublime）の心境である。わたくしは悲壯美が個として人間の體驗の一つであることを信ずる者であるし、又、其れが害惡多きこの宇宙に於て彼れの自已保全の情操より派生したものであることをも信ずるものである。然し、其れは觀照の心理であつて、征服、若しくは、創造の態度ではない。隨つて、わたくし共が其れより得る滿足は消極的に瞬間に限られる滿足であつて、積極的に、永恒に續く滿足ではない、其れは幻想に出る滿足であつて、事實に基づく滿足でないとわたくしは言ふのである。

原始人に取つて、この世界は個々の事實、若しくは、出來事としてはそこに多くの害惡が含まれるが、全體としては人間の幸福のためにはたらく、若しくは、彼れの祈願を容れる神々に依つて攝理されて居る場所であつた。この信仰の下に生きた彼等としては、表面いろいろと彼等の期待を裏切るやうな事實、若しくは、出來事に遭遇しても、尚ほおのれの希望、即ち、理想の自由を固執することに多大の根柢はあつた。何故ならば、さう假定された世界に在つては、其れの傾向は人間の理想に依つて左右され、變更さるものになつて居らなければならぬからである。然し、ラッセルは原

始人ではない。ラッセルは文化人である、而かも、科學者である。彼れは決してそんな信仰の下に生きて居るのではない。彼れの理會に隨へば、この世界は慈愛の神々に依つて攝理されて居りはしない。人間の力より遙かに偉大なる自然の力は彼れの希望に迎合しないのみならず、彼れの幸福に敵對して居るのである。其れに拘らず、苟くも彼れにして彼れの生存を維持しようとするならば、彼れは其れの命令に屈從せねばならぬ。然し、人間が其等に隷屬するのは彼れの行爲と欲望とに於てだけであつて、彼れの思想と理想とに於ては、全然其等より自由であるのである。『行爲に於て、欲望に於て、わたくし共は絶えず外界の力の專制に服從せねばならぬ。が、思想に於て、理想に於て、わたくし共は自由である――わたくし共の同作より、わたくし共の肉體が其れの上に無力に匍匐するこの微小な惑星より、そして、わたくし共が生きる間死の專制さへよりも自由である』と彼れは說いて居る。二つの極端は出會ふ。あの『哲學に於ける科學方法』に於て、眞の哲學は情意の要求より解放されたる純智の所産でなければならぬと揚言したラッセルより、斯かる言說を聞くことは矛盾であるやうにも思はれるし、更に一層當然であるやうにも思はれるのである。こゝに彼は二重の誤謬に陷つて居る。其等の一つは、自然と人間との關係に就いてであり、其等の他の一つは、欲望及び行爲と思想及び理想とに關してである。

わたくし共は、わたくし共の力で一夜にして宇宙の組織を一變することの出來ない限りは、如何なる事柄を題目とするとも、先づ事實を尊重してかゝらねばならぬ。わたくし共にして一片の空想に溺して無限の憧憬を恣にするならば、わたくし共に取つて唯一のものたるこの世界を目して最惡にして最不完全のものであると非難することも出來る。然し、事實として、わたくし共にはこの世界を外にしては一つでも別の世界に棲息することが許されて居らぬのである。成る程、この世界は確かに或る空想が要求するだけ善いもの、完全なものになつて居らぬ。そこにはさまざまな缺點も

あり、威嚇もあるり、強迫もある。然し、人間が地上に出現して、今日彼が享樂する文化を建設するに至るまでには彼れ悉とくそこに見出され、利用され得る自然の力の協同を俟つての上のことであつた。さうすると、其等はラッセルが想像する如く不斷に彼れの幸福を破壞して居るし、又破壞することをのみ目的として居る仇敵であるとわたくしは信ずることは出來ない。早い話が其等がさうであつたならば、人間はこの世界に於て一日と雖も生を續けることの困難な筈ではないか。自然の力は彼れの安全の保障と幸福の增進とのための素材である。わたくしはこの素材が彼れの知識と、熟練と智慧との種と程度との如何に隨つて無制限に猛悍ともなり、從順ともなる駿馬に比せらるべきものであると信ずるが、彼れの意思を解するところなく、ただ彼れに危害を加へることのみを事として居る豺狼に比すべきものであると信ずることは出來ない。事實さうであるとしたならば、人間が自然を遇する賢明なる道は、手を拱いて其れの暴力を俟つことではなくして、其れを馴しておのれの忠僕とすることとである

わたくしからすると、人間に取つての眞の自由は、語つて一つの意味を有ち得る自由は、斯くして人間が自然の力を征服し、利用して彼れの行爲と欲望とのはたらく幅と深さとを獲得すること、若しくは、さうする力の意識に他ならない。さうすると、自由は其れの第一意義に於て行爲と欲望とに關聯するものでなければならぬ。ラッセルは行爲や欲望のやうな雜素を交へない思想と理想とに於てのみ獨り自由が成り立つのであると說いてゐるが、思想は行爲や欲望の指標として理想は其等の指南者としてはたらく外に何の役目があるか。さうすると、思想と理想との自由は、(さきにわたくしが說明した意味に於て、)行爲と欲望とのはたらく自由を擴張し、充實する自由でなければならない。わたくし共が荒唐なる、空疎なる、若しくは、頑固なる理想に依賴して、それから生活し行く上に動力と勇氣とを引き出し得るのは、理想が直ちに事實であつた時代に於てだけである。既に人間が道德的理想と事實的眞理とは二つのものであり、事

實的眞理に一致せざる、若しくは、其れに基礎を置かざる道德的理想が永く其の妥當性を保つことの出來ないことを覺つて來てからは、思想や理想が欲望や行爲の仕事を奴隷的と輕蔑し、全然其れを超越した領域に於て純粹自由を建設するといふやうなことを聞く時に、わたくし共は其の謂ふところの純粹自由なるものの自己催眠の中に化釀された假物、若しくは、僞物に過ぎないことを洞破するのである。人は如何に一片の空想に依つてそんな純粹自由を建設しても、其れが彼れの行爲と欲望とに毫も交渉のないものである限り、行爲と欲望とが自然の力の前に敗伏する場合に思想や理想は果して能く其の純粹自由の價値に對する信仰を滅却し破却しないであらうか。

ラッセルは基督信徒であり、數學家である。畢竟するに、「自由人の信仰」は基督教と數學とより來たる二重の迷信より成り立つて居るのである。わたくしからすれば、其れは「自由人の信仰」でなくして「不自由人の信仰」である。

## 三、自由思想とは何ぞ、自由思想家とは誰ぞ

わたくしが自由と呼ぶところのものはこんなものではない。其れは單に主觀的の情操たるに止まらず、進んで客觀的に行爲と欲望とに關聯するものである。

わたくし共の生活の內には現に數多くの問題が存在する。然し、わたくし共が仔細に點檢すれば、其等はそれぞれ異なつた時代と異なつた反省の段階に於て形造られて居るが故に、わたくし共に取つて同一の意義と價値とを有たない。然し、其等の一つ一つに就いて其れの由來と性質との相違をこゝに詳說する遑がないから、こゝではわたくし共の生活改造に役立つことを標準として、大まかに其等を眞正のものと僞似のものとの二種とすることにする。さうすると、眞正の種に屬する問題はわたくし共の幸福のために是非とも解決されなければならぬものであつて、又、わたくし共の力量で

解決され得る樣式を具へたものである。僞似の種に屬する問題はわたくし共の力量では到底正面よりは解決出來ないやうな組織を取つたものであるが、其等が解決されると、されないとは、實際には、若しくは、直接には大してわたくし共の幸福に交渉するところのないものである。この種の問題の最も顯著なものの一つは、西洋に於て神學や形而上學の辯說より、自然に一般人の閑想や話柄にまで注入された害惡（Evil）に關する其れである。この宇宙は全智全能なる一個の神に依つて創造され支配されてゐるといふ前提を固守し、其れに辻褄を合せようとすればこそ、何故に人間の生活に不利益なる害惡がたまたまそこに存在するかといふことが一つの問題、而かも、神學や形而上學に取つて最も嚴肅にして、最も困難な問題となるのである。然し、わたくし共にして一旦この宇宙がそんな神に依つて創造され、支配されて居るとする信仰はわたくし共の空なる憧憬の外射である。そこに見出だされる善と惡とは、美と醜とのやうに、生物たる人間と其れの環境たる世界との間に成り立つ關係の異なる部分の適應の樣式の良、否、若しくは、程度の完全、不完全の相違に過ぎないといふ觀點に立つことになると、神學や形而上學の問題としての害惡の問題は當然倏ちにして雲散し、霧消して了ふ。たゞ殘るのは、善と惡との生活上の事實と、如何にしたならば善を增し、惡を減ずるかの實際上の工夫だけとなる。

自由の性質に關する考察も其れが神學や形而上學の問題とされるに至るのは害惡が其等の問題とされるのと同樣の經路に由るのである。其の始め、この自然は悉く必然に依つて支配されて居ると假定するがために、どこにか、そして、どういふ風にかして、この理法に滿足出來ない人間の欲求を慰籍しようとして、其の必然に對抗して其れの支配の圏外にある自由を彼れの意思の性質と想像することになる。自然のはたらきを絕對に必然とすることが一つの神話である通り、意思を絕對に自由とするのも一つの神話である。蒔く者は、又、刈らねばならぬ。沒批判に自然の絕對必然を假定

した償として、不合理に意思の絶對自由を想像しなければならなかつたのである。

それでは、事實はどうであるか。絶對必然も絶對自由も事實ではない、假想である。人間は有用なる假想として、先づ必然の概念を工夫したのであるが、其れの志向を誤釋した結果として、自由の概念を捏造したのである。

人間の體驗に入り來たるものの各は或る範圍の内に其れのはたらきを續ける傾向を有つて居る。言ひ換へれば、全然同一ではないが、類似の樣式、若しくは、組織を以てはたらき續ける傾向を有つて居る。(こゝでは此れが其等のもののわ本質であるか、或は、既に其等のものに關して人間の心の統一作用がはたらいた結果であるかを吟味する必要はないたくし共が知覺の與料として受け取るものは悉とくさういふ性質を有つたものである。)然し、其等のものはそのまゝではまだ直ちに生活の用材となるほどに統一され、洗練されて居らぬ、散漫である。混淆である、偶然の分子が多分に含まれて居る。其れを生活の道具と化するのには、わたくし共の便宜に隨つて其等の上に一層の洗練と、改造とを施さねばならぬ。必然の概念なるものはさうする目的を以てわたくし共が其等の特徴を手掛りとして、其れのはたらき振りを皇張し醇化して作り上げた一つの標準に過ぎない。つまり、必然の法則なるものは客觀的の存在ではなくして、主觀的の要求であり、設計である。事實さういふわけであるから、人間の知識としては最も抽象的なる星學的の、化學的の、乃至、物理學的の主導原則として用ゐられる勢力保存の法則にしても、自然一致の法則にしても、因果の法則にしても、客觀的の存在としては到底矛盾に陷ゐるか、不徹底に終るかの概念である。たゞ、知覺の與料を出來るだけ經濟的に、即ち合理的に取り扱ふ主觀的の要求、若しくは、設計として、始めて一つの重要なる意味を有ち來たるのである。『自然に斷隙はない』とは久しく人間の心を支配して來たモツトオである。然し、其れは彼れに便利なやうに自然を取り扱はふとして作つた一つの設計書きに過ぎない。固より自然には斷隙がなければならぬ、若し其れに斷隙がないとし

たならば、どうしてそこに生ずる變化や、進化の現象を如何に說明すべきであらうか。ベルグソンは生命の飛躍といふことを言つたが、飛躍は生命の在るところだけに限られたものではない。飛躍は自然全體の本質である。たゞ、わたくし共は無生物より生物に、又、生物に在つては、肉體より精神に進むに隨つて、飛躍の性質の一層大膽になり、一層複雜になり、一層微妙となるのを見るのである。斯くの如く斷隙を含むことを其れの本質とする自然は片寄つて必然でもなく、片寄つて偶然でもない。或る範圍の內に柔軟に類似を續けて行くはたらきだけである。事實さうであるに拘はらず、わたくし共が强ひて必然の範疇を以て其れを律しようとするところからして、其の無理な範疇に依つて取り入れられることを拒む部分は偶然となつて現はれ、範疇としての其れの妥當性を脅かすことになるのである。

必然の法則には、事實に即して言へば、事物の關係、若しくは、相續を必然と見做す假定には何等の過誤も含まれて居らぬ。たゞ、其れを主觀的の要求と共ずして、客觀的の存在とするところに始めて一つの過誤は生ずるのである。變化も、進化も、改造の工夫も、等しく適應の樣式である。然し、其れは變化より進化に、進化より改造の工夫に移るに隨つて、其れは自然の傾向たる制限を脫却するといふ意味ではなく、其の制限の內にあつて、其れの構造を變更するといふ意味に於て、だんだんに其れの自由の程度を增して行く。改造の工夫に至つて、それまで逆行的の整齊であつたものが、意識的の、若しくは、反省的の改整となる。この最後の樣式は人間が彼れの生活の便宜に隨つて、自然の力を支配するために、そこにハンドルを見出ださうとし、若しくは、作り出さうとして必然の概念を創造し、其れを自然の力の上に課するに至つて其れの頂點に達するのである。こゝにわたくしが意味して居る意味に於て、人間が自由になつたればこそ、必然の概念を創造し、其れを自然力の上に應用することが出來るやうになつたのである。かういふわけであるから、必然は自由の所產である。自由と必然とは互に反撥する存在ではなくして、相補補する觀念である。

斯くの如きが事實の眞相であるとすると、苟くもわたくしが自由に就いて語る時、共れが人間の行爲と欲望との特徴として、直接に物理的の、若しくは、自然的の現象の取り扱ひと決定と、變更とに關係するものでなければ共れはわたくしに取つて何等の意義をも有たぬのである。

人間は自由の存在物である。彼れの生活は獨り彼れを取捲くあらゆる物理的の、及び、自然的の現象を改釋し、攻整することに依つてのみ、彼れの生存を維持することが出來る。されば、大觀して、彼れの生活は改造の活動の連續である。然し、時期的に、若しくは、部分的に共れを點檢すれば、共れは必ずしもこの一般原理に合するやうにはたらいて居らぬ。共れも畢竟するに、エコノミイの法則より來たるのであるが、之れがために改造のプロセスは往々にして阻遏され窒息させられることになる。一旦わたくし共が新たにわたくし共の生活の中に生じた要求を滿たすために多大の苦心を重ねて、過去に於て創始され、現在に於て不便となつた生活の方針を打破し、若しくは、共れを改革して、新たに一層便利なものを工夫し、共れが一般に採用されることになると、それから後は、一一の事件に關して別々に商量するの手數を省き、苦痛を避けるために、この第二のものは出來るだけ久しくわたくし共に依つて細心に保存され、徹底に尊信され、讃仰されることになる。この結果として、必要に應じて隨時に改造されなければならぬことを共れの生命とする生活の方針も習慣となり、因襲となり、傳統となり、教權となる。齊に民衆が共れに拘泥するのみならず、指導者にしても、否、指導者たるがために一層頑强に共れを守護する。彼等に在つては、愛眞の念を愛利の情と紛糾し、錯綜するところのあるがために、辯論に次ぐに迫害を以てし、鬪爭を以てし、戰亂を以てしても、尙ほ飽くまで共れを死守しようとするのである。共の間に生活は遠慮なく日夜に推移して行く、隨つて、共れの欲求も日夜に變化し行つて、暫らくも息まない。斯くして、この生活の方針と實際に於ける生活の欲求とはますます扞格し、乖離して行く。この趨勢

が　しき日につて堆積すれば、そこには生活そのものの破産あるのみである。生活の破産の徵候は政治の腐敗である、道德の墮落である、產業の荒廢である、學術の沈滯である。然し、自家保存を其れの職とする人間の本能はいつまでもこの不滿足にして危殆の狀態に晏如たることは出來ない。そこで、保守を其れの特徵とする上古、及び中世と雖も、五百載にして、若しくは、千載にして一人の豪傑の士の出現するあり、民衆の代表者として彼等の欲求を洞察し、醇化し統一して其の已に古びたものを化して再び其れを新らしきものとなすの偉業を成就したのである。たゞ、當時に在つては、生活の總べての側面は宗教的機關に依つて統率され、宗教的なることを其等の基調として居たために、此等豪傑の士の多くは（後世より目すれば）宗教の改革者として起り、且つ、はたらいたのであつた。然し、其れの意味に於て、彼等の思想は自由思想であり、彼等は自由思想家であつたのである。

近世に至つて、特に、現代に於て、科學の思想が發達し、デモクラシイの精神が圓熟するにつれて、實驗主義と個人主義とは深く、固く人の心に根を張つた。この結果として、現代に生きる個人は前代の如何なる時期に生きた個人よりも彼等が繼承した生活の方針と彼等の欲求との間の矛盾の性質を一層明確に理會し、一層敏速に、そして、一層有効に其れを對治する能力を具へて來た。現代に生きる個人は前代の如何なる時期に生きた個人よりも一層少なき消耗と煩悶とを以て彼等の生活を改造することが出來るといふ意味に於て、一層聰明になつたことは明白である。然し、現代人と雖も猶ほ人間である。種族に固有する傾向より全然解脫することの出來るものではない。勘なくとも彼等の多數は、彼等の大多數は過去に於て彼等が工夫した、若しくは、適應した生活の方針を習慣とし、因襲とし、傳統とし、教權として了つて、現在に於ける彼等の生活の實利は既に其れの改造を要求して居るのに、彼等の情操は其れの保存に愛着して居る。從て解放のヴェヒクルとして計畫された制度や、教理や、學說も今は束縛の羈絆となつて居る。彼等と雖も實際に生活

して居るからには、無論、衝動としては散漫にかゝる狀態に對して不滿を感じないといふことはない。たゞその衝動の蘊意を追窮し、開展し、限劃して其れを一つの概念にまで仕上げることは到底彼等の力の及ばざるところなのである。

それでは、誰れが其れを爲すか。誰れが其れを爲すことを能くするか。其れを爲すは自由思想家であり、其れを爲すことを能くするのは獨り自由思想家のみである。今日、自由思想家なる言葉は可なりに廣く世間に使用されて居る。然し、わたくしからすれば、其れは正用されて居るよりも濫用され、誤用される場合が反つて多いやうに思われるのである。

世の中には自由思想の性質を誤解しながら、自由思想が如何なるものであるか、如何なるものであるべきかを些しも理會するところがないながら、自由思想を主張して居る者が頗る多い。自由思想家を以て自任し、他稱されてゐる輩の中にもさういふ者が尠くない。概して言ふと、彼等の過失は理論的に、實際的に、最も含蓄ある意味に於て、放恣と自由とを取り違へて居るところにある。眞の自由は獨り反省あり自制のあるところにのみ榮えるのであるが、彼等は反省のなく、自制のないところに其れを求めて居るところにある。恰も學校の課業を嫌つて敎室より逃れ出た兒童が、さうして自由を得たと空想して居るやうに。然し、無反省と無自制とは、たゞ晩かれ早かれ、專制、即ち、不自由を化醸するだけであることは事實の優に證明するところである。自由とは制度の一切を破棄し去ることではなくて、適切に現存の制度を改造して行くことである、改造して行ける準備を懈らざることである。若し或る人が一旦頽廢したコンヴエンションを破棄することは、未來永劫に一切のコンヴエンションより解脫することだと想像するならば、彼れは大なる幻想の囚となつて居る者である。或る計畫の下に一つのコンヴエンションが破棄される時、其の計畫は一つの新たなコンヴエンションでなくして何んであらう。されば、わたくし共にして眞にコンヴエンションの桎梏より免かれようと欲す

るならば、其等が生活の方針である限り、破棄されるものも、破棄するものも、新舊の相異こそあれ、畢竟するに、其等は等しくコンヴェンションであることを、隨つて、等しくコンヴェンションの機能と制限とに服することを理會することである。

自由思想とは人間の生活を自由にする思想の謂でなければならぬ。

人間の生活の總べての機關は（知識や理想でさへもが）一つの役目を以てはたらき、其の役目を滿たすことになると、其等の機關のはたらき振りは一つの固定した構造を取つて了ふ傾向を有つ。其の始め、生活を解放する方便として工夫されたものは、やがて其れを抑壓する桎梏となる。この傾向の徴候は各機關の孤立である。其の孤立より生ずる一つの機關と他の機關との間の撞著、及び、一つの機關の志向と其れの組織との間の乖離である。仔細に點檢すれば、人間の過失、若しくは、罪惡の十中の八九までは此等二つの事實より胚胎されることが發見されるであらう。自由思想に與へられたる唯一の使命はこの撞著を調和し、この乖離を融合する一事に限られると言つてもよい。それでは、自由思想は如何なる見地を取ることに依つてこの使命を果すか。其れは、常識の、教理の、乃至、學說の志向を達成するために、其等の理會を搖蕩し、改整することに依つてである。詳しく箇中の消息を語るならば、自由思想は其等が為すよりも一層深く、一層廣く、一層放膽に、親切に、的確に人間の性情を考察し、文化の歸趨を解釋して、其等が本質的の對存とするものを自由思想は作用的の確執とし、其等が獨立的の構造とするものを自由思想は相關的の發動とし、其等が最後的の狀態とするものを自由思想は中間的の經過とし、其等が、強者の弱者に課する支配とするものを自由思想は優者と劣者、若しくは、先進と後進との間に成り立つ合議とすることに依つてである。一方に常識や、教理や、學說と、他方に自由思想との間には、人間の生活のはたらき振りに關してこのような相違はあるが、之れを要するに、自由思想

の目的とするところは、成りたけ尠しの犧牲を以て個々の欲望の統一を圖り、成りたけ尠しの反抗と反感とを以て舊き情操と制度とより新らしき情操と制度とへの揚遷の實を擧げようとするところにあるのである。この點よりすると『眞理は爾を自由にす』と高唱した基督は確かに古今獨步の自由思想家であつた。何故ならば、この道德の天才は人間の生活を統率するに、個々の行爲に關して煩瑣な規則を與へようとしないで、直ちに其等の原頭に溯つて彼の品性の溶化を期したからである。

若し如上の省筆にして自由思想の何物であるかを素描し得たとするならば、現下わが國の切に要求するところのものの一つは、其れの運用者たる自由思想家の存在するといふことではあるまいか。

## 四、一自由思想家としての予の企圖

嗚呼落漠たるかな現下に於けるわが思想界！わたくしが落漠と感ずるのは其れの量に就いてではなくして、其れの質に就いてである。其れの實體に關することなく、其れの外形に關してだけ言へば、現下に於けるわが思想界は固より多士濟々である。されば わたくしが落漠と感ずるのは決して政治を論議し、道德を論議し、産業を論議し、教育を論議し、學問を論議し、其の他、生活に關するあらゆる問題を論議する論者の鮮少なるためではない、彼等の中で自由思想の何物たるかを會得し、自由思想家の資格を以て其等を論議する者の殆ど皆無なるがためである。自由思想に遵つて爲されざる生活に關する論議は、如何に其れが博覽と宏辭とを以てなさるゝとも、わたくしからすれば、玉の杯の底なきにも等しくて遙かに空虛なものである。わたくしが現下に於けるわが思想界を落漠と感ずるのにも十分の理由はあるではないか。『萬能餘りあつて一心足らず』とは、現下に於けるわが思想界の謂である。實に、彼等の有てるものは見聞である、併

等に缺けるものは學と識とである。

わが同胞の生活の根本疾患は、其れが一方に於て神秘主義的となり、他の一方に於て唯物主義的となつて居ることである。一層正確に言へば、それが一方に於て神秘主義的となることが增長するに比例して、他の一方に於て唯物主義的となることが增長するやうな形を取つて居ることである。そして、更らに悲むべきことには、世を擧げて指導者の位置にある人々までが其れの症狀は知覺するが、其れの病源に至つては何等の理會するところもないことである。わが同胞の感じ方、考へ方、行ひ方が一方に於て神秘主義的となり、他の一方に於て唯物主義的となつて居るのは彼等が近世文明を理會することなく、其れを生活することを強ひられた結果である、近世文明の精神を體得することなく、其れの機構だけを使用しようとする結果である。この結果として、制度は欲求の表現とならず、欲求は制度を統卒せずして、社會の制度と個人の欲求との間には恒に相尅はあるが、絕えて相制はなくなつて居る。今日に於てわが國の文化が模倣の、補綴の、彌縫の其れであつて、如何なる意味に於ても、創造の其れでないことに、創造の其れであり得ないことに大した不思議はない。然し、わが國の繁榮とわが同胞の幸福とはこのやうに一つの模倣の、補綴の、彌縫の文化を持續することに依つては保障されずして、獨り一つの獨自の文化を創造することに依つてのみ保障されるものならば、一日も速かにかゝる狀態は改善され、かゝる傾向は轉換せしめられねばならぬ。これには、わが同胞をして現に有てる能力と、現に置かれた環境とを標準とし、材料として、彼等の生活の根本疾患たる彼等の感じ方と、考へ方と、行ひ方とに於て事毎に神秘主義たる的と同時に、唯物主義的たるの、否、神秘主義的たるがために唯物主義的たるの由來と關係とを爲と省察せしめ、其等に含れた志向を正當に揮揄せしなることに依つて、其れをして最も充實した意味に於て理想主義的のもの、即ち、現實主義的のものにまで變形させしめねばならぬ。世上の殆ど總べての論者は、飜譯に、紹介に、[illegible]

に、あらゆる問題をあらゆる風に論議して來た、現にして居る、然し、自由思想の何物たるかを理會せず、自由思想家の資格を有せざる彼等は、全然この一緊要事を等閑に附して居るのである。彼等は生活の改善と改造とを叫んで居る。然し、自由思想に憑らずして何んの生活の改善があらう、何んの生活の改造があらう。

わたくしは才學未熟の者である。然し、わたくしが一度文明批評家として起つや、明確に、透徹に、文明批評の唯一の利器として自由思想の機能と効用とを體認し、自由思想をわたくしの言論のヴェヒクルとして起つたのであつた。わたくしの自由思想はわが同胞の生活を、言ひ換へれば、彼等の感じ方と、考へ方と、行ひ方とを自由にする思想である。わたくしの觀るところに隨へば、わが同胞はどれほど近世文明の機關を移植し、使用して居ても、なほ中世的の個人であり、群衆である。近世的であるのはほんの彼等の外殼だけであつて、彼等の中核は依然として中世的のものである。彼等の生活は數百年來の專制と、傳統と、因襲とのために凝固して了つて、未だ曾つて一度でも文藝復興式の、若しくは、佛蘭西革命式の烈火よりの洗禮に依つて溶解され、流動化されたことはない。所詮わが同胞は彼等の氣分と覺悟とに於て『佛蘭西革命前』の民族である、『文藝復興前』の民族でさへもある。四圍の大勢に强ひられて、わが同胞は近世文明を生活することを努めて居るとはいへ、近世文明の意義に對して彼等の心田はなほ荒蕪に屬する。どんなに良い種子でも磽确の地に落ちては其れが發芽し、成長する筈はない。眞にわたくし共にして近世文明の種子をわが同胞の間に播いて、其れをして完全に茂生せしめ開花せしめ、成果せしめようとするならば、まづ彼等の心田を近世的に開墾せねばならぬ。わたくし共は國際道德を說く前に、社會主義を說く前に、絶對普通參政權を說く前に、近世の產業や、教育や、學問や、藝術を說く前に、或は、其等を說くと同時に、彼等の心田を開墾して近世的のものとせねばならぬ。さうして彼等をして風土的に、國民的に、其等を咀嚼し、同化し、運用するの理會と力量とを有たしめねばならぬ。然

し見渡したところ、今日雜多の論客の中で、そこに着眼し、其れに着手して居る者が果して幾人あるか。さうして居る者の殆ど皆無である間は、わが同胞の生活の改善と改造とに關し、わたくしは一個の文明批評家として、優に特異の分野を管領し、獨自の役(ロオル)を滿たしてゐるやうに思はれる。

一個の哲學者とし、延いて、一個の文明批評家としてわたくしの目的とするところはわが同胞の生活をして最も充實した意味に於て理想主義的のもの、即ち現實主義的のものたらしむるにある、そして、この目的を成就するわたくしの用ゐるヴエヒクルは最も正しき、そして、最も穩當なる意味に於ける自由思想である。

## 五、予が生活信條の成立と蘊藏

中世紀の末、近世紀の初め、在來の信仰がやうやく其の權威を減じ、哲學が宗教の侍女たる地位を棄てゝ、生活に於て新たに一つの獨立した存在を取つた時に方つて、『二重眞理』なる標語が行はれた。それの意味は、一つの事實に對して宗教と哲學とが異なる解釋を與へ、其等がどのくらゐ互に矛盾しても、どちらも同樣に眞理であり得る、其等の一つは宗教上の眞理であり、他の一つは哲學上の眞理であるといふのであつた。このセンチメントを代表して當時の哲學者の一人は宗教上の眞理を辯護しようとして『不合理なるが故に吾れは信ず』と揚言したのであつた。然し斯く揚言した彼れは信の何物たるかを全然理會しなかつたものと言はねばならぬ。苟くも或る人が或る事を信ずるには（縱し其れが哲學上よりは非難さるべきものにしても、何にしても、彼れが其れを信ずる見地よりしては必然に合理のものであるからである。『合理なるが故に吾れは信ず』が普遍に信仰の根抵を說明する格言でなければならない

この世の中に棲息する以上、何人と雖も彼れが合理と信ずるところに隨つて或る方針を作り、其れに據つて生活して

居らない者はない。その方針に含まれた假定を開展し、説明すれば、其れは取りも直さず彼の生活信條となるのである。事實を意識すると、せざるとに拘はらず、又、其れを告白すると、せざるとに拘はらず、總べての個人が、各、一つの生活信條を有つて居るやうに、わたくしが一つの生活信條を有つといふことは理の當然である。わたくしはわたくしの合理と信ずるところに隨つてわたくしの生活信條を作つて居るのである。

屈原の作と傳へられて居るものに、『橘頌』といふのがある。其の中に、『后皇嘉樹、橘徠服兮。受命不遷、生南國兮。深固難徙、更壹志兮。』といふ句がある。わたくしは彼れが愛郷心の、若しくは、愛國心の象徴としてこの句を歎誦する者である。わたくしは一個の人間としてこの土に生れた。人間としてわたくしの爲し得る總べては、たゞ一個の日本人として最善を竭すことである。一個の日本人としてわたくしの享有した性情を以て、わたくしの繼承した文化を開發することを外にして、わたくしの生活を完成する道は一つもわたくしに與へられて居らぬ。わたくしは日本人として善く生きることに依つて、始めて、世界人として善く生きることが出來るのである。能力の形に於て、環境の形に於て、日本人としてわたくしが現に所持し、世界人としてわたくしが成就しようとするものの資本の一切である。わたくしは無限にわたくしの生活を完成するために、現に自分の所持して居るものを尊敬し、愛護せねばならぬ。

『現實は如何に見すぼらしくとも、わたくし共は其れを尊重せねばならぬ。何故ならば現實を外にして美しき理想の發生する場所はないから』といふ意味のことをカアライルも力説した。現に自分の所持して居るものを尊敬し、愛護せねばならぬといふのは、自分の所持するものを、在るがまゝに、動くがまゝに、放任することではない。そこに既に隱然一つの力となつてはたらき始めて居る改整の傾向を捕捉し、高調して其れをしてその功を成し遂げしめることである。

最廣義にわたくしの生活といふものを理會し、最深義にわが國の文明といふものを解釋する時、其等は普通に想像さ

れ居るよりも、遙かに、遙かに、親密なる程度に於て、互に透徹し、融通して居ることが體認されるであらう。わたくしの生活はわが國の文明を攝取して成り立ち、わが國の文明はわたくしの生活よりの貢献を得て形造られる。わが國の文明を離れてわたくしの生活が存在し得ないと同時に、わが國の文明よりわたくしの生活が脱退するならば、それだけわが國の文明に缺所が生ずるわけである。わたくしの生活の中にはたらく矛盾は、わが國の文明に影響して其れの缺陷の一部を構成し、わが國の文化の中に見出だされる缺陷はわたくしの生活に反映して其れを多くの矛盾にまで誘導する。この事由からして、わが國は其れの文明の利害よりわたくしの生活の完成に關して無頓着であり得ないやうに、わたくしは自分の生活の興味よりわが國の文明の改善と改造とに關して無關心であり得ない。然し、若しこの狀態が變更されなければならぬものであるならば、そのイニシェティヴは孰づれの側より來たらなければならぬかは多言を須ゐずして明白である。さきにわたくしは一方に於て神祕主義的であり、他の一方に於て唯物主義的であることを以てわが國の文明の根本疾患とした。然し、わが國の文明のさうであるのは、わたくしの、わたくしの隣人の、そして、總べての日本人の感じ方と、考へ方と、行ひ方とが一方に於て神祕的であり、他の一方に於て唯物主義的であるがために、わたくし共の生活に於けるこの矛盾が、おのづからわが國の文明の缺陷となつて居るのに過ぎぬ。されば、わが國の文明よりこの二元主義を驅逐する唯一の道はわたくし共が、てんでに、自分の有てる才能と、自分の置かれた環境とを材料とし、標準として、わたくし共の生活に於て先づこの二元主義を打破することであらねばならぬ。現下に於けるわたくし共に取つて、最も含蓄ある意味で善く生きるといふことは、たゞこの一事を爲すことに限られる。

わたくしの生活信條はわたくしの要求とわたくしの見解とを基礎として、わたくしが善く生きるために作つた一つの公準である。然しわが同胞にして、わたくしと倶に同一の文明を生活し、同様に其れの缺陷を分受して居る以上は、こ

の生活信條がわたくしの生活に取つて其れの原理であるやうに、彼等の生活に取つて尠なくとも一つの參考資料であらねばならぬ。

## 六、予の生活信條

### 第一、人生の目的

人生の目的は何んであるか、其れの意義は何んであるか。苟くもこの世に生を營んで居る以上、何人に取つてもこれに優して易解の問題はないのに、事實、これは一つの疑問たるべき性質を具へないほど易解のものであるのに、古來、人間に課せられた最も難解の問題の一つとされて居るのはどういふ理由であるか。其れは他でもない。初めからこの問題は間違つた照準に依りて構成されて居る、隨つて、到底正しき解答は案出され得ないやうになつて居るのに、世人の多くは强ひて其れに對して一つの解答を案出しようとして居るからである。

何人にしても、苟くもこの世に生を營んで居る以上、彼れの生活が彼れに取つて人生の目的であり、そして、其れが或る方針に依つてなさるゝならば、彼れに取つて其の方針が人生の意義である。勿論、異なる個人が一つの協同生活のメンバアとなり、其れの支持と利用とのために協力する結果として、自他の生活はそれぞれ相互に感化と變更とを受けることになる。然し、さうしたところで、人生の目的と意義とを限定する最後の標準は各個人の生活であらねばならぬ。たとひ彼等の生活の協同的含蓄を一層明確に理會し、一層自由に高揚する立法家、政治家、哲學者などと呼ばれる輩が彼等の中より出でて、其等に超越するやうに見える人生の目的と併せて其れの意義を新に立するにしても、畢竟するに、其等が眞實のものである限り、其等の材料となり、指標となつたものは、そこにはたらいて居た各個人の生活の

目的と意義との他に一つもありよう筈はない。其等は彼等立法家、政治家、哲學者に特有な知見と同情とを以て、各個人の生活の特殊性を厭殺しようとしてではなく、反つて、其等の獨自性を解放しようとして各個人が人生の目的とし、意義として居るものを總合し、醇化して出來たのに過ぎない。さうすると、人生の目的は何んであるか、其れの意義は何んであるかといふ問題は何人の生活にしても既に應分に解答して居るところのものである。言葉に依つてでなければ、尠なくとも實行に依つて、彼れの日夜の動作は一つとして之れが解答でなくして何んであらう、人間の興味の一切は、現に彼れが營みつゝある生活を如何にして一層善くすべきかの一事に極限さるべきものであり、又、聰明に吟味すれば、事實、其れに極限されて居るのである。此れが彼れに取つての唯一の問題である。若しこの問題の外に問題の形を取つた幾多のものがあるとするならば、畢竟するに、其等はこの目的を成就する方便としての問題に過ぎない。

『起原は神秘である』とアミイルは言つた、如何にも、總べての起原は神秘である。のみならず、見やうに依つては、總べての存在も、總べてのはたらきも一つとして神秘でないものはない。其等に關して透明なる理會を有つことは全然人間の能力を超絶したものである。例へば、何故にこんな奇怪な宇宙といふものが存在するか、何故にこんな奇怪な人間といふものが其の間に出現したか、といふやうなことになると、如何なる大宗教家の信仰と雖も、如何なる大哲學者の知識と雖も到底解くことの出來ない永久の謎であらねばならぬ。然し、彼等の孰れもはそんな謎を解かうとして無益な努力と苦悶とを續けることをしなかつたのである。彼等にして眞に宗教家たり、哲學者たるの職分を會得して居る限り、彼等は他に彼等の智慧を正用するの道を知つて居た、其れは彼等が見出した宇宙の組織と、人間の性情と、兩者の關係とを與へられた事實として素直に受け取り、限られた條件の中に在つて、限られた能力を以て、如何にしたならば

彼等の生活と、彼等の同胞の生活とを抄しても一層善くすべきかの工夫に其れを適用したのであつた。然し、彼等にしたところで、結局は時代の兒であつた。彼等がどれだけ偉大なる道徳上の天才であつても、當時世間に彌漫し、總べての生活に浸潤して居た信仰や傳統を全く脱却することは出來なかつた。随つて、彼等の言説は、往々、(今日のわたくし共よりすれば)、實際の生活の説明としては首肯し難い神話や、比話の外衣に被はれて居る。それにしても、彼等に特有の非凡なる直覺と才幹とは彼等の企てた革命の見地より驚くべき程度にまで改釋して、其等に新らしき意味を盛り、其等の中に實際の生活に對する指標を出來るだけ多く見出ださうとして居たことは事實である。

嘗て人間の文明の行程に於て一つの段階があつた、正確に言ふと、現代と雖も、猶ほ、いろいろの意味に於て其の段階を、全然脱却しては居らない。其の段階の特徴を一口に言つて見ると、不思議なことには、總べての人々が現在よりも過去、若しくは、未來を目標として生活して居たことである。彼等は實際の生活よりも(想像力に依つて捏造された、随つて、其れに對して超絶的地位に置かれた)其れの起原か、否らざれば、其れの到達點に價値を置き、實際の生活は其の起原に復歸するか、其の到達點に到着するかの準備とし、手段としてのみ一つの價値があるとなされたのであつた。樂園は過去にあり、天國は未來にあつて、孰づれも現在には無かつた。わたくし共が價値を味ひ、理想を實現するための唯一の基本は現在だけであるから、幸福を獲得しようとして、現在を措いて其れを過去に求めたり、未來に求ためたりすることは不合理であるには定まつて居る。然し、當時の人々の感じ方、考へ方からすると、一應の理由はあのである。彼等は人類學者の謂ふところのアニミズムの精神に支配されて居た結果として、彼等の生活の動力に依り、其れの内に導く様式と、導かれる内容との二つに暫らく分裂する作用的の確執を、彼等の生活と、其れの外にある或る一つのものとの存在的對立とし、更に、其の對立を時間的に解釋して、現在と過去と、若しくは、現在と未來とに

配置したのであつた、彼等としては、さうすることに依つて、始めて彼等の生活を統一するに一つの依據と規律とを得たのであつた、彼等としては、導く樣式と導かれる内容とを生活して行く間に、彼等の生活の内に隨時に相繼する作用的の確執としては、その不安さと不確實さとの念に堪えられなかつたのである。プレトオやアリストオトルのやうな今日に至るまでわたくし共の人生觀と宇宙觀とに偉大なる感化を與へて居る曠世の大思想家までもが理念や神の假定を以て實際の生活を統一するに必須の存在物としたのは、この當時の一般傾向を襲套したのであつた。わたくし共にして其の理念の組織若しくは、其の神の性質を檢討する勞を取るならば、其等は當時實際の生活に於てはたらいて居た其れの方針を外化し、物化したものに過ぎないことを見出だすであらう。されば其等の價値は獨り其等が實際生活に對して指標を有ち、其れの指南車として役立つところにあるのである。

其の宣言に於て超絶的でありながら、其の意義に於て事實的であつた此等の假說が實際の生活に對して其れの指標を失なつて來ると、そこに、久しい間神學や形而上學の懊惱問題となつて來た『何處から、』と『何處へ』との問題が化醸される。超絶的の意味に於ける『何處から』と『何處へ』とは確かに人間の能力を超越した問題であるが、其れがさうであるのは、其れが問題ではなくして假似問題であるからである。

わたくし共總べては、既に、特定の性情を以て、特定の文明の中に人間として生れ出で、わたくし共の生活の中に胚胎される矛盾を自覺するに及んで、始めて、人生に對してわたくし共の驚異の眼は開かれるのである。『大凡人間に依つて發せられた問にして、又、彼れに依つて答へられないものは一つもない』とエマソンの觀察した種の問題は悉とく彼れが生を營み始めて後、其れを續けるために彼れの生活内の事件として生ずるのである。尤も、人間の興味は彼れの現在に集中されるといつても、彼れの現在は過去よりの成長であり、未來への延長であるがために、現在に善く生きよう

とするならば、出來るだけ完全に其れを理解し、支配することの必要から、尋いで、其れの過去に溯源し、其れの未來を豫見することになる。之れがために、現存するもの、若しくは、知られたるものより、現存せざるもの、若しくは、知られざるものにまで推理する科學が人間の幸福の保障に取つて大切な道具となつて居るわけであるが、其の溯源と豫見との方法は現在に善く生きるといふ興味に依つて極限され、決定されて居るのである。決して超絶的の意味での『何處から』と『何處へ』との問題を追窮して居るのではない

事實、超絶的の意味に於ける『何處から』と『何處へ』との問題が普通に想像されて居るやうに、人間にとつてそんなに重要なる意義を有ち、そんなに絶大な威厭を以て其れの解決を人間に迫つて居るのであらうか。此れは頗る疑はしい。

トルストイの『懺悔錄』を讀むと、其の中に彼れが自殺を決心し、倏ち心機一轉してそれを思ひ止つた前後の顛末を記した一節がある。其れに據るとかうである。彼れは、彼れの生涯の或る時期に至つて、頻りに形而上學的の意味での『何處から』と『何處へ』の問題に惱まされることになつた。そして、(さう彼れが思つたのは、全然、科學の性質に對する彼れの誤解より來たつたのであるが、)科學は彼れのためにこの問題を解決してくれると思つて、科學の說明に聽くことにした。然し、科學は其れに對して何等の滿足なる解決を彼れに與へなかつた。依然として『何處から』と『何處へ』との問題は大なる神秘として殘つた。そこで、彼れはますます懊惱の情を增すのみであつた。切羽詰つて、終に自殺を思ひ立つた。事實、彼れは二度まで自殺の手段を取つた。然し、この羽目に陷つた時、ふと眼を轉じて彼れの周圍を見まわした時、そこには、尠しも科學を知らず、藝術を知らず、近世文化の何物なるかを知らず、簡單な衣食を以て單純な欲望を滿し、素朴に家業を營み、素朴に隣保相助け、嬉々として生活して居る一團の人々のあるのに氣付いた。

此れは、即ち、ロシアの農民であつた。彼れはこの有様を見て、豁然、人生の極致はこゝにありと大悟し、自殺を思ひ止まつたのであるといふのである。然し、彼れのこの物語りよりして、彼れをして自殺を決意せしめた眞の原因は『何處から』とか『何處へ』とかいふやうな問題からの悩みではなくして、彼れの生活に因んで生じたもつと卑近な事件の悩みであつたとわたくしは推測するものである。さうでないとしたならば、一向に筋褄の合はぬ話ではないか。ロシアの農民がどんな風に生活して居たにしても、其れが、形而上學的の『何處から』と『何處へ』との問題を解決しないことは、其れの解決に對つて一閃の光りさへも投じないことは明瞭である。彼れの實際の生活の中に化醸された具體的の苦悶が偶ま傳統的の、形而上學的の問題の假相を取つたこととすれば、初めてわたくし共に納得はつく。『觀樂極兮哀情多。』彼れは、外豪奢にして、內、悪德と虚僞とに滿ちた貴族の生活に對して漸く嫌悪の念を生じ、其の嫌悪の念が實は彼れの厭世觀の中核を作したのである。

先年、藤村操が人生を不可解とし、『巖頭感』を此の世に遺して身を華嚴の瀑に投じた時、世人の或る者は其れを（妙な名稱ではあるが、）哲學自殺として彼れの志を高しとし、彼れの行を壯なりとしたのであつた。その後、（その事實の有無は固より不明であるが）彼れの死には失戀の一事件が纏はつて居たといふことが評判されるに及んで、或る人々の心の中には、其れに依つて彼れの死の意義は大に割り引きさるべきものであるとの考慮が生じたやうに見えた。然し、わたくしからすれば、この評判に相應する事實があつたとして、始めて、人生が彼れをして自殺を決行せしめたほど不可解のものとして彼れにまで現れた理由が會得出來ると思はれるのである。あの『巖頭感』は眞實の告白であつた。あの失戀のエピソオドは形而上學的の問題を醗酵して其れを個人的のものとなしたのである。

俗人に依つて雜然思想家として呼ばれてゐるものに一種の型がある。其れの一種は人生の目的と意義とを實際の生活

の中に見ださうとして居るものである。他の一種は其等を其れの外に、(時としては、其れの前に、時としては、其れの後ろに)見出さうとして居る人々である。『瞬間を受用せよ』と教へたゲエテや、『汝に最も手近な義務を盡せ』と說いたカアライルは確かに前種に屬する思想家であり『自然に還れ』と叫んだルウソウや『超人の出現のために橋梁たれ』と唱へたニイチェは確かに後種に屬する思想家である。そして、わたくしは前種の思想家に與する者である。一時に世人の情操を搖蕩し、彼等をして、猛然、おのれの生活に對して不滿の感情を起さしめるのは後種の思想家の得意とするところであるが、徐ろに彼等の理智を啓發し、永遠に彼等をしておのれの生活の中に秩序と光明とを創造せしめ、其等を把持せしむることは前種の思想家の獨擅するところでなければならない。

わたくしは刻下わが國に於て現に生を營む個人の生活の目的と意義との外に、あらゆる個人の生活の綜合の目的と意義との外に、人生の目的と意義とを空漠に憧憬し、模索して居る人々の數の餘りに多きに驚くのである。わたくしは宗教家と呼ばれて居る輩の中にも彼等を見出だす。文藝家と呼ばれて居る輩の中にも彼等を見出す、教育家と呼ばれて居る輩の中にも彼等を見出だす、哲學研究家と呼ばれて居る輩の中にも彼等を見出すのである。今日、わが國民の文明が一方に於て神秘主義的となり、他の一方に於て唯物主義的となつて居ることの責任の大半は彼等と彼等の言說に感化される人々の負ふべきものであるといふことを誰れが否定し得るか。

## 第二、生活のはたらき

昔、アアキメデイスは『自分に槓杆を當てがふ點を示せ。さうしたならば、自分は地球を動かすであらうが』と嘆じたさうである。如何にも、地球を動かすのには、力も、槓杆も必要である。然し、一層必要なのは正しく其等を當てがふ點を發見するといふことである。今日、生活改善とか、社會改造とかいふことが汎く世上に叫ばれて居る。そして、

この叫びには十分の根柢があるとわたくしは信ずる。其れは、社會の制度と個人の欲求との間に横はる矛盾の體驗より、多くの人々に依つて發せられて居る叫びである。然し、或る缺陷があると感ずることと、其れが如何なるものであるかと知るといふことは、別の事柄である。感ずるだけでは其れを取り除く方法は一切講じ得られないからである。わたくしはわが同胞の間に生活改善と社會改造とに必要なる力と、槓杆との潜在することを疑はない。たゞ、わたくしは彼等の間に其れを正しく當てがふ點が發見されて居るかどうかを大に疑ふ者である。

わたくしはわが國の文明の根本疾患を、其れが、一方に於て神祕主義的となつて居り、他の一方に於て唯物主義的となつて居るところにあると診斷して居る者である。わたくしの見解よりすれば、其れが神祕主義的となつて居るとは、既に生活に對して機能を失つた制度を保留し、若しくは、初めから何等の機能を有たぬ制度を設立することであり、唯物主義的になつて居るとは、統一なき欲求をはたらかして、其れに依つて一つの滿足たる方針を實現しようと空想して居ることである。若し斯くの如きが神祕主義的であり、唯物主義的である症狀であるとすると、些しでも現下に於けるわが國の文明の特徴を、其れの政治に就いて、其れの道德に就いて、其れの産業に就いて、其れの教育に就いて、將た、其れの學問に就いて一通り觀察したものは、誰にしても、わたくしのこの診斷を無雜作に一片の僻見と非難し去る者はあるまい。さうすると、わたくし共は學說にしても、教理にしても、政策にしても、この惡狀態を助成し、若しくは、支持する傾のあるものを排斥し、其れを破壞し、若しくは、溶解する傾のあるものを涵養せねばならぬ。そして、生活のはたらきに關しての誤れる解釋の如きも排斥さるべきものの一つであらねばならぬ。

唐詩に釣罷歸來不繫船、江村月落正堪眠、縱然一夜風吹去、猶在蘆花淺水邊といふのがある。この善良なる詩人は人間性の善なることに就いて純眞なる信者であつたやうに想はれる。然し、あの時代に方つて、人間性の善なることに就いて、

このやうに純眞の信頼を置いたのは稀有の事であつた。これまで人間性ほど人間に依つて其れの性質の誤解され、猜疑されたものはない。人間が彼れの生活に、延いては、この宇宙に秩序と法則とを立する方便は彼れの性情のはたらきを外にして、一つもないのであるから、彼れがそんなに久しく彼れの性情の性質を誤解し、猜疑して來たといふことは、如何にも不思議でもあり、不合理の所爲でもあつた。然し、事實は確かに事實である。斯くして、一面からすれば、人間の發展の歴史は彼れが人間性に對してだんだんに誤解と猜疑とを薄らぎ、其れに對して理會と信頼とを増して來た歴史であると見られ得る。今日に至つても、この誤解と猜疑とは人間の感じ方や、考へ方から全然その跡を絶つたとは言はれない。現に、到る處、人間は放任して置けば墮落するばかりである、彼れを救ふのは獨り神の力あるのみであると說かれて居るのは、之れが何よりの證據である。

何故に人間はおのれの性情のはたらきに對してこのやうに誤解と猜疑とを懷くことになつたか。そこには一つの十分なる原因があつた。其れは、彼れが欲望のはたらき振りを精當に理會せず、隨つて、妥允に其等を支配し、運用することが出來なかつた結果である。

人間は衝動を以て彼れの生活の道具として出立する。衝動は彼れの生活のあらゆる機關となるものの基本である。衝動は其の初めに方つて盲目である。然し、其等の孰づれもが、外に向つて動き、反應としてそこより刺激を呼び起すことになると、衝動に及ぼす其れの影響は、倏ち、協同してのみ始めて生活の道具として役立ち得るといふ事由の下にそれまで潛在して居た其れと他の衝動との有機關係を覺醒して來る。この目醒めた有機關係は、其れの本來の機能に依つて、一つの衝動がはたらく度毎に、無論其れを取り　れた後、作用上の、及び、利害上の關係を有する總べての衝動の間に一時的の合議體が成り立ち、其れの實現の可否と、そして、若し其れが實現されることが可しと決せられるなら

ば、その實現の程度と様式とが合議されるのである。『合議される』と言つても、その初めに方つては、其れの方法に於て極めて散漫であり、其れの意識に於て極めて不明確であるのは事實である。然し、一つの興味からは或る衝動の滿足が追求されても、他の一層大なる興味から其れが否定されることのあるのはわたくし共が孩兒の行動の中にも常に認取することの出來る以上、論理的には、即ち、其の行動の意義を標致するには、其れを形容して合議、尠なくとも、構成の途中に在る合議と呼んでも差支へない、否、他の言葉を以て其れを呼ぶよりも遙かに妥穏であり、適當である。

合議が續いて行はれる結果、本來衝動に潜在した二重の作用、即ち、支配する様式と、支配される内容とを顯然其へて來ると、わたくし共は改めて其れに欲望と命名する。つまり、欲望とは衝動がおのれの滿足を求める時に、自覺を以て其れの手段と關係とを考慮するやうになつた衝動の謂に他ならない。

こゝで、重大なる謬見に陥り、其の謬見の所産として、在來の神學や、形而上學や、認識論さへもが捏造したやうないろいろの神話を捏造しないために、わたくし共は篤とこの二重の作用の性質を精察し、正解することが肝要である。

第一には、わたくし共は輕率に支配される方をおのれの發動を求めて居る一つの欲望と同一視し、支配する方を其の一つを除いた他の總べての欲望と同一視してはならないといふことである。一つの行爲の決定には、其れに關係を有つ總べての欲望が共通の見地に立ちて與づからねばならぬ。例へば、一國の議會に於て、全國の選擧區から選出された議員が一つの地方問題を討議するやうなものである。其の議案は其れと直接の利害關係を有つ一人の議員に依つて提出されたにしても、其れの討議は闔國的の見地よりなされねばならぬ。當の議員の意見が他の議員に依つて傾聽され、最後の決定が彼れに依つて納得されるのは、彼れが闔國的の見地に立つて其の討議に與つて居るからのことである。さうでないならば、そこには強制はあらうが、納得といふものはあり得ない筈である。今、わたくしは比喩を棄てて實際に起

る事實に就いて考察して見よう。こゝに平常酒を嗜む一人の職工があつて、彼れが賃銀を受け取つた歸途、ふと酒屋の前を通りかゝり、忽ち彼れの心の中に飲酒の欲求が生じた、然し、其れと同時に、彼れの家庭に明日の米鹽の資を得ようとして彼れの歸りを待ち受けて居る妻子の心像が惹起されたがために、其の欲求の滿足を中止したとする。この場合に、支配したものは妻子の幸福を氣遣ふ欲望であつて、飲酒の欲望はたゞ其れの支配を受けただけであると觀ることは出來ない。わたくしは尠しく其の理由を語るであらう。飲酒の衝動はどうして彼れが家庭に殘した妻子の幸福を氣遣ふ欲望を呼び起したか。其れは『彼れの平生の生活に依つて形造られた聯想に依つて』と或る人は答へるかも知れない。然し、彼れの飲酒に關聯した心像は他に澤山あるべき筈である。そして、其等の中には、飲酒の欲望を鼓舞し、奨勵するものもあるに相違ない。それにも拘はらず、故らに、其れが家庭に於て明日の米鹽の資を得ようとして彼れの歸りを待ち受けて居る妻子の心像を呼び起したのは、飲酒の欲望がおのれの滿足を主張しながらも、猶ほ、生活の統一に對して一つの機能を以てさうして居るからである。それであるから、其れに依つて妻子の幸福を氣遣ふ欲望が呼び起された時、能く其れと共通の見地に立つて、其れと協議することが出來たのである。勿論、多くの場合に於て、事件はこのやうに圓滑に進行しては居らぬ。そこには必然に爭鬪もあり、煩悶もある。さうして爭鬪や煩悶の續いた後、行爲が決定されるから、其の行爲が豐富な意味を有つことになるのであるとも言へる。然し、一つの公準としての立場より欲望のはたらきを觀察すれば、事實は、結局、わたくしがこゝで說明して居る通りのものでなければならない。

第二には、わたくし共は支配する方と支配される方とは、一つの欲望が行爲にまで成熟して行く進行の中に限つて對立する作用であるとし、決して其等を永久に固定して對立するものとしてはならないといふことである。この事實の眞相は、苟くも行爲のヴェヒクルたる、否、其れの反省的側面たる判斷が如何にして成立し、如何なる機能を有つて居るか

を知悉して居る人々には容易に會得さるべきものである。勿論人間の生活の全部は認識の活動だけで支配されて居らぬ。其れを支配するものに審美の活動もある、表現の活動もある、社交の活動もある。然し、其れが主とし隨時の改整と改造とに依つて支持されて居るものならば、人間の生活に於て認識の占める地位は極めて重大なものであるとせねばならぬ。そして、認識界の中核を形造つて居るものは判斷である。されば、生活するといふことは判斷して行くといふことである。然し、同じ判斷が繼續されて行くのではない。事件が相續して起るにつれて、其等を處置して行くために異なる判斷が相續して行くのである。時々刻々に一つの判斷が終結され、其の收獲が主辭となつて新らしき判斷が構成されて行くのである。かういふわけで、各の判斷の主辭、及び、賓辭となるものは、いつでも獨自のものを其等の材料とし、獨自の意義と目的とを有つたものである。生活を一貫する興味は、亦、其等の相續して起る判斷を一貫して居るが、前に主辭となつたものは後に主辭となるものと同一ではないし、前に賓辭となつたものは後に賓辭となるものと同一ではない。其等が同一でないからして、始めて、判斷が生活を改整し、改造する道具となり得るのである。判斷の形式に當て嵌めれば支配される方は主辭に相當し、支配する方は賓辭に相當する。さうして、兩者の媒介たる聯辭は、兩者の外的均齊を意味さないで、或る一つの目的に對して其等の内的抱合を意味するのである。

わたくしの觀るところでは、人間の生活のはたらきに關して捏造されたいろいろの神話は、この支配する方と、支配される方との二種の作用に關する誤解に其等の端を發して居るのである。

然し、等しく神話と言つても、わたくし共は其れが文明の變遷と、進化とにつれてだんだんにおのれを變形して來たことを見逃してはならない。其れが、初めには、神と人間との二つの存在の對立とせられ、次には、天理と人欲との二つの原理の對立とせられ、それから後いろいろの變形を經て、今日に於ては、其れが與料たる嗜欲と其れが綜合たる、

若しくは、克服たる理性との二つの異質の對立とされて居る。わたくしは此等の孰づれの見解にも同意出來ぬ者である。若し其れが眞面目に依據されるならば、此等の孰づれの見解も人間の生活のはたらきに、尠なからざる誤謬と故障とを齎らすものとわたくしは考へて居る者である。

人間の經驗は獨り總合的活動に依つてのみ構成され得るものである。そして、この總合的活動は彼れに先驗的のものであるといふことは、今日、哲學思索に取つて一般信條となつた。然し、これだけのことは啻に今日の哲學思索に取つて一般信條であるのみならず、昔から、苟くも哲學思索の名に價する哲學思索に取つて一般信條であつたと言つてもよいくらゐである。プレトオ、アリストオトルと雖も暗々裡に其れを事實と假定して立論して居る。其れが事實であることを沒却したと言つて、後世の學者から非難される英國の經驗派に屬する人々と雖も、其れに對して明斷なる説明こそは與へなかつたが、矢張り其れを事實と假定して立論して居る。『人間の生活の主なる仕事は推理(infer)することである』と斷言し、其の假定の上に人間の論理的活動の性質を考察し、説明したジエ・エス・ミルの如きは、言葉に於ては兎に角として、實行に於ては先驗的なる總合的活動が人間の經驗の構成に與つて如何に重要なる役目を爲して居るかを十分に認得してゐた一人であつた。たゞ何人も嘗て企圖しなかつた方法に依つて、何人にも優れて明確に、根氣よく其れのはたらきを析開し、闡明したもののカントであつたことはわたくし共の等しく承認しなければならぬ事實である。

わたくしとしても、苟くも哲學研究に志し、其れに依つて或る効果を擧げようとして居る以上、どうしてこの一般信條を拒否することが出來ようぞ。わたくしは其れの一信徒であることを告白するに躊躇せぬ者である。但し、わたくしとしては、こゝに一つの問題がある。其れは先驗的なる總合的活動のはたらきを經驗の如何なる段階に置き、如何にその特徴を解釋すべきかといふことである。この一點に關して、わたくしは世の論理主義者と稱する者とは手を別たなけ

ればならない。彼等はカントの衣鉢を墨守して其れのはたらきを知覺、若しくは、衝動に認めずして、悟性と理性とに認めようとするに反して、わたくしは其れの發端を夙に知覺と衝動とに於て認めようとするのである。等しく先驗的なる總合的活動を認めながら、其れの結果に於て彼等とわたくしとの間に千里の差を致すのは、この思想の相違あるに由るのである。

彼等謂ふところの論理主義者は口を開けば輙ち言ふのである、『知覺や衝動はわたくし共がどんなに分析しても、總合の活動は見出だされない、畢竟するに、斷片的のものとして始まり、斷片的のものとして終る外はない。然し、人間の生活は、事實、總合されて居る、總合されて、始めて、成り立つのである。して見れば、他に其等を總合するものがなければならぬ、其れは個性であり、理性であり、眞の意味の我である、』と。彼等の主張を眞實のものとすれば、如何にも彼等の推論は正しきものである。然し、其れは彼等が勝手に知覺や衝動には總合的の活動が尠しも含まれて居らぬと假定して掛かつた結果である。知覺や衝動には總合的の活動が潛在して居る。其等が生を營む道具たらんがために外來の、若しくは、内起の刺激に出遇ひ其等を整頓し、支配しようとして、始めから潛在した其れの總合的原理が顯然はたらき出すのであるとすれば、知覺や衝動と、悟性、若しくは、理性とはたゞ一つものの異なる段階に與へられた解釋に過ぎないこととなるのであらう。さうすると、初めから終りまで在るところのものは意味を有つた存在だけであつて、一方に存在があり、他の一方に意義があつて、其等が（どうしてさういふことが行はれるか何人にも解らないし、又、解らう筈はないが、）人間の心の中で互に抱合して知識や道徳が出來るといふやうなことは一つの神話となつて了ふ。實を言ふと、カント主義の根本缺陷はカントが彼れの學説を間違つた心理學の假定の上に立てたところに胚胎して居る。

彼れが當時の英國の心理學の假定が人間の經驗を説明するに不十分のものであつたことを看破したことは、其の當

を得て居た。然しながら、其れを其れの眞價、即ち、其れの纔邊に取らずして、纔かに其れの表價、即ち、宣言に取り、そして、其れを不十分のものとして彼れが全然其れに超越するものと信じた一つの學說を工夫したところにあるのである。若し、彼れにして一層深刻に、當時の經驗派の假定に入りこみ、一層精當に其れの缺陷を發見したならば、今日一般に獨逸の哲學者たちのドグマとなつて居る論理主義、心理主義の對立の樊籠は永久に思想界から取り除かれて居たらうと想はれる。何故ならば、彼等が心理主義の模範として居るロックやヒユウムの學說もわたくしから見れば一種の論理主義であつて、たゞ、其等は間違つた、粗硬な論理主義であつたからである。この點よりすると、フツサアルが彼れの『論理研究』の第二卷に於て試みて居る英國の經驗派の假定に對する批評は（わたくしは其れの方法にも、結果にも、全然同意を表するものではないが、）カントの爲した其れに比して一層親切にして適切なものがある、こゝに於て、不必要に形而上學的の色彩を帶びしめたのは餘り感心は出來ないが、カントの二元觀に依據たるものあつて蹶起したフイヒテやヘエゲルの努力にわたくし共は十分の意義を認めなければならぬ。

ヴインデルバンドの如きも、論理主義者に傳統となつて居る論理主義と心理主義との對立の樊籠の内に跼蹐して居る一人である。彼れの著作の中でも、あの『プレルヂエン』で收められたいろいろの論文が最も明かに其れを例證して居る。そして、『發生的方法か、批判的方法か』の如きは其れの尤なるものである。彼れの意見に隨へば、發生的方法はたゞ物事の變化を其等が起るまゝに敍述するだけであつて、其れの中には何等の價値の判斷が加はらないから、眞の哲學研究の方法とはならない、と言ふのである。然し、眞の發生的方法とは果してそんなものであらうか、どうであらうか。學說にしても、道德にしても、制度にしても、苟くも其等が人間の生活の事件として、人間の生活のために、人間の生活の中に起る以上、隨時環境を支配することを目的として、要求の樣式の改整に關する評價、即ち、價値の判斷を其れ

のヴエヒクルとして變遷しないで、どうして變遷するであらうか。こゝに歴史の合理性が成り立つわけである。さうすると、眞の發生的方法は實際に相續して起つた價値の判斷に依つて決定されて、變遷の條件の意義を論理に研究するものでなければならない。若し斯くの如きものを眞正なる意味に於ける發生的方法であるとするならば、其れが何故に哲學的研究の一つの方法、而かも、最も重要なるものの一つとなり得ないかを、わたくしは理會するに苦しむ者である。

わたくしは、復び、カントに還つて一言せねばならぬ。

更に、カントの思想に纏はる缺陷は、其れが『純理批判』の中に於てさへ、二三の異なる、そして、相容れざる見地の間に右往、左往、低迷し、彷徨して居ることとである。カントとして謂ふところの現象主義がそれの中心思想でなければならぬと思はれるが、其れが、或る時は主觀主義に陷いり、或る時は合理主義に傾いて居ることである。わたくしの考へるところでは、現象主義は現實主義を一層深く追窮して、其れの根柢たる人間の總合的活動のはたらきを見出し、說明して居るものであるから其れは現實主義と相容れるものである。然し、合理主義に至つては、新らしき形にもせよ沒批判に過去の信仰に其れの基礎を置く形而上學の憧憬を裏書きして居るものであるから、現實主義と全然相容れざるものである。特に、わが國のカント主義者に依つて珍重されて居る Idee の思想の如きは確かに彼れの合理主義の部分に屬する抽離物である。現象主義の本來の主張からすれば、Idee のやうな思想は極力排斥さるべきものではなかつたか。

嗚呼不信なる者よ！何故に卿等は現在に卿等の求める一切を得て、現在に滿腔の信賴と價値とを置くことが出來ないのであるか、若し卿等にして一層眞實に、一層眞劍に、現在に生きようと努めたならば、卿等は其處に卿等の未だ曾て知らざる力と、美と、莊嚴とを見出たすのであらうに！卿等が Idee に賴つて生きようとするのは、Idee に賴らざれば生きることが出來ないと考へるのは、卿等が現に眞實に、眞劍に、現在に生きて居らない何よりの證據である。

カント學徒の意見に依れば、Ideeは永久にわたくし共に依つて實現されないものである。不可思議にも、この特徴に依つて、其れは永久にわたくし共を押進する力としてはたらくと言ふのである。其れが特定の內容を有たないのが其れの美點であると、彼等は附加へるのである。生活して行く上に、どうしてわたくし共の生活はさういふものに依つて支持され、牽引されて居なければならぬと考へなければならないかの理窟にわたくしは苦しむ者である。如何なる思想にしても、其れが、結局日常生活に役立たないならば、小錢に兩替出來ない貨幣のやうなものであると或る學者は言つた。科學の創造する概念は小錢に兩替出來る貨幣である。ニイチエの超人の思想にしても隨分迂遠なものであるが、それでも、猶ほ、小錢に兩替出來る貨幣たるを失はない。然し、Ideeに至つては（こんなことを言つてはカント主義の神聖を冒瀆するかも知れないが、）小錢に兩替出來ない貨幣であればまだしも、一個の贋札にしか過ぎないやうに想はれる。全體、カントが知ることと考へることを區別し、知り得られるものの外に、考へ得られるものの存在を許したことは、彼れとして一種の妥協であつたとしか思はれない。徹底した意味に於て、知り得られないものは、同時に、考へ得られないものでなければならぬ。

然し、よく考へて見ると、カントは初から現象主義、即ち、批判主義と終始する積もりは無かつたようである。神と、靈魂不滅と、意志の自由とを非常な論辯を以て辯護して居たので解る。彼れは一方に於ては認識論の創設者であつたが、他の一方に於ては狹量なる一個の基督教徒であつたのである。そして、彼れは兩者の情操の間の矛盾を感じながら、徒らに兩者の並立を圖らうとして居たのであつた。いろいろの形に於て、彼れの學說の上に重疊百出する二元觀の秘密はこゝに伏在する。

哲學は人間を解放する道具であるべくして、彼れを拘束する桎梏であるべきではない。然し、今日、わが國に於て哲

學を學んで其れを桎梏として居らない者が果して幾人あるであらうか。哲學を記誦する者の多きに隨がひ、其れの傳播されることの廣きに隨がつて、其れに依つて生活のはたらきのますます睽異されるのは、現下に於けるわが國の狀態である。わたくしはわが國の文明を中心として、生活のはたらきの理會され、闡明される哲學が研究されることを、否、其れにも優して、生活のはたらきが理會され闡明されるやうに、哲學が研究されることを希うて止まざるものである。

## 第三、快樂

こゝに、わたくしは享樂主義の福音を說かうと欲ふ。然し、讀者はわたくしのこの宣言を聞いて驚異の眼を睜らき、不安の念に襲はれる必要は毫もない。何故ならば、わたくしが其れを說くのは、生活に頽廢と破壞とを齎らさうとして說くのではなくして、其れに緊張と、秩序と、統一とを與へようとして說くのであるからである。

何人にしても、素直に生活し、正確に彼れの體驗を省察し得る者のよく知つて居る通り、快樂は善の指標であり、隨つて、其れ自づからが一つの善となるのである。例へば、健康は假りに其れが快感を伴はないとしても一つの善であるに相違ないが、事實、生理的に健康に含まれた好ましき性質は、心理的に其れの分身として快感となつて現はれる。さうして、快感は健康の指標としてはたらくがために、健康が一つの善であることに關聯して、快感も、亦、一つの善となり、終に、一つの假似存在を取るに至るやうなものである。このやうに、健康と快感とが指示するものと指示されるものとの關係にあるが故に、健康を證せんがために快感の有無を探ることもあるし、又、其の順序を顚倒して、快感を味はんがために健康の良否を檢することもあるのである。さうして兩者の間に一つのファンクションが成り立つて居る以上、孰づれよりするとしても、相應の參考として相應の効果は擧がるべき筈である。然し、人間の生活に於ける快樂の役目を理會することに關し、最も重要なる事實としてわたくし達がくれぐれも初めから明確に體認しなければならな

いことは、（姑らく健康と快感とだけの關係に限つて言へば、）健康は獨立して存在するものであるが、快感は健康に依據して、始めて、纔かに經驗されるものであるといふ根本眞理である。

この事實の眞相を闡明することは、快樂が人間の生活に於て如何に重大なる役目を滿たして居るかを理會するに極めて大切であるからわたくしは更に一般的の形として、も少しこの間の消息に就いて語るところがなければならない。

或る人が或るものを欲するから、其の事が彼れに快感を與へるのであつて、其のものが先づ快感を有つて居るから、彼れが其れを欲するのではない。つまり、或るものが苦痛と感ぜられるか或は快樂と感ぜられるかは、其れを經驗する或る人の生理的、及び、心理的條件に依つて劃せられて始めて成立するのである。其等の條件を竢たないで、苦痛と快樂とに關聯して、其のものの性質が決定されて居るのではない。一つ卑近な例を取つて見よう。或る一人には餅が甘いから、彼れは其れを好むのである、又、他の或る一人には酒が甘いから、彼れは其れを好むのである、といふ風に普通には考へられて居る。然し事實の眞相はこの意見と全然反對である。前の人は餅を好むから、其れが彼れに依つて甘しと味はられたのであつて、後の人は酒を好むから其れが彼れに依つて甘しと味はれたのである。論より證據、餅を好む人をして酒を飲ましめ、酒を好む人をして餅を食はしめたならば、こゝにわたくしが考察し、主張して居るものの眞理は立ちどころにして立證されて了ふ。

普通に、快樂に比して遙かに優れた客觀性を具へて居ると想像される美の成立に就ても道理は全然同じである。

世人はやゝもすればベエトオフエンの『第九シンフオニイ』の美は永遠性を有つて居る、ラフアエルの『マドンナ』の美は永遠性を有つて居る、といふ。然し、彼等の謂ふ永遠性なるものは、『其の音譜や其の色彩及び形象やを美しと感受し、鑑賞する人々が世界に存續する間は』といふ條件に限られて居ることは言ふまでもない。さういふ性情を有つた

種族が一人殘らずこの世を去つた瞬間に於て、其等の永遠性は倏ちにして消滅して了ふ。畢竟するに、美も快樂と等しく、其れの客觀的存在は其れに對する主觀的の鑑賞に依つて成立し、其れの相續に依つて支持されるのである。

然し、何故にわたくしはそんな明白な事實に就いて、こんなに多くの言葉を費すのであるか。それはたゞ快樂の性質と、其れの現に人間の生活に於て滿たして居る作用とに關して世人の誤解を匡正する手掛りとしたいためである。

快樂はたゞ其れが快樂であるがために惡である、苦痛はたゞ其れが苦痛であるがために善であるといふやうな驚くべき意見を持する極めて小數なる實行上の禁欲主義者と、極めて多數なる、そして、極めて安價な言說上の反快樂主義者とを除いては、如何なる快樂にしても、尠なくとも其れが體驗されて居る瞬間に方つて、一つの惡であるといふやうな不合理な意見を主張する者は一人もあるまい、何故ならば、其の經驗が彼れに或る滿足を與へることが彼れが其れの中に或る價値を見出だすことが、直ちに彼れにまで快樂として現はれるのであるからである。つまり、或る人が或るものから滿足を得るといふこと、又は、其れに價値を見出だすといふことと、其れを快樂と感ずるといふこととは、全然同じ意義を有つたことである。否、異なつた表現を以て一つの體驗を語つて居るのである。さうすると、快樂が惡であるのは、其れが快樂であるがためではなくして、快樂としては其れが體驗される瞬間に於て善であるに相違ないが、それに拘はらず、其れのはたらきの或る側面が惡を結果するからのことであらねばならぬ。さうして、惡といふものの意義を實驗的に攻究する時、其れは、生活に矛盾を齎らし、其れの統一を毀け、其れの力量を減ずることの外に一つでもあり得ないやうに思はれる。さうすると、快樂が惡であるか、どうかの問題は、快樂がさうすることを果して其れの必然性として居るか、どうかといふことの闡明に依つて解決されるわけである。さうすることが快樂に內具の、そして特有の必然性であらうか。わたくしが否定的に答辯し、そして、其れを說明して見たいと欲つて居るのはこの疑問である。

『人間は合理の動物である』といふ格言は久しい間彼れの制義として受け取られて來たものである。然し、若しこの格言に依つて、彼れは尠しも、誤謬を犯さず、過失に陷らない動物であるといふことが意味さるゝならば、この格言は全然虚僞を語つて居るものであると言はなければならない『人間は過失に陷いる動物である』と彼れを制義した方が一層事實に近い。一面から見れば、人類の歴史は過失の連續の歴史である。尠なくとも、少數の眞理を確立するために、多數の誤謬の試驗され、放擲された事實の歴史である。人間の欲望と其等の發動として生活の機關となつたものとのどの一つが、これまで尠しも誤謬と過失との連續の記錄を作らなかつたか。藝術の欲求も其れを作つて居る。學問の欲求も其れを作つて居る。道德の欲求も其れを作つて居る。特に、政治と宗教との其等に至つては、最も陸離たる色彩で其れを作つて居るものである。ペリクリスはあの『追悼演說』に於て、『吾人アテンス人は美を好んで驕奢に流れず、智を愛して脆弱に陷らず』と言つて、其れをアテンス人の矜りとして誇つて居る。其れが事實であつたにしても、或は、理想とされて居たのに過ぎないにしても、彼れが光輝燦爛たるあの大演說に於て、其れを故らに揚言して居る以上、藝術に從事し、哲學に從事することと自づからが其れの誤謬を犯し、過失に陷いることとの保障とならないのが常であるからであらう。旣に總べての種の欲求にしてその通りである。享樂の欲求だけが獨りこの缺陷から免れることが出來たならば、それこそ一つの奇蹟である。又、事實の法廷の前に享樂の欲求だけがさうであつたと、眞赤な僞證を敢てする者は一人もあるまい。わたくしとて、そんな、ばか氣たことを評議して居るのではない。政治上の陰謀や、宗教上の狂信が其等の慘虐を振つた跡に比すれば、其れの最も極端なる形のものになつても、享樂の欲求のはたらいた跡は生活の根柢を危殆ならしむる點に於て、大分穩順なところがあるやうに思はれる。然し、奔放不羈な享樂の欲求が身を滅ぼし、國を亡した例は、琴を彈じながら火焰美を鑑賞するためにロオマに火を放つたネイロを筆頭として、數限りなくある。わたくしは惑

とく其等を事實として承認する。然し、こゝにわたくしが大なる興味を以て問題として居るのは、快樂は生活を破壞するだけのものであつて、其れの中には生活を統一する原理が尠しもはたらいて居らぬか、どうかといふことである。悲いかな、わたくし共の漸く達し得たこの文明に於ては、總べての場合に方つて、總べての人々に對つて、眞理を語ることが賢き道であるとされて居らぬ。其れがために、これまで快樂に就いて語られたのは、事實に基づく觀察からよりも、想像より生じた懸念からの方が多かつたのである。其れが一般に醇乎として危險なるもの、有害なるものとされて居るのは、其れに就いて眞理が語られずして、主として、教訓が語られて居る何よりの證據であるまいか。然して、わたくし共はだんだんに總べての事柄に關して眞理を語るやうにならねばならぬ。一點を增すことなく、一劃を減ずることなく、眞理を直ちに教訓として語るやうにならねばならぬ。わたくしは、今、快樂に就いての教訓を語らうとして居るのではない。そんなものは既に哲學の名に於てさへも餘りに多く爲されて居る。わたくし共はその煩に堪えない。わたくしは其れに就いて眞理を語らうとして居るのである。

さきに、わたくしは快樂が善、即ち、價値の指標であつて、同時に一つの善、即ち、價値であると言つた。知識が他の價値に依據して、其等の客觀的指標としてはたらく限り、其れが如何なる種の誤謬にも陷いり得るとは思はれない。たゞ、其れが一つの獨立した價値として、一つの僞似存在を取つた上、猶ほ、他の價値に對して指標たるの役目を滿たさうとするところから、其れが始めていろいろの誤謬に陷いるのである。快樂に就いても、此れと全然同じ觀察はなされ得る。快樂が他の價値に依據して其等の主觀的指標としてはたらく限り、其れは如何なる種の過失をも犯し得るとは思はれない。たゞ、其れが一つの獨立した價値として、一つの僞似存在を取つた上、猶ほ、他の價値に對して指標たるの役目を滿たさうとするところから、それが始めていろいろの過失を犯すことになるのである。然し、この獨立の價値

は快樂が他の價値に對して之れが指標として滿たす役目の洗練された結果、自然に他の價値の體系から分離したものであるから、其れが往々其れの本來の役目を裏切つてはたらくことがあつても、其れは再び本來の役目の自覺に立歸るだけの組織は快樂自づからの中に具へられて居るとわたくしは主張するのである。わたくしがかう主張するのには、相當の根柢がある。わたくしの意見に隨へば、さきにわたくしが爲した快樂の心理的分析からも明らかなる通り、快樂は活動的態度に依つて始めて獲得される人格的體驗であるから、この事實は其れの特徴を總合的とし、創造的たらしめて居るからである。

快樂の性質と作用とに關するわたくしのこの解釋は、靈肉二元の傳統の上に築かれた謂ふところの嚴肅主義の解釋と異なることは無論のこと、プラグマチズムの解釋とも異なる。わたくしとしては、この場合、わたくしに與へられた便宜が許す限りに於て、簡單ながらわたくしの解釋の根柢を暗示した。若し誰れにしてもわたくしのこの解釋が勝手なものであり、間違つたものであると考へるならば、其れに對して反證を擧げることは、彼等の義務でなければならない。然し、その場合に、彼等の先づ知らなければならぬことは、眞理を把握する第一條件は、先入主となつて居る一切の傳統や學說から解放されて、一本立で勇敢に事實に面し、そこで、見出だしたところのものを勇敢に公表することであるといふことである。

わたくしの考へるところでは、この世の中で、理論に於て、實行に於て一旦誤つて生活を組織する異なる成分に對する正しき理會を取り外づし、其等に對して間違つた評價にまで深入りした人々にはいろいろの型がある。一方に神秘家と禁欲主義者とがあるかと思へば、他の一方には淫蕩家と享樂主義者とがある。前の型は病的に總べての種の快樂を卑下して生活の統一を破り、後の型は病的に或る種の快樂を誇張して生活の統一を破つて居る。此等の孰れの型に屬する

にしても、彼等の執著し、耽溺した一二の觀念に法外の價値を置く結果として、健全なる生活の成立に必要なる他の觀念に正當なる價値を與へることが出來なくなつた一點に於て、彼等は全然一致する。變形精神の所有者として、彼等は等しく愍むべきものである。然し、どちらの型に屬する者が最も容易に彼等の踏み外した正路に呼び戻される可能性を有つて居るかと言へば、其れは無論、淫蕩家と享樂主義者とであつて、神秘家と禁欲主義者ではない。何故ならば、淫蕩家と享樂主義者とは或る一二の種の快樂の價値を誇張するために、生活の平衡を破つて居るのであるが、結局、其等の誇張された快樂も當然に生活の維持に必須なる他の種の欲求と有機的に結び付いて居らなければならないわけであるから、彼等にして更に一層深刻に其等の快樂を追窮して行くならば、其等は、自然に尋常の生活に於て、他の種の欲求の間に其等が占むべき本來の地位に復歸し、本來の作用を囘復するであらう。之れに反して、神秘家と禁欲主義者との場合になると、彼等は總べての快樂の價値を否定し、隨つて、其等より成立つ健全なる尋常の生活を否定して居るのであるから、彼等と其れとの間には永久に越ゆべからざる障壁が築かれて了う。若し精神的とは健全なる生活に必要なる總べての欲望のそれぞれに相應する價値を與へて其等を統一することであり、物質的とは其等の欲望の或るものに相應以上の價値を與へると同時に、其等の他のものに相應以下の價値を與へて、欲望の世界の中に矛盾と衝突とを雜生せしめて居ることであるならば、そして、此れが精神的、及び、物質的なる言葉の有ち得る唯一の意味であるならば、一方に神秘家と禁欲主義者と、他の一方に淫蕩家と享樂主義者との孰づれもの生活は物質的であつて、精神的になつて居らない。然し、淫蕩家と享樂主義者とには精神的となる望が開かれて居るが、神秘家と禁欲主義者とには其れが全然鎖されて居る。

この事實からしても、（若しこゝにわたくしの語つて居ることが事實に該つて居るものならば、）快樂は、もともと、

善、若しくは、價値の指標たることを其れの役目として居るものであるから、隨つて、其れが一つの獨立した價値として振舞つた曉にも、猶ほ、他の價値と協同し得るように、おのれを改整し、組織する。能力を具て居ることが優に證據立てられて居る。

實際の體驗として、『快樂主義の矛盾』と呼ばれて居る一つの事實がある。其れは、功利主義の組織者であつたジエ・エス・ミル自づからも彼れの『自叙傳』に於て、其れの實在することを承認して居る。快樂は正面から追窮されると、わたくし共から逃げ去つて了ふ。わたくし共が快樂を當の目的としないで、他の活動に沒頭すると、思ひがけなく其れの副産物として快樂は十分に生じて來る。そこで、若しわたくし共にして純粹の快樂を味はうと欲するならば、旅人が目指す地點に旅しながら、其の道の兩側のところどころに咲き出でた美しい野花を摘みつゝ、歩を進めると同樣の態度を取らねばならぬと、彼はわたくし共に警告して居る。此れは、確かに尊き、そして眞實の警告であるに相違ない。然し、かういふことは快樂の獲得だけに限られた眞理ではない。總べてのものの達成に關聯する一般の眞理である。何事を達成するにしても、性急に其の一事だけに興味を局することは失敗の大なる因となる。誰れが名譽の獲得だけに屈托して、其れを獲得したか。誰れが長壽の獲得だけに屈托して、其れを獲得したか。蓄財のやうな極めて單純な事柄にしたところで、たゞ其れの獲得に屈托するだけでは失敗する場合が隨分多い。この事由からして英雄の大事業は總べて無意識の中に成就されるといふカアライル一流のパラドックスも一分の眞理を含んで居るわけである。そして、事實さうであることに大した不思議はない。其れは、人間の欲望は孰づれの一つにしても單獨のものはない。隨つて、其れが完全にはたらくには、他に其れの方便となる多くの欲望の協同を必要とするからである。この理屈が快樂の場合に在つては、他の欲望のはたらき振りの指標であることを其れの役目として居るがために、特に觀者に眼につくだけである。然し

この事實は快樂が其れ自づからに一つの價値でないといふことの證據には尠しもならぬ。

この事實はわたくし共に取つて如何にしたならば純粹の、そして、恒久の快樂を體驗して行けるかといふことに關して好個の參考資料を供給する。其れはわたくし共が全力と全心とを投じ得る活動を絶えず續け、絶えず新たに開いて行つて、わたくし共の內的生活に富化と新化を圖つて行くことである。つまり、快樂を創造の基礎の上に實現して行くことである。ファウストに取つても、メリヤスに取つても、享樂主義とは絶えず、新らしき、そして變化する事柄を體驗することに依つて自己を擴張して行く生活の方針の謂であつた。この意味からすると、正しく理會されたる享樂主義は活動主義である、創造主義である、自己完成主義である。

わたくしは、今日に至つても、何故に快樂がこのやうに教訓の鼓吹者たる政治家や、宗教家に依つて誤解され、猜疑されて居るのみならず、眞理の研究を標榜して居る學者や教育家に依つてまでも誤解され、猜疑されねばならぬかの理由を解するに苦む者である。自然は過度の虐待を受ける時はいつでも反噬する。其れは利導さるべきものであつて、決して窒殺さるべきものではない。凡庸なる政治家や宗教家と、無識にして無學なる學者や教育家とに依つて虐待された快樂は、彼等の身上に於てすら、どこかで其の反噬の爪牙を磨いて居るに相違ない。その結果は光りを嫌つて闇を好む僞善である。

現下に於けるわが國の文明の根本疾患は、其れが、一方に於て神秘主義的となり、他の一方に於て唯物主義的となつて居るところにあるならば、其れの一部が理論に於て、實行に於て、快樂の取り扱ひに關する誤謬より發生して居らぬといふことを誰れが斷言し得るか。

昔、ロオマの武將スキピオは彼れが議政壇上に立つて國政を議する毎に、其れが、如何なるものに關するにしても、彼れは彼の議論を結ぶに『カァタァゴ滅さざるべからず』の一句を以てするを忘れなかつたといふことである。わが同胞が協同生活に於ける個人の意義と作用とに一層覺醒しない間、わたくしは恒久に彼等に對つて一つの忠言を呈し續けるであらう。其れは、『卿等は先づ個人として聰明にならねばならぬ』といふのである。わたくしは自分の主張を徹底個人主義とまで銘打つて、これまでいろいろの機會に於て、可なり痛切に個人の生活の如何なるものであるかを說明して來たのであつた。そして、わたくしの見解は正しいと信じて居る。然し、世人はまだ個人の意義と作用とに關して會得するところは、猶ほ、極めて茫漠であり、極めて不安定であり、極めて不精當である。この慨歎すべき事實の結果として、書を信ずるに敏にして事實を觀るに迂にして鈍なる學究たちより記誦的に、そして、陶吟的に、『社會生活は個人的のものに依つては組織されない、其れを組織するものは、必然に、超個人的のものでなければならぬ』といふやうな意見の發せらるゝを聞けば、彼等は、其の場合に、個人的とは如何なることを意味するか、超個人的とは如何なることを意味するかを究めずして、倏ち無雜作に其れに耳を傾けようとするのである。わたくしは個人の性質に關して、世人の理會がこの程度に低迷する間は、わたくしの徹底個人主義の使命はまだ全く果されて居ないやうである。

今日に於ても、故總理大臣原敬氏は實行の人であつて、思想の人でなかつた。彼れは目前の事務を處理するには驚くべき能才であつたが、百年の長計のために理想を建設するには何等の天才でもなかつたと世人から一般に評價されて居るやうである。わたくしはこゝにこの評價の當否を判決して居る興味もないし、時間の餘裕もない。たゞ、こゝにわたくしが言明したいと欲ふ一事は、彼れの感想として或る機會に於て、新聞紙に依つて傳へられたところに據ると、思想といふことゝ理想といふこととをわたくしが唯一の正しき意味と理會して居る意味に理會するならば、彼れは必らずし

も思想の人でなくもなかつたし、又、理想を建設する大才でなくもなかつたやうである。といふことだけである。何故ならば、彼れは總理大臣の印綬を帶びて間もなく、或る人に依つて彼れの未來の方針に就いて尋ねられた時、彼れは、わが國の最大缺陥は、個人の聰明の發達して居らないことである。然し、個人の自覺が幼稚であつて、其れを成分とする社會の進步する筈はない。されば、わが日本に於ては、個人をして彼れの權利と併せて義務とに關して一層明確なる自覺に至らしむる個人主義を鼓吹することが肝要である。といふことを語つて居たからである。わが國の政治道德の腐敗して居るのは、政治機關の運用が公明と圓滑とを缺いて居るのは、わが國胞の間に個人主義の增長し來たつたのが其れの主な原因であるといふやうな、愚にも付かぬ意見が、謂ふところの有識者の全階級を風靡し、萬人擧つて其の蒙昧なる想像に附和雷同して居た時代に方つて久しく公生活に携はり、政界の表裏の事情に通曉した一個の苦勞人たり、a man of the worldであつた彼れよりこの到徹した意見を聞くことを得たのは、實に、わたくしに取つて空谷に跫音を聞くにもました歡びであつた。議會に於ける彼れの討論と政友會の會合に於ける彼れの演說とを外にしては、國策とも目せらるべきものに關して發せられた彼れの意見にしてわたくしの耳朶に達したのは、彼れの生涯を通じて僅かに此の片言ぐらゐのものである。然し、この片言がわたくしにまでは最も雄辯に政治家としての彼れの高邁を語つて居るやうに思はれたのであつた。何故ならば、彼れはこの片言に依つて、わが國の文明の根本缺陥を指摘し、併せて、之れが根本療法を指示して居るからである。若し正しく現實を理會することを外にして理想の役目はなく、現實を善く發展させることを外にして理想の役目はないものならば、故原敬氏の如きは、當時、わが國に於て卓然として思想の人であり、理想の人であつたと言はなければならない。

不思議なことには、わが國の文明の根本缺陥はこんなに明白であり、之れが根本療法はこんなに單純であるのに、滔

々たる天下に原氏を除いて、此のやうにはつきりと前者を指摘し、後者を指示したものの他に一人もないことである。そんな人は學問界にも見當らなかつた、教育界にも見當らなかつた、まして政治界に見當らう筈はない。わたくしも、今日、わが同胞の道徳觀念には混亂と昏迷との狀態にあることを承認する。然し、其れは主として彼等が制度を個人主義と實驗主義とに依つて建設されたものに取りながら、其れを運用するのに彼等の多數は父老主義と傳統主義とに依つて涵養された情操と道徳との外、何物をも有たぬ。極めて漠然ながら　彼等と雖も、此等の兩者の間の矛盾を感ぜざるを得ない。この感じが彼等をして知らず識らず、理性に由らず、纔かに衝動を通して其等の情操と道徳とに對して反逆を企てしめるのである。されば、わが同胞の道徳觀念の中に現に見出だされる混亂と昏迷とを救ふの道は、折角芽ざしかけた個人としての自覺を抑壓しようとすることでなくして、其れをしておのれの志向をどこまでも徹底させることでなければならない。聰明なる、そして透徹せる個人主義の主張に開眼せしめられるといふことは、近世文明のＡＢＣを學び始めるといふことである。社會主義や、聯帶主義や、國際主義にどんな重要な意義が含まれて居るにしても、其等は個人主義の意義を修得した後のことである。

一の個人が他の個人より各異なるところのあるのは、感覺の事實である。然し、其れに拘はらず、彼等が一つの協同生活を營んで居るといふことも經驗の事實である。そこで、如何にして異なる性情を有つた個人が一つの協同生活に入り、其れを支持し、開發するために協同することが出來るかといふことが一つの問題となるのである。多くの人々は個性の上に超個性なるもののはたらきを假定することに依つてこの問題を解決しようとし、わたくしは其れの上に一切そんなものを假定しないで、たゞ個性のはたらきだけを觀察することに依つてこの問題を解決しようとするのである。彼等の意見に隨へば、個人が個性的に分化すればするほど、それだけ、協同生活の可能性を減殺することになるのである

が、わたくしの意見に據れば、個人が個性的に分化すればするほど、それだけ、協同生活の可能性を增長するといふことになるのである。彼等の意見に隨へば、個性と社會性とは相反する二つの性質であり、わたくしの意見に據れば、個性と社會性とは一つの性質の二つのはたらき振りに過ぎないのである。

わたくしは、どうしてこんな意見を持するか、どうしてこんな意見を持するに至つたか。

多分、ソクラテイスは、如何にして個性を有つた異なる個人が協同生活を營み得るかの問題に關して哲學的考察を試みた最初の一人であらう。然し、彼れは不幸にして協同生活の根柢となる、謂ふところの善、若しくは、正義を彼等の生活の中に發見する方法を誤つて居た。彼れは彼等の生活が全體として相互に交渉する間に成り立つものとして、作用的に其れを發見しようとしないで、彼等の各の生活の一部に含まれるものとして機械的に其れを發見しようとした。彼れは、(彼れが好んで用ゐた實例を借りるならば、)詩人の生活や、政治家の生活や、船大工の生活は彼等の協同生活の中に於て分化し、其れに依つて統括されて居るものとして、其等のはたらきの全體を善、若しくは、正義と取らないで、彼等の生活の中で纔かに租税を納めるとか、兵役に就くとか、子弟を教育するとかいふやうな、共通の部分だけを善、若しくは、正義と取つたのであつた。そして、彼れの遺業を紹いだプレトオもアリストオトルも彼等の師の見地の缺陷を超越することが出來なかつたのである。其の結果として、唯一の實在たる個體や個性のはたらきを第二義のものと見下して、其等より彼等が間違つた興味と間違つた研究方法とに依つて抽象された理念や普遍を第一義のものとして尊崇するの誤謬に陷つた。久しい間最上の權威として歐羅巴人の思想と信仰とを支配して居た此等の誤謬が、今日に於ても人間をして正しく個人と社會の關係を理會せしむることにどれだけの障礙となつて居る解からないほどである。

『人間は政治の、若しくは、社交の動物である、』とアリストオトルは定義したのであつた。然し、彼れは、人間は如何

なる組織を以て政治の、若しくは、社交の動物となり得るかをまだ十分に考察せず、或は、考察したにしても、まだ十分に洞見し得なかつたやうに思はれる。異なる個人が政治の、若しくは、社交の動物であるのは、彼等が共通性を有つたためではなくして、交徹性、若しくは、補角性を有つて居るがためである。若し、わたくし共が強いて其れを共通と呼ぶならば、其れは靜的の、算數的の共通性と取らるべきではなくして、動的の、作用的の共通性と取らるべきである。つまり、各個人が彼れの隣人よりてんでに遺傳と、境遇と性格と、教養と、目的と、義務とに於て異なる風と程度とに順じて忠實におのれの生活を中心として、それだけ異なる風と程度とに、相互に被動的の關係に於てと同時に能動的の關係に於て生活して居るといふ意味での共通性であらねばならぬ。

この原理の上に生活する異なる個人の間に社交行爲は始めて可能となるのである。若し彼等が、これぞれ、最も含蓄ある意味に於て異なるパアスペクチイヴを通して互に交渉しながら、其の質を無視したならば、彼等は悉とく行爲の焦點を失ふであらう。例へば、こゝに或る一人が他の一人に對して彼れの不幸に同情するとする。同情するとは、前の一人が後の一人の心に融け入つて、彼れの悲と同體になることではない。事實に於て、そんなことは無論不可能なことであるが、強いて想像の上でそうならうとしたならば、出來るだけ兩者が同じ氣分と同じ態度とで一緒に悲しむことになるから、同情の効果は失はれて了う。どこまでも同情する者と同情される者とが、二つの異なる中心點を有つた二つの異なる人格であるといふことを意識し、其の相違の意識を以て、一方の人格が他方の人格の悲を理會し、慰藉するのでなければ、眞の意味に於ける同情は成り立たない。こういふわけで、一層多く社會的となるために、一層少く個人的となる必要はない。人間に取つて、一層眞實に個人的となることとは、一層眞實に社會的となることであり、一層濃厚に社會的となることとは一層濃厚に個人的となることとである。

總べての個人はさきの無數の個人に依つて長い時代を通して創造され、繼承され、變更されて來た一つの文明の中に生れる。彼等は異なる性格を以て其の文明を同化して、それぞれ、異なる才能を開發して行く結果として、彼等は、又、それぞれ其の文明に異なる貢獻をすることになる。斯くして、彼等は彼等の繼承した文明を獨自に、應分に變更して居るこの一點に關しては、凡人も天才も全然同樣である。凡人が被動的に現存の文明を受用するのに、天才は能動的に未來の文明を創造するといふのは、彼等の力量の相違から生じた偶然の相違に過ぎない。そこにある總べての個人の生活の內容が彼等の經營する文明の內容であるのである。

信條は必然に公準の上に立てられねばならぬ。こゝに、社會と個人との關係に就いて語るところのものは、固より一つの公準である。隨つて、其れの價値は、偏に、理論に於ける、應用に於ける其れの効果に依つて決せらるべきものである。かゝる見解を生活の方針として、果して役に立つか、どうか――最後に其れの價値を決する標準は、たゞ此れだけである。

若し世の中に個人の性質に關しこの公準に勝る公準が一つでも他にあると信じ固執する論者があるならば、わたくしは、其れがどんなものであるかを彼れより聞きたいと欲ふ。

# カント哲學と唯物史觀

## ――カント生誕二百年を記念して――

土田杏村

### 一　カントとマルクス

其の生地ケエニヒスベルヒに生涯を終始し、極めて僅かな時期を除くほかは、歩一歩も其地を離れたこと無く、時針のやうに精確な生活を守つたカントは、あらゆる認識の基礎となる不動の座標を考へた。此れに反して、追放につぐに追放を以てし其の生國の獨逸は勿論、大陸の諸國にも其の居を安んずることが出來ないで、異鄕倫敦に客死したマルクスは、社會の變革を支配する根本の法則を發見した。わたくしは此等兩者の生活と思想との對照を特に興味深く感ずるものである。

哲學の分野に於けるカントの功績は、其の所謂コペルニクス的轉回を完成したことにあると言はれて居る。此れに對すればマルクスは社會主義をユウトピア的より科學的に押し進めることに於て、社會主義のコペルニクス的轉回を實現したものである。

カントの考察したものは自意識を持つた人類の追求すべき、するに相違ない理念であつた。彼は其れを課題としての人格自由の理念であると見た。カントは人類の問題を解く代りに、人類への課題を發見したのである。其の課題を現實的に解くものは、今後永遠の道途に亘るわたくし達の實行である。マルクスの考察した問題もまた、根本的にはカントの其れと異る筈はないが、彼は特に視點をわたくし達の社會の理念に置いた。其れは社會に於ける人類の解放であつた。彼はやはり其處に一つの課題を發見し、其の課題を解く途は社會主義の實行の外に無いと斷定したのである。

カントの思想の關與するところは、およそ人類の取るべき根本の態度に就てゞあるから、其れの効果を今直ちに何等かの形態にあらはして示すことはむづかしい。しかし今日苟くも思想

問題を考へるほどのもので、カントが發見した根本的態度を無視し、または其れに反對して進むといふことは、餘程無謀のものでなければ出來ることでは無い。今日世界の思想界を最も力強く支配して居る思想は何かと言へば、わたくし達はどうしても、其れはカント哲學であると答へなければならない。カントに比較すれば、マルクスの問題は直接に社會制度へ結びついて居るから、其れの効果を直ちに現實の形態に就て見出すこともさほど困難では無い。世界大戰の前には、マルクスの思想は、カントの其れ以上に實現の方途の困難なるものと見え、また民衆により其様に觀察せられて居たが、今となつてはマルクスの理想は既に部分的に世界で實行せられて居る。例へば勞農露西亜は、マルクスの理想を其儘に社會制度の中へ實現しはじめた。英國の勞働黨は直接にはマルクスの思想と關係なく、首相マクドナルド氏のごときむしろマルクス派の大陸社會主義を排斥しては居るけれども、わたくし達は勞働黨の社會主義をマルクスの其れより截然と分離することはどうしても出來ない。其他の諸國にあつても、社會主義は今日世界の民衆の最も優勢な一動きを指導するものとなつて居るのである。たゞ其れだけの客觀的大勢を考へてさへ、わたくし達はいまカントとマルクスと、其の何れしか一方を高調し、他方を排斥することは出來ない。少くも民衆の思想的動きを批評しようとするものに取つて、其れが自然の爲方だとは考へられない。

わが國の思想界を見れば、其處には甚だ多數のカント主義者があり、また甚だ多數のマルクス主義者がある。然るに此等の人達は、たゞ自らの選んだ思想の世界の中に安住して、其れ以外の問題、正しくは課題に耳を傾けようとは一度でも努めなかつた。カント主義者は純粹のカント主義者であり、マルクス主義者もまたやはり純粹のマルクス主義者である。さうしてわたくしの最も惜んで居る事は、思想の專門家に就て其の傾向が見られるだけでは無しに、一般の社會民衆がやはり其の二つの異つた途を進みはじめて居ることである。勿論カント哲學とマルクス主義との間には、思想の根本的態度に著しい反對がある。或は全く反極的の傾向を其等は示すとさへ言つてもよい。わたくし達の周圍のカント主義者とマルクス主義者とは、其の實質的の相違に執着して、他を批評するとすれば、他を非難し、排斥するだけであり、他の思想の含む課題を自らへ取り入れようとはしないのである。さうして其の區別は思想的にといふよりは、むしろ性格的に、また趣味的になされて居ることも否定せられない。例へばカント哲學を研究する樣な人達は、社會主義の問題を考へることは何か淺薄なやうな、自らの性格をはなれ

た過激なもののやうな感じのすることを避け得ないし、またマルクスの社會主義を追隨するほどの人達は、カント哲學の問題を考へることは、其の運動の熱度を衰亡せしめた、觀念的遊戲に沒入したやうな感じのすることから離れ得ない。そしてたゞ其の性格的の、また趣味的の固執から、此の重要な眞理の問題を自らの性格と趣味とへ奴隷たらしめて居るのである。其點では、例へば其の批判的態度を自負して居るカント哲學者も、案外批判的では無くカント哲學を形式の哲學であると自信して居るものも、單に形式的にでは無しに、實質的にさへカントの取つた哲學の資料から一歩でも他へ離れては居ない。

わたくしは先きに本誌の上で、教化に於ける具體的聰明の缺乏を論じて置いたが、わが國で取扱はれて居るカント主義とマルクス主義との二つを比較しても、其處にはカント主義者とマルクス主義者との思想問題に對する具體的聰明の缺乏が遺憾なく暴露せられて居ると思ふのである。わたくし達は今日思想の根本的立場としてはいかにしてもカント主義から離れるといふことが出來ないし、また現在の社會の一成員として社會制度の問題を思想的に、また實行的に解決すべき義務を課せられ、のみならず其の問題の解決は現在最もさし迫つた爲事の一つとなつて居り、其の解決はマルクスの社會主義的理念を指示しつゝあるが、其れにも拘らずカント主義のマルクス主義化、またはマルクス主義のカント化を企圖するもののたつた一人でも無いといふことはどうしたものであらうか。

カントはルソオの革命的なる思想に接し、其れから大いなる影響を受け、ルソオの社會論や、人格尊嚴の思想を自らの哲學の根基として取り入れた。其の傳記作者の記すところに隨へば、カントは佛蘭西革命の進行に大いなる興味を寄せ、毎日其の成功を祈念して居たといふ事である。其の狀勢を今日へ持つて來れば、ルソオに相當するものはレニンであり、佛蘭西革命に相當するものは露西亞革命であるとも言へるが、今日わが國の哲學者の中で何人がレニンの思想に共鳴し、露西亞の革命に深甚の興味を持つて居たであらうか。カントはまた當時或る土地に起きた地震が人心に大いなる動搖を與へたに對して、地震の理論に關する科學的の論文と、動搖しつゝある人心に或る確信を與へることの出來る論文とを公表し、其れは彼の傳記作者によりカントが時務に迂遠で無かつたことの證左として擧げられるを常とするが、其の地震よりも遙かに勢力の强かつた關東の大地震に對し、わが國のカント哲學者の誰れが、自發的にさらした警告や慰撫の言葉を發したであらうか。其れ故にわたくしはわが國のカント哲學者につき、其の社會的、むしろ正しくは人

開的、人生的の興味と情熱とは、はるかにカントの其れ以下にあると批評しなければならないのである。

また他方のマルクスは、其の當時に全盛を極めたヘエゲルの哲學を研究して、はじめは其れに追隨し、のち其れの反極に立つ思想を取つてヘエゲル哲學の批評を書いた。しかし其の唯物史觀の考への構造はヘエゲルの哲學から完全に離れては居ず、むしろ其れを模した様のものになつて居る。またマルクスは同じく哲學者であつたプルドンの思想を攻撃批評しては『哲學の貧困』の一書を成した。其外希臘の哲學に就ても、またフォイエルバッハの其れに就ても批評を書いて居るのである。其時の社會的状勢と今の其れとに拙い比較を取るならば、ヘエゲリ哲學に相當するものは今は新カント派の哲學でゞもあらうと思ふが、わが國の社會主義者の幾人がマルクスの爲した意味の哲學批評を書いたであらうか。(嘗て若き社會主義者の一人がリップスの哲學に對する反對論を書いた。わたくしは彼の早き死を措むものである。)わたくしは新カント派の哲學が彼等社會主義者の中ではたゞ不評であることを知つて居る。また現に其れの非難の言葉を幾度となく讀んだ。しかし其等の批評は何れも新カント派の哲學を正しく理解してから發したものでは無く、單に性格的な、趣味的な反對を示したに過ぎないものであつた。其れ故にわたくしは、わが國の社會主義者に就て、其れの哲學的態度はマルクスの其れに遠く及ばないことを指摘し、且つ非難しなければならないのである。

わたくし達が、今現に位置して居る社會的現實につき、具體的聰明の原理を働らかすことが出來たとすれば、現代のわたくし達の主たる問題は、カント主義とマルクス主義との統一であらうと思ふ。兩者の反對は抽象的知識體系としての反對である。其の見方に立つてさへ、カントとマルクスとには、其れ々々に修正せらるべき誤謬を含んで居る。わたくし達は此等の知識體系の根基をなす其れ々々の動機を比較しなければならない。そして具體的聰明の原理に隨ひ、わたくし達の生活の現實的尖點において兩者の體系の統一を企圖しなければならない。

わたくしは一面ではカント主義者であるが他面ではマルクス主義者であることを自信するものである。わが國の社會主義者が理解するマルクス其儘の意味での唯物史觀ならば、わたくしは自らを唯物史觀論者として許すことが出來ないけれども、カントを理解するとはカントを超越することであるとするならば、マルクスを理解するとは、同じくマルクスを超越することであるに相違無い。わたくしはカントとマルクスとの信徒では無い。たゞ彼等兩者の學徒であることを欲する。しかし眞に彼等

の學徒となることとは、彼等の本義を發揮する意味を以て、彼等の信徒となることではなからうか。

カントの哲學とマルクスの唯物史觀とを統一する論文の試みは、わたくしの少ない記憶の範圍では、嘗て一度もわが國の評論界へ公表せられたことが無かつた。カントの生誕二百年を紀念する短章として、わたくしは其の主題を右の問題に取つたといふものは、カントを現代に、わたくし達の生活に生かすには、換言すればわたくし達がカントの思想を生きるには、カントをマルクスの唯物史觀の中に生かす事を以て始めねばならぬと考へたからである。

## 二 唯物史觀の論理的構造

マルクスの唯物史觀は、其れを言葉通りに解釋するならば、大して複雜なものでは無い。また言葉だけの意味では、大抵の人が其の趣旨へ賛成するに相違無い。學問から得た何等かの豫見を持たない素朴の人ほど容易に其の趣旨を受け取ることが出來るであらう。唯物史觀の形式を聞いたゞけで直ぐ其れに反對するといふものは、實は既にカント哲學の根本概念を得て居たために、マルクスの言葉を素朴に純粹に受け取ることが出來なかつたことに原因を持つて居る。後に詳しく批評するやうに、唯物史觀は此れをきびしく哲學の立場から批評すべきものでは無い。其 批評によつては唯物史觀は素朴的唯物論と同じく、雲霧のやうに其の姿を消失せしめることであらう。そして唯物史觀の虛妄が消失するだけでは無しに、其れのたうとい眞實も亦消失することであらう。其れとは反對に、唯物史觀は單に經驗的に受け取られなければならない。素朴的な人ほど適切に唯物史觀を理解し得るといつたのは、其の意味を以てゞあつた。何故なれば唯物史觀は後に批評するごとく、所謂經驗的法則の一つに屬するものであつて、其の法則の妥當性は經驗的以上に進むことの出來ないものだからである。其れを超えて唯物史觀を理解する社會主義者があるとすれば、其れは認識の限界を知らない非哲學的態度を取るものであらう。

しかしまた他面に哲學者のがはから唯物史觀への反對の持ち上つた場合には、マルクス主義者は其れを反駁しようとはせずに、たゞ默つて其れを受け入れて居ればよかつたのである。そして其の非難にも拘らず、唯物史觀はわたくし達に取り餘りにも強く眞理であると言つて居ればよかつたのである。哲學は經驗から得られた所謂經驗的法則の實質に批評を加へることは出來ない。何故なれば哲學はたゞ形式の科學だからである。然るに唯物史觀の眞理で無いことを言ふものは、實は其の法則の實

質的批評を試み、哲學の認識の限界を超えて居た。しかしわたくしはまた哲學者によつてなされた唯物史觀の批評をまつた誤つて居るとも言はない。のみならず其の批評は、哲學の殆ど常識となつて了つたほどの程度を以て眞理であるとさへ言つて其の批評を保證しようと思ふ。其の場合には、經驗的法則の妥當する正しい限界を超えて、唯物史觀が一つの哲學的原理として主張せられたときに、其の擴張は眞理では無く、其れを批評し、非難する哲學の態度は正しいとわたくしは主張したのであつた。

今日マルクスの唯物史觀と呼ばれて居るものには、幾つかの形式がある。そして本當にマルクスの言葉で主張せられた唯物史觀は其等の形式の中の一つであるといふ奇觀を示して居る。唯物史觀に對しては、其の最も見易いところから最も緻密な內面的の問題にまで亘つて多くの非難が加へられたが、マルクス學徒は其れに答へるために、マルクスが語つた以上の新らしい法則を其れに附け加へて、其れの眞理性を保證しなければならなかつた。しかしさうして居る間に唯物史觀には、多くの歪みが加へられた。わたくしは此等の多くの形式の唯物史觀の中ではマルクス自身の言葉を以て語られた形式が、眞理性の最も高いものであつたと考へて居る。けれどもわたくし達がマルクス自身の語つた形式を批評しようとすれば、マルクス主義者はいつでもマルクスを註釋した人達の唯物史觀の形式の中に逃げ込んで了ひ、マルクスでは無い、其の別の形式の唯物史觀を以て答へるのが常となつて居る。其れだからわたくしは今マルクス主義者により、大いに擴充せられた意味の唯物史觀からはじめて、其れの內容を批評しようと思ふのである。

わたくしは今ボルハルトの考へた唯物史觀の形式を考へて見たい。其れはマルクス註釋者のなした唯物史觀の解釋の中では、因果關係を最も詳密に示したものの一つであると考へられるからである。彼によれば唯物史觀の排列した因果的系列は次の順序のものである。

人間の物質的欲望——其の不斷の增加——勞働の生產力がたえず高められること——生產方法の變化——經濟諸關係の變化——すべての社會的關係の變化（社會的變革）——（階級鬪爭）——政治上の出來事に對する地盤——人間の思想の變化に對する地盤

今若しマルクスが其著「經濟學批判」の序文に書いた形式をマルクス唯物史觀の典型と見るならば、其れにあつては此等の因果關係の發端は「社會的生產」である。わたくしはマルクスが社會的生產以前の諸關係を顧慮せず、いきなり其の概念を以て

はじめたことを、從來の學者に見られなかつた彼の卓見とするのであるが、ボルハルトは、更に其の關係以前へ種々の因果關係を挿入して居る。わたくしの考へるところでは、其れは却てマルクスの唯物史觀を改惡するものであつた。

第一に、此の因果關係の發端は、「人間の物質的欲望」となつて居るが、それは大分疑問である。マルクスは「社會的生産」を以てはじめたのであるが、何故此の如き社會的概念の根基に、「物質的欲望」といふやうな個人的概念、しかも概念的形而上學に墮したとさへ思はれる概念を置く必要があつたか。其れはともかくも、此の前提によつては、唯物史觀はわたくし達の生活の一面觀であることが明かにせられて居る。言ひ換へれば、唯物史觀は物質的欲望の關與する範圍にあつての人間生活の觀察である。其れの範圍を超えて、唯物史觀は人間生活の上に適用せられてはならない。

第二に、此の因果關係にあつては、社會經濟生活の中の生産を特に重んずるものとなつて居る。しかし「經濟諸關係の變化」の原因を、「生産方法の變化」のみに歸せしめることは適切で無い。其れ故に唯物史觀は經濟的史觀の中でも、なほ特に生産的史觀と呼ばれなければならない。わたくし達は、經濟生活にあつてはひとり生産のみならず、流通の諸機關が經濟的諸關係の機械性を決定する有力なる要素となつて居ることを知るのである。そして流通の諸機關の機械性は生産方法によつてのみ構成せられたものでは無い。例へばわたくし達の今日の經濟生活を決定するはなはだ有力なる機關である銀行の機構は生産方法とは大した關係のない機械性をも持つて居る。

第三に、以上すべての總括として、ボルハルトが經濟的諸關係の因果を個人的要素へ還元したのは適切では無い。今日の心理學的社會學はやはり社會的諸關係を個人的心理により說明しようとするが、其れは社會學としては不可能の事業である。人類は、生れながらにして、「一定の彼等の意志より獨立したる關係」すなはち社會的關係の中に「入り込む」ものである。其れ故に今わたくし達の心理を社會的諸關係より取りはなして、個人的に觀察しようとしても其れは出來ることで無い。其れ故にタルドをはじめとして、一般に心理主義的社會學者が、人間の個人的心理だと考へて分析した結果は、純粹に個人的なる心理では無く、「社會的諸關係の中に入り込み、社會的諸關係に影響せられた個々成員の個々人的觀察」にしか過ぎなかつた。其の個々人的心理觀察を組み合せて、社會的諸關係をつくる心理學的社會學者は、譬へば出來上つた一個の時計を分解し、更らに其の諸部分を組み合せて元の時計をつくるやうなものである。時計

はたゞの機械であるが、社會は一の人格的關係であるから、一旦分解した要素を組み合せても、元の社會は出來上らない。社會の心理學的分析を最も詳密に試みたグラハムワラスは、其等すべての要素の組み合せを鄭寧に仕上げて見たが、其れはどうしても可能の途ではなかつた。ホッブスは恐怖を、ベンタムは快苦を、コントは愛を、タルドは模倣を、社會的關係の個人心理學的原因であるとしたが、さうした還元は不可能である許りでは無く、其等すべての個人心理學的要素を原因としても、なほ且つ社會的關係を生むことは不可能であつた。わたくし達は此の研究から當然デュルケームの社會學の立場を生むことが出來る。社會の前提は個人的要素では無く、直ちに社會的關係其のものでなければならない。たとへ社會の發生を考へたときでも、個々人が相寄つて社會を構成すると見るのは、人間の祖先をアダム、イヴと考へるにひとしい神話である。況んや社會の發生は、現在の社會的關係の論理的構成を語ることが出來ない。わたくし達は社會學に於ても哲學に於けると同樣に、其れの心理主義を打破しなければならない。デュルケームが、タルドの模倣は社會的特質の原因では無く、却て其れの結果であるといつた批評は甚だ鋭い。そして社會的現象の特質を、個人に加はる、または加はることを感知し得る外的强制力に歸したことは、非常の卓見であると思ふのである。しかし其れと同じいものを、マルクスは「一定の、必然的の、彼等の意志より獨立したる關係」と言つて居た。個々人の心理より社會的關係を望むから、デュルケームやマルクスは、「外的强制力」とか、「彼等の意志より獨立したる關係」とかいつた。其れは明かに個人心理と社會的關係の絕緣を宣告したものである。わたくし達は、社會的關係をたゞ社會的關係の前提に立つて研究しなければならない。隨つてマルクスの唯物史觀の前提をなんらかの個人心理的要素とする解釋は誤謬である。マクルスこそは唯物史觀に於て其の特有の社會的見地を確立したのであるが、マルクスの學徒は再び其れをスミスやマルサスやリカルドの個人主義的唯理論的經濟學の立場へ還元せしめて了つた。學問の前提こそは、其の學問の諸派を分たしめるものであるが、もしもマルクスが其の經濟學の前提に、「人間の物質的欲望」とか、または其れに類似したやうな個人心理的要素を取つたとすれば、わたくし達は何にもマルクスの經濟學をスミスやマルサスやリカルドの其れから區別すべき必要を持つまいと思ふのである。

第四に、唯物史觀の解釋に、右の如き個人心理的方法を取つたとすれば、個人的心理の總和と社會關係的統一との間に出來た罅隙を埋めるために、わたくし達は或る細工を施さねばならな

いが、其の細工は隨つて幾多の論理的不自然を生むのである。個人的心理は意識的現象であり、社會的關係は無意識現象であるが、前者より後者はどうして生れるのであるか。マルクス學徒の中には、其處へヴントの「創造的綜合」の原理を持ち出したものもあるが、此の罅隙を滿たすためには、誰れが考へてもヴントの此の原理以上のものはないであらう。しかしヴントの此の原理は、元來ヴントの心理學の長所では無くて、其れの行き詰まりを救濟するために考へ出されたものである。本來其の困難を持たないマルクスの唯物史觀が、ヴントの此の原理を利用しなければならぬのは、決してマルクスを賢く解釋した爲方ではあるまい。

のみならず右の解釋には次の如き大いなる困難が伴なふ。マルクスの唯物史觀は、本來社會的諸關係の社會的因果につき斷言せられたものである。然るに右の解釋によれば、其の社會的諸關係を更らに個人的因果が支配して居る。個人的心理は意識的現象であるが、其れの總和は社會的關係の無意識的現象となつて現はれ、其の社會的關係は因果必然性により支配せられて居ると或るマルクス學徒は言ふ。しかし社會的關係が社會的に因果必然性に支配せられて居るとすれば、或る一つの社會的事象の原因は、やはり他の社會的事象に求められなければならない。隨つて個人的心理は其の事象の原因であつてはならない。無論其の事象の因果關係に個人的心理は關與するであらうが、其の個人的心理は因果必然的に決定せられるから、社會的關係の因果性を考へるときに、其の個人的心理を顧慮する必要は無い。また其れとは反對に、意識的なる個人的心理が社會的關係の原因であるとすれば、また兩者のさうした罅隙に創造的綜合の原理がはたらくとすれば、其れの結果たる社會的關係の無意識的現象は創造的のものであり、社會的關係相互の間に因果的必然性の支配する筈はない。またよし偶然に其の社會的關係が機械的に經過したとしても、其れを因果性と呼び、また其の因果性を必然的だと呼ぶことは不當である。此れを要するに、原因は結果に對し、一義的に決定する要素でなければならない。一の社會的事實が社會的の因果必然性に支配せられるならば、其の原因は因果必然的に他の社會的事實の中に求められなければならないし、また其の社會的事實が個人心理的に意識的に支配せられるならば、其の原因は創造的に個人心理の中に求められなければならない。しかし前者の爲方を以ては、歴史的經過は因果必然的のもの、合理的のものとなるが、後者の爲方を以ては、其の歴史的經過は創造的のもの、非合理的のものとなるであらう。

## 三　わたくしの解釋した唯物史觀

マルクス學徒の解釋する唯物史觀が、却てマルクスの眞意より遠ざかるものになつて居たことは、わたくしの右の批評を以て明かにせられたと思ふ。此等の困難を避けてマルクスの唯物史觀を解釋するならば、其れは次のごときものとならなければならぬ。

唯物史觀は經濟的史觀である。なほ特に、生産的側面より見た經濟的史觀である。唯物史觀が歴史的經過の決定要素として社會的生産を重視したことは、マルクス主義の大いなる特色ではあつても、其々の缺點ではなかつた。歴史に經過を決定する要素は、其他に幾つもあるから、隨つてわたくし達の歴史觀には宗教的史觀、哲學的史觀、工學的史觀、民族心理的史觀など幾多の其れが成立し得る。マルクスの唯物史觀は、其れを少しも排斥するものでは無い。しかし此等の要素の中でも、經濟的要素がはなはだ強大なる勢力を持つて居ることをマルクスは暗默裡に主張しては居るが、わたくし達は其れへの贊成を惜むものでは無い。

社會的認識はたゞちに社會的關係を以て出發しなければならない。マルクスは其れをよく理解して居る經濟學者であつた。其れ故に彼の唯物史觀は個人の意志より獨立したる社會的生の關係から出發したし、また其の資本論は資本主義社會に於ける商品から出發した。其れは個人的欲望や快苦から出發した唯理論的經驗論または個人主義的經濟學より截然としてマルクスの經濟學を分離せしめる重要點である。わたくしは、他の多くのマルクス主義者の解釋に反對して、唯物史觀の前提は、社會的なる生産關係以外のものでは無いと主張するものである。

社會の變化は、社會自體の因果關係を以て進行する。其れは社會の中に存在する幾多の社會力の集團の相互關係によつて變化し、進行する。

社會の組成員たる個人は、勿論意識的なる生類であるから、此の社會的變化に關與しない筈は無い。いなむしろ個人は、其の社會的變化の根本的動力であると言つてさへ、其れは個人の社會的決定力を、また個人の創意心(イニシアティヴ)を、餘りに高く評價して居るとは言へない。しかし其等の個人的意識と及び個人的活動の總和とは、社會力の集團・構成するものであるし、また其等の個人の意識と活動とは既に社會によつて決定せられ、十分に社會的特色を帶んで居るものであるから、わたくし達の社會的認識は、社會力の集團の相互關係を注意し、其れを目的としなければならないのである。

社會の變化は創造的であり、非合理的である。わたくし達はどんな爲方を以てしても、歴史の將來を完全に豫知することが出來ない。例へば或る個人の生命がいつ絶えるか、或る集團の形態がどうした變化を遂げるかなどに就て、わたくし達はどうしても合理的な推論を下すことが出來ない。

しかしながらさうした歴史の經過につき、極めて漠然たる性質の、單に經驗的の因果法則——其れを普通の呼び方に隨ひ經驗的法則といふならば、——經驗的法則をつくることは、さほど困難では無い。また其れは論理的に不可能のことでも無い。殊に歴史的經過の全面を支配し得る樣な法則をつくることは困難であり、終には不可能となるにせよ、社會的諸關係の要素に着目して、其等の要素間の經驗的法則を求めるとすれば、其れは大して困難では無く、また理論的にも不可能では無いのである。例へば需要供給の法則は、經濟的諸關係を完全に支配し得る法則では無く、少なくも現在の金融制度を以ては、社會が此の法則により支配せられて居る場合はむしろ特例である。しかし社會の中の或る狹少の範圍を考へ、また其の社會的關係も割合に複雜でなかつた場合に、需要供給の法則はたしかに一の眞理となつて現はれて居る。わたくしは近頃或る書物を讀んだとき、中世期より文藝復興期に亘つての社會的變化が、全く金融論的に說明せられて居るを見て大いなる興味を感じた。其の著者の意見に隨へば、中世期が暗黑時代と呼ばれなければならなかつたのは、交換の中介となつて役立つ高貴なる金屬が僅少であつたからで、ペルウに於けるポトシ銀鑛の發見は其の困難を救ふことが出來、ついに文藝復興期の繁榮を招來するやうになつたといふのである。此の學者に隨へば、其處には唯物史觀とも言はるべきものの法則が經驗的に支配して居るのである。

マルクスは唯物史觀の中で、社會的關係に於ける階級鬪爭の現實を考へ、社會的革命の時代の到來すべき必然性を豫斷した。其れは實にマルクス唯物史觀の核心である。そして此の豫斷は一つの經驗的法則である。其れの本質的證明を試みたマルクス唯物史觀の全說明こそは、容易に他人の反對を許さないマルクスの卓見と言はるべきである。わたくしは經驗的法則としての唯物史觀には少しも反對しようと思はない。過去の歴史が階級鬪爭の歴史であつたことも誤らない事實的觀察であれば、またマルクスの考へた順序を以て社會的革命の時代の到來するといふことも巧みに事實の眞相を解剖した、有力なる一つの經驗的法則であると考へるのである。また其の社會經濟的生活の根基が、人類の觀念的生活形態を決定するといふことも、少しも僞りでは無い。

## 四 目的觀と因果觀との結びつき

唯物史觀をマルクスの主張した言葉どほりに信ずる點では、わたくしは他の誰れよりも忠實なるマルクス主義者であることを告白してもよいものであるが、こゝに昔から唯物史觀に對して、殆ど常識的になつて了つた二つの反對があり、しかも其等はいづれも哲學の立場から發せられて居る。わたくしは其れをどう所置すればよいであらうか。

第一の反對は、唯物史觀の機械觀と、人間努力の目的觀との間に存する矛盾から出發して居る。マルクスの唯物史觀に隨へば、社會的變革は因果必然的に行はれるといふのであるが、若し其れが眞であるとすれば、個人が社會主義的努力を爲すことは無意義である。其の個人の努力が存すると否とに拘らず、社會的變革は因果必然的に進行する。換言すれば個人的努力は、社會的變革の形勢を變化し得ないは勿論のこととして、なほ其の變化の努力に何等かの增減をさへ加へ得ない。此れは唯物史觀に對して殆どフェータルな非難であり、マルクス主義者によつて爲された多くの辯駁にも拘らず、わたくしは其の非難を間違つて居ると斷言することが出來ない。

或るマルクス主義者はかう言つて辯解するのである。「唯物史觀は、どうして個人の努力を不必要だと主張する學説では無い。其れどころか唯物史觀は、實は其れの不可缺的部分として個人の努力を豫想して居る。何故なれば、社會改造への人間努力が無ければ、階級的衝突は起り得ないから。其れ故にマルクスの唯物史觀が階級鬪爭を高調する限り、其れは當然個人の努力を豫定して居るものである」と。我國のマルクス主義者の中にも此の辯解には贊成して居るものがある。しかしわたくしは此の辯解は、實は大いなる論理的誤謬を侵して居ると考へるものである。

此の辯解者は、實は「人間の努力」といふ言葉を二つの異つた意味に使つたことに氣付かないで居る。其れはわたくしがマルクス學徒に警告したい批評の最も重要なるものの一つである。此の辯解者の意味した「人間の努力」は、自然的心理的努力、換言すれば社會的事實として、存在としての努力であるが、わたくし達の意味したものは、倫理的努力、當爲の發表として考へられた努力である。階級鬪爭が行はれるためには、自然必然的に、事實的に、社會の個人の一部が社會改造への努力をなしつゝあることは否定せらるべくも無い。しかしわたくし達が今問題としたのは、さうした事實としての存在としての個人の努力は、個人の倫理的動機として可能であるかどうかといふこ

とである。其の努力が社會の中に在るか無いかと言ふことではなしに、其の努力が社會にあるべきかあるべからざるかといふことである。もしも社會の變化が單に自然必然的に、機械的に、嚴密に進行するものとすれば、(卽ち世のマルクス學徒が普通に解釋するごとくに)個人は其の進行を左右するために、其れへ或る影響を與へるために、何等の努力をも加へるべきでは無い。何故なれば自然必然的、機械的なる經過の中では、いかなる努力も其の因果關係を左右し得べきでは無いからである。此くしてわたくし達は、特に目的を意識して、倫理的に社會改造への努力を爲すことは少しも必要では無いことになる。マルクス學徒は此の批評を避けることが出來ない。

しかしわたくしは其點に實は唯物史觀の理解の中心點が潛むのでは無いかと思ふ。わたくしは先きに唯物史觀を一つの經驗的法則であると言つた。嚴密に自然必然的に適用せらるべき因果法則では無く、單に漠然と眞理であり、且つ部分的に適用せられたときに其の眞理性の最も高い法則であると言つた。其の理解は右の困難から唯物史觀を救ふことが出來るであらう。唯物史觀は個人の倫理的努力を全然的に禁遏するほどの強さの妥當性を持つた法則では無い。其れはいくらでも個人的努力の自由を許す程度の妥當性を持つた法則である。個人がいかに自覺した倫理的努力をなしたにせよ、社會的變革の條件が具備しない間は、企圖した社會的變革は實現せられない。其れを敎へたものは唯物史觀である。然るに個人の倫理的努力の意企が強盛であれば、社會の現實に存する社會改造への努力の勢力も強盛であり、隨つて企圖せられた社會的變革は唯物史觀の法則通りに動いて達成せられることとなる。其の倫理的努力が弱ければ社會的變革はおそく起り、また或る場合には其の變革は全く起らないで終るかも知れない。唯物史觀の形式は、單に經驗的法則であるから、其の變革は絶對的に起り得るとは斷言し得ないし、また天文學が日蝕や滿月を豫言するごとくに、其の變革がいつ起るかを確然と斷言することは可能で無い。

繰り返して言ふ。唯物史觀の形式は單に經驗的法則であり、經驗的法則が持つ必然性以上の其れを持つことは可能では無い。若し此れに反して唯物史觀が自然因果の必然性を持つものだとすれば、社會の變化は正しく其れの形式のごとくに動き、また其れの變化の時間も正しく形式のごとくに決定せらるる筈であつて、人間のいかなる努力を以てしても、其の變化の樣式や變化の時間は左右せられないであらう。すなはち人間の倫理的努力は、すべて其の唯物史觀の形式の中に落ち、自然因果のわだちを步むより外は無いであらう。

社會的法則としての唯物史觀の妥當性は單に經驗的のものであると考へるならば、唯物史觀の妥當性に就ては次の二つの見方が成立する。一つは唯物史觀の適用せられる社會生活の範圍を割合に狹く、また短かく考へるのである。唯物史觀に隨つて實際の歷史を解釋したマルクスの爲方は、わたくし達の人類社會の過去に就ては可成りに詳密ではあるが、將來についてはたゞ漠然と示されて居るだけである。ことに後の豫想して居るやうな共產主義的共同社會が現出した後の人類社會の歷史に就ては何の記述も無い。また其處へ適用せらるる歷史的法則も示されては居ないのである。しかし凡そ或る法則が必然的の法則と呼ばれ得るためには、其の適用の範圍や其れの確實性やは、時の過現未により制約せらるべきでは無い。ニュウトンの引力の法則が若し絕對の眞理だとすれば、其れはひとり地球に止まらず、木星にも火星にも、また今後現出すべき未知の遊星にも嚴密に適用せらるるに相違ない。唯物史觀に就てわたくし達は、さうした妥當性を要求する必要は無い。其れはたゞわたくし達の現在の社會生活を說明し得ればよい。極めて狹い範圍へ其れの妥當性を限つて、唯物史觀はたかゞ現在の資本主義的社會の特質を表現し、其れの崩壞の必然性と經過とを說明したものだと見れば其れでよいのである。此の範圍内に於ては、マルクスの唯物史觀は、はなはだ高い程度の確實性を持ち得ることであらう。若し斯樣に理解したとすれば、過去の歷史の說明にいくらかの誤謬を持つとしても、――わたくし達はいくらでも其の誤謬を指摘し得るが、――其れは唯物史觀の效果を何程も害するものでは無い。また資本主義的社會の崩壞した後の人類社會が、いかなる歷史を持つかについても、わたくし達はたゞ沈默して居ればよい。歷史の將來は全く未知であるが、たゞ資本主義的社會の關與する限りに於ては、唯物史觀は經驗必然的に將來の歷史へ適用せられるであらうと言つて置けば其れでよい。唯物史觀に對するソオレルの批評は、唯物史觀を右のごとく理解することにより避け得られるとわたくしは考へるのである。

次にわたくし達は、マルクス主義から其れのユウトピアニズムの要素を除去しなければならない。マルクスは理想社會を可現實的と考へ、其の理想社會へ達するまでの歷史を「人類社會の前史」と呼んだが、わたくし達はさうした理想社會を可現實的とは考へ得ない。理想は理念であつて現實では無い。將來へ必然的に現はれる現實は理念だとは言はれない。理想社會を理念として考へるときには、人間社會の歷史は、人間の自由の歷史であるが、其の自由の歷史の一要素的、一面的觀察が唯物史

觀である。なほ換言すれば、社會を理想化しようと欲する人間の、倫理的努力の社會的表現を經驗的に法則づけたものが唯物史觀である、と考へたとすれば、其れははなはだ適切に唯物史觀を理解したものであらうと思ふ。

唯物史觀は此の二つの見方の何れかを表現したものである。其れだけ認識限界を以て理解せられた唯物史觀はまつたく正しい。そして此の二つの見方も結局は同じことを言ひ表はす。

人間の歴史は非合理的である。其れは自然のごとく合理に、因果必然的に進行するものでは無い。「自由の歴史は惡より始まる。人の業なるが故に」と斷言して、自然の歴史より人間の歴史を截然と區別したカントの歴史觀は正しかつた。當時ヘルデルは人類の歴史を自然の歴史と同じい見方を以て取扱つたが、カントにあつては、歴史のアプリオリは道徳であつた。歴史を進める動力は、人類の原罪である。人類の歴史とは、言ひ換へれば自由の歴史である。此の見方はカント哲學の重要契機の一つであるが、其れは現代の新カント學派の哲學者によつ新らしく展開せられて、トレルチュやウィンデルバンド、リッケルトやの特色ある歴史哲學を建設することゝなつたのである。わたくし達が人格の絕對的自由性を確信して居る限りは、わたくし達の歴史の進みに就ても、其れを自然必然的のものとして信ずることはどうしても出來ない。また逆に人類社會の歴史を非合理的のもの、創造的のものと認識すればこそ、わたくし達は人格の文化的努力を絕對的に自由であると確信することが出來るのである。

わたくし達人類の生理的、心理的經過は自然必然的に法則づけられて居るであらう。そしてわたくし達は其の自然法則をはなれていかなる活動をなすことも許されては居ないであらう。しかし此の如き理論的認識の外に、其れと並立して、人格の自由をアプリオリとして認識する實踐的の其れ、非合理的の其れの成立し得ることを歴史哲學の上で斷言したのはカントの偉大なる事蹟であつた。

社會は人格の自由を豫想する。其れ故に社會的認識は歴史的認識、非合理的認識であり、其れ自ら因果的の法則を適用することは可能では無い。しかし其の社會を組成する要素と要素との關係に就き何等かの法則性を認識しようとすれば、其れは必ずしも不可能では無い。たゞ其等の要素には既に何程かの歴史性が加へられて居るのであるから、其の法則性は、自然科學の其れのごとくであることは許されない。換言すれば其の法則を精密に自然的要素へ分析し、其等の自然的要素の因果必然性を求め、其の自然的法則の總和として、一の社會的法則を得

ることは、絶對に可能では無い。社會的法則が單に經驗的の法則として成立し得る所以は其處にある。

人間生活の眞の歴史が自由の歴史であることはマルクス自身によつても容認せられて居る。たゞしかしマルクスに於ては、自由の歴史は因果必然の歴史の後に來る。彼の所謂「人類社會の前史」は唯物史觀の法則により必然的に支配せられるが、其れの終末に於て共産主義的共同社會が組織せられゝば、はじめて此の如き必然的法則により支配せられない、人類社會の眞の歴史がはじまるといふのである。エンゲルスもまた同じ考へを持ち、右の如き歴史の轉換を、「必然の國より自由の國への人間の飛躍」と呼んで居る。此點こそは唯物史觀の訂正せらるべき誤謬であらう。自由の國、目的の國は必然の國の最後にあるのでは無く、必然の國と並立してある。人類の社會生活は、一面に於て自然必然の因果法則により支配せられ、また其の妥當性のより低い經驗的法則、例へば唯物史觀の法則により支配せられては居るが、同時に他面に於て其れは、人類の自由の歴史であり、理想への苦鬪の歴史である。現實の人間は完全に自由に生きては居ないし、また其れは不可能のことでもあるが、其れだからといつてまた全く自由の無い、必然のみに生きて居るものでも無い。完全に自由で無いとは、人間の生活が眞に人間の生活なるがためであり、現實の生活は現實的なるが故に のものでは無いのである。

マルクスやエンゲルスは所謂「自由の國」を可現實的の社會と考へて居るが、其れはマルクス主義をしてユウトピアニズムに墮落せしめた。其れに對するソオレルの批評は正しい。エンゲルスの言つた「自由の國」は、其れ故にカントの主張した「目的の國」でなければならない。カントの其れは「勿論たゞ理想である。」理性的生類は、此國に於ける普遍的法則の立法者であり、其れ故に彼は何等他のものゝ意志に服從しない元首として此國に屬するが、また他面には自ら其の法則へ服從する點で、彼は其れの成員として此國に屬する。エンゲルスの所謂「必然の國より自由の國への人間の飛躍」とは、其れ故にわたくし達理性的生類が必然的の自然法則に支配せられながら、理念としての「目的の國」を追求しつゝ進む其の精進の全經過を意味するものとしなければならないのである。

## 五　觀念的生活と物質的生活

唯物史觀に對しては、なほ一つの重大なる非難が哲學上の一つの常識として從來主張せられて居る。マルクスが、人類の觀念的生活形態は物質的生活の生産方法により條件づけられると

したことに・一般に價値と存在との關係に就ての正しい哲學的理解を缺く爲方だといふ非難が其れである。マルクスはかう言つて居る。人類の意識が其の存在を決定するのでは無くて、むしろ此れに反し、彼等の社會的存在が其の意識を決定するのである」と。此の點につきマルクスはヘエゲルと甚だよい對立を示した。今若しマルクスの思想を存在一元論と呼ぶとすれば、ヘエゲルの其れは價値一元論と呼ばれ得る。マルクスに於ては存在こそは價値を決定し、ヘエゲルに於ては價値こそは存在を決定する。其間に立つてカントは認識論的二元論を取るから、價値と存在との兩要素を正當に承認し、しかもなほ價値優位の考へを取るのである。

わたくし達は單に一つの「原理」に拘泥してはならない。人類の觀念的生活形態と社會的存在との決定關係については、カント主義者もマルクス主義者もあまりに執拗に、抽象的に、彼等みづからの原理へ固執し過ぎて居る樣にわたくしには思はれる わたくし達は原理より前に實際の事實に就き素朴の反省を加へなければならない。然るときカント主義もマルクス主義も二つながら眞理として現に成立するを見る。例へば哲學者は、存在に對する價値意識の優位を主張して居るけれども、然らば彼が時事問題などに就きどんな批評を下すかと見れば、大抵は時務に迂遠な、其時の社會意識に支配せられた平凡なものとなり、理論はいかにもあれ、事實として彼の觀念的生活が其の社會的存在により決定せられて居ることの確證を示して居る。卑い例が、我國の哲學者の中に、自ら社會主義者としての（其れはどんなに修正せられた意味のものであつてもよい）名乘りを擧げて居るものは一人だつて見られない。また次に人類の意識が其の存在を決定することのたしかなる證據は、マルクスに追隨する社會主義者自身のたうとい活動により示される。彼等は時代に對して一の反抗兒であつた。言ひ換へれば彼等の意識は社會的平均への一の例外であつた。彼等は自からの意識を以て、自由に其の存在を批判し決定することが出來たのである。

二つの見方は此の如く、ともに並立して眞なることは可能であるが、其れはカントの所謂アンチノミイとして互ひに成立し得るといふのでは無い。カントのアンチノミイは論理的成立であるが、わたくし達の場合では、單に經驗的に二つの見方が並立して可能であると言つたのである。唯物史觀に對して發せられたカント主義者の非難は、唯物史觀の法則を單に經驗的の法則であると理解することにより十分に解かれ得るとわたくしは考へるものである。

經驗的法則としての唯物史觀はいかにも正當である。わ

し達の意識は其の存在を決定せず、わたくし達の社會的存在が其の意識を決定することは、わたくし達の社會生活の經驗的法則として、何としても否定せられない。其れを否定するものは實は現實の社會生活に、透徹した分析を加へ得なかつたのである。のみならずいかなる哲學者も、哲學の立場より此の經驗的法則を眞理で無いと斷言する權利を持たない。何故なれば唯物史觀に於て社會的存在により決定せられると見たものは、わたくし達の現實的の「意識」——其れは時間の制限を持つた經驗的意識である——であつて、「價値」其のもので無いことは勿論たかゞ先驗的なる規範意識でさへもない。わたくし達は自らの價値批判を先驗的なる批評であると考へて居るが　そして哲學者は殊に　の傲岸を常に示して居るが、其の批判は大いに經驗的なる批評であり、つねに自らの社會的存在により決定せられて居るのである。しかし勿論さうした決定性は、唯物史觀の法則が經驗的法則としての妥當性をしか持たない以上、絕對的に其の通りだとは言へない。絕對的に此の法則から離れることはわたくし達社會的生類に取り可能では無いと同時に、絕對的に人類の社會的存在が其の意識を決定することも亦事實として可能では無い。唯物史觀を一の經驗的法則と見ることは、直ちに其れだけのことを意味して居るとわたくしは思ふ。

しかしマルクス學徒は、唯物史觀の妥當性を其れだけのことは見ず、もつと進んで此等の觀念的生活の「價値」さへ、人類の社會的存在により決定せられると見るから、哲學者が價値領域を擁護するために、唯物史觀を否定するのは、少しも無理では無い。此の場合マルクス主義者は社會學的認識の限界を超え此れを哲學的認識の範圍へまで擴張せしめたから、大いなる過誤を侵すこととなつたのである。彼等は其の立場に於て、宗教や哲學を否定し、其等の觀念的生活の價値を食ふこととの生活の價値によつて測定しようとする。いつの間にか彼等は唯物史觀論者の立場から唯物　者の其れへまで動いて居る。社會學的認識の立場から形而上學の其れへまで移つて居る。今日わが國に唯物史觀の信奉者は甚だ多いが　わたくしの觀察するところでは、彼等の大部分は實は唯物史觀論者では無く、また唯物史觀論者であることを必要とせず、なほ一歩を進めて唯物論の信奉者になつて居ると思ふ。また唯物史觀が民衆の間にはなはだ容易に普及せられることの出來たことも、其れが實は唯物史觀では無く、唯物論であつたことに主たる原因を置いて居ると思ふ。わたくしは其事を、わが國のマルクス主義者のために決して名譽なる現象であつたとは考へない。

わたくし達の觀念的生活の「價値」は、いかにしても物質的

生活の價値により決定せられ、測定せられることが出來ない。生活を觀念的と物質的との二つに區別することさへ、實は正しい爲方では無い。其の資料より見れば生活はすべて物質的であるし、其の形式より見れば其れはすべて觀念的である。そして宗教、藝術、科學、道德、法律、政治、經濟など、わたくし達の文化的生活の各部面は、すべて其れに固有の價値を持ち、其の何れかの價値を以て他の價値を決定し、測定することは不可能である。すべての文化價値の自律を高調したものは實にカントであつた。彼は批評主義者として正しく認識論的であつた。其れ故に彼はフィヒテやヘエゲルのやうに而形上學の立場へまで進入して、文化價値を系統づけることからさへ完全に避けて居たのである。わたくしは、文化生活の價値が互ひに自律して、他により制約せられないといふ哲學的認識と、唯物史觀の社會學的認識との間に何等の矛盾を感ずるものでは無い。

人類の歷史の事實としてもすべての文化生活の價値ははなはだよく擁護せられて來た。わたくし達の歷史は自由の歷史であるとするカントの思想は、わたくし達の過去の足跡により、なんの誤りもなく證明せられて居る。

## 六 カント哲學の特質

唯物史觀をどういふ爲方で解釋したにせよ、――或る人達の現になすごとく其れを唯物論史觀として解釋したにせよ、――其れによりカント哲學の光彩が幾分でも曇らされるといふ事はありさうに無い。カント哲學は唯物史觀を排斥するものでは無くて、十分に其れの成立を許し、其れを自らの中へ包容して居るものである。唯物史觀が成立したからカント哲學は破産したと考へるものがあるとすれば、其れは實はカントの哲學的立場をなんら理解して居ないのである。

唯物史觀はわたくし達の社會の經驗的認識から出發する。其れは歷史の具體的事實の上に立脚した内容を持つた眞理である。さうした歷史的法則は、認識としての本質より制約を受けて居るから、無制限に、絕對的に、わたくし達の歷史生活の上に適用せられるといふ事は出來るもので無い。其れは歷史の要素を支配する法則である。斯樣な實質的法則をどれだけ多數に集め、其れを抽象化し、統一して見たところで、所詮は歷史生活の要素を支配する部分的な、實質的な法則であらう、歷史生活其のもの丶法則、またはアプリオリ丶なることは出來ない。唯物史觀を僭越的に押し進め、人類の歷史生活を支配するもつとも根本的な法則であると斷言したときに陷つ誤謬は、經驗的の多くの形式が此れまで持つて來た誤謬とおなじく、要素的、

資格をしか持たないものを以て、全體の形式を絶對的に決定し構成しようと努めたことである。

若し本當に人類の全歴史生活を決定し、構成し得るやうな、根本的の立場を得ようと思つたならば、わたくし達は第一にさうした實質的の見方から離れて、全然形式的なる立場に立たなければならない。次には歴史の變化の外形を見るよりは、本來人類が歴史生活を營んで居る創造的展開の根本的動力に着眼しなければならない。其れは歴史的認識の根本前提である。カントは其の前提を道徳であると見たのである。自然の歴史は神の業なるが故に、其處には道徳の要素がない。道徳とはひとり原罪を擔つた人類への負課であり、其の贖罪の道徳的精進によつてわたくし達の歴史生活ははじまる。そして歴史生活の此の根本前提より自づから引き出される歴史の終極目的は、道徳的に完成せられた人類により齎らされた永久の平和である。此れは歴史の全體觀であり、また形式觀である。歴史生活其のものの意義を發揮せしめる根本的見方である。わたくし達は最早其處に法則の概念を持ち出すことが出來ない。道徳は歴史のアプリオリである。そして此の如きアプリオリにより、歴史的認識が可能となれば、其の認識の範圍内で、經驗的法則として唯物史觀の認識も可能となるであらう。唯物史觀の根據から、人類の自由なる道徳的精進の見方を排斥することは、實は唯物史觀の認識其のものを不可能ならしめる所以となるであらう。

わたくしは今カントの言葉を其儘に受け取り、歴史のアプリオリを道徳であるとしたが、現代哲學の洗練と發展とを經たカント哲學の立場から見れば、「道徳」といふかはりに「文化價値」なる概念を使ふが一層適切であることは言ふまでも無い。

カントの哲學は、彼以前の其れに所謂コペルニクス的轉回を與へた。彼の哲學の特質については、換言すれば哲學者としてのカントの前代に比類の乏しい天才については、わたくし達は此れまで餘りに多くの文獻から教へられ、よく知られ亘つた事實であるから、わたくしは今此處に其の記述を繰り返へすだけの煩を避けようと思ふ。カントの哲學は生活の實質についての哲學では無い。其れはいつでも形而上學の立場に陷る。しかるにカントは、さうした形而上學が概念と實在との相違を忘れ、いつの間にか認識の正しい限界を超える樣になることを、其等の學者達に警告した。彼は形式と實質との認識論的二元論を取り、哲學を純粹に形式の學問として保つた。そして概念的認識より實在を生む形而上學の途からはなれると同時に、經驗の部分的認識を全體の妥當性へまで不當に擴張せしめる經驗論からも完全に途を分つた。其れが彼の所謂批判的方法の發見であつ

た。

カントの哲學は、其れ故に純粹に形式的であり、批判的であり、認識論的であるから、獨斷的の念信を形而上學より得ようとするものに取つては何の意義をも見出すことが出來ない。カント哲學はわたくし達のすべての認識と活動との根本的前提を批判するものであり、概念により實在を創り出すものでは無い。しかし此く嚴密に批判的の立場に止まるといふこと自身には、人格としての深き確信を要する。カント哲學は人間として信ずべき限りのものを信ずる態度の決定である。また彼の哲學は經驗的現實につき何等かの實質的法則を考へ出さうとはしない。其等の法則的認識を不必要とせず、むしろ科學の爲事として其の認識の必要を大いに高調しようとするものではあるが、少くも其れは哲學の事業では無い。哲學の立場としては、此等の法則的認識を可能ならしめるための基礎を證明してやらなければならない。カントはさうした基礎をあらゆる文化生活について確定しようと努めた。彼の哲學の取扱ふ目標となるものは經驗的現實の法則では無くて、其れの認識の範疇であつた。其れは法則の法則である。法則の純粹なる形式である。

形而上學の合理性と經驗論の事實性とを併せて、批判的、形式的なる認識論を建設したカントの哲學は、其れ故に同時に哲學の方法として過去の心理主義より離れ、論理主義の立場を取つた。認識は模寫說の哲學の考へるやうに、觀念の中に實在其のものを寫し出すのでは無い。若し模寫說のいふところを正しいものとすれば、觀念と其れの對象となる實在との一致を認識する第三の立場が必要となり、其の要求は無限に進行して究盡しない。此れに反して認識は一つの構成である。しかも其れは論理的の構成である。若し此の認識を一の心理作用と考へたとすれば、認識論は心理學的に考察せられ得るでもあらうが、心理學的に考察せられたものの成果はたゞの心理學であるだけのこととなる。のみならず心理學の取扱ふ材料となるものは、個々人の實在的なる心理經過であつて、普遍妥當性を要求する認識其のものでは無い。こゝに認識論は、認識其のものゝ純粹に論理的なる形式を取扱つて論理主義となつた。また各個人の經驗的なるはたらきとは違つた普遍妥當的なる、論理的なる、人間のはたらきを取扱つて先驗主義となつた。先驗哲學こそはカントの獨自なる發見であり、カント以前の哲學者の決して其の立場を知ることのなかつたものである。

わたくし達はカントに隨つて批判哲學、先驗哲學を取つた。今後いかやうな哲學の立場が成立したにせよ、其等が此の批判的、先驗的なる立場から離れるときがあるとは、どうしても考

へられない。アインスタインは相對性原理を發見したが、相對性原理は通俗的に考へられるやうに相對論と同じいものでは無く、其れは物理學や數學の原理を一層批判的に修正しようと努めたものであつた。先驗哲學は先驗的なるが故にすべての經驗を無視しようとはしない。先驗哲學が經驗を離れるのは、哲學を純粹に形式の學問として保つためであり、形式を形式として此く純粹に保つから、經驗は經驗として現實的に證明せられることとなつた。わたくし達は先驗的觀念論を取るから、おのづから經驗的實在論の立場を確證することが出來たのである。

カント哲學の特色は、何處までも純粹に認識論的に、嚴密に方法的に止まるところにある。たつた一つの獨斷をでも持ち出し、其れを根據としてすべての學問の基礎概念を演繹することは、彼の堪へ得る態度では無かつた。其れ故に彼は嚴密に批判的ではあつたが、批判的とはわたくし達の文化的生活の經驗を其のまゝ忠實に受け取り、其れに超越的根據よりの抽象的說明を加へないことである。此點でカントは理想的に經驗論者の立場を守るものであつたと言はれなければなるまい。わたくし達の道德的文化生活の基礎を彼が批判しようと思ふときには、彼は先づわたくし達の生活に、快樂とも功利とも、また單に唯理論的なる完全の概念とも違つた、普遍妥當性の要求を持つ道德其のものゝ嚴然として存することを確信するのである。其れに道德に關聯するあらゆる認識の說明の根本的出發である。言ひ換へればカントははじめから理想主義者である。そして理想を前提として取らないものと、何等かの議論を交さうとはしない。理想主義を取るかぎり、カントの哲學はまた人格主義の特色を持つ筈であるし、また實際其の通りになつた。しかしカントは認識論的な、方法的な立場を離れて形而上學の範圍へ踏み込むことを避ける點では、理想的に鋭い學的良心を持つて居たから、此の如き人格をもたゞ極限の概念として許すだけであり、後にフィヒテやヘエゲルがなしたやうに其れを物自體と相即することが無かつた。フィヒテやヘエゲルにまさつてカントがわたくし達の師である所以は、此點に強く發揮せられて居る。

わたくしはマルクス主義を正當に發展せしめてカント哲學の立場へ移り、カント哲學の根本的特色として何人も容認しなければならないものを幾分演繹して見た。マルクス主義のみならす、今後一般にいかなる哲學が成立したにしても、わたくしが右に舉げた位の特色を打ち破るほどの思想が何人かにより考へ出されるとはどうしても考へられない。勿論カントの哲學的構成には、後のカント主義者が其れに修正を加へたやうに幾多の

缺陷の含まれて居ることは否定せられない。しかし其れは人間が神ではなくて人間である限りは免れ得ないわづかの過失である。わたくし達はむしろカント哲學の本幹を見なければならない。そしてどんなに獨創的な哲學的立場を發見するにしても、右に擧げた位のカント哲學の本幹と其れが矛盾するものである限りには、其れは必らず一の謬說であると考へなければならない。カントはおよそ人間の文化的なるはたらきの根本形式を考察したのであり、其の發見せられた形式は時代のいかなる變革によつてでも影響せられそうには見えない。社會改作についてわたくし達が原理を考察したにせよ、其の原理に根本基礎を與へ、其れを證明するものは、必らずやカント哲學でなければならない。しかしわたくしが今わが國の思想界を顧みたかぎりに於ても、社會改作の原理を考へるものゝ中で、其の原理の基礎をカント哲學に取つたものはきはめて少なく、却て其れを否定しやうとするものゝ多いといふことは悅ばしい形勢では無い。わたくしは今後公表する評論の中で、しばしば其の立場の缺陷を指摘し、批評しようと考へて居るものである。

## 七　カント哲學への肯定と否定

カントの哲學に對する非難は、マルクス主義者の中から此れまで幾度も無く聞かれるが、其等は往々カント哲學を誤解したことより發せられたものである。唯物史觀を唯物論として理解する人のカント哲學へ發する非難については、わたくしは改めて辯妄を語る必要を認めない。たゞ純粹に唯物史觀の立場に止まりながら發した幾つかの批評に對して、わたくしは簡單に其れの誤解を解いて置かうと思ふ。

第一に、カント哲學は、永遠不變的、普遍妥當的の原理を求めるから、其れには變化的流動的の考へが含まれて居ないといふものがある。しかし變化し、流動するものは生活の實質である。たゞ其れが變化し、流動すると認識せられ得る爲めには、變化流動しない座標軸を必要とするであらう。カントは自然界を支配する因果法則を十分に包容しながら、因果性なる認識の範疇は永遠不變的、普遍妥當的に許容せられねばならぬとした。カント哲學は、社會的變革の認識の基礎を與へはするが、實質としての社會的變革を否定しようなどとは考へない。

第二に、カント哲學は徒らに形式的であり、何等内容的の規定を與へないといふものがある。しかしカント哲學が純粹に形式的であることは、其れの長所ではあつても短所では無い。内容的の規定は、資料として何等かの歷史的事實が與へられたときにはじめて可能となる。カント哲學は或る固定した實質的原

理に執着し、其れを以て事實を拘束し、歪曲せしめようとはしない。

第三に、カント哲學が人格自由の理念を取ることは、其の思想がまだ社會的とならず、個人主義の程度に止まることを示すといふものがある。しかし其れはカントの人格なる概念を經驗的にしか理解し得ない人の持つた誤解である。社會なる概念さへ人格概念をはなれては成り立ち得ない。

第四に、わたくし達の心理的、生理的發達をどれほどよく觀察しても、カントの言ふごとき先天的要素は存在しないといふものがある。しかし其れはカントをロックにより理解しようとした誤解である。わたくし達の所謂先天的はさうした心理的、發生的の意味を持つては居ないのである。たゞ其の基礎を心理的、生理的より一段と進めて、生物史的となし、生物進化の全歴史を反省することによつて、カント哲學を否定しやうとするものもあるが、其れこそはまことに大なる徒勞であらう。カントといへどもさうした學問の研究を不必要だとは言はない。たゞ其の研究についてさへ、其れの可能を證明し、其の眞理の妥當性を確認することの出來る基礎を見出さうといふのである。

此等の誤解は、わが國のマルクス主義者の中に最もひろく行き亘つて居る。そして悲むべきことには、彼等はさうした誤解を正さうと努めず、またむしろ正すことを悅ばないやうな傾向を示して居る。わたくしはさうした沒批判的態度の中から、社會改作のよき原理と實行とが生れ出るとは信ずることが出來ない。

しかしわたくしはわが國のカント主義者、なほずつと其の範圍を擴張して、一般に專門の哲學者、倫理學者と呼ばれて居る人達の現に取つて居る態度には、十分に滿足して居るものでは無い。其れへの不滿は、マルクス主義者への其れより、ずつと以上ではあつても決して以下では無い。彼等の態度はあまりにもアカデミックである。そして時代に對する感觸や反能やを持たない。カントの傳記作者は、カントが時務に迂遠でなかつた證左として幾つかの事例を擧げるが、わたくしは彼を其れほど時事的興味を持つて居た哲學者だとは考へない。しかしわが國の現在の哲學者、倫理學者たちは、カントほどの、またフィヒテやスピノザやほどの時代的感能をさへ持つては居ない。わたくしは其の態度にみづから憤激を禁ずることの出來ないものである。

勿論わたくしは經驗論者では無い。經驗の中から根本の形式が歸納し出されるとは信じて居ない。しかし正しい反省は、つねに事實によつて確認せられなければならない。わたくし達が

現實に對してなにほどの興味をも持たない場合に、其の思惟の中から、純粋の其の概念的思惟だけの中から、推論せられた原理がわたくし達の生活を動かし得るとはどうしても考へ得ない。

眞理は先驗的に基礎づけられなければならぬ。社會改作の原理も、確實なる眞理の資格を得るためには、或る先驗的なる原理と結びつかなければならぬ。其れ故に「カントにかへれ」の要求は、わたくし達の文化批判のいづれの部面へでも適用せらるべきである。しかしカント哲學を其の態度の基礎に取つて居るから、其の人の文化批判はつねに正確だとは言へない。眞理其のものは普通妥當的でも、或る哲學者、倫理學者の考へた所謂眞理は、必らず普通妥當的だとは言へない。眞理を考へるものが、自ら考へた所謂眞理を主張することに於て、何處までも大膽であり、且つ其れへの確信を持つことを、わたくしは思想家の取る當然の態度とするものである。しかしわたくし達が所詮人間である間は、信ずる他面で直ちに疑ひ、自らの主張へ公平であると同時に、他の主張へも開放的に傾聽することが必要である。批判哲學の方法を取らない人の文化批判には、直覺的の或る鋭さがあり、其の主張の眞理性はカント哲學者の其れ以上である場合は少くない。然るにカント哲學者は、其の主張に傾聽しようとせず、此れを通俗的なる意見として輕蔑するのが常である。彼等のさうした態度を、わたくしは甚だ陋なりとするものである。カントは批判哲學者では無かつたルソオから多くの精神的の糧を得た。わが國のカント哲學者は概念以外の糧を取ることから故意に其身を避けて居る。

所謂社會問題を物質的なる問題、認識や藝術やについての問題を精神的なる其れと考へ、前者を輕蔑する哲學者は少なくない。此れについてわたくしは從來も論じたことがあるから、今再び其の辯妄をなさうとは思はない。

要するにわが國の哲學者、倫理學者は、およそ哲學者、倫理學者たることに根本的なる資格の、人生的なる、また社會的なる興味を持たない。彼等はいかに人格の品位の尊嚴なることを概念的には主張して居ても、社會の不正に平然として堪へ、其の不正を批判と實行とにより匡正しようとの、まことに哲學的なる、理倫的なる情熱を性格的に感じない。彼等はたゞ哲學や倫理學やの「學者」にならうと思つて居る。しかしさうした價値への情熱と批判への勇氣とを持たないものが、何の學問を建設し得ようか。美學の研究者だといふものの、また世間でも相當の美學者だと認めて居るものの書いた文章が、何等藝術的なる香氣を持たず、其のあげる譬喩なども聞くに堪へない拙劣、

るものである場合をわたくしは幾度となく實見して、はたして其の美學者が美の體驗を持つものであるかどうかを疑はねばならなかつた。哲學や倫理學などを取扱つた思想雜誌を讀んだものは熟知することであらうが、近來は實に不思議な文體が平然として使用せられ、また其れが實によく流行して居るのである。しかし日本語、日本の文章としての自覺をさへ持たないやうな其等の思想家が、また其れに於て生活の深刻と洗練とまた雄大とを象徴し得ないやうな哲學者が、はたして眞に人格の品位や生活の意義についての確信を持つて居るであらうか。わたくしはナトルプやカッシラアやが戰敗後に獨逸文化についての確信を公表した論著を讀んで、彼等こそはフィヒテにも劣らない、時務との交感を持つた、眞の意味の哲學者であることを信じた。わが國に其等の哲學者の追隨者は甚だ多いが、さうした氣概と情熱とは彼等に於てまつたく萎縮して居るとわたくしは思ふ。

## 八　必然の國より自由の國へ

カントの哲學は、人類の文化的生活の普遍妥當的なる、一般的なる基礎をわたくし達に教へた。普遍妥當的なる、一般的なる基礎を缺くとき、わたくし達のいかなる言表も其の意味を持つことが出來ない。しかしカントはさうした基礎を確證することが出來たから、其の基礎の上に立つて人類の歴史生活を變化的なるもの、個性的なるものとして認識することが出來た。カントの歴史觀の中には、人類の鬪爭さへ正當に容認せられて居る。其の鬪爭が歴史的認識の一範疇として見られるやうになつたものはヘエゲルの哲學であるが、マルクスの階級鬪爭觀は恐らくは一部分ヘエゲルの思想より得られたものであらう。斯樣に考へるならば、歴史哲學の發展の上から見ても、カントとマルクスとは、まつたくの反極に立つものでは無い。

しかし要するにカント哲學の意義は、文化的生活に一般的基礎を與へ得たところにある。變化的、個性的なる人類の歴史生活につき、社會的變革の法則を見出すことはカントの任とする事業では無く、また其れは彼の哲學に必要な仕事でも無かつた。マルクスの社會的認識はカントの事　の限界に於てはじまる。カントのごとくに「一般的な言表」をして居るだけでは、「現在の資本家社會に於て、勞働者に　の社會的現」を破棄すべき力を與へ、また其れを强要するところの、物質的其他の諸條件が、いかにして今日ついに發生して居るか」を解明することが出來ないと考へたものはマルクスであつた。其れ故に彼はカントとは途を分つて、「たゞ其れによつてのみ意味を生ずべき

其の條件」を明るみへ持ち出すことに努めたのである。

唯物史觀の究極の意義は、其れ故にわたくし達の歴史生活を制約する、現實的條件を科學的に整頓したことにある、其れが唯物史觀の最高の强みであつた。

カントの哲學は時代の差別を超越して、いづれの時代の歴史生活へも其れの根本基礎を提供する。彼は歴史を自由の歴史であるとしたが、同時に其れの發端は人類の原罪であるから、歴史其のものの生活に絕對の自由が實現せられて居るとは言はない。絕對自由の世界は、其の歴史的努力の究極に理念として望まれる「目的の國」である。わたくし達は從來、人間の勞働の意義を輕視するか、或はまつたく其れを見出し得ないで居たが今や社會の問題は、其の勞働の生活へと集中して、わたくし達は勞働の中に文化的意義を見出し、勞働の歴史を自由の歴史とすることの必要を痛感しはじめた。勞働を指導するものもまた當然「目的の國」の理念である。隨つて勞働は解放せられて自律し、社會的生活として組織化せられなければならない。勞働自身の國に於て人格は其れの成員として、また元首として、其國へ屬しなければならない。勞働についての義務と品位とが其處に發揮せられる。其れはマルクスの所謂「各人は各人の能力に隨ひ、各人は各人の要求に隨ふ」社會より外のものでは無い。

今日の社會主義運動の基礎はカント哲學により正しく與へられる。原罪を含む資本主義社會を改作して、「目的の國」を建設しようとする努力は、人格の品位を自覺するものに取つてのみ可能である。唯物史觀は、さうした人格が今現にいかなる物質的條件によつて制約せられ、また其の條件はいかなる法則に支配せられて變化しつゝあるかの正しい認識をわたくし達に與へる。現在の歴史生活に對應して、社會主義は理想主義となり、理想主義は社會主義とならなければならない。必然の中に實現せられて進む自由、——エンゲルスは其れを「必然の國より自由の國への人間の飛躍」と呼んだのである。

# 經濟的危機に瀕せる日本

法學博士 堀江歸一

(一)經濟的循環期說の適用――景氣の良否の激變するに足らざる所以――經濟的循環期と經濟政策――不景氣の永續する場合――我國の現狀如何(二)經濟社會現時の慘狀――其原因は總て不可抗力に存するか――年來の經濟政策に於ける過誤を顧みる(三)經濟政策上の積弊如何――原、高橋兩內閣の人工的繁榮策――好景氣から恐慌に至るまでの經過――好景氣時代に於ける經濟政策を誤まる(四)經濟的循環期說と我國の不景氣――我國に於て不景氣の永續した二原因――積極政策の濫行――財政と國民經濟との背馳――英米兩國の爲したる所如何(五)震災當時の經濟社會――經濟復興に關する無策――我國經濟社會に襲來する五個の危險――貿易の趨勢――輸入超過の大なる可き理由(六)國際貸借に於ける我國の地位――我國の對外收入――將來の悲觀される所以――我國經濟の行詰らざるを得ざる理由――局面展開策如何――輸入の抑制と輸出の獎勵(七)貿易の逆勢と外債募集――今後の外債募集――其條件の不利なる可き理由――外債と國民經濟との關係(八)我國經濟の基礎鞏固ならず――工業國と資本輸出國――輸入超過を恐るゝの弊――如何にして危機を脫する

## 一

一國の經濟社會が時に好景氣であり、又時に不景氣であり、其間に事業や、國民生活に消長を來すことは、尋常の出來事であつて、經濟學者は之を說明するに、經濟的循環期の學說を以つてする。蓋し好景氣の極まつた曉には、投機熱が高まつて、恐怖の襲來を蒙り、恐慌後に不景氣の爲めに、經濟社會が沈衰すれば、其間に投機熱勃興の時代に、膨脹した企業界が次第に整理され、一般物價の低落と共に、生產費の減縮を招く一方に國民生活の安易に行はれることは、自ら貯蓄を促し、冗費の節約と相俟つて、資本の供給を豐富にし、金利步合の低落、諸券市價の騰貴に依つて、新計畫の事業を盛にし、斯くて生產された物質は外國に販路を求め、之に對する代價の回收に依つて、國際貸借の自由に有利と爲ることは、益々好景氣を刺戟して、結局投機熱の勃興に依つて、恐慌を誘致するに至るまで、斯る

勢の繼續するを免がれないであらう。是れが即ち經濟的循環期說の一班であつて、要するに一國の經濟社會は恐慌の後に暫時不景氣の狀態に陷り、不景氣の繼續する間に、徐々として景氣恢復の機運動き來り、續いて好景氣時代を經て、投機熱の昂進恐慌の爆發に至るまで、恰も一年內に春夏秋冬の季節の動きつゝあるが如くに、經濟社會の運行にも自ら定まれる方則あるものと認められるのである。

既に然る以上は、一國の經濟社會が好景氣であるからと云つて、必ずしも喜ぶに足らない如くに、不景氣であるかと云つて、敢て悲むに値しない。蓋し經濟的循環期說の適用されること、正しきに居るものであるとすれば、今日の好景氣は早晚將來の不景氣を惹起す所以と爲り、將來の不景氣は更に他日の好景氣を誘致する道と爲るからである。唯好景氣時代に於て、國民をして飽くまでも好景氣に伴う利益を享受せしめると共に、不景氣時代に於ける負擔から國民の蒙る損害をして成る可く輕からしめることは、當局者の意を用ゆ可き所であつて、經濟政策の要訣は正に此所に存するものと云へる。若し其れ此點に於ける經濟政策上の方針、宜しきを得なかつたならば、一方に好景氣時代短かくして、恐慌の慘害甚だしく、他の一方に永く經濟社會をして不景氣の慘狀に苦しましめることとなしとしない。例へば不景氣時代に於て、商工業は沈衰して居りながら、或る事情の爲めに、物價が少しも低落せず、國民生活の費用甚だ多くして、國民の生活を壓迫して居るとしたならば、如何であらうか。又物價の騰貴斯の如くである以上は、金利步合の上進して已まざることも亦當然の道理であり、金利步合の上進に依つて、有價證券の市價の壓迫されて居る場合には、事業の振興も亦意の如く爲るを得ず、國民生活に對する壓迫は資本の增殖される勢を頓挫せしめるの外はないであらう。斯の如く爲らんか、經濟社會の危機は求めずして、來る次第であつて、其不景氣も經濟的循環期說に依つて、說明される不景氣と違つて、短小の歲月の間に一去せず、永く經濟社會に殺到して、經濟的實力に疲憊を招くこととなしとしないのである。我國今日の經濟社會に於ける疲憊は果して之に類するもののなきを得るであらうか、若しも之に類するとしたならば、即ち、我國は今日を以つて、經濟的危機に瀕するものとせざるを得ないのである。

## 二

我國現在の經濟社會が慘憺たる狀態に居ることに就ては、何人と雖も、異論を挾むを得ないであらう。震災火難の襲う所と爲つた東京橫濱其他の地方に於ては、今日に至るまで如何た

方面に於ても、復興計畫の進捗著しきものあるを見ない。國民生活の疲弊困憊は人をして正視するに堪へざらしめるものがあるとされる。然も世人の多くは之を以つて盡く震災火難の齎したものであり、不可抗力の如何ともす可からざるものとするようであるが、私は此點に就て聊か異論を挾まざるを得ない。固より震災火難に因る經濟的損傷の甚だしかつたことは、私と雖も、之を認めるに躊躇しない。然しながら此損傷と共に、我國經濟社會が再起の餘力を存せざるまでに、倒壞の已むを得ざるに至つたのは、必ずしも震災火難に伴ふ損傷の大なるが爲めのみではない、我國に於ける經濟政策が多年に亙つて、間違に間違を重ねて、爲めに不景氣の存續する期間をして意外に長きものたらしめ、斯くて經濟社會の疲弊一方ならざりし其際に、震災火難の突發したことが即ち經濟社會に今日の如き致命傷を負うに至らしめた所以である。隨つて我國の經濟社會は單に震災火難に依つて、累されたものではない、經濟政策に於ける積弊こそ、經濟社會を擧げて其犧牲とした次第であつて、年來の不景氣に苦しめられて、氣息の奄々たる其上に、震災火難の打擊を蒙つた以上は、今日の如き窮狀に陷ることも亦敢て異とするに足らないであらう。

然らば何を以つて我國年來の經濟政策に於ける積弊とす可きであらうか。世間には我國現在の經濟社會の陷りつゝある窮狀を目するに、甚だ輕卒であつて、單に震災火難に對する善後策さへ施されたならば、其れを以つて直に經濟的振興の期し得られるが如くに考へる者もある。若しも我國の經濟社會が震災前まで相當に繁昌して居り、其組織も整理の宜しきに就き、唯震災と云ふ突發的事件に依つて、不良の影響を蒙つたものであるとすれば、震災善後策は即ち取つて以つて、經濟振興策とするを得るかも知れないが、前述の如く震災火難の突發的影響の外に、經濟政策に於ける積弊が今日の經濟社會に大なる禍害を及ぼして居るものであるとすれば、吾人は其積弊の根源に遡つて之を刈除することに、力を致さなければならない。

## 三

然らば何を以つて、我國經濟政策に於ける積弊とす可きであらうか。一言を以つて之を現はせば、原高橋兩内閣に依つて行はれた所謂積極主義の信念下に於ける經濟財政上の諸政策は即ち之に當るのであつて、而して其後政權を握つた内閣例へば加藤内閣の如きものが此積弊を除かうとせず、寧ろ之を助長したことも、自ら責任を荷うものであると考へられる。原高橋兩内閣が如何に自家の黨與をして政權を壟斷せしめるに就て、必要

であつたと云ひながら、第一殊更に經濟社會に人工的好景氣を盛ならしめることに腐心し、第二此目的を達する爲めに、殊更に物價を騰貴せしめて、一方に國民生活に及ぼす脅迫に就ては之を意に介しなかつた、第三特に金利步合を低くし、又當然其引上げられ可き場合に、之を沮止し、以つて通貨膨脹、虛業伸張の勢を逞ましからしめ、第四財政上に於ても、亦積極主義を實行する爲めに、年々巨額の公債を財源とする事業を計畫し、一方に公債の發行に依つて、金融市場を脅かすと共に、他の一方には經費膨脹の勢を容易にし、財政の規摸をして尨大のものたらしめたことの諸點は何としても後年の經濟並に財政に禍を貽す所以たるを免がれなかつた。斯くて歐洲戰時から戰後一二年間歐洲諸國に於て、大規模の消費の行はれる結果として、我國の物資に對する諸外國の需要の旺盛である間は、我國も亦其利益に浴して、經濟社會に空前の繁昌を告げるを得たもの丶、戰爭の終熄と同時に、此方面から來る刺戟の次第に消滅するに加へて、內國に於て上記の如き種々の不健全なる原因に依つて醸成された所謂經濟的繁榮が一步を轉じて、投機熱の勃興と爲るや、遂に大正九年三月破綻を暴露して、恐慌を惹起し、爾來商業と云はず、工業と云はず、將た又農業と云はず、總ての產業を通じて、極端なる不景氣に陷らしめて居ることは、世間公知の事實に屬するのである。即ち歐洲戰爭の當時に於ては、我國は諸外國に於ける我國物資に對する需要の盛なるに乘して、貿易上に多額の輸出超過を收めた其上に、運賃傭船料の收入增加に依つて、國際貸借の關係に於て、最も有利なる地位に立ち外國から受取る正貨を以つて、在外正貨を增殖すると共に、其一部を利用して、或は外國に負ふ我國の債務を決濟し、或は新に外國に債權を獲得するを得たのである。

凡そ我國近代の經濟史を通じて、我國に取つて、最も順調を極めた時と云へば 明治十九年兌換制度復興の當時から、明治二十三年に至る間、商工業の旺盛であつたのは、其一であつて此數年間の好景氣は明治十四五年より數年間に亙る通貨收縮に依つて、醸された不景氣の損傷から、全く國民をして脫せしめるの觀があつた。次に經濟社會に繁昌を告げたのは、明治二十六年頃から二三年間に亙る銀價下落に依つて、產業上に刺戟を告げた時代であり、續いて日淸戰爭後や、日露戰爭後に於ける好景氣も共に目覺ましきものであり、我國產業發達の基礎は多く是等の時代に於て、築かれたと稱するを得る。然も是等に比較して、大なる著しき程度に於て、我國產業發展に資したものは、歐洲戰爭の期間を通じて、我國の經濟社會に與へられた刺戟に外ならなかつたのである。故に當時に於ける經濟政策にして

其正しきに就き、國民に對して、常に適當の警戒を施し、彼等をして極端なる投機熱に罹ること回避せしめたならば或は大正九年の恐慌は之を未然に防ぎ得たかも知れず、防ぎ得なかつたとしても、尚ほ其及ぼす患害を或る程度に抑制し、一方に好景氣に伴う利益は國民をして之を滿喫せしめて、以つて國民經濟の發展に資せしめるを得た道理である。然るに政府の實際に施した經濟財政策は右に述べた如きものであり、一として投機熱を煽揚するものならざるなき有樣であつたとすれば、好景氣が好景氣たるに止まらず、投機熱から進んで恐慌襲來と爲るのは當然の徑路であつて、斯の如きは政府自ら求めて玆に至つたものであると云ふを憚らざる次第である。

## 四

經濟的循環期の學說から云へば、其循環期に際して、起る一の經濟現象例へば好景氣とか、不景氣とか、景氣恢復とか云ふことは、三年内外を期間として、經過す可きものと考へられる。好景氣が如何に續いたとしても、三年以上に亘らず、不景氣が如何に永引いたとしても、三年も經過すれば、景氣恢復期に移ると云ふのが一般の定說であつて、此事は諸外國に於ける經濟的現象の推移から云つて、略ほ完全に實證されるのである。然らば大正九年三月の恐慌以來我國の經濟社會にして不景氣に陷つたとすれば、其不景氣の現象たる、昨年の震災當時に於て、一正に三年半の歲月を經過したことゝ爲る。經濟的循環期の學說から云へば、不景氣時代にして、既に三年以上の歲月を重ねれば、景氣恢復の曙光に接し得る道理であるのに、我國に於ては毫も斯る徵候の經濟社會に出現するものなく、幾年を經過しても、依然たる不景氣の狀態を呈して、已まないと云ふのは、何故であるかと云へば、私は此點に於て二個の原因の動かす可からざるものゝあることを信ずる　其一は既往に於ける投機熱の餘りに甚だしく、隨つて之に對する反動も其度を超ゆるものであることであり、他の一は不景氣の時代に處しながら、國家の財政には不景氣に伴うだけの緊縮整理が行はれず、依然として放漫を極めて、已まざることとである。第一の點に就ては、深く說明を試みるを要しない。原高橋兩內閣が如何に積極政策の實行に熱心であり、殆ど他を顧みなかつた趣きを考へれば、之を知るに足るであらう。第二の點は實に我國に於て財政と國民經濟との間に　聯絡の存せざる證左であつて、又常に財政をして國民經濟を攪亂せしめる所以と爲るのである。

不景氣時代に於て、經濟社會をして早く不景氣に伴う患害を脫せしめるには、經濟社會の全體を擧げて、整理緊縮を行うこ

とを必要とする。而して此經濟社會の内には、國家財政も亦當然網羅されなければならない。思ふに今日如何なる國が如何なる經濟組織を立てゝ居るに拘はらず、一國に於て最も大なる消費を爲すものは、財政の主體たる國家であつて、國家が財政を營む上に於て、民間市場に就て、物資を購入し、勤勞を雇傭する分量は公私官民の經濟を通じて、最大のものであると考へられる。然るに政府が年々巨額の經費を支辨して、物資や勤勞を需要することの大であれば、大であるだけ、物價や賃銀の騰貴するのは、免かれ難き所である一方に、政府が巨額の經費を支辨するに當り、之に對する財源の調達必ずしも確乎たる基礎に於て行はれず、公債を財源に利用し、然も其公債に對する應募が當時の國民貯蓄に依つて、行はれなかつたならば、勢通貨の膨脹を促して、更に此點から物價の騰貴を惹起するに至るのである。我國に於て、經濟社會は大正九年の恐慌に依つて、商工業に一大頓挫を招いて、明に不景氣の狀態に陷つて居りながら不景氣に伴ふ經濟上の特徴が或る方面に現はれず、物價は縱に騰貴して、國民の生活を壓迫し、金利亦著しく上進して、企業を妨害したのは、一に財政が經濟社會の不振に伴つて、緊縮される道に就かなかつたからである。

之を英米兩國の事例に徴したならば、如何であらうか。兩國が戰後の經濟復興に處して、最も多くの力を傾注した所は經費を節約して、財政の規模を縮小するの一事であつて、英國はゲツデス委員會の報告に基いて、行政に一大刷新を施し、北米合衆國亦歲計制度に就て、多年行はんと欲して、行ふを得なかつた改革を成就して、經費を縮小することに成効した。而して兩國に於て斯る經費の縮小の行はれたのと相前後して、通貨收縮物價低落の步調を示すに至つたことも亦爭ふ可からざる所に屬する。然るに我國の爲す所は此點に於て英米兩國と正反對であつて、好景氣時代に膨脹した財政は不景氣時代に入つて、毫も收縮されず、依然として經費の膨大を極むる有樣であるとすれば、國民經濟が常に財政の壓迫する所と爲るのは勿論、不景氣の狀況を脫して、景氣恢復の機運を開く能はざることも亦已むを得ざる所であると考へられる。

## 五

斯の如く年來の不景氣に依つて、疲弊の甚だしきを來して居つた我國の經濟社會が昨年の震災火難を蒙つたとすれば、其打擊が健康體の經濟社會に對するものに比較して、酷烈を極めることは、當然の勢であるとしなければならない。加ふるに震災當時金融市場を安定せしめる爲めに、政府の行つた政策の内

には、聊か機宜に適したと見る可きものもあつたが、其後經濟社會の振興を期する方策に至つては、一として其行はれたものゝあるを知らない。第一火災保險問題は罹災後半年を經る今日に於て、依然として未解決の儘であつて、保險契約者をして殆ど宙字に迷はしめて居るではないか、第二罹災商工業者に對して、簡易なる方法の下に、資金を供給する工風は未だ行はれないではないか、第三市中銀行亦金融市場の前途に對して、意を安んずることが出來ない一方に、取引先の內に震災の打擊を脫する能はざる者の多い結果、其資金融通を嚴にし、爲めに金融梗塞の狀を呈しつゝあるに拘はらず、之に對する政府の方策に何等の見る可きものがないではないか、第四斯くて生ずる物資供給の缺乏は輸出貿易を不振ならしめる一方に、輸入に依つて、內地市場に於ける供給を補充することを必要とする爲めに貿易の逆勢を甚だしからしめるではないか、第五貿易の逆勢の著しきに加へて、貿易外に於ける對外收支も亦頗る我國に取つて不利益である爲めに、對外支拂の加重するもの甚だしく、圓價値の低落する勢の著しきに拘はらず、政府に於ては、之に對する確乎たる方策の存するものを見ないではないか、是等は何れも我國の經濟社會を襲ひつゝある事柄の重なるものであつて、之に對する處置の宜しきを得ない限り、我國に於ける經濟的危機は求めずして、來るものと覺悟しなければならない。是が我國經濟社會の現狀を眺め、一方に政府の經濟政策上に於ける無能を顧みて、深憂を感ぜざるを得ざる所以である。

現に震災以來我國の貿易は如何なる狀態に居るであらうか。昨年中の輸入超過が五億三千萬圓の多きに上つたことは、經濟社會に取つて、一の脅威たることを失はなかつたが、更に本年に入つては、一二兩月の入超額を以つてして、二億圓の多きに達さうとする有樣である。貿易上に於ける毎年の事例を以つてすれば、上半季は入超期であつて、下半季は出超期であり、後者に於ける出超に依つて、前者の入超を償ひ、時に全體に於て輸出超過の勢を保たしめるに至るのであるが、本年の如き、昨今の勢を以つてすれば、上半季の輸入超過の極めて大であるに對して、下半季に於ける輸出超過の見込みは實際に乏しく、全體を通じて、輸入超過の大なるものに接することを免かれないであらうと想像される。即ち其理由とする所は

第一、復興事業の進行と共に、復興に必要なる物資は續々外國から輸入され、以つて內地に於ける供給の足らざる所を補ふこと。

第二、之に對しては內國に於て成る可く外國物資の輸入を阻止する希望があり、正貨拂下の制限や、信用狀に對する制限

に依つて、其目的を達することに勉めるようであるが、事實輸入品の代金を決濟する財源の備へられて居る以上は、輸入の增加は何としても之を防ぐを得ないこと。

第三、內國に於ける一般物資の不足に對しては、勢外國物資の輸入に依つて、其缺を補はなければならない。政府が震災直後實行した生活必要品に對する輸入稅減免の制度を繼續しつゝあるが如き、要するに一方に內國品の供給を以つてしては、需要に應ずるに足らざることを示すものであると同時に、今後外國物資の輸入される勢の盛なる可き證左とするに足ること。

第四、輸出は內國の經濟組織が復興して、其生產力を恢復し、加ふるに物價の平準點が少なくとも震災前の程度に復歸しなければ、其盛に行はれるを望み得ない。然も政府に斯る對策の存するものなく、民間經濟力の復興に對して、殆ど無爲を極めて居る以上は、輸出の振興の如き、遂に之を望むを得ない。寧ろ物價の騰貴、生產費の增嵩に依つて、之を妨げられるに至ること。

の數點に歸するを得るのである。

## 六

貿易上に於ける我國の逆勢、斯の如くであるとしても、若しも貿易外の國際貸借關係に於て、我國が有利なる地位に居り、後者の有利なるバランスを以つて、前者の不利なるバランスを償ひ得るが如き事實を生ずるならば、其間に何等憂ふる所ありとしない。然しながら從來我國の國際貸借に於て、受取勘定の項目に屬するものとしては、（一）運賃傭船料（二）漫遊外國人の內地費消金（三）外國出稼人の內地送還金（四）海外放資の利子並に收益等を擧げるを得るが、右の內、第二以下の諸項目は從來重要のものでなかつたし、今後に於ても亦重要とするを得ないのである。現に大正五年以後三四年間に亙つて、我國の國際貸借が非常に有利なる方嚮に向つて、展開したのも、要するに當時歐洲戰爭の影響に依つて、運賃傭船料の收入に劇增を告げた結果に外ならない。卽ち諸地方の海運業者や、船舶所有者が船價の騰貴に依り、運賃傭船料の上進に依つて、續々船成金と爲つて、全盛を極めた如くに、國家の經濟も亦斯る不時の收入に依つて、國際貸借上に於ける地位の安全を期するを得たのである。然るに戰後の海運業は世界を通じて、甚だしき悲況に陷り、容易に復舊の見込に接せず、船成金をして徒に一時の榮華を嘆ぜしめるが如くに、我國の經濟に於ても、國際貸借の狀況は運賃傭船料に依つて、代表される收入の劇減に依つて、

著しく不利のものと爲つたのである。而して運賃傭船料以外に於て、我國が對外債權收入として、依賴し得るものは、或は海外出稼人の內地送還金であるとか、或は漫遊外國人の內地費消金であるとか云ふような重要ならざる項目に屬し、殊に後者の如き、日本の地震國である事實が世界の諸國に向つて廣告され、又帝都が殆ど其全部を擧げて、破壞し盡され、漫遊客の耳目を樂ましめる何ものをも存しない今日に於ては、到底其增加することを望み得ないのである

國際貸借に於ける我國の地位の不利なること、斯の如き場合に於て、巨額なる輸入超過が我國の貿易に出現し、昨年中の輸入超過は現に五億數千萬圓に達し、本年度の入超に至つては、果して其れが五六億圓臺で遮斷されるか、七八億圓の多きに上るか、孰れにしても對外債權の收入を以つて、之を決濟するに不充分である位の多額に上り、勢正貨を以つて拂出すことを要し、然も其正貨の所有高に限りがあり、對外債權の收入を以つて、之を補充するを得ないとすれば、輸入超過が今日の如き勢の下に繼續する限り、我國の經濟社會は遂に行詰る所に行詰らざるを得ざることと爲るのである。

茲に於てか行詰りの甚だしきに至らざる間に、局面を打開して、我國經濟社會を安全なる地位に置かなければならないと云ふことは、何人の腦裡にも浮び來る問題である。然らば此點に於て、政府は從來如何なる處置に出でたかと云ふに、其一は輸入抑制の政策である。

第一、震災直後に行つた輸入稅減免期間の滿了すると共に、其多くの部分を復舊して、課稅を行うこと

第二、輸入品の代價決濟に就て、在外正貨の拂下げを行う場合に、輸入品の種類を選擇し奢侈品の輸入に對しては、容易に其拂下げを行はないこと

第三、爲替銀行の輸入信用狀發行に對しても、亦嚴重なる制限を施して、之を濫にせしめないこと

第四、爲替銀行の爲替賣値にも適宜干涉を加へ以つて輸入を制限すること

の諸方策であつて、其如何なる效果を齎すを得たかは、斯る諸方策の行はれつゝある一方に於て、輸入超過の勢の滔々として極まる所を知らざる一事を以つて、之を推すに難しとしないのである。由來今日の貿易上に於ける逆勢を制する爲めに、輸入の抑制を急として、一方に輸出の奬勵の更に必要であることを考へざるが如き、偏見の甚だしきものとしなければならない。然も從來如何なる輸出奬勵策が政府に依つて、行はれたであらうか。今日の如く種々の關係に迫られて、窮地に陷つた我國の

輸出貿易を奬勵するのは、固より容易の業とするを得ないが、私見を以つてすれば、政府が當業者に對して金融の便を與へること、一般物價の低落を謀つて、生産費の節約を期すること、原料品並に補助品の供給を豊富にし、其外國の供給に係るものに、就ては、輸入を無稅とすること、輸出品製造業者中の罹災者に對しては、工場の建築、機械其他の設備に就て、特別の便宜を與へることとの諸點は輸出貿易振興の爲めに、實施の急を要する所である。然も政府は是等の問題に就て、何等の解決を試みず、内國の物價は之を其騰貴するに任せ、資金の供給に就ても、亦震災直後勸業興業の兩銀行が極めて小規模に特殊の貸付を爲したものを除いては、一の認む可きものを示さない。斯の如くして貿易の逆勢次第に甚だしきに至らうとするのも、亦怪むに足らないのである。

## 七

斯くて政府は貿易の逆勢を恢復し、其均衡を保たしめることを以つて、到底望みなしとしたか、又は至難の業であるとしたか、對外支拂の安全を期する爲めに、過般倫敦并に紐育の兩市場に於て、五億五千萬圓の外債を發行したことは、世人の知る所である。固より大正十四年二月並に七月を以つて、期限の滿了する四分半利付英貨公債を以つて、新外債に對する乘換應募に充ることを許した結果、英貨公債償還の困難は或る程度まで、之を緩和するを得たが、外債の實收額は世間の豫期した所より遙に少なく、二億一千萬圓に過ぎない。即ち此金額だけ在外正貨を補充するを得たとした所で、昨今の如き輸入超過の勢を以つてしては、能く對外支拂の前途を安んぜしめるを得るが如き不可能事であつて、今後在外正貨の減少すると共に、再度の外債募集に依賴して、其補充を謀らざる可からざるに至るは、明瞭の事實である。然も此際に於て、如何なる條件の下に、外債募集の目的が達せられるであらうか。過般成立した外債に於て、利子步合の頗る不廉であつて、倫敦發行の分が六分九厘、紐育發行の分が七分一厘の利廻に上ることとの如き、我國財政の對外的信用が斯くまでに低落し、其低落した財政の信用程度が外債の利子步合に現はれ來つたものであるとすれば、高利公債の發行されたのも、亦致方なしとしなければならない。而して今後我國の財政が其面目を一新して、信用程度を增進する望みがあるかと云へば、現在の狀況を以つて、判斷すれば、到底其望みありとするを得ない。其際に在外正貨補充の必要に迫られて、外債を發行する、其發行を全うせざる限り、對外支拂に支障の生ずることが顯然たる事實であるとすれば、外國資本家が

此間に乘じて、高利を以つてせざる限り、外債に應募しない態度に出でることは勿論であつて、啻に高利を徴收するのみならず、其他の點に於ても、自己に有利なる條件を課するに怠らないであらう。現に今回の外債發行に際し、我國政府と外國の資本家代表者との間に、今後担保付外債の發行された場合には、今回發行された外債の所有者をして其担保の利益に均霑せしめると云ふ約定の成立したと傳へられるに至つては、私は之に對して種々の意義の存することを認める。即ち第一、外國資本家は我國財政に對して、今後担保付でなければ、資金の融通を肯じない程に、信用を與へざるに至つたこと、第二將來の外債には必ず担保の提供を條件とし、然も斯く担保付外債の發行された場合に於ける無担保外債の地位の不利と爲ることを恐れて、担保の均霑を約定する態度に出でたことは頗る明瞭であつて、將來我國が外債募集の回を重ねたならば、高利の外に、担保の提供と云ふ屈辱的條件の加へられるに至るは、私の想像に苦まさる所である。

元來外債の募集は外國から低利の資金を一國に誘導するの故を以つて、是認されるのである。即ち一國が內國に於て連續的に公債を發行したならば、必ず付するに高利を以つてしなければならず、又斯く高利の公債を發行することが內國に於ける一般の金利を高からしめる原因と爲つて、金融市場を壓迫する虞れの大なる場合に、低廉なる利率の下に、外債を發行したならば、如上の形勢を緩和するに資するもの少なからざる道理である。然るに我國今回の外債の如き高利のものを以つてしたならば、毫も低利の資金を利用することの効果の奏されざるのみならず、更に斯る高利の外債發行に依つて、內外の金融の疏通される勢を妨げる弊害の大なる一事は吾人の看過す可からざる所である。蓋し今日經濟的復興を必要とするものは、一の政府のみに止まらない、民間當業者亦其家屋營業所を新築する點に於て、商品を仕入れ、機械を据付け、原料品を用意する點に於て資金を必要とするのは勿論であつて、政府の必要とする復興資金と民間當業者の必要とする復興資金とを比較し經濟復興と云ふ大局から眺めて、孰れを重要であるかとすれば、其間に何等の差別を置くことを許されないのである。然るに今、內國の金融市場は甚だしく緊縮し、國內の事業家にして如何に資金を需要すること、緊切であるとしても、之を調達するに容易なるを得ないとすれば、彼等の眼は自ら海外市場に向つて注がれざるを得ない。震災前我國諸會社にして外資輸入を計畫し、又實際に低利の資金を輸入することに成功したもの々少なからざりし所以である。然るに今、國家の信用を以つて、外債を發行する

場合に、其利廻りを七分の高きに置いたと云ふことは此點に於て如何なる結果を生ずるであらうか。斯る高利の外債が發行されて、外國に於て、我國財政の信用程度を律する規準に充てられたならば、民間の營業者が外資を輸入する場合にも、亦此規準に律されて、一割に近い高利を支拂はざる可からざるに至るのは、當然の數であつて、外債募集の結果として、低利に外資の輸入される道は杜塞されることゝ爲つたのである。若し其れ今後政府が更に不利なる條件の下に、外債を發行したならば、外資輸入に對する障壁の益々高きを加へることは論を俟たない、即ち此點に於て、民間營業者は復興事業の遂行に必要なる財源を奪はれたものとせざるを得ないのである。

我國の金利歩合が甚だしく不廉であつて、其高率なる點に於て、世界の群を拔いて居ることは、世人公知の事實である。而して斯く金利歩合の高率であることは、二樣の意義に於て、經濟的復興を妨げる所以たらざるを得ない。第一金利の高いことは、新に企業を試み、又は從來の企業を擴張する爲めに、資金を借入れる者に取つて、大なる負擔と爲り、其負擔の重ければ重いだけ、彼等の企業心を沮喪せしめることは論を俟たない。第二金利歩合にして一般に高いときは、有價證券の市價が一般に壓迫されて、低き程度に居り、一方に證券の利廻りをして高からしめるのは、當然の數である。證券の利廻りの一般に高いときには、世人は資本を放下して、利殖の計を爲さうとする場合に、先づ斯る證券を買入れることを以つて、得策とする結果新に企業家が事業を發起計畫したり、又は既設事業の規模を擴張したりする爲めに、資本を吸收しようとしても、容易に之に應ずる者を見出し難く、隨つて新事業の計畫をして頓挫せしめるの外はない。金利歩合の高きことが事業の興起を妨げ、經濟復興を遲からしめる憾みあるは明白の事實であると考へられる。

玆に於てか如何にして我國の金利歩合をして低廉ならしめるを得るかと云ふことが近來一個の問題と爲つたのである。之に對して最も簡單に考へる者は日本銀行の金利引下げを以つて、急務であるとし、日本銀行さへ金利を引下げたならば、我國の金利は立所にして低落するが如くに信じ、頻に日銀の利下げを主張して、已まないようであるが、本來日本銀行は一國の金利歩合を決定し、其低かる可きものを高くしたり、其高かる可きものを低くしたりすることに就て、何等の權能を有して居る次第ではない。市場の金融緊縮し、諸銀行の日本銀行に對して、資金の融通を求める勢が急であればこそ、之を制する爲めに、日本銀行は金利の引上げを必要とする一方に、市場の金融緩漫

であつて、市中諸銀行の日本銀行に資金融通を求めること、軟弱であればこそ、日本銀行は之に刺戟を與へる爲めに、若干の利下げを施すのである。卽ち日本銀行の金利政策に於て爲す所は大體上市場の趨勢に追隨するのであつて、時に此趨勢に先だつて、金利步合の上下を爲すことがあつたとしても、單に近き將來に現はれ可き事相を豫想して、之に順應するに止まる。日本銀行の力を用ひて、市場の大勢を其好む所に赴かしめんとするが如き、冠履顚倒の譏なきを得ないのである。

此點から我國昨今の經濟狀態なり、金融關係なりを考へて、吾人は如何なる結論に達するであらうか。我國の金利步合が頗る高貴であり、然も世界の群を拔いて高貴であると云ふのは、第一我國の物價が何時までも調節されずして、今日尙ほ高騰の境に居り、如何なる事業を爲す者も此高騰した物價を標準とするが故に、資金に對する需要自ら增加して已まざること、第二物價の將來益々高騰する勢の豫想される結果、資金を他人に貸付ける者は高利の徵收に依つて、貨幣價値の低落に依つて、將來蒙る可き損失を回避しようとすること、第三政府が公債政策の下に、年々多額の公債を發行する爲め、自ら金融市場を脅威し、財政を以つて金融を壓迫する弊の跡を絕つを得ざること、第四高利外債の發行された結果、低利の外資輸入に依つて、金融を調節する望みなきに至つたことから惹起されたものであるとすれば、其由る所甚だ深しとしなければならない。單に日本銀行をして金利步合を引下げさせただけで、能く金融緊縮の大勢を緩和するを得るとしたならば、其間に大なる誤解なきを得ない。或は政權の干涉は日本銀行をして金利を引下げるの擧に出でしめるかも知れないが、然も是れよりも有力なる經濟上の力は結局日本銀行をして金利を引上げるの已むを得ざるに至らしめ、經濟社會をして徒に定めなき金利の變動に苦ましめるに終るであらう。

市中諸銀行の營業方針に就ても、亦世間に非難の聲を聞くようである。然しながら我國の銀行が預金銀行として營業し、而して今日の如き金融緊縮に加ふるに、經濟社會不整頓の間にする以上は、其取引先の希望するが如く、活潑たる資金の融通を試みるを得ないのは、當然の勢ではあるまいか。銀行をして今日の經濟社會に於て、活躍せしめようと云ふのは、經濟復興の見地から之を必要とするのであり、此見地から之を必要とする以上は、政府に於て公共的立場から銀行の行つた或る種の營業に關聯して生じた損失に就て、之を保證するの任に當なければならない。之を爲さずして、單に銀行の營業に活躍せさることを責めるが如き、難きを他に强ゆるものである。

## 八

由來一國が其經濟の基礎を鞏固ならしめるに就ては、自ら或る道の存するものがある。今日國を國際間の交渉の繁劇なる境に置く以上は、孤立自給の經濟生活の如きは、到底之を營むに堪へない。進んで國際共通の經濟生活に入らなければならないのである。此際に當り、輸出入貿易を通じて、一國と外國との間に、經濟上の關係を生ずることを常とするが、一方に其輸出入貿易たる、常に均衡を保つを得るものではない、國が新開國の狀態を脫して、次第に多くの人口を吸引し、彼等に充分なる衣食を供へようとする以上は、必ず外國から食料品原料品の新を輸入せざる可からざるに至るであらう。而して一方に製造工藝品の輸出に依つて、盡く之を決濟するを得ざる場合には、其差額は何を以つて之を決濟す可きであらうか。一國が製造工業國と資本輸出國とを相兼ねるの必要は茲に存するのであつて、共資本輸出國たる特色に基き、海外に資本を貸付け、或は海外に資本を運用し、前者からは利子を、後者からは利潤を回收することに依つて、對外債權を獲得し、之を以つて輸入超過を決濟する方便に充てたならば、如何に輸入超過の金額が增加した所で、何等經濟社會の安定を脅かすの虞れなきのみならず、却つて國民の既往に於ける勞働に依つて、蓄積された資本の利子や、利潤を通じて、最も安易低廉なる條件の下に、外國の物資を內國に供給せしめる所以と爲るのである。而して更に一國經濟の據つて立つ基礎をして鞏固のものたらしめんとする以上は、對外債權の收入と輸入超過額とを比較して、前者が常に後者を凌駕し、前者を以つて、後者を決濟した上に、尙ほ若干の餘裕があり、此餘裕を新に對外放資に充てゝ、以つて不知不識の間に對外債權の收入を增加せしめることが必要とする。是れが一國の經濟生活を最も安全なる地位に置き、又國民をして最も豐滿なる狀態に於て、生活を營ましめる所以であつて、此一事を除いて、到底經濟生活の發達は之を望むを得ないのである。

或は從來我國が資本輸出國たるに就ては、資本の供給の餘りに貧乏であつたことが指摘されるかも知れない。然も大正五年から數年間に亘つて、我國が輸出超過國であつて、同時に國際貸借上に於て債權國であつたことは、我國をして資本輸出國たらしめる絕好の機會であつたのである。然も此好機に處して、當局者の爲した所は必ずしも事の宜しきを得ず、却つて支那に回收不能の債權を殘して、今日尙ほ其處置に窮するの概きである。既に國際貸借上の關係に於て、債權收入の確乎たる項目を

存しない以上は、一度び貿易に平衡を失して、其逆勢を告げれば、之に對する決濟の道を得ざるに至ることは、當然の數である。斯の如くして輸出超過の繼續するときには、聊か意を安んじて、經濟社會の繁榮亦之を期するを得るが、之に反して輸入超過の形勢に一轉すれば、國を擧げて、之に恐怖する。然も輸入超過の結果として、金融の梗塞、對外支拂の不安、爲替の逆調、物價の低落相次いで起り、之に對抗する爲めに、如何に不利なる條件をも忍んで、外債募集の擧に出でなければならないものとすれば、輸入超過の恐る可く、憂う可きことに根據ありとするを得るであらう。而して輸出超過の時代と輸入超過の時代とは、經濟的循環期の進行と共に、三四年ならずして、往來するものである以上は、其度毎に我國の經濟社會は危險に際會する、而して此危機に應ずる爲めに、外に於ては高利の外債を募集して、後年の負擔を重くし、內に於ては商工業を攪亂し、其發展を挫折するものとすれば、此位我國に取つて、不利の大なるものはないのである。

茲に於てか問題は二つに分れる。第一は如何にして我國をして資本輸出國たらしめ、又國際貸借上に於ける債權國たらしめて、以つて經濟社會永遠の安定を得るかと云ふことであり、第二は震災後の變動に依つて、殺到し來つた經濟上の困難に當るには如何なる方法を以つてす可きかと云ふことである。第一問に關する議論は姑く之を後日に讓る。第二に對する解答は極めて、簡單である。試に之を列記すれば、

第一、財政に緊縮を加へて、經濟を節約すること

第二、公債財源の事業費を普通財源に移して、公債募集を廢止し、財政を以つて、金融市場を壓迫する弊を絕つこと

第三、復興復舊に要する事業費も第一の工風に依つて生じた剩餘金を以つて、其財源に充てる方針を取り、公債財源の所要額を減縮すること

第四、隨つて今後對外支拂の必要已むを得ざるものを除き、外債の募集を愼み、外國物資の輸入額も復興事業の調節に依つて、勉めて之を削減すること

第五、財政上苟も積極政策に類する方針は之を回避し、物價の調節、通貨の收縮に意を致し、經濟社會を健全ならしめること

第六、民間の經濟的復興を援助し、貿易の平衡を得るに努力すること

第七、金融市場の安定を求めて、銀行の活動に資すると共に復興事業に對する金融に就ては、政府に於て特別の保護を與へること

の諸方策が主張される。斯の如くして當面に殺到する經濟的危機を脱すると共に、經濟社會永遠の安定を求める方策を立てることが焦眉の急であつて、我國今日の經濟的經綸の眼目とす可き所である。

# 生活美化論

本間久雄

## 一

生活するといふことは、この世において稀有のことである。大抵の人は生存してゐる。そしてそれがすべてゞある。

これは、矯激な文學者として、その名を馳せたオスカア・ワイルドの言葉であるが、實際この言葉には、掩ふことの出來ない眞理が含まれてゐる。

大抵の人は生きてゐる。滅多に飢え死することはない。しかし、たゞ生きてゐるといふことだけで、その生き方は、鳥や獸が、たゞ生きてゐるから、生きてゐるといふのと異ならない。生きてゐるといふことの意義を自覺し、生きてゐるといふことの悦びを享受するのでなければ本當に、生きてゐるとは云へない。それはたゞワイルドの所謂生存（イキジスト）することであつて生活（リーブ）することではない。

しかし、この世における事實は、不幸にして、吾々が、生活するといふことよりも、より多く生存するといふことに過ぎない生き方をしてゐるといふことを、あらゆる方面で證據立てゝゐる。これは云ふまでもなく悲しむべきことである。

そして、この悲しむべき事實は、人類の進展を信じなかつたり、人類の向上を希望しなかつたりする人間でない限りは、單に悲しむべき事實として、このまゝに、成りゆきに委せて置けるのでないことは云ふまでもない。尤も、單なる唯物史觀から云ふならば、生存と生活との區別は、物質的なある種の條件

で撤廢し得るものであるかも知れない。しかし、生きてゐるといふことの自覺や、生きてゐるといふことの悅びは、決して單なる物質的條件だけでは解決されるものではない。無論ある種の、又ある程度の物質的條件が必要ではある。しかしさういふ物質的條件以外に、生活を享樂し、生活感を鮮かにするためにはもつと根本的なある種の條件が必要なのである。

近代の社會改造家の中には、この點に思ひを潛めたものも多々あつた。言葉を換へて云ふと、單に生存に過ぎない生き方を送つてゐる多くの人をして、生活の名に値する生き方をさせようとすることに沈潛した人も、可なりに多かつた。アト・ランドムに名前を擧げただけども、ラスキンがさうである。モリスがさうである。カアペンタアがさうである。エレン・ケイがさうである。ロマン・ロオランがさうである。ラッセルがさうである。而も尙此他に、恐らく四五は容易に擧げ得るであらう。

單に生存に過ぎない生き方を生活の名に値する生き方たらしめようとするこれらの人々の主張は、その細部に亘つては、云ふまでもなく、それ〳〵異つてゐる。しかし、その根柢には一つの共通したあるものがある。それは外でもない、吾々の生き方を美的なものとしようとする一點に、主張の焦點を置いてゐることである。言葉を換へて云ふと、單なる生存に過ぎない吾々の實際の生活を、本當の生活たらしめるためには、少くもその一つの條件として、吾々の生活が美しいものとされなければならないといふ一點において、彼等の主張は一致してゐる。從つて、彼等の主張は、これを引きくるめて生活美化の提唱と名づけてもよいであらう。

稿者は以下、これらの人々の主張を解說しながら、近代におけるこの生活美化の提唱の一論を述べようと思ふ。

## 二

生活を美しくするといふことには、二つの意味がある。一つは、普通に解釋されてゐるところで、生活を、生活以外の美の標準に照して、それを美化することである。そして、この場合生活以外の美の標準とは、多くの場合、藝術に具象された美を云ふのであるから、その美の標準に照して、生活を美化するといふことは、結局、生活をして藝術そのものの如くならしめようとすることである。言葉を換へて云ふと、生活をして藝術を模倣させることである。蓋し、この場合の藝術が、生活以外の既成藝術であることは云ふまでもない。「生活は藝術を模倣すべし」と主張した所謂唯美主義運動の如きは、最もよく、この意味においての生活美化の思想を代表する。

生活を美しくしようとする今一つの意味は、美の標準を生活以外に求めないで、それを生活といふもの〻中に求めようとすることである。言葉を換へて云ふと生活そのものを美とし、藝術としようとすることである。生活の藝術（アート・オブ・ライフ）といふことを說いたカーペンターやモリスは、すなはち、この第二の場合における生活美化の思想を代表する。

生活を美しくしようとすることには、上のやうに二つの意味がある。そしてその何れの場合においても、生活の美化が、同時に生活の藝術化であることは、云ふまでもない。

生活の美化又は生活の藝術化といふことについての、上に述べた二つの意味の中で、さて、吾々はその何れを採るべきであるか。

それは、云ふまでもなく、第二の意味におけるそれである。第一の意味における生活の美化といふことは、その美の標準が生活以外の既成藝術にあるのだから、その既成藝術にして、十分に價値のあるものである場合はとにかく、それを模倣するといふことは、多くの場合、徒らに吾々自身の生活を既成美の觀念の中に閉ぢ込めることによつて、率いて吾々自身を硬化させる結果に終ることが多い。これに反して、第二の意味におけるそれは、生活そのものを藝術とすることであるから、生活以外に美の標準を求めるには及ばない。從つて既成藝術に囚はれる必要もない。飽くまでも生活そのものと始終することが出來る。上に擧げたラスキン以下もろ〱の思想家の生活美化の提唱も、この第二の意味におけるそれである點においてこそ、始めて、現代においての最も重要な思想問題であり、又一種の社會問題であり得るのである。

さて、この第二の意味における生活の美化とは、更に委しく云つてどういふことであるか。いかにして生活を美化するか、又、美化することによつて果してどういふ効果が齎らされるか。その効果の個人的意義はどうであるか、その社會的意義はどうであるか。

先づ、生活の美化とは、更に委しく云つてどういふことであるか。言葉を換へて云ふと、生活を藝術とするとにどういふことであるか。このことから述べよう。それには、差當り「生活の藝術」を說いたカアペンタアの主張を見るのが、今の場合も便利である。

さて、生活を藝術とするといふことは、その生活者が、直ちに藝術家となるといふことであつて、藝術を既成藝術に限ることの出來ないのは、云ふまでもなく、藝術家といふものを、在來の觀念に從つて、決して畫家とか彫刻家とか詩人とかいふも

のに限るべきではない。すべての人が、ある條件によつて、藝術家であり、又あり得るものでなければならぬ。

かういふ考へから出發したカアペンタアは次のやうに說いてゐる。

「すべての人間は、すべての動物や、すべての植物と同じく、それ自らの發展の法則を持つてゐる。從つて、又それ自らの表現は、それに取つて一種の喜びであらねばならぬ。ある樹は橘の果を結び、ある樹は薔薇の花を保つ。すべて健全な樹はその仕事において喜びを持つことは明かなことである。そしてこれはたゞ〱それの自由的であり創造的である時だけである。その本性に從つて花をつけ、實を結ぶときだけである。そして人間も正に、かくの如くでなければならない、そして人間か、かやうに、それ自らの發展の法則に從つて、それ自らの表現を贏ち得た時こそ、彼れは始めて藝術家である。」

「藝術家とは、ひろい意味で云へば、樹木や動物と同じく、たゞ〱創造的衝動に從つて自然に健全に働いてゐる人の謂である。この種の藝術家は實に幸福である。藝術家といふ名を單に畫家文學者、音樂家などに限るのは愚かしいことである。蓋し、藝術の中の最大なるものは「生活の藝術」である。たとへば、こゝに洗濯女があるとせよ。彼女が、もしも、自分のしてゐる仕事に誇りと興味とを感じて、それから得る利益を度外視して出來るだけその仕事を完全にしようとするならば、彼女は、彼女の仕事において立派な藝術家である。單に展覽會に出品するために繪を畫く人よりも更に〱に立派な藝術家である」と。

すなはち、その人が、「それ自らの發展の法則」を實現して、すなはち、その人の創造的衝動に從つて、その人獨自の本具的な特質なり個性なりを發揮することが出來れば、その人の生活は、たゞちに藝術であり、その人はとりも直さず藝術家であるといふのである。言葉を換へて云へば、すなはち、生活の藝術化又は生活美化の根本條件の第一は、その人本具の創造的衝動の充足又は實現にあるといふのである。

## 三

創造的衝動の發揮が、吾々の生活をいかに美しいものとするかといふこと、或ひは藝術的なものとするかといふことは、近代において、始めて說き出されたことでは無論なかつた。しかし近代においてこのことが特に力說高調されざるを得なかつたのは、近代の社會は、殊更に、各個人をしてその創造的衝動を發揮し得ない狀態に置いてゐるからである。實際、近代の社會は、吾々の多くに取つて、吾々の中に潛んでゐる「それ自らの發展の

法則」を、始めから踏み躙つて了つてゐる。従つて吾々は、その法則を實現することによつて、吾々自身の稟性や氣質やらを思ふさま生かし、伸すといふことは、殆んど不可能な狀態に置かれてある。そして又、今日の吾々の生活――勞働生活の慘めさのすべては、實に、こゝに胚胎するのである。

（論の内容を一層適確にするため、稿者は、これまで用ゐた「生活」といふ言葉を勞働生活といふ言葉と書き改めることにしよう。少くもさういふ意味に用ゐてゐるといふことを斷つて置かう。といふのは、勞働は、――勞働の種類は問ふところではない。――吾々の生活の主要部分だからである。そして勞働を主要部分としない階級――さういふ特殊階級もこの世には無論あるが――さういふ階級の生活については、以下述べることは餘りに沒交渉であるからである。）

改めて云ふまでもなく、その人の中のそれ自らの發展の法則が、何物にも阻止されず、自由に、潑溂と、それ自らで伸びひろがるときには、そこに生長の快樂、創造の幸福が自らに醸し出される。吾々の勞働生活においても、この生長の快樂と創造の幸福とが、そこに伴ふ場合には、その勞働は單なる勞働以上のもの、すなはち、カアペンタアの所謂生活の藝術となるのである。ウィリアム・モリスは「藝術とは、吾々の勞働の中に醸される快樂の表現である」と云つたが、實際さうである。近代機械の勞働には、快樂がないから、從つてその表現であるべき筈の藝術はそこにあり得ない。すでに、そこには快樂がなく從つて又藝術がないから、そこにあるものはただ單なる勞働の苦痛のみである。苦痛の表現としての生活又は勞働――それは實に單なる生存であつて、斷じてその名に値する生活ではない。慘めでなからうとしても、不可能なことではないか。

さて、それならば、何故に、吾々の勞働に快樂があり得ないか。言葉を換へて云ふと　何故に、吾々は、吾々の勞働の中に吾々の創造的衝動を、十分に生し　伸すことが出來ないか。

この問題の考究に這入る前に、今日の勞働の分野がそれに從事する人間が、その創造的衝動を發揮し得ないために、いかに慘めな狀態に置かれてあるかを、カアペンタアの詩人的の記述に從つて、今一應吾々は考へて見よう。

カアペンタアはその『工業的自由の方へ』の中で、現代における勞働生活の慘めさについての自分の見たまゝの記を書いてゐる。

いつか、私は、汽車に乘つてある海岸を通過したことがある。それは春の日であつた。太陽はまばゆく輝いてゐた。私の眼の前には一つの野原が展けてゐた。一人の人間がその野原を

耕してゐた。野原のさきは海であつた，それはまことに美しい景色であつた。羊毛のやうな雲の漂つてゐる高い空、泡立つ浪をたゝへてゐる青黒い海、鳶色に輝いてゐる野原、海邊に飛び交ふ海鷗、丈夫さうな耕作馬、私の眼に觸れたすべてのものは生命と希望とに充ちてゐた。而も飜つてそこに耕してゐた人間を見ると、どうであつたか。――その二人はぼろ〳〵になつた着物を着て、貧に窶れ、みすぼらしい身體をして、いかにも疲れ切つたといふ樣子をしてゐるではないか。つまり彼等二人の人間は一見して周圍の美しさとは不調和なものであつた。これは何のためであらうか？

カアペンタアは、上のやうな詩的な觀察で、自然の美しさと人間のみすぼらしさとを對照した後に、轉じて工場勞働の慘めさを說いてゐる。彼れによると工場勞働は、田園の勞働に比して一層慘めである。工場內には黃ろい長屋がいくつもつゞいてゐる。そしてその中には、窒息するやうな空氣を吸ひながら、機械のひゞきや、さま〴〵の騷きの中に、黃ろい顏の老若男女が一ぱいになつてゐる。人生の美と喜びとを、どうしてこの中に求めることが出來やうか。彼れはかういふ慘めな事實を說明しようとして次のやうに云つてゐる。

私は嘗つてグラスゴウに近い或る工場の傍の橋の上に立つてゐた。それは晝のさ中で、丁度晝飯時であつたので、その工場からぞろ〳〵職工が出て來た。人間の潮（うしほ）――とも云ふべく、一萬人の男女が山崩（なだれ）を打つやうに、その橋の上を急いで去つた。私はその橋の上の或る隅に佇んで、彼等の顏を見守つた。私は工場に這入る必要はなかつた。といふのは、彼等を見ただけでその工場內の如何なるものであるかは十分推測することが出來るからである。彼等は何れも疲れた顏をしてゐた。どんよりした眼をしてゐた。單調な表情をしてゐた。濁つた皮膚の色をしてゐた。瘦せこけた體格をしてゐた　性欲的な外貌をしてゐた。實際私は非常に壓迫されるやうな感情を抱いてそこを去つた。

カアペンタアは、次に坑夫の慘めさを描いてゐる。

私は子供のとき――今から五十年前――ブライトンに住んでゐた。そして北イギリスの鑛山の坑夫の話を聞くのを常としてゐた。蓋し、その鑛山から出る石炭を吾々が日常用ゐてゐた私は子供心に、吾々の日常欠くことの出來ない石炭を得るために炭坑の中で危險を侵し、生命を賭して過度の勞働に從事してゐる坑夫なるものは、何れも偉大な體格を備へた、丈夫な、そして國民からは尊敬されてゐる男である――實際さうでなければならない――と想像してゐた。しかるに幸か不幸か、近年、私は、北東ダービシャーの石炭坑の數哩のところに住むことゝな

つたゝめに、この地方の坑夫の生活の如何なるものであるかを知ることが出來た。時々、私は遠方の炭坑から歸つて來る彼等をチェスタアフィールドの停車場で見たが、その第一印象は、今でもはつきりと覺えてゐる。私の子供らしい想像が描いた美しい偉丈夫の代りに、どやどやと混み合つた汽車の中から、あたかも自分自らを恥ぢるやうな、みすぼらしい衣服を着た、一見して欠乏と過勞とを示してゐる瘦せた男どもが、足早にプラットフォームを出て來るのを私は見た。尤もその中にも、肥えた、愉快らしい男もないではなかつたが、それらは例外であつた。而もその後彼等坑夫を知れば知るほど、私のこの第一印象の正しかつたことが明かになつた。而も、かういふ人々は、實際において社會の最も必要な仕事をする人達であるにかゝはらず、彼等の生活は果して何處に生命の閃めきと生命の喜びとを見出し得るであらうか。

カアペンタアは、更に轉じて、勞働者の家庭生活の慘めさに言ひ及んで、彼等の家庭の何處にも、彼等の靈魂を養ひ、その滋養物となる要素を求め得ないこと、彼等の日常生活の單調といふ恐ろしい檻衣(ひつぎころも)から彼等を救ふ何等の刺戟をも彼等の生活から求め得ないことを述べたあとに、次のやうな一挿話を擧げてゐる。

ある小さな田舎の小屋に、一年中單調に生活してゐた夫婦者の手藝勞働者が、ある休日に、二人の子供を連れて、ある海岸の町に出て來た。そしてそこに並び立つてゐる下宿屋の一つに宿を取つた。彼等は、その僅かばかりの荷物を取りかたつけてゐる間に、その二人の子供を、街道を見るために出してやつた。と、暫くしてだしぬけに子供等のけたゝましい叫び聲がきこえた。夫婦者は何事かと驚いて走り出て見た。子供等の身の上には何事もなかつた。たゞ、子供等は絶望の餘り、身を震はして泣いてゐた。それは外でもない。彼等子供等は街道を少し遠くまで行つたゝめに、引きかへして自分の宿を探しても皆一樣の家造りであるために、それが何れであるかわからなくなつたゝめである。それは子供等に取つては本當に恐ろしい悪魔——並び立つてゐる家造りが皆一樣で見わけがつかなかつたために——として一生涯彼等の忘れ得ないところのものであらう。

カアペンタアは、上のやうに、さまざまな實例を擧げたのちに、要するに現代の勞働階級には、彼等に、人間として生活する上に最も必要な重大事——健康と喜悦と愛と美と——が欠けてゐるといふことを數言論じてゐる。

## 四

勞働階級の人々の生活の、生活といふには餘りにも慘めであり、みすぼらしくて、到底それは單なる生存に過ぎないといふことは、カアペンタアの記述を待たないでも、恐らく容易に吾々の承認し得るところであらう。しかし、さういふ慘めと、みすぼらしさとが、言葉を換へて云ふと、健康と喜悅と愛と美との欠乏が、どこから來るかといふ問題を更に尋ね上つて、それが、前にも述べた通り、創造的衝動の發揮されないところに原因するといつたところにカアペンタアのカアペンタアらしい、詩人的、哲學者的解釋のあることを見落してはならない。

この點を、現代においてカアペンタアと並んで、最も多く力說してゐるのはバアトランド・ラッセルである。

ラッセルは、その政治的理想其の他の著書の中で、人間の衝動を所有衝動と創造的衝動の二つに分けて、人間としての最善の生活は、所有衝動が最少の活動をなし創造的衝動が最大の活動を爲すところにあるといふことを說いてゐる。

所有衝動は私有財產制の基礎であり、又、自己の必要以上の富を蓄積しようとする欲望の基礎である。近代社會の資本主義、商業主義は、云ふまでもなくこの基礎の上に築かれたものである。創造的衝動を基礎とした仕事なり運動なりが、近代において、殆んどその影をひそめざるを得なくなつたのは、全く所有衝動の發露でありその具體化である商業主義、資本主義の跋扈によるのである。言葉を換へて云ふと、近代の勞働生活に、健康と喜悅と愛と美とが欠乏してゐるのは、ラッセルの所謂所有衝動のみが極端、むしろ變態的に發達して、その反對に、創造的衝動が、極端に或ひは變態的に萎縮させられ、抑壓されたといふことによるのである。であるから、吾々の生活をして、その名に値する生活たらしめるためには、吾々の內にある所有衝動が最少限度に活き、創造的衝動が最大限度に活くといふことが先づ何より第一に必要となつて來るのである。

實際、吾々の勞働にして、それが創造的衝動に基いたものであればあるほどその勞働が快適なものとなり、從つてそこにはいよ〳〵益々生活の喜びと幸福とが齎らされる。〃カアペンタアは彼れ自身が親しく知つてゐる一人の小供が、一日、汚い、むさ苦しい工場で十時間も、奴隷のやうに働いて、さて、家にかへると——非常に貧しい家である——茶を飲んで、すぐに地下室の狹い汚ない部屋に飛び込み、うす暗い蠟燭の光りを便りに、貧しい道具で、小さな細工物に取りかゝり、そしてその細工物に從事しつゝある間は、いかにも愉快げに、晝間の苦しい勞働を全く忘れ去るのを常としてゐたといふ一事實によつて、いかに自分の創造的衝動に從つた自發的な仕事が、愉快であり

幸福なものであるかを說明してゐる。

かやうにして、カアペンタアは、あらゆる仕事又は勞働を以て、自己の創造的衝動に從つてなさるべきものであり、又さうすることによつて、すべての人は藝術家であり得もするし、又藝術家でなければならないといふことを說いた。曰く、「すべての人は一種の藝術家でなければならない。そしてその仕事が本當に自己の表現であり自己の解放であることを感ずることによつて、この仕事に快樂を求めなければならない。かくして、この世は喜悅に充ちるのである」と。以上が、卽ちカアペンタアの「生活の藝術」の主張の要點である。

生活そのものを、一種の藝術とすることは、かやうにして、この世を喜悅に充ちさせることである。しかし、不幸にして、近代は生活を藝術とすることとの不可能な時代である。勞働そのもの、生活そのものは、もと／＼そこに勞働者、生活者の創造的衝動を基調とした自己の解放であることによつて、自ら、そこに快樂と幸福感とを伴ふべきものであるにもかゝはらず、近代は、勞働又は生活を、創造的衝動を基礎とすることの不可能な狀態に置くがために、そこから、全然快樂と幸福とを奪ひ去つて了つた。從つて、近代に於いては勞働の概念、又は業務の概念は共に苦痛である。そして快樂はたゞ業務でない遊戲——生活又は勞働遊離の狀態にのみ求められるといふ考へ方が一方に現はれるやうにさへなつた。哲學者サンタヤーナの業務苦痛說の如きはその一つであらう。であるから、サンタヤーナは、人生から業務を次第に少くして遊戲を次第に多くするのは、同時に人生から苦痛を少くしてそこに、快樂を多くする所以であるといふ意味のことを說いてゐる。要するに、勞働と快樂といふものを、全く調和することの出來ないものと考へてゐるのである。

生活の美化を說く思想家たちは、勞働と快樂とについてのかういふ二元的見方を斥けてその調和を說く。すなはち勞働の中に快樂と幸福とを求めやうとする。更に言葉を換へて云ふと勞働の快樂化である。エレン・ケイの「更新的敎養」の主張や、ウィリアム・モリスの「民衆藝術」についての主張やらは、その立論の樣式こそ異なれ、何れもこの勞働の快樂化の一點に力點を置いたものであることは爭はれない。

エレン・ケイが熱心に唱へた更新的敎養といふのは、現代の勞働生活に力と淸新さとを與へるための敎化運動であつた。すなはち、彼らに勞働のみが重荷となつてゐて、而もそこに何等の慰藉もないといふ現代の勞働生活に、再び新しい力と勇氣と淸新さとを與へようとする運動であつた。そのためにケイは、

人間の快樂の中から、生産的快樂——再びその仕事に勇氣と力とを以て從事し得る原動力となる快樂を選擇して、その反對に非生產的快樂——それに耽けることによつて徒らに心身の疲勞と困憊とを齎らすやうな種類の快樂を拒絕しようとした。言葉を換へて云ふと、精力の消費と供給との釣合を取ることによつて、日每の生活や日每の勞働を常に力に充ちたもの、常に淸新の氣に充ちたものとしようとしたのである。そして同時に、勞働をして、單に苦痛の表象としてゞはなく、生活意志の表象、生活享樂の表象としようとしたのである。こゝにエレン・ケイの生活美化論の中心がある。

## 五

近代の生活美化の提唱は、亦ウィリアム・モリスにおいて、とりわけ、鮮かな旗印を見ることが出來る。

モリスはその有名な論文『有用の仕事對無用の勞苦』を次のやうに書き出してゐる。

今日では大抵の人が、すべて仕事は有用なものだときめてゐる。また大抵の有福な人はすべて仕事は望ましいものだときめてゐる。又、有福なると否とを問はず、大抵の人々は、一見無用な仕事でも、これをやつてゐれば、それで自分の生計の資を得てゐると思つてゐる。そして、大抵の有福な人たちは、もし勞働者が「勤勉」であるあまりに、すべての快樂を打忘れ、また神聖なる勞働の目的のためにあらゆる休息を打すてゝ滿足してゐさへすれば、結構なことだと襃めそやす。つまり、すべて勞働は、それ自身において善なりといふのが近世道德の信條の一項となつてゐるのだ。他人の勞働を喰つて生きてゆく連中には、御都合のいゝ信念ではある。しかし、彼等に喰はれる人々としては、そんなことを鵜呑みにしてはいけない。今少し事柄を洞察しなければならない。

かういふ立場から、彼れは、勞働問題の根本について思ひをめぐらしてゐる。

まづ、人間といふものは勞働するか、それがいやなら死ぬかどちらかだとしておかう。自然は決して吾々の生活の資を無料では與へない。何等かの種類又は何等かの程度の勞苦によつて、吾々はそれを得なければならない。次に自然は、かやうに吾々を勞働に强ひておいて、果して何の報償をも與へないものかどうかを考へて見よう。

モリスは更につゞける。

自然は報償を與へる。人間自然の本性として、もしその人が病氣でない限り、或る條件の下においては、その仕事に喜びを

爲するといふのが、自然の與へる報償の第一である。しかし、いかなる勞働でも、すべて勞働は、結構だといふやうな僞善的な賞讃にかゝはらず、私は敢て云ふ。そこには福祉であるどころか、咒ひですらあるといふほどの勞働もあるのだと。もし、勞働者だちが、死んでもいゝから、或ひはまた工場か獄舍か、どちらでもいゝ、そこに閉ぢ込められて了つてもいゝから、とにかく手を束ねて働くことを拒むならば、社會に取つても、勞働者、自身に取つても、却つていゝといふやうな、さういふ仕事もあると。

又曰く、

して見れば、仕事には二種類あることがわかる。すなはち一は善であり、他は惡である。一は人生の祝福であり、光明であり、他は單に人生の咒ひであり、重荷である。

モリスは、かやうにして、勞働に二つの種類のあることをはつきりと說いてゐる。それならば、祝福であり光明である勞働と咒ひであり重荷である勞働との差異はどこにあるか。それは外でもない。一はその內に希望を持つて居るに反して、他はこれを持つてゐないところにある。

それならば、この內にある希望とはどういふ希望であるか、どういふ特質を持つた希望であるか。

モリスは、轉じて、この問題を論じてゐる。曰く、その希望とは、休息の希望と、生產の希望と、仕事それ自らにおける快樂の希望とであると。そして、これらの希望が相當に豐富で、且つ善良な性質の希望でなくてはならない。休息もその甲斐のあるだけに、十分にいゝ休息でなければならない。生產も、馬鹿か禁欲者でない限り、持ち甲斐のある生產でなければならない。快樂とても、仕事をしてゐる間、十分に意識されるやうな快樂でなくてはならない。手持無沙汰に感じてゐる人が、手に糸屑を弄んでゐるやうな風で、それを失くしても、たいしたことでないやうな、單なる惰性的の快樂でなければならない。とモリスは附け加へてゐる。そして尙、以上のことを更に大體次のやうに說明してゐる。

休息の希望は、一番單純で又最も自然な希望だ。これがなくつては、吾々の精力が徒らに疲弊し困憊して了ふだけだ。だから、吾々が、その休息に就いたとき、十分それを安樂出來るだけの長きものでなくてはならない。仕事の間に費した精力を恢復するに必要なだけでは足りない。それ以上更に新しい力を湧き立たせるだけの長いものでなければならない。

生產の希望とは、どういふものを吾々が生產しつゝあるかといふことに對する希望である。前にも一言した通り、生產の

めに働くことを自然は吾々に強要する。そこで、吾々に取つて殘るところは、眞に何物かを生産するやうに氣をつけることだ。眞に何物かであつて、何物でもないものを生産するのではない。少くも吾々の必要としないものや、用ゐてゐないものを生産するのではない。といふやうな風に、氣をつけて、吾々の意志を活かせなければならない。

仕事それ自身における喜びの希望――これが又、最も大切だ。およそ、生きとし生けるものは、自分の精力を働かせることに喜びがあるものだ。野獸と雖も、輕快に敏捷に强力であることを喜ぶのが自然だ。實際「人間は、自分の仕事であるから、又自分の意志に從つてする仕事であるから、その仕事が存續するのだと感ずるやうな仕事をしてゐる人は、誰でも、自分の身體の精力ばかりでなく、心と魂の精力をも活かせてゐるのだ。記憶と想像とは、仕事に當つて、かやうな人を助ける。その人自身の思想ばかりでなく、過去時代の人々の思想が、かういふ人の手を導く。かくて人類の一部として、その人は創造するのだ。吾々の仕事が、かういふ風ならば、吾々はその名に値する人間となり、吾々の日々は幸福なものとなる。」

モリスは、勞働の中にある希望を上のやうに解說してゐる。こゝで、特に興味のあるのは第二の生産の希望と、第三の、仕事それ自身における喜びの希望である。しかし第二の、この産の希望も、結局は第三の仕事それ自身における喜びの希望を根柢として始めて可能である。といふのは、仕事それ自身における喜びの希望は、自分の意志に從つてなれる仕事といふ自覺に基いたものであり、そしてこの自覺なしには、生産するに値する仕事を選ぶといふやうなことも到底あり得ないからである。であるから、上の三つの希望の中では、特に第三の希望――仕事それ自身における喜びの希望といふ一點に、最も力點を附さるべきものであることは疑ひを入れない。

かやうに見て來るとき、モリスの主張が、いかにカアペンタアの主張と似てゐるか。仕事それ自身における喜びの希望といふことが、いかに創造的衝動を基礎とした勞働といふことと同じであるか。といふことは改めて云ふにも及ばないことであらう。

## 六

さて、上のやうに考へて來て、勞働を快樂化することが生活をその名に値する生活とすること、すなはち「生活の藝術」を實現して生活を藝術化し、生活を美化することであるとすると、そこから生ずる人生的効果は何であるか。

カアペンタア謂へらく、勞働の快樂化から齎らされる利益は二重である。一つは勞働者自身の自己表現、自己解放に伴つて生ずる勞働者自身の快樂である。言葉を換へて云ふと、創造の喜びである。他の一つは、かういふ創造の喜びから造られたものゝ價値である。すなはち曰く、「製造されて市場又は店頭で賣られ、交換される物品が、喜びの中に造られ、そしてこの物品の下に、その物品の製造者の精神が吸ひ込まれてゐる場合には、その同じ精神は、その物品の購買者、使用者にも反映する。あたかも、日時計を輝かしい色彩で彩つて、一日、太陽に曝して置くと、夜になつて、その面の上に同じやうな奇怪な輝きを反映すると同じである」と。

すなはち言葉を換へて云ふと、勞働の快樂化によつて、その勞働者自身が創造の喜びを享受すると共に、その勞働の結果たる產物を使用するものも亦その創造の喜びを分ち與へられることとなるといふのである。かくして、その物品の製作者にも、それの使用者にも、同樣に幸福な世界がそこに現出することゝなるのである。こゝに勞働の快樂化又は生活美化の社會的意義がある。ウィリアム・モリスが、民衆の藝術を以て「民衆によつて、民衆のために造られ、その製作者にも、その使用者にも共に幸福である藝術」と云つたのも、結局おなじ意味に外ならない。

さて、それならば、吾々は、いかにして勞働の中に快樂を求むべきであるか。言葉を換へて云ふと、いかにして此生活を藝術化し、生活を美化すべきであるか。勞働の快樂化、生活の美化といふことの條件はすでに述べた通りであるが、その條件――吾々の内にある所有衝動をして、最少限度の活動をさせ、吾々の創造的衝動をして最大限度の活動をさせること、即ち一言すれば、吾々の創造的衝動を自由に、生かし、伸すといふその條件を實現するためには、どうすればよいか。問題は、自らこゝに轉換して來る。

それは外でもない。所有衝動の大がゝりの發露であり、具體化である近代商業主義の跋扈を滅絶することによつて、各個人をして創造的衝動の自由な伸展を可能ならしめるやうな社會をつくることである。

近代商業主義(コンマーシャリズム)の滅絶――モリスもカアペンタアも、無論その思想の破邪的方面の基調をこゝに置いてゐる。そして、こゝを基調として、勞働を快樂化するために、現時の勞働生活の弊害を指摘し、その狀態の改造を彼等は叫んでゐる。

重ねて云ふが、近代の勞働生活に釀される根本的な弊害は、前にも一言した通り、商業主義の跋扈である。資本主義の横

である。商業主義、資本主義は、人間の所有本能を極端に發揮させて、誤られた意味の「富」の蓄積を、これ力めさせる。その結果は、人間の勞働とそのものが、商品と同じく賣買され、勞働を買ふ者――資本階級は、自分は何等の勞働をもしないで他人の勞働を買ひ、勞働を賣る者――勞働階級は、自己の勞働をそれを賣る必要上、それを自分の意志に從つてするといふことが出來なくなつて、たゞ〳〵買手たる他人――資本家の意志に從つてそれをするに止まる。從つて勞働に從事するこの階級は、モリスの云ふやうに「彼れの生活の興味が、その勞働の中心から遊離され、彼れの仕事が單なる一個の勞役――他人の意志の下に活計を得るといふ單なる機械に過ぎないところの、何等の意志を持たない一個の人間」たるに外ならない。すなはちその勞役は單なる生活のための勞役であつて、勞役のための生活であるといふ純然たる奴隷の境遇である。

而も、かういふ奴隷狀態は、單に勞働に從ふ者ばかりではなく、その勞働の結果を使用し購買する者においても同じである。といふのはモリスの云ふやうに、近代の商業主義は、善良な賣買才能を持つた購買者たちを市場(マーケット)の奴隷に變へて了つたからである。"人間のための市場ではなく、市場のための人間といふのが近代商業主義の標語だからである。かくして勞働の當事者に取つても、その結果の共受者に取つても共に大なる精浪費である。

さて、かやうな狀態を改める第一のことは何であるか。モリスは云ふ。それは、勞働の當事者が、眞に有用である仕事でなければしないといふ覺悟を持つことである。有用である仕事とは何であるか。更にモリスは云ふ。

それは外でもない、自分の必要と共に鄰人の必要を充たすといふ仕事である。近代は、この勞働の當事者の必要と、その結果を共受する使用者との必要が異つてゐる。こゝでは、便宜上暫く、勞働の分野を、日常品の製作といふ點に置いて考へようならば、製作者の方では、大抵の場合、自分たちには何の必要をも感ぜられず、又、認められない日常品のために營々として勞役する。使用者の方でも、自分の使用する品物が、いかにして製られるかを少しも知らずに使用してゐる。從つて使用者と製作者との間には、それを使用する上にも製作する上にも何等の同感もあり得ない。それではならない。使用者と製作者とは、時にその勞働の役目を取換へてもよい間柄でなくてはならぬ。例へば、こゝに一人の木匠があつて、ある日、金匠に大きな箱を造つてやり、金匠はまたの日、木匠にコップを造つてやるとする。と、二人の仕事には同感がある。すなはち、木匠は、も

し自分に大箱が入用だつたら自分も亦それと、そつくり同じやうな大箱を、その友人の金匠のために造つてやるのであり、又、一方、金匠のコップも、正に、彼れが必要とした折には、自身使用のために造らうと思つてゐるところのものである。すなはち、相互の間には、お互ひに造つてゐる品物は、自分自身と同じ必要を感じてゐる人間に使用されるのだといふ自覺がある。さういふ自覺の伴つた仕事こそ、とりも直さず有用な仕事である。

モリスは又、別な言葉で、この有用な仕事を説明してゐる。曰く「吾々は生活の美的部分を——その快樂を、即ち肉體的及び精神的の、科學的及び藝術的の、社會的及び個人的の快樂を——心から喜んでする仕事を基礎とし、自己及び鄰人をそれによつて利することが出來るといふ自覺」が肝要であると。これによつても、その有用な仕事の意義が明かであらう。

## 七

有用な仕事といふことの第一の特長は、既に前にも述べた通り、それが勞働の當事者である自己及び、鄰人に取つての必要といふことである。この必要を離れては有用であることの意義はない。自己と鄰人との必要を度外視した勞働は、商業主義の命令に從つた勞働である。その勞働から産出される物品は遊惰階級のための單なる贅澤品であるか、或ひはたゞ單に市場のための粗悪脆弱な醜くい物品であるかの何れかである。それをつくる製作者の生活とはそれは何等の必然的關係がない。從つてその勞働は何等の創造的快樂を伴はない單なる勞役である。

さて、上に述べた有用な仕事を、一層やりよくするためには、いかにすべきか。モリスは、この具體的な問題について二三の條件を擧げてゐる。その一つは、仕事に變化を與へて、仕事の單調を破ることとである。

謂へらく、人を強制して、毎日、おなじ仕事をさせ、而も、これを免れることの出來るとか、變化があるとかいふ見込のないやうなことでは、その人の生活は牢屋の拷問と變るところがない。これを必要だとするのは商業主義の暴虐に外ならない。およそ一人の人間で、少くとも三つ位の職業は、わけもなく覺えて、實地にやつてゆけるのが當り前だ。その中には、室内に坐つてする仕事もあり、戸外に出て、心は勿論、體力をも強く働かせる仕事もあるであらう。たとへば、吾々の生活の一部分を、あらゆる仕事の中で最も必要で、最も愉快な仕事——地を耕すこと——の中に過ごすことを好まないやうなものは恐らくないであらう。だから仕事に變化を與へて單調を破るのは決し

て不可能ではない。

次に有用な仕事を一層やりよくする今一つの條件は、勞働生活の環境の改造である。

環境の改造とは外でもない。勞働生活の環境を樂しいものとすることだ。モリス曰く、吾々文明人は慘めなことや、穢ならしいことを、勞働生活には必然のものとして平氣で我慢してゐるが、丁度金持の個人の家にそれ相當に穢らしいものがあるのと同じで、一般社會にもそれは必然のことゝ思はれてゐる。もし、お金持が、客間に一杯に石炭などの燃滓をぶちまけて置いて、平氣でゐたり、食堂の隅々にはゞかりを建てさせたり、背ては美しかつた庭を、いつも埃や屑の山にして置いたり、床布(シーツ)を洗はなかつたり、卓子掛を掛取かいなかつたり、家族のものを五人位一つ床の中で寝させたりしたら、彼れは、たしかに發狂者處分命令許のなすがまゝにならざるを得ないであらう。しかし、さういふ愚かしい、慘めなことを、現在、吾々の社會は當然のことゝして、毎日平氣でやつてゐるが、これは立派に氣狂ひでなくて何であらうかと。

現在の勞働生活の環境を、上のやうに半ば揶揄しながら、轉じて、工場勞働の狀態に及び、彼等工場勞働者が、現在のやうに決して狹苦しい市中の陋巷に豚のやうに押込められてはならないこと、もつと住み心地のよいところに置かれなければならないこと、工場は、そこに働く人に取つては、少くとも充實した、溫い社交生活の機會であり、知的活動の中心であり、自己の家庭と同じく慰樂の源泉でなければならないといふことを、モリスは痛論してゐる。そして、このことを、實現するために彼れは自らマアトン・アベーの工場を經營して、樂しい環境と變化のある仕事とによつて、吾々の日常生活に最も有用な物品――家具調度その他の工藝美術品の製作に一身を捧げたのであつた。

さて稿者は、勞働の快樂化、生活の美化といふことについての思想的根據ともいふべきものは、如上ほゞこれを論じた。すなはち生活をして、單なる生存ではなく、本當にその名に値する生活たらしめるためには、日毎の勞働を快樂化し、かくすることによつて、「生活の藝術」を創り出さなければならないこと、そしてさうすることが、同時に生活を美化する所以であること、そしてその勞働の快樂化、生活の美化が、社會的にどういふ意義を持つてゐるかといふこと、――そして、勞働の快樂化、生活の美化を本當によく實現するためには、今日の勞働生活がどういふ覺悟で、どういふ風に改められなければならないかといふこと、――稿者は如上、それらについての、カアペンタアや

モリスの見解を約說して、近代における生活美化運動の思想的の根據を說いた。しかし、近代の生活美化運動のむしろ重要な一面である實際運動、たとへば、前に擧げたマアトン・アベーの工場は、どういふ組織であつたか、そこでは働く人々にとつてどういふ生活が送られたか。そこではどういふ品物がつくられたか。そしてそれが吾々の生活を美しくし、豐かにするためにどういふ役目を演じたか。といふやうな問題を始め、更に、近代における誤られた商業主義が、いかほど人生の美的方面、生活の藝術的方面を傷け損じつゝあるか。といふやうな問題については、紙數と時間との關係上、つひに、こゝに解說することが出來なかつた。それを解說することなしには、この稿の論旨の徹底されたものでないのは云ふまでもない。いづれこれについては、稿者は更に稿を新たにして述べたいと思つてゐるが、たゞ、この稿を終るについて一言附加したいことは、上來述べた生活美化の思想と、「富」の觀念との關係である。

上來說いたやうな意味で、生活を美くし、豐かにして、生活の名に値する生活たらしめるといふことは、在來の「富」の觀念とは云ふまでもなく非常に相違してゐる。相違してゐるどころか寧ろ相反してゐる。しかし、これからの「富」の意義、――勞働狀態が上來述べたやうになつた時の「富」の意義は、決して上來の生活の美化の思想と矛盾するものではない。モリス曰く「富とは「自然」が吾々に與へるものだ。道理のわかつた人が道理の適つた用途に供するために、自然の賜物の中から造り出すことの出來るものだ。太陽の光、新鮮なる空氣、汚れざる大地の表面、無くてかなはぬだけの品格のある衣食住、あらゆる種類の知識を蓄ふること、そしてそれをまた撒くだけの力、人間相互のこだはりのない融和を得るの途、藝術品、つまり人間が最も人間らしくあり、最も精進的で、最も思想に富んでゐる時に造り出す美――すべて、これらは本然の男らしい健全な人々の喜びのよすがとなる。これが富である」と。

「富」をかういふ意味に解するならば、上來の生活美化の思想は「富」の觀念と矛盾するものでないどころか、むしろ「富」の觀念そのものであると云ひ得る。

この意味から云ふと、生活美化の思想なり運動なりは、とりも直さずこの新しい「富」を人生に創造しようとする思想であり運動である。

# 米國の一般移民制限案と日本人特殊禁止案

法學博士　米田實

## 一

目下米國の立法府に於て、長風紫瀾を捲起しつゝあるものは排日條項を含む外國移民制限法案である。右は昨年十二月から問題となり二月上旬下院委員會にて略其可決を見たが、二月十三日に至り突如外務卿ヒユーズ氏の干渉を惹起し、更に二月下旬上院に於ける別案提出となり、今猶紛糾又紛糾を加へて居る有様である。吾人は歐洲移民制限に關して、さして多くの注意を拂ふものでないが、唯だ今回の移民法案が日本人の渡米に、一大難關を作らんとするにあるを觀ては、聊か研究考慮の必要を思はざるを得ないのである。蓋し今期、議會に於ける同案の運命如何なるにしても、本問題は今後幾年かに亘る同國立法の大問題たらざるを得無いからである。仍つて玆に少しく之に對する所見を述べて見たい。

## 二

吾人が本問題を論議するに當り、公平なる見地よりして先づ第一に指摘しなければならぬのは、北米合衆國の移民政策が近年非常なる變化を見たことである。此變化は日本人に對して特に然りと云ふのではない、歐羅巴各國より來る總ての移民に對して、同様其政策を變改したのである。最近に於ける日本人排斥問題も亦、一部は此一般的移民制限の精神の一發露と觀て差支ない、無論それが總てを説明すると言ふのではないが少くとも半ばは、此移民政策變更の結果に因ると云つて宜からうと思ふ。

然らば米國は從前如何なる移民政策を執り來つたかと云ふに所謂移民歡迎の四字に盡きて居たと云ふは過言ではない。本來米國人の祖先の一部は歐羅巴の宗教的迫害を遁れ、淸く自由なる生活を新しき天地に試みんと欲する。宗教的移民であつた、

所謂新英州に移住せる清教徒（ピューリタン）の如き即ちそれである。又た他の一部は本國たる歐羅巴の經濟的生活に甘んぜず、新大陸に自己の生命を發見せんとて移住し來り、黄金を求め富を得んとする物質主義者も尠くなかつた。彼のサー・ワオーター・ローレーに率ゐられたヴァージニア州を中心とする植民は、即ち之れであると云つて宜い。斯くの如く源泉を移民に發せる米國が愈十三州として獨立したる十八世紀末當時、各國よりの移民歡迎に日も是れ足ら無かつたもの、亦た何の不思議があらう。十九世紀に入つても、此狀態は依然たるものがあつた、米人等は一日も速かに多數の移民者を外國より迎へ、以て物質的發展に資せしめんと熱心したものであつた、殊に當時彼等の頭には移民を以て最も有利なる獲物なりと映してゐた、何となれば移民は出生以來、十七八歳に達するまでの養育並に教育等重要なる負擔は外國に於て總て之が責に任じ、愈有用の年配となり社會の爲め自由に活動し得るやうになると之を米國のものとするからである、換言すれば他人の勞力の結果を米國獨り收得することになるからである、猶此等外國移民が持參し來る若干の現金なども、結局は米國の富力を增さしむるものなりとして歡ばれた、此形勢に乘じて十九世紀の始め頃盛んに入つた移民は彼等の同胞たる英國人であつた、十九世紀半頃になると、獨逸移民が盛んになり、之に續いて南歐及び東歐移民の渡來を見、伊太利露西亞波蘭諸國の移民が、盛に米國に向つたのであつた。茲に於て乎今日一億の米國人口中約三千萬人は、十九世紀に於て渡米したる移民並に其子孫である。今一八二〇年より一九一九年に至る百年間、米國に移住せる外國移民數を數ふれば實に三千三百二十萬百三名と云ふ多數に上るのである。其內蘇格蘭愛蘭を包含せる英國移民は最多數であり八百二十萬人と稱せられてゐる、之に次で獨逸は五百四十九萬四千五百人の移民を出し、其他伊太利は四百十萬人を露西亞は三百三十一萬人を、又スカンデナビヤの丁抹諾威瑞典三國は二百十三萬の移民を送り、佛國は五十二萬三千人を、墺地利及洪牙利帝國は四百六萬八千人を、英領加奈陀は八十三萬を送り、メキシコは二十一萬七千、和蘭は二十一萬四千、希臘は三十五萬二千、瑞西（スイッツランド）は二十五萬六千を、葡萄牙は十五萬九千を送り、其他各國皆數千乃至數萬の移民を米國に送つて居るのである。是等の各國移民が十九世紀に於て如何に歡迎せられたるか、其事實を示す最も好適なる資料としては、米國に於て特に移民船の噸稅を減額したこと、米國法廷が移住費の貸與を以て正當と承認せしことすらあり、南北戰爭當時外國移民に對しては兵役を强ゆることなしと稱し、以て戰爭により移民來住の減少を見ゐな

からんと期したことさへあつたのでも分る。啻に是れのみに止まらず、米國諸州は移民歡迎のために、外國人に盛んに土地所有權を與へたのである。又た殆ど無報酬的若くは形式的代價に於て盛に官有地をさへ下付したのである。就中顯著な外人歡迎の實例は米國各州が、外國移民を自州に迎へんとし或は他の州に奪はれざらんとして互に競爭の結果、外國移民に對し大統領州知事の選擧權さへ與へたことであらうと思ふ。

誰も知る如く米國にては其歸化權は中央政治機關の管轄下に在り之に反して選擧權は各州の法律により各州が適宜に之を制定するのであるが、然も米國の歸化法では、歸化には五ケ年の年限を要するので、諸州は此間に移民招致競爭の機會を發見し自州内に一兩年居住し單に米國市民たるの意思を發表したる外國人に向つて選擧權を附與すると云ふが如き法律をも通過せしめたのである。一例を揭ぐればアラバマ州にては二年間自州内に居住せる外國人に對し、人頭税を支拂へること及び歸化意思を發表したりと云ふ單なる條件の下に、市民と同様の投票權を與へたものである。又アーカンサス州にては唯一年間其州内に居住し、歸化の意思を發表せる外國移民には投票權を與へ、インジアナ州又同一方針に出で、カンサス州に於ては六ケ月居住せるものに投票權を附與してゐた、其他ネブラスカ、ミゾリー、テキサス、ウイスコンシン、南ダコタ州皆同様で、太平洋沿岸に於けるオレゴン州の如きもやはり、州内に六ケ月居住し歸化意思を發表せる外國人には投票權を與へたものであつた。

斯の如く參政權を外國人に與へてまで、移住を奬勵し歡迎した十九世紀の米國は蓋し移民の樂園と評するも、過言で無からう、此時代に於ける米國こそは放遊の民に執りて眞に自由の地であり樂土であつた、然かも、そが永久に斯くの如くなるを得無かつた所に、難問の源泉は存したのである。

## 三

然り、日は回り月は重り二十世紀となると、從前の風は漸く變化し來つたのである、就中世界大戰爭後に於て著く其狀態を異にするに至つたのである、這は如何なる理由に基くか、其一は米國に於ける人口の年と共に增加し、今や從來の如く其富源開發上に外國移民を齎らすを有利とせさるに至つたことである。今人口增加の狀勢を見るに、米國全土の面積、三百二萬六千七百方哩は昔日と異なら無いが、其人口は急速度を以て增加し一八八〇年に、五千十五萬五千七百八十三人を數えたるに對し、十年後の一八九〇年には六千二百六十二萬二千二百五十人に增加し、一九〇〇年には七千五百九十九萬四千人となり、一

九一〇年には九千百九十七萬二千人に增加し、次で一九二〇年即大正九年には一億五百七十一萬六百二十人に激增したのである。今より四十年前の一八八〇年當時に比較すれば、殆ど二倍の人口增加を示してゐる。更に其密度に就て見るに、一八一〇年即今より百十四年前、一平方哩の人口四人、三であつたものが、一八二〇年には五人半となり、一八三〇年には七人、三となつた、然るに近年に至り其密度は漸く加はり、一八九〇年には最早一平方哩人口は二十一人、二となり、一九〇〇年には二十五人、六を數へ、一九一〇年には三十人、九となり、一九二〇年には三十五人、五となつた。斯の如く人口が漸次增加すると曾つて競爭的に歡迎した移民も、今は其必要を減ずること、豈自然ではあるまい乎、然も外國よりの移民は尙續々多數渡米するのである、其結果、米國生れの市民が新發展を見んとし新しく土地を得んとする場合、耕作に適する未開墾地が殆ど失はれて來たのを經驗し始めた、又た外國勞働者の勞働賃銀低廉にして且低級なる生活に甘んずる關係から、米國生れの市民は彼との競爭に於て、勝ち難く自然之が爲め自已の生活程度を低下しなければならぬ苦境に陷つて來た。次ぎに社會的に云へば外國よりの移民は內地人に比較して品行惡い、犯罪の統計其他飲酒衛生などの狀態を見るも、內地人より遙かに劣位にあり、風俗上面白からざる現象が多い。次に政治的に觀察すると、米國は自由の國家として、自由憲法を有し居るに拘らず、歐羅巴其他より來れる移民は民主政治の何たるを解せざるのみか、中には英語さへ了解し得ざるものが多い、斯の如き彼等を多數國內に有することは延いて政治の運用上に各種有害なる現象を招來するだらうと、米國政治家は憂慮の念を高め來つたのである。

以上の諸點から米國人は先づ大體、外國移民の入國を制限し、米國內に於て相當に同化し又は消化し得る程度の數量の外は、悉く拒絶するを以て策の得たるものと考ふるに至つたのである、彼の最近に於ける移民政策は、實に此意見の現はれに外ならぬものである。勿論米國が移民制限策を執つたのは、今日が始めてではない。既に十九世紀後半に於ても幾分その徵候と認むべきものもあつた、併し最初は制限と言ふ程のものでは無かつた、例へば一八七五年に於て醜業者或は罪人等の入國を禁止し、一八八五年には自由を誇る米國として奴隷的意義を含む契約勞働移民の入國禁止を聲明した、其他無政府主義者或は狂人等の移住制限を實行した、併しながら是等は特殊的意味あるものにして、一般的移民制限を意味するものではなかつた、然るに世界大戰爭以後に於ては思ひ切つた一般的移民制限策を講ずることに進んで來た、尤も之には、世界大戰前後獨逸及び其他

の爲したる行動が、大いに與つて力あつたと思はれる、例へば獨逸は一九一三年制定に係る所謂獨逸帝國市民法第二十五條に於て、『獨逸市民にして外國に歸化する際、私かに獨逸の國籍を支持せんと欲するならば、更に此旨豫め適當なる獨逸官憲に屆出でよ、然る時は依然として市民權を持續することができる』との意味を規定したのであつた、此規定は所謂二重國籍を可能ならしめたるもので、最も米國人をして憤慨せしめたのであつた、何となれば獨逸移民を最も多く包容するものが米國であつたからである。加之世界大戰中既に米國に歸化したる獨逸人にして、米國に忠實なるよりは、寧ろ獨逸に忠誠の意を示し、種々の陰謀を試みたる實例が多かつた。是等の事實も米國政治家を刺戟し、是非共各國移民數に制限を加へ、米國が同化し得消化し得る程度を超えざる範圍に止むべしとの感を强からしめた。之が更らに移民に因る社會的政治的經濟的弊害と相俟つて、益々米國をして制限方針に向はしめたのも、何の不思議があらう。

而して此根本的移民制限の思潮を、最も遺憾なく發露したものは何か、一九二一年五月米國議會を通過せる三分入國法則ち是れである。然らば三分入國法とは如何なることかと言ふに、一九一〇年に於ける在米各國民の統計を基本とし、其數の三分以内を以て該國民の一年間入國許可數とした法律であつた、之によれば英國は一年間七萬七千三百四十二人を米國に送ることを得、獨逸は一年間に六萬七千六百七名を、伊太利は同樣四萬二千五十七人を、露西亞は二萬一千六百十四人を、瑞典は二萬四十二人を、波蘭は二萬百七十六人を、諾威は一萬二千二百三人を、チエツクスロヴアキアは一萬四千三百五十七人を、夫々米國に入國せしむることが出來る、而して歐羅巴等各國を合計すると一年間三十五萬七千八百三人は、米國に入國し得ることゝなつたのである。是れ米國に取りては非常な制限策採用であつたと言はねばならない。何となれば米國に於ては久しきに亘り外國より多數の移民を入國せしめてゐたのである。我日露戰爭當時（一九〇四年）に於ける米國への移民數は八十一萬二千人であり、翌一九〇五年即明治三十八年には百萬人に達し續いて世界大戰勃發當時の一九一四年（大正三年）の數字を見るに、是亦年々百萬人以上に上つてゐた、其後世界戰爭となるや一時米國行移民數も減少を示したが、尙且三分制限法制定實施の前年度卽ち一九二〇年七月一日より一九二一年六月三十日に於ける移民入國數は、八十萬五千二百二十八を數へて居た、之に對比して三分制限法律が一躍三十五萬人に限定したることは、既に多大の制限と云はざるを得ない。否な一九二一年七月より一九二二年六月迄の實際の入國者數を見ると之より一層減少を示し

たのである。是れ或國の移民數が所謂三分制限にまで達し得無かつた爲めでもあらうが、兎に角右一ヶ年間の、米國入國移民數は三十萬人にしか上らなかつたのである。米國は其後も此三分制を繼續施行し、一九二二年春更に同法の實施期限を本年（一九二四年）六月三十日まで卽ち二ヶ年間延長したのであつたが、今や更に右三分入國制を二分入國制と改むるのみならず、其基礎となり標準となりし人口統計をば、外國移住民の數未だ多からざりし一八九〇年卽ち今より三十四年前の古き統計に據らんとして居るのである、若し之を實現することゝならば、一年の移民入國數は恐らくは十七八萬人の少數に減ずるであらうと思はれる。要するに以上の事實は明かに米國が總ての國の移民に對して、峻嚴なる制限を行はんと欲する大方針を語つて居る。此點は吾々日米移民問題を研究するものゝ亦た思慮中に加へ置くべき事項ではあるまいか。

## 四

斯く檢し來る時、我日本移民獨り右の制限より除外せらるべきものだと主張する理由は、發見されないであらう。併しながら同時に目下米國議會に提出せられ居る移民制限法律案を見ると、吾人は其特に我日本に對してのみ、更に苛酷を極め居ることを感ぜざるを得無い、之れ異論を挾まざらんと欲するも得ざる所以である。然らばそが日本人に取つて如何に苛酷を極め居るかと云ふに、外國人に對しては單に人口統計に基く二分若くは三分の入國制により之を制限せんと努めつゝあるも、我日本人に對しては更に根本的に制限を加へ否な制限よりも禁止と見る可き條項を移民法案中に包含せしめたことを發見する。今米國下院提出の移民法案第十條第二項を檢すると、米國現行法律の下で歸化權無き外國人は、根本的に其入國を禁止するを以て原則と爲し、唯除外例として少數種類の人々に限り、特に入國を許可して居るに過ぎない、卽ち米國在留者で、一旦歸國の上再渡米せんとするものは、其入國を許可されるが是れとて豫め許可書を貰はなければならず、期限又一年間に限られてゐる、其他には宗教家大學高等學校の敎員たるもの、或は特別の知能的職業に從事するもの、及び其者の妻並に十八歲未滿の子供、大學若くは高等學校に學ぶ學生、官吏其家族從者旅行者、或は他國へ向ふ爲めの通過旅行者、職務上一時入國する海員の入國を許してゐる、然かも是れ等除外例の入國許可の者に就ては、極めて嚴密なる解釋を下すのが、今までの米國流の解釋である。例へば學生の如きも十分なる學資を有すること、其他面倒なる條件を附して居るので、一般學生が自由入國を爲し得る譯では

ない。從つて淡泊に云へば該規定は僅少の例外を除き、殆ど日本人の入國を禁止するものと云つて差支ない。尤も我日本人の歸化權有無に就ては、從來相當に議論があり、或は歸化權なしと主張するものもあれば、有りと論ずるものもあつたが、今日では最早日本人には歸化權なきことを明かにされて居る。蓋し一八七〇年制定された改正米國法規二千百六十九條に於ては、一般歸化法の適用は白人並に阿弗利加人（黒人）に限ると規定して居るのである。之に就ては一部にては唯一般歸化法の適用が二種の人々に限られ居るのみにて、其以外の人々の歸化を禁止せるものではないと解釋を下せる向もあつた。殊に一八八二年支那人排斥法律規定せらるゝと同時に、支那人の歸化を禁ずる規定は採用せられたので、若しも一八七〇年の改正法律により白人及阿弗利加人以外の歸化を禁止して居るならば、何が故に新たに支那人排斥法律を制定し、其歸化を禁ずるの必要があらう、と論じ此支那人排斥法律中に含まれたる支那人の歸化禁止條項は、取りも直さず日本人に對する歸化權の有無を曖昧に爲せるものであると、解釋するものも多かつた。併し此解釋には幾分無理なる點がないでもない。詳しいことは云はぬが、一八七〇年七月二日の米國上院議事並に一八八二年四月十七日の米國下院議事錄によつて、立法者の意思の存する所を解釋すると、右の主張の成立は困難なるものがあつたのである、然るに一九二二年十一月に入ると、米國大審院は遂に日本人に歸化權なきことを判決したのである。從つて今日該法律案條項の成立を見ると、忽ち日本人の入國禁止の影響を被るべきは、最早疑ひなき所であらねばならぬ。人或は謂はん此法律の影響は獨り日本人のみにあらず印度人支那人皆同様の影響があらうと、然かも支那人に對しては、一八八二年五月排斥法律は通過せられ、更に一八九二年及一九〇四年に亘り支那人排斥法律が制定され、該法律は今日依然として其能力を繼續して居る。從つて支那人を排斥せんが爲めの目的ならば、今更ら不能歸化外人の入國を禁止すべき規定を設くる必要はないのである。次に印度人は如何と云ふに、之に對しては一九一七年米國立法府に於て經度緯度による移民禁止法を採用したのである、即ち東經百十度の西より東經五十度の東に至る地域にして北緯五十度の南に位するもの、即ち亞細亞大陸印度裏海地方と、並に北緯二十度の南と南緯十度の北との間にある東經百六十度の西に位する米國領以外の諸島、即ち蘭領印度、ニューギニア等に對して、その人民の米國移入を許さゞることを規定して了つたのである。從つて是等に對しても今更不能歸化資格による入國禁止法律を制定するの必要はない。而して取り殘されたものがわが日本移

民であることは、米國移民統計表を見るもの丶直ちに認識し得る事實であらう。米國が如何に抗辯し如何に遁辭を構ふるも、不能歸化外人入國禁止法が主として日本人を目的とするものにあらずとは到底云はれないのである。殊に該案起草の歷史に顧ると、日本人問題が中心たりしことは何人も看取し得る所である、顧みるに一九〇六年（明治三十九年）米國桑港に於て日本人學童排斥問題があり、翌一九〇七年一先づ解決せられると共に、該問題に關聯し玆に日米紳士協約なるものが締結され、日本は該協約に基き勞働者の渡米制限を約束したのであつた、然も一九〇六年七年の事件は時の米國大統領ローズヴエルト氏をして大いに日本移民に對する注意を喚起せしめ同時に、他の移民問題をも研究せしむるの動機を與へ、政府は同年議會の協贊を經て、移民委員九名を任命したのであつた。卽ち上院より三名下院より三名大統領指名によるもの三名より成る委員會是れである、而して該委員會は各種移民問題に就て調査研究を遂げ、一九一〇年十二月委員長ヂリンガム氏より、其結果報告を議會に提出した、其中に於ては種々の移民制限方法も提出されてあつたが、就中所謂市民とならざる移民の入國禁止を始めて唱道したのである。而して此案は一九一一年法律案として、議會に提出せられたが、成立を見るに至らず、延期又延期を重ねつゝある間に、世界大戰に逢着し、戰爭後再び提出され現に一昨年頃も案として提出されたのであるが、今回は愈眞面目なる討議を見るに至つた譯である。此案によれば他の民族が唯數量上の制限に拘束せらるゝのみで、其他大體入國可能なるに反し、日本人のみは原則として入國不可能の狀態に置かれるのである。殊に除外階級のあるとしても、之に對する米國移民局の偏狹なる解釋は曾て種々の實例により明かに證せられて居ることを忘れてはならない、要するに本案こそは今後日本人の渡米を極端に困難にする苛酷な差別的立法と云はねばならない。

## 五

尤も日本の對米移民の經濟的政治的社會的影響等が斯くの如き特殊的排斥若くは差別的待遇を値ゐする事情あるに於ては、そは自ら別問題とならねばならぬ、然かも吾人は如何にするも、公平に見て斯くの如き事情を發見することが出來ない、見よ第一に日本移民は其數量に於て餘りに少ないのである。今在米外國人數を見るに、英國移民は八百萬を數え、獨逸は六百萬にして墺地利移民と合する時は彼是れ一千萬人を算し、伊太利移民亦四百萬人を有するに比較すれば我日本移民の如きは物の數にもならない、過去三十年間に入國せるもの僅々二十二萬に

過ぎず然も現在在住せる數に至つては十一萬人内外では無い乎。次に米國に於て移民制限を斷行するに至つた原因は同國人口漸々増加し、昔時の稀薄なる時代と異り漸く稠密を加へ來れる點であるが、我日本人の行く太平洋沿岸は米國に於ても人口稠密とは云ひ難い。即ち米國に於て最も人口多い地域は東部諸州であつて、西部ではない。例へば東部のロードアイランド州に於ける一平方哩の人口は五百六十六人であり、マサチユセツツ州は四百七十九人であり、ニユージヤーシー州は四百二十人コンネクチカツト州は二百八十二人、ニユーヨーク州は二百十七人、ペンシルヴエニア州百九十四人と云ふ數字を示して居る、東部を去つて中央部に入ると彼のシカゴを包含せるイリノイス州の一方哩人口百十五人、インデアナ州の八十一人など、相當の數と言ふを得やう。然かも日本人が行く太平洋沿岸は如何と云ふと、全然東部中部と異り、人口極めて稀薄、同時に未拓地も非常に多いのである。比較的人口多しと云はるゝカリフオルニア州の如き、一八九〇年一方哩の人口七人、八から一九〇〇年には九人五となり、一九一〇年には十五人となり、一九二〇年には二十二人となつた、勿論激増には相違ないが併し二十二人の數字を以て人口稠密なりとは決して云ひ得られない。我日本内地の四百餘人に比較すれば誠に霄壤の差ではあるまい乎。又カリフオルニア州北鄰のオレゴン州は一方哩八人二であり、ワシントン州は幾分多くて二十人三である、若しそれネヴアダ州の一方哩七人、ユタ州の五人、ワイオミング州の二人に至つては、恐らくは何人も其人口の稀薄なるに驚かざるを得ないであらう。從つて該方面に向はんとする日本移民の如きは、數量の一點からすると、多く問題とするに足らないのではあるまいか。

然らば一轉勞働賃銀に就て見れば如何、日本移民の賃金非常に廉く、爲めに白人勞働者を困難せしめ居るかと云ふにさうでは無い。日本移民の賃銀は葡萄牙西班牙伊太利人等に比し、高くとも廉いことはない。然らば教育は如何と云ふに、日本人は教育に熱心なる國民で、英語を讀み得る數も他の民族に比し、比較的多く日本語を讀み得る所謂教育資格に於ては、在米日本人は十人中九人以上讀書能力を有し、英獨佛人等を除ける歐羅巴移民よりも上位にあるは、疑ひなき所である。風俗如何と云ふに是亦能く同化し得る國民である、尤も多少非難の餘地ないとは云へないが、公平に之を觀察すれば其同化の速かなる點は、彼のミリス博士が著述「米國に於ける日本人問題」に於ても、承認するに吝ならざる所である。即ち吾人は日本人が故らに歐羅巴白人以上に排斥されなければならぬ理由の發見に苦し

むものである。

斯くの如くにして、猶ほ且つ邦人排斥激甚を加へつゝある所以は如何と言ふに、吾人は單に日本人の欠點を指摘する其弊よりも、寧ろ一は太平洋沿岸に於ける人種的僻見殊に支那人排斥の後を繼承した悪因縁に依つて一層容易に人種的僻見を高めしめた不運な事實と、他は日本が日露戰爭と共に、國力大いに增加し興隆の氣概溢せる結果、米人間幾分日本ゝ關する疑惧の念を懐抱せるものゝ存在することなど、相俟つて排日並びに恐日氣勢を煽揚し來れる點を忘却してはならぬのである、人種的僻見に就ては太平洋沿岸は、日本人渡米以前より其思想强盛なりと見るを得べく、殊に支那人排斥問題を動機として、東洋人に對する僻見の强まり來れるは疑ひない事實である。顧れば太平洋沿岸カルフオルニア州で鐵道が敷設され、鑛山が採掘せられ今日大いに其富を爲せる所以のものは大部分支那人の力にありと云ふも過言ではない。近頃は支那移民の渡米絶無となつたが我維新前後に於ては渡米者非常に多く、一八六一年には七千五百人、一八六二年には三千六百人、一八六三年には七千二百八位を數へ、明治元年になると一萬六百人となり同二年には一萬四千九百人、同三年には一萬一千九百人を數へた。斯の如く支那人移民の增加する一方、彼等は世界到る處に於て行ひつゝあるが如き、支那人獨得の生活を米國にも營んだ、ソコデ忽ち白人側の人種的僻見を助長して支那人排斥の聲は高唱せられ、遂に一八七八年及一八七九年米國議會に於ける支那人排斥法案提出となり、一八八〇年米支間に支那人排斥條約は締結され、續いて一八八二年（我明治十五年）支那人排斥法律は、始めて制定せられたのである。其後支那人排斥法律は益嚴重となり、カリフオルニア州に於ける支那人排斥は獨り法律上のみならず、社會的にも種々なる形に於て現はれ、人種的衝突を盛ならしめたものであつた。

斯く東洋人に對する人種的僻見の漸く高まりし後に於て、渡米し始めたる日本人が其影響を受け易きは寧ろ當然では無かつたらう乎。殊に日本人は支那人と異り、着々農業上に地步を占め、就中加州農園に於て大發展を見たのである、即ち大正元年に於て已に加州に二萬六千五百七十一英町の土地を所有し、十二萬四千六百五十六英町を借地して、農業を經營した事實に徵しても、日本人が如何に事業的に活動しつゝあるかを明かに窺知することができる。のみならず大正二年加州々會が亦日本人土地所有權禁止を目的とする法律を通過し、大いに日本人の事業上に蹉跌を及ぼすべしと期待せられたるにも拘らず、實際に於て大正七年日本人の土地所有面積は三萬三百英町借地三十一

萬六千英町に增加するの珍現象を示したのである。然かも之が日本人の事業的能力が如何に優秀にして恐るべきかも白人に示し、その嫉視を增加したのは、抑も亦た何等の不幸であらう。

排日助長の他の一因は日本國の勢力である、日本が動もすれば帝國主義者と目され、世界到る處に膨脹すべき國民の如く思惟せられてゐる結果、若し斯の如き國民の一部を自國に常住せしむるとすると、軈て日本の領土を米國に擴張せしむる機會を生ぜぬかとの憂慮をも白人側に惹起せしめたことは、疑ひも無き事實であつた、尤も此點は墺地利洪牙利が、自國内に多數の異民族を有し、之が爲めに却つて自からを崩壞せしめた大戰當時の實例等で米人の憂慮を增加したことも容易に想像し得らるゝ所である。斯くの如くにして、排日熱は適當以上に高められ遂に歸化權の有無の問題をさへ利用して、日本人を排斥せんとする苛酷なる制限策を見るに至つたことは、識者の忘却してならない所である。從つて米國の一般移民制限を正當としても、日本人に對する特殊禁止策をまで、正當とするのは恐らくは識者のなす能はざる所であらねばならない。

## 六

斯く論じて來ると、茲に吾人の面前に現はれ、回答を求むる問題がある、我官民は如何に此米國の移民排斥問題に對する乎是れである。

予は之に對して、先づ下の如く答へ度い。

(一)、米國が歐洲移民に對しても、嚴格なる制限策を執り始めた以上、我が對米移民も此一般制限の大針に從はねばならぬことは當然である。

(二)、但し歸化不能外人移住禁止の如き、事實上邦人に對する苛酷な差別的待遇の排斥は、之を否とせねばならない、餘りに苛酷ならざる數量的制限か若くは從來の紳士協約修正繼續かゞ正當であらう。

(三)、移民制限の大針は之を承認する代りに、日米兩當局協力、以て已に米國に在留せる邦人若くは邦人の子孫の保護、並びに之に伴ふ日米永久親善確保策を講ぜねばならない。

序でだが、右の內紳士協約繼續論につきては、吾人は正當に之を米國に爲し得る根據があると思ふ、何となれば明治四十年(一九〇七年)紳士協約並びに大正十年(一九二一年)の紳士協約追加協定に依つて、日本は忠實過ぐる程、移民制限を實行し來れる歷史があるからである。試みに見よ、明治四十年紳士協約以前に於ける對米日本移民數は相當多數に上つて居た。即ち一九〇二年(明治三十五年)には一萬四千人、一九〇三年には

一萬九千人、一九〇四年には一萬四千人、一九〇五年には一萬人、一九〇六年には一萬三千人、一九〇七年（明治四十年）には三萬人の日本移民は米國に入つた。然るに紳士協約の締結と同時に、日本人移民は著しく減少を示し、翌明治四十一年即一九〇八年には五千八百人に減じ其翌年には三千百人となり、爾來減少の大勢は更らに變らなかつたでは無い乎。近頃は幾分增加して居るやうにも云はれて居り、實際大正九年には九千人を同十年には七千五百人を、同十一年には六千三百人の渡米者が數へられて居るが然かも此中には所謂官吏もあれば學生もあり、純粹の勞働階級及び再渡米者は極めて少ないのみならず更に米國より歸國せるものが非常に多く是等の數量を差引く時は、上記の數字は半以下に低減し、其の移民は一向增加を示して居ない譯となるでは無い乎。加ふるに大正十年二月に入ると、我國は久しく行はれた寫眞結婚婦人の渡米を禁止したのである。是なども米國の在米日本人數增加阻止政策に敬意を表せる、忠實なる遣り口と見るも差支ない。以上の如く紳士協約の實際的効果の相當に見るべきものありし一事は、日本が米國に對し從來の如く、國際協定により日本移民を制限するの策に出でしむることを要求する當然の根據となるではあるまい乎。縱し又此案が米國側に於て容れられずとするも、米國立法に於て日本人の體面を傷ふが如き、差別待遇的立法を避けしむるやう、要求すべき相當の根據を爲すものであると信ずる、我松井外務大臣を始め幣原大使が如何なる方針を以て、此重大問題に臨み、接衝すべきかは俄かに逆賭し難きも、右の如き態度を執るも、何等不當にあらざることを確信するものである。

併し吾人は又た米國の有移民制限立法策に關聯し、吾々本國の日本人として大いに考へなければならぬ問題あることを忘れてはならぬ、それは何であるか、外でも無い、今後米國に關聯しては、我が移民を送ることを中止する代りに、既に渡米せる日本人並に其子孫が幸福なる生活を米國に於て爲し得るやう、日米兩政府が協同努力すべきことであると思ふ。就中吾々の注意すべきは、米國出生日本人の市民權問題である。移民に依らずして出生に依る太平洋岸日本人人口增加問題は、決して輕視するを許さ無い、現に加州のみに就て計算せる所によれば日本子女出生數は、年々四五千人を以て數ふる狀態にある、茲に於て吾人の最も急務と感ずるものは、彼の米國出生兒童をして米國市民として幸福なる生活を送る機會を失はしめざるやう努むべきことである。蓋し米國憲法補則第十四條によれば、米國に生れたるものは總て米國市民となり得るのであり、從つて是等のものは土地所有權を有し、參政權をも所有する資格があ

る。然も是等の兒童の前途に暗影を投げて、其幸福なる生活を阻止せんとしつゝあるものは、何であるか、云ふまでもなく目下米國に發生しつゝある出生日本人市民權剝奪運動であらねばならぬ。之は米國の問題であり、米人の反省を求めねばならぬが、同時に之には日本の現國籍法の缺陷に基く二重國籍問題あることをも忘れてはならない。日本は敢て獨逸の如き卑劣なる策を藏するものではない、唯在米日本人兒童は米國に出生し、米國市民たる權利を有するが、日本領事館に於ても日本人として出生手續を爲さしめておくことになつて居る。然るに日本の國籍法は徵兵問題の立場より、右兒童が生長して、自からの理解力、判斷力に應え何れの國籍を採用するか、二者其一を決定すべき能力を有する時期になると、日本國籍の脫離を許さざることに規定され居るのである。這は要するに陸軍側の主張に基く徵兵政策より來れるもので、是等の兒童が未だ自から二國の國籍の何れを採用するか、選擇能力なき時代に於ては、日本の國籍を脫離し得べき機會を與ふれども、一度相當判斷能力を生じたる年齡に於ては、最早絕體に脫離を許されざるが如き厄介な制度を形成して居る。斯の如き法律は速かに改廢すべき必要がある、之が爲めに彼等は米國に生れながら、米國の國籍を失はんとする現狀に直面して居るのみならず、斯る制度あるが故に米國政治家學者などは、米國出生日本人の地位に對し疑惑念を挾み、排日派又之に乘じて、在米日本出生兒童の市民權を剝奪せんと暗中飛躍を試み、常に物論收まるの時を見ない有樣である。我國は速かに此病根に向つて救治をなさねばならぬ、然かも同時に、吾人は米國人に對しても、移民一般制限の決意をなすと共に、あらゆる方面と方法に於ける在米邦人の迫害を中止する丈けの雅量をも示さんことを希望せねばならない。

# 現代政局の上に作用する政治意識の種々相及びその將來への展開

政治的試錬期を潜りつゝある
我國の民衆に此一篇を捧げる

大山郁夫

## 一　解題　政治的變革の動因の本質

最近に於て我々の眼前にめまぐろしく展開しつゝある政治的事象の種々相は、我國の政界も今や一種の劇轉期の前に立つてゐるといふことを、各方面から我々に強く暗示する。——といふのは、或る驚天動地式の事變が、今にもそこに突如として勃發しようとする形勢が見えてゐる、といふやうなことを意味するのでは、決してない。さうした表面上の擾亂の到來を豫感せしめるやうな徴候は、今のところ、先づ何處にも現はれてゐない、と言つていゝ。それにまた、さうした表面上の擾亂は、縱しその外觀が如何程めざましい種類のものであるにもせよ、必ずしも、社會上並に政治上の根深い變革を作つて來るものとは限らない。否、それはむしろ、最も多くの場合に於ては、屢々各時代の革命の歴史に依つて證明せられる通りに、却て一種の反動期の現出を促進する誘因にさへなり勝ちのものである。無論、多くの革命の後に遣つて來る反動期は、當該革命以前の狀態への全的復

歸を意味するものであるよりは、むしろ、そこへの復歸と見られ得る狀況の裡にも尙ほ、そこからの躍進を指し示すところの諸要素を或る比率に於て包含してゐるものである、といふやうなことも、容易に歷史的に論證し得られる事實であるには相異ない。がしかし、さういふことの考察は、私が今差し當つての問題にしてゐることではない。否、私が玆しばらくの間私の注意の目標にしようとしてゐる主題は、次の一要點に繫がつてゐるものである。すなはち、――

或る程度に重大なる歷史的意義を帶びる社會的若しくは政治的變革が、或る期間內に醞釀され實現されるに至るまでの全過程に於て、その誘因としての――若しくはその『酵母』としての――働きをなすものは、事實上、社會生活及び政治生活の基底に於て、その期間を通じて終始默々として脈動しつゞける諸多の事件の連續から來る影響の漸層的集積である。別言すれば、それは、或る特殊の個人若しくは特殊の集團の意識的計畫から出た行動の結果としてよりも、むしろ、一般の社會人及び社會的諸集團の意識的及び無意識的行動の間に起る複雜な交互作用の所產として、絕えずそれ自身を完成しつゞけて行くところの『社會過程』の內容を次々と補給しつゞけて行く諸多の事件の連續から來る影響の漸層的集積である。かうした諸多の事件の連續の進行が或る瞬間にそのクライマックスに達したとき、その影響の漸層的集積の總勘定として、そこに、或る程度に重大なる歷史的意義を帶びる社會的若しくは政治的變革が實現されるのである。若しくは、少くとも、その實現の端緖が開かれるのである。

かういふ徑路に依つて促成される社會的若しくは政治的變革が、所謂『革命』といふ言葉で普通一般に觀念されてゐるやうな種類の外部的擾亂の形式を取つて現はれるか否かは、決して本質的な問題ではない。それは、さうした形式で現はれる場合もあれば、またそれとは異がつた――そしてもつと目立たない――形式で現はれる場合もある。換言すれば、社會的若しくは政治的變革は、常に或る一定の嚴格な、動きの取れないやうに出來てゐる『公式』に從つて出現

するに決まつたものであるべく運命づけられてゐるものではない。從つて我々は、或る形式で出現したものが本來の社會的若しくは政治的變革であつて、しからざるものはさうでない、と主張するやうな、恰度或る種の偏屈な宗教信者の場合によく見るやうな態度を取つてはならないのである。少くとも、我々が科學的立場から物を見ようとする限りは、我々はさうした態度を極度に排斥しなければならないのである。從つて、若し我々が、或る社會過程が到達し得た境地が社會的若しくは政治的變革に相當するものであるか否かを科學的に測定しようとするならば、我々は、それが出現する際に取つた形式に拘泥しないで、端的にそれが內容的に持つ本質及びその實際上の効果を見つめることから出發しなければならないのである。その際、それが所謂『革命』の名の下に世俗的に理解せられる或る種の外部的擾亂を伴つたか否かは、少くとも問題の核心を構成するものではない。そればかりではなく、我々は同時に、さうした外部的擾亂の中から咄嗟の間に產まれた變革よりも、むしろ、一般世人の注意の圏外に在つて、何時となしに漸進的に完成された變革の方が、その根柢に於て一層確實であり、その効果に於て一層永續的であるやうな場合が、非常に多くあり得るものであることをも、我々の考慮の中に置かなければならないのである。

かういふところに我々の着眼點を据ゑての上で、我々の眼前を忙しく去來する政治的事象の種々相の裡に、我國の政界の上にも將來必然的に起るべきものと想定し得られるところの相當に重大意義のある變革への道程を、今日に於て既に多少の明確さを以てでも指示して居るやうな徵候が認められ得るか？　といふ問題に立ち向ふとき、私の答へは率直に肯定的たらざるを得ない。私が本文の劈頭に於て、我國の政界も一種の廻轉期の前に立つてゐることが暗示されてゐると言つたのは、全然そのためである。私は、以下本文の筆を進めて居る間に、我々の記憶からまだ遠退いてはゐない幾多の最近の代表的政治事實に依つて、私のこの提言を說明しようと考へてゐる。それと同時に、私はまた、その政治

的變革がどういふ性質のものであらうとしてゐるかの問題をも、私の能力の範圍内で考察しようと企てゝゐる。

だが私は、さういふ變革が完成せられるべき時點を正確に測定しようとするやうな、常人には到底試みることが出來ないことを、私自身で試みようとするやうな愚擧に着手してゐるものだとは、毛頭誤解されたくはない。そして、若しこの點に關して、それを正確に測定しなければ千萬語も畢竟無益に終るものだ、といふやうな批難を私に投げ掛ける人があるならば、私は即坐に、さういふ出來ない相談に沒頭して、そのために却て幾らかでも出來さうな仕事を顧る餘暇をなくするのは、無益の限界を通り越への有害の沙汰だ、といふ言葉を以てその人に酬ひたい。しかのみならず、私は一歩を進めて、私が今企てゝ居るやうな仕事を試みることは、我々が我々の對社會及び對政治の態度を決定する上に於て、――我々がさういふ態度を決定する必要を意識する限り、――單に有益なことであるばかりでなく、更らに絶對的に必須な先決條件だとさへ考へてゐるものである。

## 二　實證的政治批判の難關

### A　材料蒐集上の障碍（1）

――政府政治家及び政黨の宣傳の偏倚性――

私は、前に言つた通りに、最近の政界に起つた諸般の代表的政治事實を基礎として、そこから私の論述を進めて行かうとしてゐるのである。私が斯樣に『事實を基礎として』といふ點を特に强調するのは、自明の事柄でなければならぬ。政治批判といふものは、そのもの自體の本質上、その根柢に於て事實の觀察に即した實證的性質のものでない限りは、それに學術上の價値のないことは素よりのこと、その他の如何なる實際上の效果も利益もないものである。

と言つたところで、私は、さういふ意味の實際的政治批判を試みる仕事の前に立ち塞がつてゐる絶大な、殆んど人間業では踰え難いほど絶大な障壁に對して、私の眼を閉ぢようとしてゐるものではない。それには、先づ第一に、誰れもが經驗してゐる筈である通りに、當然實際的政治批判の基礎的材料とせられるべき諸般の政治事實の報道の蒐集に關する困難がある。今日のやうに廣告や宣傳が一世の風潮をなしてゐる時代に於て、――しかも政府も政治家達も諸政黨も、一般の商工業者流と同樣に、相競うて廣告や宣傳の秘術を盡くすことに餘念のない時代に於て、諸般の政治事實の報道の蒐集に關する困難があるといふのは、取り樣に依つては矛盾のやうにも聞こえようが、實は決してさうではない。如何にも、彼等から日々我々に供給される報道の無限の數量に關しては、我々は毫もその少きを憂ひないで、寧ろその多きに惱まされてゐる。けれども、それらは殆んど皆、捏造された事實の傳達でなければ、假粧を加へられた事實の記述である。さういふものが、正確な意味に於ける事實の報道の部類に屬するものでないことは無論であつて、從つて我々は、さういふものに信頼して正當なる政治的批判に到達することの出來ないことは、また言ふまでもないことである。

尤も、今日に於ては、善良なる一般市民も、個々の政治家達や諸政黨から出る手前味噌たつぷりの言說を、せいぜい賣藥の能書き以上に取扱はないやうな心的態度を養ひかかつて來てゐるから、その點に關しては、最早殆んど何等の警告を與へる必要はない。と言つても恐らく間違ひはあるまいが、しかし、これに反して、政府筋から發表された報道だといふと、それに多少の、若しくは多大の信頼を置くものが、現在でも相當にあるやうである。これには幾多の原因もあることだが、しかしその最も主要な點に於ては、それは、パターナリズム萬能の信仰が、他の何物よりも手廣く、官民の間に行はれてゐた官僚時代から傳承されたところの遺産である。政府を構成する大小の官吏たちは、現實社會の上に於て相互に爭鬪軋轢する諸ゝの集團的利害關係の上に超越する至公至平の立場に置かれてゐるものであるから、彼等

の見解、判斷、乃至、行動、施設は、黨派的色彩に浸潤されたそれらとは自ら選を異にするものがある。』——と、大體かういつた調子の、今日の標準からいへば、高々夢中の譫言以上には受取りやうのない言ひ分が、相當の尤もらしさを以て、語りつがれ聞きつがれてゐた時代が、我々の記憶から餘り遠くもない過去まで續いたものである。事實上、今から數年前の寺内内閣の看板の上には、『秉公持平』の鹿爪らしい文字が大書されてあつて、しかも、その内閣の首相の『精勵恪勤』振りに魅せられてゐた公衆の耳には、それがさして僞善的なものに響かなかつたのである！ それどころか、現在に於ても、清浦内閣が自らそのレーゾン・デートルの諸項目として擧げてゐるもの丶中に、『選擧の公平』といふのがある。けれども、時勢はさすがに變つた。今日となつて見れば、政府が全然黨派的利害關係に『禍ひ』されないなどといふやうな言ひ分は、どの方面からも、段々と信ぜられなくなりかかつてゐる。それ故に、政府が掲げてゐる『選擧の公平』の言葉は、當然その上に『不』の字を加へて讀みつづけるべきものだといふ位のことは、誰れでも心得てゐる。そして、實質上政府の與黨格の立場に居る政友本黨の人々は、それで多少安心してゐるし、またその反對の側に居る所謂『護憲三派』の連中は、本能的にそれを警戒してゐるのである。それ程だのに、『國家の政務』といふ名の下に總括せられてゐる内治外交上の事實に關して政府筋から絶えず公にされる報道が、今尙ほ、一般世人の信用を或る程度まで繫ぎ留めて居るのは、一應不思議だといつたやうな感じを、我々に懷かせる。殊に、若し我々がこの事實を、政府そのものが著るしく企業體化しつ丶あるといふ、現代の一大傾向と併せ考へるときには、この感じが更に一層深められるのである。それにも拘らず、それは現に嚴存してゐる一事實であつて、そしてこの資格に於て、それはその存在の理由を有して居るものである。我々はそこに、何よりも以上に、官僚專制時代に獲得せられた心的習慣が、今尙ほ民衆の潛意識の中にその痕跡を鮮やかに留めてゐる事實を認めないで居られないのである。

## B 材料蒐集上の障害（二）

### —— 新聞紙の報道の功過 ——

しかし、實證的政治批判の立場から、その材料の最も豐富なる源泉として、誰れもが見逃がすことの出來ないものには、——そして事實上誰れも見逃がしてゐないものは、——現代の社會生活の上に一種の大勢力を以て臨んでゐる新聞紙である。この範圍内に於て、それは、政府や、政治家達や、諸政黨やの、廣告若しくは宣傳本位の演說、文章、報告、乃至、公表文書などよりも、遙に重く見られてゐる。否、さうしたものの主要なる部分は、大抵はみな、新聞紙のどの欄かに收められてゐる。そして、新聞紙は尙ほ、その外に、若しくはその上に、さうしたものの中に求め得られない種々雜多の事件——少くとも殆んど誰れもの、若しくは大多數人の興味なり利害感なりを唆るに足る種々雜多の事件——に關する報道や記事を網羅してゐる。少くとも、外觀だけでも、さうしてゐるらしく見える。それは、この意味に於て、今日の通り言葉の一つとなつて居る通りに、『社會の縮圖』である。少くとも、體裁だけでも、それらしく見える。

もつとも、この『社會の縮圖』は、常に、——でなければ甚だ屢〻、——畸形化された種類のそれである。そして、そこに、新聞紙の功過を、若しくはその罪過を、嚴重に見極める必要の因つて生ずる素地があることは、事實である。けれども、我々は、その前に先づ、新聞紙が、一般的性質の報道機關としての唯一の地位を占めて居るところの、近代社會のユニークな產物であることを、無條件に承認しないわけにはゆかない。素より、それは、特殊の興味若しくは利害感に繫がれる事柄の關する範圍内に於ては、決して重要な報道機關として見做すべきものでないといふことには、誰

も異存を申し立てるものはあるまい。けれども、これに反して、苟しくも一般的興味若しくは利害感に訴へる力のある事柄の關する範圍内に於ては、それは、それ自身の裡に持つあらゆる缺點と病弊とを以てしても、尙ほ、他に及ぶものなき報道機關であるといふことだけは、拒めない事實である。

しかし、新聞紙が現代社會に於て、若しくは現代社會に對して、日々實際に從事してゐる主要な仕事は、單に報道機關としてのそればかりではなく、同時にまた、事件に對する論評機關としてのそれである。その外に新聞紙は、尙ほ他の若干の社會的機能――たとへば、娛樂機關とか、意見交換若しくは紹介機關とか、個人的若しくは集團的廣告機關とかとしてのそれのやうな――を、非常に手廣く行つてゐる。がしかし、さういふ社會的機能は、縱し他のそれぞれの立場から見てどれほど重要なものであるにもせよ、私が本文に於て取扱つてゐる主題に對しては、寧ろ緣の遠い地位にあるものである。だから今私は、私の主題に最も直接な關係を持つところの、報道機關及び論評機關としての新聞紙の社會的機能の範圍内だけに、私の注意を限らうとしてゐるのである。

論評機關としての新聞紙の社會的及び政治的意義は、縱しその報道機關としてのそれと同等に重大だとは言ひ得られないにしても、少くとも、それに次いで重大だといふことには、毛頭間違ひはないのである。この事を考慮の中に加へて新聞紙を評價すれば、それは單に、實證的政治批判に對してその材料の源泉としての意味を持つばかりではなく、同時にまた、それは、或る種の政治批判に對して、多少の程度に於てその構成上の幇助者としての意味をも持つものである。もとより、それは、或る特殊の專門的知識の所有者に向つてこの役目を盡くし得る餘地を全然――若しくは甚だ僅かしか――持たないが、しかし、さういふ專門的知識の持合はせのないのを普通とする一般公衆に向つては、この方面に於て、殆んど不可侮と言つていゝ程の大勢力を振ふのである。新聞紙が、屢〻輿論の指導者だと呼ばれるのは、全く

そのために外ならないのである。もつとも、それは、常に必ずしも善意に於てさう呼ばれるのだとは限らない。この點に關してもまた、我々が、新聞紙の功過を糺明する必要を認めるものがあるのは、事實である。が、それは兎に角、我々は、少くとも是非善惡の批判を離れた立場からならば、輿論形成の過程の上に於ける新聞紙の威力を承認することを拒むことが出來ないのである。

我國の新聞紙中には、當年のロンドン・タイムスに關して言はれてゐた通りに、その社説に依つて、單獨で或る内閣を製造したり破壞したりするほどの威力を示した記録を持つてゐるものは、まだ一つもない。それにしても、多數の新聞紙が相寄つて一齊に同一論調を猛烈に反復する場合には、それが少くとも、出來かゝつた内閣を流産させたり、影の薄い内閣の死期を早めたりすることの上に於て、無視することの出來ない一種の勢力となるといふやうなことは、我國に於ても、全然實例が缺けて居る譯ではないのである。現に現内閣の首相の如きは、甞ては一方の運命の犧牲者となり、今また他方の運命に肉薄されて居るが、さういふ事件の發生を促す諸原因の中に、諸新聞紙の論調の大體の傾向を算へるのは、至當なことであらねばならぬ。

我々は屢々、新聞紙の社説が次第にその勢力を失ひつゝある傾向の現はれてゐることを、人々の口の端から漏れ聞く。それは、一面からいへば、たしかにさうである。そして、その原因は、「人」に關係する問題でもあると同時に、また『時』に關係する問題でもある。殊に、最近の我國に於ても見られる通りに、個人意識や集團意識が、或る時期には徐々に、がしかし或る時期には比較的急激に、兎に角一歩々々と眼ざめて來るやうになつてからは、政治家達や道學先生達の言説が次第にその社會的威儼を失ひつゝある傾向が見えだしたと同樣に、新聞紙の社説の輿論形成の過程に於ける勢力もまた、次第に凋落する傾向が必至的のものとなつて來てゐるのである。そして、さういふ徴候が、今日に於て既

に、あちこちから現はれ始めて居るのである。殊に我々が、新興の勞働運動の如きものが、資本階級の管理の下に置かれてゐる新聞紙の論調などには殆んど無關係に、一本筋にその獨自の方向に展開しつゝあるやうな狀態を見る時には、我々は一層この感じを深めないで居られないのである。

しかしながら、大體の上からいへば、さういふことは、今のところ、單に一の傾向として見られ得るに過ぎないのであつて、それが一の完成された事實となるまでには、まだまだ相當に先きの永いことゝ思はれる理由がある。兎に角、現在に於ては、新聞紙の社說 ― 若しくはその他の形式でその上に現はれる論評――の輿論指導力は、知識階級の人々が幾分知識的虛榮心を混ぜて主張するのを常としてゐる言葉程に、それ程に薄弱なものになつてゐないのは、事實である。殊に、社會的若しくは政治的變動が、突發若しくは高潮して來たやうな瀨戶際に於ては、獨自の判斷を構成する能力を全然――若しくはそれに近い程度に――缺如してゐる一般公衆が、新聞紙の社說に、若しくはもつと非形式に書かれた論評にさへも、同化されて行く程度は、決して侮るべからざるものがある。しかも、かういふ狀態は、今後相當に永い當分の間は、(おそらく普通教育の一層行渡るに伴れて、)寧ろ增進こそすれ、決して減退しないであらう、とさへ考へられるのである。前にも一言觸れたことだが、清浦內閣成立以來、殆んどすべての『大新聞』の上に日々繰り返されてゐた內閣反對の論評が、來るべき總選擧の上に影響するであらうところの諸要素のうちの、最も重大なるものの一つとして算ふべきものであることは、たしからしく見える。少くとも、それは、政府がその『選擧の公正』の聲言に拘はらず、必ず何かの方法で敢行するであらうと豫期される選擧干涉に、優に對抗するに足るほどの勢力を示すであらう。のみならず、それは、所謂『護憲三派』の威どし文句附きの警告以上に、その選擧干涉の手の露骨に現はれるのを妨げる効果を持つであらう。

また若し、我々が昨年の九月の震火災當時のことを回想するならば、我々は、新聞紙の輿論指導力の實在を、一種の消極的方面から推斷し得る根據を持つのである。當時東京市內の新聞紙といふ新聞紙が、幾日間にも亘つて、正規の發行を續けることが出來ない破目に陷つてゐた際に當つて、我々は、如何に新聞紙以外の或る方面から出た或る種の示唆が、唯さへ不安に襲はれて居た民衆の激情を挑發し煽動して、そのために一大社會的亂脈狀態を現出せしめたかを、深き悲痛感を以て經驗した。それは『流言蜚語』が暴威を逞しうした幾日間でもあり、或る黑手の影が跳梁跋扈した幾日間でもあつた。それは、短期でこそあつたが、まさに暗黑時代でもあり、恐怖時代でもあつた。そして、これらのことは、すべてがすべて、新聞紙が影を潜めて居た幾日間に起つた出來事であつた。それから間もなく、新聞紙が、一つ一つと、段々に正規の發行を恢復するやうになつてからは、さすがの亂脈狀態も、暴ばれあぐんだものが何時となく休息を求めるやうに、次第々々に鎭靜に赴いたのであつた。この結果を生ぜしめた原因を、一に諸新聞紙の復刊の事實に歸してしまふのは、新聞紙の効果を不當に高く評價することになるのは、無論である。が、それにしても、諸新聞紙の復刊の事實が、その原因の重要なる一部分を構成したといふことだけならば、諸新聞紙が『公平』の名に於て、當然その承認を要求する權利を持つてゐるところのものである。それからまた、諸新聞紙の復刊の事實がこの結果を助成したのは、單にその論評だけに依つたのではなく、同時にまた、その報道に依つたことも少くはなかつたのである。かうして、多くの場合に於て、報道もまた、それ自身で論評になる場合もある。嚴格にいへば、これらの二つのものは、双方から引離して取扱ふべきものでないといふのが、普通である。けれども、單純に論評として取扱ふべきものが、屢々輿論形成の上に主働體となつて作用するものであることを示す一例としては、我々は、矢張その頃に起つた最も戰慄すべき慘害事件と見做すべき、例の朝鮮人及び勞働者等の遭難事件や、甘粕事件に對する公衆の批判の態度が、諸新聞紙の論調

に伴れて、次第々々に、我々の立場から見て正しい方向に變遷して行つた事實を擧げることが出來る。今から當時のことを追想すれば、たとへ他のすべての點に關して現代の新聞紙に反感を懐いてゐるものでも、少くとも右の一點に關しては、多くの新聞紙があの時に取つた論評の態度に向つて、或る程度の好感を表さない譯にはゆくまい。

イギリスで有能の著者たちの一人として知られてゐるアルフレッド・イー・ズィンマーンが、その近著の或るページに於て、現代の新聞紙の輿論助成上の威力について述べてゐる中に、次のやうな一節がある。

『……ヨーロッパ全土を通じて、義務教育制度の結果として現出したところの、新しき、好奇心に富んだ、解放せられたる大公衆に向つて、新聞紙は、單に事件の報道者及び解釋者としての役目を務めて居るばかりでなく、同時にまた、教師及び說教者としての、案内者としての、哲學者としての、そして、匿名の――しかし不斷の――伴侶としての役目をも務めてゐる。幾千萬の無批判的な大衆が『新聞で讀んだこと』の上に彼等の信仰を繋いで居る今日程、文字の力が偉大さを示したことは、曾てなかつた事だ。聖書が萬能であつた新教勃興の初期でさへ、そんなにまでではなかつた。けばけばしき大字の標題と編輯の苦心振りを物語る樣々の細工とで取り圍まれた活字の冷靜な威容は、それに魅せられないやうに特別に訓練せられた人々以外のすべての人々を說き伏せたり、威どしたりする。かの婉曲な辭令で「讀書會社」と敬稱されてゐる公衆の聽覺を捉へたり、その味覺を唆つたりする秘術を心得てゐる人々だけが持つて居るやうな、そのやうな親しみのある、そして何時までも永續する權力は、古來の帝王たちさへ知らなかつたところのものであり、また、そのやうな威壓的な、絕對的な、ローマ法王廳の主宰者たちさへ體驗し得なかつたところのものである。』(Zimmern, Alfred E., *Europe in Convalescence*, London, 1922. pp. 53―54.)

かういふ評語を移して、我國の諸新聞紙に――たとへ『大新聞』と稱せられてゐるものにでも――適用するならば、

それは無論、餘りに誇張的に過ぎる言ひ分にならうとは、事實である。けれども、我國の諸新聞紙でも、徐々に、だが確實に、善かれ、惡しかれ、段々さういふ境地に向つて歩みを進めつゝあるとだけならば、安全に言ひ得られることだと、私には考へられる。

しかしながら、他方からいへば、新聞紙の罪過もまた、實にその威力に關聯して生じて來たものである。古來、如何なる威力若しくは權力も、結局は社會的病弊に變質しなかつたものはない。少くとも我々は、さうならなかつた唯一つの實例をも知らない。近世紀のヨーロッパに於ける諸國王の專制權も、その初期に當つては、或る意味に於て、その肯定の根據を持つてゐた。にも拘らず、それは、第十八、九世紀に於ける革命運動を惹起するまでに惡化しないでは居られなかつた。新聞紙の威力もまたその例には漏れないで、それが樣々の大弊害を醸すやうになつて來てゐることは、今日に於て既に明瞭になつてゐる。新聞紙の報道や論評が輿論構成の上に大なる影響を及ぼしつゝあるといふことは、一つの活きた事實である。けれども、それらのものが常に正確であり、妥當であるか否かといふことは、全然それとは懸け離れた問題である。そして、實證的政治批判の材料の源泉としての新聞紙に立ち向つて居る私が、最も關心してゐるものは、一にこの問題に外ならないのである。

新聞紙の報道や論評の本質を徹底的に批判しようとすれば、我々は、少くとも、それをその背景となつてゐるインダストリアリズムに關聯せしめて、論究しなければならないことになる。しかし、私が茲でそれを企てゝ居ては、私の本文の主題から、餘りに遠く離れて行くことになる。この先にまだ多くの重要なる諸問題を待たせてゐる私には、今はさうして居る餘裕がない。そこで私は、この問題に關しては、讀者と私との間に既に諒解がついてゐるものと假定して、たゞ單に、現在あるが儘の新聞紙上の報道と論評との本質のうちに含まれてゐる缺陷と病弊とを、それらが本文の主題

に直接に關係のある範圍内に於てのみ、手短かに擧げることで滿足しなければならぬ。そして、この點に關してもまた、私はふたゝび、前記のズィンマーンの言葉を借りて來ようと思ふ。それは別に新味を出してゐるものでなく、寧ろ平凡なことを述べてゐるものであるが、しかし甚だ要領よく問題の中心點を掴んでゐる。のみならず、それを茲で引用することは、少くとも、他人が既に說いて居る點を別の言葉で表現する、といつたやうな、氣の入らない仕事から私を救ひ出すだけの効果は、たしかにある。兎に角、彼は、チャールス・ディッケンスやジョーン・モーレーなどの名篇が日刊新聞紙上に見出されてゐた第十九世紀の後期から見れば、現代の金力專制の支配の下に投ぜられてゐる新聞紙の品質が著るしく低下し、且つその獨立性が少からず失はれて居ることを述べた後に、次のやうに續けて居る。——

「場面の背後に活躍する諸勢力が斯うしたものだとしてみれば、その前景に於て、諸問題の眞相に暗い市井の俗衆を啓發するに足るものがあるでもなく、寧ろ徒らに彼等の思惟を混亂せしめること以上に貢獻すべきものがあるのは、別に不思議でも何でもないことである。批判的能力の持ち合はせもなく、また公共事務に關する知識の準備もなくて、たゞ漫然と新聞紙を讀むのは、却て自家の聰明を掩ふ結果を產むものだとか、——また、官憲の檢閱を經た記事と、私人の細工の加はつたそれとの間には、何れが優つたものかを判別する餘地がないとか、——といつたやうなことを、今日のヨーロッパの日刊新聞紙の大部分に關聯して說くことは、決して誇張に失する氣遣ひはない。兎に角、自分が讀んで居る新聞紙の持主が何の誰がしであつて、彼の政治上若しくは社會上の黨籍が何であつて、彼の野心若しくは敵對感の標的がどういふものであつて、そして、彼の本國若しくは他國に於けるこれこれの集團若しくはこれこれの勢力に對する彼の關係がどういふものであるかといふやうな要領を會得してゐる人々は、無邪氣な公衆の大多數者よりも、遙かによく、その眼光を紙背に徹せしめることが出來るものだ、とだけならば、安全に言ひ得られるの

である。一例を擧げて言はうならば、一般讀者たちの相當の割合を占める部分が、彼等自身の眼に觸れる記事に對して、何程かの批評的判斷を働かせ得る能力を具へてゐるにしても、それにしても、故意に默殺された項目から結論を引出さうとするには、異常の辨別力が必要になつて來るのである。同業者聯合の關係に繋がれる諸新聞の一團の内部に於て、何某の名を擧げることは罷り成らぬ、といふ一令が發せられると、ローマの盛時の絶頂でさへ行はれなかつたような破門の運命が忽ちその呪はれたる人の上に臨むのである。かういふ破門令が、實際上は發せられるに至らないで濟むかも知れない。が、それが發せられ得るものだ、といふことを人々が知るだけで、それは有効な脅威になる。それは、從前に於て、世界歴史の進路を轉換せしめたやうな結果を伴つたところの、幾多の大暗君若しくは無謀の處置を激發せしめる役目を務めたものである。』

ズィンマーンは尙ほ語を繼いで、大戰當時に於ける新聞紙の影響に、說き及ぼす段になつて、次の通りに述べてゐる—。

『かうして、大戰勃發の時までには、新聞紙は既に層一層と商業化されてゐて、そして、公共事務に對する人々の心的態度を劣悪ならしめ、それを益々輕薄に、益々無責任に赴かしめることに、目立つて貢獻してゐたものであつた。が、大戰がどれほど、かうした諸々の悪影響の上に、更らに輪を懸けたやうな結果に導いたかは、殊更らに追想してみるまでもないことである。國民的危機の前に國民感情が昂奮してる時ほど、明晰な、正直な考へ方が必要な時はないが、また、さうした時ほど、それが困難な時はない。しかも、この仕事の困難さは、新聞記者たちに取つても、市民たちに取つても、官邊からの宣傳係りの出現のために、二重に增大するのである。いかにも、敎養の低い民衆が、自分達が餘りによくは知らない名分のために生死の戰ひに沒頭してゐる際には、彼等を啓發するための或る組織的手段が講ぜられなければならないといふのは、蓋し已むを得ないことであらう。が、さうした臨機の處置は、明かに濫

用され勝ちになる。それ故に、各國の政府が、新聞紙を色づけたり、出版業を操縱したりなどし始める時には、その反動の種々相が隱微の間に萠さして、不測の働きをすると同時に、それは忌はしき結果を産むのである。かくして、大戰終熄の際には、曾てバークが「輿論への通路」と名づけたところのものが幾部分遮斷されてゐて、そして、輿論そのものが、官選公表技師たちがその行動を開始した前に比ぶれば、遙にその感受性を減じ、遙かにその皮肉味を増してゐたのであつた。」（Zimmern, op. cit., pp. 55—56.）

社會上、政治上、商工業上の各種の利害關係。政府の検閲制度。國民感情の昂奮。官邊からの宣傳。——大體かうしたものが、現在如何に新聞紙の報道及び論評を色づけて居るかは、右の引用文の中に、簡明に記述されて居るではないか？　もとより、それは、專らヨーロッパの新聞紙に就いて物語つてゐるものであるが、我々は、その個々の項目の下に於て、それに多少の斟酌を加へると、——或は、さういふ斟酌を加へる必要すらないかも知れないが、——それを我國の新聞紙の大部分に適用して差支のないものであることを、見出だすのである。もとより、新聞紙の報道及び論評に纏はる各種の缺陷の中には、人間の能力の有限性から必然的に來て居るものが少からずあることは、事實である。そして、かういふ缺陷は、人間の能力の上に何かの變動が起るのでなければ、決して取除かれないであらうといふこともまた、間違ひのないところである。たとへば各個人の頭腦内で進められる思惟に、他人の任意の透視を許さない範圍が少しでも殘留する限りは、若しくは、各集團の内部だけで行はれる謀議に、外間からの窺知を許さない場合が少しでも存續する限りは、新聞紙の報道及び論評にしたところで、他のあらゆる種類の機關から出る報道若しくは論評と一樣に、常に正確であり、妥當であることを期するとが出來ないものである。そして、それは、如何なる時代に於けると、如何なる制度若しくは環境の下に於けるとを問はないのである。けれども、右の引用文中に擧げられたやうな種類の缺陷

は、主として現代の資本主義制度に關聯してゐるもの、若しくはその下に於て特に強調せられる傾向のあるものであることは、爭ふべからざる事實だと、少くとも私には考へられる。この事は、我々が、輿論形成の過程の上に於ける新聞紙の威力を考察する場合に際して、我々の深き關心を促すものである。と同時に、それはまた、我々が我々の實證的政治批判の材料の源泉の一として新聞紙を取扱ふ場合に際しても、我々の警戒を刺激するものである。そして、それは更らにまた、我國には資本階級の管理の下に置かれてゐる諸新聞紙だけがあつて、勞働階級專屬の新聞紙の見るに足るものがない現狀に對して、我々に強き不滿足を感ぜしめもすれば、また同時に、さういふ新聞紙の出現に對する我々の希望を昂めさせもするのである。

要するに、我國の新聞紙も、西洋諸國のそれと同樣に、インダストリアリズムの支配の下に於て、その報道の正確性及び妥當性を損はれてゐることは、爭ふべからざる事實である。その上、我國には勞働階級の管理の下に置かれた有力な新聞紙が一つもない結果として、我々が新聞紙から得る報道や論評は、少くとも或る種の問題に關しては、非常に一方に偏つたものである。たゞ、しかし、新聞紙の讀者の大多數が無產階級に屬するものであるといふ事實と、記者の大多數が所謂『無產有識階級』に屬するものであるといふ事實が、多少の程度に於てこの形勢を緩和して居ることだけは、我々といへども、承認しない譯にはゆかない。殊に、諸新聞紙の社會面に於ては、勞働記事が、段々と公衆の興味と注意との對象の一つとなりつゝある趨勢が、既に明かに現はれてゐる。從つて、優秀なる勞働記者に對する需要なども、次第に高められつゝあるやうである。かういふことを念頭に置いて諸新聞紙に對するとき、我々は、同一紙上の諸欄の記事の間に、——たとへば、社說と社會記事との間に、といつたやうに、——著るしき矛盾もしくは不統一の跡が暴露されてゐるのが、寧ろ普通であるといつたやうな狀態を見ても、それを少しでも訝かる理由を持たないのである。

無論、他方から見れば、かういふことが起るのは、一つにはまた、報道の敏速といふことに關して諸新聞紙の間に劇烈なる競爭が演ぜられる結果として、全紙面に亘る統一的監督の行使が不可能であるといふ事實にも基因するものである。が、いづれにしても、新聞紙の側からは不可抗的缺陷としか見ようのないこの事情のために、報道や論評の偏倚性が、幾分か緩和されて行つて、それが却て一般公衆を利する結果に導くのは、一個の皮肉な現象だといはなければならぬ。かう考へるときは、報道敏速のための死物狂ひの競爭は、一方に於ては、始終虛報誤報の原因となつてゐる――かういふ虛報誤報は、同一紙上に出る後報、若しくは他紙上に出る別報に依つて、幾分匡正されてゆく場合もあるが――ものであるにも拘らず、他方に於ては、時として新聞紙の背後からその報道や論評を支配するインダストリアリズムが豫期しない結果を產むこともあるのである。かういふことの外に倘ほ、或る單一の新聞紙の報道から或る事件の眞相を掴むことが到底不可能な場合にも、多くの新聞紙の報道を一塊に突き混ぜて判讀すれば、その間に自ら、これに對する一條の通路が發見される、といつたやうなこともまた、多くの新聞讀者たちの經驗するところのものである。

ズインマーンが言ふ通りに、我々が新聞紙に眼を落すときには、我々の眼光をして能く紙背に徹せしめるほどの冴えた判斷力が我々自身のものでない限り、我々はそれがために、却て際限もなき迷路に深入りし勝ちのものである。けれども、かういふことは、その裏面に於て、我々がそれほど冴えた判斷力を持つ場合には、我々は新聞紙から我々の實際的政治批判のための有力なる材料を抽き出し得るものであることをも、同時に意味するものである。尤も、我々がこの目的のために新聞紙を最も有效に使用しようと思ふならば、鍛錬せられたる判斷力に、關係問題に對する或る程度の專門的知識と、報道の眞僞を鑑別する方法に對する或る程度の理解とを結び附ける必要があることは、事實である。が、兎に角、これだけの用意が我々に具はつてゐる場合には、新聞紙が我々の目的のために甚だ有用な材料供給機關の一つと

して見做すべきものであるばかりでなく、特に一般的興味及び利害感に繋がれる事柄の關する範圍内に於ては、絶對的に必須なそれと見做すべきものである。そして、このことは、無數の缺陷と病弊とに充ちてゐる現代の新聞紙に關しても、縱し或る程度の保留を附けながらにもせよ、我々がその承認を強要せらるるのを感じるところのものである。

### C 批判構成上の障害

——今日の一般の政論の上に見られる缺陷——

先年我國にもデモクラシーを基調とする啓蒙的政論が流行した時期に比べると、近來に於ては、組織的政論に對する一般公衆の興味が、非常に薄らいで來てゐるやうに見られる。無論、前にも述べた通りに、その日その日の政治上の事件若しくは問題に關する日刊新聞紙の、間に合はせ本位の論説——殊に餘白塞ぎの形で掲げられてゐる短評——は、今日でも案外に廣く讀まれて居て、殊に政界の動搖期に於ては、相當に有力に輿論形成の上に作用して居ることは、事實である。がしかし各種の政治問題の性質を、多少の程度に於て根本的に解説し、それを組織的に論述することを企てゝ居るやうな種類の政論は、今日では、まづ第一に、その新聞雜誌の上に現はれる度數に於て減少して來て居るし、また、それらが新聞雜誌の上に現はれたところで、一般公衆の注目を牽きつける力に於て萎縮して來てゐるやうに見える。かういふのは、おそらく、私一己の手前勝手な臆斷であるばかりでなく、我國の讀書社會の現狀、及び我國の評論界に於ける中心問題の移動に幾らかでも注意して居る人々のすべてが、一様に承認しなければならないことであらう。だが、かういふ事態が發生したのは、一體何に基因するものであらうか？ それに對する責任は、政論家達の側にあるものであらうか？ 一般讀者達の側にあるものであらうか？ それとも、これらの兩方の側に關係のない別の方面にあるのであらうか？

ものだらうか？――といふのは、一例を擧げようならば、デモクラシー論全盛時代以來絶えず進轉をつゞけて來た我國の社會狀態は、現在に於ては、いかなる種類の組織的若しくは解說的政論に對しても、最早そのレーゾン・デートルを與へる餘地を持たない點にまで行き着いたものと見做すべきものだらうか？といつたやうな意味で言ふのである。――

これらの諸問題を一々明確に解決することは、表面上は甚だ無雜作な事柄のやうに見えるにも拘らず、實は決して容易な仕事ではない。そして私は今、それを茲で、私の滿足する點まで企てゝみようとしてゐるものでもない。それには、私の用意が著るしく缺けてゐることに、私自身が心附いてゐる。けれども、それに關して私が今漫然と考へてゐることをでも、茲で序に一應述べておくことは、私の論述をこの次の問題に移す繼ぎとして見ても、多少の意味のあることであるから、私は、これから暫らくの間、それに關はつてみることにする。

私は右の設問の順序を逆に行つて、まづその最後のものに對する私の答案から書き始める。この點に關しては、私は、現在の社會狀態が、如何なる種類の解說的政論のレーゾン・デートルをも滅却する點にまで進轉して來てゐるとは思はない。否、それどころでなく、一般に社會狀態の進轉の過程の上に、さうした一點があるか否かといふことすら、考へ樣に依つては、寧ろ愚かな疑問である。人間の社會生活の上に、多數人の組織が存續する限り、そしてその組織が或る種の統制を要求する限り、そこには必ず或る種の政治問題が存續する筈であり、また、或る種の政治問題が存續する限り、そこには必ず或る種の解說的政論の存在の理由がある筈である。政治問題といふものは、煎じ詰めれば、多數人の意思の間に存する相互的關係――若しくは多數人の意思の間に行はれる相互的作用――の具體的表現であるにすぎない社會生活の必然的産物としての組織といふものが要求する統制の樣式及び運用に關する問題である。それ故に、人間の社會生活の存續する限り、そこに或る種の政治問題が常に存續する筈のものである。また、それ故に、文字通りの意

味に於ける『政治の否認』といふことは、成り立ち得ないものである。それは寧ろ、或る種の政治の様式及び運用に對する不信任の態度、及びその不信任を具體的に表現するために提案せられたる手段方法に關聯していはれるものである。疑ひもなく、如何なる種類の政治の様式及び運用も、他のすべての人間生活の附隨物と一樣に、決して本質上永久的のものでもなく、固定的のものでもなく、寧ろ早晩必ず變つて行くといふのが、そのものゝために定められたる運命である。それ故に、或る時代に行はれてゐる政治の様式及び運用に對する不信任を具體的に表現しようといふ運動が、或る時點に於て完全にその目的を達成する、といつたやうなことは、起り得る可能性の多分にあるものである。けれども、さういふ運動が完全にその目的を達成した瞬間には、最早、或る新らしき政治の様式及び運用が、舊來の政治の様式及び運用に取つて代つて、その地位を充たしてゐなければならない筈のものである。といふのは、さうした運動は、——といふよりも、更らに正確に言へば、凡そ或る社會的目的の達成を企圖する運動といふ運動は、——必然的に多數人の協同行動の上に立脚するものであるが、この多數人の協同行動は一種の社會的結合を前提とするものであり、この社會的結合は一種の組織の上に可能にせられるものであり、この組織は一種の統制を要求するものであつて、そして、この統制の内容を構成するものは、實に一種の政治の様式及び運用に外ならないからである。

かう考へて來ると、所謂『政治の否認』といふものも、實は一種の政治的態度であつて、そしてこの態度の作用は、疑ふべくもない一種の政治運動である。少くとも、『政治』といふ言葉を、或る特殊の意味——たとへば、フランツ・オッペンハイマーがその國家論に於て、『政治的手段』を說明する際（Franz Oppenheimer, *Der Staat*, 1912, pp. 11—15）に用ひて居るやうな——に於てではなく、その本來の意味に於て解釋するときには、我々は、必然的にかういふ結論に到達するのである。そしてまた、その意味に於て、アリストテレスの名言として古來の政治的文獻に幾度となく引用せら

れる例になつて居る『人間は政治的存在だ』といふ言葉に、深い味が含まれてゐるものと解釋することが出來るのである。それは、人間が『社會的動物』であることを前提としてゐるのであつて、そして、この前提が正しいものであることは、言ふまでもないことである。人間は人間として生活し始めた時から社會的動物であつた通りに、人間として生活する限りは、いつまでも社會的動物でなくて居られないものである。それ故に、人間が社會的動物でなくなつた時は、やがて人間が人間でなくなつた時であるべきだ、とさへも、極めて有理に主張し得られるのである。だとすると、苟しくも、人間としての人間の生活が存續される限りは、前に述べた理由に依つて、それにどういふ形式に於てかの政治が存續する筈だ、とも言ひ得られると、同時に、またその反面から、政治はそれ故に徹頭徹尾人間的な現象だ、と說くことも、何等の間違つたところがないのである。

我々は最近數個年來の我國の評論界の相當に有力な一部の間に、サンディカリズムから流れ出て來た一種の政治思潮が、縱し廣くとは言ひ得られないまでも、可なりに深く浸潤してゐた事實を、記憶してゐる。或る一派の人々は、そこから出發して、政治否認の聲を高く張り擧げたものであつた。そして、それは、我國の勞働階級の中の組織せられた勢力を代表してゐる諸團體の、對議會態度の上に、少からざる影響を及ぼしたもののやうに見られる。と同時に、それはまた、知識階級中の少くとも一部のものの、一般に政論と稱するものに對する興味なり注意なりを、或る程度に冷却した一因ともなつたものである。けれども、若し我々が、彼等の政治否認の主張を幾分でも有理たものと解釋しようとするならば、それは、現在行はれてゐる通りの政治の樣式、及びその運用、並びにその根本を構成する權力の性質、及びその所在に對する彼等の否認的若しくは反抗的態度に關聯するものと見做すべき範圍の內に於てのみ可能なのに過ぎな

いものである。そして、彼等の主張に影響されたものと見るべき勞働者の諸團體の政治否認を標榜した運動も、實は現在の政治に對する彼等の否認的若しくは反抗的態度の現はれであつたものと見るべきものであつて、政治そのものに對する否認的態度の現はれであつたものと解釋すべきものではないのである。この意味に於てならば、我々は彼等の主張及び行動を理解することも出來るし、また當時の情況を考慮の内に置くときには、それに同感することすらも出來るのである。けれども今若し我々の解釋を、この範圍の外に一歩でも越えしめるならば、彼等の主張なり、行動なりには、何等の意味も認められないものとしなければならないことになるのである。當時の政治否認の主張者等の中には、政治といふものの全體を否認するやうな口吻を用ひたものもあつたし、また現在でもさういふ口吻を用ひてゐるものが、全然なくなつたといふ譯ではない。がしかし、彼等が一般に政治といふものを否認しようが、しまいが、政治そのものは依然としてそこに存在するものでもあれば、また依然としてそこに存在しつゞけるであらうところのものでもある。たゞ舊き政治を破壞して、新しき政治を創造しようといふ要求が、政治の否認の聲の假裝の下に於て唱へられるやうなことは、今後も度々繰り返されることであらう。しかしながら、人間の社會生活が存續する限りは、——從つて人間が人間として存續する限りは、——如何なる形式に於てかの政治が、必ずそれに附き纒ふ筈のものであつて、そして、如何なる形式に於てかの政治がそれに附き纒うてゐる限りは、少くとも政治的義務（political obligation）の問題が、常に社會生活上の興味の中心の一つとして殘る筈のものでなければならぬ。ルソーの社會契約説は、曾つては、この問題を少くとも部分的に、解決することに依つて、法治國家思想の上に、政治的義務の道徳的基礎を貢獻したものであつた。けれどもそれは、現在に於ては、新興の政治的勢力としての無産階級の擡頭の前に、全然その權威を失ひつゝあるものである。そして、それに取つて代はるべき新しき政治的義務の基礎の設定に對する要求が、既に何處からといふとなく、また、

どういふ過程に依つてといふこととなく、自然と持ち上げられ掛かつてゐるのである。で、多少先見の明を具へた社會理論家若しくは公法學者等のあるものは、各方面から、幾分づゝ、この問題の解決のために貢献しようと、努力して、ゐる跡さへも見えないではない。それにも拘らず、この問題が、今尚一種の混沌狀態の中に置かれてゐることは事實であるが、しかし、同時にそれが、今後の社會理論中の重要なる一部分を構成するものとなるであらうといふことだけは、我々が承認しなければならないことである。

我々は、一方に於ては、かういふ風に、政治否認の聲の盛に擧げられたのを聞いたと同時に、他方に於ては、政治と生活との關係から、政治に背を向けることの非を鳴らす議論の廣く行はれるのをも見た。かういふ議論は、主として議會政治家たちや、政治的デモクラシーの基調の上に立つ諸新聞紙やの側から出たものであつた。彼等の主張の要點は、政治は各人の實際生活と密接な關係をもつてゐるものであるから、各人は政治に冷淡であつてはならない、といふ趣旨に歸着するのであつた。如何にも、彼等がいふ通りに、政治は實際生活と密接な關係をもつものである。それは過去に於てさうであつた通りに、現在に於てもさうであり、また將來に於ても永遠にさうであらうところのものである。しかも、現在に於ては、――過去に於てもさうであつたが、――政治は支配階級の人々にとつては、その階級的支配を達成する目的のための必要物として、その生活に交渉してゐるものであるが、これに反して、被支配階級の人々にとつては、さういふ階級的支配の目的物としてのあらゆる不利益が政治を通して彼等の上に課せられるといふことに依つて、その生活に交渉してゐるものである。各人の政治に對する關係が、かういふ風に別々のものになつてゐるといふことは、階級國家内に於ける必然的現象である。政治否認の諸主張の中で幾らかでも有理なものと見做すことが出來る主張は、かういふ關係を政治の上から拭ひ去ることを要求するものである。それはその本質に於ては、矢張り政治否認を標榜

する一種の政治的主張なのである。が、それを批難する人々は、全然この點を無視して、政治否認の主張者等が、一切の政治を破壞することに依つて、人間の社會生活を無秩序の混亂狀態の中へ投げ込まうとしてゐるもののやうに、いひ囃やすのである。けれども、政治否認の聲を擧げる人々の側からいへば、彼等は社會生活を混亂狀態の中に投げ込まうとしてゐるどころではなく、寧ろ反對に、現在の社會關係の下に於て、甚だしき混亂狀態を惹き起す原因となつてゐる階級的支配を消滅に歸せしめようとしてゐるのだ、ともいへるのである。のみならず、その主張及び行動に於て、政治否認を表明する必要に迫られてゐる側の人々が、彼等の生活事情若しくは彼等を繞る社會環境の上に何等の變化もないのに、何かの拍子に急に打つて變はつて、積極的に政治行動を執つて見ようとした處で、それがどうして彼等の生活の足しにならう！ 政治的權力が、常に彼等の不利益になるやうに行使されてゐることは、殊に勞働爭議などの場合に於て、彼等が最も切實に體驗して來たところである。それに對する不平の聲を彼等が議會に徹せしめようとしても、その通路は盡く塞さがれてゐる。また議會內から、いくらかでも眞劍に彼等の叫びに呼應しようとする聲は、絕對に聞かれないのである。かういふ狀態の下に於て、彼等が曾て現在の政治をボーイコットしようとしたのは、全然理解が出來ないことではないのである。けれども、彼等が最近に於て、彼等の周圍の社會事情の自然の轉換に伴れて、次第に政治行動是認の態度への方向轉換を試みたことを見ると、人間の生活が、その社會的方面に於て、如何に政治に密接に結びつけられてゐるかゞ、窺ひ知られるのである。これは疑ひもなく、山本內閣成立以來、普通選擧法案の議會を通過する見込みが、一時的にもせよ、確實らしく見えたといふ事實にも基因してゐようし、またそれよりも殊に、イギリスに於ける勞働黨內閣の成立といふ事實に影響されてもゐよう。若しくは更に、適切にいへは、後にもいはうとしてゐることであるが、現在の世界の上に動いてゐる、ある新しき現實の展開が、彼等の建設的意志及び希望を、それとなく湧き立た

せたといふ事實に負うてゐるものでもあらう。何れにしても、この事實は、人間の社會生活が、如何に不可分的に政治に結ばれついてゐるものであるかを示してゐる點に於て、我々に或る深い暗示を與へるものである。我々の立場から見れば、皮相的に政治否認の論據に同化するものも、また皮相的にそれを排撃するものも、一樣にこの點に對する精細な考察を缺いてゐるやうに考へられるのである。

現在の社會狀態が、如何なる種類の解說的政論の存在をも許さない程度にまで進展して來たといふ論據の不當であることは、大體、右に述べたことに依つて、明白になつたらうと思ふ。だとすると、現在に於て、各種の解說的政論が、次第に一般公衆の興味から離れつつある傾向のあるのは、その責任を一般讀者達の側に嫁すべきものであらうか？といへば、それに對する我々の答へは、甚だ簡單明瞭であらねばならぬ。一般讀者たちは、各自その趣味、嗜好、乃至必要に應じて自主的にその興味の焦點を定めるものであつて、外部から强制的に或る特殊の讀み物に注意を拂ふべきことを要求せられるのを甘受する義務を負うては居ないのである。それ故に、政論家たちの側からでも、誰れの側からでも、一般讀者たちの內的要求に合致したものを供給しないで置いて、たゞ自分勝手な注文から、任意に彼等の興味なり、注意なりを自分たちの方に引き寄せようとしたところで、それが終極に於て徒勞に歸すであらうことは、いふまでもないことである。それが假令、專制君主の我儘と威力とを以てしても、その結果は同じことである筈である。それは、人間性の然らしむるところである。それは恰度、官僚政治家や政黨政治家やが、勝手に國民思想の善導を企てるのと、同じ行き方である。少くともそれは、個人意識及び集團意識が、數年前とは比較にならない程度に於て眼醒めて來てゐる現在の社會狀態を無視した行き方である。それ故に、我々は、この上この問題を穿鑿する必要をもたないのであ

つて、こゝで直ちにそれと手を別つていゝのである。さうすると、餘すところは、我々が今關心してゐる問題に對する責任が、一般の政論家たちの側にあるか否かの一點である。それに對する私の答へを豫め言つて置くことにすれば、それは肯定的である、といふ一言に盡きるのである。私は今、その理由を、次に簡單に述べようと思ふ。

現在我が國に最も普通に行はれてゐる——そして、それは、何時でも、また何處にでも、最も普通に行はれてゐるものでもある——政論の種類を、次の三つに大別することが出來ると思ふ。その第一種に屬するものは、直接に或る特殊の政治的目的を達成するための手段として、實際政治家たち及びそれに隷屬する論客たちに依つて供給せられるのが普通であるところの、プロパガンダ式の色彩を帶びたそれである。また、その第二種に屬するものは、直接に或る特殊の政治的目的を達成しようといふ企圖の下に行はれるものではないが、一般的性質の或る政治的態度を勸奬する目的を以て行はれるところの、その説者の主觀的見解の色彩の著しく勝つたそれである。最後に、その第三種に屬するものは、現在の社會組織の肯定の立場から、政治機關の組織及びその作用を、主として法理的見地から解説するところの、内容的よりも寧ろ形式的に走り勝ちの、訓詁注釋流のそれである。これ等の三つの種類の政論は、無論、相互の間に多少の共通點を持つてゐるところから、嚴格に區別が出來ないものだといへない譯のものでもなく、また個々の政論の側からいへば、嚴密にはその何れにも屬しないでゐて、しかも大體上その何れにも屬するといつたやうな地位に在るものもないではない。けれども、かういふ區別は、大體上のものとして見れば、成り立ち得るものであると同時に、或る場には相當に便宜のあるものである。殊に、今の私の場合に於て、最もさうである。

ところで、右の第一種に屬するプロパカンダ式のものは、既往に於ては、我が國に於て行はれてゐた政論の殆ど唯一

の形式であつた時代もあつたが、――そして現在に於ても、相當に行はれてゐるものでもあるが、――しかし、それは、一般讀者たちの評價に於ては、最低の價値しか有しないものと見做されるやうになつて來てゐる。殊に、それは、デモクラシーの基調の上に立てられた啓蒙的政論――それは、政論の各種類の間に、殆ど均等に分布せられてゐる――が流行し始めた頃から、急にその勢力を失墜したものである。そして、その理由は、甚だ簡單明瞭である。即ちそれは、一方に於ては、少くとも一般の讀書社會に於ける社會的及び政治的知識への向上といふ事實からも來てゐるし、また他方に於ては、近來の社會生活に於ける個人意識及び集團意識の眼醒めといふ事實からも來てゐる。手短かにいへば、それは近來の政治社會の顯著なる趨勢の一つであるところの、立法部の聲價の衰退の傾向と、その歩調を一にしてゐるものである。現今に於ても、官僚及び政黨に通ずる諸政治家の、刻々の政治問題に關する評言は、依然として常に新聞紙上を賑はしてゐるが、しかし、それは、少くとも、多少の程度に啓發された讀者たちの間に於ては、或る特殊の利害關係に立脚する手前勝手な言說として受け容れられてゐるのに過ぎないのであつて、しかも、彼等自身の批判を導く目標としてよりは、寧ろその批判構成上の參考資料の一つとして取り扱はれる位が、關の山になつて來てゐるのである。

第二種に屬するものであるところの、論者の主觀的見解の色彩の著るしく勝つた政論は、知的優越感を強度に持ち合はせて居るすべての論客たちが、最も陷り易き誘惑の手を擴げてゐるものである。そして、さういふ人々は、官僚式の御用論客達の間にも、所謂新思想家の群れ』といふ名の下に一括せられてゐる論客達の間にも、相當の數に於て存在してゐるのである。彼等は、古來の――殊に第十八世紀の、若しくは第十八世紀式の――理想主義者若しくは理知主義者等の跡を追はうとしてゐるものである。彼等は、實際の政治社會の轉化が、彼等の高く揭げてゐる政治的理想を目標として進み得るものと信じてゐるらしくも見え、また、それを、彼等の頭腦から出た計畫や、施設や、『根本原則』や、

『指導原理』で、さういふ目標へ勝手に進ませ得るものと信じてゐるらしくも見える。といふのは、彼等が讀者達に與へるものは、常にザインでなく、ゾルレンであり、政治事實の觀察から出發した歸納的解釋でなく、彼等の空想若しくは思辨から捏ね上げられた演繹的說話だからである。それ故に、彼等が口數多く述べ立てるところも、結局は、『すべきだ』とか、『してはならない』とか、『するのが間違ひだ』とかといふやうな點に歸着するのである。彼等の言說は、或は花々しくもあり、或は莊嚴でもあり、或は奇警でもあることはあるが、しかし實際の政治社會に動いて居るあるがまゝの政治事實に對する適當なる解說をそれに求め得られない、といつたやうなのが普通である。彼等の多くは、豫言者の如く語るから、縱し故鄕には容れられなくとも、——なぜなら、故鄕は餘りによく、彼等の生ひ立ちや人となりを知り過ぎてゐるから、——政治進化の實際に通じない、いはゆるunnitiatedな俗衆を、一時的に蠱惑するには、充分である。けれども、一般の讀書社會が終極に於て眞面目に政論から要求するところのものは、彼等自身の對政治態度を具體的に決定するための基礎的材料としての實際的知識であり、歸納的解釋である。ところが、それらがさういふ政論から得られないのが通例であるから、暫らくの後には、彼等がそれに失望するのが落ちになるのである。否、さういふ風に失望するのは、讀者たちだけではなく、論者たち自身もまた、それと類似の運命に陷るのである。といふのは、彼等もまた、しまひには、世界が彼等の根氣よく指導する方向には中々動いて吳れさうもなく、勝手にそれ自身の軌道に沿うて廻轉しつゞけることに劫を煮やし、その揚句の果てには、『低級なる政治家』を罵り、『愚劣なる民衆』を嘲ることに依つて、纔かにその傷けられたる自尊心を癒やしてゐるやうに見えるからである。かういふ點に於て、彼等は、政治社會の進化の場面に於て實際上の役割を振り宛てられてゐるものが、彼等がその理想中に描いてゐるやうな『政治人』なのではなく、さういふ『低級なる政治家』や、さういふ『愚劣なる民衆』やであるといふ事實を忘れてゐるやうに見える。そこ

で、彼等が讀者達に供給するものは、地上の政治に關するものでなくて、天上の政治に關するものであり、人間の政治に關するものでなくて、神々の政治に關するものである。それ故に、彼等の頭腦から繰り出される折角の名論卓說も、結局は、一般讀者の實際上の要求とはそぐはないものになるのである。いかにも、政治的義務の基礎の探求が各時代の政治社會の興味の中心の一つである通りに、新興の政治的勢力が凄まじき勢を以て擡頭して來た今日に於ては、新しき政治的義務の基礎が、それといふことなしに、盲搜しにもせよ、探求されつゝあるといふことは事實であるに相異ない。それ故に、或る意味に於ける政治理想の供給は、今日に於ても、決して無用視せられるべきものではない。たゞ、今日に於て或る意味を持つ政治理想は、政治社會の進化の過程に於て實現され得る必然性のあるものの上に設定されなければならないものである。で、手短かにいへば、主觀主義的政論は、幾ら善意にそれを解釋しても、少くともこの點に於て不充分だといふことだけは、免れないのである。

最後に、第三種に屬するものとして上に掲げられたところの、法學的立場から試みられる訓詁注釋流の政論は、現在の政治機關の組織及び運用を、法學的立場から解說しようとするものである。まづ第一にそれは、今日の法學上の——殊に公法學上の——所謂『定說』の若干數を承認することから出發し、第二に、それは、現實政治事相を、その內容的方面からよりは、寧ろその形式的方面から說明しようと試みるものであつて、更に第三に、それは、その根本に於て、國家組織の體用及び政治機關の樣式及び運用の現狀——若しくは、少くとも、その現狀の根柢に橫はる原則——の肯定の基礎の上に立つてゐる、といつたやうな特質を示してゐるのが普通である。で、それが、かういふ範圍內に於て、或る種の實際的效用をもつてゐるものであることは、我々に於ても承認しなければならない事實であるが、しかし、その缺陷もまた、そこに含まれてゐるのである。そして、その實際的效用の方面は、こゝに特に取り立てゝいふ必要のないほ

ど、それ程平凡なものでもあれば、また過渡的性質のものでもあるから、私は今、それを省略することゝして、次に、その缺陷の方面を、一應考察して見ようと思ふ。

この種類に屬する政論を供給する人々は、その出發點に於て、今日の公法學上の諸『定說』中の主要なものを、無條件に承認してゐるといふことは、今しがた言つて置いたことであるが、殊に、法治國家思想とか、國家主權說とかの如きものは、殆ど何等の證明をも要しない眞理であるかのやうに、彼等の手に依つて、自由に振り廻はされてゐるのである。けれども、さういふ法的規範に關する官選敎科書的說明に盲從しないで、活きた實際の政治社會に動きつゝある諸現象を、科學的態度を以て研究しようと努力するものは、少くとも、さうした諸定說の價値を疑はないものは、ないまでになつて來てゐるのである。成る程、それらの諸定說は、近世紀の或る時期に於ける國內及び國際政治の實狀を、或る程度まで適切に說明したもののやうに見えたこともあるが、しかし、それ以來殆ど測り知られない程の變遷を經過して來てゐる現在の實狀の前には、段々間に合はないものになつて來てゐるものが、決して少くはないのである。殊に、法治國家說や、國家主權論の如きは、最早や一種の架空說、若しくは神話（myth）の地位に、祭り上げられようと——若しくは祭り下ろされようと——さへしてゐるのである。少くとも、私の知つてゐる範圍內では、前者はオランダの公法學者のクラッベの所謂『近代國家觀』（Die moderne Staatsidee）の學說に依つて、絕大なる脅威を與へられてゐるし、また後者は同じクラッベや、フランスの公法學者のレオン・デュギーの如き偶像破壞者的意義のある學者の手に依つて、殆ど致命傷ともいふべき程の打擊を加へられてゐるのである。何れにしても、かうした在來の諸定說は、今日の實際上の政治事實に照らして、精細な再考察を必要とするものである。またその或るものは、徹底的改造をさへ必要とするものである。それ故に、それらの諸定說を、絕對的眞理であるかのやうに、無批判的に受け容れ、そしてそれ

らを當然の前提として、出發してゐるやうな政論に對しては、我々は眞つ先きに、不信任を唱へずにはゐられないのである。

次に、この種の政論を押し出してゐる人々は、彼等が、何よりも殊に、在來の法學的方法に訓練されてゐる事實の結果として、彼等が取扱ふ題材を、内容的によりは、寧ろ形式的に叙述するやうに習慣づけられてゐるのが普通である。ところが、一般人が、政治に就いて知らうと欲してゐることは、その形式よりは、寧ろその内容であり、且つまたその内容が、或る形式をとつて現はれるに至るまでの過程である。固より、或る一定の政治機關の様式及びその運用に關する形式的知識も、これ等の存在を理由づけてゐる社會狀態が存續する限り、或る程度の實用的意味を帶びてゐるものには相違ないが、しかし、一般人が社會生活の生活者としてのその地位に於て、必然的に最も痛切に必要を感ずるものは、さうした政治機關に向つて作用する現實の社會的諸勢力の實質及びそれ等の間に行はれる相互的關係若しくは相互的作用の實況であらねばならぬ。これは、當然さもあるべきことである。といふのは、彼等が社會生活の生活者として、各自の生活態度を決定するためには、さうしたものに關する知識が、當然にその根本條件になるものだからである。かう考へて來ると、一般人の社會生活意識の眼醒めの進みに伴れて、形式本位の法學的政論が、次第に内容本位の社會理論若しくは社會的政治理論に壓倒されて行く形勢が、最近數年間に於て、著しく目立つて來たのは、別に不思議でも何でもないのである。

更らにまた、此種の政論の供給者等は、現狀——若しくは、現狀の根柢に横はる原則——を肯定する立場にある結果として、政治現象を、その動的方面に於て取り扱ふよりは、寧ろその靜的方面に於て取り扱ふ傾向を示すのが普通である。彼等は、明示的にさうしないまでも、少くとも暗默的にさうするのを普通とする。ところが、かういふ觀察法が、

政治現象の實際の狀態及びその實際の動きを示すことが出來ないものであるといふことは、今日に於ては、凡そ政治現象を科學的に研究しようとしてゐる程の人々なら、知り過ぎてゐる程知り拔いてゐることである。即ち、すべての政治現象の個々のものは、社會進化過程の不斷の流れの上の或る一點に於て、他のあらゆる政治現象に關聯して、その地位を占めてゐるものである。それは、縱には、その前に過ぎ去つた諸現象と、その後に來ようとしてゐる諸現象とに不可分的に連絡してゐるものでもあり、また横には、それと並存する諸現象と、複雜に交錯してゐるものでもある。一般人が、社會生活の生活者として要求する政治的知識は、かうした諸關係の、あるがまゝの狀態及び關係の如實的觀察の上に、基礎づけられたものでなければならない。それは、單に、政治事實の科學的認識のために必要であるばかりでなく、一般人が社會生活の生活者として、その生活態度を決定するための基礎的條件としてもまた、同樣に必要なものである。殊に、前に一再ならず觸れて置いた政治的義務の如きものは、社會關係の刻々の變化に伴れて、それ自體もまた變化しなければ、單にその施行力を失ふのみならず、時としては屢々、社會生活を混亂狀態に導くものであるから、その發見、若しくはその設定のために役立ち得る政治的知識は、必然的に、政治社會の動的觀察に即するそれでなければならないのである。だとして見れば、さういふものには緣遠い形式本位の法學的政論が、段々その生命を失ひつゝあるのは、當然の成り行きだといはなければならないのである。

以上、私は、今日最も普通に行はれてゐる政論の主要型、並びにそれ等の各々に含まれてゐる缺陷を指摘して置いた。で、若し今日の政論が、今日までにそれから失はれて行つた一般公衆の興味と注意とを取り戻さうとするならば、一方に於て、それ等の缺陷を避けることを努めると同時に、他方に於て、それ等の缺陷に關聯して擧げられたところの、そ

れが當然持つべき諸條件を、現實に持たなければならないことになるのである。詳言すれば、先づ第一に、それは、純然たるプロパガンダ式のものであつてはならない。次に、それは、純然たる主觀的の産物、若しくは純然たる空想の産物であつてはならない。それは、活きた政治事實及びその實際上の動きに觸れたものでなければならない。それは、假令單に、政治事實の敍述だけに止まらないで、それの將來に向つての展開の方向を指示する議論を含んでゐる場合に於ても、または、政治上の或る『指導原理』の發見若しくは設定の試みを含んでゐる場合に於ても、政治事實の觀察から出發した歸納的解釋の基礎の上に立脚したものでなければならないのである。またそれは、政治事實を、單にその形式的方面から說明するに止まらず、それを實質的方面からも討究したものでなければならない。この點に於て、それは社會理論としての性質を帶びなければならないものであるが、しかし本來の純然たる社會理論よりも、更らに一步を進めて、社會的諸勢力の作用の政治的に表現せられるまでの過程を、その諸段階に亘つて闡明しなければならない。このことはそれが、すべての政治現象を社會進化の過程の産物として、取扱はなければならないといふことに交渉してゐるものである。最後の意味に於て、それは、現在に於けるすべての政治現象を、相互的に關聯せしめて考察しなければならないと同時に、それを過去及び將來の諸現象と連絡せしめて觀察しなければならないのである。かくすることに依つて、それは始めて、社會生活の生活者としての一般人に關はる重要問題として、彼等の興味と注意とを要求することが出來るのである。

かういふ仕事は、疑ひもなく、無限の困難と障碍とに取卷かれてゐるものである。少くとも、今日最も廣く行はれてゐる政論の主要型として、私が上に掲げたものの比較的安易な行き方とは、似ても似つかない困難と障碍とに取卷かれてゐるものである。それには、先づ第一に、前にも述べた通りに、材料蒐集上及び取扱ひ上の障碍がある。この方面

から來る障碍は、現在のところでは、まだ容易に打ち勝てないものとして殘つてゐる。がしかし、假りにそれが打ち勝たれたにしたところで、その外に尙ほ、手短かには到底言ひ盡せない程の、幾多の難關が、まだその先きに控へてゐるのである。觀察の透徹、判斷の正確、推理の周到、題材に對する衷心からの興味、複雜なる材料を取扱ふために必要な忍耐力、……かういふものは、その豫備的材料の內譯を構成する諸項目の數例である。かういふ仕事が、滿足な程度になし遂げ得られる時期が來るか否かは、疑問である。が、社會生活の生活者としての一般人の注意と興味とを要求する權利をもつ政論は、その方向に添うて行はれなければならないのである。そして、さういふ種類の政論の、現在に於てさへ既に、その出發點を離れかけてゐるものが、時としては見受けられることがあるのは、事實である。それが、どういふ程度まで、進み得る可能性があるものであるかの問題が決せられるのは、無論、將來のことであるには相違ないが、しかし現在に於ても、それを試みる必要と價値とがあるといふことだけは、確かな事實である。私は、私が今、この方向に於て、幾分の成功をでも收め得るものとは思つてゐない。けれども、たゞ私は、このことを念頭に置いてなりと、これから本文の筆を進めようとしてゐるのである。

## 三　集團現象の政治的意義

新らしき政治學說に於ける最も顯著な傾向の一つは、集團過程を通しての政治現象の觀察の風潮の出現である。樣々の論據の上に立つ各種のフェデラリズムの原理や、非中央集權の原理や、ファンクショナリズムの原理やのやうに、その核心に於て多元的國家觀（the pluralistic state theory）の上に基礎づけられてゐる諸學說は、概ねみな、社會生活上の集團過程の考察を以て、その全體系を裏附けてゐるのである。

かうした集團過程の考察に立脚するすべての多元的國家觀は、學說史上の一現象としては、第十八世紀以來の政治論の分野を獨步したほどの全盛を見せたものであるところの、そして現代人の眼にも餘りに親しいものになり切つてゐるところの、所謂一元的國家觀(the monistic state theory)に對する反動として最近に於て勃興したものであることは、ハロールド・ラスキが、その二三の著書に於て、明快に指摘してゐる通りである。がその形成の過程からいへば、多元的國家觀に屬する多くの學說は、それぞれに、近代の政治社會の活きた事實の實際的觀察の上に打建てられたものであると同時に、また、それに依つてその論據を强められたものでもある。

第十八世紀以來の自然法學の體系から脈を引いて來てゐる政治上の諸學說——それらのものは、大抵は、一元的國家觀の類名の下に包括され得るものであるが、中には、將來の社會生活の目標として、無政府主義に眼を向けてゐるものもある——の主潮をなしてゐるものの最大弱點は、主として、その注意を個人と國家との關係の上にのみ集中することに急であつたために、事實上個人と國家との間に介在する地位を占めてゐて、個人的諸勢力を糾合することに依つて、國家生活の上にその生存表現を不斷に行つてゐる無數の社會的集團の存在、及びその働きに對して、この題目の重要さに匹敵するほどの、充分な考察を貢獻しなかつたところに横はつてゐた。尤も、すぐれた一種の洞察力を具へてゐたルソーの如きは、他の一般の契約論者たちとは流石に異がつて、近代政治的文獻に於て論爭の渦卷の中心となつてゐるところの、例の一般意志(volonté général)と總意思(volonte de tous)との關係の基礎的條件として、政治社會とその內部に含まれてゐる幾多の部分的社會との關係に觸れた——それを詳細には解說しなかつたが——ことに依つて、近代政治生活上に於ける集團現象の意義に對し、非常に意味の深い或る暗示を與へたことは、事實である。がしかし、多くの政治事實に對して驚くべき把握力を示すのが常であつた彼も、彼が著作に從事した時代から來た制約を免れること

が出來なかつた、といふ當然の事實の結果として、我々の時代の政治生活の上に於ける集團現象の中の、最も決定的意味を帶びてゐるものであるところの、階級對立關係に觸れる點までには、遂に進み得なかつた。これに反して、現代の科學的社會觀の主要な源泉の一つとしての地位を確實に握つてゐるマルキシズムは、階級對立の見地から、近代國家生活に於ける統治關係を闡明することに依つて、政治學說に對しても、一の新らしき出發點を指し示してゐることは事實であるが、しかし、各階級内に於ける各種の諸集團の聯立の關係、及びこれらの諸集團の發生・成長・離合・集散の關係が持つ政治的意義を、少くとも我々の目的のために役立つほどの程度には、解說してゐないやうに、私には考へられる。

政治社會の現實に卽していへば、各階級は、無論現在に於ては、或る意味に於て、非常に大なる集團を形成してゐるものとして見るべきものであるが、しかし同時に、各階級はまた、その内部に群立してゐる多數の集團の抱合から成り立つてゐるものとも見るべきものである。更らにまた、國境を超えて存立する諸集團がある通りに、階級の境域を超えて存立する諸集團があることも、考慮の中に加へなければならないものである。多くの點に於て、各階級もまた、國境を超えて聯結せられて行く傾向を示してゐるものでさへある。とにかく、かういふ風に、國家及び階級に依つて、縱横に貫通せられてゐる無數の諸集團の、形成・存續・變轉・及びその間に於ける複雜なる相互的交涉關係が、現代の國家生活及び國際生活の上に於て、主要なる意味を帶びるあらゆる現象の根柢に作用してゐるものである。そして、この點に關しては、集團過程の觀察に立脚する政治學說が、既に或る程度まで、光りを投げてゐるのは事實であるが、しかし大體に於ては、今後の政治學が、その注意と努力とを集中しなければならない分野が、無限の廣大さを以て、この方面に橫はつてゐるといふことも事實である。

自然法學系統の政治學說が、國家に對立するものとしての個人の地位を極力强調したことには、無論絕大な歷史的意義がある。それは、ルネッサンス時代以來の、個人意識の眼ざめといふ、一大歷史的重要意義のある事實に關聯してゐるものである。神秘で包まれ、傳統で固められてゐた中世紀以來の政治的專制主義に立ち向つて、紀念すべき凱歌を擧げたものは、實に個人の權威と價値との認識の上に足場を据ゑた政治思想及び政治運動であつた。この事は、事新しく述べるまでもなく、近世紀の政治史の輪廓だけをでも覗いた人々の誰れもが、熟知してゐることである。けれども、この個人主義的政治思想が、有效にその戰ひを戰ひ終へてから、間もなく、それはその學說的價値を失はなければならない運命に陷つた。あるがまゝの社會事實の科學的認識の新傾向が、その破綻の危機を醸成したのであつた。

現代の社會に於て、個人意識が熾烈に働いてゐることは、否むことが出來ない事實である。けれども、如何なる個人意識も、社會生活を離れては存在しない、といふこともまた、同樣に明瞭なる事實である。この意味に於て、個人意識は社會的產物であつて、從つてそれは、社會的性質の刻印を打たれてゐるものである。それは、その發生に於て社會的である通りに、その表現に於てもまた、社會的である。といふのは、必ずしも、個人意識は常に社會的に組織せられた集團を通して表現せられるに決まつてゐる、といふことを意味するのではなくて、寧ろ、さういふ集團を通して表現せられる場合は勿論、だが、さういふ集團を通してゞなく、直接に、單獨に表現せられる場合でも、常に社會的效果を伴ふものだ、といふことを意味するのである。個人意識表現の意義も動機も、一にそこに存するのである。しかし、これだけのことを認めた上でも、我々は、尙ほ個人意識が、社會的に組織せられたる集團を通して表現せられる場合が、無限に多くあるといふ事實を、特に注意しなければならないのである。

個人意識の對象としての個人的利害關係は、物質的のそれにせよ、精神的のそれにせよ、その中に、組織され得ない

もの、若しくは組織される必要のないものを含んでゐると同時に、組織され得るもの、若しくは組織せられる必要のあるもの、若しくは組織されるのを利益とするものをも含んでゐる。コールが、その『社會原理』に於て、個人的欲望に關して適切に述べてゐる言葉（G. D. H. Cole, *Social Theory*, London, 1920, p. 33）は、そのまゝ、この場合にも、適用することが出來るものである。ところで、組織され得る、若しくは組織される必要のある、若しくは組織されるのを利益とするやうな種類の利害關係は、言ふまでもなく、それが組織されることに依つて、最も强くそれ自身を表現し主張し得るものである。多くの個人的利害關係が集團的利害關係に組織化される傾向は、この人間社會の必然的事實の必然的産物である。また一方、各個人の側から見れば、彼がその生活上に於て持つ組織可能の利害關係は、——組織不可能の利害關係にしても同じことだが——決して單一なものでなく、多岐多端なものであることの結果として、彼は、その或るものを甲の集團を通して、またその或るものを乙の集團を通して……といふ風に、自己が持つさまざまの利害關係を、さまざまの、それぞれ適當な集團を通して、表現し主張しようとする、必然的要求を持つものである。それ故に、各個人は、彼自身がその生活上に於て持つてゐる利害關係が多いだけ、それだけ多くの集團に屬する自然的傾向を示すものである。かくて、現代の政治生活に於て、最も有効に主張され表現されてゐる利害關係は、常に例外なく、組織化されたるそれであるところの集團的利害關係——階級的利害關係もそのうちの一つである——なのである。集團現象の政治的意義の重要さは、實にこの點から來てゐるものである。

## 四　我國の現政局の上に於ける集團過程（上）

### ——局面の新轉換——

集團過程の政治生活に於ける意義が次第に增進しつゝあることは、現在の世界の殆ど全部を通じて、普遍的に現はれてゐる傾向の一つである。そして、それは、現在の我國をも、例外にしてはゐないのである。我々は、動々もすれば、社會理論若しくは政治理論の或る種のものを、諸外國の現狀を說明してゐるものとして玩味こそするが、それが、我國の現狀に適用し得べきものであるか否かを吟味するのを怠る場合が、屢々ある。それは、一方に於ては、現代の世界の生活が、經濟的の方面に於てと同樣に、他のあらゆる物質的及び精神的の方面に於てもまた、次第に連帶性に繋がれる程度が、急調子に高まりつゝあるといふ事實を忘れ勝ちなところから來てゐるのでもあるが、また他方に於ては、各種の社會的及び政治的事實の進展及び轉變は、大抵は皆、特別の觀察者以外の人々の視野の外に在つて、隱微の間に、その完成への道程を經過して、そして、その完成後に於て、始めて、その時まで不注意であつた人々に、驚異の眼を見張らすのが常である、といつたやうなところからも來てゐるのである。

集團過程の觀察に立脚する政治學說もまた、我が國に於ては、幾分か、この運命に陷つてゐるやうに見える。けれども、さういふ政治學說が注意せられてゐると否とに拘らず、我國の社會生活上に於ける事件の進行は、集團過程を、其政治的意義と共に、刻々に促進しつゝあるのである。詳言すれば、我が國の社會生活の上に於ても、各種の諸集團の構成、成長、及びそれら諸集團の間の相互的交涉及び關係が、不注意でゐる人々の想像してゐる——若しくは想像さへもしてゐない——以上に進捗してゐて、さういふ一切のものが、表面上は極めて隱微の間に、だが、實は異常な底力を以て、現政局の上に働き掛けつゝ、その政治的表現を求めようとする傾向を示してゐる。しかも、この傾向は、時日の經過につれて、意外の速度を以て、前進しつゝあるやうにさへ見られる。最近數個年來、政局の行き詰まりといふことが、多くの政治家たちに依つて感じられ、また唱へられてゐたのは、私の見るところを以てすれば、今日になつて稍々

明確なものになりかけて來た集團過程が、尙ほその醞釀期にあつた間に、政局の表面へ浮び上がらせた餘沫が惹起した場面の一光景だつたのである。が、それと同時に、近き將來に於てこの政局の行き詰まりを破るものも、この集團過程がなす業でなければならないと同時に、今後豫想し得られる限りの將來に向つて、我が國の政界の進化の方向を決定するものもまた、矢張りその同じ集團過程の仕事でなければならない必然性があるものと、考へ得られる理由があるのである。

我が國の政界に於ける政治的目的のために組織せられた集團として、最も夙くから注意せられて來たものは、官僚と諸政黨とである。その外に元老といふ、今は殆んど凋落に瀕してゐる小集團や、軍閥と稱せられる、本來は軍事上の目的のために組織せられたものでありながら、實際に於ては、このファンクションの領域を超えて、內政及び外政の上に隱れたる——しかし、それにも拘はらず、相當に、若しくは不當に、强大なる——勢力を振つてゐる集團があることも、前々から一般に知られてゐた。が、これらの二つのものは、發生學的に、形態學的に、並びに組織學的に、官僚の部類に組み入れられるべきものである。

かういふ譯であるから、官僚及び諸政黨の集團的勢力としての性質は、政局の底に隱れたる他の諸集團のそれに比して、割合に早くから注意せられてゐた。また、政局の底に隱くれた諸集團の中でも、金權を代表する富豪連の政治的勢力は、その官僚及び政黨に對する相互的牽引作用及び相互的援護關係の、實際政治上に及ぼす影響が、餘りに顯著なところから、それも割合に早くから注意されてゐた。私自身も、嘗て本誌を通して、かういふ諸點から、官僚及び政黨の性質を論述したこともあるし、またその時の論旨を拙著『政治の社會的基礎』の中にも(同書第三編第一章「現代日本に於ける政治的實權の移動」)收めて置いたから、こゝでは、それを再論する勞を省く。

が、現在の瞬間に於ても、一般世人の多くは、官僚と諸政黨とが、我が國の政界の全局面の主人公として、そしての指導的勢力として、完全にその地位を持續してゐるものと考へてゐるのである。若しくは、彼等は一歩を進めて、現政局の上に於ては、官僚がその歴史的頭目の漸層的自然消滅に依つて、歩一歩とその勢力を失墜しつゝ、次第にその地位を諸政黨に讓りつゝある、とまでは考へてゐる。そしてこの理由に依つて、彼等は、今後の政局を支配するものは、諸政黨を措いて外にない、とまで考へてゐる。否、單に一般世人が、さう考へてゐる許りでなく、諸政黨自身も、同じやうなことを考へてゐる。彼等が『超然内閣』とか、『特權内閣』とかを、何時までも何時までも排斥して、政黨内閣の出現を、何時までも何時までも待ち望んでゐるのは、そのためである。そして、近來に及んで、彼等の自力に依つてでなく、『時』の力に依つてではあるが、兎に角、元老の影の薄れが、急に目立つて見え出して來た――長い長い芝居の場面が愈々大詰に迫つて來たかのやうに――ことに氣がつくや否や、彼等のその希望の熱度が、一足飛びに昂騰して、彼等自身の時代が目睫の間に近づいたことを彼れらに思はせるのである。そこで 從來幾度か唱へられて、一たびも實現せられた例めしのないところの、官僚打破のための諸政黨の提携――縱し、一時的性質のものにせよ――らしきものが、『護憲三派の共同戰線』といつたやうな珍標語の下に、皆が互に探ぐつたいやうな感じに襲はれながらも、そして今のうちから既にその前途を危ぶまれて居ながらも、兎に角、實現せられることだけは、實現せられたのである。かくて彼等は、近き將來に於ける政黨内閣の出現に依つて、彼等が全局面の主人公となるであらう日が近づいたものであると考へてゐるのである。

彼等は、實にさう考へてゐる。が、彼等が果して、さう感じてゐるか否かは、一個の疑問である。いづれにしても、彼等が或るディレンマの下にある不安と焦燥とから脫れないでゐることは、その徵證が、幾らでも求め得られる。

To be, or not to be;—— that is the question.——

デンマークの若きプリンスのこの溜め息は、或る皮肉な意味に於て、彼等の溜め息でもある。彼等は、全政局に於て、導かうとしてゐるのか？ それとも、導きつゝ導かれようとしてゐるのか？ 若し彼等が導かれようとしてゐるのならば、それは何に依つてゞあるか？ 輿論？ 民衆？ しかし、輿論は輿論として存在するものでなく、民衆は民衆として無力である。無力であればこそ、民衆は民衆として存續してゐる譯である。のみならず、彼等自身も、從前に於て、屢ゝ有效に輿論を作つたこともあれば、また有效に民衆を煽動したこともある。それ故に、若し彼等が輿論や民衆に導かれるも とするならば、彼等以上に有效に、輿論に內容を與へ得るか、若しくは輿論の虛に乘じ得る力が、——または、彼等以上に有效に、民衆を動かし得るか、若しくは民衆の不注意の間を縫うて行き得る力が——どこかになければならぬ筈である。さういふ效果をもつ力は、一體どこから來るものであるか？ それは、彼等が手間探ぐりに探ぐりつゝ、まだ探ぐり當てゝゐないものである。けれども、集團過程の見地から、政治現象を見てゐるものにとつては、それに對する一般的な解答を與へることは、不可能なことではない。といふのは、さういふ力は、强弱の度の相異こそあれ、いづれも皆、それぞれの組織せられたる利害關係——若しくは、それぞれの集團的利害關係——から流れ出るものだからである。そして、最近に於ける我が國の政局の推移を凝視する時、我々は、さういふ種類の集團的利害關係の種々相が、そこにも政治的表現を求めるために、様々に活躍してゐるのを見るのである。從つて、集團現象の政治的意義を討究することは、我々自身の問題にもなつて來てゐるのである。

## 五　我國の現政局の上に於ける集團過程（中）

——最近の政局の變調の原因——

集團過程の目立つやうに昂進するにつれて、第一にそこからの壓迫を感じだしたのは、諸政黨であつた。多年大政黨の看板の下に納まつてゐた政友會や、憲政會も、ぢつとしてゐられないやうな焦燥氣分に襲はれた。小政黨の身輕さのために、比較的自由な立場にゐた國民黨は、『既成政黨打破』の標榜の下に、革新俱樂部の方へ變身して行つた。そこから、一時企畫せられた、非政友合同運動が展開した。けれども、それは、一時あらゆる點に於て、最も多くディレンマの下におかれ、最も多く中途半端の立場の上におかれてゐた憲政會の、積極的反對ではないが、逡巡的態度のために、立消えるともなく、立消えになつた。けれども、この運動が狙つてゐた政友會の切り崩しは、他の原因のために促進された。そして、その中の所謂殘留派が、却つて昨日の政敵であつた憲政會及び革新俱樂部と變態的に提携して、所謂『護憲三派の共同戰線』を張らうとしてゐる、といふ段取りにまで進んだのである。最近、數個年來の我が政界の事件の進行は、かういふ風に、變調であり、亂調であつた。そして、さういふ狀態が生じたのは、何よりも殊に、諸政黨のディレンマからであつた。

諸政黨のディレンマ！　それは、久しく氣息喘々の狀態を示してゐた官僚の官僚としての政治的勢力をして、幾年かの餘命を永からしめた。高橋內閣が、政友會の內訌のために仆れると、加藤（友三郎）內閣が出現した。其加藤內閣が、首相の死のために崩壞すると、『熟柿』が山本內閣の手に落ちた。山本內閣の沒落後には、淸浦內閣が、その衣鉢を次いだ。かうして、政友會を中心とする政黨內閣と、その次に來るか來ないか分らない政黨內閣との間には、三代の官僚內閣若しくは貴族院內閣が、いづれも短期のものであつたが、――そして、その最後のものも、いづれは短期のものであるらしく見えてゐるが、――兎も角も、絛蟲のやうに前後相連つて出て來た。政黨內閣は、今にも出さうで、出て來ない。それに反して、官僚內閣は、今にも引込みさうで、中々引込まない。

しかし、同じ官僚內閣とかいつても、加藤內閣以後のそれらは、最早、以前のそれらとは、その立場を異にしてゐたものであつた。寺內內閣までは、官僚內閣はなほ、幾分の傳統的威儼を以て、諸政黨の上に臨んでゐた。その寺內內閣は、事實上、所謂白紙主義を標榜してゐた政友會の好意的中立の上に存立することが出來たものであつたが、それでも鹿爪らしく『秉公持平』を笠に被ることも出來れば、『大權干犯論』を振り翳して、反對黨を威どすことも出來た。けれども、それは、官僚內閣らしき官僚內閣の最後のものであつた。加藤內閣となると、それは、『殘燭內閣』の殘燭味を、その本來の意味以外に於て、寧ろより多く發揮したものであつた。といふのは、それは、事實上、政友會の留守を預る內閣だつたからである。山本內閣は、少くともその成立の當初に於ては、可成り眞面目に普通選擧問題を取り扱つてゐたところから、官僚內閣とはいひ條、明かに政黨內閣への橋渡しになることを、その使命と心得てゐたもののやうに見えた。しかし、その一時的反動は、『御大典內閣』と銘を打たれてゐる淸浦內閣の成立と共に現はれた。淸浦內閣の成立は、今度は流產にこそ終らなかつたものの、可なりの難產であつた。そして、その難產の原因は、數日間に三たび變心の藝當を演じた首相が自覺してゐた通りに、今日の狀態の下に於て、衆議院內で多數を擁してゐる政黨以外のものが、內閣を組織することが不便になつて來てゐる事情があることが判つてゐたからである。けれども、それが流產の前轍を踏まないで濟んだのは、政友會といふ活動家の蟒が、貴族院內に飼つておいた油蟲といふ格で、近來段々と太つて來てゐた研究會の、自派の政治的地位に對する貴族らしい錯覺に基いたことも少くはないが、しかし、その根本に於ては、衆議院內で多數を擁してゐる政黨といへども、萬全の便宜を以て、內閣を組織することが出來なくなつてゐる、といふ事實から來てゐたものである。

何故に、かういふ狀態が生じて來たか？　それは、直接には、今日の政情の下に於ては、どの政黨が多數黨になつて

も、その『多數』は極めて不確實な多數——分裂前の政友會の『多數』が代表してゐたやうに——であるといふことから來てゐるのである。しかし問題はそれで盡きない。我々は、まだその次に、さういふ『多數』が不確實な『多數』になつて來たのは、何ういふ原因から來てゐるものであるか、の問題を究めなければならない。

この點へ來ると、我々は始めて、大戰以來我が國の社會生活の上に刻々促進されつゝあつた、諸集團の構成の過程、並びに、それらの諸集團の集團意識の眼ざめの昂進といふ、我々の眼前に行はれてゐる活きた事實に打つ突からざるを得ないのである。集團意識の眼ざめといふことは、各集團が、自ら代表してゐるところの、組織されたる利害關係——若しくは、簡單にいへば、集團的利害關係——に對する自覺、及びそれを社會的に表現し主張しようとする意思を含めていふものである。それは、個人意識の眼ざめの次の階段として現はれる必然性を持つてゐるものである。各個人が、自己の生活上に於て持つところの、所謂『組織可能の利害關係』の多くのものを、それぞれ適當の集團を通して表現し主張するのが最も有效だ、と覺つたとき、——それは各個人が、現代の社會環境の下に、必然的に、それを覺らされるべく迫られてゐるからである、——そこに、集團構成の過程が、避け難きものとなつて、現はれて來るのである。權力階級は、その權力生活の進行の或る時期に於て、一度は必ず、自階級以外の社會圏内に於て、集團構成の過程、及び各集團の集團意識の昂進を防ぎ止めようとして、あらゆる手段を構ずる必然的傾向を示すものである。けれども、如何なる集團に屬する如何なる種類の權力も、終極に於ては、決して永續的のものでもなければ、萬能的のものでもない。權力が如何なる樣式に於て行はれようが、それは、社會生活の上に必然的に來るものを、來させないやうに、防ぎ止めることは出來ない。それがなし得るすべてのことは、必然的に來るものの來る時期を、幾分か早めたり、幾分か遲めたりする位

が、關の山である。在來の官選公法學者等は、おしなべて、この點に於て、學說的に認識上の誤謬を繰り返して來た。けれども、古來の權力者等は、自分たちの體驗に依つて、この動かし難き鐵則の下に、苦き盃を嘗めて來た。我が國の官僚は、その比較的に永き權力生活の後に、それを嘗めた。我が國の政黨は、まだ權力生活といふ程のものを手にしない前に當つて、既に、事件の進行のために、それを嘗めることを强要せられてゐる。

## 六　我國の現政局の上に於ける集團過程（下）

### ——その政界に對する諸影響——

集團過程の促進のために、實際政治家たちが、先づ第一着に或る破局に面したのは、一時戰爭景氣が煽られた際に、勞働者の群れが、突如として集團的勢力として擡頭した時であつた。それに續いて、その當然の結果として生じた資本勞働の對戰に於て、その時以來の政府が、如何に事毎に、拙策を演じたか、また諸政黨が如何に事毎に無策を示したかは、まだ我々の記憶に新たなことであるばかりでなく、現に今尙引き續いて行はれてゐることでもある。無論、現代日本の政府及び諸政黨は、主として資本家及び地主の側の利害關係に奉仕してゐるところから、彼等は、その立場からして彼等に至當と考へられる事を出來る限りにしたに違ひない。けれども、それに關する彼等の施設を監視してゐたものは、單に資本家及び地主ばかりではなく、まだその外に、多少の程度に組織せられたる勞資兩階級の中間に介在してゐるところの、組織せられざる、若しくは殆ど組織せられざる一般公衆があつた。その一般公衆の間の意見は、政府や諸政黨が、たとへ資本家や地主の側の利益の代表機關として行動してゐる場合にもせよ、決して無視することが出來ないものであつた。それ故に、彼等が勞働階級の不利益となるやうに、政權を行使し、政策を決定してゐる場合でも、一般

公衆の前には、餘りに不道德に見えたり、餘りに暴虐に見えたりするやうなことの上に、少くとも多少の保護色を加へたり、多少の假裝を施したりしなければならなかつた。かういふ狀態の下に行はれる政府の政策が、勞働階級の反抗を買ふ程度に於ては少しも減じないで、しかも資本家や地主の側の不滿足を一層募らせたのは、當然の成り行きであつた。けれども、政府や諸政黨は、この點に關して、單に國內に於ける一般公衆の批判の前に立たなければならなかつたばかりでなく、國際勞働會議を通じて、直接に諸外國の批判の前にも立たなければならなかつた。で、この方面に於てもまた、我が國の政府が、如何に失策を重ねて來たかといふことも、周知の事實である。

けれども、この間に於ける勞働階級の諸團體は、その四圍の情況から、最近までは、政治行動の否認の態度――それも、前にいつた通りに、一種の政治的態度には相異ないが――を採ることを餘儀なくされてゐたところから、政府及び諸政黨は、その日その日の掛け引きに追はれる彼等の習性のために、勞働階級側に於ける集團構成の過程の影響を、彼等の實際上の政治行動の上に於て、まだ際立つて感じてゐないのは、事實である。がしかし、彼等は彼等が代表してゐる資本家や地主の側に於ける集團構成の過程の進行のために、足許から鳥が飛び立つた程の驚きを感じるべき運命に出合つたのである。この點に關しては、政府よりも、殊に諸政黨が、寧ろ一層多く狼狽した跡が見えるのである。

我が國の諸政黨は、年來久しく、商工業者及び地主等を締めての、資本階級若しくは有產階級の支持の上に立つてゐた。彼等の各々は、商工業者及び地主等を一團とした選擧區のすべてを一手で率ゐてゐた。そして、さういふことも、或る期間內は可能であつた。少くとも、この一團の中に、集團過程が目立つて行はれなかつた間は、可能であつた。けれども、さういふ期間も、竟に永續的のものではなかつた。富豪と官僚及び諸政黨との關係が、隱微の裡に、或る政治的影響を及ぼしてゐたのは、議會始まつてからのことであるが、しかし、一般の實業家連が、次第に集團化して、その

組織化されたる利害關係を、表立つて政治的に表現しようと努めるやうになつたのは、寧ろ近年來のことである。商工黨——現在では實業同志會の名で知られてゐる——の組織の計畫の風說が、始めて世人の注意を刺激しかけたのは、若し私の記憶が間違つてゐなければ、昨年の上半期であつた。しかし、地主側の政治的奔走も、樣式こそ異がへ、同樣に活潑に行はれたものであつた。こゝに於て、諸政黨の難關の上には、また新しき一つが加へられた。同じ一つの資本階級若しくは資產階級として、勞働者及び小作人等の諸團體とを一團とした無產階級に對立する場合に於てこそは、商工業者及び地主等から成る一團は、その間に相互的に一致した共同利害關係をもつてゐるにしても、この立場から離れて彼等自身だけになつて見ると、彼等の間にもまた、さまざまに異がつた——根本的に相兩立しない程にも異がつた——集團的利害關係が感じられるやうになつた。そして彼等の間に、次第に分立しかけて來た諸集團が、各自の立場から、その組織化されたる利害關係を、政治的に表現し、主張しようとするやうになつてから、諸政黨の煩悶時代が始まつたのである。彼等は漸く、その一手で、兩方の手綱があしらひ兼ねるやうになつて來たことを自覺し始めたのである。

分裂前の政友會が、衆議院内に於けるその絕對多數を以てしても、如何に右の集團過程の前に、その苦悶をどうすることも出來なかつたかといふことは、既に加藤内閣の下に於ける第四十六議會に於ての彼等の行動に依つて、その一端を示した。この議會に於て、政友會は、その絕對多數黨の勢力を以て、年來の懸案であつた營業稅輕減の問題を解決したことに依つて、都市の商工業者等を納得せしめたが、それは、同時に、地方の地主等をして、地租輕減の問題に對するその督促的態度を、急激に强めしめたのであつた。そして、憲政會が早くから、この問題に對して、力瘤を入れてゐたのに對して、政友會はその際、地租移讓の斷行を標榜して、それに後れを取るまいと焦せりだしたのである。

かういふ風に商工業者側と地主側とが、別々にそれぞれの集團的勢力を後楯として、それぞれの組織化されたる共同

利害關係を政治的に主張し、表現しようとしだしてからは、從來是等の兩者の側を一團とした選擧區に倚つてゐた諸政黨が、次第に苦しい立場に迫ひやられて來たのは、當然のことであつた。尤も、諸政黨は、かういふ一團に迎合してゐる外に、年來、全國各地の地方的共同利害關係に媚びることに努めてゐたものである。その中にも、政友會は、この點の上には、絕大の活動力を向けてゐたのであつて、そのために、到るところに『黨弊』を傳播せしめさへしたのであつた。政友會の分裂前までの大勢力が、少からずそれに負うてゐたことは、一般に認められてゐることである。けれども我が國の社會生活の上に、一般に集團構成の過程が促進されるやうになつてからは、かういふことが、今後永續しようといふ見込みが、段々と薄れて行つた。故の原總裁沒後の政友會の煩悶は、決して、その全部を、この巨頭の非運に負うてゐるものではないのである。また、それ以後の政友會內部の內訌は、幹部の二三の人々の意見若しくは、感情の喰ひ違ひに萌さしたものでもない。寧ろさういふ意見若しくは感情の喰ひ違ひこそ、政友會そのものの煩悶に萌さしたものと見るのが、至當の順序である。一政黨の勢力の成長期に於ては、その內部の小葛藤の如きは、その凄まじき成長力の中に呑み込まれてしまふものである。これに反して、その勢力が一旦下り坂に向ひかけると、その內部の紛擾が、事毎に誘發されて、延いてその終局の大破綻にまで導かなければ已まないやうになつたといふのが、殆ど筋書きのやうに決まつてゐるものである。かう考へるとき、我々には、今年の初頭に於ける政友會の分裂の素因が、どういふところに潜在してゐたかを、見極めることが出來るやうに感じられるのである。

事件のかうした進行の中に於て、實業同志會の如き、商工業者等の組織化されたる利害關係を、政治的に表現してゐる集團が、それ自身の立場から、旣成政黨打破の聲を擧げたのは、現政局の觀察者たちに、或る重要なる暗示を與へた

ものである。從來に於て官僚若しくは軍閥以外の側から放たれた政黨に對する批難の聲を、その源泉に遡つて探求する時は、少くとも三つのものに類別することが出來る。其一つは、一般公衆の側から出た、漠然たる政黨批難の聲である。それは、その一部分は、近年來諸政黨から流れて出た『毒素』の害が及んだ區域が餘りに廣く、且つその程度が餘りに猛烈であつたことに對する反動でもあるが、その一部分は、勞働者の諸團體の側の政治行動否認の態度の一影響としても見ることが出來るものである。その第二のものは、小政黨の側から大政黨に對して擧げられた、既成政黨打破の聲であつた。そして、それには、戰術的意味が濃厚に含まれてゐたことは、隱れもないことであつた。更らに第三のものは、各大政黨内に於て擧げられた政黨改造の聲であつた。これには、種々の直接原因が擧げられるが、その遠因は、右に述べた通りの、現在の社會生活上に於て、段々と促進されて來だした集團過程の裡に求むべきものである。そこへ、第四のものが加へられた。それが商業者の側の新生の政黨とも見られる實業同志會から擧げられた所の、それである。これも同じ集團過程から產まれたものであるが、しかし、それは從來の政黨批難の聲と、或る點に於て、其性質を異にするものをもつてゐる。といふのは、それは、特殊の組織化されたる利害關係を、現實的に代表する政治的集團から、あらゆる利害關係を名義的に代表する政治的集團に向つて投げられた巨彈だからである。一と口で言つてしまふなら、それは、諸政黨のデパートメント・ストアー・ポテリックスに對する否認の聲である。

　私は、私の思ひ附きの造句であるデパートメント・ストアー・ポリティックスといふ言葉を、殆んど何の氣もなしに用ひたが、しかし、その意味は、讀者たちに依つて、充分に諒解せられることゝ思ふ。が、念のために、多少註釋じみた說明を加へると、それは、かういふことになる。——從來、我が國の諸政黨の政綱を見れば、彼等が如何に、「國利民福」の看板の下に、各階級及び各集團に屬する樣々の『商品』を、デパートメント・ストアー式に陳列することに注意した

かを知ることが出來る。政友會の所謂四大政綱の如きものは、その一例として見るべきものである。しかも、買ひ手の鑑識眼が、まだ幼稚であつた間は、この『國利民福』屋の店頭も、相當に繁昌したものであつた。が、集團構成の過程は、買ひ手の鑑識眼を高めた。彼等は最早、デパートメント・ストアーの商品では、滿足が出來なくなつた。といつてデパートメント・ストアーにも、それ相應の便宜がある間は、この『國利民福』屋も、急に閉店する運びに至ることはあるまいが、然し幾分でも實力のある買ひ手の一部が、自ら政治的購買組合を組織しようとする傾向が見えかけた以上、早晩その店頭の商品の陳列替えを行はなければならないやうになるであらう。この點から見れば、分裂後の政友會の殘留組が、從來普通選擧を看板の中に書き加へてゐたところの、憲政會や革新倶樂部の方に歩み寄つたことには、或る深い意味がある。尤も彼等（殘留組）は、まだ普通選擧の實弊を擧げ得る段取りまでには、進んでゐない。それは、その從來の顧客若しくは地盤であつた諸選擧區に對する顧慮から來てゐるものであることは、無論である。そこに、舊政友會の片割れである政友本黨が、『穩健着實』を合ひ言葉にして開店し得る餘地があるのである。

この事實は、我が國の政界に於て、自由主義を立場とする政黨が、必然的に出現せねばならないものであることを物語つてゐる。若しくは、デパートメント・ストアー・ポリティックスを、どこまでもその儘持續して行くことが出來ないやうになつて來てゐる今日の諸政黨の或るものが、今日の『普選』の標傍の當然の延長としての自由主義の上に立つことになるかも知れない。否、恐らく、さうなつて行くであらう。さうなれば、無論、それに對立して、保守主義を振り翳す政黨も出現するであらう。それは、恐らく、政友本黨が、その『穩健着實』の主張の當然の延長として押し出すであらうことも、自然の成り行きらしく見えてゐる。もとより、今日の諸政黨が、急にそのデパートメント・ストアー・ポリティックスを、一氣に振り棄てるものとは考へられないから、從つて彼等が、自由主義とか、保守主義とかを取るにし

ても、それを在來の陳列棚の諸商品の中へ割り込ませるに過ぎないであらうことは、我々にも考へられることであるが、しかし、それでも全然無意義なことではないのである。殊に、我々は、今日の普選の種が、將來の自由主義の芽となつて擡頭するであらうといふ豫想の上に、或る興味と期待とを寄せようとしてゐるものである。

イギリスに於ては、自由主義と保守主義との對立が、今日では、既に過去のものにならうとしてゐることは、事實である。それ故に、そこでは、今日保守黨に對立するものが、最早自由黨ではなくなつて、勞働黨にならうとしてゐる。かくて、そこでは、現實政治の上に於ける自由主義と保守主義といふやうな思想的對立は、舊時代の遺物にならうとしてゐる。そして、現實的な利害關係の對立が、それに取つて代らうとしてゐる。けれども、それは、自由主義の主張が、大體に於て、そこに實現されてゐるからである。尤も、イギリスに於ても、それが、すべての政治的理想家たちの注文通り完全に實現せられてゐるものでないことは、我々が、バートランド・ラッセルの如き論客の熱烈なる抗議によつても、豫々から知つてゐることである。が、それにも拘らず、そこでは、それが政治的勢力の分岐點の一つになるには餘りに無意義になり過ぎてゐる程までには、實現せられてゐるのである。ところが、我が國の現狀の下に於ては、さういふことは、絶對的にないのである。けれども、それだけに、自由主義に對する要求は、少くともある一部に於ては、非常に痛切に感じられてゐる。のみならず、その要求を感ずるものの區域が、段々廣がらうとさへもしてゐる。我々はその傾向を、震災中での二三の不祥なる出來事に對する諸新聞紙の論調、及び一般公衆のそれに對する共鳴に於て、かなり明瞭に認めることが出來た。それ故に、我々は、今後の或る政黨の自由主義の主張、若しくは自由主義的態度が、一般公衆に向つて、アッピールする力を示すであらうことを、かなりの期待を以て豫想するものである。

といふのは、決して、利害關係の代表が、實際政治の上に弱められようとしてゐることを意味するものではない。

我々は、既成の諸政黨が、もとよりそれをしつづけるであらうと同時に、特殊の組織化されたる利害關係を、代表する特殊の政治的諸集團 ― それは、政黨の形ちをとるであらうが、しかし既成諸政黨と行き方を異にするものであるべきは、いふまでもない ―― が、今後益々多く現出して、所謂小黨分立の新形勢を誘致するであらう、とさへ考へるものである。殊に、普選實施の後には、商工黨や、農民黨以外に、勞働黨若しくは無產階級黨が擡頭するであらうといふ傾向も、今日に於て、既に現はれてゐる。勞働者及び小作人等を一團として見たる、若しくはそれらの上に、所謂無產有識者の集團を加へたものを一團として見たる、所謂無產階級は、その內部の集團が、それぞれに異つた特殊的利害關係をもつてゐるに拘らず、無產階級といふ一團としては、一つの階級的共通利害關係をもつてゐるのである。それは、恰度、資本階級、若しくは資產階級側の各集團が、それぞれに異つた特殊的利害關係をもつてゐるに拘らず、資本階級若しくは資產階級といふ一團としては、一つの階級的共通利害關係をもつてゐるのと同じことである。で、無產階級側の階級的利害關係、及びその內部の諸集團の集團的利害關係は、早晩或る形式に於て、政治的表現を見ない譯には行くまい。問題は、その階級的利害關係と、集團的利害關係との中で、いづれが先きに政治的に表現せられようとしてゐるか、の一點にあるのだが、現在豫想し得られる限りでは、前者が先づ第一着に、政治的表現を得ようとしてゐる形勢があるのである。これには、さまざまの原因のあることも考へられるが、しかし、その最も根本的なものは、經濟問題と結びついてゐるものとすべきであらう。即ち、恰度彼等の從前の政治行動否認の態度の根柢にも、彼等の經濟的實力問題が、含まれてゐた通りに、彼等が今後、政治行動に入る場合にも、矢張り同じ問題が、少くとも一時的には、彼等の態度を決定するための、先決條件となつて働くであらう、と考へられる理由がある。

以上私は、主として經濟的利害關係を基礎とする諸集團の構成の過程、及びその影響を、現政局の上に現はれてゐる姿のまゝに觀察しようと努めた。が、その外の、所謂精神生活の方面の利害關係を代表する諸集團の構成の過程も、近來に到つて、益々活況を呈するやうになつてゐることは、いふまでもない事實である。けれども、それは、政治的方面に於て、決定的指導要素にはなつてもゐないし、またならうともしてゐないから、私はそれを、私の注意の外に置いた。たゞ、地方的共同利害關係に立脚する集團過程の構成は、政治批判の方面からも、注意しなければならないものである。我が國に於て見るやうに、首府が社會生活、若しくは文化生活の唯一の中心となつてゐるやうなところでは、地方的集團が、社會的にも政治的にも、際立つた特殊性を發揮しないのは、理由がない譯ではない。けれども、この方面に於ても、既に或る變遷が現はれ始めてゐる。それは、首府以外の二三の都市が、經濟的中心として、次第に優越的地位を占めるやうになつて來てゐる事實に基因することも、少くはあるまい。我々は既に、第四十七議會（臨時議會）に於ける帝都復興豫算の討議に關して、如何に、地方集團の意識が活躍したかを見た。また、火災保險問題の處理に關しても、如何に、經濟的集團利害關係が、地方的集團利害關係に依つて、横斷せられたかを見た。かういふ點に、集團構成の過程の將來への進みを、暗示するものがあるが、ここでは、これ以上、それに觸れる必要はあるまいと思ふ。

上來概説したやうな、我が現政局の上に見られる集團構成の過程は、單に右に述べたやうな諸影響を、現實政治の上に及ぼさうとしてゐるのみならず、それにも劣らない程に決定的な影響を、政治學説の上にも及ぼさうとしてゐるのである。それに關して、先づ第一に、考へらるることは、在來の主權絶對説の上に築き上げられてゐる一元的國家觀の崩壞の運命の免れ難いことである。主權の學説が、今日既に、神話化しつゝあることは、前に述べた。かう考へるとき、我

我の眼前に、集團過程の政治的意義に立脚する多元的國家觀の前途の方向が、豁然として展開するやうに考へられる。が、その細論は、本文の範圍外に亘ることである。

## 七　新らしき現實の展開

人類生活が始まつて以來、集團過程が行はれなかつた時代がなかつた、といふことは、人間を社會的動物として見るとき、我々が當然に到達せざるを得ない斷案である。けれども、それが驚くべく急激なる速度を以て全社會の上に波及して行つて、至るところに集團意識の強烈なる眼ざめを促進したといふやうなことは、近代社會――殊に現代社會――での顯著なる出來事の一つである。現代の社會思想上の諸々の流れは、いづれも皆、多少の程度に於て、それに影響されてゐないものはない、といふことは、決して過言ではないのである。

しかし、集團過程が、現代社會生活の上に於て、空前の活況を以て普遍的に行はれてゐるといふことは、決して、それを自然の成行に放任しておいていゝといふことを、意味するものではない。それは、その自然の成行に放任せられたまゝでおかれるときには、結局は、全社會を驅つて、或る混亂狀態の渦中へ導かねば、已まないものであらう。それ故に、それは、早晩どうにか、整理され統制されなければならないものである、といふこともまた、推理の當然の結論として、引き出し得られることである。この點に於て、我々は、さういふ整理及び統制の道程を指示するものとして、或る種の社會哲學の存在の理由を肯定することが出來る。社會科學は、集團過程の事實に關する知識を供給し、また、その事實から歸納された法則を啓示する。けれども、さうした知識及び事實を基礎として、集團過程の整理及び統制の目標を發見することは、多少とも社會的實効を期する社會哲學が、當然その任務とすべきものでなければならぬ。もとより

り、一切の社會事實を無視して、若しくは、一切の社會事實の科學的觀察から出發しないで、單に當該學者若しくは思辨家の主觀的産物としての社會指導原理を廉價に提供する種類の社會哲學は、過去に於て、既に供給過剩の程度にまで生産せられつゞけて來たものである。が、さういふ社會哲學に、何等の社會的實効も價値も伴つて來てゐないものであることは、私が既に前に述べたことでもあるが、しかし、事實に依つても、餘りによく證明されてゐることでもある。けれども、社會事實に對する精細なる科學的觀察に即して眞面目に企てられた社會哲學上の勞作の多くは、たとへそれらが豫期の效果を擧げてゐない場合でも、何れかの點に於て、我々を啓發する或るものを持つてゐるのが、普通である。一例を擧げて言はうなら、前に參照したコールの『社會原理』の如きは、まさにその一例である。我々は、その中の所説を徹頭徹尾承認する義務を毛頭感じないが、それにも拘らず、我々は、それから樣々の有益なる示唆を受けてゐることを、否むことが出來ないのである。

けれども、コールも右の書中に言つて居る通りに、社會哲學は、結局、その核心に於て價値の問題を含んでゐるものであるから、一人が掲げるそれが、萬人の承認を得ることが出來ないのは、いふまでもないことである。少くとも、それが萬人の承認を得るまでには、自由討議を必要とする。否、實をいへば、自由討議が如何なる程度に行はれたにしたところで、萬人が萬人ともそれを心から承認するやうにならうといふやうなことは、若し過去に於ける歴史的事實の證明が信頼し得られるものとすれば、到底望み得られないことである。それは、誰れにでも拒めない事實だ、と言つてよからう。が、それにも拘らず、自由討議の必要は、如何なる社會制度の下にも、存在するものである。といふのは、或る社會哲學が指し示す社會統制の道程の目標への前進が斷行されようとする時には、縦し萬人が萬人ともそれを承認するには至らないまでも、少くともその時そこで萬人の意向（輿論）に最後の決定を與へ得るに足るほどの一部分の人々

若しくは集團——縱しそれが比較的少部分の人々若しくは集團にもせよ——が、それを承認してゐることを以て、その必須なる前程條件とするのである。さういふ場合にも、比較的に多數の人々が或る程度の强制を感じるやうなことはあらう。（多數の人々のための行動が、多數の人々に依つて非行と感ぜられるのは、皮肉な現象であるが、それも一の人生事實として、已むを得ない場合がある。）がしかし、さういふ場合には、それは、少くとも、それに伴ふ虞れのある社會的動搖を見ないで濟むであらう。否、さういふ社會的動搖すらもまた、すべての場合に絕對に避け得られるものとは限らない。と言つて、自由討議の豫備的段階が必要だといふ主張は、そのために、少しでも不當若しくは無用なものにせられるべき譯はない。否、自由討議の豫備的段階が必要だといふ主張は、さうした社會的動搖をも、出來るだけ狹い範圍内に止まらしめよ、といふ、社會生活上の當然の要求から見て、一層至當な、一層有用なものとせられるべき根據を持つてゐるのである。この點から、我々は、政治上の自由主義の實現の豫想の上に、可なりの期待を寄せたのである。

從來に於て、我國の支配階級は、各國の支配階級と同じく、自階級の存立のために都合のいゝ社會哲學を、考へ得られる限りの方法に依つて、民衆の上に傳播せしめるために、絕大の努力をして來た。そして、彼等はまた、各國の支配階級と同じく、さういふ社會哲學の幻滅を將來する危險を伴ふ種類の、各種の集團意識の發生を防止するとにも、腐心して來た。それにも拘はらず、來るべきものは、遂に來たのである。現在に於ては、如何なる權力の行使も、全社會生活の上に於ける集團過程の急速なる進歩を、如何ともすることが出來ない。そして支配階級のそれに對する抑壓手段は、單に全社會に、より以上の擾亂を醸成せしめる動因となる虞れがあるのみならず、同時に彼等の地位の沒落を早めるやうになるであらうとの脅威をさへ、示すやうになつて來た。今日に於ては、彼等といへども、自由主義への前進が已むを得ないものになつて來てることを、悟つてゐる筈である。

他方に於て、勞働者の諸團體にしたところで、彼等が一旦、政治行動否認の態度を棄てゝ、その是認の態度にやつて來た以上は、矢張り自由主義の確立に努力しなければならないことを感じる筈である。彼等の所謂『議會利用』の政策が、縱しどういふ動機から出て來てゐて、そしてどういふ意味を帶びてゐるものにせよ、この政策のためにも、自由主義が必須な前提條件を構成することは、言ふまでもないとである。幸にも、彼等は、それを自覺して來てゐるやうに見える。それは、彼等の過激社會運動取締法案に對する當初からの態度に依つても明白であるが、しかし、最近の勞働總同盟の大會に於ては、この點が、一層明白にせられた觀がある。しかも、彼等が、この點を強調する傾向になつて來たのは、大震火災の際に於て彼等が得た教訓に負うてゐるとも少くないことは、疑ふべからざる事實である。當時に於て、組織せられざる民衆を代表する人々の群れが、如何に、勞働運動及び社會主義に對する全然の無理解を示したかは、多少これを豫期してゐた人々をさへ、少からず驚異せしめたのであつた。それには、我國の國民教育の缺陷が反映せられてゐたことは無論であるが、しかし、勞働者や社會主義等の諸團體が、從來組織せられざる民衆の輿論を、餘りに無視しがちであつたことも、可なりの程度に手傳つてゐなかつたとは、誰れにも言ひ得られまい。勞働階級や社會主義者等の主張——殊にその最も根本的な主張であるところの階級差別撤廢の主張——が、縱し如何程有理なる性質のものにせよ、その敵對者である資本階級側に依つて、理解され得ないのは、若しくは、たとへ理解されたしにしても、承認され得ないのは、無論のことであるから、彼等がこの方面に向つて、理論を說く何等の必要を持たないことは、彼等が熟知してゐる通りである。けれども、彼等が組織せられざる民衆に向つて啓蒙運動を試みるといふことは、單に仕甲斐のあることであるばかりでなく、同時に、彼等の運動の前途のために、絕對的に必要なことでもある。この點から言つても、自由主義の確立は、當然彼等の努力に値することだといはなければならぬ。リベラリズムが曾て西洋諸國の資本階級の武

器であつたといふ事實は、彼等が今それを使用しようといふのを妨げるための何等の口實にはならない筈である。加ふるに、日本の資本階級は、まだリベラリズムを利用する程度にさへ達して來てゐないのである。それ故に、リベラリズムはまだ、日本に根を張つてゐない。そして、それがために、勞働階級や社會主義者等が、どれだけ無用の苦しみを經て來たかは、測られないものがある。自由主義が彼等の革命的精神を冷却せしめる虞れがある、といふのは、餘りに彼等の革命的精神を釘附きにした言ひ方ではあるまいか?

勞働者の諸團體の政治行動是認の態度への方向轉換は、彼等の『現實への眼ざめ』といふ主張で、屢〻形容されてゐる。現實への眼ざめは、今や世界の各部の各層に於て、促進されつゝある。大戰中は、すべてのものが、多少の程度に於て、空中亂舞の狂態に浮かされてゐた。けれども、大戰終熄後既に六七年も經て來てゐる今日に於ては、すべてのものが、漸くその足を大地に踏み附ける餘裕を得かゝつて來てゐる。かくて、行き過ぎたものは、幾分後へ戻りかけてゐる。そして、行き足りなかつたものは、一歩前へ進みかけてゐるものである。けれども、我國の勞働者の諸團體が政治行動是認の態度への方向轉換を『現實への眼ざめ』の名で呼ぶのは、彼等の從前の政治行動否認の態度が、現實への眼ざめから來てゐたとすると、それは、私から見れば、事實に反するものである。當時に於ける彼等の四圍の狀況は、彼等をして政治行動否認の態度へ赴かしめるより外はなかつた。それ故に、それは、當時の現實に對する彼等の眼ざめからだつた、といへるのである。けれども、今や新しき現實が展開されつゝある。そして、それに對する彼等の眼ざめが、彼等をして、政治行動是認の方へ赴かしめたものでない、とは言へないのである。

新らしき現實の展開！　年來の懸案であつた普選實施の見込みが、少くとも一歩を前へ進めたやうに見えることが、それであらうか？　それも、さうでないとは言へない。が、若し我々が廣い世界の上を見るならば、そこには、それとはその意義に於て全然比較にならない程大きな、或る新らしき現實が展開してゐるのを見るのである。帝國主義が沒落の運命に瀕して居ることも、その一つの徵候である。國際主義的意識が新らしき刺激を得て來たことも、その他の一つの徵候である。けれども、我々は、イギリスに於ける勞働黨政府の出現、及びその勞働黨政府の手に依るロシアの勞農政府の承認といふ最近の事實の裡に於て、最も著るしき新機運の擡頭を見ることが出來るのである。殊に我々は、それが、アングロ・サクソンの世界とスラヴの世界との再接觸を意味するものだ、といふ點に於て、それに世界政治上の重大意義を認めようとするものである。我々は、必ずしも、我國の勞働者諸團體の經濟行動がロシアからの暗示を受けたもので、その政治行動がイギリスからの影響を反映してゐるものだ、と主張しようとするものでないが、しかし、それも見樣に依つては、さうも見えなくはない。けれども、アングロ・サクソンの世界とスラヴの世界との再接觸の世界文化上の影響は、決してそれだけに止まるものではあるまい。

かういふ新らしき現實の展開の前に於て、我々は、我國の自由主義運動の前途に囑望する感じの、一層に深まるのを覺えるのである。現在、我々の政治意識を試錬するためでもあるかのやうに、我々の前に置かれてゐる普通選擧問題に關しては、私は、集團過程の政治的意義に關する私の考察から、テクニックの問題としては、それが比例代表制と結びつかなければならないものだ、と思惟すると同時に、思想上の問題としては、それが自由主義發生の前驅とならなければならないものだ、と結論しようとしてゐるのである。

# 所謂『思想善導』の眞意義

## 愛眞本能に對する制度的忠義

杉森孝次郎

もしも制度としての國家、組合としての政府に、國民の「思想善導」に多少たりとも貢獻しうる餘地があるとするならば、それは、立法、行政が關する限りに於いて、國民生活に於ける反道德的、不合理的、非進步的事情をすこしでも餘計に除去し、改正するにある。淺薄なる思想の表現である實行が、比較的に深い思想的及び生活的基礎を有する不安を善導する可能などは最初から絕無をきはめすぎてゐる。善導者は善導されるものよりも賢明であらねばならん。また善導者の動機は、いささかたりとも、私利的、私情的であつてはならん。單なる自己、自家、自族、自國、自階級の威福、權勢、利益を保護し、增大することを隱れたる目的のうちに持ちながら、國民なり、社會民なりの思想善導を云爲するが如きは、俗惡この上もない現象だ。ここでいふ俗惡には、自覺的及び無自覺的の僞善が最も著大に含まれてゐる。勿論、それと共に淺識と無智が。

思想の善導は、その社會民の各員を、その社會の各人格を、判斷、思索の獨立有能者に絕えずすこしでも高く進步させるほかに方法を持たない。まじめなかたちの判斷と思索に對しては、絕對の自由を環境づけることが、政府または國家としてなすべき思想善導の第一要件だ。愛知、愛眞の深絕、虔絕の自由主義先づなくして、他の思想を善導することも、おのが思想を主張することも、正氣の沙汰とはいへない、いやしむべき行爲だ。

教祖權威主義や經典權威主義のぬけがらを寄せ集めて、思想善導を公呼するなど、あまりにばかげすぎて批評の餘地もないわけだが、再思すれば、わが國の文化の眞の水準は、恐らくはこの邊の高さにしか達してゐないのだらう。斷片的に、折りに

觸れでは、もうすこしわかつたやうな語氣、口吻を示す多くの青、壯、老年男女も、洗つて見たら、思ひ切つて心の闇の持ちぬしなのではないか。

各人が、いまよりも直接に、自分のあたまで物事を考へる氣力と習慣とを持つて來ない限り、日本の前途は明白に闇黒だ。國家としては、その氣力と習慣とをすこしたりとも多く助成する意志を持つべきだ。自分がま夜なかに安住してゐながら、隣人のあけがたを善導しやうなどとは、位置の錯覺だ。われまづ進んでまひるの太陽となるにあらずんば、いかにして他の無明を意識しえんや。

日本を善導する方法は唯だ一とつある。それは尙古でもなければ尊神でもない。それは愛眞の一概念によつて完全に代表されぞ。眞とは何ぞや。國民的反省は、したがつて進歩は、この一問の意識から始まる。

日本は、一度、愛眞國として內外に意識されるほどの非常心狀に移る、轉生する必要がある。萬善それにつづく。

愛眞意識に深燃し、全燃し來たる人が、一人でも餘計に發生しくるやうに、各人、各所に於いて省、齋、爲すべきでないか。

愛眞意識に對する制度的保護、このほかに政府の思想善導の餘地はない。しからば、その制度的保護の具體的內容はなにか。それは、勿論、巨細にわたつて種々だが、いまは、一括してそれのすべてを讀者の自問自答に委讓する。

愛眞意識に對する制度的保護の代はりに、愛眞本能に對する制度的忠義といふてもいい。

ここでいふ愛眞のうちには、愛社會正、愛社會善も含まる。且つそれらの觀念的なありかたのみでなく、十分に實行的な、したがつて制度的なありかたもが。

# 秩序の維持と社會の進歩

文學博士　三宅雪嶺

□

危險思想と云ひ、思想險惡と云ひ、之に對して思想善導と云ふが、危險や險惡や、善導要求者の立場より判定するのであつて、他の方面より見て異なる見解を下すを免れぬ。善導要求者は概ね權力關係者であり、大體上、安寧秩序を主にし、苟くも之を紊すを危險として防止に努める。即ち秩序を維持しようとするのであつて、當然と云はねばならぬ。秩序が破滅しては、何とも仕樣がなく、其大多數の最大禍と云ふて居れず、兵力を以ても無秩序を有秩序に變ずるの必要がある。日本で舊幕時代に何でも上の意に背くものを罰し、人々相睨みて嫌疑を避けたのは、當局者が何と考へての事にせよ、其點に於いて理由がある。實に何を差し措いても、秩序を維持せねばならぬ。

□

然し秩序の維持を專一にしては、國家社會が固定し、幾代を經ても、同一狀態に止まり、空しく多くの年數を費した事になる。時を金とせば、尠からぬ金を無益に棄てて居る。年數を經れば經るだけ、何物かを得べき筈であつて、之を得ないのは、之を得たのに壓倒せられ、時として獨立を保つに堪へぬ。他國と接觸せぬ間、何の狀態で續いても差支へなく、せいぜいで權力爭奪の內亂に苦しむ位であるが、他國と交つてはさうは行かず、少くとも自負心を傷つけないだけに、相應の取扱ひせねばならぬ。元はと云へば、人類の進步を豫定しての事であつて、進步を擯る者は、人の進步を妨げ、何とか片づけねばならなく、なる。東洋が歐米に威壓せられる跡あるは、地勢が進步に不便なる爲めながら、進步を擯つた罪と云へば云へる。武陵桃源で秩序を維持し、秩序の上で申分なくても、世界に通用しし、田舍の田舍と嘲けられるのを避くべくもない。

□

日本は大陸よりも進步に適したが、他國と接觸することが少く、政府で秩序の維持を專らにし、其他を問はず、只學術上進

歩を望む所があり、或る期間、相應に盛なるを致した。進歩を望むよりも、實質を知らぬ所もあつたが、何にせよ多少の進歩を遂げた。漸くして其不統一が變亂を誘はぬかと惧れ、朱子學で統一し、異學を禁止した。異學は危險であり、險惡であるとした。それで何程の效能あつたかと云ふに、一時幕府の威力を示した所あれど、實際に於いて程なく禁が解けて居る。解けただけ猶は幾許か儒學の進歩を見たのであり、若し飽くまで嚴禁を續けたなら、固定した舊幕時代が愈よ固定し、外國と接觸する頃、狼狽加減が更に甚しかつたらう。蘭學を危險として壓迫したが、今少しく緩めて置いて如何であつたらうか。

□

歐洲諸國も曾て秩序の維持を専一にしたが、後にさうして居れず、互に進歩を競ひ、後れた者は打ちやられてしまふ。權力關係者は、自らの位置を保つが爲めに、事なきに若くはなく、新に起り來る所のものを危險視し、之を防止するに努め、政治と密接の關係ある宗教に於いて特に甚だしかつたが、多少の變亂を經、改まるものは改まり、改まらぬのは落伍した。西班牙は落伍の著しい例に居る。英國が憲政の實を擧げ、他の諸國が漸次之に倣ふ形になつたのは、強ち自由民權問題のみでなく、憲政の下に比較的進歩を遂げ得るからである。專制政治は秩序を維持するに効あつて、進歩を遂げるに益なく、却つて害になる。何でも當局者の意に背くのを罰するよりも、法律の範圍内で、自由放任を許す方、進歩を遂げるによい。疑問は法律の範圍を何の邊に定めるかと云ふに存し、或ひは之を窮窟にし、或は之を寬かにする。如何にしても多少の自由を許す以上は、秩序の維持に妨げあるやうな聲が聽え、當局者の耳觸りになる。事によつてその聲が高まり、革命騷ぎになつたりするので、心配も一通りでない。憲政として定まるまで、何れ程騷ぎ合つたか知れず、權力關係者が恐く群集の足で蹂躙られたやうな事もある。

□

我日本で血を見ずに憲法を得たのを幸とするが、實にさうである。自由民權問題が一應片づくか片づかぬかに、財産問題が起り、之れ亦秩序を危くする事、一二のみでなく、自由民權に於ける如く、革命を實行したのがある。一度び革命に遭遇するや、恰かも大病に罹つて凡ゆる療治を受ける如く、恢復するに容易でなく、革命と云へば、損害を意味するかに感せられる。革命は何處までも防がねばならぬとて、何でもその疑ある行爲を取締り、思想からして改めさせようとするが、其處が頗る手心を要する所であつて、下手をすれば、進歩を妨げるのみならず、

反動を促すに至る。英國は保守的と云はれながら、進歩すべきに進歩すること頗る巧みであり、既に憲政の模範を示し、よく革命を防ぐを得、更に自由主義にて資本家を生じ、勞働問題で動き難からうと見えたのに、俄かに勞働黨内閣を興し、勞働問題でも模範を示すの勢がある。之について種々の紛擾あり、英國も困つたものと云はれたけれど、兎も角も、次から次ぎへと變り、其間に進歩を示して居る。

□

日本で血を見ずして憲法を得、更に社會問題を無難に解決するか何うか。政府で隨分目まぐるしい變遷に惱まされずに居れまい。憲政が整へかけたかと思へば、勞働爭議が起り、或ひは共産主義を迎へたりする。法律を窮屈にして抑へつけ、ギユーの音も出ぬやうにすれば、秩序を維持するに有利であり、世間が平穩無事に安んじ得るにしても、正に起りつゝある問題は、單に秩序を紊すものか、又は他日の進歩を促すものか、前者ならば手厳しくして宜く、後者ならば深く慮らなければならぬ。安寧秩序を首眼にし、其外に何事も考へぬのは、舊幕時代に於いて或ひは可、今の時代に於いてさうは行かぬ。當局者ももはや舊幕の如く、己れの位置のみより考へず、世界に於ける帝國の運命を考へる處がある。秩序を維持しさへすれば宜いとまで思ふまい。同時に進歩を圖らうとするであらう。秩序のみより見て現狀と變つた事が悉く危險に感ぜぬでなく、唯進歩の爲めに或る程度まで危險を堪へ忍ぶを要する。何處まで腹を定めて世間の移り變りを見るか、危險と云ふのが案外危險でなく、安全至極と信ずるのが案外危險であつたりする。一時ルツソーの民約說は佛國革命を惹き起した程危險なものであるとしたが、今日何程讀んでも危險を感ぜず、一の陳腐なる說としか見て居らぬ。說其物が危險と云ふよりも、之に伴ふ事情を考ふべき事が多い。前に天然痘で多くの人が死んだが、今は種痘して之れを防いで居る。他の傳染病も此の通りにすれば、恐るべきを覺えぬ。或る新說で騒ぎ立てるのは、新鮮味を感じ、刺戟が強い爲めであつて、新鮮味を失へば何でもなく、更に新しい說を入れて興味を感じ、之を振れ廻らずに居れぬ。之れを振れ廻るので進歩を促す所あるが、眞に騒ぎ立てる程の効能あるか何うか。

□

何事も一朝一夕に成らず、試驗に試驗を重ねねばならぬ。社會問題とて今日思ひ立つて今日行ひ得べきでなく、行ればやつて見よと云はれ、途中で始末に困るやうな事が幾らあるか知れぬ。末の末まで分らぬにせよ、互に話し合ひ、論じ合つて

れば、初め氣づかなんだ事に氣付くのがある。危險思想と認めたならば、多くの官吏の中には、識に富むのがあり、危險人物を呼び出して話して見たらば何うか。黑衣の中で巨魁と認めるのが幾人か有るらしく、之を呼び出すのは檢束するのよりも手間がかからぬ。多くの官吏中、議論でかの若干人に克ち得るの自信ある者ないと云へぬ。好い結果が無いかも知れぬが、一度試みては何うか。水野内相自ら相應に議論し得るであらう。内相として繁劇に過ぎるならば、帝大なり其他なりから人を招けばよからう。或ひは危險人物の巢窟に行き、其處で論じ合ふも面白からう。只取締りのみを嚴にするのみで、思想を導き得ると云へぬ。今は政府筋で言論機關を手に入れ危險思想の鼓吹を妨げるとの噂があり、既に或る新聞雜誌を手に入れて居るらしい。資本家で片着ければ、資本家攻撃の有力なる議論の出場所がなく、延いて之れに煽てられる思想界が鎭靜しさうであり、幾許か其の効能ないと云へぬが、要するに一時の事に止まり、恐い者見たさで、何でもない事に興味を感じ、別の手段で意見を發表し、自ら面白がり、人も面白がり、實地に行つて見ようと思ふのがないでなからう。言論機關を政府又は資本家の手で押へるのは汚い物に蓋する。

□

古典を奬勵して、新思想を抑へようとする計劃がある。其の云ふ所は漢學を以つて希臘、羅馬の古典に劣らず、英佛等頻りに古典を重んじて居るとするにある。漢學は種々の點で學ぶべきものとてし、歐洲の古典と趣を異にするを察せねばならぬ。漢學は如何にして近世の進歩と接續したか。希臘で聖人と見えてるソクラテスは、當時の危險人物であつたのを承知しての事か。漢學で模範的人物とするのは何人か。秩序を維持するのみを考へず、進歩を慮る所なくてならぬ。古典の研究を必要とし、之を現代に應用するの意ならば、進歩を妨げないやうにするの用意を肝要とする。

□

思想險惡と云ふけれど、次ぎから次ぎと流行し來り流行し去る所、思想を鍛錬するのであつて、多く經驗を積めば、大抵の新説を新説と思はず、新説としても騷ぎ立てるやうな事がない。新思想の輸入を防ぐよりも、多く輸入して頻りに研覈し、思想を鍛錬する方が後の爲めになる。根本に於いて缺けて居るのは、學校でも學校以外でも、紳士たるの道を輕んじて居る事である。從來文明國と稱するのも、如何はしい風俗あれど、如何にも紳士らしいと思ふべき人物あるのを道がと云はねばならぬ。紳士道を修めたと云ふ譯でなくても、成程立派な人物と思

はずに居れぬ。勞働者上りでも米國のリンコーンの如き、天晴れな紳士である。近頃英國の首相になつた勞働黨首領マグドナルドも確かに紳士と稱さねばならぬ。前の身裝のみを專らにした紳士から見て怪しむべきにせよ、眞の紳士たるを失はぬと思はれる。さういふ類が相應に多ければ、思想など何も憂ふるに足らぬ。日本で舊幕時代に武士道が整はうとして整はず、新に紳士道を必要としつつ、之を如何にすべきかを考へず、上下の分を守るに最も重きを置き、個人の性格を鍛錬せぬが爲め、僅かの事で不體裁な事を演じ、其非を悟らたくなつて居る。今少しく紳士道を普及し得たならば、思想善導の如き、考へなくてもよくならう。

# 所謂宗教家と所謂危險思想とは沒交渉

安部磯雄

先頃現内閣が宗教家を招待して、思想善導に就いて助力を仰いだといふやうなことがあり、多少之れが社會の問題となつたやうである。之れに就いて我々の意見を述べる前に、先づ考へなければならないことは、思想善導といふ以上、現代の思想が惡化して居るといふ事實を假定して、初めてそれの善導の必要が生ずるといふことである。所謂思想の惡化とは何んであるかといふに、其處に二つの見方がある。其一つの見方は一般的にいふ思想の墮落である。詳しく云へば人々の心が物質的に傾いて行くとか、利己的な要求が強くなるとか、それが外部に現れて一般的な奢侈贅澤な風が起ることを指したり、又は淫蕩の風が盛んになつて、男女の關係が極端に紊れ、風俗壞亂の事實があるとか、金錢のために詐欺的手段が行はれたり、官吏などの公職に在る者が屢々賄賂を取るといふやうなことを意味して居るのであつて、斯くの如き事實は皆思想の墮落の結果であり、思想の惡傾向と云はれる。然るに今日、思想が惡化したと云はれて居る、所謂その思想の惡傾向は、今云つたやうな事柄

とは違つて特殊の意味を含んで居るやうである。具體的に云へば今日人々の間に問題になつて居る社會主義、共産主義、無政府主義、虚無主義等の思想に、一部の人からは危險思想として取扱はれて居るが、之れを所謂思想の惡化と見るのが第二の見方である。そこで問題は清浦内閣が宗教家を招いで思想の善導を依賴したといふのは、それが何ういふ意味に於て企てられたかといふことである。それは今云つた第一の意味の思想の惡化、卽ち思想の頽落に對する之れが善導の方策を立てる意味であつたやうにも思はれる。何故ならば其處に招かれた宗教家や、社會改良家といふ人々の顔觸れが、それだけで風俗の問題とか、それの教化の問題を考へさせるからである。併し又一面考へやうによつては、數年前から所謂危險思想として取扱はれて居る種類の思想が盛になり、昨年六月頃に起つた共産黨事件などもあるので、それは第二の意味の思想、卽ち危險思想の善導の意味であつたやうにも思はれる。此第二の意味に於て政府が宗教家を招いだのならば、それは甚だ見當違の感がある。といふのは現代の宗教家の幾人が時代の思想に觸れて居るであらうか。換言すれば彼等の中の幾人が社會主義や、共産主義の思想に就いて理解を持つて居るかは疑問である。思想の頽落を救濟するといふならば、これは宗教家の自ら任ずる仕事であつて、別に不思議はないけれども、危險思想の善導といふやうな仕事はどう考へても宗教家には不向である。茲では假りに政府當局者が危險思想善導の目的で宗教家を招いたものと見て、それに關聯して意見を述べて見たいと思ふ。

我々は所謂危險思想がどうして起るかといふことに就いて先づ其原因を考察して見なければならない。今日に於ては、確かに此世の中に於ては、社會主義や無政府主義の思想が說かれて居るし、又信ぜられても居る。或意味に於てそれは宗教の如く又宗教に代つて非常な力を持つて居るとも云ひ得る。而もそれが無學な、思慮なき人々の間にのみ勢力を持つて居るのではなく、相當に教育のある、知識階級の間に根を張つて居るのであるから之れを輕視することが出來ない。然らば斯くの如き思想の依つて來る原因は何であるかといふに、第一には日本人には非常に自由を得たいといふ欲望が强いことにある。換言すればこれは束縛を免かれたいといふ心の要求である。斯くの如き慾望や、要求が日本人の間にあるといふことは、畢竟、日本の社會に常に種々なる束縛や、壓迫が絶えないで、人々がそれに堪えられず、從つてそれに反抗する精神が非常に强いといふことを意味する。著るしい例としては、近來水平社の運動の如き明かに其一つである。水平社の運動が必しも社會主義や、無政府

主義の信仰の結果であると斷ぜられないばかりでなく、恐らく、は水平社の人々もさういふことは考へて居ないであらうと思はれるが、從來水平社の人々に對する世間の差別的待遇が彼等に反感を抱かしめ、猛烈な水平社の運動と化せしめた其要素は、丁度社會主義者や無政府主義者が持つ束縛に對する反抗的精神のそれと共通の點を有つて居る。勞働運動や農民運動も亦云ふまでもなく其運動は束縛や壓迫に對する反抗的精神に基く。猶此外にも知識階級の間にも反抗的精神が強く漲つて居ることを否むことが出來ない。卽ち知識階級に於ては思想や言論の自由が常に尊重されなければならない。然るに知識階級は屢々さういふ自由に對して壓迫を加へられるのを經驗して居るので、彼等は何うにかして自由な空氣が呼吸したい、もう少し自由に何事でも云へるやうな社會を作り出したいといふ要求を持つやうになるのは當然である。今日知識階級の間には早くから社會主義や無政府主義の思想が傳播して居て、只其思想を公然と表面に發表する人が少い丈けであつて、それは案外根底の深いものとなつて居る。權力者から見れば斯くの如き思想は確かに危險な思想に相違ないが、之れを要求する者の側から云へば極めて當然の要求であつて、彼等は常に自由を生命の如くに考へて居るから、自由が完全に得られるまでは、それを束縛し壓迫す

る所の原因に對して飽くまでも反抗して止まないのである。第二の原因としては生活問題が擧げられる。生活とは換言すれば人が生きんとする要求である。人が此世に生れた以上は誰れもが皆生きて行く權利を持つて居る。然るに今日の社會に於ては人が生きて行くために求める職業さへも、總ての人々に對して均しく與へられて居ないのが事實である。勞働階級に於て屢々起る失業問題は、世界共通の問題であつて、我國に於ても絶えずそれが起りつゝあるのである。智識階級とても亦其例に漏れない。今日高等教育は盛んになつて來たが、それを受けた者が職業を得るのに困難して居るのである。前に述べた自由に對する束縛や、壓迫よりもそれは意味の深刻なものであつて、それが明かに生活に對する直接の脅威を感ぜしめる處に重大な意味を持つ。實際に饑餓に陷入つた場合に人間の思想は險惡となる。若し假りに一室に數十人の人を容れて置き、そして其室には只一つ小さな窓のあることを想像したならば、初め空氣の惡くならない間は二三十人が禮儀正しく其室の中に居ることが出來る。然るに炭酸瓦斯が次第に室の中に充滿して來て、新鮮な空氣はそこにある只一つの小さな窓からのみ得られるといふことになると、其處に慘酷な光景が演ぜられる。纔かに得られる新鮮な空氣のために、どんなに平常は禮儀の正しい人間でも

が、生きんとするために慘憺たる狀態を現出する。今日の社會の狀態は丁度それと同じであつて、人間の數が多過ぎて一部の人が食物を得ることの出來ないために、人間の性質が險惡となり、思想が惡化して來るのは當然である。昔はさういふ運命に對して人間は宿命として諦めて了ふことが出來た。然るに今日の自覺した人間は、自分の運命は止むを得ざる宿命の結果ではなく、人間の遣り方如何に依つて、人間が生きて行く上に於て苦しまないでも濟むといふことを發見するに至つて、總ての運命を宿命として甘んじて諦めることが出來なくなつた。茲に人間は更によりよき社會を作りたいといふ要求を持つに至つたのである。即ち自由を得たいといふ慾望と、生きたいといふ要求が痛切であつて、今日人々の抱いて居るやうな思想を形作つて來たのである。

現代の人々が抱いて居る思想は決して無理な要求ではない。若し今述べたやうな意味の思想が總て悉く惡思想であつて、それを善導する必要があるならば、それは到底宗教家の力の能く爲る所ではない。それよりも今の內閣などが、宗教家の力など借らないで、自ら進んで他の適當な方法を講ずることが必要である。具體的に云へば國民の總てに職業が行き亘るやうに、國民の生活が安定を得ることが出來るやうな道を講ずると同時に、一面に於て、國民生活の上に捲き纏つて居た束縛や、壓迫を取り去つて、人々に出來る丈け多くの自由を與へることが肝要である。斯ういふ事は宗教家などがやるよりも、政府が之れを企てた方が遙かに有力であつて、効果を擧げることが出來るのである。而もそれは政府當局にとつて決して困難な仕事ではない。更に其具體的方法として如何なる手段を取るべきかの筋書を語るならば、前にも云つたやうになるべくより多くの自由を國民に對して與へることであつて、それは即ち思想、言論の自由を完全に保障することでなければならない。思想はそれが道理のない所に、他の反對する思想が興つて來てそれを矯正する作用を持つのであつて、即ち左傾的思想が盛んになれば一方に右傾思想が現れて來てそれが思想の均衡を保つのである。思想はそれが常に互に爭つて行く過程に於てそれの作用が十分に滿されるのであつて、思想言論以外の手段に依つて思想、言論に干渉する必要は少しもない。只爲政者としての執るべき手段は、思想や言論がそれ自身の範圍を超へて暴力と化した時に、其場合に初めてそれに對して取締る必要が生じて來る。而もそれに要する取締りは左傾派に對しても右傾派に對しても同樣に行はるべきであつて、權力者側に對して都合の惡いといふ理由を以て、特に或る行爲の原因である思想を取締るといふこと

は、反動的に其思想を傳播せしめる有力な動機となる。今日實際の狀態は政府自らが左傾思想を壓迫して反つて其思想を宣傳して居る傾がある。茲に於て所謂危險思想に對しても勿論、一般の思想に對する善導とは、之れを要するに其思想自らの自由性に放任して置くことが最も賢明なる方策であることを信ずる。次に又國民の總てに對してなるべく其思ふ所を自由に云はしめると云ふことも亦一の方法である、それには普選實行は最もよき手段である。此際政府も普選を思ひ切つて斷行することが必要であつて、年齡の二十五歲などに必しも囚はれることなく、二十一歲でも二十歲でも差支ないから、さういふ制限に拘泥しないで普選を即時に實行したならば、それ丈けで所謂思想善導に資する所少くないと思ふ。猶之れに關聯して水平社の運動などに就いては、其要求する所は當然なのであるから、多年社會が壓迫し、侮辱した水平社の人々に對して國民は衷心から謝罪すべきであつて、政府も亦進んで十分に水平社の運動に對して同情を表し、彼等に對して社會が差別的待遇をしたならば、殊に學校などに於てさういふことが行はれたならば、其教師なり、生徒なりを嚴重に處罰するといふ風な措置に出づべきである。水平社の運動にも往々常規を逸した行爲が現れることがあるが、これは何も水平社の運動に限つたことではなく、昔の自由黨の運動などに於てもさういふことはあつたのである。只其運動の目的さへ正しいのならば、虐げられたる階級のためには政府は卒先して援助を與へるやうにするのが本當である。更に根本的な問題として茲に考ふべきことは貴族制度の問題である。これは貴族自身が進んで廢止すべき制度であつて、階級打破の思想が盛んになつて來る時に當つて、それに反對するのは反つてそれが危險思想を助長するものである。今日に於ては最早貴族も特權もないのであつて、それは單なる名稱の存在に過ぎないものが存在して居ることが禍となつて居るのである。茲に於て此世の中に於ける特權と呼ばれるものを全廢して、支配階級と被支配階級の區別を撤去することが理想となるのであるが、併し如何なる理想社會に於ても政治の便宜上支配階級と被支配階級とが別れるのは止むを得ないのであつて、只問題は今日の如く支配階級が一種の特權階級であることが悪いのであるから、此意味に於ける支配階級から被支配階級を區別する本質的な相違を撤廢することが必要である。即ち政府と國民に就いて云ふならば、役人と人民との間に區別がなく、所謂官民合同で融和して行くことの出來るやうな社會を作ることが急務である。次に生活問題に就いては國家が自ら解決すべき失業問題がある。政治家にとつては失業問題が試驗問題であつて、此

問題が解決出來ないやうでは政治家として落第である。職業紹介所の如きも現在では大分增えて居るやうであるが、もつと其設備を擴張して、國家自ら多くの失業者に職業を與へるやうにしなければならないが、其他にも猶府縣や、市町村に於ける政府の機關が行ふ種々なる仕事の中でも、最も費用のかゝる事業、例へば道路を作つたり、鐵道を敷設したり、港灣を築いたり、山林事業を企てたりするにしても失業者の出る場合に備へて、至急を要せぬ事業は之を繰り延して置いて、不景氣の時になつてそれをやり出すといふことも一つの方法であつて、當面の救濟方法としては有力である。又南米に移住する者には國家が旅費を與へるといふことになつて居るが北海道や樺太に移住したい希望を持つ失業者があれば相當の便宜を與へてやることも必要であらう。猶それに次いで將來は外國でも問題になつて居る最低賃金を一定することも急務である。安い賃金で働らいて居る以上働く者の間に不平が絕えない。それには相當の賃金を定めて、傭主はどうしても最低賃金を支拂はなければならないやうにする。併し斯くの如き手段丈けで失業問題が解決出來るかどうかは外國の例を見ても甚だ疑問であるが、失業問題は如何にしても解決しなければならない重大な問題であるから、更に根本的な方策として、土地國有、工場の國有を斷行することにならなければならない。土地や工場が國家の所有になれば、總ての人間に職業を與へることが容易になる。之れも亦一案であつて、國民の不平を取り去る最も根本的な方法である。最後に述べたいことは、斯くの如くにして政府に眞に思想善導の意志があるならば、試みに玆に一つの他の方策を採用することである。政府が宗教家を招待したことは必しもそれが無意味であつたとは云へない。只それが思想の墮落を救濟するといふ宗教家の仕事の範圍内であれば差支ないが、危險思想を善導するといふ任務を負はされるには彼等は餘りに無力である。玆に於て政府はもう一層太つ腹になつて、宗教家の會合を企てたやうに、例へば勞働總同盟や農民同盟の幹部、社會主義團體、無政府主義團體に屬する代表者、水平社の人々など招待して、胸襟を開いて自ら意見を述べ、又彼等に自由に云はんとする所を云はしめたならば、何が故に今日の思想が彼等の所謂危險に陷入つて居るかゞ明かに分るに違ひない。斯ういふことを望むのは甚だ突飛であるかも知れないが、それはビスマークなども既に昔やつたことであつて、彼は社會主義其他は壓迫したが、一面於て度量大に廣く、社會主義者の大立物であるラサールと會ひ、親しく其意見を聞いたことがある。とうの昔に於てさういふ事實があつたことを考へれば、今日の政治家はもう少し度

量を示すことが出來る筈である。現代の惡化せる思想問題に就いて宗教家の力を借りるのは、恰も按摩に腸チフス患者の診察を依賴するやうなものである。現代の思想問題は生活問題から出發する。それは一面に於て思想の自由を求める所に出立するが、又其時代の經濟的思想にも淵源する。斯くの如き問題に對しては、寧ろ種々なる勞働團體に直接意見を聞いた方が遙かに効果があるのであつて、同時に又さういふ團體の意志を當局者に知らしめて置く必要がある。

# 危險思想の安全化

林　癸　未　夫

思想善導は舊式の政治家や議員どもの常套語であるが、彼等の所謂思想とは主として國家思想又は社會思想を意味してゐるやうに思はれる。が、併し元來國家や社會に關する思想は、善惡を以て批判さるべきものでない。唯その安危を別つことが許されるのみである。それも單に或特定の國又は社會の、特定な時代に於て、或思想が安全であるか危險であるかを論斷し得るに過ぎない。だからその批判は局限された相對的價値を有するに止まる。例へば德川幕政の末期に於て勃興した尊王論は、幕政維持のためには此上もない危險思想であつたに相違ない。併し今日の日本では皇室中心主義が安全思想の標本のやうに看做されて居る。ルソーの民約論やモンテスキユウの萬法精理は、ブールボン王朝の專制政治に取つては怖るべき危險思想であつたが、革命後の共和政府のためには此上もない安全思想と早變りをしたのである。帝政露西亞では共産主義が無二の危險思想であつたが、勞農露西亞ではそれが唯一の安全思想と目される。カイゼル治下の獨逸では社會民主々義が危險思想として屢々脅迫されたが、現在の共和獨逸では舊軍閥の復辟運動が危險思想として嚴しく糺彈される。我日本では普選運動でさへツイ一兩年前までは危險思想扱ひをされてゐたのである。凡そ專制政治の擁護者には議會政治は危險であり、議會政治の擁護者に

は無産階級獨裁政治は危險であり、無産階級獨裁政治の擁護者には專制政治も議會政治も共に危險である。それと同じく資本主義の信奉者に取つて社會主義は危險であり、社會主義の信奉者に取つては資本主義は危險なのである。

さうして見ると一つの思想が安全であるか危險であるかは、それが自己の信念や利益に對して防衛的であるか攻撃的であるかによつて、人各々これを識別するのほかはないのである。自己と反對の立場に在る人とは安危常に相反するのである。從つて自他其地位を替へると、昨日の安全思想は今日の危險思想であり、今日の危險思想は明日の安全思想であることが珍らしくないのである。珍らしくないどころか、歴史は斷えず其例を繰返してゐるのである。だから何人も或思想の安危に就て絶對的の評價をしてはならない。今日自分が安全思想として極力擁護しようとしてゐるものも、明日自分の味方が劣勢となると忽ち危險思想として排斥さるべき可能性を有つものであることを、常に念頭に置くことが必要なのである。言ひかへれば、思想に對しては飽くまで懷疑的であることが、結局思想そのものの進步と、その思想に導かれる國家や社會の進步とを、最も良く持ち來たす所以であることを知つて置かなければならぬのである。

○

然らば或特定の國の特定の時代に於ける或思想の安危を、結局誰が最後に審判するのかと言へば、それはやはり國民全體であると云はなければならぬ。勿論個々の國民は一々判然たる意思表示はしない。併し國民の暗默の意思は必ず其國其時代の文化に最も多く貢獻しつゝある人々の思想及活動の上に反映するのである。そして大多數の國民の意思に受容される思想が結局は安全とせられ、これに反するものが危險とされることになるのである。即ちそれによつて思想の陶汰が自然に行はれるのである。つまり國民が一般投票によつて贊否を決するのと同じ結果になるのである。唯注意すべきは、この投票は同時に一齊に行はれない。だから投票締切及開函に就て定められたる時期がない。そこで政治家や學者に斷えず投票數と其贊否の比較に就き精密な考察を必要とすることになる。もし彼等が其測定を誤つたならば、彼等の主張や政策は破滅のほかはないのである。

然らば次に、如何にすれば國民をして其批判を正當に行はしめることができるかといふに、それは他なし、唯すべての思想を國民に公開すること之である。そして國民をして直接に出來るだけ詳に其思想を理解せしめること之である。さうすれば國民は各種の矛盾、衝突、排擠する思想を良く咀嚼し、吟味し、對照して、其贊否を決することができるのである。恰もこれは

議會に提出される各種の議案に對し、提案者をして各々良く其說明を爲させ、質問者に十分な應答を與へた後に、討論裁決を行ふべきであるのと同樣である。然るに若し此場合に、議長か或は國務大臣かゞ豫め獨斷で議案の可否を決し、此案は提出を許さない、此案は說明を差止める、此案は質疑應答を禁ずる、此案は撤回を命ずる、といふやうな權能を揮ふことができたとしたならば、どんなものであらう。誰しもそれを忍ぶべからざる不法とすることに躊躇しないであらう。思想の是非が國民によつて裁決される場合も全く同一の方法が取られなければならぬのである。或思想が一部の政治家や學者によつて、どんなに危險視されやうとも、其提唱を阻止すべき權能は何人にも與へられてはならない筈である。國民はかくの如き權能を何人にも許容してはならないのである。そして如何なる思想に就ても、其に其說明を聽取するの自由を確保すべきである。これは最も貴重な國民の自由である。

○

如何なる危險思想も、それが國民の前に公開せられ、說明せられ、理解される時に、初めて其思想の危險性が拭ひ去られるのである。思想の發表が抑壓されると、其思想に神秘性が附加される。そして少數の者には宗敎的信仰の標的とされる。最早それは理智を脫して感情の中に擁護される。そして其處に狂信的な危險性を發育せしめるのである。之に反して思想が公開されて、それに對する一般の知識が普及すると、それの有つ神秘性は次第に失はれて、正體が白日の下に暴露される。そしてそれが平凡化する。平凡化することは常識化することである。常識化することは安全化することである。そして初めて國民は全部に理智的にその是非を批判し、採否を決することが出來るやうになるのである。

卑近な例を引けば裸體畫のやうなものである。曾て日本では洋畫展覽會の催される度每、裸體畫問題なるものが起つた。官憲は公衆に裸體畫を見せることは風敎上善くないといふ理由で、その展覽を差止めた。或場合の如きは紫の布を以て畫面の一部を蔽ふたことがある。かゝる官憲の處置の馬鹿々々しさはいふまでもないが、併しかゝる處置によつて、裸體畫が特別有いものでもあるかの如き觀念を一般に與へて、是非それを見して恍惚の快感を味ひたいといふやうな慾望を抱くものを多からしめたことは疑ひなかつた。つまりそれが裸體畫なるものに一種の神秘性を附與したのであつた。ところが今日ではどうだ。裸體畫は、展覽會場は勿論、到る處の繪葉書屋の店頭にザラに掲げられて居る。そして誰もそれを特別に難有がつて眺めて

あるものはない。つまり裸體畫の神秘性が剝奪されて、平凡化されてしまつたのである。平凡化されたから最早風教問題などをかつぎ出す者はなくなつた。平凡化から安全化に及んだ證據である。

○

今日の日本の政府官憲は共產主義や無政府主義を頻に危險視してゐるやうであるが、是等の主義が若し危險であるとするならば、それは是等の主義の抱藏する思想そのもののためではなくして、その思想の自由な論議の發表を抑壓してゐる官憲の態度から生ずる危險なのである。若し是等の主義が絕對に日本の國家社會に有害であると信ずるならば寧ろ武斷的に徹底的に其研究及論議を嚴禁すべきものである。學術的な研究ならばさしつかへないといふやうな不徹底な手段では何の役にも立たぬ。學者の研究的な文章であつても、讀む者が讀めば、やはり宣傳的な役目をする。部分的に○○などを附して出す文章は、曾て裸體畫の一部を柴布で蔽うて一層觀者の好奇心を挑發したのと同樣な愚策である。唯共產主義や無政府主義の神秘的魅惑を增させるばかりである。だから是等の主義に對して取るべき政府の方針としては、最も苛烈な危險思想取締法を制定して、一切の研究及論議を禁止するか、さなくばあらゆる思想の研究及論議に完全なる自由を與へて之を國民に公開せしめるか、者其一を選ぶべきである。そして私から見れば勿論後者を選ぶ方が一層賢明である。政府に其決斷さへあれば、共產主義や無政府主義の日本に有する神秘性は忽ち剝奪されて、その宗教的難有味は減殺されてしまふ。そして必ず平凡化され、安全化されてしまふにちがひないのである。

然るに從來政府の取つた方針は、是等の思想をます〳〵神秘化し、從つて危險化する方にばかり働いてゐた。しかもそれが徹底的に行はれなかつたゞけに却て害を大くしたのである。例へばストーブの口を全部塞げば火が消えて暖氣が失はれるから、少しだけ開けて置いたら火が消えずに暖氣が保てろと思ふのと、同じ程度の思ひちがひである。何となればストーブの口を小さく開けて置けば、一層火勢が增して暖氣が强過ぎて來ること必定だからである。だから火も消さず暖氣も適當にして置くには、ストーブの口を全部開け放しに置くに限るのである。わが政府がこの睹易き理を悟らぬのは實に困つたものである。例の森戶事件の如きは、最も適切な例として擧げることができる。森戶氏の論文の內容が何んであつたにせよ、若し官憲があのまゝ放任して置いたならば、あの論文を讀んだものは恐らく數百かそこらの僅少な人々に過ぎなかつたに相違ない。然るに

偶々官憲が其發賣を禁止し、おまけに筆者を起訴した爲に、あの論文は數萬人によつて精讀せられた。平素無政府主義などには何の興味も有たず、クロポトキンの名などは耳にしたことのない多數の人々までが、爭うて之を讀んだことは、現に私の目擊したところである。官憲は正に無政府主義を國民に宣傳するの目的を以て、あの事件を惹起したといつても差支なかつた。かくの如き沒常識な官僚主義こそ眞に危險思想の製造元なのである。

英國には危險思想なるものは存在しない。如何なる主義も勝手放題に研究され論議され發表される。唯實行的目的を以て行動することだけが抑制されるだけである。だから英國では一時的には危險思想があつたとしても、忽ち常識化せられ、平凡化され、安全化されてしまふ。かういふ場合なればこそ勞働黨の穩健な漸進主義が着々勝利を占めて、やゝ過激な急進主義の共產黨が却つて凋落して行くのである。昨年末の總選擧で勞働黨議員は五十名を增して百九十二名となつたに拘らず、たつた一名の共產黨議員が落選したのもそのためである。殷鑑遠からず露西亞を見よ。危險思想の迫害に最も極端であつたがために、危險思想のために最も早く壞滅した。わが政府が英露兩國と日本の現狀とを比較して一考するならば、彼等の取るべき道は自ら明白であらうと思ふ。

危險思想を安全化する方法は、あらゆる思想の研究論議及其發表に完全な自由を與へるほかにはないのである。

# ジャーナリズムの尊重と教科書の改善

本間久雄

○

政府當局の所謂「思想善導」とやらは、新聞に現はれたところから推測すると、いかにも馬鹿々々しい近頃の愚策である。政府が宗教家——其實宗教を商賣とする連中を一夕招いで、思

想善導に關する知慧を借りるといふことの、いかに噴飯事であるかは、前月の本誌で、高嶋米峯氏の所論に盡きてゐるから贅しないが、實際、招待された宗教商連中が、思想問題に關しては一言も口にしないで、その代りに、開き直つて、政府が宗教團體を常に冷遇するとか何とかいふことを、政府當局に詰問したといふ記事を、新聞で讀んだときは、政府が、寧ろ可哀さうで、慘めでならなかつた。丁度、御馳走に招いた客から、禮を云はれる代りに、なぜもつと前から御馳走をして呉れなかつたかとつけこまれてゐるやうなものだ。

政府が招待した宗教家――佛教、神道、基督教の連中は、それぞれの宗派や團體では、いづれそれ相當に重んぜられてゐる人々であらう。しかし、その重んぜられてゐるのは恐らく純粹の宗教家としてといふよりは、恐らく、所謂政治家的手腕によつて、その團體を巧みに切り廻してゆくといふところに原因がありはしないか。それはともかく、新聞に擧がつてゐる所謂宗教家の名前から想像しても、彼等は、現代の複雑な思想界に處して、その善導の任に當り得る人々であるか否かは、常識で考へても分ることであらう。もし、眞面目に、心から、彼等を思想善導の任に堪へたり、思想善導の相談に値するものと考へてゐるといふなら、政府當局は、全く、お話しにもならない常識以下だ。

政府は、宗教團體以外に、社會教化團の人々をも招待して、思想善導の相談をするといふことだが、この方とても――どんな人々を招待するのか知らないが――某々宗教家連を招待したところから推測して、たかゞ知れてゐる。

要するに、政府の今度の思想善導は、少くも今まで傳へられたところから云ふと、近頃での愚擧である。

○

しかし、一歩を進めて、一體、政府が「思想善導」を提唱すべきものかどうか、又提唱して果して効果が擧かるべきものかどうか、といふことは、大きな疑問だ。

思想は云ふまでもなく、固定したものではない。時代と共に常に變化して止まない。殊に、今日のやうな複雑多様な時代には　思想そのものにも複雑多様なすがたがある。これを一色で塗り潰さうとしたり、一つの旗印の下に統一しようとしたりするのは、いかほど思想的に人格的に卓越した人が試みても、恐らくは、結局失敗に終ることであらう。況んや思想的にも人格的にも何等卓越したところのない連中が企てるにおいてをやである。

それに、政府といふものは、思想的には舊思想を代表するの

大抵の一般の人は、何思想――因襲的思想に囚はれてゐるものだから、政策上にもそれと反對することは不利益なので、意識的にも無意識的にも、政府は常に因襲的思想の基礎の上に立つ。だから、思想善導の立場から云ふと、善導されなければならないのはむしろ大抵の場合、因襲的思想を基礎とする政府側の連中である。因襲的思想は、丁度、河の流れの淀みのやうなものだ。さういふ淀みを、正當な流れに轉廻させるためには、常に新しい思想の刺戟と誘導とが肝要である。言葉を換へて云ふと、新しい健全な、思想によつて、古い、時代錯誤的な思想が善導されなければならない。そして、因襲的思想の巣窟である政府に取つて、その刺戟となり、誘導の任にあたるのは、この新しい、健全な思想を基礎とした輿論である。この輿論に耳を傾けるか否かによつて、その政府は、長命であつたり、短命であつたりする。

とにかく、思想的に善導される側に立つのは、多くの場合、政府側である。だから官僚の立場にあつて、國民の思想善導などいふことは到底不可能なことでもあるし、またそのことを忘れて、「思想善導」などゝ、高飛車に出るのは、釋迦に說法の類でもある。

事實、思想善導らしいことについての政府の試みは、殆んどすべての場合に失敗してゐる。最近では、床次内相の例の醇澆節道徳の鼓吹なども、比較的大がゝりに行はれた運動ではあつたが、無論失敗の例に漏れなかつた。

ずつと遡つて、德川時代にも、例へば、例の松平樂翁や水野越前などの計畫した種々の風教廓清的政策なども、一種の思想善導の運動ではあつたが、これらも見事に裏切られてゐる。要するに、政府側で、思想善導などいふことを試むべきものか、どうか、又果してその効果があるものかどうか、といふことは、大きな疑問である。

○

しかし、思想善導といふやうな、自分がいかにも善導者にでもなつたやうな傲慢な態度からではなく、一般の思想問題に留意するのは、政府としては當然しなければならないことだ。殊に今日のやうに、思想的にも生活的にも、嵐の前のやうな不安と焦燥とに國民一般が驅られてゐる時代には、その不安と焦燥とが、何處から來るか、どこにその源因があるかといふことを、虚心で、而も謙遜な心で探求し、研究して、その不安と焦燥との根源を根だやしにするやうに努力することは、心ある爲政家の當然採るべき態度であらう。果してそれが出來るかどうかは別問題としても、とにかく、それだけの覺悟が肝要であら

う。

○

上のやうな意味で、「思想善導」などいふ口幅たいことではなしに、政府側が、もし、どういふ方法かで、嵐の前のやうに險惡な現時の思想的雰圍氣——思想の惡化などいふ言葉をよく御用學者は用ゐるが、今日の思想が全體として、果して惡化してゐるか、又はそれが當然なのかは、もつと研究してからでなければ容易に云へないことだ。ただ思想の雰圍氣が、嵐を豫想するやうに險惡で、平靜を缺いてゐることだけは確かだ——を、多少でも緩和しようと思ふならば、私はその具體的方策として、敢て次の二ヶ條をすゝめる。

第一は、ジャーナリズムの尊重といふことである。

政府がジャーナリズムをどう解釋してゐるかを私は知らない。又、現代のジャーナリズムに潜んでゐる弊害のかず〳〵をも十分に私は認めてゐる。しかし、どいふ弊害がそこにあらうとも、とにかく一代の輿論——思想的の歸趨を暗示した一代の輿論がジャーナリズムによつて醸し出されるのが事實であり、そしてこの輿論に傾聽することが爲政家の大きな義務である以上、政府は、十分にジャーナリズムを尊重すべきである。ジャーナリズムの輿論を尊重することは「時勢」の流れに棹すことである。これに棹して居れば、徒らに反動思想の味方となつて時代に逆行し、そしてその時代を一層の混亂狀態に陷らせるといふやうなことは恐らくなくて濟むであらう。現政府などは、殊にこの點において猛省する必要がある。

第二は教育の改善——今少し具體的に云ふならば、小中學程度の教科書の改善である。

今日の小中學程度の教科書が、いかに時代錯誤の思想に充ちたものであるかは、今更事新しく云はなくともよいだらう。一昨年であつたか、私は本誌で、小學校の國定教科書の中から、軍國主義的要素を指摘して、これらの軍國主義的要素がいかに今日の時代に不適當なものであるかを論じたことがあつたが、單にこの問題ばかりではない。その他にも時代錯誤的思想が至るところに盛られてゐる。

例へば、階級意識の問題などにしても、今日では、すでに非常識な反動思想として、新時代の國民には一種の常識となつてゐることでも、何等の修正をもされずに、そのまゝに教科書に載つてゐる。今、手元にその書物がないから、そのまゝの文句を引き合ひに出すことは出來ないが、たしか國定教科書の四の卷か五の卷で上杉鷹山公を記述してある條下に、鷹山公は、大名でありながら百姓のやうな粗衣粗食に甘んじた節約生活をし

たのが偉いといふ意味で、公を讃美した文章があつた筈だ。何でもこの文章は、大名は贅澤をしてもよいのだが、そのしてもよい贅澤をしなかつたのが偉いといふ意味に解されないことはなかつた筈だ。現に、私なども、少さいときは、さういふ意味で鷹山公を有がたい名君だと、學校で說ききかされたことを覺えてゐる。

今日の時代思潮は、そんなアナクロニズムを、もう斷じて認はしない。むしろ大名のやうな遊民階級、搾取階級は、百姓以下の粗衣粗食に甘んずるのが當然だと今日では思はれてゐる。つひ、この間も京都の水平社大會で、わが國近世階級制度の建設者であり、擁護者である德川一家に、爵位返上の勸告を議決して、大に階級打破のために氣勢を擧げたと傳へられてゐる。それが勸告として當を得てゐるか否かは別問題として、恐らく、いかなる人でも、今日では、差別待遇の撤廢といふことに對しては、まづ氣分的に同感せざるを得ないであらう。今日はさういふ時代である。それにもかゝはらず、小中學の教科書が、依然として一世紀も二世紀も後れてゐる封建思想をそのまゝに載せてゐるといふことは、思想的に見て、驚くべき奇怪事でなければならぬ。

だから、小中學で如上の封建思想を注ぎ込まれた若い男女が、いざ世の中に出たとなると、その學校で教へ込まれたことは何の役にも立たない。ばかりでなく、「現代」といふ時代の人々のためには、却つて邪魔になるといふ結果となり、強いて思想の混亂を來たし、その歸趨に迷ふといふことゝもなるのである。だから、小中學の教科書改善といふことは、目下の重大な而も又緊急な問題である。

尤も、今急に、教科書を改めたからと云つて、その効果の目に見えて急に擧がるものでないことはわかり切つてゐる。少くも、その効果の擧がるのは次の時代まで待たなければなるまい。しかし、現在のやうに、時代とそはない教科書を用ゐてゐるといふことは、小中學のまだ若い男女の心靈を、或る意味で虐殺するものであることを知るならば、すぐに、眼前の功績の擧がるものでないからと云つて、放擲するのは、眞に國家を考へる爲政者のすることではない。この點については、私は當局の猛省を促したい。

尚、一言したいことは、さういふ教科書改善の實際的方法であるが、在來のやうに、文部の官吏に編纂を一任したのでは、出來上るものは、今日のと、恐らく五十歩百歩であらうから、やはり、在來の傳統に對する理解もあり、新しい世界思潮に對する批判もあるといふ、穩健にして、健全な立場にある思想家

たちを、その相談役とも、監督とも顧問ともして、從來の官僚式編纂法を全然變へなければなるまい。しかし、今度の宗教家招待の例に徴しても、そんな思想家たちを、今の政府が見出しもしまいし、又見出さうともしないだらうから、教科書改善についての私の希望も、結局は、私の心の中だけの一種の空想として、終ることであらう。

# 俗吏輩の所謂思想善導に就て

法學博士　堀江歸一



## 一

我國に於て、政府當局者の爲す事の内には、時に滑稽に類するもの少なしとしないが、私は其内の一として、歴代の當局者が常に爲す所謂思想善導の計畫を擧げることに躊躇しない。

所謂思想善導の對照として用ひられる言葉は所謂思想の惡化であるが、私は近來に至つて、我國民の思想の如何なる所に惡化の兆候のあるかを知るに苦むものである。我國民思想として、中外に誇る可きものは、忠君愛國の一念であるが、國步多難の今日に至つて、私は我國民に忠君愛國の念の益々盛なるものこそあれ、毫も其衰へた跡あることを認めるを得ない。皇室の御繁榮に對しては、國民心を一にして、之を慶祝し、敢て他あるを知らない。一方に歴代の聖天子は國民に對して仁慈を垂れさせられることも、亦萬國に例を見ざる所であつて、苟も日本國民として生を現代に享けたことを喜ばない者はないであらう。如何にも昨年二重橋事件とか、虎門事件とか云ふが如き、不祥事の續出した爲めに、一部の人士をして國民的精神の動揺を顧念するに至らしめたかも知れないが、該事件の如きは、何れも狂人又は之に近い者の發作的行爲に過ぎないのであつて、苟且にも之を以つて健全なる國民の思想を云々するが如きは、沙汰の限りであるとしなければならない。

故に皇室に對する國民思想に對して、私は何等惡化の兆候を認めなければ、又隨つて何等憂慮す可きの跡あることをも知ら

ない。世上の識者が益々忠君愛國の大義を明にし、國民をして居家處世の上に、嚮ふ所を知らしめんことを希望して、已まないのである。

然らば如何なる方面に、國民思想惡化の厭ふ可きものありとするであらうか。或る者は我國民に階級打破又は階級無視の念の盛なるに至つたことを以つて、或る者は、我國民に上長に服從する道徳の乏しきに至つたことを以つて、之に充てるかも知れない。而して昨今思想の善導を云々する者の如きは、斯る事實又は假想した事實を捕捉し、之を思想の惡化であるとして、匡正の道を講じようとするものであるかと思はれる。果して彼等の認めて惡思想とするものが眞實國家を荼毒するが如きものであるかどうかは、後段の問題とし、私が第一に考へんと欲する所は政府當局者の所謂思想善導手段の如何である。而して歴代の當局者は此點に就ては、常に型の定まつた事とするのであつて、殆ど其埒外に出づることを許されない。然らば何事をするかと云へば、神、佛、耶三宗教の代表者を集めて、教義の宣傳を依頼し、又國民をして神社佛閣を禮拜せしめ、無名の郷社にまで、祭祀を絶たざらしめることを期する。而して清浦内閣は此外に各種教化團體の當事者を招待し、彼等の力をも藉りようとした點に於て、聊か異色を發揮したのである。

思想の矯激に流れることを制する爲めに、宗教の力を求めるのは、一應尤もの次第であるが、我國の既成宗教にして能く國民思想を涵養し、淘冶する程、國民に勢力あるものがあるであらうか、將た又佛教の僧侶、耶蘇教の宣教師、神道の神官にして能く信者に對して、安心立命の地を與へ、彼等の動もすれば荒まうとする精神に一道の光明を放ち、今日の如き汚濁の世界、罪多き、社會に身を置いて、尚ほ佛弟子たり、神の子たる行を爲さしめるだけの感化を及ぼす人があるかと云へば、私の寡聞なる、殆ど其人あるを知らない。時々何々教、何々道と稱する淫祠に類するものが出でゝ、世間を騷がすが如き、如何に既成宗教の無力であるかを語るものであつて、斯る際に彼等に國民思想をして中正に就かしめるの運動を望んで、何の效果が現はれるであらうか。思はざるの甚だしきものである。曩に床次竹次郎氏の内務大臣たるや、三教合同を主張して、世間の笑を招いたことがあつた。爾來當局者も流石に世間を憚る爲めか、佛耶神の三宗派代表者を別々に招致するさうであるが、思想善導を謀ると云ふことに於て、無益であり、無用である點から云へば、彼等の合同を考へると、各別に招待して、依頼するのと、其間に何の差別を爲すを得ない。

各種教化團體の當事者を招待して、思想の善導を依頼した

は、清浦內閣を以つて、嚆矢とする。然も其教化團體の內には、反動的思想を代表することに依つて、却つて、今日の國民思想を攪亂するものがなかつたであらうか。國民道德の如きは、時勢と共に、其標準とし、規矩とする所に異なる可きものゝあるのは勿論であつて、隨つて封建時代に起つた或る道德を大正の今日に鼓吹するが如き、却つて國民思想に有害なる影響なしとしない。教化團體と銘を打つたものであれば、其教へる所の如何を問はず、總て其力に依つて、今日の國民思想を淘治するの資料に充てようとするが如き、當局者自身の思想甚だしく混亂したものと云はざるを得ない。

## 二

當局者の認めて、以つて國民思想の惡化とするものは、果して眞正の意義に於て、惡化とす可きものであるか、其第一は階級無視の觀念であつて、現に此邊の傾向の現はれることを恐れて、普通選擧の實施に反對した政治家のあつたことを考へれば、今日同樣の守舊的思想の行はれることも、亦怪むに足らないかも知れない。然しながら社會に於ける階級のものが本來人間生活の便宜に基いて、作り上げられたものである一方に、其階級に於ける上下、高低を決定する標準に充てられた權力の分賦とか、富の分配とか云ふものが當初に定められた所に比較して、趣きを異にするに至つたならば、自ら階級打破若しくは階級無視の念の國民の間に湧起することは、已むを得ざる勢としなければならないであらう。最も目前に近い例を取れば、今春來我國に起りつゝある所謂特權內閣に對する反對運動である。一部の人士は之を以つて階級無視の念の發露したものとするかも知れない。然し貴族の子弟が貴族の家に生れたと云ふ故を以つて、政治上に大なる特權を擁し、自己の有する才能よりも、寧ろ此特權を利用して、政界に榮達を極めると云ふことに爲れば、國民の反感の期せずして之に嚮ふのは、怪むに足らない。故に階級無視の觀念が國民の間に釀成されたとして、政府が之を思想の惡化であると認めて、其矯正を行はうとするならば、階級的特權を利用して、自己の實力に不相應なる政治的地位を獲得するが如き、非違の所業を避けることを以つて、第一の要訣としなければならない。

第二に國民思想惡化の實例として、屢々指摘されるのは、我國民に上長に對する服從觀念の缺如するに至つたことである。然しながら服從を以つて、一個の美德であるとし、一方に國民の間に濫に上下の差別を立て、偶々下級に列せしめられた人々をして上級の班に就かしめられた人々に服從の已むを得ざるに至らしめるが如き、一種の奴隷道德を以つて、社會生活を律せ

んとするものに外ならない。今日の經濟組織は人と人との間に設けられた人爲的連鎖を切斷し、彼等にして對等の力を有する限り、互に自由の競爭に從はしめて、以つて各自の能力を錬磨せしめることを期する。此間に於て、法律を以つて、因襲を以つて、一人に對して、他人の服從を强制するが如き、大なる間違を生ずる所以であつて、苟も人として世に處する以上は、他に對して飽くまでも對等の關係に居ることを期しなければならない。斯くて主人と婢僕との間に、資本家と勞働者との間に、雇傭者と被傭者との間に、夫れ〳〵獨立對等の關係の認められる次第であるのに、我國民の一部が之を目して、社會上の一大變動であるとし、此變動を望む者を指して、思想の惡化であるとするが如き、時勢の進步を辨へざるの甚だしきものである。

## 三

從來官吏が國民思想の善導を企てたことは、一再にして止まらないが、實際に幾何の効果を奏したりと見る可きであらうか。儒教の復活であるとか、忠孝思想の鼓吹であるとか、信仰心の涵養であるとか、種々の方面に亘つて、行はれたことがあり、時に甚だしきに至つては、浪花節語りの優遇にまで及んだこともあるが、多くの場合を通じて、常に見る所は下僚輩が上官の意を體して、之を實際に行ふに當り、只管事の及ばざらんことを恐れて、極端の所業を爲すの一事あるのみである。從來當局者が思想善導の目的を以つて、國民に與へた教訓の內には、固より尊敬に値するものなしとしないが、第一其多くは空漠たる所言であつて、實際の生活に適用する規矩と爲らない、第二非常の事變に當つて、貴重の教訓と爲るとしても、日常の行爲を律する標準に充てるを得ず、第三既に一個の教である以上は、躬行實踐を以つて、本義としなければならない道理であるのに、斯る教を垂訓する國務大臣必ずしも有德の人でなく、隨つて之を鼓吹する地方長官以下の官吏亦一個の俗吏に過ぎないとしたならば、實際の効果の容易に求められなかつたことも亦怪むに足らないのである。流行に清浦內閣の當局者は自ら思想善導の衝に當ることを以つて、良心に恥る所ありとする爲めか、特に僧侶神官宣教師若しくは教化團體の當事者に嘱し、彼等をして事に當らしめようとするが如くである。然れど是等の人々が其德行に於て、思想に於て、知識に於て、官吏輩に比較して、幾何の勝れりとするものあるを得るであらうか、私の疑を挾まざるを得ざる所である。

## 四

今日我國に於て、國民思想をして其正しきに就かしめるに就ては、必ずしも俗吏輩の之を善導することを要しない。又思想

なるものは、決して之を一の型に統合し了す可きものでもない、種々の思想が一の社會に存在して、互に淘冶鍛錬された上で、始めて多數國民の間に承認される思想を生じ、其行爲を規することゝ爲るのであるから、國民思想の中正を得るに就ては、

第一、思想の研究并に發表を自由にし、苟も之に對して、權力の干渉を加へないこと、

第二、思想に對するに、思想を以つてし、權力の干渉を加へないのは勿論、暴力を用ひて思想を壓迫しようとするものに對しても、亦充分の取締りを施すこと、

を必要とする。而して他の一方に於ては、

第三、政治上に、民意の暢達される道を設け、其杜塞される爲めに、生ずる弊を除くこと。

第四、官吏社會や、民間の銀行會社等に存する幾多の閥を打破し、才能ある人士をして其才能を充分に發揮せしめる道を開くこと、

第五、國民一般の生活を安易にし、特權、獨占、偏私等苟も情弊に類する事に依つて、利益や富を一部階級に壟斷せしめるが如き勢を打破すること

の諸點亦思想善導の方法として、缺く可からざる所に屬する。

今日清浦内閣の爲しつゝある所は多く是等の要求に遠ざかるあるに拘はらず、口に思想善導を云々するが如き、吾人の認めて、奇怪事とせざるを得ざる所である。




# 日本近代詩の象徴思潮

日夏耿之介

引。本篇に於ては大正十一年十月號本誌所載「日本近代詩の成立」及び本年一月號本誌所載「日本近代詩の浪曼運動」に接續して、明治三十八年以降明治末期に臻る明治近代詩發展の第三期を概叙し、輓近詩壇の意義及價値の背景を討ねて、民族の詩的發語の模樣が他の文化的諸分科といかに聯關の理法のうちにあるかを究めんと欲す。尙一月號所載文中所々誤記誤植あり、「文壇照魔鏡」の作者正岡蘂陽を山口孤劍とせる誤記、川島浪速を浪雄とせし誤植、小山内薫を論評せし項が誤植と誤記とにより意味が反對に近き程度になりし等の缺點等凡て改めて讀者の再査を覓めをかんとする所也。又、文獻を尋ねてつひに獲る能はざりし相等の作家は之を流布の概觀本等の知識などもて補ふ能はざるを以て遺憾乍ら批判と記述とを割愛したり。

## 第一部　頽唐詩體

### 第三期前期

（明治三十七、八年――明治四十一、二年）

### 一　詩感母胎としての同時代思潮

輓近派の清新體（ドルチエ・スティル・ヌオーボ）が完成するまでの歳月は、古く必然に酸敗した民族詩想がまつたく朽ち落ちて新らしく萠んだ葉が早くも二葉を生じ水枝をつけやがて鮮かなその初花を笑かせるまでの建設期であるから、その間に生れ、育ち、亡んだ數々の詩想、詩作の實際を檢討せんとならば、必然に詩想の母胎とし

て同時代の一般思潮、詩作の背景としての思想の契機、環境の事象を顧みなければならぬ。

私は、第二期を論じた所で、歐洲文藝復興以來數百年間思想の起伏を、我民族は明治年間五十年中に悉く經驗するべく餘儀なくされたと云つた。さきに政治上必至の事情によつてプロイセン風の國家主義が取り入れられ、それが次第に傳統的國粹感情と融合して、不思議な狂信を帶べる近代的國家の成立と近展開し、一方、資本主義の經濟組織が段々完備して、假令んば半開急進國家の常として財政上の窮乏に苦しみ、入超の報告に嘆息を重ねなければならない狀態にあつたにせよ、國家生活の大機能を操作する土木事業、教育事業、社會事業の色々は半世紀前のサムライ人種らのかつて夢想だもしなかつた程度に進歩發達して、就中、自然科學の研究と軍事上の諸攻究とに於ては、ウタマロの幻影とラフカディオ・ヘルンの白日夢とによつて日本觀の根柢を大なり小なり根づけられた多數の日本研究者にサムソン・ヒンメルスチェルナ風の黄禍的畏怖を衝動させるほどの急進的効果を見せた。アンピール銃の西南戰爭はやがてプロシヤ參謀メッケル少佐の招聘となり日清役後の軍備擴張は日露戰二十八萬餘噸の艨艟を造つたのである。ゝ山や管叟の英國哲學に始まつた明治哲學が、一人の哲學者なく盡つたにせよ、現代に於て敢て系統の組織に直面する哲學思惟の可能者を産出しつゝある所以は、これを過去に於て、井上圓了の幼稚な唯心哲學や井上巽軒の形式的な實在論が時代の精神中樞と民族の形而上學的訓練とを刺戟した事實がそくばくあつた事にも歸せなければならない。些かなものでも前驅するものは時代犧牲としての跡を殘してゆくのであるから。獨逸兵學の横溢は、かくして、獨逸哲學の縱流と並びすすんだ。カントとハルトマンの先行の上に立つ現象卽實在の論策は純理の精緻を外裝せんとしても、それは單に抽象的で形式的で、ともすれば論理上遊戯に隨するにすぎず、源流遠く溯つてその奥義を人格的に體驗し一致させたものはなかつたから、此等の純正哲學の要求が、單にいはゆる外來思想として椿らしがられたのみでなく、在來のアイデヤリズムの本質的欲求に基いたものであるにせよ、時代は倫思想にわかく、民族はまだこちたき哲學的思念に慣れない、加之、梅櫻桃李一時に思想の花を咲かせた明治中期にあつては、西歐世紀末の思想も亦同時に輸入されて來てゐる所から、本質的に反對の立場を自覺する者すら既に頻出して、民族一般の哲學として清般の實在論は到底根柢より普遍的に瀰漫せずに終つてしまつた。時代の民族は、寧ろ、手とり早く、倫理宗教の實際の救ひの手を待つた。清澤滿之、近角常觀の說教が、信教の自由

を允され乍らしかも何ひとつ與へられなかつた明治靑年の渴を癒さんとし、樗牛が美的生活論のセンセイシヨン、綱島梁川の見神の實驗の衝動が各當代のヤンガージェネレイシヨンに共鳴する事多かりし理由、並びにそれが哲學界にはさして波動を與へずして止んだ理由はこゝにある。

國家至上主義の高潮は日露戰役前後にはじまつて明治時代の終末に際し正にその赤道下を航過した。すなはち、それに對する反動は廣瀨中佐の軍歌を高唱する少年らの小胸の一隅に既に業にあつたのである。國民的自覺を强ひられた德川人の若き末孫は、個人的自覺をつかんで一躍して輓近派の世紀末思潮に洗禮されなければならなかつた。「僕はイゴイストだ」と當時にしては大膽に卒直に內心の傾向を暴露したところに若き樗牛への興味があるが、この明治の日本が生んだ近代人は、ニイチェ及びニイチェヤンの近代西歐詩人が或は自殺し或は窮死したごとき結果に身を焉らしめたに反し、日本人持前の樂生氣質と樗牛持前の肯定僻とに引きづられて自然に落込む筈の紀季的斷層を避けて活潑な日蓮主義の宣傳にその理想主義的覇氣のはけ口を目付け出したが、この「信仰の覺醒」は梁川に於けるが如き狂信者を牽引する力は既に無かつた。國家信仰の點に於て反國家的態度を摸索してゐる靑年らを躊躇せしめたのである。樗牛亡びて半歲の後、華嚴の瀧にとんだ少年藤村操の死は（よしんばその原因にいかなる他の事情があつたにせよ又なかつたにせよ）この期の思想を極端に押し進めたものの具象であつた。さまよへる羊のむれは、かうした犧牲を拂ひながら、やがて「宗敎」の門をたゝいた。既成宗敎の信條と儀禮とにとらはれず、佛敎と基敎とを同時に取り入れる類の思想家のその宗敎である。そこはかとない敬虔の內心がのぞむ歸依信樂の門である。維新以來の啓蒙思潮は、日淸役後の日本主義提唱により夥しくその道途をはばまれたが、個人の自覺が敎化の普遍によつて促進されてから再び倫理の一面に破毀と分析と創造の手を延ばさうとした。詩興の陶醉の幻夢に身を任せて啓蒙期の倫理的意義に衝突したものはついにその身を亡ぼすか、我と自ら思惟の蓋を閉ぢて山林に逃遁するより外に道はない、然らざる殘されたものは敢爲に實際的倫理學的意義に直面して、當然、殘されたる唯一の門、宗敎の口に入つて、論理的理解、概念的思惟の方法を放れ、感情の陶醉、信念の練磨のあひだに、個人的理想主義の立場を拓かんと企てた。一切の宗敎感情の勃興がこゝからはじまる。特に基敎徒の間にあつては、敎養の世界の感化もあつて、宗敎に身を任ねる者同時に藝文の嗜向を有し、藝術に獻身する者しば〳〵新敎各宗の歸依者であつた。植村正久はブラウニ

ングを講じ、內村鑑三は「愛吟」を殘し、「久遠の基督敎」徒小山鼎浦は劇詩の習作者となり、佛基兩敎にまたがつた自由信仰の反敎會基敎徒綱島梁川は泣菫が詩の同情ぶかい批判者であつた。現代詩感に交通多きは、自然、基敎徒に多かつたが、淸澤滿之の精神主義が親鸞に基し、高山樗牛の信仰が日蓮を祖師と仰ぐも、畢竟、かれらはともにそれら宗門の祖師によつて自家の信樂を說いたのである。かれらに導かれた若き宗門の沙彌らまた次第に詩歌の壇に參するやうになつて來た。

## 二　新詩壇の社會的位相

「新體詩」といふ名は明治末期あたりから捨てられて來たが、その名の上に新體の形容のついてゐる間、あだかも漢詩は社會に於ける藝術的一勢力であつた。漢詩欄が雜誌「太陽」にあるごとく、新聞「日本」にもたえなかつた。上の部では純正漢詩人の眞面目な藝術的努力として詩集の刊行や詩會の集ひや支那日本古詩史の研究やが盛んに行はれ、下の部では大臣、實業家、休職官吏らの「雜懷」を示す料としての道樂詩集の發行や遊戲的集合や「好應酬」やが取交され、席上、幇間詩人の斡旋が校讐のごとくしきりであるのが例であつたのだが、此期の頃よりして新詩は次第に世間にその藝術の一分科としての存在性を認められ、新詩人は、ひろく文壇に於ける一存在として識られるに至つた。もと、一番現實の事實として、新詩は、單に靑年士女の戀愛や、幼稚な政治思想の表現としてのみ用ゐられ、思想の圓熟を示した中年期のものの藝術的表現の具としては最も不備であると一般に見做されてゐることと、漢詩家、歌人、俳諧師が職業として存在しうるに係はらず、新詩人は少靑年の一部のあひだにのみ喜ばれ到底職業としてはいふ迄もなく文藝の分科としても一般的にはなほ完全には存在しえないといふことと此二つの卑近な事實が、一般民衆に新詩への興味を輕からしめる材料となつてゐたが、泰西詩史の學問的研究が大學に講ぜられ文學雜誌に發表され、それらの詩歌と一番交涉ある本質のものが稚い乍ら今の新體詩を措いて外にないといふ事實や、少數の眞詩人の作品が段々世間に讀まれるやうになつて來たといふ事實などが集つて次第に社會上の藝術的存在が認められるや、一方、「新體詩抄」に育まれた少年は既に一人前の靑年として成人するに至りそれらの靑年が「中學世界」漢詩欄の廢止などとともに新詩の興味にかへり、小中學敎育に於ける國語漢文の成語の簡易化が敎科書委員らによりて實現せらるるに伴ない、漸く漢詩の制作が難事となり新詩の創作が普遍するに至つた。數から見ても質から見ても、明治詩史に於ける眞詩人は、漢

詩に多く新詩に掛かつたことは事實である。が、舊詩型の保存の意味以外、既に漢詩形への新らしい興味はない。新詩型の愛育は、藝術魂ある作家、評家、少數鑑賞家の熱心な直接問題であるのみでなく、世界文學史に於ける自邦文學の位地に關心ををくもの、世界文化史に於ける日本文化の價値に關心ををくもの、凡てが、新らしい民族詩感の表現の一型式として、在來の歌と句と以外にあつて一領土を有する新詩の發達に限りない懸念を感じてゐた。新體詩を「しんていし」と讀んで平然としてゐたのは評壇の宿老であるが、當時の青年はこの無心に對してすら憤滿を抱かないではゐられなかつた。恰も、自然主義を「じねんしゆぎ」と讀んで小説好きの青年聽者の顰蹙を買つた佐々醒雪の講演があつたごとくである。象徴詩を漫罵して少年の反感を求めた學匠は、やゝ晩れて自由劇場初演の當夜、開演中常として來た私語を交して紺飛白の叱咤にあつた下町の若女房とその新舊立場の位置に於て大差はない。俳句と短歌の革新以上に新詩の愛育は神經質で多血質な當代少年のみの重要問題であつた。

が、次第に認められたといつても、社會上はいふ迄もなく、雜誌の上での新體詩の待遇は甚しく物質的に貧しかつた。新詩によつてのみ衣食することの不可能は、今日でもさうであり、未來永劫さうであるに違ひなく、外國に於ても少數の大作家又は通俗詩人をのぞいて又さうであるのだが、漢詩人や俳諧師、歌人が徒弟を漁り添削料をえて糊口の資となしうるに反し新詩人はそれが叶はぬため僅かに雜誌の一隅に餘白を割かれて涙錢をうるにすぎなかつた。必然、新詩をわざとするものは、財産を擁するものでなければ、親の脛嚙りでなければならない。少くとも他に職業を見出して時餘をこゝに充てなければ普通人には不可能であつた。それは今も尚同じである。が、當時に、その狀態にあつても心の安慰は幸くも保たれた。今ほどせち辛くはなかつたのである。それらの青年が一團となつて新詩の進展に從事したのである。社會との交渉はこの時分からして必然起らなければならない。文壇では、露伴、鷗外の二人が早くもこの問題的新詩にその手を染めたのである。

社會が手を延べて功利的に新詩と接觸した初めは、新詩中の最劣等値に位する軍歌、唱歌、校歌、市歌、團體歌の類を求めたことに起る。明治十五年はじめて「新體詩抄」が出る前の年に早くも「小學唱歌集」が出たのを見ても必須の關係は伴はれない。日清役、義和團事件、日露戰役と戰ひあるごとに街上高く軍歌は樂唱せられて喇叭のひびきとともに士氣の鼓舞と愛國心の鼓吹との役目を命ぜられた。鐵道の延長につれて「鐵道

歌」が、世界的興味の普遍につれて「世界唱歌」が、自治團の發達につれて市町村歌が、教育の發達につれて校歌が各その獨得の職務を擔任した。落合直文、山田美妙、與謝野寛、土井晩翠のものは普ねく兒童に謳はれた。それは既に數年前からの事である。懸賞歌がひろく天下に募られた最初は、三十五年、「大阪朝日」、「讀賣」、「萬朝報」の三新聞が賞をかけて新體詩をつのつた時で對社會感に敏感な新人の集團、新詩社々員は三社に感謝狀を送つて其志を賞した程であつた。「大阪朝日」は「大阪市の歌」を、「萬朝報」は「處世の歌」を「讀賣」は「大日本膨脹の歌」を求めたのであるが、大阪市歌は、詩人として相當の名を知られた一柳芳風が當選した。

霞こめたり生駒山
浪は靜けし茅渟の海
三州の野の末とほく
造りたてたる大都會
大厦高樓並みたてる
浪華の春は夢ならず
あゝ麗はしき大阪市……

の類の布置であるが、一般幼孩の頭を標準した關係もあり勿論詩として論じるべきすぢのものではない。膨脹歌當選者は永井人穎といひ次のやうな歌旨の進行である。

歴史を見れば古人は雄飛
雑林蹴たてゝ　シベリヤまくる
アリナレもアルタイも
吾の祖先　さても猛しや……

處世歌の第一等は中里白香、第二等は鳥潟隆三であつた。第一等歌のスタンザは

吾等が力弛む時
吾等の汗の乾く時
朱紱の宰相威嚴なく
紫綬の將軍名譽なく
希望の光地に落ちて
果ては國家もなかるべし。……

ともに拙劣極まる措辭であるが、募集社の性質もあつて後者のそれに勞働の神聖が歌ひこまれた應募歌の多かつたのは注目に値した。が、それだけで社會からは目星しい反響を獲られなかつた。「人氣取」か「局面轉開」の新聞屋仕事以上には考へなかつたのである。應募作品の低劣は社會好尚の水準を示す。反應の稀少は新詩そのものの社會性の稀薄をあらはす

社會主義的運動は此期に、萬朝を退いた幸德秋水、堺枯川により平民社が設立され(三十六年)「平民新聞」が發刊されて後は、二年の後解散の憂目を時の桂政府に得た當時で、枯川の外に原霞外、山口孤劍が文壇に姿を現はした當坐で、もとより社會詩人として見るべきは一人もなく、兒玉花外の「社會主義詩集」(三十六年)の禁止のごときは、その詩と作者との性質より見て問題とすべき程の事ではない。時代はなほ社會意識よりも先方に立つ國家意識に鋭感を示した頃で花外の詩歌の類は他に多少あつたが、押し並べて一般人類意識の初期の覺醒にあたつて恒とする自由と憐憫との感情のやゝ狂激な發語にすぎない。よしんば社會哲學意識の明確な基礎に立つ思考を持ちえても、官憲の壓迫の非理に甚しく、民間「志士」の無知に甚しい當時に、社會主義感に倚る環境と個人との交渉の詩化は允される筈もない。花外はその翌年、「花外詩集」を出して禁止集の極めて穩和な若干篇と新作の同種作とを公けにし、附錄として友人知己五十九人の「同情錄」を收めたのは當時らしい趣好の、せめてものうさ晴らしで、その多くは眉を怒らした慨嘆の辭でなければ誇張した感情のてらひであつた。桂月は「沒分曉漢の俗吏」の凌辱を同感し、片山潛は「先年君が山梨より歸り將に關西に行かれんとするや余等十數人の同主義者は一夜キングスレー館に君が行を壯とし離別の小宴を開したり、余は同夜汽車に乘ずるに京都奈良及大阪の名所古蹟を探り一大詩彩を振はれんことを期し倂て彼等風光明美の絶勝をして我々信ずる社會主義を謳はしめんことを希望せり」といひ、幸德秋水は「花外に與ふ」の詩を贈り、

我口たとひ裂かるるも、
石は代りて物言はむ。
我筆たとひ折るるとも、
血潮は文字を染成さむ。
骨も碎けよ肉も飛べ、
正義は永く世に活きむ。
同志(とも)よ聞かずや、ラサールが、
「我は死すとも文明の
大運動の死すべきや。
諸君の中の一人だも、
息の根つづき得ん限り
我が點したる火焔(ほのほ)をば
燃せよ　燃せ　いざさらば。
斯くと誓はん人々は、
右手(めて)を擧げよ」と叫びたる
ロンスドルフの・命の

最後の一句、今も猶
我等の耳に響けるを。

とうたひ、梁川は「詩人の濕情の毀は、よく右をはぐくみて鳩となすべく、詩人の批判の劍はよく人を斬つて馬に班せしむべし」。「こゝに俗世に對する噴薄の不平塊を僅かに風月の海き衣につゝみて暗に一代の人心に訴へむとする一種有主張の詩ありとせむも、俗世の王權は、尙ほ心してその裳裾をだに濆さざるべき也。」と論じ、劍南道士は、「吾人の言はんと欲する所は、曾ては文藝界にすら未だ重視されざりし新體詩歌が、今や思想的産物なり社會の勢力なりとして、爲政者に認めらるるに至りたる事實是なり」と說き、靑柳有美は禁止の因は名のためである。「予の『戀愛文學』の如き」と同じだといひ、三木天遊は「文壇の寄食者とさへ人の惡い奴の嘲し候新體詩の、今は兎も角も國家社會の治安を害する迄の勢力あるものと認めらるるに到れる事を相共に慶賀」しようといひ、白星は禁止當時白、花交換の私書を公けにし、「白星問ふて曰く足下は社會主義を理想とせらるるや又この主義の社會に實現する事を期せらるるや。花外答て曰く然り。白星再び問ふて曰く、足下の著社會主義詩集は社會主義宣傳の手段として作られたるや。花外これに應じて曰く然り、予は社會主義を一の宗教として信奉するものなり」云々とて一たび他雜誌に公刊されたものの禁止は既得權の侵害だといひ、內務省告示第五十七號によつて內務大臣中將兒玉某が新體詩を解する事が判明したのは名譽だといひ、泣菫は「唯これを怖るる事鬼にも似たる今の爲政者の前に斯の四文字を冠らしめたる御集は稍挑撥と揶揄とに」すぎたものだとさとした。總じて藝術に理解なくして徒らに壓迫を事とする官憲への憤激が全部で、花外詩そのものを卒直に批判したもの一つもなく、名によつて禁ぜられたといふ說が有力で、反語的に詩の社會力としての進歩を賀するに止まつた。花外の詩は彼の漠然たる自由への渴望と非理の壓迫への憤激以外社會主義文學の立場から見ても藝術の本文批評の上から見ても事件ではない。この同情辭に垣間見られる文士らの態度に此時代らしい幼稚を見るばかりであるにすぎぬ。

社會主義詩のいきさつは此程度に終つたが、天遊や劍南やの云ふ社會への存在性是認の努力は此詩集の禁止位で果されたのでない事はいふ迄もない。鈍感無知な「世間」は無賴漢の徒が東歌風の今様で下らぬ事を書き散らした位しか考へなかつたのである。

更に、既成文化諸階級囹が見た新詩觀はどうであつたか。三十九年八月の「中央公論」は、「窃かに思ふに現時文壇に在りて

最も群疑の府となりをる」新體詩が、「或は字句に、語格に思想に、今日の新體詩は到底一の謎語のみ、作家等自身の圏内を離れて了解せらるべきにあらずと難ずるものあり、或は新事象、新詩情を歌ふには凡てに於て新を許さゞるべからず、之を謎語となすは新詩趣を解せざる凡俗の見なりと辯ずるものあり、……文壇諸大家の判定を得」たい云々の手翰を添へて「大方達識の士」に致した結果を掲げた。正岡藝陽は「日本國が百人の新體詩人を有する時、日本が露西亞に負けるの時に候」云々といひて「小生の新體詩、『日本勝つた〱露西亞負けた！』と結び、谷本梨庵は、今のものも相當に面白いが、要するに謎語であるのは國語がわるいので、「此際寧一言語界の源三位頼政現はれ出でゝ、斯の鵺的國語を退治」すれば兎に角左もなければ「従來のまゝにて多少の改良を加ふる」にすぎなからうと說き、宋松謙澄は、歌と何の傳統的技能に精通し、「美文的に綴り出」す「天才」が出て初めて功が現はれると教へ、山路愛山は、今の新體詩が判らないのは「想の熟せざる」せいだと攻撃し、小波山人は「何に合はして謡ふか」判らないと質問し、佐々醒雪は「句法も用語も餘りに曖昧」だといひ、虚子は新體詩の事は新體詩人に任せてをけ、不安心と思ふものは自分でやつて見よといつてのけ、坪内逍遙は、「詞閑の事はやはり自然の成行に任せ候かた面白き花も咲き實も結ぶべく」と論じてゐる。多くは不眞面目に逃げるか、言葉少なに避けるかで、作家側は大部分「歌ひて自家にならむとする」(泣菫)といふ旨が多かつた。之によつて見るとどうでもいゝといふ不眞面目な返答（その代表は日南福本誠の返答で言語道斷な猥りがましい狂歌で答へてゐる。當時の「名士」の大部分はこの種の劣等にして蕪雜な返答以上に出で得なかつたらう。帝國文學記者の如きは興奮して日南に喰てかゝつてゐる。）と自然に任せよといふ穩和な中分とで、坪内逍遙の言葉の如きが一番聰明な返答の代表的なるものであつたらう。が、とにかく「名士」によつて新體詩の救拔はなされなかつたのである。作者によつて世間への特別の期待は發せられなかつたのである。藝術に衆議判は効がない、「少數同情ある讀者と卓越せる評家」とあれば滿足されたのである。爾來、明治末期に及ぶ迄この對立は繼續された。大正期に入つて此の對峙は崩された。拙劣見るにたへない詩家まで「民衆的なること」の義を輕卒に無知に曲解して、わざ〱民衆中の一番無知にして一番低劣なるものの目がけてその標準をすゝめた。大正期の主潮がこれである。「中央公論」が掲げたこの問題につき翌年の「早稻田文學」は「大體に於て漸く新體詩の獨立的價値を認め來れる事を示せり」とその一瞥で報じてゐる。

三十九年には、倘、ヨネ・ノグチの主唱で日英米合同の第一詩集「あやめ草」第二詩集「豐旗雲」が發刊され、あやめ會が設立され、泣菫、有明、泡鳴、白星、林外、花外、小山内、敏、晩翠、月郊、醉茗、露葉、ビンヨン、ハウスマン、ハーディ、スタダード、モリス卿、グイネー、ミラー、ダスタン男夫人、イエエツ、フェネロサ、カウエイン、カーマン、プトナム、エディス・トヌス、オースティン、シモンズ、サザランド侯夫人、ビーボディー、タップ及びメネル夫人が名を列ねたが、二號にして永く休刊してしまつた。この企てもつひに何等の社會的波紋を殘さずにやんだのは當時としては寧ろ當然のことであつた。

國文學者として批評の鋭利と知識の確的を以て知られた藤岡東圃が四十年二月「帝國文學」誌上に試みた「新體詩論」はその史的究論に劣ろ陳套論であつたが、それでも新代詩人が舊國民即社會一般に迎へられぬは當然であり、一般言語の紛亂無統一亦此が責に任じなければならぬと云つた論旨には傾聽すべき點もあつた。岩野泡鳴は「讀賣」に之を駁して、必ずしも社會の理解を求めず。用語文體の統一は徒らに社會に待つべきでなくて詩人自ら試みるべきである。詩人は豫言者であることを要すると論じたのはより當をえてゐた。



## 三　象徵前期

日露戰爭當時、民族は、かつて經驗しなかつた狂信的なやゝ輕卒な、然し單純な國民としての誇りをえた。帝國主義の國家的立脚地を、本質的正義の立場と思惟して、或ひは、思惟させて、恒に永久にセンティメンタルなる、無知なる、輕薄なる、正直なる國民の盲目的な國粹感に投じて國家的雄飛の快感と正道を踏む喜悅との單純な民衆の昂奮の中に、資本家の投機心と軍人の功名心とを少からず織り交ぜて、美事な擧國一致を妥協と苟合とに長けた桂内閣が作り上げたから、よしんば少數の基督教徒や思想家や社會主義者やがその思想上の立場の必然性から敢然とたつて非戰論を稱へたけれど英雄崇拜のロマンティックな空想の手に導かれつゝ、國家的困難なる進退の實際を痛感してゐる國民は、これらの反對者を恰も非國民の如くに一蹴してしまつた。これは、當時としては正にしかあるべき結果であつたのだが、そのため勃然として起つた諸種の反動思想が、反國家的なる感情を導き、個人主義の思想を普遍化し、社會運動の急速進歩を將來しようとは豫想してゐなかつた。

三十四五年、世紀の回轉と共に個人思想の浸潤はあつたのだが、日露戰後の社會的好況、國家的進展と共に俄然急激な瀰漫

を示し、日本は露西亞に戰爭で勝つて文學で征服せられてしまつたのである。從つて、軍歌の類も日清役當時のやうな佳作は少く、一般詩壇も亦藝術上の純粹興味ある興奮をば示さなかつた。日清役當時にさへ既に文學界一派によつて軍國文學の愚を說かれた事はさきに述べた。當時の雙璧といはれた泣菫有明はじめ鐵幹、月郊、白星、林外、代水、春風、泡鳴、花外、清白、夜雨、醉茗、柳村の諸家に幾分の軍國詩はあつたけれど多く顧みるに足らず、鷗外は陣中に親らあつて多くの偶作をえたけれども、それは文學者森鷗外の一番拙劣な部分を示したにすぎない。國家主義に對する無政府主義的反抗はまだ詩の上には現はれてゐなかつたが、詩人も評家も、一般民衆の有識者らと同じ程度の心向で國家主義的行動を是認しながら、しかも一たび詩の問題になると、むしろ藝術至上主義の立場から、傾向的な軍國主義の喇叭卒となることに心から甘んじる事は出來なかつたのである。あるひは、個人の主觀的問題に切にして集團生活の方面を顧みるにいとまがなかつたのである。あるひは、個的生活と社會生活とを恰かも二個の存在のごとくに漠然と考へたのである。何れにしても社會意識が個人的思考の背景となつてその思想の重要な半面を分擔するにはまだ臻らなかつた。一般國民は日清役と卅三年役との準備を經てこの戰役によつて初めて國民的自覺を意識したのであるから、全國青少の口をして

　赤い夕日に照されて

を謳ひ、

　廣瀨中佐は死したるか

を唱へしむるにすぎず、しかも

　ウラルの彼方風荒れて

の侵略主義が一方の丘で高唱されてゐるにかゝはらず、又一方には、

　軍律きびしき中なれど

の安つぽい殉情調に軍國生活の個人的悲嘆をうつしてゐる事、あだかも日清役當時早くも

　渡るにやすき安城の

の作句がひびく小胸に又同時に

　すいといふのは梅ぼしひとつ

の忍從的哀唱があらはれてゐた如くである。一般黎民の間にあつては、悲哀と忍從の聲はあつても戰勝の恍惚、勝利の快感は忘れがたい。拙い軍歌に貧しい想像力の限りを托してこの國民的滿悅を味はつた。少數の識者は、戰中早くも財政狀態の奈邊にあるかを考へ、兵力の消失と兵力を働かす軍費の窮乏とをう

れひ、ポーツマス講和會議の憤激よりも、平和となる事の安心喜悅の方が强かつた。詩文壇の世界にあつても、啓蒙思潮の拘束を振り切つて宗教的自覺の方面に個人の安心を求める心が强かつたから「星と菫」の憧憬時代から「煩悶」の焦心時代に進程して、政界に第一桂內閣が五年半の長日月威權を振つて財界教育界內務部立法部とあらゆる方面に過渡期政治の陋態を百出させても、美しく飾つた雜誌の餘白からは思春期の惱ましげな嗟嘆が宗教的心向への杆格を意識しながら悶へてゐる憂鬱な私語としてきかれた。このとき民族の詩的發語を代表する筈のリーディングポエット達はいかに謳つてゐたか。

當時詩人としては最高の地位にあつた薄田泣菫を見るに、さきに「白玉姬」(三十八年)に收めた民謠體

藻伏束鮒春の日の
ぬるい水面に浮くと見りや、
草ばり柳に翡翠の
そよろと落ちた下し羽に、
やんら、隱れた、また水底へ。
隱れた、隱れた、
しよんがいな。「はずみ」第一聯

の類に見える試作は、同じ書の「鶯と大原女」や、「白羊宮」の「鈴蘭の歌」等に使用された

さつさ、いよこの

云々の疊句があらはすやうなあく迄も彼獨得の古雅なかたちを尊ぶ精神に立脚してゐるために、

『花を待ちみる事榮に、
さこそは齋へ、ともすれば
青水無月の小野の香に、
むかしの夢のうらびれて、
古巢を見てはさしぐむ。』と、
さつさ、いよこの
日雀女

のごとく今の讀者なぞにはルビを振らないでは迚も讀めない、讀めても、釋義を施さなければわからなささうな語法であるため、民謠本來の要求にそはないで多く民衆のかへりみないところとなつてしまつたのは必然である。かれの民謠風としてはあまり苦心の作とも思へぬ「戀ごゝろ」の方が完美してゐるのは彼のこり性がこの詩體を頑なにしがちな事實の例證である。が、もともと彼の本領は別にある。詩集「二十五絃」(三十八年)に企てられた史詩、譚詩の試作は、既にかれ獨自のスタイルをかたち作つてゐるが、多く七五單調に終始して百行二百行の長篇

を行つたため、語句の聯關飛躍のあひだに、いかに細心な神經質の注意が拂はれたにせよ、つひにだれてしまつて、しばしば讀みつゞける魅力の消失を餘儀なくされ勝ちであつたにもかゝはらず、その部分部分の詩美のかゞやかさにいたつては何人の追隨をも允さないユニークのスタイルをあらはしてゐた。が、全體から見ると、彼自らが苦心した長篇譚詩の類よりも、短唱抒情詩の方に完成された美が多くある。卷頭「公孫樹下にたちて」は三十四年なほ彼が作州津山のほとりにある頃の少年作なるにもかゝはらず、その句の美は確實であり不動である。

あゝ日は彼方伊太利の
七つの丘の古跡や
圓き柱に照りはえて
石床しろき回廊の
きざはし狹に居ぐらせる、
青地襤褸の乞食らが
月を經て來む降誕祭
市の施物を夢みつゝ
ほくそ笑する顏や射む。……

の詩感の特相は、伊太利にも王朝にも京阪にも中山にもあらぬ、彼の心の王領のローカルカラーの美を強調し、「五月の一夜」は三十七年の作であるが、

野薔薇空にくゆりて
まよはし深きも所がらや

とか、

この五月野の夕ぐれ
人醉はしめの眺めに、

などの片言隻句を漁つて見てもかりそめならぬ生平のこの詩人の心づかひの深さはうかゞはれる。

越えて三十九年五月彼はその一生の代表作、當代詩壇の冠冕とうたはれた詩集「白羊宮」を公刊した。彼の技巧の圓熟期の代表作である。從つて青年の間早くも彼の臭味に反感を抱いたものも亦少くなかつたのは當然である。先づ世評を見ると、上田敏は「藝苑」誌上鏡影錄といふ隨筆中藝苑子の名を以て次のごとく論じてゐる、恐らく當時のかれに一番感情趣味の同情をひいたのはこの詩人であつたらう。

「薄田泣菫氏は此學殖ある詩人の一例なるか。語彙の豐富にして、殊に中古軍記類に散見したる語を驅使することの巧なるは、詩壇第一人なるのみか、西歐詩文の造詣も頗る深きが如し。其處女作にはキイツ愛讀の跡あり。「暮笛集」中の一篇がエルギリウスの第一牧歌に類する如く、近時の作「おゝ大和にしあ

ましかば」はブラウニングの同じ體に相似し、新年の「太陽」に寄せたる佳什「望郷の歌」は、「ミニヨンの歌」に通ひて、而も大に日本趣味を發揮したる所面白し。

櫂の音ゆるに漕ぎかへる山櫻會の
若人が瑞木のかげの戀がたり（第一節）

わがふるさとは、楠の若葉仄かに香ににほひ
葉びろ柏は手だゆげに風にゆらゆる初夏を
葉洩りの日かげ散斑なる糺の森の下道に（第二節）

も心ゆくかぎりなれど、第三節第四節の沈靜なるこそ、新らしき日本に生ひいでし舊き花なれ。」（第二號）

なほ同誌第六號同じ隨筆に曰く、

「薄田淳介氏作『白羊宮』出づ。日は春の白羊宮に位する時、天地開闢せりと傳ふるに據りしものか。秀でたる近什數篇のほか、諸雜誌に散見して、余が未だ精讀せざる作多し。『わがゆく海』『笛の音』は、今の佛蘭西詩壇の象徴詩人中、令名嘖々たる Henri de Régnier の詩を讀む心地あらしめ、『冬の月』『零餘子』等各節の第四行をはたと六音に止めて、情熱更に烈しきを感ぜしめたるは、古希臘サッフォオの餘韻なる可し。余がさきに激賞したる『望郷の歌』は素よりなれど、新に見たる『くちづけ』『白すみれ』『寂寥』『海のほとりにて』等は、余が趣味にとりて頗る面白き作なり。」

泣菫の作の特色は右の上田敏の賞讃にもあらはれてゐるが上來しばしば述べて來た彼の古典趣味はこの一卷に於て全く獨自のスタイルを完成し、選ばれた言葉は傳統に即して傳統以上の美を彼の名に於て謳り、詩感と技巧と內容と形態とまことに渾然たる一致妙合の契機に達してゐるものが少くない。

ああ、大和にしあらましかば
いま神無月、
うは葉散り透く神無備の森の小路を
あかつき露に髮ぬれて往きこそかよへ
斑鳩へ。平群のおほ野、高草の
黄金の海とゆらゆる日

にはじまる一篇は、「赤ら橘葉がくれにほのめく日なか」を「そことも知らぬ靜歌の美し音色に」ふと見ると在り樹の上に黄鶲が戯れてゐるさまが、丁度矮さい樂人がゐるやうだといふ第二聯を經て、

日は木がくれて、諸とびら
ゆるにきしめく夢殿の夕庭寒に、
そそ走りゆく乾反葉の

白膠木、榎、楝、名こそあれ葉廣菩提樹
道ゆきのさざめき諳に聞きほくる
石廻廊のたたずまひ、振りさけ見れば、
高塔や、九輪の錆に入日かげ、
花に照り添ふ夕ながめ
さながら、緇衣の裾ながに地に曳きはへし
そのかみの學生めきし浮歩み、
ああ大和にしあらましかば、
今日神無月、日のゆふべ
聖こゝろの暫しをも、
知らましを、身に。

の憧憬にをはるが、その形は、敏や泡鳴のいふごとく、ブラウニングが Home-Thoughts, From Abroad (1845) に、

Oh, to be in England
Now that April's there,
And whoever wakes in England
Sees, some morning, unaware,
That the lowest boughs and the brushwood sheaf
Round the elm-tree bole are in tiny leaf,
While the chaffinch sings on the orchard bough
In England—now!

云々とうたつた詩形のその唱ひだしこそ似てゐるが、ブラウニングの此作が、詩人が伊太利亞に漂遊する道すがらの作と傳へられ、特にこゝに引いたスタンザは旅行途上の作かといはれてゐるもので、英國田園の快美な風物への詩人の樂生的展望であるに對し、泣菫の詩に出る大和への嘆美は、その昔の寧樂朝の藝術時代を追懷しての今の大和の天地山川に對する嘆美で、あの宗教的樂生詩人が右の作で英吉利の鶫の啼き聲に新らしい意味を添へたに比して、この藝術的樂生詩人は、奈良の古都の黄鶲に奇警な聯感を與へてゐる。この詩を評して岩野泡鳴は「しまひまで來れば、兎に角聖僧の心を持つて藝に遊びたいといふ意だけは通つてゐる。然しその發想法は遊戯的になつてゐる。」といひ、又、「平群の野の草が枯れてゆら〳〵する日、塵まみれの窓に白みて日ざしが淡く　古代の珍らしい經文の何、箜篌、神酒入れ、彩色畫の壁などが見える。それらに見とれて其によつてたたずんでゐるといふことだ。「黄金」といふことをただ一行置いて二ヶ所に使つて來るのが面白くないところへ持つて來て、古代の物をいかめしさうに並べたのが、單に珍物とさへ云へば濟むところだ。」「文章世界」と云つたが、古代藝術美の憧憬に出發する詩感を建築するのに、古風なさまざまの道具

だても單に珍物とだけは考へられぬ事いふ迄もない。出鱈目で粗笨な俗評の代表がこれである。また、「明星」(三十九年七月)の合評で、鐵幹が「最近の新聞雜誌を見ると、この『白羊宮』の批評が何れも非常の好評である。異口同音に優れた詩集だと感服してゐる。薄田氏を以て我國第一の詩人だと稱讃してゐる。」「新體詩」といふものに對して、新聞雜誌記者先生達が此如き善意の評言を下したのは異例である。」といつてゐるがこの合評は他に馬場孤蝶、茅野蕭々の二人が參加し、全篇にわたつて精細な批評を加へ終りに總評を添へ四六倍判三十六頁にわたつてゐる。その評旨には妥當な意見も怱卒な批判もあるが大體に於て作者の立場に同情した上で用語の一一に細かい詮索をなしたのは、作者にちかい詩的傾向の是認者等であるとはいへ、批評として正しい態度をとつたもので、粗雜な出鱈目評を無暗に澤山いへばまづ勝利を占める大正期の詩壇の遠く及ばない點である。なほ鐵幹は、「望郷の歌」の評中、「思想としては作者の尙古趣味を遺憾なく表現し、形式としては典雅なる詩形の極致を示し」たといつたのはいいが、「極致に達したる詩體の一面には、どうも標本的に成つて、氣力に乏しい、感情が薄いと云ふ嫌ひを免れ難い」といつてゐるのは、この特殊の場合と一般の場合とを混交せしめた說で、極致に達した詩必ずしも感情の最高調を表はさないものではなくして、泣菫の如き詩風に於て型式の完到達したものが、何んとなく手ざはりのつめたさを感ずるのは、もともと泣菫本來の特色が出たもので、かかる詩に於けるかかる作者に感情の高調を覓めるのは求めるものの無理である。泣菫の感情の最高限度は、むしろ、

夕月さしぬ、野は凍みぬ、
日のいとなみに倦みはてて、
刈りし小草に倒れ伏し、
別れし人の身ぞおもふ。……

「牧のおもひで」

とか、

忘れがたみよ、津の國の
遠里小野の白すみれ
人待ちなれし、木のもとに
摘みしむかしの香ににほふ。……

「白すみれ」

とか、

今日しも、卯月宵やみに、
十六夜薔薇　香ににほふ。
なつかしきもの、胸の戶に、

黄金の文字の名ぞひとり。……

「美き名」

などの短唱のあひだににぢみ出てゐるにすぎないので、所謂「星と菫」詩人の俗許を呼ばれた所以なる、薔薇や菫やをうたつた詩に一番よく彼のセンティメンタリズムが出てゐる。もとより情熱の激しい詩人ではない、一味の哀情が靜謐なかたちのあひだに匂ひ出る風の詩人であるから、ひとたびその憧憬の唯一の對象としたものに飽氣がさせば全く詩作が出來なくなつてしまふのは仕方がない。かれの王朝趣味古代趣味はわが上にある歳月の老るとともに沈靜して、それに伴れて、かれの詩は、「落葉」(四十一年)の幽妙な散文に轉じ、ついにぱつたり途絶えてしまつた。

泣菫が作のなくなる迄には、然し乍ら、なほ若干の波瀾があつた。それは當時の象徴詩に感化をうけたことである。象徴詩の手法が上田敏によつて紹介され、その一番本質的な習作を夙くも蒲原有明が示したとき、泣菫ももとよりその影響をうけずにはゐなかつた。「無花果」、「零餘子」、「魂の常井」、「妖靡自我」などには多少その趣が出てゐる。

つむじ風、した葉の煽り、
あたふたと零餘子はこぼる。
ああ不祥、——刺高球數の
珠のみだれ。……

「零餘子」

のごとき表現は、ともすれば形式に凍化したがるこの作者の感性が象徴の妙用の境致まで行きつかないで、よくよく詮索すれば、まことは極つまらない比喩の類にしか解せられなくなつてしまふので、「妖靡自我」の第六聯に、

こよひ熱るる病臥の悩みのもなか
世はとみに鴉羽いろの焰して、
蕩けたゆたふ火の海に、吾や落葉の、
左視右顧、ゆくへも知らぬ途すがら、
ふと遠方に目馴てし人がたち見て
直みちに追ひすがりつゝ失聲して、
「君よ」と呼べば、立ちどまり、振向き樣に、
「見惚ひの時こそ來れ。」と脫ぎすべす
被衣のひまに見入るれば、あな「我」なりき、
髑髏に胸はふたぎぬ、危篤れぬ。

のごとき乾からびた形式の内に感情がとらはれて、一行一行に詩感の興奮の漸層を加へねばならない本然の約束がみだ

てしまふ。殘されたものは散文的な談理である。說明である。泣菫ごとき詩情の詩人には、特にもこの種の形式を避けねばならない恐れがあるにもかゝはらず、象徴詩の提唱に應じて、象徴の境致に到らぬ理說の反復、譬喩の連續をくり返して失敗すべきは初めから明らかである。

「笛の音」(「早稻田文學」三十九年四月號所載初名「笛のなげき」)を評して、上田敏は、「象徴の適用巧みにして、幽婉の美あらはる。」といつたが、この言葉は當を得ない。元來、この詩は可なり問題となりうる作である「明星」の合評中、他の二者は默し、胡蝶のみが「それから中の短い歌になつてゐる處、即ち曲になつてゐる處は甚だ面白い詞が多いやうに思はれます。が、全體の感覺としては、どうも十分に著者の感興に追附て行く事が出き難いやうな感じがするのは、甚だ殘念の次第であります。」と云つてゐるのは謙辭で、全く失敗の作である。

生命の路のもろ側に猝やぎ立てる
「かなしび」の女木「よろこび」の男木
今宵さしぐむ月代のまみの濕みに
すずろに木靈うらびれて
天の幸夜にあくがるる沈默の深みを、
笛の歎きの音をいたみ
上枝そよろに囁やきて散りこそまがへ
二木の落葉ほろほろに。……

の初句の形式美が自然あらはす内容のうるほひは、中央の曲に於ては數段減じ、そのかはり、

聖り世の
沈默ぞ、齋居する
嚴の苑

とか、「想」の實とか、「努力」の常烽火とか、盃搆とか忌精進とか、朱の赭舟とかいふ一見耳遠い語が頻出するため、感情の流動せるか否かを檢するさへ困難な難解の詩聯となつてゐるが、くりかへして讀んでゆくと全部と迄はゆかぬが、たとへば

そこしも、齋き女の
小忌ごろも、
蠟の火、黃金文字
僞のけはひ。

などの句は不思議な味解の下にたしかに一種の感情を醸出する。すなはち、全體としていへば、孤蝶の言の如く失敗の作たるを免れず、之を上田敏のごとくに絕對に讃美することは躊躇されるけれども、此種の立場にある泣菫の作にも亦獨特の持味があることを忘れてはならない。泣菫は象徴詩人にならなか

つた。かれの立場は「古典趣味」と稱する境致にある。そのかたちは整正なれば、それだけ特色が鮮かになる。「ああ大和にしあらましかば」に、朝晝夕を順次にうたひ、「望郷の歌」にて春夏秋冬を次第に賦してわざとらしさが少しもなく、かへつて彼の軒昂たる、澎湃たる情緒の搖曳があらはれてゐるところを見ると、かれが形式を極端に煉磨して、はじめて内容の美があらはれる風の技巧の特徴にある詩人であることが悟られる。定まつた信仰といふものはない。あきらかな懷疑といふものもない。その「古典趣味」は、浪曼派の通有する遠き邦、遠き世へのあこがれである。藝術至上主義的感懷である。唯美主義的憧憬である。この心境が、たびたびの試煉にあつて狂信の熱を帶び、鼓吹の力を加へ、やがて自然に、青さびた信仰の祭壇に落付いたならば、それは一種の當時には珍らしい藝術的宗教の力と美とを以て同時代のみならず後々までも多くの感化者を出したであらうけれども、泣菫自らは、「白羊宮」卷頭に努力の帆をうたひ、朝發きの心をうたつて、次いで「早稻田文學」三十九年七月號卷首に「葛城の神」三章五百十五行の長篇に、役小角が久米の石橋を築いて一言主の女神を石縛した古傳によつて結縛葛城之神をうたひ、更に解縛葛城之神を賦して、はるかに英吉利浪曼派詩人シェリが「プロメシウス解縛」に擬さうとし尚遠くはニスキロスがプロメチウス三曲と趣を等しうせんとしたけはひがあつたけれども、その後篇はつひに世に出ずに終つた。何故であるのか。泣菫にとつても、當代詩壇にとつてもそれは眞面目に熱心に考察せらるべき重要の問題である。

長篇詩「葛城の神」は、「橋づくり」、「女神結縛」、「女神幽囚」の三部に分れ、次の起句に始まつてゐる。

下なる邦のおほやまと
大和の國の葛城の
湯津岩むらの峰上より
御嶽精進の往きなやむ
嚴の行場の大峰へ、
直なる歌を得てましと、
流れての世の一の者、
役の小角が橋びらき。

その次には「大日本なる高山の八十氏人をつどへ來」るくだりに「大蓮華」、「黑法師」、「青崩」、「莎陀利」、「貴舟」と山の名を連舉し、

また鎖まれば、山人は、
北なる海のベエリング、

離れ小島の島だわに、
氷屑は日々に融けぬらむ、

の縹渺たる想像の飛躍を示し、古雅な成語新造語を自在に驅使して

宿居やつれの金星の
眶たゆげに出でたたす
かはたれ時に紛れ來て、

とか、

唐棣のころもうちはへて、
眞夏の小野の朝踏みに、
天の御階にいでませば、

とか泣菫獨特の詩格の婉雅をいつぱいに發揮してゐるけれども、全篇悉く七五正調を用ゐ、詩句轉倒の變化すら禁じて坦々たる記述の間に叙事的詩感の昂揚を企てたため、第二、第三部になると變化なきに苦しみ、感情の單調に飽いて、女神幽囚の前後に起る心狀の異樣な脈搏が、作者の覚めるとほりに實現されないで、かへつて事件の推移のみに興味のみに鑑賞のセンスを集中して辛くも通讀してしまふ結果に墮してしまつてゐる。用語は彼の譜代の言葉のみを選んでゐるから時には「又か」といふ感じにも縛はれ勝ちな處もあるが閑雅、靜麗の詩情が夕闇を彩る殘光のやうな効果を與へる點もないではない。信天翁をおきのたいふと讀ませるは「海潮音」の用語であり、宿直やつれといふ語は與謝野晶子が其頃の歌集の中の秀歌にもあつて珍らしくもないが、青水無月といふ印象づよい造語は今もなほエフェクティブである。

木間に巣がくる蜘蛛の
青水無月の夕庭の

の類である。

長女柿は手だゆげに、
日向に夢む夏かげを

の作句は類似した二句を他の作の場合に使用して而も成功してゐるためこゝではかへつて失敗因となつてゐる。特に最終句の

「夜半なり――かくて永劫の
被衣は落ちぬ、吾と世に。」と
姫は眞闇に平伏して
祇獻もよよと泣き濡れぬ。

の最終の一句の如き、夥しく處々に使はれた慣用の作句を大切

な切りのラインに用ゐたため、今迄の苦心が殆ど悉く空になるほどの障害を與へてゐる。

畢竟、薄田泣菫が、この時代に企てた詩風進展の企てはその第一歩たるこの長篇が、ところどころの部分的妙パッセイヂあるに拘らず、全篇として見ると明らかに失敗の作で、そのため自ら續作を豫告した解脱葛城之神も世にいでず、この種の史詩譚詩はこゝに全く斷絶して、すなはち他の詩風に轉じ、「明星」終卷の前後から全く作詩を廢してしまつた。が、詩集「白羊宮」一卷は、「有明集」と並んで明治時代文學史の詩的最重要な位相を占めるものでこの冊子あるがため詩人としての泣菫は不朽であり、三十年代の民族詩的精進も亦石胎のそしりを免れた。かれの詩風はユニークであつたため一部教養ある讀者に愛誦されるにとどまり、普遍性もなく亜流の出ることも尠かつたが、その確實に成語の歴史を識つてその上で自己の奴僕として快適に自由に使ひこなした技巧のさえや、造語のふさはしい道具台と、趣味三昧に徹した古代嘆美と、美と藝術とに對する篤信的渇望とによる詩情の個性價は、二十年近い現今もなほ少しも（他の詩人や小説家や戯曲家の大部分に對するやうな）創艸時代なるが故の危つかしさ、稚なさを寸分も感ぜしめず、その詩は明治時代中期の精神を代辨するものとして韻律の文、子規の句、晶子の歌のごとく永遠に殘さるべき史價を持つてゐる。

この時代の第一人者泣菫が右のやうな努力と失敗と完美とのあひだを彷徨してゐたやうに、他の作者もひとしく、寄せかへす時代の波の潮どきを見ては、精進と逍遙とのわだちのあひだを紊迷してゐた。時代の個人主義思潮がニイチェとイブセンとを紹介して思想、戯曲の二方面に改革刷新の手を延ばしたごとく、詩界も亦フランス、イギリスの主として浪曼運動期前後以來のさまざまな詩風をとり入れ、春秋一日に來るさまを呈したけれども、確たるイズムの意識と實質とを帶びてゐるものは少く、浪曼的本質にして自然派の手法を喜ぶものもあれば、リヤリズムの素質の上に浪曼的素材を扱ふものもあり、譚詩、民謡を説くもの、國民詩人の現出を「絶叫」するもの（ヨネ・ノグチのごとき）平俗の詩風にかへれとさとすもの紛糾きはまりないそのなかに、只一事注目すべき、紹介があつた。近代象徴主義の提唱である。

象徴 Symbol の譯語は森鷗外ではなくて中江兆民にはじまるがフランス象徴詩の移植を企てたものは上田敏で早くも三十六七年の交にはじまつたが、その意義ある具體的の効果は、三十八年十月發市一卷の譯詩集「海潮音」が近代象徴詩を傳火し、同譯書の長序に簡略乍ら象徴詩の何ものなるやを說いたに胚胎

する。けれども、なほ當時は西歐藝文史の史的過程に就ての獨創ある研究も出てゐなかつたため、詩家も評家も、いふ迄もなく讀者一般も漫然と無準備に先蹤の說くところを聽いて新奇にはしり異邦美にあくがれる心持ちから此れに附和しあれに雷動するの幼稚をくりかへしてゐたため、年少早く大陸藝術の知識に卓れて、當時としては最新の興味あるこの新詩風を理解と同情との用意を以て說いたのであるけれど、受取るもの、あるひは、これに追從して共に提議する人々に知識の不足と不適當な素質とがあつて、他の多くの古典やイズムや名手やの輸入の概して中途半端でおはつたに似て、完全な浸潤かなかつたが、とにかく新詩壇あつて以來の最初のイズムの意義ある時と處と人とをえた紹介であつたため尠からず詩文壇雙方にわたつて啓發し、フランス晩近詩壇に關する興味と次いで研究ともこの時分から初めて起り、世界文學史の水準線に立つ文學上の見地から創作と批評とをいとなむものが續々と青少のあひだから出るにいたつた。さきに說いた泣菫のごときもこの運動の感化を蒙つた一人であるが、もと泣菫が詩風と詩情とが古典的格式を保つ浪漫趣味の陶醉に出發するもので、象徵派の紀事的傾向もなければ手法上の本質的共鳴もないため、その感化は表面的に終つたに反し、かれと雁行して出て彼よりも晩く長く詩壇の中樞人物となつてゐた當代名匠の一人蒲原有明は、一番誰れよりも最先きに象徵詩の感化を享け、一番誰よりも深く強く象徵詩人の影響を蒙り、一番誰れよりも明らかに象徵派の作風を發揮した。そして一番多く象徵主義を談論して而も甚少くその感化を蒙つた詩人は岩野泡鳴であつた。鐵幹は素質として此詩風に遠く、清白、夜雨、醉茗はなほ更のこと、林外、啄木おのおの親ら昵近を試みてつひに自己の詩情となり切らずに終り、かへつて年少白面の徒のあひだにその手法は拙ない乍ら、稚ない乍ら、感激と憧憬の餘慶をもつて、なほ深くつよくひゞいて行つた。後年あらはれた「邪宗門」や「廢園」がこれを代表する。

さて、象徵主義を說き、あるひは自らその精神により創作をこゝろみた有明、泡鳴、上田敏その他に就ては次章詳かに論じるが、かれら以外の此期に於ける代表詩人を見ると、さきの泣菫に次ぐ史價ある業績を殘したものは「文庫」派の詩人伊良子清白であつた。

清白の詩業は詩集「孔雀船」（三十九年）一卷に盡きる。通計十八篇の選詩を定めるにかれは、醉茗の談話によると、實に夥しい多數の作詩を犧牲にしたといふ。由來、特別の主張の下に集つたのではなくして、自然の集團が自ら一種の色調に彩られた文庫派の中にあつて、その集團生活に於けるかれ清白を位地づける

ことは無意義に近い。この派の中で、特色を發揮して一派一流をも起し出る素質があり、世間も亦その詩的材能の異色をみとめてゐたものは他に醉茗と夜雨とあるのみであるが、この二人がよく當代の讀詩階級の間に識られてゐたに反し、清白の詩的位相は極めて不遇であつた。醉茗の靜謐と溫藉とは青春熱狂の對象となるものでないかはりに一味の溫情によつて結合される詩的交誼を持ちやすいが、夜雨になると日本的な感情を極めて感傷的に自然に表白した點で、ひろく田園のあひだに筑波根詩人の名がひゞいて行つたけれど次なる時代に深い影響を與へる風の豫言的本質と超時代的意義とに乏しかつたとは夜、茗兩者ひとしい通性である。こゝに、清白の素質を見ると、その名は「淡々の詩風であつた。」（明治四十二年二月「太陽」增刊文藝史、新體詩界「泡鳴執筆」）とか、「おしなべて氏の用語は頗る豐富なるに共作多く人を動かすの力なきは惜むべし。」（三十九年六月「帝國文學」）とかいふにとどまり、文庫派中に於てこそ「白眉」であれ（「早稻田文學」）、「錚々たるもの」であれ（「帝國文學」）ひろく詩壇の水平線上にふさはしい位相を與へたものは嘗てなく、或は名を辛じてあげ（三十九年十一月「早稻田文學」彙報）、或は名をすらもあげるを惜む（「明治文學史」）樣な態度であつた。しかも、黨派の同臭稱讚や批評精神なき評壇やの同時代が早くすぎて、後年新天地が打開され新人物によつて新詩壇が占められるに至つて、かへつて彼の詩は少數の識者の間に讃美せられるに至つたのは大體に於て至當である。その清白の詩品を見ると、彼の詩の特色はかなり複雜してゐて、

蔀戸に
秋風吹いて
河添の旅籠屋さびし
哀れなる旅の男は
夕暮の空を眺めて
いと低く歌ひはじめぬ

といふ「漂泊」の起聯に見られる文庫派的傷感もあれば、第二聯に見る

亡母は
處女となりて
白き額月に現はれ
亡父は
童子と成りて
圓き肩銀河を渡る。

のごとき清新高蹈の想像の氾濫もあり、

月に沈める白菊の

秋冷まじき影を見て……

「秋和の里」

の日本的沈潜の描法は

五月野の甍しみら
瑠璃囀の鳥なきて
草長き南國
極熱の日に火ゆる……

「五月野」

の餘情ぶかい佳句の動的印象に隣りし「不開の間」、「鬼の語」の幻惟と妖魅に於ける奇峭な空想の喜悅は、「華燭賦」、「月光日光」の壯麗體の含蓄ある形式美、及び「戲れに」に見ゆる當時にしては異數な忍從の反語のこゝろのさへ等と合してその用語の印象の鮮明と適確と立體的表現とその想像の全幅の畸異と富贍と日本的瑰麗とは、泣菫有明に次ぐ個性あるスタイルの保有者であり、泡鳴、鐵幹、林外、白星も及ばない獨自なる技巧の把持者であることを示す。

父よ其手綱を放せ
枌の穗に夕日宿れり
數ふればいま秋九月
赤帝の力衰へ
天高く雲野に似たり
初陣の駒鞭うたば
夢杳か兜の星も
きらめきて東道せむ……

「初陣」

の破題を見れば、寧ろ極めて陳套な語法を用ゐて些かの西洋的語風の感化もないのに一味の新鮮が香つてゐるのは何故か。

島國の花柑子
高圓に匂ふ夜や
大渦の荒潮も
羽をさめほゝゑめり

「花柑子」

の起句を検すれば、かへつて何の奇なき平凡の詩情の流動にすぎざるに一語と一語との配合のあひだ云ひがたい清新技巧の醱酵があるのは何故か。右のやうな有數の詩感と技巧との一致を有する清白が何故にその後の詩作を廢して三十六年東都を去り田園ふかく刀圭の術業の裡に埋沒してしまつたのか。しかも又、次期の詩壇に目ざましい光芒を引いてその感化を永くつよく示しえなかつたのか。その答へは一にして足りる。清白は稀に見る卓れた詩家の一人であつたが、その詩多くはさまざまの苦

辛の餘になつたもので、生れえたる天稟の詩人が放吟して時に佳句を生むとは事かはり、その技巧は啻に優秀な技巧詩人の夥しい勞作の中に選ばれる少數の玉成があらはす表現美であるによつて、元來、新詩潮の造詣も憧憬もないかれにこの清新詩體が允されたのは、同時代の詩技の焦點、言語の精神を敏慧に掴つて之を自家藥籠中のものとしてまつたく譜代の俗語として自由自在に驅使したため、わずか一卷の冊子に斯のやうな意義ぶかい生命を與へ得たのであるけれども、詩林の中心が漸く移つて目まぐろしい變轉が次から次へと重なつては到底之に伴なつてゆくことは許されない。時代の退潮に卷かれかゝつたと感じてはその秀拔技巧も一旦に光と熱とを失つて卒然として詩感の昂揚がとどまり、默して過渡詩林の圓座の裡から去らなければならない。そして右のやうな特徴に終始したその詩に同時代的意義はふかくとも、豫言的な底力がなつたのは當然である。

清白は不遇にして默つた。「孔雀船」はその艶容をみとめられずして去つた。その詩は誠に花ひとときの香であるにすぎなかつた。が、かれは卓れたる詩人である。その詩冊は稀に見る佳句で鍍められてゐる有數の佳品の一である。この天稟技巧、この敏銳な感受性に富む詩人が、さらにひろく世界大の感化をうけて、ゲブリエル・ロゼテイの絶句の意義をとらへ、ホセ・マリヤ・ド・エレディヤの表現美を感じ、あらゆる相類の技巧の先人の苦辛をよく解しえたならば詩史は一段の光彩ある數頁を附加されたに違ひなからう。

不遇にして酬ひられなかつた健康の常人清白に對し、不具な廢人横瀬夜雨が讃美と崇拜のあひだにその詩人的期間を經過したのは好對象である。夜雨は清白とともに二十九年前後から文庫に人となり、やがては文庫の三人の中でその一般の愛唱をうけたことは隨一であり詩壇を通じても尚且一番通俗性に富む普遍詩人であつた。

夜雨の哀調は、「夕月」(三十五年)以後、「花守」(三十八年)、「花守日記」(詩文集三十九年)及び「二十八宿」(四〇年)の三卷に此期を代表してゐるが、その詩風は依然として昔ながらの哀婉と幽韻の復唱であり、新思潮の影響もなければ、新技巧への焦慮もなく、啻に歳月をへてその感情の自然の落付きが氣づかれるばかりである。夜雨の通俗性は、日本的感情の可憐な流露が感傷的な悲調の姿致によつてあらはれてゐる詩風と、その詩の母胎たる薄倖の夜雨その人への愛憐とで形造られたものであるが、後年さかんに續出した徒らに少年少女に媚びた安價な少女詩人、通俗詩人の陋態は、さすがにこの詩人にはなかつた。

守日記」の挿詩、

花散里の夕まぐれ
雲居の路を忘れたる
雁は夏野の草ふみて
露に翼をぬらすらむ

の如き「優美」の一聯が、

夢に仰ぎし小月波の
山を小霧の下に見て
岸を離れて逝く舟に
われは漂ふ浪の上……

の如き哀愁のくだりにつづく詩情の、恒にいつまでもくり返されるのみで、しかも讀むものを容易に飽かしめない魅力を持つてゐる所以は、その一縷の哀情、一律の哀吟にあくまでも自ら執して、それを丹念にいつまでも愛育する心持ちを失ばずに詩作する態度を崩さずにゐたためであるに外ならぬ。「藝苑」三十九年夏の卷頭を飾つて「二十八宿」の劈頭に收められた「野に山ありき」は此期に於ける夜雨の代表詩風であらう。

野に山ありき蒼蒼
莚なる花のほの／＼と
匂ひて曉の紫は
筑波に負へる色となり
雲、南に浮くとのみ
かすめる空に鳥鳴きて
竹の小弓を携へし
子等は麥生に隱るらん……

若い頃の徒らな哀怨が次第にかげを潜めてもの靜かな熟視となり低調となつて來てゐる過程は、僅かにかれの詩風の推移のあひだに垣間見られる變化である。しかもその詩尾の一聯

東、月波の
草がくれ
露にしをるゝ
花ありさと
痛める胸に
銘して
忘れぬほどの
情はあれかし

に見られる激情や、

置露白き
短夜を

薔薇咲く野べに
　倒れ伏す
女神の像の
　唇に
汝が唇を
　觸れて見よ

の熾んな熱情、それに、

手枕痛き
をぶすまに
通ひし夢を
契りにて……
「手枕」

の詩にあらはれる戀慕の欲情のかげを、かれ一流の殉情調で蔽ふてゐるくだりを見ると、夜雨の詩にあらはれてゐるかれの感情が、實はその人間生活の半面にすぎずして、更に突入つた全景の暴露を眞摯に徹した態度で行ひえたならば、更にかれの詩は、通俗性の埒外に出て稀に見る人間性の發揮をなしえたであらうと思惟されるのであるが、この程度にとどまり、普通、夜雨の詩といへば、「花守」中の知られた諸篇や、「二十八宿」中夕月の卷の第一作

影まだ淡き夕月の
照せる野べに俯きて
睫にあまる涙をば
稀には袖に拭ふらむ……
「影」

の類のツクバネ・サンティマンタール調が談らるるにすぎないのは、詩人としての彼がつひに、第二流以上に出でなかつた所因である。清白、夜雨の同胞作家で「文庫」の中心詩人であつた河井醉茗は此期に彼一生の詩的踏舞を營んだ。

處女詩集「無弦弓」(三十四年)は注目するに足るものではないが、この頃より彼の主宰する「文庫」は次第に地方青年の間に拔くべからざる潜勢力を持つて來た。一色白浪、小牧暮潮、清水橘村の詩が誌上に見え出したのもこの頃からである。三十七年に入つては、溝口白羊、人見東村、澤村胡夷、有本芳水、藪白明らも詩作をこゝに公表したが中にも北原白秋は、「春湯雜詩」、「林下の默想」の類から進んで、三十八年一月號誌上に、長篇「全都覺醒賦」の豪壯詩體を發表して群小青年詩人をぬきんで、その翌年六月の藝苑子は「北原白秋の作に接するは始めてなれど、尋常の詩風とは見えず、情趣頗る饒かなり。」と評した。當時の白秋は「明星」に轉じて、同派の詩風に共鳴し、

場詣」の長篇に

行けかし、さらば南國の香の御寺へ。
春なれば街の少女が華やぎに、
君も交りて美くしう、戀の新萃の
初旅や笈揹すがた鈴ふりて、
大野のみなみ菜の花の黄金海透く
筑紫みち、列もあえかのいろどりに……

のごとく盛んに先蹤詩人の套語から感化をうけて、後年の享樂調、官能美の稚い素地を示しつゝ、すくすくと延びて行つた。三木露風が「書窓山」を「文庫」によつて公けにしたのも此頃である。三十八年に出た文庫派のアンソロヂー「靑海波」には、前記の小作家以外、水野葉舟、平井晩村、島木赤彦、葉末露子、山崎紫江、長田秀雄、笹田谷穗等も加はつてをり、同人の名はしばしば「明星」や三十六年に林外、泡鳴、御風らの手で「明星」から分離して出て「明星」とは異つた若々しい浪漫情調の香をみなぎらした「白百合」(四〇年廢刊)やの間を往還してゐた。雜誌は外に、「神泉」、「國詩」、「白鳩」、「新潮」、「曉聲」、「心の花」が靑年の揺籃であつたが、集團的意義ある存在は前記三雜誌のみであつた。

醉茗は、その「文庫」の代表者として不相變ず溫順な感情の直叙に終始し、三十八年春「劍影」を、つゞいて「塔影」(六月)を上し、翌三十九年アンソロヂー「桂の卷」を選し、「玉むし」を發市した。醉茗は四〇年春「文庫」を退き、別に「詩人」を興し、翌年五月廢刊したが、この雜誌には服部嘉香、森川葵村その他文庫同人が執筆したが十號にして四一年初夏廢刊した。いはゆる文庫派の活動はこゝに窮る。醉茗の詩人的立場及び生命もこれよりして次第に衰へた。

醉茗の詩は日本的感情に立脚して異端的憧憬のない所、雨白とひとしく文庫的特色を示したが、生硬な行語のない替りに西詩的表現の新鮮もなく、平明なかはりに含蓄美は見られなかつた。しかも、長年のあひだ、文庫の孤壘によつてよく當代詩林の一部を代表しえた所因は、かれの學識でなく詩そのものでもなく、將たその魅力たりし溫精な人物のみのためでも亦必ずしもなくして誠は當時全國に遍流する靑年一般の民族感情の主調が倚この派の基本感情と默々のあひだに一致してゐたがためであつて、從つて文庫の立場は保守的であり、現在的であり、何ら未來への賜物の豫感を持ちえぬ本質であつた。文庫に對立するものは華美な趣味と絢爛な幻想と異邦情調と個人主義思想の判然とした論明で、それを具體化してゐるものは雜誌「明星」である。醉茗の詩は「塔影」に代表せられる。その清楚、つゝ

ましさ、その閑寂、おちつきは藤村の感情と形式とから一番多く育まれて、藤村ほどの熱情のない代りに、藤村にないじつとりとした沈潜を見せた。かれの本色はこゝにある。「玉蟲」には只一つ「落葉を焚く歌」が特徴を示す。

秋晴の朝、庭守は
黄なる樺なる雌黄なる
木の葉草の葉うづたかく
火をうつさんとかゞまりぬ

夜にうるほひし露霜も
一葉／＼に乾きゆく
烟のかげに立ち添ひて
葉守の神やあらはれむ

眞夏大野を覆ひたる
國つ鎭めの公孫樹
光に透いて金葉(きんえふ)の
皆地に落つる響かな

櫻の精は遠春の
海を渡りて去にけり
朽ちては輕き乾き葉の
梢はなるる力かな

常盤なるべき檜葉杉葉
うらがれたるがめら／＼と
火になりやすき秋のはて
地の美はそらに收まらん

機にかゝれる織絹の
自然の彩(あや)のまばゆきも
捲かるるまゝに彼方なる
はてしなき手に渡されぬ

あゝ落つる葉に驚いて
烟を擧ぐる庭守よ
萬葉焚いて盡きせざる
林に入らば悸(をのゝ)かむ

讀むものは、「響かな」、「力かな」、「收まらむ」などの弱い

かし一味の魅力あるひゞきに引かれて讀了し、最終の一行の力の不足なのに不滿を感ずるであらう。これが此詩人の詩の特色である。危つかしさのない地味な素樸な行文の間に、たとへば何の奇もない一區劃の風景を瞰望してところどころ可憐な名もない草花の風姿に愕ろくがごとく、ゆくりない美を發見する。これが醉茗の詩である。この風の詩格に於て彼は他の詩人に容易にない、つゝましき美をあらはし、一家の風を創成しえた。すなはち、

笛を吹く子も來ずなりて
秋に折れたる葦の葉の
穗に出でゝこそ寂しけれ……

「汀のいのち」

の低唱である。

若き子を導き入れて
鳩は梢を放れたり
誘はれし途は忘れて
踏めば小草の柔かき……

「はてなき森」

の靜趣である。その調は七五にかなひ、その取材は田園草木の微物の美枯淡の美を限る。心内の苦悶を「吾心は暗し」に托してもそこはかとなき焦慮しか殘らない。「ナイルの岸に……」と云つても遠國への憧れは常凡である。しかも「山守」をうたひ、

其初めより荒たへの
落葉衣に膚はなれ

と歌ひ出れば詩材人をえて悠々と迫らぬ安心が見える。醉茗の詩美はこゝに限られて、當時の感情の一部をよく代辯した。が、この靜境が時代の進展のわだちのひびきに破れて「不安」を感じた時、かれの詩境は根柢から動揺した。その焦心の果ては慘めな未完成に辿りつく。あやめ會第二詩集「豐旗雲」によせた

朝は開けぬ、事もなく
夜の間に伸し蔓草の
這ひぬ、大地の濕ひに
目覺めたる葉は日に向ふ

我眼の達く限りには
雲の動くと日上ると
石柱の根に立つ人と
世は何事も印象せず……

の聯になほ彼の平生を窺ふ事は出來るが、つゞいて「電氣の

彼」をうたひ、「神經質も性ならむ」といふともう彼の現はさうとした不安そのものよりも先きに彼自身の詩境の不安を感ぜられる。醉茗はこれよりして岐路に立たねばならなかつた。

當時思想の民族的動亂に基き、合理的立場をすてゝ民衆がその倫理的要求によつて宗教情緒のしめやかさに憧れた時、綱島梁川が出て「病間錄」の一卷に詩よりも美しい感情の宗教的沈痛の姿を示したが、これに引かれて宗教詩の類が世に出たけれど、その詩は多く梁川の文よりも詩でなかつた。一色醒川の「頌榮」(三九年)、中谷無涯の「すひかつら」(同年)之を證する。

下界の平和　攪き亂さんと、
天降り立ちたる　魔破旬の
身體延せば　長(たけ)　百由旬……

無涯「降魔頌」第一篇第五

の拙いうたひぶり

こゝにしてソドムゴムラの
いにしへをかりにかへし
ねぎもとむロトの挽回(ただめ)の
義人、あゝ、十人ありや……

醒川「市のどよみ」

の粗笨な表現である。ともに「宗教詩」といふ先入感に縛られて概念的に理說したがる易きにつくのでこの非詩に陷るのである。醒川の如きは詩才もあつたから、この邪道に入らなければ、かへつて誠の「宗教的」なる詩が生れたかも計りがたかつた。平木白星の「耶蘇の戀」(三八年)、もこの種の心向に出立した劇詩で、同じ理因からと、も一つ劇詩そのものに對する日本詩的關心の皆無に近かつたためとから失敗した。白星は俗氣の多い、從つて計企の夥しかつた作家であるが値あるものは尠い。「釋迦」(三九年)も右と同じ素質のもので等しい終末を告げた。

魔王　口噤(つぐ)め、えゝ默らすか。
愛樂　大王、願ふは御心靜めたまへ、
夜はいつなりしか、寢物語に、誰火(ひかり)の娘より聞かされしは
往古(いにしへ)、淨德といへる王、羅闍大仙の意に忤(さか)らひしため
春秋つゞく旱饑饉(ひでりききん)かつ洪水(おほみづ)の難に遇ひしとかや……

——第一段第一齣

のごとき進行である。かれの詩は「日本國歌」(三六年)の國士調から、「心中おさよ新七」(三七年)の譚詩(小島烏水は長評をよせて之を叙事詩といつたが寧ろ譚詩に近い。)にいたるまで凡てその缺點とする所詩感の不熟と用語の不洗練とから來る。

ほど多く企て多く試み多く書いてつひにそのスタイルに到達しえなかつた詩人は少い。「七つ星」(三七年)からはじめて、「平和」(四五年)にその詩作を焉へるまで、彼として見るべきは、辛じて

妖魅が
人嘆しては要なしと
脱ぐ蛇の衣 ― 驕りの蛻
冥宮に勝をことほぐ夏の會よ……
「夏の戀」

の粗雑のなかに、太い線の感情を壮大なかたちで盛らうとする企ての詩句のなかにある。それとても多くは全體の統一を亡みして部分の興味に忙ぐため作品となりえたものは極めて稀である。所詮は國士歌に政治的氣焔を抒べた類のものが唯一の取所であらうが、それも晩年をぎこちなくしてソングとしての存在性も帯びないのであるから比較はとれない。

兒玉花外は、白星と粗雑に於て對となるが、その感情は單純で素撲でその詩も人となりと一致してゐる點ではるかに白星に卓れてゐる。さきの「風月萬象」以來、「社會主義詩集」を禁止され、翌年「花外詩集」を出し、「ゆく雲」(三九年)、「天風魔帆」(四〇年)の外、「バイロン詩集」(同年)を出したが、馬上哀吟の昔から一貫してその風調は少しも變化せず、狷介不羈、獨行放吟、熱涙と憧憬と傷哀と叱呼とのあひだに明治青年がはぐくまれた政治的粗放な渇望と、思想的粗悍な欲求とから淡とした自由にあくがれる熱望と弱きをあはれむ情恨をやつたもので、板についてゐる點で白星林外にも卓れ、矮小ながら世界を持つてゐる點で月郊泡鳴にも劣らないものがあつたけれど、これ以上は斷じて延びず、これ以外には決して擴がられぬ詩風ゆえ、次第に時代の後潮に殘されてつひにいつとなく詩壇にあつて詩壇から全く放れ去つてしまつた。

あゝ、大波のうねくや、
旭日を孕む金帆は
七月、佐久の白百合の
雲吹く風に揺る如し。

聞け、赤銅の裸男、
浪も鎮まる火の言、
見よ、巖角に手を舞はし
おゝ長髪の人立てり。……
「白帆に寄する詩」

詩の素質は、もと、ソングの範圍を出ないけれど、一腔の氣を

以て拙劣な技能を救ふ所がないではない、あやめ會第一詩集「あやめ草」に揭げられた雲の座をその佳作とする。

あゝ青界の
　雲の王座
日の神淨む
　雲の銀坐
春風超く
　舞ひぞ上り
雲に膝埋め
　高き獨思。
强きヴァルカン
　槌を揮るか
吾は天火に
　打ちて鍛へ。
…………
天下亂すも
　春の興や
縱横の覇氣
　雲に得てん。
法も道なき
　虛無の界に、
不窮を吸ひて
　虛無の如く。
…………
棚雲低も
　人を載せず
落花の霰
　髮に撲つよ。

「鷲と自由」の幼い概念詩、「松を刺して」の稚い猛勇調の破綻を見せ、時としては「木葉の使者」のやさしい微吟を示す彼は取捨をかまはぬ無頓着な性情である。三六年四月大阪中之島の公會堂で開いた日本社會主義者大會席上に放吟した「大鹽中齋先生の靈に告ぐる歌」や水死の女工をうたつた「春恨」や、法界節女に與へた「仇浪」や、「新聞幼工の歌」や、失業者の自殺をうたつた「越中島の朝」や、

　カール・マルクスの名によりて
吾は抱かなむ、可憐兒よ、

の「可憐兒」や「ラサールの死顔に」などを見ると、彼の社會主義的口吻を聽くけれど、もとより社會主義の理論に出發した哲學的思惟の抒情的發露があるわけでなく、英雄を弔ひ、光秀に同じ、黄興に感じ、バイロンを讃すると等しい無思想な普通人の大ざつぱな感懷にすぎない。かへつて超然と郊外に節をひいて

　ゆふ日花さく
　　死の丘
　古塚一つ
　　淋しき、
　血に「人間」と
　　指背く

とうたつた「詩人塚」の方が詩であり作品である。強ひて彼を社會主義詩人とするならば、それは譬へば内田魯庵が當時ゴーリキーの作から暗示をえて「社會詩人」といふ小説をかいたその主人公水原筑波が「あゝ人間の皮かぶる狼よ」とうたつた類の低徊趣味の主義詩人、あるひは、郊外に一瓢を攜行する底の社會主義詩人であらう。

　花外に好對象をなすは「夏花少女」(三八年)と「花妻」(三九年)を公刊し、雜誌「白百合」によつた前田林外である。林外は當時無暗に反感を持たれて「帝國文學」記者から罵詈的批評をうけ、一般からも重視せられるやうな、せられぬやうなあいまいな扱ひをうけてそのまゝ詩人の幕を閉ぢてしまつた作家であるが、帝國文學記者の反感の原因は「聞けば林外は第一流の詩人ださうだ、世の中は萬事これだから困る……今迄誰も林外の詩才を疑ふものがなく彼をして安々と詩界一方の大將たらしめたと云ふのは益々解らぬ、不思議である、神秘である、」(「帝國文學」三九年七月號)云々と云つてゐるごとく、虚名に對する實がないと思考したに基くのだが、由來この種の滑稽はさらにある事で、(今の詩壇を一人の詩魂のある評家が短歌や俳句の場合のやうに詳細に論評して見たら林外以上の百鬼夜行なるに愕く事であらうが)、その林外とて必ずしも爾く大將になつてゐた譯ではなく、數の少い詩人の間にゐて年功と守壘とを有してをれば相當な人かなある位には輕卒な世間が思惟するもので、その空想をそのまゝ實在化して大將視したのであるが、當時にあつて林外の位地はさして重大なものではなかつた。彼の詩風は一見して誰にも其缺點が分るし、誰にもその嫌びやかさが判る風のものであるから正しく相當の位相にあつたのである。「帝國文學」三十八年中に連載された「詩壇漫言」は、存の罵評に比べると遙かに鋭利で眞摯であつた。林外の處女詩集を

評して其特色を「第一其擬人法の異彩を呈するにあり、第二其の詞藻の豊麗なるにあり」といふのも當つて居るし、當代が詩語革新を要とする時期で例へばクロップシュトックが叙事詩「メシヤス」に新風を出して獨逸語でないと罵られた時代に似てゐるといふのも不倫な比較ではない。「夏花少女」十二篇は皆八七調で、もともと八七調そのものが語調の本性から何んとなく落付きのわるいものであるが、當時の「毎日新聞」記者が、「林外の八七調は泡鳴の其れよりも落きあり」と云つたのは至當で、漫言の筆者櫻井天壇亦之に讃してゐるが、林外の失敗はその八七調を多く名詞どめにした點と、新造語のいゝかげんな點と、天壇が稱して「上品なる妖怪體」といふ畸恠に對する特別の興味の發露した詩の詩感に深い根底がなかつた點と此三點に歸する。罵詈する側は林外の思想の貧弱、詩句の蕪雜を嗤ひ、好意ある側は、「空想の魔的勢力」をあげ、それを林外は卓れた擬人法で表明してゐるので、擬人法に卓越する理は「妖魔」に興趣を有してゐるからであるとなす。大分飛躍した論理であるが主旨は捕捉するに難くない。之等の評をまとめて林外そのものの詩作の本體を一言にしていふと、彼は本來極端に浪曼的な趣味を有して、その趣味を飽くまで詩の上に生かす事が自分の作詩の精進であると考へ、あくどい迄にその方面の發揮に努力したのであるが、その技巧はもと卓れてゐるものではなくして、古語、廢語、新造語の驅使選擇に當にはまつた急所をうる事が餘り多くなかつた處から、只見れば妖艶絢爛五彩燦たる豊艶の致をつくしゐるが、よく見るとその色彩の縞の目がひとつ／＼躍どりの上に浮いてゐて全體が一致と均齊とを保つてゐない上に輪廓の描法も當をえてをらぬ。それで、空虚！ 空虚などの嘲笑をえたのであるが、さきに述べた浪曼的なる趣味の極端なるものがある林外がこの詩句の使用をしてゐるあひだ時としてよい形質の一致をなしえた場合も亦ないではない。これある時林外はよい詩を作り、これを失しる時かれは惡詩に墮する。「花妻」卷頭「若き尼」に

恨みある「戀」の敵の
我を詛ふや、
八萬四千、
「想よ、亂れ。」の——叫び聲。
（助け、叫び聲。）……

のごとき夢句の性質を顧みず出鱈目に用ゐて形式本位に奔つた拙劣の標本である。その他「神秘のけはひ」、といひ「理想」のうまし國といひ愼重にはかつてそつと置くべき抽象語を安々とすゑて生體の判らぬ晦澁に陥り、統一のない混亂にはまる。けれども、この混亂と無責任との林外の浪曼趣味が呼んだ形式が

僅かな機會をえて巧みな形質の一致をなしえた時それは例へば「印度哀歌」第二、「回顧」のごとき佳調をなす。

　理想を汲めよ。理想の水を、信を、はた、愛を掬べよ。
　岨づたひして、河づたひして、さかのぼれ、「生命」の源に。

誰ぞや、デッカン原頭、獅子の脊にうち跨りて、
こゝろありげに、回顧、殿銘の最古を悲歌してくるは。
いざ問はん、チヤンドラグプタの裔よ、けなげにも「生命」
の源に、
ふたゝび「轉輪聖王」の御旨をぞ繼ぐ、勇やある。

……………

ああ、わが戀の神祕の國よ、聞くに哀れの殘缺よ
愛の泉は瑠璃鳥の口に、いざ、蘇へよ、潤へよ。
棕櫚の汁に倘ほ滴れど、あはれ、汝が胸は渇きたり。
白檀の香は匂へども、あはれ　汝が名は汚れたり。

が、こゝに至るまで彼はあらゆる詩作の努力のあひだにあらゆる凡人の失敗をくりかへした。貧弱な想像力を濃麗の用語で蔽ひ、たどたどしい詩感の流出を、拙劣な技巧で假裝す。「夏花山女」のごとき、その種の難句と拙句との連續であつた。「黄金薔薇」に

　詩の料さぐると熱土、絕海

のごときは熱土と絕海との連絡が、堅い言葉から軟らかい言葉に無反省に押し移されて失敗してをり、

　とこしへ花園愛をぞ誇る

の句は、とこしへと花園と愛とを只只句調のために思慮なく結合して無理に一句に押入れてしまつたので、舌たらずの小兒の乳語のやうな滑稽がさきに出て、作者のつたへんとした詩情の發露に耳かたむけることを碍げることおびたゞしい。

　尼といひ戲唉といひ蝴蝶といひ金盃といひ艶魔といひ孔雀といひ夢の彩野といひ共用語は一見燦と光つてよく見れば錆のにび色に死んでゐる。

　林外は當代詩壇の憧れるものの廓大と、保つてゐる缺點のよせあつめである。その形式主義はつひに大成しなかつたが、その浪漫的幻影はその推進力たる青春の血のなほ殘滓ある間にあと方なく消失したが、若し此樣な時代の此樣な人物に對し、理解と同情とある、詩魂と銳敏とある、鑑賞の表白の卓れた一人の批評家があつて巧みに林外の特色と缺點とを突いて善導したならば、與へられたる賦性は、こゝにとどまらずして今少し深く發揮せられたであらう。その他、啄木はつづいて「藝苑」に「吹角」の名篇そのほかを公けにし、御風は「白百合」によつ

て詩歌兩面にまたがり、杉谷代水、桑田春風らもまた詩壇を順次に去り、三木天遊久しぶりに「夏湖雨月」の作があり、繁野天來亦「石佛」の作があつたけれど共に舊態を追ふにすぎず、時代は早くすゝんでこの時すでに象徴主義の理論と創作との目ざましい研究に入つてゐた。民族はこの新詩潮を果していかに受入れたか。

## 四　象徴運動の始末

### I　象徴主義の理論

文明の施設の輸入の方式が、勢ひ山村一旦に三春を迎へるさまであつたために、西歐浪曼思潮が、文學的にも、哲學的にも浸入しはじめて以來、たちまち、時の先後と國の甲乙をとはず新らしかるべき何ものをも迎合せんずけはひを示し　希臘思潮の提唱はヘーゲル派哲學の瀰漫と踵をつき　プローティヌス的思考は世紀末藝術の苦悩と肩を並べる奇觀といへば奇觀、常道といへは常道を現じた。

それまで、英佛獨伊等の詩潮の消息はしばしば傳へられたが、その多くは明確な文學史的知識の上に立つた主張的の解説でなくて、單に新聞雜誌の切抜き、抜き讀みの類の模索にすぎないため、斷片的知識として殘る以外には、空しく異邦情調を煽揺するにすぎない結果に了つてゐた。その中で、伊太利にダンテを、希臘にホメーロスをスカンディナギヤにイブセンを覚める類は些かの紹介にしかすぎなかつたのであるが、獨逸文學は森鷗外によつて該博な知識と尖鋭な鑑賞の下に正しい移植と紹介とが行はれ、大村仁太郎、石橋忍月、北里龍堂その外の譯述もあり、その數は少ないけれど甚しい杜撰は見られなかつたが、英文學は一番早くから、語學の近接した干係から、一番多く紹介されたに干はらず、その曲解曲釋が一番甚しく、而して、その正しい効果は一番尠なかつた。何ら專門の知識のない amateur や dilettante や linguist や Poetaster の手で勝手に無撰擇に、而して、無精神に珠玉を瓦礫とかへたから、キャンブル、ヒマンズ夫人、ロングフェイロウ、クック女史等の場合は多く懸念するに足らぬとしても、ミルトンもブラウニングもキイツもボウもおしなべて寧ろ譯業の手を染めてくれなかつた方が遙かに願はしいやうな無雑粗笨極まるものが現はれたため、それより長く英文學は此邦にその眞の持味を誤解されゐだかもミツド・ヰクトオリヤン朝の平凡穏健思想が嘗に英國民族文學本部全體の特色であるかのやうに速斷するものが續出するに至つた。シェリは雲雀を咏じて賞歡詩人キャンブルと轡を並

らベキイッは夜鳴鳥を唱つて家庭詩人クックと席を同じくしてゐた。が、佛蘭西文學は、佛學修業の少數非文學者が餘戲的飜譯を試み、それも流俗の顧るところとならずに消失してしまつたのみで、語學の緣の薄い干係もあり進んで之が移殖のわざを計るものがなかつたが、「帝國文學」が生れてその「海外騷壇」で上田柳村が筆を英佛文學紹介にとるや、多くは斷簡の引例か月刊誌、ハンドブックの抄譯ではあつたが、彼獨得の燃犀な批評眼と柔軟な鑑賞性とにより高下正邪の別を敏慧に判別し、多くは優秀な人の意義ある作品の事例のみを談つたが、明治三十一年七月號の同誌同欄に「佛蘭西詩壇の新聲」をかゝげて、中に次の章句を揩いたことは詩史上の注目事件であつた。

「佛蘭西詩壇の格調はユウゴオ以來頗る變更せしが其後ルコント・ド・リイル等の唱導せし『パルナッシヤン』詩社の聲調も近時は大に其勢力を失ひぬ。ボートレエルの鬼才は近世の文學史上特筆すべき價値あり。彼が幽鬱奇拔なる詩才は其狂なるが故に棄つべきにあらず。ヹルレエンが縹渺たる夢寐の調も其怪なるが爲に貶す可きにあらざるなり。彼等の勢力は彼の『ロマンチック』詩社を倒して文壇の覇を稱せし『パルナッシヤン』詩社がそれをも今や壓倒せむとす。此流を汲みて佛蘭西詩壇の新聲を擧めむとする者を名けて『サムボリスト』Symbolistes といひ、又、『ヱル、リブリスト』Vers-libristes と稱す。

此新派は文學在來の詩形に據らず、自在流暢にして思想の微韻を捉ふべき新體歌を作らむとす、而して『パルナッシヤン』詩社が謹嚴なる作詩法に正面より反對し特に其押韻に就いて說を異にす、此派の詩歌に於ては各行の連鎖益々密にして每行の末に於て詩句を終らず、所謂 enjambement の法を用ゐること頻なり。かの有名なるヹルレエンが『秋の歌』の如きは此新派の源を發する所なるべし。」云々と云つて原詩を紹介し、その「天才の聲」が一代の騷人らを動かし「詩人フェルナン・グレエグ Fernand Gregh の作 Menuet といふに」反響がある。と論じ、次ぎに、「つらつら藝術の發展を觀ずるに、其原始に於ては極めて簡素未熟の狀態を呈し、其漸く進むに從て、複雜圓熟の境に至る。其頂點を名けて所謂『クラシック』の時代とす。而して一世の民心其あまりに完全なるを厭ひて、倦怠の情自ら發するに至り、當初の簡朴なるを賞して、蒼古とし幽寂なりとするの風を生ず。それやがて『ロマンチック』の起る所以なり。近世の文明今や其盛期を全うし、時に一轉して清新の機運を生ぜむもの、或は衰頽して暫時荼蘼の悲境に陷らむかといふに此十九世紀末に於て、『プレラフェライト』起り『アムプレッショニスト』を生じ又『サムボリスト』の徒を出すに至りしも敢て

訴るに足るものなし。」といひ、更に、「作詩法の自由ならざる可からざるを奨說するは精神病學の所謂隔世遺傳（アタヴィズム）」を以て律すべきにあらず、將又一時の假初の流行を以て說明すべきにもあらず、眞に彼等の婉娩なる思想は新詩形の已むべからざるを證して餘りあるものなり。ワグネルの人生觀が其特殊なる樂風にして始て發揚せらるべきが如く、佛蘭西新體詩家の思想感情は實に『パルナッシヤン』が縟瑣的詩格を以て現はし得可きに非ず。ヱルレエン等が勤めたる音樂的聲調に賴らざる可からざるなり。」と論じた。

明治三十一年、當年二十九歳の若者の筆であるから行文のたどたどしさ、理說の誤謬の多きはやむをえない。作詩界に於て陳套な國文學者の今様風や明治初年風の滑稽な卑屈調が時花つてゐる時、とにかく此紹介をした一事の效蹟は詩史上から見て顧みなければならない。果然、後年、詩壇に論戰がさかんに行はれるに至り、象徴一派の徒が「作詩法の自由」、「文法破格の可能」を高唱して世評に抗し、蒲原有明が「春鳥集」の序に近代象徴詩を論じて「近代の幽致」を叫び、又、ロゼティが作にならつて畳句のエフェクトを試みて成効したのも悉く皆この一文に淵由するに相違ないと思惟されうる。

ついで、明治三十三年發行「審美新說」に鷗外はヨハネス・フォルケルトが「審美上時事問題」を解說し、「空想の昂上は又自らにして象徴 Symbolik を用ゐしむ。此に所謂象徴は廣義に非ず、價値あるものの表出を謂ふに非ず。（若し此義より言はゞ、Zola の小說は皆象徴たるべし。）狹義なり。某の含蓄ありて、本來不恰好なる形式もて表出せられ、これがために印象明白なる體現を做し得るに至る。Max. Klinger の畫に於けるぞ、Ibsen の詩に於ける、多く此手段を用ゐたり。試みに二三の例を後者中に求めんか。Nora の舞踏と徴命と、Gespenster の太陽 Frau von Meere の海 Wildente の辮中に捕へ置ける鴨、Solness の登塔と唱歌と等、此類極めて多し。Ibsen は間々共作中の活人物をして象徴化せしめ、その廣容なる意義に似たること Goethe の Faust の第二部と一様なるに至る。是れ憾とすべきなり。」云々と云つたが、此等の文獻の効果は爾來詩流してあらはれず、飛んで、明治三十八九年詩壇隆昌の氣運が臻り、詩冊子、評論が一切り目まぐろしき迄に出さかつた頃、詩壇の中心主潮は、この象徴主義の運動に外ならなかつた。

文壇一般から之を見ると、浪曼思潮の意識的主張が三十六年前後に行はれたのに、小說界に於ける自然主義の提唱は、同年の頃より小杉天外の「魔風戀風」が問題となり道義・偏感から斥けるものと藝術上立場から擁護するものと出て、公平なる

にある學徒は、歐洲自然主義の發達に、「第一自然主義」、「第二自然主義」の別ありと解釋して、天外の平明な寫實主義を後期自然派に徹底させることが、天外を救ふ道であり、文壇を進展させる所以であると說いた(「帝國文學」三六年五月號「所謂自然主義」)が、その實際の活動は田山花袋の「露骨なる描寫」文が出た頃からである。自然主義が小說界を壟斷風靡して一代の流風となりつゝある時、その一隅には浪曼派の小說が新らしく芽生へて漱石小說の價値を訊ね、鏡花文の新意義を覓めてゐた。明治三十六年安藤無書子が「帝國文學」に「デカダン」論を書いた。この種紹介のやゝまとまつたものの第一聲である。その旨は、ラファエル前派を「近世文藝デカダン傾向の濫觴」(原文ママ)とする說は便宜論で、「この風夙く十八世紀佛蘭西にほの見え口善惡なき童ども戲れに Hydropathe と呼びけるが後 Decadents の名」で呼ばれたといひ、トルストヰ、イプセン、ニイチェ、メエテルリンク、ダンヌンチオはこの流派の巨人だといひ、「バアランヌ、マラルメ、アダム等詩歌美術の記號的方面を規定せんとて努力したり」がモレアヽ始て記號主義」を起したと記したは、勿論象徴主義の事で、何かの外國雜誌の抄譯に相違ない事が判る。なほ、「ロウゼンクロイツェル一團はかゝる法則的記號主義を實現せんが爲めに起れる神祕派」で首領をパアラダアンといひ、ロリナアは「神經病」に性欲方面を發揮し、英國にはスヰンバアンから分れた「主美派」があり、「佛には、モンデエの刱めたるパアナシエイ派有り」、リシパンの「無頼漢歌」、カルデュッチの「惡魔歌」は「デカダン文學の錚々」だといひ、ギリエ、バアルベイ等「神明を褻瀆」したが「一片宗教的の俤を認め」られたけれどフイズマンスに至て「全篇悉くデカダン的人物の會萃」からなり「耽溺蕩逸靡爛の極に達し」たと論じ、一轉して論議に入り、「近世のロウマンティックは主として自然主義寫實主義或は究理主義に反動して起れる現象なり其神祕主義記號主義に沒入するは當然の徑路のみ」。此派に三つの特徴がある、一は「自我意識」、二はロウマンティックとの「因緣」、三は「縹緲窈窕の妙」、「暗示風韻」の把持、四は「女性的なる」ことだと云つた。此の幼稚蕪雜な紹介がなほ當時の無智な詩壇に貢獻した所少くないはいふ迄もない。進んで三十八年には「白百合」に武田木兒、「ヱルレーヌ」を讃し、「太陽」に長谷川天溪「表象主義の文學」を論じ、三十八年十二月號)、片山孤村の「神經質の文學」(三八年六月九月)、「續神經質の文學」(三八年十二月)が「帝國文學」に現はれ、「讀賣」に中島孤島は「暗黑なる文壇」を掲げトルストヰとノルドオを祖述して攻擊の一聲を放ち、角田浩々歌客は同紙に

（三八年十一月十二月）伊吹郊人の名で「比興詩を論ず」とその餘論とを公けにし、島村抱月は「日々」で又新詩の諸問題にふれた。そして、有明の春鳥集の序に此詩論にふれた條のある事は前にいつたが、三十六年の交より主として「明星」に「光明道」、「白琺瑯」等の譯詩篇を公けにしてゐた上田敏は譯詩集「海潮音」を上梓して爾來この派の根元の酵母となつた。又、詩人にして唯一の論客であつた泡鳴は「神秘的半獣主義」（三九年）を著はし、四〇年に入つて「日本古代思想より近代の表象主義を論ず」（「早稻田文學」）と「自然主義的表象詩論」（「帝國文學」）とを發表した。

喧鬧をきはめた此等の論戰のあひだで史價ある立論は、「海潮音」の序と孤村文と泡鳴論とであつた。上田敏は象徴の本義を說いて、「詩に象徴を用ゐること必らずしも近代の創意に非らずこれ或は山獄と共に舊るきものならむ」然れども、「之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢」とする。この「清新の氣運」を促したものはマラルメ、ヱルレエヌであり、之に對して保守の言を吐くはブリュンチエルである。「象徴の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の概念を傳へむと勉むるにあらず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ說き及ぼさゞる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心狀を喚起するに在りとす。例へば本書一五九頁「燕の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽（パリサイ）の徒と共に虛僞の生を營みて、醜陋汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽搏きて、久方の天に飛び影は落ちて、骨蓬の白く淸らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狹くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に饜きてとこしへに精神の愛に餓ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛へられ或は空想の泡沫に歸する愛を哀みて、眞理の捉へ難きに憧がるゝ哲人の愁思もほのめかさる。而して、此詩の喚起する心狀に至りては皆相似たり。」二〇二頁「花冠」は詩人が黃昏の途上に佇みて、「活動」「樂欲」「驕慢」の邦に漂遊して、今や歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛れ語らず所只幻惑の悲音のみ。「孤り、此等の姉妹と道を異にしたるが、終に歸り來らざる「理想」は法苑林の樹間に「愛」と相睦み語らふならむとい

ふに在りて冷艶素香の美今の佛詩壇に冠たる詩なり。」云々。

なほ彼は卷中挿語で、佛詩は、ユウゴオに絵畫の色を、ド・リイルに彫塑の形を、ヱルレエヌに音樂の聲と又更に陰影の匂ひとを捉へようとしてゐると譬へ、マラルメの有名な言「物象を靜觀して、これが喚起したる幻想の裡、自から心象の飛揚する時は「歌」成る。さきの「高踏派」の詩人は、物の全般を採りて之を示したり。かるが故に、其詩、幽妙を虧く、人をして宛然自ら創作するが如き享樂無からした。それ物象を明示するは詩興四分の三を沒却するものなり。讀詩の妙は漸々遲々たる推度の裡に存す。暗示は即ちこれ幻想に非らずや。這般幽玄の運用を象徴と名づく。一の心状を示さむが爲、徐ろに物象を喚起し、或は之と逆さに、一の物象を採りて、闡明數番の後、これより一の心状を脱離せしむる事これなり。」このマラルメが語を傳へた彼はその十年の昔(廿九年三月)早くもエルレエヌを紹介して「詩人」の一節を譯出してゐる。

更に一つ、「藝苑」三十九年五月)誌上彼は更に「象徴詩釋義」を試みマラルメが『小曲』

絹には『時』の薰すれど
『妄執』の色褪せにたり
鏡のそとに溢れたる
雲の御髪に如めやも。……

Quelle soie aux baumes de temps
Où la Chimère s'exténue
Vaut la torse et native nue
Que, hors de ton miroir, tu tends!

云々、四聯の詩の自家釋義を示し右の聯の暗示する處は、「絹織の古りたる布は百代の香に染みて、連想豐かになよなよたる絲の手觸りは、美人の雲髮をかきわくる思あらしむ。たゞもとより人工の成せる物なれば、由緒いかばかり深くとも、生命の活動なし。こゝに『妄執』とはあながち非難の意にあらず、寧ろ幻想、生氣の義にして、色相界の執着が生みいづる諸の想ならむ。されば明鏡に雲髮を梳けつる麗人の美に比していかなる綾絹も如かじとなり。第二聯以下は、

心急れの旗じるし
道の衢にいきほへど、
われはただ君がねくたれを
枕ぎてあらむ、限もきりて。

げに呼のいとせちに
憧がるとてもあやなしや、
君戀ひわたる貴人が

丈長髮のふくだみに
玉を擲つこゝちして
「名利」の叫ふたがすば。

Les trous de drapeaux méditants
S'exaltent dans notre avenue:
Moi, j'ai ta chevelure nue
Pour enfouir mes yeux contents.

Non! La bouche ne sera sûre
De rien goûter à sa morsure,
S'il ne fait, ton princier amant.

Dans la Considérable touffe
Expirer, Comme un diamant,
Le Cri des Gloires qu'il étouffe.

のごとき言語の布置で、これに對しては左のごとく解釋をこゝろみてゐる。

第二解に及びて樂欲と名利との爭は起りぬ。旌旗は大道に鋒きて、功名の念を誘へど、英雄の心寧ろ翠帳の阿嬌に牽かる。あなたには軍の神の馬印こなたには愛染の旗印、兩々相對して、象徵の妙を極む。所謂萬物の照應(コレスポンダンス)これなり。第三解第四解に至りて、樂欲は終に名利を壓しぬ。ヘラクレエス Herakles はオムフアレ Omphale に屈しタンホイゼル Tannhäuser はエヌス姬 Frau Venus に迷ひ、サムソン Samson がダリラ Dalilah に誑られ、アントニウス Antonius がクレオパトラ Cleopatra に溺れたるは此理なり。こゝに詩人は雲煙旌旗の象徵を用ゐて、時處の差別を除きたる一世相の眞髓を味ふ。」と一括していふと、「卒讀して何の得る所無く、曖昧なる數箇の幻想おぼめくを知るのみなれど、漸くにして一の心情を浮びいづ。これ英雄の麗人を頌する意、樂欲と名利との衝突なり。」と說く詳部には異說を挿まねばならぬが、大體に於て象徵詩新體の精神を握つてゐることは爭はれない。爾後の作家評家多くは「海潮音」の序のこゝろに基いて象徵の本義を說き、マラルメが所說を引いてかの拔簡說を叙べることを恒とした。

同じ年やゝ先んじて出た「春鳥集」の序で有明は「近代の幽致」を云つて官能の尊重を說き表現の新法を論じた。「夏漸く近づきて春衣を褪」てんとする趣であつた。

片山孤村が「神經質の文學」に提出した新知識に、柳村によつて佛蘭西象徴派は說かれても獨逸象徴詩史の內容を傳へるものがなかつたからで、大體、ヘルマン・バールの行實とその位地とを紹介し彼か「近世文學評論」Studien zur Kritik der Moderne 1894 の大意を抄出し、先づデカダン派の特色の第一は舊浪曼派と違つて「神經のロマンチック」であり覓むるところは情調 Stimmungen であつて感情 Gefühle でないとし、第二は、人工的 das Künstliche 傾向とし、第三は神秘への渴望であるといひ次に象徴派々解說して僞象徴文學に對する新象徴詩の新技巧を例證し、更にホーフマンスタールが新詩社の三綱領をあげ、新浪曼派は自然派の反動として生じたとバール初め其派の人は見てゐるが實は自然派の極端な延長と「自然派の置土產たる Sensation」の新形式とであると斷じ、フォルケルトの第六講演を引いて例證してゐる。其續論の方では、バルテルスを說いて一八七一年以降が初期デカダンス、八一年此方が最盛期デカダンス、九一年後がデカダンス末期とし、末期を更に分けて、一、表徴派・女性的（ボドレエル、ヱルレイヌ）、二、ディオニソス的・超人的（「ツァラトゥストラ如是說」とニイチェ式抒情詩との模倣者）、三、神秘的・原始的（メーテルリンク）と略說し、尙デーメル、ホルツ等維納青年詩人を紹介し、デーメルの詩「死せる鐘」Der tote Ton を譯してゐる。

此紹介文から角田浩々歌客との數回にわたる論戰が開かれ、弧村は附論（三八年十二月）を公けにしてフォルケルトの分類を啓蒙的に紹介し、一、觀念象徴、二、一般象徴、三、情調象徴とし、歌客が「比興詩」の名で呼ぶことを主張したるに對し、歌客が一切の象徴を混同してゐるのみか Symbolische Poesie と Symbolistische Poesie との區別すら判らぬと嗤ひ、象徴派詩學信條の大謬見は「部分を以て全體に代へむとした事、情調のみが詩の內容となる價を有すと主張した事」にあると斷言した

浩々歌客は、その比興詩論で漢詩六義の分類法により比と興との詩風が即ち象徴詩であるから東方尊重の精神で昔からある比興の名で呼びたい。司空曙が「江村即事」

罷釣歸來不繫船　江村月落正堪眠
縱然一夜風吹去　只在蘆花淺水邊

を大典禪師が應無所住而生其心の說示だとしたのは人心の安住

を不緊諾の運命に喩へた比興詩で、進んでは佛教の偈の如きもさうだと說き、象徴詩の極致は畢竟、漢詩の詩品にいふ「一字を着けず自から風流を得」に歸すとしたいといふ論旨であつた。之を孤村は嗤つて情緒象徴の立場に無知だと斥け、天溪は用ゐたる材料を「直に表象なりと誤解したるものならん、表象派の表象とは、言語と其排列その物となり、之を指して比興詩と言ふが如きは、表象と寓意との差別を辨ぜ」ないものだと駁した。浩々歌客が象徴の語意に暗かつたことはいふまでもないが、更に押切つて曹子建の七歩の詩

煮豆燃豆萁　豆在釜中泣
本是同根生　相煮何太急

は情緒象徴詩の好例だと云つたのは殆ど戲論に近い眞面目な言葉であつただけ。智巧のアレゴリイとムードとの差異が判然してゐないことが明かになり議論はこゝに終結した。

これらの論爭を經て象徴詩の輓近體は舊人にも新人にも了解されて來たが、現在作品としての當代象徴詩は一向にひろく世間の愛誦する處とならず、詩壇と世間とは風馬牛の關係を持續して行つた。評家にも浩々歌客の如き熱心餘りあつて知識の足らぬものがあり、孤村の如き知識十分あつて同情の全くなく、象徴詩を否定排擊せんためにあの研究を公けにした觀があつたものもある處を見れば、本然的の詩への要求と新詩の本質とを一致して考へることをしない世間が脊を向けてゐたのも怪むに足りない。孤村の論は、明晰な頭腦で整理した材料を一片の常識論で按排して、それに當時の中年者が考へたやうな無責任な嘲笑惡罵の味を振りかけてあつたから、「態度が不眞面目だ」といふ攻擊を切りに受けたが、紹介した事實の反響は少からずあつて、後年口語詩が發生するときの準備ともなつた。

かういふ孤村の態度は一般の利口者が逃避的な立場で試みる嗤笑で、明治時代を通じ、學界、教界、文壇、政界、實務界を通じてこんな態度の者が利口だといはれ「要領がいゝ」とほめられたのだが、この態度から一歩出て新らしく道を拓く勇氣のあるものがなければ、新らしい人生への局面は展開しない。冷靜にして同情ある學者として抱月は「囚はれたる文藝」(三十九年一月)「早稻田文學」に近世文藝思想の推移を叙し、フォルケルトの分類を說き斯くの如き傾向を別稱すると「横より呼ぶときは情緒的」であるが「縦より呼ぶときは宗教的」であると云ひ、そのいはゆる「宗教的文藝」の義を說いた。抱月に反して宣傳者の攻擊的氣質と蕪雜と熱心と非論理とを兼ね備へた詩人泡鳴の論議は夥しい缺點があるにもかゝはらず頗る注目するに足る立論であつたが、利口者受けのする世間では、彼の蕪雜や非論理や滑稽

な眞面目にかへつて反感と不眞面目とを感じて、判らぬ者も判るべき者も多くはその所說を輕々にあしらつた。泡鳴の熱は作詩に發せずして論詩に發した。

四〇年の「新小說」に揭げられた「佛蘭西の表象詩派」で泡鳴はマラルメ以來の傳統の史的陳叙をしたが、考證が大ざつぱで譯詩がいゝかげんで發音が出鱈目であつたため評家の惡口をうけて外の眞面目な議論まで輕視され勝ちであつた。些らぬトリギヤリズムに氣をつけて全體を見ないのが明治學徒の惡僻であるが、細部に拙笨な泡鳴流も亦明治文士の固僻である。泡鳴は、大ざつぱな僻に時とすると神經質な詮議立てもして、夏目漱石が何かの雜誌に、「新體詩は見ないがつまらない」といつた言葉尻をとり、「お得意のだら〳〵した寫生文小說を書いて、世間を茶化して居るみが「いゝよ」むきになつてゐるが、此生一本な態度で何者にも突擊して論戰の花を咲かせた。論爭が自己を高め自己の名を高めることをも亦忘れない彼であつた。臆面もないその自己吹張で二重の障壁を經た彼方の結果を私かに豫想してゐる彼であつた。

四〇年三月帝國文學會講演に於ける彼の「自然主義的表象詩論」は例によつて傍若無人な放言であつたが中を見ると「これから益々發展すべき詩風」を箇條書にして、一、宗教的形式の脫却、二、懷疑と煩悶、三、神經と自然との燃燒流化、四、殺那的生慾の發現、五、心熱、六、新語法と新用語、七、思想と技巧との純化、八、新リズム、の八種とし、詩は宗教哲學のために作らず、詩を以て宗教、哲學となすといひ、藤岡東圃が、詩の生命は感情を動かす點に在るが宗教的又は哲學的思想がその中心だと云つたに對し、泡鳴は、心緒が一時に「燃燒流化」して、「心熱」すなはち「熱想的自覺」Passionate thought を現じるのだから、詩即宗教、哲學だと論じ、絕對詩歌の立場を明らかにしてゐるのは創見でも新意でもないが、作者の云はんとする所、學者の考へなかつた所を直截に道破したものである。

彼の「日本古代思想より近代の表象主義を論ず」は一番力をこめた立論であつたが、要するに古代の神々の生活が「熱烈な生慾」(性慾ではない)を持つてゐて、その發展が宗教の形式をうけてから「神がかり」といふ豫言者のやうなものが出來た神后皇后や豐太閤は「大和民族全體の活力が神がかり」したものである。この神がかりの祕密が佛教と合してから消極思想が入つて來た。この古代人の生活を詩の上で生きるのが自然主義的表象主義であるに外ならぬといふのである。例によつて飛躍した論理で獨斷的にこぢつけてはゐるけれども、苦悶の意義を認め、宿業的な自然主義の人生觀を明るみに引張り出し、表

象的立場を自然主義で貫くといふ意向は一應うけとれない事もないが、その詩の本領とした「眞摯、熱烈、刹那的表象のイリユジヨン」は、中に盛つたいろ〳〵の内容の不統一のためにつひに泡鳴自らをはじめ一人として實行出來ないで終つてしまつた。

長谷川天溪の「表象主義の文學」はケーベル博士の講義「直接に卽ち直觀的に或る意味を傳ふる物は表象なり、或る觀念の媒介に依りて意味を傳ふる物は寓意なり。」を引いて一般象徵法に初まつてイプセンの「ブランド」を說き、極めて無雜ながら辛くも近代佛詩の情調象徵にまでいひ及んでゐる。獨創の見や信仰者の熱は些かもないが弧村、泡鳴と共に啓蒙的意義に於てのみ一顧の値ある論議である。なほ中村星湖が「ウイスマンの象徵主義」に「伽藍」の内容を解說したごときものが各雜誌に競つて現出した。

以上の諸論議に見るごとく、西詩の起伏に就て殆ど無知に近かつた本邦詩壇が之によつて浪曼詩、古典詩、象徵詩の差別とその相關の立場をも識り、現に自分の依つてゐる詩感の內容の價値と立場とを初めて闡明しえて、自覺的文學史の第一頁にその若き雙脚を踏み入れたのは、散文壇で自然主義の提唱から、俄かに意識的立脚地に彳んだと同じである。世界文學史の水準線から現代日本文學の所產を解することが、この時からして初めて容易になりかゝつたのである。

なほ象徵の譯語は前述の如く中江兆民(多分はその「維氏美學」)に初まるが、森鷗外之を採用し、上田敏之に同じた一番普遍的な譯語で、他に島村抱月は「標象」。泡鳴、天溪は「表象」と譯してゐたが、泡鳴の譯語が在來の哲學上譯語「表象（フォレシュテルング）」と混同するといふ批難に對し彼は自分の考へでは、哲學上用語例も詩學の用語例に渾化させてかまはないからだと辯駁したが、サンボールの譯語はその後つひに象徵と決定した。

## II　詩論の進化

創作が意識的となり、文學上傾向、集團、運動の精神が自覺的に、文學史的に行はれるやうになるに從つて、象徵詩論に伴ない一般詩論も亦急に進化のあとを示した。二十年代末期の戲作文壇當時では、二葉亭の如き革新文學者もなほ戲作氣分を意識的に皮肉に用ゐたのではなく、運命的に分有してをり、詩歌絕對の本質を明確な文章で示しえたのは、美妙らが詩論を總收した「つき草」に於ける鷗外一人であつたに比し、三十年末期には詩の紹介についても本質に就ても社會上の相對的立場についても突き込んだ論策にまで進んだ。たとへば、「早稻田文學」(四〇年

六月）に於ける片上天弦の詩歌の根本疑がそれである。泡鳴前記の詩論の本意がそれである。櫻井天壇の「獨逸の抒情詩に於ける印象的自然主義」（四十一年）がそれである。

天弦の設問は「詩歌の存在を否定するの意を含むものではない」が、自然主義的表象派が「一切の心的活動が渾融して一時に其の高熱に達したるの殺那、その瞬間の感味心境をさながらに注ぎ出だす」ものである以上、「貧しき言語を以て歌はれんとした場合に、或ひは其の感味は現はれずして結局不可解のものとなるか、但しはまた、わづかに其の感味の一小部分を現はし得たるに止まるか、何にしても表現の努力が不完全の結果に終るべきは已を得ぬ次第で」あるが、「形式上の制約が其の表現せる感味の節奏に伴ふ限り、形式の制約は感味を拘束する手段でないこと勿論である」に係はらず、「複雜にして變化無限なる所謂主觀の反應感が、如何にして一定の形式の中に收められ」うるかに想倒すると、勢ひ「形式上の制約が詩歌の必須條件やがて文藝の他の部類との區別要件であるとすれば、詩歌のこの制限が又延いて其の感味の形（節奏）やがて種類をも制限するに至るべきは當然」であるから、この制約にいか程まで信用されるかされないかゞ問題である。「永久に一種の不充分なる文藝の形式として存在す」るとすれば畢竟詩人の詩的精進は「つひに甲斐なき努力」となりはしないであらうか。

これは技巧と詩感と形態と内容とを分離させて形式上の制限の可能性を疑つたもの故、この疑問から出發すれば論は藝術哲學の本部迄溯つて再び象徴手法の吟味に復歸しなければならないが、この設問に明答を與へた評論は尠く、僅かに泡鳴がこの疑問の方法に誤謬があると云つて、言語藝術は詩文共に章句の相即相離の三昧境から彷彿させる反應感が極致であるからそれ以上やそれ以外を考へたつてしかたがないと云ふ意をもらしてゐるかと思ふと、又、不完全な言語を使用するからこそ「朦朧」にならざるをえないのだといひ、「精神の振つてゐる詩人」なら、評家や小詩人にとつて「つまづく石」であらうとも、形式を自由な天地と見て活動すると云つてゐるにとどまつた。これに似通つた問題に泡鳴がその「自然主義的表象詩論」で觸れたのを時事新報文藝週報記者が揶揄したが空漠な駄論であつた。由來、自ら判つてゐて自ら判らなくなるのが泡鳴であつた。

天壇文は懇切に同情と理解とを以て評説した祖述論であるが、實際上の詩壇への貢獻は彼の如きものの方が孤村に比して遙かに深かつた。特に口語詩勃興に就て右印象詩論の功績は爭はれぬ。彼は外にもヘッベルやメーリケを說きゲーテの民謡を論じ「ミュンヘン詩派の詩歌」を說きホーフマンスタールの象徴

劇を論じ、孤村の「フーゴー・フォン・ホーフマンスタールに就て」(四一年)と並んで輓近維納派の二人者であり、栗山萬次郎、山岸光宣と共に獨逸文學の少數の研究者の一人であつた。あだかも折竹蓼峰が内藤濯と共に佛蘭西詩に於て柳村の跡を追つたと好一對である。高踏派象徴派にわたり柳村よりも後に出ただけやゝ詳かに紹介したのが折竹の「近代佛蘭西詩界の概觀」(四〇年)、「ルコント・ド・リイルの詩に現はれたる虚無の思想」(四〇年)「現代佛蘭西象徴詩家」(四一年)であり「ヹルレエヌの戀愛觀」(同年)であり、内藤の「ホセ・マリヤ・デ・エレディヤの形式美」(四一年)であつた。厨川白村は「近英詩人の時勢に對する干係を論ず」(四一年)でロゼチィ、クラフ以後の輓近英詩を論じたが、この紹介にすぎない點で右の佛獨二派の紹介者に類し、問題も思索もない概觀論にすぎない點で、後かれのものした「文藝思潮論」に隣するものであつた。白村は淺薄極まる概論文學者として衆愚の迎合を得て一生を終始したが、その著述で一番内容を盛りえたものは「近代文學十講」一卷があるばかりである。尙他に近代英文學に論究したものに天弦の「英吉利自然派の官能主義」(三十九年)があり、栗原古城の「イニツの象徴論」(四一年)があり、メーテルリンクを說いたものに「七人」の中澤臨川と、「明星」の上田敏とがあつた。

相馬御風は、「白百合」に詩歌の創作を、「早稻田文學」に月評を試みてゐたが、その中で上田敏の象徴派に對する紹介の態度が、「こんなものもよからう」位の生ぬるさであつた事が、後に悪影響(感情直寫の分子少なき詩風)を及ぼしてゐるといつたのは事實だが、柳村は譯詩序にも自ら云つてゐるやうにその「同情は寧ろ」高踏派にあつたのである。又、「自ら欺ける詩界」に言語の形式の障壁を除くべきを急務とし、「詩界の根本的革新」に形式主義打破の方策として、一、雅言の驅逐、二、舊詩調の破壞、三、行と聯との制約の破壞を說いた。が、形式に執しすぎるの非は當時の大家卽ち泣菫、有明共にまぬがるべからざる缺點として殘されてゐたけれども、此種の詩として泣、明共にその絕頂時代に至らんとする時であるから、右三種の方策を說いても實際上に於ては効果は上らないもので、寧ろ高所から端的に島村抱月の如く口語詩の可能を高唱した方が局面展開の誘因として有力であつた。この時より口語詩は詩壇唯一の關心であつた。(これに就ては後期に略說する。)

最後に、幸田露伴が四行詩の試作は、かれの長篇詩「出廬」と前後して發表されたが、彼「短詩」(「蝸牛庵夜譚」)といふ一文で本邦短詩形を顧み、「三十一音の歌たるに叶ふものを得て歌とせられたる時まことに好きなり。」「十七音の歌もまた然り。」「おのづ

からにして百千種の内容あり、おのづからにして百千種の外形あるべきなり。」「こゝに於て吾等のいはゆる短詩といふもの生まる。」といひ、「短詩みをつくし」の條に、「一章四行、一行およそ四五音より二十音に至るまで、心のまゝたるべし。たゞし言葉のつゞけかたに必ず調あるべし。」とて新クヮトレーン詩を創成し、言語は術語、外語、隱語、方言心のまゝでよいが調和を忘るなといひ、文法は人々の之を信じ之を用ふるに任すが新古の甚しき混淆や全くの誤謬は忌むといひ、方針は新趣味に就き、寛容の研究に向ふを意とすべしと論じた。これに對する反響は殆どなかつた。彼の作例も拙詩、惡詩が多かつた意圖は惡くないが彼その人が散文で詩を行る風の詩人であつたから韻語ではつひに大成しえなかつたのである。この前後、土井晩翠と吉野臥城とが八行詩の試作を公表したが、その結果に於ては露伴と同じであつた。

## III 象徵主義の詩歌

さて、以上の如き新詩の論砦の上に立てられた詩歌の殿堂からは、はたしていかな偶像を開扉しえたであらうか。

泣菫の稟性は、此派とその精神、技巧に於て縁遠かつたが時代の影響は當時彼々してすらも一番この派の詩の傾向にあると稱された「零餘子」の如きを作らしめたけれど、それは、智巧にたよつて感情の三昧境を顧みぬ寓話詩、譬喩詩の方向に奔つたものとしてはやゝ象徵の感味が自然ににじみ出た點で推賞されたもので、

つむじ風、した葉の煽り
あたふたと零餘子はこぼる

とか、

西はさあれ、底土にひそみ
日にめざめ、濕りに吹呟び

とかいふ條りのあひだに一種の含蓄美があらはれて象徵的暗示を示したことは爭はれないが、象徵詩はつひに泣菫その人の畑のものではない。「機關車の歌」で、日常現代生活を歌へといふ評家の要求に應じてかれはその後の新展開を企てたが形式と資材との根本的乖離があるのでつひに全く失敗に終つてしまつた。鐵幹は、西詩の教養の皆無ながら、鋭感と敏悲とでよく時代精神に伴つて進んで來たが、この頃より Oyaji とか Tachibana とかの如くローマ字で詩を作る試みをもつゞけやがて佛蘭西語を習得して捲土重來の氣を示さうとしたが、その詩には西詩の感化は初めより一貫して極めて尠く、象徵詩運動に對しても自己の主宰する「明星」がその中心の觀あつたに係はらずその方向への昵近がなく、僅かに例へば「斧」、「斧」の類の詩に試作を

公けにしたけれど、もと彼の詩風は感情のさま〴〵な直叙の形式にその獨得の特色を發揮したものであつたごとく、後、「檞の葉」(四十三年)に收録した小曲百六十篇の類などに昔からの忍從と苛辣との中間を彷徨する

内側に歩けども轉ばず
ああ、女。
男の如く銃を執らず。
黑髮、瞳、くちびる、
我等ああ勝目なし。

のやうな短詩に一種の面白味を見せ、「斧」の如きは當時評判をえた詩であつたけれどももともと彼の特色が象徴詩らしい形式の中に盛られて、その表現の技巧のたくみに倚つて人を感ぜさせたもので、彼の及び象徴詩の本道を行くものではなかつた。「彗星」は佳作の評がたかかつたが、彼の精緻な技巧が一見して人の感嘆をひくけれど、實は最初の六行に於けるが如き技巧の冴えが後の十六行にも一貫して繼續したならば此詩は技巧から入つて技巧の上に出で、佳品となつたのだが終りに近づくに從ひ容易に就いて外調に滑走したので成效しなかつた。尤もこれは象徴詩といふべき作品ではない。

最初から象徴詩に賦性の親近を示してゐたのは只一人蒲原有明があつたがその有明にすら新見地なしと斥けて自ら唯一の新人と號した泡鳴は自ら盛んに論議して悟得もあつた筈にも係はらず、作詩に佳品は少なかつた。多くは

われに　神なく　日は　死なく
ありと　いふべき　この　悲み。

の風の表現で、性急で落付のない彼は歌ふに先んじいちはやく説明してそれで自分は歌つたつもりでゐたのである。が、泡鳴の詩境の値は、理説に傾きがちな抒情の姿相、象徴手法にあくがれる浪曼詩風の如き、ふたつの相剋せるものの紛然、雜然たる堆積のあひだにある。「白百合」の初期の浪曼調が「夕潮」(三十七年)の主調となつて、處女集「露じも」(三十四年)の幼稚を救つてゐるけれど、その「夕潮」には彼の詩風がまだ定まらず、「海堡技師」の容しい試作に外れたのだが、「悲戀悲歌」(三十八年)と「闇の盃盤」(四十一年)とに於て初めて彼のものらしい詩風を確立させた。けれども彼は畢竟散文的詩人である。純文社時代の浪曼調を脱して「闇の盃盤」の泡鳴風を作つたのはたしかに彼として一つの進化には違ひないが、この詩集と大正期に出た「戀のしやりこふべ」とを限りに長く詩筆を絶つて小説に奔つたのは彼としては、更に自然な自己表現の道への進展であつた。そして「闇の盃盤」と小説類とをつなぐものとして「

のしやりこふべ」は口語を使用して、今まで雅語使用のために
あの赤裸々なるべき泡鳴の全體が惜くもむきだしになり切らず
に十年の歳月を過して來たのが、一朝にして眞實の彼の本性
が、がむしやらに露出した、不相變らず性急で拙劣であるがか
れ獨得のうま味も亦出て來たものとして注意される値がある。
貧しいその空想に倚らずして直ちに觸目の現實に取材しただけ
でも彼の詩感の發展史に於ては注目するに足りることである。
泡鳴の象徴詩は、所詮、かれの試作で終つてしまつた。新ら
しく、次から次へと、永遠に習作を書いてゐたのが泡鳴であ
る。一聯の稀に見る佳句は、數聯の蕪詩の頭を飾つた。(『悲戀
悲歌』、三界獨白(二一)「闇の横木」)。巧妙掬すべき四句一聯と平
凡な二聯とが終りに二行の駄句を附加した。(『悲戀悲歌』時劫
森のかげ」)。

ああ 日 は毛布の 黑み を 帶びて、
月 なた 血 の ごと しぼみ來たり、
あめたる 星々 その情 もろく、
たとへば 無花果 地 にぞ 落つる。
諸犬 は 谷な物 おのづと 巻きて、
山々 島々 うつり行きぬ。
わが身 は 鉛の、おもり の 如く、
空より 釣られて 闇 を 下だる。……

『悲戀悲歌』(闇の横木)

時劫 の 森かげ 露は しとゞ、
わが おほ御神 の 足 を 受けず、
重なる 落葉 の 下行く 水 は、
岩 をば めぐりて 人 を 刻む。

……………………………………

身づから その手 を 樹 には かけて、
見よ 立ち上れり 石 の すがた。
あらくれ男 の 胸 いと廣く、
常世 の 風 をば ここに 漂ひぬ。

ああ かれ 戀 なく 苦み なくに、
はじめて この世に 出でん とするか。

『悲戀悲歌』(時劫の森かげ)

樫 の 樹の間 を漏る月 の
影は ふるひて 座に 落ちぬ。
誰が ゑみまけし 魂の
かた砕け ぞと、そも 小猫

白き　小猫は　走り來て、
ただ　つくねんと　見守りぬ。
泡と　つぶ立ち　玉と　散り、
散りては　つどふ　その碎け。

白き　小猫　は　さればみて、
つかむと　すれば　手を　照りぬ。

月と　猫とは、その夜　より、
わが座　を　和す　蹤なりき。

「闇の盃盤」（月と猫）

この「月と猫」には彼らしくない不思議な透明な美がある。而も終りの二行のために全體の生命が失せてゐることは前例の場合にもまさつてゐる。「闇の盃盤」亦末句に於て同一結果に了つた。その統一のない事かれは一个無名の小詩人にも劣つた。印象の錯雜と言語の無吟味とは「日比谷公園」の如き惡詩をも作つた。詩形の研究家としはて自ら「博士論文だ」と無邪氣な誇りを見せた「新體詩作法」を見ても判るが、その研究も彼にとつては害にこそなれ詩人としての彼に寸分の益をもたらさなかつた。天弦が「詩壇漫言」の「泡鳴の詩想、詩形」に「夕潮」中の「あゝ世の歡樂」を以て「紀手の風氣に接觸」させると云つたが、一縷かすかた美があつても反省なき饒言の行列にはばまれて全體の印象は紛糾し混亂し錯雜するにすぎない。これらの技巧感を指揮する彼の「心熱」に理論の背景あつて詩感の基礎がなかつたから、注文通りの心熱の刹那的燃燒にならずに殆ど恒に横に外れてしまつた。かれの官能描寫は、せひぐ、

人　の　知らざる　憂ひ　多し
身　をば　起さん　力　失せつ
白む　臥所に　夢　の　かをり
ゆるむ　節々　花　を　聞く……

「春曉」

の類にすぎず、婦女强姦後の心狀を描いた「墮落日晴」（四十一年「太陽」）の「苦悶詩」も苦悶の外形を說いて敢てその內容に及んでゐない。自然主義の現實觀を取入れて、表象派の新基礎に立つといふ彼の企ても、自ら攻擊する「舊思想の表象主義」の抽象觀念や非自然傾向やを減却してしまふだけの理解の根底がなくして終り、しかもその作品はつひにその理論以上の破綻に終つたが、悲愴しき破綻の間に屢泡鳴式詩的輝やきを見せ

た。それは決して輕視してはならない時代の異色である。

さて、蒲原有明がこの期に於ける力作は、蒐めて「有明集」（四十一年一月）一卷にあるが、もとこの集はやゝ早く出版せらるべき性質のものであつたので、彼亦「その期間（四十一年より大正四年に至る。日夏註）は新詩壇に於て少からぬ動搖を生じ、一面詩論の盛んであつた時代である。新主張の旗幟は詩歌の解放といふことであつた。恰もこの時「有明集」が出た。自然「有明集」は新主張に對する牲に上げられた觀を呈した。今思ふと「有明集」は不思議にも時代の思想の轉機の上に立たされたものである。」（「有明詩集」自註第三頁）と說いてゐるが、假令ば年來の勞力の總收として、時代の展開期の生贄になつたにせよ、今見てもその詩の獨自性あるスタイルを正しく保有してゐる點で、また、その後の夥しい作家らに夥しい感化を賦與した點で、彼の詩作の永遠性は爭はれない。有明が作の廣く世評に上つたのはさきに述べた通り（一月號參照）「春鳥集」上梓の際のことで、象徵派詩風の感化は早くこの集にあらはれてゐる。かれに就ていち早く批判的讃美をよせたのは櫻井天壇であつた。天壇はその象徵論（三十八年『帝國文學』「象徵詩を論じて有明の春鳥集に及ぶ」）で象徵を部分的全般的、の二種に分ち、前者は「某の感覺印象を記述するに方り象徵的に他の感覺印象を借用するの技巧」で、後者は「一個の其自身に於てまとまりたる詩想を象徵的に表現する」事だとし、前者に於て有明は成功に近づいてゐるが（「靜かにさめしたましひの」、「五月靄」、「家根のくさ」、「朝なり」）後者では未熟である（「わがおもひ」、「束の間なりき」、）とし、その故は「象徵の客觀方面と主觀方面とが圓融一體ならざる」からだとしてゐる。

「春鳥集」の有明は、極めて自然に、この自然必然の延長の姿をこの「有明集」に示してゐる。前きの集に於て、

靜かにさめしたましひの
一日は花とにほひ咲く、
ゆふべにねむる花なれば
贈らむすべはなけれども
わが戀ふる人、君をこそ、
君が眼をこそ慕ひ咲け。……

にはじまる「靜かにさめしたましひの」の一篇は當時佳作の名高かつたが、その甘味は、諦感と表現とが幽婉な姿致に於て一致してゐる處にあり、

いかにひらきてたましひの
花となりけむ知らねども、

この曉の水を出で、
一日のすがたゆるされて、
一夜に消ゆるこの花の
さだめもすでにつたなしや。

の優情の流露にあふれけれど、全體として觀察すると、泡鳴がしばしば攻撃した、詩感の象徴的渾融が知識的にかたまりかゝつてゐるといふ意味の缺陷はどの作にも多少は免れず、「朝なり」は天壇も印象派の繪畫の美だといひ、輕快な印象詩として扱ふべき方面に詩感が傾いてゐるにかゝはらず、

朝なり、やがて濁川
ぬるくにほひて、夜の胞を
ながすに似たり。しら壁に――
いちばの河岸の並み藏の――
朝なり、濕める川の靄。
市ばの河岸の並みぐらの
白壁――これやわが胸か。

の調子でおはりまで一貫せず、最終に、の說明の蛇足であり害毒であるものを附加した如きは彼の詩作經路を通じての缺點であつた。これを天壇は「象徴によりて代表せらるべき內面生活と之を代表する象徴共物との關係が緊密」でなかつたからだと云つたのはそれに違ひないが此作の性質から見て大袈裟な云ひ分である。

技巧の確實は既に「獨絃哀歌」にあらはれ、象徴手法の可能性はその「春鳥集」の一卷に出てゐるが、それが「有明集」になる　完全にかれの個性の光燦たるスタイルに迄通りついて象徴時代唯一の收穫がこの冊子を外にしてなかつた事實をよく謂つてゐる。天壇は、彼にとつて、三十七年三月「帝國文學」に又もや「詩人蒲原有明を論ず」をかゝげ、詩形、修辭、詩想にわかつて詳細に彼の特質をあげた唯一の同情ある評家であつた。

その中で天壇は獨自の見を談つて、本邦詩壇に象徴詩の生起するに到つた原因は「我邦社會人心の神經が萎微し、萎弱し頽いて幺渺の音を求め幽宵の色を貪り好んで醇を破り漓に就く底の心理」に基くもの、即ち「西歐に於てデカダン文學を生じたる同樣の心理的經路」によるものではなくして、作家等が西歐象徴詩を讀み「之を愛し之を崇拜し之を摸倣しかくて遂に自ら之を創作せんと擬するに至りたる個人的好尚より生じた」と斷じた。が、これは半面の眞質のみを謂るものである。之を讀んで愛し崇拜し創作せんとする心向の誘因は何であるか。既に慣慢心を失したテニスン、ロングフェロウの微温凡庸の詩境に滿

足出來ず、現前する心の環境の複雑性を表白するに象徴派の傾向が一番心醉すべき內容を有してゐると同感する共仔細は何であるか。そこに若干の社會的個人的環境に於て夙くも西洋紀季時代の荒涼と凄慘と悲壯と爛壞とを想はすべきものが日本現在の社會にも個人にもはやく萌芽してゐたに相違ひないふしに、當代社會史を一顧しても歷々指呼しうるので、果然ニイチェ主義の唱道といひ、「宗教」への憧れといひ、自然主義の隆爛せる「耽溺」傾向の横溢といひ、隱遁狐疑の高踏的風格の勃興といひ、反國家思想の個人主義的提唱といひ、社會主義的衣鉢の諸動作といひ、あらゆる社會と藝文とにあらはれた新現象は、そこに異邦情調と西洋崇拜心理とから來る若干の摸倣があつたにせよ、明確に象徴傾向の成因の奈邊から將來されたかを證するもので、象徴詩時代の初期に勃然として頽唐詩風の横流を見、有明、泡鳴、林外はじめ當時の主なる作者のあひだに殘された作例がその現象を如實に物語つてゐる。有明を見ると、かれはその詩情の高潮期を此作風で經過してゐるのである。

　愛欲の甘き疲れの
　罪の汚染とまじらふ
「滅の香」の
　肉村の懺悔の夢に
　朽ち入るは梵音どよむ
涅槃教の「寂の妙香」を讃し、
　熟えて落ちたる果かと、噫見よ、空に
　日は揺ぎ、濃くも腐れし光明は
　喘ぎ黄ばみて湖の中に滴り
　波に溶け、波は咽びぬたゆたひに。

の『寂靜』篇に黑き眞珠の夢を譲りたゞ「朽ちゆく夜の海」の句を嗅ぎ、

　燒け爛れたる路の砂、惱みの薇の葉とともに
燃ゆる死滅の灰を揚げるわが世の「坂路」の「悲苦の遊戲」をうたひ、

　人は皆いぶせくも面を伏せて、
　盲ひたる魚かとぞ喘げる中を

『不安』の思ひが思ひを食むわが靈が「朽つる肉の香に」なくさむさまをうつたへ
「絶望」のはては

　さあれ身に惱みなし、涙も涸れて
臥房なきこの穴の世の裸形の「痛み」を呼び、
　人の世の篝火
　ほのぐらき樹の間を

わたしらに近くか

『燈火』の美鳥の象徴瞬。

何事の起るともなく

何ものかひそめるけはひ

執ふかきちからは、やをら、

重き世をまろがし移す

『夏の歌』の象徴美は、さりげなき

ほろほろと乾ける土は

ひとしき崖をすべりぬ

のトリギヤリズムに趣り

並び立つ樅の高樹は、

知識めく影のふかみに

鈍びくゆる紫ごろも、

合掌の姿をまねぶ

『秋の歌』の落葉のすゝり泣き。

傳へ聞く彼の切支丹、古の惱もかくや——

「畏怖」の窯、「性欲」の里正

禁制の外法の者と執ねくも罵り通り、

來る中に

蠟の火を點して念ず、假名文の御經の秘密

「啓示の森の囁きを待つ『苦惱』にうめき、

なべてのうへに灰いろの

霧こそ默せ、日の終

その灰いろに彩といふ

彩の喘ぎを聞くごとし

と『灰色』の「悔の音」をきゝ、

火照の天の最後の

光叫ひて、斑猫は

世をば惑はす妖法の

尼にたぐへるそのけはひ、

靜かに浮び消え去りぬ

彼方、道なき道の奥、

生あるものの胤を食む

蛇纏ふ、肉、の腐。

黄泉路とばかり、「悪の秘所」の疾病をうたひ、

いかなる罪の凶會日に

結びそめたる種ならむ

『どくだみ』の花蘂に輝く火の匂ひを嗅ぎ、凡そ當年の有明が感興を托し、詩念を寄せ、性命を任せた一切の憧れるもの、美しきもの、よきものはこの心境の内部に秘められてゐると考へら

れた。その頽唐の詩苑に彷徨したこの詩人は、かつては『獨絃哀歌』に

聖榮閑のつとめに獨りゆかむ

と詠じ、

聖なるめぐみにたよるそれならずば
胸の火歌聲ともにあだならまし

と歌つた敬虔の詩人、評者天弦のいはゆる「君子詩人」であつた。『春鳥集』に

新らしきいのちのほとり、
あふれちる雫むすばむ。

と希ひ、

今日こそいと樂しけれ、君を得ては

と醉ふた浪漫詩人、夢と美と幻影との詩人であつた。その間一縷の「近代的憂愁」の重みはあつたけれど、それは何とも定めぬ文明の思春期に必らずつきまとふ春愁のたぐひで、その幽雅なうれひが空虚なる「精神」への肉の反抗や、假裝的盲目的「信仰」への實證主義の謀反や、夢のやうな「幻想」への現實感の憤懣などが、卒然一團となつて、肉の解放、無信仰の告白、幻滅の悲哀を將來し、集團生活に對する個人の自覺、因習的自己に對する革命的自己の自覺を經驗すれば、誰といはず、凡ての人々が一樣にこの心境に一度びは到達しなければやまない時代の趨勢であつた。わが、有明の象徴詩は、少くともこの自覺の上に築かれたこと（其處に青年らしい英雄主義的態度のてらひがあるにもせよ）疑ひない事實である。

この頽唐詩の傾向は、他の人、泡鳴の場合に於ては、一つの人格が二個に正しく分裂してゐて、しかも自分ではそれを一つに體してゐると思考してゐたから、かれの「苦悶詩」にあらはれた官能の美も、幻滅の哀感も、無信仰の告白も、ぴつたりと人間性の板についた至妙の境致にあつて獨得の個性を發揮して居ない上に、その粗雜な性急な表現法が、甚しく技巧上の缺陷を作つてゐるので、かれの全心熱の表白はつひにかれの「苦悶詩」に於て完全の姿に於てはきかれずにしまつた。自ら、「肉感的デカダン思想を緻密な音律に彫刻して歌つてゐる」（「太陽」増刊文藝史、新體詩界）と評してゐる、

死はも　わが身　を　獄に　つなぎ
肉は　魂とも　燃えて　のぼる……

（闇の盃盤）

のごとき、單に外的音調の約束に束縛された中に理說の二句が堆積し蹈跲するに　ぎなかつたし　ともすれば生々欲の讃美に趨るその健康極まゝ頑健極まるデカダン「趣味」が　歌はんと

欲した心向の中には有明や林外と共通する當代一般の類唐詩風が確として蟠居してゐた。この言葉の酷使者が實際の作詩に大成しなかつた如く、林外は言葉の浪費者であつたから、時流に誘はれて「毒は金杯より」(當壚の妖姫が歌へる)に、

わが嫌ふひとは、理の子、智慧の子
あはれ、戀人よ「情」に生きよ。
妖とな思ひそ、魔とな思ひそ
ふかくぞあはれめ、こよひの「性」を。

とうたつても、實は初期浪曼詩的に、

よし、燭は暗くとも夜は短くも
君、なが〳〵しき戀がたりせよ。

の血の氣の少ないあくがれを談るがせひぜひにすぎず、鐵幹の「毒草」序に上田敏が近代頽唐詩風を列擧しても、鐵幹詩そのものには毒も魔醉もない、只の鑑賞植物の巧妙に刈り込んだ一流の技巧美がうかゞはれるだけで、もし夫れその外の作家となると啻に桂園一派の亞流歌學や俗俳の運坐修業や春濤門の和臭詩等に養はれた陳套な「優美」と「輕妙」と「巧麗」との固定感情因習趣味の盲目的な奴隷として時代主潮たる浪曼僻の趣向や趣味を喜ぶの末徒にすぎなかつた。

有明の業績は、それ故に、當時の主潮詩人の雄として一部に鑑賞せられるにとどまつた關係から、自分を中心とする詩の宗派が存在するわけでもなく、夥しい追從者が踵を接ぐわけでもなく、只一人卓れた詩情と技能との發揮者として獨存した個的性質のもので、象徴主義の提唱が詩界の本流となり、譯詩と紹介とが盛んに行はれてこの期間は詩壇一代の好尚が全くこゝに集中したとはいひ條、その詩人は極めて少く、その作品も極めて稀れであり、前にも述べた如く、少壯新進の青年詩人のあひだにその感化がかなり深く行はれてその方の模倣や追隨が行はれただけにとどまつた。從つて、彼は詩作の中止とともにその大きな翼のかげを卒然と詩林から收めてしまひ、その象徴詩風も、後、北原白秋、三木露風等にその影響を與へただけで、漸次に途絶へて行つてしまつた。

このとき世評は、有明の詩感の秀拔と詩技の確實とともに表現の朦朧、用語の晦澁を攻め、ひたすら素材の卑近化を說いた。が、既に云つた如く(一月號參照)晦澁は彼の本性の歸結であり長短所こゝに確として根ざすもの故、みだりに晦澁を棄てよといふは直ちに生命を絕てよといふに等しく、まして、詩風の卑近化を奬めるのは、隱逸の學術に街頭の振れ賣たれといふに勝つて、その立場、その賦才を顧みぬも甚しい無理解の妄說である。この一人の逸才がなほ年弱くして永く詩筆を絕つた主因

は個人の稟質とその愛育の法とを蔑ろにする當代評家も共一半を負はなければならない。有明自らは、有明集以後八年間の所作に對し、それが「わたくしの肉體の衰弱と心の動揺と懊悩とを示すもの」だと云つてゐるが、詩林を去つた他の一半の主因は彼自らが時代の變轉に作ふて精進するの苦に堪えられず、漸く歌口かすかになつてやがてぱたりとその低唱をとどめてしまつた自らの心内の傾向に基くもので畢竟この結果は詩人有明にとつて運命的であり、詩壇それ自らにとつてもまた宿命的であつた。

右の詩人的宿業にあつたとはいへ、有明一代の詩品は、新詩あつて此方、前になく後にも尠いひとつの偉業として殘るべきが値あつた所以は、言語藝術の技能の臨騎をよく把握して、在來文章道の、感受性に、教養に、稀れな稟質の賦質を示してゐる上、自ら刻苦して詩技の道に一刀三禮の藝的敬虔を爽は自ら精進をなしつづけたによるので、「草わかば」の昔より若くしてその表現力に俊邁の詩人に少ない特色を示して、それが當時新渡の新板本のない折柄若付芋錢の好意でロゼティを研究し、その詩形に著しいロゼティ風諧詩の妙味と、同じく畳句 refrain の巧用とが目について、しかも多くは成功に近かつた。「姫が曲」の

姫はこのとき黒欄の
きざはしひとつ降りなづみ

大君あふぎためらへば
日は香木の戸を刻む
(嗚呼うたかたや、
ためらへど、とどむれど。)

の終二句の畳句をロゼティが「シスタ・ヘレン」の

"Here high up in the balcony,
Sister Helen,
The moon flies face to face with me."
"Aye, look and say whatever you see,
Little Brother."
(O Mother, Mary Mother,
What sight to-night, between Hell and Heaven?)

の畳句の類に比較した評家もあつた通り「夏のは」や「宿命」などで

(妖のこれ影か夢)

とか、

かくもむなしき、石人の
眸子、またさし。

とかをくり返して倦怠を招いてゐたのが「序のしらべ」に

(見よ、空の道、

夕暮かけて雲すぎぬ。)

とか、

(雲と風とは
春を迎ふる夕あらび。)

の快響を殘してゐるのはその詩形苦心の一端で、譯詩の作品「人魚の海」や「姫が曲」等に試みた敍事記述の間の抒情的發聲の强調も他人の模すべからざる境致に達してゐた。かれの評家も見のがさなかつたが、有明の所謂「哀歌」は、ソネットの形態美になぞらへ八行の大聯と六行の小聯とが、

黃金の朝明こそはおもしろけれ、
さ霧に匂ひてさらば咲きぬべきか、――
(薔薇のおもへる)

のごとく

000(3) 0(1) }4、 0000(4) 000(3) }7、 0000(4) 00(2) }6

四、七、六、十七音の一行に於て第一の四音、第二の七音、第三の六音各交錯し、又、第一音と第二音、第二音と第三音と各交錯して參差千態の致を恣まにするモディフィケイションの美を含有してゐる。泣菫も亦かつて「暮笛集」に收めた「新著月刊」所載「花密藏難見」の小曲絕句十九篇、「ゆく春」中の「あゝ杜國」十篇に同じ試作を公けにしてゐる。が、總じて實際の結果は、天壇が理論とは事異りて、有効な音調諧和の美をなしてゐるものは多くないこと泣、有同一轍である。けだし、强喉の美なき日本語が、この約束に閉塞されて一種の形式美を發生せしめるには、詩人の內在律に含まれる詩感の强烈な熾烈な底力が行使する言靈の契機を捉つて必至のさまに自由自在の表現を完うしうするにあらざれば、到底小曲詩體の長氣息中に於ける音調美の發揮は望まれないからである。有明はこの調を讃美歌から採用したといつてゐる。詩情の横溢たま〳〵この形式の中で最大級の踏鞴をすると快心の作品が獲られたことは之れ亦泣有同軌であつた。

有明の一行は比較して長氣息のものほど彼の詩情にふさはしかつた。

噫逝れよと、嫺やげる君がほとりを、

の如く七五七音一行の事例は、ロゼティの譯詩オマアカイヤム譯詩の場合によくその成功した形を示してゐる。

有明が詩技次第に熟してつひに「末摘花」(「新思潮」創刊號)「凝夢」(「早稻田文學三十九年」)等になると極度に言葉を飾し、感情をつゝしみ、氣息の恣致を搾へ、文字の言葉に與へる影響を思つて一語一句一行織巧を極めた幽境の詩情を、抽

具象との結合せる象徴手法の表白力に托したから、晦澁はいよいよ晦澁に、朦朧はいよ〳〵朦朧に、つひに進退の度を失しる時が來たまで、有明詩の極致に自らを追つて行つた。

陰濕の「嘆」の窓をしも、かく
うち塞ぎ眞白にひたと塗り籠め
そが上に垂れぬる氈の紋織、——
朱碧まじらひ匂ふ眩ゆさ。……、

「凝夢」

といふ一聯を讀んで最初に感じる官能交錯の美は、たしかに最終に熟讀してうる思想の鬱悒性と異體同心である。

咽び嘆かふわが胸の曇り物憂き
紗の帳しなめきかかげ、かがやかに、
或日は映る君が面、媚の野にさく
阿芙蓉の萎え嬌めけるその匂ひ。
魂をも蕩らす私語に誘はれつつも、
われはまた君を擁きて泣くなめり、
極秘の愁、夢のわな、——君が腕に、
痛ましきわがただむきはとらはれぬ。
また或宵は君見えず、生絹の衣の
衣ずれの音のさやさやすずろかに
ただ傳ふのみ、わが心この時裂けつ、
茉莉花の夜の一室の香のかげに
まじれる君が微笑はわが身の痍を
もとめ來て沁みて薰りぬ、貫にしみらに。

この詩を誦んで一見何の感想をも想ひに泛びえぬ人でも、苦心して言語の布置のあひだ、揺曳のあひまに醱酵する新詩酒の香をかげば、浪曼詩人の套語とした情熱な夢も憧れもまた軀近體の慘苦も陰鬱も一様にかげを收めて只大いなる幽愁と思慕とのおほどかなうねりの間に、いひやうなき一様新様の含蓄美の燃え上るのを看取することを忘れないであらう。こゝに此詩の秘所がある。

四十一年三月「早稻田文學」批評欄所載相馬御風の「有明集を讀む」は注目すべき論斷であつた。曰く、「蒲原有明氏の詩を讀んで、いつも感服するのはそのアートである。……しかし情緒そのものを以て言葉を包む事は出來ない、情緒そのものを出す事が出來ない。……氏は到底全人格の同時に燃燒し得る人では

ない。我と詩と渾一して歌ひ得る人ではない。……氏はまだ遊戯詩の域を脱し得ないで居るのではないか。苦痛、悲哀そのものを歌はずに、苦痛や悲哀を樂しみながら歌つてゐるのではないか。……所謂「新體詩」を完成して、その極致を示したものは、有明氏である。……吾人が『有明集』を積んで感じた所は、有明氏が所謂新體詩の最後の勝利者である事と、更に全く新らしい詩の起るべき時期に至つたと云ふ事である。」

御風の評は「完成」の詩人有明を弔ふ新詩人の誄辭である。輓歌である。この評は正しいか。新時代の評家として「當代」の尖端に孑立した詩人御風がこの Addio は惜くも氣弱い正直なこの詩人から精進の力をうばつたに相違ない。君は過去の人だ。我らは新人だ。さよーなら！ が、御風の評は正しいのか。有明詩に一味の知の重味あることは多く人が云つた。が彼の全人格――その知生活もその羸弱らしい神經も鋭い感情も――打つて一丸となした全人格が圓滿に出た詩がありとすれば、それは少年少女對手の甘たるい小曲ではない、浪漫詩派の殉情調でもない、かれの人格が所有するかれの感情である、――痛々しいその神經纖維の白く露出したかれの感情世界である。これは在來の「新體詩」がよくものしえなかつた所、有明現はれて有明自らがよく之れを實現しようとした處、そして若干の作品に於て（茉莉花のごとく）實現しえた所である。御風の要求する感情は昔年らのセンティメンタルな歌口がひびき出るその感情にすぎない。有明には有明の感情が確として言語との融合一致を以て出現してゐた。それを御風は解さなかつたのである。解しても次代への存在を允さなかつたのである。次に、有明の境致が苦痛を樂みながら歌つてゐるとした御風の言葉は、たまく御風の筆の綾どりが過ぎたのであつて、有明にはそんな餘裕はない。むしろ苦痛をよく現はしかねていらくしたり、横に外れたり、いつのまにか轉じて他を歌つたりして自分で自分がままならぬ焦心に苦しんでゐたのだ。強ひて「遊戯的」といふならば、この逃避や焦燥やの態度をさしてこそいふべきであつて、詩に對して有明のとつた態度そのものに大した不純はない、從つて遊戯的と斷言する事は能きない。只、有明の詩に凡ての時代詩人と同じく苦悩への徹底がなかつた事は事實である。恐らくこれは民族的宿命であらう。これあるが故に明治詩史は[illegible]藝の史に比して數段の劣等を感ずるのである。が 新體詩の極致は、御風の言の如く、正しく有明が示してゐた。そして又御風の言の如く、次の時期は既に有明の主役たる舞臺ではなかつた。が、有明の此期に創成した詩感は確實に今も生きてゐる。これは當時の有明が一極致に立つても死んではゐなかつた證

擄である。現代の詩人の何人もが到底現はすことの出來ない獨得の美を有明は自分の詩にあらはしてゐる。これが立派なスタイルでなくて何んであるか。センティメンタルな評家が見當ちがひの注文は、かへつて人を殺し人を毒す。

有明の詩は、泡鳴の苦悶とその內容を異にして一種の苦悶の表白であつた。われと寸分も違はぬ苦悶の內容でないが故に有明の苦悶を輕しとし薄しとする泡鳴の語は寧ろ駄々兒の驕語に近かつた。有明詩の命脈は此期に絕たれ彼はマラルメの漾々たる生存樣式の如きものを思慕しつゝ多くの心境に佇み乍ら爾後の數年を「肉體の衰弱と心の動搖と懊惱と」に過し、その後の餘生にあつて依然たる「精神的孤獨」の中乍らかすかに「光明を信じよ」と宣した。が、それもつひに有明自らに加へる警策にすぎなかつた。

有明集の詩的發聲が代表する時代の叫びは、おぼろにして消なば消ぬがの殘香の性を呈し、又一見極めて個人的興味に尖してゐる觀があるが、之れ誠は當代の極めて進步したる文藝人の教養と藝術感と人生觀と苦惱と遁逃と所作と態度とを代表するもので、明治文明史そのものの特質が、恒に斯く早く進化したる少數人と容易に教化されない多數民衆との冷淡なる他人同士の如き雙在にあつたので、本質的に詩歌の要求を感じない、或ひは感じえない、多くの民衆――總理大臣や百姓や大學教授や仲仕や大多數の國民が恬として殖財に耽り秕政を恣まにし「整理」の知識を磨ぎ腕力を誇りとする實世界、現代の白日世界のその利益も聲譽も狹い一隅に、產あるもの產なきもの極少數の眞摯に「詩」に飢ゑ「藝術」に口渴く教化人が、誠に稚い草創日なほ淺い言語藝術の一つの種類をさま〴〵に撫育して世界藝術の水平線に到らしめんとする小さい努力をつづけて行つた事は、日露戰が一躍世界列强の一國とした軍事上の民族的努力に少しも劣らない文化價を持つてゐたのであるが、軍國民の立場により因習の久しきと時代の傾向とに相まつて政治家、軍人次いで資本家の事業を認める視力を開眼されても、人間性の立場にある文化價の認識を得なかつたのであるから寧ろ當然の事ではあつたのである。

頽唐の時風から生れ出て宿命的にこの紀末の少くとも四分の一世紀を代表した先人の中でマラルメが寂默の間に刻苦の生を終始した生存樣式をとつたに反し、ヱルレエヌは陶醉と痛苦との後を漂泊と幻滅に耽りフィスマンズは自然主義的人生觀から象徵主義的藝術觀に推移し、ワイルドは個性の詭術と藝術の耽美との末に悲慘な道義的自滅を招いて亡んだ。これらの人々の人間に殘してくれた藝術的遺產には「人間性」そのものの絕對標

眞を以て直ちに萬人に通ひ得い値がある。表面的、世間的なその人の日課表の時は、その時代の價値標準の指示にならないのである。

我民族が、たまたま此象徴詩感の移入をうけて、因て以て激發された民族藝術の世界史的價値はどうであつたらうか。一人の詩家、蒲原有明、一人の學匠、上田柳村、及び一人の談詩家、岩野泡鳴らの努力は、たまたま明治文化史の一頁に象徴藝術の一項を閃かしめたけれども、その運動、その作品、その影響を詳かに算へて見ると、明治人が何ら世界史への藝術的學問的政治的産業的貢獻の問を欲たしめるものを、産出しなかつた丁度そのごとくに、民族は紀元より今世紀に殘照を遺く此象徴主義藝術の領略に於てつひに劃期的價値あるものはいふ迄もなく何ら特別の民族的性質を發揮した一種の異彩をもて知られる風の作品すらも産出しなかつた。維新の「大業」は、民族史的に見て注目すべき一大事作たるには相違なかつたが、この民族的試煉を經ても、民族精神の陶冶丹錬は著しく不足であつた。この「危機」に臨ませられても、その意義、價値を感得するには餘りに鈍感で無敎育で小規模であつたため、その民族的受難が少しも文化史的に藝術史的に民性史的に生き得なかつた。

我らは民族史の事例に則り、反覆的にいくたびもの同じ「場合」を經驗して初めて大いなる結果に到達しえられることを知つてゐる。「維新」はなほ精神を新たにしてくり返され、象徴詩潮はたほ時期を改めて將來されるであらう。日本象徴詩の主潮は、かうして一まづ一經過した。タゴールとフランスとベルグソンとニイチェとを氣輕に受とつて氣輕に棄て去つた場合のやうに。が、たとへば、一知半解の實業家をしてタゴールを迎へさせ、日印協會幹事をして送り出させた場合とは違つて、象徴運動の精神意義はいま少し普遍的で深刻であつた。一人の代表詩人蒲原有明を、歐洲文學史の近代期に佇ましても、その作品は彼史に於ける第三流詩人のそれ以下には斷じて下らない藝術價にあるものである。泣菫の詩も亦之とひとしい位相にある。

象徴運動の結果は多くの白秋、夥しい露風らを生んだ。時代は必然に、季候の和順を心待ち耕地の肥沃をはかるを主とする群小の群立時代に入る。明星、文庫、早稻田詩社はじめ當時の青年詩人の業績を一瞥して見よう。

## 五　個人、結社及び詩業

正統詩系の傳統は、恒に、異端的なるものの血精注射によつて累代腐蝕の僻謬を純化にしたければならないが、本邦詩壇は正門を分つほどの規模にも年齡にも達せずしてこの年頃に到つ

たため、正系傍流の差はなかつたけれど、大體に於て、新興詩壇の大勢は、浪曼的稟性に立つ詩潮の海が、浪曼的なるシエリング哲學や紀季的なるニイチエ哲學や實證主義や神秘主義や個人主義や集合主義やの朝來を受けて、晩近派の新體詩象徴運動の席捲となり、自然主義的藝術觀の感化さへうけ入れようとして、象徴派は自然主義の反動か發展かの論議さへ行はれ、泡鳴のごとく自然主義の主潮に立つて同時に象徴派の新意義を認めんとする立場をとつたものもあつた。その中で只一つ注目するに足る現象は、青年詩人の間に、泣菫の趣味三昧を追隨するもの、有明の跡みたる道を選ぶもの、文庫派に赴くもの、「白百合」の純情をしたふもの、鐵幹、花外、月郊に趨るもの等さまゞであつたが、自然主義の感化の一部をうけて、詩材を日常實生活にとつて「空疎な幻想」を斥け、象徴手法の狂をさけて直叙體による一派であつた。

森鷗外は、日露役陣中の偶作を「うた日記」に收錄したが、多く陣中雜咏の類で、詩感の含蓄も詩技の餘情もない拙詩であつたが、歸來、腰辨當の名で「趣味」に「都鳥」をかかげ、「藝文」「明星」等に同種の新詩情を示した。「笛」(「藝苑」三九年五月)、

寒き雨電車を籠めつ、
ゆきかひに系きしろへば
逝る青き火二つ。
人いきれ蒸るがらすを
まじろかでしばしまもりぬ。
窓つらの鮫小紋の
二つ三つ寄りては流る。
おもひではそこはかとなく
浮び來るやがてぞ消ゆる。
鐸は鳴る神田須田町。

戀愛と妖麗の夢とのみを詩の上に求めてゐた人に、この詩は異常であつた。實生活に即するといへば、戰爭や政治やの大さつぱな悲憤を得意とした人に、この日常生活の詩は駭異であつた。むしろ、最初は輕蔑を以て迎へられたのも無理はない。その詩の特色は素材の感得と取捨配列と表現との精神に於て昔風の詳叙體をとらず、風景や人物や靜物などの中心フオーカスを端的に掴る印象派風であつた。

朝あけ大路　しめやかに
立ち並ぶ店　まだ醒めず。
けはひひろびろ

搏風搏壁を　いろどるや
塗繪廣告　繪看板
露にぞはゆる
刹那ちりぼふ　ひと群の
素足わらうづ　破帽子
新聞くばり。

最初は冷靜な鷗外がにやにやして皮肉にふざけてゐる樣な氣がしたが、やがて、この些かな習作が時代に甚深な意味のあることを知つた。此等の作は後「沙羅の木」(大正四年)に收錄された。

これより早く、新年の「明星」には青年畫家石井柏亭の「水村雜咏」が載り、上田敏はそれを白耳義新詩の聲調ありと評した。

大かぶらたわわに積みて
水門をくぐるはし舟
北齋が好みの小笠
白衣見ぞわづらふ
巡禮の足のほとりに

唄く出の蝶もかれかれ……

この傾向は、一切り、青年作家の間に瀰漫したけれども、やがて大なる收穫もなしに次なる詩風に轉位した。すなはち、こゝで新らしいのは見方と取材であるが、用語は昔ながらの而もかなり格式張つたゞ雅語の物馴れた使用であるから、こゝまで來て新意を出すには只一歩用語の足を口語詩まで踏み出せばよいのである。新詩社は新らしいもののあらゆる場合の味方であるが、平野萬里、北原白秋、吉井勇、太田正雄(木下杢太郎)、長田秀雄その外が競つて、有明詩に據り、又「自然派詩」に參して、一人の者が兩方への習作を同時に發表するありさまで、青年の常として胸もきまらずスタイルもない試作時代であるからとり上げて記錄するに足る作品を殘したものは少ない。與謝野鐵幹は雅號を廢して新詩風に昔の放爲な俤を見せようとした。

かんてら煙るむしあつき
佐世保の街のせり賣の
夜店のなかに、一段と
聲はり上ぐる瀬戸物屋。
「早來い、早來い、品物は
みんな廉か。」といそがしく

左のふときてのひらを
握りこぶしに打叩く。……

この詩風に奔り、又、今迄の詩風に赴くものになほ茅野蕭々、栗川茂、大井蒼梧、秋庭俊彦等がこの結社にあつたが、凡て過渡詩壇のつねとして、巧みに摸倣してゐるにとどまり嶄然と群をぬきんずるものは少かつた。「藝苑」によつた辻村鑑、小林愛雄、小牧暮潮ら又「明星」とその軌を一にした。只、北原白秋太田正雄の二人が、やがて成育しさうな特異の感情と詩技とを僅かにあらはしてゐた。詩材は、こゝに展開をとげて、機關車を咏じ、砲兵工廠をうたつた泣、有二家に作なひ、吉井勇が試驗場を、茅野蕭々が夜の工場を、長田秀雄が川蒸汽を取材し、詩材の方面の開拓は行はれて、當時の「早稲田文學」の注目すべき讀物の一であつた彙報欄は、この傾向を以て、「空閑的風俗を擺脱」して、「ワーヅワース式自然派的傾向を示せるもの」と云ひ、標象詩の「自然派的傾向と相渾合」したもので、もともと象徴詩は、「その發芽に於いて已に近代自然主義と相抱合すべき素質」があつたからだと云つた。が、結果はこの記者の推測を裏切つてその後一向にこの風の詩情に於ける佳作が出でず、口語詩形を採用するに及んで初めてこの推測の抱負が實現しはじめた。詩に口語を採用することは既に時期の問題であつたのだ。

この期に迫つて、世間と新詩との交渉はなほ殆どなかつた。片上天弦の言をかりると、「一般の社會公衆が、殆ど嘲笑の眼を以つて之れを觀」、「同情ある少數の人々と雖も、新體詩の現狀に就ては意外に迂遠」であつたのである。(四〇年四月「早稲田文學」、「文藝時評」)。しかも一方作家側にあつて泣、有二家が超然と世評を白眼視してゐるに反し、新詩社は切りに世間に神經質な熟視の眼を向け、泡鳴に、もう「新體」の二字はとつてもよからうと澄ましてゐた。(四〇年三月帝國文學會春期大會演說「自然主義的表象詩論」)。そして、文壇では「讀賣」の豹子頭が「あやめ草」を酷評し、泡鳴の駁論が出てしばらく技巧論が興つた。詩壇本部にあつては、以上の注目すべき傾向の外に青年作家の詩集の發刊がたえなかつた。水野葉舟は文庫詩人の一人であつた。その「あららぎ」(三十九年)は

流れてつきぬ秋の野の
小川の水の響かな

の調子で可憐の單音のまゝ、まだスタイルを成さずして終つた。相當に批判をうけたものに「文庫」の澤村胡夷の「湖畔の悲歌」(四〇年)、「藝苑」の小林愛雄の「管弦」(同年)があつた。前者は明瞭な確實な措辭であつてわりあひに新意に乏しく、後者

は詩感があやふやではあるが中に自ら多少の新感情があつた。

水に浸れる白雲は
醒めざる夢を打ち乘せて
御空の限
　遠くゆく。
若女の夢、鬼菱の夢、
九月秋の沼をいで
うつらと星に
　上りけむ。……
　　胡夷――「鬼菱の夢」

愛雄は歌劇に譯詩に音樂に多く試みて確實な成果をえたものはひとつもなかつた。詩も「藝苑」終刊近くに

なげかひ　さびしの
　胸をいだく

風の斷句があつた「春の扉」?の一篇がソングとして唯一の逸作であつた。外に吉野臥城は「小百合集」後の新作を「野茨集」(三十五年)に、清水橋村は「野人」に黄道十二宮等三十餘篇を收めた。橋村の幽情は一味の風趣に於て出色の名があつた。なほ彼は正富汪洋と共に「夏雁」(三十八年)をいだし單獨で更に「筑波紫」(四十一年)を公けにしたままで詩作を絶やした。極めて徐々として浸潤する新詩情が社會に投影して、早く反映のあつたものは「民謠」研究であつた。

民謠の個人的新作は泣菫が早く試み、「二十五絃」、「白羊宮」にその作例があり、別に、「子守唄」の一卷もあつたが、他にはこの方面の力作として見るべきもの少なく、白羊らが流行小説「己が罪」、「不如歸」、「魔風戀風」等に取材して卑近な物語唄をものして俗惡な興味に訴へたり、橋村が巣林子の「冥途の飛脚」を長詩とした(三十九年)類のものが卑俗の詩感を對象とした詩作として民謠と混同して論ぜられた位であるが、整理研究の方面は次第にひらけて、三十九年二月「帝國文學」に志田素琴の「日本民謠概論」出で四ケ月にわたつてつひに完結しなかつたが史的考究の最初の斧を入れたものとして頗る注目された。爾來、上田敏は「音樂新報」で民謠の詞と曲との蒐集の必要をとき(三十九年八月)。同年末には漸く詩壇にその影響あらはれて來た傾向あるを「早稻田文學」も報じてをり、十一月の「白百合」は「第一民謠號」を發刊し、翌年三月林外の「日本民謠全集」いで(十一月に續篇いづ)、九月には臥城の「民謠詩」が「太陽」に掲げられた外、[illegible]は「帝國文學」にその[illegible]添附の要をとき、柳村も亦民謠の意義を明らかにし、種類

別せよと論じ、國語調査會はいちはやく地方俗歌の類の蒐集を開始した。

この民謠研究は、次第に詩作壇にもその精神が浸入して「朝花夜花」といふ月刊詩集（野口雨情著四〇年）が二三冊迄出たけれど、單に俗語を使用するの試作に終つてしまつた。

作詩の賑盛につれて必然外國文學研究が、文壇の主要目となつた。その多くは手引草の抄譯か外國雜誌の紹介にすぎなかつたことはいふ迄もないが、テニスン、キャンプルに低迷した異國情調は大陸かけて擴がつた。八杉貞利は「詩宗プウシュキン」（三十九年）に初めて北露西亞國民詩人を傳へ、畔柳芥舟は「文談花談」（四十年）にアリストーテレスが詩學を祖述し、有馬祐政がトルストヰの「藝術論」（三十九年）で初めて杜翁の象徴詩論雜の大體を紹介した。片山孤村は「洛陽の酒徒」ヱルレエヌを談り、金子筑水はニコラウス・レナウを説き、折竹蓼峰は佛詩概觀の類の外にルコント・ド・リイルを傳へ、中村長助が「テニソンの思想」（三八年）もあらはれ、角田浩々はフインランド文學を、惠美光山はホーフマンスタールを説き、ヨネ・ノグチは三十八年に「英米の十三年」でイエエツその他を紹介し、四〇年に上田敏は「文藝講話」に泰西文學の高雅體を傳へた。

此等の紹介と並んで譯詩はこの期に於ける一大事業であつた。中にも上田敏の「海潮音」は原詩を移すの法大膽で時としては餘りに日本成語の臭味ぶかすぎる個所が尠からずあり、又、一樣に上田敏調になつてしばしば甲乙差異甚しかるべき詩人らの作が同一人の作であるかと疑はれる程の筆の滑りすぎも見られるけれども、在來譯詩といへば臘を嚙むやうな味もそつけもない、何處がよいのか判らない、恐らくは譯者自身も受賣知識に引張られてよいかげんに直譯倒譯不適譯誤譯を試みて恥じないのではなからうかと考へられるもののみが大部分を示した低級極まる譯詩壇の地位を殆ど作詩壇を摩して一種の創作詩かと思はしめる程の効果をあげた點に於て新詩史上この一卷の譯業の不滅の香は永劫に消えないものがある。

「海潮音」一卷には本篇五十七篇中、詩人が二十九人、伊太利亞三人、英國四人、獨逸七人、プロバンス一人、佛蘭西に十四人、多く象徴詩と高踏派とに屬する事「序」の如くである。譯者自ら高踏派に同情があると稱してゐるだけ、此派の「壯麗體」をうつして七五七五二十四音調を一行とした壯重な詩形は典雅壯嚴よくパルナツシヤン詩派が彫心鏤骨の面影をつたへ、ド・リイルが「古代詩集」中の「眞晝」のごときはその後「英國評論」を飾つた英譯にも勝り、「大饑饉」の第一聯

夢幻かなる滄溟、海の彎曲の擁護に
夜天の星の影見えて、小島の群と輝きぬ
紫摩黄金の良夜は寂寞としてまた幽に
奇しき眠の満ちわたる、海と空との原の上。……

ホセ・マリヤ・デ・エレディヤが「珊瑚礁」の

波の底にも照る日影、神寂びにたる曙の
照しの光、亜比西尼亜、珊瑚の森にほの紅く
ぬれにぞぬれし深海の谷隈の奥に透入れば
輝きにほふ蟲のから、命にみつる珠の華。……

に垣間見られる自由自在な移植の後のかつて本邦詩になかつた語彙ゆたかに、空想を刺戟することおびただしき、示唆ある措辭巧みな布置は、當時詩心ある者への驚異であり、一般讀者によりは専門詩人への教科書であつた。丁度、森鷗外の諸譯が低級な「小説讀者」によりも専門文士への食餌であつたやうに。

ボドレエル譯は、譯者と一致してゐない本質にあるせひか、讀みものとして面白いが、この「悲哀い煉金道士」の痛烈な歌口をば殆んど示してゐない。すなはち、「薄暮の曲」にゆきかふ古日本の成語の香がエフエクテイブに異常な美を構成してゐる點で別の意味から創作として見ても棄てがたい新味がある。ヹルレエヌの「譬喩」は「叡智集」の詩人が加特力的信仰の心緒から見て、わざと陳套た教會内部の用語を縷めて尋常の新體詩の形となした處がかへつて詩人内心の眞意をあらはして、一種いいやうのない含蓄美を創造してゐる。一見何んでもないやうな努力で、誠は尊い精進の結晶である。

主は讃むべき哉、無明の闇や悩多き
今の世にありて、われを信徒となし給ひぬ。
願はくは吾に與へよ、力と沈勇とを。
いつまでも永く狗子のやうに從ひてむ。

生贄の羊、その母のあと、從ひつゝ、
何の苦もなくて、牧草を食み、身に生ひたる
羊毛のほかに、その刻來ぬれば、命をだに
惜まずして、主に奉る如くわれもなさむ。

また魚とならば、御子の頭字象りもし、
驢馬ともなりては、主を乗せまつりし昔思ひ
はた、わが肉より穢ひ給ひし家を見いづ。

げに末つ世の反抗表裏の日にありては

人間よりも、畜生の身ぞ信深くて
心素直にも忍辱の道守るならむ。

この沈重の言辭をなした柳村は、ヱルハーレンが「途上所現」の一を飜して、重厚のなかに沈痛と蕭颯の氣にとむ「畏怖」の佳品を示した。これも當時にあつて創作と同量の詩價と史價とを有するものとして新らしき國語の美を示した。

北に面へるわが畏怖の原の上に、
牧羊の翁、神樂月、角を吹く。
物憂き羊小舍のかどに、すぐだちて、
災殃のごと、死の羊群を誘ふ。

きし方の悔をもて築きたる此小舍は
かぎりもなき、わが憂愁の邦に在りて、
ゆく水のながれ薄荷莢蒾におほはれ、
いざよひの波も重きか蜘手に濺む。

肩に赤十字ある罌粟の小羊よ、
色もの凄き羊群も長棹の鞭に、
撻れて歸へる、たづたづし、罪のねりあし。
疾風に歌ふ牧羊の翁、神樂月よ、
今、わが頭掠めし稻妻の光に
この夕おどろおどろしきわが命かな。

この沈痛が更に短唱のかたちとなつて、その方面で獨自の表現を示した例は、ギルレエヌが「秋の歌」の譯詩「落葉」の各句に於ける用語の巧妙な表現美である。

秋の日の
ギオロンの
ためいきの
身にしみて
したぶるに
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふさぎ
色かへて
涙ぐむ

過ぎし日の
おもいでや。

げにわれは
うらぶれて
こゝかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな

この譯詩と並べ稱されるブラウニングが「ピパの歌」の譯は譯詩の模範ともいはれた名譯の評たかきものであるから原詩を對照させて見よう。

時は春、
日は朝、
朝は七時
片岡に露みちて
揚雲雀なのりいで
蝸牛枝に這ひ
神、そらに知ろしめす。
すべて世は事もなし。

The year's at the spring,
And day's at the morn;
Morning's at seven;
The hill-side's dew-pearl'd;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn;
God's in His heaven—
All's right with the world.

—Song from "Pippa Passes"

徒らに原詩に拘泥せず、原詩の意を汲み、その調を考へ、簡勁にして暗示に富む八句としたのは原詩に理解あり本邦詩風に明るい、音韻に心交ふるものでなければたやすくは出來がたい。かれのブラウニング譯はなほ「岩陰に」のごときでもその簡勁と壯重とをうつしてゐる點で「春の朝」にゆづらないものがある。しかも一般は判り易い「春の朝」の作調を說いて、このブラウニングの大道の妙味を忘れてゐる。

夕まぐれ、森の小路の四辻に
夕まぐれ、風のもなかの逍遙に
ではじまり、悲壯にして餘情ぶかい
あな、あはれ、きのふゆゑ、夕暮悲し、

あな、あはれ、あすゆゑに、夕暮若し、
あな、あはれ、身のゆゑに、夕暮重し、

におはるレニエは卷中の白眉として口傳へられ、マラルメが「嗟嘆」の含蓄、ロゼテイが「生命の家」の雛句をかく迄にこなした腕まへ、及び、ヱルハアレンが「沙門」集の「法の夕」の

夕日の國は野も山も、その「平安」や「寂寥」の
鈍色の毛布もて掩へる如く、物寂びぬ
萬物凡て整ふり、折りめ正しく、ぬめらかに、
物の象も筋めよく、ビザンチン繪の式の如。……

などと共に此册子の特色を發揮してゐる部分である。

が、「海潮音」には缺點も亦多いのである。若し、此視點のみに立つて批判をすれば、この集の史價の半分をも亡し去る恐れがあるかも知れぬ。それも一應は無理でない。既に當時（三十九年一月）「帝國文學」記者も指摘した通り、第一に「壯んな粹放な作」をも「和げ」すぎ、「品好く」しすぎてゐる。第二に、壯重を企て丶却て單歌調となつた所もある。これらは「海潮音」の根本の缺點であつた。が、和げることは、記者もいふやうに古語の多い所以であるが、此書の成功した誘因は、主として日本語化した、創作化した點にあるので、たとへば、ブッセの「山のあなた」

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ。
噫われひとと尋めゆきて
涙さしぐみ、かへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸」住むと人のいふ。

の殉情調の基礎感情となつてゐる言葉の搖曳の方式。アレンの「わすれなぐさ」の流麗音、クロアサンが「秋」の前驅

たれもつらくはあたらぬを
なぜに心の悲しめる

の柔かいあたりのよい感情の淡紅の吐息、これらはひとしく日本的情調を基本として西洋的なる風姿を移したがゆゑの清新な美しさ、ゆかしさ、おもしろさでなくて何であらうか。「ようとうたらり」や「しよんがいな」の和臭は勿論「惡の華」の作者や、「冬ものがたり」の作者のこゝろと遠いひびきを音たてるものではあるけれど、こゝでは又一種別樣の美を就けてゐる。その別種の美が、原作と關係の遠いものであることはいふ迄もない。が、殆ど手のつけやうのない樣な雛句に際してそれを切拔ける唯一の法は全く邦語風の効果に倚る外に道はない。ボドレ

エルの場合、沙翁の場合が、丁度、それであると信じられる。その他、佛典語、古語、廢語の自由な驅使は或は善果となり惡因ともなつてゐるが、一としておしなべての和げることとの惡い證據にはならぬ。軍歌調は、時として、たしかに惡弊として存在する。正格調に詩旨を盛ることとの不正當な結果を招いた場合に必ず之れを見る。

上田敏は此期に「ちやるめら」、「汽車に乘りて」（「あやめ草」）「踏繪」（「豐旗雲」）諸篇を公けにし、後年、「牧羊神」の長篇を「讀賣」で公にしてゐる。記念すべき此譯集が彼になかつたならば此等に因て相當卓れた詩人の一人として殘されたに違ひはないが餘りに輝く譯業の名の前に反動的に光を消されてしまつた。が、上田敏の作詩は劃期的のものでない。追隨者の光芒を引くものでもない。たしかな詩技が、穩靜な詩情の昂騰を得て生れた尋常作品にすぎないのである。

見よ、かゝる殉教の士を
天草は農人、
五島には鯨とる子も
ガリレヤ海の
海人の習ひと
『悲の日』を守りつぐ。……

（「踏繪」の一節。「悲の日」はのち「悲節」と惜しくも改められた。典據に訂正すべき異議があつたのかも知れぬ。）

の如きが作詞の雄なるものであつた。

與謝野寛は「淮湖音」の使命を、奈良朝の歌に對する「文選」や平安朝の詩文に對する「白氏文集」に比してゐるが、後世の影響、日を加へるに從つて益す輪廓を大にする史價の點から見て敢て倫を失した比喩ではない。上田敏は居常自ら「譯詩は創作だ」といつてゐたといふ。この言葉は彼に於て初めて單たる辭句以上の生きた言葉となる。學匠と生れて、極めて婉雅の趣味に生き、鑑賞の鋭感を有し、明確にして調の高い技巧の詩文に巧みであつた彼は、たゞ大なる詩人としての稟賦を持たないが故に、異邦先蹤の作品のかたちによつていとせめて自家の詩情を驗した。果して、それは成功的に結果せられた。この海潮のひびきは、徳川の趣味も王朝の風雅もラファエル前派の尙美感も「希臘的なる風光」もすべて收めたあらゆる大雅の薔薇の徑に花咲き亂れた輓近詩體の色さまざまな花の殿堂の內陣にその一聲をとどろかせてゐる、世界性の甘美の旋律である。「チパンゴに在りと傳ふる鑛山の紫磨黃金」の快響である。高踏派の莊相に象徵體の含蓄をふくむ、浪曼派味の、古典的儀容を整ふ新らしい日本の辭である。正しくこの期にのみ出るべかりし

代の特産物だ。次の時代へのよき贈物である。

譯詩は、かくして、幾分の詩情と相當の致發とある青年の野心の舞臺の一となつた。柳村の跡を追つて折竹蓼峰は、高踏、象徴諸派の作を夥しく移植した。それは三十九年春からであつたが續いて内藤水稚が同じ業に勉めた。蓼峰はランボウの「母音」や、ボドレエルの「萬物照應」に手を染め、水稚はマラルメやメーテルリンクに趨り、又二人共譯のサマンが黄金華裕集の譯詩をも試みた。柳村を撰してその語彙と文章力とで及ばないこと遠かつたが、時代にふさはしい種類の譯業として注目せられ、且つ、少數の詩美に光つたものもあつた。その他の譯者は、小原無絃が「花の詩」、「海の詩」、「ユーゴーの詩」、「ロセッチの詩」、「西吟新譯」、「シエレーの詩」、「バーンスの詩」等を試みたが稀れな例外の他は、概して無味乾燥に終り、木村鷹太郎は、「天魔の怨」に「カイン」を譯し、「合歡草」にシエリの逸作を移し、その他「海賊」、「マゼッパ」、「パリシナ」等バイロン詩を試みたがこれも亦詩感のない人の粗笨な直解であつた。花外も「バイロン詩集」を試み、西村醉夢の「西詩の蕾」、秋元芦風のシルレルが「鐘の歌」、「ウオルッヲルスの詩」(浦瀬白雨)「ゲーテの詩」(橋本青雨)「キーツの詩」(田山花袋)、「レッシングの詩」(岡島狂花)、「英米百家詩選」(宮森桃潭、小林潜龍)「英米名家詩抄第一集三人の歌女」(若月保治)、「英詩の栞」(常口文治)「乙女のみさを」(高須梅溪。ロングフエロウ、エヴンジエリン散文譯。)その他が出た。その中で、片上天弦は初め詩作にしたがひ、のち、譯詩を試みて「テニソンの詩」(三十八年)を出したが、「帝國文學」に天壇は紛々たる譯詩壇中、「句法の無難にして措辭の圓熟せる點に於て夐かに一頭地を抜く」といひその「老成」と「沈着」との行文と語彙の豐富とを賞美し、「言Lotus Eaters 篇中「簡潔にして明細」なる四行が十一行に延びて「註解風の冗漫に墮すことなしとは謂ひ難からん」と難じた。また、三十九年八月の「早稲田文學」にスヰンバーンが「江頭賦」四十聯の哀悼歌を譯したが、「藝苑」の上田柳村又その「鏡影録」で「余は先づスヰンバアンの壯麗調を譯出したる氏の勇氣に感服し、更に措辭の粗笨ならずして、自から文才の躍如たるを喜びぬ。語法の上、幾分か議すべき所無きにあらざれど、近來の譯詩中著るしき一長篇なり。余は始めて片上氏の作を「心の華」に見、再び昨年「テニソン選詩」に親ひ、努力精進の跡あるを多と」する云々とて「日々」の評家泊人氏と共に賞讃の辭を捧げむと欲すと云つた。當時、新紙に「同情と知識」とを有するものとして柳村はこの泊人をあげてゐるが、この泊人と並んで、「讀賣」には鵲秋生がゐて同じく詩壇時評の縦

をとつてをり、「白百合」には小杉乃帆流、「明星」に鐵幹、「帝國文學」に天坡「早稻田文學」に御風がゐた。四十年文化移入の回顧も亦この頃より漸く行はれて、「明治文學史」（岩城準太郎著。三十九年）、「太陽」增刊明治史第七編「文藝史」（四二年）次いで出で、岩野泡鳴が「新體詩史」（「新思潮」四〇年）また現はれた。

アンソロヂーの簇出また著しく急激に增加して、吉野臥城の「明治詩集」（四十一年）に藤村、晩翠、泣菫、有明、醉茗、花外、白星、泡鳴、林外、月郊、柳村、孤蝶、薫、紅葉、鷗外、臥城の諸家を收めて而も鐵幹、清白の詩を逸したる如き缺陷あり、凡そ公平な立場で個人の特徴を尖鋭の批評眼の下に認めて代表作を網羅する風のものは一つもなかつたが、その數は遉がに夥しく「花がたみ」（馬場孤蝶編。三十八年）、「殘雪集」（大月隆編。三八年）、「青海波」（醉茗選。同年）、「たか潮」（竹田雅弘同年）、「五彩雲」（石橋曉夢編。同年）、（はつしほ」最好會編。同年）「心の泉」（保星子編。三九年）「さわらび」（幸田露伴選。大島寶水編。同年」、「靑蘭集」（入澤涼月編。同年）、「模範新體詩集」（鹿島櫻巷編。同年）、「柱の卷」（醉茗選。同年）。右の中で、「さわらび」は「讀賣」で、募集した寄作の「四行詩」の結集で、その作例は、

・向日葵

重田春子

高き理想に　戀も得ずして、
人妻振りの　黄金の色に
匂ひ出でゝは　東や西や
日のあと慕ふ　向日葵の姫

の類であつた。作法は、さきに出た「新體詩歌作法」（山田美妙三五年）が三十八年に再版した外に、「作文寶典」（大和田建樹。同年）、「新體詩獨習」（鹿島櫻巷。同年）、「新體詩早學」（大和田建樹。三九年）、「新體詩入門」（松山白羊。四〇年）、「新體詩作法自在」（川脇世外。同年）、「新體詩の作法」（岩野泡鳴。同年）、「新體詩作法」（醉茗。同年）等が出て、泡鳴の著がたゞ一つ存在性ある、その獨斷詩論の俗解であつた。此等の詞華集、作法類の亂發は、極めて低級な讀者の方面から次第に新詩の興味が浸入して來た事實を示し、新聞雜誌の懸賞は營業政策にたえうる一般性ある事を證せんとし、地方に於ける新詩の傳播も亦次第に普通されて行つた。當時地方の文學は如何に發達しつゝあつたか。郷土の風色はいかに藝術化されてゐたであらうか。

輸入の文明の特色は、傳統の破毀と新規範の建設との間に介在して獨自の使命を果す所にあるが、無意義なる破毀はたやすく行はれても、有意義な建設は容易に望まれない。多くは、傳

なる、郷土的なる民族的なる善きものの保存よりも輕卒な新趣味に通俗的興味が傾くところから、中央集權的なることとの餘りに甚だしい本邦文學にあつては、それらの善きものの保存は、自ら地方守舊的容氣にあるものの使命として身を挺して之にあたるべきで、この頃、片山孤村が、「郷土藝術論」(三九年)、「郷土詩人グスターフ・フレンセン」(四〇年)、「郷土詩人の宗教觀」(四〇年)を「帝國文學」その他に掲げて民族藝術方面の重大への注目を喚起せんとしたことは、極めて適當な眞摯な文業であつたに係はらず、輕游な文壇はこれに一顧をも與へずして過し、しまつたのは誠に遺憾であつた。孤村は、ハインリヒ・ゾーンライの「田園」の解説に初めて種族的、民族的意義を高調するグスターフ・フレンセンの「イエルン、ウール」や「ヒルリゲンライ」の小説の結構を詳究したのである。地方文藝のディレツタントが身柄は田園林野のあひだにあつても、魂は遙かに都門に彷徨して、都會思慕文學の中途半端な態度を永久に脫し切らぬため、地方にあつて傳來の生業や生活必至の事情から地方的營業に從事してしかも藝術魂の天賦の卓れたものを所有してゐるものも、一時は才華喚發して地方文藝雜誌の雄をとなへても、目まぐろしく展開する中央文壇の急潮に伴なふことが出來ず、また一旦は懸賞文士となつて帝都の新紙雜誌の類にその筆才をあらはしても、魂の發展のため問題の解決のため才の愛育のための刺戟的、教化的環境がないためつひにいまにか中心主潮の新意義から落伍して、昔をのみ物談る感な守舊家となつて踞るものが多いのである。餘りに中央集權的なるは、過渡文化の特徴でしばらくは如何ともしがたいが、地方には地方の地方色があつてこれを基本にして、新創造を建設することは、難事の一ではあるが不可能ではない。小說でいへば、筆者は都門に近く在つて中央文士との交誼があつたせいもあるがよく地方色を出して永久の値あるものを作つた長塚節の「土」がある。明治三十年代以來、地方文士の中に卓れて允された逸材も多かつたがいつのまにか消滅してしまつて、中央文壇の波間に遊泳すれば、無知、無才、無德、殆ど低能にひとしい無慚漢でも、「青年詩人」とか「プロレタリヤ文士」とかの名で呼ばれうるのは時代の弊ではあるが、地方青年の自らの獨自の地位の優越的自覺が足らないからでもある。

三十年代に大阪に「よしあし草」があり、大和に「古都の華」あり特に前々は醉茗、溝口彩霞(白羊)之にたづさはつて特色ある小雜誌であり、名古屋には東京の「新聲」と同胞誌の稱があつた「文壇」あり、周防に「新文學」、常陸に「青年詞壇」、千葉に「青年文壇」「新文壇」、若狹に「明治文園」があり、「鶯鶯文

學」は地方誌中の出色であり、秋田に「文星」あつて清白、露葉もこゝに筆をとつた。大阪に「關西文學」神戸に「新潮」、名古屋に「詩々夢詞」「文泉」、（京都）、「曉鐘」（岡山）、「秋水」（名古屋）、「初霞」（越前）、「夕月」（丸龜）あり「夕月」には田岡嶺雲も片上天弦も書いたし、「初霞」は「白鳩」と改題して詩專門雜誌として中央詩壇にもその波動を與へた。その外、「玄聲」（備後）、「活文壇」「信務文壇」、「筑紫琴」、「新文藝」、「天聲」、あり「白虹」は岡山に、「小天地」は盛岡に起り、特に後者は石川啄木の主宰で細越夏村も又之に加はつてゐた。高濱長江兄弟の「三日潮」、「曉星」、「曙光」、「紫虹」、「ホノホ」「森殿」、「山鳩」、「野の花」、「高原文學」、「かたばみ」も前後して出た地方雜誌中の目星いものである。そして、地方文學（假令んばその史價は、幼稚と蕪雜との反復にすぎなかつたとはいへ）のための一篇の變遷史「地方文藝史」（小木曾旭晃。四三年、岐阜市。）あることをも記錄してをかねばならぬ。

## 六　口語詩體の誕生

島村抱月が雜誌「詩人」（四〇年）で詩歌を生活に觸れしめよと云つた「近代詩」の一文は、談話ではあるが、自ら、自然主義派の現實觀、藝術觀に近接してきた詩壇の主潮を、最後に力を籠めて再説し一喝し新國詩に侵せしめた想いある位地と眞價値とがあつたが、すでに、夢幻と妖麗と怪奇と神秘的なるものとの世界から、日常生活の新意義の現實と平明と常凡と實證的なるものとの世界への推移は、森鷗外の新詩風や岩野泡鳴のいはゆる表象詩の自然主義なるものや、新詩社の一派や文庫の諸詩人などによつて「自然派風」の名の下に試みられてゐたが、その最終に爆破すべき暗礁は、用語の問題にあつた。

何が故に用語のことは逡巡として難關の一となつてゐたのであるか。小說界に於ては早く二葉亭、美妙らによつて試みられ特に二葉亭によつて當代にして驚異といふべき模範的なる文例を示され、爾來、將來の文體として次第に勢力を加へ來り、紅葉採用し、露伴試作し、自然主義の運動が一代の文運を先づ司るやうになつて來た當時にあつては文語的のものの方が既に異樣に感ぜられて來るやうになつたのであるが、ひとり、詩壇にあつては、歌壇、俳壇とひとしく、短詩型に人間生活の全部を盛る韻律的約束のややこしい、複雜な、細密な關係から、たやすく永年にわたつて使用しなれて來た文語雅語の詩語としての自在性と妙味とを捨てがての狀態にあつたのは當然である。言語藝術家として言語の些細な部面にまでも良心的であり、神經質であり、凝り性であり、頑強であればあるだけ二者を取捨す

るの岐路に立つてその方向にまよふのは至當である。若しこの方面にいさゝかも未練と愛着とがないものがあるとすれば、それは詩感に盲目な鈍感の徒か、或ひは又、新詩形に特別の適合一致を本質的に自覺してゐる詩家であらう。

詩に於ける口語特に俗語の使用は、在來、俗謠の方面、小守唄の類の方面のみで行はれて來た。七五調の正格調の類のなかに強ひて俗語を使用するのである。矢崎嵯峨之家、山田美妙の使用、薄田泣菫の試み、岩野泡鳴の試み野口雨情の使用がそれである。

泣菫が作は地方語の個性をかりて俗謠の特色をあらはさうとした普遍の事例である。

こちが賣る花何ござる、
鹿子(かご)白百合、あやめ草
ふたば葵や、山うつぎ、
花に四種(よいろ)の名がござる。
　所がらとて、
　かづく花箕(はなみ)や、
　里の娘子うちつれて、
　まゐろ、やれ、都へ。……

「白玉姫」――「花賣女」

美妙の作も「青年唱歌集」等に於て多くこの範圍を出なかつた。

泡鳴が明治二十七年「女學雜誌」に連載して同年の末に上梓した單行本悲劇「魂迷月中刄」は、最初、十音調の口語詩體であつて、のち、全く書き改めて散文の體裁にしてしまつた。

はじめ　無くば、わが身も
また　をはりが　無いのに
思想　以つて　うまれ來たり、
思想　以つて　このわづらひ。
人は　限り　脫せぬか、
限り　脫し　能はぬか？
智慧　得れば　得るほど、
智慧の　苦み　あり！
からだ　あれば　あるほど
からだの　苦しみ　あり。
絕ち切れぬ　この　煩惱！
治しがたき　は　この　苦痛！

の例で、強ひて格調に收める無理から、舌足らずの滑稽がさきにたつて口語の本來の効果は全然認められない。

泣菫の「夏の日」（「白玉姫」）は

　靡き葉のそよのさやぎに、
　睡げさのしたたり重に
　母が手の揺籃ごこちな、
　やをら日はまどろみそめた。
　………………
　夢心地、それもしばしで、
　娘子はうるほひ足ひ、
　草刈ろと木の間に隠れ
　夏の日は又もめざめた。

のごとく、泡鳴の舌足らずや、「花賣女」の陳套はないが、そのかはり

　夢心地、それもしばしで

とか、又は、

　やをら日はまどろみそめた

とかで僅かに語尾を口語の形にしてあるだけで、やはり、五七の正格調のなかで窮屈に手足をかがめてゐる。この詩には、全然、俗謡、民謡の俗語美の表白の外にたつて、口語そのものの効果を、五七調のなかで試みた習作として泡鳴の七五調作とともに口語詩史の上で注目しなければならぬ史價がある。

更にひとつ、片山孤村は「神經質の文學」の中で、リヒヤルト・デーメルの詩集「されど戀こそ」の一詩「死せる響」を純粋の口語譯にしてゐる。

　鐘が鳴るゴーン、ゴーン、何處だらう、やあ大變私は仆れるよ、
　あの沈默した。灰色の着物をきた坊主たちは皆ンな何處へ行んだらう。
　この格子戸の周りに幽靈が飛んで歩くのが見える。
　私の處から唯だ二步前の處に黑い馬車がゴロゴロと行く
　四方には十字架が煌めいて、炬火が血を流す樣に燃える。
　誰か私の腕を引張る――アヽ軟かな流れだな。
　私の痛い痺れた足がひとりでに歩いて居る
　アヽ上手に案内して吳れるなア。自分は何の街も知らないのに。
　目標も何にも無い。全然夢のやうに流れて行くのだ。

それから「當信體」Lyrischer Dichtungen の見本として
アルノー・ホルツの
[illegible] 譯したのを

Ich?　　私が？

Dir?　　お前を？

Längst!　疾くによ？

Ich tat's, noch eh' ich' wusste …… 私の氣の付かぬときから宥してるの。…………………………………………

等を口語譯した。

明治四十一年は詩壇の展開期であつた。有明が一代の詩業「有明集」は、若き詩人らに、無殘や散々の惡評を蒙つた。與謝野寛は、「明星」で若き詩人の用語の誤謬を數ケ月にわたつて指摘した。新局面のめぐりくることを渴望して、青年らは、泣菫や有明やの永遠性ある完成品の集大成に對して何らの注目を拂はないのみか、その臭味と固僻とを焦心の廓大鏡下に瞥見して、新時代への出陣の血祭りとしようとした。詮索僻と罵詈の性とのためと、自然の成行で「明星」が大家の淵叢舊詩派の大本山となつた關係とから鐵幹は、これら年少詩人の國語の語義に無知にして、不確かな表現法を恬然と試みて悟らないのを慨して一、一、立證し叱嗟して是正と懲艾とにつとめた。漸く古きものと新らしきものとは、値あるものと値なきものとの對立の如くに對峙せんとするに到つた。自然主義の論客は、この新詩風の誕生に藝術觀の見地から當然親ら助産婦の役目をつとめようと努力した。

明治四十一年三月、相馬御風は「早稻田文學」の社論「詩界の根本的革新」に於て、新體詩は創立から誤つてゐた。何故に七五五七の舊體詩型に新體詩の名を蒙らしめたのか。「現今の新體詩は、いかたる辯護を以てするとも、その根本が形式的であると云ふ一事は、どうしても爭ふ事が出來ない。」「自分は詩界に於ける自然主義を主張すると共に、こゝに具體的な要求の一二を提供したい。一は詩の用語の問題である。これは抱月氏が曾て主張されたと殆ど同じ意味に於て、詩の用語は口語たるべしと云ふのである。」「第二の要求は、詩調である。」「用語だけが口語に變つても、メロディに外迫的な制約の存する限りは」純な情緒が表白されない。」「第三は行と聯との制約破壞である。」「行の長さと、聯の數や、一聯中に收める行數の制約は」よろしくない。

この發想は直截に詩壇の内部の革新的要求と一致したが詩形の本質論からいふと著しく幼稚且不備なので、「帝國文學」の羽峰その他は批評と駁論とを公けにして在來定形詩律の存在性を明らかにしようとした。

同年六月の「早稻田文學」に櫻井天壇は「獨逸の抒情詩に於

ける印象的自然主義」を掲げて、リリエンクロオン譯詩に口語に採用してゐる。

銀行家パラッツォ。主人は旅行に行つた。
よし。召使は外に出た。殘るは小猫一匹。
「今晩。お出で。八時によ。淋しいわ。」
我は往つた。主人の室へ。戀の花園。
ソフアの上。嵐の如く、又やさしく、又恥も無く。
キスはキスを呼ぶ。「アー放して。」「放せつて。」柔音と硬音。
朝。別離。夜の客は出でゆく。
歸り路は長い。オーはでなソテよ。

またモンベルトの

大都會の夜の珈琲店(カッフエー)
紅い座褥(しとね)に大勢の賣女が居た。……

ではじまる露骨な描寫の詩、及び次の短詩

母上あなたは御存じで無いですか。
私のライフは虚僞であつて夢の方が眞實です。
私はあの時の炎に過ぎません。
私はあなたの唇の上のキスに過ぎません。

却說、論詩壇から此等の提唱と作例とを示されたに對して詩年日本の詩人らは如何に刺戟されたか。

この期に新意義に於ける口語を少くとも最初に雜誌に公表した者は御風文よりも半年餘り先んじ、實行者當年二十歳の少年詩人川路柳虹であつた。これは、四十年八月の作で九月號の「詩人」にかゝげた「塵塚」で、

塵溜のうちにはこもる
いろ〳〵の芥の臭み、

の如き文語的力勢を名詞止で受ける文章語脈があつたが、また、

慘しい「運命」はただ悲しく
いく日いく夜もこゝにきて手辛く襲ふ。
塵溜の重い悲みを訴へて
蚊は群つてまた喚く。

の如き純粹な口語詩的型式もあつた。その翌月號には「バク鎖」を掲げた、

戸棚の隅のバタの鎖——
半ば居りつくされて
臭み蒸された油の香
はげしく香ふ桝の中

の如き堅苦しい文語脈詩である。その翌四十一年一月號「詩人」

の「曇り日」は

曇つた日だ、
雨の降りさうな日だ、
靑の蟲がきち〱鳴いて、
何處かで女の歌がきこへる――
悲しい聲で――ながく曳く聲で。……

これらに因て口語詩の作例が最初に示されたに對し、當時の詩評家服部嘉香は「詩壇の主觀的權威」(同年十一月)の一文で「形式にて印象詩、内容にて神秘詩と呼ばるゝ新詩歌は口語詩が今後の發展の順序」だ云云と云つたその論理は怪しくその論旨も支離滅裂の個所がないではないが、とにかくこの方面への聲援の第一聲であつた。

外は抱月の提唱や天弦の根本疑、御風の積極的主張にはげまされ、内は柳虹の第一作を先驅として、四十一年五月に發表された御風の「痩犬」、三木露風の「暗い扉」は、泡鳴のホイットマン譯詩や自作の散文詩と共に新局面への强踏を置くものとなつた。

暗い扉が閉ぢられてゐる
その前で盲目どもがわいわい喚ぐ。
まつくらな室だ。
どんどんと一人が叩く。
するとまた二人が叩く。
今度は皆んな寄つてどんどんと
割れるほど叩きだす。

「おかしな扉だ。」
「まつ暗な扉だ。」
「開けてくれ！」
と喚ぐ。…………

「暗い扉」

右へ曲ると右へ。
左へ折れると左へ。
急げば急ぎやがる。
ああ、厭な奴だ。氣味の惡い奴だ。
一體どこまでついて來るんだ。
何を目的について來るんだ。
畜生行け。行かぬか。

**俺は何にも持つて居ない。**
**行け。**行かぬか。シッ！………
「痩犬」

さて此詩風への世評は何と見たかといふと、當時御風と論議したのは泡鳴であるが、泡鳴は自身は、刹那的燃焼に基いて「相當な一定した詩律」でその内部を表はすが、それは「斷續的に發表」してもよし、「ふわり〳〵と縫つて行く混律」を使つてもよい。そこで、自分は十分に「内容律の範圍に入つてゐる」のだから、口語詩問題の如きは大した問題とも考へない。ダンテが「神曲」で果して口語そのままで歌つたかどうか判らないが英詩では俗謡以外は皆口語ではない、「である」式の補綴詞は、「簡結を要する點から云つても」用ひ難い。（「早稻田文學の詩論」）といひ、有明は口語詩を在來の所謂散文詩と同一視して在來の詩は矢張り在來の詩でゆくと云つた。（「詩壇の近事」（？）「新潮」）。（四一年十月「早稻田文學」彙報欄參照。）、「帝國文學」の折竹蓼峰は、ＲＴＯの匿名で、さきには「疑はれたる詩歌」の一文で天弦の設問に答へ、（茅野蕭々もた「明星」で天弦に答へた）、次ぎに、「解放せられたる詩歌」で御風の革新詩論を評し、理想として現代語を用ゐるべきを説き、口語使用を俗謡に限るが如き僻論（最初の服部嘉香）を斥け、同時に形式が主觀の自然なる要求としての形式とであるべしといふ論を緩和して「詩歌の形式はリズムの調和を破らざる限りに於て最も主觀と一致する形式」たれといひ、御風の「痩犬」を評して、某が「詩歌を侮辱せんが爲めに作られた」と云つた評言を引いて、形式論の曲解からこの非詩を作つたのだと斷じ、「言文一致詩」の一文に於て現代語を俗雜也とする説の無根據をいひ、外國語、古語は他人の語であるから、よしんば俗雜にしても其俗雜を刈り込まれた巧麗の言葉として、自己の語として以て作詩する要があると論じ、「アカネ」記者が此論に對して古語使用を唱へしに對し、古詩絶對論は不可であるが、古語を復活して現代の色あひを具へ、又は新造語の補ひをなすも可といひ、今の「印象詩」が

葉が落ちる………
風――
――マンドリンのやうな縺れ………
………音波………夢
――「文庫」所載。

の如く餘りに視覺本位すぎる弊をあげた。蓼峰の説は現代語詩論に、あいまい論を試みた外は大體よく口語詩の立場を了解してゐる説で、當時の口語詩の習作に一として見るに足るものが

たかつた事はまのあたりの事實である。それ故、柳虹の「塵溜」は「詩のやうなもの」だと罵られ、

夕に近い曇り日。
空からは降る雨の粒

の「雨」は△印をき、より等に變更したのみの「狡猾且つ無意義である」と評され、三木露風、相馬御風共にその技能の拙劣を指示された。露風は當時多作して而も技巧の不洗練のために屢批難を得てゐた。

その他の論議に「口語詩の出發點」（嘉香）、「口語詩を嗤ふ」（生田長江）等があり、是非の論は四十二年を迎へて愈よ盛んになつたが、それに伴れ、一般の注目も亦多少喚起され、「ハガキ文學」は口語詩欄を設置し、生方敏郎は綠雨をまねて御風調露風調見本を作つて口語詩を揶揄した。詩人でない日本人の作つたパロデイーの二番目はこれである。彼は「僕は口語詩を見ると落ぶれた侍の妻が貧乏な夫が馬を買ふ爲めに鏡臺の引出から出したとづて置きの小判のやうな氣がしてならぬ。」（「醉中醉語」。四十一年）と云つた。

眞黑、ガアツ――海、
軌り音、煤烟、煤烟、頭
唐紅ゐのリボン、
黄色い車掌の顔。
チリチリチリン、新聞屋の鈴。
白、黒、赤、青、黄……。

露風調――「品川ステーション」

口語詩の努力は泡鳴、柳虹、露風、嘉香、夕咲、東明、介春らによつて試みられた。泡鳴は最初横槍を入れたが後では習作者の一人となり、「しイちやんに」（四一年）の駄作を書いた。

驅れ　驅れ　汽車、
僕の　むくろを　乗せて　驅れ
……………
がッたん、がッたん、がッたん！
また　がッたん、がッたん、がッたん！
……………
肉靈合致の　孤獨に、
ああ、しイちやんの　ふところに！

かつては「悲繆悲歌」に「閑の横木」の味はひを見せる迄に文語詩の上達を見せた彼は、新らしく口語詩の一年生に入つて此拙劣を見た　何處迄も入門から拙い所を上つてゆく彼である。不思議に（高所には決して達せぬが）一種の持味には達する彼である。他の口語詩人は凡て尙試練期の拙詩時代にあり、文語

を使用する青年詩人は、概して、口語詩人よりも眞正の意義の技巧に於ても遙かに上に位してはゐたが同じく倫習作時代を脱しなかつた。時代は、象徴詩の後期に入る。

# 第二部　享樂詩體

## 明治四十一二年——明治四十五年大正初期

### 一　推移の概要

明治文學史は自然主義運動を以て、初めて近代文學思潮の意識的な參加に到達した。それ迄は、藝術の原史時代(プロトヒストリツクエイヂ)に恒とする悠々たる憧憬と絶望と狐疑と飽滿との紛糾せる騷鳴のあはひから、僅かにクラシカルな秩序への精進や、浪漫的なる自我の覺醒の意識や、戯作者與屈のノンシヤランスや、國士文學の融通のきかない形式主義が、詩にも句にも文にも歌にも、半ば現はれ半ば沒し、自覺は因習に毀たれ、思索は權威に碍げられ、さながらに思想の「内地雜居」であつたのが、浪曼思潮の横溢から個人主義の新提唱となり、硯友社が大なる朽木のごとく仆れて新興自然主義の謳歌が天下の青年の同感と中年の反感と老年の無感との間に、生眞面目に、献身的に、しかし乍ら文盲目的に、衝動的に、少い藝術の殉教者的氣概が多くの亞流的追隨と夥しき卑俗の輕口とを伴つて新[illegible]詩人に忙しい時、云ふ一藝術が生活の餘戯から離れ、藝術家が文化史價的安心を獲た。明治四十一年「文藝は男子一生の事業とするに足るか」といふ質問を雜誌「新潮」が文學者の間に提出したことがあつたが、この驚異なる問ひを見ても時代の文學感はさとられよう。自然主義の人生觀は頽廢的傾向を馴致したが、現實に直面する苦惱が先であつて、進んで自己を以て人生を領略し之を受用せんとする積極様式に進むにはまだ幾分の思想の「間」があつた。自然主義のもたらした最大効果は、藤村、花袋、白鳥、獨歩の藝術を生んだことでない。(あの程度の藝術ならこれからでも出來ないとは云はれぬ。)無信仰に背景を與へ、耽溺に申わけを添へ、實生活の詳寫に意義を發見し、結構の不自然を識つたことでもない。藝術に新現實觀の背景を發見し、その現實に立脚するこの學に文化史的意味を見出した點にある。「新文學」が來たとは少くとも無垢の青年なら切實にこれを感じた。感じない者は立場や成行や傾向やから反抗と反感と反對の態度感情をとつたものに限られた。自然主義の失敗は主張の形式に捕はれて作品の自由性を失した點であり、自然主義の罪過は、浪曼的立場に於ける作品を、(自家主張に急なる餘り、)本然の賦性に基くものすらも過酷に扱はんとした僻にある。鳴外、漱石、鏡花その他の場

合がそれである。四二年五月文藝革新會の講演會があつたが、之には此主潮への反動思想で、建設的意義が少くて盲動的守舊と個人的反感とが根據になつてゐた。自然の生長の結果と偶然の動機とで夏目漱石が文壇に出て普遍的立場に立つて次第に純小說に向つた。四一年「虞美人草」が出て、漱石との俳諧的因緣で漱石の文學的根據に分けまへされた虛子が「鷄頭」を出し、次第に文壇一方の勢力となつた。「報知」、「時事」の新紙が卑俗な立場から「春情文學」と罵つて自然主義を攻擊してゐる最中であつた。この年八月、佛蘭西から歸朝した永井荷風の短篇集「あめりか物語」が刊行された。舊文士の型から新詩人の型に移らんとする過渡期の好望を有してゐた。之を眞先に推稱したのは自然派の若き論客御風であつた。年の十月には藤村の「壁」が出、翌年二月、荷風の深川讚美小說が、三月に反抗の文學「監獄署の裏」が、その翌月には「フランス物語」が禁止せられ、九月には「歡樂」の享樂文學が、年の暮には逃避の文學「冷笑」が、翌四三年正月には上田敏の享樂的小說「渦卷」が、二月には「早稻田文學」荷風に推讚の辭を呈したに對し、漱石の據つた「朝日」文藝欄で阿部次郎は「自ら知らざる自然主義者」の非難論をさし向け、その夏には自然派から「遊戲」的態度を罵られてゐた鷗外譯「ル・パルサッス・アンビュラン」の諷諫文を公にし、翌月、抱月は「蔑むべき文壇の二傾向」(「新潮」)遊戲的傾向を排し・孤村、悠々は「朝日」に小感情をむき出した自然主義攻擊文をかゝげ、九月には久しかつた自然主義論の論爭の繼續が中澤臨川の「自然主義汎論」の一文で總收を與へられた觀があつた。

さて、永井荷風の藝術は文壇局面の新展開の直接誘因として新感情の自由な香氣を、自ら主張に固化した文壇灰白の舞臺にそゝぎかけた。「低徊」するに止まつた寫生文小說から進步した俳諧派の人生玩賞は、この荷風文や柳村文や鷗外文によつて力勢を與へられ、自然派の懊苦に行きつまつた「死か生か」の思想的デイレンマを一回轉させて、積極的に享樂主義の方向に向はしめた。たゞ、荷風その人のみはその感情個性の特質に基き早く逍遙して人生藝術の鑑賞三昧に入つたが、之に刺戟された詩壇は、象徵主義の耽美的傾向と一致して、頹唐の窮地を退き新しく放爲に受用享樂の態度に豹變した。自然なる推移である。すなはち、「明星」仆れてその後身なる「スバル」(四二年一月創刊)が出て之を主導した。青年の詩情は殆ど全てこゝに集中した。昔の人はかげを收めた。姿をあらはしても當時青年の目には入らなかつた。三年前の「大家」は二昔前の陳人のやうに將へられた。少しく前に白星が「近世詩社」を起したが何の

波動も生じえなかつた。(四一年五月)。自然主義の田園研究に對し新らしい興味は新らしく都會生活に耽樂せんとした。九月、白星、林外、花外、臥城、露葉、醉茗らが「都會詩社」を結んで「詩歌は人生なり、人生の主粹は都會に在り」と云つて「志士的熱誠」を表明せんとしたが既にその成員らの本質が之を裏切つて何の果ももたらさなかつた。さきに結ばれた早稻田詩社は御風、介春、露風、雨情、東明の結合であつたが集團的意義は少なかつた。介春の詩情は一種の成熟を示さんとして崩れてしまつた。「獄中哀歌」(大正三年)が殘つた。東明は享樂詩の殘香を追つてかへつて何の個性もなかつた。「夜の舞踏」(四十四年)が殘つた。雨情の俗謠は一種の因習美ながらの新興趣をあらはす間もなく消失し、御風は論議に奔り露風ひとりその詩風を追つた。その結社の後身「自由詩社」が建設されて四二年五月月刊詩集「自然と印象」を發刊したが、翌年二月東明の「酒場」によつて禁止せられそのまゝ發展が停止された。メンバーは介春、夕咲、東明、朽葉らであつた。

昇曙夢はロシヤ詩歌の反譯につとめ、その多くは見るに足るものがなかつたが、新奇の情のみで之を見られた。即ち「都會詩人バリモント」を初めとし、「メレジユコーフスキーの詩」(四四年)、「ギツピウス女史の詩」、「ソログープの詩」之についだ。

高村砕雨(光太郎)が嘲弄して「スバル」派の享樂詩人に新手を加へた。白秋、杢太郎、秀雄の「屋上庭園」の人工美は、「スバル」趣味を極美に移したもので、白秋の「雜草園」に、かれの官能主義の極致を見た詩壇は、又更に敏によつてトリスタン・コルビエルが「蟾蜍」の新聲に愕され、(四三年一月「スバル」)、鹽釜天飈が「ゲーテの詩研究」、天壇が「ホーフマンスタール論」天弦が「イエツ、シモンズ等の研究に教へられ、ボードレエル、ワイルド、デーメル、ヱルレエヌの紹介相續き、白秋、露風、杢太郎、奨村、啄木、瀟々、柳虹、東明、介春、夕咲、秀雄、愛雄、鑑等の作詩家のストルウム・ウント・ドラングが營まれたが同時に古きものの凋落は、四三年の秋、山田美妙、大和田建樹、一色醒川の死にあらはれ、泡鳴が「詩壇に別るるの辭」(「劇と詩」三月號)にあらはれ古き花外の新らしき享樂化「東京印象記」の慘ましき失敗にあらはたが、一方「きしのあかしや」(杢太郎)が瀟洒なる「港の歌」の短唱いで、光太郎が苦痛なる享樂歌あらはれ、またかいなでの詩人の及ばぬ鑑賞と創作魂とのこもつた永井荷風が「井戸のほとり」のたぐひの譯詩「三田文學」にあらはれ(「珊瑚集」所收)耽美主義傾向は、詩文壇を貫通する著しい事實であつたこと、久しく文壇を遠のいて譯匿れた戸川秋骨も(「早稻田文學」)之を認めた位であつたが、

治四十有五年の最後の半歳は、引きつづいてこの享樂派、耽美主義、雜誌でいへば、「朱欒」、「スバル」「三田文學」、學窓でいへば慶應義塾文科、人でいへば杢太郎、光太郎、白秋の活動期で「銀座の雨」に都會美を謳ひ、「キャベツ畑の雨」に田園の新情緒を感じたもの、「五月の頌歌」をことほぎ、「稽古事」の味をためすもの、「新綠の毒素」を發見し、「よか樓のお梅さん」を低唱するものこれであつた。されば、白秋が「松の葉」以來の名吟と嘆賞した「よるよるは」、「よふけには」の小唄、竹枝の作者杢太郎が「千九百十年は我々の最も得意の時代であつた。パンの會は毎週開かれた。我々は Rodin の銅像の首の脣に寄せた皺の粘さが何う云ふ情を濃くしてゐるかが分るほどになつた。また亞剌比亞物語や、近松、三馬などに出て來る青年の心に同情を寄するほどの苦勞も覺えた頃である。」といひ、「月かげは窓のがらすの一つの皺をさへきらきらと銀色に光らせた。故もなく湧き出でたる今宵の悲哀は、過ぎし日の、雜草の花に似る薄なさけをも、いとどいとしきものに思はせた」と忍び、「お釋迦さまの弟子たちなら、また孔子様の信者たちとしても、かういふ根もない情動の泉に浸ることを、飛んだ邪見として輕じもするだらう。それを反省もしないで、何か香料か、旨い味のやうに、ひたすらに弄ぶ人をば卑しみもするだらう。予とても亦それを知つてゐる。だが佳い土耳古の葉の紙卷を飲んだあとの人さし指に殘るやさしい臭を懷しむことを知る人もあつて欲しい。歇斯的里亞(ひすてりあ)の素質をもつて、欝陶しい青年期を送つた經驗のある人でなければ、世の中のこんな亞爾可兒劑の眞味を解することが出來ぬ。」(詩集「食後の唄」序)と嘆じたこの明治文化の小さい紀念は、この半歳を、詩人としてよりも以上に歌人として天分を延ばした石川啄木が二十七歳の死を受けとり、與謝野寛が佛蘭西譯詩をも受とり、若き發村が「夜の葉」のかすかな詠嘆と昔年らの花外が散文詩集「哀花熱花」とをも受とり散文の詩人荷風が「風邪こゝち」での創作の一轉化を眺めつゝ二度の戰勝のやゝ遠き記憶と一度の「大逆事件」の近き記憶とを呼びかへしつゝ、明治帝の崩御とともに浪曼的なる國家信仰者乃木希典の殉死を見てこの半世紀の事多く雜しげく、破毀夥しく建設また尠くもなかつたこの啓蒙時代「明治」を葬つた。

この末明の特徴は、何等中心となる巨匠(ヴァーチュオーソ)が詩壇になくて、青年詩人の騷鳴でつらぬかれた一事で、之は在來の大家がその生命と光とを失なひ、あらはれ出でた新興味が青年のみの感觸をひく種類のものであつたからで、これを新作の分類から見ると、「スバル」、「朱欒」「屋上庭園」、「三田文學」に據つた一派に

定形律を重んじ、主として文語を用ゐたが、「早稲田文學」、「劇と詩」、「創作」等によつた一派は自由詩型に弃つて、主として口語を使用した。前者は、正統派として、三十五六年代よりの浪漫運動から泣菫、有明をつらぬく浪曼的古典詩、浪曼的象徴詩の系統をひいて、象徴主義の頽唐傾向から耽美的、享樂的傾向に赴き、後者は、定形律詩の陳套を感じてその破毀に基く口語詩體の使用に始まり、自由詩形とよばるゝ無定形詩律體の創造及び散文詩の創作に專心し、その趣味、主張、嗜向を異にして相對峙した。

卽ち、古きものの順當なる發達の方面は之を享樂詩派が受持ち新らしきものの自由な展開と古きものの廢毀とは之れを自由詩派が受持つた。前者に名手が多く、後者に末流が多かつたのは勢ひの然らしめる處青少年の徒の詩に關心なき者が雷動して此派に入つたために外ならぬ。自由詩派の歷史は大正今日に及んで尙つきない。

## 二　象徴末期

有明の象徴主義が知識的だといふ批難はしばしば出たが、詩風が變遷しても象徴そのものに對する創作興味は些かも減ぜず御風の口語試作「痩犬」も自然主義的表象詩と泡鳴が稱した境致をねらつて失敗した作品であつた。象徴主義は漠然として入つて漠然として去つたが、この詩法がいかなる形に於てか、當時の詩歌に影響を及ぼしてゐるその程度、その範圍は廣くして深いものがあつた。これを前期純浪曼時代にくらべて見ると、素材の扱ひ方に於ても、物象への突入り方に於ても、內面の意義を外部的印象であらはさうとする一般的努力の點に於ても、あらゆる點に於て象徴手法又は象徴主義の精神の浸潤のない所はない。強いてその局外者を求めれば十八世紀的なる點に於て單純なるに於て晩翠と時代を前後して好一對をなす兒玉花外だけであつたらう。明治四十一年十一月「明星」終卷號は九年間詩的精進の路を一朝にして退き去つた最後の場面を飾つて種々の意味で興味がふかかつた。

與謝野寬はよく時世に追隨する奇才であつたので、その努力は全集團的意義により多く加へられて自己詩田の開拓はしばしばないがしろにせられ勝ちではあつたけれど、泣菫、有明と並行して歌ひすてた詩歌には注目すべき逸作が尠なくなかつた。が、その才は詩よりも歌にあらはれ、思想よりも技巧に卓れてゐた。明治短歌史に彼の名を亡すことは出來ないが、新詩の發展史上にあつては、個人としてよりも寧ろ後に集團結社をひかへた公人としてより正當に見らるべきである。

かれは、「檞の葉」（四三年）と「鴉と雨」（大四年）とによつて

此期の創作を代表してゐるが、卓れた文才の輕快な跳梁が表現の naïveté に及ぼした惡感化は、優れたその世才が思想の獨立性に及ぼした惡影響と共に彼の作を上滑りとし小規模とし、一たび風潮に乘じてたてばその浪曼的の持つて生れた才能を縱横に發揮して目ざましい活躍をするを恒とするが、一たび時代の落伍者と意識すれば、隱遁狐疑の態度と虎視眈々の本性との中間にあつて、云ひやうのない淋しい詩風に豹變する。右の二種に於て、「桐の葉」はその過渡期を示し、「鴉と雨」は後の場合をあらはす。新詩風が寫生詩から端を發すれば、彼はいちはやくその方の習作を公けにしたけれど口語詩運動には容易に動かなかつた。終巻號所載の「おどろがもと」の短唱七詩の内

　覆面をして來給ひぬ。
　黑きころもは夜の如し。
　青ざめはてし鬼の面。
　正氣の沙汰か、戯れか。
　まことと戀することなさんか。

といひ、

　黑き毛の小犬となりて、
　淸盛の法衣となりて、
　HASHISCHの痲藥となりて
　奈破翁一世となりて
　BATAVIA の脚氣となりて。

といひ

　VERLAINE 青ざめ覗く…………

といひ

　黑きとびらの前に立ち
　譫言めけるつぶやきは、
　戀の未練か、詩の厭きか、
　滓を見出でし酒ゆゑか。
　寒き擂の前觸か。

と云つたが、その自嘲のひびきは「桐の葉」集中

　身ごもりぬ機屋のお才…………

の類と共通して彼獨自の短唱嘲笑體であり、「まことと戀することなさんか」といひ其 Hashisch や Verlaine を挿入することははやく出た頽唐興味と晩く出んとする享樂詩風とへの嘲笑的な參加であつたが、社中の白秋は其時既に此種の詩風を正面から盛んに培養し、早くも「顔の印象」のごとき作品を公けにしてゐたのだ。

　閑が、すうッと大きな口を開いた。
　呑まれまいと硝子障子が慄へてる。
　硝子の外で、ちらと、

青白い、若い女の骸骨が笑つて消えた。…………

——「或日のきまぐれ」

といひ、

蛙が田で啼く。
「裸か、裸か、裸か」と啼く。、
啼く、啼きやがる。
「裸か、裸か、裸か…………」
「裸さ」と若い肺病患者は起き直り、「ああ裸だよ」と深い
氣息を彼は吐く。……

——「蛙」

といふ風の作は彼の拙い口語詩作の一であつて、僅かにして中止したのは此新衣の肌なれぬせいと、彼の詩感が老衰期に入つたためで、前田林外も「印象斷片」を試作して、

碧大……幾十本の煙突
機械の髯……
ゴツ、ゴツ、ゴツ……ゴツ、ゴツ、ゴツ……
震動——揺曳——橙黄色の光線
黒——煤烟
白——蒸氣…………

(小石川橋)

の視覺本位詩を企て、同月に發表された柳虹の

白——
岸と波とのしづかさ。
——忘却——夢——
苦悶の影——
白——

……「暴風のあとの海岸」

と等しい作風に出でんとしたのは共に新流風に忙がんとする慮のあまり自家感情の特性に基本をする心掛を忘れたもの。これより宣も林外も、泣菫も有明も泡鳴も月郊も白星も醉茗も次第に詩風の下り坂に赴いた。宣が咏嘆的短唱に僅かに行詰を求めたのは實に最終の窮地であつた。白星の「我が見たる我」は彼の缺陷が愈よ露出して無思慮な矢鱈に太い線の洪笑的詩論に趨り、醉茗の「震動」は素樸た筆致は價値を存するが、その詩感は冷たく固形せんとしてゐるにすぎず、泣菫の「死の勝利」ば有明と共に二號一段に組んでめざましかつたが、

悪の花……地獄の焔……妖女の乳……あゝモルヒネに
醉ひごこちゆれ、夜の寢。女はうめく、

淫なる肉は青びれ饐えばみぬ。——
たゆげに煽つ燭屑の香るる嘆き。

跪きつつ女は悶ゆ。……しらわらひ
われこそ。……仄に銀色の蟲の音きこゆ、……
血のにじみ、……痙攣る痛び。……玻璃壜の
覆へりぬ、、……ああ女、死身の白さ。
吾勝てり。しびるる胸は憎悪に、
はた愛みに動悸うつ。……ああ息ぐるし、
女よ……今は放たむ、悶なき
かなたへ。……地の底にしもほしいままなれ。

人の世は鉛色のみ……なべてみな
蔑みはてぬ……蟲の音は……
……女は死にぬ……いざひとり
逝かまし、闇きかなたは。ああ生の日も
死にの日も男子はひとり。

其措辭は依然たる古典的婉雅の態を失はずして、而も歌はんとしたこゝろは女人の死を頽廢の背景に置いて「黒の花」、「地

獄の焔」とあたまから被せてもそれが内容のない死灰のやうな空音になつてそれてしまふ。全然、相反する二つのものを一にした、形態を慣習的に呼ぶ心と、新興味を意識的に植ゑんとした心とが離れ〻〻になつた結果として失敗した。彼は同年同誌三月號に「苔求詣」を出してゐるがこれも同樣の失敗であり「自然派風」、「頽廢情趣」とその新たに向はんと欲した道は悉く彼の本質と乖離してしまひ、彼自らとても、現狀を打破して新生命の岩頭に彳む要求がもともと左程に強くはなく寧ろ現住の趣味三昧に安居する心向の方がつよい所からそのまゝ彼の高踏幽雅の創作生涯は永久にわたつて閉ぢられた。「落葉」(四十一年)「泣菫小品」(四十二年)の二卷にやゝ趣味を衒ふ厭味はあるが遊於藝ばんとする風雅の一境をその詩に於けると別の妙味で發揮した散文詩といはんよりは詩的な散文を公けにしてその愛讀者の興趣を新たにしたが、それは新時代への鮮らしい出發ではなくして、過去への殘り惜しい回顧であつた。

有明は、こゝに「雨」、「白き雲」の二篇を公けにし、ともに平明に赴いた點でのみ好評であつた。この平明は評家の要求に應じたものと見てよいが果して彼を新回轉に導きえたであらうか。恐らく彼は自ら作つて自ら苦笑したに違ひない。その措辭には新詩派の輕快なしかし印象の極めて薄い臭味さへ加はつて

ゐる。(「雨」にこの傾向は著しい。)

　　白き雲

色褪する柳の並樹
蒼白き日にうつり、枝垂れて
齢若き女子は(派手やかに
歩みゆく)こともなき
その面もち。

路には輕き砂ほこり、
淡けなる風は吹く。

愁ひある胸のごと色も鈍める
壕の水、曇れる鏡の面に
薄やける日影うつろふ。

秋と知る　赤き煉瓦の屋の棟の
かなたに浮ぶ白き雲、
やや煤ばみて、
痛ましき都の空に。

ただ秋と知る
過がひ去にたる
女子のこともなき
面もちよ

有明の生命は、詩人らの理由以上の無理解に逆つてから俄然衰へたが、それでもなほ、その年の夏の「文章世界」に「我國の散文詩」を發表し口語詩體に一矢を酬ひたり、その後の「新潮」その他に雜感、譯詩、作詩の類を發表し、ボードレエルの散文詩を譯し(「太陽」四三年)、「冷血と倦怠」(「趣味」大正元年)を試み、「狐の剃刀」(四三年)、「驟雨」及「閑寂」(四四年)の散文詩があつたけれど、これは當時の散文詩全盛の餘波をうけて創作熱の勃興を見たにすぎないので、散文詩體そのものに就ては三十八年頃から既に「現の法會」の如き作があつた。れど、當時詩人有明の作として相當に批評に値する作である。係はらず、新奇を求めてらふ猶尼助文壇の默殺にあつて彼の的生命も漸次に永い沈默に入つてしまつた。

この三人の老大家(といふ年齡ではないが、本邦の文壇的年齡では正に老大家であつた。)の徐々たる隱退につれて、さきに降興した口語詩派の活躍と、更に新らしい詩壇の展開とによつ

て明治詩史の裁縫第三期後期は、夥しい群小の群立のあひだ、蛙鳴と蝉躁とのあひだに閉ぢられた。

この時、象徴詩運動の最後の殘照をかゝやかし、あはせて次たる時代への善き贈物となつた一詩集が出た。北原白秋の「邪宗門」(四二年)は第一にそれである。およそこの詩集發刊のころまでの新誌を飾つた青年詩人の一派がそれであつた。三木露風の「廢園」(四十二年)も亦そのいく分の感化をうけてあひついだ、白秋の詩は「文庫」から「明星」にうつつて忽に天禀のかかやきを見せたが、

神無月、下浣の七日、
病ましげに落日黄ばみて
晩秋の微風光り
百舌啼かず、木の葉沈まず、
空高き柿の上枝を、
實はひとつ赤く落ちたり。
刹那、野を北へ人魂、
鉦うちぬ、遠く死の歌。
君死にき、かゝる夕に。

「晩秋」——三九年五月作

の如き個性なき模倣の香のつよい間にも彼の言語に對する敏感と表現能力の天賦の卓越が早くうかゞはれ、四十年八月草に於ける作「天艸雅歌」の諸篇の内

わが仕稱よ、いざともに野にいでて
歌はまし、水牛の角を吹け。
觀よ、すでに美果實あからみて
田にはまた足穗垂れ、風のまに
山鳩のこゑきこゆ、角を吹け。
いざさらば馬鈴薯の畑を越え
瓜畦びとが園に入り、かの園に
鍬やみて蝋の火の消ゆるまで
無花果の乳をすすり、ほのぼのと
歌はまし、汝が頸の角を吹け。……

「角を吹け」

の沈靜な形式から更に進んで四一、二年の「邪宗門新派體」(「スバル」創刊號)風の詩情の成就に到達したが、それは、

HACHISCH か醉か、ABSINTHE か、狂ほしく
溺れしあとの日の疲勞……纏れちらぼふ……

——「天鵞絨のにほひ」

といひ、

日は眞晝、ものあたたかに ETHER の

波動は甘く、また緩るく、戸に照りかへす……
その濁る硝子のなかに音もなく
CHLOROFORME の香ぞ滴る……毒の音樂……
遠くきく電車のきしり……
……すてられし水藥のゆめ……
――「赤き花の魔睡」

といふ頽唐感情と異邦趣味と享樂情調と官能主義との憧憬に刺戟せられる詩感の繪畫的表現の詩型で、そこには象徴手法の交感作用もあれば、さうかと見ると十八世紀式陳腐な直叙體もあり、有明の感化もあれば上田敏の影響もあり、これを稱して純粹の象徴詩と稱することは出來ないけれど、作者もその自序中でいふ通り、「情緒の諧樂と感覺の印象とを主とす。……自己の感覺と刺戟苦き神經の悅樂とにしてかの初めより情感の妙なる震慄を無みし只冷かなる思想の概念を求めて強ひて詩を作爲するを嫌忌」するもの故、官能的白秋の身中に渦卷く神經の底力や情緒の壓力やが自らとけて一種の幻覺世界を創造する處に彼のみの詩歌の領域がをかれてあるので、これに對する批評も、自然その見地に立つて成不可を驗べて見なければならない。

白秋詩の興味は南國人のあくどい程の強力である。つぎには鋭くはないが甘くゆるやかに顫動する感情と氣分とである。かれは文明の近代性を情緒から享受せんとする。かれに近代理智の生長はない。時代の學問氣を官能によつてのみ味ははんとする。かれに純近代概念の攝取はない。この明治の生んだ近代詩人は、時代の少數の鋭感者のみが惱まれたものを、いち早くその獨得の飽くどい感覺から創造して、五彩燦やかな頽廢の色調ただよふ「ありうべからざる世界」を官能で幻想して詩歌の世界の上に築き上げてわれらに示してくれる。この風景は、凡て白秋の太つた南國人らしく日に燒けたその五官の壁を通してのみ覗きうる幻想界である。白秋自ら世評に抗して「或人の如きは此の如き詩を嗤ひて甚しき誇張と云ひ、架空なる空想を歌ふものと做せども、予が幻覺には自ら真に感じたる官能の根抵あり」と云つてゐるが、眞に感じたるものもあれば、誇張に失したものもあり、架空なるものもあるのである。それをなしと斥ける作者は、自分の天稟の特性が奈邊にあるかを知らず、この風の詩の内容の本性がどのやうなイディヲシンクラシーを持つてゐるかをも知らないのである。架空や誇張を藝術の最大興味の如く思惟するのは、自然主義的衞觀を一般的な場合に引上げて解釋したから起つた誤見で、當時白秋に誇張癖があるとなし

一個一個の評家が、意識して積極的に誇張架空を恣まにして通俗性を僥倖せんとし、いたづらなる好奇心を満足することに心が傾いてゐたとしたならば、いふ迄もなく白秋といはず、當時盛んにこの種の興味に耽つた新詩社同人は悉く根本から詩人としての態度に謬りがあつたのだといはねばならないのであるが藝術における誇張、架空は、縹渺たる情緒の笑まひ、感覺の怡悦のなかに、詩感の揺曳のまにまに、自然に、形を成し章句をわかつその間にも、知らずしらずいく分の誇張、架空の心の偏畸があつても、それが不思議に全體と均齊をなしてかへつて妥當の表現、獲る場合もあり、詩人そのもの特にも浪漫的詩人に架空誇張癖があるのはその特性であるからいかなる形に於てかその性癖によつて自然に流出したそれなら、それはその作家にとつて常態である。白秋の存意は異常に徒らに偏して好奇心に自足するの弊を矯めんとした人への抗言であらうが、その點になると問題が纖細になくて、まかな臆斷は危險である。ともあれ白秋詩の中から悉く誇張と架空とをとり去つてしまへば、油のぬけた鰻魚のやうな屍が横はるだけである。浪漫的なる詩の凡ては架空と眞實との中間を行くのである。

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、
色赤きびいどろを匂ふ、匂鋭きあんじやべいいる。
南蠻の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍酡の酒を。

とこの慣用の想像の縷を限りなくつないで出してくる樣々の珍物は、あたまの中から浮び出るまゝ、漂ひくるまゝ、これをとり出して手品師の机上にをく、ウソもほんとも、いつはりも、採つて丸めて悉く拾集め合せた一篇「邪宗門秘曲」となつて、さて初めて、今までのうそやほんとやいつはりが生きてくる。此間の境致は作詩に骨を折つたもののみが判つてゐることだ。

惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅の夢

ほんとに「身も靈も蕩りこがれても」こがれなくても作者の責任は、篇の氣息の中にある。個々の言葉の分析せられた意味あひにはない。

その官能美は次の樣な短唱に端的にでてゐる。これは作者が考へて並べた築立ではない。漠然と筆をとつても詩人の魂は内に光つて外に自らあらはれてかゝる一章をなす。

夕暮のものあかき空
その空に百舌啼きしきる。
Whisky の罎の列
冷やかに拭く少女、
見よ、あかき夕暮の空、

その容に百舌なきしきる。

或は濃霧のかげに鳴く蟲の神經の嗟嘆をかぎ、或は魔國の黄
「WHISKY」
昏を忍び、狂人樂を想ひ
　かなしみの蛇、緑の眼
　槍に貫かれてまた歎く……

　彈け彈け……鳴らせ……また舞踏れ……

といふのも假令んば作者が眞正面から瘋癲院の午後七時の印象を記錄せんとしたにしても、その結果からその値を判別するには寫實の記述の興味にあるのではなくして、この詩人が感じたかゝる迷景の示唆する何らかの情緒である。情緒を通じて表現する內心の世界性である。「顏の印象」六篇に畸異なる顏型の風光の中に精舍や狂人街や酢甕や沈丁花や不調子や赤い恐怖を感じても、工場際の溜水に盲目の沼を感じても夕日のにほひを感じても、椿の花の發狂を感じても、それらは一樣に詩人としてのかれの特權であつて、現實に幻夢を感じ、妄想に實在を感じてもかれの詩感覺は端然として亂れない。評家の重責は、表現の發言する最後のものの吟味にあるのだ。

かれの象徴詩は「謀反」(「新思潮」所載)が代表する。

ひと日、わが精舍の庭に、
晩秋の靜かなる落日のなかに
あはれ、また、薄黄なる噴水の吐息のなかに、
いとほのにギオロンの、その絃の、
その夢の、哀愁の、いとほのにうれひ泣く。

蠟の火の懺悔のくゆり
ほのぼのと、廊いづる白き衣は
夕暮に言もなき修道女の長き一列。
さあれ、いま、ギオロンの、くるしみの、
刺すがごと火の酒の、その絃のいたみ泣く。

またあれば落日の色に、
夢燃ゆる噴水の吐息のなかに、
さらにまた獸もなき白鳥の愁のもとに、
いと強き硝藥の、黑き火の、
地の底の導火燬き、ギオロンぞ狂ひ泣く。

跳り來る車輛の響、
毒の彈丸、血の烟、閃めく刃、

あはれ、驚破、火とならむ、噴水も、精舍も、空も。
紅の、戰慄の、その極の
瞬間の叫喚燬き、ギオロンぞ盲ひたる。

これはまだ暗示の形式の模倣であつて、あらはされた事象のいきさつが直截に象徵となつて「萬法照應」の世界を展開してゐない。象徵詩の稚きものである。「室內庭園」

晩春の室の內
暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……
そのもとに、あまりりす赤くほのめき、
やはらかにちらぼへるヘリオトロホプ。
わかき日のなまめきのそのほめき靜こころなし。……

の類の表現が示唆する情緒は、感覺そのものに怡樂する感情の複雜なはたらきで、その時情緒が象徵的使命を帶びてゐることは勿論であるが、眞くるしいその想像世界の內面をなほ仔細に檢べて見ると、白秋詩の官能主義は案外に輕快な、小規模な、執着のない、日本產の、原始的な性質のもので、近代的意義の複雜性、神經性、頹唐性は少ない、果然この期の太白となつた白秋の歌は、頹唐趣味へのあくがれに出發した官能的南國人の生活讚美感の表白で、從つてこれの象徵詩は輓近西歐詩體の複雜な內容とは一見類似して實は甚だ縁遠かつた。

その生體が明確になつたのは、この期の作中

空に眞赤な雲のいろ。
玻璃に眞赤な酒の色。
なんでこの身が悲しかろ。
空に眞赤な雲のいろ。

の類の小曲に散見する享樂的小唄が有つその現實觀、享樂感の重積をはかつて見れば判る。この類の詩はのち「思ひ出」(四十四年)に收錄されてゐるが、白秋の眞價は「邪宗門」よりも以上に「思ひ出」にこもつてゐるのは「願人坊」

雪のふる夜の外見れば
願人坊を思ひ出す。
願人坊は赤頭巾
目も鼻もなく、眞白な
のつぺらぼんの赤頭巾。

「ちよぼくれちよんがら、そもそもわつちが
のつぺらぼんのすつぺらぼん、すつぺらぼんののつぺらぼんの、
坊主になつたる所謂因緣きいてもくんねへ、

しかも十四のその春はじめて」……
踊り出したゝ惡玉が
願人坊の赤頭巾。……（下略）

など、「紺屋のおろく」『みなし兒」「人形つくり」等の作品である。

白秋は「邪宗門」に象徵後期を通過し、「思ひ出」「東京景物詩」等で四十一二年後大正初期にわたる享樂詩體をよく代表した。

この白秋と詩風や思想に於て恒に對照的に談られるのは三木露風であるが、露風の詩感の自然性、眞摯性、純一性には根本的に異義が挿まれうるから、彼を一方の傾向の代表者と見做すことは出來ない。

白秋の詩は愛さるべきであるが尊敬さるべき筋のものでない。華美で濃麗で眩惑的であるが、かれのせい一ぱいの天眞が出限つたもので、よい詩に相違はないが、所詮あれだけのものにしかすぎない。もつと何かあらう。白秋詩の世界以外の落付いた思考の青ざめた結果がなよびやかに、じつくりと、緻密に出た詩があり相なものだ。思索の詩はないか。想念の詩はないのか。白秋はうち見にはよいが、長く讀んでゆくと飽き飽きしてしまふ。年をとるといやになる。青年にも老年にも、働くことを知らぬ、尊敬すべき、深刻な思想詩は出たいものか。

三木露風はのちこの要求に應じようと意識するに至つた詩人であるが、そして終に白露對立を稱された詩人であるが、露風の詩には根本に擬勢の困憊があつた。その擬勢は彼を生長させ彼を萎縮させてしまつた宿命的のものであつた。

十七才で早く「夏姫」（三十八年）を出し、「藝苑」誌上（三十九年）年に似合はぬ技巧の冴えを示して、「廢園」（四十二年）、「寂しき曙」（四十三年）の收穫を殘し、その足跡は大正初期にまで繼續し大正四年の交につひに永久の墮落期に入つた。

露風も亦文才ある少年であつた。文才とは、想像力の富豐と受感性の敏俊とが相まつて表現性能の練磨をうながし、語彙の豐贍と描寫力の適確とを將來して個性あるスタイルの所有を成立せしめたものゝ謂であるから、よき詩人には必ずしも文才がある。その文才を生涯生かし切る人と中途で衰退せしめる人とがある。日本在來の新詩人は多くその後者であつた。露風も亦白秋に似て「海潮音」「有明集」はじめ當代名家の詩文の感化をたつぷり受けて、初めは

石高の原の徑道
こぼたれて郊野につづく
夏の日の熱き日向に
蛇は熟睡に困さ
夢を見ぬ、影はくづれて

ほろ〱の土に引き延び
萎れたる小草は喘ぐ。……

「來る畏れ」

あたりから

「眠りたまふや。」
「否」といふ。

皐月
花さく、
日なかごろ。
湖べの草に、
日の下に
「眼閉ぢ死なむ」と
君こたふ。

「接吻の後に」

の如き稀に見る好抒情詩を出し、「哀しき接吻」をかたり、「月夜の悲しみ」をうたひ、「廢園」の抒情詩時代を一過して、「沼のほとり」、「消えゆく影」の沈靜を示し、やがて大正初期「白き手の獵人」(大正二年)、「幻の田園」(大正四年)にその詩感辞藻の最高潮期を經過したが、彼の特色は、短句のあひだに巧用な描寫を試みたとへば、「沼のほとり」に

木は屍の如く、寂しき腕を交す。

といつて第一聯を結び第二聯を、

そのとき君は沼のほとりにあり。

とはじめてその間の照應から來る美は「木は」云々の佳句を一きは生かしてゐる。(しかも全體としては此詩は失敗の作であるが。)

古徑は我胸のごと
月光の下に照され
春の暮、山のあなたに
影くらく長につづけり。

は少年期での作品であるが、最終句の

またおもふ、山のふるみち。

と穏和に終つて無難な結果を示したが　多くはいらざる道具立を拵へて此等の佳句が死ぬことが多い。

靜かなる冬の木立に
月光は頭を垂れぬ。

に初まる「月夜の悲しみ」は終りにゆく程に、詩情が不純になり、不純になればなるだけ冗辭になつてつひに龍頭蛇尾となる。

しかし彼の擬勢は少年の頃青春の夢に蔽はれて尚見えないが年をとるにつれて次第にその頭をもたげ、つひには詩が固化し乾燥し磊々たる言葉の瓦石をころばしてしまふ。「寂しき曙」の巻頭詩「神と魚」がその例である。

　つねに曙の寂寥に棲む。

太陽は海の彼方をめぐり、
夜はまたこのところを忘れ去る。

神の名を彫りてその石を埋め、
その石埋れてふたたび見ず。
ああ　雪は單調なる世界を築く。

葉もなき木は
凍れる池の上に影を映せり。
長き時を發せども、その影うごかず、
いま見よ。魚は下より浮びいづ。
　魚は下より　　事もなく外をうかがふ。

言葉いかめしく着飾つてもよく熟視すると實はたゞごとを書きさ述べたにすぎない。この風は「良心」（大正四年）に至つてその弊の極に達してゐる。露風の擬勢といふものがこれである。その詩人的生涯中、怒つた肩がつひに下りなかつたかれは社會人生に相當に鋭い理解の眼を向け、藝術に丹念な精進をつゞけ乍ら若くして芽生へ、若くして年老いてしまつたのが、反省して純直な素樸なる人生の一員としての苦悶を經驗し、その痛苦を命あらしめる方へ正統の展化をなしえなかつたに基く。

露風が讀者に強ひる同感は、されば、空しき咆哮にすぎず、外勢にすぎず。誠は力弱く自信少い人間が、弱きを自覺して見えを張り虚勢をはるの態をなした。詩に眞の鑑賞な一徒は、一見してその鎧兜威めしき象徴詩的外貌に愕くが、志あるものは直ちにその眞部を看破してその理論的弱處をつかんとする。

が、實は、民族性の藝術的特色から云つても白秋の企てたことは易く、露風の企てたことは難かしかつたのである。感情の直截な流露といふ一徳が、白秋にあつたればこそ、その作に成効し、露風に缺けたればこそその企てに失敗したのである。白秋の歩いた道は再び踏る必要がないが、露風の企てた仕事は再三之を試みなければならない。こゝに露風への關心がありうる。

露風のわざと感情を抑へて雄々しくおさまつた態度には一寸

き喉」から強くなつてゐるが、これ亦彼の擬勢の證左である。抽象と具象の語とをさかんに結合して陰影ぶかい行句の効果を計つても、その結び合せが不當に或ひは無反省に行はれるので効果的なものは少ない。之も擬勢の左券である。「夜の碑銘」はかれの長短の連鎖劇を見るやうな作であつた。

　わが戀人は、墓に眠れり。

讀者の心は何の衝動もうけない。その代り何の反感も生じない。

　されど我心の臓は、
　今や音高く搏ちひびけり。

少しも鼓動は感じられないのである、此文句では、

　今宵「今」を「昔」に返さんと喘き、

混亂があるばかりである。

　樹木の肌はやはらかく

前句にはそぐはないが拙句でない

　月のかたへに手は白く君は眠りし

露風調である。効果ある時とない時とある。こゝではそのどちらでもない。凡境である。

　あゝ我胸は、音高くなりまされり。

まだ感情が底からひびいてゐない。

　長き草の葉の顫ふごとく

比喩としてよい形である

　われはいま、「死」の欲情をさます。

これも露風調である。此の効果がない。

以上分析しても知られる通り露風詩は一篇の中に錯相がある。悲劇と喜劇とがある。

露風は文才ある少年から丹念な青年となり、やがてひがみ根性の老人のやうな壯者となつてその詩的生涯を閉ぢた。露風は決して拙劣な詩人ではなかつた。露香は露風に讃嘆して「寂しき喉」を氣分象徴の詩集と云つたが、それは彼が露風のたらくりに僞はられたにすぎないので、象徴主義そのものの絶對の立場から見ると、白秋も露風も有明とても純粹な境致には達せずしてやんだのである。言葉の節約、シンプリシティーといふ特質を露風にあげたものもあつたが、白秋の詩が冗漫すぎた如く露風の詩は節約するかの如く見えたにすぎなかつた。白秋の多言は、精一杯のあれだけの内容に表はれてゐるが、露風のは何かまだあるらしく思はせて實は何もない。奥行のない詩作の點で白露同等であるに係らず、露風が何か含蓄に富んでゐるかの如く思惟されたのは彼が抒情を理論と交へ、感情のお蛸口をし赤裸になつて見せなかつたからであるにすぎない。

最後に重ねて言はう。露風は決して拙劣な表現者でなかつた。寧ろ高く群を抜いて光つてゐた。自由詩の餘派が非詩拙詩にもがいてゐた時、彼は既に詩作の契機を知つてゐた。當時として感ずべき巧技が青年露風の抒情を以て評家をしてヴェルレエヌに比せしめた。これは一時の世辭にすぎなかつたがこの抒情の態度から自然な展化をとり得たならば彼はたしかに白秋以上の境致に達して新詩あつて以來の新詩風を創造しえたに相違ないが、かれの擬勢が根本にあつてこれを殃し「寂しき曙」よりその兆候が見られ「白き手の獵人」に彼としての最高詩的飛躍をなした時その病弊は既に拔くべからざる痼疾となつてゐた。かれは詩に對して必ずしも純でなかつたが詩人的教養は一日も怠らなかつた。語學の出來る鈍物以上によく飜譯を通じて讀みこなす事が出來たが、一たび獨斷に陷ると飛んでもない無知を平氣で權威を以て談つてゐた。彼の詩は重視すべきものではないが、彼の詩才そのものは重視してよかつた。彼の存在はそれ自ら一種のところどころ滑稽もある悲劇であつた。

露風の象徴主義は純眞な境致に到らなかつた。象徴詩と解さない時、初めてかれの象徴詩時代の作は、僻遠詩人に卓れた特色を發揮する。象徴派はかうしてその末路を閉ぢた。

## 三　口語詩派、自由詩

四十二年三月の服部嘉香は、當時口語詩が自由詩と名をかへた時分その一方の評家であつたが、「スバル」創刊號を批評してゐる言葉がよく雙方をはつきりさせて興味がある。

すなはち「一月の詩壇は、主張を先きにして未だ完き作を示さなかつた自由詩の新しき試みと、自由詩を非難し拒否し乍らも根柢に自家の作風に多大の缺陷を見出した從來の形式詩と」の雙存だと云つて、さて、白秋の「邪宗門新派體」に至つては「一段と形容が濃厚である、濃厚な代りに露風氏の詩に見るやうにすつきりと感じが出ない。」と斥けてゐるが、白秋に露風を求めるのは、譬へば、てんぷらの味に暗ばしの味を望める類である。比較にならぬ比較である。

口語詩は、かくして、創始時代の拙劣をつづけたが、詩人にその人を得なかつたのはその時代をして長引かせ、且つ貧弱なものとした。新らしき興味は、論者の所謂「形式派」よりもこの自由詩にそそがるべきであるにもかゝはらず、讀んだ結果、事實として一向に詩になつてをらず、面白くないから致方がないのである。これが論者の與論であつた。

第一卷を入れた柳虹は「路傍の花」(四十三年)にこの口語詩を

抄錄したが、

沈默の庭　秋の匂ひ……
いつかしら夜が滲んでゐる、
いつかしら月がさしてゐる、

樹の間を滲れる光りもださめ、
痛ましい影は靈に慄へて
指を組み結んだ涙と悔のおののき……

下略――「吐息」

の如く想像力の汪溢も情緒の氾濫もない感情の平面描寫にすぎないから魅力が薄くて讀者に訴へる強い激情もないし深い思念もない。たゞ白秋一派にない靜謐の吐息のなかの一縷の情緒

あゝ蒼ざめたりの布
夕暮を彩る[illegible]さ！

「街の雨」

のやうな一句二句の落付きある姿と

私は知つてゐる、仄かに蒼さめてゆく夕月のおもてを。
秋は音もなく私の庭にきて
影と光りは絶え入るばかりに抱き合ふ……

「九月」

のやうな新抒情を僅かにほのめかし得た。彼の詩が長く進歩しなかつたのは、自家の詩情を磨き生かさうとする努力がいつも足らなかつたからである。

茅野蕭々は、新詩社の同人誌「常盤木」第二號で、詩壇の大半は口語詩の作者であると嘆じてゐるが、作者の多いのは處女地の有望の甘きに蝟集したにすぎないので、讀者は必ずしも之に伴はなかつた。その業績を判じて見れば思ひ半ばにすぎないものがある。

形式ならぬ形式を創造して口語の雅馴を洗練してゆく實際から見ても、自由詩人は天惠薄れた詩技の所有者であるにかゝはらず、實際は易すきに就く鈍劣な半詩人半文士の集合に過つたのは誠に心殘りであつたが、其中で「獄中哀歌」の介春は

監房をとりまく赤い煉瓦壁
逃げられぬ樣にとりまく壁

監房を出づ、その壁のまはりを
隱亡のやうに
くらい顏が歩き出す

かなしき朝の自由散歩
外へいづれば、あをき谷の濕りに
心のすはれたさ、のび上りたさ。……
「朝の自由散歩」

に地道な、飛躍のない、吸ひこむやうな、鈍重な詩風を發揮しここの派で唯一の好望者であつたが、その特質は、完全に磨かれずに外れてしまつた。

潮と渦のひらめきと——
象徴主義の時代が來てる。……
「苦悶と謎と象徴と」

つ如き散文的拙劣から拔け出てその鈍重を飽く迄も保つた陰濕な重厚な素樸の抒情風に奔ることが出來るだらうといふ豫感を裏切つてしまつたのである。介春に比べると、夕暎も東明も未來への望みはより少かつた。夕暎が「春の夢」で斜衎調を追つても「後衎時調」のきしのあかしやの光耀は出なかつた。「石」といふ。

水底だ
水底にわが魂が沈んでゐるのだ……

で初まる小詩の方角に彼の耽樂と感傷の赴く道を開拓したならば東明よりも遙かに純眞な詩風が生れたであらうが、彼も亦介春の如く半途にして挫折してしまつた。

介春、夕暎に比して、東明はまた一段と貧弱な詩情と語彙との詩人で「夜の舞踏」中一篇も今に殘る永久性がないにかゝはらず、當時相當に評されたのは同黨伐異の傑作にすぎなかつた。

服部嘉香は其の「散文詩論」(四四年、十月)で當時の散文詩の三種を分ち、一は泡鳴で口語無形律詩風のホイットマン祖述とし、二は阿若の「霧」(四三年)の如く俳文の發達したもの、ジュール・ルナールの類同だといひ、三は歐風文の感化をうけた八幡有春の都會散文詩の類としたが、此れは粗雜な分類で、分類する迄もなく散文詩としての出來不出來と取材の甲乙に異差があつた計りで、葉舟の「響」(四一年)といふ一しきり讀まれた「小品文」も、ツルゲーニエフ散文詩の兩種の譯も(草野柴二本と仲田勝之助本。四三年)皆すべて定形詩的隙縫に痛感した詩心の散文的表現者の企圖と見るべきであり、其中特に自由詩と稱したものが、嘉香のいふ「內容律」すなはち內在律を趁つて自然の自由詩型をとらんとするもので今日の詩の初期作であつた。しかも「良心」(大正四年)に至る象徵風詩調を試みるに至つて露風は口語詩をすてて文語にかへり、口語律

を固守したものは天賦の少い元氣者が多くてその後大正期にわたる群小蛙鳴時代を継續した。問題とする思想の特徴もなく技巧の新風もなく、少い苦悶と少い享樂とのあひだを深い洞察も深い省思もなくて彷徨し紊迷してゐたにすぎなかつた。自然主義が折角有意義に提出した現實觀の深化は、自然派の落し子たる自由詩人にとつて力以上のもてあましものとなつたのである。

## 四　文語派、形式詩、その他

木下杢太郎は「スバル」一派の色々な意味に於ける代表詩人であつた。その悠々たる殉情詩にその理智生活をわれから埋沒する快感に詩情の根據を求めようとしたが、白秋とちがひ、近代的理智に透徹した本體から一歩も外れずに、しかも竹枝を微吟し小唄を低唱するの「風流」を好むだから反對する者は遊戲的と斥け、讃美する者は耽美的と稱へたが、實はその何れもでなくして而もその兩方であつた。

「道程」の高村砕雨光太郎亦これと類似した心境にあつたが、この詩集は明治大正期にまたがる詩壇での唯一の傑作で、白秋が「雪と花火」以後の隋勢期に入つて徒らに言語を玩弄し舊夢をむしかへしてゐた時、露風が致命的詩風の陷穽に自らはまつて外面的威儀で鈍感な愛讀者を威かしてゐた時、光太郎は、「失はれたるモナ・リザ」の高調にはじまり、「根付の國」のサーカズム、「晝夜の夜」、「食後の酒」の晶光美、及び「寂寥」の浪曼的誇張に發して自然に達したる調和の美の中に隠見する、焦心と苦痛と困憊との思想的ソプラーノ、

赤き辭典に
葬列の歩調あり
火の氣なき暖爐(ストーブ)は
鑛山(かなやま)にひびく杜鵑の聲に耳かたむけ
力士小野川の嗟嘆は
よごれたる絨毯の花模樣にひそめり

何者か來り
窓のすり硝子に、ひたひたと
燐をそそぐ、ひたひたと
黄昏はこの時赤きインキを過ち流せり

何處にか走らざるべからず
走るべき處なし
何事か爲さざるべからず

爲すべき事なし
坐するに堪へず
窘迫は大地に滿てり

いつしか我は白のフランネルに身を捲き
蒸風呂より出でたる困憊を心にいだいて
しきりに電磁學の原理を夢む

朱肉は塵埃に白けて
今日の佛滅の黒星を嗤ひ
晴雨計は今大擾亂を起しつつ
月は重量を失ひて海に浮べり

鶴香水は封筒に默し
何處よりともなく、折檻に泣く
お酌の悲鳴きこゆ

ああ、走る可き道を教へよ
爲す可き事を知らしめよ
氷河の底は火の如く痛し

---

## 痛し、痛し

――「寂寥」

「新綠の毒藥」に、
二十日鼠は天井裏に交み
磯巾着は氣味惡き觸手を動かす
ああ、禽獸蟲魚
悉く無益(むやく)なる性の昂奮に
虐殺と猜疑と狂奔とにいがみ合へり

青くさき新綠の毒素は世に滿てり

見よ
河岸隨一の醜女
椿屋のおちかは溜息して
まろき乳首をまさぐり泣けり
…………
上氣したる青女房は素足も輕く
間夫の淸人劉一章と廁裏に走れり
見よ、見よ、見よ、
…………

ともねすれど
まろねすれど
いづくまでも、いづくまでも……

また、自らを叱嗟するわれとわが「聲」から、當時時花りの「河内屋與兵衛」、「心中宵庚申」の昔にかくれ

なまけものはベネチクチンをなめて
過ぎゆく時のゆるやかなテンポをたのしみ
こころに悲響の禁をやぶる
ぼんやりとした春の末

淺草はよか樓の春暮に此湎せんと欲し、「泥七寶」の小曲に弄り「夏の夜の食慾」を牛屋に漁り「冬が來る」の作品にアドーレッセンスの愛と苦しみとからさめんとするけはひを示し、「狂者の詩」の破調にかへり、つひに大正期に入つて、この生帳面な享樂家は、享樂の苦に堪えられなくなつて、生帳面なヒューマニタリヤンと化し「五月の土壤」の堅實の笑ひにひかれ、つひに曉曉たる「秋の祈」の名篇を歌ひすてて詩杯を丟つた。

當時、かれの詩は一部の具眼者に認められるにとどまり、現今に到つてなほ通俗性を脫離した陰沒の間に在る。或は人の認めぬ様に、理想家のかれ自らも自らの作を認めなかつたであらう。彼の詩の價値は恐らく明治詩史中の永久性あるものの一で、熾烈の情感、豁達の富贍、想像の輪廓、觀照の透徹、鋒の如きはその足下に跪くにも値しない。

杢太郎の人工美は厨人の反感を買つたが、彼の人格生活は曠山の如く鋒えて長く引いた裾野の春にその殉情花のよそほひを見せ、摘みとらんに任せ、嘲り去らんに任せた。この享樂家のざわめきの間に心に童貞を守つて表に紅燈綠酒の風流を忍ばんとする者の唯一の法は、このひすてりつくなつつましやかな狂態であつた。

享樂詩撤は明治四十五年前後を絕頂として次第にその狂調を收めたが、明治育ちの青年が官能から放たれ、頹唐と耽美との形式をさとり、やがて又民族本然の思想諧調に落付いてゆくその過渡期に、中年にも老人にも知られない、青年のみが知る思想の春愁の傷感に飽き足るまでひたつてゐたのが此一派である。

賢しい理智の眼と落付いた聲音との茅野蕭々には泉のやうな歌口の烈しさは見られなかつたが棄てがたい野花の美を見せ、平野萬里は四十年前後の青年詩人として一番草れた詩感を示したが明治末期に近づいては早くもその詩情は萎縮してゐた。石川啄木は、さきの活動に續いて、不相變ずその敏感な受感性を發揮し、さきの「あこがれ」が有明の「獨絃哀歌」に惹いたに

對し、四十一年後のかれは「老人」に象徴試作を企て、「谷」、「事ありげな春の夕暮」に口語習作を試みてゐるが、その方面の留意よりも彼の關心は社會的方面に轉向し、自然主義の論客が因習に反抗して之を打破するといひ乍ら、「國家」の因習には手が出せないではないかと痛い所を突き、大逆事件後急進して左傾的制作の頻發を見たが「はてしなき議論の後」、「激論」、「墓碑銘」等の中に、熾烈なその詩感の快味と阻み勝ちなる談詩の焦心とを合せ現はし、更に短歌の一筋道に彼はその鋭敏な享受性と理解力とにより新らしき歌風を創成した。啄木は新詩社から出て與謝野晶子の感化をうけたが、明治末期に於ては完く離れて彼獨自の道を歩いてゐた。啄木の詩は遠くその歌に及ばない。極めて巧みな模倣がその當時は少年詩人の名を馳かせて今はたゞ亞流の間に伍さしめねばならない。啄木の一生は彼の詩以上に詩であつた。明治文化が個人の魂に影響した經路を僅か二十七年の短時間のうちに映畫の如き速力と起伏とで示すものは啄木の生涯詩である。

その外此期の所産に、「夜の葉」(四五年)を初め高濱長江の「酔後の花」(四四年)、「習作」(福永挽歌、四五年)、「平和」(白鳥。四五年)、「淡影」(泡沫。四三年)「獸苑」(麻井浩風。四四年)、「濱千鳥」(水葉。同年)等があつたが、夜の葉の藻村のみが文

用詩人のひとりとして、清純の抒情をかすかな響に表せて一縷の哀感を仄めかした外に記録するものはない。

明治四十五年初夏の「ザンボア」は白秋露風號として此二人の近作を網羅し、露風に「靜謐」の作品、白秋に「黄色い春」の逸作を公けにしたが、これ恰も此二人者の將來の對立的存在を豫感させた。詩に專念しない者は、假令んばその本質價値に於て杢太郎が白秋の下風に立たず、光太郎が露風を凌ぐものがあつても、詩壇といふ社會圏の存在は不調に終らなければならない。これは何時代、何れの國に於ても常道である。白露兩人の雙作はこの意味に於て認められるものである。

最後に、當時の地方文壇は、「四國文學」といひ、「[illegible]島」といふ、地方色を發揮して重きをなしてゐたなかには、依倚たる中央文壇への思慕の態度があるにすぎなかつた。そして尚當分は地方に於ける文學的發達の獨立性は色々の周圍の上から望まれないものであることを識るにすぎなかつた。

## 五　後語

明治新詩の發達は、かくのごとく、未完成のまゝ次代にわたされた。偶然と稱してよい機會によつて詩すたるものの創成にはじまつた「新體詩」は、一貫して文學的、社會的不調に終

始したけれども、その同化の精神は次第に醗酵すべき民族的無力をのみあらはしてゐるものではなかつた。社會事象や文化所產の多くに世界大の値と民族的基礎とある獨自の發見發明は殆ど見られなかつたが、國家體制の發達統一の上に、民族半開の知識生活の上に新らしい開展が示されて、十九世紀的なる思想や、獨逸的なる學問や、フランス的なる感情や、英吉利的なる實行やが、それぞれ民族生活の適當なる部面に輸入され、加工され、浸潤されて、資本主義の立場をとつた軍國主義的爲政方針が、初めは太古の民に對するが如くに素樸に受入れられたのが、次第に批判的となり、終りに無政府主義的爆發のひとつを見たけれども、若き國家の對內事情と對外事情との必至の狀態は、國家至上主義の立脚地に於ける個人の制約、傳統の擁護を餘儀なからしめた。

回顧と前進とのあひだに多忙な半世紀を送つたこの「國民」に、新らしき文學型式としての新詩の存在は、一見何の關するところないかの如く空々しく見えたけれども、內に芽ぐむ「人間性」が暗默のうちに制御する潜勢力が、時代の不可思議な基調の要素となつて、百の文學亡國論は千の靑年愛好者をひきつけて進化し發達した　その回顧主義はやがて異邦趣味の領略するところとなり、新らしき現實觀の地がための最中にこの時代はすぎ去つた。その國家的關心は最初の盲目的な讃美と盲從とから、つひに個人主義的覺醒とともに漸く鋭い批判にうつらんとしてゐる最中にこの時代はすぎ去つた。

民族はつひに著しい史價ある藝術の何ものにも接せなかつたけれど、かつて推古、奈良の輸入が、大和、山城兩朝かけて燦たる華をひらいた如く、又、家康の鎖國政策の遂行を以てす　も內にうごめく人間性の芽生はやがて德川文學の奇異なる收穫物を求めえたごとく、文化の吸收に民族的馴練を經てゐる本邦人が、巧みに、小さく、普遍的に、夥しき異國人文の咀嚼と陶冶とを營んで、つひに必ず一種の日本的なる文化の現出を實行する事例を見ても、多くの西洋風なる異邦風なるものを紛然雜然と輸入した明治時代は、やがてその後の次時代に必ずある統一と醇化とを豫感してゐたに相違ない。

この實驗時代は夥しい未完成藝術を堆積せしめ、この過渡期は著しい小品藝術を濫溢せしめた。かれらの詩は、世界に誇る何ものの値もない。これを思ふと明治人であるわれらは限りない寂寞を感じないではゐられない。が、今、鷄は一心に地上の餌をあさつてゐるのである。この淋しさも對比の上でなければ感じられぬほどに、かれらは各人の生活と藝術との實行と制作とに緊急である　原始的明治が模倣趣味の大正初期を生んだこ

とを考へても、われらは卒然數百年の歲月を僅か半世紀の間に飛上つた驚異を感じる。「世界國づくし」が「十二の石塚」となり、「一葉舟」が「有明集」を生んだのである。そして、北間新らしい口語は自由詩型の無定形律をさへ生んだのである。詩が在律に依賴して何等定形の詩型にまつ要があるかないかを識ぬるまもなく、音數律を唯一のたよりとする文語詩の正格調を斥け去つた自由詩は、勢ひまつたくの曠野に立つて自然の詩型の發生完成を見る曉までは、內在心律の搖曳起伏のまにまに長短自由詩形の自然な取捨配列によるより外はない。これが今は最上の型式である。が、文語の史的位置と同時代的浸潤の程度とを考へる人は、文語の魂の自由なる驅使が、國語と殆ど同じほどに自由と新鮮と魅力とを有するものであることを悟り、口語自由詩型に準じて、この文語詩型が正調たると破調たるとを問はず立派に現代言語藝術の一樣式としての使命をなし果しうるものであることを會得するであらう。言語藝術に於ける言語の位置は絕對である。われらは、われらの良き詩感の表現のためのみにこの言語に煉金の苦勞を忍ぶ必要のあることを信じるのである。印刷機のためにのみ國語改廢の要はなく、刊行物たのめのみに漢字節限の要はない。況して、實用の一面に固執し、國語と漢字との傳說的、藝術的微妙の關係を無視してローマ字採用を新らしがる必要は毛頭ない。[illegible]の精神に眞正の詩人にのみ托された民族語への藝術的奉仕である。

拙劣と典雅との連續であつた明治新詩史は、わづかの見るに足るデッサン數枚をのこしてその多くの基礎事業の効果を、あげて次時代に任せた。われらは此啓蒙期に人となり藝術家となつたすべての人に感謝を表したく思ふ。

（享樂詩以後は時間と頁とのなきため簡潔を計りて取捨に困り机邊便宜の書に多くの引例を得しものたることをおことはりしたし。筆者。）

# 奥吉野の山水

大町桂月

## 一　藏王の吉野

勅ス、優婆塞役公小角、海嶽抖擻ノ功、古今辛苦ノ行、前ハ古人ヲ超エ、後ハ來者ヲ絶ツ。若シ夫レ妙法明教ノ四海ニ施スヤ、神足仙脚ノ五方ニ遍キヲ以テスルニ非ズヤ。是ヲ以テ千年ノ久シキ、馨香逾遠ク、衆生ノ仰グ、瓜瓞益盛ナリ。天女ノ靈夢空シカラズ、神龍ノ嘉瑞爰ニ應ズ。因テ特寵ヲ示シ、以テ徽號ヲ贈ル。宜シク神變大菩薩ト稱スベシ。（原と漢文）

これ寛政十一年に、光格天皇の役小角に神變大菩薩といふ諡號を賜ひたる時の宣旨也。古來大師を賜はりたる高僧は少なからざるが、大菩薩を賜はるに至つては、さても大に振つたる事哉。神變大菩薩は實に修驗道の開祖也。大峯山を開けり。熊野より大峯山脈を縱走して、吉野に至るまでに、七十五靡あり。靡は行場をさす。大峯山上に、藏王權現の堂あり。これ修驗道の根本道場也。その出張所といふべきもの、吉野山にあり。吉野山は大峯山脈の低くなりて、吉野川に盡きむとする一帶の長峯也。上下二里の間、四百の人家あり。吉野神宮あり。吉水神社あり、水分神社あり。金峯山神社あり。如意輪寺あり。竹林院あり。喜藏院あり。東南院あり。櫻本坊あり。南朝皇居の跡あり。後醍醐天皇の御陵あり。西行庵あり、村上義光父子の墓あり。滿山皆櫻にて、下の千本あり。中の千本あり。上の千本あり。奥の千本あり。吉野山は日本唯一の花の山也。又南朝の山也。されど吉野山の骨髓は藏王堂也、滿山の櫻はもと藏王に奉納したるもの也。南朝の歷史も藏王を本尊とする金峯山寺の僧徒の作り出せる所也。外には楠氏あり、北畠氏あり、新田氏あり、菊池氏ありたるが、吉野山にては、僧院が皇居にて僧兵が天皇を擁護しまつりし也。僧兵の首魁を宗信となす。先年贈位せられたり。宗信の勤王に盡したるは、本尊の藏王あるを以て也。吉野は實に藏王の山也。

五年の前、久保大臣と共に花の吉野に訪ひたり。南朝の吉野に泣きたり。こたびは藏王權現の吉野の根本を窮めむとて、單身吉野山に上り、芳山館に迎へらる。主人の大村裕氏は青年の頃より政治に奔走し、縣會議員として令名あり。衆議院議員にも推されむとせしが、惜しや病んで歩することも能はず。坂本彌十郎氏代つて應接す。如何なる容態にかと、其室に至りて面會したるに、血色良くして、快辯舌に依つて縱橫を極む。唯歩する能はざるまでなりと安心す。明くる日は滯在し、東南院に五條順海師を訪ひて、修驗道の事を問ひぬ。共に吉水神社に詣でゝ、後醍醐の枕の下に開き給ひし石走る音を聞きぬ。藏王堂にも詣でぬ。堂は久く荒れ果てたりしが、今や修繕殆んど成れり。吉野山の中心に雄視して、二王門道を要す。藏王堂は幾度も兵燹に罹りたるが、今存するものは、康正元年の建立にして天正十九年豐太閤の修繕に係り、更に又今回大修繕を加へたるもの也。間口八丈五尺、奥行九丈一尺、棟の高さ九丈二尺、奈良の大佛殿に雁行する大殿堂にて、足利時代の樣式を存し、特別保護建造物に屬す。本尊の藏王權現は、三體ありて、いづれも右手に三鈷を握り、左手は五指を腰に當て、右脚を擧げて、忿怒の相、人を壓す。外國傳來の地藏、觀音、彌勒などにては、剛強なる日本國民を濟度するに足らずとて、神變大菩薩が大峯山上に苦修練行して、感得したる權現にて、日本獨得のもの也。

毎年大峯山に詣づる者、二十萬人に下らずと聞く。結袈裟かけたる先達に導かれ、錫杖ふり立てゝ、上るもの、下るもの、引きも切らず。上るものは、必ず直徑四尺、高さ二丈五尺の銅の大鳥居に手を當てゝ、

(先達) 吉野山銅の鳥居に手を當てゝ
(一同) 吉野山銅の鳥居に手を當てゝ
(先達) 彌陀の淨土に入るぞ嬉しき
(一同) 彌陀の淨土に入るぞ嬉しき

を三唱す。夏の吉野山、賑かなれど、雜沓せず。春より居殘れる藝者あれど、三味線の音は殆んど聞えず。日夕銅の鳥居の御詠歌を耳にするにつけても、藏王權現の功德の身に浸むを覺ゆる也。

## 二　大峯山の二泊

大峯山は金峯山とも云ひ、山上嶽とも云ふ。大正の今日、女人禁制の靈山は、世界廣しと雖も、唯一つ日本に大峯山あるのみ也。吉野驛より一里にして吉野に達し、吉野より六里にして大峯山に達す。別に又一路あり。下市口驛より五里にして洞川

に達し、洞川より三里にして大峯山に達す。吉野よりする者は洞川に下り、洞川よりする者は吉野に下るを例とす。これ大峯山だけに登るもの丶事也。大峯以南の連峯を縦走するものは、花の吉野、南朝の吉野、藏王權現の吉野を閑却すべくもあらざる也。

吉野より大峯山までの間に、大天井嶽、四寸岩山などありて舊道はその頂に通じたるが、新道は頂より下の横手に通ず。新道を行きては、昔の口が分らずとて、大村氏わざ〳〵三人の人夫を雇ひて、昨日舊道の草を刈り、荊棘を拂はせたり。今日も人夫の一人洞谷藤太郎といふもの、鎌を手にして先にたつ。洞谷榮吉といふもの、天杆棒にて、余の荷物を舁ぐ。外に山上の本坊の執事なる中垣彌三郎氏導を爲し、都合四人にて吉野を發す。途に宗信の墓を拜し、水分神社を拜し、金峯山神社を拜し、西行菴のあるあたりを右の下方に顧みて、馬脊の如き峯上を行く。これにて吉野山は盡きたり。前方に四寸岩山を仰ぐ。心見の茶屋、路を要す。小憩して、四寸岩山にさしかゝらむとする處にて新道と別れ、天杆棒の榮吉とも別れて、舊道を取る。大村氏のお蔭にて、昔の道の樣を知りたり。新道は幅廣く、且つ平らか也。舊道は細徑にして急也。新道は遊山的也。舊道にして、始めて修驗の趣を見る。昨日三人して、通れるだけに路を明けたるも、近年行人の絶えたることゝて、樹木なほ路を塞げり。身は樹枝と鬪はざるを得ず。足のみにては歩けず。手にて押し分けざるべからず。かくて神變大菩薩の昔が偲ばるゝが、難行苦行は一方ならず。荊棘のトンネルを這ひて通りたることも幾度なるを知らず。四寸岩山の絶頂に至りたるに、平らかにして、薄生ひたり。その薄を倒して、眼を四方に放つ。大天井嶽近く前に在り。その奥に山上嶽巍然として控へたり。藤太郎思ひがけずも、煙草入を拾ふ。これ昨日道明けに來りし時に落したるもの也。今日來り作はずんば、空しく山中に朽ち果つべかりし也。頂上までは、ともかくも路が分りしが、頂上を過ぎてよりは路全く絶えたり。身は林中に沒して方角も分らず。藤太郎さへも間誤つく。終に分別つけて右に轉じ、杉の若木に身を支へて急斜面を下り、新道に出でゝ、ほつと一と息つく。名にし負ふ百町茶屋に至れば、榮吉既に在り。苦しかりつらむとて笑ふ。苦しかりしかはりに、飯旨しとて午食す。大天井嶽も舊道を取るかと、中垣氏余の意見問ふ。大村氏の命令にて、四寸岩山は固より、大天井嶽も路が明き居る筈なるに、三人の人夫其任を果さず、今日來て見れば四寸岩山すらも半分以後は明き居らず大天井嶽は全く道なかるべし。うか〳〵分け入らば、山上にて日暮るゝかも知れず。これより新道を取らむと云へば、藤太郎

喜んで吉野さしてかへり行きけり。

新道を歩けば、らくなもの也。大天井嶽の頂を右に見上げて、その東側を行く。數十町四方にかけて、山焼けたり。山毛欅などの殘骸處々に横はる。野火にやと問へば、いや山林官の焼きたるなりと、中垣氏いふ。何故に焼きたるぞと問へば、材木にならぬ木を除きて、杉を植ゑむとするなりと、説明を聞いて、始めて合點す。洞辻の茶屋にて、洞川よりの路と合し、少し行けば、嶮巌路に當る。油こぼしと稱す。その嶮巌を登りつくせば理源大師の銅像立てり。理源大師は修驗道中興の祖也。嶮巌更に又崛起して路を扼す。鐘掛岩と稱す。これを過ぐれば、路平らか也。坂にならむとする處に、龜石とて、龜に似たる石あり石柵を遶らす。右に轉じて、西覗岩の上にたつ。直下數百仭、俯視すれば、身の毛もよだつ。こゝは大峯山の一の行場也。綱に支へて半身を突出させ、巌壁に不動の像を拜ませて、親孝行をするか。致します。虚言を云はぬか。言ひませぬ。精出して働くか。働きますなどゝ、先達が初心の若者を訓戒するなりと聞く。教場に於ける修身の先生の百日の説法よりも、ずつと效果あるべしと思はるゝ也。我等の如き老人は最早斯る訓戒を受くる柄にもあらず。恐ろしくて不動も拜めず。唯巌頭より眼を放ちて、これは〳〵と壯觀に驚く。

右に洞川の龍泉寺の出張所、左に喜藏院、竹林院、東南院の出張所、合して一時に數千人を收容するに足るべし。五千尺以上の山上に於ける斯る壯大なる設備は、大峯山以外にはなき所也。なほ一段上の藏王堂の前に本坊あり。余は本坊に迎へられぬ。藏王堂は既に扉を閉ちたれども、日は未だ暮れず。榮吉に案内せられて、裏行場に至り、危巌を攀ぢ、巌穴を潜り、東覗岩の上に膽を消し、平等岩を攀づる「魂も身に添はず。ます〳〵大峯山の壯觀に驚く。本坊に宿したる上にも、酒を饗せられ、山上唯一の俗なる加藤新光師と枕を並べて臥するを得たるは我身にとりて、此上もなき光榮也。その光榮のうれしさに、一泊の豫定を延ばして二泊しぬ。

明くる日は、本堂に藏王權現を拜みぬ「神變大菩薩を拜みぬ。涌出嶽とて、最高點の巌上に、千里の眼を放ちぬ。お花畑に逍遥して、日本岩の上にも立ちぬ。お花畑とは、三四寸の姫笹の生ひたる山頂の平地也。龍泉寺出張所の宮田佐次良氏來り、余を招きて晩食を饗せむとす。氣分惡ければ斷る。さらばとて、宮田氏膳を持ち來る。晩酌するほどに、氣分なほりぬ。本坊の人々も飲み、宮田氏も飲む。一同大に醉ひたり。出でゝお花畑に至り、日本岩の上にて、又飲む。西北方の一天、赤くなり居れるを、中垣氏指して、これ大阪の市街の夜光なりと云へり。

## 二　彌山の宿

大峯山より南に續きて、大普賢嶽となり、國見嶽となり、行者還嶽となり、彌山となり、佛經嶽となり、明星嶽となり、佛生嶽となり、孔雀嶽となり、釋迦嶽となり、大日嶽となり、天狗山となり、地藏嶽となり、笠捨山となり、玉置山となる。この一帶の連山を大峯連山と稱す。ハイカラの徒、大和アルプスの名を付す。すべて樹木に蔽はるゝが、到る處山骨を露はし、高さは數百仭、長さは七八里にも亘り、絕えては又續く。斯る巖壁の連續は他に其比を見ず。巖壁の樹木及ばぬ處には、高山植物の草花を見る。益珍とすべし、高さは五六千尺に過ぎざるも、近畿にては、最高の峯也 山相雄偉にして甚奇を極む。神變大菩薩開いて修驗道の山となしけるも、亦宜なる哉。

この連山中の最高峯は海拔六千三百二十尺の佛經嶽にして、海拔五千六百七十四尺の大峯山は、高さに於て、第二流に列すれども、頂上廣くして、西覗岩、東覗岩、日本岩、鐘掛岩などの奇巖四方に散在し、お花畑もあり、飲用水もありて、連山中の盟主と推さゞるを得ず。藏王堂はこの峯を除きては、他に置くべき峰なき也。

大峰山より南の山々を縱走するを俗に奥駈と稱す。大峰山に詣づるものは、年々二十萬人に下らざれども、奥駈を爲すものは今もなほ一年中、四五百人に過ぎず。近年登山熱盛になりたれども、大峯の縱走が僅々四五百人にては、前途遼遠なる哉。

大峯山よりの路は、急に小さくなれり。樹木もよく繁れり。三十町ばかり下りたる處、小篠の宿とて、一小堂あり。清水ちよろ〳〵流る。大峯山の奥院と稱して、こゝまでは、稀に來るものあり。こゝを過ぐれば、いよ〳〵深山也。人跡絕えて、鳥語滋し。こゝに至りて、はじめて石楠花を見る。大峯山に詣で歸る者、幾んどみな石楠花の葉を手にす。然るに大峯山までの途中には、幾んど石楠花を見ず。山上の藏王堂に石楠花の葉を賣り居るを見て、始めて參詣者の手にせる石楠花の出處が分りたり。植物學者の中には、年々二十萬人が石楠花を折り去らば大峯山の石楠花終に盡くるに至らむ。石楠花を折ることを禁ぜざるべからずと心配するものもあれ。ど折る也。掘るに非ず。大峯以南石楠花は無數也。年々二十萬枝を折るとも、又二十萬枝を生ずべし。石楠花の葉は藥用になり、又烟草の代用にもなる。參詣者の石楠花の葉を持ちかへるは、一知半解の植物學者が面白半分に植物を採集するよりも賢徐あり。藏王權現は人の病を救ふ爲めに、石楠花などは惜まざるべき也。

石楠花は高山にありふれたるものにて、珍とするに足らず。

大山蓮華は大峯連山の珍也。石楠花、躑躅などゝほゞ同じ大さの灌木也。大峯山に上るも、奥駈を爲すにあらずんば、之を見るを得ず。奥駈を爲すも、今や八月に入りたるを以て、その花を見るを得ざりき。路はあるにはあるも、多くは熊笹に埋れたり。その熊笹時に腰に及ぶ。頭上に喬木繁りて、日光を遮るはうれしきが、その代りに左右の眺望開けず。眺望開くる所に、一と息つきて腰を卸す。右に谷を隔てゝ、稲村嶽巖壁を露出し長く南に延ぶ。左にも折り／＼巖壁を見下す。大普賢嶽の頂を左に、國見嶽の頂を右にして、絶壁の下に斧斤入らざる原生林を見下し、大蛇ケ原山に對して午食す。水なし。魔法瓶の酒を茶の代りにしたるは、よかりしが、一時間ばかり過ぎては、喉渇くこと甚し。路は行者還嶽の嶮を避けて、その東側に沿ふ。顧みて仰げば、絶壁天を衝く。今の奥駈の道は、峯稜若しくは側面に通じて、多くの峯の頂上を避けたるが、もとは此の行者還の絶嶮をも上下せしなるべし。これ實に奥駈中、第一の難路。行者還とは、その難路を誇張して形容したるものと思はるゝ也。稚兒止りに至らば、水を得べしと榮吉のいふに、喉の渇も幾分か減じたるも、生憎晴天久しく續きたることゝて、ある筈の水なく、失望して、渇よ／＼加はる。こゝならば水あらむと榮吉に導かれて、左の谷に下りたるに、矢張水なし。渇更に又加はる。一つ多和といふ處に、一間四方ばかりの穴ありて、うれしや、底に水溜れり。されど濁りて、ぼうふら泳ぎ居りたり。如何に渇すればとて、飲む氣にはなれず。渇を抑へて行く。路傍に鑵詰を四つ重ね、紙を夾みて、大阪某々隊と署名し、荷重きに過ぐるを以て、茲に之を捨つと記しあり。肩の苦しかりしことは思ひやらるゝが、こゝまで持ち來りて捨つるとは、辛抱足らず。腑甲斐なき人達哉。その鑵詰を捨つる心を推さば、苦しさに人をも捨つるなるべし。非常をも捨つるなるべし。到底大に成功すること能はざるべしと、鑵詰を顧みて一笑す。

奥行八町の標に達したる時は、日既に暮れたり。理源大師の銅像立てり。その銅像あるを以て、坂を奥行八町と稱す。奥行とは理源大師の名也。銅像の前、一間四方ばかり凹みて　うれしや、水溜れり。火にて照さば、水は濁り居らむ。或はぼうふらも游ぎ居らむ。されど渇極まれり。濁りて居らうが、ぼうふらが居らうが、今や飲まざるを得ず。見ざるこそ綺麗なれと、ゴムの管を下して、一と息に飲み、甘露々々と舌鼓うつ。此にゴムの管を携帶するは、余の工夫に係る。綺麗に清水によろ／＼濁りて、手にてもすくへず、飲器にてもすくへざる場合にも、ゴムの管を當てゝ吸へば、思ふ存分水を飲むを得べし。瓶の中にさし入れて飲むことをも得べく、ゴムの管だにあれば、

一切飲器を要せず。一端に竹管をはめ、他端と連絡して輪にし之を首に引掛くれば、荷にもならざる也。

あせる榮吉を制して休息し、登山袋の中より鐵葉提燈を取り出し、蠟燭を立てゝ、火を點ず。鐵葉提燈は凡そ二寸四方、やつと蠟燭が立つぐゐの高さにて、上下三側面は鐵葉、一側面だけが玻璃にて、銅線のつるを添へたり。余は懷中電燈あるを知らざるに非ず、又小田原提燈あるを知らざるに非ず。されど懷中電燈は步行する時にだけ用ゐるべくして、室內の常用燈にはならず。小田原提燈は室內若しくは天幕內に吊し難き場合多く好しや吊すを得ても、火の光薄くして常用燈になり難し。鐵葉提燈ならば、步行にも役立ち、室內の常用燈にもなる。火の用なき時は、蠟燭入れとなり、之に蠟燭を入るれば、折るゝことなし。榮吉は始めて見たることゝて、これは便利なりと感服す。夜間山を登るといふことも、榮吉には始めての經驗也。殊に聖寶八町は頗る急峻也。一面に唐檜の林にて、峻嚴には非ず。露出せる根、自から足がゝりとなる。それを手にて摑まざれば登れざるほどに急なる處も少なからず。休息せずに、四十分かゝりて、やつと登りつくしたり。山館の火光を見たる時は、世にも嬉しかりき。

こゝは彌山の頂上也。大峰山より直徑二里ばかりなれど、彎曲し、且つ屈折せるを以て、九里ありと稱す、實際は六里ぐらゐのものなるべし。山館は去年出來たりといふ。四間ありて、普通の廣間は、鑵詰を遺棄したる天幕隊の七人が占めたり。余は聖護院の主僧を請ずといふ特別の室に延かれ、神變大菩薩の尊像の前に快く眠れり。榮吉は天幕隊の室に混入せしやう也。

目に近く彌山を見つゝ絡々をひねもす越ゆる峰頭の道

## 四　深仙の香精水

余の起き出でざる前に、がや〳〵騷ぎて、天幕隊は出發せり。それより一時間ばかり經て、余は起き出づ。水の乏しきを思ひやりて、洋杯一杯の水にて顏を洗ふ。路あるまゝに、だら〳〵登りて、彌山の最高處に至る。小祠を安置す。四面唐檜の林にて、眺望なし。參謀本部の五萬分の地圖に、この山の標高を記せず。大峯山よりは、ずつと高く、佛經嶽よりは少し低きやう也。

昨日の渴に懲りて、今日は魔法瓶に水を滿たしたり。一寸下り一寸上り、凡そ二十分にして、佛經嶽の頂にたつ。うれしや頂尖れり。大峯の湧出嶽以來、こゝに始めて四方の眺望を得たり。彌山近く脚下にあり。少し離れて、西北に朝鮮嶽屹立す。行者還嶽や、大普賢嶽や、大峯山や、北に相連り、明星嶽や、

佛生嶽や、釋迦嶽や、南に相連る。東には大臺ヶ原山。西には高野山。金剛山もそれと指點せられて、東西南北山又山、其盡くる所を知らず。この眺望を肴に、一杯あらばと、口をすべらせば、宿に酒ありき。買つてくれば好かりしをと、榮吉いふ。榮吉は下戸也。あゝ酒ありしか。酒などは無かるべしと、獨合點として、昨夜は酒を註文せざりき。酒あらば、魔法瓶の水の外に、一本買つて來りしものを、何故敎へてくれざりしぞと云へど下戸に上戸の氣持は分らず。榮吉は唯えへゝと笑ふのみ也。

榮吉に促されて山を下り、今日も熊笹を押分く。大山蓮華や石楠花や、ますく多し。明星嶽を過ぎ、右に谷を隔てゝ、七面山の巖壁を見る。楊子宿とて名のみ殘れる處に午食す。少し行きて、天幕隊の七人に追ひつく。これよりこの隊と相前後す。

余より一時間半も前に出發したるにても、この隊の步調の遲さは、推して知らるゝが、今此隊と相前後するは、余の步調の遲くなりたるに非ず。景致なき處は余前になり、佳景に逢ひて、余後になる也。佛生の橫斷とて、佛生嶽の頂を經ずに、其西側の急斜面を過ぐ。丸太を橫へて、步行に便にす。その丸太多くして、幾百といふことを知らず。このあたりは余天幕隊より前になりしが、孔雀嶽を過ぎ、金剛胎藏兩界の分れ目とて、巨巖東西に裂けたる處にて、余後になる。西に見下す千仞の谷は、巖又巖にて、景致奇拔なるに、その谷より淸風吹き上りて、涼氣乾坤に溢る。立ちさりかねたりしが、榮吉に促されて、綠の梟に到り、又も休息す。巨巖谷底より直立し、路は巖頭より少し下を橫斷す。脚底には、阿吽の狛犬に似たる岩を始めとして、奇巖多し。南は近く釋迦嶽の雄姿を仰ぐ。このあたりには、高山植物の草花も散在す。林中に封ぜられたりし身、こゝにて天日を仰ぎ、いろくの奇觀に接しける也。

榮吉に促されても立去らず、ますく天幕隊に後れたりしが釋迦嶽を攀づる途中、杖捨といふ處あたりにて、早や前になりたり。釋迦嶽の頂にて二十分も休息せしに、天幕隊は未だ來らざりき。この頂も、惜しや尖れり。四方の眺望は佛經嶽と大差なきが、北に綠の梟の巨巖を見下し、南に大日嶽の巖峯を見下すの壯觀は、佛經嶽に無きのみならず、大峯連山中、どの峯にも無かるべし。余は滿足す。釋迦嶽の壯觀は、奧驅の難行苦を償ひて、なほ餘ある也。

急坂を直下して、深仙といふ處に至る。七十五靡中にても、殊に名高き靈場也。北に釋迦の巖峰を仰ぎ、南に大日の巖峯を仰ぐ。西は小高き林丘に擁せられ、東は前鬼の溪谷を見下す。平らかにして細長く、如何にも淸淨にして神聖也。大峯連山中の神境とも云ふべくや。一町ばかり北に行きて、釋迦の巖下に

至る。香精水と稱する清水、巖腹より涌き出づる筈なるが、連日の晴天に涸れたり。されど、溜りたる水、巨槽に滿ちたり。一掬して、淸風腋下に生ずるを覺ゆ。戻りて休息す。榮吉頻に前進を促す。まて〳〵、天幕隊は渇し居るならむ。而して香精水あるを知らざらむ。敎へてやらむとて、待つほどに、天幕隊來れり。果して香精水を知らず。敎へてやれば、一同行きて飮みて、大に喜べる樣也。

榮吉は昨日の夜行に懲りたり。今日は日暮れぬうちにとて、路を急ぐ也。余とても夜行を好むものに非らず。榮吉の云ふが儘に、大日の頂上を經ずして、其横を通りたり。榮吉は兩童子の奇巖にも立寄らずして過ぎむとせしが、まて〳〵、よしや日暮るゝとも、この奇巖を閑却すべきに非ずとて、余先んじて兩童子岩の下に至る。榮吉も仕方なしに附きて來る。一は高く、一は低く、高きは六七丈もあらむ。低きも四丈を下らず。筍の如き形を成して、並び立てり。その兩岩の底は一面の大盤石也。左に釋迦の巖壁を望み、前に谷を隔てゝ、孔雀嶽一帶の山腹に、唐檜の純林を望む。五百羅漢とて、無數の奇巖參差錯落す。佛經の頂と云ひ、釋迦の頂と云ひ、緣の鼻と云ひ、深仙と云ひ、この兩童子岩と云ひ、うれしくも今日は眼の淸福を多く得たるもの哉。

彌山より前鬼まで九里と稱するが、これも六里ぐらゐのものなるべし。深仙より前鬼までは五十町と稱す。この間は難徃なき代りに、大部分は空澤卽ち路にて、且つ急也。上るよりも、下る方が、却つて骨が折れるやう也。それにても、日暮れぬ前に、前鬼に達し、森本坊に投ず。この夜は酒を得たり。天幕隊は前鬼に來らず。途中に天幕を張りしならむ。

## 五　前鬼の裏行場

森本坊の五鬼繼義岡師に導かれて、前鬼の裏行場に行く。榮吉も從ふ。今日は往復二里に足らず。荷物は辨當と酒とのみなれば、榮吉に取りては、氣樂なる一日也。山腹の細路を數町行きて、閼伽坂といふ峠に至る。地藏を安置す。溪聲を耳にしつゝ、三町ばかり下りて、溪谷の彼方に千手瀧の頭を見る。又二町ばかりにして、前鬼川の溪流に續く。十間四方ばかりの碧潭を見て、覺えず心躍る。吉野を發して以來、こゝに始めて溪流に接しける也。此潭を垢離取場と稱す。溪を渉りて、巖上の日蔭に休憩すること一時間に及びぬ。下戸の榮吉には菓子を與へ余には梅酒を分ちて義岡師頻りに修驗道を說く。水しぶき激しき巖壁に附着して動かざる蝦蟇も、亦謹聽するが如し。溪に沿うて下る。溪心に深淵あり。底知らずの淵とて、深さが分らずと、

義圓師いふ。左方の崖より清水迸り出づ。一掬して梅酒に熱したる喉を醫す。溪を離れて、間もなく、溪中の弧峰の上に立つ。四面に碧山を仰ぎ、脚下に千手瀧を見下す。峰を下りてその千手瀧を仰ぐ。高さ二十丈ばかり、直立せる巖壁を奔飛す。平らかに流るゝこと數十間にして、又懸りて不動瀧となる。これは高さ三十丈もあるべし。不動瀧の底は、垢離取場の末也。頭上にも瀧、脚下にも瀧世にも珍らしき美景なる哉。こゝぞとて、行厨を開き、飲み且つ食ふ。巖壁の雞尾蘭、瀧より起る風に戰ぐを見ても、涼しさ心に浸みぬ。

千手瀧の右手を攀づれば、巖壁呀然として口を開く。その口二つあり。右が胎藏窟と稱し、左を金剛窟と稱す。金剛窟には神變大菩薩の像を安置す。千手瀧の上部、窟の横手を奔飛す。二窟の前は平らかにして、數十百人を立たしむるに足れり。屏風の横斷とて、數十間の間、上も絶壁、下も絶壁、幅一尺ばかりの處を過ぎ、二十八宿の行場を鏁にて登る。仰げば、巖壁直立して天に朝す。足は殆に付かず。凡そ鏁の一尺毎に、漸く足を容るゝだけ 鐵輪ありて、足をそれに托する也。大峯奥駈の中にて、最も危險を極むる處にて、足にて登るに非ず。全く手にて登る也。余先づ登り、次に義圓師登り、最後に榮吉登り、一同登り終りて、やれ〳〵と、胸なで下す。

鷲の窟の前に休息す、石楠花の枯葉路に滿つ。莖自ら裂きて管を成す。一つ取り上げ、火を點じて吸ひながら、義圓師に向ひ、吸うて見られよ、煙草の代用になると云へば、義圓師吸ひて、眞に然り。われ前鬼に生れて六十年、修驗道は窮めたるが、石楠花の莖が煙草の代用になることは、今始めて知れりといふ。榮吉も吸ひて、なるほどゝ感服す。

千手瀧の上流に出でゝ、馬頭瀧を仰ぐ。高さは十丈ばかりなるが、巖を傳はずして直下す。先きには不動瀧を見下して千手瀧を仰ぎ、今や千手瀧を見下して馬頭瀑を仰ぐ。三瀑を總稱して三重の瀧といふ。高さを合すれば、六十丈もあるべし。水量も少からず。嗚呼三重の一瀑、奥駈の單調を破り、水なき大峯連山の缺を補って餘りある也。

戻りて垢離取場に休息す。われ毎日午睡するを常とすとて、義圓師石上に仰臥するより早く、鼾聲を發す。溪風も通ひて、師の夢や清からむ。余もその傍の石上に臥したるが、師の鼾聲耳につきて眠られず、鼾聲の届かざる石上に轉じて臥す。神變大菩薩紫雲に乘りて、下り來りて、余の手を引くまゝに、余も雲に乘りて天に上る。足を動かすともなく、身自ら動きて飛行す。脚下を見れば、山唯黑く、川唯白し。何處ともなく、笙簫聞ゆ。足地に付くかと思へば、大菩薩余の手を離して窟に入る

余も従ひて窟に入る。窟の様、今日見たる金剛窟のやう也。窟外を見るに、千手瀧もかゝれり。今日窟に入りたる時には、いろ〳〵俗念ありしが、今や何も俗念なし。成佛とは、この事かと、何となく嬉しく、大菩薩の側に端坐せしに、おうい〳〵と呼ぶ聲す。應と答へて、眼を開けば、榮吉の聲にて、夕立が來さう也。いざ歸らむといふ。さらばとて歸りしが、夕立に遭ひたり。この夜も、森本坊に宿りぬ。天幕隊は裏行場を見ずして去れりと聞く。寶の山に入りながら、手を空しうして歸るとはこの事にやと、氣の毒也。

前鬼とは、山中の小部落の名稱也。深仙へ登るにも、五十町の急坂あり。前鬼口へは三里あるが、その間にも、同じく五十町ばかりの急坂あり。山又山の上なる一凹地、層々鹿垣を設けて、田一町、畑一町、俗塵到らざる仙境也。神變大菩薩に從ひて大峯山を開きたる義覺、義賢の子孫、この前鬼の地に住して五鬼上の仲之坊、五鬼繼の森本坊、五鬼助の小仲坊、五鬼熊の行者坊、五鬼童の不動坊の五坊、修驗道と共に榮えしが、明治以後修驗道の衰ふるにつれ、前鬼も衰へて、今存するは、五鬼繼の森本坊と五鬼助の小仲坊との二坊のみ也。

森本坊は、坊に接して、佛堂あり。こゝに安置せる神變大菩薩の木像は、大菩薩の自刻と稱す。穢なきが一風變りて有名也。

大菩薩に侍する前鬼後鬼樣拜すべし。慶長年間の古鐘懸る。別に秘藏する黄金佛もあり。松浦武四郎の描きたる大峯連山の繪圖をも藏す。神變大菩薩は熊野より大峯に入りて吉野に拔けたりと傳ふ。後世修驗道は天台眞言の二派に分れて、天台修驗は熊野より入り、眞言修驗は吉野より入る。五鬼繼義圓師は天台修驗に屬す。修驗道とは如何なることにやと問へば、皎然大僧正の偈、簡にして要を得たり。それに我れ註解を加へたりとて小冊子を與へたり。

入二瀧窟一悟二鑁塔一

これ偈の第一句也。註解の一節に曰く、諸の衆生は本と無形なり。塔婆を以て體相とす。これ即ち鑁塔なり。されば我等が五大は大日如來の全體にして、十界凡聖假一にして、横には十方に遍く、竪には三世に亘る。一切の生とし生る者は皆五大の依身にあらざるはなし。山河大地草木叢林皆此れ五輪の塔婆なり。此處を入我我入と云ふ。斯る稀有の妙法を親たり龍樹大士に謁して、此印璽を授り玉ひ、我日本末世相應の眞俗不二の修驗道を立てられ、葛城大峰の靈地を道場となして、末世下根の我々に至るまでも、皆一佛乘に入らしむる貴き法を覺悟し玉ふと云ふことなり。

此法儀軌經外傳

これ偈の第二句也。註解の一節に曰く、佛法に空見斷見といふ病がある。其病といふは、無の見に二人あり。斷見と空見となり。有の見に二人あり。常見と自然見となり。吾心は元より不生不滅にして成佛すると云ふとも、一塵をも添へず、又生死に輪廻すといふとも、一塵をもかけず。生死は假にして、實なし佛性常住なり。形は滅すと云ふとも、本性は滅せずと堅く執るは常見の外道なり。次に法は元より已れと成り、始めて修行するに及ばず。鶴の脛は長く、鴨の脛は短かく、花は紅、柳は綠、飢たら喰ひ、眠ければ眠ると執るは自然見の外道なり。次に一心一念生ずれは、生死に廻と成る。無心無念にして、知らず、思はざれば、輪廻は永く止むと執るは斷見の外道なり。次に迷なければ衆生もなく、覺りなければ佛もなく、法を聞くも、修行するも、信心を運ぶも、皆迷なり。聖經は反故なりと執るは空見の外道なり。誠に爰の處が少しの違ひで、純金と銅金と取り違ふ。さすれば冷煖自知と申して、唐辛は辛き物と聞きても嘗めて見ねば知れない。自身一口嘗めて見て、成程爰じやとしつかりと知る處で、禪家には大悟十八度、小悟其數を知らずと申すさうじや。現に角段々修行して見ねば容易に知れる事では無いから、第一に修行して此境には入るなり。

造次顚沛住三昧」

これ偈の第三句也。註解の一節に曰く、行住坐臥寸間なき法にて、寢ても、寤ても、一寸も休みの無き修行なり。此の境界に入れば、手を擧るも足を動かすも、皆是れ秘密の印となる。又今日一切の言語を發すれば、すぐに秘密の眞言じや。一陀羅尼の實行とは爰のことじや。如實知自心とて實の如く吾が本性を見るべし。外の物では無い。

開レ口呼吸靜三千」

これ偈の第四句也。註解の一節に曰く、世間のありとあらゆる物は是と非となり。此の二つを離れて濟たければ無我無心にして、非は非にして濟なく無心なり。是れ則ち無相不修の妙用なり。されば瞋る心は則ち火大なり，隱々たる心は地大なり。又物を愛し戀ふる心は水大なり。一切聲を出すは風大なり。此四大は法界の性體にして、一つも吾物に非ず。吾無ければ何物か輪廻すべき。本來法身佛にして、口を開けば三千世界に照り輝くといふことなり。

義圓師なほ平易に言ひ碎きて曰く、修驗道は、胎内、胎外、生起、死滅に對して、十界の修行を爲すなり。胎内とは母の腹内にある間を云ひ、胎外とは生れたる時を云ひ、生起とは現世を云ひ、死滅とは未來を云ふ。十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人、聲聞、緣覺、菩薩、佛界なり。この中、地獄

より大人までか六凡修行にて、隣開より佛界までが四聖修行なり。修法を柱元供養法といふ。七十五膳を胎内、胎外、生起、死滅に擬し、熊野より笠捨山までに胎内の法を修し、笠捨山にて胎外の法を修し、それより杖捨までは生起、杖捨より吉野に至るまでは死滅の法を修するなり。云々。

餓鬼の修行とは如何たることにやと問へば、先づ断食の類なりといふ。断食とまでにあらずとも、断酒だけにても可也。塵外の別天地、前鬼川の溪谷を下し、千手瀧を仰ぐ金剛の窟中他日我れ來つて、餓鬼の一法なりとも修せむ哉。

名にだにも鬼の山ぞといふからに君めぐり來てさぞやうからむ

と、義岡師詠みて贈られければ、之に答ふるとて

うれしくも鬼の名に負ふ山に來て佛のごとき人にあひけり

## 六 天誅組の遺跡

前鬼の仙境を出でゝ、五十町の急坂を下り、凡そ三分の二も下りたらむと思ふ頃、左の方よりごう〳〵と音す。凡そ十町もあらむ、前鬼川一落して大瀧となる。水勢如何にも壯なるが、高さは十丈にも足らぬやう也。坂を下り盡せば、一支溪右より來りて、前鬼川に合す。こゝにて午食す。山坂全く盡き、路は前鬼川の右岸に沿うて平らか也。成瀬とて、一軒の農家ある所細長き田も開けたり。その農家に入りて休息す。男女五六人の子供、珍らしがりて我等を見入る 川の彼方に巨嶽天を衝くさま、人をして目を刮せしむ。軒は朽ちかゝりて、しのぶ生ひたるが、それも晴天つゞくにつれて、憐れや枯れむとす。黒雲天に湧きて、日も隱れたり。溪風殺到して草木皆動く。山鬼の襲來せしが中に、唯一本の朴、風に葉を飜されて白し。山鬼の襲來せしかとばかり音たてゝ夕立大に到る。雷神も鼓躁す。昨日の夕立はほんの微滴にて、直に止みたるが、今日は烈しき夕立にて、止みさうにもなし。軒のしのぶ生きかへりて、風に躍る。余横になりて眠る。榮吉も眠る。目を覺せば、夕立は止みたるが、日は既に西に傾けり。榮吉あくびしながら、今日も夜行かと歎息す。

前鬼口に至りし時は、午後五時也。夜行と決心して、橋畔唯一の物賣る家にゆる〳〵休息す。こゝにて東熊野街道に出でたり。縣道にて、車を通ず。前鬼川もこゝに來りて、北山川に合す。この北山川は大峯連山の東を南流し、十津川は大峯連山の西を南流して、共に熊野川に合する也。前鬼川は澄めるが、北山川は夕立の痕を留めて濁れり。このやうなる時に香魚が釣れるとて、主人竹竿を肩にして出づ。十歳ばかりの男の子、小躍

りゝながら、跣足にて從ゝゆけり。北山川にそうて上る。白川といふ部落にて、日全く暮れたり。例の鐵葉提燈に路を照して夜九時河合に達し、後岩屋に投ず。

河合には一泊の豫定なりしが、宿の主人吉野名勝誌をもち來り、村の收入役中窪正一氏上北山村史稿を與れたり。上北山村史稿は貰ひたれば、後にてゆる〱讀むを得べけれど、吉野名勝誌は貰ふわけには行かず。而かもこの吉野名勝誌は林水月といふ俳の著せるものにて、書名だけにては、吉野の勝地の案內のやうに思はるゝが、內容は全く別にて、極めて忠實に、又極めて精密に南朝の史績を調査研究したる名著也。讀まざるべからずとて、二泊することに定めたり。宿に洗面所はあれど、天地自然の洗面所へとて、朝早く北山川に出づれば、我よりも先きに、十歲ばかりの少女來り居りて、石上に俯して顏を洗ふ。川には昨日の夕立の痕なほ殘れど、濁るといふまでにはあらず音たてずして靜に流る。搖曳せる白雲、離れては合し、合しては離るゝにつれて、對岸の諸峯或は現れ、或は隱る。天地みな活動する中に、一帶の人家寂として人未だ起きず。唯一雞啼くこと頻り也。

終日余は樓上に讀書せり。街上には馬糞もあるに、蠅は一疋も來らず。余感服して女中に語れば、宿の主人、潔癖にて、殊に蠅を嫌ふ。蠅取器械を備へ、もちを置くのみならず、室に居れば絶えず蠅打を手にして蠅を殺し、少しの間もじつとしては居らず。それ故にこの家にだけは蠅居らず。主人旅行したる時は、蠅むらがり來ると云へり。榮吉は主人と共に、魚釣りに行きしが、一尾も釣り得ずして、空しく歸れり。主人は一尾の鰻を釣れり。それが晩酌の膳に上る。なほ新鮮なる海魚も上る。河合は山中の小都會にて、人の交通は不便なるが、尾鷲まで鐵索の設備ありて、荷物の交通は至極便利なる也。

河合は大字の名にて、村の名を上北山といふ。上北山村史稿に據れば、文久の昔、天誅組の來り屯するに遭ひて、この山中の別天地に、開闢以來茲に始めて、驚天動地の大騷動起れり。吉村寅太郎、藤本津之助、松本謙三郎など天誅組の志士、中山忠光卿を奉じて、義兵を河內に擧げ、文久三年八月十七日、先づ五條を襲ひて凱歌を奏し、維新史の序幕を開けり。されど、進んで高取城を攻めて敗れぬ。退いて天の辻を守りて、又敗れぬ。十津川の山中に潜みしが、紀州、郡山、彥根、津などの追兵潮の如く押寄せければ、潜み果つべくもあらず。一條の血路をこの大峯連山の嶮に開かむとす。天誅組の一人にて十津川の産なる深瀨繁理前鬼を經て上北山の大字白川に來り、その親戚の福田氏に依りて一鄕を徇へ、米、鹽、松明、草鞋を徵發して、

其一部を前鬼に遁べり。然るに天誅組の本隊は、前鬼を經ずに笠捨山を經て、九月二十一日白川に來り、林泉寺に屯す。その勢凡そ百人、人夫も凡そ百人ばかり也　村民はみな思ひ〳〵に山間に隱れたり。天誅組は人夫を得むとせしに、得ること能はず。前鬼の兵糧は津藩の兵に抑へられたり。二十二日は空しく滯在し、二十三日になりて發して河合を過ぎ、北の方吉野川の川上さして立ち去れり、去るに臨んで林泉寺を燒けり。一と足ちがひにに、津兵二百人ばかり白川に來れり。深瀨繁理はひとり殘り居りけるに、發見せられて、北山川畔の露と消えぬ。二百の津兵は二十四日北進し、その跡へ同日同藩の兵二百人ばかり來り、前隊を追うて夜行し、二十五日に紀州藩の兵六百人來りて河合に泊し、二十七日に北進せり。これにて村民は全く安堵したるが、あはれや天誅組は鷲家口に於ける最後の一戰に大敗し、吉村斃れ、藤本斃れ、松本斃れ、多く皆斃れ、中山卿のみ數人の從者に護られ、重圍を脫して、長州に落ちゆきける也余は白川を過ぎけるも、知らざりしことゝて天誅組の志士の跡を弔ふを得ざりき。

## 七　北山宮の御墓

後呂屋の主人に送られて河合を發し、北山川の支流なる小橡川を溯ること二十町ばかりにして、北山神社に詣づ。北山宮を祀る。縣社にして、吉野神宮に附屬す。村長の奥田與四郎氏、社務所に我を待てり。小憩して天狗嶽を仰ぐ。景致凡ならず。村長導を爲し、小橡の部落を過ぎ、左に釣橋を渡りて瀧川寺に至り住持に導かれて、北山宮の御墓を拜す。御墓は本堂の後、數十級の石階の上に在り。柵門を設けて、人の入るを許さず。中に小さき石塔立てり。嗚呼これが皇族の御墓なるか。吉野山にても、懷古の涙に堪へず。こゝに來りて、感慨ます〳〵切也。

吉野名勝誌に據れば、後龜山天皇の曾孫尊秀王は兩統迭立の約行はれざるを憤り給ひ、前大納言日野有光と相圖り、嘉吉三年九月二十三日の夜、內裏より神璽を取り出し、叡山に義兵を舉げて、南朝の恢復を圖り給ひしが、戰利あらずして、根本中堂にて自刄し給へり。日野有光も戰死せり。遺臣神璽を懷きて伊勢に逃れ、そこにおはせる尊秀王の二王子を奉じ、大和に入り、この寺を一の宮の御座所とし、吉野川の川上なる川上村字神の谷の金剛寺を二の宮の御座所とせり。一の宮のおはす處は北山莊なれば、北山宮と稱し、二の宮のおはす處は河野鄕なれば、河野宮と稱する也。南北數里を隔てゝ、相依り相助けて、南朝一縷の命脈をたもちしに、誰か圖らむや、兩宮とも赤松氏の遺臣が主家恢復の犧牲になり給はむとは。

足利部下の豪族赤松氏は滿祐に至り、將軍義教を弑し、誅に伏して國除かれたり。遺臣主家を恢復せむとして、玆に吉野の奧の神璽に思ひ付きたり。岩見太郎左衞門とて遺臣の一人、内大臣三條實雅卿に仕ふるものありければ、間島彥太郎、中村貞友等は、神璽を取戻して朝廷に獻ずべきに付き、赤松家の罪を許されよと、岩見をして三條内大臣に請はしめけるに、内大臣之を諾しぬ、内大臣は幕府の外戚とて、幕府も許しぬ。朝廷にても許し給ひぬ。斯くて希望の半は成就したるが、神璽を取出すに就いては、世にも悄むべき陰謀を用ゐぬ。間島彥太郎は赤松左馬之助則繁の子と僞り、小谷與次は忠阿彌と變名し、辭を巧にして、請ひて兩宮に事へ、中村貞友等と內外相應じて、時機の至るを待つ。嗚呼危哉。

長祿元年十二月二日の夜、大に雪ふれり。時機は今ぞと、赤松の遺臣相約して同時に兩宮を襲へり。丹生屋帶刀左衞門は弟の四郎左衞門と共に一の宮を弑し、神璽を奪ひ、御首を取りて逃げ去る。椎莊司それと知り、郷民を率ゐて追ひかけ、伯母谷にて二人を斃して、神璽と御首とを取返せり。間島彥太郎、上月滿吉は二の宮を弑し、御首を取りて逃げ去る。郷民之を追ふ。大西助五郎鹽谷村にて御首を持てる中村貞友を射殺して、御首を取返せり。嗚呼御首は戻りたれども、兩王子は此世の人ならず。兩王子此世の人ならずんば、神璽ありとて、何かせむ。その神璽も翌年の八月、赤松遺臣の小寺藤兵衞に奪ひ取られて、朝廷に歸せり。吉野の奧の義民の心や如何なりけむ。競はさりし南風も玆に全く吹絕えたり。秋雲長へに兩王子の御墓を鎖して、北山川は空しく南に流れ、吉野川は空しく北に流る。

踏み分けて涙ぞまさる三吉野の吉野の奧の北山の里

## 八　古川嵩翁と大臺敎會

小橡にて奧田村長と別れ、木和田にて後出屋の主人と別る。河合より木和田まで一里と稱す。絕えず小橡川に沿ひて、路平らか也。木和田より大臺ケ原山の頂上まで四里と稱す。小橡川と別れて、急坂を二十町も登れば、路は山の側面を橫斷す。日光洩れず。風氣人に逼る。處々に清水湧き出でゝ、魔法壜の水の必要もなし。峯稜に出でても、なほ日蔭あり。清風樹林を洩れて來る。眺望開けくる處に午食して行く程に、路いつしか平らかになり、數條の溪流、音せずして路を橫斷す。思ひきや、五千尺の山上に斯る平地、斯る平流あらむとは。このあたりを開拓と稱す。あゝ是れ大臺ケ原山の大臺ケ原山たる所以にして、實に天下無双也。溪畔の石上、日蔭ある處に腰を卸して、煙草をふかす。榮吉は下流さして行きしが、一時間あまりも過ぎて、十

尾の岩魚を提げて來る。手づから捕へたる也。吉野を出でゝ以來、こゝに始めて榮吉の喜べる顏付を見る。榮吉は三十八歳なるが、なほ青年の氣分を失はず。氣が利か代ぬりに些の邪氣なき善人也。一時間あまりも待たせながら、御待遠さまとも云はず。頭腦單純にして、山水の趣味をも解せず。唯捕魚の趣味を解す。趣味ある處、勞することが苦にならず。勞することが苦にたらざるを以て、自ら巧者になる。榮吉は捕魚の面白さに、着物のまゝ水に沒入することを辭せず。岩魚取として、天下の名人なりと褒むれば、にや／＼笑ふ。余を導きながら、余が徹底的に山水を探るをうるさく思ふ樣子なれば、余は話を轉じて、余の山水に夢中になるは、君の岩魚取りに夢中になるやうなものなりと云へば、合點したるか、せざるか、唯にや／＼笑ふのみ也。

これより一里ばかりにして、大臺教會に達し、教會長の古川嵩翁に迎へらる。吉野の大村氏より通知しおきたれば、大に余を待ち居りける也。教會堂は十三間四面、住居之に連りて、優に千人を收容するに足れり。五千尺の山上にこの設備ありて、而かもそれが明治以後の創立とは天下の珍なる哉。

玆に大臺ケ原山の大要を說かむに、大峰連山中の大普賢嶽の脈東に延び、直徑一里にして伯母峠となる。峠の南は上北山村にて北は川上村也。峠より更に東することと直徑半里にして、伯母嶽となる。それより轉じて東南に延ぶること直徑一里半にして、經塚山となる。これ大臺ケ原山の西北隅の一峰也。經塚山より東して國見嶽となり、三津川落嶽となり、日出嶽となる。この連山が大臺ケ原山の北端にして最上層也。この連山より西も、東も、北も、みな一頓せるが、南の一方は傾斜を爲す。その傾斜極めて緩にして、處々に凸起あり、溪谷もあるが、凡そ二三里四方は、先づ以て原也。東京の山の手の如し。殊に開拓の如きは、一里四方全く平地也。その傾斜面終に直下して、大蛇嵓の絕壁となる。高さ數百仭、長さ三里に達す。三長瀑之に懸る。東なるを東瀧、西なるを西瀧、中なるを中瀧と稱す。中瀧最も大にして、最も高く、明治十九年、依田廣太郎といふ軍人の實測に據れば、八十一丈ありと聞く。日光の華嚴瀧は七十五丈の稱あれども、谷田部梅吉といふ理學士の實測に據れば、三十三丈也。中瀧は華嚴瀧の二倍半もある也。さても高い哉。

この大臺ケ原山の大部分は大和國吉野郡に屬すれども、伊勢に界し、紀伊にも界す。山の水北に落ちては吉野川となり、吉野山の麓を衝いて萬古南朝の恨を流し、東に落ちては宮川となり太神宮の御手洗川となりて伊勢灣に入り、南に落ちては北山川となり、瀞八町の奇境を開きて熊野川に合す。教會堂の地勢は

海拔五千百六十八尺、日出岳が最高峰にて海拔五千四百八十四尺、日本全體にては高山と云ひ難けれども、西日本にては高山の部類也。大峰連山は長く、大臺ケ原山は大也。大峯連山の特色は絶壁の長きにあり、大臺ケ原山の特色は頂上の廣きにあり。大臺ケ原山とても、三典の大蛇嵓ある也。高さ八十一丈の中瀧は天下の偉觀也。日出獄よりは伊勢灣を見下し、熊野灘をも見下し、遙に富士山をさへ望む。僅にこれ天下の名山也。かゝる名山なるに、天地開闢以來、古川翁が教會を開くまでは、觀光の客なかりき。古川翁大台教會を開くに及びて、始めて大臺ケ原山は天下の名山として世に知らるゝに至れり。

古川翁の前に、天台宗の丹誠上人登り來りて、高野谷に草庵を結びたることありき。弘法大師が深山の平地は禪を修するに適すとて、高野山を開きし例に倣ひて、早くも開拓の平地に着目したるも、空しく志を齎らして逝きぬ。明治三年になりて、京都興正寺の僧も、開拓に目を付け、この地を開拓して、田園を開けり。老樹は切り倒されたり。されど成功せざりき。開拓の名空しく存して、若木今や林を成せり。實利行者は開拓に目を付けずに、牛石ケ原に苦行して去れり、明治十八年に、松浦武四郎來りて、開拓に目を付けたり。こゝを開拓して田となさば、三萬石を得べしとの見込をつけ、いよ〳〵資本を調へて、東京を發せむとせしに、天は年を假さず、七十一歳にて途中に斃れたり。遺言して、分骨を大臺ケ原山上に埋めしめたり。開拓の地は、大臺ケ原山の大臺ケ原山たる所以の特色なるが、河合より來るものは、この地を過ぐ。伯母峠より來りても、この地を過ぐ。されど、今の大臺ケ原山に登るものは、吉野川を溯り來りて引返すもの多し。それにては、日出瀧、正木ケ原、牛石ケ原、大蛇嵓は探りても、この開拓に及ばざるを常とす。折角大臺ケ原山に登りても、大臺ケ原山の大臺ケ原山たる所以を解せざるべき也。明治十九年に、依田廣太郎の中獄の高さを實測したるは、世にも奇拔なる哉。華嚴瀧は實測し易し。中瀧を實測するは、難儀且つ危險にて、殆んど命懸け也。

丹誠上人や、興正寺の僧や、實利行者や、松浦武四郎や、依田廣太郎や、大臺ケ原山の歷史を成せる人なるが、言はゞ大臺ケ原山の陳勝呉廣也。大臺ケ原山の劉項は、古川翁にして、は明治二十四年の夏登りて、九十七日間苦行し、翌年の冬より春にかけて、三箇月の間又苦行し、二十六年より建築に着手し三十二年まで、滿六箇年かゝりて、教會堂を建て、こゝに始めて大臺ケ原山を開きける也。明治以後、各方面に偉才出でたるが、五千尺以上の山獄に偉力を伸べたるは、唯古川翁のみ也。今の世の神變大菩薩とも云ふべくや。

大臺教會堂は天照皇太神を主神とす。宮川の末には、伊勢太神宮ありて、皇祖を祀り、その水源の大臺教會にも、同じく皇祖を祀る。帝國の臣民は太神宮に詣でざるべからず。更に進んで雲表の皇祖に詣でざるべけむや。

翁や六十四歳、老いて益壯也。短小精悍、快闊にして能く談ず。口大にして目小に、猛氣全身に溢る。何事にも熱烈にして、一氣直往、至誠一貫して天眞流露するが翁の翁たる所以にして又能く大臺ヶ原山を開き得たる所以なるべし。その經歴も平地的ならずして、山嶽的也 岐阜市を距ること十二里の萬田村に生れたり。家は富豪なりき。父を榮治といふ。翁はその第五子なるが、翁の生れたる時、父は四十二の厄年なりき。厄年の子は家に祟るといふ迷信、今もなほ存す。翁の父も其迷信に拘はれて、翁が十二歳の時、岐阜の豪商堀江徳兵衛の家に、丁稚見習として家より追へり。翁加はりて、堀江の一家主從四十一人家の子女も多く、翁は三人の男兒の守役となり、座敷の上に馬となりて、三兒を戯すること、足掛け四年の久しきに及びけるが、終に烈しき神經衰弱に罹りて、家に歸されたり。父いたく後悔し、伴ひて名古屋に至り、伊勢に轉じ、京都に移り、凡そ一年の間、名醫を尋ね、療養に手を盡したれども翁の病は愈えざりき。終に木曾の御嶽に伴ひて參籠祈願しけるに、十九歳に至りて、全く愈えたり。御嶽にも優る靈山を開きて、この恩に報いむと、心に盟ひけるが、一と先づ實業界に身を投じ、名古屋にて奮闘すること凡そ十年、夫となり、三子の父となり、酒樓の大盡となり、美妓の情人となり、債鬼四襲の身となりて、實業は全く失敗に歸したり。妻子は家に托して、茲に、いよいよ靈山開拓の途に登れり。曾て大峯山に登りける時、東方に大臺ヶ原山あるを知り、その未だ開拓せられずにあることをも知りたれば、大臺ヶ原山を目當にして、伊勢太神宮に祈れり。送り來れる友と吉市に醉ひて、父より惠まれたる二百金を一擲し無一文にて友と別れ、物乞ふ身となりて志摩より紀州に入り、尾鷲より出口を經て上北山村に至りけるが、御嶽參籠の御陰にて、祈禱することを心得たり。火渡りの業も出來たり。翁祈禱すれば 如何なる難病も忽ち平癒したり。火渡りの業は殊に翁を神聖ならしめたり。「不思議の行者」「助けの神」「生神」「實利行者の再來」と尊重せられて、少なからざる信者を得たり。弟子をも得たり。夏の九十七日間、殆んど食せずに大臺ヶ原山上に苦行して、信者の信仰益加はれり。東京に出で、神習教管長芳村正持の門に入りて教を受け、分教會を設くることを許されて、希望の半は遂せり。三箇月も雪に苦行して、大臺ヶ原山の冬をも窮めたり。南和北紀に勸進して、淨財も集まりたり。

猛烈なる一念貫徹して、翁は四十歳にして大臺ヶ原山の開發となりける也。「筏馬」、「一本たゝら」などの妖怪出づる山として、雲外に閑却せられたりし大臺ヶ原山、翁を得て 靈山となれり、又天下の名山となれり。

山高く険く尊し神つどひつどひますらむ八百萬の神

## 九 大臺山の四泊

日出嶽に日出を見むとて、朝早く大石勝藏といふ教會の若者に導かれて行く途中にて、日出でたり。されど日出嶽の櫓に上りて見て 悔みも消えたり。東方は霧の海也。よしや早く來りたりとて、どうせ日出は見えざる也 西の方大峯連山は明かに見ゆ。佛經や、釋迦や、金字形を爲す。大日尖兀として立つ。行者還は波濤の翻るに似たり。大峯や、大普賢や、國見や、彌山や、明星や、孔雀や、相連りて 天空に波打つ。踏破したる山なれば、殊になつかし。二人の一組、七人の一組も共に來りけるが、七人組は早く去りしに、二人組は留まりて、頻りに大峯の連山を望む。話しあひて、よめたり〳〵、二人組は大峯山を踏破して來りたる也。

朝食を終へたる後、余一人、古川翁に導かれて、御靈岡に至り、翁の夫人の墓に詣で、松浦武四郎の墓碑を拜す、南摩羽峰の碑文に依る。[illegible]を教會に殺すといへり。この一群の中には、木の[illegible]多く[illegible]べり。北の上路を行くに、伊勢に通ずる部分は御料林にて、原檜太古のまゝに繁れるが、教會を中心とする一帶の地帯は民有に屬し、四日市製紙會社の斧にて、原生林を破壊せり。細路さへ縱横に通ず。處々に細長き草の族生せるを見る。草の末梢枯れて、多くは赤し。何といふ草にやと問へば、高根萬年草たりと云ふ。翁ならば、白くなるべきにと云へば、西洋人化したるなりとて笑ふ。日出嶽の櫓に上りて二時間も四方を眺めつゝ、翁と共に飲み、共に午食して、正木ヶ原に至る。數町四方平らかにして、短き熊笹に蔽はれたり。虎尾樅の葉おもたげに、四方を圍む。牛石ヶ原はなほ一層廣く、同じく虎尾樅に圍まれ、同じく熊笹に蔽はれたるが、こゝには牛に似たる牛石あり、御腰掛石あり、神武天皇御手洗池あり、片腹鯛池あり。二池の水は近き日旱りに枯れたり。泥炭の地にて、草木生ぜざる也。御手洗池は神武天皇の御手を洗ひ給ひし處、御腰掛石は神武天皇の御腰を掛け給ひし處なりといふ。神武天皇の熊野より吉野に入り給ひし際、十津川に沿へる西熊野街道は無かりしならむ。北山川に沿へる東熊野街道も無かりしならむ。大峯連山にも路なかりしならむ。必ずや何處かこの大臺ヶ原山の一部を通過あら

せ給ひしことゝ思はるゝ也。

三千年の昔に飛びし我心、大蛇嵓に至りて現實に戻る。更に下りて不動返しに至り、雲表に中瀧に望み、俯して三里の絶壁を顧盻す。この壯觀を肴に、餘れる酒を翁と共に飲みつくして教會に戻れば、杉田定一氏登山し來りて、我を待てり。教會の一部を事務所とせる氣象觀測の技手渡邊清嗣氏も來り話す。日本は世界中にて、雨量最も多き國なるが、その日本にても、この大臺ケ原山は雨量最も多き處なりと云へり。そのこまかき數字、余の頭に入るには入りたるが、酒の來り侵すと共に、いつしか拔け出でたり。この日、榮吉を伴はずして、岩魚を捕へしめけるに、五十尾を獲たり。榮吉に取りては、最も面白き一日なりしならむ。

昨日中瀧を見るには見たるが、唯上部のみ也。今日はその全體を見むとて、古川翁に導かる。教會より大石勝藏、橋下竹重の二人、杉田、渡邊二氏も加はり、榮吉も加はりて、同勢七人也。人よりも高き篠竹を押し分けて、凡そ一里も來つらむと思ふ頃、古川翁つる〳〵と猿の如く木に登りて、中瀧の全體見ゆといふ。一同なも登る。余ひとり登らず。木に登らずに見ゆる處まで行きたきものなりと云へば、翁不滿の顏付にて、先きに進む。中瀧の上段悉く見ゆる處に腰をおろす。余も一寸腰をおろしたるが、下段をも見たきものなりと云へば、翁はむつとして、聲を荒く、瀧壺まで下るが承知かといふ、人の行ける處ならば、何處までも行かむと云へば、さらばとて、又進む。篠竹缺けて小石の澤となり、うれしやと思ふ程もなく、絶壁を下らざるを得ざるやうになりぬ。絶壁又絶壁、あぶないぞ、石を落すな、周章てるな、靜に下れなどゝ戒め合ひ、數十段を四五町も下り、東瀧の下の溪谷に出でゝ、更に下る。溪谷一落して、手掛りもなく、足掛りもなく、左右も巖壁直立す。一落の長さは三丈もあらむ。古川翁は大臺ケ原山中、足跡を印せざる隈もなけれども、こゝの一溪のみは未到の地なり。流石の翁も、はたと當惑す。唯天祐とも云ふべきは、上に綱を引掛くる岩のあることゝ、中腹凹みて足を托する段のあることゝ、下に丸太の自から斜に巖にたてかけられてあることゝ也。一行中にて、勝藏年最も若く、最も元氣にて、身體矯捷也。綱を輪にして岩に引掛け、その綱にすがりて下りて、中腹に足を托し、綱を放して丸太を抱きながら、ずる〳〵と下れり。一同みな下りて、綱を解く。最早登ることは出來ざる也。一同顏見合せて、無事を祝し合ひ、巖陰に就いて午食し、酒は飲める口の古川翁と分つ。雨いたりたるが、今下りたる時の思に比ぶれば、雨などは、何の苦にもならざる也。

下り〳〵て中瀧の下流の來り合する處に至れば、西瀧もこゝに來り合して奔飛す。中瀧へと上りて、瀧底に就き、甚に下段をも見て、うれしや一念屆きたり。安心して、雨始めて害になる。右に轉じて急斜面を攀づ。篠竹を攫まずんば登れず。篠竹を攫めば、その葉にたまれる雨落ちて、全身悉く濡ふ。またその上に危險なるは、前者の誤つて石を踏落すこと也。石を落すなと戒め合ひ、自分にても落さぬつもりなれど、あやまちは致し方なし。一尺大の石余に落ち來る。手にて拂ひのけたるはよかりしが、余も誤つて踏落す。はつと驚きて顧みれば、幸に後者の身を外れ居りたりき。峯稜を行くやうになりて、一とまず安心せしに、一頓して大巖壁に行き詰り、又も氣をもみしが、巖壁にそひて右に急斜面を下れば、巖壁横に凹みて、火を焚きたる跡あり。明治天皇御危篤の際、古川翁こゝに籠りて祈禱したりきと聞き、さてはこゝより教會までは、翁の熟路なりと安心し、火を焚いて、一同雨に冷えし身を煖む。翁のみは一頭にありて、おうい〳〵と呼ぶ。まて〳〵、火に當りに來られよと云へど、來らず。凡そ十分、元氣の恢復するを待つて發す。落石の危難なほ去らず。折角乾きし身、又も篠竹の水に濡れたり。上にておうい〳〵、下にてもおうい〳〵、翁は姿を見せずして、聲にて導く。一同相顧みて、天狗に導かるゝやうなりと語りあふ。三十分ばかり闇を衝いて教會に達したる時は、世にも嬉しかりき。生れて始めて恐ろしき目に逢ひたり。先生のお作はもういやなりと笑ひいふ。翁の令息悅二氏出で來りて應接す。教會を開いて以來、こんな難物に遇はずとて、父はぷんぷん怒り居るといふ。今日は午後より雨となりて寒氣甚しきに、世にも恐しき大蛇嵓の絕壁を上下したることゝて、墜落、凍死落石の諸難交も〳〵到り、死傷ありては相すまずと心配するにつれ、執念くも觀瀑を主張し、呼ばれても焚火に動かざりし余に對して怒れる也。されど、翁は直に思ひ返して、余の山水に對する信念を了解せり。出で來りて相接せし時には、夕立のあとの霽天の如く、晴れやかなる顏付して、今日の一行の剛膽に歎聲涌けり。明くれば、雨也。勸めらるゝまゝに滯在し、翁の母が翁の門出に贈られたりといふ、白衣に鐵扇、翁の父の形見の刀に鏡、翁の用ゐし山ぶご、檜木笠などを見るにつれ、つく〴〵翁の過去の艱難を懷ひ、翁の信念と事業との高大なるに敬服し、大臺山教會の千古に榮えむことを念じ、一種の感涙個に和してとゞめもあへざりし一日を、雲の上におくれり。

## 一〇 百螺嶽

一尺の外は濃霧につゝまれて天地とよもす大瀧の音

杉田氏も共にして、大臺ケ原山を出で、吉野川の上流の本澤に沿うて下り、與入之波の小學校に休息して午食す。校長にして兼ねて敎員全體なる梅田常吉氏、喜び迎へて酒を饗す。樵戸四五軒、そのわりに學校大にして、百人を容るゝに足る、このあたりの山林は上市の山林王北村又左衞門氏の所有なるが、氏は樵夫の子の教育を思ひやり、私費を投じて、この學校を經營する也 生徒の數はと問へば、僅に七人、そのうちに二人は自分の子なりと云へり。入之波あたりに至れば、渓に非ずして川也、こゝに温泉ありて、川畔に涌く。天幕の屋根を設く。微温なれども、全くの冷泉には非ず。大和に温泉あるは、珍とすべき也、今日も又夜に入りて、柏木の朝日館に宿し、明くる日、區長大楠丑治郎氏に導かれて、對岸の神の谷なる金剛寺に至る。昨日北山宮の御墓に灑ぎし懷古の涙、乾しもあへぬに、今日又も河野宮の御墓に灑ぐ。

古を懷ふ涙も打添ひて吉野におつる神の谷の水

大峯一帶の山は、武藏の秩父山と同じく秩父岩にて、鍾乳洞の多きことも相似たり。その鍾乳洞多くは柏木附近に集まれり。大楠氏に導かれて、まづ菊の窟に入り、次に不動の窟に入る 不動の窟は吉野川に臨める懸崖の中腹にありて、景致もよし。窟内には鍾乳洞の常として、いろ〳〵さま〴〵の形象應接に遑あらず。深さは數十間に過ぎざるが、中に瀑布懸り、渓水流る。山口縣の秋吉の洞窟發見せられざる前は、日本無双の洞窟なりし也、この川上に正神の窟あり、川下に菊の窟との間に聖天の窟あり。直に吉野川に接す。この窟だけは、聖護院の持僻の外は、何人も入ることを許されず。大楠氏もまだ入らざるよし也。なほ川下に水晶の窟もあり。都合五つの鍾乳洞が柏木附近の景致を添ふる也。

大楠氏と別れ、吉野川に沿うて下る。吉野杉の本場とて 兩岸の山々峯々すべて杉の植林ならざるは無し。迫といふ處にて、丹生川上神社に詣で、大瀧といふ處に至りて、龍泉寺に投じ、吉瀬竅降師に迎へらる。大瀧の地名の實を現はして、大瀧こゝに一落す。有名なる山林王にて、今は世に亡き土倉庄三郎氏の生れし地にて、遺宅なほ在り。その銅像も立てり。その墓、この龍泉寺の境内にあり。龍泉寺は土倉家の菩提寺なるが、もと雄略天皇と持統天皇との行宮の跡也、部落の上府、石壁高く建築も新らしくして、いと清らかなる寺也。泉水の古色、殊に掬すべし。この泉水に對し、浮世の外の清風を身に受け、令妹の酌を受けて飲む。この令妹は杉田氏と婚約あり 青春の男と女、互に眼と眼と語り合へり。

大瀧より吉野へは、僅に二里也。杉田氏と榮吉と余との一行

の外に、令妹の魂も添ふらむ。途に蜻蛉の瀧を見る。高さは十丈もあらむ。いと麗しくして、散歩がてらの遊覧には手頃の瀧也。むかし雄略天皇この地に狩りして、鹿を射むとし給ひしに、虻來りて御臂をさすと見る間に、蜻蛉何處ともなく來りて虻をくらひて去りたる昔も思ひ出されて、吉野に趣を添ふる勝景の地也。

瀧水も昔ながらに今もなほみかりのあとをあきつ飛ぶなり

吉野山にたどりつきて、金峯山神社の前の茶店に休息して午食す。こゝより二十町、百螺嶽の頂に、修驗道中興の祖理源大師の墓あり。案内せむかと、杉田氏いふ。榮吉は待たせおきて出づ。左へ下れば西行菴に至るべき岐路を、右に取りて、峯脈を西に行き、百螺嶽の上部を彼方に逸れば、鳳閣寺とて、荒れたる佛堂あり。有髮の老人、小亭を設けて、賽者を待つ、この寺は理源大師の創立にかゝりて、眞言修驗にとりては、一大靈場也。小憩して峯頭に立てば、吉野の長峯、蜿蜒として近く東に連る。藏王堂殊に目立ちて見ゆ、少し南に下りたる處に、理源大師の墓と稱するものあり。屋を設く。墓は寶塔形の石塔にて、高さ八尺に餘る。東京の德川家の諸廟に見る將軍の石塔に比しても遜色なきばかりにて、實に見事なる石塔也。大正四年特別保護建造物に加へられたりと聞く。この峯や、吉野山の本脈を少し離れて孤立し、吉野山の全體を見るに都合よき處也。蜻蛉瀧と百螺嶽とを窮めたるは、君の御蔭なりとて、杉田氏に謝したるが、杉田氏にも、余の御蔭あり。余は柏木より再び大峯山を經て、洞川に下り、彌山川を溯りて、十津川方面第一の大瀧なる双門瀧を探らむと思ひたるが、杉田氏頻りに吉野川を下りて杉の殖林の樣を見よ、丹生川上神社に詣でよ、大瀧の勝を窮めよと勸む。余容易に諾否を決せず。杉田氏は榮吉を買收して、双門行をいやがらせたり。余終に決心して、杉田氏の言に從ひけるが、敵は本能寺ならぬ龍泉寺、獨りにては行き難ければ、余を導くに托して、眼と眼と相語るの機會を得たる也。

十三日ぶりに、吉野に戾りて聞けば、久保天隨來り、大峯山に登りて去れりといふ。前年は相約して吉野に遊びたりき。こたびは期せずして殆んど同時に吉野に來り、而かも少しの目違ひにて相逢はず。いづれ東京に歸らば、相逢ふべけれども、余に取りては、多少の感慨なきを得ず。坂本猶十郎氏に導かれて、後醍醐天皇の所謂石走る水の谷底なる吉野温泉に浴し、吉野山中の別天地、四面青葉の樓上、一杯陶然として、連日の勞を忘れぬ。如何に藏王の吉野へ來りたりとは云へ、後醍醐天皇の御陵には詣でざるべからずとて、如意輪寺を打留めにして、この遊を終へぬ。前鬼以南の大峯連山を閑却し、瀞八町をも閑却したるが、余は此を以て大臺ヶ原山に換へさる也。(終)

# 舌が旅をする

松川二郎

友人の松崎天民は、かれの味覺が頗ぶる鋭敏であるといふことを、よく言つたり書いたりしてゐるやうだが、誠に羨ましい限りだ。私の味覺はあまり鋭敏ではないらしい。らしいと云ふ所以は、自分の舌が他人のに較べて、より鋭敏であるか否かを的確に知り得る方法を知らないからである。現に角、鴨居の鯛と興津の鯛とをならべて、これを食ひ分けて見ろと云はれても、迚もそんな器用な真似は出來さうにない。せい／＼江戸前の新らしい魚と、二日も三日も氷詰でやつて來た所謂「旅の魚」とを、食分け得るくらゐの所である。是れ位の程度の舌が、旅をするには却つて甚だ都合がいゝ。特別に鋭敏な味覺は、うまい物に對しては他人の知らないうまさを感ずる代りに、まづい物に對しても亦特に強く感ずるに相違ない、それは實に堪らない事だ、私の如き並の舌を有つた者ですら、ひと冬宮城岩手の兩縣下を二月ばかり旅行した際、行き先き先き、朝も晝も晩も、申合せたやうにまづいヒラメばかりを食はされた時は、實際ゲンナリしてしまつて、旅は憂いものと熟々感じた。旅へ出たらうまい物が食へる、と思つたら大間違ひだ、まづい物を食はされる事の方が多い、好き嫌ひは云つて居られぬ場合が多い。旅行家の舌は、あまり鋭敏でないに限る。

處で、異つた土地へ行つて異つた物を食ふといふことは、確に愉快なことだ、旅の面白味の一半はこゝにある、『宿屋に着いたら早速名物の××節をきゝ××踊を見て、名物の××を食つてやらう』といふ期待は、何代目かの何とかの松を見たり古びたる石の一片である何某の墓を訪づるゝよりも、確かに、少くも、私に取つては愉快な期待であるんである。況してや名物にも時々はうまい物があるから、到底旅は止められない。例へば、驛で賣る汽車辨當にさへ私は一種の興味を感ずる、食ひたくない時でも、辨當を買つて其のおかづを調べて見るのが一つの樂みだ、それ／＼地方色が現れてゐて面白い。關西線の奈良や木津の辨當には必らず奈良漬の二三片を缺くことはな

い。名古屋へ來るとそれが守口漬に代る。土浦の辨當には、あの湖水の名産わかさぎと櫻ゑびとが、如何なる態に於てか必らず入つてゐる。岡山廣島方面の蒲ぼこのうまい事も、矢張り汽車辨當でわかる。廣島は牡蠣の名産地であるが、呉線の分岐點海田市驛へゆくと、素焼の丼に入れた温かい牡蠣飯を賣つてゐる、但しそれは冬の間で、牡蠣のシーズンが去ると海田市や宮島驛で(あなご飯)を賣る、あなごは矢張り彼のへんの名物になつてゐる。米原に鮒ずし、岐阜に鮎ずし、福井に羽二重餅、それから金澤へゆけば犀川のゴリの煮びたし、それを四十錢の辨當に於て味ふことができる。海を離れて山國へはいると鹽鮭、鰯、凍豆腐、さては牛蒡、にんじん、蕨、ぜんまいの世界となるので些か恐れ入るが、それも亦地方色とあれば、一種の興味がないでもなく、木曾山中の須山漬の如きに至つては、蓋し山國の情味津々たるものである。

舌が旅する。――然しながら、私の舌は前にもいふ通り並の舌だから、たゞ案内をするだけで、「通」がつたことはせい〴〵云はないつもりである。土地にゐる「舌」は宜しく私の「舌」を監視して、若し食ひ過つてゐるやうな點があつたら、土地の名譽の爲に、ドシドシ訂正して貰ひたい。何時でも食ひ直しにゆく。

# 三浦伊豆兩半島

◇

◉鎌倉を生きて出でけん初鰹。鎌倉の鰹は、江戸時代には恐ろしく幅を利かせたものである。今日も、鎌倉でうまい物と云つたら、矢張り鰹と鰕ぐらゐのものであらう。然し鎌倉には眺望の佳い旅館が無かつた、風光と共に飲まふと云ふには江の島まで行かなければいけなかつた。

◉岩本樓、金龜樓などが江の島では第一流の旅館で、よく東京・横濱へんから連込がやつてくる處だ。片瀬藝者を呼んで騷いでゐるのもある。そこの二階三階からは何れも海が見える。月の晩など殊によい。月の無い夜半、遥かの沖合に鰹船の火の明滅を見るのも好かつた。

『鰹の刺身はこゝらが本場だつたね。さう思ふ所以か、特別にうまいやうな氣がする』

三皿までお代りを命じて、東京者の女中をクスクス笑はせたことがあつた。

◉鎌倉を生きて出でけむ初鰹は、伊勢屋の前を走り抜けるのが例で、「伊勢屋に鰹つんぼにほととぎす」「そんなのも今來ませうと鰹賣」「葬禮を見て初鰹値ができる」「江戸ツ子はわたも

抜かずに初鰹―「月令に見えず袷が魚と化し」……此處らは何と云ても川柳氏の十八番もので、女房を質に置いても生のいゝ處を食ふのが江戸兒の意氣であつた。生のいゝのを貴ぶのは、卽ち腐り易い魚だからである。「さう押して掛るものかと鰹賣」。

◉それ程江戸兒に珍重がられた鰹も、昔は下魚として、貴人の口には上らなかつたものらしい。兼好法師の「徒然草」に『鎌倉の年寄の申し侍りしは、此の魚、おのれらが若かりし世までは、はか〴〵しき人の前に出ること侍らざりき……かやうの物も世の末なれば、上さままでも入たつわさにこそ侍れ』とある。世の末なればが氣に入つた。何かと白ばくれて、法師、時々用ゐたんではないかな。

◉蠑螺の壺燒も、江の島名物に數へられてゐるが、所謂名物、房州あたりの濱邊で、海女の取つたのをすぐ焚火の火で燒いて食ふやうな趣はない。辨天の祠を見物した歸りは、屹度蠑螺取の漁師に襲はれる、それも雜漢の申し子のやうなのが、ぞろぞろとやつて來て、

『旦那、蠑螺を捕らせて下さい』

といふ。何の己れが海に入つて、己れが飼つておく蠑螺を捕るのに、身共に御相談はいり申さない。

◉震災後、復活したか何うか知らないが、「夫婦饅頭」は近年鎌倉名物の一として、なか〳〵評判が好かつた。大きな饅頭と小さな饅頭とを、ぴつたりと重ねてくつ附けたもので、丁度小さな鏡餅のやうな形である。

◉大きいのが旦那様で、小さいのが奥様といふ洒落の外に、皮に仕掛があつてぱくりと一口頰張れば甘い味の中に、ぷんと酒の香がにほふ、乃ち御酒は旦那様へ、餡は奥様への意であらう。大分煩さい饅頭である。然し筑波山の「夫婦餅」や小牛田の「親子饅頭」に比すれば、意義頗ぶる徹底してゐる。

◉酒饅頭は、關西方面へ行けば少しも珍らしいものでなく、名古屋にも何とかいふ有名なのがあるが、此の名を附したところに、新婚の友人などへの鎌倉土産として、一種の可笑味がある。

◉片瀨の「片瀨饅頭」も、名物としては餘程うまい方に屬する。逗子の「浪子饅頭」は知らない。

◉逗子葉山の海岸でうまい物は「もづく」である。凧の糸ほどの太さの、細長い、暗褐色をした粘りつ氣の多いづる〳〵した海藻で、生のまゝ三杯酢で食ふ。酒徒のこれを珍重すること、鹽辛と伯仲の間にある。范孚にもづくの句あり「鶯の聲にたなびくもづく哉」と、卽ち三四月が海雲のシュンである。

◉日蔭の茶屋に友人のKが肺を養ふてゐる頃、見舞旁たよく

此のもづくを食ひてに行つたものだ。かれ亦甚だもづくを嗜んだ。かれ今や亡矣、僕亦久しく薬川のもづくを食はない。

◉もづくは波の靜かな海なら、日本沿岸到る處に產する海藻で、土地に依つてモゾク、モゾコ、モリヅなどゝ呼んでゐる。藻屑はちとひどい。三陸の沿岸では「松藻」などゝ、甚だ雅びた名で呼んでゐる。然し松藻は少しく種類がちがう樣だ、蠶繭のやうな形に、日乾しにして貯へて置き、若布の如く火に焙つたり、味噌汁などに入れて食ふ。「鹽梅は海の盛りやもづく汁」(巴靜)などいふ句のあるのを見れば、都會でも汁の實に使ふ者が多いのであらう。

◉もづくの一種に「ふともづく」がある、泉州岸和田の名產である。鹿兒島邊のも此の太もづくだが、彼地では「すのり」と呼んでゐる。

◇

安來節へ安來港に碇はいらぬ十神もづくで船繋ぐ。

◉三浦半島で最とも名高いものは、鴨居の「鯛」であらう。鴨居は浦賀港の東、觀音崎の裏濱になつてゐる。江戸前の魚、即ち東京近海で漁れた魚は何故うまいか?、などゝ其の普通がりが文藝倶樂部などに書いたやうた事は、斷られない先きに御免蒙つておくが「江戸前の鯛」、と稱するものゝ中で、鴨居鯛は特に賞美せられ、鴨居の鯛でなければ使はないと云つたやうな料理屋が、昔は在つたのだ相である。

◉浦賀あたりへ行つたら、此のうまい鯛がフンダンに食へるかといふに、左樣はゆかない。多くは東京へ直行してしまふ、ほんとうの名產といふは、大抵さうしたものかも知れない。今日も鴨居鯛は日本橋へ來て、オツト今は築地だつたね、特別の扱ひを受けてゐるといふ話である。

◉浦賀の水飴も、名物として古い歴史を持つてゐる。洲崎の瀧川、荒巻の藤井、田中の富高屋などのが良いさうである。走水(觀音崎の表濱、弟橘媛の碑の在る處)の海でとれるタイラギといふ貝も、此の地方でうまいものゝ一つである。

◉三崎はさすがに、東京灣でも屈指の漁どころである。夏は烏賊に鯵、冬になるとムツと寒比目魚たどがこゝの特產で、殊にムツとヒラメは三崎ものを以て「江戸前」とするのだ相である。ムツは東京人の非常に嗜好する魚で、肉もうまいが卵は更にうまい。

◉三崎は前に城ケ島を控えて、風光のすぐれたところで、且つ其勝れた風光を巧みに取入れた旅館が多い。宮城町の朝陽館や日出町の温泉亭は、何れも料理兼業の旅館で、客室の眺望も佳い。專業旅館には三崎館、青柳亭、紀國屋などがある。港町

のことだから溫柔氣分に富んでゐるが、へエー三浦三崎はアイヨー女の夜這ひアソダヨー男極樂寢て暮らす」（三崎甚句）、あれは女の世張りの誤傳だ、勘違ひをして變な氣を起しちやあいかん。

◉鰤も亦、十二月から一月にかけて、三崎沖でとれるのを江戸前と稱する。それが二月三月となると漁獲の量も減り、味もぐツと落ちて、『江戸前の鰤が何だ』になる。蓋し、鰤は日本海の越前近海をもつて其の原產地とし、年中時を定めて、本州の周圍をぐるぐる巡つてあるく渡り魚で、沿岸各地で捕れるが、漁獲の時季はそれ〴〵異なつてゐる。

◉兎に角三崎は、夏冬いつ行つても、うまい魚を食はせる土地である。元來が海產動植物には非常に豐富なところで、學界の珍として名高い「拂子貝（ヘイヤロネマ）」や「烏の足貝（ペンタクリイナス）」も、此の近海の特產ださうである。風光繪のごとき油壺灣には、帝大の臨海試驗場がある。

◇

◉大船のサンドヰツチは、驛で賣るサンドヰツチの中では、「日本一」と稱して過言であるまい。神戸三ノ宮驛（ミカドホテル）のサンドヰツチと雖も、こゝのに比すれば若干の遜色あるを免れない。橫濱、國府津その他の雜輩に至つては殆んど論ずるを要せぬ。

◉ハムは鎌倉ハムを用ゐ、包紙に同社の年產額や宣傳文句などの細々と書いてある所から推せば、鎌倉ハム會社が廣告の爲に自から經營してゐるのかともおもふ。麵麭も甚だ上等のを使つてゐる。

◉大船の牛乳は「均質牛乳」で、同じく旅客間に好評を得てゐるが、これは大船附近でつくるのではなく、東京からの移入ものらしい。

◉茅ケ崎にも名物がある。「南湖メザシ」が卽ちそれだ。大磯には「さざれ石」に「虎子饅頭」、但これは興津附近の「羽衣飴」、金谷附近の「小夜の中山子育飴」などゝ同一屬の所謂名物で、餘り我々の舌を樂しましめる種類のものではない。

◉國府津には何もなくて、小田原へ行つて「梅干」と「鹽辛」がある。小田原の梅干は小粒で肉が締まつてゐる、それを一つ一つ紫蘇の葉で包んだ、極めて上品なものである。私は梅干を好かないが、小田原梅干なら五つ六つは食べる。小峰公園の梅林は卽ち此の名產梅干の看板だと思へばよからう。

◉鹽辛に就ては世すでに定評がある。小田原の名物產としては「ちんりう」が名高い。本店は町の中央だが、停車場の前に高い塔のやうな賣店を設け、赤地に白く「ちんりう」と染め

扱いた大きなフラグを風に翻してゐた、それは昨年の大震でペシヤンコになつて、今は同じ場處にバラツクでやつてゐる。

●箱根には是れといふ名物はない。宮城野橋の袂の「宮城野そば」ぐらゐのものであらう、然し彼の蕎麥をうまいと思ふ人は手を擧げたツ！。近年蘆の湖に鱒を養殖してゐるが、彼れも「釣つて遊ぶ」だけの興味で、中禪寺湖あたりのに較べると、味は大分落ちる。水溫と餌料、就中水溫の關係ださうである。

●須雲川の源流は山椒魚の産地として有名である。無論澤山には居ないから、彼處に山椒魚を養殖して、山椒魚料理をはじめたら、箱根の一名物となるであらう。山椒魚が食へるかつて？。食へる。うまいかつて云ふのか？。どうせ名物だもの必らずしも甘きを必要とせぬ。

●山北(やまきた)の「鮎ずし」は鮎ずし中の逸品である。鮎ずしは東海道線の岐阜、中央線の猿橋、山陰線の和田山、その他の驛でも賣つてゐるが、私は山北を以て第一としてゐる。斷つておくが鮎の味と鮎ずしの味とは別のものである。

●私は一度山北へ鮎を食ひに行つたことがある。今は何うだか知れないが、その頃は料理店などは一軒もなく、驛の前に朝日館とかいふ旅館があつた、田舍々々した汚ない旅館で、風呂場など幾年掃除をしないのだか、湯垢でぬる／＼してゐた。その湯殿で辷つて、ズデンドウと美事に放り出されて、強か腰とお臀を撲つたのが、ズキズキと二三日も痛んだ。——それだけを覺えてゐて、鮎の味などは忘れてしまつた。然し酒匂川も彼のへんは餘程上流になるから、まづからう筈はないと思つてゐる。

●御殿場の「ハマナシ」も一寸うまいものゝ一つである。驛では確か是から作つた羊羹を賣つてゐたと記憶する。濱梨とは甚だその實に副はぬ名稱で、これは本名をコケモモと稱し、海拔七八千尺の灌木帶に自生する高山植物である。淺間の山上には殊にこれが多く、淺間名物「甘露梅」は即ち此のコケモモの果實から製したものである。

●三島には山葵餅、山葵羊羹。沼津には鯛でんぶ。桃羊羹などがある。沼津驛頭に桃ようかんの賣り聲をきく時、私は彼牛臥の御用邸附近にある桃郷の桃林をおもふ。彼の邊から江ノへかけて一帶の海は好い海水浴場である。

◇

●伊豆半島では修善寺溫泉の「生椎茸」がうまい。椎茸は專ら乾物(かんぶつ)として吸物のツマ、又は精進料理のダシに使はれてゐるが、若くして蓋の厚いのを生で使へば、一層微妙な芳香と味ひが得られる。私はよく生のまゝ山葵醤油で食ふが、その山葵が

また天城の谷の名産なのである。

◉日本は椎茸の特産地でありながら、椎茸の食ひ方を知らぬ。椎茸の栽培は大分縣最も盛んで、次が宮崎縣、靜岡縣は第三位に居る。年産額約二百萬圓その八割は支那へ輸出されてゐる。輸出されることに異論はないが、日本人は大形で蓋の薄いもの(これは味がまづい)を好む爲、山形にして蓋の厚い、味の佳いものは悉く支那へ輸出されてゐるのだ、世話はない。

◉東京では名物のカラツ風が、ヒウヒウ唸りを立てゝ猛威を逞くしてゐる嚴寒一月 天城峠を南へ越えて、草苺や莢ゐんげんを食ひにゆくのも、樂しい旅の一つである。彼の峠一つを越されば、すつかり南國氣分が漂つてくる。段々に切開かれた山畑には、白く梅が咲いてゐる、鶯、青雀、頬白などが長閑に啼いてゐる。

◉下田港を西に距ること二里半、青石川の谷にある下賀茂といふ温泉、それは非常に優秀な鹽類泉で、泉量も頗ぶる豐富である。その豐富な温泉を利用して、大規模の溫床栽培が行はれてゐる、經營者は豐田と云つて東京の人だ相である。野菜もの外にカーネーションを盛んに培養してゐる。

◉この下賀茂から半島の南端長津呂附近へかけて一帶の地域は、日本一の保健地と稱せられてゐる。

◉熱海溫泉は魚介が新鮮なりといふの外、食物に就て何の風情もないが、鮑だけは特に豐富である。近くに眞鶴崎といふ、鮑貝の豐產地を控えてゐるからである

◉眞鶴岬は御覽の通りの削取つたやうな斷岩で、少しく離れて笠島といふ露礁があ。、此の間はベタ一面の暗礁で、鮑の棲息地としてはお誂向きのところである。春の大汐には此の暗礁が悉く干上るので、福浦・眞鶴の人々は未明から船を艤して貝拾ひに出かける、その數幾十艘、實に盛んな潮干狩が行はれる。同地方に於ける一年中の最大行樂である。

◉然し、鮑はどうしても房州が本場だ。眞鶴の鮑は肉が硬くて、その味些かまづい。原因は知らないが、潮の加減だらうと云つてゐる。

◉伊豆半島の東海岸からは、夥しく蜜柑が產出せられる(種類は紀州蜜柑)殊に早川村から根府川を經て眞鶴附近に至る間の斜面は、一めんの蜜柑畑で、峰に渡り谷に連なつてゐる、早川一村でも年產十五六萬圓に達するといふことである。晩秋この蜜柑が黃熟すると、山は一めんに黃色く明るく輝やいてくる。私の舌は蜜柑に特別の興味を有たないやうだが、その頃此の海岸を旅することは好きだ。

◉「クサヤ」は干魚の王である。彼の臭氣が無ければ更にいゝ

と云ふ人もあるが、慣れゝば、彼の臭氣か、特別の味ひが出てくるやうにさへ私には感ぜられる。その「クサヤ」は伊豆大島の特産である。椿咲く島の髪の長い女の手に依つて製造せらるゝのである。産額は極めて少く、大島と東京以外では殆んど口にすることができない。

◉「クサヤ」に供せらるゝ魚は、ムロ鯵と稱する鯵科の一種で、深水に棲み、且つ非常に敏捷な魚だといふ話である。それが近年は殊にすばしつこくなつて、漁がすくない相である。かくて「クサヤ」の産額が年々減つてゆくと云ふことは、私達クサヤ黨に取つて甚だ心細く感ぜられる。

## 靜岡から濱松まで

◇

◉富士驛から富士身延鐵道に依つて芝川にゆくと、「芝川海苔」といふ珍味がある。但、これは少々茶人の嗜好に屬し、極めて淡白な香と味とを有つものである。

◉富士の白雪朝日でとける。融けて流れて、三島へ落ちる黄瀬川の溪間には山葵を産し、富士川に落つる芝川の上流には、此の川のりを産する。大きいのは長さ三四寸、幅一寸位、暗綠色を帶びた薄い笹の葉のやうな態をした植物で、清洌な溪流の石に生ずる。白糸の瀧を中心として、上流にも下流にも自生してゐる。

◉夏の土用から秋にかけて採集し、抄いて乾して貯藏すること、殆んど淺草海苔に異らぬ。燒いてもよく、水に浸して生のりに戻して三杯にして用ゐてもよい。日光の大谷(だいや)のり、多摩の氷川(ひかは)のり、相模の津久居のり、桐生の桐生のりなど皆同一の種類であるが、芝川のりは特に昔から有名であつた。

◉熊本城下水前寺公園の名物「水前寺のり」も亦、川のりの一種とせられてゐるが、植物學上からは全然別種のものに屬する相である。大體かたちも異つてゐる、水前寺のりには「海苔(のり)」といふ感じはなく、「糊(のり)」の感じがする。一定の形はなく大小も不規則で、暗綠色のぷりぷりした葛餅のやうな粘塊である。食ひ方も、適宜の大さに切つて吸物に入れ、又はツマとして用ゐる。

◉水前寺の池の下流なる江津湖といふ小さな湖水から、昔は其原料を採つたもので、水前寺のりは珍中の珍として、幕府への獻上品となつてゐたが、今日は水前寺のりの產地は久留米市の郊外國分村である、田を潰して此の藻を栽養してゐる。東京郊外の恩賜公園井の頭の池にも、先年此の水前寺のりを移植したが、結果は何うかな。

◉興津名物「興津鯛」に「蟲粥」。――此の外この地には農商務省の園藝試驗場がある爲に、時々その餘惠を享けて、意外な珍味に接することができる。主なる試作物は西洋蔬菜と果實である。極端に夏蜜柑を嫌つた私の舌に、夏蜜柑の食ひ方を敎へてくれたのは、こゝの場長恩田博士であつた。

◉それはかうするのだ、大きな夏蜜柑を横に眞二つに切る、それから小さなスプーンで袋を破らない様に肉を掻いて、袋毎に適當の砂糖を投じ、八時間乃至十二時間位そのまゝ貯へて置いて後、スプーンで掬つて食べるのである。強烈な酸味は消散し去つて、果液と砂糖とが極めて完全に飽和して、眞に上品な味ひを有つ。夏蜜柑と聞いただけで、口ぢうを酸つぱくする者よ、爾くひ改めよ。

◉靜岡は「鯛めし」、「あべ川餅」「わさび漬」など、名物もなか〱豐富である。

◉靜岡驛の「鯛めし」の賣れ行は、實際に素晴らしい。小山のやうに積上げたのが、一汽車毎に賣切れとなる。濱松、沼津、それから國府津驛などでも鯛めしを賣つてゐるが、名聲ついに本家に及ばぬ。味も及ばぬ。「山葵漬」も亦同様で、靜岡のが一番賣行もよく、品質もすぐれてゐる。

◉汽車辨當も、此の靜岡と濱松とが一番評判がよい。ひとり東海道線ばかりでなく、省鐵全線を通じても、第一流の辨當だと云へる。それから「茶」だ、驛で賣る茶に殆んど茶の香ひのするものはないが、ひとり靜岡の茶のみは、香りと味ひとを有し、さすがに靜岡は茶どころであることを想はせる。

◉「あべ川餅」だけは、些か旅客の期待を裏切つてゐる。全國津々浦々あべ川餅を知らぬものは無からう、それ程行き渡つた「あべ川」であるに拘らず、靜岡驛で賣る「あべ川」は、似ても似つかぬ「あべ川」である。いやに上品ぶつた、お雛様のお供への如き餅である。このあべ川餅と相俟つて、旅客の豫想を遠慮なく蹴飛ばすものに岡山の「吉備だんご」がある、東西好一對。

◉名代「あべ川餅」は、お手輕に汽車窓から食ふ譯には參らぬ。靜岡市の南端から對岸の手越の里へ向つて架せられたる安倍川橋、その袂の彌勒の茶屋といふが、昔ながらの安倍川餅の本家　甘黨の諸子は是非こゝまで駕を抂げ候へ。

◉數ある香辛料のうち、私の舌は最も山葵を好むものである。即ち此の場合、靜岡の山葵について一言無かるべからずだ。靜岡の山葵は、産額に於て全國の首位に居るのみならず、その歴史に於て亦頗ぶる古い。

◉山葵にも亦本場があつて、伊豆の天城山葵、出雲の三瓶山葵は古來最とも著聞せるものである。三瓶山葵の栽培は今より

百餘年前に始まり、天城山葵はそれよりも古く、百六十年前に創まつてゐる。天城山葵の名聲は、久しく天下を風靡し、東京でも名ある料理店、壽司屋はすべて天城山葵を用ゐてゐた。

◉然し、天城地方が我國に於ける栽培山葵の始祖ではない。天城山中に自生のものありしを、明和年中、湯ヶ島の人某、駿州安倍郡の山葵栽培法を見て之に倣ひ、爾後大に繁殖云々……と同地の山葵栽培誌にある、乃ち安倍川の上流地方が最も古い栽培地であるらしいが、安倍郡には却つて何の記錄も殘つてゐないので、是れ以上のことはわからない。

◉山葵の栽培は、山葵の需要が激增して、自然生の採收を以ては到底その需用量を充たし難きに至つたことを語る、それは大體に於て德川中世期と觀てよい。然し自然生の山葵を用ひたのも、さして古い事では無いらしい、著聞集に曰く「後堀河院御位の時、所下人未重、丹波國桑原の御厨供御侍進の爲め下りたるとき件のしくわやえ山河北手の山にわさび多く生ひたる山をきいて、取りにまかりけり』と即ち大凡七百餘年前のことである。——是位にして置かう、私達は山葵の歷史を食ふ譯ではないから。

◉靜岡縣下では前記天城の北の谷（特に狩野川の右岸上、中大見兩村）及び安倍川奥の外、今日では黃瀨川上流地方、大井川上流の沿岸などに於ても、盛んに栽培されてゐる。これに紫莖と靑莖の別あり、天城産ものは前者に屬し、安倍川奥より産するものは後者に屬する。

◉山葵は、深山の溪澗淸冽なる水の邊の石の間に生ずる宿根性の水草で、根皮は淡靑、その肉は爽やかなる淺綠色を呈してゐる。私が山葵を愛するのは、その淸高なる香氣と、辛辣なる辛味と共に、實に此の肉に現はるゝ深山幽谷の「色」を愛するのである。若しかれの色が生薑の如く黃であり、或は唐辛の如く赤であれば、私の山葵に對する趣味は、恐らく殆んど亡びてしまふ。かれの香と味と色とは、深山の幽谷を象徴するものとして誠にふさはしい。

◉言葉を換へれば、斯うも云へる。彼の香りと彼の味ひを發するものは、彼の淺綠色以外にない。彼の深山の幽谷そのものゝ如き「色」から出るものは、彼の淸高な香と、辛辣な味とでなければならない、と。

◉山葵は植付後滿二年に至れば、その生長力がやむ。即ち多く此の時期に於て收穫せらるゝのであるが、香味最も美なるは植付後一年より一年半の間に堀取られたものである。斯く新しきものは根皮靑白色を帶びてゐるが、年古りたるは根皮黑色を帶び、之れを摺れば、肉質脆く、粘氣に乏しい、香味の劣るこ

とは勿論である。但摺り方にも要領がある、「卸し金」を少しく炙りて温めおき、山葵の莖頭部から徐々に摺るのである。之を逆に、根先より摺るときは香味ともに劣化を免れない。山葵の眞のうま味は、根莖の上半部に悉きてゐるのだ。

◉山葵の粕漬は、もと一種の廢物利用法として創始せられたもので、料理屋用にはならず、子苗にもし難い屑物を、刻んで粕漬としたのである。それが今は却つて堂々たる一名物となつた。然し靜岡はさすがに本場だ、他土地のやうに莖や葉までは刻み込んでゐない。

◉山口縣山口町の名物田原屋の「山葵油」は、一種の山葵越幾斯で刺身、吸物、或は冷し素麵等に一二滴づゝ落して用ふれば、鼻を打つ程の利き目がある。旅行用として妙だ。二百年前から賣出してゐるといふ、原料は三瓶山葵であらう。山葵ようかん山葵餅の類は、方々にできてゐるが山葵を菓子に利用して最も好評を博したものは、東京榮太樓の「玉だれ」である。

◇

◉さて、濱名の湖畔までやつて來た。濱名湖は琵琶湖霞ケ浦に次ぐ大湖で、且つ海水洲であるから、こゝに棲む魚族は、その數頗ぶる多く九十種を超えてゐる。春先に漁れるコノシロ、夏の黑鯛、その他コチ、ボラ、ススキ、ハゼ、鯉、鮒なども多く産し、此の湖水の鰻は特に名高い。宜なる哉や濱松市には鰻專門の料理店が多い、肴町の「菊水」田町の「池川」など就中聞こえてゐる。

◉鱸はあらひに限る。よし松江の「巨口にして細鱗」ならずとも、辨天島の松林に圍まれた旅館の二階に、綺の如き湖光を懷ろにして飲んで見給へ、全たく飲める。——然し鱸のうまいのは松江だ、松江の鱸は日本一であるのみならず、ピントの外れたやうな濱名湖の風光は、宍道湖に及ばざること遠い。

◉濱松の名産は山屋の「濱名納豆」に神谷の「忍冬酒」、それから「氷砂糖」だ。今時氷砂糖とは變つた名物だが、大日本氷糖株式會社といふ素晴らしい名前の會社があつて、市内に三工場、東京及び九州の大里に分工場を置き、なか／＼盛んにやつてゐる。製品は氷砂糖。氷蜜、ポケット氷糖など。

◉「濱名納豆」と云ても、「濱納豆」と云ても同じことで、濱松でも豐橋でも賣つてゐるが、その本家は濱名湖北岸三ケ日の大福寺であること、人の知る通りである。幸ひ手許に同寺で發行した納豆由來記がある、全文を掲げて好事家の參考に供しよう。

遠江名產濱名納豆由來

納豆の名既に北畠法師の庭訓に見え、其の世に用ゐらるゝ

や久し、寺島氏の和漢三才圖會に「濱名納豆始め遠州大福寺に出」と、我寺古來納豆を傳製す、中古今川氏駿河在城の時是を進呈し、徳川公濱松御在城の日より獻上す。相傳ふ、文祿年中征韓の役起るや、家康公肥前那古耶に御出陣の際唐納豆を鎧櫃中に藏し、征韓の事停むの日祝杯を擧げるに唐納豆を下物に充てられ、唐納豆の字訓からをおさめてまめと云ふ語に通するを以て吉兆なりと賞され、其より年々獻上することゝなり、除地を賜り、爾後代々將軍家へ獻上すること、文久元年迄止むことなし。將軍家賀上の例臺必ず是を添えらると聞く。さるが故か將軍秀忠公是を畏くも後水尾天皇に奉られしより元祿十年迄七十餘年間、幕府老中の連署證狀を以て驛傳に附し禁闕に進獻す、實に我等の光榮なり。

世に納豆の製多けれども我製品は尋常の比にあらず、一種特別の雅味を有し酒に、飯に、茶に用ゐて佳なる、貴賤同好の良品なり。唐に鼓嗜也調和二五味一可二甘嗜一也といふも宜なり。霜の晨より花の夕に至るまで永く用ひて厭はず、遠江名産の名に背かず。濱名郷に出るを以て濱名納豆と稱し、山椒豆の辛きを混ずるよりから納豆と云ひ、或は唐時珍が鼓說に倣ふて製せしより唐納豆と名くと、好事雅君の知れる處なれども、近年顧客の多き日に增し、其の所由を質さる、茲を以て舊記と口碑とを併せて啓告す。

◉大變有難い來歷のものである。日本酒には相應しからぬがビールの肴としては「燒雲丹」とゝもに斯界の双璧と稱して宜しからう。――時に和尙さんへ、こんなにアーク燈のやうな大提燈を持つても、ナニ御禮には及ばないよ、いゝえ何う仕りまして。

◉三ケ日附近は、濱名の湖岸では一寸おもしろい處で、一度ぐらゐは行つて見てもいゝ。新居又は鷲津から湖上巡航船に乘込めば、礫島や猪鼻の迫戸の佳景をすぎて猪鼻湖に入り、一時間ばかりで湖岸のその小さな町に着く。秋が最もいゝね。

◉納豆の大福寺は三ケ日町から正北へ三十町。岡本在の山麓にあり、西へ一里半行けば本坂峠で、坂を越えれば御油町へ出る、此の峠は湖の全景を双眸に收めて眺望がよく、且つ古くからの紅葉の名所である。本坂と岡本との中間平山附近は一めんの蜜柑畑で、『平山の蜜柑は日本一だ』と云つた人がある。濱松の蜜柑のうまいのは是れだ。味もよく、本坂の紅葉と相俟つて秋の眺めが美くしい。三ケ日の東半里宇志山からは、香氣の特に高い松茸が出る。

## 名古屋と其の附近

◉ごゐや赤坂吉田がなくば、何のよしみで江戸通ひ――といふ俗謡が昔流行つた。狂歌と駄洒落と遊蕩氣分で上り下りした當時の東海道中でも、この附近はそのセニック・ルートであつた。しかも鹿の子の振袖で、二階から招いたといふ「吉田」は卽ち今の豐橋市だが、今日の豐橋と來ては何の風情もない市街である。一個の平凡な軍隊町である。その軍隊町の名物は、彼の歌麿の美人畫の美人の手指にさも似たる、「白魚」だとある。

◉「君は景色の佳いところが好きだつたかね」、とて特に選ばれた旗亭は、豐川の流に臨んだ醉翁亭。その時の吸ひ物が白魚であつた。芹と松露がツマに入つてゐた、但松露は罐詰ものである。酢の物も白魚だつた、鍋も白魚だつた。此の白魚づくめの御馳走をしてくれたのは、當時旅團長をしてゐたK、どこ迄も軍隊が附纒つてゐるから可笑しい。

◉白魚は三河灣で漁れる、豐川の落口の右岸、前芝村がその主産地である。大きくて肉がよく締つてゐる。

◉後ろに戀の松原を控え、前に大島、小島、竹島等の島影を望んだ海水浴場は蒲郡。こゝの名物は海鼠腸、藻漬、海老ほろであるが、是等は必ずしも蒲郡の特産といふ譯ではなく、寧ろ愛知の沿岸地一帶の名産ともいふべきものである。

◉岡崎名物「八丁味噌」、これはわざ〳〵食ひに行くがものはない。

◉尾張名古屋は「海鼠腸」で持つ。名古屋は日本の中京と誇るだけに名產も多く、漆器、陶磁器、七寶燒、時計、樂器、セメント……など種々あるが何れも固いものばかりだ。殊にセメントなどは市會議員や縣會議員と云つた種屬の食ひ物で、我々の食ふべきものではない。

◉海鼠腸は石川富山へんでも盛んに賞美するが、これは何と云ても名古屋が本場だ。產額も多いし、品質も上等である。海鼠のわたは、不思議な芳香をもつた腸で、それが恰かも絹いとの如きデリケートな觸覺をもつて、するすると咽喉をすべつてゆく、彼の滑らかな感じは、實際何とも云へるものぢやない。

◉然し、海鼠腸は生に限る。樽詰や罐詰として賣出されてゐるのは、一種の鹽辛である。味も香もぐつと落ちる。鰹の鹽辛は、鹽辛として始めて食へるので、鰹の腹わたなぞ生では迚も食へないが、海鼠腸に至つては生のまゝがうまいのである。

◉海鼠腸の產地に、海鼠の豐富であることは言ふ迄もない。海鼠は、鹽で揉んで山葵酢で食ふ。これは全國到る處同じやうである。肉がコリコリして齒切れよく、矢張り一種の芳香を有し、鮑の「水貝」よりも、遙かに乙なものである。唯だ、私は海鼠の態を甚だ好まぬ、あの妖怪じみた態を觀ると、食慾頓に去

つて、一寸食ふ氣にはなれない。

◉何時であつたか横山健堂が、『最初に海鼠を食つた者は、餘程の勇者であつたに相違ない』と嘆じたことがあつたが、誠に御同感である。處で私の友人に海鼠の猛愛者がある、かれは海鼠を食ふのに、庖丁を入れると味がまづくなると稱して、毎も丸ごと之を嚙ぢる。かれも亦勇者の片われであう。

◉海鼠は今は尾張三河の沿岸各地で産出するが、その原産地であり、且つ今も尚主産地たる名譽を維持してゐるのは、知多半島の大井港である。海鼠捕船は一種特殊のかたちをした船で、それが白い帆を張つて、湖水のやうな靜かな海上に幾十艘となく泛んでゐる風情は、大井港獨得の趣である。

◉海鼠腸製造の元祖は、即ち此の大井港の山本八右衛門（屋號八◉）で、昔は此の家の株となつてゐたといふ。そして海鼠を食つた勇者の名は不明だが、海鼠腸の發明者は明かにわかつてゐる。大井の名刹寶珠山醫王寺の緣起書の教ゆる所に依れば、それは即ち行基菩薩であると。あきれた坊主だ。

◉大井の隣地は師崎で、其處はすでに知多半島の南端、日間賀島や篠島など所謂「東海の松島」を構成せる島々は、近く海上一二里の間に連なり、一日數回定期の石油發動機船が通ふてゐる。日間賀島は赤穗義士中の風流者大高子葉を出したことを自慢にしてゐる島で、蛸が名物、「日間賀蛸」といつて名高い。それから「內紫」といふ大さ三寸に餘る大蛸がとれる。これもなか〳〵うまい。

◉知多半島はお向ひの渥美半島などゝは違ひ、古くから開けてゐた半島で、到る處絃歌の聲あり、師崎半田附近は清酒の産地として知られてゐた。それで此の半島、酒は比較的に佳い。佳酒あり佳肴あり憾むらくは美人が居ない。

◉渥美半島では伊良湖岬の西瓜を推奨する。私は西瓜を嗜好する者で、夏到れば必らず伊良湖の西瓜を想ふ。伊良湖の西瓜は汁が多くて、且つ頗ぶる甘味に富んでゐる。大きなスプーンをざくりと突込んで、その一塊を掬取つて口中に含めば、果肉悉く舌頭に溶け去つて、些の殘滓を留めぬ。西瓜は砂地に限る。土質と氣候と品種と、三拍子揃つた伊良湖の西瓜は日本一此の西瓜を食ふだけでも伊良湖岬は一遊の價値があらう。

◉名古屋はまた日本一の蔬菜市場たる枇杷島を控えてゐる爲、野菜と果物とは驚くべき豐富である。濃尾平野の産は勿論近縣の蔬菜物は悉く一度此の市場に集まつて、そして又各地方へと散つてゆく。此の市場は名古屋市民に取て、大きな誇りでもあり、又幸福でもある。國産では「宮重大根」、大根の王だと云はれてゐる。

◇

◉岐阜の鮎も、話のたねに一遍ぐらゐは食つておくべきであらう。長良川の鮎は、その名聲すでに世界的で、日本鮎の代表權を有つてゐることは爭はれない。日本鮎と云つたが是は少々不都合、鮎は日本の特産である。

◉昨年だつたか一昨年だつたか、世界的の魚類學者と云ふジヨルダン博士が日本へ來て、鮎を食つた、そして米國産のユーレーコンに次ぐの美味、世界で第二の名魚で御座ると激賞した。かれは米人である。ちと怪しい說だと思ふけれども、私の舌はそのユーレーコンを知らないから、何とも抗議の申込みやうがない。まさかフライにして召上つたんではなからうね。鮎は蓼酢のこと。

◉鮎の產地として盛名あるもの、長良川の外に富山の神通川、兵庫の揖保川、周防の錦川、其他々々々々、東京附近ではお粗末ながら多摩川。何處のが一番うまいと、斷言し得る程銳敏な舌は無からうが、鮎料理は岐阜、富山、岩國など皆上手にやる。それに、多少はそれぞれの特色もあるやうである。

◉長良橋から金華山公園へかけての風色は、實に秀絕で、此あたり眼に見ゆるもの皆「涼し」の一句能く其の情景を悉してゐるが、唯だ涼しくないのは、チンチン鈴を鳴らして橋上を驅る電車である。夜は此の橋上に立つて、川風に袂をふくらませながら、金華山の麓から下つてくる鵜船の火を觀るのが涼しい。鵜船は無月の夜を最上とし、上絃の夜は月の落ちるを待ち、下絃の夜は月の出ない前に始める。夏の宵の賑かさは、京の四條の夕涼み以上である。——然し謂ゆる「鵜飼見物」とは、此の橋の上から眺めることではなかつた。

◉鵜船は五隻若しくは七隻を以て一組とし、舟毎に篝火を焚いて、上流の方から漁をしながら下つてくる。御覽船は、橋のかみに之を待受けて、共々に漕ぎ下りつゝ眺め、眺めつゝ飲み且つ歌ふ。舟子は篝を執つて舷を亂打する、鵜は魚を吐いて復た波に入る、人は歌ふて又飲む、火光は更るに從つて彌々赤く絃歌は水に流れて夜とゝもに盡きない。

◉川を挾んで、瀟洒な旅館や旗亭がある。就中右岸長良の鐘秀館は、近く金華山の翠微と相對して、河畔第一の眺望を有つてゐた。芭蕉翁の「十八樓記」に依つて名高い十八樓は、川の左岸の橋しもで、且附近に人家が建並んだ爲、今は全く金華山を視野の外に逸し去つたのは惜しい。然し例の「皆涼し」の句碑は、其の庭内に殘つてゐる。

◉鵜飼は岐阜最も盛んではあるが、長良川の特産といふ譯ではなく、つい近くの犬山でもやつてゐる。犬山は名古屋市柳橋

から十八哩、約一時間で達する。木曾川の左岸に在つて、「日本ライン」と呼ばるゝ景勝の地である。『鮎は岐阜よりも犬山の方がうまい』と云ふ人も、實際尠くはない。だが長良川よ心配するな、岐阜の方がうまいと云ふ人も、實際尠くはない、人はてんでに勝手なことを言ふのだ。

◉犬山の名物は鮎にあらず、山椒魚料理である。濃尾地方では一般に山椒魚を嗜食するの風があるが、犬山を以て本場としてゐる。煮ても食ふ炙燒にもする、脂肪に富んだ肉で、味は魚らしからず寧ろ獸肉に近いが、一寸「ムツ」に似たところもある。

◉山椒魚の棲家は深山の溪澗で、日光や箱根の山中は其の産地として有名であるが、數は甚だ少ない、飛彈山中の深い溪谷などには、可なり多く棲んでゐるらしい。現に角各地で捕れた山椒魚は悉く此の地方に集まつてくるのだ相である。背に黒い斑點と、疣とを有し、而も蛇と蛙の合の子のやうた彼の醜惡な相貌を、眼に想ひうかべつゝ、その肉の一片を口にする事は、私に取ては可なりな努力であつた。が、後で料理法を聽いたら尚ほ氣持が惡くなつた、生きながら燒鍋に入れて、狂ひ死をさせるんだ相である。

◉岐阜へ戻つて、土産物には鮎の粕漬、鮎のうるか、松風(菓子)に守口漬。うるかは即ち鮎い腸わたの鹽辛で、むつう苦いところが酒徒の間に珍重せられる。鮎の腸燒も、此のわたを拔いたのは決してうまい物ではない。「子うるか」は鮎の卵巣を取つてつくつたもので、うるか中の上等品である。守口漬は守口大根といふ細長い紐のやうな大根を、味淋の粕漬にしたものだ。

◉大垣は「御所柿」の本場で、名物も生柿、干柿、柿ようかんの柿づくめ、養老公園には「養老酒」、是等は敢て説明を要せぬ。

◉東海北陸兩線の分岐點米原へゆくと、「赤蕪漬」がある。ただ綺麗なばかりが取柄で、裝飾的な物であらうと、多寡を括つて久しい間輕蔑してゐたが、豈計らんや存外の珍味であつた、酒の下物ともなれば香の物代用としてもよい。此の外琵琶湖名産「鮒ずし」を賣つてるけれども、これは大津が本場だから……。

## ◇京、阪、神

◉京の着倒れ難波の食ひ倒れと稱し、大阪は食道樂を自慢にしてゐる處である。大阪に夫れ程うまい物があるか?、ちと疑問である。成る程べちやくちやと食ふにはよく食ふ、芝居へ行

つても寄席へ行つても、物を食はずに見物してゐるお客は殆んど居ない、何かしら絶えず口を動かしてゐる。特にそれは、婦人に多い。大阪の食倒れは即ち「質」にあらずして「量」である。——此說に對しては、大分抗議が出さうだな。

◉『東京は酒がまづうて、あかんな』。二言目には大阪の友人たちは屹度かう言ひよる、些か腹が立つけれど、凡は事實だから仕方がない。實際大阪は何んな小料理屋でも、灘の生一本を使つてゐる。是だけは羨ましい。むかし大阪の名物を詠んだ狂歌に、

舟に橋、お城、草履に、酒、かぶら茶出屋、揚屋に、石屋
植木屋。

と、ちやんと酒がはいつてゐる。灘の酒を大阪名物に數へて涼しがつてゐる處が、いかにも大阪らしくてよい。

◉さて是から大阪を責める。京都には全く無く、東京には殆ど無くて稀れにあり（それも今度の震災で全滅したらう）、ひとり大阪に於て盛んなものは遊船宿である。その數實に六百餘。さすがに大阪は「水の都」だ、享樂の舞臺を船に取つて、流るゝともなき流れの上に、夢幻のごとき歡樂の情調を追ふことを忘れなかつた。昔は五座の芝居見物にも、多くは屋形船で行つたもので、近松の淨瑠璃などにはその情趣がよく描かれてゐる。役者の樂屋入が、矢張り船で行はれたといふことである。

◉或る人の、此の水都遊船の情景を描いたものに

……やう／＼大川へ出ると、風は俄かに舟の灯を煽ぐ、舷をたゝいて謠曲、淨瑠璃をうなりながら、鮒卯、芝藤、日出（ひので）などの舟生洲へつけて料理を誂へ、船へ運び入れて更に遡る……寄つて來るのは果物の舟、善哉の舟、鮨の舟、花火の舟、落語の舟、此方の舟で飲食して彼方の舟の藝を見聽きする。一つ濟むゝ互ひに離れる。知人の舟と圖らず逢ふ、舟を寄せて水に語る、盃をかはして風に別れる。風は愈々酒氣を吹く。水はいよ／＼赤くなる。舟はいよ／＼絃歌になる。色を喜ぶ者の中をめぐつて夜を忘れる……。

と、然し今は此の遊船も甚だ振はなくなつた。

◉遊船の時代はすでに去つても、大阪でうれしいもの——依然として水都の誇を成せるものは、芝藤、鮒宇等の舟生洲の川魚料理である。大阪は海魚に豐富であると同時に、川魚にも豐富であ、また其の料理に巧みであつた。大阪の友人が一番につれてゆく處は、此の船の川魚料理であり、私にたちの一番喜ぶものも亦それであつた。

◉川魚料理で有名な家は、南では末吉橋通三の「播半」、九郎右衛門町の「芝藤」、宗右衛門の「菱富」、東では北濱二の「灘萬」、

北では網島の「鮒宇」などである。播半はすつぽん、菱富は鰻がお得意ださうである。其の他の家も、それ〱特色を有つてゐるのであらうが、餘り詳しいことは知らない。

●十一月もすでに半ば、木枯の風漸やく霜を帶びる頃になると、彼方の橋下、此方の河岸に牡蠣船が現れて、一層この水都的氣分を濃厚にし、風につれてぷーんと鼻を打つてくる磯の香は、抑へ難き味感をそゝるのであつた。此の牡蠣船も昔は、廣島附近の漁夫が、牡蠣のシーズンに入ると共に、一艘の傳馬一挺の櫓にギーコギーコを極めて、遙々海を渡つてやつてきたものださうで、船そのものからがすでに磯臭紛々、眞に「藻に埋るゝ牡蠣船」の趣があつたと。今は其のシーズンに入ると、ビーヤホールが懸床を取外して、倉庫に預けた船を組立て、之を水に泛べて早變り、材料は廣島から汽車で取寄せる。磯の香ひもへちまもあつたものかは。

――牡蠣に就ては些か語りたいが、本場の廣島へ讓る。

●右の外、大阪でうまい物を食はせる家と云へば、先づ南では西櫓町の「丸萬」、同じく「京與」、難波新地の「日柄喜」、難波驛前の「花月樓」、西では新町通の「鳥菊」「門野」、松島の「現長」東では平野町の「堺卯樓」、北では堂島の「魚岩」、それから天王寺の「八百松」、住吉の「丸太格子」などであらうか。西洋料理や精肉いろは暫らく問題外としておく。

●住吉公園は、社前から海濱一帶にかけての松林、松は皆年古りて雅致に富む、その間にずつと並んだ料理屋、茶店はいづれも瀟洒な構ではあるが、赤前垂で客を呼んだといふ名物の三文字屋伊丹屋ともに今は無く、長柄の杓で茶を汲んで出した小町茶屋も無くなつて、ひとり「丸太格子」のみが昔の俤をとゞめてゐる。

丸太格子とは、表がゝりが太い丸太格子に組んである所から、名に呼ばれる家で、蛤汁に蒸蛤、鯡、ぼら鯷、蒟蒻の田樂と云つた淡泊と野趣とが、一部の人の味覺を喜ばせてゐる。一體大阪は料理に蛤を使はぬところで、東京に蛤の多いのと妙な對照だが、此の家が其の蛤を呼び物としてゐるのも面白い。

●二三日ぐらゐの旅では一寸氣付かぬが、京阪地方は料理によく干瓢を使ふところで、一例が、鮨料理にも干瓢卷などゝいふのがある。京都は寺町だから干瓢や椎茸を多く使ふのに不思議はないが、大阪は京都よりも多く干瓢をつかふ。

●大和の木津、近江の水口は干瓢の産地として、昔は聞こえた土地であつたが、今はすつかり衰へて、干瓢は殆んど栃木縣の專賣もの、年々の産額百萬貫を上下してゐる。次では茨城縣の結城・下館附近だが是は十萬貫位といふことである。處で、

木茨城の干瓢が東京へ移出さるゝ額は極めて僅少で、全産額の八十%までは大阪へゆく。

◉干瓢は極めて淡泊なものだが、噛しめるに從つて一種自然的な甘味と、床しい香りとが沁みてくる、俳味を有すとでも云ふか。此の高尚な香味を探り出し、之れを嗜好する大阪人の「舌」は、些か敬意を表するに足る。然しこれは京阪地方に「茶料理」「精進料理」流行の結果で、大阪の或る一流の料理屋では干瓢から取つた煮汁（ダシ）を茶料理に用ゐてゐる相である。

◉「或る料理屋」といふ所以は、その家では干瓢からダシを探ることを、家傳として極秘にしてゐるから、名前を預つておくのだが、笑はかせる、そんな事は禪坊主は昔からやつてゐるぜ。

◇

◉茶と精進料理とは、京の人達の趣味に、しつくりと合つてゐるやうだ。ほやあとした彼の東山の姿を眺めながら、古びた茶碗をひねつて居ると、すつかり好い氣持になるに相違ない。だが我々野人に取ては、あの「茶」なるものは强敵であつた。

◉もう黴の生へた話であるが、昔足立北鷗（讀賣新聞の主筆をしてゐた）と私と、それから樋口龍峽――であつたか横山健堂であつたか、或は更に他の人であつたか、確と覺えてゐないが、兎に角三人が遙々、西陣織の西村甚兵衛翁に招かれて行つた事があつた。それが私には最初の京の旅であつた。

◉一日、三人は翁から茶に招かれた。三人は恐る恐る身をこごめて四角な犬くゞりから、茶室に入つた。主人は和服だがお客は皆な洋服だ。やがて例の茶碗まはしの藝がはじまつた、私が茶の儀式に就て豫て敎へられてゐた事柄は、『茶席へ出たら他人のする通りを眞似れば好い』といふことだけであつた。けれども先頭が足立北鷗では、此の敎は何の價値も無かり相に見えた。そして加藤清正と福島正則とがお茶に招かれて、鴨居へ頭をぶつつけたと講釋師のよくする話を想出して、私はとうとう謹嚴なる茶席に於て、クスクス笑ひ出してしまつた。北鷗は苦り切つてゐた。――多分茶が苦かつたのであらう。

◉茶碗まはしは兎に角無事に濟んだが、茶菓の食べ方に就て私たちは遂に二派に分れた。その茶菓といふは小形の橙（であつたか青柚であつたか、是も確とは記憶してゐない）を砂糖で煮たもので、一つ宛皿に載せて箸が添えてあつた、北鷗と他の一人は果皮をつゝき破つて、中の肉を挾み出して（然うすることは、可なりの努力らしかつたが）食つた。私は一種の冒險的氣分で、皮のまゝ食つてしまつた。

◉その結果兩派の間に、何れが正しい食べ方であるかに就て詮議が始まり、ついに北鷗から翁に裁判を仰いだ。甚兵衛さん

頗ぶる迷惑なさうな顔付で、『皮のまゝ召上つて宜しいのです』と、慇懃に答へた。宿に歸つてから北嶋が『あなたは茶の作法を知つてるのですか』と不思議さうな顔をした、私は笑つて答へた『いゝえいかに茶の作法が六箇敷いものだつても、蜜柑の皮を箸でむかせる程の難題を吹かけるものでは無からうと思つたまでです』。

◉二度目に飲んだ時は、横濱の大谷嘉兵衛翁と一緒であつた、かれは全國茶業組合の會頭をしてゐた。『茶は宇治、水は京都ですね。宇治の玉露も京の水を用ゐなければ、ほんとうの味は出ませぬ』『私は京へ來てお茶を御馳走になるのが、樂みでな』そんな事を言つて賞める度毎に、茶のお代りが出るのには縮ろいた。

◉京都では又「松茸」で苦しめられた經驗を有つてゐる。御大典の前後一箇月ばかりを、京都で暮らしたが、丁度松茸のシーズンで、朝から晩まで松茸づくめには少からず閉口した。是は堪らないと宿屋を逃出して、肉屋へ飯を食ひにゆくと、何事そこゝも亦松茸多々的である、松茸や三ツ葉は殆んど勘定の中に入れてゐないのかと思ふ程どつさり持つてくるのだ。京人の松茸に對する、恰かも東京人が豆腐を使ふ位にしか思つてゐない。

◉それも其の筈だ、近畿地方の山といふ山は、殆んど松茸を產せぬところは無いと云つていゝ位、どこでも松茸が採れる。從つて茸狩の行樂も頗ぶる盛んだ。この上丹波地方から移入さるゝ量も夥しいものである。然し風味は產地によつて、若干優劣がある、大和南部地方即ち吉野口、北宇智、五條あたりの產が、最も香味が佳いと云はれてゐる。

◉京都名產の中で私の好きな物といへば、「千枚漬」と「柚味噌」とである。千枚漬は有名なものだけに、其の製造所は甚だ多いが、四條小橋の袂から南へ入つた仙臺屋に限ると教えられて、私はいつも其家で買つてゐる。驛前あたりで賣つてゐるのとは較べ物にならない。

◉原料は聖護院蕪と聖護院大根で、之を薄く輪切にして、[illegible]と麴と昆布と唐辛で漬ける。そして唐辛を加へる。殊に蕪は、根よりも肉質が緻密で、一種の芳香を有つてゐるから上等である。昆布特有のマンニットの甘味とグルタミン酸から來るうま味とが、すつかり蕪なり大根なりに浸みこんで、而も著しく粘氣をさへ有てくるので、舌觸りも頗ぶる滑らかである。その味淡白にして高雅である。

◉聖護院は蕪も大根も似たやうな形で、太く短かく直徑は普通のもので五六寸あるから、輪切にしたところも甚だ立派だ。

私は千枚漬に「漬物の王」なる尊稱を與へたいと思ふ。

◇

◉私は一體、料理兼業の旅館が好きで、大抵の場合さういふ家を選んで泊ることにしてゐる。食ひ物がうまくて女中なども氣が利いてゐる。五日や七日滯在しても、毎日同じものを食はされるやうな憂目を見ることが、比較的すくない。宿料はいくらか高いには違ひないが、全體の氣分がぼうとして、コセコセしたところのないのが嬉しい。

◉料理兼業旅館は三味線を彈いたり、歌つたり、騷々しくていけないと非道く嫌ふ人もあるけれど、私にはそれがさして苦痛に感ぜられぬのである。騷々しいと云つた所で、隣室で騷ぐ譯ではなく、飲み客の宴席と旅客の客室とは、大抵棟を異にしてゐるものだ。――兎に角富山の富山ホテルや大津の紅葉館などは、さうした旅館の内私の最も好きな家の一つである。

◉大津の紅葉館は、表玄關は白玉町の通りに、裏玄關は大津電車の電車道に、表から裏までは二町ほどもあつて、長い長い廊下が之れを連いでゐる。裏の二階三階の客室からは、何れも眼も遙々と湖水が見晴らされる。座して湖水を眺める客の視線を遮らぬやうに、戸は凡て一枚硝子となつてゐるなど、親切な注意が拂はれてゐる。

◉二日三日もこの旅館に居れば、湖水の珍味は、求めずとも悉く我が前に運ばれてくる。料理は?、私は一枚硝子の戸を見た時、すでに此家の板前の凡ならざるべきことを斷定してゐた。私は滅多に京都には泊らない、京都に用事があつて行つた場合でも、多くはこゝに本據を置くことにしてゐる。從つて私の琵琶湖に親みを持つことも、亦頗ぶる深いものがある。

◉琵琶湖名產はヒカイ(鰉)といふ小魚である、明治大帝は非常に此の魚を嗜好された相で、「鰉」の當て字もそこから來てゐるといふことである。輕い味をもつた魚で、掻揚げやフライにして食ふと、實際何とも云へない。京都名產「鷺知らず」も、實は此の湖水の產だ。

◉「飴だき」に「鮒ずし」は、大津網節とともに大津名物として古くから聞えたものである。飴だきは湖水で漁れる小魚を、飴と醬油とで佃煮にしたもので、石川町の坂本屋がその本家だ。「鮒ずし」は有名な源五郎鮒をもつて作り、これは石場の「魚善」のを最も佳しとせられてゐる。魚善は。大津ではうまい物屋として知られた料理屋である。

◉琵琶湖の「鮒ずし」は變つたすしで、一般のすしと云ふ意義には當箝らぬ、『彼の鮒ずしだけは、臭くて迚も素人には食へない』と、大抵の人がいふ、私も餘り彼れを好まない、まるで

腐敗つたやうな香ひがする。然し酒飲みけ頗る之を珍重する。野田卯太郎は酒徒であるか否かを知らないが、かれは曾て此の鮒ずしを三折買つてゐたのを、私は見た。此の鮒ずしは壽司ではなくて鮒を醱酵させたものである。彼の臭氣なり風味なりは、即ち醱酵に出る臭氣と風味である。醱酵と腐敗とは、或意味に於て親類のやうなものである。

◉「源五郎鮒とは、何んな鮒なのか？」、これはよく受ける質問であつた、何處か變つた鮒であらうとは、多くの想像する所であるが、答は單簡、琵琶湖で漁れる鮒が即ち源五郎鮒なのである、普通の鮒と異つた所はない、但琵琶湖の鮒が、斯く呼ばるゝには一場のロマンスがあつた。

◉佐々木氏が近江一國の領主であつた頃の話である。家來の錦織源五郎は漁獵に就ての造詣が深いところから、琵琶湖の漁司を命ぜられてゐた、殿樣は特に鮒がお好きであつた、でかれは毎日湖水から漁れた鮒を嚴重に檢査して、御殿の司膳部へ送屆けることが、主なる仕事の一となつてゐた。

◉同じく家臣の一人に牛塚忠太といふ意地惡の武士がゐた、かれは殿の愛妾紅に想をかけてゐた、紅は又秘かに源五郎を想つてゐた。そこで忠太は源五郎を失策らせて遂出す必要を感じた。或る日、源五郎が奉つた鮒の鰓に一筋の髮毛が潜んでゐるのを、司膳部の役人が發見した、それに源五郎の名で殿に達て源五郎は直に官を取上げられ、代りに忠太が其の後任となつた。忠太は斯うして源五郎を片付けて置いて、或夜源五郎の姿に扮裝して紅の寢室に忍び込んだ。紅の居間には一人の男が泊つてゐた、『己れ源五郎』と男は矢庭に此の闖入者を捕へた、その男は殿樣であつた。

◉翌日、忠太は斬罪に處せられ、源五郎は適宛り漁司に復官して、琵琶湖の鮒は再び源五郎に依て檢査せらるゝやうになつた。源五郎の奉る鮒、源五郎に依て檢査せらるゝ鮒、世人は何時しか之を源五郎鮒と呼ぶやうになつたのである。

いにしへは殿もかしこし堅田鮒
つゝみ焼なる中の玉章……衣笠内大臣

鮒は、殊に堅田附近にて漁獲さるゝのが、一番美味だと云はれてゐる。

◉『日本一の鰻料理……金子』、但これは私が云ふのではない。京津電軌の電柱にペンキで書かれた廣告である。今は線路が變つた爲汽車はそこを通らなくなつたけれど、金子といふ鰻屋は、もとの大谷驛附近街道の走井といふ處にある。大津から十町位の距離である。湖水で漁れる鰻を使つて、焼き方もし」も純東京式である、竹葉(ちくやう)や神田川に較べてうないと、

ないか。」より下味くもなかつた。そして極めて安直であつた。『大津へ行つたら是非寄つて見給へ、一寸淺草の「中の常盤」と云つた風な大きな家だ』、さう云つて私は友人達にすゝめた。

◉走井の「走り餅」は、舊幕時代からある古い名物の餡ころである。惡く甘くないのと、餅も硬からず軟からず、程よ當りである處が自慢なのだらうで、今も尚よく賣れてゐ味ひは加賀の「松任あんころ」に酷似してゐる。

# 朝夕富士の見ゆる新居から

村松梢風

## 故郷

私は山を上の方へと登つて行つた。本道を行かずに、開墾地の茶畑の間の傾斜の急な小徑を歩いた。村が山の下に見えた。九月の末の眞晝の陽が空いつぱいに耀いてゐた。私は息が切れるので度び／＼立ち止つて足を休めた。暗綠色をした茶の葉から發る澁いやうな香氣が微かに鼻を掠める。體が少し汗ばむやうに感じる。

山は八分通り上まで開墾されてゐた。山の上には寺がある。大師堂だの、青銅の大佛だの、札所の觀音堂だのがある。境内を取り圍んでゐる古木の椨の幹と幹との間から堂の建物の森中が見えてゐる。私は一緒に隨いて來た老人を振り返つて言つた。

「お爺さ、これあ中々骨が折れるな」

「さうですよ。だが、其の代り近いこたあ三つ一もござんすまいよ」

と老人は勢よく答へた。老人は古い麥藁帽子を冠つて、手には二種ばかりの花を持つてゐる。もう八十近い齡だのにまだ腰も曲つてゐない。痩せてゐるけれど岩丈らしい骨組み、太くて長い手の指、銅色の厚い皮膚、それらが永い永い勞働の生涯の苦痛をば語つてゐる。彼は隣り村の或る中農の隱居で現在では非

常に氣樂た身の上だつた。で、四年程前私が家族を東京へ移した時から私の家の留守番に住み込んでゐるのだつた。彼の女房も齢は七十位だがいまだ達者で居た。彼女は夫と違つて綺麗な顔立ちの女で、染めた髪の上に小さな髷を載せ、いつでも眞黑に鐵漿を付け、そして月の三分の一位は私の家の方へ來て暮してゐた。

茶畑が盡きると、松林を伐採したあとの灌木だの雜草だのが茂つてゐる自然地で其處には道は無かつた。山躑躅だの荊棘の中を私は進んで行つた。幼なかつた頃よく此の山へ來て、躑躅の葉に附着するみゝじくだの、すつぱといふ木の葉を採つて食べたりしたことを私は思ひ出した。幼年時代の私達子供は其の他いろんな野生の植物の實だの、若芽だの、或ひは草の根を掘つて食べたりした。それから私達は山の腹へ洞穴を穿つて隠れ家を造つたりもした。それらの子供等の遊戯の中には幾多の原始人の生活が遺されてあつた。元始生活から文明人に進化して來た人類發達の道程を、私は短かい自己の半生の上に眺めるやうな氣持がした。

頂上に達した。其ゝは墓地である。一隅に開山堂と稱する小さな祠がある。此の寺の開山木食上人が入寂した場所だ。穴を掘つて其の中へ這入つて七日七夜の間鉦を鳴らしてゐたといふ祠の側へ行つて強く足踏みをすると、ドン・ドンと地下の空洞に反響して聞える。

墓地は非常に綺麗である。少し濕つた地面には柔かな苔若が生へてゐる。樹木の間から日光の珠が落ちて來て涼しい風が流れて行く。私は自分の家の先祖代々の墓の前に立つた。老人は寺の方へ行つて新らしい水を汲んで來て花立ての水を替へ、めい／＼の墓の前へ新らしい花を立てた。古い墓には苔が附いてゐる。が、十七年前に死んだ父の墓はまだ昨日建てた物のやうに新らしかつた。後ろの方に石の地藏尊が立つてゐる。三歳の時兄の私と一緒に凧を上げて遊んでゐた僅小川へはまつて死んだ弟と、五歳の時赤痢を病んで死んだ次ぎの弟と、其の二人の子供の爲めに父が建てた地藏尊であつた。兄弟三人の中で私一人が後へ殘つたのだつた。併し、可哀相な弟達や、働き盛りで死んだ父の墓の前に立つて見ても、最早今の私の眼には一滴の泪も浮かばないのである。死者と生者との懸隔が餘りに遠くなり過ぎてゐる。私は可成り久し振りで墓参をしたのだつた。併しそれは或る意味でこれらの地下の人々に暇乞ひをするやうな氣持で今日玆へは來たのである。

私は此の山の下の村にある自分の家を遠く離れた土地へ運んでしまふ決心をした。其の月初めに遭遇したあの大地震の影響

だとも云へる。死んだ父が建てゝからまだ年數を經てゐない其の家を永年明けて置くことを惜しく思つてゐた處へ、地震以後の東京の生活が私には堪へられなく苦しいものになつて來たので、急に計劃して、比較便的利な土地へ家を搬んで其處へ一家族の生活を移すことにしたのだつた。そして明日から其の取りこわしに着手することになつてゐた。それは何でもない事のやうだが、私自身の感情の上ではさう小さな事柄ではなかつた。祖先傳來の生活を嫌つて都會へ飛び出して行つた小さな反逆兒の一人で當て私もあつた。それは許さるべき事のやうに思つてゐる。が、先祖が初めて其の地面を拓いて、そして其の後幾代もの人達が同じやうに、其の地面の上の繁榮をのみ希つて來た魂のこもつてゐる屋敷を石ころ畑にしてしまつて、建ててある家までも他鄕へ持つて行くといふことは餘りに過去の精神を蹂躙する振る舞ひであると自身でも思ふのである私の感情の上手から云へば、寧ろ立ち腐れにするまでも家屋敷には手をつけずに置くことの方が快いのである。

私は山の端に立つて前方を眺めた。此の山續きの山脈に沿うて村が橫はつてゐる。村の傍らを可成り大きな川が流れてゐる。其處から沃野が遠く擴がつてゐる。實つた稻が田面を深く黃色く染めてゐる。縣道を乘合自動車が走つて行つた。すべての物が眠つたやうな靜けさの底に沈んで、押し繪のやうにハッキリと私の眼に映つた。

「何んといふ美しい村だらう――」

と私は思つた。私の家も其處から見られた。柿の木は紅葉してゐた。白壁の藏がキラ／＼と反射してゐた。むしろ平凡な山野、單調な村落の光景　それが何故斯うまで私の心を惹き付けるのだらう？　私はふと或る事を思ひ出した。それはもう二三年前の事だ。つた或る時私は此の村の家へ歸つてゐた。其處から一里ばかり離れた町の友達を久し振りで訪問して見ようと思つて、あの縣道をブラ／＼歩いて行つたのだつた。其の途中で何の聯絡も無く、私の腦裏に突然「故鄕」といふ觀念が浮かんだ。それは後にも前にも經驗のないほど强く犇々と私の胸に迫つた。私は駭いたやうな氣持で四邊を見廻した。周圍の物象が悉く私の心に異常な親しみを感じさせた。其の縣道は私が少年時代每日町の小學校へ通つた道であつた。其處は道路が堤防を兼ねてゐて、川沿ひの側には小篠の籔が茂つてゐて、片側は下の方に田圃があつた。四五丁の間は人家が杜絶えてゐて　松林の低い山が近くにあつた。平凡と云ふよりも全く取り柄の無い周圍の光景であつた。それだのに私の魂は其の自然の中に吸ひ込まれてしまつた。私の脚は、其の踏んでゐる土の中から生え

たもの丶やうな踏み心地の快さを感じた。其の感じは全く土其の物に對する親しみであつた。母親に對する親愛であつた。てうどそれと同じやうに、故郷の土や水と人間の肉體との間には有機的に引き合ふ何物かゞあるに相違ないと私は思つた。「人間といふものは畢竟自分の生れ故郷の土に還元すべき宿命を持つてゐるのかも知れない――」私はそんな事を考へ乍ら埃つぽい道を歩いてゐたのだつた。

私は今、其の時と同じ經驗を繰り返してゐるのであつた。故郷の土に還る――其の事が更に強く一つの願望のやうになつて私の心を浸してゐた。私は背後の墓地を振り返つて見た。其處に靜かに眠つてゐる人達の靈魂を幸福であると思つた。私も死んだら此の人達と同じやうに玆へ葬つて貰はふ――と考へた。

私は、今の自身の感情を誰れかに語らずには居られないやうな氣持になつた。其處で老人に向つて、相手に理解のできるやうな言葉でもつて自分の心持を語つた。そして恁う附け足して言つた。

「人間といふものは年と丶もにいろんな心持の移り變りを味はふものだ。私が廿歳を越すと間もなく家を飛び出した時分は、私は自分の生れ故郷ほど厭な處はないと思つた。乞食をしたつて誰れが恁んな處へ歸つて來るもんかと思つた。無論死んだつて此の土地の土になる了簡は無かつた。知らぬ他國でのたれ死をして鳥や野良犬の餌食にならうと其の方が餘つ程幸せだと本當に考へた。そんな風で私ほど此の故郷を呪つた人間は今迄に無かつたらうよ。それから私は今日まで都會で暮して來た。都會で暮して居れば田舍へ歸り度いと思ふやうなことは一度だつてありはしない、私は旅もして歩いた。廣い世間のうちには實にいい土地もあつた。さういふ土地へ住む人はどんなに幸せだらうと考へることはあつても、そんな時此の自分の生れた土地のことを思ひ出したりしたことは只の一度も無かつたのだよ。處が、今恁うして村を眺めてゐると、自分が是れ迄に見たどの土地よりも、私に取つては矢つ張りこの村が一番いい土地のやうに思はれて來たんだ。私は今あの家まで取り拂つてしまはふとしてゐる、それから今後も他國へ出ていろんな事をするだらう、誰れが見たつて私はもう此の土地とは關係の無い人間なのだ。が、一番最後には私は矢つ張り此の村へ歸つて來るのかも知れない、私はそんな氣持がしてゐる。此の墓地だつてやがては私の墓場にもなるだらうから、掃除位は綺麗にして貰つて置かうと思ふのだよ」

私は聲を立てゝ無意味に笑つた。山上の澄んだ空氣の中に私の聲だけが強く響いた。老人は眼をしばだたき乍ら私に言つた。

「お前樣の仰しやることは儂らにも解りますよ。儂は自分では若い時から一歩も村を出たことのない男でございますから、さういふ覺えもありませんが、よく旅へ出た人が生れ故鄉ほどえゝ處は無いと云つて歸つて來たためしもございますだ。それについてもう餘程古い話だが恁んな事がありましたよ……」

老人は兩方の手を腰に當てながら、枯れた聲で次ぎのやうな話を續けた。

舊幕時代の事だが、茲から一里ばかり東の原に武家ばかり集まつて一部落を造つてゐた。それは近くに城を持つてゐる大名の家來の者だが、祿高だけでは生活が立たないので城下を離れた其の原へ住んで、非番の時には農業をしてゐたのだ。其の仲間が追ひ〱に增加して一時は二三十軒位出來てゐた。處が藩主が遠國へ國替へになつた爲めに、多くの者は其處を引き拂つて主人と一緖に新規の領地の方へ行つてしまつた。中には武士を廢して其の土地に居すわつてしまつた者もあつた。それから間もなく御一新の世の中になつた。さうして星霜が移り變る間に、一時は殘つた者もあらかたは他國へ越して行つてしまひ、家も取り拂はれ、其の跡は畑になつて、屋敷の名殘りも留めなくなつてしまつた。土着の百姓の家だけが其處には殘り、僅か一軒位の居酒屋が微かに商賣をしてゐた。そして最早土地の若い者では昔其の村にさうした武家屋敷が澤山あつたといふことは、話に聞いても信じられなくなつたくらゐに其の間に年月が經過してしまつた。すると、或る年の或る日のこと、此の村へ一人の旅人が遣つて來た。旅人は、これも村に一軒の小さな床屋へ立ち寄つて「自分は此の村に少し縁故のある人間だが、土地の古い事を聞き度いと思ふが誰れか知つてゐる人はあるまいか」と言つた。床屋の亭主もまだ中年者だつたので自身では其の答へはできなかつた。すると折よく其處へ村の故老が來合はせた。

旅人は故老に向つて「昔此の村に武家が大勢住まつてゐたことがあるか」と言つて訊いた。

故老は、自分が若かつた時分の其の有樣を眼に浮かべ乍ら其の通りを答へた。

旅人は「其の武家の一人に何某といふ者があつた筈だが」と言つた。

故老は一層はつきりと過去を思ひ浮かべた。其の名前を云はれた何某といふ武士は、それらの中では一番立派に生活してゐた方だつた。其の家の主人が勤番の日に城下へ出て行く時の、裃を附け、二本差しで、草履取りを一人供に伴れて歩いてゐた立派な姿をさへ昨日見たばかりの事のやうに思ひ返すことがで

きたのだつた。そこで故老は「自分は其の何某の家の事ならよく知つてゐる、折り〱農業の手傳ひに雇はれて行つたこともあつた」と答へた。

旅人は非常に喜んで「實は自分事は其の何某の悴である」と言つて始めて身の上を明かした。旅人の年齢は凡そ四十位だつた。武士の血統らしい品格が何處ともなく現はれてゐたけれども、また樣々な人生の辛酸を嘗めて來たらしい樣子も其の容貌によつて讀まれたほど零落してもゐた。旅人自身の語る處に依ると、彼は幼な兒の時父母に抱かれて此處から百里離れた下總國へ行つた。そして、其處で成長する間も無く維新の改革で家祿に離れたので、其の後は兩親と一緒に諸方を轉々として歩いた。彼が一人前の男になつた時分には既に親達は此の世に居なかつた。彼は獨り兒であつたから全く天涯孤獨の身の上となつた。それから以後も各地を放浪していろ〱の生活を送つて來た。が遂に今日まで何一つ成功したものは無かつた。依然として現在も孤獨の身の上だつた。

「私は世の中で志を得度いといふ望みはたうの昔から捨てゝゐる、が近頃たつた一つ妙な望みを持つてゐた。それは自分の生れ故郷へ行つて暮して見度いといふ望みだつた。それがどんな處だか今日迄知らなかつた。が何處で暮してゝも思はしい事が無いにつけても其の度ごとに、思ひ出すのはまだ見たことのない此の土地のことだつた。代々其處へ住んで、親も其處で生れ、自分も其處で生れた故郷といふ處へ行つて見度いと私は思つた。それで今度思ひ立て遣つて來たのだ」

と旅人は物語つた。

旅人は其の儘此の原の中の村に足をとゞめるやうになつた。茶を採むことなども心得てゐたので茶師に雇はれたりしてゐた。が筆算も確かで、上品な方の仕事でもさせれば何んでもしてのけた。人物も正直だつた。で間も無く世話をする者があつて村内の或る家へ入夫した。さうして彼は其の村で平穩に晩年の生涯を送つてしまつた。

老人の話はそれで了つた。

「でがすからね、故郷といふものにはどつか餘所と異つたえゝ處があるもんかも知れませんて」と最後に老人は言つて言葉を切つた。

私はいたく心を動かされた。そこに不思議な人生の姿を私は見せられた。零落して始めて故郷へ流れ寄つて來た其の男の身の上は、あらゆる放浪生活者が最後に到著すべきところの宿命をば色濃く暗示してゐるものではあるまいか——。

「大變面白い話を聞かせて貰つた、丁度私が考へてゐるやうな

事だつた。私の悴も何十年か後に其の男のやうに此の村へやつて來るかも知れないよ」

「御冗談を仰しやるものぢやありません」

「冗談と云へば冗談だが、行く末の事ばかりは分つたものぢやあないからね」

私は歸途に寺へ寄つて行くことにした。墓の前を通る時もう一度私はそれに目禮した。

「人々よ、私もいつかはお前達の側へ來るであらう——」

## 徒歩聯絡

東京驛を發車した其の列車の二等室には種々雜多の人が乘り合はせてゐた。汽車の中には何時だつていろんな人間が乘り込むけれども、地震後間が無かつた其の頃は特にさういふ感じが強かつた。其の原因の一つは服裝にもあつた。すべての人が必要以下の服裝を纏つて甘んじてゐた。若しくは殊更にさういふ裝ひをしてゐた。色彩も統一も無い服裝をした人ばかりが乘り合はせてゐる加減で、貧富の懸隔も職業の差別も一向譯が分らない、只いろんな顏付きをした人間が大勢腰掛けてゐるとだけしか思はれない。私は洋服でカーキ色のゲートルを卷いてゐたが、クリーニング屋が燒けたゝめに間着も冬着も一度に失くしてしまつたので、最早十月で小寒い雨模樣の天氣だのにアルパカの服を着て、其の上に黑の冬外套を被つてゐた

女客は少なかつた。

乘客は直ぐに馴れ〳〵しくして互ひに話し合つた。東京在住者らしいのもあれば、上方あたりから見舞ひに遣つて來た歸りらしいのも居た。一ケ月餘を經過した今日になつても、知らぬ人同士が言葉を交へれば地震の事以外に話題は無かつた。

「あなたはどちら迄?」と私に隣席の人が話しかけて來た。

「私は江尻迄です、あなたは?」と私は反問した。

「私は大阪迄參るんですが……何しろ地震後初めて汽車に乘りますんで……如何でせう、確に行かれませうか?」

と其の人は暗い不安な表情を浮かべて言つた。

「行かれますとも、大丈夫です。私はつい四五日前にも向うから乘つて來ましたが、途中で二箇所ほど歩かなければならん處があるだけです」

「何處と何處を歩くんでございます?」

「馬入川と箱根山ですが、どちらも十五六丁位のもので、さう骨は折れやしません。それに私が先日歩いた時は天氣のいゝ日でしたから、箱根山なぞは却つていゝ氣持なくらゐでした、併し今日も厭な天氣になりましたな、又降り出さなければ宜しい

んですが……」

　私は汽車の窓から空を見上げた。東京の燒跡には紙屑が散らばつてゐるやうにバラックが散在してゐた。地震の頃迄は青々としてゐた愛宕山邊の丘陵が枯野のやうに生氣を失つてゐた。

「何分始めて出ましたのでどうも不安心でして——併しあなたは一遍お通りになつておいでゞしたら樣子がお分りでございませう、どうか宜しくお願ひ申します」

　と言つて隣席の人は丁寧に頭を下げた。其の人は言葉の樣子から見ても生粋の東京つ子のやうだつた。旅へ出たりすることをひどく億劫がる都會育ちの人の癖が、地震後の混亂に脅やかされて一層臆病になつてゐるやうだつた。私は九月なかばに郷里へ行く時には芝浦から清水港迄汽船へ乘つたが、歸途は汽車で來た。で徒歩聯絡の樣子も分つてゐるのでさう心配してはゐなかつた。併し隣席の人はまだ〳〵心配になると見えて私にいろんな事を尋ねるのだつたが、其の人はどうかと云ふと元來田舍道などに就いての智識が乏し過ぎるので、私の說明もほんたうには呑み込めないやうだつた。さう云へば其の人の旅拵へも不用意なものだつた。縞物のお召の古びた着物と羽織を着て矢張りお召か何かの袴をはいてゐる。白足袋に駒下駄である。そして可成り大きなトランクを携帶してゐる。きやしやな躰つきで、年頃は卅五六位に見える。

「あなたのお宅はどの方面で？」と私から訊いた。

「富士見町六丁目でございます」

「燒けましたか？」

「いゝえ、手前どもはお蔭樣で助かりました、併した、私のほんたうの家といふのが日本橋の小網町でして、是れは無論燒けましたが、其の他親類中が悉く下町でしたので、それが皆燒け出されてやつて來られましたんで、何とも云へない混雜をして居ります。——あなた樣のお宅は？」

「私も助かりました。駒込の坂町ですから、父も遠方でしたが地震では瓦一枚落ちませんでした」

「それは結構でございましたな」

　それから私達の間には例によつて地震の話が交された。さうして話し合つてゐても私には其の人の職業や身分に關する事は一向判斷が付かなかつた。其の人は見掛けに依らない太い力のある音聲を持つてゐた。しかし藝人にしては品格があり過ぎるし商人でもなし、と云つて畫家といつた樣子でも無い……。

　馬入川の手前の野中の假停車場で列車が停まつた時分にはたうたう雨が降り出してゐた。私は隣席の人と誘ひ合つてどちらもトランクを提げて列車を出た。外には丸太を組んだ橋が架つ

てゐた。乘客は目白押しに其の橋の上を歩いた。

「やあ」

「やあ」

私の道作れは、矢張り汽車から降りたばかりの一人の男と偶然顔を合はせると互ひに意外らしくさう言つた。向うの男は古い麥藁帽を冠つて、小柄で色の白い可愛らしい顏にチヨツピリと口髭を生いてゐた。

「どうでした」

「いやどうにもお話になりません、すつかり遣られちまひました。お宅樣も小網町の方は飛んだ事でございましたな。ついまだお見舞にも上りませんで」

「どう致しまして、時に、どちらへ？」

「へい、一寸靜岡の方へ、それから名古屋の方迄參る筈なんで、連中がございましてな、あなた樣は？」

「私は上方迄」

「お永いんですか」

「いやほんの一週間ばかり――ぢや、いづれ後ほど」

「は、どうも失禮」

私達は腕が拔けさうな思ひをして重たいトランクを提げた儘漸う改札口の側迄來た。そして其處で一人の人夫に荷物を渡した。其處から線路を離れて横道へ這入るのだつた。人夫はトランクを脊負つて一緒に歩いた。道路は思つたよりヒドかつた。まるで泥田のやうに深くぬかつてゐた。

「昨日此の邊は中々きつい降りでやしたでの、此の通りこねてしまひやした」と人夫が言つた。

私は靴ばきだからまだしも歩けたが、私の道作れは氣の毒だつた。足袋は脫いで懷ろへ入れたが下駄は泥まみれになつてしまつた。地震で歪んだ藁葺き屋根の家が並んでゐる東海道筋へ出て四五丁ばかり行くと馬入川の岸へ出た。雨は横降りに強く降つて來た。鐵橋は折れたり曲つたりして河床に轉がつてゐた。私達は流れの處へだけ架けたペカペカの橋を順番に渡つて行つた。其の行列は廣い川幅よりも更に何倍もつながつた。すべての人が暗澹とした川原を默々として歩いてゐる。街道を又五六丁行つて線路の方へ曲ると其處にも假停車場があつた。テント張りや板圍ひの飲食店が道の兩側にぎつしり並んでゐる。發車迄はまだ一時間餘りあつた。

「何處かで休みませうか」

「休みませう」

私達は成る可く空いた店を物色して這入つた。「牛丼拾錢」「ライスカレー拾錢」などと書いてぶら下げてある。丁度十二時で

あつた。若い娘に荷を脊負はせて來た男は、其の娘をも店へ呼び入れて牛丼を振る舞つてゐた。私達も其の牛丼と矢張り拾錢のうま煮とを注文した。餘り空腹でもなかつたが、其の食事は咽喉を通り兼るほど不味かつた。

「今日はあなた樣のお蔭で大變助かりました、獨りだつたら實に心細い處でしたが」と道伴れの人は言つた。

「どう致しまして、お互ひ樣の事です」

私は先刻徒歩聯絡が容易な事のやうに言つてあつたのが、今日の此の惡路で、それが天候のせいとは云ひ乍ら何んだか自分にも責任があるかのやうな氣持がして相手に對して濟まないやうな感じがしてゐた。私達は其の場で名刺を交換し合つた。其の人は、名前を聞けば誰れでも知つてゐるくらゐ高名なお能役者だつた。S——氏と云ふ人だつた。私は意外な氣持で其の人を見た。有名なお能役者であるSさんはビショ濡れの袴を不恰好に端折つて脛まで泥をはね上げてゐた。

漸う汽車が着いた。が中々發車しなかつた。

「あなた方のお仕事は是れから却つて宜しいでせう。私共の方はまるで見込みはありませんが」とSさんは言つた。

「否、私共の仕事も矢張り駄目です、肝心の印刷事業が殆んど能力を失つてしまひましたのです。是れが恢復するには容易な事ではありません、どの道一年や二年は仕事は無いものと思はねばなりません」

「左樣ですかな、私はまたあなた方のはふはお忙がしいだらうと思つてましたんですが。併し、吾れ〳〵のはふと異つて雜誌だの書物だのといふ物は世間で必要な物ですから直きに恢復しますでせう」

「さあ——世間で左う必要を感じて呉れゝばいゝんですが。左う言へばあなた方のはふのお仕事だつて無論必要な事です、今後は當分人が殺風景な生活をしなければなりませんから、却つて反動的に藝事でもやらなければ慰安が求められないといふやうな結果になりはしないでせうか」

「さあ如何なもんですか——何分私共のはふは聲を立てる仕事ですからどうも世間體が……」

そんな話をし合つたがSさんにしても私にしてもお互ひの前途は眞つ暗で見當も何も付かなかつた。

「私共の仲間は皆下町に住んで居りましたから一人殘らず燒け出されましたが、其の中で私一人がまあ火事だけはのがれたやうなわけでして。家元達も大概一時上方邊りへ落ちつくことになりましたが、まあ私だけは東京に居殘つて見ようと決心致しました。併し今度はあちらの懇意な人から頻りに來いと云つて

寄越しますんで、一寸出掛けて見ることに致したのです、實は躰の具合も惡いのでどう致さうかと思つたのですが」それから

Sさんは思ひ付いたやうに「先刻汽車から降りた時私と話しをした男がございましたでせう、あれはM――といふ長唄の鼓打ちですが、あの連中も當分矢張り困りますでせう」

M――と云へば長唄の鼓打ちでは日本一の名家だつた。あの瘦つぽい男がそれとは私には思へないくらゐだつた。それにしても、あの鬚はどうしたことだらう。

「あの方は元から鬚がありましたかしら」

と私が言ふとSさんは笑ひ出して

「あれはおほ方燒け出されて床屋へ行く暇が無かつたんでせう」と言つた。

Sさんは、お能の家元がみんな燒け出されたけれども、そして命から〲逃げのびたのだけれども、その中でも能面だけはめい〱失はずに持ち出したといふ話をした。

「衣裳のはふはまあ新しいのでもできないことはありませんが面ばかりは今こしらへようと云つてもできません。あれを燒いてしまつたら吾れ〱の方は生命を失つたも同然でしたが、さすがに一つも失くせずに濟みまして不幸中の幸せでした」とSさんは言つた。

私は能樂に對しては全くの門外漢であるけれども、其の話は何とも云へず私を喜ばせた。藝術の尊さといふやうな氣持を感じた。私は、今後の日本がどういふやうに變化しようとも、純日本の傳統的精神を盛り上げるところの能といふ藝術が滅びるやうなことがあらうとは思つてゐない。併し、此度の地震のやうな大天災に遭遇してはどれ程貴重な物でも燒失させないといふ保證ができようか。其の人々の中に、もしも猛火に包まれて脊負ひ出した能面と諸共に燒け死んでしまつた人が一人でもあつたならどうだらう。人間の生命より尊いものは無い筈である、が、その時吾れ〱は其の人の死を悼むであらうか、面を燒いたゝめに永遠に其の能樂から眞正の感情を享け入れることができなくなつたことの方をより多く悲むであらうか……。

列車は這ふやうにノロ〱と歩いた。此の邊は震源地に近いので沿道の光景は慘憺たるものだつた。家といふ家は潰れ、崖は崩れ、田や畑には深い龜裂を生じてゐた。見渡す限りの稻が立ち腐れになつて、地面が波のやうに高低を造つてゐる場所なぞもあつた。シヤベルなどを持つて氣拔けのしたやうな顔をして列車の通るのを眺めてゐる男なぞを幾たりも見た。

列車の乘客は、今度は箱根山の徒歩聯絡のことを心配してお互ひに語り合つてゐた。さう言つてはみんな一樣に暗い色を面

に添へて見せた。それは恰かも人々の行く手に横たはつてゐる唯だ一つの難關を想像してゐるかのやうにも見えた。

　私は別の事を考へてゐた。私自身の前途に横たはつてゐる難關、お能役者であるSさんの前途、有名な長唄の皷打ちの將來……それから此の汽車に乘つてゐる種々雜多の人々のめい〳〵異つた運命の行く手を塞いでゐるであらうところの人生の難路を私は想像してゐた。……暗憺とした行路に困難な山坂路が無限に續いて見えた。

## 富士さま〳〵

　駿河一國は大概何處へ行つても富士山が見える。人の行く處へ富士の影が附いて廻るやうにさへ思はれる。從つて此の國の名勝地と云はれる程の景色は十中八九富士山が中心になつてゐる。駿河は何處迄も富士の國である。

　私の今度の住居は、淸水港の町に隣接した村で、最近淸水が市制を施くに就いて市部に編入されたけれども、元來不二見村と稱する村である。港を俯瞰する一帶の小高い地域で、其の名稱の語るが如く、富士を見るためにはまことに好都合の土地である。富嶽の觀望を以て有名になつてゐる龍華寺だの鐵舟寺だのも村内にある。私の住居からも富士は飽く程眺められる。二階にゐても階下にゐてもどの部屋からでも富士が見える。庭の隅に立つてゐても、縁がはへ腰を掛けても、風呂場の中からでも、此頃だと眞つ白くなつてゐる富士山が何時でもぱツと正面に映つてゐる。

「いゝ富士だ、いゝ富士だ」

と言つて初めて來た人は喜ぶのである。が、餘り常住眼に慣れてしまふと、美觀に搏たれることが少なくなる。朝起きして軒端に富士を眺めるのも、柱に時計が掛つてゐるのも大して變りが無くなつてしまふ。私の家のある處は字を御殿と云つてゐる。昔徳川家康が此の地へ別莊を營んで濟御殿と稱した其の名稱が殘つてゐるのだ。家康公の御殿の跡へ私風情が家を建てるといふは僭上至極の沙汰であるが、其の代り雨露をしのぐばかりの草の庵で、地代は坪五厘といふ野中の一つ家である。坪五厘だけれども、とにかく富士はよく見える。

　富士を觀るには季節をゑらばない。春は霞みて媚めかしく、秋は山氣澄んで崇高云ふべからず、また夏冬はとり〳〵の趣きがある。が、もつと仔細に觀察すると、其の日其の日に依つて變化する。一日のうちでも朝晝晩と雲の形や山の色合が一刻と雖も同じでゐない。富士は絶えず動いてゐる、變幻極りなき山である。

富士の姿の中では、私は總じて雪の無い裸の山を愛する。秋のなかば、夜來の雨山上の雪となつて、颯と一と刷毛薄化粧を施したやうなのも自から氣分を新たにしないではないが、春の終りから秋の初めへかけて、靑々と澄み渡つた柔らかな山の姿には及ばない。雪を頂く富士は壯嚴ではあるが、いかつくなり過ぎて、色の變化が乏しくなるうらみがないではない。就中私は雨後の富士が好きである。それは浴後の美人に譬ふべきすがすがしさである。

駿河の富士は、古來幾千の詩人に依つて詠嘆され、畫工にして是れに筆を染めぬ者はない。私も此の土地に住むからは、朝夕日日の富士を研究し、變化の樣を描寫して、富嶽百譜でも物さうかと思つたこともあつたが、詩才が乏しいので所詮出來ないと斷念してしまつた。が、折り〳〵散歩がてらに附近の名所を見て歩いた時の、眼に殘つてゐる富士の景色を二つ三つ爰に記して見る。

東海道を汽車で通る人は、興津と由比との中間に當つて、駱駝の脊のやうな形をした險しい山が駿河灣へ突出してゐるのを見るであらう。トンネルを出ると、汽車は斷崖絕壁の根を走つてゐる。磯浪が岩礁を嚙んで、車輪を洗はんばかりに打ち寄せてゐる。さりながら海は疊を敷いたやうに靜かである。伊豆半島が其の前に橫たはつてゐる。右手に三保の松原、左手には田子の浦廻の長汀を、一眸の下に集めてゐる。漁村の家、點々と沖に浮ぶ舟――其の畫圖の中に、人々は雄大な富士を眺めるのである。

其處は薩埵峠である。由來此の地は海道一の景勝と稱されてゐる。古へは岫崎(くきがさき)と云つた。

「波の花くきが崎より散り來めり梢も見えず風の早きに」といふ古歌がある。更に遠くは其處のことを波の關守とも云つた。藻鹽草に

「波の關守と申は、今の世に久岐賀崎と云所なり、古は此の道を通りけるに、汐滿ちぬれば往來の立ちとどまりて、女浪男浪をかぞへて、小浪寄りぬる時、通ひける故に、關守とも波の關戶とも申ける」

舊幕時代の東海道は山の上を通つてゐた。山上十八丁の險路で箱根に亞ぐの難所であつた。雲助だの胡麻の蠅が跳梁して旅人を苦しめたもので、講談ではお馴染の場所である。昔は山神の祠があつたさうで

山の神さつた峠の風景は三下り半に書きもつきせじ

といふ蜀山人の狂歌がある。

翻つて史を按ずれば、觀應二年十一月晦日、征夷大將軍足利

尊氏が此の山に陣を張り、弟左兵衛督直義の大軍を打ち破つてゐる。其の時の戰の有様は太平記第三十卷に詳しく物語られてある。

極く古くは此の山を磐城山或ひは岩木山と云つた。其處には一つの面白い傳說がある。大昔のこと、磐木山の西に當る許奴美の濱といふ處に美しい姿を持つてゐて、山を越しては通つてくる神があつた。處が、磐城山には一人の荒神が住んでゐて、其の荒神が大層此の事を嫉妬して、男が其處を通らうとすると邪魔をするのだつた。男は折角其處迄は出て來ても、荒神の眼にかゝるとそれから先きへ行くことが出來なかつた。だからどうしても妻との逢瀨も稀れだつた。許奴美の濱の女神はそれが腹立たしくもあれば悲しくもあつた。で、或る時久しく逢はない男の事を想つて次ぎのやうな歌をうたつた。

磐城山ただ越え來ませ磯崎の許奴美の濱に吾れ立ち待たん
(萬葉集)

許奴美の濱といふのは興津邊の濱を云つたのである。

安政の地震以後、地盤が變動して山の根と海との間が廣くなつたので、其の時から街道を山下へ移した。現在の國道は鐵道線路と並行して波打際を走つてゐる。坦々たる道路であるが、反つて古代の波の關守當時の趣きを想像することができる。

---

岩に當つて飛び散る波の花の中に浮ぶ富士の[illegible]た姿に如くものはない。

雄大な富士の景の中でも、最も雄圖の大なるものを見ようと思ふ人は龍華寺へ行くがよい。其處は清水港の西に連なる有度山の麓である。前方は一つらの田で地勢に次第々々に昇つて行く。山下には蜜柑畑の多い村がある。其の村の上手の處に茅葺き屋根の大きな堂が見えてゐる。門前の左右の石に

龍華風色今雖在
芙山大觀須待時

としてある。是れでは富士が裏に隱されても不平を並べることはできない。生垣について登つて行くと寺の庭へ出る。玉石を並べた庭中を大な蘇鐵の樹がのたつてゐる。屋根の上には老松が枝を差しのべてゐる。

庭の一隅に立つて東南を展望するならば、眼に映る物は其限りなく偉きなパノラマである。正面に青々と廣がつてゐるのは駿河灣である。遠く見えるのは伊豆半島であつた。富士は、女神のやうな美しさと氣高さをもつて、其の長い裾を曳き、さながら宇宙の誇を一身に蒐めてゐるやうに立つてゐる。愛鷹や興津蒲原あたりの山々が、てうど彼女の前にひれ伏してゐる從者のやうに見える。三保の松原は常に綠の色を湛へて、海の中へ一

妨に突き出してゐる。まことに日本一景の名に恥ぢない絶景である。

此の寺には高山樗牛の墓がある。

風の無い日を見て、發動機船の客となつて、三保の松原迄散歩に行つて見たりした。清水の波止場から出る其の小型の船には、いつも變つた面白い客種が乘つてゐる。十五分位で三保の村へ着く。海端に漁師の家がギシ／＼と集まつてゐる。海には粗朶が植えてある。此の頃だと、粗朶に附く海苔を採收する舟が木の葉を蒔き散らしたやうに浮いてゐる。海苔舟といふ舟は大抵長さが一間か九尺位で少し大きな盥を浮かべたやうなものだ。それへ男と女と乘つてゐる。男が粗朶を引き上げて海苔を取ると、姉さん冠りで紅い襷を掛けた女達がそれを目笊へ入れて海水でザブ／＼と洗つてゐる。實にのどかな景色である。

船着き場から五六丁行くと御穗神社の前に出る。松林の中の古い社で、御穗津彦神、御穗津姫神二柱の神が鎭座まします。社の鳥居前から外海の方迄一直線に松並木の道が附いてゐる。有名な羽衣の松は其の外海に面した海岸にある。此の濱を有士の濱と云ふ。

一帶の白砂青松の中に一と際目立つ老樹が羽衣の松である。但し現在の松は二代目ださうである。樹下に古碑がある「羽衣天女祠碑」と曰ふ。

羽衣は羽車の轉化だといふ説もある。卽ち御穗津彦御穗津姫の神が天の羽車に乘つて此の濱邊に降り立たせ玉ひしといふ其の羽車の故事を指して云ふのであるが、昔は羽車神社といふ祠が此處にあつて、維新當時迄は石龕が存してゐたと云ふが、現在は其の趾も無い。更に昔は此の附近に漁夫伯梁家居の跡と稱する處まであつたといふが、今は尋ねて見るよすがもない。

駿國雜誌には「往昔三保の松原に、神女天降て、羽衣を松枝にさらし、終日遊戲す。玆に漁夫伯梁と云者あり、其羽衣を拾ひ藏す、是織女の機中六珠衣也。神女家に來り、悲み乞ふと雖も與へず、故に天上に歸の術なし。依て伯梁と夫婦の語らひす。或日夫の家に在らざるを窺ひ、彼羽衣を盜て去る。伯梁もまた登天して僊となる。其地に社を建て、羽衣の神と祭る。後廣道守氏の翁、此舞曲を傳へて、世に弘めたり、東遊の駿河舞是より起る。云云」と載つてゐる。

同じ書に、此の天女に關する他の傳説も載つてゐる。原文の儘で紹介する。

「中平松村、天人の社は、往昔八幡宮を祭る處なり。後、有度濱に降現する所の天女を祭りて、天人の宮とし、八幡宮を以て攝社とす。是いにしへの土神なり。」里人云。中平松村に、長右

衞門と云者あり、清水に至て食鹽を商ふ。一日歸路、駒越村の濱に於て松樹に羽衣の掛るを見る。即ち是を拾ひ取り、家に歸る。天女此羽衣を取んがため、其夜長右衞門が許に來り、住ん事を望む。主天女なる事を知らず、家に居らしむる事三年あまり、一朝前磯に材木の漂流する事あり、里民悉く出て是を拾ふ。時に長右衞門が家擧て至る。天女其隙を伺ひ、羽衣を取て去んとするに、ひさしく下界に有て身穢る、故に飛揚の術盡たり。天女土神八幡の社頭に上て祓す。折ふし長右衞門來る。天女事の序を語り、誓て曰、我を以て土神に祭らば、永く當村の守護神たらんと、即土神とす。云云。今當社、鏡を以て神體とす。又彼長右衞門が子孫、今に相繼して其事跡を記す、證文あり、近年火災に燒失して傳へず。云云。惜哉」

此のはふは伯梁の故事に比べると遙かに近代化されてゐる。それだけに神韻が乏しい。伯梁天女の傳説は、人間の本能を最も直截に表現して而もあれほど美化し得た點に於て、我國の傳説中の白眉である。

羽衣の松の側から波打ち際へ驅け下りると、玆からも勝れた富士が眺められる。白砂青松の一端に富士が現はれてゐる。玆から見る富士は、何處から見るよりも一番よく絵になつてゐる。

風早の三穗の浦廻をこぐ舟の船人さわぐ波立つらしも

（萬葉集）

## 梶原景時

鎌倉の歴史を讀むと、正治元年十二月、朝頼以來の權臣梶原景時が幕下を追はれ、翌年正月景時は一族郎黨を從へて西國へ上る途中、駿河國狐ヶ崎に於て滅ぼされたと記されてゐる。又郷史に、當國廬原郡高部村に梶原一族の墓があると載つてゐる。高部村迄は僅か一里位しかないと云ふので、一日私は其の古蹟を訪らつて見ることにした。

其の事を書く前に、一體梶原景時といふ男はどんな人物だつたかと考へて見る。鎌倉切つての權臣で軍功も數へ難い程だのに古來梶原程人氣の無い人物も少ない。同じ鎌倉大名の中でも、畠山重忠と梶原景時では、人氣の點に於て正に兩極端を代表させられてゐる。然らば彼は全く左様に奸佞狡智一方の曲者だつたであらうか、其處には少しく疑問がある。彼が後世の憎まれ者になつてしまつた最大原因は義經を讒言した事にある。讒言したことは事實だが、それをしないでは居られなかつた程義經も我儘だつた。そも〳〵逆櫓の議論にしてからが、義經の云ふ事は成可り亂暴で無茶だ。軍船に逆櫓を附けよと云つたのは何

も逃げる時の要必ではない、船の進退驅引を自由にする爲めだ。平家が弱くて戰に勝つたから幸せだつたが、負けたら大變だ。老功を以て軍監の職を命ぜられてゐた景時としてはそれ位の用意周到は當然である。そこで景時は義經と喧嘩をした。まさに掴み合ひの喧嘩をやり掛けた。さういふ處に私は梶原の正直さが現はれてゐると思ふ。彼も亦好個の阪東武者であつた。義經の失脚が梶原の讒言に端を發してゐるとは云ひ乍ら、彼の御曹子に對する英雄崇拜的觀念と、其の哀しい末路にそゝぐ婦女子の同情の泪とが、變じて梶原に向つての盲目的憎悪となつて來るに至つては、景時たる者迷惑せざるを得ない。義經の運命は頼朝の犧牲になつたのである。冷酷な頼朝の腹中既定の筋書になる天下統一の政策の一端が其處に現はれたけゞで、豈梶原の與り知る處ならんやである。親の血を享け繼いだ源太景季に至つては更に眞の典型的阪東武者であつた。頼朝に池月を所望して許されず、出陣の途で佐々木高綱に池月を賜はつたと聞いて大いに怒り「いで其の分ならば高綱と刺し違へて、主君によき侍二人損をさせ奉らん」と云つて手ぐすねひいて待つてゐたが如才の無い高綱が貰つたのではなく無斷で盜み出して來たのだと言つたので少しも疑はず「然らば我れも盜めばよかりし」と言つて忽ち大口あいてからからと笑つた。天眞爛漫竹を割つたやうな男である。要するに、世人の梶原に對する指斥は餘りに獨斷的である。尠なくとも私は、鎌倉時代の武人政治家としての梶原景時、其の性格、其の運命に就いては、多大の興味と同情とを寄せずには居られないのである。

梶原景時の權謀にのせられて黜けられ、又は誅せられた者は獨り義經のみでない。鎌倉幕下の多數の者が其の手でやられた。だから景時は衆怨の府となつた。が是れまた當時の情勢として止むを得ない事だつた。讒言をしたり、罠を設けておとしいれたりするといふのは、君子の道では無いけれど、何時の時代でも、政爭の渦中に於てはさうした權謀術策も當然行はれてゐる事だ。智慧のある者には敵はない、景時の如く、辯才に長け、眼から鼻へ拔ける人間が勝利を得るのだ。和田義盛をペテンに掛けて侍所別當の職を横取りしてしまつたが、義盛はどうする事もできなかつた。併し、由來智者は己れの智恵の爲めに身を滅すのが常である。景時が矢張りさうであつた。頼朝の沒後、景時は頼家に重んぜられ、二代の寵を恃んで同僚を侮り屢々專横の事があつたが、偶々正治元年十月、景時は結城朝光が忠臣不事二君と言つた言葉を捉へて、朝光が異志を抱いてゐるやうに讒訴した。朝光は早くも身に危害の及ぶことを察して、救ひを三浦義村に求めた。義村は更に和田義盛足立盛長等と謀り、千葉

常胤畠山重忠小山朝政等の主なる御家人を糾合し、六十六人の連署を以て反對に景時の罪を鳴らして、頼家に處分を迫つた。哀しい哉頼家に力量が無かつた。頼朝を頭に戴いてゐる時と同じ氣持で事をしたのは景時の不明だつた。諸將に迫まられると頼家は周章狼狽して、遂に景時を追放するよりほかに仕方はなかつた。

景時は、自分でかまへた罠に陷されたのだつた。自業自得と云はなければならない。併し茲に見のがし難い事は、此の事件の背後に隱れて狂言を繰つてゐた北條時政の存在である。頼朝沒後の鎌倉の政變は悉く北條氏が黒幕に動いてゐる。機會のある毎に北條氏は其の魔手を伸ばして頼朝麾下の功臣を滅ぼして自己の競爭者を剿滅し専ら我家の勢力の増大を圖つてゐた。殷鑑遠からず、畠山重忠、和田義盛等も追ひ／＼時政の爲めに滅ぼされてしまつた。

鎌倉を追放された景時は、一族を率ゐて一度は相摸國一の宮の城に籠つて變に備へた。が、か〻る小城に立て籠つたところで所詮勝算はおぼつかない。謀略に富む景時として如何でかおめ／＼死を待たう。彼は鎭西管領の宣旨を賜はつたと稱して、西國の武士を糾合して鎌倉に對抗しようと思つた。翌年正月私かに一の宮を發して京都へ向つた。鎌倉では早くも此の事を知つて三浦義村等を遣はして追撃させた。

梶原の同勢は、家長景時、其の子源太景季平次景高をはじめとして、一族郎黨三十三騎に過ぎなかつた。其の同勢が駿河國庵原郡高部村といふ處迄來たのは、正月廿日の夜の亥の刻であつた。景時の乘つてゐた馬は摺墨であつた。名馬であるので景時は只一騎先きへ驅け拔けて、狐ヶ崎といふ處迄行つた。前方に川があつた。すると其の川原に軍勢が待ち伏せてゐた。暗夜ではあつたが星明りの下に兵馬の犇めき合ふのを景時は見た。彼は馬をとどめて、

「汝等何者なれば我が馬前を妨ぐる、我れこそは梶原平三景時なるぞ、鎌倉殿の命に依つて京都へ赴く爲め、只今一族郎黨と共に罷り通る、速かに道を開いて通すべし」と大音聲に呼ばはつた。すると敵方から

「梶原公こそ我等が望む相手なれ、我々先刻より公の御越しを待ち受け申した、いで當國武士の弓勢のほど御覽候へ」

と言つて劇しく矢を射掛けた。景時は馬首を返して、遅れて到着した味方の同勢と合した。敵は此の近くの國侍の面々であつた。梶原の同勢が後へ引つ返すと、後ろにも敵がゐて散々に矢を放つた。山手の方へ避けようとすると、其處にも敵がゐた最早遁れる道は無かつた。一同は敵に向つて戰つた。併し、衆

寡敵せず味方は次第々々に討ち死した。景時は早や是れ迄と覺悟を極め、景季景高等に防ぎ矢をさせながら狐ヶ崎の山の峯に上つた。

景時は矢立の筆を取つて

もののふのかくごもかゝる時にこそ心のこらぬ名のみをしけれ

と星明りで辭世の一首をしたゝめ、それを鎧の袖に結び付けた。そして枯草の上に座をしめて心靜かに生害を遂げた。景季も景高も其の場で父の後を追つた。

其の古墳へ行く途中の、高橋村といふ處の高源寺といふ禪寺にも梶原の墓がある。一族八人の亡き骸を一所に茲へ葬つたと傳へられてゐる。農家と農家の間に寺の門が建つてゐた。茅葺きの、どこも荒れ果てた貧乏寺だつた。庫裡の前へ行つて案内を乞ふて見たが返事も無い。見ると、鄰家の百姓家との境に垣根も何も無い。其處へ行つて見ると、其の家のおやぢが日なたへ莚を敷いて草鞋を作つてゐる。

「私は此の寺へ來たんだが、誰れか寺の人は居ないでせうか」

と尋ねて見た。

「はあ、此の節は和尚樣が留守でやすからのう」と、おやぢは頰冠りを取りながら言つた。

「それは困つたな」

「お前樣、和尚樣に何か用があるでがすか」

「いや左ういふわけぢやありません、實は此の寺に梶原の墓といふ物がある筈だから、それを見に來たのだが」

「あゝ、梶原の墓でやすかえ、そんならわしが知つてるから案内して上げますだに」

と言つておやぢは腰を上げて、泥まみれの藁草履を突つかけて私を寺の方へ案内して與れた。本堂の横を廻つて裏へ出ると其處は墓場だつた。荒れ果てゝ一面に草が生へてゐる。

「是れが梶原の墓でやすよ」

とおやぢは高さ四尺位の非常に古い一つの墓を指差して言つた。其の墓だけは少し高みに建てゝあつた。碑面は摩滅し苔むしてゐたが「不忘乾坤燈外滿沒」といふ字だけが微かに讀まれる。墓の後ろには小笹が茂つてゐて、其の間から痩せこけた百日紅が一本ヒヨロ／＼と伸びてゐた。何といふ淋しいことだらう、あたりに累々としてある見窄らしい墓石だの、大概こわれて落ちてしまつてゐる本堂の白壁の殘りだのが、いはれもなく私の心を悲しくさせてしまつた。

卵塔場の向うには廣い竹藪があつた。其の先きは田圃で、遙

くに山が見えてゐる。籔の端から碧空へ眞つ白い富士が現はれてゐた。これは譬へやうもなく寂しい富士である。

私は寺を出て高部村へ行つた。其處は龍爪山の支脈を背後に背負つてゐる豐饒な村だつた。山畑には蜜柑が色付いてゐた。刈田の中を縣道が眞つ直ぐにのびてゐる。

狐ケ崎といふ處は、夕日無山といふ山の尖端であつた。其の山の頂きを梶原絶頂と稱へるのである。源太景季が其の頂上迄馬を背負つて登つて行つたと傳へられてゐる。

梶原堂といふが其邊にある筈だつた。道端の家で其のありかを訪ねると直ぐに知れた。それは山の崎を中腹迄登つた處にあつた。其處へ行くには險しい小徑を木の根や岩角に掴まり乍ら這ひ上らなければならなかつた。中頃に十坪ばかりの平地があつて堂が建つてゐた。毀れた狐格子の外から覗いて見ると、正面に厨子があり、左右に位牌が一つ宛置いてある。左は「日本征夷大將軍源頼朝公尊儀」右は「龍泉院殿梶原公大居士」としてあつた。

堂の傍らに非常に古い墓が八基並んで建つてゐた。其の内二つは少し大きく、他のは極く小さな墓だ。大きいのが景時景季の墓だらうと思つて私は見た。

周圍に枯れた茅が一面に茂つてゐるので眺望を遮られてゐた。頭の上の杉林の中から鵯がけたゝましく啼いた。

# 笑の國巡禮（續篇）

高須芳次郎

## （一）日常茶飯事の上に築かれた笑の國

春が闌はになると、山が笑ふ、河が笑ふ、花が笑ふ、鳥が笑ふ、霞や雲までが笑ふ。萬有悉く笑の大管絃樂を合奏する時に當つて、私はまた笑の國がなつかしくなつた。もう一度、私は今まで歩いた範圍とは別な方面を春風に吹かれながら歩いて見

ることにした。笑ふ門に福來るかどうか、私は腹の底からこみあげてくる笑を抑へようとしないで、輕快な氣分で、笑の國へ歩き出した。

最初、私は黄表紙の作者と縁の深い狂言作者で滿たされた笑の世界へ行く氣で居た。ところが、ぶらりと歩き出して見ると、どうしても低徊式、螺旋式の行き方がして見たくなつた。それは曾て夏目漱石が云つたやうに「閑人が買物に出て途中で引かゝる」式である。それで當面の買物のことは、忘れぬが、交番の前で鼠をぶらさげて居る小僧を見たり、天狗連の御談を聞いたり、工夫が道路修繕をして居る様子を眺めたり、のら犬が放尿する時の足付を可笑しがつたりして、やつと買物のことを辨ずる底の行き方である。

そんな風であるから、私はずつと先きの方にある狂言作者の笑の國へゆく前に、もう入口のところで、先づ皮肉味の多い、神經質な笑ひ方をする一個の作家に引かゝつた。私はそつと、その男の顔を見ると、瘦せて青白い、そして鋭い眼ばかり、ぎよろりと光らして、にやりと笑つて居る。それは齋藤緑雨であつた。

緑雨は、篁村、新二、得知らと共に曾て明治文壇の滑稽家のうちに數へられた。彼れの笑は澁味、甘味、酸味の代りに多くの苦味を帶びて居た。社會のアラ、人間のアラ、殊に文壇や劇界や花柳界などのアラを鋭く拾ひ出して、抉ぐるやうな皮肉な笑を人々に浴びせかけた。

彼れには、江戸の落語などから暗示を得たところがあつた。極手短な落語のうちには、可なりに奇警な味を持つ秀逸のものがある。それらには、少しの無駄がない、巧みに自然味のあるオチを取つて、人々を笑はせる。さうした形式は、短文に應用するのに最も適切である。緑雨は茲に自得するところがあつたにちがひない。今二三の例を擧げて見よう。

○最短の文章

とかく當世は文章の短きがはやるといふを聞きて、侍なる人のかたより、知音の僧へつかはしたるとなん。

送遣る十八本松茸恐惶謹言

圭侍者へ

平非の伊賀入道

○喧嘩

さる町に喧嘩あり。さんざんに踏みあひければ、あたりの人「ひらに〳〵、堪忍あれ、こなたの相手は逃げた。」といふ。「無念や先を越された、おれが逃げやうと思ふたに。」

マックス・オオレルの行き方とても、この落語の味と形式を新しくしたものだと云ふことが出來る。江戸末期の享樂的な民衆

生活を如實に描いた『七偏人』『和合人』『八笑人』及び『箱根草』『魂膽夢輔譚』などは、落語の趣を連續的に延長させたやうなところが多く見える。もつと廣く云へば、黄表紙、洒落本の半ばは矢張落語の進化したものとも云へる。落語とても一概に輕視することが出來ない。左の落語などゝ寸鐵的笑の極所を得て居る。

○粗忽者

さるおもてに草履わらんじ、大分つくり置く商人あり、そさうな人「伏見へはかう行くか。」と問ひければ、内より「向ふは四文、前は六文。」と申す。問ふた人「かたじけない。」とてゆかれけり。

○矢大臣、左大臣

父子して天神樣へ參詣なしけるに、息子親父に向ひ「この門の兩脇にある矢大臣、左大臣といふは、どちらが矢大臣で、どちらが左大臣だ。」と聞くに、親父眞面目になり「能く覺えておけ、ソレ矢大臣でない方が左大臣で、左大臣でない方が矢大臣だ。」

○落書

新らしい壁に落書してありしを旦那が見附け「誰がこんないたづらをしたのだ。」と見世中の小僧に質せど、白狀するものなし。「然しいたづらにしては、成田屋の顔がよつぽど能く出來て居る。」といへば、一人の小僧「これは私で御座ります。」

○富士山

さる獨かせ、富限(ふげん)になり、歴々町人衆と同じやうに茶の湯の會へゆかれしが、床に探幽の筆の富士の懸物かけてありしを見て、「扨も／＼見事な出來締さうに御座ります。山坂は取わけ書き難いものぢやに。」と云ふて感心せられた。

何れも短文として見てよく出來て居る。綠雨はその形式と見方を現代の上に應用して、彼れの笑の才能を披瀝した。

元來、綠雨は何か世間のアラを見付け出さないでは居られぬ性分の人である。どんな穏かな氣分の時でも、必ず人の氣付かぬアラをほぜくり出して、竊かに快とする。彼れの眼を向ける對照物の上に注意深い光りをなげかけて、鼻の穴の中に生えて居る毛の數まで讀まねばやまぬ。耳の横にホクロがあるとか、頭の後に白髪が一本光つて居たとか云ふやうな談柄をする筆法で、周圍のアラを見る。さうしたいたづらをして結局人を笑はせた。

綠雨が見たアラは、大きなアラではない。極小さな顆粒のやうなアラである。彼れの神經纖維そのものゝやうな細かいアラ

である。どちらかと云ふと、人々が日常、座臥のうちに無意識に露出するアラである。そこには、小さな矛盾、小さな不均衡がある。それを敏活に看て取つて、矛盾を指摘し、不均衡を摘み出すところが綠雨の笑の生命であつた。「かうしたところは俺しか知るまい。」と云ふ彼れの得意さが、その簡潔な情味ある文章に流れ出て居た。

彼れの境地は殊に柳暗花明の巷にあつた。彼れは妓女、華魁らを中心とした脂粉の香、口紅の香のする天地に耽溺するところの人々のうちに笑の題目を最も多く見出した。さうしたところは、京傳や三馬に似て居た。綠雨自身が京傳のやうに、柳暗花明の狹斜情調に思ひ切り浸つて、その中から、丹念にアラを拾ひ出した。彼れは美妓と戯謔し、遊び仲間と談笑しつゝも、そのアラを拾ふことをいつも忘れなかつた。かうして彼れは巧みにその冷笑の標的をいくつも得た。そして彼れから冷笑を浴びせかけられた相手が、思はず、笑つて頭を掻くと、彼れは「ふゝん」と云ふ調子で微笑した。それは久米正雄氏の「微苦笑」に似たものだが、久米氏のは、多分のスヰヰトネスを持つて居るのに引かへて、綠雨のは多分の苦味、辛味を持つて居た。

「私が創造した笑の趣味がわからぬやうでは田舍者たることを免れないね。」

と綠雨が云ひさうな樣子が想ひやられる。「みだれ箱」「あられ酒」の二卷を見ると、綠雨の微苦笑する聲が、はつきり私に聞えるやうだ。綠雨が微苦笑しはじめたのは、隨分古いことで明治二十四年か二十五年頃であらう。彼れは「大に笑ふ」と云ふ一文を發表して、微苦笑の神髓を發揮しようとした。が、綠雨の笑の世界を味ふには、綠雨の氣分とぴたりと一致しないと、微苦笑の味が減ずる。江戸ッ兒氣質、江戸趣味の守札を胸に張つて置かぬと、綠雨はその笑の國へ誘つてゆかうとせぬ。すこし窮屈な笑の國だ。それでも物好きな私は、先づ「大に笑ふ」一卷の空氣のうちへ覺えず引き入れられた。

石川五右衛門凌雲閣に登りて曰く、春宵一刻値千金と友のむだ口敲きければ、我直ちに應へて、最明寺時頼殿鐵道馬車に乘りて、佐野源左衛門に逢ふといへば、東家の祇王祇女、玻璃窓に詩文を書殘すと友は大口あいて笑ひけり。

○

嚙占めて味の出るものはと突然友の謎かけしを我聞かぬふりして、今の小説はといへば、九谷の急須なり、見る目綺麗なれども瑕あるべしといふ。いや鐵葉の庖丁なり、形はまぎれなけれど、豆腐もむづかしといふ。いや和染の羽二重なり縫ふ間も色の褪むるといふ。いや／＼惡酒なり、忽ち頭にの

ねるといふ。いや〳〵麗薬なり、直ぐ眠るといふ、はては銀流しなり、煙管なり、切張なりと互に言募りて、顔見合せ、勝負のつかぬが花なりと笑ひけり。

○

誰それの何々論、長く拙く退屈呼びの妙劑なり。金砂子のすこしなるは床しけれど、大踞屑(おがくず)の雨の如く降來らんは閉口なりと友のいふを我いさゝかも退屈せず。却て其勞を謝すといへば、さりとは辛防强し、何故と問ふに、一向初めより讀まざればなりと答へて笑ひけり。

それらは絲雨の微苦笑の最初のものである。

## (二) 笑のうちに現はれた人情の機微

「絲雨の微苦笑が次第にコツにはまつて來たのは、「おぼえ帳」「ひかへ帳」などを書いた頃からである。二三行乃至五六行の文字の間に笑の聲を寓したところに獨得の小さなヒウモアがあつた。何でもないことで、人が餘り氣に留めない些事、うつかりして居ると、その儘輕く見のがしてしまふやうな茶飯事、さうした世界に絲雨が眼を付けて、笑の種を引出したのである。

○牛は犬は猫はと問ふに、もうと啼く、わんと啼く、にやあと啼くとてまでは尋常なりしも、戯れに虎はと問けば、悲しげなる女の兒のしばらくは小首傾げ居たるが、良(やゝ)ありてとらあと啼く。

○上州は高崎の者とか、鍛冶屋の小僧の十三ばかりなるが、手も足も眞黒になりて追使はるゝを何處が顔ぞと人のからかひしに、小僧振返りて、息の出る方が前だ。

○六十あまりの老婆、送籍を願ひますといふ、籍は何處にあるぞといへば、こちらのお役所へちやんと預けて置きました。

○私(わち)の親父は何處に埋けてありますと、廿五六の若者の蹈込みし仔細をたづぬれば、八年前、家を出でゝ、今日都へ還りしに、家もあらず、父もあらず、噂には死したりときゝて直ちに區役所へ驅來しなり。行倒人の名簿の中に、右衞門と左衞門の唯一字違ひなるがありければ、これなるべしと假埋地を教へ遣りけるに、若者は眼を屡瞬きて、お役所といふは難有えものだ。もう御迷惑は掛けません、それでお手數料はいか程でございます、いづれ改めてお禮に出ますが。

○人の妻となれる女の許へ、年下なりし男の今又わかきを得たりとて、心中もすべきさまなり。されども命なくなるより、よき智慧あらば貸したまへと戯れに言送りしに、女の直ちにこれに答へしは、撥取りし手に似ず、至極の能文なり。

寫し置きたれば左に掲ぐ。

御返事申上ゲ候當節は智慧と申すものたんとなく候へども、姉弟のよしみ、少しばかり申上候、一命に別條なき法は、山中へ身を投げるか、海中にて首をくゝるか。但しは小やうじにてのどを突くことに候、差支ないと存候ほんの少々の智慧御かし不申、いつそ差上申候。なほ又入用の節は取りに御つかはし可被成候、めでたくかしこ

新體詩見本の一節は、われ實にこれより探ぬるなり。

○さる好事家の連立ちてあやしき處に登り、探究を忘れ給ふなと言交はしたるを女聞きはつりて、さばかりの洋語われ豈解せざらんや。そは難有うといふ事なるべし。何のお禮ぞと言ひけり。

○知らぬ御方に三圓貰ひ、これが御緣（五圓）になればいゝとは一ころ落語家の繰返し唄へる所なり。いさゝかの無心を逃げたる客の許へ、浮草や流れの身は愛想盡かしも手管の一つ、扨とやの文おくりたるが、大方は宛字の妙を窮めたる女のことゝて、なき緣と書くべきをなき圓と書きたり。適切といふことと思はぬ邊にあるものかな、客もあまりの可笑しさに見返り柳、吹かけられしまゝを果したりとぞ。

○掛引は商人の慣ひなれど、これはあまりと一時噂の立ちし

は、名たゝる木綿問屋の若隱居、おなじ土地なる妓の手たるに、人を以て、百圓にきはめ、さて自身それを携へ行きて妓に向ひ、ナントこゝでもう五圓まけぬか。

以上のうちで、心中して生命を助かる法を手紙で人に傳へた或妾の戯言は、ヒュウモアの上乘である。一篇の心中喜劇を讀むよりもこの短い手紙の方が遙かに面白く、餘情が綿々として居るのを覺える。客に無心を吹かけた女が「緣」と「圓」とを問違えて、却て客と緣を深くして、無心に成功したことは錯誤から來た笑の一種である。藝妓へ手切金を與へる際に「五圓負けぬか。」も商人心理の極所を穿つて居て色と慾に囚はれた弱味を曝露したところが面白い。

○臆病を以て聞えたる新進作家の、夜深けてひとり路行かんはいと〳〵危し、闇にもきらめく双の稲妻、聲をも懸けず、後袈裟に斬附けらるゝこともやと言ふに、君はさる恨を受くべき身かといへば、いえ〳〵用心せぬと、世間には人違ひといふ事があります。

○華魁と呼ばれんは氣づまりなりと女のいふに、さらば女郎かと客のいへば、それは餘りに酷し、今少しの色は着けたまへと言ふ。では何といふ可きかと問へば、娼妓さんとお言ひなさい。

○學生が風儀の亂れたるは、われ一人掩むとも甲斐なかるべし、年明前なる小店女郎の、久しき馴染に問ふて曰く、貴郎は何日大學を廢業するのです。

何でもない些事であるが、その些事を透ほして、笑のうちに人情の機微に觸れ得たところがある。

## （三）小さな笑のダイヤモンド

緑雨がこの可笑味を素直に推しつめていつたのが、『みだれ箱』のうちに收められた「日用帳」である。そこには緑雨式の穿ちが微苦笑の空氣を濃厚に醸し出して居る。恰度、小さな笑のダイヤモンドを一つ一つ拾ひあげて、その光輝を見せて居るやうだ。

○櫻痴居士の『春雨傘』を、眞にさすべき品とおもひて、上製三拾本と誂へしは、飽くまで盲の緣ありて可笑しけれど、『めさまし草』拾部、遙々前金にて申込める人の、此れは落語にすとも考へ落の方なり。先づ一部を送附したるに、程なく斷りの書面來りて、愚息當年八歳に相成申候、乍折角貴誌は稍高尚に過ぐる哉に被存候云々。子供等が朝のものを、おめさといふより誤りなるべし。

○魯文翁が實歷譚の一に、或時地代の督促を二階に避けて、不在といへ、不在といへと手眞似にて妻に敎ふれば、負はれし兒は何の氣もつかず、お父さん、手など振らずに下りておいで。

○花は盛りなる仲之町の往還に、月は隈なしバツタリと行會ひしも愕かず。君金があるか、有るなの一處に來たまへ、無くば失敬する。

○經書は人の師たるに足るべき程を修めたれど、自ら好みて藝者屋の主人になれるがありて、玉祝儀を記入する帳面の表に、瓊華錄。

○丸は好きな人、三角は嫌ひな人と、抱妓が手控の符號を見つけて、それでは四角はと問へば、中位ゐな人。

○上野の明方、向島の暮方、是れ第一の風景なり。この兩處に家を持ちて、花月雨雪と分けては言はず、毎日のながめを擅にせんかと眞面目なるに、半夜代りにでも嫁るのですかといへば、成程其處迄は考へなかつた。

○謎に曰く、新聞小説の作者とかけて貧乏世帶と解く、心は其日々々に逐はるゝ。これに對する新聞社とかけて酉の市の賓物と解く、心はかき込め〳〵。

○化物七分の話の通りなればと、人三々々とわざと洒落に、まぎれるやうに妓の呼掛けしを、見さん〳〵ときゝ取りて、

親類交際を悦びし客ありしは、僅の事なり。少しく變へて、わが作中の一句に用ひたれど。

○一心不亂に反駁文を草する人のもとへ、近しき商人の入來りて、定めし金になりませうと言へば、新聞の原稿だもの、錢には屹度なる。

○さら〳〵好きし男にあらねど、我身の爲と等閑にせざりし由なれば、又無きものに雁の玉章、彼方より繼渡るも無理ならず。別れて遠き外邦の旅の宿、雨しと〳〵と今しも窓に降り濺ぎて、そゞろ故鄕を思ひ出し候、父母を思ひ出し候と迄は何の事もなかりしが、併しておんみを思ひ出し候とあるに女の讀到りて、人、餘計な事だ。

私は綠雨の微苦笑に引きつけられて、思はず、道草を喰つた。前途を見渡すと、未だ笑の狂言國がある 落語の國がある。狂歌の國がある、俳句、川柳などの國もある。私は少し急いで一氣に進んでゆかう。

## (四)　漱石の猫の元祖と笑の線香花火

私が『みだれ箱』『あられ酒』の作者と別れて、直ぐ狂言の國へゆかうとすると、何處かに「巡禮さん、一寸待つて下さい。」と私を呼びかける聲がした。誰れかと振返つて見ると、恩師逍遙先生の家で見かけたことがある『春廼家漫筆』である。その中には「一圓紙幣の話」「をかし」の一篇が收められてあつたのを記憶して居る。

私が『春廼家漫筆』を見たのは、明治二十四年の秋であつた。「一圓紙幣の話」は漱石の『吾輩は猫』と同型のもので、一圓紙幣の自叙傳に托して、二十四年頃の紳士生活の內面を穿ち、輕い諷諧の意を寓したのである。漱石の『猫』よりも約二十年先立つて出た作である。その冒頭には「吾等文本の門を叩きし上清童子の仙骨なければ、又スペクテートルの夢枕に立ちしシルリングの洒落あるにもあらず、本來の薄ぺら、其身貴からざれば半生の經歷に花も實もあらな筈なきを所望せらるればとて我だちての身の上話し嗚呼の限、人間達の思はくもつしろめたし。しかはあれど又思へば流れて〳〵の末、當社の金箱にいりしと浮居氏のいふ因緣のわさか。此社の人達との宿世何とやら怪しくなつかし、且は吾とても相應に思ふことのあれば、過來しかた打明けていふて見たしと思ふたなり。」と記してその履歷を始めるのである。それは漱石の『猫』が冒頭に「吾輩は猫である。名前は未だ無い。どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ〳〵した所でニヤ〳〵泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。」と話し始める

のと同じ格である。

「一圓紙幣の話」のうちで、殊にヒユウモアの味があるのは、第八回のところである。紳士の待合通ひの様子が軽く諷じてある。その一節に「何寺にて撞く鐘か、かう／＼と鳴渡り往來する車の音も行遠定めらるゝばかりになりぬ。夜は已に十一時を過ぎてありし歟。旦那先に、若紳士後につゞいて車引入れられし所は通街より七八間引込みたる家なりき。これも旦那の邸とは思はれず、何處かと訝かるうちヲヤマアお久しぶり云々と洒落本の文句に當世のコロモをきせしやうなることを少し老いたれど、媚めいたる聲にて言ひ／＼立迎ふ。どうだ女主公約束はちがへまい、何とやらして何とやらと旦那も酔はれし歟、わからぬ俳優の假聲、女主人愛嬌笑ひ融し、ほんたうに感心、それにしても道が知れたのが頼母しいなどおぼえきれぬ軽い口上、旦那に背中ぶたれてキヤツといふ女中と口を揃へて述たて、旦那と若紳士を二階の一間へ作ふまでの呼吸到底吾等の口では叙がたし、假令叙たところが此の一回の筆記は足下では覺束なければ只ほんの片端を語るべし。」と最初の様子を示し、それから本題に入つて居る。

　二階へ登りて後の模様、扨何といふべきか。吾等相かはらず面無い千鳥なれば座敷の廣さ狭さわからねど、茶烟草盆運ぶ女中の裾あくる音近きを聞けば四疊半か六疊か　それよりは廣くあるまじ。旦那ひそめき四疊半もふさがりだの、チラと見た背姿、小みけと見たは僻目か、敵手は誰だ、ヲヤマア早いこと、當てごらなさい、コウツト小みけの敵手と、多過ぎて當がつかぬ、これか／＼、イヽエ、甘木か、イヽエ、邊見か邊見さんは三弊、ヲヤ來てゐるか、エ昨日も來た、驚く、それでは解せぬ数へろ／＼、今にわかりますとくすぶり笑ひ、此中いつの間にか此座敷の人口二人殖え、吾等には眞似られぬセリフばかり、庚申待の晩、田舎にて聞きしと似てありしが、東京の通言なれば眞似られず。其の中ひとりは女主人、ひとりは聞いたやうの聲と思へば、宴會にて聞きしどら吉の聲たり。

　それらによつて二十四年頃の待合の様子や客の有様などがわかるところに軽い可笑味がある。漱石の『猫』は俳味を主とした可笑味が中心となり、「一圓紙幣の話」は人情を主とした滑稽味が色濃く出て居る。

　「をかし」は、西洋の逸事、瑣聞などを譯したものである。頓智、頓才を喜ぶ人々が多いだけに、奇抜なところがある。それからくる笑は、小さな笑の一閃光である。笑の線香花火の瞬きである。笑の一線に觸れたかと思ふと、もうその笑が淡く消え

てゆく。そこに「をかし」の味がある。

その笑の趣は時に東西、例を同じくすることがある。「をかし」の中にフランスのラッソンと云ふ男が、僧正マロトルウの說敎中、その格好、服裝の滑稽染みたことを大聲揚げて笑つた爲僧正から法廷へ訴へられた。ラッソンは直ぐ呼び出されて所謂せらるゝ形勢であつた。ところが、ラッソンは生來漫畫が巧みなので、突嗟に僧正の滑稽な姿態を描き、黑い帽子を頭へ六つばかり被らせ、胴被(ぐるぎ)、ズボンなどを九つばかり着けた樣子を寫して法廷へ差出した。それを見た裁判官は思はず噴き出して、「成程これは可笑しい。」と云つてラッソンに無罪を宣告した。つまりラッソンの繪が役立つたのである。

少しそれと趣を異にするが、漫畫を役立たせた上では、十返舍一九も亦日本のラッソンたるべき資格があつた。彼れは『膝栗毛』で大當りを取つたに關らず、依然として貧しかつた。それで彼れは一策を案じて、まるで無一物な屋內の四壁へ白紙を張詰めた。そして彼れの得意の漫畫趣味を發揮して、簞笥、床の間、ちがひ棚、掛軸、花瓶などを縱橫に描いた。またその傍らに立派な倉庫を描いて、富裕らしい氣分を漂はせた。それが彼れの唯一の財產であつた。が、さうしたことで彼れは滿足した。正月には、餅を拵える金がないので、彼れは大きな鏡餠の繪を壁に貼り付けた、七月の盆には精靈棚の繪を以て當座の間に合せた。一九のすることが全部漫畫そのものであつた。人々がそれらの畫を見て呆れ返り、笑ひくづれると彼れは大に得意であつた。「をかし」の氣分である。

一九には、かうした逸事が多かつた。彼れが笑の文學を創造する時、一室に閉居して何處へも出なかつた。その身邊には筆硯がころがつて居る、書籍がひつくり返つて居ると云ふ有樣で、枕席も杯盤も置きつぱなしで、塵が山のやうに積つて居たが、彼れは一向平氣で机邊に張つて居る蜘蛛の巣にすら氣付かないで筆を走らせた。左に「をかし」のうちから二三拔萃した逸事にも、一九に負けないやうな放心家が居る。

○剽竊家

むかし或る年若き作者一篇の悲哀院本(トラゼヂー)を作りて佛蘭西の諷刺家 Piron に乞ふて其朗讀を聽くべしといふ許諾を得たりき。然るに其作中の作句は大抵前人より剽竊せるものたりしかば、ピロンは作句に讀至る每に帽を脫して拜一拜せり。斯くすること數回に及びしかば、作者大に怪み、何の故ぞと問ふ。ピロン答へて曰く、オ、是僕の習慣のみ、僕は舊知己にあふ每に常にかくの如くする也。

○レッシング

日耳曼の大家レッシングは詩人、批評家、學者として聞えたると共に放心粗忽をもて聞えたり。夫のニウトンが鶏卵と懐中時計とを取たがへて煮たるなど共に大思索家にありがちの可笑しき例なるべし。レッシング屢々家内にて金錢を失し、窃に家人の邪かと疑ふ由ありしが證なくて物をいひがたしと或時一握の金貨を態とらしからず、机上に殘し置きて、扨ツト家を出けり。斯くて友にあひし時云々と語りしに、其人其策の佳きをほめ、扨いふ、勿論金貨の數を數へられつるならん、レッシング少しくうろたへ、算ふるとや、ウンニヤそれは忘れたり。

○ラ・フホンテイン

佛蘭西の文人ラ・フホンテイン粗忽放心もて聞ゆ。下に誌せるは、フーレチエーといへる人が事實なりとて物に記せる所なれど、殆んど信じがたき話なり。或時、ラ・フホンテイン其友なにがしの葬送し、其後數日を經て例の如く、其人の家に音訪れたり。ありやと問へば、過日死去りぬと答ふ。そは意外なり、ハレヤレとばかり驚きし體なりしが、稍やありて我に返り、げに／＼そは眞なり。今こそ思ひいだしたれ、現に予其葬儀に列りしものをや。

○酒のや主人

名高き佛蘭西の詩人シャーペル Chapelle は一個の奇人なりき、學深く識博く、而も人と語るに學者めいたることといふを嫌ひ、洒々落々道戯滑稽流るゝが如し。好んで人と交り、人も亦好んで此人と交はりぬ。然るにシャーペルに一個の病あり酒を嗜むこと酷しきに過ぎたり。誠ある友は皆深くこれを憂ひけれど、流石に面を犯して得意見するは無かりき。其中に最も深く交りて骨肉よりも親しき詩人兼批評家のブアロー (Boileau) といふが深く嘆き、斷然此病の根を絶たしむべしと決心し、或日パリーの街頭にて遭ひしをり直ちに説法をはじめけり。立ながらの意見なれど、其いふ所痛切なりしかば、シャーペルも大に感じ、漸く服したる色あり。斯くて歩きつゝ、尚説もてゆくに、シャーペル風と見返り、幸ひに委に旗亭あり。車馬往來の繁き街頭にては話斷續になりて十分に聽取がたし、尚深く君の高喩を聽きたし、願ふは此亭に入りて憩一憩まん。君の意見は眞に深く僕の心を動したりといふ、ブアローげにもと諾して亭に上る。旗亭に上りながら何も命ぜざる譯にはゆかじ。一壜を呼ぶべし。やがて其酒は盡きたり。話はまだ央なり。よし今一壜といふうちにこれもまた盡けり。かくてやめんは餘りわるし、今一壜一壜と壜の數かさなりぬ。蓋しブアローは此惻心の機を失ふ可らずと思惟

せしゆゑに説法容易に果さりしなり。ツマリ兩人とも快く熟睡し、日暮れて目を覺せば、共におのが家の寢臺の上にありけり。

○知識を貯ふ

無學なる人のことを知識に富みたりとて喋々しくほめたゝふるものありけり。餘りにそら〳〵しき世辭いふが憎しとてや、簡明せる才女のいふやう、彼の人が夥たゞしく知識を貯へておはさんは驚くべきにあらず、一たびも費し給ひしことなければ。

○ひと理屈

演劇の蓋を開けてより五十三日目の舞臺にてヒタと絶句したる小俳優ありけり。上優叱つて曰く、鈍漢けふは五十三日目なるぞ。小俳優不平げに答へて曰く、さういつまでも記えてをらるべきか、察したまへ、

以上は主として藝苑に於ける可笑味ある逸話である。詩人、文士、學者などには通常人と異つたところがあり、特殊の習癖があるから、そこに自ら笑の種を作ることが多い。その放心、その酒癖などは、殊によく見る例である。平生温柔、謙遜な文豪アヂソンは、旺んに酒を飲むと、諧謔が矢繼ぎ早やにその口を衝いて迸り出た。ところが、その友人スチイルは、酒盃を啣まない時は、談笑自在であるが、爛醉すると口舌が重々しくなつて他愛なくなつた。かうした酒の上に於ける文士の可笑味は現文壇にも例が少くない。今のアヂソンは誰れ、今のスチイルは誰れと考へて見るのも興趣があらう。更に逍遙先生が列擧されたやうに東西に於ける酒界の語林を作つて見るのも亦一興である。Tipsy（酒に飲まれる）top heavy（頂邊重し）boory（顛醉）Cup spring（酒盃兒）などの言葉は、「猿のやうに飲み過ぎた」とか「二つに物を見る」とか「梟のやうに醉ふ」「小鰻のやうに樂しさうだ」とか云ふ俗間の通り言葉と共に人を笑はせる。

## （五）死の上に見出した可笑味

私が笑の線香花火に打興じて、何となしに漱石の『猫』を手に執つて見て居ると、「今更『猫』でもありますまい。『猫』は餘りに人が知り過ぎて居ますよ。東風や苦沙彌や迷亭、寒月などの話を聞くことは後廻しになさい。それよりも『猫』を生み出した笑の國へ御越しになつたらどうでせう。」と云ふ聲がした。

「何だ、『猫』を生んだ笑の國？」

と私は少し頭を傾けないわけにゆかなかつた。

「それ、熊手と提灯ね、あれを御存知でせう。」

といふ聲がまた聞えた。

考へて見ると、「熊手と提灯」には、初期の『ほとゝぎす』に出た子規の寫生文である。「ラムプの影」「墓」などと共に俳味から出たとヒユウモアを人々に吹込んだ作品である。墓といふやうな悲痛、寂寞、孤凉の感じがする主題を笑の空氣の中へ引入れたのは子規以外に見られない可笑味である。「熊手と提灯」は題が既に滑稽の感じを與へるが、それに對する子規の見方が、自然の笑を作り出した。

「墓」はその冒頭から既にヒユウモアを湛えて「斯う生きて居たかつとて面白い事も無いから、一寸死んで來られるなら一年間位地獄漫遊と出かけて、一週忌の祭の眞中へヒヨツと歸つて來て地獄土産の演說などは甚だしやれて居る譯だが、併し死につききりの引導渡されツきりでは餘り難有くないね。」といふところが第一に妙だ。いかにも俳人らしい。

ヤア何だか次ぎの間に大勢よつて騷いで居るナ「ビヤウキキトク」なんていふ電報を掛けるとか何とかいつてるのだらう。ナニ耳のそばで誰やら話しかけるやうだ。何かいふ事がないか、いふ事無いでも無い借金の事どうかお賴み申すヨ、それきりか、僕は饅餅が好きだから死んだら成るべく澤山盛つて供へてもらひたい、それは承知したが辭世は無いか、それサ辭世の歌一首詠もうと思つたが間に合はないから十七字に擬へて見たお笑草をたれか出したいいだね、[illegible]けりや十一字でも善いぢやないか言つて見たまへ、さうだな言つて見ようか「屁をひつて尻をすぼめず」といふのは何か下五文字つけてくれ、笑つちやいけないヨ、それぢやネ秋の花と置いてはどうだ、それヤどういふ譯だ、どういふ譯もないけれど外に置きやうは無しサ今秋がさかりだから秋の花サ、そんな譯の分らぬのは困るヨ、ぢや君屁ひり虫といふのはどうだ、屁ひり虫は秋の季になつてるから、屁をひつて尻をすぼめず屁ひり虫かそいつは餘りつまらないぢやないか、つまらないたツて困つたナそれぢやこれではどうだ屁をひつてすぼめぬ穴の芒かなサ、少しは善いやうだナ、少し善ければそれで我慢して置いて安樂に往生するサ迷はずに行つてくれたまへ、迷つたら歸つてくるよ……イヤに靜かになつた、誰ぞらシクシク泣いてるやうだ。抹香の匂ひがしやアがら、此匂ひは生きてる内から餘り好きでも無かつたが死んで後も矢張善く無いヨ何だか胸につまるやうで。胸につまるといへばからだが窮屈だね。こりや棺の中でおれのからだを詰めたに違ひない。棺を詰めるのは花にしてくれといつて置くのを忘れたから今更仕方が無い。オヤ動き出したぞ。墓地へ行くのだナ。人の足音や車の轟る音で察するに會葬者は約百人、新田

いへば無慮三百人はあるだらう。先づおれの葬式として不足も言へまい。……

それから篇中の主人公が墓の下へ這入つてからの感想に托して、死の前に於ける華族の無價値を笑つたり、向ふ見ずの戀を諷じたりして、最後に世智辛い社會の傾向を暗に當てこすつたところは、殊に面白い。

オヤ誰か來やがつた。夜になつて詩を吟じながらやつて來るのは書生に違ひ無いが、オヤおれの墓の前に立つて月明りに字を讀んで居やがるな。氣障な墓だなんて獨り言つて居やがら、オヤ恐ろしい音をさせアがつた。石塔の石を突きころがしたナ。失敬千萬ナ。こんな奴が居るから幽靈に出たくなるのだ。一寸幽靈に出てあいつをおどかしてやらうか。併し近頃は慾の深い奴が多いから、幽靈が居るなら一つふんじばつて淺草公園第六區に出してやらうなんていふので幽靈捕縛に歩行いて居るのかも知れないから、うつかり出られないが、失敬ナ、悠々と詩を吟じながら往つてしまやがつた。此頃此處へ來る奴にろくな奴は無いよ。きのふも珍らしく色の青い眼鏡かけた書生が來て何か頻りに石塔を眺めて居たと思つたら、今度或る雜誌に墓といふ題が出たので、材料を搜しに來たのであつた。何でも今の奴は只は來ないよ。たまに只來た奴があると石塔をころがしたりしやアがある。始末にいけない。オー寒いぞ〱。

子規が俳想を延長させて、石塔をころがす亂暴書生を捕へて滑稽味を發揮したところは、その光景が活躍して居る。墓についての悲哀感を戲謔化したのは、子規の創造した笑の小天地である。こゝまでくると、死も、亡者も死神もすべてが笑のヱエルをかけられてしもふ。薄氣味のわるい死神も笑つて躍り出すかも知れぬ。灰色の亡者も笑つて歌ひ出すかも知れぬ。死も明るくなり、悲みも輕くならう。墓の上の枯枝にとまる烏も、大きく笑ひ出しさうに思はれる。

## （六）　俳諧眼に映つた笑の人生

「熊手と提灯」は、何でもない一場の光景のうちに、子規が俳想の翼をのべて、そこに笑の渦卷を見出したのである。子規が彼れ獨自の主觀を透ほして、二の酉に於ける世相諧の可笑味をひろげたのである。熊手を買つて福運を祈る人々の上に無邪氣な諷諧を試みたのである。

坂を下りて提灯が見えなくなると熊手持つて皈る人が頻りに目につくから、どんな奴が熊手なんか買ふか試に人相を鑑定してやらうと思ふて居ると、向ふから馬鹿に大きな熊手をさ

しあげて威張つてる奴がやつて來た。職人であらうか、しかし善く分らぬ。月が後から照して居るので顔ははつきり見えぬが何でも慾ばつて居るやうな人相だ。こんな奴には屹度福は來ないよ。身分不相應な大熊手を買ふて見た處で、いざ鎌倉といふ時に寶船の中から鼠の糞は落ちやうと金が湧いて出る氣遣なしさ、まさか大佛の簪にもならぬものを屑屋だつて心よく買ふまい……やがて次の熊手が來た。今度は二人のよぼ〳〵車に窮屈さうに二人の婆さんが乘つて居る。勿論田舍の婆さんで其中の一人が誠に小い一尺ばかりの熊手を持つて居る。若し前の熊手が一號といふ大きさならば此熊手は二十九號位であるであらう。其小さな奴を膝の上にも置かないで矢張上向けて大熊手持つたやうに差あげて居たのもをかしい。其無邪氣な間の拔けた顔は慥に無慾といふ事を現して居るので、こいつは大に福を與へてやりたかつた。自分が福の神であつたら今宵此婆さんの內に往て、そつと其枕元へ小判の山を積んでやるよ、あしたの朝起きて婆さんがどんなに驚くであらう。併し善く考へると福相といふ相では無い。寧ろ貧相の方であつて、六十年來持つたつぎませの財布を孫娘の嫁入に讓つてやる方だ。して見ると福の神はこんな皺くちや婆さんを嫌ふのであらうか。或は福の神は此の婆さんの內の門口迄行くのであるけれど、婆さんの方で、福なんかいらないよいふて追ひ返すやうな人相とも見える。……次も二人乘の車だが今度は威勢が善い。乘つてる者は、三十餘りか、四十に近い位の、かつぷくの善い、堅帽を被つた男で、中位な熊手を持つて居る、大方可なりな商家の若旦那であらう。四十近くでは若旦那でも無い譯だが、それは六十に餘る達者な親父があつて、其親父が又慾ばりきつたごうつくばりのえら者でなか〳〵六十になつても七十になつても隱居なんかしないので、立派な一人前の後つぎを持ちながら未だ容易に財產を渡さぬ、それで仕方無しに今に若旦那で居るといふ人相をして居る。側に乘つて居るのは十二三の少年で　れが末の弟に違ひない。こいつも餘り福をやりたくないのであるが、併し大鷲大明神なか〳〵慾ばつて居るから是位の熊手を買ふてもらふた義理に少しはき搔込んでやるかも知れない。

俳諧眼を透ほして見た戲書が、好笑の雰圍氣を漂はせて居る。人相と熊手の上から、福の神の因緣に說き及んで居るところに子規一流の考へ方、見方が現はれて居る。一體熊手といふものそれ自體が滑稽染みて居るのであるから、慾張つた職人と大きな熊手のことを思ふと、誰れも噴き出さずには居られない。

俳諧からくる好笑の趣味を子規同様に體得したのは尾崎紅葉であつた。その傾向は彼れの『二人女房』にも出て居るが、殊に『多情多恨』の一節中に、紅葉の佳謔を見出すのである。その一節は、未だ待合のことを知らぬ柳之助が、友人葉山に伴はれて始めて待合の二階へ上つた時の描寫である。殊にその會話の上に浮び出て居る好笑の味は、蓋し紅葉の壇場で誰れの追隨をも許さない。

二人の通されたのは、茶掛つた小意氣な六疊で、折廻した縁の外は中庭になつて、その筋向の間では客と藝者の藤八を打つ影法師が映るのを、柳之助は突立つて見て居たが、

「馬鹿な眞似をしとるな。」と障子を閉てゝどつかり坐ると、此狹い間を電燈の光は耐らぬほど眩く照して、未だ火鉢も出ねば婢も來ず、唯明くばかりあつて閑寂した中に、葉山が床柱に靠れて、象牙の煙管筒の頭を閉さうに拔差する音がスポン〳〵鳴る。

と紅葉は待合の閑靜な趣を叙して、やがて茶菓子を搬んで來た女中を點綴して、それに不粹な柳之助の好笑的動作をからませる。

「あゝ腹が減つた。」又もや柳之助の呻くのを聞いて、婢は茶を注いで居たが、

「あら、洪水は岐阜と極つたのですが、飢饉は、貴方、何處」

「えゝ。」とばかりに柳之助は荒膽を挫かれた。虚さぬ葉山は、

「今朝の火事は番町だよ。」

「あら、然う、番町には私の情郎が居るのよう。」

と惡身しながら甘意れて言ふのを、柳之助は愕然と打目戍つてゐたが、やがて眉を皺めて横を向いた。

「いや、然うだつけかね、はてな、もう臺灣にはゐないのかい。」

餘り葉山の眞面目さに婢も不覺と釣込まれて、

「おや、何故、貴方。」

「軍夫の話だらう。」

「おふざけなさいよう！貴方の洒落は例でも罪が深いから可厭さ。」

「もつと罪の深い事があるのだが、知つてゐるかい。」

「大知り！」と圖に乘る途端、耐りかねたか柳之助は、

「早く何か食はうぢやないか。」

正に是晴天の霹靂、婢は打魂消て、如何に此人が家暮であるか、後學の爲に見て置たいといふ顔で、彼の面を眺めながら、

「貴方は餘程賤しいよ。此は待合ぢやありませんか、物を食べるなんて、那樣賤しい事を爲る所ぢやないの。」

江戸ッ子肌の俠な女中の樣子が眼に見えるやうで、思はず誰れにも會心の笑を洩らさせる。

## （七）狂歌の上に見る笑の國

紅葉の江戸ッ兒趣味、俳諧趣味の合成的笑謔を味ふと、今更ながら、江戸ッ兒の笑を分析して見たい心持になる。江戸ッ兒の遊戲的本能は、その環境、周圍を悉く笑の樂園化することに傾いて居た。洒落、地口、無駄口などは、彼等の本能の一發現として用ゐられた。それが文學方面では、狂歌、俳諧となつた。少くとも、俳諧や狂歌の上に彼等の遊戲的本能の閃きをはつきり見せた。俳諧は今尙ほ行はれて居るが、狂歌は殆ど廢れてしまつた。が、何れかと云ふと、低級ではあるが、狂歌の方に笑の分子が多かつた。その笑はシャボン玉のやうに意味の淺いものであるが、時には、小さい唐辛子のやうな利き目が輕淡な、幾分卑俗な笑のうちに混ざつて居て、捨て難い味がある。江戸ッ兒が、事に觸れ、物に感じて折々、即興的に頓才、頓智を笑謔の上に示す遊びの氣分、諷諧の意味が狂歌に結晶して居るかのやうに思はれる。

狂歌のうちには、時事に對する諷刺の意を述べたものが少くない。江戸政府の施政方針について、不滿を感ずると、彼等はそれとなく、狂歌によつて、政治上の欠陷を諷じた。彼等は、武斷政治に壓せられて、正面から政府の云爲を非議すべき權能を與へられて居なかつたので、側面から笑にまぎらせて、それとなく、非難の意を示したのである。その諷刺の方法は巧妙を極めて居た。當事者がそれを讀んでも、腹を立てるよりは、却て笑ひ出したにちがひない。それはスヰフトが『ガリヷア旅行記』に於て試みた諷刺を寸鐵的な方法で行ふたものだとも云へよう。そしてスヰフトが民黨に身方したと同じく、狂歌の作者中には、民黨が多かつた。

江戸に於ける田沼時代に煩瑣な儉約令が出て、明和八年から向ふ五年間、それを實行すべきことを一般民衆及び諸役人に命じた時、不平の聲が到るところ、狂歌を透ほして現はれた。當時、政府は、將軍から老中、若年寄へ與ふべき料理を湯漬に限る事とした、また側衆、奥向の人々には一汁一菜を與へることに定めた。それについて、役人のうちにも不滿を感じたものが少くなかつた。彼等は、それを『百人一首』その他に擬して、頻りに諷じた。

菅家

此度は汁も吸ずして表上
　燒みそ二食めしのまに〳〵

蟬丸

是や此酒も料理もへらされて
　へるもへらぬも御湯漬のはら

三夕

見渡せば酒も肴もなかりけり
　裏店めきし秋の夕暮

さみしさはみそもかはりもなかりけり
　槇も燒ずに秋の夕暮

心なき鼠も哀知られけり
　くいものもなき秋の夕暮

以上は倹約令に對する不平の聲であるが天災や米價騰貴や疫病に對する時人の感想も亦狂歌となつて現はれた。明和年間に風雨、洪水などが連年に及ぶと、朝廷では、明和九年を改元して安永元年とせられた。この時、民間では「めいわ九も昨日を限り今日よりは壽命ひさしき安永のとし」と詠んだ。また當時物價が昂騰したことについて「年號は安く永しと變はれども、諸式高直いまにめいわ九」と不平を洩したものがあつた。そして安永二年に至つて、疫病が流行して、十九萬人の病死者を出した時、中以上のものが主として多く斃れて、尾張の徳川宗睦の子、治休が矢張疫病で歿すると「御屋敷へ町からうつる疫病は、はじめ中間をわり(尾張)中將」と詠んだものがあつた。中には、天明三年の淺間噴火の事に托して、爲政者の遣り口を諷じ「淺間しや富士より高き米相場、火の降る江戸に砂の降るとは」と歌ひ、或は「砂や降神代も聞ぬ田沼川(田沼意次の事)米くれないに水野(水野出羽守)もふとは」と歌つた。

この時代は、時事を諷じた狂歌が殊に多かつた。田沼意次の子で若年寄を勤めた意知(山城守)が佐野善左衛門に怨まれて殿中で刺殺せられた時、田沼の施政方針に反感を抱いて居た人々は、頻りに佐野を賞揚して、田沼を嘲笑した。それが狂歌となつて、時人に傳稱せられ、オランダの學者チヽングが當時それをローマ綴でその史書中に收めたことがあつた。それらの狂歌には「金とりて田沼るゝ身のにくさゆへ、命捨てもさのみおしまん」「東路のさゝの渡りに水まして、田沼のきれて落る山城」「山城の城のお小袖血に染みて、赤年寄と人はいふなる」などがあつた

その時分、士風が廢頽して居て、狂歌になりさうな材料が何處にも石ころのやうに散らばつて居た。明和元年夏、書院番の京極伊兵衛、木造七左衛門、西の丸小姓宮城仁十郎、小姓組の

杉原七十郎らが隅田川で水練の稽古をするつもりで、朝から舟を出して、舟中へ藝妓を呼び入れ、亂醉した。何れも深更迄涼んで皈つたのであるが、その際、杉原が醉ひ倒れて溺死したことに氣付かなかつたほどに誰れも前後不覺に醉つた。この事が後に至つて知れると、いづれもその士籍を取りあげられた。それに對して左のやうな落首が行はれた。

　　宮城仁十郎
川風にふき折られしや宮城野の
　すゝきはおぼれて浮つ沈つ

　　杉原七十郎
船に醉い酒がすぎ原七十郎
　七百石を川へ進物

　　木造七左衛門
木造りてたしなむべきに人までを
　さそふ遊びの面つくりけり

　船遊
何事もなくすむ時はけいこ船
　おぼれる時は藝妓(げいこ)船かな

それらを見ても、江戸人が如何に世上の出來事を茶化し笑倒し洒落散らしたかが想はれる。この餘勢は權威ある名歌の類をも洒落の材料とすることを快とするやうにした。大江千里の「月見れば千々に物こそ悲しけれ」の歌を「月見れば千々に芋こそ喰ひたけれ、わが身ひとりのすきにあらねど」と茶化し、山邊赤人の「田子の浦に打出で見れば」の歌を「白妙の富士の御詠で赤ひとの、鼻の高ねに雪はふりつゝ」と滑稽化した。が、狂歌の作者は單に他を茶化したばかりではなかつた。自らをも茶化した。嚴肅な死の前に於てさへ、洒落のめすことを忘れなかつた。一九は歿する時、「此世をばどりや御暇に線香と共に終りは灰左樣なら」と戯れた。三馬も亦世を去る時、「善もせず惡も作らず死ぬる身は、地藏も笑はず閻魔叱らず」と詠んだ。

蜀山人(四方赤良)が曾て舟で伊勢の海を渡つて三河へ向ふ途中、烈しい風雨のためにひどく苦んだ際、その門人が蜀山人を介抱しながら「先生の奇才も、かうなつては駄目でせう。恐らく一首も出ますまい。」と云つた。ところが蜀山人は苦しい胸を抑へながら「否、いくらでも名歌を吐くよ。」と云つて、左の一首を詠んだ。

よめばよむ月といふ字は二つよむ
　げつとでもよむぐわつとでもよむ

蜀山人がある呉服屋で木綿の裏地を求める時、頭番がその價を一朱だと云つたのを少し高いと思つた。それで直ぐに彼れ

頓才を出して「一朱とはあまりあこぎなうら木綿、網のやうだぞもつとひけ〳〵」と咏んだので、番頭も思はず笑つて、いくらか値段を引いた。多忙な現代人の思ひも付かぬ悠々たる氣分である。

かうして狂歌は、單なる言葉の戯れ、言葉の洒落に過ぎないが、中には、いくらか上品な趣致を帶びて、文學的價値の乏しくないのも見出される。四方赤良の「くれ竹の世の人なみに松立てゝ、やぶれ障子に春は來にけり」「金はありかけも拂ふて置炬燵、とろ〳〵寢入りつかんとしの夜」「ものゝふの臆病風やたちぬらん、大つもごりのかけとりの聲」式亭三馬の「村雲よ邪魔がしたくばかけぬけて、月の入るべき山にふさがれ」松永貞德の「すゞしさを巻こめてくる文月は、一葉の風のちらしかきなり」などはその一例である。

## (八)　川柳、俳句の上に見る笑の世界

狂歌よりも、もつと卑俗で、もつと鋭い穿ちを見せて、人間の弱點や、その一擧一動の上に笑の焦點を示すのは川柳である。それはいかにも皮肉である。が、その皮肉は罪のない皮肉である。愉快な皮肉である。中には聊か意地のわるい皮肉もあるが、その皮肉の動機には一向他愛がない。

蠅は逃げたのに靜かに手を開き
雨の手で欠伸をぐつと差上る
御隱居は杖のあたまへ手を重ね
もしくれもせうかと遣手罷出で
それがしも罷成ると鬮子しやれ
糠袋よつ程顏を長くする
挨拶の度に手拭肩をかへ
漆かきのゝ字一字で日を暮し
土俵入まける景色は見えぬなり
讀めぬ字は何といふ字に讀んで置き
御扇子をちと拜見と讀めぬなり
幽靈は握拳で引戻し
ぬかる道飛ばれるだけは飛んで行き
雨だれの路次は猪首で通りすぎ
首一つふると角兵衛獅子になり

それらは主として人間の動作の上に現はれた可笑味を穿つて適確に著しい特徴の閃きを摑んで居る。そのどれもが小さな漫畫になり得る。それから人間の弱點を穿つた句にも個々の職業や生活に附纏ふ特質の一點を捕えて、笑の小さな豆粒を引きりなしに投げかけるやうな戯れを示して居るところに輕い洒落味

が漂うて居る。

一人者客にしばらく留守をさせ
芝居の馬くびと尻とはいき別れ
生き代り死に代り出る下手役者
嫁殿やなどゝ化物聲でいひ
産婦句夫使ふが癖になり
泣き泣きもよい方を取るかたみわけ
肺肝を道々くだく朝歸
おうつくしかつた相だと後妻言ひ
親にもあはず黒石をいかすなり
しつぽりと和尚の悔みうまいもの
口を寄入にたいこ一分借り
女郎買ふ金をおやぢはためて死に
とう腐賣貧乏寺の時計なり
しわい奴何んぞと言ふと時節柄
賣殘りげに十目の見るところ

その他、史上の人物を引ぱり出して、諷諧の意を示した句にも、往々秀逸がある。光秀の末路については、「禍來る即ち死すは明智なり」「洛中へ桔梗の花が三日咲き」と穿ち、道眞については、「惡筆がよつて筑紫へやる工面」と詠んだなどはその一例である。

金を貸せではない馬鹿め嫁を貸せ(道灌)
梶原は耳をかしなの元祖なり
未來記に見れば高時肴なり(北條)
鎌倉の汐干うろこのしまひなり(同上)
清正は人參畑ふみあらし

どの人物をも戯畫化して、史的感興を笑の一點に集中したところに小さな皮肉味がある。が、範圍や題材の上に限りがあるので、その穿ちが、いくらか皮相に留まつてしまつた趣がある。矢張、人間の一擧一動のうちに好笑の一契機を摑んだ方により多く笑を誘發する力のある句が多い。

川柳からくる笑にくらべて、もつとのんびりした笑を促がすのは俳諧からくる可笑味である。それは川柳ほどに鋭い穿ちをしないで悠然と春の日永に猫の欠伸を見て興ずる趣が見える。その笑は茶味がかつた笑、禪味の混ぜつた笑である。故意とらしい笑が少くて、自然に湧き出た笑、自得して笑の世界を靜かに眺めると云ふやうなところも見える。

日が永い〱とのらりくらり哉　　一茶
けろりくわんとして烏と柳かな　　同
戀猫のぬからぬ顏で居りけり　　同

鳴かんかと髭かきあげてきりぎりす　大江丸
つゝみあひし夫婦出くはす踊哉　几董
客僧の狸寐入や藥喰　蕪村
頭から布團かぶれば海鼠哉　同
ふり返る二重廻しや人違ひ　子規
燒芋としるく風呂敷に烟立つ　同
火桶抱て頭髏をかくしけり　路通
埋火に鼻のみ見ゆる日暮哉　成美
突兀と大入道の紙子哉　麥太
牡蠣飯の烟吹き合ふ夫婦哉　小波
出代の更に醜きが來りぬる　虚子
瓜踏んで瓜盗人のこけたりな　紅葉
むにや〳〵と眠り入るなり額に蠅　紅綠

以上のほかに子規の「老僧は人に非ず乾鮭は魚に非ず」「濁世暑し和尚赤裸々、所化白裸々」といつたやうな禪味がゝつた句がある。露月の「栗はねて大入道と化けても見よ」と云つたやうな逸興に乘じた句もある。几董の「馬鹿づらに白き髭見ゆけさの秋」や一茶の「春たつや愚のうへにまた愚にかへる」といふやうな自ら憐む上に可笑味を寄せた句もある。それらは俳諧特有の笑である。

## （九）狂言の上に見る笑の國

さて最後に愈よ私が狂言の國へくると、黄表紙よりも、もつと朴茂な原始的な笑が四壁をゆるがすやうに大きく鬨るのを感じた。江戸に於ける笑の文學はその源流を狂言に發して居るものが多い。室町時代の笑の趣味は他愛なく大まかなものであつたが、それが江戸時代に活用せられて巧緻な味を加へたところに、笑の進化史を見る感じがする。『膝栗毛』などでは「どぶかつちり」のほかに「鱸庖刀」「雁争ひ」「附子」「狐塚」「つんぼ座頭」「墨塗り」「雁争ひ」「三人片輪」「筍争ひ」「暇の袋」などから材料を借りて居る。中には、一九が狂言の趣向をすつかり剽竊したのもある。

狂言の世界は、今日の眼から見ると、どうしても、御伽話の國である。太い不器用な線で、ぼんやり表現せられた漫畫の國である。その中へは、まるで突飛な、想像も付かぬやうな主人公が出てくる。中風症に罹つて下界へ落ち、藪醫者の療治を受けて昇天するとい雷が現はれる。隱蓑、隱笠、打出の小槌などを人間に與へて福の神以上に金銀を振出す鬼が出てくる。上野の仁王に化けて賽錢をくすねる惡戯者が出る。うすのろの大名、愚かな僧侶、貧弱な山伏、愛嬌なる閻魔、極端な放心家な

どもよく出る。すべてのシテも、ワキも、アトも見るからに間抜けた可笑味を帶びて居る。

それに狂言の筋も亦簡單だ。いくらか込み入つた筋を求めると『三人片輪』などの類がある。『三人片輪』は、ある大名が片輪者を抱えやうと云ふのを聞いて、惡戯好きの男が僞の啞、座頭、跛足に化けて三人共に大名に抱えられる。大名はそれとも知らずに彼等を信じて、酒藏、錢藏、物藏の鍵を預けて外出する。その留守中、僞の啞が物を云ひ出す、僞の座頭が大きな眼を開ける。また僞の跛足が俄かに歩き始める。酒藏を開いて酒を取出し、盛んに飲む、歌ふ、舞ふ、到頭、大名の歸つてくるのに氣が付かないで大醉したところへ、大名が戻つて來て始めて惡戯者の眞相を知り、立腹する。僞の座頭が狼狽て啞になる、僞の啞が急に跛者に化けると云ふ滑稽を演じて、「嗚呼ゆるさせられい〳〵」と悲鳴の聲を揚げて逃げるのを「やるまいぞやるまいぞ。」と追ひかけると云ふ筋である。すべてが淡泊である、長閑である、古雅である、朴茂である、神經衰弱や世界苦や末世病などを知らぬ太古の國の春の笑である。

今の時代は餘りに笑が欠乏して居る。もつと快活に笑つても損はない。笑は人の身心を活かす、すべての人々を元氣附ける笑の國を巡禮したものには、たとひ、有形の福が來らずとも、無形の福は必ずくる。酒も笑つて飲めば、快く憂らを解はしめる、食物も笑つて喫すると、過食も消化し易い。切瑣な事務も笑の氣分で片付けると苦もなく進行する。それから見ても、笑は人生に必要だ。空氣や水の必要なるが如く有用だ。笑の文學の存在と發達とは一段深く要望せらるゝところのものである。それにしても、わが笑の文學は甚だ振はない。人生は笑はんがための人生でないにしても、まさか泣かんための人生でもあるまい。時々笑ふことがなければ、世界苦の負擔に堪え切れない。天地皆笑ふ盛春と共に新しい笑の門が大きく開かれるであらうことを笑の神に向つて祈らう。私は最後にマックス・オオレルの最短な一小話を茲に引いて笑の幕を閉ぢよう。そして笑の國の巡禮を打切ることにしよう。

諸君、感冒に罹つて居る時は、決して戀人の許を訪はぬやうになさい。眞心こめて意中を打開けやうとする刹那、急に嚔が出たりすると、折角の話頭を挫いてしまひます。わかりましたか。

（附記）本文中に引用した笑の文學の譯例には句讀のないものが二三あつた。それは潜越ではあるが、便宜上、句讀を施した。茲にその止むを得なかつたことを明かにして一言御わび致します。

# 「風流」論

佐藤春夫

この文中に、御迷惑にもその名前の出て來る機會を持つすべての今人と古人とにこの談理小品を呈したい。

## 一　序說

むつかしい題をつけてゐる。しかし私は斷るまでもなく學者ではない。なまなか、學者のやうな口を利かうとすることは、私にあつては不自然極る。それぢや私は何者で、どんな者のやうに口を利けばいいか。私は知らない。但、私の思想は今度は饒舌的に生れたのだから、私はやはりこれを饒舌で表白することが最も樂(らく)である。私は飽くまでも自然に從つて樂(らく)であることを愛する――文體に於てすらも。

それにしても、風流といふものは決して饒舌なものぢやない。むしろその反對のものであるらしい。それはまた、風流人にとつては、ただ感ずべきものでこそあれ、考へるべきものぢやないらしい。捕捉しようとすればあとのない香爐の煙であるらしい。さればこそ古來、風流人は風流に就ての片言隻句を述べたことはあつたにしても、仰々しくその本體などを說かなかつたのであらう。然るに、私はといふと、「風流」なるものに就て考へるばかりではなく、更に饒舌をもつてそれが果してどんなものであるかを解かうと企てるのである。風流人は定めし、私の無風流を笑ひ或は咎めるであらう。さうして私を無風流漢と呼ぶに相違ない。だから、若し私にして風流人をもつて自任するとしたら、私にも多分、この小論は無いに相違ない。私は風流といふものをそれほどにも消極的なものと思ひ做してゐる。

だから、もしこの小論に於て私がたとひ風流なるものの正體を見究め得たと假定してみたところで、私が饒舌な風流論を發表するといふこの事實が、やがて、私が風流の徒を以て自認するものでも無ければ、同時に風流なるものを今更に提唱する、では無いといふことの、雄辯なる說明となりさうである。

――ままよ、私は風流の徒などでなくつたつてもいい！

言ふまでもなく、私とても現代人である。――唯物史觀といふ言葉も知つてゐる。現實的理想主義といふ言葉も知つてゐる。プラグマチイズムとか、エラン、ヴヰタルとかいふ舶來の言葉さへ聞きかぢつて知つてゐる。いや言葉だけではなく、その言葉の意味をさへかすかではあるかも知れないが感ずることも出來る。現代人であるところの私は、風流などといふものを、實際、一言のもとに馬鹿にしたいやうな氣持さへ持つてゐるのである。現代人としての私、コスモポリンとしての私。それらの私はたしかに風流などを馬鹿げ切つたものと信じてゐる。

しかも私は同時に、風流なるものを無視し去ることが出來ないところの傳統人としての私、日本人としての私を實に屢々見るのである。時には私は、風流を無視し去らないどころではない。月の夕に花の晨に、寧ろそれが私を蠱惑することをさへ感ずる。――さうだ感ずることがあまりに切であるがために、私は一度もそれを考へたことがなかつた程であつた。

私は、往年、世人が惡魔主義者とか享樂主義者とか彼を呼んでゐるところの現代の文士谷崎潤一郞とまだ親交を結んでゐたころ、居は互に近かつたし、私は彼と日夕相往來したものであつたが、その頃、私は彼と實に頻りにこの風流といふものに就て語り合つたものであつた。我々は互に相手がそれを理解してゐるものと見做し合たやうな氣持でゐたから、互にそれの本質をどのやうに判斷してゐるかといふやうな點に就ては格別の論議はなかつた。ただ、我々の身邊に古人の所謂風流といふものが今もなほあることを、さうしてそれは決して西洋の藝術からは感得されない何ものかであるが、それが我々の身に或は胸に或る力を持つて打つといふ事實に就て、谷崎はそれを菜食主義的の美食と呼んでしかしそれが人々から靑春を奪ひ、人々を消極的なものにするといふので、彼は彼の所謂菜食主義的の藝術の蠱惑に對して、ひどく怖れを抱いてゐるかのやうであつたのを私は今思ひ出す。私はといふ、私は別段、彼のやうにそれを怖れもしなかつた。彼がそれのことを菜食藝術的美食といふに對して私は假りに月光的恍惚と言つたことをも思ひ出す。やはりその頃、芥川龍之介は谷崎のその菜食藝術に對する怖れを知つて――何れは谷崎からその論を聞いたのであつたらうが――私に言つた「谷崎のやうに何もああ戰慄するにも及ぶまい」と。蓋し、やはり、一言に言へば風流とも呼ぶべきことに就いて言つてゐるのである。かく突然、私が何故に彼等の名前をここに引いたかといふのに、現代人でありながら、一言に風流と

言つて仕舞つても大して間違ひないらしい一つの或るものに魅力を感ずる人々が私より外にも例があるといふことを言ひたかつたのである。若し、それでまだ例に乏しいといふならば、私はいくらでも知つてゐる。「雨瀟々」の作者永井荷風が私に思ひ浮ぶ。かの作者の現今の境地を大ざつぱに風流と言つてみても大誤がなささうではないか。十五年前にこの作者を人々は享樂主義者と呼んだ。またその藝術的生涯の當初にその藝術は少くともその外皮に於ては、最も東洋的でないものであつたことを人々は知つてゐる筈である。更にまた私に思ひ出せるのは、十年前にフューザン會といふ名のもとに集つた一團の美術家たちのうちの或る人々である。それらの人々は當初には西洋の美術のうちでも最も激越な奇矯にまで見えるほどの新運動に應呼する者であつた。然るにその人たちは今日では反つて、我々傳來の風流的所產の一つである南畫なるものの境地を愛し始めてゐるかのやうに見えるではないか。――岸田劉生のごときがその重な人である。

　私は澤山の人々の名前を數へた。風流三昧に或る蠱惑を感ずるのは、その理由が何であるかは今しばらく考へないことにして、ともかくもその事實は、現代の藝術家のなかでも決して私ひとりではないことに私は氣づく。もうこれ以上に例を外側に求めることの代りには、私は寧ろ讀者諸子が目を各自の內側に向けてみて、君自身のなかにそんな蠱惑に應ずるやうな何ものかが果してなかつたかどうかを、先づ驗べてみてもらひたいと思ふ。

　諸君子に尋ねよう。君は、時あつて折ふし、ふと世情が淡くなつて己に執する心が去つたかのやうに見えたその瞬間に、或る名狀しがたい情調――少くとも私には情調として現はれるが――それを「ああ、それが古人の所謂さびしをりの氣持であつたらう。もののあはれであつたらう」とさう言へばさうかとたとひおぼろげにでも思へるやうな、それを悲しいと言はうには喜ばしく、喜ばしいと呼ばうには悲しみであるやうな、一種かすかな模々とした奇異な、それによつてしばらくは身も心も潔められるかのやうな恍惚、陶醉、或る場合には靜かながらの情念にさへ似通うた感じを、天地間非情の何物からでも感得した覺えが、君にかつて無かつたか。

　――私が今もどかしがつてゐることを君は知つてゐるであらう。全く私の言ひ方はもどかしい。けれども私の言ひ方が惡くつてもそんなことなどにはこだわらないで、若し判りさへするなら、私は君に、「あ！　そんな氣持はあつた」と言つて貰ひたい。でないと、私は筆を運びつづけるわけには行かない。―

仕方がない。どうしてもそんな氣持は知らないといふ人に向つては、私はもうこれ以上に私のこの一文を讀みつづけないことを乞ふことにしよう。實際、私は、さういふ人に向つては少し慍るのだ。人間のなかには誰しも、たとひそれが常にではないまでも、さうして程度に强弱の差はあつたにしても、私が今言はうとした心持を感じたことがないといふ人は無い筈だと私は思つてゐる。蛙にだつて鳥にだつて、犬にだつてある筈だと私は言つてみたいくらゐだ――だがそれではお伽噺になつて仕舞ふだらう。しかし、人間にならば誰にでもあると言ひきつても大丈夫お伽噺にはならない。私はその心持をそれほど普遍的なものだと思つてゐる。但、その心持は、人々の產れた國の風土や習慣によつて必ず多少は變つた現れをするかも知れない。譬へば同一種類の草花でも、その產地によつていくらかは、或は大に、その色香を異にしてゐるやうなものである。さうして我々日本民族であるものに現はれるあの心持は、きつと似通うたものに相違ないと私は信じてゐる。だから、私は私の信念の上から、私が言はうとした心持は日本人のうちには誰でもが持ち合せてゐて、しかもたとひ堂々めぐりのもどかしさででもそれを言はうとすれば、手もなくそれが判つてくれてもいいくらゐなありふれたもののやうに私は思做してゐる。それだのに、「そんなことは知らない」と言つた人があると假定すると、私はその人を、私の下手な表現をわざと許してくれなかつたただの意地惡だと思はないではゐられない。――それほど、私はそれを人類に普遍的で民族に共通的なものと信じてゐるのである。

そこで、私の筆の無力を恕して私の言ひたい氣持を察して、さて讀みつづけやうとしてくれる諸子よ。私が「風流」といふものがどんなものだかを說かうとしてまづ言ひたいのは、「あれ」の事だ。折ふしに我々のなか――心のなかでもない體のなかでもない、單に「我々のなか」といふ方が一層適切であると私は思ふが、その我々のなか――をあのやうに微妙に通り過ぎる「あれ」だ。別れた人の美しい影のやうに微妙に……。妙にはかなくしかしそれは喜びに似てゐるまことに奇異な影である――假りに影と呼ばうなら。その影を我々は我々の傳先から傳へたのだ。我々の祖先も亦彼等の祖先からそれを傳へたのであらう。その祖先はそのまた祖先から……それではそれを最初につたへた人は誰だつたか。さうしてなぜまたあんな氣持をだけ傳へたのか。――そんなことを誰が知つてゐるものか。そんなことを知つてゐる人があるくらゐなら、秋の夜の蟲は何故啼くのか、そのうちで草雲雀だけあんな啼き聲を何時から何故に探んだか、そいつを私はその人に敎へてもらひ度いものだ！

ただ我々にも氣のつくことは今日といふ平面を見渡してそこにほんのかすかに、それと言はなければ氣づかないほどに現れてその存在をさへ疑ひ度いやうな一つの點は、よく見るとそれは截斷面に現れた糸であつて、それは古今といふ立體のなかを通いてゐるところの永い一本の糸であるといふ事實である。かういふ判り切つた事に就ては今更說くまでもなかつたであらう。私はもう一度同じ事を言ひ度いのである。我々の日常生活といふ平面のなかへかすかに一つの點か何かのやうに捉へがたく現れる「あれ」が、人生といふ立體のなかでも亦永い一本の糸であるやうに思へるではないか。ことの序に私はもう一つ、もう一層比喩的なことを言ひたい、一つの糸が一つの點に見えることがあるやうに一枚の紙が他のものによつて或る狀態で匿された場合には一本の線としてだけ見えることがありはしないだらうか。一つの點が一つの線の或る現れであつたやうに、一つの線が一つの平面の或る現れでないとは限らないと私はいふのだ。物にかくされて點としか見えないものが、長さのある何物かであり、長さだけ現れたものが更にそれを覆ふてゐるものを取去ると廣さへ持つてゐるものであるかも知れない。さうしてこの我々の現實的人生――即ち或る立體の單なる一截面の上に、點として現れてゐるさまざまのものはすべて、單なる點以上の何物かであるのに、それが各他のものと相剋し合つて點としてだけしか現れ得ないのかも知れない。宇宙と名づける立體を人生といふ特定の截り方で截斷し、乃至人生といふ立體を今日といふ特定の截り方で截斷し、それ故に、われわれの今日の人生といふものは無限的宇宙といふものを假想して見る場合、ほんの哀れな斷片であるかも知れない。しかも我々に與へられたものとしてはどうやら生憎とこの斷片だけらしい―

この總に與へられた斷片によつてより大きな或物を解からうとして、人間の各自は、各自の生活を最も力強く支配する點を捉へて、その一點を中心として各自の生をそこに開展させる――或は無意識に、或は强烈な意識の下に。さうしてそこにさまざまな思想やさまざまな哲學やさまざまな宗教や、即ち時には全く相容れないやうなそれほど種々雜多の生き方が、同じ人間同志のなかに然も時を同じくし所を同じくして發生してゐるのであらう。この意味ではたつた一個の今日のこの世界でさへ實は互に交錯し重複した無數の世界なのである。……そんなことは、しかし今は深入りしてゐるわけにはいかぬ。ただ、讀者諸子が、あの折ふし我々のなかを通り過ぎる「あれ」を知つてゐて、又、昔の人も「あれ」を感じたらうとだけ認めてもらへればいい。

「あれ」！　私がいま子供のやうにしか口を利けないのを讀者諸子は笑つてはいけない。言葉の王と名告る人があつても、その人が眞に賢い人である限りは、我々の民族の詩魂に觸れるあの一種の感情を描くためにならば、多分はきつと口を閉ぢるだらう。事實、我々の祖先のうちの幾多の天才も亦、結局は實に私が今ここで言語に絕してゐるところの當の「あれ」を、如何にして的確に捕捉し如何にして端的に表現しようかといふその一念のために彼等の生涯を捧げたものである。「あれ」の眞の表現を求めて我々の祖先は端なくも、そこに三十一文字といひ更に十七文字といふ他の民俗のものに比べ一最も沈默に近い文學の様式を見つけ出した。また實體を的確な存在にするための陰影を無視することによつて實體そのものをさへ陰影界のものに化してしまふやうな最も虛無に近い美術の手法を見つけ出した。その詩情がそのやうな表現を要求したからである。沈默と虛無とに近い。これこそ我々の古人の風流的藝術であつた。我々の古人は「あれ」を沈默と虛無とに近いものと解釋したからである。それにしても亦、その風流的藝術に喜んで彼等の命を盡した風流の徒とは、實に「あれ」を感じて「あれ」の喜びの眞實なことをしみじみと感得した人々が、自己の快適な生をそこに見出すと同時に、ほんの瞬間的に通り過ぎるあの、悲愁と一體になつてゐるほどにまで深い喜悅、兩極を一ときに具備してゐる感激、その一瞬こそ宇宙と永久とに繫がつてゐるかと感ずるまでのその眞實の閃光をどうかして永續的なものにしたいといふ切願から、彼等は我々の世俗的生活のなかではほんの物かげに匿され片隅に忘れられてゐるあのおぼつかない一點の「あれ」を、人間生活の中心にまで持出し乃至は「あれ」のあるところへ人間生活の中心點を推移して行つて、さて世俗界に於ては決して日常生活的ではあり得ないところのものを日常生活化しようとしたのである。——とてつもない價値の轉換だ！　世俗ではそんなものを生活の數のなかへも加へないかも知れぬやうな一點を凝視して、それに長さを見出し廣さをまで賦與してその面の上へ、一個の國土を、世界を、建てやうとしたのだ。然も、その奇異な安樂境土のなかに、唯その精神を胡蝶のごとく遊ばせるだけでは滿足せずその肉體をさへそこへ住み込ませようと企てたのである。——汚れのない一少女の導きによつて肉體のままで天國を經巡つて來たといふフロオレンスの大詩人ものの數ではないと言ひたいほどである。言はゞ極端な詩的耽美の日常生活の創始である。彼等はその全生活を擧げてその藝術の花床にしたのである。生活と藝術との一元を疑はなかつた彼等のさのやうな極端な生活創造を見る時、私はそぞろに彼等の徹底的

な飛躍を壯んなりと言はざるを得ない。さうしてこの一群の見なれない浪漫主義者たちを愛するのあまり、私は私自身が彼等に伍するかどうかは別としても、彼等が已たちの世界とは別な世界に住んでゐる他の多くの人々のことを「俗」と考へたことの驕慢をさへ好しと言はうと思ふ。全く、そのやうな無茶な詩的耽美の生活創造をした彼等は、その事實そのものによつて世俗に對して無言の挑戰を企てたとも言へる。

それにしても、但、彼等の詩的耽美の日常生活なるものは乞食のそれに隣合つてゐる！　彼等の美術なるものは醜怪に隣合つてゐる！　彼等の文學なるものは答のない謎語に隣合つてゐる！

然も！　更に驚くべきことには、それらのものが、その基調を味解する者にとつては、時には何ものにも變へがたい魅惑的の力を帶びて迫るではないか。——私自身にとつて言ふならば私の理性と私の意志とはどうやらそれを拒否しなければならないと考へる時にも、私の感情は、稍ともすればあの奇異な靜寂的陶醉の世界を私に憧憬させるではないか

さても、「風流」はどこまで手の込んだ代物だらう！　私が風流といふものの正體を見たいとあせるのはこの爲め外ならない。甚だしく逆説的な恍惚であるこの風流と言ひ風流的藝術といふものの本源を、私は子供のやうな片言で「あれ」だと斷じたことは諸君子も既に御承知である。その「あれ」といふ代りに學者達はその同じものを「無常感」と呼んでゐる。もし強ひてさういふ言葉で「あれ」を呼ばなければならないとならば、私はそれを無常感とだけは呼ばずに「無常美感」といふ造語を許して貰はうと思ふ。しかしそれにしてみたところがやつぱりただ「あれ」と呼ぶこととさう大した差違はないではないか。さうして問題がもうここまで來るやうになつては只、「あれ」とか「無常美觀」とかそんな言葉だけでは濟まされさうにもない。我々は今や　彼等風流の徒がその一點に命をかけて彼等の生を目覺しいほど徹底的に開展させたその原動力たる「あれ」を、もう一度はつきりと突き留めて見無ければならない。その無類に畸形な美の第一の秘密はきつとその原動力「あれ」のなかに萌芽を示してゐるに違いない。その萌芽を彼等はきつと充分に畸形に生長させたのだ。萌芽である時には、さほど畸形とも思はなかつたものを、その生長とともにその畸形の度が自然と、充分注目をうながすほどに擴大されたのではないだらうか。

私は「あれ」のことを一度仔細に本質的に考へよう。それから風流の徒がそれに與へたさまざまな解釋、その解釋から出たさまざまな樣式——つまり風流と風流的藝術とを本質的に考へ

よう。それの疑惑に對して我々――いや私自身が、果して身を投じていいかどうかを考へるのは無論のこと。

## 二　挿話

唐突であるが、私はこの間、雜誌「新潮」主催の雜談會へ出席した。――この會合は文壇人以外の諸君子は或は御存知ではないとも思ふから說明をするが、これは當代の小說作者たちが毎月、その月々に發表された文藝的制作に對して月並的雜談を試みる一夕の會合なのである。――もう一度說明をするが小說作者たちが文藝を談ずる一夕の會合などといふと、或は風流らしく聞えるかも知れないが、もしさう思つたならば大へんな間違ひであらう。また事實、別段にさして風流な會合でもない。一たい現代なるものが決して風流でもなければ、小說作者なるものも風流でない。更に會合なるものがまた風流でないと來てゐる。「現代」「小說作者」「會合」この三つのものはそれ自體が各風流ではないところへ、そいつが三つ重つて見れば別して風流でないことになりさうではないか。――呉々も誤解して貰つてはならないが私の言ふのは、現代の小說作者何某と何某との會合が無風流だといふので決してないことである。飽くまでも、「現代」「小說作者」「會合」そのものが風流でないといふのである。そのことも何れは自然とそれを論ずる機會が、この後に出て來ると思ふから、今は詳しくは言はないが、假りに、「現代」――「むかし」、「小說作者」――「詩人」、「會合」――「ひとり」、を單に言葉の上で感じてみても何となくそんな氣がしはしないだらうか。――私は今、諸君子と私とが「風流」といふこの一語の語感の上にどれぐらゐの共通な感じを持ち合ふことが出來るものかを驗してみたいと思つてこんなことを言つて見たまでである。全く共通な、或は共通に近いとして使用してゐる我々の言葉も、時々氣がついてみると互にかなりの違ひを持つて使つてゐることが折々私に氣がつくからである。

それはさて、さつきの「新潮」主催の雜談會であるが、その席上でのこと、話題が室生犀星の作品の品隲から作風の批判とでもいふやうなことになつて、何かのきつかけで誰かの口からひよつくり「風流」といふ言葉が出たのが初まりで、犀星の說つてゐるところはむかしながらの「さびしをり」だらうと久保田萬太郎が言つた時、久米正雄は一說を立てて、むかしの風流とは違つてゐるだらう――感覺的なところがあるぢやないかと言つた。それがどうも、むかしの風流には感覺的なところが無かつたかのやうに久米が考へてゐるらしいので私は尠なからず驚いた。何故かといふのに私は風流といふものは古來感覺的な

ものだと思ひ込んでゐたからである。私は思はず自分と他との見地の違ひにその驚きを洩した時、久米は更に說明をして「古來の正しい風流は意志的なものであつた」といふ說を聞くに及んで、私の驚きは實に大したものであつた。さういふわけでこの格別に風流でもない席上に三十分ばかりは風流論が榮えた。さうしてもともと風流でない席は一さうと無風流になつて來た——換言すれば、私たちは各の意見を主張するのに忙しかつたのである。諸君子の語感をもう一度驗してみるが、無言のうちに互にうなづき合ふことと、言葉澤に自說を申し立てることと一體どちらが「風流」だらう？「無風流」だらう？ ——こんなことを言つて、私はこの席上の人々の無風流を咎めようなどとは夢更思つてゐるのではない。それどころか、この席上、就中最も沒風流だつたのはかく言ふ私自身であつたのだから。事實、私が一番おしやべりだつた。といふのは、この機會に端なくも覗ひ知ることを得た席上の諸家の意見は、この題目に關して口を開いた限りの諸家の意見は、不思議なことに——私にとつて不思議なことに、皆一樣に私のものとはあまりにかけ離れてゐたからである。諸家は、私の管見を——それもごく斷片的にしか言はなかつたが——淺はかな奇を好む說と感じたかも知れない——、いや、事實どうもさうらしいのである。老大家德田秋聲のごときは「謬見ではない」と言つて私を穩便にたしなめた程である。それにも拘はらず主觀的な私はまた私で、私があたりまへと思ひ込んでゐることが諸家によつてそれほど異說視され、然も私にとつては諸家の說こそなかなか珍らしいかつたのだから一種の奇妙な氣持は今だに——これを書いてゐる今だに殘つてゐる。然も、諸家の說は大體に於て一致點があり、唯私ひとりが別なのだから、これはどうしてもこの場では私の方が異說といふことになる。諸家は私のことを、敢て異を樹てて人を驚かしたと思つたかも知れない。況んぞ知らん、私はただ普段から思つてゐるだけのことをつい言つただけなのだ。それだけに私にとつては、諸家とかゝる感じ方が違ふといふことに一種の不幸福を覺えるのを禁じ得ないとともに、私の言つたことは唯いつもの感じだけにすぎなくつて一とほりの考察の後での說でもないだけに、私は「俗論といふものはいつも多數の人が贊成するものだよ」と言つて濟してゐるわけには行かないやうな氣持があつた——澤山の人がそれほど奇妙がる私の感じ方、見方を、もう一度自分でも事細かに考へ直してみたいといふ熱情を、この談論の中で私は抱き始めたものだから、それにつけても、しかし、その夜の席上はその同じ題目にいつまでも低徊してゐるわけにも行かなかつたし、またそれほど不意に現に、

た諸家の說が私には充分徹し難い如く、私の說とてもさう手輕には諸家に徹しないだらう事にも氣がついたので、私は私の感じ方が諸家に充分解せられないのみか淺薄化されたことを甚だ憾みながらも、私はその場ではより以上には私の「風流」觀を披瀝し盡さなかつた。

私はその席上の諸家とは、「風流」觀に於ては全く違つた世界に住んでゐたのである。それでは諸家の意見といふのはどういふのか。（新潮三月號「新潮合評會第十回記」事參照）

久米正雄は言ふ――「風流といふ心境はどちらかと言へば意志的なものだ。それを感覺で行けば近代的のデカダンになつて了ふ」「それまでの感覺に到達し得る前に、意志的な鍛練が必要だ。さうして達成されたものが古來の正しい風流だ。」から久米は「古來の正しい風流」といふものを說いたあとで「人生觀の凝立ではなくつて感覺の自己陶醉である」ものを「新時代の風流」と呼んでゐる。卽ち、それを近代的デカタンと一味相通ずるものとするのであらう。もし近代的デカダンといふ用語に對して久米と私との見解にして同一なものであり得るなら、私は事實風流の徒といふものと近代的デカダンといふものとを甚だ微妙に相似てゐる一面のあるものと考へてゐるのである――このことは後に說く。久米はまた風流といふものに就て「天才流の風流」と「達人的に解釋した風流」といふものを區別して、私たちの見解の相違をそこに置き、ただ好きに終始して――自己の一種の感覺に訴へるものにしかすぎないといふ私の考へ方を久米は假りに「天才流の風流」と呼んだ。さうして私のやうな言ひ方は「風流の極致を、成つた後の形を言つてゐる」ものとした。久米はこの一語によつて、一切のもののとは言はないまでも、尠くとも風流に就ては、究極といふものと道程といふものとを區別し、しかもその間に相違のあるものと考へたかのやうに見える。私はこの點に以て久米の說とは甚だ一致しがたいものである。その道程に於て究極を既に含むことが出來なかつたなら、そんな道程を經て何時どうして極致に行くことが出來るだらうか？ 極致などといふものは決して無い。それは一つの理想だからである。――しかしそのどんな刻々の道程をとつてみても、たとひそれがコクのないものであつたらうとも極致と相通ずるものを感ずることがあればこそ、不斷に何ものかの道程にある我々も亦その極致を理想することも出來るのではないか。それ故、風流がもしその道程に於て意志的なものであるならばその究極境、極致も亦、意志的なものであるといふ方が正當ではないだらうか。道程と極致とを、肉體と精神とを、生活と藝術とを、表現と內容とを、或は亦平常の談話と改まつた時

の文章とを、そんなものをきつかりと區別しようとするのはたしかに一つの迷妄だと私は思つてゐる。しかし、久米は彼の見地によつて極致と道程とを區別したかのやうに見える。それならば先づそれもいい。それから久米は彼一流の温柔な微笑と一緒に「佐藤君ならばほつておいても風流になる。しかし、みんなさうではないから」とも言つてゐる。私は考へてゐる、風流といふものは本來それを好かないやうな人にとつて、そんなに意志的な努力をしてまで勉めるやうなそんな立派なものだらうか。古人は「世を遁れて風流に遊ぶ」とさへ言つてゐるのである。久米は、彼の豐かな愛嬌から、この際私の名を言つてくれたのだから、私がそれを眞にうけるわけには行かないのだが、私に思ひ出されるのは、あの風流の蠱惑をあのやうに恐怖してそれを郤けるために寧ろ意志的であらうとした谷崎潤一郎の在る事實である。(一言斷つて置くが、私は谷崎をたとひ畏敬するとしても、彼が決して天才的だと思つた事は今までに曾てない。ただ詩人的ではあり、浪曼的ではあり、感覺的ではあり、それでゐてなかなか世俗的に意志的な人物とは思ふ。それ故、久米の「天才流の風流」によつて私は谷崎を思ひ出すのではない)そこで久米も人によつては意志によらざる風流をも認めていいぐらゐの考へはあるかも知れない。それでも結論的に彼は述べてゐる——「僕はどうしても風流の心境のなかに意志の力を感ずる」と。さうして久米は、これはどんな論據或は見方であるか是非に說明を得たいのだが「芭蕉の文學は意志の文學だと思ふ」と斷じてゐる。

德田秋聲は言ふ——「昔の風流は感覺的といふよりも、もつと心的なものだと思ふ。禪修業のやうな努力的な修業であつたと思ふ。今の金持のお茶などとは少し違ふ。」又、「昔のえらい人の風流は、道樂藝ではなかつた。寧ろ東洋流の宗教的なものだつた。」秋聲は私が感覺的と言つた言葉を解して、私がさも富豪のお道樂と風流とを混同してゐるかの如くに思ひ做して、かういふ啓蒙的な說をもつて教を垂れられたのは、失禮ながら私は些か心外に近い氣持だと申し上げたい。私とても若年ではあるけれども、それぐらゐのことがまんざら解らなくて、風流を論じてゐるのではないつもりだつた。私に言はせれば、その意味を強めるために、その點を敢てからも說きたい——風流の徒の生涯はお金持のお茶と全く同じことだ。ただその唯一の相異の點は、俗人がその單に道樂と心得てゐるところの、さうして又實際、言葉本來の深い意味に於ての道樂であるところの心持に、その心身を賭しただけである。即ち俗人は片手間のやうに樂しむ。その心持を風流の徒は生涯の唯一のものとしただけ

ある。このたつた一つの點だけこそ最も重大な相異だつた！
私が風流の徒のその徹底的な價値轉換に對する歎賞はすでにこの文の（一）に於て述べてあるから再説はしない。それほどであるから私は、富豪のお茶と眞の風流とを同一視するやうな馬鹿ではないことを認めて貰ふことにして、さて秋聲は、感覺的といふ私の言ひ方を淺いものとし「もつと心的なもの」と言つてゐる。この點とても私は無論、心的であることは承知の上で、その心的といふのは mind に近いか heart に近いかを言はうとして、それが heart に近いことと思ひ、また風流の徒がその心持を日常生活の目に見、鼻に聞き、手に觸れることが出來るところの一切にまで及ぼしたことを考へて、感覺的といふ言葉を用ひたのである。さうして感覺的といふ言葉が意志的といふこととは相反してゐても、もつと廣い意味の心的なものとは決して何の牴觸をも私は感じないのである。感覺が――いやもつと肉體を聯想させる官能といふ言葉であつてもいい、それが決して心的なものであり得ないと若し誰かが言ふならば、一切の藝術、就中、端的に感覺を通してのみ存在し得るところの美術や音樂上の制作には人の心に訴へるところの傑作は絶無であるべき筈だ！　凡そすべての藝術は、感覺が心的なものである――肉體感が同時に精神感であり得る乃至は精神感が同時に肉體感であり得る事のこの神祕の上に築かれてゐるのである。肉體の恍惚感がやがて精神の恍惚感と交錯することによつてこそ、初めて近代のデカダンの藝術の意味もあつたのである。

私はここで久米の場合にわざと言ひ殘して置いた事「風流が感覺的なものであるならば近代的のデカグンになつて了ふ」といふ久米の説に答へたいのだが、近代的デカダンの藝術を前述のごとく肉體的恍惚感がやがて同時に精神的恍惚感であり得た時の藝術と解した上で――全くこの解釋は私だけのものではない――、風流といふものをも感覺と見るところの私は、所謂近代のデカダンの徒、ボードレル的精神の青白い情熱と言はれてゐるものと風流の徒の心境とに一味の甚だ相近ずるものを感ずるのである。さうして彼を青白い情熱と呼ぶなら、これを假りに眞白い情熱と呼んで見ようかとも思ふ。但、この二者の相異る點は、どこまでもそれが各、東洋文明の所産と西洋文明の所産とだといふことである――かすかな人間の匂と、强烈な人間の匂と。（何を私が、東洋文明といひ又、西洋文明といふか。私は今に章を改めて説く）さうして、デカダンの徒がそこに一種の宗教的暗示を持つてゐるとは言へ結局どこまでも藝術の徒であるやうに、私は風流の徒をも、それが秋聲の言ふが如く「東洋的な宗教的な」何者かであることは認めても、それを「禪修

業のやうな努力的な修業」とは感ぜずに、どこまでも彼等を藝術の徒と信じてゐる。藝術のための藝術の徒とさへ言ひたい。その感覺の陶醉が同時に秋聲の所謂「心的」陶醉を兼ね得たところの藝術の徒であり、その藝術的追求はやがて彼等の生活をまで藝術と一致させた。乃至はさせようとした――それは、しかし、意志によつてではない。陶醉的追求である。私は彼等をそれほどの享樂者と見てゐる。

現に我々が目のあたりに見ることの出來る前述の風流的作者永井荷風、或は風流的靈感をそれほど戰慄した谷崎潤一郎、又今この問題の誘導者となつた室生犀星、或は小田原の閑詩客北原白秋のごとき、それらの人々が風流の眞髓に徹したかどうかは暫くこれを措いて、ともかくも彼等が風流なるものに心を牽かれるらしいことは何人もこれを認めるだらう。更にそれらの人々は我々の時代での感覺的な享樂者的の文藝家であることは誰しも疑はないであらう。してみれば感覺的で享樂的であるこは、風流とは何かしら重大な關係のあることが判ると思ふ。「思ひ出すことなど」の筆者である夏目漱石は一代の文人と呼ぶべき人である。私は彼が一代の小說家であつたかどうかは知らない。しかしたしかに一代の文人であつたことだけは疑はない。その夏目漱石のごときもその初期の作品「虞美人草」「草枕」などを見たならば、この人にも感覺的な一面の甚だあつたことを發見するだらう。更にこの人が明治年間の最大の作者として泉鏡花――稀に見る感覺的な作家――を擧げたことは、漱石自身がどれぐらゐ感覺的な人であつたかを充分立證すると思ふ。ただ私の更に知りたいのは、夏目漱石とともに我々の時代の文人の双璧である幸田露伴であるが、私はこの人の風流のなかには感覺的といふよりもより意志的なものを見出しさうである。この人だけは私の數へやうとする人のうちの唯一の例外である。そのせいであらうか、私はこの人をただ風流の徒とのみは思はずにより哲人的に感ずるのである。さうして風流の徒と東洋的哲人とが微妙に隣り合つてゐる例を見る。

古人芭蕉に就ては私は多くの事實は知らない。又一般にも知られてゐないやうである。この人に就ては私は稿を改めて書いてみる考へもあるから今は細說はしないけれども、私の知つてゐる限りでは彼も亦、その時代の人から或は後世の人から、時に享樂的な性格の人であつたかのやうに見られ、解せられたことを知つてゐる。私は芭蕉の出現があの享樂的な元祿時代であり正風の泉があの世俗的享樂の人工的な談林派の流から深く、實に深く遡つてその澄みきつたところで發見されたのを面白いものに思つてゐる。私は空想してみる――芭蕉にその當時の民衆

の空氣をむしろ早く深く味ひ盡したためであつて、民衆が一世紀を要するところの進展を彼は十年に於て成した。一語でつくせば彼の天才は民衆とともにあつて、ただ民衆の容易に飽かなかつたところのものを彼はその一體によつて味ひ盡して、更により不盡の味に就いたのではないだらうか。彼は決して民衆に對して反抗的であつたのではあるまい。卽ち、彼自らを導いたものは彼の敏感であつて、彼の意志ではあるまい、と。それは芭蕉の爲人を秋霜烈日の人とは思はずに春風駘蕩の人と見ようといふことにもなる。又その文字的制作によつて見るに、久米は「芭蕉の文學は意志の文學だと思ふ」と言つてゐるが、久米のこの說に就ては私は更に說明を聞かない限り、私には全く不可解である。成程、彼の制作は風流的藝術に特有な灰色の世界ではある。然も、その灰色の世界に於て、いかに芭蕉は感覺的であつたか！「何の木の花とは知らず匂哉」「あらたふと青葉若葉の日の光」「山路來て何やらゆかしみれ艸」「五月雨のふりのこしてや光堂」「閑さや岩にしみ入る蟬の聲」「木がらしに岩吹きとがる杉間かな」彼の文字のうち傳唱するに足るものを三四思ひ出してみても私にはそれがすべて甚だしく感覺的なものに感じられる。さうしてそれによつて彼の文字は永久に生きてゐるのを見る。ただその感覺たるや、近代的のものではなく飽くまで風流的のものであることは論ずるまでもない。芭蕉の殘した文字の悉かで唯一つ、「行脚掟」はそれの題目が要求するごとく、意志的と言へば言へない事のない唯一の文字であるが、それとても彼の磨かれた趣味性「嗜み」と見るべきものであつて、それ以上に七面倒な何事でもない。又、藝術的文字としてはその全集中寧ろ無くもがなのものである。ひとり芭蕉とのみ言はず、一般の風流的藝術に於て、その制作が風流的感覺を示すことなく、唯に風流的意企「人生觀の凝立」的意志をのみ現はす時、それは何と俗な、月並的風流であつたらう！　私は斷言する、風流を意志的なものなどと見ることは風流を滅亡させることである！　試みに思へ、風流の徒がその藝術的極致としてその脉動を常に要求するところの氣品を、彼等は彼等の一種テクニカルな用法で「にほひ」と呼ぶではないか！

秋聲は芭蕉に就て言ふ――「芭蕉は努力をしてゐる」と。言ふまでもない事だ。人誰か努力せさらんやだ。生きるといふことそのものが既に一つの努力ではないか。しかもすべての傑出した人人はすべての努力をさへ享樂するのである。努力の伴はない享樂をする者はただ蕩兒だけだ！　享樂の伴はない努力をする者はただ奴隷だけだ！　芭蕉は蕩兒でもなければ奴隷でもない。ただ彼は偉大な詩人だ。詩人が詩のためにする努力、人

間が生のためにする努力、それは彼等が偉大であればあるほど事業と一致してゐる。

久米、徳田兩家の外に久保田萬太郎は風流を說いて「原始精神に眼ざめようとする努力」と言ひ加能作次郎は「或る意味の信頼に安住しようとする努力」とのみ說いてゐる。二家はあまりに語を惜まれたが爲めに、二家自身には充分な說明であつたかも知れないが、二家とは別人である私には不立文字のやうに全く摸糊として、捕捉し難い。が、どうやら二家も亦、風流といふものを何か宗教的意志の所産として觀てゐられるかのやうにだけは私にも感ぜられるのである。

諸家のほんの片鱗に就て、私がこのやうに語を費して諸家を駁することの急なのを、諸家は寬恕されたい。さうして、私が若し諸家の說を正しく解する力がなかつたのならば、私が諸家と說を異にした不幸のためにこの說を細說したのだからして、その私のために諸家は折角の閑を惜まれることなく、私の蒙を啓くことに吝でないであらうことを望む。實際、「風流」を明確に正當に理解することは我々の民俗の藝術の大半を解說することであり、國民性を闡明するに甚だ重要な一眼目であることに氣づかれたならば、前述の諸家であると無いとに不拘、この問題を追求することは決して閑事業ではないと私は信ずる。批評といふものは必ずしも毎月の創作を評するだけのものでもなければ、また舶載の洋書と同じ題目をのみ採ふべきものとも限らないだらうから。——そこで、この席上の四家であるが、この諸家は風流といふものを甚だ面倒なもののやうに觀察して居られるかのやうに見える。思ひ切つて妄評を逞しくするなら、諸家はその本質に就ては一向御承知ないことをひどく投撒して居られるかのやうに見える。趣味の人としてただ傳統的に「風流」を前後もなく尊敬する一般的迷妄であると私は考へはしない——秋聲も富豪のお茶などとは違ふと斷じられた程なのだから。しかし恐らくは、あまりに強くその情感に訴へられるがままに、それを理性の上で是が非でも高價に認めむとする性急な錯誤であらうか、それとももつと外のものであるか、ともかくも諸家は料らずも「風流意志說」といふ途方もない反語によつて、諸家が相當に愛して居られるらしい「風流」を思ひ切つて揶揄したやうな結果になつてゐる。實際私には「風流意志說」は愉快な程に思ひがけない逆說であつた！　多謝す、諸家。諸家は私にお誂へ向きの論題を提供された。

まあ諸家と一緒に、風流の徒を宗教的なものと見てみよう。然らば、彼等は何故にただ宗教的などではなく宗教そのものにならなかつたのだ。また意志的なものと見てみよう。彼等、

故に克己派の哲人にならなかつたのだ。なぜそれだけの意志を發揮しなかつたのだ。彼等が果して意志的、宗教的なものであるならば、彼等がもつと確實に安住していい境地は外にいくらでもあつたのだ。彼等は何故に、樹下石上に端座してその指の爪が組合して掌のただなかを突拔けるまでの苦行者に伍しなかつたのだ！　なぜ「清貧」をその花嫁に擇んでその腰に繩の帶を卷くところの聖フランシスの徒に雜らなかつたのだ。或はまた樽のなかに横臥して日の光より外に何ものをも求めなかつた犬的哲人の教を請はなかつたのだ。生憎と彼等がそんなものを創造するやうな力がなかつたからと言はなければなるまい。それなら何故、ほんの手近かにあつて彼等のものと甚だ相似通ふた佛教僧にならなかつたのだ。さうして何が故に徒らに興を追ふて藝術に感懷を托したのだ。もし彼等を意志的なものとするならば、何といふ不徹底な彼等の意志だらう。何といふ淺はかな彼等の努力だらう。もしそれが果して意志的なものであつたといふならば、私はそれに蠱惑を感ずるどころではない。その以前に私は彼等を卑屈な不徹底漢とし、淺薄な思想家として卑しむの念に堪へないであらう！　さうして彼等が爲し得たところの藝術を淺はかな中途半端の生んだ醜惡な畸形兒として唾棄するだらう。――もうこれ以上に一分間も考察することなしに唾棄するだらう。

然し私はもう一度考へなければならない。彼等を意志的なものとして認めたのは私ではない。私は私で彼等を、徹頭徹尾、一個の藝術的享樂者として認めたのだ。さうして私は主張する――彼等は別に溯つて來る所があつて、即ちたつた一つの眞實な感覺によつて藝術的陶醉の全く別個の新天地を、苦行者隱者僧侶その他の外に、嚴然として創出したのである、それこそ目ざましい徹底的態度で。

さうして人々が宗教的苦行だと思ひ、意志的練磨だと早合點をするのもまんざら無理でもないやうな珍奇な詩的耽美生活が始まつた。

それらの秘密は何もかも、たつた一つの「あれ」のなかにあるのだ！　さうしてその「あれ」といふのは、それこそ不思議なことに全く人間の意志などといふものがそのなかに微塵もあつてはならない「或るもの」であつた。――私は詭辯を樂しむのではない。反語を弄ぶのではない。感ずるままの眞實を出來るだけ素直に述べてゐるだけである。今にして考へて見ると、「風流は意志的」と聞いた瞬間に私がびつくりしたのも無理はない――私の心の底では「こんな思想」があの時混沌として眠つてゐたのだから。

さあ、その私の「こんな思想」といふものを、私はこれから說かなければならない。

## 三　本　題

私は既に風流とは「もののあはれ」であり「さびしをり」であり、乃至は「もののあはれ」「さびしをり」の日常生活化であり　さうしてその中心をなすところのものは學者の所謂「無常感」だと斷定した。「もののあはれ」と「さびしをり」とを一口に同じものと言ふことは出來ない。その言葉が違つてゐるやうに、その內容、精神も亦、多少の相違があることは論ずるまでもない。さうしてそれが一たいどう異つてゐるかといふことに就ては自づとそれを說く折が後にあるつもりである。しかし、たとひそれがどう違つてゐても結局は、同一の流れが、流れゆくがままに自づとその岸邊を變へたまでの二つの曲折であると私は思つてゐる。これも私の斷定である。さうしてこの斷案はさうはつきり言ひ切るのはどうも私の獨斷であるかも知れない——私はその點を具さに考へないではない。然も、どう考へても私の頭では別にこれ以上の考案も出來なければ、またこの自分の斷案に就ては自分では何の疑義をも抱かない。だから、私は私のこの斷案に基いて私の說を樹立するつもりである。

どんな說であらうともその根柢であるところのものは、結局は論者の獨斷なのではないだらうか。その獨斷が人々によつて同感される場合には、それを人々は獨創的だと呼んでゐる。—私の斷案が果して獨創的と呼んで貰へるかどうか、それはおぼつかない。ただ私としては、どうしても自分でかうとより外には信じられないその點に、基礎を置くより外には方法はない。そこで私の斷案に贊成してくれる人、或はともかくも先づ矛盾が生じないまでは認めてやらうといふ人にだけ、私はしばらく私の說を述べようと思ふ。私の說のこの根本を始めつから認めない人は、私の獨斷に代ふるに、その人が信ずるところの風流の根柢を先づ擧げて、それによつて樹立した風流論を一とほり私に聞かせた上で、私の斷案の滅茶なことを敎へてもらふことが出來れば幸である。——私は先づこれだけのことを斷つて置きたい。——それからもう一つ。私の說が果して古人が考へたとほりの風流の解釋になつてゐるかどうか、私はそんなことは自ら知らない。「古來の正しい風流の心境」と言つてみたところで、古人を地下に呼び起して古人の口づからこれを聞くことが出來ない以上は、誰が「古來の正しい風流の心境」などを知ることが出來るものか。ただ我々に出來ることは、我々の心に多少とも生きてゐるところの風流的感懷に就て、自らこれを檢ね

自らこれを究めてそれが合點をうなづくまで、自ら說いて自ら滿足するだけの事なのである。だから、私のなかに風流の感懷が全くなかつたとしたら、私の風流觀はきつと出鱈目なものになるだらう。――私は私の說を初めから會得すまいと用意をしてゐる人々の爲めには、いつも何事をも說くつもりはない。從つて私は誰に向つても私の說に對して同感を强要しはしない。私はただ、私が私の說を持することが、私として自然であることを諸君子に知つて貰ふことと、もう一つには私のとは異にする諸君子の說が、私にとつて(諸君子にとつてではない!)反對であることが甚だ自然だといふことが、私に理解できればいいのである。又たとひその說が私のものとどんなに反對であらうとも、それが首尾あるものである以上、私は同感しないまでもそれを是非する考へはない。各人は各人の見地から物を見さへすればそれでいいのだ――私はこのとほり個人的である。

私は自分の裄と丈とに合せただけだ。

そこで私は一つの感覺であるところの「無常感」を風流の根底だとも言つた。その「無常感」とは果して何であるか。

「無常感」は佛敎の渡來と一緒に來た。そのしるしには「萬葉集」のなかには「無常感」はないと一般の文學史家は言つてゐる。この定說に對して私は別に異議はない。ただ、あの宗敎として最も哲學的背景の多い佛敎が、我々の民族の間に傳播してそれが一向哲學的には受け入れられずに――乃至、受け入れられるに前だつて、「無常感」といふ一種の感覺――或は情操だけが先づ形成したことを考へることの點が、我々の民族性を見る上に甚だ興味のあることを思ふのである。實際、我々の民俗には思索的な才能乃至嗜好といふものは甚だ少ない。思索癖ある人を見ては理窟つぽいと言つてこれを卑しむ國柄である。思想もなければ哲學もない民族であることは古からだつたと見える。それにしてもその「無常感」は第一に、一たいどこから、民俗のどの階級から發生しただらう。蓋し、「櫻かざして今日も遊び」暮して、遊びくたびれた大宮人の歡樂の果ての哀愁ではないだらうか。實際、「もののあはれ」といふ詩境を發見したのは古今集の大宮人たちであつた。

それが佛敎といふ厭世的宗敎から來た一つの感覺或は情操である以上、それを中軸として組立てられた世界である「風流」のなかに、宗敎的な匂ひがあることはあまりに當然なことである。私の興味を持つ點は、そんなところにはない。豆腐が豆から製出されたことに氣づくものには、豆腐が豆の味を持つてゐたからといつてそれを少しも問題にはしないと同じことだ。私にとつてこの問題の面白味は專ら、宗敎であり同時に哲學であ

るところのものが、ただ感覺として情操として感得され、さうしてそれがやがて「もののあはれ」といふ藝術境に變つて來たところにだけある。

それにしても「無常感」といふものは、その正體は何か？

一體、人間は、これを民族的に見ても、個人的に見ても、多少とももの を考へることが出來るやうな時代——ものごころが生じてあまりに多くの年月を要するまでもなく——少年時代にもなつて一度、己といふものの在ることに氣づく時代になりさへすれば、その己であり己と同じである存在「人間」の外にさまざまな他の存在「自然」があることに氣がつかずにはゐられない。さうして自然對人間といふことに就て、必ずや驚異の目を見張つたであらう。すでにその驚異は一變してやがて皆一様に、自然の悠久無限なことと然も人間自身の須臾にして微小なことに對する心持に變る。無限大を感じた直後に、それに對照して無限小に近いものを見る。さうしてその無限小とまで思へるものは、今まで可なりに大きなものと心得てゐた己自身であつたことに氣がつく。——これを智慧の初めとも言はう。靈の目ざめとも言はう。——諸君子は、身體なり精神なりのひどく衰へてゐる時の或る瞬間に、もしや己の手や頭などの如き或る部分が、遂に無限に擴大したかと思ふと、見る見るうちにそれが一時に芥子粒程に縮まるかのやうな一種不氣味な恐れに襲はれた覺えはなかつたか。私は、屢々そんな現象を感じた事がある。さうして私はそれをひとりで勝手に解釋した——これこそは、我々の祖先、乃至は我々自身が自分で氣づかなかつたほど稚かつた頃に、無意識的に自然の偉大と人間の微小とを感得したその一瞬間の驚きが、今に我々の心の奥底にそれほど深く刻まれてゐて、我々がぼんやりとした折ふしに我知らず第一に思ひ出されることがそれなのではないだらうか。あの不氣味に大きな自分の掌や、不氣味に消えてなくなりさうになる自分の掌は、宇宙と人間との象徴ではないだらうか——しかし、こんな解釋はほんの餘談である。ただ、私は自然對人間といふことに氣づいた時の我々人間の驚異がそれほどまでに深かつたであらうことだけは疑はないのである。實際、人間の一切の文明はそこに發してゐると言つて見ても、あまりにとりとめがないだけで、しかし別に間違ひではない。就中、人間のあらゆる宗教、あらゆる哲學、あらゆる藝術こそは、その起源を一さう直接に、人間的自然の驚異のなかに發してゐる。自然の無限大に對する人間の微小といふこの悲痛な事實が人間を刺戟したのである。ただ瞬時にすぎない自己に氣づいた時、或る者は敢然としてこの自然的悠久に對して外に別個の人間的悠久——人間的努

力の不滅なる何物かを樹立しようと企てた。或者はまた何等かの法則の工夫によつて人間そのものも亦自然とともに悠久にあり得るかも知れないと考へてその方則を探究した。しかし或る者はまた、我々自身であるところの人間といふ微小な存在がこの須臾な存在を遂げんが爲めに支拂ふところの苦惱が、この微小とこの須臾とに對してあまりに高價にすぎることを感じて、我々の生に對する本能的執着を自然が人間に與へた一つの欺謀であるとして、その生を持續せんとする努力そのものが既に一つの自然に對する拜跪であると觀じた末に、寧ろ、決然としてのこの存在を拒否しようと志した。すべての哲學史、すべての宗教史はこれらの事實の列擧に別ならない。藝術は藝術で別に一つの工夫をもつてたとひそれが瞬間であらうとも瞬間のなかに悠久と對抗することの出來るやうな特別に快美な世界を樹立しようとも企てた。その方法が何であり、その方向が何であつても彼等はともかくも、彼等の精根のつゞく限りを盡した。人間の存在に就て光明的な努力をしたところの人はもとより、懐疑的否定的な人々でさへもやはり、各その人間的意志を發揮したのである。人間的意志の讃美に對して、たしかに人間的意志の讃美を否定するところの宗教も哲學もあつた。しかも、それが宗教であり哲學である限りに於ては、人間的意志の讃美者とともに、その積極的な否定者も亦たしかに意志的であつた前者の意志を假りに十(プラス)の力に働いた人間的意志といふならば後者のものを一(マイナス)の力に働いた人間的意志とも言ひ得るであらう。人間は、一度、自然に對して人間自身の微小なことに氣づくや否や、その悲痛な事實から脫脚しようとして、それぞれにこのやうな意志を發揮したのである。たとへば破ることの出來ない檻のなかに入れられた猛獸のやうに。見苦しいと言へば見苦しい、しかし、壯烈と言へば壯烈なこのやうな力をもつて戰つたのである。——それが何の爲めであるか私は知らない。ただ、我々はその猛獸と同じく生きたいといふ慾望を持つてゐるからである。一(マイナス)の力に働いた意志とてもやはり生きてゐるといふ心持を味はんが爲めの一つの手段であつたともいふことさへ出來る。さうしてそれらの力は我々の生がそのやうに限られたものであるといふことを熟知した瞬間に於て、勃然として發揮されたことは檻のなかの猛獸とともに至極尤もなことである。

しかも、人間對自然といふこの精神的の目ざめが我々の民俗のなかに現はれた時に、そこに生れ出たところのものは、たゞた一つの所謂「無常感」だけであつた。さうして「無常感」なるものは、即ち、人間の須臾微小と自然の悠久無限とを認めて感ずるといふだけのその感覺乃至は情操たけにしかすぎないの

である。それは決して努力の末に掩覩して得たところの何物でもない。寧ろ、それを根本にしてすべての人々が意志的な壯烈な苦鬪をしたその根本そのものである。何の苦もなくただ民族が少年或は青年期に近くなりさへすれば自づと氣がつかずにはゐられないだけの感覺乃至は情操だけなのである。さうしてそれがやがて、我々以外の他の民族のなかでは、それこそ種々雜多　宗教や哲學やその他の生活方則の苦悶を誘引したところの原形的感覺そのもの、或はそのものの極く言ふにも足りないほどの變形にしかすぎないのである。彼等他の民族のなかにあつてはそれだけの苦悶的動作と絶叫とを叫び起したところのその同じ實感が、我々の民族の間では、それが成育すれば宗教にでも哲學にでもなるところの嬰兒が、生れ出ると直ぐに、それ自身が一個の美的なものとなつて、やがて「もののあはれ」といふ藝術境――瞬間と永久とを同一化しようとするところの微妙な一法則の境地――を苦もなく築き上げたのである。我は「苦もなく」といふ。さうだ、その間にそれが藝術になるまでに、或は哲學として或は宗教として、或は藝術の素地であるところの人生それ自身に於て、意志的に或は理性的に、十（プラス）の方向にであらうと一（マイナス）の方向にであらうと、どんな苦悶をしたといふ事實が我々の民族の文明史上に殘れてあるか。また「もののあはれ」の藝術境が始めて開拓された時代よりも以前に、或は以後に、民族的の靈の目ざめとして目すべきどんな時代があるか。奈良朝の文化は、「萬葉集」の藝術とともに、正しく未だ靈の目さめを知らなかつたころの少年のやうな、それほどに人間至上的な無邪氣な潑溂な文化である。さうしてやがておもむろに靈の目ざめを豫覺させてはゐる。ただ、しかし、ただそれだけだ。またそれだけであるが爲めにこそ一さう尊くもある。

私は信じてゐるが「もののあはれ」を感じ出したところの詩人たちは、正しく靈の目ざめであつた。しかも彼等はそれに就て、殆んど些も苦しむことなしに、ただ一つの藝術境を開拓しただけだつた。あつけないとも言へる。奇蹟的だとも言へる。さうしてそれは佛教的な影響であつたかも知れないが、私はより多くそれを偶然的なことだと言ひたいやうな氣がする。私の[illegible]るところを以てすれば、「古今集」の詩人たちは全く、或る意味での頽廢者たちであつたのだ。彼等はその歡樂の果で疲れてゐたのである。さうして彼等はただの感傷家だつた。然も彼等は實は豐かな天分を抱懷してゐた。

一體、生のあまりにはげしい活動は、その生が不幸でなかつた場合でさへ、我々に屢々死のことを考へさせる。しかも我々は死を樂しく考へるほど疲れてゐる瞬時に於てさへも、生きて

ゐる限りに於てはやはり生の本能に執してゐる。さうして死を考へてゐることによつて生きてゐることを享樂してゐるといふ心理さへもあり得る。ただその場合に於ける生の執着も、生の享樂も、それが生としてはいかにも最小限度的なものなのである。さうして「もののあはれ」と言ひ「無常感」といふのは、實は、この最小限度に於ての生の執着と生の享樂とに外ならないのである。活動によつて疲勞した人が無意識的に靜止を思ふ瞬間には、彼の人間的意志は影のやうに淡くなり、さうしてさういふ人々の目に現はれ出て來るところの自然の悠久は、我々が遂に抱括されるであらうところの最後の故郷へのノスタルジヤの如き哀しい愛情として現はれて來る。しかし彼が生きてゐる限りに於て彼はやはり心から死を欲したわけではない。――人間には死を欲するといふやうなそんな本能は何時も少しも與へられてはゐない。與へられてゐるものは生の本能だけである。死を欲するが如き心持を生じた時とても、それはただ生の本能が疲れてゐたか痛んでゐたか狂つてゐたかだけの事なのである。すべての自殺者はただ不滿な生に刺戟されて生の本能を狂的に發揮しただけなのである。況んや、「古今集」の大宮人たちは生の不滿から死を欲したのではなく、却つて幸福な生の過剩的疲勞からであつてみれば、その安靜に對する希求は寧ろ生の喜びを新たにするためのものとしてであつた筈である。しかも、彼が一度自然の悠久と自己の須臾とに氣がついて見ると、彼は思ひがけない愕然を以て自己を省みざるを得なかつた。然るに影の如く生の力の薄れてゐたこの滿足的疲勞の人は、その愕然のうちにも決してそれほどの生の力を發揮することが出來なかつた。またしなかつた。彼等は、その悠久無限のものに氣がつくや否や、彼等の幸福がそれらの悠久なものと終始することが到底不可能なのだといふ一つの悲愁だけは感じた。しかし生の力の薄れてゐる彼等にはその悲愁とて亦淡いものであつた。さうしてこの悲愁は、決してそれ以上に深められも高められもしなかつた。佛教的結論がこの時の彼等を救つたかも知れない――せいぜいその結論だけが。しかし私は、彼等を救つたものはさういふ宗教ではなくて、寧ろ彼等自身の豐饒な詩人的天分ではなかつたかと思ふ。何故かとならば、彼等はその淡い、しかし根ざしの深いところの悲愁のなかに、彼等の新詩境を先づ發見した。詩人たちは新詩境を發見したその喜び――藝術的陶醉によつて、彼が發見したところの人間對自然の悲しい驚異をわけなく解決してしまつたのである。――所謂「無常感」といふ言葉を、私はわざわざ「無常美感」と呼びたいといふのはこのためである。悲哀の享樂。厭世の享樂。「もののあはれ」の

詩情は何も事新らしく說くまでもなく頽廢的なものである。

この頽廢的詩情が、それにも拘はらず、どうしていつまでも我々の心にふれるか。それは我々がその頽廢的詩情によつて年久しく養はれて來たからであるに違ひはない。それならば何故に、この詩情はそれが民族的詩魂ともなるまでにそれほど年久しく魅力を失はなかつたか。――全く、今でもまだ我々の心に折ふし潑剌として生きてゐることを感ずるではないか。これは正しく考察していい點である。さうして私はそのなかに相當に正當な理由を見出すのである

「もののあはれ」の詩情は、第一にはその題目を人間の疑の目さめとも呼ふべき重大な、さうしてそれ故に永久に新らしい人間的事件の中心にその根を下ろしてゐる。しかもその中心へ殆んどぢかに生へてゐると言つていい。第二には、この甚だ一般人類的でしかも永久的であるところの題目に對して、その問題を發見して提供すると同時に、それに對して一つの解決をさへ與へてゐるのである。問題を提供すると同時にその解決を提へたと言つても過言ではない。――さうして我々は、折ふしにはまことにこの解決によつて充分滿足するところの自分自身を見出す。「もののあはれ」は果してそれにどんな解決を下してゐるだらうか。

人間が自己を自然に對抗させて、時には自然を征服しようとさへ考へて、敢然と決然とさまざまな方法を講じて、しかもそれの果に益々苦悶を高めたかのやうにさへ見えるところのそれぞれの民族を我々は知つてゐる。然も、我々の民族の祖先が、この同じ問題に直接して期せずして捉へ得たところの、或る新らしい一つの解決は、恐らくは他の民族――殊に西歐の他の民族にとつては夢想だにもしなかつたものであらうと私は思ふ。――外でもない。我々の祖先はつひ（ほんのつひ―）我々人間をも自然の一部分として感じたのだ。自然に對抗する人間を感じたのではない。自然に拘攝される人間を感じたのだ、自然の子としての人間を素直に認めた。さうしてそれだけの事だつた。「何の事だ！」笑つてはいけない。が然し、他の民族のあの檻に囚へられた猛獸のやうな奮闘とこれとを思ひ合す時、自づと笑ひを催すほど、氣がついてみればまるで「コロンブスの卵」のやうな子供らしい、直觀的な、卽興的な、けれどもどう考へたつて本當には相違ないところの解決であつたではないか―

然し、（この然しは甚だ重大なそれである。赤のインキで劃られない程である）ここで我々が決して忘れてはならない事には、我々が自然の一部分として我々自身を感じ、それによつて自然對人間の苦悶が甚だしく荷が輕くなるのには、その爲めに

我々は我々人間自身の意志を最小限度にまで卑下してしまつてゐるのである―

若し、燃え盛るやうな人間意志にとつてはそれを最小限度のものに限定する爲めには、確に一種の内面的葛藤を要するだらう。一(マイナス)に働くところの意志を充分に發揮しなければならないだらう。然り、佛教哲學の如きは、自己を最小限度に限定するためにはあれほど廣大な哲學を必要としたのである。人間的意志放擲も亦一つの人間的意志活動である。ただ、もともと燃え盛つてゐないところの人間的意志に於ては、換言すればそれが最初から最小限度的であるもののために、既にそれ以上の何の意志をも加へる要はない筈である。さうして我々の祖先は――尠くとも「もののあはれ」の詩人たちは、意志放擲的意志、一(マイナス)的意志の把持によつて彼等特有の解決を贏(かち)得たのではなく、寧ろ、飽くまでも自然的に生の力の淡くなつてゐるその一刻に於て、偶然にそれを捉へ來つたかのやうに私には見える――意志放擲といふよりもそれは意志脱落の瞬間であつたといふ方がもつと適切であらう。彼等がその解決を得るために努力をした跡は一向に認め得ないばかりか却つてその反證だけを私は發見することが出來る。即ちこのやうにして得來つた詩情であればこそ、それは世界に比類ないほどの短小な詩形に於てのみ成立したのだ。ケーベル博士は我々の民俗の詩歌は、西歐のそれにあつては題目だけにしかなり得ないところのものだといふ意味を述べてゐるのは、達見である。事實、われわれの民族は他の民族がそこから發足して哲學なり宗教なり藝術なりを形成したその地點から一向發足することなしに、即ち主題そのものだけですでにそれ以上發足する餘地のないやうな境地を得たのであつた。

我々の生の力が薄れ、それが自づと最小限度になるといふこと、即ち人間的意志脱落といふやうな状態は、生きてゐる人間にとつて決しさう長い時間に渉り得るものではない。これが即ち我々の民俗の詩歌があれほど短小で事が足りたことの唯一の理由である。「萬葉集」時代に於ては存在し得たところの一層長い詩形は「もののあはれ」が民族的詩情になるや否や全く影を潜めてしまつたのもこの故である。極く瞬間的な感覺に對するその次の瞬間の咏歎であるが故に「もののはあれ」の詩情は確に長い詩形に盛らるべき性質のものではあり得なかつた。(これを假りに、外國の長篇小說と比較して見るがいゝ―)しかも、「もものあはれ」の詩情はもう・・さうその進展を示して松尾芭蕉等の詩歌になつた時には、それでなくてさへも短かかつた詩形がそれの半分で事足りるまでになつた。――進步すればするほど民俗的藝術の様式が單純になるどいふ例は、まことに奇異に近

い現象ではないか。然も、具さに見ればこの奇異な現象さへ全く當然であることに氣がつくのである。かくの如く沈默に近い文學また虛無に近い美術が厳然として成立したことの秘密は、その根柢を存すところの「無常感」なるものが人間の最小限度的活動であつて、全く有と無との境に存在する一刹那の感覺であつたことを知れば何の不思議もないのである。

「もののあはれ」の詩情が三十一文字を要したのは、それが單に一刹那の感覺に終始し得ずして、その感覺の次に現はれたところの感慨――しかもただの感傷であつたものをまでそのなかにとり入れたことにある。さうして芭蕉の藝術に到つては無常感といふ感傷的咏歎などは既に去つてしまつて、ただ自己が最小限度に縮んでゐる瞬間の感覺そのものだけを、一さう端的に投げ出したのである。それは風の音、水のせせらぎも、鳥の叫びや、或は咲く花のやうに、自然そのものである。風が枝を得て鳴るごとく、自然そのものが人を得て叫び得たごとくであつた。それほど端的で、故にそれほど象徴的であつた。これは風流的文學に於て全く飛躍的な進歩であつた。何となれば、「もののあはれ」にあつては咏歎的であつたが爲めに、結局主觀的であり、主觀的であつたがために自然よりも多く人間を感じさせたところの詩境は、咏歎を去つた――否、咏歎にまで及ぶほどの時間をさへ含まない程の刹那的なものになつたが爲めに、更に一歩を深めて主觀界と客觀界――即ち人間そのものと自然とがいみじく一致したその瞬間を捕捉し得て、そこに自然のなかに抱擁され切つてゐる時の人間の相を的確に描出した。人間にして人間に非ず、全く宇宙的一存在としての人間境がそこに出現した。

「もののあはれ」のなかには、最小限度に於ける人間意志をまだその底にひそめてゐた。何となれば、それは自然と終始し得ないことの、自然と合致し得られないことの咏歎であつた。換言すれば最小限度に於ての生の執着の現れであつた。さうしてそれが最小限度であつたが爲めに、彼等の感受し得た自然對人間の母子的關係には、それほどの矛盾を生じはしなかつたとは言へ、自然によつて抱擁し切られた人間の相そのものとしては一歩遠いところにあつた。少くともその母子關係は懷にある嬰兒と母とのやうなものではなく、むづかつてゐる童兒と母とのやうなものであつた。さうしてそれが爲めに折角彼等が直感的に(論證によつてではない)、感覺的に(意志的にではない)、即興的に(苦行的にではない)感受(悟得ではない)したところの解決は、彼等の主觀によつて淺くされてゐた。もう一歩、ほんのもう一歩、この咏歎的主觀――人間的意志を去つた方が更に

本當の意志脱落であつた。それを完成したところの人が松尾芭蕉であつた。事實、芭蕉の詩境にあつては、人間と自然とは苦もなく溶け合つた。人間的意志が、否、人間的生存そのものが最小限度に表現されたが爲めに外ならない。さうしてこの風流的境地に於ては何人も、――美術は斯く措くとして風流的文學、即ち極度に於ての卽興的感覺詩に於ては、何人も芭蕉に追從し得る者はなかつた。例へば與謝蕪村を見よう。

蕪村は飽くまでも風流な人であつた。然も、惜むべし彼の風流は芭蕉のものに比べてはどうしても「風流の爲めの風流」であるかのやうな何物かがある。ありすぎる。何を私は「風流の爲めの風流」と呼ぶか。曰く、風流が蕪村にあつては直接自然の子ではなくなつて、別に蕪村によつて築かれたところの別個の風流世界があつた。蕪村の藝術はその彼が別個の風流世界に於てのものであり、從つて自然にとつては子ではなく孫になつてしまつてゐるやうに私には見える。蕪村の詩にはあまりに風流的回顧や、風流的空想や、風流的詠歎や、風流的力說が過剩である。「花七日もの食はずとも書畫の會」言はば蕪村のなかには刹那の感覺以外のもの、風流的意志があまりに多すぎたのである。蕪村は能才であつた。それ故に風流の見解に就て決して誤つてはゐないとは言へ、しかもその正しく捕捉し得たところの見解を以てしても、その間に風流なるものを自然に對抗――と言つては言ひすぎるが尠くとも別に自然界以外に風流界なるものがあるかのやうな意企が姿體をなしてかすかに感ぜられるのである。危い哉、蕪村は一步を誤つたならば、終に俗人の風流、野狐の風流、富豪のお茶に墮するところであつた！ただよくこれを救つたところのものは、蕪村が風流的意企に相比敵するだけの風流的感覺を風流的生活を所持してゐたからである。風流的感覺なくして風流的意企を持つ！風流にとつては思つてみただけでも怖ろしい事だ。事實、所謂月並の風流なるものは、意企によつて作られた風流的主義であつた。さうして風流はその月並のために滅びた。――風流は意志的なものなどといふ、新潮合評會席上の諸家の說が、どうかそんな俗流のものと五十步百步で無ければいいが、眞の風流は、私の考へる風流は、風流的意企といふ人間意志をさへ旣に嫌ふのだ。

然らば、私の考へる眞の「風流」とは何か。私はもう今となれば、少しも遲疑することなく斷言することが出來る。風流の精神とは正に、人間的意志が小さければ小さい程いいのだ。即ち人間としての意志が極度に於て最小限度であることとである。この語感に於て、現代よりもむかし、小說作者乃至小說よりも詩人乃至詩、會合よりもひとりの方、また談論風發よりも拈華微

笑のだが――以上すべての後者が以上すべての前者よりも風流だと思へるのは、正に、後者が前者よりも人間的意志がより一さう少なくて事足りるからに外ならない。人間意志の紛糾を極めた葛藤を凝視しそれを組み立てたところに意味のある近代小說を、假りに風流的藝術家に示して、これが藝術の上乘だと說いたとしたら、彼等は恐らくその刹那に卒倒してしまふかも知れたい。バルザックと芭蕉とこの二人は文學の兩極である。

風流的藝術が、文學に於ては最も沈默に近い即興詩をその主要な樣式に擇び、美術に於ては最も虛無に近い單色繪をその主要な手法としたのは、まことに偶然ではなかつた。しかも全然の沈默に非ず、全然の虛無に非ず。どこまでも表現を必要とし――換言すれば藝術として終始したのは何故であるか。或る種の厭世的宗教、或る種の否定的哲學と甚だ相似通ふてゐながら、然も風流がどこまでも藝術であつてその以外の何物でもないのは何故であるか。これは全く考察を要求するところの事實であつて、しかしわけもなく解釋のつくことである。といふのは風流はそれらの厭世的宗教や否定的哲學と甚だ相似ながら、然も、最も重要な一點に於て最も重大に相異してゐるからである。

即ち、風流は決して我々の生を根柢から否定し拒絕したのではなく、ただ生を最小限度的なものには感じはしたけれども、風流の徒は生を拒否するどころか、寧ろ、生を享樂したのだ――最小限度に於ての生でこそはあつたけれども。もう一度換言すれば、彼等は自然のなかに抱かれた人間としては、人間が生きて甲斐あることを痛感したのである。――私が面白い情熱と呼ばうといふのはこの爲めである。彼等は人間的意志が構成した人間社會をこそ厭ふの念はあつたかも知れないが、人間そのものを厭ひはしなかつた。最小限度として感得したところの最小限度的人間界に於ては彼等は人間そのものを享樂したのである。さればこそ沈默に近いだけで沈默そのものではなく、虛無そのものではない世界――自然に促された人間のものである限りは、それが世俗的に有意義であらうとも無意義であらうとも、喜怒哀樂微笑號泣の何の聲であらうとも、彼等は喜んでこれを發した。自然に促された人間のものである限りは、それが世俗的に美麗であらうとも醜惡であらうとも、草木魚蟲鳥獸山川の何の形であらうとも、彼等は喜んでこれを眺めた。その彼等が發した聲、その彼等が眺めたところのものを、彼等は喜んでこれを傳へた。彼等が遺した制作がその證據物件だ――生の享樂に非ずして誰がそんなことをするものか。

彼等の喜びは人間自身の意志によつて光るのではなく、自然に反映して始めて耀いた。私が月光的恍惚と呼ぶのはこの爲

である。

彼等の美と眞と善との感じ方はまた當然、どこまでも人間的意志の約束を去つてゐることを好しとした。人間的意志の約束を去つてしかし自然と融合することによつて解放された已を樂しみ、またさういふ已を持つてゐた他の人たちが興い到るかままに自づと得たところの諸の制作を、彼等は自然に對するごとく愛好した。人間的意志ののさばつてゐないものを見て氣品ありと歡呼した。それを認めるのには「鼻」が入ると見えて、その氣品のことを「にほひ」と呼んでゐる。「心眼」といふ言葉がある――私は「心鼻」といふ文字を作つてもいいだらう。精神が感覺に到り、感覺が精神に到り得ることを「心眼」といふ文字をつくつた人も、「にほひ」といふ語を使つた人も、きつと承知してゐたことだらう！　古人なる哉。

彼等風流の徒が追求してやまなかつたところの淸閑といふのも亦要するに人間的意志の諸の約束――彼等の目からは淺小と感ぜられたところの人間的意志の約束から解放された時間、それによつて自然と人間とが融合された時間、その時間を指したのである。人間的意志ののさばり出ることを彼等はどんなに厭ふたか。彼等とても必ずしも錦繡を愛しなかつたのではあるまい。また必ずしも玉樓を憎んだのではあるまい。しかしより多くそれを大儀なものに思つたのであらう。その快樂よりもそれに伴ふ當然の煩悶を憂しと感じたであらう。桁の低いところの暮しが氣樂だつたのだ。何もかも人間意志的には最小限度であつたのだ。然も根本に於て享樂者であつた彼等は人間そのものを全然無くすることはどうしても嫌だつたのだ。さればこそどんなに手輕な形ででも藝術が彼等に必要であり、飲むにはまた淸泉の外にいくらか人間的な苦若があり、語るにはまた花鳥風月の外に彼等自身と同じ形で同じ心の友を求めないでなかつた。「一盞の酒、一二の良書、會心の友」その外に彼等は「無限の自然」をさへ、然もその目前と胸中とに持つてゐたではないか。この豐饒な彼等の富を見よ！　彼等はもつと澤山の塵埃的贅澤をしたかつたところを、やつときりつめてこれだけで我慢をしたらうといふか。さうしてそこが猥志的だとでもいふのか。かういふ人に明窓を開いて皎たる寒月を見せたらぶる／＼とふるへてから「宗匠、風流とは醫者と坊主の發明したかぜを引く機械(からくり)でがすか――何れは特許權ものでせうな」。――一笑。

彼等風流の徒――本當の風流の徒は彼等自らその生活を何かえらい事のやうに考へてゐただらうか。もしさうだとすると彼等も亦、彼等の人間的意志によつて、彼等自身が厭ふたところの俗に墮ちなければなるまい。私は彼等がただ彼等の好みに

終始したものと信じてゐる。實際、我々に生の六が溢れてゐて風流をよしと思ふ時間があるやうに、人間のなかには最小限度的自己の最小限度的享樂を無上に樂しとするところの生れながらに風流な性情もあり得るのである。風流はそのやうな人にとつてのみ生きるの道である。論理によつてたとひ信仰の哲學は築いてもその人に信ずるだけの飛躍的精神がなかつたら、遂に信仰そのものは得られないごとく、意志によつて最小限度の自己を築いても、その人に風流人たるだけの詩的感覺の持合せがなかつたならば遂に風流は知り得ないであらう。

私は言ふ、風流は――尠くとも芭蕉やその他の人々が完成した風流といふのは、中心的には感覺を極度に深めて遂げられたものであり、たとひいかに宗教的であり、哲學的であらうとも徹頭徹尾、藝術である。その事を宗教的に意志によつて完成したのでもなく、また哲學的に理智によつて完成したのでもない。しかも、その題目が宗教をも哲學をも胚み得るところの根本的な胎であつたが爲めに、我々の民族が無限に新らしい絶好のテーマによつて完成したところいものは期せずして、しかし最も當然の結果として、甚だしく宗教的でもあり哲學的でもあること明白である。人間が全く自然に服し切つて人間的意志を十的（プラス）一的（マイナス）にも一切働かせなかつたが爲めに、人間そのものが、花鳥風月やその他一切の自然物に對して全く同胞であるといふ汎神論的の哲理を、先づ自づと帶びて來た。しかし一向に哲學的ではなかつたところの風流の徒は、哲學としてはその哲理にまで彼自身を見出すことを得ずして、ただ彼等の持つてゐたその感じだけを、「花鳥風月を友」とするといふ表現――かの西洋人としては最高の風流文人ラフカディオ・ヘルンによつて驚かれたこの表現によつて述べ得ただけである。またそれらの一切の自然物と、尠くともその詩境に於ては同胞化し得たことを彼等がより以上明確に自覺しなかつたがために、彼等がもしそこを自覺しさへすれば當然直ぐにも悟り得るところの、「到るところに己がある」といふ浪漫的神秘の歡喜や、或はまた最小限度に縮み切つた果はやがて自然そのものの最大無限と合致して永久であり得たことにもなるといふ宗教的不滅の悦樂とを、それを味つたであつたらうに、しかし彼等自らは少しも力說することが出來なかつた。さうして彼がたまに宗教的な口を利けばすぐに佛教的であり、たまたま哲學的なことを言へば老莊であり、さうしてそれらのものと彼等自らとの相違には少しも考へ及ばなかつたかのやうである。――彼等は、前にも述べた如く、決してただの生の否定者でもなく、また決して「至誠無爲」の徒でもなく、最小限度でこそはあつたが生の享樂者であつたのに。

さうして、もどかしいのは彼等がいつまでも最小限度的の生であつたことである。いづれは自然の愛子である我々だ。どこまで我儘に人間的意志を逞しくても依然として自然の愛子には違ひなかつたのに――この飛躍を遂げたならば、しかし同時に風流は無くなつただらう……。

風流の徒が成し遂げやうとしたところのものが何であるか。我々は古人に聞くことは出來ない。しかし風流の徒が永久に――人間には生に疲れる瞬間があり、また人間的社會を憂しと思ふ性情がある限りに於て永久に――生きてゐるのは、彼等のあの最も深い、それ故に身心合一的の或る感覚によつてである。それを得るために、彼等は全生命を盡した程だから、もとよりこれに依りすがつて悔ないといふ信念はあつたに相違ない。また意志的でもあつたらう。努力もしたらう。しかし、それ故に彼等を意志的であると呼ぶならば、名聲が阿堵物によつて購はれたから、名聲の本質は阿堵物だといふのと同じことで、多分は正論といふものではなからうと思ふ。

それにしても、それらの珍らしい藝術を大成した最も主要な人の一人芭蕉は、彼自身の境涯に就て自ら何を語つてゐるであらうか。試みにこれを引用して、諸君子の味讀に委ねよう――

……斯くいへばとてひたぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさんとにもあらず。病身やや人にうみて、世をいとし人に似たり。何ぞや法をも修せず、俗をもつとめず、いとわかき時よりよこさまにすける事の侍りて、しばらく生涯のはかりごととさへなれば、終に此一筋につながれて無能無才を恥づるのみ……(幻住庵賦)

筆者附記。この文は餘論として「國民性と風流」「デカダン藝術と風流」「東西兩洋文明に就て」「支那の風流西洋の風流」「予の人生觀より見て何故に風流は價値なきか」其他に就て一言附說した方がいいのだけれども、時日に餘裕がないし、また今までにも大たいそれ等の點にふれて私の氣持だけは折々に言つてもあるし、本題は匆惶と筆をとつたがために重複と冗漫とを生じまた力說を缺いたかも知れないが、意のある點は、ともかくも說くだけは說いたから、(四)餘論は今は略して、また機を得て發表しよう。

# 櫻花の賦

## 櫻花の賦、

近松秋江

つい一週間ばかり前まで、梅が丁度滿開だなどといつてゐる間に、冷い雨の彼岸びよりが續いたりして一向春らしい氣が引立たなかつたが、氣まぐれな天候は一日のうちにも幾度も空の顏色を變へて、まだ何となく十分に降り足りないやうな雨晴りの、妙に暖い日がぽか〳〵照つてゐると思ふと高い上空にもの〳〵しい夕立模樣の黑雲が瀰漫して、それが頻りに動いてゐると、それにもかゝはらず天の一部分には澄んだ紺青色の大空が、優しい外國の美人の眼のやうに覗いてゐるのが見える。實際、よく注意して見てゐると三月の末のその頃の大空の色ほど氣まぐれで、そして美しいものはない。地濕めりのした大地からは暖い春の日に蒸されて、うすい絖のやうな陽炎が上騰つてゐる。さうかと思つてゐると、たつた一日か二日好晴がつゞいた後は、——東京の空では——今度は又厭に氣持ちの惡い南風が吹いて、沙塵を捲き揚げ、此の二三日、眼に立つて急に蕾の膨らんだ櫻の梢を折れるかと思ふほど搖りさはめくのである。そして、そんな厭な南風が二三日も續いて吹くと、大きく肥つた蕾は遂に堪らなくなつて、氣の早い枝から花を開いてしまふ。年によると、それが、まだ四月といふ聲を聞かぬ間に、七八分どほり咲いてしまふことがある。そんな時に限つて、氣候がまだ本當に定まらないので、折角開いた花が、その頃の季節に有り勝ちの颶風に煽られて終日吹き折られてゐるのを見ることがある。そのうち三日も四日も續いて狂ふてゐた風が、やう〳〵治まつたと思つてゐると、その晩あたりから雨になつて、開いたばかりの花は一夜のうちに、すつかり色が褪めてしまふ。私は、

そんな春に出會ふたびに、實に天を仰いで熟々と天の無情を怨む氣になる。東京の櫻花は得てそんな運命に終はることが多い。

ある年の四月の末、私は、東京から關西の方に向つて汽車に乘つてゐた。寢臺の上には、いつまでも春眠を貪つてはゐられないので、早く眼を覺して、そこらの形付けられた寢臺車の窓に凭つて、まだ、十分醒の夢から覺めない外景の山野に眼を放つてゐると、そこは丁度、東海道線では、私の常に最も好む關ケ原あたりの峽谷を走つてゆくところであつた。私は、もう屢々この邊の車窓の眺めについては書いたことがあるが、私は何となく此の邊の風景が好きである。それは無論歷史の聯想が自から然らしめるのでもあるが、關ケ原の峽谷から西へ抜け出でゝ、やがて伊吹山を眼近に仰ぐ風景は決して凡庸でない。悲しくもあれば雄々しくもある。

その時、東京ではいふまでもなく東海道の沿線到る處既に春闌け花辭してゐたのであるが、關ケ原附近は、冬季海道第一雪の深いところだけあつて春も自然と晩れてゐるので、私は、まだ全く明けきらない、向うの山の根を見ると、松の雜樹の中に交つて、たつた一本の山櫻が、薄暗い木陰に、ぽつと眞白に咲きいでゝゐるではないか。それは、花ばかり早く咲き出る種類の櫻樹とちがつて、純粹の山櫻と見え、薄紅の葉とゝもに片山里の春を飾つてゐるのが、又となく佗しくもあり世の常ならず美しくもあつた。櫻は四圍の環境や背景や如何によつて、集簇的に眺める時は琉璃であるとゝもに動もすれば俗氣を帶び易いのであるが、その時觀た櫻は聊も俗氣の無いばかりでなく、何だか、それこそ春の精とでもいふものゝやうに感じられた。私は、その後もその邊を汽車が走るたびに、春でない時といへども、眼敏くその櫻樹を探し眺めてゆくのである。心ある人は氣を付けて見て往かれよ。

さうかと思ふと又、ある年の春は四月の中間に東京から夜汽車に乘つてゆくと、その汽車は參遠あたりで早くも夜が白み渡つた。名も知らぬ村落を通過してゆく時、ふと見ると、家々ではまだ深い春眠中にあることゝ思はれて早起の人の姿一つ見えぬが、ある農家の前庭に一本立つてゐる山櫻が、靜かな白い狹霧の棚曳いた中に、眞白く滿開してゐるのを見た。さながら春の精でもあるかのやうに思はれた。私は汽車の窓から何時までもそれを見返りつゝ、汽車の速きことを憾んだ。そしてもう春は野に山に漲つてゐることを思つた。

又ある年の春。それは既う四月の末であつた。東京では降りつゞく春雨に、八重櫻さへ見にくゝ色褪せて、日に〳〵青葉し、空しく逝く春の悲しみを催うさしめるやうな時分であつた。私は月の二十四日の夜立つて關西の旅に出た。その時は名古屋から乘換へて關西線をいつた。――その時のことは既う度々誌したことであるが――折りしも尾州の平野には菜の花が一望黄金色の席を敷き延べたやうで、木曾、揖斐の長江を上下する白帆が靜にその野の果てに望まれたりするのであつた。汽車が伊勢の龜山まで來ると、伊勢太廟へ參詣した客が多勢乘込んで、車内は一層陽氣になつた。沿道の野には菜種の花が咲きこぼれ、往く手の右方に高く聳えてゐる鈴鹿山脈には春雷を帶びた物凄い黑雲が湧いて、その爲めに山の輪廓が墨繪の如く鮮明に半空に浮んで見えた。口數の多い大阪あたりの旅客が車室にぎつしり詰つて賑かに語り合つてゐるのはうるさくもあるが、また春の旅にふさはしい陽氣さでもあつた。關西線の拓植驛あたりまで來ると、あまりに暖く春日に蒸されてゐると思つてゐた空が一面に曇つて來て、ぽつり〳〵と大粒の雨滴が車窓を斜めに打つて來た。それから汽車が伊賀の上野平野をさして只走り(ひたばしり)に駛せ下つてゆく、間山峽の春雨は濛々として白く、遠くの山近くの野を罩めて、白雨のやうに一と仕切り降つてゐた。が、やがて程なく上野平野の中心に出て來た頃には雨は歇み、雲散じ、薄墨を流したやうな空の一部に眩しい太陽の光線が縞目のやうに射して、疎らに落ちて來る雨滴は微温湯のやうに暖かであつた。汽車が上野驛に着くと、暫し峽中の雨に閉ぢ籠められてゐた旅客は、はじめてほつとしたやうな氣になつて、車窓を排して吾れもわれもと物賣りを呼んで茶を求め辨當を買つた。名殘りの雨は野の面に尚ほ銀線の如く落ちてゐるのが、雲間を漏れてくる日の光に白く照らされてゐる。野には、闌を過ぎてやがて凋落しかけた黄白の菜の花が、先程の白雨のために聰か叩かれて、芳香散亂、春雨に濕つた甘酸つぱい匂が強く鼻に逼ふて來た。

昨夜東京から乘つて乘たのであるが、今朝一度早く眼を覺ましてから、寢不足の假睡々(うとうと)とした氣持ちで凭れかゝつてゐたのが、こゝまで來ると、もう奈良も京都も遠くないといふ、はつきりと氣引立つたやうな、氣持ちになるのであつた。上野から島ヶ原の驛を一つ過ぎると、長いトンネルがあつて、それを向うに出抜けると、そこはもう山城の國になつてゐるのである。そこには詩趣饒かなる木津川が深い山峽から滑潮急灘を成して流れ出てゐる。それからその木津川の奇態百様の溪流に

ふて汽車は笠置の方に向つて西するのである。笠置あたりは櫻花の多いところである。――それは後にいふ。――

その時、汽車が、トンネルを南山城の方に拔け出てゐると、一度晴れたと思つた空は又春雨に曇つて、强い西風は狹い峽谷を眞正面に西から東へと吹いて來た。雨の脚は殆ど三十度ばかりの角度をなして横さまに吹きしぶいてゐる。高い崖の上を駛せてゐる汽車の窻から溪流の方を見下ろすと、そこには一艘の柴舟が急湍に溯つてゆくのが見える。磊々たる巨岩の上を一人の男が雨に濡れて選びながら纜を曳いて溯つてゆく、一人の男は棹を操つて巧みに危岩怪石を避けたり又それを利用して舟を進めてゐる、一人の男は紺蛇の目の傘を阿彌陀に翳して西から吹き附ける春雨を避けてゐるのである。私はそこに一幅の日本畫の繪を見たのである。それから汽車は段々笠置加茂と過ぎて木津驛まで來ると、又雨は晴れて遠くの方に春の野が開展して來た。眞靑い綠の麥畑が、和かな白い霞の中に遙かに望まれた。私はその時は奈良に志してゐた。

奈良に着いた時には、生駒山の頂邊にまだ稍々殘照があつたが、公園の畔に在る旅館に就いて、お茶を飲んで一息すると私は早速奈良の公園に出て見た。長い春の日はやうやく暮れんとして薄ら寒い風が蕭々として吹いてゐる。そこにはまだ遲咲きの山櫻がところどころに寂しく咲いてゐた。そして南圓堂の方では多勢で御詠歌を流す合唱の聲が高からに響いて、それにつれて打ちたゝく鉦の音が、靜かに暮れてゆく公園の樹立の中に冴えて聞えた。その鉦の音に誘はれるやうに、山櫻の花がほろほろと落ちて來て、樹下を往く私の袖のうへに散りかゝつて來た。ゆく春の夕暮れに鉦の音に誘はれてほろほろと袖の上に散りかゝつて來た山櫻にも、私には忘れられない詩趣があつた。

# 櫻花の感傷

長田秀雄

親は他國に
子は島原に
櫻花かや、
ちりぢりに。

諸君、この俗謠を燈下に口づさんでみ玉へ。龍律の裏にこもつた哀婉の心が、自から人の肺腑を刺すものがあるではないか——一絃、直らに胸裡に入つて、萬愁を呼びさます趣がある。

さくらと云ふ柔らかくさはやかな響は、既に、我々には、民族的の感傷である。しめやかに鳩羽色の濕氣を薫じた靜かな夕されの空氣を、おほどかに悲しくゆらがせて、鳴りわたる青銅の巨鐘の夢にもたへ得ず、ホロホロと散る姿のあはれさは、千年の昔、王朝詩人の詞境であつた。

諸行無常と云ふ佛教の哲理は、酷熱の印度の國から、わが國には、既に有史以前から渡つてきて、國民の心には親しい物どなつてゐたであらう。その言葉を、そのまゝ花の姿で現はしたものが、即ち櫻花であつた。

華麗眼を眩ます牡丹の花にしろ、清洒の韻致を夏の朝の空氣に點ずる朝顏の花にしろ、美くしい姿は、一朝凋落の期にいたれば、見るも慘ましい崩壞の醜さを現はす——日本人の感傷はそれを苦痛としたのであつた、即ち美しい人の涙のやうに、ホロホロと悲しくもなり行く櫻花の無常さが、彼等の心に一脈の美くしい憂愁を曳いて滿足であつたのである。

臈たけてとか、﨟たきとか云ふ美人の形容詞は、纖細な櫻の花の蒼ざめた美くしさから轉じてきたものかと思はれる——全たく日本人の夢は、そのまゝ櫻の花によつて、象徴されてゐるのである。

濕つた赤土で全國を覆はれたこの日本列島以外の土地には、櫻は、育ちにくいときいてゐる。果してさうか、植物學者にでもきいてみなければ分らないが、成程、歐羅巴や、亞米利加にある果樹としての櫻と、わが國の櫻とは全然違つた種類であるらしい。わが國の櫻のやうな艶冶な花をつける櫻が、他國にあると云ふ話は、私は、まだ、きいた事がないのである。肥沃なこの國の赤土が、この蒼ざめた纖細な花をはらむか、はた、また、暖流にあたゝめられた程よい氣候から、かやうな美しい夢が生れ出るのか。

花では櫻、魚では鮎が、わが國の美くしい特産物である、火山が造つた急峻清冷な谷川に育れて、蒼白くやせた姿、一見白刃の如き美魚は、即ち鮎である。これを味はへば、白き肉に一種の芳香がある。舌の上に上ぼれば、淡々としてしかも清涼

の氣、鹽燒のたで酢に和して、汗ばんだ皮肉を引締めるやうである。

櫻花と鮎とは、わが民族の風格を現はす點に於ても、けだし比類のないものであらう。

いま、瞳をこらして、その風にもたへぬ一房の花を掌上にながめてみるに、眞珠のやうな淡紅を底に含んだ蒼白い花びらは、清洒な靑褐色の蕚に支へられて、優婉きはまりなき曲線を以つて、心臓の形に切りはなされてゐる。その五瓣が相集まつて、蒼白くも金色ににほふ花蕊を、仄かに包んでゐるのである。

花の趣に、梅花のやうな強い氣品はみとめられないが、婉美な點から云へば、まさに無類であらう。古來、畫家の内に、この花の凝視から、美くしい線を自得した人があつたと傳へられるのも嘘ではあるまい。

櫻の種類は非常に多いであらう。が、私は主な類別として、牡丹櫻と、山櫻との二つを知つてゐる。牡丹櫻は濃艶である。山櫻は清洒である。

かの吉原の夜櫻は、牡丹櫻の世界である。灯の光、華魁の濃い化粧の顔、こみ合ふ人の矢聲など丶、調和して、夜の都の不思議な美くしさを現はすのは、枝上萬朶の花をつけて、紅の色濃き牡丹櫻でなければならぬ。歌舞技の舞臺によく出てくる仲の町の夜櫻の景色は、人を悩殺しなければやまない情趣を帶びてゐるのである。

山櫻はこれに反して古今、萬葉の古代美をそなへてゐる。吉野の櫻、京都の花見は、即ち山櫻の蒼白い夢みがちな情趣から生れてきた物である。

百敷の、大宮人はいとまあれや、
櫻かざして今日もくらしつ。

と唄はれたのどかな有様は、牡丹櫻にはうつりかねるやうな氣がするのである。十二單衣に緋の袴をはいたぼうぼう眉の女房が琴を彈く寢殿造りの前栽の泉水に、浮かぶ落花の趣や、西鶴の描いた京は洛外の花見の姿は、やはり清洒な山櫻でなければいけない

牡丹櫻は、濃艶ではあるが、どうも、下品な感がある。どうしても、花のお江戸の櫻である。殊に落花の風情は、山櫻の氣品のある美くしさに似合ふやうである。名高い竹外先生の吉野懐古の詩を讀んで見玉へ。落花の情趣をうたつて、人の心を曳くものがある。

古陵松柏吼天飈。山寺尋春春寂寥。
眉雪老僧時輟帚。落花深處説南朝。

常盤津の關の戸をみると、櫻花の精魂を描いて絢爛の趣をき

はめてゐる。ことに黒染櫻の精が、美くしい遊女となつて、「鐘木町から來やんした。」と、云ふところは凄艶の極である。美の極致に、一味の妖氣を見出してゐるところは支那の思想の影響かとも思はれるのである。

私はかつて帝劇でみた梅幸の黒染の精が、櫻をちらした衣裳で、すつくと立つた姿を、いまだに忘れ得ないのである。

櫻花は、たゞ、櫻花それ自身としてより、わが國の花王として、千年の歴史の内に栄えてきたため、かやうに人間生活の背景として、殊に深かい情趣を感じるのである。

支那の牡丹、西洋のバラの花と、その意味に於ては同じである。

# 故郷の櫻と都會の櫻

村松梢風

故郷の家の庭に、一ともとの櫻があつた。山櫻でも、吉野櫻でもない、八重櫻の實生ださうだが、ひとへの、まつ白な花で、花の大いさは、山櫻の倍位あつた

幹の太さは一と抱えに餘る程だつた。そして、大蛇の腹のやうな枝が、うねうねと四方へのたつてゐた。狭い庭は、其の一株の櫻のために、殆んと全部の空間を占領されてゐた。枝は、横の圍を越えて、屋敷外の田の上まで伸びてゐた。

何んでも其の櫻は、父が若い時植えた櫻だと聞いてゐたが、私が子供の時分にはすでに可成りの大木だつたやうな氣持がする。花盛りは、例年神武天皇祭の前後だつた。咲き揃ふと實美事だつた。二階も下も、花の中に埋まつてしまつた。家の前を秋葉山へ行く街道が通つてゐる。其の頃は殊に道者が多いので、美しい櫻だと云つて、遠國の訛り言葉でほめて通つたりされると、私は子供心にも誇らしいやうな嬉しさをおぼえるのだつた。けれども、櫻のことだから、花の壽命は短かゝつた。櫻の花は、早く散るからいいのだと、誰れでも云つたけれど、私

は、我家の櫻の早く散るのが哀しかつた。「折角美しく咲いたのに、何故櫻の花は、もつと永く、十日も廿日も咲いてゐないのだらう」と私はうらめしく思つた。屋根も、地面も、まつ白になつてしまつた。散り敷いた花びらを、松葉の尖きで突ついては串刺しにして私は遊んだ。櫻ンぼを取るのも樂しみだつた。花が大きかつたやうに、櫻ンぼも、西洋種位の大きさだつた、が、にが味があつて、食べてはちつともうまくなかつた。

近年東京にばかり住んでゐて、其の櫻の花を見る機會もなくて幾年か過ごした。が毎年神武天皇祭が來ると、「家の櫻がさぞよく咲いたことだらう」と、家族のうちの誰れかひとりが云ひ出すので「ほんとに綺麗だらうねえ」と云つて、めい／＼が、遠くへ思ひを馳せる時の憧憬れの眼付きをしあふのだつた。故郷を離れて暮らしてゐる人々の、さびしいやうな、哀しいやうな心持が、其の瞬間に呼び起こされるのだつた。

さま／＼な、過去の思ひ出が、櫻の花の中に、ぼかりと浮かび出るのであつた。葉櫻になつた其の樹の下では、父がよく大弓の稽古をしてゐた。中學へ行くやうになつてから私も弓術を習つたので、暑中休暇の時など、父と一所に其の涼しい木蔭で弓を引いたこともあつた。父が亡くなつてから今年で十八年目になるのだつた。が、其の櫻の樹の下で弓を引いてゐる父の姿は、今でもアリアリと眼に浮かんで來るのである。

私は、父が亡くなつた後三四年間故郷の家で暮らした。其の間の生活ほど私に取つて呪はしいものはなかつた。併し、それほど厭な故郷ではあつたが、春が來て、櫻の花が咲いたり、菜種の花が田園を彩つたりする頃になると、都に憧憬れ、煩悶懊惱の胸を抱いてゐた若者の心も、何んとなく浮き立つて來るのだつた。東京の本屋から送つて寄越した眞紅な表紙の詩集を讀みながら、日の暮れるのも知らず野路をさまよひ歩いたりした。二階の窓を明けひろげて、花吹雪を浴びながら、與謝野晶子の新譯源氏物語を讀み耽つたこともあつた。そして、其の感想を幼い文章に綴つてスバルへ投書すると、思ひがけなく載せられた。それが私の書く物を活字に組んで貰つた、一番最初の思ひ出である。

歴史は畢竟背景である。いろ／＼な背景の中から、いろ／＼な歴史が生まれて來るのである。或る一つの事件でも、或る一人の人間の運命でも、それ自身に定められてゐる觀方といふものは無いのである。さういふ意味に於て、私は此の櫻の花を背景にした、我家の出來事と、自身の身の上とを、眺めて見ることも出來るのである。

處が、去年の秋、私は故郷の家を取り拂つてしまつた。そし

て其の跡は畑にすることにした。畑にしても櫻の樹だけは保存して置くつもりだつた。家は無くとも機會があつて其の花盛りに故郷を訪ふやうなことがあつたなら、私は花下に佇んで、心ゆくまで懐古の情に浸ることができるであらうと考へてゐた。すると、世話をして呉れてゐる人が、家を取り拂ふと間もなく、他の不用木と一緒に櫻の樹をも伐り倒してしまつた。屋敷を畑にする爲めには、いちばん日蔭になる其の邪魔ものの櫻を立てゝ置くわけにはいかなかつたのだ。私はそれを見た時に寂しくなつた。思ひ出の糸を、ぷつりと斷たれたやうな氣持がした。

今年は春が來ても、其の櫻の花はもはや見られぬのである。

○

東京の櫻の中で、いちばん強い印象を私の心にとどめたのは、芝神明社の境内に植えてある櫻であつた。

神明といふ土地は、十年このかた全く様子が變つてしまつたが、其の前までは、東京市内でも特に異つた趣きのある土地だつた。第一、あの日蔭町といふ通が、一種異様な感じを、人に與へずにはゐなかつた。町幅は思ひ切つて狹く、家並みが細かくて、店造りもゴチヤ〳〵としてゐて、一流二流の大通だの、新開地などでは見られない、何處か怪う浮氣つぽい感じがあつて、それでしみつたれた、古臭い、下町情調が、厭になるほど濃厚に漂つてゐた。其の日蔭町も、烏森へ寄つた方は門並み古着屋で、何んとなく陰氣臭かつたが、神明前に近付くほど町は明るく、陽氣になつて、其の邊には、小間物屋だの、下駄屋だの、かもじ屋だの、半襟屋だの、瀬戸物屋だの、さういふ小さな店ばかりせゝこましく續いてゐた。大鳥居を潜つて社の方へ向ふと、正面に、銅葺きの、伏せたやうに低い拜殿の屋根が見えてゐる。石を敷いた道の兩側には、西洋料理店だの、寫眞屋だの、しる粉屋だの、待合だのが並んでゐた。其の裏が矢場であつた。右側の寫眞館の横の、露地と云ふより隙き間と云ふはふが當つてゐる位の細い道を、體を斜めにしながら這入つて行くと、暗澹とした、地獄の入口のやうな露地の奧には、マツチ箱のやうな家が數知れず並んでゐて、どの家にも、厚化粧をした淺間しい女が二三人づつゐて客を引つぱつてゐるのだつた。神明の矢場の起原は何時頃のことか知らないが、明治七年に出た東京繁昌記といふ書物には「楊弓肆」といふ題で、此處の矢場の繁昌の有様を詳しく描寫してある。「弓肆連レ場、阿娘窈窕、妖粧盛飾、紅袖巧招レ客、客多少年闘二娘美醜一、客固非レ學レ射、專係レ挑二阿娘一云々」とあるから、其の時代から一種の魔窟であつたことは分るが、併し表向きは何處迄も楊弓店であつたのだ。が、私が其處を知つた頃は、一二軒楊弓店があつたばかりで、

あとの全部は、銘酒屋とか、新聞縦覧所とか云ふは名ばかりの純粋の私娼窟だつた。

神明と云へば、淺草公園に次ぐの魔窟であつた。私は初めて東京へ出て來た年の春から夏にかけて、神明の鳥居際の小さな宿屋に下宿をして、其處から學校へ通つたのであつた。野生の身そらで何故そんな處へ下宿したのかと云ふと、今から考へれば可笑しいくらゐだが、當時文壇を風靡した永井荷風一派の都會藝術に心醉して、故郷の田舍を飛び出して來た私であつたから、本郷や早稲田あたりの下宿屋では滿足が出來ず、選りに選つてそんな場所へ住まつたのだつた。

眼に觸れる物のすべてが、私の心を強く刺戟せずにはおかなかつた。私はよく其の邊をうろつき歩いたものだ。境内には櫻の木が澤山あつて、それが丁度花盛りだつた。その櫻は八重櫻が多かつた。青白い瓦斯の光に照らされた八重櫻の花には、春の夜の巷を往き來する女の肌を思はせるやうな暖かさがあつた。

晝間は、文字燒屋の爺さんが境内へ店を出した。日が暮れかけて、子供の姿がいつの間にか見えなくなつて、一番あとから其の爺さんが店を片付けトボ〳〵と歸つて行く頃になると、拜殿に置いてある朱塗りの大きな行燈にユラ〳〵と明かしが揺らめき始め、社の脇に軒を並べてゐる待合の二階にもぱツと一せいに電燈が映る。障子に島田の影法師が寫つたり、陽氣な三味の音に驚いたやうに、櫻の花びらがヒラ〳〵と散つたりする。カラコロと下駄を鳴らして、褄を取つたお座敷へ出がけの藝者が、お詣りに來る。段々の下の處へ屈み込んで、手を合はせた儘いつ迄も拜んでゐる。札賣所の男が、神前から金の御幣を持つて來て、彼女の頭の上でサラ〳〵と振つてやる。藝者はもとのやうに褄を取ると、晴れ〳〵した顔になつて戻つて行く――。

其の櫻の花の思ひ出には、まどはせるやうな濃厚な都會生活の夢が色濃く描き出されるのであつた。八重櫻の花は、何處に居たとて見られるけれど、あの古風な社前の高麗狗の礎石に腰を掛けながら、それを眺めた時のやうな青春時代の感激は、もはや二度と私の躰にはめぐつて來ないのだと考へると、何んとなく淋しくなるのであつた。

其の後、久しく經つてから、私はたつた一度神明へ行つて見たことがあつた。矢場の私娼窟が追つ拂はれてしまつてからでも、もう何年か經つた後いことだつた。其の跡は、大てい待合だの藝者屋に變つてゐた。が、妙なことには、そんな處へ、機械鍛冶屋が何軒も出來てゐた。楊弓屋が二軒昔の儘に殘つてゐたのも意外だつた。併し其の店は、無いにもまさるみじめな寂

れ方であつた。穴だらけの的が二つ三つ掛かつてゐて、羽のすり切れてしまつた矢が少しばかり矢筒に入れて土間に置いてあるだけの店だつた。一軒の方には矢取り女さへ見えなくて、溝鼠のやうに汚ならしい瘠せこけたチャボが、意地ぎたなさうに其處らの餌を拾つてゐるのが哀れだつた。東京新繁昌記に現はれてゐるやうな光景は、何處に描いて見やうもないのであつた。

　社殿は勿論舊の儘だつた。青銅の屋根には緑青が一面に浮いてゐた。薄暗い拜殿の奥に懸かつてゐる御簾も、御鏡も、金の御幣も、古い賽錢箱も、社前の石の高麗狗も、すべての物が十年前と變りはなかつた。が、境内の趣きは何處となく變つてゐた。何故だらうと考へて、氣が付いて見れば、これはまた何んとしたことだ。あれほどあつた櫻の樹を一本殘らずこいでしまつて、其の代りに、檜や樫の若木が植ゑ込んであるのだつた。何んといふ莫迦な眞似をしたものだ。森厳の趣きを持たせやうとしたのかも知れないが、埃にまみれた檜や樫の枝には伸びる力さへも無くなつてゐた。都會の狹斜の巷の眞ん中に在つて、古くからさういふ社會の人々の信仰に依つて維持されて來た此の神社に、それ程嚴肅な感じを持たせる必要が何處にあらう。泪や手管を賣り物にする此の土地の、遊蕩世界を美しく彩るために、あの何處か遊女の唇を思はせるやうな八重櫻の花がいかにふさはしかつたことかと、私は過去をなつかしんで、誰れに向けやうもない憤りを漏らしたのだつた。

　それすらも今はゝや一片の語り草となつた。去年の大地震の時、あの界隈は無論跡方もなく燒かれてしまつたことだらう。

　かうしてすべての物は滅びる。そして、やがてまた新らしく生まれるであらう。

# 櫻花時代

上司小劍

## 一

日本にあつては、どうも櫻花といふものが、首府の象徴のやうになつてゐると思ふ。花の都といへば、櫻の都で、すなはち首府を意味する。この點で、今の東京市が都市としての徽章を定むるにあたり、『日』といふ字と『東』といふ字とをどつちも付かぬやうな形にくづした紋にしたのを惜しいことゝ思ふ。なぜ櫻花をば東京市の紋章にしなかつたか。

## 二

『花のお江戸』といふ言葉はつまり、實際上の首府、國都が江戸にあつたのを語るものである。櫻が江戸の地味に適したのと一年三百六十五日のうちの三百五十餘日を、無駄に遊ばしておいて、何んの面白味もない幹や枝や葉を、街路に庭園に公園にさらし、――手がかゝるばかりで、金にはならず、たつた十日足らずい花期を樂んだと思ふと、もうすぐに散つてしまふ功利を超越したこの樹の性質が、さつぱりと氣の短い、宵越しの金を使はぬ江戸ツ兒氣性に欽つたのとで、江戸は櫻の都、花の都といふことに、まだ東京にならぬ先きから、さうなつてしまつた。

## 三

どこへ行つたとて、東京ほど櫻の多い都はあるまい。平生は氣もつかないが、花期になると、飛んでもないところへ、白雲がちぎれて落ちたやうに、ふうはりと花が咲く。去年の大震火災で、櫻の木もだいぶ燒けたであらうけれど、殊に櫻の多い山の手は多く無事だつたから、災後の花の香は一しほ可憐なことであらう。一年に十日足らず花期の眺めのために、あとの長い月日を、つまらなく場所ふさげにしておいて、平氣な顔をしてゐるところが、どうしても江戸市民――東京市民の意氣である。もつとも不經濟な花といへば、日本の櫻がおそらく世界第一で

あらう。樹木が建築に用ゐられるでなし、實がおいしく喰べられるではなし、花の眺めは、一年にたつた十日だもの。これがすなはち地震國の地震都市の花だ。

## 四

先年アメリカのワシントン市とかへ、東京市から櫻の若木を幾百株寄贈したことがあつた。受けたアメリカの都市では大に喜んで早速どこかの廣場へそれを植ゑたところ忽ち害蟲が發生した。日本を出發する時、完全に消毒されてゐなかつたので、害蟲の卵がアメリカへ着いてから孵化したのだ。丁度人櫻がトラホームの毒を持つて來るやうに、櫻の若木が害蟲の卵を運んで來たのだ。アメリカ人は、日本の非文明に顔をしかめつゝ、折角貰つた幾百株の櫻をスツカリ燒き棄てゝ、害蟲が他の樹木にうつるのを防いださうである。それを聞いた當時の東京市長は大に恐縮し、更らに完全な消毒を施した櫻の若木數百株を贈りなほしたのが、今はワシントン市かどこかに、毎年〳〵春の誇りとなつてゐるといふ話である。

## 五

新東京の街路樹は、銀杏(いてふ)を主とし、すゞかけ共の他を合せ用ゐることになつてゐるが、私は、ところによつて、必ず櫻もほしいと思ふ。番町のイギリス大使館の前、赤坂見付けのあたり、今でも櫻時には美しい市(まち)を飾る。上野、飛鳥山が櫻の名所として、東京の寶であるのは申すまでもない。向島の櫻が昔しのやうに榮ゆる日の速かならんことを希つてゐる。花時十日のほかは一年中、むしろ邪魔ッ氣なもいにたる櫻の木も、老樹となれば、さすがに幹や枝の眺めもまんざらでない。防火とか何んとかの實用にはならなくとも、櫻の街路樹をもつた町を、東洋第一の東京の一隅に一ケ所ぐらゐは持ちたいと思ふ。私は郊外に住んではゐるけれど、先づ〳〵東京市民として『東京』を愛する念に於て人後に落ちない。東京市が美しく復興することを、衷心から望んでゐて、それがためには、たとへ貧者の一燈でも、微力のつくせるだけはつくしたいと思つてゐる。心ない市民や遊覽客が、丸の內や銀座の街を故意によごしたり、不潔物を棄てたりしたのを見ると、手巾(はんけち)を水に濡(ぬ)らして白煉瓦の上のらくがきを拭(ふ)き取つたり、汚(きた)ないものを塵埃溜へ持つて行つて片付けたりしたことも時々ある。散步のついでの私のさうした小さな努力が、ほとんど無益に終り、よけいなおせつかいの感におつることは知つてゐても、私の東京を愛する心は、私どうしてもそれをさせずにはおかない。公園の花の枝を折

つたりするわるものを見ると、私はほんたうに、一枝を折つたもの〻一指を斬つてやりたいやうな氣がする。力及ばずとも私は東京を美しくすることに就いて、絶えず頭を痛め、九牛の一毛にだも及ばぬ念力を注いでゐる。

## 六

櫻は、首府—國都を表象する花であると〻もに、また平城朝時代、平安朝時代の代表花といふやうな氣がする。櫻かざしてけふもくらした大宮人の長閑けさ。それは平城朝、平安朝の色彩である。

ふるさと〻なりにし奈良の都にも
　　色はかはらで花は咲きけり

いにしへの奈良の都の八重櫻
　　今日九重ににほひぬるかな

前のは古今集に、ならの御門の歌として載つてゐる。後のは百人一首で誰れもおぼえてゐる伊勢の齋主のむすめの歌である。これを見ると、あの頃もやはり櫻が國都の代表花になつてゐたことが知らる〻やうだ。奈良の舊都から、八重櫻を伐り採り內裏に活けて献上した折りの、宮女の即詠として、伊勢の大輔の歌は優しい。

## 七

伐り採られた奈良の都の八重櫻の枝に、美しく咲きそろつた花を見て、悦に入つた上東門院の后は、かて〻加へて、侍女伊勢の大輔の即詠に動かされ、急に、其の元樹が根こそぎ欲しくなつた。そこで早速朝廷の命令が奈良に下つて、八重櫻の老木を掘りおこすことになつた。花のついたま〻一刻も早くそれを山城の都に運ばうとするのであつた。丁度今の京阪對東京といふやうな關係に、其の頃の奈良と山城の京との關係はなつてゐた。山城の京の方ではさほどにも思つてゐないことを、奈良の方では、妙に負けまいとする競爭心を起して、山城の京に小反感と小嫉視とをもつてゐた。そこで、奈良の名物の八重櫻を新らしい京に運び去らる〻ことは、奈良市民のすべてが反對であつた。中にも八重櫻の地主ともいふべき、衆徒たちは、たとへ勅命なればとて、こればかりは聽かれぬと力み出した。

## 八

さア大變、大衆は、腹卷裏頭に身を固め、長刀をよこたへて新京が若し暴力をもつて八重櫻を奪ひに來たら、こちらも暴力でこれにあたらうと待ち構へた。奈良の形勢おだやかならずと

聞いた上東門院の后は、どうしても舊都の八重櫻を新京に移し植ゑることをばあきらめなければならなくなつた。

## 九

其の時の上東門院のことばが、『奈良法師は心なきものとこそ思ひつるに、まことは色ふかきものなりけれ。』とかなんとかいふのである。負けをしみとして上乘の負けをしみであるとともに、奈良の衆徒の力もえらいものではないか。かくして、奈良の市民は山城の新京に對して凱歌をあげた。しかし上東門院の負けをしみは、なほこれにとゞまらないで、更らに、伊賀の國餘野の莊をば、衆徒にあたへ、年々花の盛り七日の間、八重櫻の番をさせて、通りかゝりのものなぞにむやみと枝を折り取らせないやうにした。これから後、餘野の莊をあらためて、花垣の莊と呼ぶことになつた。

## 十

平城朝、平安朝時代の人間のすることは、すべてが優しく美しく、物爭ひをしても、どことなくのんきなやうな氣がする。日本の歷史を振りかへつた時、大抵の人は皆徳川時代に同感して、興味があるといふけれど、私はどうも、平城朝、平安朝あたりの古いところに、親しみをもつ。さうしてあの時代をば、『櫻花時代』と呼びたい。――さうして今の東京に櫻花祭といふものをおこしたい。

# 彼岸櫻、富士櫻

小川未明

牡丹の花を美しいといふ人、薔薇の花を最も美しいとする人、菊の花を、花の王なりと賞する人々は、單に、花の美しいのを稱するだけであつて、葉の形や、枝の樣子や、また幹の具合などについては、あまり考へてゐないやうです。

私は、曾て、日本固有の花として、櫻を第一とし、梅をその次とするといふを聞いて、容易にこれに贊同する氣にはなれなかつたのであります。

もつと、いくらも、美しい花は、他にあると思つてゐました。なる程、いまでも、花として、美しいのは、他にあると考へてゐます。けれど、少なくも、花を賞する程の人は、自然を愛する人達です。その人達が、枝や、幹や、その他を見ずに、獨り花についてだけ、美を定むる筈はないといふことを知るに至りました。

梅は、その幹の古びて、青苔の錆びてゐるのを度外して、この花の清香を稱することはできないからです。その枝の參差として、屈折する面白味を解せずに、雪にも似た、白い淸らかな花の生命は求むることができないからです。

櫻にも、いろ〳〵種類があります。それによつて、幹の肌合も異なれば、また花の色にも濃淡があります。

植物に對する私の趣味も、その年代によつて、可なり變遷してきたやうです。この頃に至つて、富士櫻の優雅をたまらなく愛するやうになりました。

總じて、高い、岩山に育つ木には、たとへば、槇柏にせよ、石楠花にせよ、この富士櫻にせよ、また五葉松にせよ、幹肌が荒れて、一見、荒涼とした、火山岩の多い、石地に這つてゐたことを思はせるやうな、矮少聱牙な風姿をしてゐます。その枝に、富士櫻などは、淡紅色の珠を連ねたやうな、滴りさうな花を開くのを見て、可憐を觀ぜずにはゐられないのです。

私の櫻に對する、いろ〳〵な記憶は、美しいといふよりは、むしろ、花を背景とした周圍の自然にあつたやうです。

まだ、十二三の頃、近傍の山に登つたことがあります。道には、ところ〳〵雪があつて、溪の間には、雪が深く眞白でした。半腹の日當りのいゝ、崖の上を見ますと、白い紙片のやうなものが、枝の先にひら〳〵してゐるのを見ました。どの雜木も、まだ芽ぐんだものはなく、寒い風が、細い枝に、口笛を鳴らすやうに、時折は、叫びを立てゐました。

「あれは、何だらう？」

私は、まだ、蝶が出るには早いと、訝かりながら、よく、それを見ますと、山櫻の花が一輪、二輪、咲き初めてゐたのです。私は、この時ほど驚喜に近い、なつかしみを自然に對して感じたことはありません。

「山櫻が咲いてゐる！　山櫻が咲いてゐる！」

と、いひながら、その木の幹に縋つて、上を仰ぎました。なんといふ飾り氣のない花でせう。無色に近いといつた方がいゝ程

純潔で、しほらしく、そして、いま咲いたばかりの、そのまゝの姿で、微塵も浮世のなにものにも汚されてはゐないのでした。

私は、この時程、この花の美を感じたことなく、また、この花の運命をはかなく思つたことはありません。

遙かに、日本海の怒濤を見やりながら、あまりの悲しさに泣いたのであります。

次は、他の場合であるが、櫻の花が、私の眼に、暗く見えたことがあります。

月夜であるなら、なほさらのこと、さうでなくとも、夜、櫻の木の下に立つと、花の明かりで、しばらく、恍惚とするものです。けれど、それ等は、大概、彼岸櫻の場合であります。遲咲の八重櫻は、單瓣な彼岸櫻のやうに、決して陽氣ではない。

私は、たま〳〵東京から、故郷へ歸ることがあつた。ちやうど、五月の半で、故郷は、まだ風が寒く、殊に、暮方は、わびしい。私は、庭へ出て散歩する。庭には、八重櫻が、常盤木と常盤木の間に咲いてゐる。私は、東京の賑かな街を目に描いて戀しくなつた。また、汽車の中で見た、女の顔などを思ひ出して、いま頃は、あの女は、遠くへ行つてしまつたらうと思ふ。その時、ちやうどあちらの線路を汽車が通るひびきがして、遙かに、汽笛の音がきこえて來る。もう、暮方ではあるし、私は、たまらなく憂愁に囚へられる。この時、櫻の花は、決して、愉快なものでなかつた。却つて、私の目には、暗い、重たらしいものに映つた。

この時の感じからか、私は、八重櫻をあまり、いゝとは思はないのです。

郊外を歩るいて、鎭守の杜などに咲いてゐる、彼岸櫻は、一味の明るさを添へるけれど、八重櫻は、これに反して、却つて憂愁を感じさせる。

彼岸櫻について、私に、もう一つの記憶があります。

村で、繪師の庭さきに一本の彼岸櫻の木がありました。毎年火をともした頃には、それは見事だつたのです。かなりの、遠方から、この木は望まれました。その蕾のふくらんだ頃は、ちやうど小豆飯の色よりも、また、鷽の胸毛の赤さよりも、もつと色が濃く、美しかつたのであります。

繪師は、雪がこひをはづして、明るくなつた緣側へ煙草盆を持ち出し、お茶などをいれて、その花をながめて樂しんだのです。そこへ、鼈甲緣の大きな老眼鏡をかけた、頭の半分白くなつた老人がはいつてきました。この老人は、村での世話役でした。そして、平常は、よく將棋をさしに、繪師の許へやつてくるのです。

「見事に、櫻が咲きましたな。ほんたうに、見事なもんだ。時に、壜に一枝さしたいのだが、小さいのをいたゞきたいものだが……」と、老人は、言ひました。

毎年のことで、繪師は、櫻の花が咲くと、花を喜ぶと共に、老人に對して、一種脅迫さるゝやうな感じを抱いてゐたのです。そして、花を愛すれば愛する程、老人に對する厭惡の感をどうすることもできなかつたのです。

繪師は、親しい間柄ではあり、また、何かにつけて世話にならぬとも限らないと思ふところから、

「さあ、好きな枝をお切り下さい」と、言ふのであつた。

老人は、鋸を腰にはさみ、自から梯子を木にかけて登つた。繪師は、なんとなく、木に對する傷ましさを感じて、見るに忍びず、奥にはいつてしまつた。老人は、利己的で、そんなことに頓着なく、自分のいゝと思つた枝をずん／＼切る程、また、厚顔かしかつたのであります。

彼岸櫻が咲く頃になると、人の好い、無口な繪師は、これがために、神經衰弱になつたのです。彼の女房は、歯痒がつて言つた。

「今年は、枝をくれいと言つて來たら、斷ればいゝぢやありませんか？ こちらが大事にして眺めてゐるものを、枝をくれいといふのが間違つてゐます」と、何も遠慮することはない、言つてしまへばいゝとすゝめたのです。

けれど、繪師には、それができなかつた。彼は、ある日、まだ、雪が消えたばかりで、これから漸く櫻の蕾がふくらまふとする時、鋸を持出して、根本から、櫻の木を切り倒してしまひました。

世間の人は、みな惜しがつたばかりでなく、彼の女房までが驚いたのです。

ある日、老人が、やつて來た。

「どうして、あの櫻の木を伐つてしまつたのです」と、半ば詰り、半ば疑ふやうに、言ひました。

繪師は、靜かな、しかし何となく氣乘りのしない調子で答へた。

「夏は、蟲がつきますし、秋は、葉が落ちて厄介なものです。いつそ、薪木にでもしてしまつた方がいゝと思つて伐りました」

「いくら、それにしても、もうぢき、花が咲くものを」と、老人は、不平らしく言ふのであつた。

伐り倒された、櫻の木の根許は、いつしか朽ちてきました。そこから、鼠色に光る、一群の茸が生じた。繪師は、それを摘

んで、旅の中にいれて、食膳に供しようとしてゐるのを私は見たことがあります。

寫眞、あくどい色彩の花が、だん／＼嫌になつて、高山植物や、雜木などが好きになつた私は、この頃、はじめて梅の趣味を解し、櫻の花の美しさが分るやうになつた。それも、花だけを美しいと思ふのでない。前にも言つたやうに、枝の姿や、幹の肌ざはりなどを別にしては、これ等の花の面白味を語ることはできないのです。

もう一つ、こゝに風土と木の關係もあります。氣候が、その木に適さなかつたり、また土が親しまなかつたなら、折角の木も、精氣を缺いてしまひます。嚴冬に、霜を浴びて、ます／＼枝や、皮膚に光澤を帶び、芽が赤みを含むやうなのでなくてはこれを雅趣があるとはいへないのです。

塵埃の巷にゐて、自然に親しむ機會の少ない私の趣味が、自然盆栽的になるのは止むをゐません。以上、多く言つたことも私が、郊外の盆栽屋を歩るきまはつて、いろ／＼の植物に接して、それから得た經驗が多いのであります。

四國産の黒松の古木などは、格別であるが、いまのところ、富士櫻の荒びたうちに、どこかやさしみの宿る姿をこの上なく愛するものです。

「富士櫻にも、花の種類がいろ／＼、あります。これなどは、紅色が勝つて、咲きかけなど、たまらなく美しいのです」

盆栽屋が言つたことを信じて、私は、一鉢去年の夏求めたのが、この冬を無事に過して、いま澤山蕾を持つてゐます。たとへ、どこへ花見に行かずとも、私は、これを樂しみに、今年の春を待つのであります。

# 想華

## 雜記

吉村冬彦

### （一）花火

一月廿六日の祝日の午後三時頃に、私は唯あてもなく日本橋から京橋の方へあの新開のバラック通りを歩いて居た。朝よく晴れて居た空は、いつの間にかすつかり曇つて、濕りを帶びた弱い南の風が吹いて居た。丸の内の方の空にあたつて、時々花火が上つて居るので、上がる度に氣を付けて見て居た。丁度中橋廣小路の邊へ來た時に、上つたのは、いつもの唯の簡單な晝花火とはちがつて、餘程複雜な仕掛のものであつた。先づ親玉から子玉が生れ、其の子玉から孫玉が出て、それから又曾孫が出た。そして其の代の更り目には、赤や青の烟の塊が飛び出すのであつた。併しそれらの色のついた雲は、すぐに消え失せて、黒い烟だけが割に永くあとに殘るやうであつた。

京橋の上迄來て、堀に沿ふて東の方を見ると、向ふの河岸と橋の上に大勢人が集つて河の方を見て居る。船の中で花火を上げて居るのらしい。

行つて見ると、堀の眞中に、可也大きな船が一艘つなぎ留めてあつて、其處が花火の打ち上げ場になつてゐるのである。成る程、かうして河の眞中でやつて居れば、如何に東京人でも、さう〳〵傍迄押しかけて覗きには行かれない譯である。此れでないと隨分間違が起りさうである。併し果してさういふ理由から船の中を選んだのか、或は他にもつと適切な理由があるのかもしれない。

船首から船長の三分の一位の處に當つて、横に張り渡した横木に大小四本の圓筒が並べて垂直に固定してある。筒の外側はアルミニウムペイントで御化粧をしてあるが、金屬製だかどうだか見ただけでは分らない。昔は花火の筒と云へば、木筒に竹いたがを幾重となく鉢卷きしたのを使つたものだが、流石に今ではもうそんなものは使はないと見える。第一その筒の傍に立つて、花火の打上げを擔當して居る二人の技手からが、洋服に、スエター、半ズボンといふハイカラな服裝である、そうして其二人のうちで船首の方に立つて居る一人は、立派な髭をさへ生やして居るのである。此れが筒の掃除をする役をつとめる。胴の間の側に立つて居るこれもスマートな風體の男が裝塡發火の作業をする役割である。

艫の方の横木に凭れて立つて居る和服にマント鳥打帽の若い男が一番の主人株らしい、多分今日のプログラムを書いてあるらしい紙片を手に持つて立つて居る。其傍に花火を入れた箱があつて、助手が其處から順々に花火の玉を出して打手に渡す。

始めに小さな包のやうなものを筒口へ投り込んで、すぐ其上へ銀色をした球を落し、又其上へ、掌から何かしら粉のやうなものを入れる。次にチヨツキの隱袋から、何か小さなものを出して、火繩でそれに點火したのを、手早く筒口から投げ入れると、半秒足らず位の後に、爆然と烟が迸り出て、鈍い爆音が聞える。烟が綺麗な渦の環になつてフワ〳〵

と上つて行く、すると高い處で彈が爆發して、それからが所謂花火の現象になるのである。

段々眼が馴れて來ると彈が上つて行く途中の經路を明瞭に認める事が出來る、そして破裂する時に、先づ一方へ閃光のやうに迸り出る火焰も見え、外被が兩分して飛び分れる處も明に見る事が出來る。風の影響もあるだらうが、それよりも寧ろ、筒口を出る際の、偶然の些細な條件の爲に、時々は彈道が上の方でひどく彎曲して、とんでもない方へ行つて開く事もある。

一番小さな筒と、其次のとが、最も頻繁に使はれる。一發打ち上げたのゝ烟が、大方消える時分に、次のを上げるといふ順序であるが、筒の大小は變つても、上がるものは大抵同じやうな平凡なのが多い。同じ位の時間間隔を置いて連續的に五回の爆發をやるのが一番多いやうであつた。つゞけて五回音がして空中へ五つの烟の團塊が團子のやうに並ぶだけと云はゞそれ迄のものである。

『音さへすりやあ、いゝんだね』『音さへすりやあ、いんだよ』、こんな事を云ひながら、それでも矢張り未練らしくいつ迄も見物して居る職人の仲間もあつた。見物して居る連中を見渡してみると、殆んど勞働者階級の人らしく、兵隊や女も少しはまじつて居たが、所謂智識階級に屬するらしい人は一人も見當らなかつた。智識階級の人は、かういふ種類の見物には餘り興味を持たないのか、それとも、花火の技術や現象などは疾にもう知つて居るから、今更こんな處で見物する必要がないのか、さうではあるまい、寧ろそんなものをぼんやり呑氣に見て居るやうな暇がないのだらうと思つて見た。尤も向河岸の官衙の裏河岸を見ると可也立派な役人達で呑氣相に見物して居るのも大勢居た。河一つ隔てゝ、かう事柄のちがふのは果してどういふ譯だらうとも思つて見たりした。

五回の爆聲の間の四つの時間間隔は決して一樣にはならないものらしい。その長短がいろ〳〵の偶然的なコムビネー

ションで起るのが先づ面白かつた。それから五つの烟の塊が空中に描く屈曲した線が色々の星坐のやうな形をして、又それが垂直に近くなつたり、水平に近く出たり、或は色々な角度に傾斜するのも面白かつた。此等の塊が風に流されて行く間に段々相對的位置を變へて行くのが、上層の風の構造を示すものとして、特別な興味があつた。嘗て誰れかゞ、或る關東の山の上で花火を上げて、高層氣象の觀測をやらうといふ提案をした事を思ひ出して、なる程これならば存外ものになりさうだと思ひながら見て居た。

なほ面白いのは一つ〳〵の烟の團塊の變形である。此れがみな複雜な渦動（ヴオーテックス）の團塊であつて、六かしい運動を續けながら、段々に擴散して行くのである。昨年九月一日被服廠跡で起つた火焔の渦卷を支配したと同じ法則が此處にも支配して居るのだらうと思つて、一生懸命に眺めて居たが、此の糢糊とした烟の中から、さう手取早く要領を得た法則を讀取る事は容易な仕事ではないのであつた。

五回に一回位は風船に旗を吊したものや、相撲や兵隊などの人形の出るのがあつた。人形がゆらり〳〵御叩頭をしたり、擧げた兩手をぶら〳〵させながら、緩かに廻轉しながら下りて行くのは、一寸滑稽な感じのするものである。それが向河岸の役所の構内へ落ちさうになると、其處の庭で見て居た中年の紳士の一人は急いで驅け出して行つて、建物の向ふに消へた。眞逆あれを取る爲にあゝ急いで驅けて行つたのでもあるまいが。

其内に一つ、いつもとはちがつて圓筒形をした玉を込めて居るので、今度は何か變つたものが出るだらうと注意して見て居た。打ち上げられた圓筒は、迅速に旋轉しながら昇つて行つたが、開いたのを見ると、それは夜の花火によくあるやうな、傘形に或はしだれ柳のやうに空に天蓋を擴げるのであつた。此れについて一つ不審に思つた事は、あれがどうしていつでも傘のやうに垂直線のまはりに對稱的（シムメトリカル）に擴がるかといふ事である。なんでもない事のやうに思つて居たが、

考へて見ると、此れはさう簡單な問題ではなささうである。あの圓筒形が其筒の軸と直角な軸の周圍に廻轉しながら昇るといふ事と關係があるらしいとは思ふが、本當の事は鍵屋の職人にでもよく聞いて見た上でなければ判斷が出來ない譯である。昔始めて此の花火を發明した人は偶然かも知れないが、やつぱり、少しはえらい人だつたらうといふ氣がした。

一番大きな筒の順番は中々廻つて來なかつた。かれこれ半時間の餘も見て居たが、一向に此方へは手を付けない。自分の周圍で見て居る連中にも矢張それが氣になるらしい事を云ひ合つて居るのがあつた。私は自分が子供の時に九段上の廣場で見た、手拭を捻つてこしらへた蛇を地上において、それが今に本當の蛇になると云つて、其周圍に圓を描いて歩きながら、笛を吹いて往來の暇人を釣つて居た妙な男の事を思ひ出した。そしてその昔の心持と今のと何處か似通つたものを搜りあてゝ、思はず微笑したのであつた。

併したう〳〵、其一番大きな筒が裝塡される時が來た。『今度は大きいぞ〳〵』と云ふ聲が、群衆の中で、其處からも此處からも起つた。

可也大きな音と共に飛び出した彈は、風の音を立てゝ昇つて行つて、突然開いた。

何が出るかと思つて、緊張して居る、大勢の頭上の空中に、一團の大きな黄黑色のボアのやうな烟の團塊が一つ出來た。そして唯それだけであつた。烟は次第〳〵に亂れて擴散して、やがて唯一抹の薄い烟になつてやがて消えてしまつた。

花火船の艫にしやがんで居た印袢纒の老人は、其處に立てゝあつた、赤地に白く鍵屋と染め出した旗を拔いて、頭の上でぐる〳〵と大きく振り廻した。もうおしまひといふ合圖らしい。

船首の技手は筒の掃除をする。若い親方はプログラムを疊む。見物は思ひ〳〵に散つて行つた。散つた跡の河岸に誰

れかゞ焚きすてた焚火の灰が僅かに燻つて、ゆるやかな南の風に躍いて居た。

一番大きな筒から打上げる花火は、一番面白いものでなければならない、といふ理屈は何處からも出て來ない譯であつた。それでも、なんだか少し欺されたやうな氣がしたのは、存外自分ばかりではないだらうと思つた。

そして、自分は此れ迄に、此れとよく似た幻滅を感じさせられた色々の場合を想ひ起しながら、又あてもなく、祝日の人通りに賑ふ銀座の方へ歩いて行つた。

## (二)ボーイ

Ａ町を横に入つた狹い小路に一軒の小さな洋食店があつた。たつた一部屋限りの食堂は、せい〴〵十疊位で、そこに並べてある小さな食卓の數も、六つか七つ位に過ぎなかつた。併し部屋が割合に氣持のいゝ部屋で、凡てが淸楚な感じを與へた。のみならず、そこで食はせる料理も、味が輕くて、分量が餘り多くなくて、自分の鈍い胃には比較的に工合がいゝので、何かの機會に其處で食事をする事も稀ではなかつた。

廣い此の都會の、數多い洋食店の中でも、自分の注文に合ふやうな家はまことに稀であつた。高等な料理店へ行けば、室內も立派で淸潔ではあるが、其處に集まつて食事をして居る人達が、餘りに自分とはかけ距れた別の世界に屬する人達のやうであつた。さういふ中に交つて見ると、自分が唯一人間違つてまぎれ込んだ異國の旅人でもあるやうな心持がして何となく壓迫を感じるのである。それかと云つて、もう少し氣樂な處では、卓布や食器がひどく薄汚なかつたり、妙に騷々しかつたり、それよりも第一料理が重苦しくて、自分の胃には據なく負擔が過ぎるのである。

さういふ點で、自分の六かしい要求に比較的よくはまるのが、此のＡ町の家であつた。此處へは一團の政治界や

界に羽をのして歩くやうなえらい人達は來ないやうであつた。さうかと云つて餘り騷々しいぶろれたがり屋の酒呑みの客も來なかつた。來て居る人は、勿論どういふ人か分らないが、何かしら少くも自分と同じ世界の何處かに住んで居る人のやうな氣がした。時々は家族連の客も來て居たが、みんなつゝましい、靜かな人達のやうであつた。

食卓には、いつも、切子ガラスの花瓶に、時節の花が挿してあつた。それがどんな花であつても純白の卓布と淡色のパネルによくうつて美しかつた。ガラス障子の外には、狹い形ばかりの庭ではあるが、一寸した植込に石燈籠や手水鉢などが置いてあつた。そして手水鉢にはいつでも淸水が一杯に溢れて居た。

ボーイは唯一人で間に合つて居た。それは三十を少し越した位の男であつた。いつでもちやんとした禮裝をして、頭髮を綺麗に分けて、顏を剃り立てゝ、何處の國の一流のレストランのボーイにもひけを取らないだけの身嗜みをして居た。

何も此男に限らない事ではあるが、私は凡てのレストランのボーイといふボーイの顏の何處かに潜んで居る或る特別な表情を發見する事が出來ると思ふ。それは何と形容してよいか分らない。例へば從順と倨傲と、或は禮讓とブルタリテイと、二つの全く相反するものが互に密に混合して、渾然としたものに出來上つたとでも云つたらよいか。此れが邪魔になつて、私はどうしても此階級の人達に對して親しみを感じる譯に行かない。

それでも永い間の顏馴染になつて見れば、矢張りそれだけの心安さは出來た。外に客の居ない時などには、適には世間話しの一つもする事はあつた。

あの大地震に次いで起つた火災は、此の洋食店の邊も殘らず灰にしてしまつた。一二月もたつて近邊にぽつ〳〵バラツクが建ち並ぶやうになつた頃に、思ひ出して行つて見たが、其の店は未だ燒跡のまゝであつた。料理場の跡らしい煉

瓦の齏の崩れたのも其儘になつて居た。此邊は地震の害も可也にひどくて人死にも相應にあつたといふから、此處の家の人々にもどういふ怪我がなかつたとも限らないと思つた。そして、あのボーイが無事であつたかどうか聞いて見たいやうな氣がした。

それから三月程後に、再び此處を通つて見たら、いつの間にか、バラツクが出來上つて、開業して居た。這入つて見ると、凡てが昔とは丸でちがつた感じを與へた。よく拭き込んだ板敷の床は凸凹だらけの土間に變り、鏡の前に洋酒の並んだラツク塗りの飾り棚の代りには椽臺のやうなものが並んで、そこには正札のついた菓物の箱や罐や罎詰の類が雜然と並んで居た。昔は大きな火鉢に炭火を盛に焚いて居たのが、今は煤けた筒形の妙なストーブのやうなものが一つ室の眞中に突立つて居た。石を張つた食卓は冷くて、卓布も掛けず、もとより花も活けてなかつた。

ボーイは居なかつた。其代りに若い女ボーイが一人居た。大柄な肥つた女で、近頃はやる何とかいふ不思議な髮を結つて、白いエプロンを掛けて居た。

前のボーイはどうしたのだらう、聞いて見たいと思ひながらもとう〳〵何も聞かずに其處を出た。

何だか少し物足りないやうな心持になつて、そこらのバラツクの街を歩いた。自分の頭の中にある狹い世の中の一角が、それは小さな一角ではあるが、永久に燒拂はれたやうな氣がした。何故だらう。

今迄のあの店の部屋の古風な裝飾なり、又燕尾服を着たボーイなりが、凡て前の世紀の殘りものであつたのが、火事で燒けた此の機會に、一足飛びに現代式に變つてしまつたのだといふやうな氣がした。そして、事によると、あのボーイはその前世紀から燒け出されて、しかも今の世紀に落ち付く家がなくて、困つて居るのではないかといふやうな想像もした。

それから暫くして又行つて見ると、私の頭にはもう此處に居なくなつた筈の昔のボーイがちやんと出て控へて居た。聞いて見ると病氣で休んで居たといふのである。私はいつもながらの自分の任意な空想に欺されたのだと思つて可笑しくもあつた。併しそれにしても此のボーイの外貌について、一つ著しい變化の起つて居るのを見逃す事は出來なかつた。それは、地震前には漆のやうに黑かつた髮の毛が、急に胡麻鹽になつて、しかも其白髮であるべき部分は濁汚い茶褐色を帶びて居る事であつた。そして、思ひなしか、眼の光にも曇りが出來て、何となしに憔悴した表情が此人の全外容に表はれて居るのであつた。

私は別に何事も深く尋ねても見なかつた。唯地震當時の模樣など聞いたばかりで歸つて來た。

其後又行つて見ると、今度は又男ボーイは居ないで前の女が唯一人で給仕をつとめて居た。あの男は又病氣でもして居るのかと思つて聞いて見ると、先日からもう暇を取つて、此處には居ないといふのである。どうしてかと聞いて見ると、よくは分らないが、何か間違でも仕出來して、一度出されかゝつたのを、定客か誰かの仲裁で、再び元通りになつ居た、併し矢張工合が惡くて、結局自分でよしてしまつたのであるらしい。

此の事件の內容については、それ切りで何事も自分には分らない。併し、それは、若しあの大震災さへなければ起らなかつたやうな事件ではなかつたらうかといふ氣がした。少くも震災が事件の「引金」を引いたのではないかといふ、漠然とした想像をした。そして、此の事は兎も角も、今度の震災が動機となつて起つたであらうと思はれる、ありとあらゆる事件や葛藤、それ等の犧牲となつたさま〴〵な人達の事を、空想の馳せる限りに思ひめぐらして見た。

# 詞華

春江歴参帖（十二首）……岡本一平

櫻（百三十九首）……岡本かの子

一、春溪にて

僧『久しく春溪といふ名は聞いて居ました。だが來てみれば只の芥川ですね』

溪庵主『お前が芥川に見るだけで、まだ本當の春溪を見る眼が無いのだ』

僧『如何なるか是れ春溪』

溪庵主『流の音さらさらさらさら』



二、筍

僧『そこでなにしてるのです』

隱士『お前の筍を堀り出してゐるのだ』

僧『たちまち、わたくしが堀り出でたらどうなさる』

隱士、僧に一掌を與ふ。僧休し去る。



三、楊柳横橋

僧『質問いたします。どうしたら深い禪河の底を研究し盡す事が出來るでしようう』

通行の老僧、僧を捉へ橋下に蹴込まうとする。

僧『あやまつた。あやまつた』

老僧『蹴込まれた方がお前の爲めになるのだがなあ』

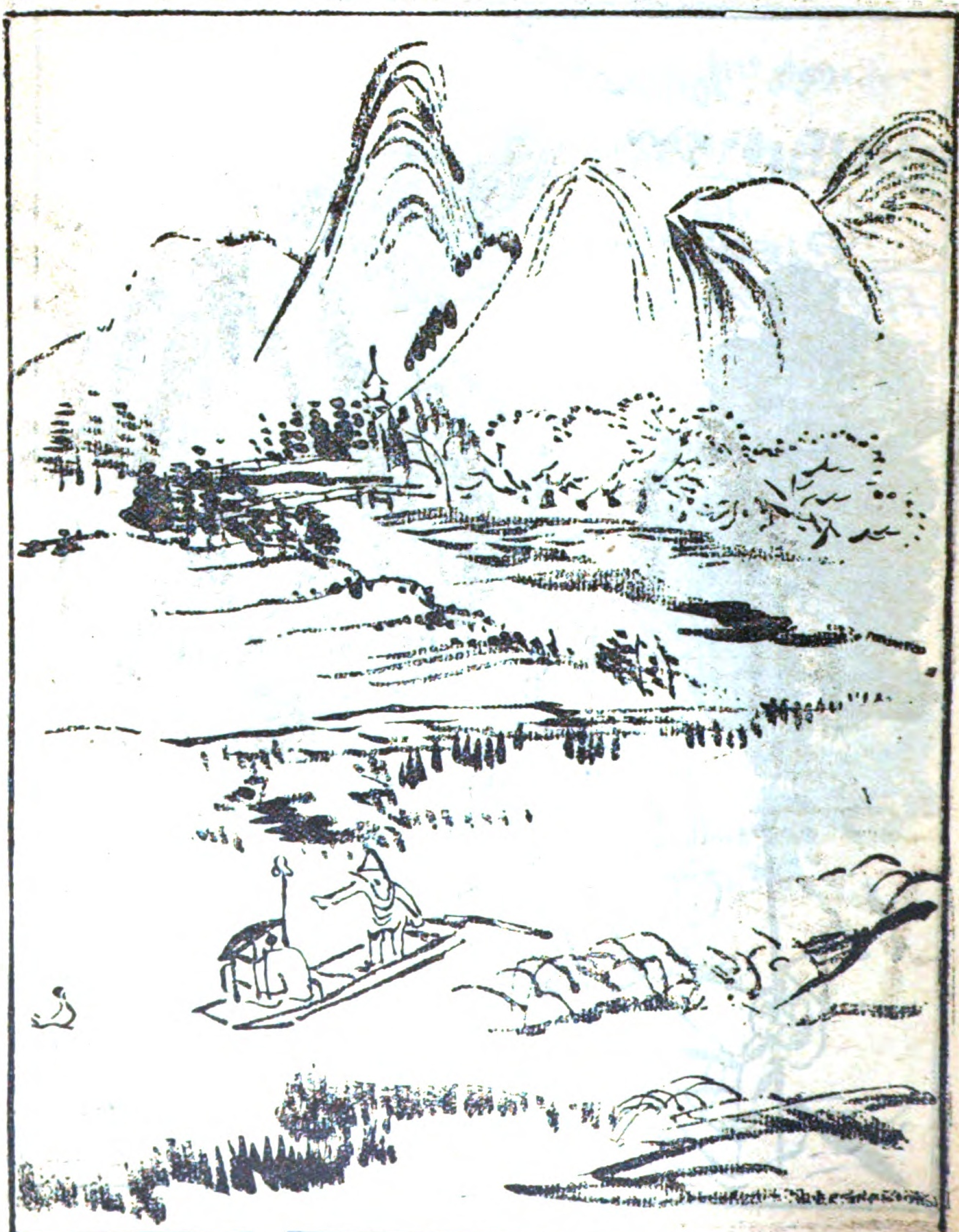


四、桃水を渡る

船頭『こゝは桃の名所でさ。桃をご覧』

僧『三十年來劍客を尋ね、幾回か葉落ち又枝を抽く、桃花を一見してより後、直に如今に至つて更に疑はず』

僧うたふ。



五、暮露踏鴈

僧『小僧。見ろ。空の鴈が水に映つて居る，鴈に影を落す心もなく，又水に影を映さうとする料簡も無い。それで居て空の鴈がちやんと水に映つてる。なぜだ』

小僧『家鴨の足は短いよ。鶴の足は長いよ。心配しなさんな』

僧『生意氣いふな。油でもこぼさぬ用心しろ』

小僧油餅を提起して曰く『油々』



六、煙市俯瞰

鬧市を俯瞰する岩頭にて一憩

僧『これから煩惱熾烈の市に入るのだ。どう覺悟してかゝらうか』

道伴れの僧『三祖大師の仰せられた言葉がある。六塵を惡まざれば還つて正覺に同ず。これがよからう』



七、淫肆嬌聲

女『ちよいと坊さん。おあがんなさいな』

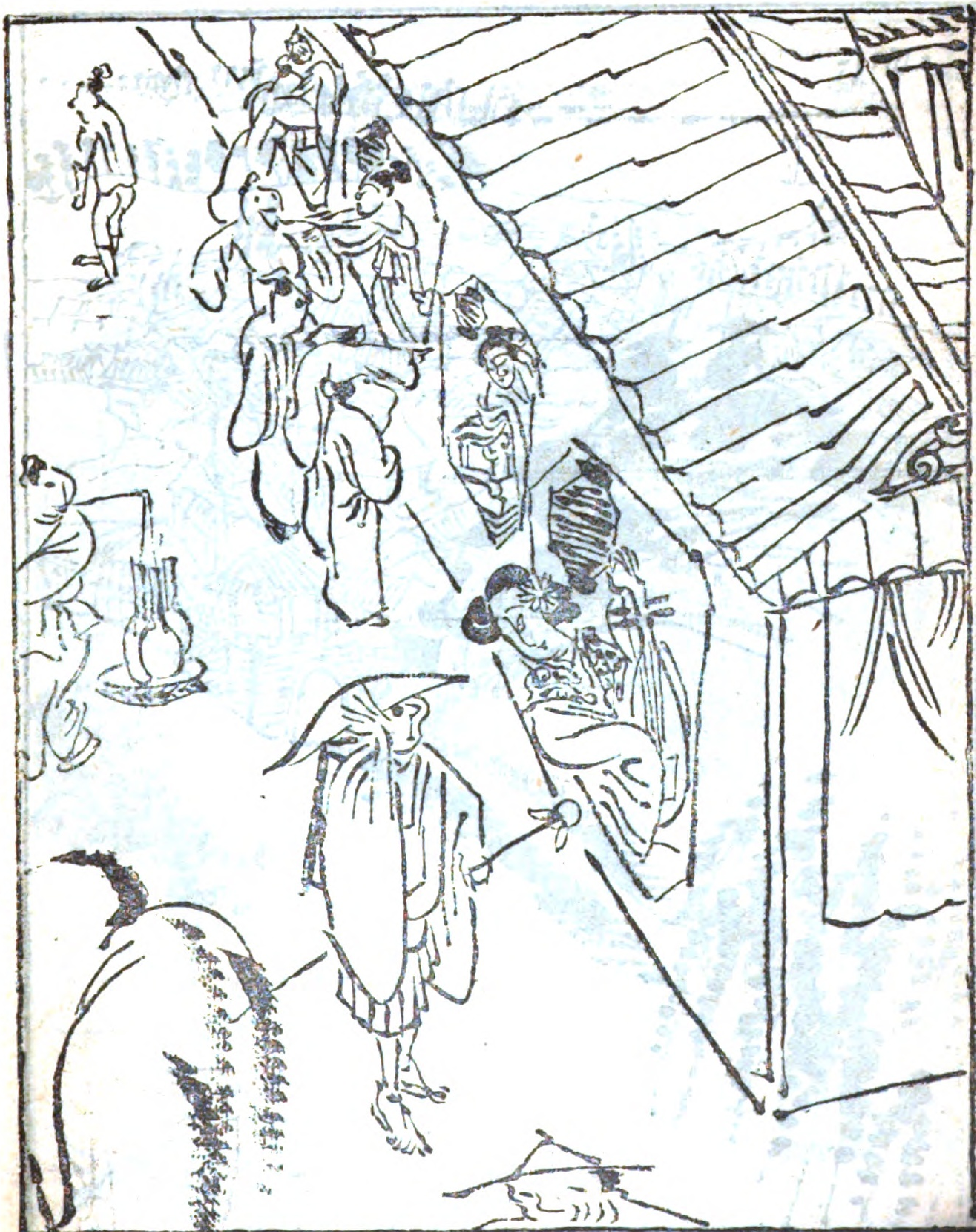
僧『おれは出家の身だ。女に近付かない』

女『不自由な出家ね。ぢや女を濟度する時はどうするの。』

僧『濟度は別だ』

女『ぢや、濟度にあがつて下さい』

僧『是非に及ばね』



八、觀世音菩薩

僧『頼むから淫りがましい態度に出て呉れるな。わしは濟度にあがつたのだ。』

女『あたしも一生懸命濟度してあげようとしてるのよ』

僧『はてな』

女『普門品第二十五、若衆生有りて婬欲多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば便ち欲を離るゝことを得ん。云々、この救ひの事業を肉で行ふだけよ』

僧『南無觀世音菩薩摩訶薩』



九、春の雨

僧『一雨潤す處、なんとしてか萬花同じからざる』

自ら代つて云く

『羊羹美なりと雖も衆口調へ難し』



十、青宵叩門

僧門を敲く。

門主『誰れだ』

僧『僧です、泊めて下さい』

門主『僧許りでは無い、この境地は佛が來ても受付けぬ神秘境だ』

僧『佛にも到れぬそんな境地がありますか』

門主『駄目な奴だな。だから貴様分際の泊れる處ちやない』門主門を閉す。



十一、春

僧『春になりました。萬物みな芽を生しました。眞理の芽は延びますかどうですか伺ひ度うムいます』

老僧『自分自身の上に觀察してみるがいゝ』

僧『それが御教へでムいませうね』

老僧『芭蕉高き事多少ぞ』

僧『野火燒けども盡きず、春風吹いて又生ず』



十二、春江注海

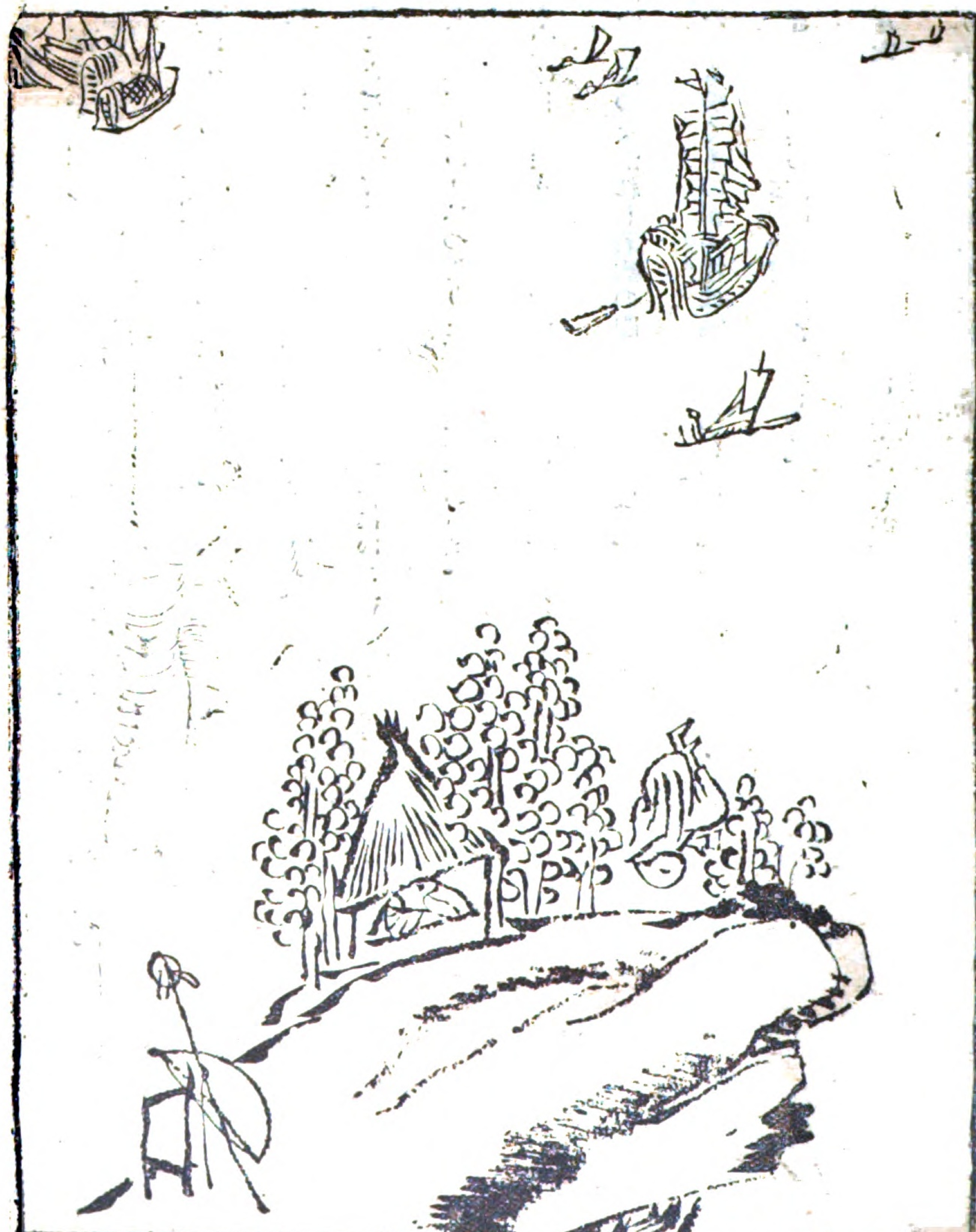
苫庵主『大海死屍を宿せず、といかなるか是れ海』

僧『萬物を包含するもの是』

庵主『なんとしてか死屍を宿せしめざる』

僧筋斗（とんぼがへり）を打つ。

（了）



# 櫻（百三十九首）

岡本かの子

うつらうつらわが夢むらく遠方の水晶山に散る櫻花。

さくら花咲きに咲きたり諸立ちの棕梠春光にかがやくかたへ。

この山の樹々のことごと芽ぐみたり櫻のつぼみ稍ややにゆるむ。

ひつそりと棒大門とざしありひつそりと櫻咲きてあるかも。

丘の上の櫻さく家の日あたりに啼きむつみ居る親豚子豚。

ひともとの櫻の幹につながれし若駒の眼のうるめる愛し。

淋しげに今年の春も咲くものか一樹は枯れしその傍の櫻。

春されば櫻さきけり花陰の淀の浮木の苔も青めり。

ひえびえと咲きたわみたる櫻花のしたひえびえとせまる肉體の感じ。

散りかかり散りかかれども棕梠の葉に散る櫻花ふぶき溜るとはせず。

ならび咲く櫻の吹雪ぽぷらあの若芽の枝の枝ごとにかかる。

わが庭の櫻日和の眞晝なれ贈りこしこれのつやつや林檎。

青森の林檎の箱ゆつやつやと取り出でてつきず櫻花の樹のもと。

林檎むく幅廣ないふまさやけく咲き滿てる櫻花の影うつしたり。

地震崩れそのままなれや石崖に枝垂れ櫻は咲き枝垂れたり。

しんしんと櫻花かこめる夜の家突としてぴあの鳴りいでにけり。

しんしんと櫻花ふかき奥にいつぽんの道とほりたりわれひとり行く。

せちに行けかし容は櫻の樹下みちかなしめりともせちに行けかし。

さくら花ひたすらめづる片心せちに敵をおもひつつあり。

朝ざくら討たば討たれんその時の臍かためけりこの朝のさくら。

あだかたきうらみそねみの畜生が櫻花見てありとわれに驚く。

わが婢なにおもふらん厨邊の櫻花の樹のもとにあちらむき佇てり。

この朝の櫻花の樹のもと小心の與作ものゝゝと歩み出でたり。

わが幼稚さひたはづかしし立ち優り咲き揃ひたる春花なれや。

咲きこもる櫻花ふところゆ一ひらの白刃こぼれてわが夢さめぬ。

わがこころも夜具に仕換へてつつましく掻いい寝てけり月夜々ざくら。

角立ちのみじかきからに牛の角つのだち行けどふれずけり櫻花に。

いみじくも枝垂るるさくら日の本の良子女王が素直きおん眉。

可愛ゆしといふわが言の畏こけれ櫻花見ますかわが良子ひめ。

新しき家居の門に櫻花咲けど夜を暗み提灯つけて出でけり。

櫻花さける道は暗けど一しんに提灯ふりて歩みけるかも。

わが持てる提灯の炎はとどかずて櫻はただに闇に眞白し。

いつぽんの櫻すずしく野に樹てりほかにいつぽんの樹もあらぬ野に。

櫻ばな暗夜に白くぼけてあり墨色一色の藪のほとりに。

つぶらかにわが眼を張ればつぶつぶに光こまかき朝櫻かも。
ひんがしの家の白かべに八重さくら淋漓と花のかげうつしたり。
さくら咲く丘のあなたの空の果て朝やけ雲の朱を湛えたり。
わだつみの豐旗雲のあかねいろ大和島根の春花に映ゆ。
久方の光のどけし櫻ちるこの丘邊を過ぐる葬列。
ほそほそと雫したたる糸ざくら西洋婦人濡れてくるも。
糸櫻ほそき腕がひしひしとわが眞額をむちうちにけり。
わが家の遠つ代にひとり美しき娘ありしとふ雨夜夜さくら。
眞玉なす櫻花のしづくに白黒のだんだら犬がぬれて佇ちたり。
折々にしづくしたたる櫻花のかげ女靴のあとのとびとびに殘る。
ほそほそと櫻花の奥より見えて來る灯にまさりたる淋しき灯なし。
櫻花の奥なにたからかに語り來る人ありて姿なかなか見えず。

糸杉のみどり燃えたりそのかたへふわふわ櫻咲き白むかも。

櫻さく丘にのぼれば遠方の松ふく風の聲かそかなり。

この丘の櫻花(さくら)のもとゆ見はるかす遠松原のほのぼのしかも。

松の間に櫻さきたり松の葉の黒きひまよりうす紅ざくら。

ミケロアンゼロの憂鬱はわれを去らずけり櫻花(さくら)の陰影(かげ)は疲れてぞ見ゆれ。

櫻花(はな)あかりさす彌生こそわが部屋にそこはかとなく淀(よど)む憂鬱。

かなしみがやがて黒める憂鬱となりて術なし櫻花(はな)のしたみち。

早春の風ひよふひよふと吹きにけりかちかちに莟(つぼ)む櫻並木を。

かちかちにつぼむ櫻の樹下みちしなび蜜柑を曳いて通るも。

さくら咲くあかるき外(と)には立ちにけりわが衣(きぬ)の皺にわかに著(しる)し。

仁丹の廣告燈が靑くまた赤く照せり夜の櫻ばな。

櫻花軒端に近し頬にあつるかみそりの冷えのうすらさびしさ。

幽刑のどよみの音のすさまじきどよみの傍の一本櫻。
櫻花さけど獄女房いつしんに働きてあり釜ひかる厨。
裏庭のひよろひよろ櫻てふずぼの手ふき手ぬぐひ薄汚れたり。
しんしんと家をめぐりて櫻さくおぞけだちたり夜半にめざめて。
けふ咲ける櫻はわれに要あらじひとの墟をばひたに數ふる。
さかんなる櫻はわれになまぬるき「許しの心」あに致ふべしや。
わがために花をかかげてさく櫻ひと樹だにありや日の本の春。
薄月夜こよひひそかに海鳥がこの丘の花をついばみに來ん。
この丘に櫻散る夜なり黑玉の海に白帆はなに夢むらん。
夜は夜とて獄の小床に淡星と語らふものか小さくら櫻。
こよひわきて櫻花の上なる晴空に光するどき星ひとつあり。
ひとり見る山さくらばな目を病みてほろほろ苦き舌を含めり。

ねむたげな櫻並木を一聲の汽笛の音がつつ走りけり。

驛前の石炭の層にうらうらと櫻花ちりかかる眞晝なりけり。

自動車の太輪の砂塵もふもふとたちけむりつつ道の邊の櫻。

眞白なる鷄ひとつ今朝みれば血に染みてあり櫻花の樹のもと。

空高く櫻咲けどもわがたどる一本の道は岩根こごしき。

さくらばな咲く春なれや僞もまこととも來よやともに眺めな。

日の本の春のあめつち豪華なる櫻花の層をうち築きたり。

おのづから陰影こそやどれ咲き滿てる櫻花の層のこのもかのもに。

櫻櫻さくら描かんとにほやかにぬばたまの墨をすり流したり。

櫻櫻さくら描きておみな子も金もふけんとおもひ立ちたり。

おみな子の金もふくるを笑はざれ日本のさくら震後の櫻。

日本の震後のさくらいかならん色にさくやと待ちに待ちたり。

金ほしきおみなとなりて詠むれど櫻の色は變らざりけり。

金ほしき今年の春のおのれかもいやうるはしと櫻をば見つ。

このわれや金とり初めつ日の本の震後の櫻花の眞盛りの今日。

停電の電車のうちゆつくづくと都の櫻花をながめたるかも。

櫻さく頃ともなればわきてわが疲るる日こそ數は多けれ。

かろき疲れさくらさく椽にかりそめの綻もわがつくろはずけり。

しばたたきうちしばだたき眼を納めるわれや櫻をまともには見ず。

さくら花まぼしけれどもやはらかく春のこころに咲きとほりたり。

櫻ばないのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわが眺めたり。

うちわたす櫻の長道はろばろとわがいのちをば放ちやりたり。

外の面には櫻盛るをわが瓶の室咲きの薔薇ははやもしぼめり。

眞黒くわれ動ざりあしたより櫻花は窓邊に散りに散れども。

ひそかなる獨言なれけふ聞きてあすは忘れよひともと櫻。

遠稻妻そらのいづこぞうちひそみこの夜櫻のもだし愛しも。

かきくもる大空のもとひそやかに息づきにつつこの丘の櫻。

かそかなる遠雷を感じつつひつそりと櫻さき續きたり。

なごやかに空くもりつつ咲き盛る櫻を一日うち和めたり。

氣難かしきこの家の主人むづかしき顏しつつさくら移植させて居り。

歌麿の遊女の襟の小櫻がわが傘にとまり來にけり。

政信の遊女の袖に散るさくらいかなる風にかつ散りにけん。

うたかたの流れの岸に廣重が現の櫻花を描き重ねたり。

咲き倦みて白くふやけし櫻花のいろ欠伸かみつつわが見やりたり。

道ばたの櫻の太根玉葱を懇いだきわがいこひたり。

ほろほろと櫻ちれども玉葱はむつつりとしてもの言はずけり。

何がなしかなしくなれりもの言はぬ玉葱に散り散り滑るさくら。

ここに散る櫻は白し玉葱の薄茶の皮ゆ青芽のぞけり。

春淺しここの丘邊の裸木の櫻並木を歩みつつかなし。

さくら木のその諸立ちのはだか木にこもらふ熱を感ぜざらめや。

松の葉の一葉一葉に濃やけく照る陽のひかり櫻にも照る。

若竹のあさきみどりに山ざくら淡々と咲きて添ひ立てるかも。

櫻花ちりて腐れりぬかるみに黒く腐れる椿がほとり。

地を撲ちて大輪つばき折々に落つるすなはち散り積むさくら。

大寺の庭に椿は敷き腐り木蓮の枝に散りかかる櫻。

ぼたん櫻ここだく樹てり尼たちが紐かけ渡し白衣干すかも。

鬱として曇天のしたに動かざり梢のさくら散り敷けるさくら。

どんよりと曇天に一樹立つさくら散るとしもなく散る花のあり。

一天は霏すり流し滿山の櫻のいろは氣負ひたちたり。

見渡せば河しも遠し河しもの瀨々にうつれる春花のかげ。

急阪のいただき昇く濛々と櫻のふぶき吹きとざしたり。

さやさやと竹さやぐからに出でて見ればしんと櫻が咲き居たるかも。

塔の澤のいかもの店に女唐停ちその向つ峰の櫻花盛りなり。

いかものを女唐買ひたりその女唐箱根の櫻花の下みちを行く。

わがままはやめなとぞおもへしかはあれ悉さり來れば櫻さきけり。

櫻花の山は淡墨いろに暮れにけり大鴉一羽ひつそり歸る。

大暴風うすずみ色の生壁にさくら許多くたたきつけたり。

ここにして櫻並木はつきにけり遠浪の音かそかにはする。

櫻花の山うしろに高し見はるかす淡墨いろのたそがれの海。

いそがはしく吾を育ててわが母や長閑に櫻も見で逝きませしか。

十年まへの狂院のさくら狂人のわれが見にける狂院のさくら。

狂人のわれが見にける十年まへの眞赤きさくら眞黒きさくら。

狂人よ狂人よとてはやされき櫻花や云ひし人間や笑ひし。

ふたたびは見る春無けん狂人のわれに咲きける炎の櫻。

わが夫よ十年昔のきちがひのわが恐怖たる櫻花あらぬ春。

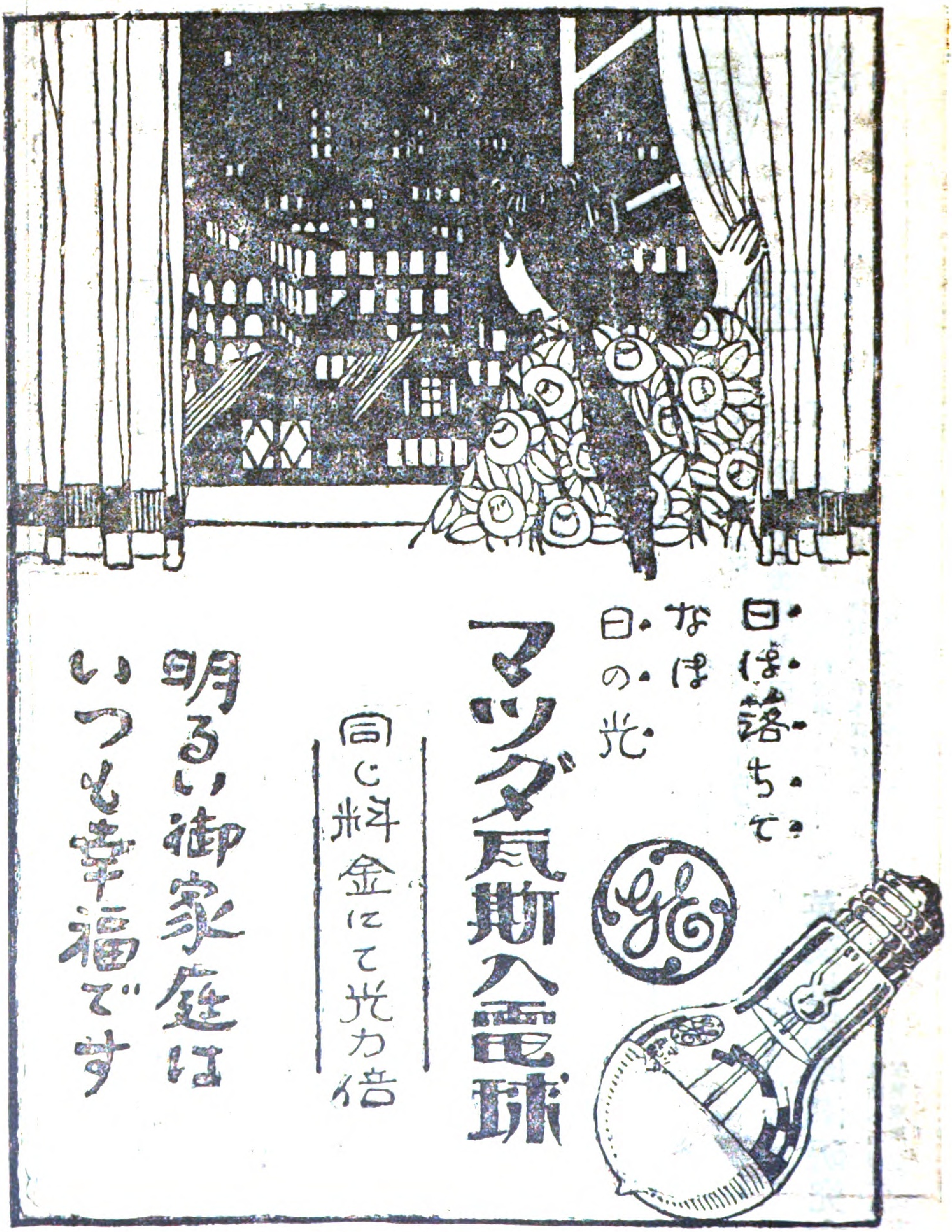
ねむれねむれ子よ汝が母がきちがひのむかし怖れし櫻花あらぬ春。

人間の交友のはてはみな儚な櫻見つつし行きがてぬかなし。（來よと宣らせる佐藤春夫氏に厚く謝しつつ。）

花あかり厨にさせば生魚鉢に三ぼん冴え光りたり。

生さかな光りて飛べりうす紅の櫻の肌の澄みの冷たさ。　一三、春。


氣分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ
増築落成
東洋キネマ
經營者　徳川夢聲


日は落ちて
なほ
日の光
マツダ瓦斯入電球
同じ料金にて光力倍
明るい御家庭は
いつも幸福です



# 外國新聞雜誌研究

主筆　今井信之先生

【英語の解釋力を養ひつゝ同時に世界の大勢に通ぜしむ】

**古き歐羅巴を絶望す**

最後の新らしき歐羅巴として吾人は實に古き歐羅巴を絶望するもの也と英國評論壇の第一人者ヂー、ケー、チエスタトン氏の皮肉とパラドツクスに富む名文

**貞操觀念の變遷**

歐洲婦人貞操觀念の變化は由々しき社會問題也、シカモ事の爰に至れるは歴史の惰力に外ならずと文藝復興時代より大戰期に至る迄の婦人貞操史概觀!!

**アンチオク教育**

アンチオクとは近時米國の教育界に突如として出現せる新語也、ハアヴード大學名譽教授エリオツト老博士の如き口を極めて此新教育法を稱揚せり、詳細なる紹介本誌にあり。

**西藏秘境の冒險**

有名なる瑞典の地理學者、スエン、ヘディン氏の西藏秘境の冒險談、血湧き肉躍る。

**英勞働黨勝利の因**

英國勞働黨は何故に總選擧に勝てるか、失業問題と保護貿易、資本課稅及び現下問題となれる世界改造會議等につき英新

前印度大臣 Sir Sydney Olirier 氏の[illegible]論文

**化學の恐るべき將來**

化學の發達は人間をして將來睡眠の必要を皆無ならしめ、疾病なる語は辭典より去り、綜合的食料と無熱光の發見により人類生活上の一大改革あるべしとの豫言

**勞農露國の經濟復活**

勞農露國のみならず獨墺其他一時は經濟的破綻を傳へられたる各國はみな既に復活しつゝありとの專門家的觀測

**家族制度の危機**

數世紀間人類社會を支配せる家族制度今や危機に瀕すとの論



# わしが死んでも

正宗白鳥

（一）

わしが死んでも誰泣こものか。
山の鳥が泣くばかり。
山の鳥が何泣こものか。
枕團子が食べたさに。

盲目のおさとは、子供の自分に自分の唄つてゐた唄が、隣の家から壁越しにふと聞えて來るのに耳を留めた。そして、「わしが死のとて誰れ泣くものぞ」と、自分でも唄つて見たが、すると、涙がホロ〳〵とこぼれた。

隣りでは、娘のおひさが米を磨いで、釜の下を燃しながら、いろ〳〵な唄を唄ひつゞけてゐたが、その外には、鶏の聲や犬の足音が聞えて來るばかりで、人間の騒ぎは一しきり途絶えてゐた。眞晝の日は冬とは思はれないやうに温かに照つ

であつた。足を行火の中へ突込んでゐるおさとは、僅かに差込んで來る日の光の所へ顏を持つて行つて、淚に濡れた白い目を開いたまゝ、自分だけの心に映つて來るいろ〳〵な影を見てゐた。

今年六十になる彼女には、娘もあり孫もあるのであつたが、近年は一しよに暮してゐることが極めて稀であつた。姉娘のおかつは二十前後の娘盛りに、他村のある男に誘惑されて家を逃出してから、一片の音信(たより)もなく全く行衛が分らなくなつてゐるので、舊暦の一月五日といふ家出の當日を、おかつの祥月命日(しやうつきめいにち)として、おさとは、毎年忘れないで、佛壇に[illegible]でも供へて、心ばかりの回向をしてゐた。妹娘のおふでは、母親を助けて極貧の境涯を凌いで來た上に、[illegible]娘の子をも生みつけたのであつたが、母親の側にばかりはぢつとしてゐなかつた。最初の夫(をつと)のあとを追つて半年も[illegible]方へ行つてゐたこともあつたし、二度目の夫とも屢々他鄕へ稼ぎに出掛けた。ある時は、母親や子供が[illegible]ないのに惱んで、夜中にそつと忍んで出たことがあつたが、不在中の食料の足しにと、五六升の米を買調へて、[illegible]へ置いて行つたのを、明け方になつて娘のゐないのに氣付いたおさとは、慌てて家の中を鬧ひづゝてゐる[illegible]に、[illegible]の底などの大切な精米の上に引くり返して、あとで大騷ぎをして悲しんだ。

[illegible]吉は、義務教育を終へると、漁船に雇はれて自分だけの口過ぎはしてゐたが、次第に自分の家へは寄りつかなくなつて、盆や祭や五節句などで、遠くへ漁に出てゐる者も歸つて來る時にも、彼れだけは滅多に村へ上つて來なくなつてゐた。おふでも、すでに四十近くなつてゐながら、二度目の夫が、妻子を棄てる氣で姿を隱して神戸へ行つてゐるのを聞出して、この頃後を追つて行つて、强いて同棲をしてゐるのであつた。

おさとは、いつものやうに、熊吉やおふでや、おふでの夫の與一の事を思つてゐた。が、さういふ自分の身に親しい人々の事を思つてゐる間にも、隣りの家で米を炊いてゐることが、彼女の心を搖かさないでは置かなかつた。米の飯の

煮立つ音や、温かい飯の匂ひは、彼女の食慾を刺戟して口一ぱいへ唾液を溜めさせた。ここ暫く、たまに殘飯や團子などを貰ふ時の外は、此間うちから、朝も晝も晩も、ふかし芋ばかりで生命をつないでゐるではないか。

行燈からランプ、電燈と、近所の夜が次第に明るくなるのに何の關はりもなかつた盲目のおさとも、世間の盲人よりも傑れて勘がいゝのと、生れて以來六十年の間一つ所にのみ寢起きしてゐたために、この家の中や近所の事は、目明きにも劣らないほどよく知つてゐた。二人の娘を生んだゞけで、男に棄てられたあと、兩親にも早く死なれるし、娘にも置てき堀りにされたりしたので、自然に、一人ぽつちで生きて行くすべをよく覺えるやうになつてゐた。米でも魚でも、食べる物さへあれば、自分で水を汲んで洗つたり、煮炊きをしたりした。

「しかたがない、お芋でもふかさうか」と、彼女は行火から出て、手さぐりで食事拵えに取掛つてゐたが、そこへ、若い男らしい足音が聞えて來て、下駄の音は家の前に留つた。近所の人ではないらしかつた。

「磯野おさとといふのはあんたですか」と、戸口で聲がした。

磯野といふ、久しく忘れてゐた自分の苗字を思出して、おさとは微笑して、「磯野おさとはわたくしで御座ります。あなたはどなた樣です。」と、高い聲を出して云つた。

「わしは半戸の者で、神戸へ稼ぎに行つとつたのぢやが、あちらでおふでさんに懇意になつて、歸りに言傳てを頼まれたのぢや。」

「へえ、それは〳〵」おさとは胸を蠢かせて、訪問者の方へにじり出て、「わざ〳〵こんな所へよう寄つて下されました。あれは丈夫で御座りますかいな。もう一月の餘も端書一本お越して呉れませんので、毎日案じて居りました」

「二人とも丈夫で稼いどるから安心して呉れと云うとつたよ」

訪問者は、家の中やおさとの顔を注意して見てゐたが、あまりに穢しいので、土間に立つきり、板敷へ腰をおろさうとはしなかつた。

「與一は荷上げ稼業をして居るさうで御座りますが、おふでは何をしとるので御座いませう。どうせ亭主が養つちや與れますまいから、おふでも神戸まで行つたかて、一日も遊んぢや暮せますまい。諸式の高い知人のない土地へ出掛けて行つて、あれもえゝ事は御座りますまいにな」

「おふでさんも力があるから荒働らきをやつとるがの。あちらは場所だから、働く氣になりや仕事に不自由はせんし、諸國から寄つて來た知らん者同士の仲に居るのは結局氣兼ねがなうてえゝと云つて居るよ。自分で稼ぎさへすりや誰にも頭を下げいでもえゝし、田舍とは違うて、何處を歩いても賑かで面白いからな」

「それでは、二人の生活が立ちさへすりや、いつまでも此方へは戻らんのでせうか。わたくし一人に此家の留守番をさせといて、いつまでも他國で暮らすつもりで、わたくしをも得心させるやうにあなた樣にお言傳てを頼んだので御座りませうか」

おさとは、淋しさ怨めしさに身を震はせながら、白い目で訪問者を見詰めて顔を近づけて、相手をなじるやうな聲音で云つた。

「いや、さういふ譯ぢやないから、思違ひをせんやうにしておくんな」訪問者は一足あと退りをして、「わしは村へ歸る道次手だから、言傳てを頼まれただけなのぢや。おふでさんも目の不自由な親をいつまでも抛つときやすまいよ。そのうち錢が溜つたら、此方へ戻つて來るか、あんたを迎へに來て神戸へ連れて行くかするだらうから、それを樂しみに、もう少しの間、不自由だらうが辛抱してゐなされ」

「おふでの言條ではそれだけで御座りませうか。夫婦で稼いで喰うて居るから安心せいと、これだけの言條こそ御座りまするか。御他人様にわざ〳〵寄つて頂いて、娘の言條てを聞かせて貰ひますのは、何年にもない珍らしいことなのにたつたそれだけでおしまひなので御座りますか」

「無事で稼いどると云ふのぢやから、それに越したえゝ言條てはなからうぢやないかな」

「それに違ひは御座りませんが、與一といふ男は、おふでを大切にして呉れる男ぢや御座いません。さぞ毎日邪慳にされとることで御座いませう。……御免なされませ。わたくし一人を此處に置いて、邪慳な男を追廻すなんぞ、親も子も因果なことぢや御座いませんか」

「なに、あの二人は仲よく、笑つて暮しとるよ」

「そりや、人様にはさう見えますでせうけれど、今でも陰では打つたり蹴つたりをして、おふでの着てゐる者を引剝がして酒代にしたりしよるのは、わたくしにはよう分つて居ります。……それだから、あなた様に此方へ寄つて頂くやうなえゝ友手があつても、口先の言條てばつかりで、わたくしの身體に着ける物を一枚贈つて呉れるぢやなし、米代や薪代の足しを届けて呉れもせんので御座りますがな。」

おさとは、さうは云ひながらも、若しやこの人がおふでに頼まれて幾らかの金を持つて來てゐるのではないかと、望みをかけて、口先の音信だけで、この人が師氣なく行つてしまふのを恐れてゐた。

「汚い所で御座りますけれど、お休みなさつて、燐寸でも燒べて下されませ」と云つて、マッチを左り口へ持つて行つたが、訪問者は、

「わしは、もう二三軒他へ寄つてかにやならんから、これで御免にしませうわい。まあ身體を大事にしてゐなさい、お

ふでさんもそのうち戻つて來ようから」と云つて、戸口へ出て、振返つて、大きた聲で、「左樣なら」と云つてスタ〳〵と行つてしまつた。

おさとは下駄の音の聞えなくなるまで耳を留めてゐたが、その音が次第に消えて行くとゝもに彼女の心も滅入つた。「あんな人來て呉れん方がよかつた。無事なたよりなら端書でもえゝでないか」と呟いて、再び手さぐりで芋をふかしにかゝつたが、そこへ、温かい米の飯を食べたばかりの隣りの娘が、うまさうな匂ひを口つ端へただよはせながら、顏を出して、

「お婆あ、お前んとこへ珍らしい人が來たな。わし、見たことのない人ぢやが、あの人は、熊さんかおふでさんのことを知らせに來たのぢやらう。えゝたよりがあつたかの」

「わしの所へえゝたよりなんぞ聞かせて呉れる者があるものか。おひさゝんは今の人を見たのかい。」

「あゝ、歸つて行くところをちよつと覗いて見たのぢや。目のしよぼ〳〵した顏の色の青い瘦せこけた病人らしい人ぢやつた。どこの人か知らん」

「ぢや、親を放つといて他所へ働きに行つて、病氣したから親の家へ戻つたんぢやらう。與一でもおふでゞも、今に病氣したら、この家へ戻つて來るこつちやらうが、五體の利くうちは勝手な所を飛歩いて、病んだ時は、わしの所へ戻らうなんて、蟲のえゝこつちやないかの」

「それでも、神戸や大阪のやうな賑かな町で暮せりやえゝぢやないか。同んなじ飯を食べて生きとるのなら、町で暮すのが樂みだとわしも思ふとるぞな」

おひさは、おさとが覺束ない手で竈に火を點けてゐるのを見ると憐れみを感じたので、家の中へ入つて來て手傳つて

やつた。

「お婆あには、神戸も此處も同んなじこつちやな。おふでさんが連れに來たつても行きともないと不斷云うとつたが。目が見えにや、何處に居るも同んなじこつちやな」と、今更らしく憐れみを寄せて云つた。

「さうとも〳〵。わしも昔はな、人に手を曳かれてゞも神戸へも行つて見たい、金毘羅樣へお詣りにも行つて見たいと思ふたこともあつたのぢやが、この頃は何處へも行きともない。娘も孫もわしの側へ寄付かんのを此方から追掛けて行つても爲樣がないと、わしは諦めて居るぞな。娘や孫から喰扶持を贈つて貰はいでもえゝ。わし一人の稼ぎで食べて行かれにや、こゝでぢつとして、ひとりでに死ぬるのを待つとるつもりぢや。生れた家で死ぬるのは、他所の土地でのたれ死にをするよりやよつぽどましぢやと、わしは思ふとる。お前は知るまいが、わしの兩親も祖父も祖母もみんな、此處で一生を暮して此處で息を引取つたんぢやから、わしも此處でなら安心して死ねさうに思はれるがの。あの世へ行つとる兩親もわしのことを案じて居るのが、夜中に目が醒めた時に、此處へ來ていろ〳〵なことを云ふて呉れる」

「お婆あも夢を見ることがあるんだな。夜中にお婆あが獨りで笑つとるのを聞いて氣味の惡いことがあつたが、あんな時にお婆あは夢を見たのだらう」

「わしぢやかて夢くらゐ見るわな。馬鹿にしなさんなよ」おさとはニヤ〳〵笑つて、「わしは一人ぼつちになつてからよう夢を見るけれどな。わしが夜中にひとりで笑ふのは夢のせいぢやないのぢや。たまに何とも云へない可笑いことや悦しいことがあつて、笑はずには居られんことがあるのぢやから、わしが獨りで笑うてゐても狂人ぢやと云ふて呉れまいぞ。家のおふでや與一や、さう云うちや惡いか知らんが、この村のいろんな人こそ、狂人見たやうぢやが、わしは目こそ見えいでも、正氣なんぢやからな。わしがこの先どんなことをしようとも、氣が狂つたせいにして下んすな。おひさ

さんは親切に世話をして呉れるから、わしも親身に頼んで置くのぢや」

「誰れがお婆あを狂人だと云ふものか。吉野屋の旦那様は、おさとは利口で、こつちの腹の中を見透すから油斷が出來ん、恐ろしいやうなことがあると云ふとんなさつた。腹の中を見透すといふのは、何のことやらわしには分らんけれどえらいことなんぢやらうな。」

「油斷がならんと云へば、あの旦那樣こそ油斷がならんわな。」

おさとは、その譯を口へ出しては云はなかつたが、ある晩その旦那の揉療治に頼まれて行つてゐた時に、ある事を頼まれたことを思出して、獨笑ひを浮べた。ふかした芋を飯櫃へうつしてから、おひさが歸つて行くと、おさとは、温かいのを手の平でころがしながら口の所へ持つて行つて、暫く夢中で食つてゐたが、腹がくちくなると、稍々安らかな氣持になつて行火の中へ入つた。

（二）

おさとは誰れに習つたのでもなかつたが、中年から按摩を稼業見たいにして、長い間糊口の足しにして來た。しかしさして呼んで呉れる家があるのではなかつた。賭博者などに頼まれて質入れの使ひをもしたが、賭博の盛んな時には出し入れが頻繁なので、かういふことが却つていゝ身入りになつた。

この頃は三日に一度くらゐ吉野屋の旦那の肩を揉みに行く外には、殆んど按摩の頼み手もなかつたし、賭博も流行ないので、使賃が取れなかつた。それに、おふでの出奔當時のやうにはお情けの貰ひ物も得られなくなつた。一人ぼつちの心細さをこぼしても、人が親身に聞いて呉れなくなつたし、近所の世間ばなしの仲間へ入つても蔑視れるやうになつ

たのを、彼女は感じだしたので、生活に苦な外に、浮世が心淋しく思はれた。おひさの外には、懐つこい言葉をかけて呉れたり、たまに手助けでもして呉れたりする者が、隣近所にもなくなつたのを、彼女は昔に比べて歎息した。「お母の死んだ時やお父の死んだ時には、大勢寄つて來て葬式の世話をして呉れたのだが、わしが死ぬる時には、誰も構つちや呉れまい」

おさとは、行火にあたつたり日向ぼつこをしたりしてゐる時に、いつそ死んじまつた方がいいと思はれて、痛くない樂な死方を考へることもあつたが、年齢は取つてゐても身體はまだ健かなのだから、もつと生きて行かれる生命を早く絶つのに未練が殘つた。「娘でも娘の婿でもわしを厄介者にして、わしを棄てて他國へ逃げて行つたのだし、近所の者でもわしを除け物見たいにして侮つてゐて、みんなで、生きとる用のない人間のやうにわしのことを思うとるのが業腹だ。わしはもつと生きとらにやならん」と、自分で力を出すこともあつたが、さういふ時には、彼女の心も冴えて光つて、眞暗ななかに火花が散るやうな氣持がした。……若い時分に、おかつとおふでとを續けて生んだあとで、直ぐにまた女の子を生んだのを、そんなに子供を、ことに女の子を幾人も育てるのは苦しかつたので、夫や親とも合意の上で、生み立ての軟かい顔を膽えて息の根を絶つたのであつたが、その時のやうな邪慳な、しかし物に怯まない氣強い氣持が、彼女の心にきらめいた。

「おさとは貧乏はしとつても、目が見えいでも正直ぢや」と、かねて人に云はれてゐたことも、今のおさとには悅しくはなかつた。

話好きな吉野屋の旦那の揉療治をしてゐる間に、今日の世間話の外に、昔の、まだ大名や武士のあつた時分の話を聞かされたことがたびたびあつたが、そのうちで、座頭のなにがし檢校のなにがしの、いゝ事悪い事の與つた話が、同じ

盲人であるために、おさとの頭に深く刻まれてゐたので、他所の土地には盲人でももつと屈託ないゝ生活をしたり、日常に負けない仕事をしたりしてゐる者が、今の世にでもあるに違ひないと思はれた。

風の寒いある晩、おさとは近所が寝鎮まつた時分にそつと家を脱出して、自分の知つてゐる小径を、あちらこちら歩いて見た。時々犬に吠立てられたゞけで誰れにも會はなかつた。彼女は三晩夜あるきを續けた。どうせ物が見えないにしても、夜と晝とでは歩いてゐる間の氣持が違つた。神經も一層鋭くなつた。三日目の晩に、彼女は、小高い所にある家の中で微かな物音を聞きつけると、足を留めて耳を澄して笑ひを浮べた。この頃は警察がきびしいから賭博がやまつたといふ評判があつたが、どこかでこつそりやつてゐるやうに自分には思はれてゐたのだが、やつぱりさうであつたと、夜あるきの無駄でなかつたのを喜びながら、その家の前に立つて、杖の先でコツ〳〵と戸をたゝいた。家の中では燈火を消してしばらくまごついたが、おさとは、「騒ぎなさるな、わしぢやがよ」と無遠慮に聲を高めて云つた。するとまもなく、雨戸を少し開けて顔を出した者があつたが、

「おさとさんか。何の用で來たのぢや?」と、腹を立てたらしい聲がした。

「さう、わしぢや。内へ入れとくれ。外で大きな聲で用事を云ふちや、お前だちにも悪からう」

その男はマッチを擦つて燈火を點けた。婆あ何しに來たのかとか、ぢや、兎に角内へ入れてやれとか、話合つてゐたが、やがて、戸口が開いた。おさとは、「夜中に來てお邪魔をします」と、笑顔をして入つて行つた。座中の誰れがどんなに嫌な顔をしてゐようとも、目を尖らせてゐようとも、おさとには何の關はりもなかつた。

「皆さんにちと相談をお願ひに來ました」と、突立つたまゝ、一座の者に向つて白眼を見せながら、「わたくしも娘や孫に先立たれまして、この先この世で暮せる當てが御座りませんから、いつそお寺の鐘の中で首でもくゝつて死なうと思ひ

ましで、家を出て來たので御座りますが、此處まで來て、皆さんが遊ぶ事をして居りなさるのに氣がつくと、死ぬるのはいつでも死ねる。死に急ぎをせいでもえゝ。皆さんにお頼み申したら、六十になる盲目の老人のお米の代くらゐ惠んで下さるに違ひないと、不意に思はれました。それで、急に元氣がついて、皆さんのお邪魔になるのも關はずに聲を掛けて内へ入れて貰ふことにしたので御座ります」

いやに敬語を使つて憐れを乞ふのを、一座の者は可笑しく感じないではなかつたが、深夜の賭博の最中に盲婆の侵入して來たことは、薄氣味が惡かつた。平生は貧しいながらも、身だしなみの割合によかつた彼女も、この頃は窶れるままにまかせてゐたので、蓬の如き髮や二つの蠣の如き目など、薄汚くて人間離れのした凄さを現はしてゐた。

「晝間來りやえゝのに、夜夜中密かしに來るといふことがあるものか。お前が喰ふに困つて首をくゝりたいほどに思うとるんなら、警察へでも役場へでも願うて出たらえゝでないか」と、親分株の松太といふ男が穩かに云つた。

「わたくしもそう思うとります。わたくしを邪慳にして饑え死をさせる者はわたくしの敵で御座りますから、娘でも孫でも村の人でも、用捨はしません」

「折角たのみに來たのぢやから、空手で追出す譯には行くまい」松太は一圓札を紙切で包んで、子分に命じておさとへ手渡させて、「今夜は去んで寢なさい。……それで餘計なことは誰れにも喋舌らんやうにな。えゝか」

「わたくしはお世話になつた方の御恩は忘れやしません。それでは頂戴して去にます」

おさとは頭を下げて禮を云つて出たが、後から戸をピツシヤリ締められると、「わしも久振りに一儲けした」と、手にもつてゐる札の上を撫でた。寒い風を落して來る空を時々仰ぎながら、トボ〳〵と家へ戻つて、行火の中へ入つたが、暫くは昂奮して眠れなかつた。

「九日でも十日でも生き伸びなければならない。生きとりやまたえゝことがあるぞ。死に急ぎをするといふことがあるか」と、誰れかゞ側で云つて力をつけて呉れるやうに感じて、おさとは、

「左様で御座りますとも」と、口のうちで答へた。

翌朝は、彼女は藁で髪を束ねた。そして、久振りで白米を買つて來て、温い飯を腹一杯に食べた。機嫌のいゝ顔して、日あたりのいゝ所へ出て、誰れかゞ話をしかけて呉れないかと待つてゐると、

「お婆あは昨夕夜中に外を歩いとつたの、何處へ行つたのだよ」と、おさくが側へ來て云つた。

おさとはドキツとしたが、何喰はぬ顔で「お前わしを見たのかい」

「あゝ。夜中に家の前で犬が吠えてならんから覗いて見ると、お前が通つてゐたから吃驚した」

「さうかいな。わしは昨夕はおふでのことなんぞが思出されて、氣が騒つてならんから、氣晴らしに歩いたのぢや。昨夕はえゝ月夜ぢやつたな」

「お婆あも醉興な。あの寒いのに外を歩るいて何になるのだな」

「白人の月見は正氣の沙汰ぢやないといふんかい」

おさとは、昨夕の所行を近所の者に知られてはゐないかと、さすがに氣になつたが、誰れも様子を知つてゐるらしい口は利かなかつた。たゞ、白米や油揚などで食事をしてゐるのが、人に怪まれた。

（三）

舊暦の正月は近づいた。おさとは、おふでの方は當てにならないにしても、孫の熊吉は久振りに家へ歸つて來るだらう

と待設けて、それを楽みにしてゐた。

四五日の間は隣りの飯のにほひに涎を垂らさないでもよかつたが、腹に足りるだけ美食をする癖をつけたゝめに、屑芋や豆腐殻で生命をつなぐのが、一層情けなくなつた。十日ばかり呼びにこなかつた吉野屋へ、此方から出向ひて行くと、

「ぢや、やつて貰はうかな」と、主人はおさとを奥へ呼入れて、自分は炬燵にあたつて背を向けた。おさとがいくら丈夫であつても、年齢のせいと、この頃極端に粗食をしてゐるためとで、指先の力が衰へて、療治が利かなくなつたのを物足らなく思ひながらも、あたり前の賃錢をやつて仕事をさせてやるのが、この主人の自慢の慈善になつてゐた。

「此間、上から戻つて來た男がお前の家へ寄つたといふ噂があつたが、おふでからえゝ音信があつたかい」と、主人が訊ねると、

「何が、えゝ音信がありますものか。……旦那樣、わたくしは今度こそ、娘も孫も世にない者と常見を極めとります」

と、おさとはキツパリした聲で云つた。

「さう愛想を盡したものでもあるまいが、おふでも無考へな女子ぢやな。四十に手の届く歳にもなつて、働のない男の後を追駈けて遠方へ行くといふことがあるものか。他所へ行つてもえゝことはない。愚図々々してると、末は野垂れ死にぢや」と、主人は、おさとを慰めるのではなくつて、いつも云ふやうなことを云つた。

「さうで御座いますとも。誰に聞かせても、おふでを褒める者はありません。親不孝の罰當りは野垂れ死でもしませうぞい」おさとも口ではいつも云ふやうなことを云つた。そして、訪問者から聞いたおふでの夫婦の消息を主人に話して

「それでもこの頃は夫婦仲がよろしいさうです」と云ふと、

「夫婦仲がよけりや、また子供でも生まれるだらうが、旅の空で子供でも出來ちや厄介だな。おふでもえゝ加減で兒を生まんやうにせんと身が立つまいにな」

「旦那様わたくしも、生まいでもえゝ子を二人生みまして、難澁いたしましたが、姉の方は行方知れずで、どうせ他所で難儀をして死んだのだらうと思はれまするし、妹の方は行先は分つて居りますが、あなたの仰有るやうに、旅で死ぬるかも知れません。わたくし一人が家の番人をして食ふや食はずで居つても爲樣が御座りませんから、いつそ乞食にでもなつて、知らん土地へ出掛けて行つた方が結句ましぢやと思ふこともありますけれど、今は盲人の手を牽いて呉れるものも御座りませんのでな。娘だちは何處の土にならうとも、わたくしだけは、生まれたこの村に死ぬるまで居らせて貰ひませうと極めて居ります。……わたくしだつて、旦那様、若い時分に、おかつは行衛が知れんやうになるし、龜吉（おさとの夫）には逃げられるし、お婆あは弱つて身體の自由が利んやうになるし、途方に暮れた時にや、三人連で乞食に出ようと思ひました。お婆あはどんなになつてもこの家を離れともない、自分だけは此家で死なせて呉れと云ふて聞きませんので、考へ直すことにいたしましたが、あの時には、龜吉は居らいでも、親子三人で仲をよう暮らして居りましたから、乞食をしても三人一しよに居りさへすりやえゝ、餓えて死ぬるのなら三人一しよに死なうと思ふてゐました。わたくしは不具者のせいですか、いつの歳にも死んだお婆あの側を離れたいと思ふたことは御座りませんでしたのに、娘や孫は大きふなると、わたくしなぞはどうでもえゝ人間のやうに思ふとります」

さう云つて、おさとは、三人で助け合つてゐた昔を懐かしんで、子供に手を牽かれて乞食に出たにしても、誰れにも相手にされないでゐる今よりは仕合であつたと思つてゐると、肩を揉んでゐる手の先の力も自づから弛んだ。

「お前も兩方の目が開いとたつら、あの時分に龜吉のあとを追つて他國へ行つたかも知れないんだな」と、主人は欠伸

まじりに云つた。「わたくしは何ぼ男が戀しうても親を拋棄てゝ行く氣にやなれません。親に代へてあんな薄情な男に隨いて行きますものか」

　おさとが氣色ばんで云ふので、主人はふと睡氣を醒まされて、揶揄ふやうに、

「そんなことを云つても、時々は總吉のことを思出すのぢやらう」と云ふと、

「へゝゝ、……それは思出しませいでか。あの人も疾うに死んどるさうですから、わたくしも、死んだ者をいつまでも恨んぢや居りません。あの人もあの世では、わたくしに濟まんことをしたと思ふとりませう」

　眞面目でさう云つてゐるのを、主人は振向いて見て苦笑した。

「わしは今夜は宵から睡うて爲様がないから、橫になつて足を揉んで貰ひながら眠ることにしようか」

　主人は家の者に吩咐けて寢床を延べさせた。おさとは、その間片隅へ寄つて行儀よく坐つてゐたが、この家の簞笥の置場でも金庫の在所でも、女學校へ通つてゐる娘の部屋の樣子でも、手に取る如く分つてゐたので、さう云ふ家の中の有樣に知らず〳〵心を注いだ。あちらの聲やこちらの聲が奥の間へ聞えて來るばかりでなく、人々の足の觸さはりや器物の音が、彼女の胸に微く響いて來た。

「今日はお孃樣はお家に居りなさらんので御座りまするか」と、主人の足の方へにじり寄りながら訊ねると、

「あれは四五日前から他所へ行つとる」と、主人は何氣なく云つた。

「それで、どなたか、お客樣が來てゐなさるので御座りまするか」

「お客樣?……なに、日坂の子が來とるだけぢや」

「日坂のお孃樣が來とんなさるんですか。さつきから、中庭の側のお部屋に居りなさる方は、お家のお孃樣ぢやないと

思ふとりました」

「お前は何でもよう氣がつくから、馬鹿に出來んな。顏についてる目が役に立たんかわりに、お前には首か肩か、何處か外の所に、たゞの人間の目よりももつとよう見える目がついとるんぢやないかと、わしには思はれるよ。盲目は勘がえゝものぢやが、お前はまた特別ぢや、わしは長い間按摩をさせとるので、お前の智慧のえらいことをよう知つとるのぢや」

「わたくしに智慧なんぞありますものか」

「いゝや。有る〳〵。昔の話を聞かせてもお前は解りがえゝ。わしの娘なんぞは、今の事は本なんか讀んでいろ〳〵知つとつても、昔の事を話すと、ちつとも呑込めんらしいが」

「……旦那様、今夜もなにか面白い昔話を聞かせて下さりませ。お大名のお寢室へ化物が出て來ると、寢ずの番がひとりでに眠うなつたといふ、あのお話の續きはどないなりましたか」

「わしも今夜は眠うて、昔話を聞かせるどころぢやないよ」

主人はトロ〳〵と眠りかけた。おさとは自分が智慧があると云はれたのを誇るやうな氣持になつてゐた。日坂の娘が何をしに此家へ來てゐるのだらうかと、考へながら、そつちの方へ心を注いでゐると、その娘が中庭へ下りて、小聲で唄のやうな者を唄つてゐるのに氣がついた。おさとは「四五年前に會つたあの娘さんにしちや、聲柄が大人ならしうなつた」と、耳を傾けてゐたが、その唄に誘はれたのか、主人の寢息に誘はれたのか、いつとなしに氣が遠くなつて、主人の足を掴へたまゝコクリ〳〵と居眠りをしだした。やがては首俯いていゝ氣持で眠入つてしまつた。

「さつきから寢としとると思うとつたら、おさとは何と云ふこつちや。ここへ來てそんな行儀の惡いざまをするんなら、

これから家の閾を跨がせんぞ」

ツケ〳〵とさう云つた主婦の毒を含んだ言葉の半ばを夢のやうに耳に入れて、ふと目を醒ましたおさとは、掴まへてゐた主人の足を慌てゝ離して、

「御免なされませ。わたくしとしたことが。……どうしてから眠うなりましたのでせう。御免なされませ」と、聲のした方へ頭を垂れて詫びてから座を立つた。

「可愛想だと思うて呼んでやるんぢやが、そんな無作法な眞似をするのなら、これから決して家へは來て貰はんからさう思ひなさい。旦那様もえゝ機嫌で寢とんなさる。いやらしいこつちや」

「御免なされませ」

おさとは搜り足で襖の側を傳つて次の室へ出た。そして、賃錢をも貰はないで暇を告げて外へ出ると、薄着の肌を寒い風に襲はれたので身震ひした。さつきはどうにも我慢のしきれなかつた睡氣も自から去つてしまつた。急いで家へ歸つたが、行火の火は微かな溫みも殘さないほどに冷たい灰になつてゐたので、直ぐに、敷きつ放しの夜具の中へ潜り込んだ。

主婦に叱られたことを思ひ出すと、怖いうちにも少し可笑くなつた。「あの人の悋氣深いことは昔から知つてゐたが、わしが旦那の足の上に顔をあてゝ寢たくらゐなことで、あんなに怒るのは可笑しい。だけど、旦那は年を取つてゐてもなか〳〵に女子好きぢやから」

吉野屋の主人が若い女を欲しがつてゐて、自分の目をつけてゐる小よしの所へ忍んで行けるやうに、その橋渡しをおさとにさせたがつてゐることを、おさとはよく氣づいてゐた。そんな性質の悪いことをしては吉野屋の人たちに濟まな

いと今までは思つてゐたのであつたが、今夜は、「構ふものか、お金になることなら」といふ氣になつた。

あくる日、吉野屋の下女が按摩賃を持つて來てくれたので、

「主婦さんは怒つとりなさるか」と訊ねると、

「何のことだか、昨夕お前が歸つたあとで、旦那樣を起してツンケンした口を利いとんなさつた」

「さうかよ」おさとは可笑しく思ひながら、「日坂のお孃樣が遊びに來てゐなさるさうぢやが、あの人は奇麗な人だらうな」

「奇麗なものか、ぶく／＼太つてゐて。あの人は何でもよう食べるがの。此方の御親類ぢやけど、日坂の家はこの頃貧乏になつて、子供は多いし、生活に困つとるといふやうな話ぢやが、それで、あの人は此方へ來てからあんなに物を食べるんだらう」

「なんぼ貧乏したつても、わしやお前とはちがふわな。あの人なんぞが不斷ひもじい思ひをしとるものか」

「いゝやちがふ。お前は目で見んから分らんのぢやが、魚なぞ滅多に食べたことがないのか、わしがそつと見とると、頭から骨までしやぶつとる。お孃樣のやうぢやないぞな」

「あんなえゝ聲で唄ふ人がそんなことをするのかい。興が醒めることつちや」

「あの人の聲が何がえゝものか。お婆あは目が見えんだけぢやない、耳もわるいんぢやな」

「阿呆ぬかせ」おさとは非常な侮辱を受けたやうに聲を荒らげて、「わしの耳が何で惡いものか。鶴屋のお孃樣が琴を稽古しとんなすつた時に、わしは調子の合つたか合はんかも聞分けたので、お師匠さんに褒められたものぢや。琴の唄だつて聞き覺えによう覺えとる。本當にせんのなら、今でも唄つて聞かせようか」

「あゝ、唄つて聞せて下んせ」

おさとは、上框に腰をおろして、首を傾げて、兩手の指を曲げて琴を彈く眞似をしながら、脣を動かしてゐたが、やがて、「久方の月のかつらの影たかく、風吹きおくり眞砂路を……」と、松風の唄ひだしを興に乘つて唄つた。

下女は呆氣に取られてゐたが、隣りのおひさは聲を立てゝ笑つて、「お婆あはどうしたのだな」と、壁越しに云つた。

通りがゝりの者も立留つて家の中をのぞいた。

「おさと婆あさんは今日はえゝ機嫌ぢやな」

「氣でも狂つたのかい。」

みんながドッと笑つた。

## (四)

吉野屋の主婦の機嫌を害ねて、あしこの閾が高くなつたなら、差當つて纖弱い稼ぎの道の止切れる譯なので、ちよつと當惑したが、自分のやうな者が、主婦の嫉妬のたねになつたことを思ふと惡い氣持はしなかつた。久振りで自分が女であるやうな氣がした。若い時分に、小さいおふでを連れて、よく吉野屋の仕舞ひ湯へ入れて貰つてゐた時、彼家の老人に、「おさとは、ツル／＼とした奇麗な肌をして居る。惜しいものぢや」と褒められたことがあつたと、おさとは若かつた昔を思出したが、今自分の肌に觸つて見ると、ガサ／＼として、按摩をしてゐる時に感じる吉野屋の主人の手の皮や足の皮のやうであつた。「歳を取ると、男も女も同じやうになるのか」と、彼女は、彼女のためにはたつた一人の男であつた龜吉の、肉の引締つたガツシリした身體を、前へ浮べた。……龜吉の身體、それから、抱締めて頬擦りをし……

ゐたおふでや熊吉の幼い時から大人になるまでの身體を、指先で今觸つてゐるやうに思出した。人間といふ生物を双手でぐつと抱締めてゐる時ほど、心強いことはなかつたと思ふにつけて、おさとには、抱締められる生物が側に一人もゐないのが佗しかつた。

「吉野屋の旦那様は、年を取つて肌のガサ〳〵した主婦さんよりも、小よしの柔かい身體がようなつたのぢやな。小よしのお母に話して、承知したら、わしが仲人にならうか。悋氣深い主婦さんに遠慮して、儲け仕事を取外すのは阿呆なこつちや」

さうして、四五日でも、米の飯の食續けられる金を得られるのを、おさとはせめてもの頼みにした。それで、日が暮れてから、杖を突いて小よしの家まで出掛けて行くと、母親のおいせは、風邪でも引いたのか、頻りに咳をしてゐた。幸ひに外には人がゐなかつた。

「今晩は……」と、改つた聲を掛けて入ると、

「何用ぢやな、おさとさん。わしや加減が惡うて寢とるんぢやがの」とおいせは不機嫌な返事をした。

「それは〳〵。……頭痛がするのなら額を揉んで上げようかの、」

おさとは不斷になく、相手の機嫌を取るつもりで云つたが、おいせは急に喜んだ聲を出して、「頭は何んともないんだけど、足が拔けるやうにだるうてどもならん。小よしに揉ませようと思うたんぢやが、あれは知らん顔をして遊びに出やがつた」

「若い者は誰れしも家にぢつとして居らんので、老人は何處でも不自由するんぢやよ。……どりや、わしが揉んで上げよう。……お互のこつた。遠慮せいでもゑゝ」

おさとは、上へ上つて、枕許へ寄つて行つて、おいせが辭退するのを構はないで、「お前から揉み賃を取らうとは思はんから氣安うゐなさい」と、相手の心を察してゐるやうに云つて、おいせの足へ手を掛けた。

「ちやちよつと揉んでお呉れ。…あゝえゝ氣持ちや」

「わしも今夜は淋しうてならんから、久振りでお前のところへ話しに來たのぢや。今年ももう片手の指しか日が殘つとらんけれど、お前の家ぢやお正月の仕度はちやんと出來とるんぢやらうな」

「わしの家へはゑゝお正月なんぞ來るものか。小よしが紡績へでも行きや、何十圓も前金が貰ゑるし、毎日ゑゝ給金が取れるといふことぢやで、當人も行きたがつとるのぢやけれども、あれに他所へ行かれちや、わし一人で困るから、な。」

「それでも小よしさんは、お前の云ふことをよう聞いて、家にぢつとしとんなさるから感心ぢや。家のおふでを見なさい盲目の親を拋つといて遠い所へ行きくさつて、」

おさとは、ふと、おいせに比べて自分の不運を感じて、昂奮した口を利いた。

「小よしだつて、明日の日わしを棄てて何處へ行くか分つたものぢやないがの。親の口でさう云ふのは可笑しいけれどな、あの子が女子らしい顏をしとると云うて、惡い事を教へに來るものがあるので、わしは此の頃毎日氣に病んどるのぢや。今夜は風呂へ入つて來ると云うて出たのぢや、どこへ行つたことやら」

おいせは、聞きづらいほどに咳をしい／＼さう云つた。おさとは、おいせの足が細つて／＼ガサ／＼してゐるのに、生命の衰へてゐる生物の哀れさを感じてゐた。そして、吉野屋の主人の望を口へ出しては云ひかねた。

「小よしさんは容色よしぢやから、えゝ婿さんが取れるだらう。さうしたら、お前も安氣になれるといふものぢや、」

「わたしは安氣になれいでも、小よしに働きのある婿が來て呉れたら、その日に死んでもえゝ。あの子の身備が極まる

までは、たとへ死んで極樂へ行かうとも、安心して目が眠れんぞな。お前も子供のことぢや、えらい苦勞をしとんなさるから、わしの心はよう察して呉れるだらかうな」

「あゝ、察しるとも。……わしも、いろ〳〵な思ひをして、長い世を渡つて來たのぢやからの」

おさとは、氣が鬱して來て、相手から娘のこの頃の樣子を訊ねられても、不斷のやうなハキ〳〵した返事はしなかつた。それでも、叮嚀に身體を揉んでやつた。そして、おいせがお禮心で、ゆで小豆を丼へ盛つて呉れたのを貰つて、肝心な用事は一言も言出さないで其家を出た。

寒い風に吹かれながら、力のない足取りでトボ〳〵と家へ歸つた。

開いてゐた戸口を跨いで、戸を鎖して入ると、家の中に何か物音がしてゐた。正月前だから、鼠でも戻つてゐるのではないかと感じたが、その瞬間に、猫の鳴聲がした。

「家の中には何も食物はないのに、ようも〳〵こんな家へ迷込んで來た」と、叱るやうに云つたが、生物のなつかしさに、猫でも側へ引寄せて抱いてやりたくなつて、聲のする方へ蹂り寄つた。猫は闇の中で二つの目を光らせながら、あちらへ逃げこちらへ逃げした。やがて、棚の隅へ飛上つて、悠然として蹲んだ。

「なんぼ逃げても、戸が締つとるから家の外へ出ることは出來まいがな」と、おさとは猫の居場所とは違つた方へ顔を向けて云つた。

「ニヤーヲン」と、猫は盲者の聲に答へるやうに鳴いた。

「お前も食物がないから泣くのか」

おさとは、五日か十日米の飯に有りつくために、五日か十日生きの延るために、惡知慧を働かさなければならないこ

さう思ふと、氣が滅した。

世の中や神の前に飲食を絶つて、自分で自分の息の根を止めたらと、をりをり眞夜中に考へてゐることを考へながら、

「わしがもし野原で死んだら、お前はわしの死骸に喰ひつくんだらうな。お前は人間をたべたことがあるのか」

「ニヤーヲン」と、猫は盲者の聲に答へるやうに鳴いた。

彼は急に身慄ひした。そして、窓の戸を開けて、杖を取つて闇の中を打ちながら、猫を追出した。



記念指輪 シヤクンタラー姫

著者 印度 カーリ・ダーサ
譯者 日本 河口慧海
現代口語體譯文 日本 故 鈴木重信

祝詞

八重雲の八つの姿に宿ります
自由なる御神、さてその御姿は
神のはじめて産みたまへる水。
護摩の法もて御犠まつる聖作――燃ゆる火。
さては時を序づる日と月、大千に充ちわたりて
聲聞かしむ性なる靈氣と
なべての種の源と學者の稱ふる土。
衆生の生命なる空氣と

その八玄を身とし給ふ神のみことよ
滿座の人々を護らせたまへ。

## 序幕

座頭（祝詞を唱へて）これで、祝詞は十分で御座います。（樂屋を顧みつゝ）おい、一寸、化粧がすんだらこゝへ來ておくれ。
座頭の女房（座に入る）お呼びで？何か御用？
座頭　さやう、いやこゝに御座る方々といふが、いづれも眼きゝの方ばかりでな。
そこで一つ、カーリ・ダーサの作られた、新歌劇「記念指環シヤクンタラー」といふのを演じて、お目にかけようと存ずるじや。みんなもよくでかすやうに、一勉强十分にやつてもらはねばならん。
頭女房　えゝ、それはもう、お計畫が行屆いてゐますで、別に落度といつたものは御座いません
座頭　いや、しかしな、ほんたうを言ふと、眼のきく方々の御滿足が行くまでと言ふものはな、どんな上手な俳優でも、自分の腕前が心から善いとは、承知の出來んものでな。
頭女房（謙遜しつゝ）ほんにさうでした。それでと、あなた、今何にせいとおつしやるの？
座頭　さやう、滿座の方々の、お耳の慰みになるやうな歌を、一つ唱つたが、一番でな。
頭女房　では、季節はなんとしませう
座頭　お慰みに十分になるやうな——かうつと、この頃はいつた夏の歌を唱つてもらはうかな。今こそ實に
「水に泳ぐのも樂しく

花の林の梢に香ばしい風が吹いて、
涼しい樹影にうつとりと見るのもうれしい。
とりわけ、夕陽のうつくしい夏の日暮じやからな。」

頭女房　それでは、（と唱ふ）
「耳なるかざりの合昏花、
揺るゝもなよら花蕊に、
をり／＼寄りて蜜蜂の、
接吻するよ合昏花。」

座頭　いやうまい、うまい、よう唱うた。お聞きの方々も、お前の歌の調子がいゝので面白かつたのじやらう。御機嫌の態でな。まるで極楽を描いた彩色畫のやうに見えるじや。そこでと――何をするはずだつたかな。

頭女房　おや、さつき新歌劇「記念指環シヤクンタラー」をすると仰つたでせう――

座頭　ほう、さう／＼。全く忘れたわい、といふのも
「お前の歌の面白さに、
わたしの心が運びさられたのじや。
足早に逃げる鹿に誘はれて、
ドウシヤンタ王が遠くへ行かれたやうなものでな。」（退場）

（序幕終り）

# 第一幕

（ドウシヤンタ王は手に弓と矢を持ち、御者と共に鹿を追ひつゝ戎車に乘り、舞臺に入り來る）

御者（王と鹿とを眺めつゝ）

「あはれ、あが君、
逃ぐる牡鹿と、
張りつめし御弓ぞ持たる君し見れば、
自在の神の人となりて、
かの鹿追ふと我は思ふ。」

王（ドウシヤンタ王）これ、御者よ、われらはあの鹿のために、隨分と追はせられたのう、じやが、まだ

「走る、中々疾く走る、
走りながら、時々振りかへりて戎車を見るのが可愛いゝ、
そして今にも降つて來る矢を、恐れたかのやうに、
うしろ身をひいて、前の方に縮めた樣子も面白い。
疲れた口からは、
半分はみかけた草を、徑にこぼしながら――
しかし見い、あの早い足がきを、

地面には少しも足が觸れないで、まるで宙を飛んでるやうじや。」

（驚きつゝ）

はて不思議な、これほど速く追うてゐるのに、あの鹿め、だん〳〵微かに見えるやうではないか。

御者　いゝえ、王様、それは、これまでと申すものが、道が險しう御座りましたので、手綱を引き締めて、車を遲く致しましたので御座りまする。それ故、鹿も遠くへ逃げまして御座りまするが、しかし、唯今は道も平らになりまして、王様の鹿をお打ちになることも、たやすい事と存じまする。

王　では、手綱を弛めるとよいじや。

御者　ハッ。（と言ひつゝ我車を走らす態度を爲す）

王様、御覽下さりませ。この

「手綱を弛めました馬の様子を

耳をそばだて、首を一直に伸ばしまして、

突立つた鬣(たてがみ)が搖がうとも致しませず、

我とわがひく車の、

その疾さにおされまして、

燥(はや)りたち　燥りたち、

砂烟を蹴あげて、

走りまする様子を。」

王（微笑しつゝ）ふうむ。馬の速さが鹿に勝つたわい。
「我車が疾いものじやから、
いつとも知らないうちに、
早や大ぶ遠いところへ來たらしい。
間を隔てた二つの所が、
一つになつたやうなもので、
わしの眼には一切の羊腸曲路も、
たゞ眞直に見える。
距離といふものがないやうじや。」
御者よ、これを見い、わしは今鹿を殺すぞ。（矢を弓に當て放たんとする擧動）
（樂屋より）
もうし、王様、それは仙家の鹿で御座ります。お殺しくださるな。お殺しくださるな。

御者（聽き且つ視て）王様、鹿を打つ矢道に當りまして、二人の仙人が現はれて御座りまする。

王（敬意を表しつゝ）では、手綱を引き締めよ。

御者　ハツ。畏まりまして。（と言ひつゝその擧動をなす）
（時に一人の仙人、その弟子と共に舞臺に入る）

仙人（手を擧げて）もうし、王様、それは仙家の鹿で御座ります。お殺しくださるな。お殺しくださるな。

「その矢定めてお放ち下さるな。
かよわい鹿の身は、
綿に焰をかざしたやうに。
これにまさつて繊弱いものは、またとありませぬ。
何としてあなた様の、
堅い、鋭い、金剛矢に堪へませうぞ。」
早く御矢を元へお收め下さりませ。王様の武器は危惧に悩む民をこそ救へ、かやうな無辜の生物を、殺すためでは御座りませぬ。

王（敬禮しつゝ）こゝに收めて御座る。（と言ひつゝ言へる如くす）

仙人（喜色滿面に溢れて）
「それでこそ、
まこと榮譽ある、
月種族の王様と申すもの。
やがては、才徳君に似まする、
御王子御出生遊ばして、
轉輪王となられることを祈ります。」

弟子（また手を擧げて）福徳圓滿かな、轉輪聖王とならせ給ふ王子を、王様は必ずお擧げにならんことを。

王　（首肯し）婆羅門の祝福を忝く思ふぞ。

仙人　王様よ、私共は薪を集めに参るもので御座ります、こゝは私どもの師匠、世に一萬仙人の導師と申されて居りまするカヌワ大仙人の隠家マリニーの河邊でシヤクンタラー姫の守らせまする處で御座ります。余りお急ぎの御用も御座りませねば、かしこに入らせられて、姫の御歡待をお受けになりましては、如何で御座りまする。また、

一世を捨てゝ隠れ住む人らの、
やすらかな生活をも御覧遊ばして、
君が御力の威光の行きわたつて居ります際涯を、
お知り置きになることも出來ませう。」

王　大仙人は居らるゝか。

仙人　只今は娘シヤクンタラー姫の不運を拂ひまするために、ソーマチイルタへ参りまして御座ります。尤も賓客があらば御歡待せよと、姫に言ひ置かれまして。

王　さやうか、では、ともあれ、その姫に會はう。姫は大仙人にわしの敬虔を傳へるであらうのう。

仙人　それでは、私共は仕事に参りまする。（と言ひつゝ弟子と共に退場）

王　御者よ、馬を進めい、仙人の隠家を見て、わしらも清しうならうぞ。

御者　ハツ。（と言ひつゝ再び戎車の走る様子をなす）

王　（あたりを見廻し）敎へられずとも、このあたりが仙人の隠家とは、たれにも氣がつくじや。

御者　それと申しまするは？

王　はゝあ、そちは、これを見ないのじやな。こゝは、
「鸚鵡の巣に遊ぶ、
雛鳥らの嘴からこぼれた野生米が、
樹下にたくさん落ちて、
かしこゝと、胡桃をわつた跡の石も見える。
人間を疑はうとしない鹿達は、
人の聲にも驚かず、身動きもしない。
仙人が木皮の衣を着たまゝですゝいだ、
その水の雫が池のほとりの小徑に滴つて居る。
それればかりでない。
「そよ吹く風に小川の水は揺れて、
漣は樹々の根元を洗ひ、
萠えづる若芽は、
醍醐の護摩の煙にうつろひ、
廣い苑のこゝかしこ、
神にさゝぐる吉祥草の葉は刈られて、
恐れを知らぬ小男鹿は物靜かに歩をうつす。

それを見ても解るじや。」

御　者　仰せで御座ります。

王　（少しく行きたる處にて）こゝで車を停めよ、わしは歩いて行かう。さすれば仙家の人に妨げとなるまい。

御　者　手綱を締めまして御座ります。靜かに御降り下さいませ。

王　（車より降り、わが身を眺めつゝ）御者よ、仙人の苑に入るには、くつろいだ裝ひをせざなるまい。この裝束と弓矢はそちに渡しておくぞ。

（といひつゝ獵裝を御者に渡す、御者それらを受け取る）

王　わしは仙家を見て來るじや。それまでに、馬を洗うて置け。

御　者　ハッ。御意の通り致しまする。（と言ひつゝ御者は他出す）

王　（少し行きてあたりを見）こゝが仙家でがなあらう。先づはいらうか。

（入りつゝ右手に愛のふるひ――結婚の吉象の現はれたるを見）

「物靜かなこの修道の仙境で、

はて、右手（めて）のふるひとは不思議なことじや。

まさか、こんな處で、さういふ果報を受けようとは思はないのに、

――しかし、事の起る運命になつては、場所の限りもないのかな。」

皆さん、こちらへ、いらつしやい。

（これを聽きて）おや、庭の南手の方に誰か人の話し聲が聞える。行つて見ようか。（と前に少し進みて）

はゝあ、仙家の娘たちが、若木に水をやるために、ちやうどこちらへ來かけたところじやな。手ごろな甕をもつてるわい。

(つくづくと眺めて)

はて、さて、美しい樣子じやのう。

「宮居の姫たちにも、

またとあるまい、仙家の乙女の美しさ、

野山に咲いた蔓の花の、

苑生の花にもまさる性じや。」

この樹影で、少し待たう。(と言ひつゝ立ちて眺む)

(時にシヤクンタラー姫、前に言ひし如き物もち、その友達アナスーヤー、プリヤンヴダーの兩女と共に舞臺に出づ)

皆さん、こちらへ、いらつしやい。

アナスーヤー　ねえ。シヤクンタラー。お父樣はあなたよりもこの森の樹の方が、大層大事なのよ。でもなければ、若い素馨の花のやうな纖細いあなたに、この樹の根元へ水を撒かせるやうなことを、おさせにはならないと思ひますわ。

シヤクンタラー　あらまあ、これは、お父樣がおつしやつたから許りじやないのよ。この樹をみんな、わたしの姉妹のやうに、思つてゐるからのことよ。

プリヤンヴダー　シヤクンタラー。この森の樹でね、夏の初めのこのごろ、花をつけて居るのは、皆水をやつておいた

のでせう。だから、今花の季節の過ぎたものにも、水をやつておきませう。さうすれば、きつと功徳が澤山ありますよ。自分の欲しいといふものを、離れてゐますからね。

シヤクンタラー　ほんたうにさうですのね、プリヤンヴダー。（と再び水を濺ぐ）

（王は注視しつゝ獨語す）

これが、カヌワ大仙人の姫シヤクンタラーといふのだな。（驚いて）しかし、あのカヌワといふ大仙人も、こんな姫を仙家に置いて苦行をさせると言つては、餘程考のない人じやな。

『何のかざりもないに、おのづから美しい彼女に、
世捨人にふさはしい、その生活を强ひるとは、靑蓮の柔い花瓣で、
堅い藤蔓の根を、切らうとするやうなものではあるまいか。』

まあ暫くこの樹影に隱れて、姫の樣子をありのまゝに見てやらう。（と言へる如くす）

シヤクンタラー　アナスーヤー。プリヤンヴダーに結んで貰つたら、木皮衣の結び目をしめ過ぎたのよ。少し緩めて下さいな。

（アナスーヤー、緩む）

プリヤンヴダー（微笑しつゝ）なぜわたしが、しめすぎたやうに仰有るの。それよりか、御自分をお責めなさいな。盛り上がるやうな、若々しさに乳房が大きくなつたんでせう。

王　よう言うた。

『美し身を、

あらはには見せじと若い姫は、
肩の邊つよく木皮の衣を結びたれど、
しめたる胸は、
蕁の黄みしが中に
花の蕾の匂ふとこそ見ゆれ。」

あの木の皮衣は全く姫の身には不似合じや。が、それにしても、なほその身を飾るに足るとは……いや。

「蓮の花は藻草に蔽はれても、あでやかに、
月の中の斑點は黑くして反つてその清麗を增す、
木の皮ごろもさへ美しう見ゆるその乙女に、
ふさはしからぬといふ、何物があらう。」

それはかりでない。

「鹿の眼なす、
その乙女には、
あらつけないが、木の皮衣もかはゆく見えて、
魅する許りの、
その美しさと、
露ほどもたかはぬ様子は、

「蕾がなかば、顔を出したと言ひたいやうな。」

シヤクンタラー　（前方を見つゝ）　あのアモラの樹が風に揺られて木の葉の手で、私を招いてゐるやうね、行つて挨拶して來ませうよ。（かく言ひつゝ行く）

プリヤンヴダー　シヤクンタラー。一寸そこに、立つて御覧なさい。

シヤクンタラー　なあに？

プリヤンヴダー　あなたがその下に立つていらつしやると、その雄々しいアモラの樹に、姫かづらが寄り添うてるやうに見えますの。

シヤクンタラー　まあ。だからあなたのことを「美辭の主（プリヤンヴダー）」といふのよ。

王　プリヤンヴダーはほんたうによく言ふた。

『若芽のやうな紅い唇、
なよ／＼し枝なす腕（かひな）、
陽春の身こそ、
人の心根奪ふ花でもあらう』

アナスーヤー　シヤクンタラー。あなた、いつかこのアモラの樹の美しい奥さん、若素馨（ナワ・マーリカー）の蔓のことを「苑の光」だと仰有つたでせう。お忘れになつて？

シヤクンタラー　いゝえ、それを忘れちや、まるで自分を忘れたやうなものよ。（蔓のほとりに近づきこれを見る）嬉しいわ、この頃ね、この二つの樹は仲よく暮らしてゐるのでせう。若やいだ標象（しるし）に花のたつぷり咲いた素馨（マーリカー）の蔓

が、澤山に果實をつけたアモラに寄り添うて嬉しさうに愛の樂しさを物語つてゐるでせう。(と言ひつゝ花をみつむ)

プリヤンヷダー　(微笑し)アナスーヤー。あなた、なぜシヤクンタラーが、あんなに熱心に「苑の光」を眺めて入らしやるか御存じ?

アナスーヤー　解らないわ、なぜ?

プリヤンヷダー　「苑の光」があの樹によう似ついてゐるやうに、御自分にもちやうど恰好な方を見つけたいと、から考へて入らつしやるのよ。

シヤクンタラー　それは、御自分のお願ひでせう。(と言ひつゝ甕より水を灑ぐ)

アナスーヤー　シヤクンタラー、あのマーダヴイーの莖は、お父樣があなたと同じこと、お手づからお育てになつたのよ。それに、あなたは、もうあれをお忘れになつたの?

シヤクンタラー　若もさうだつたら、わたし自分を忘れるやうなものですわ。(マーダヴィーの莖に近づきこれを見て)

シヤクンタラー　あら、不思議なこと。プリヤンヷダー、あなたによいこと敎へて上げませう。

プリヤンヷダー　よいことつて、なんでせう?

シヤクンタラー　このマーダヴイーの莖が時節でもないのに、根元から先まで一杯に花を咲かせてゐるの。

(兩女急ぎ來りて)

ほんたう?

シヤクンタラー　ほんたうですとも、これ御覽にならないの?

プリヤンヷダー　(喜色滿面、莖を見る)お姉樣、それじや、わたくし、お返しによい事お知らせしませうか。

シヤクンタラー　お返しつて、どんなよい事を？
プリヤンヷダー　あなたにね、近いうちに、お芽出度い事があるつて言ふこと。
シヤクンタラー（怒れる様子にて）それが、お自分のお願ひなのでせう。そんなお話なら、もう十分。
プリヤンヷダー　あら、お姉様、わたし冗談申上げた積りじや御座いませんのよ。お父様がこの花の咲く標象は、あなたによい事がある標象だと仰有やつたからのことなのですわ。
アナスーヤー　プリヤンヷダー。それで、わたし解つたわ、なぜシヤクンタラーがあんなにこの花蔓を可愛がつておやりになるかゞ。
シヤクンタラー　あれは、わたしの妹ですわ、水をやらずには、居られないじやありませんか。
王　姫は父婆羅門とは、異つた種族の母から、生れたのではあるまいか。或はそんな事を疑ふ必要もないではあらうが。

『姫はまさしく、
わがつゝましき胸の思ひゆゑに、クシヤトリアの花嫁となるであらう。
凡そ疑惑の巷に立ちて、最後の備證となるものは、
たゞ正しい人の胸の傾きではあるまいか。』

しかし、も少し確めて見ねばなるまい。
シヤクンタラー（恐れつゝ）あれ、水を濺けたら蜂が恐がつて、マーダヴイーの蔓から、あれ、わたしの顔へ飛んで
――（と言ひつゝ蜂に悩まさるゝ所作）
王（熱心に眺めつゝ）實に可愛いゝ……苦んで居る様子さへ、一段と乙女は美しいわい。

『蜂の飛ぶ方へと、
すばしこく廻る乙女の眼なづかひ。
恐怖ゆゑに眉毛のあたりで、
物言ふすべを覺えた姫よ——戀ならなくに。』

あゝ（妬ましげに）
『眼敏く慓ふ乙女の眼を掠めて、
その耳のほとりに人の秘言を囁く蜂よ。
拂ひのけようとする美しい姫の手の隙を盗んで
お前は愛の寶なる唇につと觸れる、
——おゝ幸ひ多きものよ、
私は徒に戀の闇路に死ぬるのだ。』

シヤクンタラー　救けて、救けて、蜂が追つて來る。

兩女（笑ひつゝ）救けてつて、私達には出來ませんわ。それこそ、王様をお呼びなさいな。何處の苦行林でも、お護りになるドウシヤンタ王様を。

王　善い機會が來た。出かけよう。怖れるには及ばない。（と言ひかけて、獨語）しかしさう言て出れば、わしが王たることは忽ち知れる。さうじや、かう言はう——

シヤクンタラー　向ふ見ずの蜂が追ふから、あつちへ逃げませう。

（歩きて後ろを顧りみ）

あら、まだ追つて來る。救けて頂戴。

王　（急に走り出で）

『プル王統國を治め、
諸々の邪惡なる者を寤きすと言ふに
仙人のまな娘に、
仇をするとは何者だ！』

（彼等王を見て驚き）

アナスーヤー　あのう、そんな大事では御座いませぬ、たゞ友達が惡い蜂に、いぢめられて困つて居りますだけで御座います。（と言ひつゝシヤクンタラーを指す）

王（シヤクンタラーの方を見て）御修道はお進みでせうな。

シヤクンタラー（恥ぢらひて俯向く）

アナスーヤー　私共も、御立派なお方をお迎へしましたので、修行の幸福も一段と增しませうと存じまする。

プリヤンヴダー　お出かけの道は、如何で御座いましたか。シヤクンタラー。御着を祝ふ品と果物とをお持ち遊ばせな。御足をお濯ぎ遊ばすには、この水でよう御座いませう。

王　お饗應はその優しいお言葉だけで、十分に頂きました。

アナスーヤー　どうぞ、この七葉樹の蔭へ暫らくお坐り下さいませ。大變お涼しう御座いますから、お疲勞をお休め下

さいまして。

王　お勤行で、あなた方もお疲勞でせう。まあ、少しくお休みなさい。

プリヤンヷダー（密かに言ふ）私達は何でも、お客樣の仰有る通りにするのが常前なのだから、さあ、いらつしやい、坐りませう。

シヤクンタラー（獨言）わたしはこの方を見てから、何んだか、この仙家には、不似合な氣持の餌になつたやうだわ。

王（三人を見ながら）あなた方のお同件は實に樂しさうですな。御年齡と言ひ御容貌と言ひ、皆さん、そつくり御一緒ですからな。

プリヤンヷダー（密かに）ねえ、アナスーヤー。あの方はどんな御身分の方でせう。御容子で見ると、勇ましいやうな悧口さうな方で、お口のきゝ方も御上品だし、なんだか、王樣みたいうな氣持のする方ね。

アナスーヤー　私も奇態だと思つてるの。私から伺つて見ませうか。

（聲を出して）

なんだか、面白いお話を伺ひまして、つひおしやべりをします、元氣が出ましたので御座いますが、あなた樣は何處の王統をお輝かしになるお方で、また何處の國の人民があなた樣の御留守について心配いたして居りますか。お見受けしましたところ、餘程お華奢でいらつしやるのに、なぜまあ、こんな處へいらつしやる程の、御苦勞を遊ばしたので御座いませう？

シヤクンタラー　わたしの胸よ、騷がないでおくれ、お前の考へてゐることを、アナスーヤーが訊いてゐるのだから。

王（獨言）どういふ風にわしの事を言たものか、どうやつてわしの身分を隱してやらう――さうじや、

（聲を上げて）私は吠陀の學者で、プル王統の王様に命ぜられて審判をする者です。この仙林を視察せんために參つたのです。

アナスーヤー　あなた様がお護り下さいますれば、この苦行林も全く安穩で御座ります。

シヤクンタラー（戀情に耐へず恥かしき樣子をする）

兩女（王と姫の心を知りて）シヤクンタラー。お父様がいらつしたらばねえ。

シヤクンタラー（怒れる樣にて）いらしたらば、どうして？

兩女　もしいらしたらば、お父様が生命よりも大事なものを、このお方にお上げになるだらうと、かう思ひますのよ。

シヤクンタラー（怒りを粧ひて）何のお話だか私には解らないわ、あつちへいらつしやいな、もうお話は十分。

王　わたしも少しく、あなた方のお友達のことについて、伺ひたいのですが。

兩女　お尋ね下さいまして有りがたう存じます。

王　カヌワ大仙人は、常々清淨の誓願を實行せられる方だと伺つて居ましたが、あのお友達を、その方の娘さんだとおつしやるのは、どう言ふわけなのでせうか。

アナスーヤー　それで御座いますか。それはガウシカと仰有る神通力のおありになる、王族の仙人が御座いまして。

王　ガウシカ？　聞きましたな。

アナスーヤー　その方があの方のほんたうのお父様で御座いますが、お棄てになりましたのを、カヌワ様がお拾ひになつたので、それでやはりお父様になるので御座います。

王　棄てられた？　それは奇態なお言葉ですな。一つお話を初めからお伺ひしたいものですが。

アナスーヤー　では、お聞き下さいまし、昔あの仙人が厳しい苦行をなさいました時分に、何う申すものか、神達が大變それをこはがられまして、厳粛な仙人のお心を碎かうと、メナカと申す天の遊女を送つたので御座います。

王　さやう、神が人間の度ましく苦行をするのを、恐れるといふことは隠れもないことですな。してそれから？

アナスーヤー　ちやうど美しい春の季節で御座いました。仙人はその天女の狂はん許りのお艶姿を御覧になりまして、」

（言ひさして恥かしげな様子をする）

王　はゝあ、よく解りました。すると、あの方はその天女から、お生れになつたのですな。

アナスーヤー　さやうに御座ります。

王　さうでせう。

『その妙麗な容姿は

とても人間生のものとは思へない。

またその燦爛たる光彩は、

とても地上のものではないから。』

シヤクンタラー（恥しげに俯向く）

王　（獨語）ふうむ、所望しても好いな。しかし、あの友達らが戯談には嫁ぎたいとは言つたが、果してさうかどうか。

こいつ甚だ懸念だが。

プリヤンヴダト（微笑しつゝシヤクンタラーを見、また王を眺めて）

あなた様には、何かまだお聞遊ばしたい事でも、御座いますやうで。

シヤクンタラー（指を立てゝプリヤンヷダーを制止す）

王　よく當りました、御推察が。實はそのお方の事について、も少しお聞きしたい事がありましたのです。

プリヤンヷダー　この仙家のものには、少しも御遠慮はいりませぬ。御自由にお尋ね遊ばして。

王　では伺ひますが、

『姫の踏まるゝ仙人の誓願は、
戀の道を沮むと申します。
そこでその誓願を守られるのは、
嫁ぎの日まで？　と、言ふのですか。
それとも姫は永遠に、
その乙女のやうに、涼しい眼をもつた鹿の群と一緒に、
こゝに、一生をお暮らしになると、言ふのですか。』

プリヤンヷダー　道を修むる事についても、友達は自分の思ふやうになるのでは御座いません……しかしお父様の御心持は、相當な方におめあはせしたいと考へて、いらつしやるやうで御座います。

王　（微笑しつゝ獨語）

『望みを增せ、お前の願は難なく通る。
おう私の心よ、すべての疑惑は晴れ、
火だとばかり、今が今までこはがつたものは、

お前の觸れらるゝ玉であつたぞ。』

シヤクンタラー（怒れる如く）アナスーヤー。わたし……行きますよ。

アナスーヤー　なぜ？

シヤクンタラー　ガウタミー伯母樣の處へ行つて、プリヤンヷダーが取止めないばかな事ばつかり言ふと告口するのよ。

アナスーヤー　お姉樣、折角のお客樣を捨てゝおいて、勝手に入らつしやるなんて、仙家に住んでる人らしくないじやありませんか。

シヤクンタラー（答へずそのまゝ歩む）

王　はて、姫はもう行つてしまうのか。（引き留めんとして余りに非禮なりと思ひ止む）

あゝ、かうもあるものかな、人間の愛情に囚はれた者といふものは

『後を附けて直ぐにも行かうと思つたが、

待て、待て、估券と言ふことがあるぞ、

足だけは一歩も動かさなかつたが、

一度はそこへ行つて引戻されたやうな氣持がする。』

プリヤンヷダー（シヤクンタラーを引き留めて）

怒りつぽい方ね。入らつしやることは出來ません。

シヤクンタラー　どうして？

プリヤンヷダー　あなた、わたしに水が二壺借りてあるでせう。あの樹におかけなさつたのね。それを返してから、い

らつしやいな。（と言ひ、強ひて乙女を留む）

王　姫は樹に水をお遣りになるので、もうすつかりお疲れらしいですな。御覧なさい。

『兩腕が力なく垂れて、
手先が眞赤になつてゐます。
甕を捧げるために、呼吸づかひも苦しさうに、
胸には動悸が激しく打つてゐます。
耳にかざした合昏の花は、
汗にまみれてお顏についてゐます。
結びが弛んで亂れかゝるお髮を、
片手でおさへていらつしやるのが、いじらしい。』

私が代つて姫の負債を償ふ事にしませう、（と言ひて指環を與ふ）

兩女（指環を受けてそれに彫られたる名を見、互に顏見合せて驚く）

王　私を變にお考へになつては困ります。それは王様の下されたもので、つまり私が王のものなのです。

プリヤンヴダー　それでは尙更のこと、この指環をお離しになつてはなりません。いゝえ、もう私達の負債など申すものは、お言葉だけで十分に消えてしまひました。

アナスーヤー（微かに笑ひつゝ）シャクンタラー。このお方、いゝえ、この王様の御親切で、あなたの負債は償はれましたのよ。何處へでも入らつしやいな。

シヤクンタラー（獨語）自分で、自分が、思ふやうになればね。

プリヤンワダー　何故。いらつしやらないの？

シヤクンタラー　私、あなたに使はれては、ゐませんのよ、私の行きたい時に、あたし勝手に行くわ。

王　（シヤクンタラーを見て獨語）私が姫を思つてるやうに、姫も私を慕うて居るらしい。私の望も大抵は成るであらう。

『たとへ私の言葉に返事はしないぶんにも、

私の言葉に耳を傾しげて居るのは事實だ。

たとへ私の顏を見ないとしても、

ほかの物に長く留まる視線ではない。』

（樂屋より）

仙人よ、仙人よ、仙家の獸らを護る用意をせよ。

ドウシヤンタ王が近所に獵に來てゐるぞ

『馬の蹄の蹴上げる砂塵が、

仙人らの濡れた木皮衣を干した樹々の枝に、

夜明の空のくれなゐに、

蝗の群が飛ぶやうに落ちて來る。』

王　さては、家來どもがわしを探すために、森を騷がしてゐるな。

（再び樂屋より）

そこへ象が出て行くぞ。老人や女や、子供らが大騒ぎをしてゐるぞ。

『戎車を見て驚いた象が
牙では樹の皮を引裂き、
足にからまつた草は、
引き切り引き抜き、
鹿の群を追うて、
仙家に來たぞ、
修道をみだす、
阿修羅の化身のやうに。』

（女らその聲を聞きて驚きて立つ）

王 （獨語）あゝわしは不幸にして、仙家の幽寂を擾す者となつた。さあ歸らねばなるまい。

兩女 私共は象が恐ろしうてなりませぬ。どうぞ、家へ歸らして下さいませ。

アナスーヤー （シャクンタラーに言ふ）ガウタミー伯母樣が大變心配していらつしやいます。さあお早く、伯母樣の所へ參りませう。

シャクンタラー （歩み難き樣子にて）まあ、あたしの足がしびれたのかしら、動けないのよ。

王 どうぞ、お靜かにお出で下さい。仙家にはお騷がせしないやうにしますから。

兩女 あなた樣、あなた樣は大變お名高いお方で御座いますのに、今日はなんの御愛想も致しませんで、失禮ばかり致

しました。どうぞ、これにはお懲り遊ばさず、また入らして下さいませ。

王　どう致しまして、あなた方にお目にかゝつただけで、十分の御歡待でした。

シヤクンタラー　あれ、アナスーヤー。針のやうな吉祥草の新芽が足に刺さつて。おやおや、着物がクルバカの枝にひつかゝつた。離す間一寸待つてゝ。

（と言ひつゝことさらに時間をいれ、王に流眄を送りつゝ兩女と共に退場）

王　あゝみんな行つてしまつた。わしも家來共の處へ歸らねばなるまい。シヤクンタラーを見てからと言ふものは、あゝ、城へ歸りたくなくなつた。とにかく家來共に遇うて、きやつらを、仙林からは遠離れたところへ置かねばならん。わしはシヤクンタラーに遇ふ樂しみを、止めることが出來ない。

『わしの身體は前へと行くけれども、
亂れた心は後へ奔る、
風に向ふ綾羅の幢幡のやうに、
竿は進むけれども、幢幡は後へと流される。

## 第二幕

（道化婆羅門登場）

道化　（マータヴイヤ）（歎息す）ヘン、何といふおれは惡運なんだ。あんな獵好きな王様についたので、飽き〳〵しちやつたじやないか。何か言へば「そりや鹿だ」「そりや猪だ」「そりや虎があそこに」つて眞晝中でもなんでも、夏塲

けで坊主になつた林の中を、次から次へと追ひ廻されるんだ。そして飲むものといつたら、木の葉の腐れこんだ、ぬるつこい山水の、おまけに、ぴりつと舌を刺す奴なんだから遣り切れない。食ふ物だつて同じこつた。燒肉ばかりと來た上に、何時と決まつては食はれない。夜になつて眠ようとすりや、馬の野郎が喧しうごたつかせよる。折角寢たと思ふと、私生兒の獵犬めらが、朝早くから林へ出かけるんだと、ぎやん〳〵耳の裂けるやうな音をたてるんだ。寢とられたものじやない。おまけにこれ程苦しんでおいて、まだ苦しみは盡きないんだからな。腫物が佝僂の上に出來よつて痛んで〳〵堪らない。それでも、昨日はおれ等遲れたんで、まだ運がよかつた。王様は鹿を追ふて仙林へ行つて、仙人の娘つ子のシヤクンタラーと云ふ美しいのを見たんだそうな。それからといふものは、何時城へ歸るとも言はいで、昨夜よつぴて眠らずに考へてゐた。何かいゝ事でもありそうだ。まあいゝや、少し待つて友達(王の事)が結婚するのを見てるんだ。

(少し行き前方を眺め)

ほら、親友がおいでなすつた。弓をもつて、胸には野生の花環をつけて、深くわが戀人を思ふに似たりと來たかな。よし〳〵、こゝで一つ足が痛んで動けない眞似をして待つてゝやらう。この方便で、少しは骨休みが出來ようわい。(と言ひつゝ太き杖によりかゝる)

王　(登場獨語す)

「姫は容易に得られない。
けれども慕うてゐてくれる樣子を見るに、
たとへ行くところまでは行かない分にも――

兩方に思ふところはある。と心はおのづから慰まざるを得ない。」
しかし、こんな風に戀人と云ふ奴は、自分の心で對手の女の心持を想像して、そして、自分で瞞されるのかも知れない。
「秋波を送つたと考へて居るのが、
それも實は横の方を見たのかも知れない。
緩くり歩いて居るは、戀しいからだとは思ふが、
それも尻が重いからかも解らぬ。
行きませんと友に言うてゝ、
怒つたらしい返事をしたのも、
わしと係りのあることだと見たが、
これも一切を自己（愛自體）と見る　愛のせいかも知れない。」

道化　（おなじ態度にて）あゝ王様、てまへは手足が動きませぬで、ヘイ、口だけで「勝利よあれ！王様。」と申しまする。

王　（微笑しつゝ彼を見）何時から、手足が痛むのじや。

道化　ヘエ、何時からとは情けない。御自分で眼玉に指を突き込んで、なぜ涙が出るぞとおつしやるんですな。

王　そなたは何を言つて居るのじや、もつとはつきり申せ。

道化　では申しまするが、鞏が侚僂の眞似をしまするのは、自分の力からですかな。それとも、水の流れによりまするかな。

王　無論、河の流れによるであらう。

道化　と同じく私のは、王様故で御座ります。

王　どうしてじや？

道化　政道のお仕事は御放棄になつて、かやうな物淋しい處で、樵夫や、獵師の眞似ばかりなさるのが、王様らしいところで御座りまするか。いかゞで御座りまするな。てまへの方は婆羅門の辯に、毎日畜生どもを追ひ廻はしまするために、手も足も抜けて落ちさうになりましてな。もう早や何事も致しかねまするによつて、一日お暇を願ひたう御座いまする。

王　（獨語）きやつ、わしの思うて居るやうなことを申す、カヌワの娘を見てからは、わしも獵には行きたくない。

「弓ひき立て矢筈つがひ、鹿に射向ふ、
あゝ爲じな、爲じな、
已が思ひ女の側に居て、
やさしい眼遣ひ教ふる鹿に。」

道化　（王の顔を見て言ふ）王様は何か外のことを考へておいでになる。てまへはまるで、山奥でひとり怒鳴つて居るやうなものですな。

王　（微笑し）友の言葉じや、無にするわけにもならぬ、わしは留まることにする。

道化　（喜びの色を示し）あゝ、そのお徳でこそ。勝利よあれ！　王様。（と言ひて行かんとす）

王　あゝ、一寸、殘りの話を聞いてから、行つて貰ひたい。

道化　御用ならば、どうぞ。

王　そなた、しばらく休んだならば、わしのために、一仕事一寸やつてくれるじや。

道化　甘いものでも、頂けますかな。

王　いや何れ話さう。

道化　お待ちしまする。

王　おう、誰かゐるか?

守衛　(ライヷタカ)(内に入る)ハハア、居りまするで御座ります。

王　ライヷタカ、武官を呼べ。

守衛　ハハア。(と言ひつゝ外に出で、再び武官と共に入りて言ふ)

守衛　将軍どうぞ、お入り、王様には御用を仰せられようとして、こちらを御覧になつてゐられます。お近かにお進みなされい。

武官　(王を見て獨語)獵といへば、隨分やかましい罪惡だが、王のためには、好い結果を生んでるな。

「絶えず弓をひくために、胸の肉は堅くなつて、日の熱に耐へて汗にも濡れず――少しは痩せたが、

固より太身のさほどにも見えぬ。

山林に戯れる巨力な象のやうに。」

(近づいて)

勝利よあれ!王様。鹿の逃道も解りました。猛獣の居場所も見究めて御座ります。何か外に御用で。

王　マータヴイヤが獵のことを惡くいふで、わしは獵が厭になつたじや。

武官　(觀客を見て言ふ)　マータヴイヤ………言ふだけのことは、しかり言つてくれ。おれは一寸王様の心を飜へすやうなことを言つて見るからな。

(聲を出して)

王樣、あの阿呆奴、實にくだらない事を言ひ居りましたな。いや、當獵の利益と言ふものは實に豪いものでして、

「始終お動きになりますので、お身體は痩せませうが、
身輕くて、却つて氣持がよいやうで御座りまする。
のみならず、怖れにより、また怒りによつて、
獸らの心の變る樣子も、自然と解つて參りまする。
まことの手練と申しまするは、
生物の的に射あてますることで、
それ程の樂しみはまたと外に御座りませぬ。
「獵は罪じや」などゝ人間が申せば、それこそ眞赤な大嘘で御座りまする。」

消化　(怒りて)やい出て行け、物騷がせの親玉つたら貴樣のこつた。折角王樣が人間の本性に立ちかへつて靜まつて御座るに、貴樣のやうな、生兒どもこそ、林から林へと驅けづり廻つて、おしまひには、人間の鼻つたら、口も鼻もない爺猪の口中へはまり込むんだ。

王　將軍わしらは仙林の近くに居るのじやで、どうも、そなたのいふ事にも、同意し兼ねるじや。じやから、今日一日は。

「水牛らにも暢氣に池の水を掻きまはさせ、
鹿も木の下に臥て、ゆつくりたべるやうに、
猪も安心して、ムスタ草を澤山に飽き／＼するほど喰はしてやれ。
そして、このよわつた弓も休ませてやらう。」

武官　御意の如くで御座ります

王　それでは、前驅の弓手共にも、こゝに歸るやうに言ひ附けて貰ふじや。そして、仙林には聊かも障りのないやうに取締つて、なるべくは、あれらをこの近邊に留めぬやうに注意して欲しいじや。

「物靜かな苦行林は、
燃ゆる火こそ、うちに藏すれ。
手には觸れえむ、火精珠の、
他の火に遇へば物燒くごとく。」

武官　御意の如くに取計らひまする。

道化　煽動者よ、出て行け。

王　（下僕らを見て）お前達、みな獵服を脱げ。ライヴタカ。お前は門を見張れ。

守衛　（ライヴタカ）ハハ――（道場）

道化　王様は、蝿奴らまで、すつかりお追拂ひになりましたな。そこで一つあの樹蔭を天幕にして、あの石の上にお坐り下さいませ。私も樂にさせて頂きます。

王　そなた、案内をしてくれい。

道化　では。こちらへ。

王　時にマーダヴイヤ。お前は、眼をもつた果報といふものを知るまいな。と言ふはまだそなたは、美人を見たことがなからうから。

道化　へヘエ。王様は、てまへの目の先に居られまするが。

王　誰でも皆自分の愛する者を、一番の美人と見てはゐるが、わしは仙林の荘厳とでも言ふべき、シヤクンタラーの事を言うてるのじや。

道化　（獨語）こんなことを増長させちや困る。

（聲を出して）

仰せのやうに仙人の娘だと致しますると、お娶りになるわけには参りませぬ。とすれば、美人を御覧になつて、何となさるお積りですかな、友よ。

王　ばかな奴じや。

「なんのために、
人は見る？
頭をあげて眼をはりて、
晴れたる空の新月を。」

プル王統たるわしの身に、避けねばならぬ者には、わしは假りにも思ひは寄せぬぞ

道化　と申しまするは？

王　「あの娘は天女のいとし兒じや、
棄てられたのを、仙人が拾はれたのじや、
素馨(マーリカ)の花が樹から落ちて、
アルカの枝に懸つたやうなものじや。」

道化　（笑ひつゝ）ハハア、椰子の實を飽きる程たべた者が、酸つぱいタマリンドを欲しがるやうなものでしてな。王様は宮中で世界第一の美人を飽くほどお樂しみになつたので、この度はさういふお望みをお起しになつたのですな。

王　お前はまだ、その乙女を見ないから、さういふことを言ふのじや。

道化　では、その娘と申すのは、思ひきつた美人で御座りませうな。王様のお目をお驚かし申したことですで。

王　一口に言へば、
「美の神があらゆる力を振つて、
描き上げたのがその乙女か。でもなくば、
「美」の原型(かた)に生命(いのち)の息を吹き込んだのが、それか。
わたしはその美しい姿を見ると、
創造主(ブラフマ)の智能自體に觸れたやうな氣がする。

道化　つまり、何處から見ても、世間の美人なぞの追ひつく話じやないと、仰せられるのですな。

王　それで、わしが思ひ惱むのじや。
「爪切られぬ莖、
蕾の花の匂もあらに、
疵なき珠のまどかにして、
いまだ味はれざる新蜂蜜。
さるは如意樹の實とぞ言はん。
知らずいづくの幸福人か
その珠うけん。

道化　ハハア。では、お急ぎにならねばなりませぬ。でないと、或はあのイングデイの樹油くさい頭の、仙人の手に落ちるかも知れませぬ。

王　娘の自由にもいかんじや。それにおやぢが、今あそこにゐないでな。

道化　王様に對しまして、娘はどういふ樣子で御座りました？

王　仙人の娘は自然寡言なやうじやが、それでも、
「眼と眼がぴつたりあうた時に、
姫はわしをじつと見た。
そして、何かとよそ事にかこつけて、
美しい顏をして笑つた。

恥かしいといふ一念で、
あからさまには言はなかつたが、
しかし隠してはゐなかつたぞ。」

道化　（笑ひつゝ）御覧になるが早いか、もう膝にとび上つて來るやうなことを、お考へになりましたかな。

王　姫は友達らと一緒に行かうとしたが、その時、特に愛情を十分に現したじや。といふのは、
「かよわい姫は、
二足三足ゆきかけると立ち止まつて、
葦の葉で足を切つた。痛いと言うた。
着物が樹の枝にひつかゝつたと言つて、
——實はひつかゝつたのではないが、
はずしながら、わしを見かへつたぞ。」

道化　では御用意をなさいませ。やがて、王様はこの林を樂苑となさることで御座りませう。

王　友（サァー）よ。わしはこの仙居のうちの者に、見知られて居るじやで、どういふ口實の下に、再びこの仙家に行つたらよからうのう。一つ考へてくれまいか。

道化　何の口實がいりませうぞ、王様　では御座りませんか。

王　それが、どうするじや。

道化　收穫の六分の一を納めよと、仙人におつしやるですな。　（六分の一は國王に收むる地租）

王　ばかな。仙人達はわしに對して、珠玉財寶よりも、もつと〱尊いものを納めて居るじやないか、見い。

「四種の民から納める王の富は、
遂に朽ちて塵となるべきものではないか。
しかるに、行者達はその嚴肅な行事の六分一の、
――不壞の果實を我らに送る。」

（樂屋より）

わし等の使命は、もう濟むぞ。

王　（聞きて）あれは、仙人の聲じやな。穩かな靜かな聲である。

守衞　（入る）勝利を得させ給へ。王樣。唯今入口に、二人の年若な仙人が參りまして御座ります。

王　それでは、直ぐにこゝへ案內いたせ。

守衞　ハヽア。（と言ひつゝ外に出て、二人の仙人を導き來り言ふ）こちらへどうぞ。仙人樣。

兩仙人　（王を見る）

第一の仙人　あれ、御覽じろ、王樣は如何にも、威風あたりを拂うてじやが、また何となく親しげなやうにもお見えになる。と言ふは、やはり仙人のやうな御性質によるのじやな。

「諸人のたのみてやすき『家』、
またその護りとならむゆゑに、
王は日々苦行す――げに制欲の王よ、

ふたりの樂人に歌はれて、
まこと天に入ることあまたゝびと傳へらるゝも。」
あゝ君にこそ、
仙人の名はふさはしけれ。」

第二の仙人　ガウタマ因陀羅(インドラ)の御友達、ドウシヤンタ王とはあの方のことかね。

第一の仙人　さうだ。

第二の仙人　さうか、成程。

「それでこそ——
お城の門のやうな長い大きな腕で、
國の隅々に到るまでの地を治めたとて、
また、神々と惡魔の群の戰ひは、
インドラの迅雷と、
この王の弓によつてのみ定めらるゝと言はれても、
——何の不思議もないではないか。」

兩仙人　（王に近づき）勝利(ヴイクトスレ)よあれ、王樣(アーシヤン)よ。

王　（座より立ちて敬意を表す）わしはお二人樣を敬禮する。

兩仙人　王樣に吉祥あれと願ひまして。（とて果實を獻ず）

王　（一寸禮をして受け）何か御用でも。

兩仙人　この山に王樣の御出で下さいました事を、仙家の者共は承知致しまして王樣にお願ひ致したいと存じまする。

王　お願ひとは。

兩仙人　大仙人カヌワが御不在のため、羅苦叉鬼共が私共の護摩供養に危難を加へに參ります。どうぞ、王樣の御威光によりまして、仙家の平安をお護り下さるために、こゝ數日間、御者をお伴れの上、御滯在下さいまするやう、お願ひ致しまする。

王　いや、承知致しました。

道化　（王に囁く）王樣、結構なお頼みですな。

王　（微笑す）ライヴタカ、そなた、御者に弓矢を整へ、戎車(いくさぐるま)を廻すやうに申せ。

守衛　ハハア。（立ち去る）

兩仙人　（喜び）

「これぞ王の自性、君が父祖に似まし、
プルの子孫とおはします。
民の凶災(まがつみ)はらひ給ふと、
護摩の供養を守ります。」

王　（敬禮し）お二人はお先へお出でなされい。わしは後から直ぐと參り申す。

兩仙人　勝利よあれ。（兩人退場）

王　マータヴイヤ。そなた、シヤクンタラーを見たくは思はないか。

道化　先刻までは、隨分樂しんで居りましたがな、羅苦叉鬼と聞いては、御免を蒙りますな。

王　恐がるには及ばん。わしのそばに居れば、大丈夫じや。

道化　てまへ、こゝにお留守居をさせて頂きます。誰も來ないやうにして居りまする。

守衞　（入る）勝利よあれ、王樣。御車は既に整ひまして、勝利のお出立をお待ちして居りまするが、只今太后樣のお使として、城中からカラバハカが參りまして御座りまする。

王　（熱心に）なに？母上がたのお使？

守衞　さやうで御座りまする。

王　では、直ぐ通せ。

守衞　ハハツ。（彼出で行き、カラバハカを引きて來る）

カラバハカ　（進みて一揖し）勝利よあれ、王樣よ、母后樣が仰せで御座りまする。

王　なんと仰せじや？

カラバハカ　來る四日は育兒の祭りで、潔齋日で御座りまする。で、その日には王樣の御在城を是非ともお願ひしたいと、母后樣方の仰せで御座りまする。

王　仙家の賴みもあり、母上の仰せもあり、いづれも忽がせに出來ぬとは、困つたものじや。

道化　トウリアンクのやうに、中空にぶらついたら好いでせうな。

王　いや、困つたものじや、全く。

「河の流れが、
岩に遮ぎられた如く、
わしの心は、
場所の異る二つの邦に裂かれる。」
（やゝ考へて）

友よ、（マータヴイヤ。そなたはいつでも、母上達がわが子のやうにして居られることじやで、今から歸城して母上達に、わしは仙家の護りで暇がないからと申上げて、そしてそなたが、わしの代りをしてくれないかのう。

道化　私が羅刹叉鬼を恐がつて居ると、お考へ下さいますな。

王　（微笑す）ハハア。大婆羅門のそなたに、恐怖があつてならうか。

道化　では王樣の弟御のやうにして、歸らせて頂きますかな。

王　仙家を騷がせることがあつてはならないから、從者はすべて、そなたと一緒に歸城させる。

道化　（意氣揚々と）では、只今、てまへが王子樣となつたやうですな。

王　（獨語す）この若い婆羅門は、輕卒な奴じやで、歸つたら、いづれ宮中の女らにわしの心の秘密を喋つてしまうであらう。とすると、先づ手まわしをせねばなるまい。

（王、道化者の手をとりて）

實はわしか仙家に行くのは、仙人らに敬意を致するためなのじや。仙家の娘を見るためではないぞ。考へても見い。「わしはどこで育つた？　また娘は何處で育つた？

鹿の群のなかで育つたその娘に、わしが戀する？
ばかな。
先刻(さつき)から、わしの申したことは凡て、
つれづれの慰みじや。さう思へ、友よ。」

道化　心得て御座ります。

王　では、マーダヴィヤ。そなたは、これから城へ歸れ。わしは、仙家の護りに參るとするじや。

（退場）

## 第三幕

（護摩供養の弟子、吉祥草(クシヤ)を手にして登場）

弟子　（驚きつゝ、また考へて）ドウシヤンタ王様は豪い威勢だな。何しろ王様が戎車(いくさぐるま)に乘つかつて、この仙林(はやし)に來られてからと言ふものは、おいらの行事に邪魔する奴が、全く跡かたもなくなつたからなあ。
「すべての障碍といふものは、
一ひき遠くから王樣の弓がぴゆんと鳴りさへすれば、
みんな消へてしまふんだからなあ、

矢なんかつがへでも、好いんだからなあ。」

まあとにかく、供養僧達のために、吉祥草を祭壇にしいておかう。

プリヤンヷダー。そのウシラ香油や、蓮の葉や、莖は誰に持つて行くの？

(先方の言葉を聞きし様子にて)

えつ？　何ですつて？　シヤクンタラーが熱で困つて居るんだつて、それで冷やす？　じやねえ、プリヤンヷダー。わしからはなあ、護摩の水をガウタミーに上げておくからね。お姫様に上げるやうにして下されい。お姫様は仙人様の二番目の生命だから、大事にしなくちやねえ。(といひて退場)

(時に戀に惱める王登場)

『我は知る――苦行の力の恐ろしさと、
乙女がその身の自由ならぬを。
さはれ、回らし難きかな、この思ひ、
渓間を走る水のごとく。』

おう愛の神よ。あなたは、何處から、その鋭い鉄の花の箭を、得られたのである？

あゝさうだ。

(思ひ出して)

『シヷ神の怒りの火は、
今もなほ確かにおんみに燃えて居るじや。

恰も海火が、
水の集りに燃えて居るやうに。
でないならば、
何故ひとたび灰となつた愛の神——おんみが、世のなべての忍辱、わけてもわたしに、
かほどの熱を起させるのか。』
そのうへ愛人達はおんみや月（チャンドラ）を深く信頼して、反つてうまく〳〵と謀られるのではないか。といふのは、
『おんみの持つ花の箭と、
月のもつ光の涼しい——とは言へ、
我らのやうな戀人には、
虚僞とこそのみ知らるれ。
月はその凉しい光のうちに、
燃ゆる火を漂はせ、
おんみはまた花の箭をもつて、
電光の如く我らを打つ。』
しかし、
『摩竭魚（マカラ）の旗をもつ愛の神は、夜となく、晝となく、
わが胸に惱みを與へる、けれども、

わたしの心はうれしい。
あのつぶらな眼をもつた——
人を醉はせる酒のやうな—— 君ゆゑに、
わたしの心が苦しむのだと思へば。』
愛の神よ、おんみはしかし、わたしに露ほどの情愛ももつてゐなかつたと、罵られても、返辭はなからうな。
『愛の神よ、おんみの弓をひきしぼつて、
わたしの耳のあたりを狙つて矢を放たうとしても、
一切は無益だ——無身のおんみをこそ、
わたしは千々の思をもつて養つて居るではないか。』
（情想に驅られつゝ歩み）
もう仙家の危害も亡した事じやから、仙人等はわたしに休んでくれと云ふことじやが、さて何處にこの遣瀬ない思ひを慰めるのじや、どうせ、姫に會ふ以外に何の手段もあるまいが、さうじや、一つ探してみようか、（進みて前方を見つゝ）
大方シャクンタラーは友達らとマリニー河の岸のあの莖の阿亭で、この日中の暑さを凌いでゐることじやらう。かまはん、かしこまで出掛けて見よう。
（歩みてあたりを見廻し）
少し前に、あの乙女達は、この若葉の樹影路を通つたと見える。といふ譯は、

『乙女達に、
　花を摘まれた蓮が、
　生々しい口を開けて、
　木汁の雫にぬれて居る、
　　（あたりの景色をなつかしめる様子にて）
あゝ氣持のいゝ林だ。そよ〳〵と風が吹く。
『蓮の香にしみ、
　マニリー河にたつた漣のいぶきを含めて――
　涼しい風は戀に惱むわれをひしとだいて、
　慰めを與ふ。』
　　（更に進みあたりを眺め）
うまいぞ、シヤクンタラーは、あのヴエダサ蔓の阿亭にゐるのじや。その證據に。
『亭にゆく砂道に新らしい足跡がある、
　爪先が淺く踵が深い――尻が重いからな。』
この樹の影に隱れて見てゐてやらう。
　（隱れて微笑）
ほほう、眼の正月じやな。まさしくわが意中の愛人が、友達に助けられて、花を敷いた石床の上に臥して居る。

よし、この蔓の影に隠れて聞いてやらう。何をひそ〳〵話しする。（と云ひつゝ立ちて見る）

（時にシャクンタラー、件の様子にて衰はる——黒幕を落す）

（兩女は親切にシャクンタラーを煽ぐ）

シャクンタラー。この蓮の花で煽いだ風で、少しはお氣持がよくなつたでせう。

シャクンタラー　（痛々しげに）まあ、あなたがた—私を煽いでゐて下さるの。（兩女互に顔を見合せ歎く）

王　大部惡さうだ。

（考へて）

暑氣にでも當てられたかな？それとも、わしが考へるやうに。

（熱心に見て）

さうじや、間違ない。

『胸にはウシラの草の衣を著けて、
腕にかけた蓮の花環もゆるやかに、
惱めばこそ——更に、
ならびなく美くしい乙女よ。
夏の暑も愛の熱も、
燃ゆる惱みにかはりはないとして、
あの乙女の——その艶麗（あで）やかさ。

夏やみであらう筈はない。

プリヤンヷダー　（密かに）ねえ、アナスーヤー。王樣がお出でになつてからよ、シャクンタラーの御樣子が違つて來たのは。だから、私は熱より外に何か譯があるんじやないかと思のよ、どうでせう？

アナスーヤー　えゝ私もちやうど、おんなじことをひとりで疑つてゐたの、一寸尋ねて見ませうか。

（聲を高めて）

お姉樣、わたし擠變な事をお尋ねしますわ。お身體が大變お苦しさうなのね。

王　さう、思ふ壼を言つた。

『月光とばかり純白な、

蓮華の腕飾がいま、

その色を失つた。

堪へ難い熱があるのであらう。』

シャクンタラー　（半ば床より身を起し）なんでも好いわ、おつしやいな。

アナスーヤー　私達戀といふこと、どういふ事だか、ちつとも知りませんけれど、話に聞いた戀に惱む人の樣子が、何だかあなたの御樣子と、そつくりのやうに思はれますのよ、だから、何處からあなたのお苦しみは出來て來たのか、はつきりおつしやつて下さいね。確かな事がわかりませんし、お療治のしやうもありませんでせう。

王　アナスーヤーは、わたしの考へを知つてゐるのじやな。

シャクンタラー　あたし……大變苦しい――今言へないわ。

プリヤンヷダー　なぜ？　アナスーヤーが親切に言つて下さるのに、あなたそれを隠して、毎日お痩せになる許りなのよ。もう残つてゐるのはそのお美しい顔ばかしだわ。

王　プリヤンヷダーは正直に言つたほんとうに、

『やゝ褪め痩せた頰
萎えた乳房。
腰のあたりも細つて、
肩の圓みも落ちて、
顔の色は青白く、
思ひ悩みて衰へし、
そのうつくしさ、痛々しさ。
たとへばマーダヴイーの蔓の葉が、
夏のあつい風に觸れて凋んだやうな。』

シヤクンタラー　（嘆息して）―誰も外にいふ人はありませんの。けれども、言へばあなた方に御心配をかける許りでせう。

兩女、ですから、親しい友達がお苦しみを分けて持てば、いくらかはお樂になるのでせう。お願ですから、おつしやつて下さいな。

王　『思ひやりの深い、

友らに問はれて、
心の悩みのわけを、
姫は云ふであらう。
いくたびか振返つて、あゝ
思ありげな目で姫はわたしを見た。
けれども姫から今一度。
たしかな答を聞きたいと思ふ。』

シヤクンタラー　あのこの仙居を護つて下さる、王様にお目にかゝつてから。（と云ひさして恥づかしげな様子）

兩女　それから

シヤクンタラー　その時から、あのお方を思ふ許りで、こんなに痩せたの

兩女　そりや、結構ですわ、あなたのお望みに、ちやうどふさはしい方ですものね、大きな河はどうしたつて海へ行きますものね。

王　わしは聞きたいことのすべてを聞いた、
『愛の神はわが悩みのもとへ、
またわが慰安者、
夏の果て、雲深き日の、
冷と熱とを世に與ふる如く。』

シャクンタラー　何でもいゝから、あなた達でね王様が、私を可哀想だと思召すやうにして下さい、でなければ、私の後世を弔つて下さいな。

王　もう、その言葉で疑はすつかり晴れた。これでこそ、愛の神から受くべき一切の果實を受けたといふものじや、苦しんで苦しんで得たと云ふものじや。辛い中にも嬉しさがある。

プリヤンヷダー　(密かに)思ひおもふ火のやうに燬けてゐるのよ。ちよつとも待てないと云つたところだわ、それに當の相手がプル王統第一の方と言ふのですものね。お望みのかなへるやうにしやうじやありませんか。

アナスーヤー　どうしたら、人に知れずに、おまけに早くお望みがかなうでせうねえ。

プリヤンヷダー　人に知れずにと言へば、どうかも知れないけれど、早くなら直ぐにも出來やしないこと?

アナスーヤー　どうして?

プリヤンヷダー　王様だつてやつぱり思つてゐらつしやるだらうと思ひますの。一寸御覧になつた時の様子が違つて居ましたものね。さうして、この頃は夜もお寢みにならないと見えて、大變お痩せになつたわ、

『夜な夜な、
熱い胸の思ひから溢れる、
燬けるやうな涙に濡れて、
王飾の色を失つた、
黄金の腕環は、

不断にしかも激しく觸れた、
弦ずれの痕の殘つた手首をぬけて、
かへしても、かへしても、
滑り落ちる。』

プリヤンヷダー　一番にお手紙をお書きなさいよ。さうしたら、それを花の間に隱して神樣にお參りするやうな風をして、わたし、きつと王樣にお渡ししますわ。

アナスーヤー　それで、シヤクンタラー　あなたは、どうお考へになつて？

シヤクンタラー　折角お友達がおつしやつてくださる事を、いやだと言へると思つて？

プリヤンヷダー　それじや美しい言葉で、何とか、あなたのお心持にそふたお歌をお作りになつたら、どう？

シヤクンタラー　えゝ、考へますよ、けれども、わたし、何だか、怖くて胸がどきどきするやうなの、おさげすみに、なりはしないかと思つて、

王　（微笑す）

『おう臆病者よ、こゝに御身が、
拒絶を怖れるその男が、
思ひに焦がれて立つてゐるではないか。
いかに戀ひたればとて男子が
思ひつめた乙女に、

戀人の得られぬといふ例は、ないではないか。

兩女　御自分の御立派な御姿色を、大變におみくびりになるのね。あの眼の藥になる美しい私の月を、誰が眼かくしをして見ないでせう？

シヤクンタラー　えゝ、じや、こしらへませうね。（と云ひて起きて考へる）

王　あゝその美しさ、この一時こそ、瞬きもしないで見てゐるべき時だ。

「歌をつくる姫の面に、
蔓草形の眉は上り、
われを思ふしるしに、
うぶ毛もよたてる赤き頰よ。」

シヤクンタラー　歌が出來たの。何か書くものがあつて？

プリヤンヴダー　この鸚鵡の胸毛みたやうな、柔い蓮の葉にお爪でお書きなさいましな。

シヤクンタラー　（書きて）聞いて下さいな、これでよいかどうか。

兩女　好く伺ひます。

シヤタンクラー　（詠）

『君がみ胸、われは知らねど、
つれなき君よ、君を忍びて、
わが心あつし、夜となく日となく、

わが思ひゆだねまつる君よ。』

王　（獨白）顔を出すに最上の機會じや。（突然出て來）

『美くし君よ、思ひゆえに御身があついと仰せられる。

私こそは夜も日も愛の神に燬かれてゐますじや。

太陽に照らされても蓮花は凋まず、

月（愛の神）は却てそれを苦しめるごとゝ。』

兩女　（王を見て悅び立上り）ようこそ、お出で下さいました。どうぞ、まあ早く、私共のお願ひの成就いたしまするやうに。

シヤクンタラー　（起き上り王に敬禮せんとす）

王　いや〳〵、それには及びませぬ。

『心より起る身の熱に、

花の臥戸も早や凋んでゐます。

蓮の腕環の色もあせてゐます。

御挨拶をなさるには餘りに御痛々しいですからな。』

シヤクンタラー　（自ら煩悶して）わたしの心よ、なぜお前はこれで滿足しないの、なぜ、そんなに騷ぐの。

アナスーヤー　どうぞこの石の座にお坐り下さいませ。

シヤクンタラー　（少しく座を讓る）

王　（坐す）あなたのお友達が、熱でお苦しみにならないことを念じますじや。

プリヤンヷダー　（微笑みて）最早やお藥が出來ましたので、大方もうお療りで御座いませう。

シヤクンタラー　（耻かしき様子）

プリヤンヷダー　あなた様方お二人が、十分愛し合つて入らしやるとは、一目見て解りまする、で御座いますれば、申上げるまでも御座りませんことながら、友達を思ひまする心持と致しまして、一言申上げたう存じまする。

王　はゝあ、何でもお氣づいた事を言はずに置きますと、後々の氣掛りですからな。

プリヤンヷダー　では、お聞き下さいませ。

王　いかにも。

プリヤンヷダー　下々の困窮をお救ひ下さいますのが御前様——王様の御務めと伺ひまする。

王　さやう、ところで、それがわしに、どういう懸り合ひになるのじやな？

プリヤンヷダー　それがで御座りまする。この私共の親友は、御前様をお慕ひするあまり——愛の神に攻めたてられたとでも申しまするか——かやうに痩せ衰へて居りまする。そこで御座いまする。どうか、友達の生命をお助け遊ばすと思召して、末永くお伴れ下さりませ。

王　いや、それはお互でしてな、わしはお話で滿足しますじや。

シヤクンタラー　（プリヤンヷダーに向ひ）王様にそんなことをお願ひしたつて、何にもならないじやないの、御殿の澤山のお妃にお別れ遊ばして、夜寠胸を痛めていらつしやるお方に？

王　『御身こそわが心にもと、近きものゝ極み、

御身を離れて誰にか思を寄せむ。
あわれ、わが心魅する眼、
一度は愛の矢に死にし我の、
君を外にしては、と思ふ。
おゝ美しきものよ。』

アナスーヤー　王様は澤山のお妃方をお持ちと伺ひまして御座いまするが、この友達の事に付きましては、どうぞ私共に歎きのないやうにしておやり下さいませ。

王　お言葉までもありませぬ。

『娶ることは幾度かなれど、
眞にわが家の榮光(さかえ)として矜るべきは、
帶の如く海に繞まれしこの國と、
御身らの友二つのみ。』

兩女　それでこそ、もう私共には心懸りは御座りませぬ。

シヤクンタラー　（微笑む）

プリヤンヴダー（私かに）アナスーヤーさん、大事なお友達が、あれ御覽なさい、だん〳〵と活きかへつて來るぢやありませんか。夏雲の湧くのを見て、元氣づく牝(めん)の孔雀のやうね。

シヤクンタラー　王様にせねばならぬ、禮儀も忘れてしまつて、内證ことばつかしお喋りした失禮をおあやまりなさい

な。

兩女　（笑ひながら）さうおつしやる方から、おあやまりなさいまし、失禮なんていふこと、私たちは存じませぬ。シャクンタラー　王様、どうぞお許し——世間の人と申しますると、大抵は大人が居りませぬと、いろ〳〵な事をお喋りするものですから。

王　（笑ひて）

　『美くしものよ、御身にふれて、
　そのふくよかに快い花の臥戸に、
　友たる座をお許し下さるか？
　——さればお許し申さう、御身の罪も。』

プリヤンヴダー　（戯れて）それだけで、結構なのでせう。

シャクンタラー　（怒れる樣子にて）およしなさいよ。私がこんなにみじめな様子をしてゐるのに、冗談をいふなんて、ひどいじやないの。

アナスーヤー　（外を眺めて）プリヤンヴダーさん、御覧なさいよ。あの可愛想な鹿の子が、迷ふてきよろ〳〵してゐるじやありませんか。きつとお母さんを探してゐるのでせう。私お母さんの處へ伴れていつてやりますわ。

プリヤンヴダー　いゝえ、あれはいたづら者の仔鹿、あなた一人で、伴れて行くなんておつしやつても、だめ、私が手傳つて上げませう。

（兩女立ち去らんとす）

シヤクンタラー　あら、何處へも行つちやいけないことよ、私が一人ぼつちで、助けなしになるじやありませんか。

兩女　（笑ひながら）おほ、ほ、ほ、獨りぼつちで助けなしですつて？天下をお護りになる王様が、お側にちやんと、いらつしやるじや、ありませんか、

（彼等去る）

シヤクンタラー　あら、まあ、ほんとに行つてしまつた。

王　御心配には及びませぬ、姫、お友達のかはりに、こゝに一人確かに下僕（しもべ）が御用を勤めます。

『涼しい蓮の葉の團扇で、
お心を慰めるために露の滴るやうな風を煽ぎませうか。
でなくば蓮華のやうな色のお足（みあし）を、
膝にのせてさすりませうか。仰せのまゝに致しまする。』

シヤクンタラー　いゝえ、いゝえ、尊いお方から、どうして、そんな事がして戴けませう。（と言ひつゝ努めて起き上り行かんとす）

王　（止めて）姫、この日盛りに、そのお身體（からだ）でどうします？

『胸には蓮の蕊をおほふ、
花の臥戸をはなれて、
どうして、そのお弱い足で、
この暑い日に出られます？』

（と云ひつゝ靜かに姫を引き留む）

シャクンタラー　おゝどうぞ、お離し――お離し下さいまし。自分で自由になる身分では御座りませぬ。何とも致しかねます。どうぞ……わたしを護つてくれますものは、あの二人の友達だけで御座います。

王　すると、わしは辱しめられたのじやな。

シャクンタラー　いゝえ、これは御前に申したのじや御座いません。ただ神様をお責め申したまでゝ。

王　神様はおほかた、我々の願ひ通りにして下すつたのじや、それに、なぜ、神様をお責めになる？

シャクンタラー　なぜと申しまして、私は神様をお責め申さずには、ゐられませぬ。身體の自由を縛つてお置きになりながら、他にまた、あなたのやうな善いお方をお見せになるのですもの。

王　（獨語）

『胸には思ひながら乙女は、
　わしの求めを拒み、
ともに居る樂しみを思へど、
わしに從ふを厭ふ。
嫁ぐに近き乙女らは、
おのれの心々の
思ふところに從はで、たゞ
愛の御神によらむとするや。』

シヤクンタラー　（行かんとす）

王　（獨語）留めずに置かれるものか。（つと進み、乙女の衣を捉へて留む）

シヤクンタラー　プル王様、失禮なことをなさいますな、澤山の仙人が見て居ります。

王　仙人は恐るるに足らん。これを見られたところで、カヌワ仙人は法律に詳しい方ぢや。罪過だとは思はれません。

『仙家の娘達はおほかた、
乾陀婆式に
自由に嫁いで
兩親はそれを正しく許すと言はれてゐるぢや。』

（あたりを見て）

ほゝら、廣場へ出て來たな。（シヤクンタラーを棄てゝ元の道へかへす）

シヤクンタラー　（王に隨ひて）プル王様、私をどうぞ、お忘れ下さいますな、お望みにも添ひませず、たゞお言葉ばかりでお交際を願ひましたこのわたくし。

王　愛しきものよ。

『御身は遠くゆくとも、
我が心御身を離れじ、
黄昏時の樹の影の、
樹の根はなれて遠くは行かじ。』

シャクンタラー　（少し行きて獨語）あのお言葉を聞いてから、妾の足は進まなくなつた、おうさうだ。このアルパカの樹蔭にかくれて、王樣がどんなに妾を思つて下さるか、そつと覗いて見よう。

王　何といふ事ぢや。これほど慕うてゐる者を、何の關係もないやうに、放り棄てて行つてしまつた。

『あゝ何といふ堅い、
合昏花(シリーシヤ)の莖のやうな心じやらうのう。
その嫋なよ〳〵しい、
強く抱くにも堪えぬ身を持ちながらのう。』

シャクンタラー　あれを聞いては、何處へ行く力もない、

王　あゝ、掌中の玉を失つた今、この莖の阿亭で何んのする事があらう。（前方を眺め）おう、これは〳〵、何處へも行くに及ばん。

『蓮華の腕環が眼の前に落ちてゐる。
乙女の身に塗つた、
涼しい香油のうつり香――
あゝわしの心を縛る鐵鎖(くさり)
（熱心に拾ひ上げる）

シャクンタラー　（自分の手を眺め）まあ、ちつとも氣がつかなかつた。あんまり痩せたものだから、腕環が落ちまつた。

王　（腕環を腕に押しあてながら）あゝ何といふ氣持のいゝ觸り工合だ。

『いとしい者よ、
御身の腕からすべりおちた、
—愛撫あり
と思はるる御身には非ざる—
無生の腕環で、
この哀れな男は、慰められてゐる。』

シャクンタラー　これじや、ぐづ〳〵しては、ゐられない。おう、あれを言ひ譯の種にして行きませう。

（と言ひつゝ王に近づく）

王　（それを見て悦ぶ）おう、生命のあるじが來たぞ。わしがあんまり苦しむので、神樣も可哀想じやと思はれたのじやらう。

『喉のかわいた飲雨滴鳥に
せがまれて、
あたらしい雲は、
驟雨を鳥の口に落しに來た。』

シャクンタラー　（王の前に立ちて）御前様、あの道の中頃で、わたくし、蓮の腕環を落したことを思ひ出しまして、捜しに歸つて參りましたの。そして、私の胸はちやんと、それを御前樣がお拾ひ遊ばしたことを存じて居りますの。

どうぞお返し下さいましな。でないと、御前様と私との間を仙人に覺られまする。

王　それじや、條件を一つつけてお返しするとしませう。

シヤクンタラー　條件とおつしやいますのは?

王　わしがもとのお手に、はめて返すのじや。

シヤクンタラー　えゝ、じや、さうなさいまし。(と言ひて近づく)

王　まあ、この石にお坐りなさい。(兩人近づきて坐す)

王　(手をとりて)

『あゝこの觸覺(ふれごころ)よ
むかし濕婆(シバ)の怒りに燬(や)かれた、
かの愛の木。
神らのふらす甘露(アミリタ)のしめりに、
いまもかも新芽ふくとも。』

シヤクンタラー　(手を執られて心持よげに)

早く、早く、あなた、

王　(悅びて獨白)夫を呼ぶ言葉をもて、わしを呼ぶ。

ふうん、もう十分の御信用じやな(聲を出し)

この腕環は少し太過ぎる、なんなら、わしが直してあげよう。

シヤクンタラー　（微笑）どうぞ、お願ひ。

王　（これを口實にわざとゆつくりして）

『おゝ美女(スンダリー)よ、

これを御覽、

この腕環は空の三ケ月が、

シヤーマ夢のやうに美しいそなたの手を、

もそつと美しうするために、

空を拔け出て蓮の莖に化けて、

そなたの双つの腕を

飾つたのじや。』

シヤクンタラー　わたくし、それが見えませんの、耳にさした蓮の花粉が目に入りまして、

王　わしの氣(いき)で吹き出して、見えるやうにして上げようね。

シヤクンタラー　えゝ、恐入ります、けれど、わたくし、氣味がわるいわ、

王　さう言はないで下さい。新參の下僕(しもべ)は、主人の命令より外のことは致しませんからな

シヤクンタラー　おほほ、それが氣味がわるいと言ふ種ですわ、あまりわたくしをお敬ひなさるんですもの。

王　（獨語）この機會を逸してはならんからなあ。

（王はつとめて乙女の顏を上げさせせんとす）

シヤクンタラー　（王の爲さんと欲することを拒みたる擧動をなす）

王　わしの不躾を厭ふに及ばんじや。

シヤクンタラー　（一寸見上げて耻かしさうに俯向く）

王　（手にて乙女の顔を上げて、獨語）

『夢にも人に觸れたことのない、
わが愛人のやさしい唇よ。
今あでやかに震ひて、
わが接吻をゆるす如く。』

シヤクンタラー　まあ、何をなさるのか、お忘れになつたやうだわ。

王　耳の蓮華が邪魔になつてよく見えない。（王は口にて乙女の眼を吹く）

シヤクンタラー　ありがたう。これでもとのやうに、はつきりと見えますわ。こんなにお骨折をして戴いてどうしてお禮を致しませう。わたくし、耻しうございますわ。

王　この上何を求めませうぞ、

『おん身のあでやかな顔の香に、
觸れただけでわしは報られてゐる。
あの蜜蜂はたゞ蓮華の匂ひで、
滿足してゐるのだ。』

シヤクンタラー　それじや、もしあの蜜蜂が、それだけで滿足しなかつたら、何うするのでせうか、

王　これです。（と接吻せんとす）

シヤクンタラー　（顏を蔽ひ隱す）

（樂屋より歌の調子にて）

お、お、牝（めす）の水鳥（チヤクラヷーカ）よ、

汝の友と別れよ、夜は來れり、

シヤクンタラー　（聲を聞きて、悟りたる如く）きつと伯母樣のガウタミーが、わたしの病氣を見舞ひにいらつしたのだらうと思ひますの、ですから、一寸の間、あの樹のうしろに隱れて、頂戴。

王　よし。（身を隱す）

（ガウタミー、手に器を持ちて登場）

ガウタミー　おう、お前が病氣をしたと聞いたので、見舞に來て上げた。これはお供水じやがの。

（乙女を見。乙女を起して）

お前は獨りで、ここにゐたのかえ？

シヤクンタラー　今ね、アナスーヤーと、プリヤンヷダーが、マーリニー河へ行つたところですの。

ガウタミー　（御供水をふりかけながら）えゝ子じや、何の患もなく、長生きをするやうに、身體の熱はひいたかえ？

シヤクンタラー　はあ、よほど好いやうですわ。

ガウタミー　もう日が暮れる、家まで一緒に歸らうね。

シャクンタラー　（躊躇しながら起上り、獨語）わたしの心よ、おまへは望みの物が今にも得られるといふ時に遲れて、大事な機會をなくしてしまつた。今おまへが苦しむのはその罰といふものよ。（聲をあげて）

蔓の阿亭よ、わたしの苦しみを慰めし者よ、
いつかまた、饗應して上げませうね。（と言ひつゝ去る）

王　（もとの場所へかへりつゝ歎息）あゝ望みをとげるまでには、どれだけの邪魔があるものやら。といふわしは、

『あの美しい眼をもつあの顔を、
上げさせはしたものの――
口もとを時々手で隱しながら、
恥しさうに顔をそむけて、
許さない身振のいぢらしさ――
わしの唇は遂に觸れることが出來なかつた。』

さあ、何處へ行かう。實はここでも好いのだがわしの戀人がしばらく樂しんだ處じや、まあ暫く居て見ようか。

（あたりを眺めつゝ）

『花を敷いた石の床には、
乙女の臥たあとが懐しく殘つてゐる。
蓮の葉に爪で書いた愛の言葉は、
凋んでゐても懐しい。

あゝ蓮の莖の腕環が、姫の手から落ちた。
一切の幻象が、
わしの眼から消えやらぬ。
どうして、この阿亭が出られやうぞ。』

（樂屋より聲）

『大王よ、
黄昏の供養の式は始まれり。
護摩焚く壇、
燃ゆる火のあたりに、
食肉の惡魔ら、夕雲の如く、
黒く恐ろしき影をひろげぬ。
おう。』

王　（侍りて聽き）仙人達、怖れるな、わしがゆく、いま直ぐに。

（幕）

# 第四幕

（友達の兩女舞臺に入り、花を摘む所作）

アナスーヤー　プリヤンヴダー、あの可愛い、お友達シャクンタラーは、ほんとに好いお婿さまをガンダルヴ式でお貰ひになつたのね。ほんとに結構だと思ふわ。けれども、わたしなんだか氣がかりでならないことが一つありますの。

プリヤンヴダー　なぜ、さう？

アナスーヤー　なぜつて、護摩供養の式がすんだから、仙人達は王様にお歸りを願つたでせう。王様は今日都にお着になつて、そして今頃は宮中でお妃たちにお遇ひになつたでせう。そして、シャクンタラーの事なぞきつとお忘れになつたらうと思つて心配なの。さうでもないでせうか。

プリヤンヴダー　どうしたところで、王様をお信じ申したらいゝじやありませんか。あゝいふ様子の方は決して不信用な事をなさらないものと私は思ふわ。それよりか、ほんとに心配でならないのは、お父様が巡禮からお歸りになつて、あつた事をみんなお聞きになつたら、なんとおつしやるでせう。それが解りませんわ。

アナスーヤー　それなら、御心配はいらないわ。あの方なら、きつとお父様の御氣に召さうと思ふの。

プリヤンヴダー　どうして？

アナスーヤー　兼々お父様は、相當なお婿様があつたら、姫をやりたいと望でいらつしやつたのですもの。そして、この事は、お父様にはなんのお世話もなくて、全く神々達がお父様の代りになつたやうなものですもの。

プリヤンヴダー　そりやほんたうね。

(花籠を見て)

隨分花が集りましたね。今日の供養には、これで澤山でせう。

アナスーヤー　でもねえ、可愛いお友達シャクンタラーの爲に、幸運の開けるやうにお祈りせねばならんでせう。だから、も少し摘みませうよ。

(藥屋より)

おゝい、わしが來たぞ。

アナスーヤー　(聞いて)誰か來たやうですのね。

プリヤンダダー　えゝ、でも、家にはシャクンタラーがいらつしやるでせう。

アナスーヤー　だめよ、シャクンタラーのお心は今日お留守よ。ですから、花はこれだけとして出かけませう。(兩女出て行く)

(再び藥屋より)

ヤイ、客をばかにするない—

「苦行の德をもち、
神通力を得たるこの我を、
見向きもしないとはなんだ—
この故にお前の思つてる戀人は、
お前を忘れるやうになれ。

いくら思ひ出さう、思ひ出さうとしても、
のんだくれのやうに、
前に言つた言葉なぞ奇麗に忘れてしまへ。」

兩女　（これを聞いて大いに落膽す）

プリヤンヷダー　まあ、こんな事が起らなければ好いがと、案じた通りの事が起つたじやありませんか。きつと尊敬せねばならぬお方に、心のお留守のシヤクンタラーが、失禮しちやつたのじやないのでせうか。

アナスーヤー　（前方をすかして見て）それがまあ、一通りの方に失禮したのじやないの。それ、あの怒りつぽいドゥルヷーサ大仙人ですよ。あれ、あの通り呪うて、まあ、ひどい勢で歸つて行くわ。

プリヤンヷダー　ほかの方だつたら、あんなに火のやうに怒らないわ。だけれど、あなた、早く行つてあの方の足許にお禮をして、もう一度歸つて頂くやうにお願ひなさい。その間にわたしは、あの方をお拜する水や、何かを用意して行きますから。

アナスーヤー　えゝ。（彼女立ち去る）

プリヤンヷダー　（道に躓いて）あらつー　手に持つた花籠が落ちた。胸さわぎがひどいものだから、足がよろめいて。
（といひつゝ花を拾ひ集む）

アナスーヤー　（舞臺に入る）忿怒の化身みたやうな人を宥めようと言つたつて、宥めやうがないじやありませんか。けれどあの仙人は、少しは私のいふ事を聞いてくれたわ。

プリヤンヷダー　それだけでも、あの仙人としては大出來ですのね。何といつてお宥めになつたの？

アナスーヤー　どういつても歸つて下さらないんでせう。ですから、わたし、あの方の足許にお拜をしてお願ひをしましたの。あのう大仙人樣、あの娘はあなた樣のやうな大神力のおありになる方が、眼前にお出でになつたことを全く知らなかつたので御座います。そしてまた、さういふ事は今度が初めての事で御座いますから、どうぞ、お許し遊ばせつて、かうお願ひしたの。

プリヤンヷダー　へえ、さうしたら。

アナスーヤー　するとね、あの方がおつしやるに、自分の言葉を取消すことは出來ないが、しかし何か記念の品を出せば、あの呪詛は解いてやらうと、さう言つて直ぐ消えてしまつたですの。

プリヤンヷダー　そりやよかつたわ。じや、あの王樣がお歸りの時に、シヤクンタラーの指におはめになつたあの指環ね、あれにはお名前も彫つてあると、記念の爲に下すつたのだから、あれこそかういふ時にお役に立ちますわ。

アナスーヤー　さあ、こちらへ入らつしやいな、神樣へお勤行の用意をしませう。(兩女進む)

プリヤンヷダー　(ア、アナスーヤー。あれ、御覽なさい。あの左の手で、頰杖を突いて少しも開かずにゐらつしやるお友達の樣子、まるで繪のやうですのね。お婿樣のこと許り考へて、御自分さへ忘れていらつしやるくらゐだから、お客樣に氣のつかんのは當り前ねえ。

アナスーヤー　この事は、私達二人の間に內證にしておきませう。さうしないと、シヤクンタラーが知つたら堪らないでせうからね。あのお弱いお身體ですものね。

プリヤンヷダー　誰がやさしいマーリカの花に、沸湯をかけるやうなことをするものですか。(兩女入る)

（以上中所作了る）

（時にカヌワ仙人の弟子、寝床より立ちて舞臺に現る）

弟子　巡禮からお歸りになつた大仙人が、時刻を見いとおつしやつた。どうれ、そとに出てよく見よう。まだ夜明けには間があるだらうか。

（進みて空を眺め）

はて、もう夜が明けさうだわい。

「西の山際には、
月が殘つて、
東の空には、
黄色の太陽の上る景色、
昇る光と沈む光、
その二つの光に、
この世界は支配されてゐるのだ。
——境遇に縛られた人間のやうに。」

また、

「月は落ちた。
睡蓮の花の美しさも、
今はたゞ面影となつて、
もうわたしの眼を慰めてはくれない。
夫と遠く別れて、
女の胸にわく、
堪ゆべくもない、
その悲しみ。」

「あけぼのは、
カルカンドー(棗)の實を紅く彩り、
草ぶき小屋の寺を、
孔雀は眠より醒めて行く。
軒場に鹿は、
立ちて歩み、
尻を高々とあげて、
脊伸をして居る。」

「夜の闇を破つて、
毘紐天(ヰイシユヌー)に上り、
山々の君となり、
妙高のうへに留つた月は、
微かな光を殘して、
つひに空から落ちた。
高く榮えた人間の、
その末路の如くに。

アナスーヤー （蚊幌の裾を上げその姿少しく見ゆ、獨語） 世間から離れてゐる私達には、解らないけれど、どうしても、あの王樣はシヤクンタラーに殘酷(ひど)いことを、なさつたやうにしか思はれてならないわ。

弟子 さうだ、お師匠さんに護摩供養の刻(とき)が來ましたと、言ひに行かねばなるまい。（退場）

アナスーヤー おう夜があけた。起きようかしら。だけれどそんなに早く起きたところで何んにも出來やしないし――手や足には、まだ朝仕事をしようといふ元氣がないんだから。愛の神さまは自分の目的を遂したのだからさぞ、ほくほく悦んでゐるだらうけれど、お友達の方はこの策略にひつかゝつて、すつかり嘘の人を信じてしまつたのだわ、まあ。

（思ひ出して）

さうだ、それは王樣の罪じやない。全くあのドウルヴーサ仙人の呪ひからこんな變なことになつたんだわ。さう

でなければ、あれ程約束しながら、あの善い王様がこんなに長い間一人の御使さへも、お遣しにならないといふ筈はないのだもの。

（思案して）

だから、こゝからあの王様の記憶を呼び起す爲に、あの指環を送るといふのだけれども、さてこの哀れな仙人に、誰がそんな御使をしてくれるでせう？　けれども、もしかすると、飛んでもない大恥をシヤクンタラーはしよはなくちやならんやうになるか知ら。もしかして、シヤクンタラーが、ドウシヤンタ王と結婚して姫様になつたことなぞが、巡禮からお歸りになつた許りのお父様に知られたら、ほんとにどうなるのだらう。私もう考へがつかなくなつてしまつた。この難儀はどうして切り抜けたらいゝのかしら？

プリヤンヷダー　（笑ひつゝ入り來る）　大急ぎで、アナスーヤー。シヤクンタラーの御出立の用意をせねばなりませんよ。

アナスーヤー　（吃驚して）　まあ、どうして？

プリヤンヷダー　お聞きなさいよ、たつた今、わたしね、シヤクンタラーによくお眠みになつて？　と聞きに行きましたの。

アナスーヤー　そうして？

プリヤンヷダー　さうするとね、シヤクンタラーは恥づかしがつて俯向ていらしつたけれど、お父様は御自身でお姉様を抱いておつしやつたわ。――娘お前は幸福なものぢや。ちやうど護摩を焚く者が、その煙で盲目のやうになつても、甘く供物を火の中へ落したやうなものじやからな。あ子よ、お前はわしに後悔させるやうなことは少しもな

い、よい弟子に學問を授けたのと同じ事じや。今日は仙人どもを途中の保護者につけてやつて、お前を其の夫へ送らせようと思つてねえ。

アナスーヤー　それじや、誰かゞその事をお父様にお話したのでせう？

プリヤンヷダー　それはねえ、お父様が護摩堂へおはいりになつた時に、無形のものが歌をうたつたのですつて。

アナスーヤー　(驚いて)　まあ、何と言つたでせう？

プリヤンヷダー　お聞きなさい。(梵語にて)

「婆羅門よ、聞け汝の兒は、
世に幸福こそあれと――
うちに火を含むシヤミー樹の如く、
ドウシヤンタ王の胤を宿せり。」

アナスーヤー　(プリヤンヷダーを抱きて)　まあ、いゝ事を聞いたわ。けれどねえ、なんだか悒しいやうな中に、悲しい氣がしますわ。シヤクンタラーは今日から直ぐ、いらつしやるのだらうと思ふとね。

プリヤンヷダー　私達の悲しみは何とかして辛抱して、今こそ、あのお可哀想なお方を慰めて上げねばなりませんわ。

アナスーヤー　じや、私バクラの花環がよくもつやうに、あの芒果の枝にかけたココナットの殼に入れて、蓮の葉で蓋をしておきませう。それから、お祝には是非いる牛糞と、きれいな粘土と、それから吉祥草の穂さきを用意しておきますわ。

プリヤンヷダー　それじや、さうして下さいな。

アナスーヤー（去る）

（樂屋より）

ガウタミーよ、シャールンガラヴと、シャーラドウワタに娘の件をして行くやうに、用意しろと言ひ付けておいてくれ。

プリヤンヴダー　アナスーヤー急いで頂戴な、あれはきつとハスティナプールに行くやうに、仙人達をお呼びになつたのよ。

アナスーヤー（祝福の品々を手に持ちて）さあ、御一緒に参りませう。（と言ひて進む）

プリヤンヴダー（見て）あれ、あそこにシャクンタラーは朝の水浴がすんで、仙人の奥さん達が盆にお祝の米をのせてお芽出度うを言つて居るでせう。さあ、急ぎませう。（兩人共に進む）

（時にシャクンタラー右の如く仙人の妻達に圍れて登場）

シャクンタラー　奥様方にお禮を申上ます。

仙人の妻の第一　おう娘よ、王様から御寵愛のしるしに、大王后様（マハーデーヴィ）のお名前をお頂きになりますやうに。

仙人の妻の第二　おう娘よ、大英雄のお母様とおなりなさいますやうに。

仙人の妻の第三　おう娘よ、そなたこそ、王様の最愛のお方とおなりなさいますやうに

（かく祝詞を述べて祝米をシャクンタラーに振りまいて皆々去る）

兩女（アナスーヤー、プリヤンヴダー）（近づいて）水浴をなさつて？

シャクンタラー　まあ、よう來て下さいましたのね。さあ、こゝへお坐り下さいまし。

兩女　(座す)　さあ、御用意をなさいまし、私達はあなたの額に、幸福の點を着けて上げますから。

シヤクンタラー　ありがたう。これは毎日のことだけれど、殊更今日はありがたく思ひますわ。これから先きは、可愛いゝお友達から、この祝點を着けて頂くことが遠くなつて、出來なくなるのだと思ふと――

(と言ひて涙を落す)

兩女　まあ、お姉樣、こんなお芽出度い時に涙なんぞを、まあ。(と言ひつゝ自らも涙ふきつゝ、シャクンタラーに着衣せしむ)

プリヤンヷダー　お姉樣、あなたの御容色には極く好い御召物や、裝飾がお似合になるわ。仙家にあり合せのものでは、何んだかうつりが惡いやうですよ。

仙人の二人の弟子　(手に衣類を捧げてゐる)　こゝにお召し物や、お裝飾物が御座ります。お姫樣にお召し下さいますやうに。

(皆々見て驚く)

ガウタミー　これナーラダ、お前それを何處から持つて來たの?

弟子の一人　カヌワ大教師の不思議な御力によりまして

ガウタミー　では、大仙人が如意神通力で得られたといふのじやの。

他の一人　いえ〱、さうでは御座りませぬ。私どもが大仙人からシヤクンタラーのために、樹から花を集めて來いと仰せられまして、參りましたところが、

「とある樹からは、

お祝ひのしるしにと、月のやうに眞白い絹を。
次の樹からは、
乙女達が手足を染めまする、美しい藤紅の染草を出してくれました。
それから樹々の花神たちは、
ちやうど樹の梢の尖枝のやうに見えまする。
お手を手首までもお出しになつて、
この瓔珞を下さいました。」

プリヤンヴダー　（シヤクンタラーを見）蜂い女王は樹の穴に生れながら、蓮華の蜜さへ味ふと、言ふたやうなものですわね。

ガウタミー　かういふ芽出たい事のあるのは、きつとお前が王様のお家でお后になれるといふ吉瑞なのだらうよ。

シヤクンタラー　（恥づかしげな身振り）

ナーラダ　どれ、樹達のしてくれた事を、マリニー河に水浴に行つて御座るお師匠様に知らせて來よう。

（といひつゝ去る）

アナスーヤー　お姉様、わたしこんな着物や、裝飾物をつけた事がありませんのですから、どうしたらいゝか解りませんの。

（考へつゝ眺めて）

おう、さう繪に描いてあつたのを見ましたねえ、あゝいふ風にあなたのもおつくりしませうねえ。

シヤクンタラー　ほんとにあなたはお巧者だわ。

（時にカヌワ仙人水浴より歸りて登場）

カヌワ　（考へて）

「シヤクンタラーは今日行くのだ。あゝ。
わたしの胸は物思ひに充ちてゐる。
涙が言葉を遮り、
悲しみに自分の姿は生命を失つたやうだ。
仙家に住むこの身でさへ、
愛情は、かほどの苦しみを殘して行くものを。
あゝ。
世のなみ／＼の人達にとつて、
最愛の娘と別れるといふ事は、どれ程の歎きであらう。」

（かく言ひつゝ歩む）

兩女　シヤクンタラーさま、お裝飾はこれでみんなつきましたのよ。こんどはこの絹のお召を着けませう。

（シヤクンタラー立ちて着衣す）

ガウタミー　おう娘、お父樣がお越しになつた。嬉し涙をたゝへて、溫いお眼でお前を御覽になつてじや。お禮をお言ひなさい。

シヤクンタラー　（恥づかしげに）お父様、ありがたう御座います。

カヌワ　おう娘よ。曾つてお后サルミスターガ大王ヤヤーテーにおかせられたやうに、お前も夫に十分に愛敬せられるやうに、そしてまた、サルミスター后が後のプル帝をその子にお持ちになつたやうに、お前もよく四海を統御なさるる、王子を得るやうに。

ガウタミー　これ娘、この祝福のお言葉こそ、ほんたうの御賜物ですよ。

カヌワ　娘よ。今こゝに供養した護摩の火を右にお繞り。

（一同前進しシヤクンタラーをして、形の如くせしむ）

カヌワ　（祈禱の詞。吠陀の句を讀む）

「吉祥草をしける護摩壇をめぐり、
桑の供木は炎々と燃ゆ。
罪をきよむるその淨香こそ、
またなれをして淨からしむるものなれ。」

シヤクンタラー　（右に護摩の火を繞る）

カヌワ　娘よ、出かけようぞ。

（前方を見て）

シヤールンガラヴと、シヤーラドウワタは何處に居る？

（兩弟子入る）

兩弟子　こゝに居りまする。

カヌワ　おう、子供たち。お前の妹（シヤクンタラー）に道案内をしてやれ。

兩弟子　こちらで御座います。どうぞ。（皆々歩む）

カヌワ

「おう、山の樹々よ、
林の女神の宿れるものよ。
汝らを愛でて、汝らに水を撒かざれば、
自らはその一滴をも口にせざりし――
身を裝はんことを思へど、
汝らを愛でて、その若葉には觸れずありし。
また汝らに花の季節來たれば、
よろこび祝ひし――わがシヤクンタラーは、
いまぞ行く夫の館へと、あゝ、
汝らのすべてに別れを告げて。」

弟子　（シヤールンガラヴ）（時鳥の聲を聞き）お師匠様。
「シヤクンタラー姫がお友達の仙家の樹達は、
お姫様のいらつしやるのを許しました。

あれ、あの美しい時鳥の聲が、
そのしるしに聞こえます。」

（空より聲あり）

「姫の行きます道のほとり、
池の蓮の葉もて蒼く、
緑樹烈日をおほふありて
砂塵は蓮の花粉のごとく柔く、
順風しづかに君を送る。
——おう、樂しき旅をこそなさせ給へ。」

（皆その聲を聞きて驚く）

ガウタミー　娘よ、あのお前を大變可愛がつてくれた、生れながらお前の親類であつた、林の女神たちがお前の行くことを許してくれたよ。お前あの神樣達に、お禮をお言ひなさい。

シヤクンタラー　（禮拜して數歩進み私かに言ふ）プリヤンヴダー。私ほんとに王樣にあひたうてならないの。けれどね。この林を棄てゝ行かなくちやならんと思ふと、足が重くてならないわ。

プリヤンヴダー　そりや、あなただけじやないわ。みんな悲しんでゐるのよ。今あなたと別れようとする、林の樣子をようく御覽なさいな。

「悲しさうに牝鹿は半分たべかけた草をこぼして、

孔雀はをどるのを止めたでせう。
そして樹蔭で枯れた蔓の葉の落ちるのが、
涙のこぼれるやうに見えるじやありませんか。」

シヤクンタラー　(思ひ出して)　お父様。わたし妹の蔓草「苑の光」お別れを言つて來ますわ。

カヌワ　うゝむ。お前がおれを可愛がつてゐたことは、わしもよく知つてゐる。わしの右側にあるから、行つて遇うて來るといゝ。

シヤクンタラー　(近づいて)　おう。私の妹、お前の可愛い手で私を抱いておくれ。お前はアムラの樹のお嫁さんに勿論おなりなのね。けれど私これから遠い所へ行くのね――
お父様。この子わたくしとおんなじやうに、可愛がつて下さいましな。

カヌワ　あ子よ。
「お前のために兼々願ひまうけた、
幸福はめぐつて來て、
お前にふさはしい花婿を持つたのが嬉しい。
「苑の光」蔓の木は、
アムラの樹に配はせてやつた。
そしてわしは、お前やその蔓についての心配から脱れた。」
さあ、もう少し行かう。

シヤクンタラー　(兩女の傍に行き)　この蔓の木を、あなた方にお委せしますわ。

兩女　それじや、私たちの身は誰に委かして下さいますの？(兩女泣く)

カヌワ　これさ、アナスーヤ、プリヤンヷダー泣いちやいかん。一體お前達こそ、シヤクンタラーを慰めてやらなくては困るじやないか。(皆進む)

シヤクンタラー　(前方を眺め)　お父様、あの阿亭のそばを、歩いてゐる牝鹿は姙娠ですのね、だから、そろ〳〵歩いてゐますわ。あれがお産しましたら、お知らせ下さいましな。その事をお便りで、どうぞ、お忘れなく。

カヌワ　うん、忘れない。

シヤクンタラー　(歩き辛い様子にて)　誰かまあ、わたしの裾を引くのでせうか。(といひ後を顧る)

カヌワ　おう、あ子よ、

「お前の手から稗の實を貰つて育つた鹿――
仔の時分には口を葦の葉で切つては、
お前にイングデイー油をぬつて貰つて、
癒つたあの鹿が、
お前の行くのを停めようとするのじや。」

シヤクンタラー　おう、まあ可愛いこと。私はお前達のお仲間を離れて行くのよ。それになぜお前はついて來るの？お前が生れるとすぐ、お前の母さんは死んだのだから、私はお前を育てゝあげたのよ。けれど今、私、お前と別れて行くのよ、可哀想ね。けれども好いわね、お父様がお前を見て下さるからね。さあ歸つておくれ。後生だから。

（といひて泣きつゝ行く）

カヌワ　もう、泣いちやいかん。娘よ、しつかり足脚を見てお行き。

「笑まし眼も、涙にくもりて
道見ることもさだかならねば、
おう泣きやめよ、石ありて、
この道は平ならねば、おう躓かん。」

兩弟子　尊者、吠陀の中に愛人を送るは水のある所までと定めて御座ります。こゝはちやうど池の岸で御座ります故、こゝで御命令を承りまして、お別れ致したう御座ります。

カヌワ　さうじや、それじや、このニヤグローダ樹の蔭に、少しく休むとしよう。（皆行いて樹蔭に留る）

カヌワ　ところで、あのドウシヤンタ王には何と言つてやつたらいゝかな。（といひて思案す）

アナスーヤー　お姉様、この林で心あるもの の限り、この別れを嘆かないものは御座りませんのね。あれ、御覧なさい。

「蓮の莖を口にくはへた水鳥は、
葉の影にかくれて、
妻鳥が呼んでも呼んでも、
見かへりもせずに、あなたを見つめてゐるでせう。」

カヌワ　あゝ、これ、シヤールンガラヴ、先づお前がシヤクンタラーを王の前にひいて、わしからじやと言つて、かう

仕へておくれ

シヤールンガラヴ　はゝあ、

カヌワ

「自らの欲情を制するといふ寶をもつた私達と、
高い御家筋の御自分と、
この二つをようくお考へ下さい。そして、
姫の愛はわしの知らぬうちに運ばれたのじやが、
とにかく君に澤山在はす妻々のうちに加へて、
應分のお情愛(なさけ)を加へてやつて頂きたい。
その上のことは善いにつけ、惡いにつけ、
姫の運じや、多くを我らは望まない。」

シヤールンガラヴ　委細承りまして御座います。

カヌワ（シヤクンタラーを見て）娘よ、今、お前に訓戒を與へておく。わしは山林棲居の身ではあるが、また世間法も知らぬでもない。

シヤールンガラヴ　尊者、世に賢人と申さるゝお方にお解りにならぬ事は、決して御座りませぬ。

カヌワ　先方へ着いてからの心得は、
「舅姑(しうとしうとめ)、敎の師によく事へ、

いましが友妻をまことの友といつくしみ。
夫の君の怒りていましを罵しむ時も、
忍びて忍びて争ふことなく、
とりわけ召使どもを憐んで、
奢侈快楽に心をよせず、
かくして乙女は家妻となる
でなくば、家の禍害とならう。」

ガウタミー、お前はこれをどう思ふ？

ガウタミー　これから、嫁いで行くといふ若い娘には、至極結構な御訓戒です。これ娘よ、ようくお前はこれを心にとめて、決して忘れてはなりませんぞ。

カヌワ　娘、こゝへお出で、わしと二人のお友達に抱かれて、そして別れるじや。

シヤクンタラー　お父様、こゝから。アナスーヤ！と、プリヤンヴダーは歸るので御座いますか。

カヌワ　さうじや、二人ともやはり嫁に遣らねばならぬ。從つてお前と一緒にあしこへ行く事は出來ん。ガウタミーがお前と一緒に行つて下さるのじや。

シヤクンタラー　（父を抱きて）おう、今わたしはお父様を離れて一人で、他の國へ行くので御座りませうか。ヒマラヤ山から引抜かれて、遠い〳〵所へやられる栴檀樹のやうに。

カヌワ　おう、なぜお前はさういふ？

「多くの尊い家内眷族を持つた家主の、
妻として敬はれかしづかれて、
不斷に家の榮譽をあぐべく、
重い責任を負うたお前の身ではないか。
やがてまた。
東雲をやぶる太陽のやうに
世界を浄むべき王子をお前は身に持たねばならぬ。
その時こそ、お前は今日の悲しみを露ほども思はないであらう。」

シヤクンタラー （父の足もとにひれふして） お父様、わたくし、お拜をいたします。

カヌワ わしがお前に願ふたことの成るやうに祈る。

シヤクンタラー （兩女の傍に行きて） お二人ともいらしつて、抱いて下さいな。

兩女 （その如くす） お姉様、もし王様が、あなたの事をお思ひ出しにくいやうでしたなら、あの王様のお名前の彫つてある指環をお出しなさいませ。

シヤクンタラー そんなにおつしやると、私の胸はぎくつとしますわ。

兩女 お案じなさいますな、愛情が深いと、ついよけいなことまで疑つて見ますの、

シヤールンガラヴ 尊者、日も隨分上つたやうで御座りまする。お姫様にお急ぎ下さいますやうに仰せ下さりませ。

シヤクンタラー （再び父を抱きてのち、仙家を見て） お父様、わたくし、いつまたこの仙家を、見ることが出來ませ

う。

カヌワ 「娘よ、

世界の端から端までを、

おだやかに治め給ふドゥシャンタ王と睦しい年月を經て、

その間にお生れになつた王子は、剛勇ならびなくおはす時、

御位を譲られた王様とそちは、この平和な山林に歸つて來るであらう」

ガウタミー 娘、お別れでだん〳〵ひまをとつた。さあ、もうお父様に歸つてお貰ひ。こんなに話してゐては際限がないからね。お父様、あなたもお歸り遊ばせ。

カヌワ わしの日課の苦行も今日は妨げられたわい。

シャクンタラー お父様はお修行遊ばしてゐるのだから、なんにもお歎きはないけれど、私はもう消え入りさうだ。

カヌワ 娘、お前は、なぜ、そんなにわしを悲しませるのだ。(歎息して)どうしてわしの愛を取り去らう。のう。お前が可愛がつてゐた戸口の野生の稲でも見たらばのう。——まあお行き、道中を用心してな。

(ガウタミー兩弟子シャクンタラー出で去る)

兩女 (久しく佇みて悲しみつゝシャクンタラーの後姿を見る) あゝ、あの樹で、シャクンタラーの姿が見えなくなつてしまつたわ。

カヌワ (歎息して) アナスーヤー、プリヤンヴダー、お前らの友達は行つてしまつた。もう歎くに及ばん、さあ歸ら

う。

兩女　お父様、さあ、歸りませう。シャクンタラーがいらつしやらないので、何だか仙家が、からつぽのやうでのすね。

カヌワ　そりや愛情といふものが、さういふ事をお前達に考へさせるのじや。

（悲しげに歩みつゝ）

これでわしも安心したといふものじや。シャクンタラーを夫の家へ送らせたからのう。

「娘、そは他の財寶なり、
今ぞその主におくりて、われ心やすし。
あづけられたる富を、
ことなく故主に返したる人の如く。」

（幕）

## 第五幕

（時に侍官、守衛老人入來る）

侍官　あゝ、年はとりたくないものだ。このさまは何といふことだらう。

『ありし昔、君が宮居の殿守、
勤めの飾りにとぞ持ちし杖の、
今はけながき年月を經て、
とぼ〳〵と行く身をぞ支ふべくなれる。』
奥にゐられる王様に少しでも遲れてはならぬ。
緊急事件を申上げねばなるまい。
（少し進みて）
ところで……と、用事はなんだつたか。
（默想して）
おゝ、さうじや、カヌワ仙人のお弟子達が王様に拜謁を願ひたいと言ふのだつた。不思議なことであるわい。
『輝いたのは瞬時、老人の記憶は、
燈火の消えて行くやうに、
忽ち明るくなつて、
また暗に蔽はれる。』
（少しく進みて前方を見）
こゝに王様がゐられる。
『下々を子のやうに憐んで、幸ひを與へ給ふ君は、

心みち足らず寂靜の地を求めおはす。
高見る日のかげろひに惱む羊の群を、
足引の岩間の蔭にみちびく牧者の―お丶君よ。』

王様のお仕事を瞬刻も忽がせにする事は出來ないに違ひないが、さりとてたつた今玉座をお離れになつた王様に、カヌワ仙人のお弟子の事を申上げるのは、なんだか心ないやうな氣がしてならぬ。かうして世の中をお護りになるために、いづこに王様のお休息といふものがあるであらう。と言ふのも、

『太陽の神は、時の駒に鞭うち、
夜となく、日となく、風は吹きて、
永遠に大蛇の王は、世界を背に負ふ、
收穫の六分一を收むる同じ勤めにいそしみ給ふ。』

(時に王と道化、大臣、從者など登場)

王　(歩みつゝ勤勞に疲れし樣子にて)
すべて各々が求めるものを得た時に、一切の人間は實に幸福である。しかし王者の仕事こそ、實に困難な仕事と言はねばならぬ。

『王位を得んとする望みも、得て後は既に消えて、
たゞ徒にその位地を保たんとする苦心のみが殘る。
惱みの増すてふ日傘を手にして、太陽の暑さをさけゆく人のやうに、

世界をわが物としても、心の悩みは更に癒えない。』

（楽屋より詩人達）

王よ、勝利あれ。

（その一人唱ふ）

『おのが身の苦しきをば厭はず、
世の民草の憂ひ除かんと日毎にいそしみ給ふ君は——生れましゝか。
頂きを太陽に燬かれつゝ、
涼しき木影に人の苦を救はんとする常磐樹の如く。』

（他の一人また唱ふ）

『世の罪を糺す主と現はれ、
悪を懲し世を治め、争ふものを静めて民の守りとぞなり給ふ君、
外國との友誼は非常に善けれども、
眞實の友誼を人民に示し給ふ君。』

王　（跪いて聞く）　わしはこれを聞いたので、すつかり疲れが癒えて生々した。

道化　（笑ふて）　あははあ、牛が牛追ひに呼ばれたらば、疲れが休まりますかな。

王　（微笑し）　とにかくまあ坐れ。

（兩人坐す、他のものも順次に坐す）

（樂屋よりビーナの琴の音す）

道化　（聞いて）王樣、音樂室の方に大變優しい音がしますな。多分お妃ハンサーヴデイカーが鳴らしておいでになるのでせう。

王　靜かに……聞いてみよう。

守衞老人　（彼方を見て）王樣は何かなさつての樣子じや。少し待たう。

（樂屋より歌ふ）

「汝の求むるは常に新しき蜜のみ、
飽くばかりアモラの花にくちつけて、おゝ蜂よ。
今は——なぜ——そを忘れつ、
あだし野の蓮の池に樂しみゐるや。」

王　うゝむ、情緒に滿ちた歌じやのう。

道化　王樣、あなたには、あの歌のわけがおわかりになるのですか。

王　（微笑して）そのわけは、ハンサ　ヴイカーは、一度わしが情を受けたばかりなのじや、友マータヴイヤよ、行つて妃に、わしは十分責められたと言ふて來てくれ。

道化　かしこまりました。
（起ち上つて）
しかしおそこでは、てまへになんとして見やうもありませんな。

王　まあ行つて、なんとか好い具合に妃を慰めてくれ。」

道化　承知致しました。

（と言つて立ち去る）

王（獨語）　はて何としたことじや。あの歌を聞いてから、わしの胸が何となく物騒がしい。前にまく愛する者と別れたと言ふ覺えもないのじやが。しかし

『凡そ心の滿足してゐる時に、

美しいもの、懷かしい聲などを見聞きして胸に強い印象を殘すのは、

たとへこの世にさることはないにしても、

過ぎし世に、契つた強い愛情の記憶が現はれるのであらうか。不思議やな。』

（と言ひて立つ）

守衞老人（近づきて）　王よ、勝利あれ。只今ヒマラヤ山麓の林中から、カヌワ仙人のお使としまして、道人達が御婦人方と共に到着せられましてござります。何と致しませう。

王（敬意を表しつゝ）　なんと、カヌワ仙人のお使が御婦人方と共にござつたと？

守衞老人　さやうにござります。

王　では官僧ソマラータに、吠陀經（ヹエーダ）の式によつてその方々をこゝへお通し申すやうにわしの言葉を傳へよ。わしはこゝに待つてゐる。

守衞老人　仰せの通り致しまする。（去る）

王　(立ち上つて) ヴエトラーヴテイ、護摩堂へ案内せい。

侍女　ハイ。どうぞこちらへお越し下さりませ。

(前に立ちて)

こゝは護摩堂の廊下で、掃除が行屆いてをりまするので、美しうござりまする。護摩の香油を出しまする牝牛はあそこにをりまする。さあどうぞ、こちらへおより遊ばしませ。

王　(下僕の肩に手を掛けて上る) ヴエトラーヴテイ、お前はなんと思ふ――カヌワ仙人がわしに使を送つたことを『何か障碍があつて、仙人の修行を害したのではあるまいか、

或はまたわしの不徳ゆゑに樹々の果實が止まつたのではあるまいかと、

事の樣子を豫想しかねたわしの胸は、とかくと心配をするのじや。』

侍女　なんのそんなことがござりませう。王樣の御威光で、仙家の者たちが安穩に暮されるのを悦んで、お禮を申上げるために來られたのだらうと存じまする。

(時にガウタミー、シヤクンタラー、カヌワ仙人の弟子等と共に官僕に導かれて入り來る)

守衞老人　こちらへ、こちらへ、皆樣、

シヤルンガラヴ　(道人) 友シヤラドヴワタよ。

『君の御稜威他を侵し給はず、

民草はいと賤しきも、敎へて惡の道を踏まず。

――さはれ人々のざわめくのを見れば――寂處に住みなれし身ゆゑか――

炎々として燃ゆる火の館にゐるが如し。』

シヤーラドウワタ（道人）シヤルンガラヴ、さういふ感じは都に入ると自然に起るものだ。

『自分もまた此處に樂しみを求めつゝある人を見るて、
みそぎせし身に有垢の人を見るごとく、
罪なき者の罪人を寢ねさるものゝ眠れるものを、
自由なる人の繋縛人を見るやうな思ひと、同じ氣持がするのだ。』

官僚（ソマラータ）それでこそ、あなた方のやうな方々を尊いと申すのでござります。

シヤクンタラー（凶徴 認め）あらつー　わたしの眼がぐる〳〵する。

ガウタミー　娘惡い運命はみな滅びて、お前の夫の家の神々たちが、みなお前に幸ひを與へて下さるやうに。

（と言ひつゝ進む）

官僚（王を指して）仙人がた、あのお方が王様でござりまする。四級の人民を治め給ふ王樣が、あなた方をお迎へするために、もうお立ちになつてをられまする。それ御覽なさい。

シヤルンガラヴ　大婆羅門、これはまことに讃ふべき事でござりまする。しかし私どもにとつては當然の事で、と申すわけは、

『木の枝は果實が熟すればおのづと垂れ、
水新たに集まれば雲下る。
善き人、位高き人の物優しきは、

世の人に善き事をなさんとする人の自性ならずや。』

侍女　王様、道人たちは快さゝうな顔をしてをられます。なんぞよいことのために參つたのでござりませう。

王　(シヤクンタラーを見て)

『おゝ、これは何人？　薄着衣で顏を隱してゐるので、

その美しさを飽くばかり知るといふ事は出來ないが、

苦行をする人らのうちに群れた樣子は、

枯葉のかげに見る新芽のやうではないか。』

侍女　王樣、奇態なことでござりまする。いろ〳〵考へて見ましても、あの方々が何しにおいでなされたかゞ解りかねまする。されど、あの御婦人は大變お美しうござりまする。

王　でもあらうが、他人の妻は、餘り凝視るものじやないぞ。

シヤタンクラー　(手にて胸を抑へ)　わたしの胸よ、なぜお前はそんなにびく〳〵するの？　靜かに辛抱しなさい。眼の前に御主人がいらつしやるじやないの？

盲僧　(進みて)　王よ、常に幸福あらせ給へ。

彼等は聖典に從ひ、敬禮すべき道人らでござります。師匠の大仙人から、お使として參つたのださうでござりまするゆゑ、何事かお聽き下さることをお願ひ申します。

王　承知した。

兩弟子　(手を揚げて)　王よ、勝利あれ。

王　わしはそなたらすべてに敬意を表しますじや。

兩弟子　君が願ひ、滿されよ。

王　仙人らは何の妨碍(さまたげ)もなく修行をしてゐらるゝか。

兩弟子

『君が世は德の守り、
なにとして道を修むる者に妨碍(さまたげ)がありませうぞ。
また高光る日のましますに、
どうして暗い處がありませうぞ。』

王　ではわしの王といふ名に、幾分の實があると言はるゝのじやな。時に迦葉波(カシャパ)大仙人の後裔カヌワ仙人には、世界の利益のために御機嫌はよろしいか。

シャルンガラヴ　修行成就の方々はその意のまゝに幸福を得られてをりまする。しかし師匠は、王様にお芽出度い傳言(ことづて)を、お傳へ申せと申しました。

王　仙人から、何を言ひつけられたのじや。

シャルンガラヴ　王様は自分の娘とうちく\の約束で結婚せられたから、自分は悦んでその事實を認める。

『願ひに契ふ人々の中にも王様はとりわけ優れておはす。
娘こそ善業の德の化身ともいふべく、
かくて有德の二人が、

妹背を契れる――創造神(ブラジャーパティ)に耻はあらざりき。』
で只今この娘をお受取になつて、家の祭りを共々におなし下さいませ。もう産月も近いことでござりまする。

ガウタミー （カヌワ仙林の聖母） 王樣、わたくしも一言申上たうござりますが、先刻より機會(をり)を得ませぬので……

王 御婦人、お話しなされい。

ガウタミー

『娘は親のゆるしを得ずでございました。
しかし、王樣もお友達にお相談遊ばさず、
うち〳〵に心をお許しになり、妹背をお契りになりました、
これはお互のこと、別にどちらにも科罪(とが)はござりませぬ。』

シヤクンタラー （獨語） 背の君はなんとおつしやるだらう？

王 （疑惧の念をもて聞き了り） 一體なんのことを言はるゝのじや。

シヤクンタラー （自身に言ふ） この言葉はわたくしには火だ。

シヤルンガラヴ 一體なんのことを言はるゝなどとは、これはや途方もないこと。申すまでもなく、王樣は御自身人間社會の習慣をようく御承知でせうな。

『貞操(みさを)ただしい婦人とても、
夫のある身で久しく生家(さと)にをれば、世の人は疑ひます。
さればこそ、女の親戚達は娘を――夫の愛せられると否とは知りませねど。

夫に送り屆けます。』

王　では、この御婦人はわしと既に結婚せられたると言はるゝのじやな。

シヤクンタラー（憂ひて獨語）おゝ心よ、お前の怖れるは無理じやない。

シヤルンガラヴ　御自身のなされたことがお嫌ひな事であるとしても、それに對する責任をお棄てになるといふことが、王様の王様らしいことでせうか。

王　そんな戲論を容れる餘地がどこにあるか？

シヤルンガラヴ（怒りて）かやうな欺瞞こそ、權力を貪る者の間にあたりまへなことです。

王　とんでもない無理を。

ガウタミー（シヤクンタラーに）娘少しの間恥づかしがらないでおいで、わたしがお前の着衣をとつて上げるから。そゝすれば、王様もお思ひ出しにならう。

（と言ひて言へる如くす）

王（シヤクンタラーを見）

『おゝ、實に並びなき姿かな――今ゆくりなくも自分にこのはしたものゝ、
果して昔この少女をうけ容れた事が自分にあるのであらうか。
いづれとも定めかねた心を直ちに決めて、この姫を受けいれやうか、
はた否まんかと私の心は惑ふ。
あけがたに蓮の花に露と蜜とを分ちかねて、

花に入らんとしてためらふ蜜蜂のやうに。

（と言ひて立ち、且つ考ふ）

侍女（獨語）まあ、王様は餘りに細々と道德の道をお踏みになる。誰が今の世にこんなに易々と得られた美しい贈物を斷る人があらうか。

シヤルンガラヷ　王様、なぜ默つてをられますぞ。

王　いろ〳〵と記憶を呼び起して見るが、わしにはこの婦人と結婚した覺えはない。とすれば人の妻を犯す耻を思はずに、どうしてこの婦人をわしが受納する事が出來るか。

シヤクンタラー（自らに言ふ）まあ、結婚した事さへ疑うていらつしやるのに、どうしてわたしの高い望みが遂げられやう。

シヤルンガラヷ　あゝ、もうこれで十分だ。

『娘を取られた仙人は、
しかも仙人らしく王様の罪を許してをります。
盜賊のやうなあなたに取られた財產の――娘を盜つて、
しかもあなたに敬意を表してゐるのです。』

シヤーラドウワタ　シヤルガラヷ、もうお止しなさい。シヤクンタラー、私たちは言ふだけの事は皆言ひました。しかし先方は、あゝいふ風の返事をされる、なんとかしてあなた自身あの方を信じさせるやうにしてごらんなさい。

シヤクンタラー（獨語）言つたとてどうします？　あれほどの愛がこんなに變るのですもの、あゝ、私は自分の一生

を實につまらない事にした。……でもなんとか言つて見よう。

（聲をあげて）

あな……（と半ば言ひさして）お丶、これは適當な言葉じやございません……プル王様、さうです、このお名がお似合になります。わたくしは苦行林で育ちました。從つて極く單純な心を持ちまして、先にお約束遊ばした事を、そのまゝ信じきつてをりましたのに、あゝ、今こんなお言葉で、その約束をお破りになる。それがプル王統のあなた様に、おふさはしい事でございませうか。

王　（兩手にて耳を覆ひて）靜かに――

なぜ、あなたはその生家の名譽を汚し、またわしをも同じく汚辱の淵に引き落さうとなさる？　これはちやうど、河の水が自分を守つてくれる岸の土を壞して、反つて自分の淸らかさを濁らすやうなものですぞ。

シヤクンタラー　あゝ、この事ばかりはみんなあなた様がなさつた事を……まるでわたくしを人妻かなんぞのやうにお疑ひになつて。では致方がございませぬ。わたくしは紀念のための。證標をお眼にかけて、あなた様のお疑ひを解きまする。

王　それが一番よろしい。

シヤクンタラー　（片手を指の處に置き、驚き）あれ、あれ、あれ、私の指にあの指環がない。（言ひつゝ悲しくガウタミーを見る）

ガウタミー　お前はあのサチー靈場の河水を拜んでゐた時に、その指環を落したのです。

王　（笑ひを含みて）　それが世に謂ふ、女の虛榮と申すものじや。

シヤクンタラー　これはまあ、何といふ惡運な、あゝ、しかし王様、わたくしはまだたしかな事實を申上げます。

王　ほう、こんどは何か聞けと言ふのじやな。

シヤクンタラー　あのいつぞや、新素馨(ナワマリカ)の花苑で、あなた様は、蓮の葉の器物(うつわもの)に水を入れて、お持ち遊ばしましたではございませんか。

王　成程、それから。

シヤクンタラー　その時、わたくしが平素自分の子だと申してをりました、仔鹿がそこへ參りましたらば、あなた様はやさしくその仔鹿をお呼びになつて、その水を飲めとおつしやいました。しかしあの仔鹿はあなた様を存じませんものですから、飲みませんでした。ですから、その同じ水をわたくしが取つてやりますと、大變悦んで飲みました。さうると、あなた様はお笑ひ遊ばして、かうおつしやつたじやございませんか『すべて彼等一族に信用のあるのはお前と、この仙林に棲む者二つに限られてゐるのじや。』とおつしやつたじやございませんか。

王　さういふ言葉は、そなたの目的を遂げるためとしては、實によく出來てゐる。世間並の樂しみを悦ぶ戀人は、さふいふ美しい虚言(そらごと)に惑されることもあらうがのう。

ガウタミー　王様、さういふ事をおつしやるものではございません。仙家で育ちましたこの娘(こ)は、人様をお欺し申すといふやうな事は、露ほども存じてをりませぬ。

王　おゝ、苦行林で長らく修練をなされた貴女(きぢよ)よ。凡そ女と言ふものは、下等な動物でも、いつ教へるともなく、わるがしこい智慧はすでに生長してゐることがわかる。牝(めん)の時鳥は、自分の雛鳥を飛べるやうになるまで他鳥(ひと)を欺むいて育てさせる、智慧のある人間に對して、何と言うて見る必要もないではないか。

シヤクンタラー　（大いに怒り）　まあ何といふ卑しいあきれた方でせう。あなたは自分の心に比べて、大方ほかの人た

ちも人を欺すものだと考へていらつしやるのですか。誰がまあ。ほかの人を……誰がほんとうの人格を道徳の衣で隠して、青草の下に恐ろしい陥穴のある……あなたのなさるやうな事をするものですか。

王 (獨語) とにかく、仙家に育つたために、單純だといふあの婦人が、あんなに怒つてゐる樣子を見ると、その言ふところも事實であるのかも知れない。横にそらさぬ眼の赤くなつた樣子、責め立てるやうな言葉、とても他の目的で作り事を言うてゐるものではないらしい。寒さに打たれたやうに紅い唇が震へて、弓のやうな美しい眉が一時に逆立つた樣子を見るに、あの婦人の怒りに嘘もないやうだ。とすると、わしの自身考へてゐることが少しく變になつて來た。

『かつてわが身に、
愛の契りを仙家に結んだ覺えがないゆゑに、
自分は情なくもてなしてゐる。
それを見ておのづから生ずる忿怒にその眼は赤く、
美しいその眉が逆立つ、
恰も愛の御神が弓を引き折つたやうに見える。』

(聲をあげて)

御婦人たち、ドウシヤンタの性行は世に知れ渡つてゐる。從つてそなたたちの言葉にわしは辨解する必要がないじや。

シヤクンタラー なんとでも。あなたのおつしやることは、正しいのでございませう。

たゞあなただけが、この世の中に正しいといふ事を知つていらつしやるのでせう。

さうして、節操を差上げた女は、何も知らないとおつしやいます。あゝわたくしは、あなたのお陰で、全く一人の娼妓となつてしまひました。

ガウタミー　娘お前はこの人をプル王統の名譽ある王様と信じて、口に蜜のある、腹に毒のある人の手にお前自身を委ねてしまつたのです。

シヤクンタラー（上衣の端を顔にあてゝ泣く）

シヤルンガラヴ　ふしだらな行ひが、その行爲者自體を焼き苦しめる樣子は、まづかういふ具合なものだ。

『それゆゑに何事をするにも、先づ熟慮を第一とします。
とりわけ私かに結ぶ愛の契りを、
かつて心を知らぬ者にする時、
その戀はかへつて身の敵となりますぞ。』

王　おゝ、道人、なぜ、そなたはあの婦人の申すことのみを信じ、その覺えもないわしに濡衣をかぶせらるゝのじや。

シヤルンガラヴ（怒りて）お前は王の答へを聞いたか。生れ落ちて以來、嘘僞といふものを露ほども學ばなかつた者の言葉を虚言だといひ、反つて詭詐強迫を政治の學問の一として修練した者の言葉を以て、信實だといふ事が出來ますか。

王　おゝ、正直なるそなた、しからばまづそれをさうとして、事實わしがさやうな事をしたとして、さてあの婦人を欺いたところで、それがわしにとつて何の獲物となると言はるゝのじや。

シャルンガラヴ　破滅です。

名聲あるプル王統のものは、またかつてその破滅を受けた事がない。そんな事は信ずる價値がない。

シャルンガラヴ　大王よ、そんな事を論じて何の役に立ちます？　さあ私どもは師匠の命令を果しました。もうお暇致します。さて、

『この乙女は、御身の妻である。
捨つると否とは、御身の自由です。
妻に對する主の權利は、
一切に及ぶと言ひます。』

ガウタミー　さあ參りませう、

（總べて立ち上る）

シャクンタラー　わたしが……こんな嘘ばかりの人間に騙されて苦しんでゐるのに、皆さんもわたしを棄てゝお行きになるのですか。

（と言ひつゝガウタミーに隨ふ）

ガウタミー　（立ち留つて後を見て）　これシャルンガラヴ、シャクンタラーが歎いて〳〵私たちについて來る。夫が亂暴にもあの娘を棄てゝしまつたのだから、全く便りない娘です。致方がないじやないか。

シャルンガラヴ　（顧みて大いに怒り）　なんといふ氣まゝな、そなたに勝手が出來ると思ふか。

シャクンタラー　（恐れて慄ふ）

シャルンガラヴ　よく聞くが好い、シャクンタラー。

『もし王様のお言葉がほんとならば。

そなたは仙家の名を汚した婬奔者——お父様はそなたをなんとせらるゝ？

もしそなたが、御自分の所爲に耻ないものなら

たとへ婢僕となつても、この家に留るべきものではないか。

それがそなたの守るべき道だ。』だから、そなたはこゝにゐるのじや。わしらは行くから。

王　おゝ、道人たち、なぜそなたらは、その婦人にきつく當るのじや？　まあようく聞かれい。

『月はたゞ睡蓮の花を悅び、

月は蓮華を愛する。

凡そ情欲を愼む者は、

人妻にかゝはる事を忌む。』

シャルンガラヴ　假りに長い月日の別離によつて、御自身のなされた事をすべてお忘になつたとします。それにしても、自分の妻を棄てゝそれを家に入れる事が罪惡だとおつしやるのが、果して王様のなさる事でせうか。

王（內殿の婆羅門を顧みて）お前はこの事について、どうしていゝと思ふ？　わしは相談する、果してわしが記憶を失つたのか、或はまたあの婦人が虛言を吐くのか、なんとも判斷し兼ねるじや。それでもしわしがあの婦人を退けるならば、それが自分の妻を捨てる事になるのか。或はまた人妻を汚すことになるのか。

婆羅門（考へて）もし王様がかうなさいますれば、

王　どうするのじや、言つて見て下さい。教師よ。

婆羅門　まづその御婦人が、身二つになられるまで、宅にお預けを願ひまして。

王　なぜさうするの？

婆羅門　かつて、王様が轉輪聖王とならせられる王子をお持ちになると、あの學問の深い占星聖者が申しました。さう致しますと、その誕生せられまする大仙人のお孫にその相好が具つてゐますれば、王様はその御婦人を王妃となされいますのが當然と申すもの、でなくば申すまでもなく、その御婦人は、父仙人の許にお返しになるべきものだと存じまする。さすれば事は定まりまする。

王　さう、それでよい。されば教師よ。

婆羅門　（立ち上つて）娘よ、わたしについて、こちらへおいで。

シヤクンタラー　おゝ、地の神よ、わが入るべき穴を。おゝ（かく泣き叫びつゝ婆羅門僧に導かれて、ガウタミー及び道人等と共に入る）

（咒咀のために記憶を失ひし王は、しかもシヤクンタラーを思へる時に舞臺の後より聲あり）

はて不思議な。

王　（こを聞きて）何事？

内殿婆羅門　（大いに驚駭して舞臺に入る）王様、實に不思議極る事が起りまして。

王　何事じや。

婆羅門　ちやうど、カヌワ仙人の弟子たちが行かれましたあと、あの娘は身の不運を限りなく歎きまして、双手を空に上

げてしきりと泣き悲しんでをりましたが。

王　それから、どう致した？

婆羅門　しまするど、一道の光が女の形を致しまして、あの天女聖祠の近くに現はれ、見るまにあの婦人を抱いて、天に上つて見えなくなりましたので。

皆々　はてさて不思儀な。

王　教師よ、この事は、既にわし等の棄て去つた問題じや。もうとやかくと無益な想像を加へる必要のない問題じや。そなたは、もう宅へ歸つてお休みなさい。

婆羅門　王よ、勝利あれ。

王　ヴイトラヷテイ、わしは全く疲れた。寢室へ案内いたせ。

待女　こちらへどうぞ、王樣、

（と言ひつゝまづ立つ）

王　（歩みて）

『仙人の娘を妻にした覺えはわしにない。
それでわしは彼女を退けた。にも拘らず、
わしの心の痛み悲しむ樣子は――わしは思ふ。
わしはかつて彼女と妹背の契りをしたのではあるまいか。』

## 中幕

（王妃の弟に當る市の警察署長、後に漁師を捕縛せる巡査二名を從へて登場）

二巡査　（漁師を笞ち）こらつ泥棒、貴樣は、この寶石に王樣の御名の彫つてある指環をどこから取つた、正直に白狀しろ。

漁師　（恐れたる樣子）にあ、旦那樣、おらあ、そげいな惡いことをするもんぢやごはせん。

巡査の一人　なんと？　すると、王樣が貴樣を大磐婆羅門と思召して、この指環を下されたと言ふのか。

漁師　違えまさあ。おらあ、さくら村に住んじよる漁師でげさあ。

他の巡査　泥棒め、おれたちは、貴樣の居所や職業を聞いてゐるのぢやないぞ。いらん事言はずに、さつさと白狀しろ、

署長　これスチヤカ、始めから順々に言はせて、中途であれこれと邪魔をしない方がよい。

兩巡査　仰せの通り致します。

（漁師の方を向き）

こりやその次を言へ

漁師　だから旦那、おらあ毎日、網や釣でさかなとつて、家の奴どもを養つてゐまさあ。

署長　（笑ひつゝ）ふうん成程、お前の生活方法は尊いものぢや。

漁師　旦那、そげ言はしやつたものじやごはせん。

おらあたちの歌を聞いて下つせえ。

「漁師と生れて漁するが。
罪じや耻じやと來てらりよか。
靜かでお慈悲な婆羅門さへも、
犧牲するとて動物殺す。」

署長　ふん。それから。

漁師　何日でつか、へえ、緋鯉を取つてそいつを細かくきざんでゐやしたら、でけえ價の玉入の指環が出やしたで、そいつ賣らうとしちよると、旦那方に縛られたんでげさあ。この指環を見つけたわけはもうこれだけだ。さあ旦那、このうへあ、打たうと粉にしようと勝手でげさあ。

署長　（指環を嗅いで）ジヤールア、これが魚の腹の中にあつたといふ事は疑へぬ、この生臭さ加減きやつの言ふところが事實なのじやらう。じや一つ、持來い、王宮へ行つて見よう。

二巡査　（漁師に向ひて）こりや巾着切、前へ進めい！

（と言ひつゝ、一同進行）

（署長　スチヤカ、この王宮の門前でよく注意して、わしが宮中から歸つて來るまで、待つてゐるのぢや。

兩巡査　署長、おいで下さい。閣下の宮中御伺候は、さぞ王樣もお悦びになるでせう。

（署長外に出て去る）

一巡査　ジヤールカ、署長は隨分遲いね。

他巡査　王様なぞと言ふものは、自分の都合のいゝ時に會はれるものだからね。

一巡査　ジヤールカ、供の手がね。（と言ひてその手を漁師に示し）この巾着切を、叩き切りたがつて、むづ〳〵しとるんだ。

漁師　旦那、旦那方あ、わけもねえに人を打つもんぢやねえでげさあ。

他巡査　（前方を見て）おゝ、あそこに署長が、王様の命令書を手に持つてこつちへ來られる。今にこやつが宥されて、家族どもの顏を見る事が出來るか、でなけりや、死刑になつて禿鷲や豹の餌食になるかゞわかるんだ。

署長　急げ、急げ、そいつを。（と半ば言ひたる時）

漁師　あゝ、おらあ殺されるだあ。（と嘆息す）

署長　その罪目を許してやれ……そいつが指環を持つて來たのは、正當じやと王様はおつしやつた。

一巡査　畏りました。こいつあ、實に閻魔の王廳から逆戻りしたんだなあ。

漁師　（署長に禮して）旦那様、おらが生命はおめえのもんでがさあ。

（と言ひて署長の足元に禮す）

署長　起きい、王様はお前にあの指環に相當する御褒美をやれとおつしやつたぞ。さあ、これが御褒美だ、受取れ、（と言ひて金を渡す）

漁師　（大いに喜び禮拜してこれを受く）おらあ、この、御恩ありがたく思ひまするだ。

他の巡査　こいつあ、實に王様から大恩を受けた奴だ。全く斷頭臺から降ろされて、象の背中に乘せられたやうなものだからなあ。

一巡査　閣下、この償金で見ますと、どうもあの指環の寶石は大變な價値のもので、王樣が餘程大切になさつたものと見えますな。

署長　いや、わしの考へるところでは、王樣はあの指環の寶石を、大事がられたわけではないのだね。

兩巡査　と言へば、どういふわけでございますか。

署長　あの指環を御覽になると同時に王樣は最愛しい佳人を思ひ出されたのだね、と言ふのは、あれを御覽になると、忽ちあの勇敢なお方が、非常に悶えてゐられる樣子だつたからなあ。

一巡査　つまり私どもが、王樣に歡喜と悲哀とを、一時にお起させ申したわけですな。

他巡査　これらの事は、要するにこのさかなの腹から起つたわけであります。

（と言ひて羨望の情を以て漁師を眺める）

漁師　旦那、この金の半分を、酒手に取つて下つせえ。

署長　おい漁師、わしらと貴樣とは、もう大の仲善しになつたわけだ。そこでどうだ、朋友交際の手始めに、一杯祝つたつて好からう。さあ。みんな酒店へ行かう。

（皆去る）

## 第六幕

（時に天行車に乘りたるミスラケーシー舞臺に現はる）

天女　（ミスラケーシー）アチヤラ蘇川の沐浴の用意の當番をすましてしまつたから、今の間に、皆さんが沐浴をなさるまでに時間もあらうから、お友だちに頼まれたこと、あの王様の様子を見て來ませう。シヤクンターラーはお友だちのメナカの娘だから、何んだかこの頃は自分の兒のやうな氣がする。あのかはいゝ兒のためによう く調べて來てやりませう。

（あたりを見て）

これはまあ、何と言ふことでせう。今日は春祭で嬉しい花やかな日だといふのに、この宮殿にはお祭の様子つたら少しも見えないでひつそりしてゐる。おゝさうだ、あの苑守の傍で隱身術に隱れて、頼まれただけの用事はみんな見て來ませう。

（と言ひて天行車を下りて舞臺に立つ）

（そこへ一人宮女アモラの花を見つゝ入る、他の宮女も續く）

宮女第一　（パラブリチカー）あゝ、美しい盛の春が來た。

「彌生の春の生命とも見ゆる、
薄紅色の萼にて黄色の蕾をつゝめる、
アモラの花の榮えを、
嬉しきまゝに悦びまつる。」

宮女第二　（マドウカリカー）あれ杜鵑女さん、あなたは何を獨りでおつしやつてゐるの。

宮女第一　蜜蜂女(マドゥカリカー)さん、あなたは御存じでせう。杜鵑(ほとゝぎす)はアモラの花が咲いてゐると、大變感動するものですつてね

宮女第二　（悅んで走り入る）まあ蜜の春が來たのですね。

宮女第一　蜜蜂女(マドゥカリカー)さん、あなたがちやうど、美しい思ひの歌を、お唄ひになる時が來ましたわ

宮女第二　（爪先にて立ちつゝ）ちよつと、私がアモラの花を摘んで、愛の神樣をお祭りするのですから、その間わたしを捧へてゝ下さい。

宮女第一　さうすれば、お祭りの功德の半分は私に下さるの？

宮女第二　そりや仰有るまでもないわ。私とあなたとはもと〳〵一つだつたんでせう。それを神樣が二つにお分けになつたのですものね。

（と言ひて友に身をよせアモラの花を摘む）

まあ、この花は十分に開いてゐませんのね。けれど、莖は折れ易いわ。

（合掌して）

「摩竭羅(まかう)の旗を持ちたる、愛の大神に額づきまつる。
アモラの花よ。御弓(ゆみ)持ちます愛の御神に、
我は今いましをぞ捧げむ。
そは愛染五箭の一として愛の神に放たれ、
旅人の家にのこせし若き妻の胸を、
いましの打たんがために。」

侍官　（怒りて登場）これつ！　何をする！アモラの花を摘むなぞとは以ての外の事だ。王様が春の祭りをお止めになつたのを知らないのか！

兩宮女　（恐れて）どうぞお宥し……私どもは王様のお命令(いひつけ)を存じませんでしたので。

侍官　全く知らなかつたかね。王様の御命令は春の樹はもとより、その枝に棲む鳥にさへ及んで、いづれも皆順つてゐるのではないか。あれを見い。

「アモラの蕾はいち早く出たがその花蘂(はなしべ)を現はさず。
クルヴカの花もまだ開かずにゐる。
冬は過ぎても杜鵑はその美しい歌聲を喉に潜め、そのさまを見て、
膽を冷やした愛の神は、放ちかけた矢を半ばで止めたであらう。」

天女　（ミスラケーシー）大王に限りもない權力(ちから)のあることは、疑ひもないことだわ。

宮女第一　私どもは、數日前王様に拜謁を得まして、大王のお妹婿ミトラヴス様からこのお庭に來て、花を描けと仰せつけられまして、參つたのでございますから、全くの新參者で、なんにもお聞きしなかつた者でございます。

侍官　では以後かういふ事を二度と致すな。

兩宮女　（急に禁止のわけを知りたくなつて）あなた様、もしもわたくし共にお知らせ下さいまして、お差支へもない事でございましたら、なぜ王様が春祭りをお止しになりましたか、そのわけをお聞かし下さいませんか。

天女　王様たちは生れつきお祭が好きなのに、それをしないといふには余程のわけがなくてはなりません。

侍官　（獨語）この事はもう世間に知れてゐることじや。話してやつても差障りもあるまい。

（磬を上げて）

お前たちいつぞや、シヤクンタラーが追つ返へされたといふ話を聞いたかね。

兩宮女　ハイ、私どもは大王の御妹婿様から、お指環のお見つかりなつたことまで伺ひました。

侍官　ふうん、それまで聞いてゐれば、それから先の話は少し許りしかないよ。その指環を御覽になると王様は、いつか內證でシヤクンタラー姬と結婚せられた事をお思ひ出しになつたのさ。それでこの前にはその事を全くお忘れになつて、シヤクンタラー姬を追ひ返された事を非常に御後悔なすつたのさ。といふわけは、

「王様は美しいものをお厭ひになつて、

常のやうに日々の政務も御覽にならず

夜は夜もすがら眠もやらず、寢がへりのみし給ふ。

慈愛深い王様の事だから、

宮女のお話にお返事はなさるが、

時々間違へてシヤクンタラーとお呼びになる。

そしてお思ひ出しになつては、

恥かしさうに兩の腕を垂れていらせられる。」

天女　これはまあ、いゝ事を聞いた。

侍官　だから王様のお心持がさういふ風に悶へてゐられるので、從つて春祭りも禁じられたわけさ。

兩宮女　それは御尤でございます。

(樂屋より)
こちらへ、どうぞ、王様。

侍官 (聞きて) こゝへ王様がお見えになる。お前たちは自分の仕事をおしなさい。

兩宮女 ハイ、(彼等立ち去る)

(時に王、後悔の態にて道化婆羅門と守衞侍女を率ゐて登場)

侍官 (王を見て) あゝ、あの人を引きつけるやうな魅力のある相好は、どんな時にも變らず現はれてゐる。今は心の悶えで輾轉してゐられるが、それにしても美しいことだ。
「王のなさるべき獨特の莊嚴もなさらず、
左のお手に僅か黄金の腕環をかけられたばかり、
唇は熱のために蒼白く、
お眠りにならぬ眼は紅さしてゐる——にも拘らず、
生得の優しさは、(貴い玉を、光を出すために研く如く)
やつれ給うた君のお姿の輝きを増す。」

天女 (王を見て)シャクンタラーは追つ返されても、恥かしめられても、やはり王様のお心を占めてゐる事に間違ない。

王 (靜かに考へつゝ歩みて)
「あの時はなんとしたのじや。
わしのこの愚な心は眠つてゐたのか?

あゝさうじや。あの美しい眼をもつて乙女に
起されながらも眠つてゐて、
今、後悔の炎に胸を燒くのじや。」

天女　ほんとにね、あのかはいさうな鳥は不運でしたのね。

道化　はてさて、またシヤクンタラーの事で責められてござる。どうして慰して好いのか……わしにはわからん。

侍官　（王に近づいて）王よ、勝利あれ。お庭のお遊びの用意は十分に致してござります。どうぞお氣に召しまするやうに遊ばしませ

王　ヴエトラヴテイ（守衛侍女）大臣の處に行つて、わしは今朝非常に遲く起きたから今日必ず見ねばならぬ政務上の事があつたら、書面で申遣すやうに申し傳へておけ。

守衛侍女　ハイ、仰せに從ひまする。

（彼女出づ）

王　パールヴターヤナ、お前も自分の務めに行くがよい。

侍官　ハア、

（外に出づ）

道化　王様は全くこゝを寂しい處になさいましたな。春が來て、なんとも言へないほど美しいこの歡樂の庭を、あなたはお避けになるのですな。

王　（歎息す）友よ、運の惡い時には、更に多くの禍ひが重なると、諺には言ふがの、全くよう言うた事じや。

「忘却の闇、わが心をとざし、
仙家の乙女と契りし記憶を失ひて、
かよわき乙女を情なき手もて逐へりし悲しさよ。
愛の御神の放ち給ふ花のアモラ矢にひしと射られて、
胸の闇たちまち破るれば、おゝ、時は移なるに。
悔ひの叫びに血を吐く思ひよ。」

道化　いや、わが友よ、一寸お待ちなされい、てまへがこの杖で愛の神のその矢を滅してやります。

(と言ひつゝ杖にてアモラの樹を打ち花を落す)

王　(笑みて)はゝゝ、わしはそなたの婆羅門の威力を見た。が、さてわが友、わしはいづこに坐らうか。おゝさうじや、わしが最愛の人の美しさとかよわさに似てゐる玉蔓の前に坐つて、眼を慰めようかの。

道化　しかし、先刻王様は雅家の女官メダーヴィーに仰せつけられましたな。それはあなたが妙香花蔓の阿亭で終日暮して、御自身で貴女シヤクンタラーの肖像を描くから、その下書をかしこに持て行けといふ事でござりました。

王　さうぢや、しかし心の慰めとしては實に貧しいがのう。まあ、その妙香花蔓の阿亭に行つて見ようか、案内せい。

道化　どうぞこちらへ。

(かくして二人先進す。天女ミスラケーシーもまた從ふ)

道化　この妙香花蔓の阿亭の中は、寶石で敷つめて飾つてございます。その上靜かで自然の閑居で涼しい風を送つてくれます。全く王様を喜んでお迎へしてゐるやうですな。さあどうぞ、内へ入つてお坐り下さい。

(兩人とも內に入る)

天女　この莖の後に隱れて、かはいゝシヤクンタラーの話をみてやりませう。さうしてあの娘に王樣の尊い愛情をすつかり話してやりませう。

(と言ひてそこに立つ)

王　(歎息す)わが友よ、わしは今始めてわしがシヤクンタラーに遇うた時のことを殘らず思ひ出したぞ。その時わしはそなたにシヤクンタラーの事をみんな話して聞かせたのう。わしがあれを退けた時にそなたはそこにゐなかつた。しかしどうしてそなたはその後一度もあれの名さへ言はなかつたのぢや。

道化　恐らくてまへが忘れましたから、王樣もお忘れになつたんでせうな。

天女　だから王樣は、ちよつとでもお友だちと離れてはならない。

道化　いや實はてまへの方は、忘れてはをらなかつたのですが、そのお話しの末にあなたは、これはすつかり戲談だぞと仰せられましたので、愚直なてまへは仰せの如く信じてをりました。しかしこの事は詮ずるところ、運の力が強かつたのでせうな。

天女　そりや、ほんたうね。

王　(暫く考へて)おゝ救けてくれ、友よ。

道化　何とした事です。王樣は御自身をお忘れになつてゐますな。大人物といふものは、決して憂ひのために奪ひ盡されるものではありません、大暴風が吹いても心は動きませぬぞ。

王　友よ、わしはシヤクンタラーがわしに追ひ退けられた時に、全く寄邊ない身となつたことを思ひ出すと、わしの

胸が裂り張ける程苦しいのぢや。
「乙女はわしに拒まれて、
　寄るべなき身を一族に從へて去なむとすれば、
　父仙人の御弟子なる行者は、聲を勵まして「止れ」と言へりき。
　姫は涙に滿ちたる眼をそむけて、
　情なきわしを見やりたる、そのいぢらしさ、
　おう、思ふだにわしの胸は燃ゆ――毒矢に射られたる如く燃ゆ。」

天女　その悲しさ、たよりなさは、私も同じ事です。

道化　へえ、てまへは、あの空から降りて來て、あの婦人を引攫つて行つた者が、何であつたか、それが疑はれてたらないですな。

王　友よ、それは別に疑ふに及ばん。誰一人あの節操の固い乙女に觸れる者はないじや。わしがあれの友だちから聞いたところで見れば、メナカがあれの母じやと言ふから、大方そのメナカか、或はあれの友だちかゞ取りに來たのであらう。

天女　あんなに苦しんでゐらしても、びつくりするほど常識だけはおありなさるのね。

道化　さうとしますれば、御心配は御無用ですな。いづれ暫くしたらば、あの婦人にお會ひになれるでせうよ。

王　なぜじや。

道化　何處の親類にしても、自分の娘が最愛の夫から、長らく離れてゐる苦しみを見るには堪へませんからな。

王　わが友よ。

「過ぎし世の善き行業が實りたるに、

僅かの誤りにて總ては過ぎされり、

そは夢なりしか、現象にか、

わが望みは絶えて、運の山より墜ちたる如し。」

道化　そんなに仰るものじゃありませんな。てまへの申すことは、この指環が證明してをります。ならねば運命は、必ず思はぬ事から、出來上るものですからな。

王　（指環を見て）この指環は、わしの容易に達し得ないところから落ちて來たので、いくらかわしの心の慰めとなるじや。

「さてもこの指環よ、

爪紅く美しき乙女の指より、

過世の善業ともしくして、

早くも落つべき運命もたりし、いましよ。」

天女　もしあの指環が、誰かシヤクンタラーを知つてゐる人の手にはいつてをつたなら、ほんとの慰めがあつたであらうに。………シヤクンタラーは今遠いところにゐる。そしてわたしだけがひとり、王様のこのお優しい言葉を聞いて喜んでゐるわけですのね。

道化　はて、この指環には王様のお名が彫つてある。どういふお考へで、この指環をあの方の指におはめになつたので

すかな。

天女　この人は、わたしの聞きたいと思つてゐる事を聞いてくれる。

王　わが友よ、わしが苦行林から歸る時に、乙女は眼を涙ぐませて問うた。「あなたは何時またわたしのことを思ひ出して下さるか」とな。

道化　それからどうなさいました。

王　それでわしは、この指環を乙女の指にはめてやつて、かう言うたのぢや。

道化　どう仰せられました。

王　「いとし妻よ、この指環に彫られしわが名を、
　日に一字づゝ讀みたらば、
　そを讀み了へし日こそ、
　わしが城中より者共を遣し汝を迎ふる日なれ。」
と、さうして、この殘酷なわしは、その事を忘れたばかりに、その約束を果さなかつたのじや。

天女　ほんとに幸福な別れであつたのに、運命はそれを邪魔をしたのですね。

道化　ではなぜ、それが釣針みたやうに、緋鯉の口にはいつたのですかな。

王　乙女は恒河のシャチー靈場で水を拜む時に、その指環を指から河の中へ落したのじや。

道化　ありさうな事ですな。

天女　それであのかはいさうなシャクンタラーに向つて、結婚した事さへお疑ひになつて、罪を犯すなぞとまでお考へ

になつたのですね。でもこれ程に深い愛が記憶を呼び起す印がなくては、思ひ出されないとは少し不思議ね。

王　わしはこの指環を責める。

道化　(笑ふて) てまへもこの杖を責めてやりますな、なぜ、お前は曲つてる、主人は眞直なのに……とから言つて。

王　(それには眼もとめずに)

「なぜお前は水に落ちた？
あの美しいかぼそい乙女の指から、
お前は非情なものだ。
事の善悪を知らなかつたと言ふだらう
さうにや、それじや、なぜ、
有情のわたしがあの愛しい人を拒んだぞ。」

天女　わたしが言はうと云ふ事を、御自身で言つていらつしやる。

道化　とにかくてまへは、餓鬼に責め立てられるやうですな。

王　(彼の言へる事に少しも氣が附かず) おゝわが愛する妻よ。何のわけもなく、そなたを拒んだわしの胸は後悔の炎に燃えてゐる。そなたよ、どうぞこゝに一ぺん來てわしを許してくれ。

(時に女官手に繪を持ちて登場)

侍女　王様、此繪にお后様がをられます。

王　(それを見て) この描いた繪の中にも、やはりわしの最愛の乙女の美は現はれてゐる。

「大きな長い眼の上に動く弓のやうな眉、
ちらりと出た齒先、下脣、
――そこにこぼるゝ微笑の愛らしさ。
熟した棗の色のやうに紅々と美しい脣に、愛の想は現はれて、
匂へる口、戲むれに物言ひいでんとするけはひ
――あゝしかし繪だ、繪だ。」

道化　（繪畫を見て）友よ、これは實によく出來ましたな。どうもこの繪の御婦人の表情があんまり美しいので、じつと、見てゐまするとじねんと生命のある物のやうに思へて、なんだか、物でも言つて見たいやうな氣がしますな。

天女　王樣は畫かきの名人だ。お友だちのシヤクンタラーが眼の前にゐるやうだ。

王　名人の畫家と言へども、到底繪に現はし得ない或物を、わしは不完全ながらも、乙女の美を現はす事を努めた。
「平面に描いた乙女の胸が高く見え、
臍のあたりは低く、胃のまはりに高低があつて、
油繪の繪具のおかげとかぼそい樣子も現はれて、
ほゝゑみながら斜めにわしを見て物を言つてゐるやうな。」

天女　これはすべて、だん／＼と後悔の苦しみが增して來る愛の表情ですね。

王　（歎息して）

「わしはその乙女を愛撫する餘りにこの繪を描いたけれど、
眼のあたり相見た時には情なく乙女を退けたのであつた。
濛霧のために、行手に水滿々たる大河のあることも知らず、
溺れることも厭はず、突き進んだ人のやうに。」

道化　よく見ますると、この繪には美人が三人もゐますな。どれが一體シヤクンタラーなのです？

天女　この人はまだシヤクンタラーを見た事がないと見える。眼をもつた甲斐のない人ね。

王　そなたは、どれだと思ふ？

道化　（凝視して）この水を貰つて、引々としてゐる若いアーム樹の傍に立つて、結びの緩い髮から、落ちかけた花を手でおさへながら、顏を少しく汗ばんで、片腕は柔く垂れて、下衣は腰のあたりでちよつと緩んだ、全體の樣子が、少し疲れたといふ風に描いてあるのがシヤクンタラーで、そのほかはお友だちでせうな。

王　よう見た、友よ。わしの思ひの節々もそこにあるのじや。急いで描いて、隅の方には汚れさへあるが、わしの頬から落ちた涙の跡は、繪具の色の代りにも見えるであらう。

（侍女に向ひ）

チヤトウカー、こゝがまだ半分しか描いてない。そち行つて繪具と筆を取つて參れ。

侍女　（道化婆羅門に）マータヴイー先生、恐れ入りますが、この繪をお持ち下さいませんか。わたくし一寸取りに行つて參りますから。

王　わしが持つてやらう。

(王待つ、侍女去る)

道化　こゝへ何をお描きになります？

天女　そこへシャクンタラーにとつては、大切なものをお描きになるのだと思ふわ。

王　友(サケー)よ、聽け。

「マリニー河の砂地の上に二羽の鵞鳥と犛牛と、
その後には聖ヒマラヤの雪の連峯を描いて、
仙衣を染める染草が枝から垂れてゐる樹と、
その下には左の眼を牡鹿の角にこすつてゐる牝鹿を現はさうと思ふ。」

道化　(獨語)王様のおつしやるところを聞いてみると、なんでもこの繪は、髯の長い木皮衣(きのかはごろも)を着た仙人の姿で埋つてしまひさうだぜ。

王　友(サケー)よ、シャクンタラーの父のカヌワ仙人を、ちよつと飾つて描かうと思つたが、つい忘れてしまつたじや。

道化　それは、なんですかな。

天女　苦行林にゐるシャクンタラーに、何か一つ似合うたものを描かなくちやだめね。

王

友(サケー)よ、乙女の耳に合昏花(シリシヤ)の莖をつけて、
花びらが頬に垂れてゐる様子を描くのを忘れた。
またその胸に秋の月のやうに耀く、

優しい瓔珞を描くことも忘れた。

道化　どうしたのですな、これは。美しい蓮華のやうな手を上げて、顔を隠すやうにして、大變恐がつてゐるじやありませんか。シヤクンタラーが。

（注視して）

うんわかつた。この蜜泥棒の悪戯者が、お姫様の蓮華のやうなお顔を攻め立てゝゐるのですな。

王　その悪戯者奴を追ひ拂へ。

道化　不法を罰せられるのは、あなた様のお勤めですからな。どうぞお追ひ拂ひ下さいまし。

王　それはさうじや。蓮に咲いた花の客人よ、お前はなぜ、こゝへ來てそんなに難儀をしてゐるのじや。

「見い、花にとまつた雌蜂はお前を待つて、
お前を慕うて
喉は乾いても
お前の來るまでは蜜を吸はない。」

道化　此動物は、止めれば止めるほど、なほ頑固になるものですな。

王　（怒つて）なんじやと、わしの命令を聞かぬと申すか—よし聽け。

「わしが乙女と戯れて、
相觸れんとせしかの若き木の芽の如く美しき紅唇に、
おゝ刺さんとするか、いましは。

さらば、蜂よ、わしは汝を蓮の花の中に閉ぢこめておくぞ。」

道化　あなたがそれ程嚴しくお咎めになるのに、なぜ蜂が畏れぬのでせう？（傍に向きて微笑して）たうとう王様が氣狂になつた。おれもお附合で、どうやら變になつたわい。

王　これほど禁じたのに、なぜお前はまたそこにゐる？

天女　あゝ、賢君と言つても、愛戀の苦しみには顚倒するものですのね。

道化　（聲を上げて）これは繪ですぞ。

王　なに繪だと？

天女　わたしは、大抵あの方がかうしていらつしやるだらうと思つてゐたから、知りたい事だけは、みんな知つてしまつた。

王　そなたは、隨分ひどい事をする。

「現に今ありありと乙女に會うて、
嬉しく樂しく話してゐるものを、
ほんとは繪だぞと言つてそなたは、……
わたしの胸には生きてゐる乙女を……。」

（と言ひて涙を流す）。

天女　別々になつてゐることから、こんなにお苦しみになるとは、不思議な程御自身で矛盾なさるのね。

王　友よ、どうしたら、この不斷の思ひを忍び續ける事が出來るかのう。

「夜もすがら寢ねざれば、
夢にだも乙女を見むすべはなく、
涙のしげければ、
晝にだも乙女を見むすべはなし。」

天女　あなたは乙女の友だちの前で、すつかり、乙女の拒まれた悲しみをお洗ひ下さいましたのね。

侍女　チヤトウリカー　勝利よあれ、王様よ。只今繪具を持つて參ります途中で、

王　どう致した？

侍女　ピンガリカーがお知らせ申したものでございますから、ダスマテイ王后樣がお見えになりまして、繪具箱を無理にお取りになつて、これはわたしが自分で持つて行くからとおつしやいました。

道化　さうして、お前はどうやつて逃げて來た。

侍女　ちやうど、王后樣のお召の裾が、蔓草にからまつたのを、ピンカリカーがはづしてをります間に、逃げて參りました。

王　友よ、后がこゝへ來さうにや。あれはきつい嫉妬家じやから、この繪をどこかへ隱さねばならぬ。

道化　なぜ、あなたは御自身もと、おつしやらないのですな。

（繪をとり上げて）

もし閨房の網からお脫けになつたら、てまへはあの秘雲殿の鳩しか、氣のつかない庭に隱れてをりますから、どうぞ、あそこでお呼び下さいまし。

（と言ひて急に走り出づ）

天女　あの方は、愛人に心を牽かれながらも、やはり初めの愛情を尊重していらつしやる。あれを見ると、きつと友情の厚い方に違ひない。

（時に守衛侍女登場）

守衛侍女　勝利よ、王様にあれ。

王　ヴェートラヴァティ、お前は、后を途中で見たじやらう。

守衛侍女　ハイ、お目にかゝりました。けれども、お后様はわたしが書面を持つてをりまするのを御覧になりまして、お歸り遊ばしてでございます。

王　后は公用と知つて、わしを妨げなかつたのである。

守衛侍女　王様、大臣様が申されましてござります。本日は國務の方はお休みになりまして、たゞ市政の事について申上げねばならぬ事を、書面に認めておかれましたさうで、どうぞそれを一應御覽下さいまするやうにと申されましてございます。

王　書面を出せ。

守衛侍女　（それを差出す）

王　（讀む）

「謹みて大王に奏し奉る。遠洋商業に從事せるグハナ＝ブリデヒーと申すもの航海中破船のため死去致し、彼に遺子無之候。ゆゑにその所有せし數千萬金の財産は、國法に從へば、王宮の所有に歸するものならむと思

考致し候。武威赫々たる大王よ、願はくば賢智を垂れて至當の命令を下させ給へ。」
子のない者は實に悲しい者じやのう。ヴエートラヴテイ、その商人は隨分な金持だつたのじやから、さぞ妻も澤山あつたに違ひない。誰か姙娠中の者もゐないか、調べてやつて見い。
守衞侍女　妻の一人にアヨツダヤの商人の娘が、男子誕生式を致しましたと聞きましてございまする。
王　ではその胎に出來た兒が、その財産の所有者じやと大臣に傳へよ。
守衞侍女　（出づ）
王　おゝ、ちよつと待て。
守衞侍女　ハイ。
王　この後わしの民は子孫の有無に拘らず、遺産は死者の生前最愛せる者に附與す、たゞし罪人を除く、とドウシヤンタ王が宣告したと言へ。
守衞侍女　確かに傳へまするでございませう。
（退場、再び登場）
王様、人民は大王の御命令を、大旱に雨を得たやうに喜びましてございます。
王　（長く熱き吐息を吹きて）あゝ嗣子のない家の主人がなくなると、一族は全く依るところを失つて、その繁榮もともに滅びてしまふのじや。わしが死ねば、プル王統の榮光も、同じく消えてしまふのじや。
守衞侍女　さやうな御不幸な事は、決して〳〵起りませぬ。
王　じねんと出來た好機會を、わし自ら退けたのじや、わし自らを責めねばならんのじや。

天女　王樣はわたくしのお友だちのために、御自身を責めていらつしやる。

王
「わしの家の礎たる第二のわしを、
わしは乙女の胎におきながら、わしはその正しい妻を棄てたのであつた。
美なる機會に、善なる地に種を下して、
大なる果實を育つべく豫期せしものを、あゝ。

侍女　（守衞侍女に向ひて）ねえ、王樣は大臣樣がお送りになつた書面を御覽になつてから、あんなに涙を流していらつしやるのですね。王樣はあのお歎きをお止めにならないだらうと思ひます。ですからね。あの秘密殿に隱れていらつしやるマータヴィー先生なら、きつとお慰め申上げるに違ひありません。ですから、あの方をお呼び下さいましな。

守衞侍女　お早くお氣がおつきになりましたこと。

王　このドウシヤンタの祖先は、さぞ危んでをられるであらう。
「あゝわが亡き日何人かわが一族の中に、
吠陀の法に從ひて供養を祖靈に捧ぐるものぞ、
必定して我に嗣子なきを彼等は憂ひ、
わが捧ぐる水に——
おゝ祖靈は——その涙を浮べてぞ飲まむ。」

天女　あゝ、王樣は闇夜に惱んでいらつしやる。燈火はあるけれども、餘りに遠い。
侍女　あゝ王樣、お歎はもうたつぷりでございまする。あなた樣はまだ〱お若くいらつしやいます、ほかのお后樣に王子樣がお生れ遊ばして、御祖先樣の御滿足もございませうに。
王　（獨白）
王樣はわたしの言ふことは、少しも耳を傾けて下さらない。これではいゝお藥も、お拒みになるに違ひない。
（變ひて）
「世の初めより淨かりし月種王統の連綿も、
わしに至りて遂に絶滅す。
恰も淸き辨才河の流れは罪の國に至りて、
消え盡すと言へる如く。」
（と言ひて失神す）
侍女　（怖れて）王樣、どうぞ、お氣を確かにお持ち遊ばして。
天女　あの方を悅ばせて上げようか……いえ〱、わたしは神々のお母樣から、まずシヤクンタラーを慰めてやれと言ひつけられたのでした。神樣たちもシヤクンタラーの事には心配していらつしやる。早く行つてシヤクンタラーが正妻として歡んで迎へられる事を言つて上げませう。こゝでわたしがとやかくとするのは善くない。早く行つて、この事を詳しくわたしの愛しいお友だちシヤクンタラーに話して上げねば。
（と言ひて空中に上つて消ゆ）

（舞臺の後より聲あり）

王　おゝこれは正當じやありません。

侍女　（氣がついてその聲を聞き）はてマータヴヰーの聲が遠くに聞える。きつとお氣の毒なマータヴヰアが繪を持つてゐるところを、ピナリダハーや、ミスリターなど一緒に、お后樣附の女官に見つけられたのだわ。

王　チヤトウリカ！、お前行つて、わしからだと言うて、后に侍從などを禁足しないやうに言へ。

（女官退場）

（舞臺の後より再び同じ聲にて）

室内監督　あの婆羅門は恐ろしくて聲が出ないので、……誰かそこにゐないか。

王　ハハア。なぜ婆羅門マータヴヰアは、あんなに叫んでるのか、見て來い。

室内監督　ハハア、卽刻見て參ります。

（退場、やがて恐れに打たれたる樣子にて登場）

王　パールヴタヤナ、何か非常に恐ろしいことでもあつたのか。

室内監督　さうおつしやつて下さいますな。

王　なぜ、さう慄ふ？

『老いたれば旣に顫ふ身の更に甚だしく、

風に揺れたる菩提樹の如く慄へたる。』

室内監督　あなた様のお友だちをお救け……

王　救けるとは、なんじや

室内監督　大變な危險で……

王　なんじや、もつとよく言へ。

室内監督　どうぞ秘雲殿の方向にお氣をつけ下さいませ。

王　何か起つたのじや、そこで。

室内監督

『孔雀の家から登らうとするには幾度も〳〵休まねばならぬほど高い、

あの殿の頂から、

形の見えない或者が王様の御友だちマータヴィアを、

力に任せて奪ひ去つたのでございます。』

王　(急に立ちて)わしが家が惡鬼に襲はれるやうになつたといふのか！　それとも、王位は罪を作り易いものじや

からと言ふのか！

『日夜わがなす事の、

正道を誤りしやも計り難く、

多くの民のうちに、

「誤斷に苦しむものあるやを明らめ難し。」

（舞臺の後より）

早く〳〵助けて―

王　（足早に進み）汝（そち）、恐れるな。

（舞臺の後より）

どうして恐れずにをられませうぞ。誰かがてまへの腕を後へねぢ上げて、甘蔗（さとうきび）をへし折るやうに折らうとします―

王　（その方向を見て）弓を！　弓を―

案内監督　（弓と矢とを持ちて登場）王よ、勝利あれ、こゝに弓矢と手蓋がございます。

王　（弓矢を執る）

（舞臺の後より）

『さあ、今貴樣を殺すぞ、新らしい咽喉（のど）の血にうゑた虎が、
餌（ゑ）となつた獸を大地に叩きつけるやうにして。
さあ、ドウシヤンタ王を呼んで救主（すくひぬし）になつて貰へ、
物の災厄を除くべく兼々弓箭を整へてゐる、ドウシヤンタ王を。』

王　（怒る）わしの名を指す、怪しからん。おゝお前のやうな卑しい惡鬼を、長くは生かしておかんぞ。

（弓弦を打ち）

パルヴタヤナ、階段の道へ案内せい。

案内監督　ハア、こちらへ、どうぞ、王様、（皆々急いで行く）

王　（ぐるりを見廻し）おゝこゝは空つぽじや

（楽屋より）

お助け下されー　てまへの方からは、あなた様が見えまする。あなた様には、見えませぬか。あゝてまへは猫に捕まつた鼠も同様、助かる望みがありませぬ。

王　おゝ魔術に誇れる者よ、わしの矢さへ汝を見出すことが出來ないといふのか。待て、待て、わが友にしがみついてゐるとて安心すな。かう射てくれる。

『婆羅門よ、護るべき汝を護り、
殺さるべきものは、
鵞鳥の水乳をわかちて乳をのみとる如く、
これを殺さむ。』

（時にマータリ（因陀羅王の御者）マータヴィアを引きて登場）

マータリ　王様。

『君が箭のお的になりまするものは因陀羅より送られた悪鬼でござります。
さあその弓をお緩め下さいませ。
そして友垣と云ふ親しいお眼で射て下さいませ。

さやうな殘酷な矢ではなく。』

王　（いそいで矢をおさめ）さてはマータリであつたか、ようこそ來られた。神々の御者。

道化　これは賢しい王様、てまへはまるで犧牲の獸のやうに、こやつに殺されかけてをりましたに、へえ、お歡待とはどういふ譯で。

マータリ　（微笑して）王様、わたしがこちらへ參りました用事を、どうぞお聞き下さいませ。

王　どういふ御用て。

マータリ　惡魔の一群に、カーラネーミの子のドウジヤヤといふのがありまして

王　わしはナーラダから、その事は聞いてゐる。

マータリ

『王様のお友だち因陀羅にはとてもそれを滅す力がござりませぬ。
彼を戰場に破り得る者は王様をおいてほかにはござりませぬ。
闇夜は月の光りで破ることが出來ても、
太陽の力は闇夜に及びませぬ。』

でございまする次第で、王様にその弓箭をお持ちの上、この天車にお乘り下さいまして、即刻御出陣をお願ひ致しまする。

王　わしに因陀羅がこの光榮ある仕事を託せられたことは、非常な滿足に思ふ。じやがそなたはたゞマータヴイアをあんな目に合せたのじや。

マータリ　（微笑して）ハハア、それはかう申すわけで、實は何か非常にお樂しの事があなた樣におありのやうに見えましたので、それ故、あゝ致してちよつと王樣をお怒らせ申したのでございます。と申すは

『火は薪を動かせば更に燃え、
蛇は頭に觸れられて怒る如く、
勇者は激勵によつて、
その精神を恢復す。』

王　さうじや、そなたのやり方は、それでいゝのじやのう。（道化の方を向き）わが友よ、わしは天の主の命に從はねばならん。じやによつて。そなた行つて大臣にこの事情を話してわしの傳言をしてくれ。

『萬民の擁護は汝の智力に委する。
わしの弓はしばし、天界の勤めに行くのじや。』

道化　仰せの通りに申しまする。（退場）

マータリ　王樣、どうぞ、天車にお乘り下さいませ。

王　（乘る）

# 第七幕

（王とマータリ天車に乘じて）

王　おゝマータリ、因陀羅王がわしに光榮ある事を命じてくれたが、わしはその責務に對して、甚だ不足を感ずるのじや。

マータリ　（微笑して）王樣、それは兩方ともが、自ら足らぬとお考へになつてをられると思ひまする。

「あなた樣はお與へになつた利益を極く僅かなものと、
お考へになつて光榮をのみ喜ばれ、
因陀羅は王樣のなされた功勞に對して與へた光榮を、
僅かなものとお考へになる。」

王　さういふものじやない。別離の宴を開いて、神々環坐の中で、因陀羅王がわしに半坐を分つてくれられた光榮は、
わしにとつては、望外の幸福と言はねばならんのじや。

「瓔珞を欲して立ち給ふ王子ジヤヤンテを見つゝ、
空を仰ぎて、ほゝゑみたまひし因陀羅王は、
その御胸にふれし表徴に、白檀の練粉のつきし、
曼陀羅の花瓔珞をわしに與へ給ふた。」

マータリ　不死の主より王樣にお贈り申すに、何物といへども惜しむべきものはござりませぬ。

「悪魔の剰の壓迫に堪へかねた、天國と因陀羅は、
二たびその自由を握ることが出來たのでございまする。
一たびは昔、人獅子王の鋭爪の勝利によりまして、
一たびは今、大王の平鐵の矢の御威光によりまして。

王　にしても因陀羅王の偉大なことは、
「人臣の樹つる功はいかに偉なりといふとも、
これ君侯の赫々たる稜威に歸す。
太陽の御者紅雲は夜の闇を逐ふ力あれども、
日の神その前になくんば何の力かあらむ。

マータリ　お言葉は、あなた様のやうなお方にこそおふさはしうございります。
（すこし進みて）
王様の偉大は末ながく天界に記憶されてをりまする。と申しまするは、
「天上諸神の奥方は化粧綺具の餘りをもつて、
如意寶樹で作つた布の切れ〳〵に、
この戰ひの顚末を唱ひやすい句に考へて、
王様の功績を天の神々は綴つて書きつけてゐる。」

王　マータリ昨日登る時は悪魔との戰ひに氣がとられてをつたので、このあたりには氣をつけなかつたのぢやが、一

一體この邊は何れの風帶に當るのじやな。

マータリ 「このあたりは淸しい三筋の恒河が、空に流れてをりまして、
諸々の曼陀羅に落ちて生まれました諸々の光の珠の現はれて參りまする、
プラワと申す離塵の風處天で、
遍照天に支へられてをりまする世界でございまする。」

王 それゆゑか、わしの躰の内も外も非常な寂靜を感ずる。
（天車の外面を見て）
わし等は、今、雪の圏内に參つたやうじやな。

マータリ なぜさうお思ひになりまする？

王 「山の峽間から飛び立つた雨乞鳥が跡を追ふて、
燦々たる電光とともに、綠色の天馬にひかれて馳せ下る天車に、
いとど露のしづくの繁いのを見れば、
このあたりは、水氣の多い雲に充たされてをるであらう」

マータリ 暫く致しまするると、王樣のお國へ到着致しまする。

王 （下方を眺めつゝ）おゝマータリ、激しく下つて行くので、地上の人間世界が實に妙なものに見えるな。

「大地は山の頂から延びたやうに見え、
木の葉の隠れ場を棄てゝ、木々はその幹を顯はしてゐる。
山峡の細き流れは水なき如く、
大地はわれ等の前に打ち上げられるやうに見える。」

マータリ　よう御覧なさいました。
（と熱心に下を見て）
いや、全く美しい世界でございまする。

王　あの東西の大海に臨んで、頂からは夕焼け雲のやうに黄金の溶液を吐き出してゐる山はどこの山であるな。

マータリ　王様、あれはキンナラの山で、金剛嶺と申しまする靈場で、修行成就のためには恰好の地でございまする。
「自然生の創造主から生れたマーリーチヤ
神と悪鬼との父が、
その妻と共に修行いたされる
聖地でございまする。」

王　（敬意を表し）それは好い都合じや。わしは敬意を表して行かう。

マータリ　それは結構なお考へでございまする。
（下降の態度をなす）
到着いたしましてございまする。

王　（驚いて）おゝマータリ。
「この車はなんの音もしない。
あたり前の車のやうに塵埃も立てない。
地べたを走る車でありながら
地べたには觸れず、なんの障碍もなく走るよ。」

マータリ　王樣と因陀羅の違ひは、僅かこれ位のものでござりまする。

王　どの邊がマーリーチヤの御子息の仙居じやな？

マータリ　（手を以て示して）御覽なさいまし。
「あの白蟻の塚に半ば身を埋めて、淨糸と蛇の皮を捲きつけ、
首のぐるりには古いくねつた藤蔓を廻らし、
その頭の苦行髮には鳥が澤山巢をくうて、
大木の幹のやうに日に向つて立つてをりまする
あれが仙人でござりまする。」

王　（見て）おゝわしは、この苦行仙人に禮拜する。

マータリ　（車馬の手綱を引て走る）車はまづこゝで停めねばなりませぬ。こゝは曼陀羅樹の珍重される創造主の仙居でござりまする。

王　こゝは天上よりもまた、一段と寂靜なところじや。不死の甘露を湛えた湖水に來たやうぢやのう。

マータリ（車を止めて）どうぞ、お降り下さい。

王（車を下る）これから、どうせられるのぢやな。

マータリ　車はこゝに停まれと申しまする因陀羅王の命によつて、そのまゝ停つてをりまする。それゆゑ私も降りまして、差障りございませぬ。さあどうぞ、こちらへお越し下さいまして、仙人の庭をご覧下さいませ。

王（驚いて）

「如意寶樹の林はあれど人はたゞ氣を吸ひてのみ生き、
黄金蓮華の蘂にて染みたる水を神に捧げ、
寶珠にて造られし家に棲み、苦行の果を得むと希ひし
天女らの前にて制欲の禪定をなせるこの樂境に――仙人ら苦行す。」

マータリ　大德の望みと申しまするものは、上れば上るほど高くなるものでございまして。

（少しく進みて空を見上げ）

ブリツダーシヤカル、お主人のマーリーチヤは只今何をしてをられる？

（聽きつゝ）

なんと？奥方のダクシヤ＝ヤニーが妻が夫に仕へる功德について、お尋ねになつたので、それで御主人が奥方や仙人の妻たちにその説明をなさつてじやと？　では、そのお話の濟むまで待たねばならん。

（王を見て）

王様、しばらくこゝにお待ち下さいませ。私はその間に因陀羅の父上に、あなた様の事を申上げて參りまする。

王　ハア、承知した。

(と言ひて立ち停る)

マータリ　それではちよつと行つて參りまする。

王　(自身に起れる吉兆を注視し)

「お前はわしに欲望を培(つちか)はうと言ふのか。

おゝ腕よ、お前は空しくふるへてゐるのだ。

さういふ樂しい事は過去にみな退けてしまつた。

そして今はたゞ憂ひのみが殘つてゐるのだ。」

(樂屋から)

またそんなおいたを。あなたはどこへいらしても、わがまゝですのね。

王　(聞いて)かういふ所でわがまゝ勝手のあらう筈もないのに、誰じやらう、あんなにとめられてゐるのは。

(聲の聞える方向に眼を向けて、驚き)

おゝあの子はたれの兒ぢや。二人の仙人にとめられながら出て來る。いかにも優れた力のありさうな。

「母の乳から引き離されて、

鬣をふり亂した獅子の仔を、

玩具(おもちや)にするのじやと、

引き立てて行く。」

（時に件の子供は二人の仙女と共に仔獅子に戯れつゝ登場）

子供　獅子の仔、口を開け、口を。お前の歯を算へてやらう。

仙女　まあ、あなたはいたづらつこね。なぜ私たちの兒のやうにしてゐるその仔をそんなにいぢめるのです。だん／＼と増長して、まあひどい。仙人たちはあなたの事をサルヷーダマナ（一切を征伏するもの）と言つてゐますのは善く當つてゐますよ。

王　どういふ譯でか、わしはこの兒が自分の子のやうな氣がしてならん。これと言ふのも自分に子がないためにどこの子もみんなかはいらしく見えるのぢやらう。

他の仙女　獅子のお母さんが、あなたがそれを離さないと噛みつきますよ。

子供　おゝこは、おゝこは。

（下唇を突き出す）

王　（驚いて）

「この兒は大英傑の種と見える。盡きざる勢力の炎を持つてゐるから。」

仙女　その仔獅子をお放しなさい。他のおもちやを上げますから。

子供　なあに？　さあ、おくれ。

（手を開く）

王　（その手を見て）ほう、あの手には轉輪王の象徴がある。」

「欲しいものを得やうと開かれた手には、
指の間に薄膜(シャーラ)があつた。しかし、その掌(たなごころ)は、
曉(あかつき)まばゆく開きそめた紅蓮(ぐれん)の
炎のやうな花瓣の連つたる花蕊の如く能くは見えなかつた。」

他の仙女　スブラタ、うつちやつてお置きなさいよ。口だけではその方はだめですよ。するのなら、わたしのお部屋のサンコ＝チヤナカの彩どつた土孔雀を持つて來て下さいな。

仙女　じや、さうしませう。

(退場)

子供　おれは、その間こいつと遊ぶんだ。

仙女　(見て笑ひ)お放しなさいよ。

王　あんないたづらものじやけれど、わしはあの兒がかわいらしい。

(歎息して)

「蕾のやうな齒なみを出して譯もなく笑ひ、
舌のろく／＼廻らない口で物をいふ愛らしさ。
たとへ衣物は泥によごれても、
思ひのまゝにあの兒を抱いてやる人の幸福(さいはひ)さ。」

仙女　(指を立てゝ)なぜ、わたしのいふ事を聞きません？

（あたりを見て）
誰かこの邊に仙人の子たちはゐないでせうか。
（王を見て）
あ、もし、あなた樣、この獅子の仔を、なんと申しても放しませんから、どうぞ、引きし放てやつて下さいませんか。

王　（諾して、微笑みつゝ近づき）おゝ、これ大仙人の兒よ。
「こんないたづらをして仙人の掟を破るものじやない。
お前のお父さんは物靜かに心の平和を味つてお出でじやのに。
お前はなぜお父さんを耻しめるやうな事をする。
白檀の樹に近よる蛇のやうじや。さういふ事をしてはならん。」

仙女　この方は仙人のお子樣じやござりませぬ。

王　成程、このお兒のなさる事は、その顔つきによう似てゐる。しかし、ところがかういふ處じやから、それ相當なことを考へたのだが。
（吸ひつけられたやうに兒に觸れて）
「この兒はわが一族の者より生れしものならん。
ふとその身に觸れては——何者にかその悦びをかへな。
おゝいかなる笑みをか、父の胸に、

かゝる見もてる父の胸に――與ふるものぞ。」

仙女　(二人を見て) まあ、なんといふ不思議な事でせうか。

王　なにが不思議ですか。

仙女　あなた様とは何のかゝり合ひもないこのお子様が、どうしてか、大變よく似ていらつしやいます。それに、見ず知らずのあなた様のお言葉で、このおいたさんが、すつかり靜かにおなりになりましたのが不思議でございます。

王　このお子が仙人の子でないとすればどなたのお子さんです。

仙女　プル家でございます。

王　(獨白)なんじやと、これがわしの一族の者の子じやと言ふ？　ふうむ、それでこの子がわしに似てゐると言ふわけなのじやな。とすれば、大方プルの一族がこの世の終りの義務(つとめ)として、仙人生活をしてゐる、それの子でゞもあるのじやらうか。

「人よ、生の初めを甘露(アムリタ)の如き宮殿に過ごし、
天が下をいと安らかに治め、
やがて人よ、生の末を隱者の住居(すまひ)なる樹蔭に入りて、
淸らかにも苦業生活を守れる者よ。」

(聲を上げて)

しかしどうして、人間世界のものがこゝへ來られたのでせうな。

仙女　おつしやいますやうに、こゝは人間の來られる世界ではございませんが、このお子さんのお母様が天女にお關係(ちかづき)

がありましたので、つまり神様たちのお父様のお住居で、このお子さんはお生れになつたのでございます。」

王　（獨語）だいぶん有望になつて來たぞ。

（聲を出し）

ではそのお母さんと言ふのは、何といふ仙人のいや王様の奥様です？

仙女　自分の正妻を棄てるやうな人の名を、誰が申しませう。

王　（獨語）ほう、これは全く自分の事じや。では、一つこの兒の親の名前を聞いて見やう。……いや〳〵、それは人としての禮に背く、人妻の名をきくことになるからな。

（仙人、彩りたる土の孔雀を持ちて登場。）

仙女　それこのシヤクンタ〔孔雀〕を御覧なさい。

子　どこにお母さんが。

兩仙女　（笑ひて）お名前が孔雀とおんなじなものだから、お母様だと思つたのでせう。まあ、あなたはお母様好きの方ね。

他の仙女　この美しい孔雀を御覧なさい。あなたはこの孔雀が見たいとおつしやつたでせう。

王　（獨語）シヤクンタラーがこの子の母の名と見える。しかし、世の中には随分同じ名の人間もあるから。名前だけ聞いたのでは、徒らにわしの心を惑亂させるのみじや。

子供　おばさん、あたしは、この美しい孔雀が好きだ。

（と玩具を取つて遊ぶ）

仙女　（心配げに見て）このお子さんの腰につけてあつた、お守がないじやありませんか。

王　いや、それは御心配なく。さつきこのお子さんが獅子をいぢめてをられた時に地べたに落ちたのです。

（と言ひて拾はんとす）

兩仙女　あゝ、それはどうぞ、お拾ひになりませんやうに……。

（見て）

まあ、もうお拾ひになつた。

（と言ひて驚きて兩手を胸にあてて、互に顏を見る）

王　なぜ、拾うては惡いのです。

仙女　いえ、お聽き下さいまし。このアヴラジダーは恐ろしい力のある守藥で、マーリーチャ仙者から、このお子さんのお誕生の日に頂いたのでございます。そしてこのお守りが地べたに落ちなした時には、御兩親でなければ、拾うてならないのでございます。

王　もしほかの人が拾うたとしますると？

仙女　それが忽ち蛇となつて、拾手に嚙みつくのでございます。

王　さういふ事を實際御覽になりましたか。

仙女　えゝ、度々

王　（喜びて獨白）あゝわしの望みが遂げられたぞ。うれしい。

（とて子を抱く）

他の仙女　おゝスツヴダー、早くいらつしやい。苦行していらつしやるシヤクタラーに、早くこの事を知らさねばなりません。

子供　放して、放して、お母様のところへ行き度い！

王　わが子(プツトラ)よ、お母さんは、わしとお前とを見に今直ぐ來るよ。

子供　あたしのお父様はドウシヤンタだ。おぢさんじやない。

王　お前の矛盾が、ます／＼わしのためには確實な一致となるのじや。

（シヤクンタラー片手に髮を握りて、思案げに登場）

シヤクンタラー　（獨語）あのお護符(まもり)が蛇にもならなかつたとは聞いても、なんだかまだ本氣にならない……ミスラケーシーの話を聞けばほんたうかも知れないけれど。

（と言ひつゝ進む）

王　（シヤクンタラーを見、喜び且つは悲しみて）

おゝシヤクンタラー、

「衣は垢にけがれ、
苦行に疲れし顏(かほ)は青ざめ、
獨りゐる身の姿が、髮を束ねて、
無慈悲なるわがために、いと久しき日を淨く守りし。」

シヤクンタラー　（悔悟の心に青ざめし王を見て、考へつゝ、獨語）

あゝ違ふ、わたしの夫ではない。とすれば誰だらう？　神聖な儀式で清浄に護りたてゝゐる子に不浄な身體(からだ)をさはらせるのは。

子供　（母の傍に歩みより）お母様、あの人は誰あたしを抱いて坊やつて言ふのよ。

王　おゝ愛する者(プリイエー)よ、實にそちには無残なことをしたのう。しかし、かうして今幸福(しあはせ)が來てめぐり遇ふやうになつたのじやから、どうか、わしを思ひ出してくれないかのう。

シャクンタラー　（獨語）おゝわたしの胸、しつかりして。一度はわたしをおいぢめになつた運命の神も、今度はこのお腹立ちをお忘れになつてわたしを憐んで下さる。さあ、わたしの夫ですよ。

王　おゝわが妻よ。

「思出の輝きに夢幻の闇は消えて、
幸なるかな再び、おん身はわしの前に立つべくなれり。
蝕のおはりに妻ロヒニーに會ふ
月のもちし運命(さだめ)の如く——美(め)しき者よ。」

シャクンタラー　（歡びて）おゝ勝利よ、あらせ給へ、わが夫(せ)。（と言つゝ涙に遮られて止）

王　妻よ。

「勝たせ給へといふ言葉は涙に消ゆるも、
あゝわしは勝ちたり。勝ちたり。汝(なんぢ)が飾らさる
顏(かほ)の青きを見るがゆゑに。」

子供　お母様、あの人はだあれ？

シヤクンタラー　お前自身の運命をお尋ねなさい。

（と言うて泣く）

王

「あゝ、かよわき者よ、そなたの胸から、
わしの無情を責める心を棄てゝくれ。
計り知れない何者かの強い力があつて、わしの心は闇に閉ぢられたのであつた。
巨大なる疑惑の暗夜――それに蔽はれた人の心は、
花飾を毒蛇と思つて投げ棄てる盲人の如く、
一切の善を悪と見るではないか。」

（と言ひてシヤクンタラーの足に禮す）

シヤクンタラー　どうぞ、あなた、お立ち遊ばして。永い間の苦しみも詮じつめれば、わたしに罪業があればこそ。いかほど御親切にして頂いても、わたしの罪業が反對に〳〵にと、働いたのでございますものね。

王　（立ち上る）

シヤクンタラー　それよりも、あなた、どうしてこの不幸なわたひしをお思ひ出しになりまして？

王　では話さう。話せばわしの心に打たれた愁傷の箭も抜けようと言ふものじや。

「かよわき者よ、暗冥のわが心ゆゑに棄てられたそなたの眼に、

涙は湧いて唇にまでも流れたであらう。
おゝ美しき者よ、今わが心の悔ゐより涌れたる表徴のゆゑに、
そなたの睫毛に露の如く宿る涙を拭はしめよ。」

（と言ひつゝ拭ふ）

シヤクンタラー　（涙を拭はれし際に王の指環を見て）それは、あの同じ指環でございますの。

王　さうじや。これが不思議なことでわしの手に入つて、それと同時にそなたのことを思ひ出したのじや。

シヤクンタラー　ほんとにそれが悪いことをしたのね。あの時は見つけようとしても、どしても出て參りませんでしたの。

王　蔓の花が咲く時候の來た時のやうに、これを受取るといゝ。

シヤクンタラー　いゝえ、わたしはもうそれをよう信じません。あなたがお持ちになれば、ようございますわ。

マータリ　（登場）これは〳〵お幸福な事にござります。お后様との御再會、お健やかな王子様のお顔も御覧になりまして、大慶至極に存じまする。

王　いや、そなたのやうなよいお友だちに伴れられたれば、望外の幸福を得たと申すものじや。して、マータリ、この事はまだ因陀羅王には御存じあるまいな。

マータリ　（微笑して）神に知られないと申すことはござりませぬ。さあ、ではお越し下されませ、マーリーチヤ尊者が王様にお會ひになられまする。

王　そなた、この子を抱いて、みんなで一緒に尊者にお會ひ申すのじや。

シヤクンタラー　でも教師様たちの前に、夫と一緒に參るのは羞しう御座います。

王　いや、祝の宴の時には必ず一緒に行かねばならぬ。さあ、行くじや。一緒に參れ。

（凡べて進む）

（時に黑幕を落して、マーリーチヤその妻アデイテイと共に現はる。マーリーチヤは王を見て）

おゝダクシヤニー。

降魔の戰ひに將となつた一世の救護者ドゥシヤンタ王とはこの方の事じや。

「そなたの子の因陀羅神の求めに應じて、

因陀羅神の志はこの方の弓勢によつて成就せられ

雷電は遂にその形ばかりの裝飾となつたのじや。」

アデイテイ　あの輕々しい姿勢が、なんとなく大英雄らしい。

マーターリ　王樣、神々のお兩親は御自分の子供に對するやうな柔いお心持で、あなた樣方を御覽になつてをられます。

さあどぞお前へお進み下さいませ。

王　マーターリよ。

「これ十二の形象を具し、光のみなもとと諸仙に名つけられ、

三界の守護者にして、犧牲の享受主たる因陀羅神を生み、

また放勝者たるヴイシユヌ自在の根源と言はれし、

世界の創造主より生れたる第一ダクシヤとマーリーチヤなるか。」

マータリ　左様にござりまする。

王　（拜して）兩尊者に因陀羅の僕ドウシヤンタは敬意を表し奉る。

マーリーチヤ　生命永くして地上の統治者たれ。

アデイテイ　また無敵の王たれ。

シヤクンタラー　（子と共に尊者の足許に禮拜す）

マーリーチヤ　おゝ娘、そなたの夫は因陀羅神と肩を並べる。そなたの子はジヤヤンタのやうになるのじや。これより外にはもう祝つて上げる言葉がない。そなたは因陀羅の后パウロミーのやうに、夫の生きてゐる限り、そなたも長く生きてゐるのじや。

アデイテイ　おゝ娘、そなたは夫の手厚い敬愛をうけて、またこの子は生命永くしてそなたら二人の家の莊嚴となるやうに。……さあ、こゝにお坐り。

（創造主の周圍に一同坐す）

マーリーチヤ　（彼等を一人〳〵指して）

「貞操正しきシヤクンタラーと、この善き子、汝とは、
信と財と義との三つを融合したる如くならむ。」

王　尊者、始めてわが望みが達せられ、次でまた尊者にお目にかゝる事を得ましてひたすら尊者のお慈悲を感歎してをりまする。

「花開きて實を結び、

雲起つて雨降る。
　因果の次序は正しく斯くあれど、
　尊者の惠みにて結果は容易く現はれき。」

マータリ　これこそ、世界のお兩親のなさる大慈悲でござりまする。

王　尊者、私は尊者のお血縁にあたるカヌワ仙人に對し、罪を負ふものでござります。と申しまするは、シヤクンタラーと乾闥婆式で結婚いたしました後、あれが友たちに伴れられて參りました時に、つい私が失念してをりました事でござりまする。その後この指環を見出しまして、失念してをりました事を、すべて不思議にも思ひ出してござりまする。

「何者かが、或る人の前を過ぎり、或る人はそを疑へり。
そは大象なりき。さはれその人は遂にそを知らず。
ほど經てその足跡を見てその象なるを知りしが如く、
わが心の迷ひはありしと自ら思ふ。」

マーリーチヤ　いやわが子よ、その罪はそなたの受くべき罪ではない、つまりそなたの幼覺そのものが、間違つてをつたのじや。まあ聞け。

王　仰せ下さいませ。

マーリーチヤ　メナカがアフサラの靈場から、そなたに逐はれたシヤクンタラーを伴れて、歎き〱わしの妻の所へ來た時に、私は禪定によつて知つたのじや。つまりこのかはいゝさうな娘はドウルヷーサの呪咀の力によつて、そ

の夫から忘れられたので、その指環さへ出てくれば、解けるのだと言ふことを知つたのじや。

王　（深く嘆息して獨白）あゝ、それで初めてわしの不名譽を脱することが出來た。

シャクンタラー　（獨白）わけもなくお退けになつたけれど、さういふ事があつたとすればなんの罪にもなりやしない、それにわたし自身呪はれてゐたことなぞ少しも知らなかつた。あの時分はすつかり夢中になつてゐたものだから、そんな事は一切聞かなかつた、けれどお友達だけは大變心配してくれたのね。もしか王樣がお忘れになつてゐたら指環を見せたらいゝつて。

マーリーチャ　（シャクンタラーを見て）娘よ、さうじや、お前の考へが正しい。お前はお前の夫に對して咎め立てをしてはならん。

「呪咀のためにかつてはすげなく拒まれたけれども、
今は既に思ひ出してお前を全心に愛してゐてくれる夫。
徒らに塵に埋もれた明鏡の反影も、
これを拭へばもとに復るやうに。」

王　仰せの通りでござりまする。

マーリーチャ　わが子よ、そなたの悦んでくれたこの子は、シャクンタラーが生み落した時に、わし自らが法典に從つて誕生の祝ひをしてやつたのじや。

王　尊者、わが家の基礎は、實にこの子によつて立つたのでござりまする。
（と言ひて子の手を執る）

マーリーチヤ　その子は、行末々は轉輪聖王の位に登る子じや、

「彼は戎車に乘じ海を渡り、
易々として地上の七大陸を征服せむ。
今聖林にて彼は、
諸の猛獸を伏するがゆゑにサルヴ・ダマナと呼ばれたれど
後に世界を支ふる者となりて
バハラタ（給食者）と名づけられむ。」

王　尊者が聖規によつてお祝ひ下されたこの兒が、將來仰せの如くなりますることを一途に祈りまする。

アデイテイ　幸ひメナカも傍にゐてくれることじやから、カヌワに娘の望みのかなつた事を知らせてやらねばなりませぬ。

シヤクンタラー　（獨白）わたしの思つてゐることを言つて下さる。

マーリーチヤ　カヌワは、苦行力でこの事は、すべてもう知つてゐるはずじや。

王　ではカヌワ仙人は、わたしに對して怒つてをられませうな。

マーリーチヤ　いや、しかしわしから、娘も子供もともに受け容れられたといふ吉報をも、一度知らせてやる事にしよう。これ誰かゐるか？

（弟子登場）

弟子　御用でござりまするか。

マーリーチャ　ガーラワ、お前今から直ぐに空を飛んでカヌワ仙人の所へ行つて、わしの使だと言うて、ドゥルヴーサの呪咀の解けたためにドウシヤンタの記憶もたち返つて、シヤクンタラーも子供も、ともに受け容れられたといふ吉報を傳へるのじや。

弟子　仰せの如く致しまする。尊師さま。

（退場）

マーリーチャ　（王に向ひ）わが子よ、そなたも妻子と一緒に因陀羅の車に乗つて歸城するがよからう。

王　では、お暇を致しまする。

マーリーチャ

「因陀羅をして汝の民に甘雨を灑がしめ、
汝はまた滿ち足る許り金剛持者に犧牲を供へよ。
かくの如くして善業をもて相酬ひば、
和平は百歳を以て數へられ、福祉は天地兩界に遍からむ。」

王　わたしの力の及びまする限りに、善業を勵みまする。

マーリーチャ　ではもう、何もわしに望むことはないか。

王　一方ならぬ御恩惠に預りました上に、今更なんの望むところがござりませう。

「王をして民の福利をはからしめ、
學藝の女神サラスヷテイをして吠陀の大聖典を襃へさらしめ、

ドゥルが女神と共に、
自在の神をしてわが再生の存在を滅ぼさしめよ。』

――シャクンタラー姫 (大團圓)
(森)

# 『シャクンタラ姫』の後に

□私は、世界聖典の研究且つ紹介者である篤學の士、松宮春一郎氏から河口慧海氏の梵語からの『シャクンタラ姫』の原稿の通讀及び紹介を依托された關係から、この優秀な飜譯の後に一文を添える幸榮を擔つたことを愉快に思ふ。

□一體『シャクンタラ姫』の完全な飜譯が既に日本に表はれてゐていゝ筈であるが、一向その模樣も見えなかつた。十年程前に私の知人の小森彥次君の飜譯があつたが、あれはウイリヤム・ジョンスの英譯に依つたものらしい。其他ある新聞紙に連載されたものもあるが、それも英語からの重譯であつたらしい。

□河口慧海氏の飜譯は、從來の英譯が、ウイリヤム・ジョンス氏にしてもモニエル・ウイリヤム氏にしても、多く

は改作誤寫の跡の多いと言はれるナーガリ字體に依つてゐるのに反して、印度梵語學者によつて校訂された經典と言はれてゐるベンゴール及びカシミール傳來の原本によるイスワラ・チャンドラ・ヴィデヤ・サーガル氏の刊本を土臺にされたものだといふことである。私は言語の事に關しては全く無智な一人であるが、たゞ驚いたのはこの翻譯によつて『シヤクンタラ姫』の思想の崇高で、構圖の雄大であるといふことであつた。

□『シヤクンタラ姫』は中古印度の詩聖カーリ・ダーサ(紀元五世紀頃の人)の作であるが、ヨオロッパ近代の戯曲の形態に新しい紀元を與へてゐるといふことは、この劇詩の序幕を讀んだだけで直ぐに解るやうな氣がする。一七八九年にウイリアム・ジョンスの英譯が生れた時に、ヨオロッパの文壇及び學術界に梵語研究の新氣運が勃興したと言はれてゐるのは決して不自然なことではないと思ふ。ゲーテが『シヤクンタラ姫』を讀んで、「天地の神聖と清淨の美は收めてこの一篇のシヤクンタラに盡てゐる』と讃歎したといふことは有名な話だが、彼の大作『ファウスト』の結構の大部分もこの『シヤクンタラ姫』に依つたものだとさへ言はれてゐる。然う考へると『ファウスト』の中に表はれる諸人物とその性格の中に『シヤクタラ姫』の中の諸人物とその性格が反映してゐるやうにも思はれる。

□『シヤクンタラ姫』の構想は仙人カヌワと天女メナカとの間に生れた美しい娘とドゥシャンタ王との戀愛苦行を描いたもので、これ一個の人間苦鬪史とも見ることが出來る。あの壯大無邊のヒマラヤの山中、マリニー河の岸に添へる仙林、可愛い眼をした鹿の住んでゐる邊に花の如く美しいシヤクンタラー姫を描き出して、それに教養あり勇氣ある一個の人間、ドゥシャンタ王を通して戀愛の元始的熱情と清淨さとを示し、愛の表象である記念の指輪によつて、男女の貞操と努力を示してゐる。また獨思瞑想に耽つてゐる老行者カヌワが、結婚のために自分

の家を捨てゝ行かうとする娘シャクンタラに對する人間親子の情愛ノ切實さは、この戯曲の最も美しい場面で、この老哲學者が娘に與へた結婚に關する教訓は實に印度人の結婚に關する最高道徳を示してゐると言はれてゐる。

□この戯曲の飜譯の文學的價値に關しては、讀者の判斷に待つ方が一層いゝのであるが、紹介者として、私は河口氏の梵語譯を現代語化された故鈴木重信氏　功績を充分賞揚していゝと信ずる。鈴木重信氏は若い印度學者としてまた獨想ある思想家として一部の人々に囑望されてゐた人であつたが、二三の論文及びヂヤイナ經典の飜譯を世に公けにしたゞけで、一般的には全く無名にして短い生涯を終へたことは實に殘念だと思ふ。この飜譯を見たゞけでも、同氏の語彙の豐富と措辭の功妙さは實に驚くばかりだ。私が進んで紹介の勞を取らうとしたのも實に氏の譯文の立派さに刺戟されてゞあつた。

□最後に『シャクンタラ姫』の歌詞の持つインテンシテイによつて、私は、戯曲の中に入つて來る詩の要素が理解されて愉快でたまらなかつた。將來の戯曲に主觀のインテンシテイによつて、もつと〳〵詩の要素を入れていゝといふ自信をも得たやうに思ふ。他人がこの戯曲を讀んで何う感ずるか、それは私には解らない。私はすてきに面白いと思つた。單に面白いといふ以上の面白さをさへ感じてゐることを告白して、この一篇を世間に紹介したい。

―一九二四、三、六―

雜司谷にて

秋田雨雀

# 同胞

豊島與志雄

恒夫は四歳の時父に死なれて、祖父母と母とだけの家庭に、獨り子として大事に育てられてきた。そして、祖父から甘い砂糖菓子を分けて貰ひ、祖母から古い御伽話や怪談を聞き、母の乳首を指先でひねくることの出來るうちは、別に何とも思はなかつたが、小學校から中學校へ進んで、それらのことがいつしか止み、顏に一つ二つ面皰が出來、獨り勝手な空想に耽る頃になると、兄弟も姉妹もないことが、甘い淋しさで考へられた。

兄弟も姉妹もなくて自分一人きりだといふことは、自由なのびのびとしたことだつたが、一方にはまた、張合のない頼り無いことでもあつた。そして餘りに廣々とした滿ち足りない心で、月や雪や花などをぼんやり見入つてゐると、獨り子だといふ事實の奥に——事實の手の屆かない仄暗い彼方に、自分と同じ血を分けた或る者の姿が、ぼーつと立現はれてきた。或る時は、自分を力強く導いてくれる兄だつた。或る時は、自分に戯れかゝる弟だつた。或時は自分をやさしく慰めてくれる姉だつた。また

或る時は、自分を心から敬愛し信頼してる妹だつた。そしていつも美しかつた……といふだけで、どうしても顏がはつきり見えなかつた。單に美しいといふだけでなしに、その眼鼻立をすつかり見て取りたいものと、心の努力を重ねるうちに、一體さういふ兄弟姉妹を、自分は昔持つてたのか、現在持つてるのか、未來に持つやうになるのか、または夢の中でだつたのか、何だかもやもやとしてきて、一切分らなくなつてしまうのだつた。

馬鹿馬鹿しい空想だ、と恒夫はその想ひから覺めると考へて頭の外に投り出してしまつたが、それでもやはり時々、我知らず其處へ落込んでいつた。事實の彼方といふ遙けさが、彼の心に甘えてゐた。

所が、それが單なる空想でなしに、事實となつて現はれてきた時、彼は吃驚して、父の位牌の前に澤山香を焚いた。

父の十三回忌の法會の日だつた。家の者や近しい親戚の者など皆で、朝の十時頃寺へ行つて、佛事を濟し墓參をしてから、料理屋の方へ廻らうとする段になつて、二三日來氣分の勝れなかつた祖母が、身内に寒けがすると云つて、すぐに家へ歸りたがつた。で、母がその伴をすることになりかけたが、先程から窮屈を覺えだしてゐた恒夫は、鹿爪らしい祖父や伯父達の間に交つて、御馳走を食べに行つた所でつまらない、といふやうな豫想から、強ひて母に代りたがつた。そして、客は皆大人ばかりだつたし、女の人も二人ゐたし、何やかの都合から、母が接待役の格で居殘ることになつて、恒夫は祖母の伴をして歸つて來た。

恒夫としては我儘から出たそのことが、祖母にとつては非常に嬉しかつたものらしい。打晴れた初春のぽつかりした暖みなのに、祖母は炬燵をいれさして、恒夫にもそれにあたらせたがつた。そして恒夫がお義理半分に、足先だけを炬燵布團の中に差入れて、疊の上に腹匍ひながら、雜誌の小說を拾ひ讀みしてるのを、しみじみとした眼付で見守つて、述懷めいたことを話しかけた。然し恒夫は、祖母の言葉に興味を覺えなかつた。祖母が父の十三回忌にめぐり會はうと、

昔のことを考へると夢のやうな氣がしやうと、さうして生きてるのが有難いことだらうと、そんなことはどうでもよいのだつた。

「何時になるでせうね。」と祖母は尋ねかけた。

恒夫には何時だつて構はなかつた。

「お母さん達ももうぢきでせうよ。」

その言葉の語氣に、恒夫は祖母が自分を憐れんでることを感じた。と同時に、自分のうちにも祖母を憐れむ情があることに氣付いた。何だか吃驚して眼をくるくるさして、頭をねぢ向けて見ると、祖母の眼がいつもより多く潤みを帶びてるやうだつた。

「せめて今日だけでも、あの子を來させるとよかつたんですがね。……私がいくら云つても、お祖父さんが頑固たことばかり仰言るのでね……。」

「え、お祖父さんが……。」

「それもね、理屈から云へばそれもなんですよ。たとひ血統はどうだらうと、立派に他家の子供となつてるうへに、それをわざわざ呼び寄せて、昔のことをほじり出すのは、よくないことだ、兩方の氣持を悪くさせるだけだ、とさう仰言るので……。それにしたつて、もう十三年も、十五六年も前のことですから、別に差障りはなからうと、私としては思つたのですけれど……そしてあなたにしたつて、一人つきりよりは、表立つて兄弟を持つた方が、いくら心強いか知れないのに……それをお祖父さんは、得手勝手な考へだと仰言つて、どうしても聞き入れて下さらないんですよ。」

恒夫は起き上つて、祖母の方へ向き直つた。

「それ何のことですか、お祖母さん。」

祖母は眼をしばしばさした。

「あなたはまだ何にも知らないんですか。」

「何を……。」

「お母さんから何とも話がありませんでしたか。」

恒夫は何とも答へないで、祖母の顔を見守つた。見てゐるうちに、少し分りかけてきた。「ぢやあ僕に兄弟があるんですね、お祖母さん。夢にみたりぼんやり考へたりしてたことが、本當だつたんだな。ねお祖母さん、それは僕の兄さんですか、弟ですか、妹ですか……そして何處にゐるんです。」

祖母は急に氣が挫けたやうになつて、その話を避けたがつた。然し恒夫は承知しなかつた。當にかゝつて祖母へ尋ねかけながら、もしその話をはつきり聞かしてくれなければ、自分を愛してはゐないんだ、といふやうなことまで云つた。するとお祖母は、誰にも洩らさないといふ約束をさした上で、大體次のやうなことを話してくれた。

恒夫の父と母とは、結婚して五六年後まで子供が出來なかつた。所へ不意に恒夫が生れた。大變な喜びだつた。祖父なんかは、殆んど一日中赤ん坊の側に坐り通して、女中達を叱り飛ばしてゐた。が不幸にも、その頃から父は肺病にかかつた。方々へ轉地しても癒らなかつた。別に寢つくほどのことはなかつたが、常に熱と咳とが去らないで、非常に氣むづかしくなつた。その父の面倒をみるのに、赤ん坊を抱へた母だけでは手が廻りかねた。そして、苛々してる父の側で、ごく忠實に働いてくれる女中が一人あつた。その女中が姙娠した。祖父が一番ひどく腹を立てた。それが祖母の骨折りでうまく納つた。その女中は、お腹の子供と多少の金とを持つて、或る人の所へ嫁入つた。そして生れた子供は男

の子だつたが、すつかりその人達の子として育てられた。父が死んだ時一寸來たばかりで、全くの他人となつてゐた。今ではその一家は、大塚に紙屋をやつてゐて、他に二三人子供もあり、わりに樂に暮してゐた。恒夫の弟に當るその子は、小野田茂夫といつて、豐山中學校に通つてゐた。

「本當ですか、お祖母さん。」と恒夫は叫んだ。「お祖母さんはどうしてそんなによく知つてるんです。」

「表向きどうといふことは出來ませんけれど、間に人を立てゝ、影ながら面倒をみてやつてるので、すつかり樣子は分つてゐますよ。」

その言葉が終らないうちに、恒夫はふいと立上つて、自分の室へ馳けていつた。そしてまだ耳に殘つてる、弟の名前とその住所とを手帳に書き留めた。それから僅に分別くさい樣子をして、祖母の所へ戻つてきた。

「お祖母さん、僕の弟に逢ひたいでせう。」

答がないのでよく見ると、祖母は火燵の上に顏を伏せて、眼から涙をこぼしてゐた。

何が悲しいんだらう、と恒夫は一寸考へてみたが、分らなかつた。それでも祖母の涙は、何だか神聖な觸れてならないものゝやうに感ぜられた。胸の奥でぴくりとして、途方にくれて、椽側に出てみた。西に傾きかけた日脚が、明るく一面に照つてゐた。空が青くて馬鹿に高かつた。彼は其處に踊り跳ねたい氣持をぢつと抑へて、弟の面影を想像し初めた。

輕い咳の音がした。振向いて見ると、祖母は左の肩に手をやつて揉んでゐた。

「僕が叩いてあげませう。」

そして彼は元氣よく祖母の後ろに坐つて、祖母の痩せた頸筋と赤みがゝつた髮の毛とを、初めてのやうに珍らしく眺

めながら、指先で眩しいほど早くその肩を叩きだした。

---

靜かな晩だつた。來客の用心に拵へられてゐた御馳走と、料理屋からみやげに持つて來られた御馳走とに、恒夫はすつかり滿腹して、額が輕く汗ばんでくるやうな心地だつた。

祖父はまだ餉台の前に端坐して、ちびりちびり酒を飲んでゐた。母は長火鉢の銅壺で酒の燗をみてゐた。祖母は炬燵を持つて來さして、それにあたりながら脇息によりかゝつてゐた。そして皆の間には、法會のことや親戚の人達の噂など、いつもより多くの話題があつた。電燈の光もいつもより明るかつた。

それらの光景を、恒夫は不思議さうに眺め廻した。いつまでも膝をくずさずに坐り續けて、滿足げに盃を擧げてる祖父の樣子が、何だか馬鹿げてゐるやうに思はれた。眼付から言葉付まで、四方八方へ氣兼ねをしてゐるらしい祖母の樣子が、何となくはがゆく思はれた。人のよい溫和な笑みを浮べながら、押しても動きさうにないほどどつしりと構え込んでゐる母の樣子が、變に愚かしく思はれた。今この眞中に、弟を不意に連れて來たら……などゝ考へると、妙に面白く可笑しくなつてきた。

「恒夫、と祖父が突然聲をかけた、「何を一人で笑つてゐる。こゝへおいで、今日は特別に一杯飲ましてあげるから。」

恒夫は一寸躊躇したが、思ひ切つて祖父の方へ寄つていつて、盃三杯ばかり續けざまに飲んでやつた。祖父は首を縮めて、頓狂な顔付をした。

「ほゝう……お父さんの子だけあつて、なかなか飲めると見えるな。……が、もうよい。それくらゐがよい所だ。」

祖父から盃を取上げられたのをしほに、恒夫はふと立上つて、次の室の佛壇の前へ行つて、しきりに香を焚いたら香の煙の向ふから、父の顔が笑つてるやうに思はれた。そしてまた、弟ばかりでなしに、兄や姉や妹や、そんなのを澤山方々に生ましておいてくれてるかも知れない、など丶馬鹿馬鹿しいことを考へて、自分で自分に面喰つた氣持になつた。

「恒夫さん、何をしてゐるんです、そんなに煙を立て丶。」

母の聲に恒夫は我に返つて、一寸考へてから答へた。

「僕はあまり香をあげたことがないから、これまでの分を一度に焚いてあげようと思つて、それで……。」

そんなことをすると火が危い、と母は云つた。祖父は盃を下に置いて、小首を傾げた。が何よりも、祖母の眼に非常に悲しげな色の浮んだのが、強く恒夫の心に觸れた。

そして、その跡が後まで心に殘つたので、恒夫は母と二人になつても、弟のことを尋ねかねた。たゞ父の臨終の模樣を悉しく尋ねた。

然し母の話は、父の病氣の經過のことや、一時無くなつた食慾が甘酒のために出てきたことや、最期まで意識がわりにはつきりしてゐたことや、咳はひどかつたが喀血は殆んどなかつたことや、講談本を讀んで貰ふのが好きだつたことや、臨終の苦悶がごく輕かつたことなど、大抵恒夫が聞き知つてる平凡なことばかりだつた。弟のことや弟の母親のことなどは、一言も出て來なかつた。そして、何度聞いても常に彼の心を打つことが、たゞ一つあつた。

父は息を引取る四五時間前に、恒夫を枕頭に連れて來さして、その小さな手を五分間あまりもぢつと握つてゐた。

その間、子供は顔をしかめながら、一生懸命に我慢してゐるらしかつたそうである。

「僕は本當に泣き出しはしなかつたの。」と恒夫は尋ねた。

「いゝえ、顔をしかめてこらへてゐました。眉根に八の字を作つて、口を曲げて、おかしな顔をしてゐましたが、それでも泣き出しはしませんでしたよ。お父さんは、手を布團から差出して、あなたの手を握つて、ぢつと眼をつぶつてゐらしたが、五分ばかりして……いえもつと長かつたかも知れません、ふいに咳込みなすつて、咳の中から手眞似で、あちらへ連れてゆけといふ樣子をなさるんです。子供に病氣がうつつてはいけないと、いつもお云ひなすつてゐたから、乾度それを心配なすつたんでせう。それから咳が鎭まつて、あなたがまだ側に居るのを御覧なすつて、なぜ早く向ふへ連れて行かないんだと、大きな聲でお叱りなさるんです。それで私は、あなたを向ふの室へ抱いてゆきましたが、それから四五時間して、お父さんはもう駄目でした。私があなたを抱いて連れて來た時は、もう何にもお分りなさらないやうでした。」

「その時……その前の時、お父さんは僕の手を握つて、僕の顔をぢつと見てゐらつしやりやしなかつたんですか。」

「いゝえ眼をつぶつてゐらしたんですよ、そのまゝお眠りなさるのかと思つたくらゐですもの。」

それでも恒夫はまだはつきり信じかねた。

彼は父の死については、殆んど何も記憶してゐなかつたが、たゞ一つの場面だけが、妙に頭の底にこびりついてゐた。父の馬鹿に大きな堅い力強い手が、自分の手をしつかと握りしめてをり、父の落ち凹んだ鋭い眼が、ぢつと自分の顔を見つめてゐた――確かに見つめてゐた。そしてその手と眼とが、自分を何處かへ――氣味悪い處へ、ぐいぐい引張つてゆかうとするので、一生懸命に怺へて歯をくひしばつてゐた。するうちに凡てから解き放されてほつとした。それだけのことだつたが、その一生懸命に怺へる氣持と解き放されてほつとする氣持とは、ひいては父の死全體に對する氣持でもあつた。

恒夫はその氣持をぢつと見つめた。胸の中がむづむづしてきて、母に向つて飛びついてでもゆきたくなつた。お母は、人のよい落付き拂つた微笑を顔に浮べて、ちらちらとゆらめく佛壇の燈火を見てゐた。

これが自分の本當の母かしら……ふとそんなことを思つて、恒夫は眼をくるくるさした。

「お母さん、僕は何時頃に生れたんです。」

母は遠い處を見るような眼付をした。

「朝の……五時頃でしたかね、なんでもまだ明るくならないうちでした。この子は夜明に生れたから運がいゝと、さうお祖父さんは仰言つたんですよ。」

そして弟は何時頃に生れたんだらう、と恒夫は考へた、どんな風に生れたんだらう……。それは丁度、鶏卵の黄身についてる小さな目、あれをぢつと見るやうな感じだつた。

彼は不意に口笛を吹き出した。元來極めて下手で、流暢に鳴つたためしがなかつたけれど、氣持だけは朗かに吹き鳴らしてるつもりだつた。そして、誰が何と云はふと、弟を探し出してやらう、弟に逢つてやらう、といふ決心を固めた。

---

或る日、恒夫は大塚の店を探しあてた。

二階と奥とが住居になつてゐるらしい相當な店だつた。店の奥には、堆く紙類がつみ重ねてあつた。右手と前面には、重に小學校用のらしい文房具が、一面に並べてあつた。左手には、各種の煙草やパイプが、硝子箱の中にはいつてゐた。そしてその眞中に、若々しい髪の結ひ方をした中年の女が、膝の上に小布をのせて、縫ひ物か何かをしてゐた。

眉と眼との間が少しつまつた、揉上の長い、肥つた女だつた。

恒夫はその前を何度も往き來した。はいつて行つて茂夫さんは……と尋ねるつもりだつたが、それを爲しかねてるうちに、益々氣分にこだはりが出來てきた。それかといつて、いつまで待つてもきりはなささうだつた。どうしていゝか分らなくて、通りしなに店の奥をぢつと覗き込んだ。とたんに中の女が顔を擧げてちらと彼の方を見た。彼は慌てゝ逃げ出した。こちらを向いた彼女の眼が、形も何も分らないたゞ眞黑な輝きとなつて、頭の中にはつきり殘つた。その時彼は初めて、その女を茂夫の母親だらうと思つた。

それから二三日して、恒夫はも一度其處へやつて行つた。やはり揉上の長い彼女が店に坐つて、往來の方を見い見い、薄汚い婆さんと話をしてゐた。婆さんは店先に腰掛けてゐて、いつまでも歸りさうになかつた。恒夫はがつかりして立去つた。

何も極りが惡いんぢやあない、家の人に氣付かれちやあつまらないからだ、と恒夫は自ら自分に云ひながら、何故ともなく口惜しくて仕方なかつた。そして唇をかみしめて考へてるうちに、學校へ尋ねてゆけば譯はないと思ひついた。

その土曜日に、彼は一時間早く學校を脱け出し、途中で少しぶらぶらして、十二時間際の時間をはかつて、豐山中學にはいつていつた。二學年の小野田茂夫に逢ひたいと云ふと、小使室の横に待たせられた。

教室の方から一時に大勢の生徒が出て來て、がやがや饒舌りながら、恒夫の方をぢいつと眺めていつた。恒夫はぐるりと向きを變へて、何氣ない風にぶらつき初めた。そして、應接室もないのかな……と考へてゐる時、ふいに後ろの方で大きな聲がした。

「小野田さんを連れて來ましたよ。」

ぎくりとして振向くと、痩せた一人の生徒が足早に歩いてきて、數歩先の所に立止つて、眉根を少し寄せながらこちらを窺つた。高い廣い額の下に、小さな眼が上目がちに光つてゐた。

恒夫は無意識に帽子をちよいと脱いでお辭儀をした。

「僕……川村恒夫です。」

相手に何の反應もないので、彼は云ひ直した。

「僕は……君に逢ひたいと思つて……こないだから……。」

「何か僕に用ですか。」と相手は氣後れのした聲で云つた。

恒夫はふいに、何といふわけもなくかつとなつた。

「だつて……だつて君は、僕と兄弟ぢやないですか。君も僕のお父さんの子で、僕もやはりお父さんの子なんだから。え、君はまだ何にも知らないの。君のお母さんが僕のうちに來てたことがあつて、お父さんとの間に君が出來たんだつて……。そして君のお母さんは小野田といふ家に嫁入つたから、君は小野田と云ふんだけれど、本當のお父さんは僕と同じお父さんで、川村といふんだよ。だから……。」

「あ、その川村さんですか。」

突然大人の調子でさう云はれたので、恒夫は喫驚して、茫然と相手の顔を眺めた。

「外を歩きながら話しませう。」

それは全く落付拂つた大人の調子だつた。恒夫は急に氣が挫けて、首を垂れながら、茂夫の後に從つて學校の門を出た。茂夫は一言も口を利かず、振返つて見もせず、何かをぢつと考へ込んだ様子で、自家とは反對の方へ、音羽の通り

を江戸川の方へ歩いていつた。

茂夫が別に驚いた樣子も見せず、また喜ばしい樣子も見せないで、思慮深さうに落付いてるのが、恒夫には不思議に思はれた。そして、どうしたんだらう……と考へてるうちに、ふつと物悲しい氣持に閉されて、涙ぐんでしまつた。見にでも縋りつくやうな氣で尋ねかけた。

「君は前から知つてたの。」

「え。」と茂夫は答へてから十步ばかりした。「そしてあなたはいつ知つたんです。」

「十日ばかり前、お父さんの法事の時、お祖母さんから初めて聞いたんだよ。それまで僕はちつとも知らなかつた。お祖母さんから聞いて、喫驚して、それから急に君に逢ひたくなつて、何度も君の家の方へ行つてみたんだけれど、店に人が坐つてゐたから……。あれ、君のお母さんなの。」

茂夫は何とも答へなかつた。だいぶ暫くたつてから、獨語のやうな調子で云つた

「僕は前から知つてたけれど、あなたに逢つてはいけないと、お母さんから止められてたんです。」

「え、何故だらう。」

「大きくなれば分ることですつて。」

恒夫は妙に冷りとした感じを受けた。自分が今迄漠然と氣兼ねしてゐたこと、祖父母や母やまた茂夫の家の人達に、氣付かれないやうにしたいと思つてゐたこと、それがぼんやり分りかけてくるやうだつた。

「だつて僕達だけなら構はないだらう。」

「さうかしら。」

その調子が初めて恒夫の氣に入つた。彼は最初の元氣を取直して、いろんなことを尋ねかけ、また自分の方からもいろんなことを話した。茂夫の家では、父が會社の書記をしてゐて、母が店の方をやつてをり、其他に十二歳の妹と九歳の弟とがゐること、などを彼は聞き知つた。そして自分の家では、祖父はいつも碁ばかりうつてをり、祖母はいつも病身であつて、母が二人の女中を使つて、何もかもやつてゐること、などを話してきかした。それから二人の年齢を比べてみると、茂夫の方が十一月餘り年下だつた。

「ねえ、僕の家に遊びに來ない。」と恒夫は云つた。「默つてさいゐりや、誰にも分りつこないよ。」

茂夫は急に眉根を寄らせた。

二人はもう江戸川の岸を歩いてゐた。櫻の枝に一杯蕾がついてゐて、所々には花を開いてるのもあつた。薄濁りのゆるやかな流れは、物の影を凡て呑み込んでしまつて、表面だけにきらきら日の光を受けてゐた

大曲まで行つた時、茂夫は突然立止つて、改まつた調子で云ひ出した。

「僕はもう歸ります。」

恒夫は驚いて、も少し歩かうと勸めてみたが、茂夫は川の面に眼を据ゑて、聞き入れさうな様子もなかつた。

「此度は僕の方から、學校へ尋ねてゆくか、手紙をあげるかしますから、それまで待つてゐて下さい。あなたからいらしちやいけません。」

その時彼の顔から眼のあたりに、非常に憂鬱さうな翳りがかけた。見てゐると、その翳りがふーつと擴つていつて、彼の淺黒い顔全體を包み込んでしまふやうに思はれた。恒夫は一人投り出される氣がして、口を噤んで幾度も首肯いてみせた。

それでも二人は病院前まで一緒に歩いていつた。背中にさす春日がぽかぽか暖いわりに、地面を流れる空氣が妙に薄ら寒かつた。

「ぢや此度は乾度、君の方からやつて來るか手紙をくれるかするね、乾度。」

「えゝ乾度します。よく考へてから……。」

茂夫は一つ丁寧にお辭儀をして、大塚行きの電車に飛び乘つた。恒夫は上野の家まで歩いて歸つた。

何を考へることがあるんだらう……と恒夫は思つた。然し茂夫の方が自分よりは、いろんなことを多く知つてをり、いろんなことを深く考へてゐて、ずつと家いやうにも思はれた。憂欝な顏をしたり大人びた言葉使ひをしたりするのは、そのためかも知れなかつた。……が、それは非常に淋しいことだつた、心惹かれる淋しいことだつた。

家に歸ると、風邪をこぢらして寢ついてる祖母の所に、丁度醫者が見舞つて來てゐた。

「お祖母さん、もう櫻の花が咲いてゐますよ。」と恒夫は不滿さうに云つた。

火鉢の上の洗面器から立昇る湯氣の向ふから、祖母はしよぼしよぼした眼で見返した。その樣子が、恒夫には何だか親しみ薄く感ぜられた。

---

恒夫は茂夫に逢ふのをしきりに待つた。茂夫の廣い高い額とその下の上目がちな小さな眼とが、頭の中にまざまざと殘つてゐた。それを見つめてゐると、弟といふよりも寧ろ兄といふ感じだつた。

でもやつぱり弟なんだ、陰氣な弟なんだ……さう恒夫は自ら云つて、胸の底が擽つたいやうな氣持を覺えた。と共に

また、自分自身に張りが出來たやうな氣もした。

茂夫はなかなか、姿も見せなければ手紙も寄來さなかつた。恒夫は苛ら苛らしてきた。そして丁度一週間目の土曜日に、彼は最後の望みをかけながら、わざわざ友達から一人後れて、學校の門を出て見廻すと、向ふの電車停留場の柱の影に、書物を手にして讀んでゐる風を裝ひながら、こちらを見守つてゐる少年があつた。それが茂夫だつた。

二人は眼と眼でうなづき合つて電車道を歩き出した。

「僕いろいろ考へてみたけれど、二人つきりなら構はないと思つて、やつて來たの。」

その調子から様子まで、先日の茂夫とは全く異つてゐた。恒夫は一寸面喰つたが、そのはづみを受けて心が躍つた。

「僕どんなに待つてたか知れないよ。」

「だつて僕はいろんなこと考へたんだもの。君がやつて來たのは、僕に恥をかゝせるためぢやないかしら、といふやうな氣もしたし、お母さんに相談してみようか、と思つたり、何か大變悪いことをしてるのぢやないか、と思つてみたり・・いろんなことを考へたよ。でも何でもないことなんだ。僕達は兄弟なんだから、兄弟として親しくしたつて、ちつとも悪かないんだね。」

「悪いもんか。・・君は變だな、どうしてさういろんなことを考へるの。悪い癖だよ。」

茂夫の額は一寸曇りかゝつたが、すぐに前よりは一層晴々と、而も何だか狡猾さうに、輝いてきた。

「僕にはまだいろんな悪い癖があるさうだよ。」

「どんな癖が・・・。」

「どんなつて、自分ぢや分らないが・お父さんがさう云ふんだもの。」

「ぢやあ、お父さんは君を愛してゐないんだね。」
「いや、愛してくれてるよ。」
「だつて可笑しいなあ。」
「ちつとも可笑しかないよ。」
そして二人はきよとんとした顔を見合つた。
そんなことを話して歩いてゐるうちに、何處へ行つていゝか分らなくなつたが、ふと思ひついて、植物園へ行つてみた。
櫻の花が咲き揃つてゐて、子供や女の人達がきやつきや云つて遊んでゐた。二人はその側を通りすぎて、ずつと奥の池の上の、躑躅の間の芝生に坐つた。南を受けた斜面なので、足を投げ出してぼつとしてゐると、うとうとゝ眠くなるやうな暖かさだつた。そしてそこらの叢の中には、蛇や蝦蟇や蜥蜴などがのつそりと匂ひ出してゐさうな、もやもやとした濕氣だつた。池にはもう鯉が出てゐると見えて、麩や煎餅を投げてやつてる娘達もあつた。
「僕はね、」と恒夫は云つた、「何處かに自分の兄弟がゐるやうな氣が、いつもしてたんだよ。何處か僕の知らない處に、兄や姉や弟や妹がゐて、それにひよつくりめぐり會ふ、そんなことをよく夢にみたり考へたりしたよ。するとやはりさうだつたんだ。君にめぐり會つたんだ。ひよつとすると、僕達の兄や姉や妹なんかが、何處かにゐるかも知れない。君にはそんな氣はしないの。」
「だつて、お父さんは若いうちに死んだんだらう。」
「でもね、お父さんは方々へ轉地に行つたり、いろんなことをしたんだよ。そして、僕は小說で讀んだんだが、肺病に

なると性慾が强くなるんだつて……。」

云ひかけて恒夫は突然顏を赤らめた。それから眼をくるくるさして口早に云ひ出した。

「だから、まだ方々に子供があるかも知れないよ。僕達二人きりぢや餘り少いや。それをみんな探し出して名乘り合つたら、面白いだらうね。」

「だつて、一人でそんなに澤山子供を拵へられやしないよ。」

「拵へられるとも。男は一人で充分なんだよ。動物なんかみんなさうだらう。そして方々に子供を生みつ放すんだよ。」

茂夫は突然大きな聲を立てた。

「人間もさうなると面白いな。」

「そして愉快だよ。」

二人はいつしか肩と肩ともたれ合つて、互の身體の溫みを感じながら、向ふの池の縁に立つてる小女達を眺めてゐた。ぼーつと霞んでる和やかな春の日が、しみじみと大地の上に照りつけてゐた。

恒夫は不意に云ひ出した。

「僕達がかうしてる所を見たら、お父さんは喜ぶだらうね。」

「喜ぶとも、屹度。」

「僕は何だか、お父さんは大變優しい人だつたやうな氣がするよ。」

「なぜ。」

「なぜだか分らないが、屹度優しかつたんだよ。僕はお父さんが好きだ。」

「僕も好き……になつたやうな氣がするよ、君に逢つてから……。今のお父さんなんか頑固で嫌ひだ。」

「お父さんが生きてたら、僕達は素晴らしく澤山の兄弟になつてたかも知れないよ。」

茂夫は驚いたやうに眼を見張つたが、そのまゝの顔付で口許に微笑を浮べた。恒夫はぢつと空の奥を見入つてゐた。

---

恒夫と茂夫とは、どちらからともなく互の學校へ出かけていつて、植物園や上野公園や時には日比谷あたりへも、ぶらつき廻つた。

學校の歸りが夕方になることが多いのを、母から怪しまれていろいろ尋ねられても、恒夫は何やかやいゝ加減の口實を並べ立てゝ平然と空嘯いてゐた。そして心の中は、吾弟を得たり、といつたやうな晴れやかなもので滿たされてゐた。そして遂には、茂夫を家の中へまで連れて來た。小野田の姓から一字省いて、野田といふ親友だとふれこんだ。豐山中學の制服だと氣取られさうなので、いつも和服に着替へさしてきた。唯も茂夫だと氣付く者はなかつた。

「どうだい、うまくいつたらう。」

茂夫はにこにこしながら首肯いた。

櫻や桃の花が散つて、萌え立つやうな新緑に樹々が包まれ初めてゐた。庭には眞赤な躑躅が咲いてゐた。そのわきに可なりの池があつた。池の中に飛び込んでゐる大きな蛙や蝦蟇を、二人は額にねとねとした汗をにじませながら、長い竿の先でつゝき廻つた。

恒夫は寫眞帖なんかも持ち出した。

「お祖父さんやお祖母さんが、本當のお祖父さんやお祖母さんでなかつたり、お母さんが本當のお母さんでなかつたり、またお母さんにいろんな兄弟があつたりして、そんなことが一度に分つてきたら、素敵に面白いだらうね。」

そして二人は、おどけたやうな眼を見合つてくすくす笑つた。

「君は額がお父さんで、眼がお母さんらしいね。」と恒夫は云つた。

「さう。お父さんは若くて立派だつたんだね。」

「さうだよ、僕はちつとも覺えてゐないけれど……。」

父の寫眞を子供の時のからずつと並べて一度に眺ると、何だか滑稽な氣がして仕方がなかつた。祖父や祖母なんかのもやはりさうだつた。そしてその感じが、實際の祖父や祖母に接する時にも、頭の隅につきまとつて仕方なかつた。

二人はどうかすると、祖父の悪い方の碁盤を持つて來て、五目並べや圍碁の眞似などをして遊んだ。そこへのつそり祖父がやつて來て、圍碁の法を教へてくれることがあつた。恒夫は影でくすくす笑ひ出してはよく叱りつけられた。茂夫は一生懸命になつてよく覺えた。その指先が非常に綺麗で器用だつた。

「お前には碁の才がある。碁打になつても立派な者になれさうだ。」と祖父は云つた。

「僕は碁打になんかなりません。」と茂夫は不服さうに答へ返した。

すると祖父は上機嫌に笑ひながら、自分の室へ歸つていつた。

けれど祖母の前に出ると、茂夫は妙に悚んでしまつた。どうしたんだい、と恒夫に尋ねられても、彼は答へることが出來なかつた。

祖母はずつと寢たきりだつた。そして恒夫から書物を讀んで貰ふのを樂しみにした。どんな書物でも構はなかつた。

書いてある事柄なんかどうでもよくて、たゞ恒夫の聲を聞くのが目的らしかつた。

「僕が小さい時、」と恒夫は茂夫に云つた。「御伽話やお化の話を澤山聞いたから、そのお返しなんだよ、屹度。」それから彼は聲を低めた。「お父さんも死ぬ前に書物を讀んで貰ひたがつたさうだから、お祖母さんももう長く生きないかも知れない。」

「大丈夫だよ、まだ元氣ぢやないか。」

茂夫は打消すやうにさう答へたが、祖母の所へ行くと、顏を伏せて固くなつてしまつた。恒夫に代つて書物を讀んでやる時には、變に聲が慄へた。

「ありがたう。もうそれくらゐにしておきませう。」と祖母は云つて、ぢつと茂夫の樣子を見守つた。「またこんど來た時に先を讀んで下さいね。」

「えゝ。」と茂夫は低く答へた。

「恒夫にもあなたみたいな兄弟があつたら、どんなにか心强いことでせう。……いつまでも親しくしてやつて下さいよ。」

恒夫はひよいと顏を擧げた。

「ぢやあ僕達は兄弟になつていゝの。」

「え、あなた達が……。」

「お祖母さんがさう云へば、僕達はいつでも兄弟になつて構はないんです。」

云つてしまつてから恒夫は自ら吃驚した。祖母は頭を細かく慄はせて、これまで見たこともない大きな眼をして、二人の顏をぢつと見比べてゐた。

茂夫は今にも泣き出しさうな顔をして、不意に立上つた。
「僕また來ます。」
恒夫も我知らず立上つた。そして茂夫の後について祖母の室を出ながら、半ば口の中で囁いた。
「大丈夫だよ。……お祖母さんは遠慮してるから、分りやしないよ。」

---

五月のはじめ、ひどい暴風雨が襲つてきた。眞暗な低い空から、豆粒のやうな雹が降つてきて、それが止むと、雨と風とが次第に勢を増して、一晩中荒れ狂つた。宵のうちに、電燈が二度も消えた。
その時から、祖母の容態が俄に悪くなつた。醫者が日に何度も來たし、看護婦もやつて來た。
三日目の朝、恒夫はいつもの通り學校へ出かけやうとすると、祖父の室へ呼びつけられた。祖父と母とが火鉢を挾んで坐つてゐた。火鉢の縁で長い煙管を、祖父がいつもより強い力ではたいてゐるので、恒夫はたゞごとでないと感じた。そしておづおづと其處に坐ると、母はいきなり云ひ出した。
「恒夫さん、家へよく遊びに來る野田といふ人ね、あの人は小野田茂夫さんぢやありませんか。え……嘘を云はないで、はつきり御返事をなさい。」
恒夫は次第に頭を低く垂れて、唇をかみしめた。
「どうなんです。茂夫さんでせう。」
「えゝ。」と恒夫は答へた。

一寸沈默が續いた。祖父がまた強く煙管をはたいた。

「それでは、もう何も云ひませんから、今日學校が濟んだら、すぐに茂夫さんを連れていらつしやい。……よござんすか。」

「えゝ。」

「すぐに連れてくるんだぞ。」と祖父が大きな聲で怒鳴つた。

恒夫は喫驚して、何にも尋ねることが出來ないで、風に吹き飛ばされる木の葉のやうにして出て行つた。

母が玄關まで送つて來た。

「茂夫さん一人だけですよ。向ふの家の人には何にも云つてはいけませんよ。」

恒夫には合點がゆかなかつた。どうして分つたんだらう……茂夫を連れて來てどうするんだらう……何で祖父があんなに怒つてるんだらう……祖母の病氣がひどいのかしら、それと茂夫と何の關係があるんだらう……。そこまで考へてきた時、恒夫は急に晴れ晴れとした所へ出たやうな氣がした。僕と茂夫とを表向き立派に兄弟にしてくれるのかも知れない……そして茂夫の、高い廣い額と、憂はしげな大目がちの眼と、綺麗な器用な指先とが、まざまざと眼の前に浮んできた。

恒夫は學校で待つてることが出來なかつた。三時間目がすむと、こつそり逃げ出して豐田中學へ行つた。そして例の小使室の横でだいぶ待たせられて、十二時になつてから、茂夫に逢ふことが出來た。

「大變なんだよ。」と恒夫は云つた。「お祖父さんとお母さんとが、すぐに君を連れて來いと云ふんだ。お祖母さんの病氣がひどいんだ。」

茂夫は一寸顏色を變へた。それから變に絕望的に落付いてしまつたらしかつた。いつもの通り家に歸つて着物に着變

へて來ようとした。

「服のまゝで大丈夫だよ。もう君だつてことが分つてるから。」

「だつて、今日だけ服でゆくのは餘り圖々しいよ。」

何が圖々しいのか恒夫には分らなかつた。然し茂夫は聞き入れなかつた。

「それから、君の家の人には知らせないやうにつて、お母さんが云つたんだけど……。」

極り悪さうに恒夫が呟くのを、茂夫は上から押つ被せた。

「そんなことは分つてるよ。」

二人はそのまゝ學校を出た。茂夫が家に歸つて着物に着變へてくる間、恒夫は遠くの方で待つてゐた。

「今晩遅くなるかも知れない、友達と活動を見に行くんだから、と云つて來たよ」

茂夫は得意げにさう云つたが、すぐに、初めての日のやうに憂鬱な表情をした。恒夫の家に近づくに從つて、その額から眼のあたりの曇りが徐々濃くなつていつた。恒夫も變に口が利けなかつた。

何だか憚られるやうな氣がして、そつと家の中にはいると、二人はそのまゝすぐに、祖母の病室の方へ連れてゆかれた。

次の室で、祖父と伯父とが碁を圍んでゐた。それが何だか異様に感ぜられた。一寸まごついて立つてゐると、祖父は二人の様子をぢろりと見やつて、顋で奥の室を指し示した。別に怒つてるやうでもなかつたので、恒夫は少し安堵した。

祖母は、布團を二枚重ねた上に更に羽布團を敷いて、上に毛布と羽布團とをかけて、如何にも輕さうに寢てゐた。二人の看護婦と母とがついてゐた。

恒夫と茂夫とがそつとはいつて行つて、入口の所に坐ると、誰も何とも云はないのに、閉ぢてゐた祖母の眼がぱつと開いた。硝子のやうな眼だつた。それがぢつと二人の方を見つめた。

母が相圖をしたので、二人は祖母の枕頭へにぢり寄つていつた。祖母は唇を動かしたが、聲は少しも出ないで、その代りに眼から涙が流れてきた。その時、茂夫が不意に傍につゝ伏して、大きな聲で泣き出した。

何もかもこんぐらかつてしまつた。看護婦の白い服があちこちへ動いた。

茂夫は室の外へ連れ出された。祖父が一寸はいつて來てまた出て行つた。恒夫はいつのまにか祖母の手を握つてゐた。筋張つたその手が間を置いてはぴくりと震へて、やがて靜かになつていつた。祖母は眼をつぶつて、そのまゝうとうとゝ眠つてゆくらしかつた。一人の看護婦が小首を傾げて、その樣子を見守つてゐたが、恒夫の手から祖母の手を離さして、毛布の中へそつと差入れてやつた。氣がついてみると、母の姿が見えなかつた。

恒夫はぢつと坐つてゐた。いつまでたつても何のことも起らなかつた。あたりがしんとしてしまつた。

恒夫はやがて立上つて、室から出て行つた。次の室では、祖父が碁盤をわきに片付けて、伯父と何やら話してゐた。恒夫は一寸お辭儀をして通りぬけた。

四疊半の勉强室の椽側に、母と茂夫とが坐つてゐた。恒夫はほつと大きく息をして近寄つていつた。

「お祖母さんは……。」

「眠つてゐらしたやうです。」

「また。」

母は急いで祖母の方へ行つた。そのぽかんと開いた眼と口とが、不思議な感じで恒夫の頭に殘つた。

茂夫はまだ涙を一杯ためてる眼を、庭の地面に落したまゝ、默つて身動きもしなかつた。
「お母さんが何か云つたの。」と恒夫は尋ねた。
「誰のことも惡く思つちやいけないつて……。」
「惡く思ふつて……だつて君は誰のことも惡くなんか思つてやしないんだらう。」
茂夫は首肯いた。
「それでいゝんぢやないか。……お母さんは少し人がよすぎるんだよ。」
日脚の西へ傾いてゆくのがはつきり見えるやうな、晴れ晴れとした靜かな天氣だつた。すぐ向ふに木瓜の眞赤な花が、天鵞絨のやうに光つてゐた。
「僕が云つた通りだらう。」と恒夫は暫くして云つた。
茂夫は涙の乾いた眼を瞬いた。
「何が……。」
「何がつて……何もかもさ。」
それきり二人は默り込んで、日向にぢつと蹲つてゐた。椽側がすつかり日陰になつてしまうと、恒夫は俄に空腹を覺えだした。
「腹が空いちやつた。」
「うん、僕も。」と茂夫が應じた。
恒夫は女中から餡パンを貰つてきた。そして二人で頰張つてゐると、表に人の來た氣配がして、出迎ろ人達の

した。二人は急いで餡パンを隠した。然し誰も其處へはやつて來なかつた。二人は首をひよいと縮こめて、眼と眼でつこり笑み合つて、また餡パンを頬張り初めた。

やつて來たのは醫者だつた。醫者は晩になるまで歸らなかつた。家の中が何んだかざわざわして、それが重苦しい沈默の中に浮出してゐた。そして六時半頃、恒夫と茂夫とが病室に呼ばれた時、祖母はもう意識を失つてゐた。痰のからまる急な呼吸に時々喘いで、その後はすーつと細長く息を引きながら、昏々と眠り續けてゐた。

二人はまた病室から出て、庭へ降りていつた。ほーつとした明るみを含んでゐる空に、星が一つ見え初めてゐた。なま温い空氣の中に、新緑の香が漂つてゐた。

「お父さんが死んだのも、こんな晩だつたかも知れないよ。」と恒夫は云つた。

茂夫は何んとも答へなかつたが、不意に恒夫の手を握りしめた。

「君が云つたやうに、僕達にはまだ他に兄弟があるかも知れないね。」

「後でお祖母さんに聞いてみようか。」

「だつてお祖母さんはもう……。」

そして二人は何んとなくぞつとして、首を縮こめた。



# 此方が詫びる

久米正雄

十二時三分の終列車が、鎌倉停車場に着いた。

私と田中とは、改札口の傍の、手荷物か何かを受取る棚臺みたいなものに、腰掛けるやうに凭りかゝつて、汽車から降りて來る人々を物色してゐた。誰かいゝ鴨がかゝつたら、うまく取卷いて一杯飲まう、と、云ふ程卑しい積りではなかつたが、誰か知つた人が降りて來たら、相手を換へてお喋りしよう、と、云ふ位の氣持であつた。――少し二人一緒の夕飯だつた爲に、度を過した晩酌の醉と、二人つきりの話に飽きて、又ぶらぶら、停車場の方へでも行つて見ようか、そしたら誰か出鱈目仲間に會ふかも知れない、と云ふ事になつたのだつた。

八月の初めの事で、夜更けの鎌倉の散歩は、浴衣美人の影は收まり盡してゐても、快適なものだつた。八幡前の大通りでは、昔ながらの松籟さへ聞えた。が、結局人臭い所の好きな私たちは、いつも散歩の終りの足を、停車場の方へ向けるのが、慣しだつた。殊に終列車には、「午前會」の連中と稱する、鎌倉の智識階級不良仲間が、澤山乘つて居た。

彼らは、朝の午前中に鎌倉を出て、夜の午前十二時三分に歸つて來る所から、さう云ふ名の會を作つて、親睦關係を結んでゐた。田中も毎日ではないが、其仲間だつたので、よく出迎へと稱しては、彼らの歸途を擁した。

が、其日は、どうしたものか、さう云ふ仲間で、面白さうな男は、一人も降りて來なかつた、たゞ二三の顔を赤くした西洋人と、見知らぬ俗つぽい紳士連、それは恐らく此處の別莊へ、妻子と共に來てゐるのが、東京の所用を濟まして歸つて來た、と云つたやうな人たちばかりで、爭ふやうに殘り少なの俥に乘ると、四方へ散つて行つて了つた。

「とう〳〵いゝ鳥はかゝらなかつたね。仕方がないから、磯見へでも寄つて、冷たい麥酒の一杯も飲んで別れるとしようか。」

「うむ。さうしよう。」

二人はこんな事を云つて、廣場を横切つて、正面の、まだ明るい燈火を點けてゐる、氷屋ともカッフェエともつかぬ、其茶店の方へ向つた。早く店を終つて了ふ其處らで、其家だけはやゝ晩くまで戸を開けてゐた。

入つて見ると、向うの窓側の卓子に、一人の西洋人が座つてゐた。それは先刻、終列車から降りて來た男で、其時から彼の小柄な身體と、小兒のやうに赤みを帶びて、少し含羞んでゐるやうな顔つきに、はつきり見覺へがあつた。彼は私たちが入つて行くと、鳥渡會釋でもしたげに微笑んで見せた。

が、私たちは仕方がないから、中央に大きく置いてある、支那風の圓卓子へ椅子を寄せて、落着きなく座つた。

「冷たいビールを一本呉れ給へ。」

お上さんが額の汗を拭き〳〵、麥酒の大罎を持つて來た。

「おい、チン〳〵をしようや。」

「よし、チン〳〵！」

私たちは麦酒を二人のコップへ、盛り上るだけ注ぎ終ると、例もの癖でかう云ひ合ひながら、支那風の乾杯をした。卓子が支那風だつたので、横濱の支那料理屋へでも行つたやうな積りで、即興的に云ひ出したのだが、又別な卓子に居る西洋人に杯を擧げて見せる氣持が、多少働いて居ないでもなかつた。

私たちはぐつと一杯飲み終つた。

と、其時、不意に向うに居た西洋人が、妙な日本語で云ひ出した。

「おなじです。」

見ると彼は、顔一ぱいに赤い笑を浮べて、片手で麦酒罎を高く差上げながら、少し振るやうにして見せた。恐らく、同じものを飲んでゐるのだ、と云ふ積りであらう。

二人は、何を、毛唐の酔つぱらひ！と云ふやうな顔を見合せたが、此方も一杯機嫌ではあり、向うがさも親しげな顔を見せてゐるので、揶揄半分直ぐ相手になる氣になつた。そして私が何と答へたものかと、鳥渡英語の文句を、頭の中で操つてゐる中に、田中の方は、直ぐ得意の教師英語で、自信ありげに呼びかけてゐた。

「然り。お互ひは同じ仲間だ。」

「お互ひの健康を飲まうか。」

私も辛うじて、田中に敗を取るまいと思つて、生兵法大怪我の基とは知りながら、一生懸命、中學生時代の努力を以て、かう云つた。

と、其西洋人は喜んで、ヒヤア何とか彼とか早口に、鳥渡私には解らぬ事を云つて、立ち上るやうな氣勢を見せた。

私は少し恐れをなしたが、田中は解つたのか解らぬのか、例に依つて自若として又云つた。

「此方へ來給へ。君と相識になる事を吾々は喜ぶよ。」

西洋人は早速大に喜んで、自分のコップと壜とを、兩手で一時に携へたまゝ、此方の卓子へやつて來た。私は自分と田中との間の、倚子を彼の爲に空けて薦めた。腰を掛けると、西洋人の羅紗の古くなつたやうな匂ひが、そつと不快ではなく漂つた。私は何だか馴れない氣持で少し後退みするやうに、固くならざるを得なかつた。

一度、杯を合せると、田中はもう平氣で、何かと問を初めてゐた。

「お前は何時から日本へ來たか。」「何處の國から來たか。」「何をしてゐるのか。」「今何處に住んで居るのか。」そして「鎌倉には、どの位永く停つてゐるのか。」「Etc」大概の會話書にありさうな、月並な事ばかりであつたが。——

さうして、半分解らないながらも、私の聞き得たところでは、彼はテイー・シー・ローヨーと云ふ横濱駐在のパナマ領事で、三年ばかり前に日本へ渡來し、今は鎌倉材木座の「海見ル」と云ふ莊に居るらしい。さう云へば一二度、此處いらで彼を見かけたやうだ。……

パナマ領事！　さう云はれた時、私たちは其事を信ぜられないで、不可解な顔を見合せた。聞き取り下手の、其癖お前廻りの私などは、パナマと云ふのをパラマウントと聞き違へて、其當時海濱ホテルへ、毎木曜日の夜パラマウント映畫を持つて來る、向うの會社の事務員か何かだと思つた。そして話を進めてゐたところが、此の間違ひには彼もやや心外だつたと見えて、懐中から一葉の招待状を取出し、パナマ領事館内テー・シー・ローヨー殿と書かれた宛名を、指で幾度も〳〵指し示して見せた。それは横濱開港紀念何年かの、市長からの招待状だつた。

私たちはやつと腑に落ちた。

すると今度は、彼の方から、私たちの身分調べを初めた。

「ところで、君たちは何だ、いづれ、頭に關した仕事をしてゐるらしいが。——」

彼はさう生粋でない事が、一言で知れる英語で、ゆつくり聞き糺した。殊に「頭に關した仕事」と云ふ語には特別に力を入れた。

「俺たちか？」と、二人は顔を見合せて、そして同時に微苦笑しながら「俺たちは藝術家だ」

「藝術家？　畫家か？」

「いや、作家だ、小説家だ。」田中が註釋した。

「そして劇作家だ。」私も付け加へた。或時、矢つ張り西洋人と話しをしてゐたら、職業を聞かれて、ドラマチストと云つたら、デンチストと間違へられ、慌てゝプレイライトと云ひ直した事を思ひ出しながら。

「おゝさうか」と、ローヨーはいい出鱈目相手が見つかつたと云はぬばかり烏渡嬉しさうに私の方の方を顧みた。「お前には此前、汽車の中で會つたが、其時から頭に關する仕事をしてゐる男だと思つた。さうか、作家か。それは面白い。ところで此前、お前が汽車の中で、一緒に乘つてゐた美人は何だ。」

私は更に苦笑を重ねなければならなかつた。

「彼女は此の鎌倉で、小半亭と云ふ日本式料理店の女主人だ。」

「お前の情人か。」少し彼はいゝ氣になつて來やがつた。

「いや、さうではない。單なる知合だ。」

「單なる知合？　さうか。それなら俺を今度紹介して呉れ。その料理屋は、誰が行つても入るのを許すか。」

「いや。併し、さう云つて置かう。」

「だが」田中が傍から、無理な英語で合の手を挾んだ。「許すのは食物を食ふだけだぜ。」

「それでいゝ、それでいゝ、是非紹介して呉れ。」

かう云つてローヨーは、小兒のやうに赤い含羞顔で、にやにやと笑つた。田中と僕とは此奴、案外人を食つてゐて、話せる奴だと云ふやうな顔を見合せた。

それから、話は更に、こんな事に移つて行つた。

「ところで、」とローヨーは云ふ。「お前たちが作家なら、横濱の潤一郎・谷崎を識つて居るか。」知らないなら、もぐりだぞと云はぬばかりだ。

「うむ、よく知つてゐる。二人とも可なり親しい友人だ。」

田中が冷靜に答へた。

「親友! ほんとうか。だが、あの男は日本では、隨分有名な作家の一人なんだらう。」

「さうだ 最も拔ん出た作家の一人だ。」

田中はディスティングイシトと云ふ言葉を、さも苦勞人らしく發音した。

「だが、どうして吾らのミスター谷崎をお前は知つてゐるのか。」

と、私は今度は此方から反問した。

「横濱のグランドで知合になつた。いゝ男で、英語はなかなか正確に話す。お前たちよりも巧みだ。」

「さうだらう。さう云ふ事が、寧ろ彼の生活の特徴の一つだから。」と田中。「だが、如何にしてお前は彼と話すやうにな

つたか。」

「うむ。それはミス・三千子・葉山に紹介された。あのスクリーン・アクトレスの。お前たちは彼女をも知つてゐるか。」

ローヨーは鳥渡にや／＼した。

「うむ。あの谷崎のシスター・イン・ローだらう。」

田中は答へた。

「義理の妹？」ローヨーは不審さうに問ひ返した。

「では、ステップ・シスターか。」

私は破格の英語で、註釋するやうに云つた

するとローヨーは更ににや／＼しながら云つた。

「いや、單なるシスター・イン・ローか。」

それには田中と私とは、更に呆れた顔を見合した。

「兎に角。彼女も亦、吾々は友人と云ふべく、餘りに知合過ぎるのだ。」

「さうか。俺もだ。」

かう云つて彼は、改めて愉快さうに、握手する爲の手を差出した。

それから又こんな話にもなつた。

「その外、谷崎は個人的に知つてゐるんだが、日本の作家で讀んだ事のあるのは、モ、三・石川と寛・菊池だ。二人とも知つてゐるか。」

ローヨーは幾らか通らしい。

「うん、知つてゐる。」田中は答へた。「百三・倉田は、流派はちと異るが、菊池とは谷崎よりも更に親近だ。殊に此の男は。」

「僕は兩方とも、同じアンダーグラヂユエートだつた。殊に菊池とは全く儕輩作家（フエローライター）だつた。」

私は同人と云ふ意味で、そんな下手な言葉を使つた。

「お前が？ 眞實に？ではお前の名は何と云ふんだ。」

「正雄・久米。」

私はグレン・ショー翻譯の効目を、鳥渡羨ましく感じながら、正直に答へた。

「此國で、特に有名な破れし戀の作家だ。殆んど菊池とアズ・ウエル・アズに有名だよ。」

田中も、ローヨーが信じないのを見て、かう口を出した。が、浴衣がけの、眞つ黑な妙な男を、彼はどうしても寛・菊池と、親友だとは信じないらしかつた。

「では。」と私は話頭を向けた。「お前の讀んだのは、倉田君の『出家と其弟子』と、菊池の『蕩父の歸宅』だらう。」

「さう／＼。だが、菊池のは、題が少し違つてゐる。」

「原名は『父歸る』だ。が、本人も、『蕩父の歸宅』と自稱してゐる。」

「成程、さう云へば確にさうだ。」

「どうだ、あの脚本は？ 分つたか。」

「面白かつた。お前たちが眞實に親友なら、いつか菊池に會へるやう、紹介して呉れ。」

「宜しい。喜びを以て。」
「彼も英語を話すか。」
「可なりよく。」
そんな事を云ひ合つた後、だん／＼夜も更けて來たので、三人は麥酒を滿たして、から呼び合ひながら別れた。
「是から愉快に交際（つきあ）はう？」
「再び何處かで相見よう！」
「グツ　ナイト！」
「サヨナラ！……」

それから確か一週間後の、或る日曜日だつた。私たちは相變らず、晝の泳ぎ疲れも厭はずに、海濱ホテルの夜のダンス場へ、眞つ黒い顏を出してゐた。

八月半ばの、輝かしい夏の晩で、ホテルの庭の芝生には、月の光と投光器の照明との、微妙な交影が作つた。そして海と松脂の匂ひの、そつと通つて來る暗い徑のあたりには、白い服裝の西洋人たちが、くつきり顯れては消えた。場内も特に今日は賑かで、ジャズ・バンドの音が少し急調に感ぜられる位浮立つてゐた。

私たちは冷たいカクテルの醉と、人いきれですつかり上氣して、狂つたやうに踊り入つた。踊り手は隨分澤山だつた。

私は鎌倉で知合になつた、樋口君の兄妹と一緒に、暫らく踊り廻つた後で、次ぎの卓子に居た、矢張り鎌倉在住の或

る令嬢と紹介されて、其お相手を願ふ事になつた。

其令嬢は、前からもよくから云ふ場所で、見かけた事のある人だつたが、名を寺尾と云ふ、此處の海岸通りに住む、横濱の大きな貿易商の娘で、圓顔の愛嬌ある、如何にも現代式と云ひさうな、まア美人の部類だつた。彼女は、腕と頸の露はな、ドレスみたいな洋裝をしてゐた。そして、頭は縮らした洋風結髮に、洋服と同じ淡紅色の、細いリボンで鉢巻をしてゐた。其上、眼の下を青黛で隈取り、猶よく見ると、眉毛も端を落して、下り氣味に黛で描いてゐた。頰は勿論、頰紅で俐くくらゐ。……

「あの娘さんは、日本に生れた事を餘つ程後悔してゐるやうだね。」

前に、畫家の松山君が、そんな評語を下した事があつた。

「だが、あゝ云ふ人と一度踊らないと、どうも踊り場へ來た氣がしない。」

そんな事を、冷評半分に云つたのは、松野と云ふ不良仲間だつた。

「あれで重くでもあつた日には、夏向きは殊にやり切れないね。」

田中もそんな事を云つてゐた。

「が、あゝ云ふ人と踊るのも、一種の修行さ。」

凡ゆるものに、一應は是認を置かうとする私は、そんな風に云つてゐたのだつた。

それが其人と、橋口君が偶然知つてゐて、私に紹介された時は、決してそんなに厭でなかつた。遠く離れて冷評するとなると、そんな惡口を爭つて云ふもの丶、踊り相手にさへなつて吳れゝば、僕にはそれこそパトナア・ファーストだつた。殊に其人は踊りは相應にうまかつた。

踊りは丁度、番數も半ば位進んで、今が酣だつた。

私は彼女の腋の下を輕く支へ、殆んど直接に觸れる感じの、薄絹を通してしつとり汗ばんだ背中へ右手を廻すと、混雜を避ける爲めに左手を餘り伸ばさずに、二人とも最初の組合せにしては、甚だ自信ありげな態度で、踊りの群の中に入つて行つた。初め、私は殆んど眞つ直に、場を横切つて向うの端に達すると、今度はぐる〳〵旋回しながら、踊り場の外輪に添ふて、どうやら巧みに他の踊り手を避けつゝ、一週するやうに導いた。彼女も輕く從いて來た。

「先生の御作は、二三年前から私、大變愛讀して居りますわ。」

彼女は踊りながら、混雜した人々の中でそんな事を囁いた。最初の相手をする時、それは大抵の女性の云ふ科白ではあるが。

「いや、どうも。――」

私は恐縮して了ふのが、常であつた。そして他の場合と違ひ、一種の、得意なんぞを決して感じずに、作家としての恥らひに似たものを、漠然と感じて了ふのが常だつた。――踊つてゐるのは、小説家の俺ではない。たゞ踊り手として遇して呉れ、そんな氣持があるのだつた。

「何か此方で、只今お書きでゐらつしやいますの。」

「いや、何にも。――」

かう云ひながら、一小節の切れ目を、私はわざと外づして、ツウ・ステップで踏んだ。

そんな事で、私は彼女と共に、踊り場の外廓を、應接間に接してゐる、入口の近所まで廻つて來た。

ふと見ると、共應接間の入口に、役目の如く立つてゐる給仕人と、二三踊りを見てゐる、内外人の間に、一度會つた

西洋人の顔を見出した。鳥渡見た時は、西洋人に對する私たちの感じで、一度會つた事はあるが、誰だつたか解らなかつたが、直ぐそれは此間會つたばかりのパナマ領事ティー・シー・ローヨーだと知れた。

向うでは、先に氣がついたと見えて、例の小兒のやうな含羞笑を浮べて、鳥渡會釋した。私も首を下げて合圖をした。

と、何と思つたか、彼は私が輪をかいて、もつとそつちへ近つくやうに、廻り込まうとする間もなく、ふいに其入口の所から姿を消した。

私は鳥渡不思議に思つたが、其儘何の氣もなく、其洋裝の御孃さんと、得意になつて踊つた。手際よくウエーブされた髮と、頬紅に輝いた頬と、靑く染めた眼の下とを、さう不快でなく間近に感じながら。

アンコールは三回まで繰り返された。そして私たちはすつかり汗ばんで、堪能して踊りやめた。私は叮嚀に一揖して彼女を彼女の卓子にまで戻らせた。

人々もみんなそれ〳〵の卓子へ收まつた。

私も自分の卓子で、渇を醫するため、飲み殘りのレモンスカッチへ、吸ひ藁を突込んでゐると、給仕人が來て、わざとのやうに耳許で云つた。

「貴方が久米さんでゐらつしやいますか。」

「えゝ、さうです。」

私は怪訝さうに答へた。

「パーラーで貴方にお目にかゝりたいと云ふ方が、お待ちになつてゐでになります。」

「どんな人だい。」
「外國の方です。」
私は直ぐにローヨーだと思つたので、何かと思つて、席を立つて行つて見た。
すると果して、給仕人の示すまゝに、廣間の次ぎの間の隅に、スパニッシュかポルチュギーズと云つた感じの男と、立ち話をしてゐるのは、紛ふ方もないローヨーだつた。
彼は私を認めると、いきなり進み寄つて來て、手を握つた。私は恐縮して、甚だ中途半端に手を出したが、それでも彼は機嫌よく二三度打振つて、早口に何とか云つた。よく來たとか、わざ〳〵招んで濟まない、と云つたやうな挨拶らしかつた。そして近寄つて立つてゐた友人に、私を有名なる小說家として紹介した。谷崎の友人だとも云つた、其男も谷崎君を橫濱で知つてゐるらしい。私の事も、彼は共一週間の間に、知合のドクトル寺木から聞いたとかで、前よりも信用と尊敬を持つてゐた。
やがて彼は、話があると云つて、私を向ふの部屋の隅の、安樂椅子の所へ誘つて行つた。
「何の話があるのか。」
彼が二杯のカクテルを命じたのを見て、私は促した。
「お前は先刻踊つてゐた婦人を、よく識つて居るのか。」
「うむ。少し知つてゐる。」
私は又例の、紹介しろではないかと思つて、少し莫迦々々しげに云つた。
「さうか。では、彼女は何だ。眞實の事を云つて吳れ。」

「固氣な婦人だ。ある貿易商——私はその言語に困つて、イン・エンド・エキスポーターと云つて、後で商人と云ひ直した、——の娘さんだ。」

私は紹介しろなど丶云はれると困ると思つて、少し眞面目に云つた。

「矢つ張りさうか。それでは困つた失敗をした。確に固氣の娘さんか。」

彼の赤い子供らしい顏は、一種の苦笑を帶びてゐた。

「さうだ。だが、一體どうしたのだ。」

「實は一と月ばかり前に、俺はあの、お前も知つてゐるドクトル寺木に、汽車の中であの女に紹介されたんだ。向うから近付になりたいと云つて。……」

と、話し出した物語を聞くと、大體こんな事らしい。

——先月の初め頃、彼ローヨーは横濱へ通ふ汽車の中で、矢つ張り鎌倉在住の齒科醫寺木に會ひ、四方山の話をしてゐる中、直ぐ向ひ側に、洋裝をし顏を描いた女が居て、寺木に親しく挨拶したが、やがて、寺木から笑ひながら紹介された。「非常に熱心にお前と知り合ひになりたがつてゐるから、話をしてやつて呉れ」と云ふやうな紹介だつたが、出鱈目な寺木の事だから、少しは藥を效かせ過ぎたらしい。兎も角もさう云ふ紹介で、彼女はローヨーに名刺を差出した。小さな日本字を書いた裏には、羅馬綴りで名前と番地とが入れてある。さうして二言三言話すと、寺木はやがて向うの方に、知合が乘つてゐるのを認めて、彼女をローヨーに托したまゝ、其方へ話しに行つて了つた。

つひ寺木の、餘り眞面目でもない紹介で、ローヨーは彼女を、さう尊敬しなくてもいゝ、婦人だと思つた。そしてさ

ら思つて、彼女の様子を眺めると、其洋服の工合と云ひ、顔を彩つた調子と云ひ、どうも普通の女ではないやうだ。ローヨーは横濱で、例のチャブ屋女と言ふものを、勿論澤山知つてゐる。が、どう見ても其上等な奴に違ひない。あの粋な寺木が、近付になりたがつてゐると、自分に紹介したのは、きつとさう言ふ意味があつたのだ。夏場近くなると、鎌倉の海濱ホテルあたりへも、さう云ふ西洋人相手の、高等な連中が出動するとかしないとか、噂に聞いてゐたやうだから、てつきり其一人に違ひない。それにしてもいゝ相手に紹介されたものだ。

　さう思つたローヨーは、だん／＼普通の會話から、彼女の眞相を試さうと思つて、話を其方へ進めて行つた。辯はゐるが、英語も少しは話せる。……で彼は冗談半分に、彼女に低くこんな風に囁いた。

「今度お前の家を訪問したいが、差支はないか。」

「どうぞ。喜んで。――」

　彼女は一種の嬌態を作つて――とローヨーには感ぜられた。――答へた。

「何時訪問してもいゝか。」

「どうぞ。――」

　彼女は繰り返すやうに、ぽうと顔を染めて、嬉しげに云ふ。

「夜訪問したいが差支ないか。いつでも家に居るのか。」

「然り。――」

　ローヨーはシめたと思つた。

「今日は何處へ行くのか。横濱へでも行くのか。」

「いゝえ、東京へ行く。」

「好きな人に逢ひに行くのか。」

「友達を訪問に。」

彼女は耻しげに笑つた。

「私もお前の友達になりたい。」

「どうぞ。――」

「そしたら今度、二人で箱根までドライヴしようではないか關はないだらう。」

ローヨーは圖に乘つて、もう大丈夫だと思ひ、さう早口に囁いた。

「…………」

すると彼女は、耻しげに俯向いて、にやりと笑つた。どうも承諾と外思はれない。

「いづれ今度お前を訪問して、ゆつくり共事に就て相談しよう。」

「どうぞ。――」

彼女は口籠るやうに云つて、又にやつと耻しげな笑を堪へた。

かうしてローヨーは、益々口說に似た言葉を、彼女に囁きかける毎に、彼女は默つて、耻しげな笑みを以て答へる。

ローヨーはもう滿足した。

そしてやがて汽車は横濱に着いたので、アドレス入りの名刺を貰つてあるし、承諾も得てゐる形なので、又の再會を固く約して、下車する事になつた。下車の際、手を出したら、彼女も差出した。力を籠めてそれを握つたローヨーは、

更に滿足して出て行つた。

それから二三日後、ローヨーはグランドの酒場で、晩くまで友人と酒を飲み、終列車で鎌倉へ歸つて來た。夏も初めの、そよ〳〵したいゝ晩で、おまけに一杯機嫌の、物足りない女欲しいやうな氣持だ。で、彼は停車場へ下りた時、ふと此間會つたあの女の事を思ひ出した。さうだ。かう云ふ時訪問してやらう。約束がしてあるんだから差支はあるまい。兎も角も、居るか居ないか行つて見よう。――さう思つた彼は、上衣のポケツトを探した。アドレス入りのミス・ユリコ・テラオの名刺は、ちやんと底に殘つてゐる。

彼は改札口を出ると、直ぐ其處の車夫(リキシャ)に、名刺の日本字の方を出して見せた。車夫は馴れたもので、直ぐ承知して梶棒を上げた。

やがて微醉の彼を乘せて俥は、心を唆るやうな松風と海の音との中を縫つて、海岸通りの、とある洋館の前へ着いた。車上から、其家を見やつたローヨーは、はゝア成程と思つて、少し餘計に賃金をやると、其儘車夫を返した。日本風の、洒落れた門は締つてゐた。が、其中にある洋館は、ベニガラ塗りの木造で、どう見てもそれらしい家だつた。醉つては居たし、夜目でもあり、且つ先入主に占められた彼の眼には、どうしても間違ひない、高等なチャブ屋だ。もう〆めたものだ。此處迄來れば、叩き起して泊めて貰ふだけの話だ。

彼は遠慮なく、其處の門柱にある、呼鈴を押した。が、もう寢て了つたと見えて、家の中からは誰も出て來ない。彼は更に遠慮なく、戶をどん〳〵叩いた。

やつとアマさんらしい者が、家の中から出て來た。

「誰方(どなた)ですか。」

彼女は聞いたに違ひない。

「私(わたくし)です。入れてください。大丈夫です。よろしいです。」

彼は日本語で云つた

相手が西洋人なので、まさか盗人とは思はない女中は、主人の商買上、何か關係ある人か何かだと思つて、兎も角も中へ入れた。

芝生と貝殻を踏んで、玄關から入ると、中の應接間には、花模樣のソーフアや、卓子や、それらしい用意はちやんと整つて、なか〳〵洒落れたチヤブ屋である。もう、てつきりあの女は、いゝ三鞭酒か何かを持つて出るに違ひない。

ローヨーはすつかり馴れた態度で、わざと投げやりに、其處のソーフアに身を投げると、

「直ぐユリ子さんをよんで下さい。私、約束しました。」

と云つて、名刺を女中に出して見せた。

女中は怪訝な顏をして、令孃のに違ひない名刺を見ると、何とか彼とかローヨーに解らぬ日本語で、云つた。女はもう寢て了つたらしい。が、客が來て居るのか、居ないのかは、當人に會つて聞いて見なくては、どつちとも解らない。

「私、ぜひ會ひたい。會へば解ります。」

女中は仕方なしに、奥へ引込んで行つた。

暫らくすると、奥で何か人聲がして、やがて當の女が、日本服を着て出て來た。洋裝の時と、少し感じは違ふが、其顏に間違ひはない。

ローヨーは立上つて、矢庭に握手をしながら、待ち切れないやうな英語で云つた。

「此間約束した通り、今夜淋しかつたので、訪ねて來た。都合はどうかね、」

女は何故か、後退みして、呆氣に取られたやうに、意味が分らないらしく、眼を瞠いてゐるぎりだつた。

「今夜は都合が悪いのか。どうかして泊めて呉れられないのか。俺はもう歸らない。」

彼は益々血を湧かしたやうに、畳みかけて云つた。

「…………」

其時、女の後から、一人の男が日本寢卷のまゝで、怒つたやうな顔をして、出て來た。

ローヨーはしまつたと思つた。が、女とは約束したんだから、關はないとも思つた。きつと女の先客には違ひないが、今更逃げも隠れも出來なかつた。

「何の用ですか。」

其男は、恐ろしく叮嚀な、間伸びのした英語で云つた。

「私も泊めて貰ひに來たのだ、君は此の女の客か。」

ローヨーは虚勢を張つて、かう尋ね返した。

「いや、私は此の女の兄だが、何の用で泊りたいのだ。」

「約束をしたのだ。が、都合が悪いんなら、仕方がない、又來よう。」

ローヨーは、さすがに少し氣味が悪くなつた。

「さうか。どうしたのか知らぬが、兎に角此の家へは、見知らぬ男を泊めるなどゝ云ふ譯には行かない。殊に深夜他人の娘を訪問するなんて、甚だ失禮ではないか。何かお前の間違ひだらう。兎も角も用があるなら、又、晝來て呉れ。」

其兄と稱する日本人は云つた。それは兄と稱しては居るが、其實きつと、女の客だらうと思はれた。

「いや、決して間違ひではない。が、今夜都合が惡いのなら又來る。では約束を忘れるな。いゝか。」

彼はやゝ中つ腹で、から吐きかけるやうに、女に向つて云ひながら、少し荒々しく其家を飛び出した。何となく、馬鹿にしてやがると云つた氣持で。——

彼は仕方なしに、深夜の遠い道を材木座の自分の泊り屋まで歩いて歸つた。

其後、一度で懲りて、もう改めて訪ねはしなかつたけれど、どう考へて見ても、其家の作りと云ひ、女の樣子と云ひ、チャブ屋類似のものには違ひない。たゞ、俺は都合の惡い時に行つて、馬鹿な眼を見たのだ。が、いづれ其中、又女にも會ふ機會があるだらうから、そしたら又違約の咎を責めて、又何とかならないものでもない。あの家で都合が惡ければ、約束通り、箱根へでも横濱のホテルへでも行けばいゝのだ。

が、又さうは思ひながら、又その兄と稱するもの〻言葉を、よく後で考へて見ると、腑に落ちない所がないでもないけれど。……

そんな事で、一と月ばかり經つた今日、又遇然、私と踊つてゐる彼女を、ローヨーは此處で發見したのだ。——

「さうか。彼女は眞實に、尊敬すべき令孃なのか。」

さう語り終つたローヨーは、改めて、私の顏をぢつと覗き込みながら、子供のやうな含羞顏を、更に眞赤にして聞いた。

「さうだ。それは俺が確言する。お前はすつかり間違へたのだ。その兄と云ふ男も眞實だ。私は彼女の兄をも知つてゐ

る。」

私は面白づくでかう答へた。兄を知つてゐると云ふ程ではないが、彼女に兄弟のある事だけは、橋口君から聞いてゐた。

「さうか。そいつは大變な事をした。困つた事をして了つた。が、お前が彼女たちを知つてゐるのは幸だ。どうかお前から、彼女によく詫びて吳れ。賴むから詫びて吳れ。でないと再び、彼女たちに顏を合せられない。どうか、つひ醉つぱらつてゐて、失禮したと云つて、許すように詫びて吳れ。私はお前に賴む。」

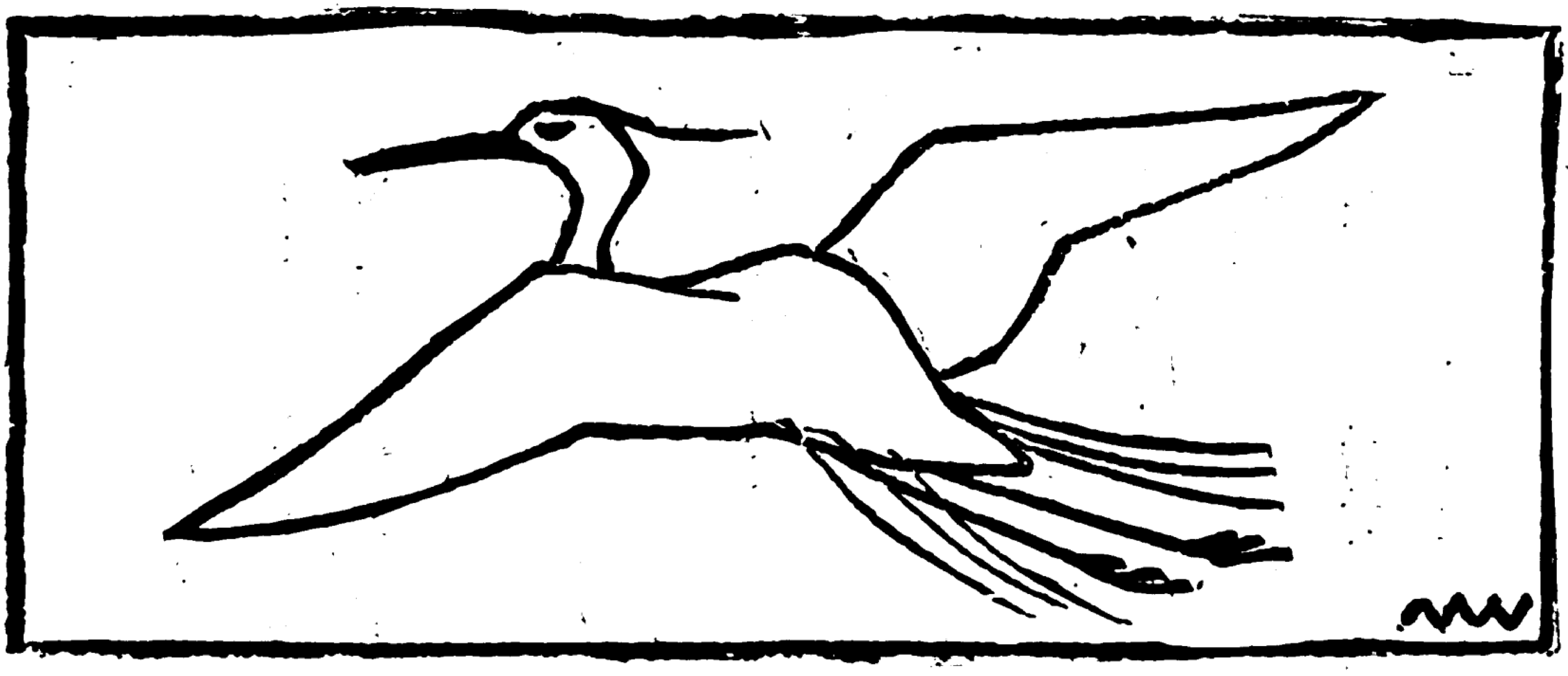
彼は一生懸命に云つて、私の手を打振るやうにした。

が、私は彼の手を靜に放させて、そして出來るだけ間違はない字句を思ひ浮べながら、叮嚀にかう云つた。

「いや、そんな事は必要がない。それは此方こそ、お前に改めて詫びなくちやならない。俺は詫びる、さう云ふ『文化』を持つた日本人を、代表して。」

そして私は思はず、此の不良外人ローヨーの前に、日本流の叮嚀な御辭儀を一つして了つた。……

（大正十三年三月）



# 「夕飯」

宇野千代

（一）

法科大學生の吉村は、昂奮して歩いて居た。今、別れて來た許かりの櫻井の顔が、その儘自分にのり移つて居るのを感じた。落付いて、落付いて、と吉村は自分で自分の心に言ひ聽かせ乍ら歩いて居た。

櫻井の煽動的な悲憤慷慨的な口調がその儘、自分の脣の上に浮いて來るのを感じた。と、それらの言葉の凡てが、

「君はちつとも口惜しくないんだね、何と言ふ情けないお人好しなのだ。」

と言ふ一言に盡きるのだ、と氣附いた時、吉村はぎくつとして立留つた。

が、直ぐ、

「うまく嗾しかけやがつたな、」

と呟いて、又すた／＼と歩き初めた。

ふと吉村は、先刻から眞赤な顔をして大きな聲を擧げて居たのが、自分ではなくて櫻井であつたと言ふ事に氣附いて、不思議な氣がした。と同時に、不貞な女と一緒に居るのも自分ではなくて、あの櫻井自身であつたやうな氣がした。薄い冬の日さしのやうな和やかさが、吉村の心の中へ滑り込んだ。

三丁目を眞直ぐに柏屋の明るい飾窓のところまで來て、鷄のやうにひよいと眼を擧げると、土藏と高い物干臺の間に狹まれて、二階の軒に糸で吊した白足袋がゆらりゆらりものを言ふやうに搖れて居る。――ちよつとも逢つて居やあしない。――と、吉村はちよいと口を尖らしさうになつた。つい先刻まで、浪江の顏を見たらいきなり、毆り飛ばして遣らうと思つて居たのだつたが。

彼奴の聲が俺の頭に一種の暗示を與へて居たのだな、と思ふと、その櫻井の聲から遠ざかつた事が、吉村を安易な氣持に導いたのであつた。

が、何故とも解らずに、吉村は足音を忍ばせて階段を上つて行つた。異常な事が起るに違ひないと言ふ豫想のために、足の爪先まで凍りついて慄へて居るやうな氣がしたり、階段と一緒に浮き上つて行くやうな氣がしたりした。

浪江は、出窓に腰を掛けて編物をして居た。そして、いつもの通りに、

「降つてて？外は、」

と訊いた。

吉村は、沈默つて帽子を釘に引つ掛け乍ら、――おい、俺は怒つて居るのだぞ、俺は決して許しはしないぞ、――と、彼の心の中に居る浪江に、と言ふよりも彼自身に宣告するやうに言つた。が、彼の眼が、その帽子の引つ掛つた釘から机、本箱、坐蒲團、それから彼自身の羽織の掛けてある朱塗の衣紋竿、三角棚にのつかつて居るヒヤシンスの鉢、

洋紅の笠を冠つたスタンド、と見遣らされた。それらの飾りにも違はな過ぎる色と空氣とが、吉村に、何事も起りはしなかつたのだ、と言ふ事を信じさせようとした。

けれども、彼は言はずに居る事が出來なかつた。

「お前は、河田に手紙を遣つたか、」

浪江が編物から顏を擧げた。

「河田に手紙を遣つた事があるか、」

「あるわ、——向ふから寄越したから返事を遣つたわ、」

「向ふから幾度寄越したんだ？お前はその度に返事を遣つたのか？」

吉村は、浪江の瞳が彼を輕蔑するやうにちらと光つたのを見た。

「だつて、如何してそんな事を訊くの？」

彼女の聲は全で反抗して居るやうに聞えた。吉村は、もつと違つた風に初めなければならなかつたのを感じた。けれども、彼には如何言つて好いのか見當が附かなかつた。

沈默が續いた。浪江は一寸肩を搖すつて、——彼女は何か氣に入らない事がある時、何時でもさうするのであつた。——再び手を動かし初めた。

毛糸の玉が、生きたもののやうに輕く跳ね上つては轉がつて行く、吉村にはそれがものを言つてるやうに思へた、——手紙を遣つたわよ、遣つたわよ、——彼は浪江の眼を見ないやうに、そうつと眼を擧げた。暮方の微光のせいで、浪江の丸まつこい二重顎から、心持裸けた胸もとへ掛けて、うす青い隈が搖れて居る、——と、彼女の薄い脣が一寸と動い

た。

吉村は、彼女が何を言ひ出すかはつきり分つた。彼はそれを、彼の耳で聽きたくなかつた。彼は狼狽てて――全で、彼女が棄て鉢になつてありもしない事を白狀して呉れないやうに、と懇願するやうな眼附をしながら、――狼狽てて言ひ初めた。

「俺は、そんな事をちつとも氣にしてやあしない。それは、手紙位は出したかも知れないと思つたけれども、――今日、櫻井が、歸りに是非寄つて呉れと言ふから彼奴のところへ行つたらさう言ふのだ。お前が河田を唆して何かして居る、それを、河田の奴は好い氣になつて方々へ吹聽して歩いて居る、彼奴の友達で知らない者は一人もない。それだのにこの俺だけが、何にも知らないで皆の好い笑ひ者にされて居る。と言ふのだ。櫻井は、親友の俺がそんな風になつて居るところを、側から到底も見て居られない、と言ふのだ。彼奴はさう言つた。彼奴までが一諸に笑はれ者になつて居るやうな氣がする、と言ふのだ。だから、河田の奴をうんと懲らしめて禍の根を絕たなけや不可ない、と言ふんだ。それには、先づお前を詰問して眞相を確める必要がある。そして、その上で河田のところへ押し掛けて行けと言ふのだ。――だから俺はさう言つた。お前がそんな眞似をしたとは信じる事が出來まい。俺はお前から確かな言質を取つて、きつと彼奴の顏を立てて遣る、と言つたのだ。――俺はこれだけ言つたら、せい〱した。もう何ともなくなつた。櫻井は親切な男だけれども、何だか彼奴の親切は五月蠅いよ。――

だが、お前は是非ともさう言つて呉れなくては不可ないよ。今に、櫻井が遣つて來るだらうから、彼奴の前できつぱり言つて呉れ。河田とは何でもありはしないと言ふ事をね、それでないと俺は、この上櫻井から何か言はれるのが辛いし、第一、それに間違ひない事なのだからね、」

吉村は、自分の聲が途切れるのを懼れでもするやうに、我れと我が言葉に追ひ立てられるやうに口早やに言ひ續けた。

浪江は吐き出すやうに言つた。

「私、櫻井なんか怖くもなんともありはしないわ、あんな奴に辯解するなんて可厭なことだわ、」

その時、階下で、

「吉村、吉村、」

と呼ぶ聲がした。浪江は殆んど反射的に立ち上つて、

「櫻井よ、私、あんな奴のお説法喰ふのは眞平だわ、」

と言ひ捨てて、するりと廊下へ拔け出た。そして、反對の方向へ走つて行つた。

（二）

おや？――何だつて逃げやがるんだらう？

吉村は何故ともなく、浪江の素足の音が廊下の板の面に吸ひ付いて、――それは猫の足音よりも忍びやかに、栗鼠の姿よりも早く消えて行つた。――裏梯子を傳つて遠ざかつて行くのに耳を澄ました。

「如何した？浪江さんは居ないのか？」

櫻井が、壁の中から生へでもしたやうにそこに突つ立つて居た。吉村は、浪江とともに自分自身の姿をも、この男の眼の前から隱して了ひたかつた。彼の顏から、胸から、肩から、凡てのところから放射する眼に見えない壓迫を感じた。果たし切れない「借り」を感じた。

「一寸使ひに行つた。」

「じやあ、君はまだ話さないのか？」

「話した、」

「すつかり話したか？浪江さんは、河田の仲間で噂して居る事を承認しやあしなかつたか？」

「あれは、何でもありはしなかつたと言ふのだ、」吉村は一寸言葉を切つた。と、櫻井がじつと彼の唇を見詰めて居るのを感じた。彼は急いで附け加へた。「然し、誰にでも思ひも懸けない噂と言ふものはあるのだからね、」

吉村は、その言葉が櫻井の耳へ這入るまでに消えて行くやうな氣がした。彼は非常な速さで、先刻からの浪江との問答を思ひ浮べようとした。何を彼は訊いたのであつたらう？浪江は何を答へたのであつたらう？

「僕等の要點は、何方がアクテイブに出たかと言ふ事だ。何方が誘惑したかと言ふ事だ。浪江さんが誘惑したのか、河田が誘惑したのか、」

吉村は、不貞な行爲をしたのは彼自身であつたかのやうな羞恥を感じた。――河田が誘惑した？何と言ふ不似合な響きのする言葉であらう、――吉村は、河田の蒼白い顏を、じつと見詰めて居るとゆらめいて居る陰火が感ぜられるやうな蒼白い顏と思ひ浮べた。

「河田が誘惑したのだとすると、最初からの計畫をちつとも變更する必要はないのだ。實に度し難い奴だ友人の妻君、いや妻君だよ、妻君を籠絡して泥溝の中へ墜したのだ。今頃彼奴は、手を叩いて笑つて居るだらう。あんな、うらなり瓢箪に笑はれて居るなんて、全く男じやないよ。」

櫻井の顏は喘いで居る馬のやうであつた。吉村は、どんな力が櫻井をこんなにまで昂奮させ、怒らせるのか解する事

が出來なかつた。

「君の男が立つか拾たるかと言ふところなのだ。好い加減に狐疑逡巡を止め給へ、直に支度をし給へ、直ぐに出掛け給へ。」

斯う言つて櫻井は立ち上つた。そして、自分の腕を試しでもするやうに、力を籠めて空に振つた。

櫻井のその身振りから、吉村は、自分の體が廊下の方へ突き出されるやうなけはひを感じた。彼は、立ち上りさま、大きな聲で怒鳴り散らしたかつた。

「止めて呉れ！貴様は一體、何だつて俺を、丕で俺が貴様に「借り」でもあるやうに責め立てるのだ。何だつて俺は、貴様の言ふ通りにならなければならないのだ。浪江は俺の女だ、俺の女が誘惑しようとされようと貴様の知つた事ぢやない！」

然し、吉村は、さう言ふ代りに櫻井の後から随いて階段を下りて行つた。彼の心は直ぐ靜かになつた。彼は、今下駄をつつかけて幕方の街を歩いて居るのが、彼か櫻井かはつきり解らないやうな一種の放心の中に居るのであつた。

（三）

「ぢやあ歸りに、——君の報告を待つて居る。」

櫻井は、生垣に添うた暗い露路の這入り口でさう言つた。そして、高らかな下駄の音を吉村の耳に殘し乍ら消えて行つた。

「彼奴は、」と、吉村はその下駄の音に向つて言つた「俺の頭の中を腐らせて了つた。何か俺には分らない毒素のやうた

ものを注射して行つた。」

この時、櫻井に對する憎惡が微かに頭を擡げて、直ぐ消えた。彼は、歩き乍ら自分の不幸を考へたのであつた。

――彼は無心な子供のやうに、ぶらんこをして居た。降り注ぐ陽を浴び乍ら、太い幹に結びつけた美しい絎け紐に掴まり乍ら、ゆらりゆらり搖れて居た。彼の足の下では時々、雀が飛び下りて鳴いて居たり、蛙が青い草の中から覗いて居たり、犬がぢやれついて居たりした。然し、彼は何にも見なかつた。彼の心は、彼の體と一緒に宙に浮いて居た。と、何時の間にか（彼はちつともそれを知らなかつた。）絎け紐は擦り切れて細く弱つて居た。あつと言ふ間に、彼は地上に投げ出された。――

「俺は、何をしたと言ふのであらう？」

彼は浪江を愛して居た。櫻井をも河田をも信じて居た。

「俺は、何をしたと言ふのであらう？」

と、彼は繰り返した。そして、自分の不決斷を非難するのであつた。彼の心は次第に憂欝になつて行つた。けれども矢張り、河田の住んで居る植木屋の離れの方へ歩いて行くのを止める事は出來なかつた。彼は河田に逢つて、さう言ひたかつた。

「君は、俺をこんなに不幸にした。然し、もうぶらんこの紐は切れて了つたのだ。あれと同じ紐は何處にもない。」

音の死んだ裏町であつた。貧しい灯が深い植込の中から、藁屋根の明り窓から、そこにも人が住んで居る、と言ふ合圖のやうに、ちら〳〵と瞬いて居た。歩き乍ら吉村は、陽炎のやうに地を這うて空に昇る氣體を感じた。――何て靜かな街だ。昨日も一昨日も俺はこんな靜かな街を歩いて居たのかなあ、――

彼は一寸立留つた。生垣と言ふには何と言ふ大きな、椎の並木であらう、裸の幹が十本ばかり、三丈もくうを抜いて揃へ乍ら、眞黑い梢の一塊り宛つをさも輕々と差上げ乍ら、そして、幹と幹との間から玩具のやうな河田の離れを態さらしく覗かせ乍ら、立ち列んで居るところまで來ると、踏み馴れた眼の前の石疊が恐しかつた。彼は、身を屈めて眞竹の繁みを透かして見た。

と、その離れは眞の暗のまゝ、僅かに屋根のにび色と嵌め硝子の銀泥色とを反射させ乍ら、闇の中に沈んで居た。

「居ないのかな?」

不可思議な喜びが、吉村の胸を水のやうに流れた。が、彼は何かに惹かされたやうに、その眞つ暗な部屋の方へ近附いて行つた。そして、かち、かち、と金屬の觸れ合ふやうな微かな音を聽いた。

「誰?小母さん?」

河田の聲であつた。吉村は、身を躍らせて眞竹の繁みへ飛び込んだ。その時彼は浪江の素足の音を、―それは、まさ〳〵と彼の耳の底に殘つて居た。猫の足音よりも忍びやかな、廊下の板の面に吸ひつくやうな、それで蹠の柔かさの忍ばれるやうな、―聽いたやうな氣がした。いや、確かに聽いた。ざわ〳〵と梢を渡る風が、帽子を冠らない彼の頭を逆か撫でにして過ぎた。

と、ぱちんとスヰッチを捻る音がして、障子が明るく浮んだ。河田の姿が黑く現れた。

「何だ、吉村か、何故沈默つてそんなところに立つてゐるのだ。」

「何か音がしてゐるのに眞つ暗だから、一寸遠慮をした。」―

さう、冗談めかした言葉が微かに顫へた。彼は、彼の眼が霞んで、河田の蔭から摺り抜けて行つた浪江の姿を、見逃

したのではあるまいかと云ふ錯覺に苦しめられたのであつた。

「そりやあ、お察しが好過ぎるよ。貴の間に遣つとけば好かつたんだがね、」と言ひ乍ら、河田は先きに立つて案内した。

「見給へ、やつと今、取りつけを終つたところだ。好いスタンドだらう？こんなんな型は日本にはないよ。ほら、斯ふ遣れば上は向きになるし、斯ふ遣れば下向きになる。スヰツチ一つで如何でもなるんだよ。如何だ、斯ふ上は向きにしたところは、一寸、五條橋のぎぼうしの灯みたいだらう？」

河田はひとりで面白そうにスヰツチを捻つては灯を點けたり消したりした。

「止し給へ、暗くするのは止し給へ、」

吉村は哀願するやうに言つた。そして、その奇妙なスタンドと、河田の優しい女のやうな顔とを見較べた。

名狀し難い感情が、吉村の胸を流れた。彼はやつと、自分の隠れ場所を見出したやうな氣がした。今は、何も彼も話せそうな氣がした。話す事に依つて、會體の知れない苦しさから解放せられたいといふ渇望に驅られた。—河田、君は正直な男だ。君のその朗らかな聲で、すつかりほんとうの事を話して呉れ。何卒、俺の苦しみに形を與へて呉れ。俺は如何したら好いのだ。—

然し、彼は一言も言ふ事が出來なかつた。ふと、河田の蒼白い額越しにヒヤシンスの鉢が、——厚ぼつたい葉に圍れた眞直ぐい莖に小さな洋紅の花が群がつて咲いた、—眼に附いた。

「君、あれは何處で買つたのかね？」

「これか、これは買つたのじやあない、母屋の庭から引つこ抜いて來たのだ。植木屋だから何でもある。」

—俺の部屋の三角棚に飾つてあるヒヤシンスは夜店で買つて來たのだ、買つて來たのだと浪江が言つた—吉村は口の中で呟いた。—俺の不幸をこの男が知つて居たらう…。

その時、河田が後のボタンを押しながら言つた。

「君、飯は如何かね、僕と一緒に遣らないか?」

「ああ、」

飯? 吉村は晝も夜も、何も喰べなかつた事を思ひ出した。彼は、急に、灼けつくやうな空腹を感じた。然しそれは、ほんたうの空腹ではないやうな氣がした。—だが、飯を遣るのは好い、俺は飯を喰べ乍ら、何氣なく、先刻のスタンドの續きをでも話すやうな具合にあの事を切り出すだらう。——

軈て、食卓が運ばれた。吉村は殆んど機械的に箸を動かした。彼は幾度となく茶碗を替へた。彼は、彼自身のあたまがそれを喰べて居るやうな氣がした。

と、吉村は、往來の小砂利に喰ひ込む微かな轍の音を聽いた。それがぎーいと鈍い音を立てて、確かにこの裏の椎並木を潜つたと感じた時、彼の手からかたりと箸が落ちた。——彼は自分の腦髓が小砂利とゴム輪の間で噛まれ乍ら、引き裂かれ乍ら、離れの方へ、彼の下駄の脫いである沓脫ぎの方へ、じり〱と曳かれて來るのを感じた。

「俥だね?」

と、嵌め硝子を透かして河田が言つた。「さうだ、櫻井が來たのだ。」

吉村は思はず眼を閉ぢた。そして、梶棒の下りた音を、土の上にはずみを喰つて投げ出された下駄の音を、濡れ椽を踏んだ櫻井の足音を聽いた。河田が障子を開け乍ら何か言つて居るのを聽いた。最後に、彼の直ぐ後で櫻井の叫ぶ聲

聽いた。

「吉村、君は何んと言ふ情けない奴だ。君はそんなに腹が減つて居たのか。」

――「吉村は彼の坐つて居る疊が、大きなうねりをもつて搖れるのを感じた。彼は、まだ自分の頭が確だと言ふ證據を見ようとしてじつと眼を凝らした。そして、一つ二つ三つと、スクンドの絹笠の總を數へ初めた。――

「おい、吉村、何故返辭をしないのだ？俺が乘つて來た俥を如何する積りなのだ？俺は俺の部屋で、じつと君の歸りを待つて居る事が出來なかつた。さうして坐つて居る間に、君は河川に遣り籠められて慘めな目に逢つて居るのではあるまいかと思ふと、立つても居ても居られなかつた。俺は何も考へずに飛び出した。さうして歩るき乍らも、俺の歩るいてゐる間に、君が捻ぢ伏せられて居るのではあるまいかと言ふ氣がして、俺は夢中で俥に飛び乘つたのだ。だのに君は飯を喰つて居る。――君は、河田が何者か忘れたのか？姦夫から夕飯の馳走に預るなんぞは、大した腹癖だ。――おい、君は何んとも返辭をしないのか？情けない奴だなあ、」

聽き馴れた櫻井の聲が、樂しい唱のやうに吉村の鼓膜を撫でて過ぎた。彼は何にも聽いては居なかつた。おどけた燒肴の頭が――それは、烏につゝかれたしやれ頭のやうに喰ひ荒らされて居た。――食膳一杯に擴がりながら、彼の眼の方へ近附いて來た。

――一九二四、三、九、――



# 車掌夫婦の死

徳田秋聲

## 一

車掌の砥倉は、今朝もちよつと氣を弛めたばかりに、つひ四十分ばかり寢過してしまつた。そして目のさめた時には、夜は白々と明けかゝつて、近所合壁ではもうごとごといふ音をさしてゐるところもあつた。と思ふとまだ寢所のなかに子供が乳房を探しながら、ぐづり〳〵啼出してゐる聲などが聞えて、夫婦ともまだ夜中のやうな眠に沈んでゐる家もあつた。

昨夜は砥倉もおりんをつれて、町なかの芝居を見に行つて、歸りが遲くなつたうへに、家へ歸つてからお湯を沸してお茶を飲みながら、見て來た芝居の話などして、床についてからもぼそ〳〵何時までも寢物語に時の移るのを忘れてゐたので、今日は目がさめてからも頭腦が慵くて、何となし起き辛かつた。

砥倉もおりんも町の劇場へなぞ入つたのは實は昨夜が初めてゞあつた。村では頻々

の祭に仁和加などの催しのあつたこともあつたし、一里半ばかり出ると、小さい芝居小屋があつて、十二の時分に、さういふことの好きな祖母につれられて見にいつたこともあつたが、大人が感じるほどの興味がなくて、寧ろ無氣味で可恐つた。この町では、彼は二年前に除隊になるまで町端の兵營にゐたので、活動くらゐは偶に覗いて見る機會もあつたけれど、劇場や寄席の木戸を潜つたことは一度もなかつた。勿論彼は内氣で柔順な性質に產れついてゐたので、上官や朋輩に可愛がられて、上等兵に取り立てられてゐたところから、外出しても惡い交際は避けるやうにしてゐた。赤い顏をして町を歩いてゐるのを見つかつたこともなかつたし、遊廓へなぞ足踏みしたことも曾てなかつた。

今度の芝居は東京の若手俳優によつて演ぜられる、大歌舞伎劇といふ觸出しであつた。東京が地震後の火災で、劇場の殆んど全部を灰燼に附してしまつたお蔭で、この土地へも東京の藝人が入替り立替り入込んで來て、同情的な人氣を呼んでゐたが、これなぞも無論其の一つで、座組のなかには何うやら耳にしたことのあるやうな花形の名前も見えたのであつた。

「東京の大歌舞伎とは何んなものだか、一つこの際見ておかうかな。」砥倉は新聞の劇評なんかを見て、興味を唆られたらしく、さう言つて妻に話すと、おりんも心が動いたらしく、惡い顏をしなかつたが、直ぐには乘らなかつた。

「そんな好い役者だと場代がきつと高いですわ。いくらかゝるの」

「さうだね、三等で一圓五十錢だよ。三等で澤山だからね。」砥倉は演藝廣告の欄を見ながら言つた。

「おゝ高い、二人で三圓だわ。三圓も出して芝居見るくらゐなら、お美味いものでも食べた方が餘程好い。」

おりんは結婚以前、この町で薪炭商をしてゐる物堅い伯父の家に世話になつてゐたので、格別苦勞をした譯ではなかつたけれど、世帶觀念なぞが相當に頭腦へ滲み込んでゐた。良人の砥倉も除隊後一年ばかり家で農事の手傳ひなぞして

ゐたが、兄弟が四人もあるうへに、嫂に子供が三人もあつたりして、暮し向きは樂ではなかつた。いくら働いても、分けてもらふ程の田地がある譯でもなかつた。人並みに嫁をもらつて自分だけの世帶をもつには、何うしても、家を離れて獨立ちになるより外なかつた。兵營では、良人の除隊を待つてゐる細君のある兵士も大分あつたし、中には戀人をもつた男もあつて、上官や仲間に艶福を羨まれたり、嫉妬半分揶揄はれたりしてゐた。砥倉もそんな男のお惚氣を聞かされたり、手紙を見せられたりすると、さすがに自分を待つてくれるものゝないのが物足りなかつた。隊を出てからの空想や希望は様々あつたけれど、何といつても結婚くらゐ彼の心を摑んでゐるものはなかつた。

しかし彼は到頭一年間を辛抱しなければならないのであつた。そして其の一年間は、氣の張詰めてゐた兵營生活の反動でもあつたらうが、可なり憂鬱な怖い月日であつた。折角滿期を勤めて、しかも上等兵にまで成つたのは好かつたけれど、樂しみにしてゐた除隊後の生活には、何一つ彼の精勤に酬ゆるものがなかつた。で、彼は兄の諒解を得て、町へ出て電車の車掌の募集に應じた。そして間もなくおりんと結婚した。

けれど初めて獨立ちになつて、世帶をもつて見ると、それがまた小心な彼に取つて大なる不安で、車掌の月給くらゐでやつて行くには、餘程氣を引締めてかゝらなければならないのであつた。おりんは氣の好い、屈託のなささうな女だつたけれど、その點にかけては、砥倉より以上にも、世帶に忠實であつた。

しかし砥倉もこの頃は大分馴れて、少しは樂觀するやうになつてゐた。

「さう吝々したことばかり言ふもんぢやないぞ。偶には金も使つてみんと働く張合ひがない。おりんさんだつて、今に赤ん坊でもできてごらん、何處へも出られやせんから。」砥倉は言つた。

それからおりんが仕度をしてゐる間に、氣輕な砥倉は明日の朝の釜を仕掛けるために、水を汲んだり米をといだりし

た。それは其の日に限つたことでもなかつた。女房の貰ひたてから、荒い仕事に働かせないやうに、自身できめ〳〵しく立働くのが、女房孝行で近所に評判になつてゐる彼の習慣であつた。

## 二

砥倉は床のなかで、漸く目ざめて來る近所の人聲や物音を、半ば夢のやうに聞きながら昨夜見た芝居のことを思ひ出してゐたが、寢てからもあれ程頭腦や耳にこびりついてゐた怪奇な人物の顏面や、幻惑的な女の表情や、誇張的な厭味な作り聲などが、今朝の曙光で、魍魎のやうに影を潜めてしまふと同時に、寢てゐる部屋のまざ〳〵した有樣や、場末にある家の周圍の氣分などが、はつきり目に浮んだ。それは美しくも汚くもなかつたが、子供のをり遊び耽つた祭がすぎて、明朝の目ざめに感じた淡い寂しさに似たやうな安易な氣持であつた。

車が前の砂利道を通つて行つた。下駄や靴の音なども聞えた。店屋では店を開けはじめた。町幅の狹いごちや〳〵した通りなので、格子のはまつた往來向きの一室と、臺所との間の六疊に寢てゐる彼の枕元は、漸と微かな鼠色の朝の光が這ひ寄つて來たばかりだつたけれど、外から來る朝の感じは、何うしても春であつた。今火を引いたばかりの飯の匂ひなどが、臺所から通つて來て、おりんはもう疾くに起き出して働いてゐた。

砥倉は今朝ばかりは、ちよつと起き辛いやうな氣がしたけれど、床をあげてざつと掃除をしてしまふと、直きに頭がしやつきりして、裏の井戸端へ出て、冷めたい水で顏を洗ふ氣分はいつもより爽快なくらゐであつた。二坪ばかりの背戸庭には、野菜畑などがあつて、冬を越して來た黑いぼや〳〵した土の間から、霜にかにかんだやうな靑いものが芽を出してゐた。その先きは廣々した田圃になつてゐて、朝霧のなかに、白い霜のおいた新築の貸家などが目につい

た。

「大分春らしくなつて來たぞ。」砥倉はさう言ひながら、爐落しをこてと盛りあげた長火鉢の側へ來て、食膳に向つた。

色の白い、丸ぽちやのおりんは、赤い手をして湯氣のなかへ顔を入れて、暖かい味噌汁をよそつてゐた。

「昨日の朝なんか、どこかの籔で鶯が啼いてゐたわ。」

「何かと言つてゐるうちに、もう直き花見だ。これで勤めがなければ極樂だがね。しかし昨夜の堀川と云ふ狂言は面白かつたね。あれが一番見應へがあつたぞ。」

「それあさうだわ。あれが今度の呼物だといふもの。それでも何だか陰氣で哀れつぽいから、氣が沈んでいけないわ。みんな高い金を拂つて泣きに行くやうなもんだわ。」

「さう言へば昨夜は少し使ひすぎたから、是から儉約するんだぞ。」

「そんなら行かなけあ好いのに。後でそんなこと言つても仕樣がない。」おりんは笑つた。

砥倉は飯をすますと、急いで洋服を着込んで、バットを一本火をつけながら靴を穿いた。

「お早うお歸り。」おりんは帽子を渡しながら言つた。

「今日はどうせ遲刻だ。偶にや勘辨してもらふだ。」砥倉はさう言つて、煙草をふかしながら出て行つた。

軟かい朝の日がもう一杯に町へ差してゐた。水分をもつた空はいくらか沈でゐたけれど、垣根のなかに梅の白々と咲いてゐるところなぞもあつて、雪や霜に封されがちであつた長い北國の町の冬も、やかで終りを告げるのだと思はれた。

砥倉が結婚と同時に、今のところに世帶をもつたのも、ちやうど去年の四月で、それまで彼は車庫に近いところの或る下宿にゐた。おりんと結婚するやうになつたのも、その下宿の神さんの世話で、其の神さんは以おりん世話になつてゐた

伯父の家内の縁類であつたところから、それとなしおりんを見る機會を作つてくれたりして、其が生れるとから二人に極めつけられてあつた運命でゞもあるやうに、譯なく纏まつてしまつた。砥倉は何だか狐にでも撮まれてゐるやうな氣がした。その女を好いてゐるのか好いてゐないのかさへも餘り明瞭でなかつた。ぽちや〳〵したやうな顏で、感じは惡くなかつたけれど、鼻は團子のやうだと思つた。それに極めなければならないやうにも思はなかつたけれど、斷るのも惜しいやうな氣がした。おりんは家では繼母にかゝつてゐたが、繼母にも子供が多いので、十七の歳に町へ出て來て、づつと伯父のところにゐた。しかし結婚後おりんに聞いたところでは、機織工場へ二年も通つたさうで、其の工場のことを何うかすると砥倉に話した。そして都合によつては出てもいゝやうなことも言つたけれど、何うせ風儀が好くないらしいし、二人とも外へ出て働くくらゐなら、いつそ世帶をもたない方が増しだと思つたので、今更出てもらはうとも思はなかつた。

とにかく彼は幸福であつた。宿の神さんが保證したとほりにおりんは氣立が好かつた。そして來た翌日から、長いあひだ住み馴れた家へでも歸つて來て吻としたやうに、すつかり落着いた氣分で、良人に信頼し切つてゐるらしかつた。そして行李に突込んであつた汚れものを洗濯したり、綻びを縫つたりして、きちや〳〵働いた。それに桃色の手絡がよく似合つて、少し赭味をもつた、素直なたつぷりした髮を丸髷に結つてゐる花嫁姿は、宿の神さんも言ふとほり、見合ひのときのおりんとは思へないくらゐ愛らしく見えた。好いにしても惡いにしても、それが一生涯の運命だと思ふと、彼は自分の好運を感謝しないではゐられなかつた。彼はいつもにこ〳〵してゐた。仲間の不平にも大して共鳴する必要を感じなかつた。報酬の安いことや勞働時間の長いことなども、さして苦にもしなかつた。兵營生活や野良仕事に比べれば、何のくらゐ氣持が自由で、體が樂だか知れなかつた。

砥倉が業務についたのは、それから十分とたゝなかつた。赫々と炎を立てゝゐる焚火のまはりへ寄つて、少し温まつてゐると直きに番が來た。「厭になつてしまふね。」三十五六になる相棒の運轉士は、焚火のうへにかゝつてゐる大きな藥罐から、くら〳〵煮沸つてゐる湯を汲んで呑みかけたところで、さう言つて腰掛を離れながら、

「今日も明日も同じところを、ぐる〳〵〳〵廻つて……同じまはるなら電氣仕掛の車輪やブレーキの方が、何ぼ氣がきいてるか知れねえや。」

「人間ぢやねえや機械だ。」誰かゞ笑つた。

「己なんかも大分機械になりかけて來たやうだ。しかも油が切れたと來てゐるから遣切れたもんぢやありやしない。」

「僕なんかもそろ〳〵機械になりかける時分かね。ちん〳〵やつてゐる姿なんか、實際お袖さんに見せたくないと思ふこともあるよ。」砥倉も肩をすぼめて笑つた。

「畜生、お惚氣を言つてやがる。」

「電車の切符切りぢや仕様がない。切めて自働車の運轉士ならな。」

終點のあたりは、貧弱な公設市場などがあつて、其の邊のちよつとした盛場になつてゐた。砥倉は歸りに何か買つて、提げて行くこともあつたが、おりんの話では、魚類や野菜や乾物などの問屋になつてゐる、昔しからの市場の方が、やつぱり勉强してゐるのださうであつた。砥倉はそんな事にもおりんの目の利くのが嬉しかつたが、そこから振出して、廣い長い通りから、この都市を三分してゐる二筋の川の一つに架つた新式の大橋を渡つて、繁華な町の中樞の一部を成してゐる通りへ乘り出して行くと、やがて又土塀や石垣の多い屋敷町の一部を横ぎつて、公園の裏から高台へと上つて行くのであつた。この都市の山の手になつてゐる其の高台の通りを、病院前まで行くと、そこに又車庫があるのであつた

が、時間にして三十分以上はかゝらないところなので、その儘乘客を入れかへて、中途まで引返すと、今度は別の方向を取つて、更に市の主要道路へと乘出して行くのであつた。そして今一つの川にかゝつてゐる大橋から引返して、同じ主要道路を別の方向を取つて、停車場へと向つた時分には、彼も可なり忙しかつた。日はもう高く昇つて、洋服着の勤め人や、制服をつけた學生などの姿が、どこに行つても目についた。高い銀行の窓に、光線がきら〳〵してゐた。古い暖簾をかけた昔しの薄暗い老舗なども、まだ幾軒か殘つてゐた。

「何うして、この町も、近頃では東京にも負けんくらゐ綺麗になつた。」さう言つて自慢する土地の人もあつた。おりんなども其の組であつた。勿論今のところさうかも知れないと砥倉も思つた。

驛前から人を滿載して引返して來た頃には、砥倉も頭がやゝ疲れて來て、車掌臺に立つて日に照されてゐると、體中ほか〳〵して來て、目の皮がたるむのを感じた。意識も何だかぼんやりして來たが、馴れつこになつてゐるので、呼鈴の綱を引くことを忘れたり、切符の區劃を取違へるやうなことはなかつた。そして大橋前の停留所まで來ると、乘客もげつそり減つてしまつて、砥倉は第一回の任務の終りに近づきつゝあることを感じた。

二年兵らしい兵士が三人づれで、遽かに乘りこんだ。橋向ふの遊廓へでも行くらしかつた。砥倉はその暗い顏を見て見ぬふりをしてゐた。「おれは未だ一度も遊廓へなぞ足を踏込んだことがない。」彼はふとさう思つたが、しかし今となつては格別自慢にもならなかつた。小遣があつたら、二度や三度はきつとあの仲間に加はつてゐただらうと思はれた。

## 三

砥倉が歸路に就いたのは、もう十二時近くであつた。その邊の店屋は大抵戶を鎖して、人の往來も絕えがちであつ

た。裏通に入ると、四邊は一層しんとして、偶に遠くの方で下駄の音の高く響くのが、更に夜の深さを感じさせた。でも何うかすると鎖した板戸の隙間から明りが差して、何かこつ／＼夜業をしてゐる家もあつた。それにさう遠くもない遊廓の騒ぎが、その區域がだら／＼した山裾の下の方にあるところから、反響で此方へ投げ返されて來るのであつた。砥倉は一日があく／＼した車輪の響きを聞いてゐるので、耳が聾のやうになつて、その音が何うかすると、電車の音と混交になつて響くのであつたが、風の方向で、太鼓の音などが厭に調子高に聞えたりするのであつた。

砥倉の家は、電車通を隔てゝその山と反對の側にあつた。距離もちよつと遠い方で、出勤には不便だつたかはりに、家賃が格安であつた。肌にしみるやうな山颪の吹く夜だとか、粉雪がさつさつと靜かな音を立てゝ、一寸先も見えないくらゐの密度で降りしきる時なぞ、彼はつく／＼歸りの遲いのを厭だと思ふこともあつたが、ぬく／＼と寢坊のしてゐられる、休みの日の朝の暢々した氣持を考へると、その方が却つて身になるやうな氣がした。

その日は午後からほや／＼南風が吹いてゐたけれど、夜になつてから又風が變つて、雪でも降りさうな寒さであつた。砥倉は外套にくるまつて、毛糸の襟卷に首をちゞめながら、こつ／＼道を歩いてゐたが、四五町も奥へ入つて行くと、そこに又寂しいながらに、ちよつと明るい一區劃があつて、小資本の機械工場だとか、染物工場などがあつた。頽廢した築地や、大きな伽藍の屋敷などが、昔しながらに形を止めてゐるかと思ふと、或るところでは屋敷町の氣分がすつかり崩されて、上方風の暖簾のかゝつた飲食店や、赤い提灯の出た饂飩屋のやうなものがあつた。この町の到るところに散在してゐる、これも上方風の洒落れた貸席なども思ひかけないところに、引込んで建つてゐた。いつ藝者の車が着いたのを見たこともないので、いづれ戰爭の時分に、この町や郡部にも少しは成金ができて、浮ついた景氣の好い時代の産物だらうから、今に凋落するだらうと、砥倉はさうなることが何か自分の懐ろにでも影響することのやうに氣にかけ

て、成行を睨んでゐたが、向ふの煮込屋で聞くと、さう云ふ商賣は案外成立つて行つてゐるらしいので、彼は何となし失望させられた。

今夜も寒い夜氣に研ぎすまされたやうな、入口の六角形の磨硝子の電燈が、ぴたりと扉のしまつた神秘めいた門の屋根裏にまじ〳〵と光つてゐた。砥倉は忌々しいやうな氣がしたが、かうして夜深の町を歩いてゐると、目ざめてゐるのは、飲食か淫慾かの窓ばかりで、何かさう云つた人間の嗅ひばかりが鼻につくやうに思へた。そしてさう思ふと、兵隊時代には、公園とか、博物館とか、官公衙、學校、銀行、會社、活動館なぞ、總ての文明的施設に讃美の目を瞠てると同時に、それら國民の幸福を護りもし、福祉を進めもしてゐるのが軍人だと云ふやうな幼稚な矜を感じたりしたものだつたが、下層の市民の一人となつて、内裏へ入つてみるとこの町ほど暗い享樂氣分の多いところはないと言つた他國人の批評がいくらか中つてゐるやうに思はれた。それは遊廓とか、料理屋とか、貸席などが多いばかりではなかつた。土地柄で最も多い軍人の未亡人や、良家の娘たちが、皆んなそれだと言ふのであつた。

「だから、此處では學生の墮落する率が多いんださうだ。」その男は言つた。

砥倉は強ちそれを信じようとも思はなかつたが、さう云ふことも隨分發達してゐるに違ひないと思つた。そして自分のおりんだけはさう云ふことはないやうな氣がしてゐたが、そんな話を耳にしてからは、ともすると彼女の女工時代が、何事もなしに過されたとは思へないやうな事があつた。が、其もほんの彼の單純な興味のうへだけのことで、ほんとうに其を自分のおりんに引當てゝみる氣にはならなかつた。

砥倉は先きから空腹を感じてゐたが、ちよつと入つて食べようと思ふやうな家はその邊にはなかつた。彼等が勞働の性質上、比較的食べものなぞに贅澤をしてゐたが、在で粗食に甘んじてゐた砥倉も、いつとはなしさう云ふ風に染みて

ゐたので、時々外で飲食ひをすることがあつた。勿論彼は酒を飲まなかつたけれど以前入營のをり、若い人達がやつてくれた送別會の席上では、へとへとに醉はされた。村に近い小驛の旅館で、その町の醫者なぞが酒席を斡旋して、みんなが隨分亂暴なふざけた眞似をしたので、正直な砥倉はひどく驚かされながらも、泥のやうに醉つてしまつた。それで飲めば飲めないこともないのであつた。すると其の通りの盡頭に近い寂しいところに、貧相な蕎麥屋がぽつりと一軒あつて、寒いをりなぞに中へ入つて行くと、濕い煙が濛々と立迷つてゐて、誰かしら客が二三人くらゐづゝゐるのであつた。今砥倉がその前を通ると、その前だけが障子から透けてくる明るい電燈の影が、水色の暖簾の下から淡すり地に引いて、甘い匂ひが彼の食慾を唆つた。で、彼はふらふらとそこへ入つて行つた。そして種物を一つ誂へて、つひ酒もつけさせた。彼はこれも曖昧屋の一つかも知れないと思つて、そんな好奇心もあつたのであつたが、見廻したところ、そんな樣子もなかつた。そこは狹い土間が二方續いてゐて、その一方から上ると、箱庭を拵へて古びのついた部屋があつた。で、砥倉が酒を二三杯飲んで、熱い蕎麥に箸をつけてゐると、そこへ栗皮色の毛糸の衿卷をして、セルのコオトを着た、二十一二の女が一人あがつて來て、砥倉を見ると、ちよつと極りわるさうに躊躇してゐたが、やがて隅の方にすわつた。そして眠さうな顏をしてゐる小女に狐蕎麥といふのを註文した。砥倉はバットを出して一服ふかしながら、見てゐたが、女は別に美しくも醜くもなかつたけれども、思ひがけなくさう云ふ女が一人で入つて來たことが、何か特色でもあるやうに彼の目に映つた。おりんよりも顏色がおどんでゐて、體つきも頑固にできてゐた。砥倉は瀬戸物の火鉢を一つかゝへてゐたが、女が寒さうにしてゐるので、彼は何か獨語を言ひながらそれを女の方へ押遣るやうにした。

「どうぞお當りなさい。なかなか寒いですね」と砥倉はお愛相を言つた。

「有難う。」女は微笑で答へて、ちよつと樣子をしながら彼を見て見ない振をしてゐた。

砥倉の目にも、それが女工か何か、さう云つた種類のものであることが、様子で頷づけた。
「あんたは矢張りこの土地ですか。」砥倉は暫らくしてから又きいた。
「違ひます××の近くです。」
××といふのは砥倉と反對の、この町からは東寄りの町であつた。砥倉はその邊から出てゐた兵隊時代の仲間を思ひ出したので、ちよつと懐かしいやうな氣がして、その家のことを聞いてみたが、女は知らなかつた。
「町ぢや肥料問屋なんかして、大分大きくやつてゐるやうな話だつたが、あんたは幾歳の時出て來ましたかね。」
「家を出たのは大分前ですけれど、私は初め遠所へ行つて、中度戻つて、こちらは去年の秋からですから。」
「それぢや……」と砥倉はそれきり口を噤んだ。
そのうちに女も狐蕎麥が來たので食べはじめた。砥倉は少し醉がまはつて來て、目がちろ〳〵した。
「お酒一つ何うです。私は先きから一人でやつてゐるんだが、獨りといふものは詰らんもんでね。」砥倉は猪口を差さうとしたが、女は赤い顏をして
「澤山です」と丼を下へおいて、袖で口を蔽つて笑つてゐた。
砥倉は何だか面白くなつて來た。そして唄でも謳つて、燥ぎたいやうな氣持になつて來た。
「姐さんは今頃どこへ歸るんです。」砥倉は聞いた。
「直き近くです。」
「直きつてどこですかね。私は堀川ですが。」
「そんな處とちがひます。」女はまた笑つた。

「どこだか中てゝ見ませうかね。」

女は默つて蕎麥を食べてゐたが、やがてお茶を一杯飲んで砥倉が一緒に歸らうと云ふのを、「浮山です」と、一足近きへ出て行つた。

砥倉が勘定をすまして、外へ出たのは、五分とたゝなかつたが、歩き出して見ると、大分醉つてゐることが判つて、顳顬のところが、づきん／＼と脈を打つてゐた。耳がひどくしんとして來て、こつ／＼歩く靴音が夜更の町に高く響いた。彼は何でも來いと云ふ氣になつてゐた。

暫らくすると、砥倉は急に空が明るくなつたやうな氣がしたと思ふと、流れのほとりへ出て來たことに氣着いた。で、眸子をすゑて見ると、そこに木造の長い橋の欄干が浮いたやうに續いて、さら／＼と流れる川の瀬が、ところ／＼星影に光つて見えた。そして橋の三分の二ほどの位置に今の女の姿が見透されたが、思做しか、彼の追ついてくるのを待受けてゞもゐるやうに、躊躇がちに歩いてゐるとしか見えなかつたので、彼はふら／＼とその方へ近よつて行つた。

## 四

砥倉が心の平靜を失つたのは、その晩からであつた。

彼はその夜二時頃に、醉も興もさめて、漸と家へ歸ることができた。勿論二人は不意に夜巡りの警官に近づいて來られて、そのまゝ交番へつれて行かれたのであつたが、會合の場所が、川縁に生茂つた木の蔭の木小屋であつたところから、水の音に紛れて靴音の近づいてくるのに氣づいた時は、もう遲かつた。砥倉は蒼くなつて、ぺこ／＼お辭儀をしたが、女は蔭へ隱れて泣出してしまつた。

「いや、しかしから云ふことがあつた以上、職務上見逃すといふ譯にも行かんからね。」年の頃四十ばかりの警官は仙掛で眞面目くさつて言つた。

「どうかさう言はずに、一つ大目に見ていたゞく譯に行かんですかね。無論酒のうへのことで、ほんの一時の出來心に過ぎんのですからね。」砥倉はさう言つて頭を下げるさへ、ひどく氣がひけた

警官はちよつと考へてゐたが、

「まあちよつとで可いから來たまへ。職務上一應は取調べなけあならんからね。何、さうびく〳〵する事はない。」と心安げに言つて、更に木の蔭に悚んでゐる女の方へ近よつて、

「お前は歸つてよろしい、家はどこかね。」

「堀川です。」女は微聲で答へた。

「今頃どこへ行つて來たのかね。」

「夜業で遲くなりまして……。」

「夜業とは何の夜業か。」

「ミシンの工場です。」

「それで年は幾許になるかね。」

「二十二。」

「亭主はあるのか。」

「いゝえ。」

「親がゝりかね。」

「姉さんとこにゐます。」

こんな問答をしてゐるうちに、女の姓名や、身元が判つた。姉の良人が鐵道の方へ勤めてゐることも判つた。

「それで、合意ぢやつたんだね。」

女は俛いてゐた。

「夜業なら止むを得んが、それにしても時間の制限があるのだからね。是から餘り夜歩きをせんやうに注意することだ。」

交番へ引張られた祇介は、しかし女と一緒でないだけに、いくらか氣が安まつたが、一戸の世帯主で、女房持であつたところから、四十分ばかりそこに立たせられた。彼はその時ほど自分の惨めさを感じたことはなかつた。そして辯解しようとすればするほど、自分の氣分に拘泥るばかりであつた。

「それぢやあ宜しい。軍籍にあるといふなら、私の計らひで一度は大目に見てあげよう。しかし今度再びかう云ふ事があると、許すわけに行かんから。」

「は。斷じてさういふことはありません。」祇介は姿勢を正してきつぱり答へて、

「實におはづかしい次第で…何うしたんですか、實際自分でも夢のさめたやうな氣持で……。」

「もう可いから歸つたら可いだらう。」

「は。ぢや、どうか是はこの場きりに。萬一に世間に知れた曉は、職務にも關しますので。」

「判つてをる。」

砥倉は何かさつぱりしないやうな氣持で、そこを出たが、暗いなかで、ちよつと肩を竦めて、泣面をかくやうな笑方をしながら、浮の空で道を歩いてゐた。それは勿論その場きりの咬かしであつたけれど、考へてみると、今日は不思議にさういつた氣分に、朝から頭腦が囚はれてゐたやうにも思へて、運が惡かつたのだとばかりは言へないやうな氣がした。そしてさう思ふと、いくらか諦めがつかないでもなかつたけれど、さうした氣分に支配されてゐたのが、既に不幸な廻り合せであつたのだと考へると、何れほど辨疏をしてみたところで、自分自身の潔白の立てやうがなかつた。

砥倉は何うしたら、平氣で家の閾を跨ぐことができるだらうかと、そんな事を考へた。おりんに對して、何時にかはらぬ優しい良人であるためには、出來たことは仕方がない、それを忘れてしまうより外に方法がないのだと思つた。だが、それを超越して一切を突きぬけてしまふだけの勇氣を持合せない以上、吭笛を締めつけられてゞもゐるやうな探つたい氣持が、いつ迄も除かれないであらう。たとひ時が少しづゝそれを薄らげてくれるにしても、痒い痛みが、永久に殘るであらう。それにあの警官の口からか、女の口からか、それが誰かに洩らされないとは、誰が言ひ得よう。思慮ありげな警官は洩す必要のないことを言明したのは事實だけれど、そんな氣休めが何の役にも立たないくらゐのことは少し狡い男なら誰にでも解り切つた事であつた。

「おりんにだけでも打明けてしまはう。さうしたら少しは氣が安まる。」砥介はさう思つたが、それが遠い過去のこととして、彼女の耳へ移されるならば兎に角、それが結婚して間のない自分の良人の身のうへに起つた現實だとしてみれば、悲しまないでも——斉つたれな此事件が彼女の悲しみとか絶望に値しないのは勿論で——皮肉な侮辱程度の不快を感ずるに違ひないのであつた。

醉ざめのせいもあつたが、砥介はひどく頭腦の過敏になつて來たのに苦しんだ。でも彼は自分の家を、今夜ほど有難く

思つたことはなかつた。

戸はまだ鍵を鎖されてゐなかつた。砥倉はおづ〳〵潜と格子戸をあけて入つた。そして息のつまるやうな思ひで、がち〳〵錠をさした。土間から中戸をあけて、茶の間へ上つて行くと、おりんは漸と起きた。

「どうしてこんなに遲くなつたんです。怪我でもしたんぢやあないかと思つて、聞きに行かうと思つたけれど、何だか頭痛がして……何んでもなかつたんですか。」おりんは言ふうちに、目がはつきりして來た。

「歸りに少し飲んでゐたんでね。」砥倉はさう言つて、鐵瓶に手をさはつて見て、湯を汲んでがぶ〳〵飲んだ。咽喉が粘着くやうであつた。

「昨夜は芝居で、今夜はお酒ね。」おりんは少し不平らしかつた。

砥倉は面白くなかつた。辛くも思つたが、腹立しくもあつた。そして子供のやうに泣きたい氣持になるのを、何うにか我慢してゐた。

近所で鷄が啼いてゐた。

## 五

翌日砥倉は一日氣が重かつた。まるで病人のやうであつた。

昨夜も歸りに途中で思案したやうに、あの事をおりんに話した方がいゝか、默つてゐる方がいゝかの問題が、今朝になつても矢張り決定しなかつた。善い惡いの問題よりも、孰が自分に取つて好い氣持だかといふことすら判らなかつた。懺悔は好いことに違ひないが、その事實が消えない以上は、やつぱり好い氣持になれる氣遣ひはなささうな氣がし

た。さういふ事を知つたおりんの氣持を考へるだけでも、苦しみが増しはしないかと虞れられた。

「一體これはそんな重大なことなのか。」砥倉はそんなことも思つて見た。餘り思ひ詰めるのが可けないのだとも思つた。

酒のせいで手足や頭腦が鉛のやうに重かつたが、いつも非番のやうに何時までも寢てゐる空もなかつた。何とか氣の安まるやうに始末をつけなければならないやうに思つた。彼はしぶ〳〵起きて、前を掃いたり、水を汲んでやつたりした。今朝は昨日よりは暖かであつた。野にも晴々した日が耀いて、不斷ならば本當に緊張した朝起きの幸福を感ずるのであつたが、今朝はそんな氣分になれないのが悲しかつた。

「昨夜は大變醉つてゐたんですね。」おりんは飯をよそひながら話しかけた。

「あゝ、づゐぶん苦しかつた。」砥倉は今も懺悔のことを考へてゐたので、ちよつと狼狽へて、いぢらしいやうな氣持で答へた。

「づゐぶん遲かつたこと。私起きてゐよう〳〵と思ひ〳〵、つひ寢てしまつて…。」

「醉つてゐたからあつち此方餘計な道を彷徨(うろつ)いたものだらうさ。」

「あんたがあんなお酒飲みとは思はなかつた。何うして又そんなに飲んだの。」

「しかし飲んだこともある。飲めば飲めると見える。」

「厭ね、お酒なんか、私大嫌い。」おりんは顏を顰めた。

「もう飲まない。懲り〳〵だ。」

砥倉はさうして話してゐる間は、いくらか氣が紛れたが、今日一日家にゐることを考へると堪らなかつた。

「今日はどこかへ行かうかね。」砥倉は不味つぽらしく飯をすましてから言出した。「山や海もまだ寒いし、どこか一日溫泉にでも浸つて來ようかね。」

おりんは不思議さうに彼の顏を見た。

「そんなに毎日遊んでばかりゐて何うするんです。顎が鍵にかゝるわ。」

さうしてゐるうちに砥倉は眠くなつたので、長火鉢の蔭で少し橫になつた。おりんはお茶を呑むと、飾臺の上を片着けはじめたが、「あんた寢たの」と聲をかけながら、押入から何か出して、そつと被せてくれた。

うつとりしてゐた砥倉は、枕に支つた肱のうへから細目を開いて見たが、意氣地なく目が淚で曇つた。その淚で胸の中の埃々したものが、いくらか拭取られるやうな氣がしたが、するうちうと〳〵と、甘い眠りに誘はれた。巡査の顏や、女の顏や、淺猿しい自分の姿などが出て來たりした。上等兵だと云ふ意識が昨夜も今も彼の心を脅かしてゐた。

午後は町の湯に行つたり、其の歸りに田圃道を步いて見たりしたが、その間も家のことが絕えず氣にかゝつた。誰か昨夜の事件を知つてゐようとは思はれなかつたが、誰かがおりんに報告に來てゐるやうな氣がしてならなかつた。

家へ歸つて見ると、果して下宿のお神が來てゐて、草餅など食べながら、火鉢の側で油を賣つてゐた。そして砥倉の顏を見ると二人でくす〳〵笑つた。砥倉もにや〳〵笑ひながら、出來るだけ氣を輕くもたうとして、わざと間へ割込むやうに坐つた。

「何か面白い話でもありますかね。」

「だから其を貴方に聞かうと思つて。」

「私に?」砥倉はちよつと首をぎつくりさせた。

「何だか此の頃は莫迦に陽氣だと云ふ話ちやありませんか。色女でも出來たんぢやないかつて、おりんさんが氣を揉んでゐますよ。」

「私に？」砥倉は顔を顰めて、「私がそんな柄かね。」

それから芝居の話などしてゐたが、砥倉は話がはづまなかつた。そして飯時分にお神が歸つて行くと、一層寂しくなつた。

その晩は早く寢たが、時々目がさめた。おりんは何か頼まれた縫ひものがあつて、遲くまで起きてゐた。

「あんた眠れないの。」おりんは砥倉の溜息を聞きつけて、不思議がつた。

「うむ。」砥倉は唸るやうに答へた。

「をかしな人。何うかしてゐるんだわ。何か心配があるんだわ。」

「さう見えるかね。」

「それ御覧なさい。昨夜なんか可笑しいんだもの。今日も一日ぼんやり考へてばかりゐて……。」

「何うして？」

「どうしても。」

「いや、實はその、實にばかげたことでね、それこそ話にも何にもならんやうな事だ。けれど、今は話せない。」

「聞かなくても判つてゐるわ。」おりんはしよげたのか怒つてゐるのか判らないやうな口調で言つた。

翌日砥倉はいつもの通り、早くから職務に就いた。そして何時もの通り、町から町を乘り廻した。

仲間の表情には、何のこともなかつたが、しかし同じ郡から出たゞけに、下宿時代から一番仲の好かつた、例の年取

つた運轉士と組になつたとき、何處かいつもの調子とちがつて、怒つてゐるやうに見えた。勿論砥倉は自分の顔の憔してゐることを知つてゐたが、それにしても少しむつとしてゐるやうに見えた。そして砥倉が何か話しかけやうとしても、彼の不機嫌な顔は、何うしても釋れなかつた。それは強ち今日に限つたことでもなかつた。むつちりしてゐるのは彼の持前であつたけれど、口髯の生えた唇の厚い口元に、どこか冷笑の影が浮んでゐた。

「今日は何だか馬鹿に運轉士不機嫌なんで……」砥倉は車庫へやつて來た時若い仲間の一人に言つた。

「あの人かい。」「人の好いその男等は微笑を浮べながら「何か不機嫌な理由があるのかい」と砥倉を見返した。

砥倉は帽子を取つて、額ににじんだ汗を拭きながら、お茶を汲みに爐側へ寄つて行つたが、そこにゐた三四人の表情が遽かに硬くなつて、默つてしまつた。砥倉は仕方なし默つてお茶を汲んで、窓際へ寄つて行つた。後ろでは誰かゞくすく笑つてゐるのを感じた。彼は冷やりとした。

「誰だい笑つてゐるのは。」誰かゞ言つた。

砥倉は平氣ではゐられなくなつた。不斷の冷やかしや揶揄とちがつた、或る皮肉と侮蔑がそこに感ぜられた。で、彼はそれを試すと共に婆げた自分の醜さを繕はうとして、誰かを捕まへて、話しかけようとして、入口の方へ出て行つた。

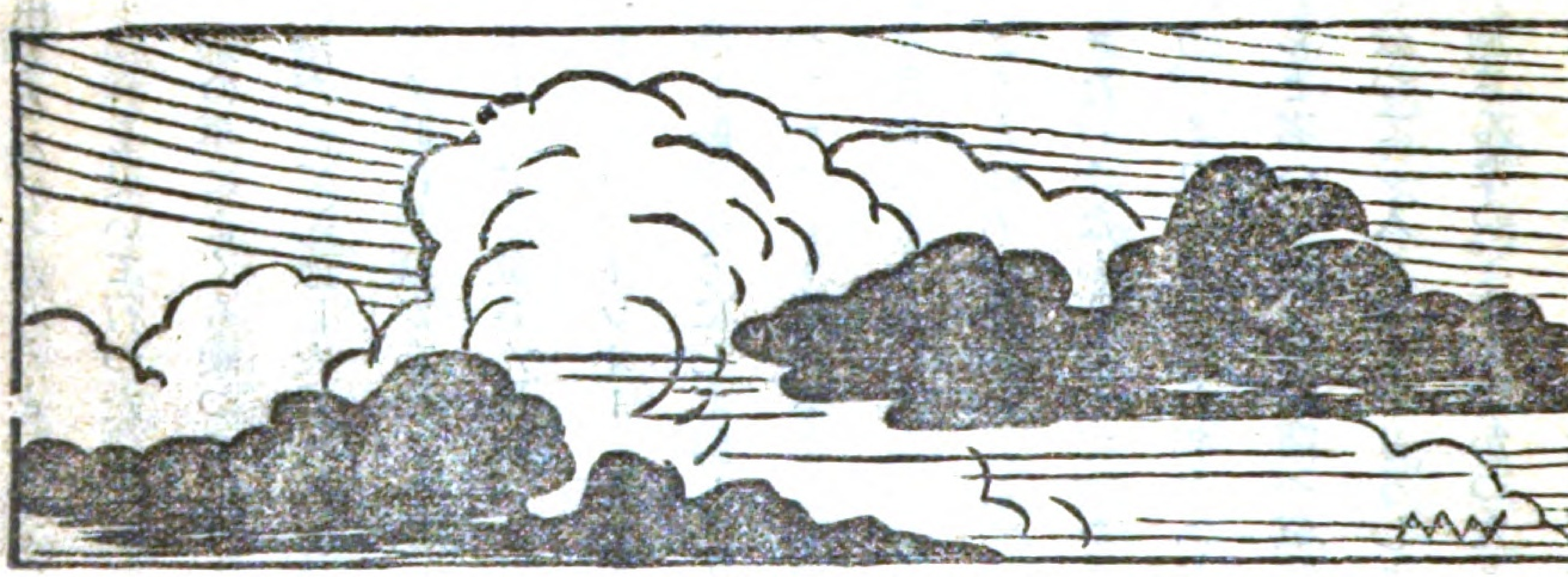
「何うしたい、しつかりしろい。顏色が惡いぞ。」誰かゞさう言つて、背をどしんと叩いて、横顏を覗いた。

砥倉は何か一言酬ひようとしたが、氣轉がしくじつた。

砥倉が猫入らずを呑んで死なうとしたのは、其から四五日もたつた或日の夕方であつた。おりんはちやうど買ひもの

に出てゐたが、歸つたときには、彼は水を呑うとして、臺所へ這ひ出して苦しんでゐた。勿論おりんは二三日前に、あの夜の出來事を夫の口から聞いたのであつたが、怒れも笑へもしなかつた。で、二人のなかは表面妙に凍ついてしまつて、何うにもならなかつた。勿論砥倉から言へば、同情も受取れたが悲しみも感じられた。

おりんは砥倉の苦悶を見ると、いきなり抱きすがつて泣いて謝罪つた。そして隣の神さんが見に來た時には、同じ藥を呑んだおりんの方が、もう口が利けなかつた。



# お加代

野上彌生子

『何處へやつたなんて、しとがぐるにでもなつてゐたやうなことを云はないで下さいよ。人聞きの惡い。私は實際奥樣の言葉を眞に受けてたんだもの。よねや、旦那樣から手紙でね、迎ひかた〴〵大阪まで來ないかつて云つて寄越したのだよ。暑いのに御苦勞樣だけれども、眞逆厭だとも云つてやれないしねえ、つて斯うでせう。誰が狂言だと思へますか。で、早速明けの日の夜行で立つと云ふので、行李だ、鞄だ、膝掛だ、新しい籐の手提だと大騷ぎをして、ぢや留守を賴むよ、行つてゐらつしやいまし、つてあの玄關から表へ曳き出す車の後を見送つた時だつて、これつぽつちも疑ぐりはしなかつたのですよ。ところが晩になつてさ、留守番には下谷の實家から來る筈だつて云ひ置いて行きなすつたのが、ちつとも來ないぢやないの。でもまだ私はあのぐうたら揃ひがいづれ呑氣に構へ込んでゐるのだらう。でなくも皆んなの留守をいいことにして、あの飲んだくれの親爺さんやたちの惡い兄弟達に主人顏をされるよりは、結句一人の方が氣樂な位で構はず寢てしまつたのです。でも幾ら何んでも明日は誰か知ら

顏を見せるだらうと待つてても、とうとうその日も音沙汰なしでせう。どうしたのか知らと思つてゐるうちに、ふつ奧樣を曳いて行つた伊勢兼の親方が、車と膝掛を返しに來た時妙なことを云つたのを思ひ出したのですよ。——え？旦那の車によくも乘つて行けたつて。——他の時とは違ふから遠慮するとでも思つたの。— そんな遠慮をする位なら駈落だつて遠慮したでせうよ。それに一つは伊勢兼の車も屋敷町の宿車のやうでもなく汚ないんですからね。家のが空いてた時に奧樣があそこの車に乘つたためしはこれまでもないぢやありませんか。でも、そんなことはまあどうでもいいとしてさ、兼さんはね、女の一人旅で大阪までと云つちや大變だと思つて、荷物の方を曳いて行つた店の若い衆と二人してプラットフオームまでちやんと見送つて來る積りにしてたのに、奧樣は待合室でもう歸つていいからつて、無理に押し歸すやうにして歸した上、荷物の世話まで、赤帽にさせるからつて手もつけさせなかつたのですつて。兼さんが歸つてわざ〱私にさう云つて話した位だから、餘程變な樣子だつたのでせうね。それを私はその時になつて思ひ出して初めておかしいと氣がついたのですよ。——そりやどうせ私は間拔だわ。でも幾ら何んでもそんな大それた事までしようとは考へなかつたんですからねえ。——だけども一旦さう思つて見れば全く疑なことばかしなんですよ。だいち大きな行李なんぞ持つて旅をするのは何より嫌ひな人が、今度に限つて鞄の外に一番の大型を二つまで持ち出したんでせう。あれだけの容れ物があれば大抵の物は入りますよ。私は奧の三本の簞笥はもうがら空きになつてるのぢやないか知らと考へたら、實際薄つ氣味が惡かつたわ。で、若し本統にそんなことだとすれば斯う凝つとしてもゐられないし、と云つて一人つきりでどうしようもなく困つてたところへ、夕方ひよつくり見えたのが、この春までお玄關にゐたあの布施さんなの。まあよかつたと思つてね。樣子は知つた人なり斯う〱だつて皆んな話したら、およねさん、そいつあお前さん一杯食はされたね。先生が今奧樣を大阪まで呼ぶなんてそんな呑氣な場合ぢやないつて云ふぢやありませんか。

ぢや矢張しさうなんだと思つた時には、私はつく〴〵奥樣が憎らしかつた。假令どんな譯があつたにしろ、斯うまで念入りな瞞し方をしなくもいいと思つてね。さうですとも、何も私が番犬見たいに一から十まであの人のする事を見張つてたわけぢやなしさ、却つて見ても見ぬ振りに通してやつてたのに、餘り非道いんですもの。而かも幾ら渡して行つたと思つて。五圓のお札でたつた一枚きり。この節ぢやどこの店にもお拂ひがたまつてゐて、通ぢやいい顏をしないんですからね。下谷のお父さんにでも泊まり込まれて、毎晩々々酌でもされて御覽なさい。それつぽつちぢや全く三日のお小使にも足りやしない。それで云ひ草がいいぢやありませんか。大阪へ着いたら旦那にさう云つて直ぐ送つてやるからつて。ふん、どこの大阪から送る積りなんだと思つて腹が立つたわ。でもさうやつて怒つてゐたつて仕方がないから、私は夜の明けるのを待ち兼ねるやうにして、朝から留守番に來て貰つた布施さんに後を賴んでおいて下谷まで行つて見たんです。どんな親兄弟にしろ斯うなりや大事な相談相手だし、今一つには留守番のこともあゝ云つてたのだから、何か話して置いたこともありはしないかと思つてさ。ところが留守番なんか賴まれたこともなし、大阪へ立つといふことさへ知らないと云ふ始末だから驚きませう。最初は私もあの人達のことだから、行李の一つも預かつててしらを切つてゐるのぢやないかと疑ぐつても見たのですが、矢張し本統に知らないらしいのです。あそこでもお父さんだけは意久地なしの酒喰ひでも、そんな嘘まではつかない人のやうですからね。一人で心配して、私の歸る時も一緒に來てくれて、布施さんと相談して、あの電報を打つたのです、初めは大阪の旦那の定宿へ打つて見たのださうですがゐる譯はありませんさ。——相手は誰かつて？そんな尻つぽを私たちに安々と押へさせるやうな奥樣だかどうだか、考へて見りや分るでせう。それにあんなのが本統の浮氣者つて云ふのか、絶えず相手が變つてるらしんですもの。その度にいち〳〵男の詮議立てをしてたまるものですか。馬鹿々々しい。まあ私には出來ないわ。だから今度でもどんなに毎日出步かうが、夜

遲く歸らうが、また一と晩位泊まつて來ようが、例の持病が始まつた位の氣で知らぬ顏をしてゐると、そりや圖々しいですからね。——根城ですか。さあ、よく溜池の家へ行くと云つちや出掛けたから、それが嘘でなけりや、ほら何んとか云つたつけ、昔同じところから出てゐて、今では大きな請負師のお妾さんになつてゐる人の家ですよ。でなくたつて奥樣の元の友達ならどうせ堅氣な人はないんだから、どこの家へ行つたつて遊び場所に事は缺きませんさ。——でもね、私に云はせりや今度のことばかしは奥樣も魔がさしたんだと思ひますね。だつて、もう三十ぢやありませんか。今日まで辛抱して來てさ、どんな相手にしろ、本氣に家を飛び出すなんてことがあるもんですか。それに幾ら浮氣をしようと我儘をしようと、これまでは旦那樣だけにはちやんと盡すことは盡すと云ふところのあつた人なんですからね。それだのにとうとう斯んなことをしでかして、本統に人までいゝ迷惑だわ。』

およねと新吉が久しぶりで彼等の四疊半にさし向ひになつた時、何より熱心な話題となつたのは云ふまでもなくこの事件であつた。以上はおよねが同じ日に彼女の主人に報告したよりは委しく露骨であるだけ、一層正確な顛末だと云つてよかつた。自分は何處までも女主人に瞞されたのであつて、彼女の今度の不都合な行爲には何等の關係もないと云ふ辨明にも嘘はなかつた。併し嚴密に批評すれば、およねの傍觀者としての態度はどうかすると餘程共犯者に近いものになつた。それはお加代に就いて抱いてゐる彼女の平生の矛盾した感情が——薄情を怒る氣持と、美しさを賞讃する心と、それ程の美しさであんな身體の人を夫にしてゐると云ふ點に對する、女らしい無意識な憫みが——斯んな場合にも同じやうに働いてゐたためであつた。それ故およねは女主人の放埒を心から非難しながらも、毎日着飾つて出歩く彼女の美しさをば憎むことは出來なかつた。寧ろそのために朝湯を沸かしたり、髮結ひの家へお百度を踏んだりする用事がなかつたら、長い退屈な留守居の間、日のたてやうがなかつたかも知れなかつた。殊にいつもは滅多に手もつけさせない箪

笥の中の物の出し入れを命じられたり、着る物や締める物の相談を受けたりすると、何事も忘れて生き〳〵した樂しみを感じた。お加代は御機嫌取りに時にはそんなこともしたのである。反對にまた着換えの時と云ふとよく肝癪を起こして、衣紋の直し樣が惡いの、帶の締め方が足りないの、裾をものと引つ張れの、何んて氣の利かない女だらうの、と散散口小言を云つたのだが、それだつておよねは不斷外の事で云はれるより腹が立たなかつた。どんなに八釜しく云はれても、結句それは面白い手傳ひであつたから。で、やつと支度が出來上ると、お加代は今一度姿見の前に立つて頭の上から足の爪先まで冷靜に檢査して見る。その時、

『この着物には矢張しこの帶が一番だねえ。』

およねさんのお見立ほどあると云ふやうな輕口でも出れば餘つ程上機嫌な日であつた。大抵は默つて鏡を離れ、默つて玄關へ歩いて行き、自分の容貌を信じ切つた女一流の刻薄な氣取り方で、默つてつんとして家から出て行くのを、およねは呆れながら、而してまたその美しさに壓せられながらぼんやり見送るのが常であつた。――家出の最後の日までさうであつた。

併しこの不幸な出來事も今の場合の準造に取つては不思議にも無益とは云へなかつた。寧ろこの意外な打擊は、彼が故鄕から持つて歸つた精神的裂傷の上に新しい一刀を加へ、生中の優しい慰撫や同情では決して癒すことの出來なかつた絕望と悲痛に對して、また生理上の甚だしい疲勞困憊に對して、大膽な外科手術を施したことになつた。彼の力は咄嗟に甦へつた、而してそれが持ち前の病的な熱情となつてお加代の搜索に集注された時、過去二ケ月間の辛酸の記憶は容易に彼から去つた　彼はあらゆる事を忘れて仕舞つた、何事をも考へなかつた。ただ遁げて行つた女を今一度自分の手に取り戻さうとする一念以外には、――彼は嫉妬をさへ感じなかつた、その極端な例は、新吉がお加代の相手の男を探し出

して來た時の彼の態度に最もよく現はれた、新吉はその男が古澤某と云ふ、溜池の家へ出入してゐた洋畫家であるらしいことやら、それならば年は幾つ位で斯う〳〵と少しは手柄話の氣で委しく報告しようとするのを、準造は冷淡に遮つた。

『それで手懸りはあつたのか。どうだ。──必要な事はそれだけだ。──さうとも、そんな青二才のことなんざどうだつてよろしい。おれはお加代が、、、、ちんころを一匹連れて行つた程にも問題にはしてゐないんだ。』

その内に準造のまわりにはいつの間にか車夫、書生、出入の壯士、以前彼の世話になつたもので、今は何かの失策で職を離れてぶら〳〵してゐる中年男と云ふ風なものから一隊の搜索團が出來上つてゐた。而して彼等は、お加代が決して東京を離れてはゐないと信ずる者と、いや、何處か近くの遊び場所に隱れてゐるに相違ないと主張するものとの二派に分かれてゐた。併しどちらをどう探すにしても先立つものは金であつた。準造は故鄕の最後の晩に次兄から贈られた千圓束の包──あの苦しく腹立たしく忌々しい、投げ返しても矢張り仕舞ひには貰はないではゐられなかつた運命の包に、今は何等の苦悶なしに手を觸れ、懸け換えのない資本、彼に今一度新たな將來を約束する唯一の認可證たる札びらを、その怪しげな搜索隊の辨當代、車代、汽車代、乃至酒代、煙草代として惜しげもなくばら蒔いた。

彼は夜もおち〳〵眠らなかつた。一人寢になつて廣々としてゐる彼の奧座敷の蚊帳からは、時ならぬ眞夜中の暗に一つの赤い灯の點がぽつちりとよく浮いてゐた。目を覺ましさへすれば床の中でも巣捲を放さぬのは彼の癖であつた。時によると彼はとうとう床から出て來て、怒つたやうに一人言を云つたり、苦しげな短い唸き聲をあげたりしながら、廊下を行つたり來たりして步き廻つた末、雨戶の上の明り取の硝子がやつと白むのを待ち兼ねるやうにして、家ぢうの者を呼び起こした。

『新吉、起きろ。──起きて車の支度をしろ。──布施君、布施君、起き玉へ。──そつちの連中を皆んな起こしてく

れ。――さあ、出掛るんだ。愚圖々々してちや駄目だぞ。」

そこらの部屋に、ごろ／＼といつとなしに泊り込むようになつてゐた搜索隊に取つては、こんな朝ほどやりきれないことはなかつた。併し準造の異形な身體全體から迸り出るやうなかん／＼した命令には、人々の不從順を許さぬ不思議な威厳があつた。彼等はぶつ／＼云ひながら、何處へ出掛けるのだか、また何をさう急ぐのだか分らないながらも、兎に角飛び起きる。それからやつと顔を洗ふか洗はないかに、もう玄關では新吉に車を促し立てる主人の嚴めしい聲が響き渡つた。――準造自身だつて何處へどう行くのか、何故さう急ぐのか知りはしなかつた。彼はただ凝つとして分らぬ女の行衛を考へてゐるに堪えなかつた。勿論また警察なんぞに任せきりにしてはゐられなかつた。何處でもよい、せめて車で駈けずり廻つたり、人を八方に飛ばしたりしてゐれば、何んとなしに彼女の所在に近づき、行衛も見出されそうな氣がするだけであつた。同時に彼自身の想像はお加代が東京に隠れてゐる説の方へ傾いてゐた。どんな場合になつても彼女が田舎で暮されやうとは思へなかつた。殊に派手な遊散地は、海でも山でも今は一番人目のうるさい時期であつた。それをも憚らず、否却つて避暑客の充滿の中に紛れ込まうと企てたにしても、長く續く筈はなかつた。お加代は金を持つてゐないから。幾ら工面しても高の知れたものだから。男の方だつて、古澤ならお加代を贅澤な避暑地の宿屋に泊まつて置く程の金持では（人々の探したところでは）なかつたから。――お加代を一月以上も探し出せなかつたのは、重にこの違算のためであつた。

お加代は思ひがけもない場所にゐた。

彼女の周りには何處にも山があつた。皆んな信州の山々であつた。目の前に迫る最も近い一つの山は、三合目位から

急な傾斜面に添うて一帶に落葉松が生え續いて、麓に下ると共にそれは疎らな明るい林となり、その前の低い水草に蔽はれた濕地と、それに連なる一つの曲玉なりの小さい沼に對して、美しい背景を作つてゐた。今お加代が古澤と二人の隱れ家として住まつてゐるのは、この沼の端にただ一軒立つてゐる鯉飼の家であつた。

この家とこの附近の景色は、數年前、古澤が其處から三里ばかり上の△△△溫泉に來てゐた間に見つけ出したものであつた。それ以來彼は沼と落葉松の林を描きに來る度に、もう溫泉の宿には泊まらないで、眞直ぐにその家に畫具箱を投げ出す程懇意になつてしまつた。而かも若い畫描きの即興的な氣紛れから、とんでもない時に出し拔けに飛び込んで行くのが常であつたから、今度のやうに女連れで不意に出掛けても、家の者は彼が一昨年の眞冬の晩、ひどい吹雪の中を半分死にかけて轉がり込んだ時以上に驚きはしなかつた。その上、この家は隱れ家としての條件には最も適してゐた。あたりにうるさい人目のないのは勿論として、其處に住まつてゐるのも年寄夫婦に孫に當る男の子と、それに鯉飼の手傳ひと漁師を兼ねた目つかちの下男がゐるきりで、後の若い者たちは山の下の本家で百姓をしてゐたし、その割りにしては家が廣くつて、殊に古澤がいつも泊つて行く二階の六疊は、邊鄙な山の中としては風變りに出來てゐた。

『まあ、斯んな部屋があらうとは思はなかつた。』

初めて鯉飼の家に着いてその一間に案内された時、お加代は一番にそれを云つて意外だと云ふやうにあたりを見廻はした。それは唐紙と壁とで出來上つたちよつと納見たいな部屋であつたけれども、沼に面した一方に十分大きな窓が取つてあるので、明るさに不自由はなく、且つ餘計なものがないから小さつぱりしてゐた。窓には珍らしく硝子戸さへ嵌まつてゐた。お加代はこの部屋はもう亡くなつた鯉飼の老人の息子が自分の好みで建てたので、その養魚事業だつて、彼が東京の學校から身體を惡くして歸つた後に始めたものなのだと云ふことを古澤から後になつて説明されるまで

は、斯んな家に何故斯んな部屋があるのか分らない位であつた。

『下にゐるあの小さい男の子がその人の子供なんだ。』

『ぢやおかみさんまであつたのね。』

『それが土地の者ぢやなくて東京から連れて來た女だと云ふので、兄貴連と折合ひが惡かつたんだ。それに先生にはもう百姓なんぞ出來やしないしするから自分の貰ふだけのものを金にして、此處で鯉飼を始めたんださうだが、話を聞くとちよつと面白い男らしい。何しろ爺さん婆さんはどの息子よりもその男が可愛かつたんだね。だから墓守をする氣で、自分たちが無事な間は決してこの家は人手には渡さないと頑張つてゐるんだ。』

『だけどもおかみさんはどうしたの。子供まで出來たのに――』

『さうさ、子供まで出來た。それも苦勞してやつと一緒になつた男の子供だ、それに――』

此處で男は言葉を切つて、その濃い眉の下に並んだ特長のある黒瞳と、締りのよい左右の唇の隅とで皮肉らしい微笑を作りながら、凝と女の顔を見据えて念を押した。

『話してもいいかい。――怒りはしないね。』

『何故？』

お加代は優しい、が、咎めるやうな目で彼を見返した。古澤が斯んな顔つきをしてものを云ふ時には、屹度何かお加代の厭がるやうなことか、腹を立てるやうなことより外に云ひはしなかつたから。――でも彼女は怖れはしなかつた。

『なんだつてお話しなさいよ、私に關係したことぢやあるまいしさ。』

『大に關係した事なんだよ。君ばかりぢやない、女性一般に――いや僕等二人に最も關係があるんだ。聞き玉へ。――そ

のかみさんはね、亭主が亡くなつて半年もたつたかたゝないに、その大事な子供を置き去りにしてゐなくなつた。温泉の宿屋に手傳ひに行つてゐる間に新たに知り合になつた男と逃げたのだ。——僕等と同じことをやつたのだ。』

『それが云つて見たかつたのね、——あなたと云ふ人は。』

お加代は彼の膝をつねつた。而して自分の殘忍な言葉とその結果に興ずるやうに悠然と笑つてゐる男の横顔を、今度は露骨に憎みながら云ひ續けた。

『だけどもお氣の毒樣、それとこれとはちつとばかし話が違ひますよ。少くとも私は誰と駈落ちしようと何處へ逃げようと、義理の悪い思ひをする人はゐないんですからね。それこそ自由なものだわ。』

『お加代さん。』

男ははつきり名前で呼んだ。彼の顔にはもう笑ひはなかつた。

『君が横井さんのことを何んにも考へようとしないのは間違つてゐる。』

お加代の頬には幽かに血が走つた。が、一瞬間でそれが消え去つた後には彼女は幾らか青ざめて見えた。

『ぢや横井のことを私にどう考へろと云ふんです。——長い間世話になつてゐながら、斯んな不仕だらな眞似をして濟まないとでも思へばいいの。あんな片輪者だから置き去りにしては可哀想だとでも云へばいゝの。それならどちらが可哀想なんだか考へて見て下さいよ。あの人と私と。——十九の春からこの年まで、私があの人の側でどんな思ひをして暮らして來たか、それが分かりさへすれば——いいえ、男のあなたには分かりはしない。』

兩方の眼の中には、丁度醫者がスポイドで眼藥をさした時のやうに、透明な涙がぽつちりと一滴づゝ浮かんだ。けれどもお加代は泣かなかつた。小さい瞬きでそれをはふり落したきりで凝つと咽喉を堅くして默つた。

古澤は斯んな場合に現はれるお加代の不意な可憐な姿をいつも非常に美しいと感じた。彼女の深い歎きの意味も道理と思はないのではなかつた。にも拘はらず彼は此處で一般の戀人たちがするやうに、優しい慰めや氣休めで女を甘やかすことは出來なかつた。却つて續きの辛らい話を押し進めて、相手の惱みや怒りを一層そゝのかし立て、同時にそれと結びついて自分を苦しめ、且つ醉はせてゐる現在の忌ま〳〵しい快樂に對して、出來得るだけ冷酷な鞭を加へ、その本能を裂き、血塗れにして見ることに不思議な誘惑を持つてゐた。

『併し、何んと云つても最初あの人を拒絶し通さなかつたところに君の責任がある。はたでどんな手段をめぐらさうと、君さへその決心なら、強ひて片輪の男と一緒にならないでもすんだ筈だからね。――世間によくある話だが、亭主から離婚しようと云ふ女が私の結婚は出發點から間違つてゐた、私は行きたくもない男のところへ無理矢理に遣られたのだと云ふ。僕に云はせりや凡そ天下にこの言葉位無責任な言葉はないと思ふね。無理矢理にやられたつて何も頸つ玉に荒繩を結びつけて引つ張つて行かれた譯ぢやなからうし、結婚の紋付に自分で片手でも通した以上、それがもう一種の承認だと見てよい。だからそれだけの責任は何處までも持たなくちやならないんだ。』

『あなたは、その時の私を何處かそこいらのお孃さんと間違へてゐるのね。』

お加代は綺麗に涙を止めて、今度は顏一杯に嘲りを浮べた。而して落ちついた聲で自分がどうして横井に引き取られるやうになつたかの行きさつを話し出した。お加代が初めて彼に逢つたのは新橋からやつと出たばかりの時で、その頃一番羽振りのよかつた横井がよく大勢の友達と遊びに來た。けれども女達は初めから彼の不具を馬鹿にして相手にもしなかつた。横井自身もまたそんな遊び場所には馴れないで手持ち無沙汰にぽつねんとしてゐるのが、丁度出たばかりで馴染客もなく、その上子供から土地で育つた朋輩なんぞの間で氣苦勞をしてゐたお加代の淡い憫みを買つた。彼女は唯

も彼の前に坐らぬ時に坐つてやつた。誰もお酌をしない時に彼の盃を充たしてやつた。

『だから若し私にあなたの云ふやうな責任とかがあるんなら、そんな子供つぽい氣紛れをしてやつたと云ふことにあるのよ。たゞそれだけだわ。――さうですとも。その他は皆んなして寄つてたかつて、それこそ頸に荒繩を結びつけたよりも、もつと非道いことをしてあの人のところへ引きずつて行つたのですからね。私に爪の垢程の責任もありはしない。――いいえ、よしんばどんな責任や義理があつたにしても、もう帳消しになつていい筈だわ。女の大事な十年を私はあの人のために棒に振つてしまつたんだもの。それともあなたは私を生涯あの人の側へくつつけて置いて、一緒に爺さん婆さんになつたところを見て笑ひ度いとでも云ふの、――全くね。さぞいい見物でせうからね。』

『どうして、君にそれが出來たら、僕は心から尊敬するよ。而して今より十倍も君が好きになるかも知れない。』

これは嘘で、また本統の言葉であつた。而かもその完全な意味は云つた本人よりもお加代の方に何ほとよく分つた。

彼女は窓を後ろにして坐つてゐたその華奢な膝を、くるりと隣りに並んでゐた男の膝に寄せかけると、其處にあつた左の手と、窓がまちに突いてゐた右の手を一緒に引つたくるやうにして自分の兩手の中に握り締めながら、激した、でも決して怒つてゐない。寧ろ惘みと愛に飢え切つた顏を、古澤の厚味のあるつんとした鼻の前にさし突つけた。

『よく〳〵邪険に出來てゐるのね、あなたと云ふ人は。斯んな山の中へ來てまでも――』

が、後は男の熱した脣で封じられた。お加代のこれらの怨言に對しては、彼はいつも外に答へ樣を知らなかつた。

男は元氣さへよければ畫具箱をかついで出掛ける。女は最初はもの珍らしさに遠くないところだと附いて行つて見たが、仕事にかかると彼女のことなぞてんで構ひつけもしなくなる男の冷淡に呆れてから、而してそれに就いて一度喧嘩

をしてから、それ以來幾ら誘はれても決して行かうとはしなかつた。これは彼女の意地つ張のみではなかつた。誰の分らぬお加代に取つては、カンヴアスの上にただ譯もなく落されて行くやうな畫具を見てゐるために、半日以上も默つて、存在をさへ忘られてその側にくつ附いてゐることは、どんな男の側であるにしても、退屈でないとは云へなかつたからであつた。それ位なら自分の顏を鏡の底にぢつと眺めてゐるか、手束ねになつたこの頃の黒髮を氣永にいぢり廻して見る方がずつと暇潰しになつた。その中に感じる彼女の滿足は、吉澤が彼のカンヴアスの上に感じる藝術的法悦と相通じるものでさへあつた。同時に二人の根本の相違は、男が仕事に女を忘れ得るに反して、女はどんな瞬間にも男を忘れてはゐないことであつた。お加代は時に依ると何もかも夢のやうな氣がした。斯んな娘のやうな戀心で一圖に男に引きつけられてゐる今の氣持だつて、思へば不思議であつた。而かも其處に來る一月前までは、そんな人がこの世界に生きてゐるかどうかさへ知らなかつた。その一月の間だつて、二人が出逢つた日は數へるほどしかなかつた。

一體にこの夏はお加代に取つては餘り樂しい夏ではなかつた。少くともおよねが想像した程浮氣はしてゐなかつた。春の末、今まで一年ばかりも秘密に逢つてゐた相場師の男が、柳橋から出てゐる若い女のために彼女を見換えたと云ふやうな出來事があつてからは、お加代は自分の魅力に就いてかすかな疑惑をさへ抱きはじめた。あと百日もすればもう三十だと云ふ年も情けなかつた。

『私はとうとうこの片輪の側で一生朽ち果てるのか。』

この思ひほどお加代に取つて果敢ない嘆きはなかつた。でも彼女は負けてはゐなかつた。その鎖と戰ひ、抑し切らうとした。今日までの數々の男との關係も、而してその度に平常のお加代とは別人のやうな素人じみた逢ひ方をするのも、云つて見ればこの遣瀨ない焦慮の現はれに過ぎなかつた。でも結局彼女は失望した。どんな相手も鎖の中まで踏み込

んで彼女を救ひ出さうとする程親切ではなかつたから。お加代は半分興ざめた皮肉な氣持であたりの男を見廻はした。

溜池の家へ行つてもこの夏は重に花ばかり引いてゐた。

或る暑い午後、珍らしく五六日行かなかつた後でその家を訪ねると、女友達のお濱は旦那と海岸へ行つたとかで、留守居の婆やが一人、勝手口に通ずる柴折戸の横の大きな石の井戸で洗濯をしてゐた。

『おそくも昨晩は歸つてゐらつしやる筈になつてゐますのですが、どうなすつたかまだ。』

『ぢや、今に歸つたらうんと香らしてやるわ。ねえ、婆やさん、二人でさんざ面白い目を見て來たのだもの。』

お加代は斯んな冗談口と共に日除の青桐の下を離れながら、一緒について上らうとする年寄を押し止め、自分だけうちの者のやうに濟まして家へ入ると、茶の間には通らないで玄關から眞直ぐに奥の離室を志した。たとへ女主人は歸らないにしても、花友達の一人二人その内に顔を見せない筈はなかつたから、彼女はその涼しい小部屋で待たうとしたのであつた。けれども行つて見て喫驚して引き返した。

『婆やさん、ちよいと』

お加代は少しあはてた聲で台所口から井戸端へ呼びかけた。

『離室はお客樣？どなたか男の人がゐるぢやないの。』

『さう、さう、つい浮つかりして。──』

注意もしなかつたことを婆やは濡れ手をするやうにして詫びながら、客は女主人の身寄の甥家で、先刻からおかみさんの歸りを待つてゐるのだと說明した。

『へえ、聞いたこともないねえ。これまでもちよい〳〵見えてた人？』

『いゝえ、ほんのこの節でございますよ。二三度もお見えになりましたか。』

『どうりで。』

男は四疊半のまん中に無造作な洋服の肱枕で、床の間を向き、紫陽花の咲いた小庭の方を頭にして、氣樂さうに長々と晝寢をしてゐた。(小さい横井の寢姿を見馴れたお加代には、どの男でも背の高いのが一番目についた。)最初何氣なく覗いた時の一瞥で、お加代はその見知らぬ客がこの家に出入りしてゐる他の人々とは別種類の人間だと云ふことを見て取つた。で、その儘台所から茶の間に入つて、簞笥の上に女主人の留守の間の日數だけ綺麗に疊んだまゝ重ねてあつた都新聞を一枚下ろして、火の氣のない長火鉢の横に坐つて見たが、その内に後の壁の高窓から射しつける西日が、今日に限つていつもの何倍か暑く感じられた。お加代は新聞をおいて、部屋の惡口を云ひながら、立ち上つて柱から團扇を一本取る序でに、上の時計を見た。

『もう四時を過ぎたのに。』

でも、お加代は、まだ歸つて來ない女友達のことを考へたのでもなければ、花仲間の集まりやうの遲いのを怪しんだのでもなかつた。

『あの人はいつまで眠る積りなんだらう。』

彼女はそれを氣にしただけであつた。同時に何處の誰とも知れない一人の男のために餘計な心配をしてゐる自分を自分であざ笑ふ氣にもなつた。この頃の心持から云へば殊にこれ程馬鹿げたことはなかつた。にも拘はらずこの一事は彼女の意識から離れなかつた。と、暑い部屋が一層かつかするやうで堪らなくなつたので、お加代はとうとう新聞と團扇を持つたまゝ茶の間を出て、次の座敷も二階の二間も、暑さでは茶の間に劣りはしないと極めることに依つて、正當に

今一度離室に行く口實を拵へた。

男はまだ眠つてゐた。寢返りをしたと見えて、今度は床の間を後にして稍仰向き加減に寢てゐるので、下手の瀬戸の蔭に坐つたお加代からは前よりもはつきり顏を見ることが出來た。稍長目な線の正しい顏であつた。髮も眉も、穩かにつぶつた左右の瞼を緣取つてゐる睫毛も、鼻の下の短かい髭も、際立つて濃かつた。これ等が白い額や頰に與へてゐる特殊の効果が、その顏の重なる美しさであつた。が、たゞそれだけの美しさでこれまで何人の男の顏を見て來たか分らない、恐らくまたその何倍か美しい顏にも見馴れた女を引きつけることは出來なかつた筈であつた。然かもその瞬間のお加代には、今まで見たどの男の美しい顏よりも、目の前の初めての顏に心を捕へられた。男が目を覺ますのが待ち遠しかつた。どんな優しい目をしてゐるか見たかつた。それよりも、どんな目つきで自分を眺めるか、それが一層見たかつた。お加代はこちらで意識して男の顏を見た時に、相手を滿足させ得なかつた例はこれまでになかつた。でもこの知らない眠つた人は。——彼女は彼が珍らしく勝手の違つた相手で、自分なぞには目もくれないやうな態度に出はしないかと云ふ怖れと共に、一方にはまるで反對な、二人はもう長い間知りあつた中であり、今日も自分の來やうのおそいのを待ち疲れてうたゝ寢してゐるので、呼べは直ぐにも飛び起きて來る男のやうな感がしてゐた。後の考へ方は前の考へ方よりもずつと嬉しかつたから、お加代は强ひてもさう思はうとした。と急に大膽になつて、勝手の分つた後の押入から籐の小枕を取り出して、坐つたまゝ側にいざり寄ると、左の手で男の後頭部を支へ、隙間の出來た頭と腕の間に右の手の枕を當てがつた。頭と手が離れた瞬間、男は無意識に安定を失つたと見えて、うす目を開けさうにしたが、その暇もなく枕がそれを取り戻させた。十數分の後、遂に二三人の花友達が寄つて來た。お加代は彼等と二階で一緒になつた。一と場がすむとちよつと下りて見た。離室にはもう誰もゐなかつた。お加代はその日ひどく負けた。けれども夜

に入つて待つてゐた女主人が海岸から歸つた時にはその損失をも忘れてしまつた。珍らしい晝寢客のことが皆んな分つたのである。名前から、年から、(それも二人は同じ年であつた)郊外に畫室を持つた呑氣な獨身者で、血から云へばお濱とは近い親類なのだが、こちらの境遇上今までは往來もしなかつたのに、今度彼が持つてゐる親讓りの借家を賣るについて、偶然にも旦那の請負師が世話をすることになり、そんな用事で近頃は此處にも來るのだと云ふことまで。その次二人が同じ家で落ち逢つた時には、女の方には二度目に見る男であるに反して、男には初めて出逢つた女であつた。ましてこの女がいつか一時間近くも自分の枕許に坐つてゐたとは夢にも知らなかつた。この變な縺れは二人を氣安く結びつけた。お加代が彼の怖ろしい寢坊を笑ふと、古澤はまたあの枕の堅かつた惡口を云つた。而して云ひながら刺すやうに見詰めてゐた彼の目に、お加代は待ち設けてゐた以上のものを見た。

古澤も頓て女の素性を知つた。而して知つて尚踏み止まることが出來なかつた時から、その若い畫家には愛と憎みが同時に始まつた。彼はお加代の美しさを嘆美すると同じ度合でその不貞を輕蔑した。自分に打ち傾けてゐる心の眞實を知れば知るだけ、その恥知らずが責め度かつた。それと共に憎んでも輕蔑しても責めても尚ほ突き放すことの出來なくなつた、却つてその忌まはしい關係に依つて、不思議に甘い惑亂の中に引き込まれて行く自分自身が何より先に腹立たしかつた。その意味から彼が女を憎み、輕蔑し、責めることは、彼自身を憎み、輕蔑し、責めることであつた。彼は怖ろしく皮肉になつた。どちらに對しても。——寧ろ二人の關係に對して。彼は相手を愍むべき時に冷笑し、吸ふべき唇を嚙み、撫ぜる代りに打つた。お加代はこれ等のことが彼のどれ程深い心の惱みに根ざしてゐるか分かりはしなかつた。ましてこれに依つて自分が初めて人間らしい戀人の取扱ひを受けたのだと云ふやうなことをはつきり意識することは出來なかつた。けれども何をされても彼のする事にはまつ直ぐにお加代の胸に突き入る或る物があつた。これは彼女

の若い肉體が幾つかの紙幣束との交換で叔の手から人の手に賣渡されて以來、何人の男に出逢つても、また十年近くも夫同樣にして暮らしてゐる男からでさへも、決して受け取つたことのない不思議な感銘であり、哀れなさすらひ人としての心靈が久しぶりにその前に見出した故郷の食物であつた。お加代は食べて見てどんなに自分がそれに飢えてゐたかを知つた。

お加代の夢中になり方は、いつも斯んな場合には好意の沈默で見てゐる友達のお濱に、何か云はなければならないと思はせた程であつた。

『お加代ちやん、あんまり深はまりはしないがいいわ。お前さんのやうでもない。今度は餘程どうかしてゐるよ。』

『本統にどうかしてゐるのよ、屹度。私にだつて自分の氣が知れない位だもの。――何故あの人が斯う可愛くなつたのか、考へたつて分らない、たゞ、可愛くつて可愛くつて、死ぬほど可愛いばかりなんだわ。』

『だけどね、あの人のことなら子供の時分のことだけれども、お前さんよりは私の方がよく知つてる積りですよ。そりや生一本ないい氣象の男には違ひなからうけれども、それで何處か氣紛れなとこのある變人だわ。だからお前さんたちが二人でさうやつてのぼせ上つてゐるのを見ると、私は危なかしくて仕樣がありはしない。』

『まさか、心中もしやしないから安心しておいでなさいよ。』

『そんな氣樂なことを云つたつて、横井さんもその内にはお國から歸つていらつしやるんだらうしさ、古澤にしても、いつまで日本にゐられるんでもないぢやありませんか。』

お加代は娘のやうに眼の中の熱くなるのを感じた。古澤が家まで賣つて得ようとしてゐるその金は、彼の洋行費だと云ふことをお加代はもう知つてゐた。けれどもそんなことがどうして考へられるだらう。――彼は決して自分を捨てて

何處にも行く筈はない。きつと留めて見せる。——お加代は斯う信じようとした。それでも聞かないで行くとしたら、——フランスでも何處でもよい、自分も後に殘りはしない。お加代は地の果まで彼について行かうと思つた。その決心の前には横井のことなど問題ではなかつた。寧ろ彼との間に繋がれてゐる苦しい鎖も、今こそ斷たれるであらう。その時が來たのだ。古澤がそれを作つたのだ。この時とこの人を措いて、自分を救ひ出してくれるものはない。——お加代は順序立てて斯う思ひはしなかつた。否、斯う思つてゐる自分を自分では知らなかつた。

山に着いた最初の晩、お加代はふと氣狂のやうに激しく泣き出して古澤を喫驚させた。

『何んでもないんですよ。——心配しないでいゝの。——ぢつと斯うさしといて——』

涙と咽び聲の中でやつとこれだけを云ひながら、お加代は男の膝に取り縋つたまゝいつまでも泣き續いた。彼女はうれしくつて泣くのだと思つた。思ふ男と一所にやつと自由な世界に辿りついた勝利の凱歌なのだと思つた。併し同時にそれが、長い間の鎖、足枷手枷に對する囚人の流石に優しい左様ならであつたとは知らなかつた。

十月に入つて早い霜が下り、冷たい雨が訪れる度に、山々でも沼の周圍でも、木々はそれ〲自分の染まるべき色を選みかけた。昨夜までの綠の葉の塊まりが、いつとなしにくろずみ焦げたかと見てゐるうちに、二三日もすればそれはもう華やかな黄や紅であつた。二人が來た頃にはまだ青々した水草に覆はれて、お加代に蒲公英かと思はせた黄色い菊科屬の花で飾られてゐた濕地も珈琲色に變つた。その細長い帶が、大さの割には水深があつて、フオーレルの六號に近い綠と信じられてゐる沼の水と、その向側に漸く燃き出した落葉松の林とを限つて伸びてゐる對照は、まだすつかり色のつかない周圍の色彩の中で最初の著しい調和を作り出してゐた。鮮飼の家の下に繋がれてゐる細長い一艘の小舟は、この頃に

なると朝暗いうちから沼の上へ漕ぎ出された。日つかちの下男は純粋の漁師になつて網にも釣にも忙しかつた。温泉の方へ集まつて來る紅葉見の客のために、夏休み以後餘り賣れなくなつてゐる鮒がこの季節で販路を取り戻すのであつた。釣は下手だと云つてゐる老主人まで長い竿をかついでよく出掛けた。子供が吹き矢と自慢の小鳥笛を持つてついて行つた。而して時々高く上手に吹き立てるその鳥寄せの笛で、外の日當りのよい莫蓙の上でさし網の繕ひをしながら殘つてゐる家のお婆さんに、彼等が今日はどの邊の岸に來たかを知らせた。

子供はまた吹き矢に飽きると古澤の畫を描いてゐるところを覗きに行つた。彼の興味はカンヴアスよりはパレツトの方に、委しく云へば、その板の上に様々な色の畫の具が、滑らかに美しい皮膚をした裸蟲のやうにチユーヴから絞り出されるところにあつた。彼は一遍あの錫の袋を手に取つて、自分でちゆーと押し出して見度いと幾ら思つたか知れなかつた。彼を可愛がつてゐる古澤は賴めばきつと笑つて押し出させて呉れるに相違なかつた。にも拘はらず都會人に對していつまでも臆病な田舎の子供は、いつも彼の三脚の横から好奇的な目をパレツトとチユーヴの上に交る〲注くのみで、默つて自分の秘密な願望と戰つてゐた。

併し子供はこの機會さへ失ひかけた。古澤はあまり畫を描かなくなつた。今までは雨さへ降らなければ何處か知ら沼の附近には屹度彼の姿が見出されたのに、この頃は滅多にゐなかつた。ゐても畫は描いてゐなかつた。畫具箱も三脚もそこらに放り出したまゝで、碧くしーんとした天の下に仰向きに嚴しい目をして寢轉んでゐた。

お加代は勿論彼の變化に直ぐ氣がついた。古澤もお加代が氣がついたことは知つた。お加代はまた自分の氣がついたことを古澤が知つてゐると云ふことを知つてゐる。それで何とも話し出さない男が少し憎かつた。お加代は舌の上に突き出て來る言葉を凝つと嚙み殺すやうな幾日かを送つた。古澤は矢張り默つてゐた。お加代はとうとう或る晩負けた。

『あなたは東京へ歸り度いのね。』

男は古風な置ランプの光で女の顏を眺めた。お加代が案外落ちついた風で話し出したのを見ると、正直に打ち明けた。

『手紙で面倒臭いことを云ひ合つてゐるより、ちよつと行つてくれば譯なく埒が明くと思ふのだ。』

『この間お友達の方から送つて寄越したのでは間に合はないんですか。』

『僕の云つてるのは旅行免狀のことだよ。』

お加代はそれを知らないで畫の具やカンヴアスのことを云つて見たのではなかつた、男はまた彼女の狡さを壓するためにわざと高飛車に出たのであつた。併しこの一言で忽ち明らさまに悄げ込んだ女を見ると、古澤も調子を變へた。

『旅行免狀が下りたからつて直ぐ明けの日洋行する譯ぢやないよ。安心しておいで。』

『同じことですわ。明けの日だつて一と月後だつて。――それであなたが行らつしやらなくなる譯ではないのだもの。』

『ぢや洋行なんぞ止めちまへと云ふんだね。』

否、お加代の不滿と悲しみはもつと根本的な點にあつた。お加代はどう鬪へても結局自分がついて行かれないところへ一人で行つて、而して其處で三年なり、二年なり、乃至だゞの一夜なり、離れて暮らせると思ふ男の心が恨めしかつた。自分に對する彼の執着は日增しに激しくなるとも衰へはしないのを知つてゐるだけ不思議に思へた。――お加代が默つて返事をしないのを見ると、古澤は言葉を續けた。

『併しね、假りに外國行を中止したとして、それから先はどうすればいいと思ふ。――例へば此處の爺さん婆さんの生活だ。あれは實にいい。美しい牧歌だ。併しこの儘一生この山の中に留まつて僕等にあの生活がやつて行けるだらうか。

少くとも僕にはむづかしい。』

『何も斯んな山の中で一生暮らさなくたつて――』

『頓ては東京で暮らせると云ふのだね。併しそれにはそれのやうに道をつけなければ駄目だよ。それまでは僕等は決して今までの社會に歸つて行くことは出來ない。みじめな日陰者として、むぐらもちが日光を怖れるやうに一生人間から逃げ廻つて暮らすのだ。正直なところ斯んな生活は僕の性に合はない。考へかゝると我慢が出來なくなつて來る。それ位なら一層監獄に入つて來た方がせい〳〵するだらうと思ふね。』

『馬鹿々々しい、なんだつてそんな――あなたが誰にだつてそんなことをされる譯はないぢやありませんか。』

お加代のこの抗議は法律上では自分は自由な女だと云ふことを意味したのであつた。けれどもそんな逃げ路は古澤に取つては二人を徐々醜くするに過ぎなかつた。

『僕は辯護士のするやうな話をしてゐるのぢやない。』

斯うきつぱり云ひきると、今までは寧ろ悲しさうに曇つてゐた彼の目が、急にらん〳〵と燃え立つた。

『法律の上の手續がすんでゐようとゐまいと、僕から見れば君は何處までも横井夫人だ。どれほど君を愛したにしろ僕は決して手を觸れてはならなかつた。他人の權利を侵してはならなかつた。その侵すべからざるものを侵したところに二人の愛の痛みがあるのだ。』

『あなたの一番好きな話ね、それが。』

いつも斯んな問題になるとするやうに、お加代はわざとつんとして話の調子を碎かうとしたが、古澤は皮肉に

『さうして君の一番嫌ひな話だ。』

と報いただけで、今日は飽くまで云ふだけを云ひ通さうとした。それは彼等の愛から痛みを除き去らう。二人の踵の後に引きずつてゐる罪の錘を一度立派に振り切らう。而して自由な誰に顧慮することもない二人になつて新しく手を繋がうと云ふのであつた。

『それには僕が暫くでもフランスへ行くのが一番いいぢやないか。その間には君も横井さんと極く自然に別れることが出來ようし、すべてが僕のゐるより遙かに順調に運ぶと思ふ。

古澤はそれ等の世話を托する人として溜池の從妹の主人を選んだ。彼の俠氣は賴みさへすれば屹度二人のために一と肌脱いでくれるに相違ないと信じた。若しまたその爲に何か金でも要ることがあれば、賣つた家から受ける筈の金を幾らでも殘して置かう。——

お加代は今はもう素直な態度で彼の言葉を聞いてゐた。段々涙ぐんだ。おしまひには泣いてゐた。彼女は斯んな愛し方で男に愛されたことはなかつた。斯んな愛し方があると云ふことさへ知らなかつた。否、今までのどの男かがこれと同じことを話し出したにしても、お加代はその男が旨くぺてんにかけるのだとしか思はなかつたであらう。けれども古澤だけはその言葉通りに實行するに相違なかつた。何年別れて待つても待ちはぐれのない人だと思へた。殊に最後に觸れた金のことは、横井との間よりは寧ろ彼に渡した娘の身體と交換に、一生自分たちの生活費をその買主から得ようとしてゐる彼女のやくざな肉親との間に起る筈の面倒まで考へた言葉であるのを思ふと、お加代はそれに就いて今まで一度も感じたことのない恥かしさを感じたほど、古澤の打ちはまつた眞情に動かされた。この人に何を拒み、何を逆らふことが出來よう。——

にも拘はらず彼に最後の決心を促された時には、お加代はきつぱり洋行に反對した。

『そんな分らないことを――』

『ですから行らつしやるなら默つて私の知らない間に行らつしやいよ。それが一番近道だわ。何んにも面倒がなくて――いゝえ、矢張り行つちや厭。――どんな譯があつたつて、決して行かせやしないから。――』

『それぢやまるで、今まで僕が話した事は何んにも聞かなかつたのと同じぢやないか。』

『さうかも知れないわ。私はあなたの顏ばかり見てたんだもの。――私を捨てて外國に行かうなんて云ふ人が、何故斯う可愛いのだらうともつて――』

『馬鹿。』

その夜彼等はいつの夜よりも堅く抱き合つて眠つた。二人の愛の痛みは結局それに觸れ合ふ度にお互ひの熱情をあふるとも弱めはしなかつた。斯んな話をするまでには十分強い決心を固めた筈の古澤自身さへ、別れてゐる間のことを思ふと、お加代を殘してその儘直ぐ遠い國へ旅立てさうにはなかつた。彼はお加代を信じないのではなかつた。お加代の美しい健康な、成熟しきつた身體、その中に充滿してゐて、たゞ一人の子供にさへも費されたことのない不姙女の強い生の剩餘力に信頼されなかつたのであつた。その點では寧ろお加代の方が安心して彼と別れてゐられたであらう。それでゐて何處までも洋行に反對したのは、彼の居る居ないが自分の一身上の解決に何等の影響も與へないこと――誰が中に入るにしても、どんな手段を取るにしても、今度のやうに逃げ出して、いつまでも分らないやうに上手に隱れ續けでもする以外には、決して横井から離れることは出來ないのを知つてゐたからであつた。たゞお加代の女らしい、寧ろ姉らしい心遣ひは、其處まで發き立てて、洋行しさへすればその間にすべてがよい事情になつて自分を待つやうに信じてゐる古澤の夢を破る勇氣はなかつた。

けれども四五日後の朝、古澤は突然どうしてもこれから東京へ行つて來ると云ひ出した。彼は今度は旅行免狀のことには觸れないで、家から受け取る金と掻きためた畫についての用事を數へ上げた。實際彼の仲間の展覽會は頓て開かれようとしてゐた。

併し本統を云ふと、そんな用事が眞の用事ではなかつた。彼がどうしても東京行を斷念されない心持には、放火者や殺人者が怖れに慄えながらも必ず今一度犯罪の場所に戻つて見なければゐられない心理と似たものがあつた。お加代にもそれが分つた。だから今度は留めなかつた。同時にお加代の心配は、古澤が彼等のやうに怖れも慄えもしない代りに、持ち前の潔癖で場合に依つてはどんな大膽な眞似をしないとも限らないと思ふことにあつた。

『行らしてもいいからその代り――』

出來るだけ用心をするやうに、めつたな人に目つけられないやうに――と云ひたかつた。でも彼の自尊心に取つてそれがどれ程不快な別れの言葉であるかを思ふと、お加代はまるで別なことしか云へなかつた。

『田丸屋のお煎を買つていらつしやるのを忘れないでね。』

彼等は別れた。

中一と夜泊りの約束であつた。お加代はそれを約束させた時からむづかしいのを知つてゐた。思ひ通り彼は歸つて來なかつた。あと二日と二晩無駄に待ち續けてゐた間、お加代は死にさうな孤獨とあらゆる妄想に惱まされ續けた。それは斯う云ふ位置と場合の女が留守の男に當然抱くやうな不信や疑惑ではなかつた。そんなことよりはお加代は古澤を手放したことに既に云ひようもない怖れを感じてゐた。彼の上京がどれ程危險であつたか、どれ程向見ずの冒險であつたか、それを考へるとお加代は古澤を立たせる前に感じた自分の心配が如何にも呑氣過ぎてゐたのを後悔された。どんな

事情があつても決して彼をやつてはならなかつた。足にしがみついても留めなければならなかつた。――

お加代の目の前には芝居の捕物に似た奇妙な光景が現はれた。古澤が追はれて逃げ廻つてゐた。小さい子供のやうな異形な人が追つかけてゐた。お加代は何年ぶりかで横井の顏を見たやうな氣がした。彼は黑く痩せて、前に行く古澤の立派な丈の高い身體に對していよ〳〵小さくなり、脊中の瘤までが更に無粹に見えた。

『本統になんだつてあんな身體をしてゐるのだらう。』

お加代は忌々しさと變な湧き立つやうな怒を感ずると共に、不意に得體の知れぬ涙がにじみ出た。同時にその涙を通じてお加代は彼女が十年間坐り馴れた茶の間のつや〳〵した長火鉢の一角を見たやうな氣がした。尚一層驚くべきことには、一つ家に住んでゐても不段は存在さへ認めなかつた澄子の、目ばかり並んでゐるやうな青白い顏までがちらつとした。吃驚して我に返ると、お加代はまたこれまで一度も考へなかつた、考へようともしなかつた事を考へてゐる自分を見出した。――選擧は旨く行つたのかしら。

お加代はそんな餘計なことを思ひ出した自分に對して自分で反抗した。すべてがもう關係のないよその世界のことであつた。長い間苦しみ拔いてやつと遁れ出た過去の不快な幻影であつた。何故そんなものが今になつて自分を襲ふたのか。――そんな隙間がどうして自分の心にあつたのか。――それが忌々しかつた。お加代は古澤が自分を一人殘して東京に行つたのが禍のもとだと思つた。どうして歸らないのだらう。何をしてゐるのだらう。畫の會なんぞどうだつて構はないではないか。――

『いゝえ、あの人は私よりも畫の方が大事だと云ふかも知れない。』

さうとも、これまでだつて私をこの部屋に打つちやつたまゝ、平氣で畫具箱をかついで出られた人だもの。――お加

代は彼を、寧ろ彼の仕事を心から憎むことに依つて氣を紛らさうとした。でもその努力は尚一層激しく彼を待ち、思ふに外ならなかつた。若し運惡く誰かに捕まつたのだとしたら。——お加代はもう、あと一日待つてそれでまだ歸らなければ、自分も後を追うて東京へ行かうと決心した程であつたから、五日目の午後一時過、古澤がやつと歸つて來たときには、飛びつくやうな思ひで二階から駈け下りた。

が、上り口に腰かけた彼を一目見ると喫驚した。彼は東京にゐた間病氣をしてゐたのだと云つても嘘ではない位まつ青になり、疲れ、頰と口許にかけて變な痙攣が現はれて、目は一種の不明な興奮で燃え上つてゐた。それは決して病氣ではなかつた。何か病氣以上の惡いことに出逢つたに相違なかつた。お加代は土埃まみれの靴を脱ぎ、左右の足の卷ゲートルを解いてゐる彼の手つきを見ただけでも慥かにそれを感じた。彼は落ちつかない心を强ひて落ちつけるために、その惡いものが何であるかをお加代に說明するのを一刻でも遲らせるために、わざと丁寧に卷ゲートルに手間取つてゐるかの如く見えた。やつと濟んだ。二人は二階に上つた。顏を見合せた。

『横井さんが上の溫泉に來た。』

お加代は何を聞いたのか分らない氣がした。聲が出なかつた。

『僕等があの溫泉にゐると云ふ噂でも聞き込んでやつて來たらしい。それが丁度僕の乘つた汽車で、而かも御丁寧に宿まで同じ箱だ。』

古澤は最後の言葉を如何にも皮肉に云ひ放つと、それに附け加へて、彼が今朝發車間際にやつと飛び込んだ列車の一室に、横井らしい人とその連れと見える二人の男を見出した時、(その一人が新吉であることはお加代にはすぐ分つた)手鞄についた名刺ではつきりその名前を確かめた時、それからまた三人のひそ〲話で彼等の旅行の目的を知つた時の

順々に倍加された驚きについて話した。

『外には向ふの端にお爺さんがたつた一人乘つてゐるだけだ。それで東京から下の停車場に着くまで六時間の間、僕がどんな思ひをしてその傍に腰かけてゐたか分るかい。』

お加代は今そんなことを考へて見る餘裕はなかつた。それよりは横井が自分たちを探しに同じ山の中に來てゐると云ふことこそ一大事であつた。がその恐怖も、横井の醜い不具な身體が六時間古澤の目の前に曝されてゐたのだと思ふ屈辱感の前には暫く威力を失つた。どんな下らない男でもよかつた。その時の横井がせめて當り前の背丈だけも何故してゐられなかつたか。――この意味から二人が同じ列車の同じ箱に乘り合せたことも、お加代には恐怖ろしいよりは、また古澤が發見されなかつたのを悦ぶよりは、たゞ忌々しく恥かしかつた。

『あんな人とよくも十年間一緒に暮らしたと思つたでせう。』

お加代はその輕蔑を痛感した。

『どうして、そんなことはない。若し身體について云つてゐるのなら、白狀するが、僕はもつと違つたものを豫想してゐた。だから最初は驚いた位だ。少くともあの顏は普通の人間の顏ぢやない。或る意味に於て――』

『およしなさいよそんな話。――馬鹿々々しい――』

『よす必要はないさ。本統のことを云つてるのだ。實際僕はあの顏を前に見てゐた六時間の間に、現在の僕が考へ得られる限りの、また考へなければならない限りの一切を考へ盡したのだ。おい、知つてるかい。あの人は落選したんだぜ。』

お加代は平氣で聞いた積りであつた。が、變な、熱い、くわつとしたものを身體のどの部分かに感じたことは拒み得

なかつた。

『僕等は此處に來て以來わざと新聞一枚も見ないやうにしてゐたから何にも知らなかつたのだが、今度溜池で樣子を聞くと、あの人は選擧に負けた上に君のことで氣狂ひのやうになつて、あの家にも何遍どなり込んだか知れないさうだ。一度は壯士を連れて來てお濱さんを脅迫してひどい亂暴を働いて行つたと云ふぜ。正直に云ふと、その話を聞いた時には僕は一種の反抗心を起した。そんな事をするんなら此方もその氣で對抗して見せると云ふ決心さへした。が汽車の間でぢつとあの人を見てるうちに、僕の考へは一變した。僕はあの人に對抗する氣はなくなつた。あの人が可哀想になつた。さうだ、今までは濟まないとは考へても、可哀想だと思つたことは一度もなかつた。これは僕の新しい感情だ。而してこれ等はあの顏からと云ふよりは、あの身體から受けたものだ。確かにさうだ。僕はあの前に進んで行つて、あなたの探してゐる男は私です。私があなたの女を連れて逃げたのです。――斯う叫び度くてたまらない氣がした。思ひきつて叫んだらどんなにせい〱するだらうと思つた。實際、もう六時間一緒に乘つてたのなら僕は實行したかも知れない。いや、あと二時間でも僕はたまらないで飛び出したに相違ない。――』

『では横井があんな片輪でなく、あたり前のずつといい男であつたとしても、あなたはそんな馬鹿な眞似をしたつて云ふの。決してさうぢやありません。――あなたはあの人があんな身體をしてゐるから、それでさう云ふ氣持になつただけですわ。あんな片輪のものを無理に取らなくたつて外に女がない譯ぢやないつて腹なんですわ。――』

『そんな馬鹿なことをまた――』

『いゝえ、言葉が違つたつて意味は同じですわ。あなたは高慢なんだから――それで自分で余計な苦勞を拵へてゐるのだから。――私ならよしんばあなたが泥棒だつて人殺しだつて、そんなことで決してあなたを捨てやしませんわ。それ

だのにあなたは——』

お加代は終に泣き出した。而して泣きながら古澤が今日になつてまで横井との關係に拘泥してゐる態度を責めた。若し彼の云ふやうに二人が横井に對して罪を持つてゐるのなら、何故二人で何處までもその罪を負はうと云ふ氣にはなつてくれないのかと。

『あなたの云ふことを聞いてゐると、自分一人いゝ子にさへなれば、私なんぞどうなつたつて構はない。これから先またどんな目に逢はうとそんなことは知らないつて風ですわ。——いゝえ、さうですとも。あなたはそれでいゝでせうさ。困ればフランスへでも何處へでも行つてしまへば世話なしなんだから。——』

彼女の泣き聲とその恨みの言葉は一つの鋭い針のやうに古澤の胸を刺した。彼は其處に自分の無意識の自我主義を見た。擔ひかけた運命の苦しさに逡巡する卑怯者を見た。自分の道徳的意志を滿足させるために、縋りつく哀れな罪の分擔者を今一度もとの闇に突き戻さうとする殘酷な變心者を見た。——外にどんな種類の罪があるにしても、これ以上醜い罪はないであらう。人の女を奪ふ罪がどれほど重い罪であるにしても、この罪に比べれば輕過ぎる罪かも知れなかつた。否、決して輕くない極重の罪であつたとしても、醜い罪よりは寧ろその重い罪に附かう。——古澤は目の前に泣いてゐる女をこの時ほど強い覺悟を以つて抱いたことはなかつた。同時にまた彼女の純粋な熱情に、愛に對する眞劍な獻身に、それに依つて殆んど神聖にされたその魅力に、その美しさに、この瞬間ほど激しく打たれたことはなかつた。彼は自分を急に無價値に感じた。

既に上の温泉に着いてゐる人々の追跡をどうして遁れるかに就いて相談した時、彼がすべてお加代の望む通にしようとしたのも同じ心持から來てゐた。お加代はいつそ東京に歸らうと云つた。温泉と沼の位置は、正三角形の頂點に近い

一點と、その中心點との關係であつたから、横井の一行が溫泉の何十軒もの宿屋を用心しながら探す間には、二人はその三角形の底邊の一角に在る停車場に出られるし、最後に隱れ家が知られたとしても、溫泉から此處まで車も通ぜぬ山道を探しに來る頃には、二人はもう東京に近づいてゐるであらう。――古澤はもつと安全な逃げ方を考へないではなかつた。それは直ぐ停車場に出る代りに、もう一層奥の小さい製材小屋へ一時隱れることであつた。而して追手が引きあげた後で、ゆつくり善後策を考へればよい。東京に歸れなければ反對に越後の方へ出よう。どんな旅行でも今は金に困りはしなかつた。――が、これ程の危險に瀕しながら、東京に歸れると云ふ不意な悦びで、その危險さへ忘れたやうに勇み立つてゐるお加代の顏を見ると、云ひ出せなかつた。却つて古澤は新たな興奮を以つて最後の決心をした。彼女を失望させないためにはどんな危險も決して避けまい。――若し運命が阻むならば、大膽に運命に挑戰しようと。――

萬事が好都合であつた。急用で今度は妻を連れてこれから又直ぐ東京へ引つ返さなければならないと云ふ話を聞くと、宿の年寄は息子が病氣で山を下りる時に使つた古い山駕籠をお加代のために用立てようと云つてくれた。舁手も困らなかつた。鱒の漁期や孵化期の忙しい頃になると、よく下の家から手傳ひに來る小作の元氣な若者が丁度來合せてゐた。その男と下男で舁けば停車場まで一時間以上はかからないであらう。里數は三里足らずであつた。

納屋の天井に吊るし上げられてあつた山駕籠が取り下ろされた。煤けてゐたけれども、その中に毛布を敷いたり、溜池の家から秘密に罐詰などと一所に送つて來た厚い羽根布團で凭りかゝりを拵へたりすると、お加代が最初其處に連れられて來た時に、停車場前から高い賃錢を拂つて仕立てよせた駕籠よりはずつと乘り心地もよければ、立派にもなつた。お加代はきりつとした旅支度で、東京を離れてからはいつもさうやつてゐる地味な束髮の頭を、持ち合せた紬ちめんのきれでおこそ頭巾のやうに包んで駕籠の中に入つた。これは顏を隱すためのみではなかつた。十月の山の夕の風は

もう可なり寒かつたのに、彼女はまだ冬のショールを用意してゐなかつたからであつた。その古風な冠り物は同じやうに古風な乘り物と共に、お加代にはひどく似合つて見えた。古澤は二時間前に解いたばかりの卷ゲートルを今一度捲きつけて駕籠脇に立つた。下男と若者で舁き上げた。彼等は家と沼に別れた。

最初の一里ばかりは石の多いひどい道であつた。彼等はそれを沼の向側に眺めてゐたと同じ種類の落葉松の森の中に、杉や、樅や、赤松の雜木林の下に、雜木の紅葉の蔭に、または急に灌木一本ない高い枯草ばかりの荒地の中に見出した。もう傾きかけてゐた山の早い入日は、その度に明るくなり、暗くなつた。それと應じてゐるやうに駒鳥とかけすが代り番こに彼等の頭の上で鳴いた。頓て一枚の粘盤岩が巨大なドアのやうに立つた崖に添うて歩いてゐる時、彼等は向ふに開けた空とその中の一つの山とその山の傾斜面が俄かに火のついたやうに燃え上るのを見た。而して山道を幾廻りかして降ると、下の平原はもう夜であつた。東の空に一枚のオブラートを張りつけたやうに見えてゐた月は靜かにその本體を現はして美しい眞珠色に輝き出した。暫くして、小さい耕地を控えた、一軒の初めての百姓家の前に出た。駕籠舁が留まつて灯を貰はうかと聞いた。古澤は彼等さへ困らなければ灯は要らない。六時十分の汽車に乘るのだから急いでくれと云つた。で彼等は無提灯の儘進んだ。夕靄のこめた足許はそれ程明るい譯ではなかつたけれども、道がもう非常によくなつた。彼等は目をつぶつてゐても通れる場所であつた。

古澤とお加代はそれまで殆んど口を利かなかつた。それは側に他人がゐると云ふ警戒のみではなかつた。二人は默つてゐてもお互ひに考へてゐることは分つてゐたし、殊に最初の興奮が靜まると共に、それに入れ代つた共通の不安と恐怖は、たとへ二人つきりであつたとしても氣樂に口を開き得ないほど彼等の心を壓してゐたのであつた。でも道が逼

泉の方から走り下つてゐる本道と丁字形に結びつく地點に近づいた時、お加代は駕籠から頭を出して少し後れて歩いてゐた古澤を大きな聲で呼んだ。古澤は駈け寄つて駕籠を留めさせた。お加代は男の頭を兩手で駕籠の中に抱き取るやうにしながら、頭巾の中から僅かにのぞけた顏をその耳に伏せて何事かささやいた。男はちよつと考へるやうな目つきをしたが、直ぐ頭を振つた。お加代は二度さゝやく代りにその口を耳から彼の口に強く移した。二人は離れた。駕籠はまた動き出した。お加代は温泉道にも今では滅多に見られなくなつた駕籠で人目を引くのを避けるために、本道だけは歩かうと云ひ出したのであつた。けれども古澤は其處からまだ二十町近くある道をお加代の足に任せるよりは、思ひきつて停車場まで乘りつける冒險を選んだ。山から下りて來る紅葉見の客の車はその時刻が一番多かつた。お加代の駕籠は大膽にもその中に交つてたゞ廣くがらんとした、が、沼の附近の夜に馴れた目には怖ろしく明るく、賑やかに見える驛前の田舍町をまつ直ぐに駈けた。停車場につくと丁度正面の掛時計が六時を指してゐた。古澤は白切符を二枚買つた。彼はこの線ではこの切符が大抵の場合自分たちを東京まで他の乘客と切り離して連れて行くことを知つてゐた。それは人目を避けるにも役立つであらう。がそれよりも彼は早く二人つきりになりたかつた。たつた一時間あまり默つてゐたことが、いや、今日まで彼女と離れて四日間も一人で東京へ行つてゐたことが、取り返しのつかない時間を空費させた氣がした。何だか自分でも分らないが、併し非常に重大なものがその間に消滅したやうに感じられた。で、やつと汽車が來て豫想通り誰も入つて來ない少さい一室に二人つきりで掛けた時には、彼はお加代の頭巾の間に輝いてゐる二つの目と二つの眉と白い額と鼻の一部分から目を離さなかつた。頭巾に包みあげられてなつめ形にちんまりしてゐるその頭も、今まで彼女の頭の形を知らなかつたかのやうに珍らしく可愛らしかつた。

『これがみんなおれのものだ。確かにおれのものだ。――人から盜んだものではない。さうとも、斷じてさうではない

――運命がおれに投げてくれたのだ。」

古澤はそれを確信した。同じ山の中まで探しに來られてゐて見事に追手から遁れ得たこともたゞ偶然とは思はなかつた。彼はその間に動かされた或る大きな手を感じた。今はたゞもう一度笛が鳴るだけだ。それで萬事が解決されるのだ。二人は永久に彼等と絶縁される――そんな氣がしてゐた。彼はこの一瞬間に最後の運命をかけた。

發車の汽笛は中々ならなかつた。汽車は初め突進して來たまゝの姿勢でプラットフオームの線路にねばりついたきり身動きもしなかつた。而して乘客がそれについて不審を抱きはじめた時には、開札口の右手にかゝつた大時計の長針はもう六時二十分を過ぎようとしてゐた。乘客は騷ぎ出した。或る者は窓から大聲で驛夫を呼び立てた。が、誰も辯明するために近づいて來る者はなかつた。彼等の仲間でさへ何故汽車が規定の時間に出ないか分らないらしく、たゞ共處らを駈け廻つてゐた。その内に次の停車場との間に何か重大な故障が生じて列車は當分共處へ留らなければならないらしいと云ふことが分かつた。氣の早い乘客の何人かは詳細を知るため列車から下りて驛長室の方へ押寄せて行つた。而して彼等の報告に依つて故障はトンネル内に起つた客車の不幸な衝突であること、多數の死傷者を出したのでその後始末がすむまでは彼等の汽車は發車されないのだと云ふことが分つた時には、新たな驚きが擴がつた。觀楓客の中には一と汽車先に立つた仲間や知人を持つたものもあつた。その不幸が若しその列車に起つたのだとしたら――彼等は不安を確かめるために列車から飛び下りた。でも一般の乘客に取つては、その椿事も最初の驚きが靜まつた後では、旅行中の興味ある一つの挿話以上ではなかつた。夕飯前の客は、どうせ長く待つなら驛前の家で何か暖いものでも食べた方が徳だと云ふ風に悠々と席を立つた。でなくも自分の席に落ちついてゐる乘客は殆んどなかつた。彼等は動き廻り、車内の誰かれとなしに話し仲間になつてさも面白さうに衝突話をした。死んだり負傷したりしたのは自分たちではないのだ

と無意識に感じ合つてゐる、共通の露骨な滿足が、皆んなを親しく結びつけた。その內に彼等は待ち草臥れた。不平を云ひ出した。怒鳴りはじめた。終には大部分の人々が車內から出て當てどなくうす暗いプラットフォームを行つたり來たりした。或る者は驛夫と議論をした。さうでない者は變な物好きな氣持で、おとなしく車內に殘つてゐる人々を無遠慮に覗いて步いた。平常は習慣的な禮儀から見ても見ないやうにして通る白線の箱の中まで避けなかつた。而して其處にたつた二人きりでかけた若い男女を見出したことに彼等の最大な好奇心を滿足させて通り過ぎた。

『錠戶を締めておしまひなさいよ。』

お加代は彼等の大膽な顏が近づく度に傍の古澤に云つた。けれども古澤は從はなかつた。却つて彼は窓の方を向いて番人のやうに突つ立つたまゝ動かなかつた。彼はプラットホームの群集を警戒してゐたのであらうか。さうではなかつた。口に出しては名差されない或る物に對して見張りをしてゐたのであつた。古澤はこの汽車の不幸に就いて一般の乘客の感じない強い恐怖を感じてゐた。出るばかりになつてゐる汽車を引き留めたこの變事が何を意味するのか――それを思ふと、彼は全身の血行が止まるやうな氣がした。實際まつ靑になつてゐた。お加代はその顏つきで彼の恐怖を知つてゐた。その恐怖はまた自分の恐怖でもあつた。けれども三十分や一時間の中で追つかれる筈はないと云ふ氣も同時にした。が、萬一どんなことで二人がその汽車に乘つたのが分つたとしたら。――たとへば彼女を載せて來た駕籠がそこいらにぐづ〳〵してゐる間に、橫井の一行が鱒飼の家を目ざして下りて來たとしたら。――案內人は屹度下男を捕へるであらう。――溫泉場の者であの月つかちの男を知らないものはなかつた。――お加代は震えた。

極度の不安が續いてゐる間にお加代は終に彼女らしい決心に到着してゐた。運惡く此處で見出されたとしたなら、逃げも隱れもしまい。却つてこの機會を利用しよう。思ひきり愛想づかしを云つて橫井に絕緣を迫らう。自分だつてもう

十年前の小娘ではなかつた。面と向つて厭だと云つた以上、どんな男にだつて手を觸れさせはしない。向ふだつてあの時のやうに頸に荒繩をつけて引つ張るやうな眞似が出來る筈はない。私には古澤がついてゐる。――斯う思つて、側に立つた男の高い後姿をしみ〴〵と眺めた時、彼はもう單なる戀人ではなかつた。彼女のものとして人生の曠野にたつた一つ見出された、不思議な尊い、安心して縋りつける柱であつた。

『あなた。』

堪らなくなつて呼びかけた。彼は後向いた。お加代は頭巾の中でにつこり笑つた。

『もう何んにも心配しなくてよござんすわ。――いらつしやいよ。』

古澤が席に歸つて並んで掛けると、お加代は落ちついて彼女の決心を打ち明けた。

『ね、ですから追ひつかれゝばいつそいいんですわ。何もかも洗ひざらい云つてやるから。――それで一遍にかたをつけてやりますわ。初めからその氣になれば、なにもあんな山の中まで逃げ廻ることはなかつたのですよ。ねえ、さうでせう。でも、あれでも考へると洒落れてたわ。――今一度あんな眞似をして見ろたつて出來やしないから。――』

お加代は一人で悶に乘つて嬉しさうに話し續けたが、古澤の決して笑顏にならない沈鬱な表情に氣がつくと、思はず言葉を切つた。

『あなたは――』

『僕はどうしても君のやうな氣にはなれないのだ。――この汽車の出ないことが――』

古澤は云いかけたまゝ、急に短い叫び聲を上げて飛び上つた。彼の目はお加代の頭を通り越して向ふに見える開札口の一劃に引きつけられた。而してその叫び聲と彼の異常な驚きに脅かされて同じやうに立ち上つてその方面を眺めたお

加代の目には、丁度開札口を通り抜けようとしてゐる横井の小さい身體と、その後に引き添うた新吉の大きな姿が入つた。

『僕等は矢張り遁げられないのだ。――別れなけりやならない――。』

運命がさう命ずるのだと古澤は思つた。

『君はぢつとしてゐ給へ、――さうしてどうぞ無事で――』

『何を云ふの――今になつて――そんな――』

お加代は彼に武者ぶりついた。彼は無意識にそれをきつく抱いた。丁度ブリッヂを上りかけたところだ。――彼はさう考へた。戻すなら、今だ。――彼は女を振り放した。お加代は離れまいとして爭つた。が、輕く突かれてよろ〳〵した時、もう二度と取り縋らうとはしなかつた。お加代は衝動的に右手を振りあげて車室から出ようとしてゐる古澤の後から飛びかかると、

『意久地なし！』

と叫んで、思ひきり男の右の頰を打つた。――否、お加代は古澤を打つたのではなかつた。何んだか自分自身にも分らない、殘酷な冷たい者の頰を打つたのであつた。

（完）



喜劇

# 大臣候補（一幕物）

長谷川如是閑

人物

棚濱（官僚出身の實業家）
邦夫（棚濱の長男）
お花（女ペンキ屋）
棚濱夫人
芳江（棚濱令孃）
赤佐子爵
しん子（藝者、棚濱の妾）
婆や（邦夫の乳母）
其他女中、書生等。

場所

棚濱家の應接間。右手と正面左寄に扉。扉はペンキの下塗のまゝ。

赤佐（椅子から立つて）　ではそのおつもりで……何しろ貴族院の方も可なり運動が激烈で、黨の方は大分押されてゐるから油斷がならんです。が然し、あんたはぢつと動かずに居られたんで却つて形勢がいゝんだから、先づそのまゝ泰然として居られることです。萬事私共にお委せを……。

棚濱（同じく立ち上つて）今更大臣でもないが、然し諸君の爲めとあれば一肌ぬいでもいゝと思つてゐる。萬事よろしく。

赤佐　承知しました。何しろ、一寸眼を放してゐると、形勢が飛んでもない方へ行くので、皆血眼の態です。アツハツハ。ぢや何れ後刻……今一の件も御間違ひないよう……

棚濱　それは大丈夫です。……然しあんたは不眠不休で御苦勞のことぢやな。

赤佐　これも國家の爲めです、

兩人　アツハツハツハ。

赤佐、棚濱退場。棚濱夫人、紅茶の盆を持ち、芳江、菓子盆を持つて登場

夫人　おやもうお歸りよ。

芳江　此頃のお客さまは、郵便やさんのやうに、一寸來ちやすぐ歸るかと思ふと、お通夜に來た坊さんのやうに、夜なか中ゐたりして、をかしいわね。

棚濱登場

夫人　おきまりになつたのですの？

棚濱　いやまださうは行かん。貴族院の連中が何せ手嚴びしい奴等ばかりで話にならん様子ぢや。が九分九厘まで

方のものぢや。これでわしも先づ大臣か。

芳江　おとうさんが大臣になるの？

夫人　さうですよ。

芳江　あらをかしい。

夫人　まあ、此子は何といふことを。オツホツホ。……芳ちやんあなたこゝで御客様の御代りになつて、お父さんと紅茶をいたゞいて、おいでなさい。

夫人退場

芳江　でもをかしいぢやないの、お父さんが大臣！　いやだわねへ。

棚濱　アツハツハ。何がいやだ。

芳江　いやだわ。……けどお父さん、何の大臣になるの？

棚濱　ム、、先づ文部大臣ぢやな。でなければ鐵道大臣ぢや。

芳江　文部大臣て、あの、學校や何かの大臣でせう？

棚濱　さうぢやよ

芳江　だからをかしいぢやないの。お父さん會社にばかりゐて、學校の事なんかちつとも知らない癖に、學校の大臣になるなんて。

棚濱　アツハツハ。知らんことはないぞ。

芳江　ぢや聽いてよ。よくつて。私、學校で何と何と何と敎はつてる？

棚濱　さう。讀方に、修身に、習字に、……それから……畫と歌と……

芳江　畫と歌だつて、あゝをかしい。圖畫と唱歌よ。それから？

棚濱　それから……何かな……こうと……

芳江　ほうら御覽なさい、知らないぢやありませんか。

棚濱　さういふ事は、下役のものがちやんと知つてゐて、うまくやりよるんぢや。

芳江　下役の人が？　ぢやお父さんは何をするの？

棚濱　お父さんは、學校は日本中でいくつにするとか、何處に何ういふ學校を置くとか、さういふことを心配するのぢや。

芳江　ぢや聽いてよ。あのう、高等女學校が日本中にいくつあるか知つてゝ？

棚濱　さうさな。今一寸覺えんな。あまり澤山あるんでのう。

芳江　ぢや御醫者の學校はいくつある？

棚濱　お醫者の學校か。これも一寸覺えんな。

芳江　皆「覺えん」のね。だめよ。お父さん學校のことなんか、何も分らないんだわ。

棚濱　アツハツヽ。文部大臣は見事落第かな。では鐵道大臣ぢや、お父さんは。

芳江　あら可笑しい。學校の大臣が、すぐ鐵道の大臣になれるの？　學校の先生が免職になつたつて、すぐ機關士になれやしないぢやないの。

棚濱　お父さんは大臣ぢやから、なれるんぢや。

芳江　だめよ。お父さん鐵道の事なんか、何も知らない癖に。此間、機關車のお釜の上に乘つかつてゐる兒のやうなもの、あれ何つて聽いたら、お父さん知らなかつたぢやないの。
棚濱　そんなことは……
芳江　下役が知つてる？
棚濱　アツハツハ。さうぢや。
芳江　ぢや大臣て一體全體何をするの？
棚濱　大臣といふものは……さうぢや……判を押すのぢや、判を。
芳江　判て、何の判？
棚濱　めくら……いや……その何ぢや……いゝ事と惡い事とを見分けて、いゝ事だけに判を押すのぢや。學校の先生が、お前方の習字にマルをつけたり二重マルをつけたりするやうにな。
芳江　でも學校の先生は字のことがわかつてゐるからマルをつけられるけど、お父さん何も知らないのに何うしてマルをつけるの？　出鱈目につける？
棚濱　出鱈目ではない。ちやんと考へて判を押すのぢや。
芳江　まるつきり知らないこと、いくら考へたつてわかりつこないわ。よく知つてる下役に判を押させた方がいゝぢやないの？
棚濱　さうすると、大臣のする事が無くなつてしまうんぢや、アツハツハ。
芳江　ぢや大臣つて屹度、月給なんか貰はないんでせう。

棚濱　それは貰はんことはない。ほんのちつとばかし貰うんぢや。
芳江　ぢや下役の方が澤山貰んでせう。
棚濱　いや下役はもつと少ない。
芳江　下役つて、ぢやよつぽどちつとしか月給貰はないのね。道理で此間お役人になつたうちの才田さんに、お母さんが、お氣の毒だつていろんなものをあげてよ。古いお鍋だのお釜だの。
棚濱　古いお鍋やお釜か。それはいかにも氣の毒ぢや。
芳江　ほんとうに下役の人達は可愛想ね。何でも知つてゐるのに、何も知らない大臣よりもちつとしか月給が貰へないなんて。誰がそんなこと定めるの？　何も知ない癖に大臣なんかになる人があるからいけないんぢやない？
棚濱　アツハツハ。さうかも知れん。
芳江　お父さん、大臣なんかなるのおやめにしない？　私いやだわ。
棚濱　これは猛烈ぢや。貴族院の奴等に聽かせたいものぢや。……芳江はやつぱり丙午ぢやつたかな。
芳江　あら私丙午なんかぢやなくつてよ。でも丙午なんてこと迷信だつて、先生が仰つしやつたわ。お父さんそんな迷信家の癖に、文部大臣なんかになつたら、皆に攻撃されてよ。
棚濱　アツハツハ。もう勘忍せんかい。お父さんさつきから降參しちよるぢやないか。アツハツハ。

邦夫登場

邦夫　お父さんこちらでしたか。芳ちやん、兄さん一寸お父さんにお話があるんだから、あちらへ行つておいでなさい。

芳江退場

邦夫　お父さんが大臣になるつて眞個ですか。

栅濱　いや知らんよ。

芳江登場

芳江　ほんとうよ！

邦夫　何です、芳ちやんは。あつちへおいでなさいつてへのに。

芳江退場

邦夫　風説に過ぎないのなら結構ですが。もし實際だとすると困つたものだと思ひましたので……

栅濱　何うして困つたものなんぢや。

邦夫　でもお父さんは、今日の時代を何う思つておいでなんです。實業家が大臣になるのは、西洋流のリベラリズムの政治の當然だなんていひますけれども、もう西洋でもそんな事は社會が許さなくなつて來てゐるんです。今日の國家の仕事は、非常に專門的になつて來て、所謂政治なるものはもう一つの立派な科學的技術になつてゐるんです。昔ならば政治家は、所謂ステーツマンで、正業のない浮浪人がなるものに定まつてゐたんですが、今日では、昔のプラトーの聖人政治が科學者政治になりつゝあるのです。政治家は一個のエキスパートでなければならないのです。お父さんのことをいふのぢやないですが、何も知らない官僚の上りや實業家なんぞか、政治をする時代ぢやないんです。教育の教の字も知らないものが文部大臣になつたり、鐵道の事なんか皆目わからないものが鐵道大臣になつたりするのは時代錯誤の甚しいものです。

棚濱　おい〳〵、そんな講釋なら、たつた今芳江から散々聞かされた所なんぢや。

邦夫　芳江からお聽になつた？

棚濱　さうぢや。芳江がお前のいふ通りのことをいつてゐたのぢや。

邦夫　お父さん戯談ばかり。芳江がそんなことをいふ筈はないぢやありませんか。

棚濱　いや云ひよつた。しかももつときび〳〵と、所謂肯綮に中ることを云ひよつたんぢや。芳江はお前よりも、ずつと徹底した意見を持つとるぞ。アッハッハ。

邦夫　（ムツとして）……

棚濱　まあ、さうムキにならんでもよい。お前は近頃少し頭でも悪くして居りやせんか。何うも始終陰欝のやうだが、時々昂奮しよる。身體を氣をつけい、自分の身體を。

邦夫　身體も悪くするでせう……けれども、私は眞理をいつてゐるんです。

棚濱　よし、よくわかつとる……然し、お前にはお前の考へがある。お父さんにはお父さんの考へがある。親が必ずしも子の考に盲從せにやならんこともなからう。

邦夫　ぢや子も必ずしも親に盲從しないでもいゝんですね。

棚濱　さうぢや。それでよいのぢや。親は親、子は子、それが即ちリベラリズムぢや。アッハッハッハ。

邦夫　ぢや、私がいやだといふ結婚を、お父さんが強制するのは何ういふ譯です。

棚濱　いやそれとこれとは事が違う。結婚は、苟も日本の道徳習慣に從へば、一個の人間同士の關係ではなく、家と家との關係なんぢや。それが即ちわが日本の淳風美俗なるものぢや。西洋ではさうでないといつて、此日本の淳風美俗

を非議すべきものではない。古來國家を以て一大家族としてゐる日本に於ては、家族主義が立國の大本でなけりやにやならんといふことは、誰が何といつても、千古に亘つて動かすべからざる掟なんぢや。先達の貴族院議會でもわしはそれを痛論したんぢやが、無論、全會一致、誰れ一人異議を唱へたものはなかつた。

邦夫　フン。

棚濱　フンとは何んぢや。わしは平生子供に對して決して干渉がましいことはせんが、國家精神の依つて立つて居る根本の問題となれば斷乎として一歩も假借せんぞ。子供等は無論の事、何人にもわしが信ずる通りをやらせんければならんと固く決心してゐる。此の國家の大本を維持するのは、すべて國民たるものゝ義務なのぢや。自分の生んだ子供らに、此の大本を破らせては、國家に對して相濟んと思つてゐるんぢや。これだけは心得てゐるがいゝ。

邦夫　それだけが心得てゐられないんです。外の事なら我慢もしますが、結婚の問題は、私の人格の絕對自由を認めていたゞきたいのです。

棚濱　それがいかんのぢや。お前の身體は自分のもので自分のものでないのぢや。棚濱家あつてのお前方なんぢや。わしが、お前にあゝせいからせいといふのは、わしがいふのだと思つちやいかん。畢竟棚濱家の先祖が申されるのだと心得るがいゝ。

邦夫　祖先が申されるんだから政略結婚だつていふんです。昔の武士の結婚なんか皆政略結婚なんです。

棚濱　政略結婚とは何んだ。人聞きの惡い事をいふものではない。當今の世界にそんなことを行ふ必要が何處にある。棚濱家で赤佐子爵の家の娘を貰ふのが何で政略だ。お前ももう何時まで獨りでは居られん。それにはお前も親くしてゐる赤佐の娘が、容姿といひ、氣立といひ、敎育でも何でも誠に申分ないから貰はうといふのぢや。お前がそれをい

かんといふ理由が、わしにはとんと呑み込めんのぢや。

邦夫　私には又、貰はなくちやならない理由がとんと呑み込めないんです。いゝ娘は皆貰はなくちやならないんなら、何人貰つても貰ひきれやしません。

棚濱　下らん揚足をとるな。赤佐子爵家で此方にくれたいと云つてゐるのではないか。いゝ娘が皆此方へくるていつてをるのぢやないわい。

邦夫　赤佐家でくれたいつて云つたつて、肝心の本人は來たがつても何もしてゐやしません。碌そつぽそんな話のあることさへ知つてやしません。

棚濱　本人には、知らすべき時にしらせるのぢや。お前は根本の精神が間違つとるから、わしの話がわからんのぢや。

邦夫　お父さんも根本の精神が間違つてゐるから、私のことを理解して下さらないんです。

女中登場

女中　目黒の御前から御電話でございます。

棚濱　よし。（邦夫へ）もうそんなわからんことをいつてゐる時ではない。わしが命令する。今日の五時までに、確り返答せい。いや、承知しましたといへといふのだ。斷じて命令するんぢや。

棚濱退場

邦夫　今日の五時。困つたなア、いやだといへばをやぢ何んなことにいひ出すかわかりやしない。あゝ何うしたらいゝだらう。何んでそんなに急に返事を迫り出したのだらう。もしかすると、あれのことも薄々感付いたんぢやなからうか。

（懐から手紙を出して讀む。）

「あなたの御心持はよくわかつてゐます。さうして私はあなたを信じます。けれどもやつぱり私は私の勝利の爲めに、いんゑ、女の勝利の爲めに、何うしても自分の行く所へ行かずにをられません。さうしてもう決してあと戻りはいたしません。ではさようなら。」

あゝあ。「女の勝利の爲めに」。よくお花さんはさう云つたつけ。やつぱりそれを實行したんだ。ほんとうに强い女だ。それが一層私を惱やます誘惑なんだ。……それにしても、何處へ行つて、何をしてゐるんだらう。居所位は知らしてくれてもよかりさうなものだなア。もう一年あまりになるのに……私はもう此先き、こんな惱みに堪へ切れ相もない。……あゝ今日の五時。何うしたらいゝだらう。

しん子登場

しん子　おや若旦那、何を獨言をいつておいでなの。怪しい手紙なんぞお讀で。こりやたゞは通されない。一體何うして下さるの。

邦夫　騷々しいぢやないか。こんな手紙なんか何でもないんだよ。……お父さんにいつてはいけないぜ。

しん子　心得ました。けれどロハではねへ……

邦夫　相變らず慾張つてら。

邦夫退場

しん子　若旦那が近頃少し變だつて話だつたけど、やつぱりさうだわ。（小指を出して）此處レコでも出來たんだわ。あの年になつてさ遲蒔きとんがらしぢやないか。やつぱりお坊ちやんだけにしゆんが遲れた、なんさよかつたねッ、ウツフ。

棚濱登場

栁濱　おゝしん子か、今日は忙しいんだ。

しん子　それは萬々承知の上であがりましたの。旦那今度愈大臣におなりなさるんですつてね。大急ぎでお祝ひ旁つて譯なんですよ。

栁濱　誰れからそんなことを聞いた。

しん子　蛇の道は蛇の或る確かな筋の報道によればつてんです。でもお忙しい際ですから、早速申あげてしまひますけど、例のお約束の一件はお間違ひないでせうね。

栁濱　御約束つて例のか。

しん子　えゝ、大臣にでもなつたらといふお約束でしたわね。所が丁度あの地面が別に買手がついた相で一刻を爭ふことになつてゐるんですの。でも先方でもあすこは、私に是非といふので、知らせて來てくれたものですから、あわててあがつたやうな譯なんですの。ね。思ひ切つて聽いて下さらない？　でもあなた、あれがあるばかりに、私平生から外のこと、どれだけ我慢してゐたでせう。ねえ旦那。

栁濱　困るなア。大臣にでもなると金が出來るなんてのは、貧乏な奴等のことだ。俺達が大臣になつた日には所謂金蔓を垂れにやならんのだ。一體結局のところ何の位なことをいひよるんかね。

しん子（掌を見せて）これだけなの。今日のうちに内金を入れるからつていつて、待つて貰つてゐますのよ。

栁濱　五萬圓か。打毀ぢやな。

しん子　でも大臣さんぢやないの。

女中登場

女中　大森の御前から御電話でございます。
棚濱　よし。（しん子に）一寸待つてゝくれ。
　　　棚濱、女中退場
しん子　さアメめた。……あすこは待合や料理屋にや持つて來いつて場所なんだよ。かうして置きさへすれば、あとはおもむろつて寸法さ。チュツチュツ。
　　　棚濱登場
棚濱（にこ〳〵しながら）あゝ何うも電話といふものは煩さくて叶はん。
しん子　でも旦那、お嬉れし相よ。……
　　　書生登場
書生　伊岐總務が御見へになりますた。
棚濱　伊岐か。十二疊の方へ通して置いてくれ。
　　　書生退場。女中別の口から登場
女中　目黑の御前からお電話でございます。
棚濱　何うもかなわんな。
　　　棚濱、女中退場
芳江（蔭で）あら女のペンキ屋さんだわ。
　　　芳江、お花、女中登場

女中　こゝの扉ですの。どなたかお見えになつたら一寸遠慮して下さいね。

お花　承知いたしました。

しん子　まあほんに。女のペンキ屋さんはちよつとおツだことね。

芳江　あんた何うしてペンキ屋さんなんかになつたの？

しん子　それには深い仔細があり相だわね。聽かして下さらない。

お花（仕事をしながら）何も深い仔細なんかありやしませんわ。男なんかの厄介になるのがいま〳〵しいばかりで、こんなオツになつちやつたんですわ。

しん子　男の厄介になるのが何うしてそんなに忌々しいの？

お花　でも男なんてものは、女は皆自分の持物か何んかのやうに思つて、すき自由にしなければ承知しないぢやありませんか。

しん子　だから女だつて、男をわたし達の持物だと思つてすき自由にすればいゝぢやないの？

お花　ですからさうする爲めに私ペンキ屋になつたのですわ。

しん子　ペンキ屋なんかになつて、あくせくしなくたつて、私達のやうに、おかいこぐるみで、男子をすき自由に玩弄物にする……おつと御嬢さん、今のは噓よ。……でかうつと、……ペンキやさんあなたは、男にでもすてられた燒けツぱらぢやない？

お花　そんなことはありませんわ。男をすてたかも知れないけど、男にすてられたなんてことは……

しん子　憚りながらて譯なの……それは失禮。「さては合點が行かぬ。」何うした次第なのさ。

お花　でもね、私のお母さんは散々男の玩弄物になつて、年をとつてからは、わらじの古いの見たいに往來傍にすてられて、それ〴〵は可愛相な人なのよ。私、それでもう、男といふ男はお母さんの仇としか思はれないの。それだのに、お母さんは、私を自分と同じやうな男の玩弄物にさせやうとするんですもの。私もまた、始めのうちはそれをいゝ氣になつて、あなた方のやうにいゝおべゞを着て、男の玩弄物になる所までいつたんですけれど、あんまりお母さんが男に意氣がなくつて、まるで蟲けら同樣なのを見ると、もう私たまらないのよ。これは大變だつて氣がしましたの。けれどもやつぱり、おしろいをつけてじやら〳〵してゐるのが嬉しくつて、何うしても見切がつかなかつたのですわ、それを……もうおしまひ。ねへお孃さん、こんなお話しつまらないわね。

しん子　それで心機一轉たらで、ペンキ屋さんとは、又思ひ切つたものね。

お花　でも私の世話になつてゐたバーの御主人が繪かきだつたので、私もまね事をして繪を習つたのが、藝が身を助けるで、看板かきになりましたの。

芳江　いゝことね。私も繪がすきだから、看板かきにならうか知ら。

しん子　そして男を征伐するなんかは、お孃さんいけませんよ。

芳江　さうして、私も男なんか嫌ひだから、ペンキ屋の姉さんが男と喧嘩する時に手傳つてあげるわ。

お花　ホツホ、ほんとうに面白いお孃さんね。でもお孃さんなんかだめですわ。ぢきにお嫁にやられてしまうから。

芳江　いやなこと。だれがお嫁なんかに行くもんか。うちのお母さん見たいに、始終お父さんににらまれてばつかしゐて、ほんとうにつまらないと思ふわ。私もあんたのやうに、お母さんの仇を討たなくつちや、あんたのお母さんも、お父さんににらまれてばつかしゐたんでせう。

お花　いんえちつとも睨まれやしなかつたのですよ。可愛がられてゐましたわ。
芳江　そいで何うして仇をうつの？
お花　でも男の玩弄物にされたんですもの。
芳江　私少しわからなくなつたわ。
しん子　玩弄物にされたつていふけれど、玩弄物にされてゐる方でも、向ふを玩弄物にしてゐるんだから五分〳〵だわ。五分〳〵どころか、男の膏汗で此方が保養するんだから、それもやつぱり立派に男を征伐してるんだわ。…女ペンキ屋風情がいくら力んだつて、憚りながら眞似も出來まい。ヘン、仇討ちなら此方にお賴み、返り討になるやうなドヂは踏まないから安心をしよだ。……ねへお孃さん。あんなペンキ屋の女のお話なんかお聞きなさるな。さああちらへ參りませう。大事な約束の時間が切れる。どれ一征伐して來やうか。オツホツホ。ペンキ屋さん、精々勉强して男を征伐をしなさい。あばよ。
お花　あんな人を見ると、お母さんのことが思ひ出されて、業が煮へてなりやしない。女といふ女は皆あれなんだからほんとにいやになつてしまふ。だから私死んでもペンキ屋はやめられやしない。クソツ。（グイ〳〵塗る）

棚濱夫人、婆や登場

婆や（ペンキ屋に）あの濟みませんが、一寸あちらへ行つて頂戴。

お花退場

夫人　あの、外ではないがね。私久しい前から邦夫の樣子が何うもをかしいと思つてゐたんだが、此頃は愈變になつて、まるで女でいへばヒステリーとでもいふのだらうね。婆やも氣がついてゐたらうね。

婆や　それはあなた様、私もとうから心配でならないので、それとなく若旦那に伺つて見ましても、何でもない何でもないと仰つてですが、あの赤佐様の御令嬢と御婚禮の御はなしが出てから、一層ひどくなられたやうに思はれてなりませんのよ。もしや何處かにお氣に召したお方でもお出來になつたのぢやござんせんでせうか。

夫人　私もさう思つてゐるのだよ。それに赤佐様との御話も大分進んでゐるので、私ほんとうに氣が氣ぢやないんだよ。旦那様も、萬が一これが纏らないと非常に困る事になるんだがつて、大變御心配をしておいでなんだよ。

婆や　ほんとうに、旦那様の御心配の御様子が目に見へるやうで、わたくしもはら〳〵いたして居るんでござんすよ。今日は一つ邪が非でも若旦那に打ちあけていたゞいて、何とか婆やにお相談下さるやうに申あげて見ませう。

夫人　さうね。是非頼みますよ。もしさういふことであつたら、此際男らしく思ひ切るやうにとくつくりと說いて見ておくれよ。あれがいふ事をきくものはお前しかゐないんですからね。それにね。萬が一もうそゝうでも仕出來してゐたんなら、出來たことは仕方がないから、萬事打ち明けて、跡始末をつけて貰つて、綺麗さつぱりにする方がいゝんだから。

婆や　さうでござんとも。跡始末は他でよろしいやうにいたしますからつてね。…でも萬一、何うしても思ひ切れないなんて仰つしやつてたら、何ういたしたものでございませうね。

夫人　それはお前、もし先方が承知しさへすれば、相當な仕送りをして、何處ぞ氣保養の場所をこしらへるなり何なり、いくらでも仕方はあるだらうぢやないか。これが何も世間でやつてゐないことぢやなし。やらない方が稀れな位なんですもの、…オホヽヽ。お父さんだつて、ちやんと呑み込んでおいでどこぢやない、その位な働きが男になくつて何うする、西洋の女なんかには、却つてそんな男を好くものがあるつて、いつかも戯談いつておいでだつたが、そこはお前、そんな物のわからないお父さんぢやないんですよ。よくね、それをいつてやつて下さい。さうして赤佐様の方へは、

是非色よい返事をするやうにつてね。

婆や　畏りました。只今すぐと婆やがよく伺つて見ますわ。そこは年の功でござんすもの。オツホツホ。

夫人　ではくれ〴〵頼むからね。

二人退場。芳江、お花登場

芳江　私しん子おばさん大嫌ひ。ペンキ屋なんかになつちやいけないつて。餘計なお世話だわ。私、男の玩弄物なんかになるものか。…でもペンキ屋になれば、何うして男の玩弄物にならないの？

お花　それはね。御覧なさい。かうやつて、一生懸命ペンキを塗つてゐれば、男の玩弄物になつてゐるひまもないでせう。それ此通り、ぐづ〳〵してゐると、ムラが出來て上手に塗れませんのよ。玩弄物なんかになつてゐると、……それお話に身が入つても、こんなに拙くなつてしまうのよ。

芳江　さうね。さうして玩弄物にしに來たらそのペンキを男の頭からぶつかけてやればいゝわ。

お花　オッホッホ。さうしてやりませうね。

芳江　でもペンキ、私にうまく塗れるかしら。ちよいとやらして頂戴な。（お花の刷毛を取つて塗る）

お花　あれお嬢さん。いけませんよ、折角ぬつた所を……御稽古はね、又こんどねへやが參りました時にしませうね。

芳江　いゝのよ。もうちよいと。

邦夫登場

邦夫　人を馬鹿にしてゐる。誰れも彼れも人間らしい奴は一人だつてゐやしない。（芳江を見て怒鳴る）こら芳江、

何をしてゐる。仕事の邪魔になる。あつちへ行つてろ。

芳江　まあ兄さん、いやだ。何處かで喧嘩して來て、私のことを怒りつけて

邦夫　生意氣！　あつちへ行かんか。

芳江　おゝおつかない。

芳江退場。邦夫お花と顏を見合せる。

邦夫　あゝお前お花さんぢやないか、僕は平山だよ。

お花　何うしてこちらにおいで？

邦夫　それよりか、お花さんが、何うしてペンキ屋なんかになつたのだ

お花　やつぱり外のペンキ屋さん迄がペンキ屋になつたのと同じ譯よ。それより平山さんが何して棚瀨さんにおなりなの。

邦夫　いやお花さん、全くすまない。實は僕はこゝの長男なんだ。平山といふのは、あんな所に遊びに行く時の名前なんだよ。親父が無性にやかましいので、バーなんかに本名では行かれないのだよ。

お花　まあ。

邦夫　いやそればかりぢやない。僕はお花さんにはすまない事だらけなんだ。出來もしない約束ばかりして……然し今それで僕自身で苦しんでゐるのだ。けど、お花さんだつてあんな手紙一本で絶緣するなんて、隨分殘酷ぢやないか

お花　でも私……

邦夫　僕が此一年間どんなに苦しんだと思ふんだ。僕は、いろ〳〵出鱈目はいつたが、心持は眞劍だつたのだ。たゞ

僕の境遇では、あんな出鱈目をいふより外仕方がなかつたのだ。眞劍になればなるほど、現實を見まいとするものだから、つひそれが嘘になつて出るのだ。僕の心持の眞劍なことは、あの時分も今もちつとも異りやしない。それをお花さんは、手紙一本で……僕はどんなにあの手紙に苦しめられたか（泣く。）

お花（塗りながら）　ほんとうに濟みませんでしたわね。

邦夫　おいお花さん。――僕がこんなに一生懸命になつてゐるのに。お前は何んだ、平氣でペンキを塗つたりして…

お花（塗りながら）　でもペンキ屋が私の稼業なんですもの。これを怠けるとあしたから御飯がたべられないんですよ。泣いたり笑つたりして稼業を怠けても、お飯をたべるに差支ない人達がほんとうに羨しいわ。

邦夫（蒼くなつて怒つて）　さうだ。お前はやつぱりあすこらにうよ／＼してゐる女どものやうに、僕等を玩弄物にするけだものだつたのだな

お花（ふり返つて）　何ですつて？

邦夫　さうだ／＼。無垢な、世間知ずの、ちつとも疑はうことも知らない、何の罪咎もない僕のやうなものを、もてあそんで、踏み躙つて、勝鬨をあげてゐるんだな。よくも長い事僕を騙してゐたな。

お花　私、手紙にかいてあげた通りなのよ。騙すなんてそんなこと……

邦夫　嘘だ／＼。皆から嘘だ。お袋が男に玩弄物にされた仇きを討つために、石に嚙りついても立派な人間になつて見せると泣いて訴へたのに同情したのが、お前に對する私の愛の芽生だつたんだ。お前もその私の愛を、砂漠で見つけた花のやうだつて大事に抱いてゐてくれたぢやないか。あれは皆あすこらの女どもがよくやる手だつたんだな。ペンキの方が僕よりも大切だなんて、人を侮辱するにも程がある。

お花（塗りながら）　あなたはやつぱりそんな風に、女は男の持物だと思つてゐたから。私、あなたの持物にならないやうにペンキ屋になつたのですわ。あなたはつまり私をペンキやにしてくれた恩人なんだわ。

邦夫　何をいふ。僕はお前の恩人なんかにならうとは思つてやなしい。愛人にならうとしたのだ。

お花　私いまでもあなたを愛してゐるのよ。たゞあなたの持物ぢやないから、自由にはされないことよ。

邦夫　お前は全く誤解してゐる。僕はお前を持物にしやうなんて思つたことはないんだ。全くお前の生活を助けてやりたいと思つたゞけなんだ。それはお前よりもそれだけ僕に餘裕があつたからだ。

お花　嘘ばつかり。あなたの餘裕は、その頃だつて、お父さんの餘裕だつたんぢやありませんか。私は憚りながら、給料といふ私だけのものを持つてゐたんです。あなたのお父さんは、あなたの玩弄物にする爲めに、私といふ女の人間を買つて、あなたにあてがうとしたんですわ。私はあぶなく、張子の人形のやうに、あなたのお慰みに、なめられたりかきむしられたりして、一生をだいなしにする所だつたんですわ。

邦夫　さういはれると全く僕は面目ない。けれども、信じて貰ひたんだ。僕はお前を玩弄物にする氣なんかは、何といはれても毛頭なかつたんだ。あの時分にもよく云つた通り、僕は親や親類が何ういはうとも、お前を僕の妻にするつもりでゐたんだ。今ぢやもう、その考は僕の骨の髓にしみこんで、死んでしまつても離れない氣がする。それだのにお前は、手紙一本で僕を突つ離すなんて、あんまり殘酷だ。僕は、此一年間、何度最後の決心をしたか知れやしない。

お花　最後の決心なんかを何度でもするやうだから、あなた駄目なのよ。

邦夫　だめでもいゝ、お前の爲めなら僕は全く駄目な人間になつても遺憾はない。……でなくとも、もう全くだめな人間になつてゐるんだ。今日の五時には僕は、赤佐の娘を貰うか、一切を捨てるかの瀬戸際に立たなければならないん

だ。赤佐の娘を貰はうなんてことを僕の口からいふ位なら、僕は一切をすてゝ放浪生活に入つた方がいゝんだ。

お花　放浪生活なんてだめよ。

邦夫　でも僕にとつてはそれより外行く道はないのだ。

お花　放浪生活なんかよりも、ペンキ屋生活に入つた方がよつぽどいゝわ。

邦夫　おゝさうだ。（小躍りして）お前の生活の仲間入りをするんだ。僕はお前を持物にするどころか、僕がお前の持物にならうとしてゐるのだ。さうして、僕はちつともそれを後悔しないんだ。

お花　ぢや女ペンキ屋の御亭主になつて？

邦夫　ならないで何うするものか。お前が僕の愛をうけ容れてくれさへすれば、僕はお前の行く所には何處へでも行く。お前が僕の愛をうけ容れてくれなくつても、僕はお前の行く所へは、何處までもついて行くんだ。金だの名譽だのつてものを屁とも思つてゐないことは、僕の方がお前より上は手なんだ。僕は、そんなものを持つてゐる人間のつまらなさを長い事見せつけられて來たんだ。二六時中僕の眼の底にこびりついてゐるそんな下らない世界から僕は解放されたいんだ。もう一刻も我慢が出來ない。お前と一緒にペンキ屋の仕事をするのは、全くその解放の時が來たのだ。それが出來なければ僕は、赤佐子爵の令嬢を賣女に落す役目を演するより外はないのだ。それは奴隷を二人も三人も作つた上に自分がその奴隷の奴隷になることなのだ。同じ奴隷になるならば、お前といふ生き〱とした人間の奴隷になる方が何んなに幸福かしれやしない。いやそれは決して奴隷になるのぢやない。救はれるのだ。僕はペンキやになつて救はれるんだ。お前は僕をペンキ屋にした恩人なんだ。

お花　おや〱今度は私の方が恩人ね。

邦夫　お前は僕を解放に導いてくれた。おゝ、お前は奇蹟を働いたのだ。

お花　あなたさう昂奮しちや困るわね、昂奮してもいゝけど、ペンキ屋の御亭主ならペンキ屋の御亭主らしく昂奮するものよ。何んです、「おゝおゝお前は奇蹟を働いたんだ」なんて。ペンキが腐るわ。

邦夫　さうだ。全く僕は昂奮してゐた。それは學問や空想が僕を病氣にしたんだ。それに氣づいたのは、全くペンキ屋になつたお前を眼の前に見せつけられたからだ。こんな家にゐて頭の割れるほど考へても考へつかないことが、ペンキ屋になつたお前を一眼見ただけで、すぐと考へついたんだ。……僕はもう全く落付いた。僕は屹度ペンキ屋になれる。……もう昂奮しちやゐない。さうして充分ペンキ屋になれ相な氣がしてゐる。いやもうペンキ屋になつてゐる。

お花　ほんとう？　嬉しいわ。

邦夫　あツ！（倒れ相になる。）

お花（邦夫を支へて）何うしたの？

邦夫　お花さん！　今お前何を云つた。あゝ僕はもう何も云はん。いふ必要がなくなつてしまつた。

邦夫お花を抱かうとする。お花輕く身體を外らして、ペンキを塗りつゞける。

邦夫　あゝ私達はペンキ屋の執務中だつたつけ。

お花　新米さんは無理もないわ。私だつて始めのうちは、こんなやうなお邸に仕事に來て、お嬢さん方の弾いてゐるピアノなんぞが聽へると、つひ涙が出てしかたがなかつたものよ。

時計の半がなる。

邦夫　あゝドキツとした。……もう五時でも何時でも恐くも何ともない筈なのに。……だがぐづぐづしてはゐられな

い。もう此家に最後の暇を告げる時が來た。さアお花さん。二人でこゝから逃げ出さなければならない。

お花　そんなにあはてたつて、私大事の仕事がまだ仕上らないぢやないの。それに二人づれでのこ〳〵逃げられもしないぢやありませんか。

邦夫　でももうぢきに五時だ。まご〳〵してゐるとぬけられなくなる。

お花　あなたお一人で、先に私のとこへ行つてゝ下さい。(懐から名刺を出して)これが親方のうちですのよ。私こゝの二階にゐるの。そこへ行つて待つてゝ頂戴。誰れにもわかりつこないわ。

邦夫　さうだ、それがいゝ。どうもお前はよくかういふ際に落付いて考へることが出來るね。全く感服してしまつた。

お花　あなただつてペンキ屋になつてさへゐれば、何も怖いものがないからいくらでも落付いてゐられるんだわ。

邦夫　まだペンキ屋になりかけだからだめなんだ。ぢや僕は行くよ。成るべく早く歸つて來てくれ給へ。

邦夫退場。棚濱、夫人、芳江登場

芳江　ほうら、お父さん、ほんとでせう。ペンキ屋の姉さん。お父さんが女のペンキ屋なんか嘘だ〳〵つていふのよ。

お花　オッホッホ。よく御覽下さいつてさう仰つて頂戴。

號外の鈴聽へる。

棚濱　號外だな。芳江、玄關へ行つて、うちにも來てゐたら貰つておいで。

芳江　何の號外でせう。

芳江退場

夫人　愈定つたのでせうか。

棚濱　さア何うかな。

芳江登場

芳江（號外を見ながら）　あらお父さんの名前がないことよ。
棚濱　どれお見せ。（號外を見て）これは怪しからん。
夫人　何うしましたの？
棚濱　赤佐の奴、今朝もあれほどに受合つて出て行きながら、これは一體何事だ。
夫人（號外を受取つて）　まあ！　赤佐さんが御自身で文部大臣ね。この號外は確かしら。
棚濱　此新聞は確かなんだ。……奴め、自分は斷じて辭退するなんていゝ加減のことをいひよつて、この様は何だ。（怒りにふるへて）よし。それならば、此方にも考へがあるぞ。誰れがあんな貧乏華族の娘なんか貰つてくれるかツ。莫大な仕度金までくれてやるといふのを何と心得てゐるのだ。
芳江　あらをかしい。赤佐さんのこと、いつでも私が何かいふとお父さんすぐ怒る癖に。
棚濱　馬鹿ツ。子供なんかこんな所にゐるんぢやない。あつちへ行つて遊べ。
芳江　今日は皆が怒る日だこと。

芳江退場　お花隠れる。

夫人　でも赤佐さんもあんまりですことね。
棚濱　何。今に吠へ面をかきよるわい。銀行の方も、もう情け容赦は要らんこノちや。

書生登場

書生　赤佐子爵が御見へになりました。
棚濱　何赤佐。どの面さげて來よつたか。氣分が惡くて寢んでゐるといへ。……いや逢つてくれる。……こゝへ通せ。
　書生退場。赤佐子爵登場
赤佐　いや何うも忙しい事ぢや。がどうやら漕ぎつけました。
棚濱　いや赤佐君。おめでたう。
赤佐　おめでたう？　いや全く。然し、ご本人から無禮打ちなんぞは嚴しいね。
棚濱　ご本人？
赤佐（感づいて）　あゝその號外を見られたんぢやな。これは記者掛りの大失態で、今責任問題が起つてゐるのです。まだ發表の時期に達して居らんと云つてゐたのに、搦手から出てしまつて、然かも大間違ひと來てゐるので、いやはや、我輩も飛つ汁を喰つて大迷惑をしてゐる所です。
棚濱　ぢやまだ確定ぢやないのですか。
赤佐　いや殆んど確定だが、たゞあんたの文部を、一應僕が正式交渉の使者といふので、出掛けて來た譯です。つまらん手數のやうだが、念には念を入れんと、此號外のやうな間違もあるで。
棚濱　それは〳〵。いや今もこゝでいつてゐたんぢや。なあにあんたがなつて居れば、全くわしがなつてゐるも同然ぢやてな。アツハツハ。何れにしても御苦勞をかけたことぢや。何卒然るべく……
赤佐　いや今度は然るべくといふ譯には行かんでな、あんた自身、伯爵の所までお足勞を願うやうにといふことです。直ちに支度を何うぞ。

棚濱　いかにもさうあるべきぢやな。では一寸失敬して……

赤佐　あゝそれから、これは私事だが、例の御返事を一寸伺ひたいと思つて……

棚濱　おうそれ〳〵。實は御承知の通り今日は頗る混雜して居つたで、つひゆるりと話し合はんぢやつたが、……いや何もう格別話し合うこともないやうな譯だが……然し一寸あちらで相談、……（うはの空で）おい〳〵、邦夫をよべ、邦夫を……

夫人退場。

棚濱　何しろ年はいつても、今の若い者はまるで子供で、得てさういふ話を避けたがるでな。わし等の時代には、もうあの年頃には立派な親父ぢやつたもんぢやが……アッハッハッ。おい邦夫は居らんか……

夫人登場。

夫人　邦夫は部屋にも居りませんのよ。さつき何處かへ出て行つたとか申しますが、テーブルの上に父上樣へとしてこんな手紙が乘せてありました。あの返事でせうか

棚濱　何だ子供らしい。面と向つていふがいゝぢやないか。（封を切て讀む）何「御兩親樣へ」だ。何だと、ム…………何ぢや……おい邦夫を呼べ、すぐと呼べ。

夫人　邦夫は居りませんのよ。

棚濱　居らんから呼べといふのだ。おいこら誰れか居らんか……

赤佐、棚濱の向ふをむいてゐる間に手に持つ手紙をのぞき込む。

赤佐（覗きながら）何「私は永久に棚濱家を去ります」。何んだ。「貧乏華族救濟の結婚よりは、生きた女との結婚

を選びます。」……邦夫さんは家出したのぢやないですか。

夫人　まあ邦夫が家出したんですか。おゝ私……（泣きくづれる）

赤佐　おい棚濱氏。貧乏華族救濟の結婚の御返事が承りたいんだが、……いやもう承る必要もありますまい。

棚濱　いやそれは……

赤佐　御承諾下すつても、肝心の本人がドロンを極めては實行不能だ。さう心得てよろしいですな。

棚濱　……

赤佐　早速伯爵の下へ御同行を願ふ筈ぢやつたが、これ亦その必要もなくなりました。御取込中お互に大分手數が省ける譯で、アッハッハ。（號外を手に取り上げて）。棚濱君。此號外はやはり正確でしたな。新聞記者といふ奴は、まだ起らん先きの事を報導しよる。商賣柄とはいひながら機敏なものだ。……では格別こゝに居る用事もないで、失禮します。

　赤佐退場。お花登場（ペンキを塗る）

棚濱　邦夫の大馬鹿者めが。どこへでも行つてくたばつてしまへ。

夫人　えゝ私何うしたらいゝでせう。

　夫人泣き喚めきながら退場。しん子登場

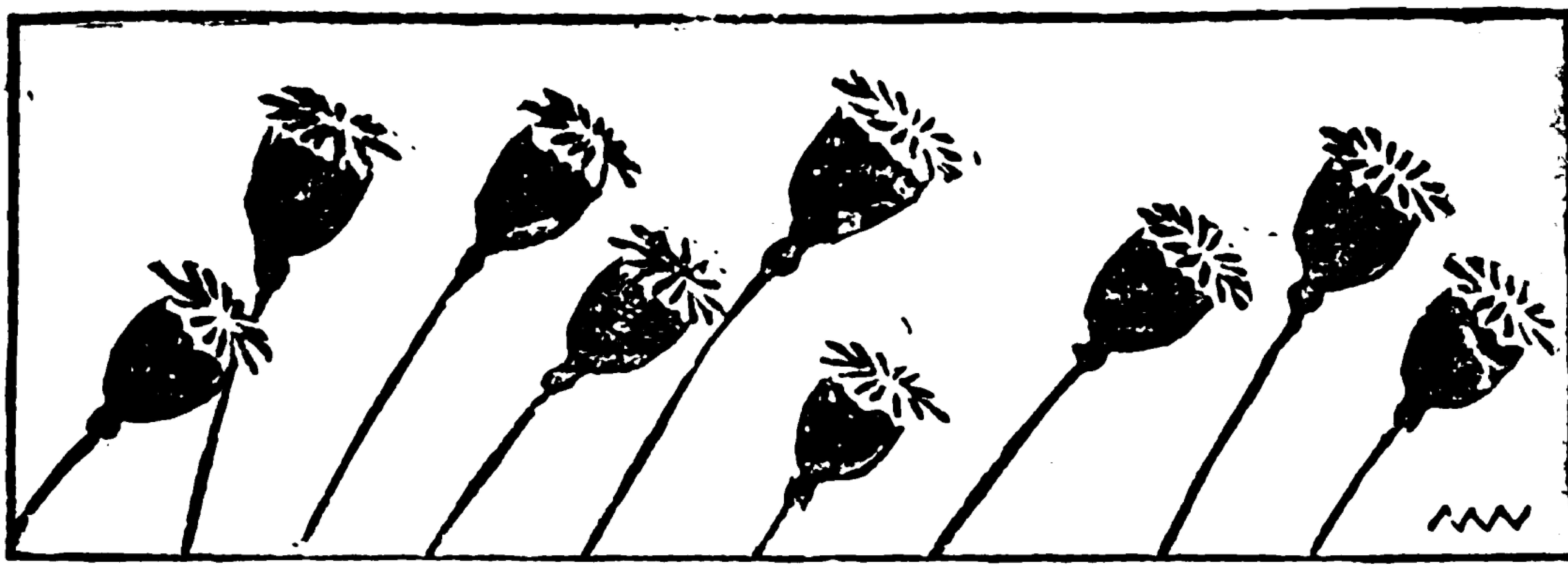
しん子　旦那、只今。あゝ息が切れる。内金二つだけ入れて、ちやんと契約を濟して參りました。

棚濱　おれも何うしたらいゝんだ。

　棚濱退場。

お花（塗りながら、ペースで）　アッハッハッハッのハだ。

（幕）



# 少年

芥川龍之介

## 一 クリスマス

昨年のクリスマスの午後、堀川保吉は須田町の角から新橋行の乘合自働車に乘つた。彼の席だけはあつたものの、自働車の中は相不變身動きさへ出來ぬ滿員である。のみならず震災後の東京の道路は自働車を躍らすことも一通りではない。保吉はけふもふだんの通り、ポケットに入れてある本を出した。が、鍛冶町へも來ないうちにとうとう讀書だけは斷念した。この中でも本を讀まうと云ふのは奇蹟を行ふのと同じことである。奇蹟は彼の職業ではない。美しい圓光を頂いた昔の西洋の聖者なるものの、——いや、彼の隣りにゐるカトリック教の宣教師は目前に奇蹟を行つてゐる。

宣教師は何ごとも忘れたやうに小さい横文字の本を讀みつづけてゐる。年はもう五十を越してゐるのであらう、鐵縁のパンス・ネエをかけた、鷄のやうに顏の赤い、短い頬鬚のある佛蘭西人である。保吉は横目を使ひながら、ちよつとその本を覗きこんだ、

Essai sur les ……あとは何だか判然しない。しかし内容は兎も角も、紙の黄ばんだ、活字の細かい、到底新聞を讀むやうには讀めさうもない代物である。

保吉はこの宣教師に輕い敵意を感じたまま、ぼんやり空想に耽り出した。大勢の小天使は宣教師のまはりに讀書の平安を護つてゐる。勿論異教徒たる乘客の中には一人も小天使の見えるものはゐない。しかし五六人の小天使は鍔の廣い帽子の上に、逆立ちをしたり宙返りをしたり、いろいろの曲藝を演じてゐる。と思ふと肩の上へ目白押しに並んだ五六人も乘客の顏を見廻しながら、天國の常談を云ひ合つてゐる。おや、一人の小天使は耳の穴の中から顏を出した。さう云へば鼻柱の上にも一人、得意さうにパンス・ネエに跨つてゐる。…………

自働車の止まつたのは大傳馬町である。同時に乘客は三四人、一度に自働車を降りはじめた。宣教師はいつか本を膝に、きよろきよろ窓の外を眺めてゐる。すると乘客の降り終るが早いか、十一二の少女が一人、まつ先に自働車へはひつて來た。褪紅色の洋服に空色の帽子を阿彌陀にかぶつた、妙に生意氣らしい少女である。少女は自働車のまん中にある眞鍮の柱につかまつたまま、兩側の席を見まはした。が、生憎どちら側にも空いてゐる席は一つもない。

「お孃さん。此處へおかけなさい。」

宣教師は太い腰を起した。言葉は如何にも手に入つた、心もち鼻へかかる日本語である。

「ありがたう。」

少女は宣教師と入れ違ひに保吉の隣へ腰をかけた。その又「ありがたう」も顏のやうに小ましやくれた抑揚に富んでゐる。保吉は思はず顏をしかめた。由來子供は――殊に少女は二千年前の今月今日、ベツレヘムに生まれた赤兒のやうに清淨無垢のものと信ぜられてゐる。しかし彼の經驗によれば、子供でも惡黨のない譯ではない。それを悉神聖がるの

は世界に瀰滿したセンティメンタリズムである。

「お孃さんはおいくつですか？」

宣教師は微笑を含んだ目に少女の顏を覗きこんだ。少女はもう膝の上に毛糸の玉を轉がしたなり、さも一かど編めるやうに二本の編み棒を動かしてゐる。それが目は油斷なしに編み棒の先を追ひながら、殆ど媚を帶びた返事をした。

「あたし？　あたしは來年十二。」

「けふはどちらへいらつしやるのですか？」

「けふ？　けふはもう家へ歸る所なの。」

自働車はかう云ふ問答の間に銀座の通りを走つてゐる。走つてゐると云ふよりは跳ねてゐると云ふのかも知れない。丁度昔ガリラヤの湖にあらしを迎へたクリストの舟にも伯仲するかと思ふ位である。宣教師は後ろへまはした手に眞鍮の柱をつかんだまま、何度も自働車の天井へ背の高い頭をぶつけさうになつた。しかし一身の安危などは上帝の意志に任せてあるのか、やはり微笑を浮かべながら、少女との問答をつづけてゐる。

「けふは何日だか御存知ですか？」

「十二月二十五日でせう。」

「ええ、十二月二十五日です。十二月二十五日は何の日ですか？　お孃さん、あなたは御存知ですか？」

保吉はもう一度顏をしかめた。宣教師は巧みにクリスト教の傳道へ移つるのに違ひない。コオランと共に劍を執つたマホメット教の傳道はまだしも劍を執つた所に人間同志の尊敬なり情熱なりを示してゐる。が、クリスト教の傳道は全然相手を尊重しない。恰も隣りに店を出した洋服屋の存在を教へるやうに慇懃に神を教へるのである。或はそれでも知

らぬ顏をすると、今度は外國語の授業料の代りに信仰を賣ることを勸めるのである。殊に少年や少女などに畫本や玩具を與へる傍ら、ひそかに彼等の魂を天國へ誘拐しようとするのは當然犯罪と呼ばれなければならぬ。保吉の隣にゐる少女も、――しかし少女は相不變編みものの手を動かしながら、落ち着き拂つた返事をした。

「ええ、それは知つてゐるわ。」

「ではけふは何の日ですか？　御存知ならば云つて御覽なさい。」

少女はやつと宣教師の顏へ水々しい黑目勝ちの目を注いだ。

「けふはあたしのお誕生日。」

保吉は思はず少女を見つめた。少女はもう大眞面目に編み棒の先へ目をやつてゐた。しかしその顏はどう云ふものか、前に思つたほど生意氣ではない。いや、寧ろ可愛い中にも知慧の光りの遍照した、幼いマリアにも劣らぬ顏である。保吉はいつか彼自身の微笑してゐるのを發見した。

「けふはあなたのお誕生日！」

宣教師は突然笑ひ出した。この佛蘭西人の笑ふ容子は丁度人の好いお伽噺の中の大男か何かの笑ふやうである。少女は今度はけげんさうに宣教師の顏へ目を擧げた。これは少女ばかりではない。鼻の先にゐる保吉を始め、兩側の男女の乘客は大抵宣教師へ目をあつめた。唯彼等の目にあるものは疑惑でもなければ好奇心でもない。いづれも宣教師の哄笑の意味をはつきり理解した頬笑みである。

「お孃さん。あなたは好い日にお生まれなさいました。けふはこの上もないお誕生日です。世界中のお祝ひするお誕生日です。あなたは今に、――あなたの大人になつた時にはですね、あなたはきつと……」

宣教師は言葉につかへたまゝ、自働車の中を見廻した。同時に保吉と目を合はせた。宣教師の目はパンス・ネエの奥に笑ひ涙をかがやかせてゐる。保吉はその幸福に滿ちた鼠色の目の中にあらゆるクリスマスの美しさを感じた。少女は――少女もやつと宣教師の笑ひ出した理由に氣のついたのであらう、今は多少拗ねたやうにわざと足などをぶらつかせてゐる。

「あなたはきつと賢い奥さんに――優しいお母さんにおなりなさるでせう。ではお嬢さん、さやうなら。わたしの降りる所へ來ましたから。では――」

宣教師は又前のやうに一同の顏を見渡した。自働車は丁度人通りの烈しい尾張町の辻に止まつてゐる。

「では皆さん、さやうなら。」

數時間の後、保吉はやはり尾張町の或るバラツクのカフエの隅にこの小事件を思ひ出した。あの肥つた宣教師はもう電燈もともり出した今頃、何をしてゐることであらう? クリストと誕生日を共にした少女は夕飯の膳についた父や母にけさの出來事を話してゐるかも知れない。保吉も亦二十年前には娑婆苦を知らぬ少女のやうに、或は罪のない問答の前に娑婆苦を忘却した宣教師のやうに小さい幸福を所有してゐた。大德院の緣日に葡萄餅を買つたのもその頃である。二州樓の大廣間に活動寫眞を見たのもその頃である。………

「本所深川はまだ灰の山ですた。」

「へええ、さうですかねえ。時に吉原はどうしたんでせう?」

「吉原はどうしましたか、――淺草にはこの頃お姫樣の淫賣が出ると云ふことですな。」

隣りのテエブルには商人が二人、かう云ふ會話をつづけてゐる。が、そんなことはどうでも好い。カフエの中央のク

リスマスの木は綿をかけた針葉の枝に玩具のサンタ・クロオスだの銀の星だのをぶら下げてゐる。瓦斯煖爐の炎も赤あかとその木の幹を照らしてゐるらしい。けふはお目出たいクリスマスである。「世界中のお祝するお誕生日」である。保吉は食後の紅茶を前に、ぼんやり卷煙草をふかしながら、大川の向うに人となつた二十年前の幸福を夢みつづけた。……

この數篇の小品は一本の卷煙草の煙となる間に、續々と保吉の心をかすめた追憶の二三を記したものである。

## 二　道の上の秘密

保吉の四才の時である。彼は鶴と云ふ女中と一しよに大溝の往來へ通りかかつた。黑ぐろと湛へた大溝の向うは後に兩國の停車場になつた、名高い御竹倉の竹藪である。本所七不思議の一つに當る狸の莫迦囃子と云ふものはこの藪の中から聞えるらしい。少くとも保吉は誰に聞いたのか、狸の莫迦囃子の聞えるのは勿論、おいてき堀や片葉の葭も御竹倉にあるものと確信してゐた。が、今はこの氣味の惡い藪も狸などは何處かへ逐ひ拂つたやうに、日の光の澄んだ風の中に黄ばんだ竹の秀をそよがせてゐる。

「坊ちやん、これを御存知ですか？」

つうや（保吉は彼女をかう呼んでゐた。）は彼を顧みながら、人通りの少ない道の上を指した。土埃の乾いた道の上には可成太い線が一すぢ、薄うすと向うへ走つてゐる。保吉は前にも道の上にかう云ふ線を見たやうな氣がした。しかし今もその時のやうに何かと云ふことはわからなかつた。

「何でせう？　坊ちやん、考へて御覽なさい。」

これはつうやの常套手段である。彼女に何を尋ねても、素直に敎へたと云ふことはない。必ず一度は嚴格に「考へて

御覽なさい」を繰り返すのである。嚴格に——けれどもつうやは母のやうに年をとつてゐた譯でもなんでもない。やつと十五か十六になつた、小さい泣黑子のある小娘である。もとより彼女のかう云つたのは少しでも保吉の教育に力を添へたいと思つたのであらう。彼もつうやの親切には感謝したいと思つてゐる。が、彼女もこの言葉の意味をもつとほんたうに知つてゐたとすれば、きつと昔ほど執拗に何にでも「考へて御覽なさい」を繰り返す愚だけは免れたであらう。保吉は爾來三十年間、いろいろの問題を考へて見た。しかし何もわからないことはあの賢いつうやと一しよに大溝の往來を歩いた時と少しも變つてはゐないのである。……………

「ほら、こつちにももう一つあるでせう? ねえ、坊ちやん、考へて御覽なさい。このすぢは一體何でせう?」

つうやは前のやうに道の上を指した。成程同じ位太い線も三尺ばかりの距離を置いたまま、土埃の道を走つてゐる。保吉は嚴粛に考へて見た後、とうとうその答を發明した。

「何處かの子がつけたんだらう、棒か何か持つて來て?」

「それでも二本並んでゐるでせう?」

「だつて二人でつけりや二本になるもの。」

つうやはにやにや笑ひながら、「いいえ」と云ふ代りに首を振つた。保吉は勿論不平だつた。しかし彼女は全知である。云はばDelphiの巫女である。道の上の秘密もとうの昔に看破してゐるのに違ひない。保吉はだんだん不平の代りにこの二すぢの線に對する驚異の情を感じ出した。

「ぢや何さ、このすぢは?」

「何でせう? ほら、ずつと向うまで同じやうに二すぢ並んでゐるでせう?」

實際つうやの云ふ通り、一すぢの線のうねつてゐる時には、向うに横たはつたもう一すぢの線もちやんと同じやうにうねつてゐる。のみならずこの二すぢの線は薄白い道のつづいた向うへ、永遠そのもののやうに通じてゐる。これは一體何の爲に誰のつけた印しであらう？　保吉は幻燈の中に映る蒙古の大沙漠を思ひ出した。二すぢの線はその大沙漠にもやはり細ぼそとつづいてゐる。……

「よう、つうや、何だつて云へば？」

「まあ、考へて御覽なさい。何か二つ揃つてゐるものですから。——何でせう、二つ揃つてゐるものは？」

つうやもあらゆる巫女のやうに漠然と暗示を與へるだけである。保吉は愈熱心に箸とか手袋とか太鼓の棒とか二つあるものを並べ出した。が、彼女はどの答にも容易に滿足を表はさない。唯妙に微笑したぎり、相不變「いいえ」を繰り返してゐる。

「よう、教へておくれよう。ようつてば。つうや。莫迦つうやめ！」

保吉はとうとう癇癪を起した。父さへ彼の癇癪には滅多に戰を挑んだことはない。それはずつと守りをつづけたつうやも亦重々承知してゐる。彼女はやつとおごそかに道の上の秘密を說明した。

「これは車の輪の跡です。」

これは車の輪の跡です！　保吉は呆つ氣にとられたまま、土埃の中に斷續した二すぢの線を見まもつた。同時に大沙漠の空想などは蜃氣樓のやうに消滅した。今は唯泥だらけの荷車が一臺、寂しい彼の心の中にをのづから車輪をまはしてゐる。……

保吉は未だにこの時受けた、大きい教訓を服膺してゐる。三十年來考へて見ても、何一つ碌にわからないのは寧ろ一

生の幸福かも知れない。

## 三　死

これもその頃の話である。晩酌の膳に向つた父は六兵衛の盃を手にしたまま、何かの拍子にかう云つた。

「とうとうお目出度なつたさうだな、ほら、あの槇町の二絃琴の師匠も。……」

ランプの光は鮮かに黒塗りの膳の上を照らしてゐる。かう云ふ時の膳の上ほど、美しい色彩に溢れたものはない。保吉は未だに食物の色彩――鱲(からすみ)だの焼海苔だの酢蠣だの辣韮だのの色彩を愛してゐる。尤も當時愛したのはそれ程品の好い色彩ではない。寧ろ悪どい刺戟に富んだ、生なましい色彩ばかりである。彼はその晩も膳の前に、一摑みの海髪(うご)を枕にしためじの刺身を見守つてゐた。すると微醺を帶びた父は彼の藝術的感興をも物質的欲望と解釋したのであらう、象牙の箸をとり上げたと思ふと、わざと彼の鼻の上へ醤油の匂のする刺身を出した。彼は勿論一口に食つた。それから感謝の意を表する爲、かう父へ話しかけた。

「さつきはよそのお師匠さん、今度は僕がお目出度なつた！」

父は勿論、母や伯母も一時にどつと笑ひ出した。が、必しもその笑ひは機智に富んだ彼の答を了解した爲ばかりでもないやうである。この疑問は彼の自尊心に多少の不快を感じさせた。けれども父を笑はせたのは兎に角大手柄には違ひない。且又家中を陽氣にしたのもそれ自身甚だ愉快である。保吉は忽ち父と一しよに出來るだけ大聲に笑ひ出した。

すると笑ひ聲の靜まつた後、父はまだ微笑を浮べたまま、大きい手に保吉の頸すぢをたたいた。

「お目出度なると云ふことはね、死んでしまふと云ふことだよ。」

あらゆる答は鋤のやうに問の根を斷つてしまふものではない。寧ろ古い問の代りに新らしい問を芽ぐませる木鉄の役にしか立たぬものである。三十年前の保吉も三十年後の保吉のやうに、やつと答を得たと思ふと、今度はその又答の中に新らしい問を發見した。

「死んでしまふつて、どうすること？」

「死んでしまふと云ふことはね、ほら、お前は蟻を殺すだらう。……」

父は氣の毒にも丹念に死と云ふものを說明し出した。が、父の說明も少年の論理を固守する彼には少しも滿足を與へなかつた。成程彼に殺された蟻の走らないことだけは確かである。けれどもあれは死んだのではない。唯彼に殺されたのである。死んだ蟻と云ふ以上は格別彼に殺されずとも、ぢつと走らずにゐる蟻でなければならぬ。さう云ふ蟻には石燈籠の下や冬靑の木の根もとにも出合つた覺えはない。しかし父はどう云ふ譯か、全然この差別を無視してゐる。……

「殺された蟻は死んでしまつたのさ。」

「殺されたのは殺されただけぢやないの？」

「殺されたのも死んだのも同じことさ。」

「だつて殺されたのは殺されたつて云ふもの。」

「云つても何でも同じことなんだよ。」

「違ふ。違ふ。殺されたのと死んだのとは同じぢやない。」

「莫迦、何と云ふわからないやつだ。」

父に叱られた保吉の泣き出してしまつたのは勿論である。が、如何に叱られたにしろ、わからないことのわかる道理

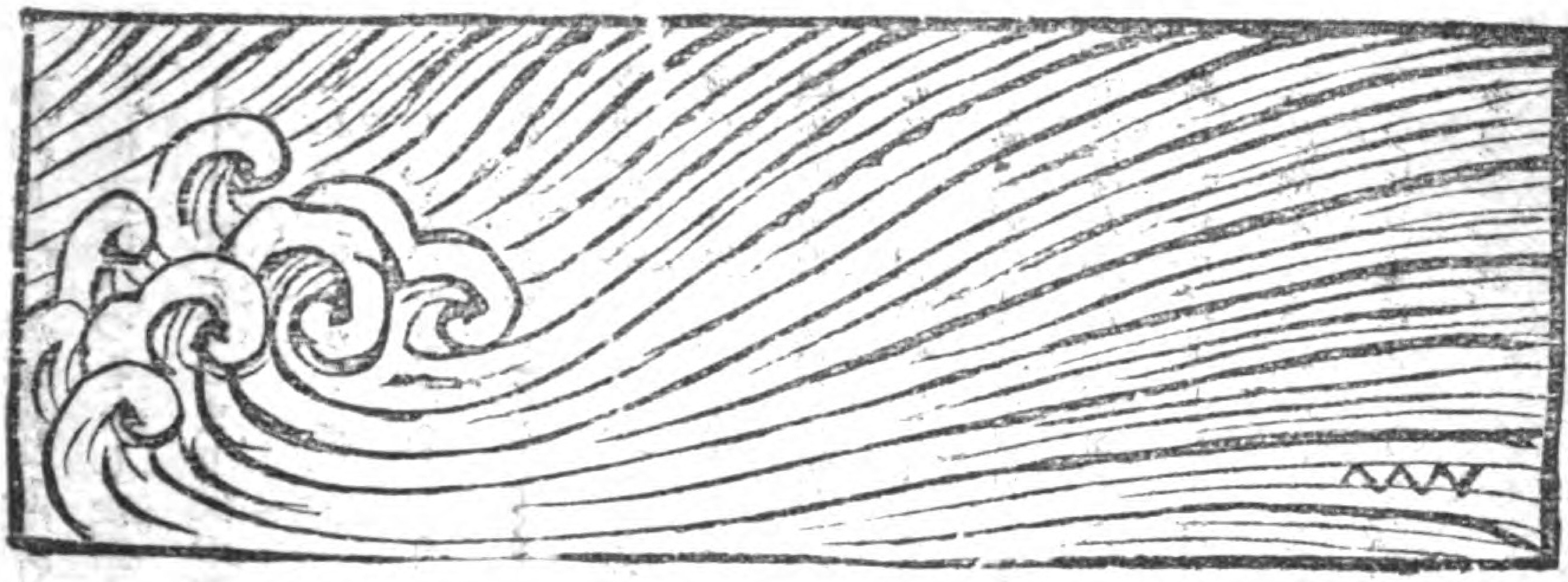
はない。彼はその後數箇月の間、丁度一とかどの哲學者のやうに死と云ふ問題を考へつづけた。死は不可解そのものである。殺された蟻は死んだ蟻ではない。それにも關らず死んだ蟻である。この位秘密の魅力に富んだ、捕へ所のない問題はない。保吉は死を考へる度に、或日回向院の境内に見かけた二匹の犬を思ひ出した。あの犬は入り日の光の中に反對の方角へ顏を向けたまま、一匹のやうにぢつとしてゐた。のみならず妙に嚴肅だつた。死と云ふものもあの二匹の犬と何か似た所を持つてゐるのかも知れない。……

すると或火ともし頃である。保吉は役所から歸つた父と薄暗い風呂にはひつてゐた。はひつてゐたとは云ふものの、體などを洗つてゐたのではない。唯胸ほどある据ゑ風呂の中に恐る恐る立つたなり、白い三角帆を張つた帆前船の處女航海をさせてゐたのである。其處へ客か何か來たのであらう、鶴よりも年上の女中が一人、湯氣の立ちこめた硝子障子をあけると、石鹼だらけになつてゐた父へ旦那樣何とかと聲をかけた。父は海綿を使つたまま、「よし、今行く」と返事をした。それから又保吉へ顏を見せながら、「お前はまだはひつてお出。今お母さんがはひるから」と云つた。勿論父のゐないことは格別帆前船の處女航海に差支へを生ずる次第でもない。保吉はちよつと父を見たぎり、「うん」と素直に返事をした。

父は體を拭いてしまふと、濡れ手拭を肩にかけながら、「どつこいしよ」と太い腰を起した。保吉はそれでも頓着せずに帆前船の三角帆を直してゐた。が、硝子障子のあいた音にもう一度ふと目を擧げると、父は丁度湯氣の中に裸の背中を見せたまま、風呂場の向うへ出る所だつた。父の髮はまだ白い譯ではない。腰も若いもののやうにまつ直である。しかしさう云ふ後ろ姿はなぜか四才の保吉の心にしみじみと寂しさを感じさせた。「お父さん。」——一瞬間帆前船を忘れた彼は思はずさう呼びかけようとした。けれども二度目の硝子戸の音は靜かに父の姿を隱してしまつた。あとには唯湯

の匂に滿ちた薄明りの擴がつてゐるばかりである。

保吉はひつそりした据ゑ風呂の中に茫然と大きい目を開いた。同時に從來不可解だつた死と云ふものを發見した。——死とはつまり父の姿の永久に消えてしまふことである！



# 蠢く者

葛西善藏

父は一昨年の夏、六十五で、持病の脚氣で、死んだ。前の年義母に死なれて孤獨の身となり、急に家財を片附けて、年暮れに迫つて前觸れもなく出て來て、牛込の弟夫婦の家に居ることになつたのだ。その時分から父はかなり歩くのが難儀な樣子だつた。杖無しには一二町の道も骨が折れる風であつたが、自分等の眼には、一つは老衰も手傳つてゐるのだらうとも、思はれた。自分も時々鎌倉から出て來て、二三度も一緒に風呂に行つたことがあるが、父はいつもそれを非常に臆劫がつた。「脚に力が無いので、身體が浮くやうで氣持がわるい」と、父は子供のやうに浴槽の縁に摑まりながら、極りなげな表情をした。流し場を歩くのを危ぶながつて、私に腕を支えられながら、引きずられるやうにして、やうやくその萎びた細脛を運ぶことが出來た。

「こんなに瘠せてゐるやうで、これでやつぱし浮腫んでゐるんだよ」と、父は流し場で向脛を指で押して見せたりした。

「やつぱしすこし續けて藥を飲んで見るんですね」

「いや、わしの脚氣は持病だから、薬は效かない。それよりも、これから毎日すこしづゝそこらを歩いて見ることにしよう。さうして自然に脚を達者にするんだな。そして通じさへついて居れば……」と、父はいつも服薬を退けた。

父、弟夫婦、弟たちのところから小學校に通はせてある私の十四になる悴、父が來て二三日して産れた弟の長男——これだけの家族であつた。牛込も奥の低い谷のやうになつたごみ〳〵した町の狹い通りは、近所に大きな印刷會社があつて、そのため人通りも荷馬車などの往來も、かなり劇しかつた。さうした通りを、午前午後の時刻を計つては、日當りのいゝ玄關わきの二疊に寢かした赤んぼを根氣よくあやした後で、田舍から着て來た帽子のついた古外套に腰の曲つた身體をつゝみ、竹杖に縋つては、よち〳〵と軒下を傳ふやうに歩いてゐる父の姿に、偶然鎌倉から出て來た自分が出會ひ、思はず涙を飲むやうな氣持に打たれたことがあつた。自分には、父の氣持が解る氣がした。「父の散歩！」悲しい微笑の氣持で自分は斯う呟いたが、がむしろ、それは傷ましい氣持のものだつた。父は孫たちのために生きたく思つてゐる——自分は心の中で父に感謝した。

私と同じやうに父は酒飲みで、どんな病氣の場合でも酒を節するとか、養生に努めたりするとか云うやうな性質の人ではなかつた。田舍にゐても生來の氣無性と脚の不自由から、滅多に外へは出なかつた父が、この東京のごみ〳〵した劇しい通りの街中を、脚を達者にするため散歩する——さうした父の心持は、生活に對する自分等の心持までも、いくらか明るい方に向けて呉れた。

父は三度ほど、弟や私の悴といつしよに、私の五年越し部屋借りの、建長寺内の山の上の寺に來て、夜遲くまで酒を飲み合つた。

「此頃やはり、毎日少しづゝでも歩くせゐか、脚の具合がたいへんいゝやうだ」と、最後に見えたのは三月下旬だつた

が、父はさう云つて悦んでゐた。

「それは結構ですね。しかし、何しろあの邊はあんなひどい通りだから、散歩も餘程氣を附けなさらないと。もしなんでしたら、どうです、當分こつちへ來てませんか。この通り部屋は廣いんですし、閑靜ですし、散歩も庭だけで間に合ふんだから……」

「いや、わしが來たところで仕方がないさ。獨り者のお前のところより、やはり子供たちといつしよの方がいゝ。わしには東京の散歩で結構だ」と、父はかぶりを振るやうにして云つた。

がその父の日課の散歩も、それから後いくらも續かなかつた。五月初め頃から父は床に就くやうになり、七月中旬に死んだ。一切の藥餌も受けなくなり、絕食同樣の日が二十日近くも續いて、ほとんど骸骨のやうに瘠せてしまつたが、元來が頑丈な體質の、殊に永年の飲酒や持病の脚氣にも左程に弱らされてゐなかつたらしい强い心臟の爲めに、却つて死の苦痛を長引かせることになつた。失敗と不幸の一代を送つて來て、特に生の執着心を失つてゐたらしく見えた父の、最後に見せて呉れた根强い生への執着は、其後自分にいろ／＼なことを考へさせた。……

が、こゝまで書いて來て、フツト、自分ながらひどく意氣込んで書いて來たことにテレた氣持になり、ペンを止めてついこの四五日前から始めた日課の散歩にと、下宿を出た。六疊の部屋の隅の壁に押附けられたやうに座つて、何ケ月にも袖も附けない蓬々とした櫛卷の髮を見せて、おせいは、此間友人のTの細君から裏地まで添えて貰つて來た木綿縞の袷を、幾日かかゝつて縫つてゐるのを、今日もひろげてゐた。自分は外套を着、鳥打帽をかぶつて、默つて出て來た。

近くの本郷三丁目の交叉點を横切るのさへ、自分にはいつもかなりの思ひだつた。きまりのやうに一二回は屹度交通

巡査の合圖を躊躇した後、思ひ切つて不自由な脚してよら〳〵と驅けるやうに線路を超して、初めてほつと息を吐く。そこから左り側の步道を、店屋の飾り窓を覗いたり、本屋の雜誌の表紙を見たり、露店の古本をひやかしたりしては、出來るだけゆつくりと一高前の角のところまで步き、そこから同じ道を歸つて來る――と云ふだけのほんの短い散步なのだ。父のやうに竹の杖は持たないが、外套の襟を立て、兩手をポケットに突込み、脊を曲げて、膝の屈折が自由にならないやうな賴りない感じで、一步々々と氣をつけて步くのだ。一二ケ月前から麻痺の感じは消えたのだが、運動筋の神經は容易に恢復しないのらしい。自分はあの浜地のごみ〳〵した通りを步いてゐた父の姿を思ひ出す。そして自分の姿を顧みる。だが散步と云ふことも、日課とするべく何と云ふ臆劫な、面白味のない退屈な仕事だらう。父にもさうだつたに違ひないのだ。だが、父は長生きしたいと思つてそれを續けたのだらうが、俺もやはり、それなんか知ら？　同じ退屈するなら、やはり蒲團の中にもぐり込んでゐるか、地震で柱の歪んだ部屋の黃色い壁――附鴨居の下や天井下の小壁などにひどいひゞを見せた壁に向つて、煙管の煙でも吹いてゐた方が、まだしもましぢやないか知ら？　部屋の隅にはおせいが借りて來た猫かのやうに、座蒲團も敷かず火鉢も當がはれず、ぼろ〳〵になつた着物を着て、脊を丸くして座つて、ちよい〳〵臆病らしく眼をあげて俺の不機嫌な顏色をぬすみ見てゐる。俺は氣の附かないやうな風をして「これがまだ二十五と云ふ若い女なのだ。そして俺だつてまだ三十八と云ふ年齡の男なのだ。それがどうしたと云ふのだらうこの老ぼれ方がさ……」と云つたやうなことを、ぼんやりと考へてゐる。それが、斯うした生活が、もう半年から續いてゐる――とふと考へて來ると、自分は譯のわからない呻き聲のやうなものが腹の底からこみあげて來るやうな衝動を感じて、ついふら〳〵とこの臆劫な日課に出かけて來ると云つたやうな氣持でもあつた。

三月上旬だと云ふに、前の晩小指大の雹が降つたとかで、厭な寒い風の吹く日だつた。一高前から例に依つて引返

うとして、ふとTの休みの日だことを思ひ出し、勇氣を出して駒込まで歩いて行つた。Tは二三日前から風を引いて休んでゐると云つて、床に就いてゐた。

「君の方へも何とも云つて來ないかい？　僕の方へもあれつきりなんだがね……」と、Tが私が座るなり云ひ出した。

「いや、僕の方へは何とも云つて來つこないだらう、あゝして歸したんだから。それにしても君の方へ何とも云つて來ないと云ふのは、をかしいね。また人事相談へでも持込むつもりかな。無茶なことを考へ出されちや、弱るからね」

「人事相談とはしかし考へたもんだね。が二度とはもうあんなことしやしないだらう。だいぶ悄げてゐたやうだつたぢやないか」

「しかし田舍の人たちのやることはわからないからな。どつちみちあれが歸ると一等いゝんだがね、無理に追出すと云ふ譯にも行かず、實際今度は僕も弱つたよ。仕事は手に附かず、下宿の方は溜るし、いつそどこかへ遁走でもしようかと考へてゐる」

「そいつは可哀相だよ。それにしても一體どんな考へでゐるのかね、あの子も。一生君のそばに居りたいと云ふほどの考へでもなさゝうだし、君の妻子のことも何もかも承知してゐるんだしね、それに毎日あゝして小さくなつてゐて、晩には晩で醉拂つて打たれるだらうしね。それでも歸らうと云はないんだから、一寸あの子の了見にもわからないところがあるね」と、Tは探るやうな眼付を見せた。

「それが僕にもわからないんだよ。それがはつきりわかつてゐると、どうにも僕の氣持をきめることが出來るんだけれど、幾ら問詰めて行つても更にはつきりした手答へがないんでね、そして何かしら野生の動物めいた感じの執拗な眼付をして、あゝしていちんち部屋の隅つこにうづくまつてゐるんだからね、つい酒でも飲むと打つたりなんかするやうな

ことになるんだよ。ゆうべも夜中に隣りの學生君に怒鳴られたよ。解決は明日俺がつけてやるから、今夜は寢ちまへ、毎晩々々勉强の邪魔ぢやないか、もう二時だぞ、人間には誰にだつて神經と云ふものがあるんだからね——ひどく叱られちやつたね」

「神經があるはよかつたな。何しろ下宿でもひどく迷惑してゐることだらうから、少し氣をつけるんだね。自分の身から出た錆ぢやないか。それでは兎に角先方から手紙の來次第僕が鎌倉へ行つてどつちかへ話をきめて來るが、その結果で、それでは當分君のところへ預けると云ひ出したら、君にそれだけの責任が持てるか?」

「そりや仕方がないだらう。僕は田舍の女房にもすつかり打明けて、田舍へ引込むやうな場合には伴れて行つてもいゝと云ふことになつてゐるんだがね、唯一つ困つたことは、あれがもう姙娠してゐて、何故かそれを俺に隱してゐるんぢやないかと云ふ氣がされて仕方がないんだがね。それを此間來た叔父さんと云ふのに打明けたか打明けなかつたか、打明けてあるとすると、君が出かけて行つても話が一寸面倒になると思ふんだ。俺は實際長い間あれが女だと云ふことを頭に入れたことがなかつたやうで、今度いつしよに居られて見て、始めてあれもやはり女と云ふ恐ろしい難物なんだつたと氣がついて見ると、俺も實はほんとから怖くなり出して、此頃では僕の方がだん／＼降參しかけてゐる形ちなんだ。子供の出來ることは怖くないが、女そのものが俺には怖い……」と自分もつい昂奮して來て、嘆息するやうに云つた。

「それは迂濶だつたねえ!」と、Tも難かしい顏付を見せて云つた

「たしかに迂濶だつた。僕もあれが來た當座からそのことを考へなかつたわけでもなかつたのだが、どうも不自然な防ぎ方をしようと云ふやうな氣にはなれなかつたのだね。あゝ、自然と云ふ奴には敵はないなあ……」と、自分はまたも嘆息せずに居れなかつた。

「しかしそれが、確かにさうなのか？　さうときまつたとなると、一寸問題だね」
「それが僕にもはつきりしたことがわからないのだ。あいつが何かしら意地くねわるい氣持から俺にまだ隱してゐるのか、さうらしく見せかけてゐるのか、どうもよくわからない。よし！　今夜こそひとつはつきりと訊いて見てやらう……」
「そんな話は醉はん時優しく訊いて見る方がいゝから、今夜は止したまへな。もし何だつたら、うちの細君に訊かして見るから、何とか云つてうちへよこすことにしたまへ」
Tに忠告されて、すつかり疲れた暗い氣持になつて、電車で歸つて來た。ところがまた、その晩遲く、醉つた揚句に飛んでもない淺ましい活劇を演じてしまつた。
姙娠の詰問から、つい此間の警察の人事相談の方へと脫線したのが始まりだつた。日暮れ時分巡査が差紙を持つて來て、おせいが顏色を變へて行つて見ると、鎌倉から叔父が出て來てゐた。が結局警察でも「もう子供のことではないんだから、無理に引擦るやうにして伴れて行つても、女の方から追かけて來るやうなんだと、また飛び出して來るんだから、そこはよく納得の行くやうに話をして、伴れて歸るがいゝだらう」と、叔父に云ふほかなかつた。おせいには「お前さんは、その人への貸金を取立てゝ歸ふと云つて出て來たんださうだが、今訊くと、うちへは當分歸りたくないからどこか奉公口の見つかるまでその人の下宿に厄介になつて居ると云ふんだが、そんなに長く厄介になつてゐて、もし宿料でも請求されるやうなことにでもなると、折角のお前さんとこの貸金だつて取れないやうなことにならんとも限らんからね。よくその邊のことも考へて見て、叔父さんといつしよに歸ることにしたらいゝだらう。兎に角一應その人の下宿へ行つてよく相談するんだな」と云つた。叔父はその晩私の部屋に泊つたが、結局伴れて歸ることが出來なかつた。

「俺が迷惑だ！ 歸れ！ 歸れ！」と、自分は例の調子で、眼を据ゑて、大聲で怒鳴つた。「いきなり警察へ持込んりだなんかして、俺だつていゝ恥さらしぢやないか。悪黨奴！ お前さへ歸つて行けば、双方に文句がないんぢやないか。一體どんな氣持で、いつまでも斯うして根つこんでゐるのか、それをはつきり云つて見たらいゝぢやないか。俺が迷惑だと云ふことが、お前にわからないのか。俺は獨りになりたいんだ。それでないと仕事が出來ないんだ。さう頼むやうに、云つて來てるんぢやないか。斯うして毎日氣を腐らして、仕事は出來ないし、宿料は溜るし、今日も女房から、長男も長女もこの頃入學試驗の準備で夜も十二時近くまで勉強してゐる、せめて毎日玉子の一つ宛でもやりたいと思ふがそれも自由にならない有樣で不憫だと、云つて來てる位ゐなんだ。さうした受驗準備の費用さへ俺には送れないんだ。試驗が受かれば受かつたで、その準備も考へなければならないんだから、そして後一ケ月と間がないんだからね。兎に角明日にも早速歸つて行つて貰はう。俺も隨分長い間お前の厄介になつた。それは知つてる。がそれは、別の方法で屹度返す。が斯うした下宿での同居生活だけは、これ以上俺には我慢が出來ない。そして田舍の女房子供たちまでも、お前といつしよのことを知つてゐる、そして俺は子供たちに玉子喰はす金さへ送れないのだ。歸つて呉れ！ 歸つて呉れ！ 俺は氣が狂つちまふぞ！ 氣が狂つちまふぞ！」と、自分は齒をギリ〳〵嚙み合しながら、あたりの學生たちが此頃試驗前の勉強中なのも忘れて、怒鳴り續けた。

　今朝妻の手紙を讀んだ時には左程にも強く感じなかつた玉子と云ふ言葉が、斯う怒鳴り續けてゐるうち、醉拂つた頭の中にふと閃めくやうに喚びかへされた。自分は一寸眼を瞑つて、拂ひ退けたい氣持から、頭を激しく振つて見た。あの九月一日の地震當時の思ひ出――鬼門々々、あれが一切の破壞者だつたのだ。「だが玉子？ 玉子がどうしたと云ふんだつたつけな？……あ、さうか、俺はその玉子で生命を助かつたと云ふわけなんだ」と、はつきり考へ浮んだ。

その日も自分は遲く起きて、宿醉の氣分で朝飯を拔いて、机の上に鏡を立て、石鹸の泡を顏いつぱい塗りたくつて、右の揉上げから剃刀をスーッと一當て頰へと下ろしたところへ、丁度ドシンと來た。自分は剃刀の手を止めてあたりを視廻したが、何しろ古いには古いが巖丈に出來た建物のことだから、裏の崖崩れは恐れたが家は滅多に潰れるやうなことはないと、泡を喰つて飛び出すほどの決心は突嗟には起らなかつたのだが、十疊の入り口の杉戸を一枚開けて風通しのいゝところへおせいが朝運んで來て置いて行つたお鉢の上にお膳が載つてゐて、小丼の中にその日一日分の玉子の三つが積まれてあつたが、その一つが疊の上に落ちて流れ出した。

「これはかなり强いぞ。疊を汚してはいけないな……」自分は斯う思つて、まだ一寸無性してゐたい氣持だつたが、剃刀を机の上に置いて、お膳の傍まで二間程の疊の上を步いて行つた時、グワラ〳〵ッと來て激しく自分の身體が杉戸に打かつたので、そのまゝ半ば夢中で跣足で玄關から飛び出し、匍ひずるやうにして二間程も外へ出て、ふと後をふり返つた刹那、二階建の茅葺きの棟がペチャンとなつてゐた。玄關わきの茶の間にゐた老僧夫婦と門前通りの男の人で、槇の枝を貰ひに來てお茶を飲んでゐた三人とが、下敷きになつた。幸ひに三人とも怪我もなく半時ほどして出て來たが崖崩れが續き、五寸程の地割れが出來たりして、辛じて芍藥畑の隅の山茶花の下に戸板を持つて來て老僧夫婦と自分との三人が寄りかたまつて、搖れて來る度に山茶花の幹にしがみ附いてゐた。建長寺內の大建物は山門を殘したほか悉く潰れて、大方丈の裏の大崖はまださかんに凄じい音を立てゝ崩れてゐた。二時間ほどしたが自分等の山の上の寺を誰も訪ねては來ず、自分も老夫婦を殘して下の樣子を見に行くのも氣がゝりだつた。自分は高い石段の上から杉の樹の間を透して建長寺の大本堂、方丈、佛殿などの潰れた屋根を見下ろして、さつきの叫び聲から想像してもかなりの人死にもあつたことゝ、云ひやうのない氣持で突立つてゐた。さうした場合、最初に、石段の下から「Nさん生きてゐるかよう！　みん

な生きてるかよう」斯う泣き聲を振り立てゝ、半ば狂亂の姿の藁草履穿きで、石段が刎ね、上からケシ飛んで行つた非戸の屋根、中程から折れた直徑七八寸程の杉の木、倒れた門の茅屋根——さうした間を、危險も忘れたかのやうに驅け上つて來たのは、おせいだつた。「生きてる！　みんな生きてるぞ！」自分も思はず大きな聲で叫んだ。その時のおせいの顔を、自分は忘れることが出來ない。落ちて疊の上を流れた玉子と、おせいの眞劍な泣き顔——その印象が、恐らく一等强く自分の頭に燒きつけられてゐるかも知れない。自分はそれまでは毎食に一つは生玉子を飲むことを缺かさなかつたのだが、東京へ出て來て、生玉子を飲むと屹度下痢をするので、以來は絕對に生では用ゐないことにして來た。自分の健康があの時以來ひどく損じられ、胃腸の弱つた爲めには違ひないが、同時に自分の弱い神經が極度に傷つけられ、脅え、その爲め斯うした病的な生理作用を來たしてゐるのではないかとも、考へてゐる。

がその、玉子、おせいの顔、田舍の妻の實家に食客さしてある三人の子供——この三つのものが、この晩の自分の醉拂つた頭の中に何かしらそぐはないばら〳〵な感じ——それがふと妻の手紙に口を滑べらしてから、醉拂の錯亂した神經が、更にカツと燃え立つて來た。それに、つい三四日前の日のことだが、自分のところに珍らしく三人ほど客がいつしよになつた。そんな場合、下宿から借りてゐる小さな茶器では隨分不自由だつた。何しろ自分は震災後五日目に、汚れた單衣一枚で出て來たのだつた。野天で二晩、おせいの家は潰れなかつたので二晩泊めて貰つたが、食料の欠乏に脅かされ切つてゐた當時のこと、自分にはそれ以上踏み止つてゐるだけの勇氣が出なかつた。自分には人間の美しさ、誠實なものゝ代りに、醜くさ、淺ましさのみが、その短い數日間に、露骨に味はされた。自分はおせいの家に滯つてゐた食料の借金の證書を書き——自分は草鞋を履いて出發の用意が出來、そして切手を賣る店も無論潰れてゐる際、額面相當の印紙を貼らせようとおせいの爺さんが大騷ぎをして搜しにやらせたり——そんなことが自分の出發の氣分を一層

惨めなものにして、追ひ立てられるやうに、五年越し居馴染んだ建仁寺内を出て來たのだ。おせいは門前の通りまで送つて來たが「すぐたよりを下さいね」と、幾度も念を押して云つた。「よし〱、すぐよこすよ」と云つて、やう〱引き出した小さなトランクに机の上や抽斗のものなど入れたのを背負つて、竹の杖を突いて歩き出したが、心の中では、迚も二度とはこの場所に足を踏み入れる勇氣はないと云ふことは、はつきりと考へられた。そして途中程ケ谷驛の庇下に一晩ごろ寝をして、翌日東神奈川からやう〱のことで汽車に乘り込み、鎌倉に行く前にゐた今の下宿に轉げ込むやうにしてはいつたのだが、來る早々、二三年前から微候のあつた脚氣が　ほとんど衝心的な狀態で起つて來た。そんなわけで、使つてゐる机、座蒲團、ドテラ、茶器の類まで一切下宿からの借物で、着てゐる着物も友人の誰彼から、羽織、綿入れ〱貰ひ集めたものだつた。おせいが十月初旬出て來た時、幾らかの金を仕度して、せめて夜具だけでも持つて來いと云つてやつたのだが、爺さんは渡してよこさなかつた。おせいはその日容手で、金の受取さへ持たずにすぐ引返して來た。貧乏な自分ではあるが、五年越し世帶持同樣の獨り暮しを續けて來て、いつとなしこま〱した物が集つてゐたので、斯うして急に下宿生活をして見ると、何につけかなり不自由だつた。金で一度に買ひ揃へれば、いゝぢやないか――さう思ひ諦めても、氣の濟まないやうた品も、無いこともなかつた。額も少なかつたが、しかし無理工面の金を持つて行つて、空手で、而も一向不得要領で歸つて來て、いつまでも、ずる〱と居催促のつもりで居るのか――斯う思ふと自分は腹が立つた。おせいが來た時分は、便所への起ち歩るきも、困難な狀態だつた。で、しばらく世話をしてゐて呉れ――斯う賴んだのは、自分の一生の失策だつたか知ら？　Tがおせいの叔父にも云つたやうに、おせいの方でも餘りに長く世話をし過ぎ、自分の方でも餘りに長く厄介をかけ過ぎた――さう云つた譯合ひのものでもあらうが、が自分に取つてはおせいはその長い間、一人前の女だと云ふ感じさへ起させなかつた――三度々々山の下のおせいの家か

ら岡持ちでご飯を運び、晩にはお酌をして床に寝かしつけて貰る、病氣の時には看病もする、さうした重寶と云ふだけのものだつたのだ。それが今では、朝自分が眼をさますと、狭い六疊の部屋に、やはり借り蒲團の床を敷き並べて、赭茶けた蓬々とした髪の頭を枕からはづして鼾をかいて眠つてゐる、自分は毎朝幾度か搖り起さなければならない、それだけのことからも自分の寝起きの氣分が滅茶々々にされて、それから晩酌にかゝる時刻まで、終日苛ら〳〵した氣持を意固地に抑えつけては、汚れた黄色い壁に向つて、暗い空想の繰返しを續けてゐなければならないのだ。二人とも幾日にもお湯へも行かなければ、調髪もしない。そしておせいもやはり執念深く默りこくつては、終日部屋の隅つこに坐りつゞけてゐる。自分は年の暮れに迫つて、郷里に妻子を見舞ひ、自分の健康上から、また子供たちの爲め村に小屋でも造つて久しぶりで家族生活を營むべく、その下相談に歸り、妻の實家に一週間ほど滯在して來た、その時おせいは置き去りにでもされることゝ思つたか、泣いて同行を迫り、やう〳〵下宿のお上さんたちの調停で思ひ宥めさしたが、後から自分の後を追かけかねまじき氣配で、汽車が上野を出て、初めて自分はほつと息を吐いた。自分は妻に彼女のことを打明けて頼むほかなかつた。

「そりや迚もたゞでは歸りますまいね。あなたも飛んだいゝものを摑まへて結構ですわ。あなたが色男だからなんでせう。わたしの方ではちつとも構ひませんから、どうぞ伴れて來て下さい」と、もう髪に白髪を見せ始めた、過激な臺所仕事ですつかり窶れ切つた妻は、自分の鬢に無數の白いのを見せ、頭の地の薄く透いて見える、室内もよち〳〵と歩いてゐるやうな自分を前にして、斯うひやかすやうに笑ひながら云つた。

「いや決してさう云ふ譯ではないんだがね、何しろあの女には親父が死ぬ時も隨分世話になつてゐるし、この春弟の細君の病氣の場合も厄介をかけてゐるし、自分だつて病氣のし通しだつた。夏には赤痢めいたものまでやつて、その揚句か

今度の脚氣だ。そんないろんな因緣からも、無理に追ひ出すと云ふわけにも行かないんだよ」

「だからわたしの方ではちつとも構やしませんから、今度は伴れていらしたらいゝでせう。さうなつたら誰にしたつて、おいそれとは素直に出て行きやしないもんでせう」

「借金を綺麗に拂つてやつても、出て行かないか知ら?」

「それはわかりませんね。先方の親たちはどんな風に考へてゐるか、その娘さんだけの考へではないかも知れませんからね」

「そこだて、俺の弱るのは……」

「それは仕方がないでせう、あなたご自分の仕出來したことなんだから。そしてもう身持ちにでもなつてるんぢやありません?……」

「そんなことはまだない。兎に角それでは賴む。試驗が受かつて二人とも汽車で通ふことになるんだと、朝も隨分早いんだし、僕の仕事と酒の兩方の面倒はお前だけでは見きれまい。頑固な質だが、働くことは幾らでも働く女だから……」

自分は斯う云つて、妻と別れて來た。が東京に引返して見ると、同じ斯うした日々だつた。自分は明けて十二になつた次女と約束して來た學校鞄さへ、送つてやれなかつた。……

「次女はもう眠つてゐるだらうが、上の二人はそれではまだ勉强かな。まだ十二時前だからな。女房もまだお相伴に起きてゐるかな。そして俺は、斯うして醉拂つて、おせい相手に每晚の管を繰返してゐようと云ふ光景かね。……さうさう、それからその玉子の話か……その玉子一つ喰はせられないと云ふ例の女房の愚痴手紙と來たんだな……」三月の上旬ながらまだ雪のどつさり積つてゐる遠い鄕里の、當がはれた八疊の部屋に炬燵でもして、薄暗い五燭の電燈の下でま

だ勉强してゐるであらう可憐げな子供たちの姿が、醉つた自分の頭にも描き出されて、自分はおせいに向けてゐた眼をふと瞑つて、斯う心の中に呟いた。そして、それらを拂ひ退けるべく、二三度激しく頭を振つた。が、すぐまた、自分はおせいに向つて叫んだ。

「これを見ろ！ どんなことが書いてあるか手前も讀んで見ろ！ 因業爺の娘！ 上書きは男の子が自分の名前で自分で書いてよこしたんだが、中身は女房なんだ。俺は玉子で地震を助かつたが、子供等も玉子でも喰はせないと、試驗が通らないんだぞ。なんだあの因業爺奴、また此間來た叔父と云ふ男だつてなんだ、金は拂ふから荷物はよこせと云つても、何も云へやしないぢやないか。あの地震早々の場合證書を書かして追ひ出すなんか、一種の脅喝だよ。そして勝手に自分の物をさらつて行つて、內金を持たしてやつても受取一本、ドテラ一枚渡してよこさないぢやないか。立派な横領だぞ。俺の方でこそあべこべに人事相談へなり、何へなり訴へたい位ゐだ。金には代へられない親父の遺品だつてあるんだし、あの掛蒲團の染めた蒲團皮は、あれは死んだおふくろが嫁に來た時のを、大事にして使つてゐるんだぞ。勝手な眞似をしたら、それこそ今に乾度罰が當るから、見てゐやがれ。手前は田舍者だから本郷の振袖火事なんてことも知るまいがな、今に思ひ當るから、見てゐやがれ！しかし兎に角、もうおとなしく歸つて呉れ。俺はあんな因業爺の娘とこれ以上喋してゐることは、我慢がならないんだよ。身體も神經も、滅茶々々ぢやないか。お前のとこでは、俺に玩具にされたと口惜しがつてゐるか知れないが、自然ぢやないか。あゝして五年もの間放つて置いて、間違ひがなかつたとしたら、却つて不自然なんだ。お前にしたつて、お互ひぢやないか。だから、俺の方でも謝まるから、もう素直に歸つて呉れ。明日の朝俺の眠つてゐるうちに出て行つて呉れ。桂庵とか何とかへ引かゝらずに、眞直ぐにこの間の叔父さんところまで歸つて呉れ。金はどんな都合してもこしらへるから、兎に角一應引取つて呉れ。もう半年ぢやないか。そ

してその間に、俺は何一つ仕事をしてゐない。俺は親父が俺の子供等へと殘して行つて呉れた杉林や桐畑まで賣拂つて、どうやら無理をしてこゝまで來たんだが、もうあとには何にも無いんだ。一二冊あつた本も、震災で、版權でも賣りたいにも、それもないんだ。後生だから歸つて呉れ。これから先き、どう出世出來ると云ふ自分でもない――それもわかつてるだらう。俺は仕事が出來ないんだ。氣が狂つちまふ。俺の子供たちのことも不憫だと思つたら、おとなしく出て行つて呉れ。俺は斯うして酒なぞ飮んでゐられる、場合ぢやないんだ。この手紙を讀んで見ろ！ 讀んで見ろ！ どんなことが書いてあるか、讀んで見ろ！」自分はおせいの顏に手紙を突きつけるやうにして、斯う大聲で云つた。

「讀まなくたつて、わかつてますよう」と、鼠色に汚れたエプロンの下に兩手を差入れてぢつと聽いてゐたおせいは、斯ういつもの突かゝるやうな調子で云つた。

「讀まなくては、わからない。だが讀みたくないものを讀ませはしないから、それでは明日は歸るか？」

「わたし、歸りません！」

「歸りません、と云つたつて、俺は歸すよ。もう大抵にして、歸つて貰はうぢやないか。下宿へだつて、迷惑ぢやないか。居催促としては執念深過ぎる！」

「……あたい、それでは、いつ居催促だと、云つた！ いつ云つた！」おせいは斯う云つたが、唇を歪めて、今にも泣き出しさうな顏して、男のやうに濃い眉の下の小さな眼をいつぱいに瞠つては、自分の顏を正面に見た。

「いつ云つたつて、さうぢやないか。そのほか理由がないぢやないか。兎に角迷惑だから、出て行つて呉れ。警察でも、お前はさう云つて來たんださうぢやないか。兎に角明日の朝は、俺の寢てゐるうちに、出て行つて呉れ。出て行つて呉れさへすると、文句はないんだから」

「あたい、何と云はれたつて、出て行かない。追出されたつて、出て行かない。家へも歸らないし、どこへも出ても行かない。行くもんか！」

「惡黨！ 何と云ふ剛情な奴かねえ！ 如何に因業爺の娘だからつて、ほんとにわからないのかなあ。……それでは一體居催促でないとすると何なんだ？ それをはつきり云つて貰はうぢやないか。また家へ歸つて、茶店の前に立つて、嫌らしい聲して、寄つていらつしやい、お歸りなさいまし、お休みなさい、よう——てなことを云ふのも厭だから、それで當分の間何か奉公口でも見つかるまで置いて呉れと云ふのか、それともどこまでも俺のところにゐたいと云ふのか、兎に角それをはつきり云つて貰はうぢやないか。このまゝずる〳〵べつたりでは、俺は迷惑だと云ふんだ。兎に角はつきり云つて、頼むなら頼むで、はつきりして貰はうぢやないか。云つて見たらいゝぢやないか。剛情だなあ……何と云ふ惡黨かねえ。お前と云ふ女は！」

「云はないよ。誰がそんなこと云ふ奴があるか！ 手前こそいゝ惡黨ぢやないか。何もかもわかつてる癖に、晝間は晝間で、夜は夜で毎晩鷄の鳴く時分までもそんなことを云ひ出しては人を虐め拔いてやがつて、誰が出て行つてやるもんか！ 一生でも取附いてやるからね……惡黨！ 薄情野郎奴！ 忘れやがつたかよ、この惡黨野郎奴が！」齒を喰ひしばり、眼を血走らせて、蓬々とした髮の中から角でも出さうなやうな形相して、おせいは斯う叫び罵つた。

「ム……この獄道者が！ 因業爺は爺として、あのおふくろの心配が、貴樣にはわからないのか。だからなぜ最初おふくろが迎ひに來て呉れた時に、素直について歸らなかつたんだ。長い間あのおふくろが、俺たちのことを庇つてゐて呉れたんぢやないか。その義理としても、俺は一日だつて貴樣を置いてやる譯には行かないんだ。たつた今のうち出て行け！ 桂庵へなりどこへなり、勝手に出て行け！」

「誰が出て行くもんか。老ぼれ！　お前さんの方で出て行くがいゝ、あたいは行かないよ。なんだその、眼鏡なぞかけて、髯なぞ生やかしたつて、ちつとも怖かないんだよ」

「何だと、老ぼれ……もう一遍云つて見ろ。……毆ぐられるな！」

「何遍だつて云つてやる。云つてやるとも！」

自分の右の拳固が、おせいの丸く紅い頬桁目かけて、二三度續けざまに飛んだ。が勢ひ好くうまく當らなかつたので、今度は起ちあがつてふら〳〵する脚をあげて蹴飛ばさうとしたが、「何、この老ぼれ野郎が、人を蹴飛ばす氣か。……敗けやしないぞ！敗けてやしないぞ！」斯う云つて、彈力の塊りそのものゝやうな勢ひで、兩手を突張りながら向つて來て、自分はひと堪りもなくドシンと壁際に打倒された。おせいは胸倉を取つて、上から武者振りついて來た。そして起きあがらうと悶掻いてゐる自分の脊中の上へ、裂け目の上の附鴨居が壁土といつしよにドシンと落ちて來たので、自分はカッと夢中になつて、「こん畜生！〳〵」と叫び續けてゐるおせいの顏や頭と處構はず打つたり蹴つたりしてゐたが、ヒーッと云ふ悲鳴を聞いて、手足を止めておせいの顏を視ると、口からタラ〳〵血が出てゐたので、自分もゾツとした。それでまだ彼女は氣でも狂つたかのやうにしがみ附いて來た。

「こん畜生！　こん畜生！　お前はあたいのあれを忘れたね。あたいのあの、大事なあのことを、忘れてゐるんだね。お前さんに見せこそしなかつたが、もう形ちがちやんと出來てゐたんだよ。丁度セルロイドのキユーピーさん見たいに、形ちがちやんと出來てゐたんだよ。あたいが誰にも氣附かれないやうに、そつと裏の桃の樹の下に埋めて、命日には屹度水などやつてゐたんだよ。この十九日で、丁度になるんだよ。それを貴様は何だ！　恍け臭つてゐやがるんかよ、忘れてゐやがるんかよ！この畜生野郎が！　そんな薄情者だから、田舍のあんないゝ子供さんたちのことだつて、見てやれ

ないんぢやないか。手前の薄情から、あたいのあれを、咀ひ殺したも同樣ぢやないか。あたいはね、あたいはね、默つて他所へは嫁にも行けない身體たんだよ。白を切つて他所の赤んぼを産むことの出來ない身體なんだよ。だからこそ、手前のやうな老ぼれの傍にもゐたいと、足蹴にまでされても、出て行かないんぢやないか。それが貴樣にわからないのか！ わかつてゐても、わからない風をして、今まで苛め通して來たんだね？ さあ、お前の方こそ、はつきり云つてご覽！ それがお前に云へたら、あたいはこれからだつて、出て行くよ。出て行つてやるとも！ 身投げしたつて、構ふもんか。さあ、はつきりと云つてご覽！ それとも、あたいの口から、こんなことまで云ひ出させたくつて、斯うして來たのか？……エーン、口惜しい！ 口惜しい！」見る間に紫色に腫れあがつた唇から血をタラ〳〵疊の上に滴らし、吊るしあがつた眼から涙を溢れ落して、おせいは子供のやうに泣じやくつた。

「あーん……」と、自分は打のめされた氣持で、彼女の兩手を取つた。

「さうか〳〵、もうよし〳〵、俺がわるかつた。俺はこの通り手を突いて謝まるから、もう勘忍して呉れ。俺もほんとは、そこまでは深くは考へてゐなかつたのだ、俺は唯卑怯で、そして意氣地無しだつたのだ。どうか許し呉れ。俺はもう追出しもしないし、これからは決して苛めやなんかしないから、今夜のところはどうか勘忍して呉れ。そして、俺は明日から屹度仕事にかゝる。そして、何もかも、いゝ方に向けるように、ほんとに努めるから、これまで通り俺の面倒を見て呉れ。お前の家の方へも、俺からはつきりと交渉することにする。そして身體や頭の健康も直すつもりだから、明日は億儀でもお湯へも行き、髮も結つて來て呉れ。田舍の子供たちへも金を送ることにして、お前の氣の濟むやうにもするから、どうか頼む。もうようく解つたから、もう泣くのをやめて呉れ……」斯う云つた自分も、知らず〳〵、泣いてゐた。

鴨居の取れた黄色い壁の部屋を出て、午前と午後との二度、父の姿、おせいの所謂キユーピーさんのこと、鄕里の子供たちのことなど思ひ描きながら、日課の散歩を續けた。本鄕通りの鈴懸けの芽生えはまだ見られなかつたが、空の色はすつかり春だつた。「おせいの家の、その桃と云ふのが、もう咲いてるか知ら。近いうちおせいの問題旁々出かけて行つて、見て來ようかな……」斯んなことを思つたりしては、一日々々と散歩區域を擴げることに、努めた。

――十三年三月――

## 中央公論大賣捌所

東京[illegible] [illegible]
同 神田区[illegible]町 上田屋
同 京橋区[illegible]一丁目 東[illegible]堂
同 京橋区[illegible]町 北隆館
同 日本橋区本石町 至誠堂
同 [illegible]区[illegible]本木町 盛春堂
大阪市北区梅田町 盛文館
同 北区東梅田町 立[illegible]堂
京都市七條停車場前 共[illegible]社
同 新町通七條南入 大[illegible]社
名古屋市 富澤町 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

◎定價 金八拾錢 郵税金六錢 但し海外郵税貳拾八錢
但支那を除く

| 冊數／代價 | 内國 | 外國 |
| --- | --- | --- |
| 六冊 | 金四圓八拾錢 | 金六圓四拾八錢 |
| 十二冊 | 金九圓六十錢 | 金拾貳圓九拾六錢 |
| 以上郵税共 | | |

▲但し新年其他一切の臨時増刊號は普通號に付き[illegible]を申請くべし、若し一ヶ年即ち十二冊分[illegible]一ヶ[illegible]分前[illegible]なれども[illegible]

一、注文[illegible]
一、[illegible]
一、郵券代用 [illegible]
せらるゝことを斷ります
一、代金引替 小包の取扱は一切謝絶す
一、代金郵便 [illegible]を前以て[illegible]せらるべし、[illegible]
[illegible]
一、金三圓以上 九割[illegible]
一、[illegible] 金八[illegible]

中央公論代金取扱 [illegible]
受領證の請求には必ず返信料を添ふべし

大正十三年三月廿五日印刷
大正十三年四月一日發行

編輯兼發行人 瀧田哲太郎
印刷人 高木島三

東京市丸ノ内ビルヂング[illegible]
發行所 中央公論社
電話[illegible]
振替[illegible]

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12,48: Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

治三十年一月十九日第三種郵便物認可



本號 特價金壹圓八拾錢